

---

**【書籍化&コミカライズ】勇者パーティーを追放された俺だが、俺から巣立ってくれたようで嬉しい。……なので大聖女、お前に追って来られては困るのだが？**

---

初枝れんげ (『追放嬉しい』10 / 6 発売)

## 注意事項

このPDFファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をPDF化したものです。

このPDFファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

### 【作品タイトル】

【書籍化&コミカライズ】勇者パーティーを追放された俺だが、俺から巣立ってくれたようで嬉しい。……なので大聖女、お前に追って来られては困るのだが？

### 【Nコード】

N5256GK

### 【作者名】

初枝れんげ（『追放嬉しい』10/6発売）

### 【あらすじ】

コミック第5巻が3/12（火）発売予定！

シリーズ累計40万部突破！

コミックはくりもとびんこ先生にガンガンONLINEで連載頂いてます。

小説7巻発売中（完結済み）

小説のイラストは柴乃權人先生にご担当頂いております。

小説・コミックともども宜しくお願いいたします(\*^-^\*)

ガンガンONLINEで【無料試し読み】だけでもどうぞ〜!

(コミック) <https://www.ganganonline.com/tittle/1252>

(フェア開催中) <https://magazine.jp.square-enix.com/top/event/detail/2921/>

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqnovel/series/detail/yuusyparty/>

アリアケ・ミハマは全スキルが使用できるが、逆にそのことで勇者パーティーから『ユニーク・スキル非所持の無能』と侮蔑され、ついに追放されてしまう。

仕方なく田舎暮らしでもしようとするアリアケだったが、実は彼の全スキルが使用できるということ自体がユニーク・スキルであり、神により選ばれた 真の賢者 である証であった。

そうとは知らず愚かにも追放した勇者一行は、これまで楽勝だった低階層ダンジョンすら攻略できなくなり、王国で徐々に居場所を失い破滅して行く。

一方のアリアケは街をモンスターから救ったり、死にかけのドラゴンを助けて惚れられてしまったりと、いつの間にか種族を問わず人々から 英雄 と言われる存在になっていく。

これは目立ちたくない、英雄になどなりたくない男が、残念ながら追いかけて来た大聖女や、拾ったドラゴン娘たちとスローライフ・ハーレム・無双をしながら、なんだかんだで英雄になってしまう物

語。

勇者パーティーが没落していくのはだいたい第12話あたりから  
です。

カクヨム様でも連載しております。

本編【完結】しました。

## 1・勇者パーティー追放（前書き）

新作を始めました！いま【日間総合ランキング3位】です！

『ゲーム内の婚約破棄された令嬢に声が届くので、浮気王子を毎日断罪することにした』

<https://ncode.syosetu.com/n0557hz/>

本作『聖女さん追放』を楽しんでいただける読者の方におすすめです！！

ぜひ第1話だけでも読んでみてください！！

## 1・勇者パーティー追放

### 1・勇者パーティー追放

俺の名前はアリアケ。アリアケ・ミハマ、18歳の男だ。

このグランハイム王国で冒険者をやっている。

いや、やらされていた、というべきかな。

見解の相違はあるかもしれんが。ふ、と俺は唇の端をつりあげた。

ここは冒険者ギルドの一角。そして周りにはいわゆるパーティーメンバーがいる。どいつも俺を親の仇と言わんばかりの目で見てくる。見解の相違というのはこれだ。今俺は、役立たずというレッテルを貼られてパーティーからの追放を宣言された。

だが、それで俺の心が騒ぐわけではない。なぜなら、

「馬鹿が、それは俺のセリフだ」

心底馬鹿にしきった感じで口にした。

いや、本当に馬鹿にしまったので、正直な感想を吐露してしまった、というほうが正しい。

嘘を吐くのが苦手なのだ、俺は。偽ることが。

だが、その真実を言った言葉に、パーティー・・・いや、元パーティーと言った方が適切だろう。俺がもはや彼らをパーティーメンバーとは認めていないのだから・・・。ともかく、俺の真実の言葉に、彼らは、

「なっ  
」

驚愕するとともに、次は怨嗟とも言つべき視線を向けて来た。

俺はまたしても唇をつりあげてしまい、

「ふ  
」

微かに笑ってしまった。だって、これではどちらが追放を宣言されたのか分からないではないか。その滑稽さに思わず笑みをこぼしたのである。

「何を笑ってやがる！ アリアケ！ お前は今の状況が分かっているのか 追放だ。お前はこの栄えあるビビア勇者パーティーを追放されたんだぞ！ この俺、王国指名勇者ビビア・ハルノアによって！」

そう絶叫したのは、ビビアという、俺と歳の頃は同じの男だ。聖剣ラングリスに認められたことから最も魔王討伐に近い男と言われている。

「そうよ、そうよ！ ビビア様に謝りなさいよ！ アリアケ！ 単

に私たちの幼馴染ってだけでおこぼれに預かった棚ぼた荷物運び男  
！！」

次に叫んだのは赤毛の女、デリア。女拳闘士。魔力で肉体を強化し、  
また「祝福された拳」による防御不可攻撃のスキルを持つ無敵のフ  
アイターと名高い。

こいつも俺と歳は同じくらい。というか、パーティーはあと3名い  
るが、そいつらも全員同じ年齢だ。というのは、何せみんな同じ村  
の幼馴染だからな。

残り3人も同じことを言ってきた。

「確かにお前の存在は俺たちパーティーの連携を著しく損なってきた。  
勇者ビビアの判断は正しい」

盾役のエルガー。たくましい肉体を強化して戦うファイタータイプ。  
ともかく無尽蔵の体力値と鋼の防御力を持ち、魔法耐性も他の追隨  
を許さないとされており、王国の盾との誉れも高い。

「ま、どうでもいいじゃない。こんな使えない奴。さっさとここで  
お別れしましょうよ、ね、勇者様」

魔法使いのプララ。金色の巻き毛が特徴。魔法のアレンジが得意で  
あり、魔力量が1万を超える。魔王すらそれほど強大な魔力量は持  
たないと噂されており人類の切り札などと言われているらしい。

そして最後に、

「とうとう来るべき時が来てしまったのですね。長かった・・・ど



れだけこの時を待ち望んでいたことか……。これも神の思し召しですね」

「はっ、アリシアにすらここまで言われるとはな!」

「それこそ神の託宣というものよ、分かったの、アリアケ!」

聖女の言葉をかさに着て、勇者ビビアと拳闘士デリアが声高に叫んだ。

・・・大聖女アリシア。

美しい長い金髪と碧眼。神々しいまでの美貌とまさに神の祝福がもたらす福音により常人には持ちえないオーラを普段からまとっている。ほとんどの回復魔法がなかば伝説と化したこの時代の中で、半ば蘇生魔術すら使いこなす彼女はまさに伝説級の聖女と言われている。この国どころか世界中にその名をとどろかす偉人的存在。

そんな聖女ですら俺のパーティー追放を喜んでいるようだ。微かに笑みすら浮かべている。俺を追放できることがそれほど嬉しいということなのだろう。

と、俺と目が合うと、すぐにパイと、笑みを消し視線をはずした。

やれやれ、嫌われたものだな。特にデリアとプララの態度は、勇者であり、ひいては権力者であるビビアにゾッコンといった様子だ。

だが、なんだか、うん?

ちよっと俺は首を傾げた。ひるがえって、アリシアの台詞にどこか

微妙な違和感を感じたのだ。

何というか、一人だけ毛色が違ったような……。

ま、そんなことはどうでもいいか。

俺は内心ため息をつく。何せこの大聖女アリシアが、恐らく俺を一番嫌っているからだ。

例えば、今のよう俺とは目も合わせないし、会話もすぐに切りあげようとする。話していると顔を赤くしてすぐに怒るし、俺が行動しようとする信頼していないのかすぐに止めてくる。それに何より、常に、どんな時でも、いついかなる時も俺を追うような監視の目を向けてくる。例えば冒険をしていない時のプライベートの際にだって、時折監視の目を感じるくらいなのだ。完全にまったく信用されていないのだろう。

やれやれ、まったく枚挙にいとまがないとはこのことだ。

なぜこれほど嫌われているのか分からない。だが、とにかくこのアリシアこそが、俺を一番嫌いに嫌っていることは間違いないのだ。そう、これは完全に間違いはない。なぜなら、俺の勘はよく当たるからな。

## 1・勇者パーティー追放（後書き）

新作を始めました！いま【日間総合ランキング3位】です！

『ゲーム内の婚約破棄された令嬢に声が届くので、浮気王子を毎日断罪することにした』

<https://ncode.syosetu.com/n0557hz/>

本作『聖女さん追放』を楽しんでいただける読者の方におすすめです！！

ぜひ第1話だけでも読んでみてください！！

## 2・無能の烙印

### 2・無能の烙印

そんなわけで、俺は冒険者ギルドの一角でパーティー追放を宣言され、こうして元パーティーメンバーたちから罵詈雑言を浴びせられているわけだ。

「ハエみたいにうるさいものだなあ」

・・・おっと、しまった。

またしても、ついつい本音が漏れてしまった。正直すぎるというのも美点だけとは言えない。

なぜなら、案の定、そうした本音に過剰に反応してしまう人間が少なからずいるからだ。

例えば、もちろん俺の出来の悪い幼馴染たちとかだ。

「て、てめえ、いい加減強がりを言ってるんじゃないぞ、アリアケ！ お前みたいなお荷物、俺様のお情けでパーティーに入れてやっていたのに、追放されちまったら引き取ってくれるパーティーはないんだぞ！」

「そうよ、アリアケ！ 謝るなら今のうちよ！」

「立つ鳥は後を濁すべきではない。いかに無能なお前であろうとも最後の最後までそうした振る舞いをすれば、幼馴染である俺たちも情けなくなってしまうぞ」

「ハ、ハエとか、ちょー腹立つんですけど。ここでボコっちゃおうよ！ ねえ勇者様！」

「はぁ・・・」

思った通りみんな激昂してしまった。聖女だけは嘆息をするにとどめたようだが・・・。それがまた俺への敵愾心の現れだと如実に感じられた。露骨に嫌悪を示されるよりも、よほど感情的な反応だと思われた。

ただ、変わっているなと思ったのは、彼女が冷やかな表情を浮かべていることだった。いや、そこまでは普通だ。だが、そういった侮蔑の視線と言うのはその相手にぶつけるもののはずだ。なのに、彼女は一切俺の方を見ず、幼馴染たちに顔を向けている。

まあ、俺を見たくないくらいに嫌悪しているということだろう。まったく、昔は俺の後をずっと付いて来るくせに言葉一つかけてこないという、恥ずかしがり屋な娘だったんだがな。

成長して聖女とさえ呼ばれるようになった今では、ずいぶんと変わってしまったということだろう。

「いいから話を進める。いちおう聞いておくが、なぜ俺が追放されねばならんのだ？」

理由を話す機会を与える。

「お前らにも何かしらの言い分があるのかもしれない。その理由を言ってみる。ただ俺は忙しいから簡潔にな」

そう言い添えた。

「何を偉そうに！ そんなの決まってるだろうが お前が無能だからだよ」

そうビビアが言った。

俺はため息をつきながら、

「はあ……。理由を言えといったんだ。それは、具体的にわけを言えということに決まっているだろう？ そんなことも理解できなかったか？」

「っ……！ あんたいい加減にしなさいよ！」

デリアが顔を憤怒に染め、俺に殺気を飛ばす。今しも殴りかかろうとする。

だが、さすがに勇者を名乗るだけあって、それを制す。

「やめろ、ははは、なら言ってやるよ。しかもメンバー全員からな！」

勇者ビビアは余裕たっぷりといった様子で宣言した。

「簡潔にと言ったのだがな。まあいい。ではお前からだ、ビビア」  
俺は呆れながら指名する。

「命令するんじゃない！ このクソ無能野郎が！ 追放する理由は簡単だ。まずはお前は一切の攻撃・防御魔法が使えねえ！ 攻撃にも防御にも、何の役にも立たねえ。使えろと言えば探索や毒消しなんかの補助系魔法ばかり！ そんなのは誰でも使えるんだよ！ つまり、パーティーにお前の力は不要ってことだ。足手まといなんだよ。ああ、これ以上の理由はねえ！ そうだろう、みんな！」

勇者ビビアの言葉に、他のメンバーも続く。

「その上、攻撃力もないし、これと言って得意な武器もないわ。いつも私たちの後ろで守ってもらってるだけ。荷物を運んだり、キャンプをはるだけなら、その土地で雇った案内役で十分すぎるわよ！」  
そうデリアが言えば、

「男らしい鋼の肉体もない。そのひ弱な身体ではとても今後の魔王軍との戦いについてくることはできないだろう。俺の役目はあくまで魔王軍と戦う勇者パーティーを守るためのもの。お前の様な後ろで何もできずに震えている輩のためではない」

エルガーが淡々と言った様子で言う。

「ていうか、いつも変な意見を言い出すから私たちいつもめっちゃ迷惑してるんですけどー！ この前だってダンジョンでいきなり、

こっちは罨があるからって、遠回りさせられるしさあ！ 大げさなんだよ、あれくらい罨なんて楽勝なんだから前進すべきだったよね！ 迂回したせいで余計なモンスターとも遭遇したしさあ！」

憎悪の炎を燃やしながら、プララは言った。

「あなたにこのパーティーは相応しくありません」

そして、聖女アリシアも結論づけるようにそう口にした。

相変わらず冷ややかな表情を浮かべながら。

まあ、やはり俺の方に顔を向けてはこないのだが……。

「お前たちの言い分は分かった。では、俺からもいくつか忠告がある。俺のスキルのことだが……」

「はあ？ 忠告なあ？ はん、今更泣いて謝っても戻してやるつもりはねえよ！ 今の俺たちからの言葉を聞いても分からなかったのかよ！ お前に聞くべきことなんて一つもねえんだよ。それにスキルだあ お前にはユニークスキルが『ない』だろうが 役立たずの凡人 何より今更パーティーを去るお前に何を聞くっていうんだ！」

「ん？ いや、そうではなくてだな……」

「さっさと消えろ！ お前はクビなんだよ、アリアケえ」

ビビアが鬼の首を取ったとばかりに……最後通告とばかりに立ち上がると同時に俺を指さし大声を張り上げた。他の奴らも同じ意見



のようだ。

ううむ。

「まあ、そこまで言うのなら、あえて口にはしないが・・・」

腐っても幼馴染。俺は最後までこいつらのことを心配し、後ろ髪をひかれる思いを持つ。

だから、やはり聞かせておいたほうがいいと思うのだが・・・。

「早く行ってください、アリアケさん。先ほども言いましたよ、このパーティーはあなたがいるにはふさわしくない、と。聞く耳を持たないというのは悲しいことですね」

アリシアが淡々とした口調で告げる。その言葉に他の奴らも笑みを浮かべた。勝負ありとばかりに。

ま、まあそこまで言うならしょうがないか。

俺は後ろ髪をひかれる思いを抱きつつ、冒険者ギルドを出て行ったのだった。

・・・こうして俺は、幼い頃に夢枕に立った”神”からお願いされた”幼馴染の勇者パーティーを時が満ちるまで背後より助けてバツクアップせよ”という、『義理』だけで参加していたパーティーからついに解放されたのである。



## 2・無能の烙印（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 3 ・賢者の独り言（前書き）

つなぎ回で少し短いです。次回から普通の長さに戻ります。  
次回は本日のお昼ごろの投稿予定です。

### 3・賢者の独り言

#### 3・賢者の独り言

さて、俺は幼い頃に夢枕に立った”神”からお願いされた”幼馴染の勇者パーティーを時が満ちるまで背後より助けよ”という、『義理』だけで参加していてパーティーからついに解放された。

まったく、今思いだしても厄介な依頼だった。

まずもって、幼馴染を助けろ、などと言われれば、・・・何よりそれが彼らの命に関わることなのが明白なのならば、俺と言う人間が断ることなど出来ようもない。俺の善性に付け込んだ巧妙なやり口であったし、そういう点でも悪辣な神だった。まあ、それで彼らが今まで生き永らえて来れたのだから、俺としては後悔はないのだが・・・。

次に厄介というか、面倒だったのは、この神託によって俺が授かったスキルが『バックアップ』そのものだったという点だ。俺はあくまで彼ら勇者パーティーの影の支配者、黒幕、後ろで糸を引く者であり、けっして表舞台には出ないというのが前提であった。だから俺のスキルと言うのは、補助系、探索系、そういったスキルをオールマイティに使えるのが俺のユニークスキルとして付与されたのである。

で、これまた厄介なのが、俺のユニークスキルは一見、何のユニーク

クスキルも持つていない様に見えるのだ。が、しかし『実は万能』  
なのである。そういうややこしい性質なのが俺のユニークスキルな  
のである。

普通ユニークスキルは鑑定などによってステータスに表示される。  
だが、俺のユニークスキルはそうした表示はされず、あくまで膨大  
なスキルが表示されるに過ぎなかった。だから城で鑑定を受けた際  
も・・・たとえば上級鑑定官でさえも、俺の真の力を見破ることはで  
きなかったのである。その上、現在俺は念のため、ある一定レベル  
以上のスキルを見えない様に”隠ぺい《インビジブル》”のスキル  
で隠している。もはや、頭の足りない奴には器用貧乏なスキル持ち  
にしか見えないはずである。

まあ逆に、もしも俺の才能をしつかりと見抜ける者がいれば、それ  
は物事の本質を見抜けるレベルの人間ということになるのだが・・・  
。ちなみに、こんな手の込んだことをしているのも、手の内をばら  
すと危険というのもあるが、何より万能すぎると周りが驚愕してし  
まうだろうという配慮の面もあった。

だが・・・本当に俺がいなくても大丈夫だろうか。ステータス上昇  
やダンジョンの回避、ガイド、準備・・・そういったことが、俺  
がいなくても本当に大丈夫だろうか。

確かに俺は攻撃魔法や防御魔法は使えない。だが、武器強化や防具  
強化、時間加速や遅延、回復力上昇など、様々な補助スキルを駆使  
していたのだが・・・。もちろん、あいつらもそれを理解していた  
はずである。・・・いや、してるよな。あいつらは俺の幼馴染だ。  
さすがにそこまで侮るわけには行かないし、実際そんなことがある  
はずがない。理解したうえで、自分たちだけでやっていけると熟慮  
したうえで、俺を追放したのだろう。

「いや」

俺は笑いながら首を振った。

「そつに違いあるまい」

俺は頷く。

あいつらならきつと俺がいなくても何とかやっていくだろう。神は時が満ちるまであいつらを助けてやって欲しいと言った。今まさにその時が来たのだろう。

なんだか考えていたら清々しい気持ちになった。

ようやく、自分の面倒をみていた子供が一人で歩き出したかのよう  
な、巢立ちの日を迎えたようなそんな気持ちになったのだ。

では逆に、と俺は思う。

今まで保護者のような生活をしてきた俺もまた、子離れをしなくてはならないだろう。さてさて、俺こそ明日からどうしようか。そんな風に自由をかみしめるのであった。

「僻地にでも行って、ゆっくりと暮らすのもいいかもしれないな」

一人ごちながら、明後日の方向へと歩き出す。『オールティ』という町を目指すことにした。そこは冒険をしていた時にふと立ち寄った小さな町だ。だが、そこで暮らす人々は温かかった。

俺は呑気に未来へと進み始めたのだった。

・・・俺が去ったのち、勇者パーティーに大惨事が訪れるとも知らずに。



### 3・賢者の独り言（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

#### 4・一方その頃、勇者ビビアたちは

4・く閑話 一方その頃、勇者ビビアたちは

「はあ、やれやれ、清々したぜ！ くくく、あいつ、みじめに何も言えず出ていきやがったぜ。なあ、みんな！」

「本当にそうです！」「あいつ、ちょーむかついたしね！」

俺こと勇者ビビアの言葉に、拳闘士デリアと魔法使いのプララが応じる。

パーティーの盾である大男エルガーは静かにうなづいている。

「アリシア、お前もそう思うだろう」

俺は沈黙を守り、なんの反応もしないアリシアに水を向ける。

するど、

「勇者様のいないパーティーに意味はありませんよね」

そう言ってニコリと笑う。

「お、おう。そうだな！ ああ、この勇者ビビアさえいれば、このパーティーには何の問題もねえよ！」

聖女アリシアも俺を肯定する。

最初聞いた時、意味が少し分からなかったが、要するに俺がいれば大丈夫・・・すなわち、アリアケを追い出せて清々したということだろう。

そう考えて俺は留飲を少し下げる。

俺たちは幼馴染で、『リットンデ村』という寒村育ちだ。小さい頃からお互いを知っている。その中で俺が一番優れていた。リーダーシップ、剣の腕前、判断力、すべてが優れていた。そして勇者としての選定が下され城に呼び出された時、俺の運命は華々しく彩られることが確定したのだ。

「それなのにアリアケときたら、俺に意見してきやがる！ ユニークスキルもない、ただの器用貧乏のカスのくせに！ 幼馴染のよしみでパーティーに入れてやってただけだったのに！」

それにあの見透かしたような目が気に入らなかった。単なる偶然で奴の勘が当たることは確かにままたまあった。だがアレはたまたま運が良かっただけだ。なのにさも当然といわんばかりの顔をする！

「ビビア様に意見なんて、とんでもないことですわ！ ビビア様がパーティーの主ですよに！」

「ほんとほんと！ 本当だったら身ぐるみ剥いで追い出しちゃえば良かったのにさあ！」

「ははは、さすがにそこまでしたら可哀そうだろう！ 情けをかけてやったのさ！」

「さすがビビア様ですわ！」

「勇者らしくて最高！ 素敵じゃん！」

そうだろう、そうだろう！

俺は女たちの喝采を受けて満足する。聖女は何の表情も浮かべていないが、まあいつものことだ。何せ大聖女だしな。

だが、ああ、そうだ。俺こそが勇者であり、世界を救う人間なのだ。俺は正しい。だからこそ、デリアやプララは当然だが俺に惚れているようだし、アリシアだって、いずれ俺の女になるに違いない。表情に出さないだけで「勇者様のことを深く信頼している」って言うていることが俺には分かる。

いや、俺を認めるべきなのは、こいつらだけじゃない。

俺は内心でにやりと笑う。

いずれ世界を救ったあかつきには、この国の姫も俺のものにする。そうすれば俺が一国の主・・・王だ！

王になり下々の者たちを支配する。そして、その華々しい未来はもうすぐ目の前に来ているのだ！

俺は不快なアリアケのことなどすっかりと忘れてしまう。気持ちが悪く落ち着きを取り戻し、自分が世界で一番優れた存在なのだと改めて確信する。

よし！ と気合を入れて、いつも通りにダンジョンの攻略へと向かうことにする。

だが、賢明な俺に油断などない。

「いちおうメンバーが一人抜けた後だ。とりあえず肩慣らしに以前攻略した『呪いの洞窟』にでも行くとしよう」

あそこなら確実に、簡単に攻略できるしな。

「堅実で適切な判断ですわ」

「むしろ邪魔者がいなくなつてスムーズに攻略できるかもね！」

「わはははは、確かにな！」

デリアとプララの言葉に笑いながら、俺たちは出立の準備を始めるのであった。

「ん？ アリシアどうしたんだ？」

ふと気が付くと、俺たちの会話など聞いていないかのように、アリシアが窓の外から遠くを眺めていた。

その目はひどく遠くを見ているような気がした。

まるで俺たちがいないかのように……。

「いいえ、何でもありません。ちょっと足りなくなってきただけです」

おっと、何を考えているんだ俺は。

俺はブンブンと首を横に振る。

そんなわけないじゃないか。俺は勇者なんだぞ。俺は冷静を装って話を続ける。

「足りない？ えーっと、何のアイテムだ？ 聖水とかポーションか？」

まだ在庫はあったはずだが……。ええっと、くそ、アリアケしか正確に把握してないんだよな。くそ、こんな時まで面倒をかけやがって。

「いいえ、もっと、ずっと、大事なものですよ。わたしの・・・成分が・・・」

聖女が何かを言った。だが、よく聞き取れない。

「？ ま、まあ。なんのアイテムのことか分からないが、よろしく頼むぞ」

正直、細々としたアイテムのことなど考えたこともなかった。

そんなことを考えるのは他のメンバーがやることだ。

それに、あまり詮索して聖女のご機嫌を損ねることは得策ではなかった。俺の勇者としての権威は、無論聖剣に認められ、王国の後ろ盾があるからだが、一方でこの大聖女が仲間であるという点も大き

いのだ。

もし、大聖女が俺を見限るようなことがあれば、俺の権威は失墜してしまうだろう。

まあ、そんなことはありえないのだが。

俺の言葉に聖女は「ええ」と物憂げに頷いた。

そんな聖女の様子は、今まで見たことがなかったので気にはなつたが……。

「おい、ビビア。洞窟のマップの件だが……」

エルガーに話しかけられて、そのことを深く考えることはなかったのだった。

とにかく俺たちはこの3日後、以前楽勝でクリアしたダンジョンへと潜ることになる。決してリスクのない、腕慣らしには最適な、簡単なクエストになるだろう。

4・一方その頃、勇者ピリアたちは（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 5・殺され解放されることを望む少女を救う話

5・殺され解放されることを望む少女を救う話

「一人旅というのもいいもんだなあ」

俺はしみじみと呟いた。

幼馴染の勇者パーティーのお守りをクビになった俺は、一路オールティという街を目指しているところだった。1か月以上はかかる旅である。

お守りをクビになる、というのも変な表現ではあるが、本当のことなのだから仕方ない。

あいつら、ちゃんと旅の準備はできるだろうか。アイテムの在庫管理や準備については、その重要性を常日頃から口酸っぱく言っていたから大丈夫だとは思いが・・・。

「というか、あいつらマップ読めたっけ？」

いつも俺が指示していたような気がする・・・。

俺は若干冷や汗を浮かべながらも、

「ま、まさかな。マップも読めない勇者一行など洒落にもならん」  
やれやれ、どうやら俺もずいぶん過保護だったようだ。出来の良し悪しはともかく、生徒の巣立ちを見守るのも、保護者の役割だといふのに。

案外、俺は彼らを指導することに充実感を覚えていたのかもしれない。何せ出来の悪い生徒ほど可愛いものだからなあ。

そんなことを考えて、苦笑するのであった。

ま、それに、

「あのしつかり者もいるしな」

あまり心配しすぎることもあるまい。

などと考えていた、その時である。

『・・・誰か・・・た、助けて』

頭の中に何者かの声が、かすれかすれであるが、響いた。どうやら、俺の脳に直接声を届けているようだ。

「これは・・・」

俺は驚く。なぜなら、俺は特殊スキルによって常時魔法障壁を展開している。はつきり言うと、例えば不意にそこそこの攻撃を仕掛けられたとしても無効化できるほどの障壁を、だ。

もちろん、そんなことは普通の人間ではできないレベルのことなので、秘密にしているのだが。

あまり特別過ぎるといふのも、周囲に警戒心を抱かせる原因になるという、そういう深謀遠慮からである。

さて、それはともかくとして、かすれてはいるものの、その声は俺へ達することが出来た。それだけで、そこそこの使い手ということが分かる。

「誰なんだ？　　というか、人間か？」

そう、そこが疑わしくなってくる。俺の障壁を乗り越えてくる人間と言つのが、あまりイメージできなかつたせいだ。

すると、

『!?!?・・・返事が・・・お願いじゃ・・・わしを・・・この呪いから解放することは誰であれ不可能じゃ・・・だから、わしを、せめて殺してくれ・・・』

「いきなり話しかけてきておいて殺してくれだと？」

訳が分からない。だが、答えられるとすれば一つだ。

「そんな依頼は受けられないな。殺して欲しいなら他を当たるといい」

「お願いじゃ。出来損ないとはいえ・・・竜族の誇りを失う前に・・・」

プツン。チャンネルを閉じた。こちらから一方的にだが。

向こうは縊るように何か言いかけていたようであったが……。

あと、竜……ドラゴンとか何とか。

多分嘘だろう。ドラゴンがこんな風に人間に助けを求めるわけはない。なぜなら、ドラゴン種族というのは人間に負けた場合、その人間に服従するという性質がある。伝説では結婚した逸話などもあるが、まあそれは嘘であろう。人間のお得意の誇張表現の結果に違いない。ドラゴンが人間と結婚するなんてな。

まあ、とにかく、そんなわけで、そもそも助けを求めてくるようなドラゴンはいるはずがないのである。いたとすれば、何かしらの卑怯な手段でつかまっているといった時くらいだろうか？

「そもそも、最初から助けてとお願いされていれば、また違つのだがな」

独り言を言って、歩き出す。

だが、

『お、お願いじゃ、助けて……』

ツーツー。

俺は驚く。またも無理やり障壁を乗り越えて来たのだから。

(もう一度だけチャンネルが力づくで開けた。それによる魔力の逆流・・・要するに俺の自動防壁によって、相手は甚大なダメージを受けて気絶してしまったようだ)

というか、致命傷かもしれない。

「まさか力づくで開けてくるとはなあ」

呆れるとともに、俺の責任ではないものの、生来の優しさゆえに心配になってきた。

あと、付け加えるならば、

「いちおう条件クリアか」

二度目の正直とも言う・・・かどうかは知らんが、ともかく「お願い」をちゃんとやり直して来たようだ。

そのこと自体は偶然だろう、だが、例え偶然でも、俺にそれをアピールできたのは幸運・・・すなわち天運、要するに実力といってよい。生きる力があるということ。ならば、

「あつちか」

急ぐ旅ではない。俺は街道を外れ、虫よけのスキルを使用しながら、森の中へと踏み入ったのである。

それに俺の鋭い勘が予感したのだ。ドラゴンを助けを求める。となれば、別の何者かの大きいなる悪意がそこにあるのではないかと。

「やはり運命は俺を放そうとしないのか」

そうぼやきながら先を急いだ。

「なるほどな」

森の中を進むと結界にぶちあたった。

どうやら、最近地震があつたらしく、結界の封印力が弱まっていた。

中の何者かはそれによって、声を外部へ届けることができるようになったのだろう。

だが、

「ふむ、みな死んでいるな」

俺は周囲を見回して言う。

盗賊か何者か不明だが、結界をこじ開けようとして失敗し、死んだ亡骸が散乱している。大方、金目のものがあると踏んで侵入を企てたのであろう。

（だとすれば、俺とは相性が悪い結界だな。何せ俺は欲望とは無縁と言って良い生き方をしているからなあ）

さて、どうするか。無理やりこじ開けても良いが、それではこの辺り一帯の生態系に異常が出るかもしれない。魔力とは力の渦のようなもの。結界とは魔力による環境操作に他ならない。だから現在の安定している状態を維持したほうがいいだろう。結界だからと言って何でもかんでも破ればいいというものではないのである。力とはそれにおぼれずに使いこなす頭脳こそが、真の意味で必要とも言い換えられるだろう。

「なら、これだな。スキル『メタモル・フォーゼ』スキル発動」

シューウウウウウウンン。

そんな音を立てながら、俺の体が変化していく。

『モグラ』に。

「さて、どうかな？」

俺はモグラになって、地中を掘り進んでみる。

よくあるのだ。

案外盲点だった！ みたいなのが。

信じられないよ、そんな方法があるなんて、みたいな抜け道が。

まさかと思うので、わりと誰も確かめてみようとしなのだが、こいつう結局を張る人間と言つのは頭はいいのだが柔軟性にかけるといふ特徴がある。

「おっと、こいつは???」

そう例えば今回のように、

「真下までは結界を張ってないパターンだなー」

こんなことがある。

信じられないが、土の中に隠れてしまっているので、結界を張り忘れるというパターン。

目の前のぼっかりと空いた結界の抜け道を発見する。これが真実なのだ。

「いや、というか誰もかれもモグラになれるわけじゃないか・・・」

誰でも自由に形態変化ができるわけではないことを失念していた。何でもできると一般から外れて行ってしまい、特別なことを特別と感じなくなってしまう。それはそれで持つ者の悩みと言っべきか、つらいものだ。

それはともかく、俺は土中から浮上する。そして、

「ぶはー!」

前人未到であろう、神殿の内部のようなところに出たのであった。



5・殺され解放されることを望む少女を救う話（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 6・ダンジョンを攻略し少女を助けよ

### 6・ダンジョンを攻略し少女を助けよ

奇抜すぎる方法で潜入した封印神殿には、大きな魔力反応があった。

光源を「ライト」と呟いて魔力で作り出す。

俺の強力な魔力は広範囲を照らし出す。通常魔法使いが使う範囲限定的なものではどうしても視界確保という点では片手落ち感がない。そんなわけで範囲を広げるアレンジをしている。

さて、今いるのはドーム状の大きな一室のようだ。

俺は魔力反応のある方角へ歩き出す。

ざっと見たところ、古びてはいるが、もともとの作りはしっかりとされていて、今にも崩れそうだとか、そういう状態ではない。

また、結界の大きさは外から見たときはそれほど大きく感じなかったが、内部は相当広いダンジョンのようであった。

どうやら、結界によって内部の空間を歪めていたようだ。

そこまでの状況を瞬時に頭の中で整理する。

環境認識、そして戦略立案。その準備と実行。

俺が勇者パーティーで発揮していて能力そのものだ。それによって勇者パーティーは最適な鼓動を取り続けてこれたし、成長の速度も速かったのである。

俺の背中を見た彼らが、巢立った後にどうなるか楽しみにである。

反面教師と言う言葉はあるが、優れた教師の背中を見るほうが成長の糧になるのは確かなのだから。

さて、そんな余談はともかく、俺は歩みを進めていく。すると、このドーム状の一室からの出口の扉の両脇に悪魔をかたどった銅像が二体鎮座していた。

「ふむ」

俺はそいつらの目の前に「空間操作」のスキルを発動しておく。

さらに数歩近づいて行くと、

「侵入者が、赤き者を解き放とうと言うのか」「災厄の奴をか。愚かな、即刻排除する」

ゴゴゴゴゴ。

今まで単なる銅像だった二体の悪魔が、たちまち生物としての動き出したのである。

そして、一瞬のうちにこちらへとびかかって来た。

常人ならば見切れないほどの速度だ。恐らくはこの神殿のガーディアン。防衛機構のようなものだろう。パツと見てレベルは60ほどだろうか。魔王麾下の將軍クラスがこれくらいの強さだ。場合によっては一国が動かなくては討伐できないだろう。

だが、

「ぐぎ!?!」「いっ、いっればばっば」

目の前に事前に張っておいた空間操作によって、大気の分厚い層を作っておいた。そこに思い切り頭からぶつかっていったものだから、思うように進めずにレベル60の防衛機構どもが焦りを浮かべているようだった。

しかし、

「なめるではないぞ、人間風情があ!」

パン!

魔力放出によって、無理やりに圧縮された空間そのものを吹き飛ばす。

「残念だったな人間!」「人間のわりにはよくやった。この言葉を冥途の土産とし、幽世で誇りにするが良いわ!」

二体が目前に迫り、強靭な膂力を活かした攻撃をしかけてくる。

「「とつたわ！」」

二体のガーディアンが俺の頭部そして心臓へと喰らい突く。

そして、次の瞬間、俺の体はその攻撃によって、ぐにやりと曲がってしまふ。そう、あたかも空間に浮かんだ残像に斬りかかったかのように。

「なあ」「ど、どういふ」

空間の中に溶け込む俺の姿に狼狽しながら、ガーディアンたちが立ちすくむ。

「やれやれ、こんな初歩の手に引っかけるとは、正直がっかりだぞ」

「なっ、いつの間っ……」「後ろだと!?!」

「遅すぎる」

ズバン!

俺の手刀によって、ガーディアンの一体の首が勢いよく斬り飛ばされた。その首は遠くの壁にぶち当たると、ぐしゃりと音を立てて砕け散った。

「跡形も残らないか。軟弱なものだな。人間風情と侮るほど上等な木偶人形ではなかったようだ」

「き、貴様……何者だ。一体どうやって背後へと回った……。」

それにこの絶対防衛機構たるわし々をこつもいとまたやすく・・・ありえぬぞ・・・」

「全て目の前で起こったことが現実だ。まずは現実を直視することだ、木偶人形。それに雑魚に関わっている暇はない。俺は忙しいんでな。さあ、実力の差はよく理解できたろう。さつさとガーディアンなどという大層な役目は捨てて、その扉を開ける、出来損ない。これはお前などよりもよほど上位に位置する人間から、お前という愚か者に対する命令であり情けだ。選ぶがいい、口端にものぼらせる価値のない愚物よ。素直に道を空けるなら、見逃してやろう」

甘い俺はチャンスを与える。しかし、

「ちよ、調子に乗るなよ、人間んんんんん！ 不意をうつたくらいでいい気になるなあああ」

ガーディアンにも感情があるのだろうか。悔しそうな雄たけびを上げながら突進してくる。

「やれやれ、温情は与えてやったんだがな・・・」

俺は突進してくるガーディアンの攻撃を正面から受け止める。

「は？」

「ではな」

次の瞬間、ガーディアンの胴体部分が10以上に解体されて、絶命した。

断末魔の声を上げる暇もない。

「おそらく、絶命したことすら理解できなかっただろう」

苦痛すらもなかったはず。それがせめてもの情けだ。甘すぎるかもしれないが、むやみに相手を侮ったり苦痛を与えることは俺の趣味ではない。愚かにも勘違いする奴がいるが、挑発はあくまで戦闘を有利に進めるための技術にすぎない。殺し合いともなれば、俺も普段の紳士の仮面を脱ぎ捨てるということだ。それは甘さではなく、逆に厳しさと言ってよいだろう。あくまで守るための力なのだから。そのことに気づけない者があまりにも多い。

「ネタばらしをすれば、最初の空間圧縮は二つの目的があったわけだ。一つはお前らの動きを空気の層で鈍らせる役目。だが、これは困だ。本当の目的は光と空間を歪めることで屈折させ、俺の姿を幻影として見せる。その間にお前たちの背後をついたというわけだ。そして、二体目を葬ったときのネタも単純だ。一回目の攻撃傾向を分析したのと、挑発して単純な攻撃しかできないようにした。それによってまんまと一点集中防御で防いだというだけの話だ。そして、ダメージ返しのスキルによって、相手にその攻撃をそのまま返した」

つまり、

「最初から俺の掌の上だったと言っただけの話だ。戦略を駆使するというのがこういうことだ」

特別なことではない。俺のようにセンスさえあれば誰にでもできることだろう。最初から勝っているというだけの話だ。

願わくば、勇者パーティーたちが少なからず俺から学んでいてくれ

ねばと思ひ。

さて、それはともかくとして、

「開門せよ」

俺の言葉に、扉は反応し、ギギギギギという、久しぶりの稼働にさび付いた音を立てながら門を開く。あたかも俺を主かのように、従順に、招き入れるがごとく開く。



## 6・ダンジョンを攻略し少女を助けよ(後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるのっ……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 7・Sランクモンスターを簡単に屠る

7・Sランクモンスターを簡単に屠る

「なるほど、ダンジョン構造か」

俺が神殿に侵入した際にすぐ看破した通り、やはり外から見ただけでは分からないほどの空間が内部には広がっているようであった。

ダンジョンのようになっている。

ダンジョンと言うのは一つの生き物のように機能する。無論、本当の意味での生き物ではない。ただ、中に侵入者が現れた場合は、モンスターによってその者を屠り、その侵入者が持っている魔力や血肉を取り込む。それによって更にだんだんと強化されていく性質のものだ。ダンジョンはまた侵入者をあえて内部へ招き入れるために宝箱という餌を用意する。

「早速か」

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

グレート・ゴーレムが3体、巨体をつごめかして通路を防ぐようにして現れる。それぞれレベル80程度。

恐らくランクS級の冒険者でも連れてこなければ倒せないほどの強敵だ。

ちなみに俺の冒険者ランクはC級。他のメンバーは勇者と大聖女がS級。他はA級であった。そう、俺は他のメンバーよりも冒険者ランクがずっと低いのだ。

ならば、論理的に言えば、普通俺にはこの強敵たちに打ち勝つ力はないということになる。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおん！」

「うるさいなあ。耳元でわめくな」

俺は、しかし、そんな敵を目の前にしても驚くどころか、大声に対して迷惑そうに顔しかめるのみだ。

そして、

「雑魚どもめ。爆ぜろ」

そう一言だけ呟くと、

「ぐおおおおおおおおおおおおお」

ドオオオオオオオオオオオオオ

轟音とともに、3体のグレート・ゴーレムが四肢を爆発させて崩れ落ちる。

どいつも今自分たちに何が起こったのか分からなかっただろう。

突然崩壊する自分と仲間のゴーレムたちの様子に、いかに無機物である石の怪物であっても、生物的な根源的恐怖を覚えずにはいられないようだ。

ゴーレムの目に当たる部分が恐怖の色をたたえるかのように明滅を繰り返す。

(なぜ? どうして?)

そんな叫びと恐怖を目にたたえる。そして何よりも伝わって来る感情は、すなわち怯え。ゴーレムにはないはずの恐怖という感情だ。

まあ、それはそうだ。無理もない。

なぜなら、目の前の信じられない現象を生み出したのが、眼前の一人の人間たるこの俺であることは明白なだから。そして、そんな相手に喧嘩を売ってしまったことを後悔しないほど、こいつらは馬鹿ではない。魔術的な回路で作られた脳髄にだって知能はある。薄っすらながらも恐怖もある。圧倒的な存在を目の前にした時に混乱する程度の反射機能はあるのだ。

まあ、俺でなければ、そんな機能があることを確認するはめになることもなかっただろうが……。そのことだけは、申しわけがないようにも思う。だが、上には上がいる。そのことは残念ながら事実なのだ。

さて、何はともあれこのゴーレムどもは本当にランクSでなければ倒せないほどの強敵なのであった。だが、俺は間違いなくランクC。

ではなぜ俺が一瞬にしてこいつらを屠ることが出来たのか？

「無論、冒険者ランク制度の欠陥による」

俺は「はあ」と呆れてため息をつく。

そういうことだ。俺から言わせれば冒険者ランク制度は無意味なのだ。本当の強さとは別に攻撃力が強いとか魔法が使えるとか、強力なモンスターを倒したとか、そういうことではない。

戦略を練り、状況にあわせてスキルをはじめとする各種手段を適切に選択、実行できること。何よりも勇気・柔軟性・判断力・コミュニケーション力やカリスマ。そういったものの方が重要である。

バックアップといういわば指示役、軍師役に徹してきた俺は、敵を直接倒すことが少ない。だからランクがCになるわけだ。しかし、その評価基準に欠陥があることは明らかだ。なぜならば、全体を見渡して指示命令を出せる俺は、他の人間たちの行動や技をすべて理解した上で指示を出して、パーティーを勝利に導いていたのだ。

それに実は、俺がやった方が早いときも、あくまでバックアップに徹していた。メンバー全員のパワーを把握し、指示を出して、望むべき結果を出しているのだから、当然、俺自身がその行為を代替することも可能なわけだ。もちろん手段は違う風になるわけだが、戦略家である俺には手段が無限にあるのは当然である。

要するに、ランク制度はこうした真の力を見定めることは出来ない欠陥のある制度ということだ。Sなどとうに超えた力を持つ俺の真の力を計測できないというのは、かなり致命的な欠陥であるという

証拠でもあるだろう。

「ま、俺もお守りから解放されたから、時間があればこのランク制度の欠陥を修正してやってもいいかもしれないな」

社会制度を直すこともまた、才能ある人間の責務だ。面倒なことではあるが。はあ。

まあ、今はそんなことはどうでもいいか。

俺は崩れ落ちて絶命したゴーレムたちを見下ろす。今回のゴーレム戦で、俺がやったのは決して難しいことではなかった。単に『魔力増幅』をしてやった、というだけ。

「こんな使い方をしてる奴は一人もいないだろうな」

俺は苦笑する。当たり前だ、こんな突飛な方法を思いつく奴もおかしいし、それを実際にこんな実践の場でやってしまうのも、どれだけの決断力と勇気がいるか分かったものではない。

ゴーレムというのはデリケートな創造物であり、綿密な魔力神経システムによって動く、精密器械だ。

よって、魔力のコントロールが非常にデリケートに行われている。

そこに魔力を多少流してやったというだけだ。

では、少し魔力増幅をしてやれば、ゴーレムは崩壊してしまうのか？

「否」

そうではない。例えば、今俺が流してやった魔力は、一体につき国の魔法使いたちが何とかひねり出せる魔力の合計を優に超える。

それを一気に3体分、流してやったのである。

規格外、そう言わなければならぬほどの魔力量を、ゴーレムに流してやったのである。いわば、大陸中の魔力を俺一人で凌駕しているようなものだ。

軽々しく口外すると、また外野がうるさくなるので言わないが、俺の才能と、そして戦略眼と勇氣・判断力があって初めてできる奇跡的な大戦術だと言える。

## 7・Sランクモンスターを簡単に屠る（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 8・出来損ないの竜の娘

### 8・出来損ないの竜の娘

「ま、あまりコスパがいい方法でもないか」

俺は頭をかきながら反省する。ゴーレムとの勝負には勝ったが、それよりもその戦い一つ一つを反省し、次に活かすことが大事だ。そう、あいつらにもそう言い聞かせていたものだ。

「俺がいるから勝つのは当然。だが、おごらずに今の戦いを思い返し、次はもつとうまくやるように」と。

さて、そんな思い出を脳裏に浮かべつつ、俺はゴーレムだったものたちの瓦礫の上を踏破しようとする。

と、その時、その瓦礫の中にキラリと光る物が目に入った。

「ん？ これは・・・」

拾い上げてみると『血のように赤い鍵』であった。

「意味深な・・・。というか、もしかすると今の3体がこのダンジョンをクリアするための鍵だったのかもしれないな」

だとすれば何と悪辣な……。

「俺以外突破できる奴がいらないだろ、それじゃ……」

どこの世界にグレートゴーレムを3体配置して、ダンジョン攻略の条件にする奴がいるというのか。魔王城じゃないんだからなあ……。

俺は呆れながらも、鍵を懐にしまいこみ、ダンジョンを歩き始めた。

「ふむ、ここがどうやら終着点といったところか？　死にたがりの娘もこの中だろうか？」

無数のドクロがかたどられた巨大で真っ赤な扉が目の前に現れていた。

なお、ここまでどれくらいのもンスターを倒したかは、言うまでもないだろう。

だが雑魚を幾ら倒したと言っても自慢にはならない。それが大陸史に残るほどの数と質だとしても、な。無論、冒険者ランクなどを突き抜けてしまっただろう。

だが、俺がそれを望まない。そういうことだ。誰もかれもが有名になりたいわけではない。目立てば煩わしいことが増える。名声にも興味がない。今のようひっそりと後ろから前途有望な者たちの教師をしているほうが、俺には向いている。自分よりも他人の成長の方が見ていてやりがいを感じるからな。

「さて」

俺は先ほど拾った鍵を、扉にあってた鍵穴へとはめて、回す。すると、

ガゴン！

鈍い、大きな音とともに、頑強なその扉がゆっくりと内側へ開いて行く。

中からはひやりとした空気が漏れだす。遙かなる時間の停滞を溶かすように、ひどくかび臭い匂いが流れた。

いかにも怪しげだ。

だが、俺は躊躇なく中へと入っていく。

畏であることは分かっている。だからこそ、入っていくのだ。

畏を張るということは、その奥に何かがあると言っているようなものだ。分かりやすい逆説なのである。こうした即断即決力は、どうしてもその人間のセンスなどにもよるだろう。

そんなことを考えているうちに、ここの間取りが大体わかって来た。

100m四方の玉座のような空間だ。目の前には階段状の段差があり、一番上にはかつて豪華であったろう玉座が置かれている。

そして、その玉座には一人の人間が座っていた。

「ようこそ、いらつしやいました。ここに至るかたがいらつしやるとは思いませんでしたよ」

そう言つて拍手をしながら、一人の男が立ち上がる。魔法使いといったいでたちの長衣を身に着けていて、眼鏡をかけている。口元には余裕の笑みを浮かべながら。

「少なくともこの1000年は、誰もここには至らなかつた。あれほどのモンスター、そしてグレートゴーレムの群れ。畏の数々。どれほどのアイテム、魔力、体力を消費してここまでいらつしやつたかは分かりませんが、既に瀕死、重症のはず。ふふふ、我が結界の粹を堪能いただけましたかな？」

「……はい？」

いやいや。俺は何を言っているのかと呆れながら、自分の体を見下ろしてみた。

「傷一つ、汚れ一つないんだが……。あの程度のダンジョンで悦に入ってるって、お前自分がよっぽど恥ずかしい勘違い野郎を演じてること、気づいているか？」

自分のことでもないのに、逆に俺がちよつと気恥ずかしいのだが。

「む、そんなわけがありません。そ、そう！ 魔力消費量は膨大なものになつたはずですよ！」

「まあそれはそうだな。一国分の魔力量は使つたかな」

「そうですねー！ ……って、一国分。は？ あなた一人で一

の魔力を・・・？」

自分の実力と比較した時に、あまりに相手が規格外だと、人は混乱をきたす。やれやれ、この時点で相手の実力が知れる。こういった状況こそが俺の 強さ というものを暗に示してしまう。それは俺の意志とは無関係に、だ。

だが、

「ふ、ふふふ。嘘で私を欺こうとしても無駄ですよ！ さあ、観念して、わしがダンジョンの血肉と果て、私の神への進化の礎となちなさい！」

現実から目をそらしてしまっただか。まあ、それもまた自分と比較にならないほどの相手や現実と直面した時によくあることだ。

ただ、今はそれよりも・・・、

「神への進化だと？」

確かそう言ったか？

「左様！ 私の野望、それは2000年前にさかのぼる！ かつての邪神アークマターはっ・・・」

興奮したのか、テンションを上げてまくし立ててくる。あちゃーと俺は後悔する。こういった手合いは自分の野望と言うかささやかな夢を語る機会に飢えているものだから、こういったチャンスを見逃さないのである。

が、

「うるさいなあ、お前の野望に興味なんてないんだ。黙ってくれるか。それに、大体みんな一緒なんだよな、そういう野望って。実にくだらんし、退屈に過ぎる。不老不死だか世界の支配か何だかが目的なんだろう？ さ、そんな下らないことより、俺は助けを求められてここまで来たんだが？ お前、何か知ってるなら、そこいらを説明しろ」

「そんなこと、だとう！ き、貴様あ」

途中で演説を切り捨てられて、激昂する。

だが、俺の言葉に考え始める。

「む、ぐぐぐ、だが、助けだと？ そんなはずは……。いや、なるほど、この1000年で結界が弱まり、外界へと助けを呼んだか。あの出来損ないのドラゴン娘は」

「出来損ないドラゴン娘？」

「ふふふ、驚きましたか。私の進化に不可欠な魔力供給源として、ゲシユペント・ドラゴン種族の娘。不老不死のドラゴン種族を封印し、我が魔力を無限に増強する糧としているのだ！ 我が編み出した秘儀によつてな！ まあ、ドラゴン固有の力を持たない出来損ないですがね！」

だとすれば……。

「そう 驚くのも無理はない！ ドラゴンを封印し、あまつさえ利用し、神に至ろうとする秘儀を編み出した天才！ それがこの私

なのだから！」

俺は息をのみ、

「未成年者略取というやつか。まさか、犯罪者だったとはな・・・」

「は？」

俺の一言に、相手は何を言われたのか分からないとばかりにポカンとした。

## 8 ・出来損ないの竜の娘（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 9・野望を打ち砕いて少女を助ける

9・野望を打ち砕いて少女を助ける

「未成年者略取というやつか。なんだ、ただの犯罪者だったのか」

「は？」

俺の一言に、相手は何を言われたのか分からないとばかりにポカンとした。

いやいや。は？ではない。

「子供をさらって、しかも長期間監禁するなど、例えドラゴン種族であれ何であれ、許されるわけがなかるう。このつまらない犯罪者が！」

「な、なにをずれたこと！ ドラゴン種族に誘拐も何もあるものか！ それに、そもそもなぜ私が犯罪者呼ばわりされねばならん。私は誇り高きハイ・プリースト！ 私を罪に問う法がどこにつ……！」

「常識的に考えて、ダメだと分からののか？ だから馬鹿なのだぞ、貴様は」

俺は目の前の対象からもはや興味をなくす。

「分からののか？ 法などというのは便宜的に決めたルールにすぎないのだ。大切なのは、当たり前前のことを当たり前前に感じる自然の心だ」

「なっ  
」

自明の正義の前に、法だ何だと言うのは馬鹿のすることなのだ。そして、残念ながら馬鹿はそれを理解できないのだから始末に負えない。やれやれ。

なお、この馬鹿は馬鹿の上に、卑怯者であった。

「くそ・・・言いたいことはそれだけあ！ 近寄るな！ これを見る！」

そう言うと、男がいる玉座の真上のブロックがガゴン！と音を立てて動き、せり出して来た。巨大なクリスタルの塊だ。

そして、その中には、銀色の髪を長く伸ばし、瞳を閉じて眠る少女の姿があった。頭には小さいが角のようなものが生えている。俺よりも見た目は一回り小さい。その顔や体はやせこけ、とても見れた姿ではない。思念波を飛ばしたのはあの娘ということだろう。今は気を失っているのか思念波は飛ばしてこない。

「近づけば、こいつがタダで済むと思うな！」

「はぁ・・・。犯罪者よ、お前は神になるとか、ただでさえ下らんことを言っただけじゃなかったか？ それが仮にも神になろうとする奴がす

ることか？ もはや、ただの間抜けな悪役ではないか」

またため息。

「犯罪者で、間抜けで、悪役とは。俺の時間を返せと言いたいぞ」

「ぐ、ぐぐぐ……。ふ、ふん！ 余裕ぶっているようだが、ならば、試してみるか」

血走った目でクリスタルに手をかざす。

「盗人に刃物か」

更に更に、もう一度嘆息して呆れてから、

「分かった、分かった。ただの間抜けな犯罪者よ、俺は手を出さん。証拠に、魔法・スキルの無効化を発動する。これで俺が何をしても、何の効果も出せない」

「余計なことを言うな、二度と私をつまらない犯罪者などと言うな！ 『いや、間抜けが抜けているようだが……。』 うるさいぞ！ ふうふう、ふふふふふふふふふ。と、ともかく、私の勝ちのようですね。ふ、ふふふ、分かれがいいのです。よ、余裕ぶりやがつて……。ええ、ええ、いいですか、動かないでくださいよ。あなたは油断ならない敵のようだ。その口が二度と動かないよう一撃であなたの首と胸を分けて差し上げましょう」

男はにやりと口元を歪めた。しかし、

「そんなことより上を見たほうがいいんじゃないか？」



怖の眼差しで見あげる。

「そ、そんなことが出来る訳がないっ… 他人の魔法にそんな簡単に割り込むことなんて… できる訳がない!!」

「現実から目をそらす。それもまた自分と比較にならないほどの相手や現実と直面した時によくあることだ」

俺は先ほど思ったことを、今度は口に出した。

「わ、私を殺すのか。くそ、もう少しで神への進化をなしとげられたというのに」

そう口惜しそうに言う。だが、俺はまたしても、「はあ?」と叫んでから、

「あ、いや、別に。というか、お前程度の男は最初から敵とはみなしていないんだ」

そう訂正する。

「な… に…」

「お前ごとき勘違い野郎を相手にしたなんて、恥ずかしいことこの上ないからな…」

正直ゾツとする。

「な… な…」

パクパクと屈辱なのか怒りなのか、顔を赤黒く染める男だが、瀕死の重傷であるために何もできない。そもそも得意の魔法も俺の無力化によって封じられて手も足も出ないというのが現実なのだ。

「さて、と」

俺のがここに来た理由は、単に呼ばれたからだ。目の前のクリスタルの中で眠る眠り姫に。眠りドラゴンか？

「くくく、無駄ですよ。永久封印クリスタルに封じ込めたのですから。いかなる力を持ってしても、そのクリスタルを破壊することなどっ…！」

「うるさいなあ。ほれ」

ガシャーン。造作もなく砕け散った。

「はああああああああああああああああ」

「本当にお前、うるさいなあ。いいから黙ってる」

「むぐー　　むぐー」

俺は原始的だが男に猿轡をはめて、玉座から突き落として、そこいらに転がしておく。威厳も何も失った元、神を目指していた間抜けな犯罪者が泥だらけになって遠くで転がる。まあ、犯罪者にはお似合いの姿であろう。屈辱の炎を目にやどらせて血がでるほど歯ぎしりしているようであるが、地べたに這いつくばりながらそんなことをされても気持ち悪いだけである。



## 9・野望を打ち砕いて少女を助ける（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 10・死にたがりのドラゴンから恋するドラゴンへ

10・死にたがりのドラゴンから恋するドラゴンへ

「おい、大丈夫か？ 起きられるか？」

「わ・・・わしは・・・ここは・・・くっ、げほげほ」

苦しそうだ。それに、確かに何かの呪いに苛まれているように、俺のステータス異常感知が告げていた。

「大丈夫か？ 苦しそうだが」

「ふ、出来損ないゆえな。ドラゴンの姿にもなれぬ竜種じゃよ。そこを人間の魔法使いに付け込まれ、封印されたのじゃ。このような哀れな姿にまでなってる」

銀色の髪は伸び放題でくすみ、顔がよく見えないが、髪の間隙から見える瞳は濁っていた。顔は薄汚れ傷つき、身体全体がやせ細ってかりがりであった。

「出来損ない。さつきも言っていたな。ああ、ちなみに、その魔法使いというのはあれか？」

俺は玉座の下でのたうち回る男を顎で示した。

ドラゴン娘は玉座より眼下を見下ろす。自分をさらった元凶の男を見つけて、初めてその目に力を宿した。憎しみの目を向けながら、

「おのれ　よくもわしを1000年もの長きにわたって閉じ込めたな……。しかも、わしの権能そのものまで奪い取りおつて。出来損ないどころか、もはやわしはドラゴンとしての資格すら喪失した……。じゃから、親切な方、救ってもらって何じゃが、ぜひわしを殺しておくれ……」

最後は絶望したように言った。

「ちよつと待て、一体どうということなんだ？　もう少し事情を分かりやすく説明してくれ」

「そうじゃな。ドラゴンですらなくなっても、その誇りまで奪われたわけではない。お主に説明する義務がわしにはある。まず事の発端は、そこに転がる男じゃ。奴は神になるという野望から、ドラゴンの権能を奪うことを思いついた。じゃが、誰でも良い訳ではない。ドラゴンの中でも王の血統でなくてはならぬ。なぜなら、ドラゴンの王の血統はさかのぼれば神につながっているからじゃ。奴は狡猾にもドラゴンの中でも出来損ないのわしを見出してクリスタルに閉じ込めた」

「その出来損ないというのがよく分からないのだが？」

ドラゴン娘は自嘲するように笑う。

「長大な寿命、自己再生、破壊力、そして空の支配

という4つの権能がドラゴンを成り立たせる。わたしにはそのいずれもなかった。弱くて脆い、空も飛べぬ竜などどこにいるじやろうか？ そのうちドラゴンの姿でいることも難しくなり、人間の姿で魔力の消費をおさえておる始末じゃ」

「だから出来損ないなのか？」

「そうじゃ。竜王の末娘なのに出来損ないのわしをドラゴンの恥として、里を追い出されたのも無理からぬことよ」

どうやら彼女は故郷を追われた身らしい。しかも竜王の末娘と言った。それはかなりやんごとない立場の竜なのではなかるうか？

「話を戻すが、弱っていたわしはあの魔法使いに迂闊にも捕らえられた。そして、時間をかけ、少しづつ我が竜の権能を自分に移したのじゃよ。その権能はさつきも言った 長大な寿命、自己再生、破壊力、そして 空の支配 という4つの権能。いずれも神を目指すうえでは欠けてはならぬ資質と言えよう」

「なるほど、実質的な神の権能を長い時間をかけることで奪い取ってきたというわけか」

「それらが奪い取られたわしは、もはやドラゴン種族とは言えぬ・・・ただの小娘じゃ・・・。こんな薄汚れて醜い、な」

「ふーむ、なるほど。話は分かった」

俺の言葉に娘は悲しそうに目を伏せる。まるで自分の死期を悟ったかのように。だが、

「では、すまないが、ちょっと試させてもらっていいか？」

「はえ？ 試す？ 一体何をじゃ？」

「その権能を取り戻すのと、あと、その権能が機能しない原因である 呪い を解呪しようかと思うんだが」

「……………  
へ？」

娘は何を言われたのか分からないとばかりに首を傾げる。

「そなた今何と申した？」

「簡単な理屈だよ。奪われたら奪い返せばいいだけだろう？」

「ああ、いや、そっちもそうじゃが。いや、聞き間違いか？ わしの 権能を使えるようにする と聞こえたような気がしたのじゃが……………」

「そう言ったが？」

俺の答えにドラゴン娘は目を見開く。

「そ、そんなことが出来るのか」

えらい食いつきであるが、

「俺の ステータス異常探知 と 隠蔽解除 のスキルの解析結果によれば……………かなり珍しい 呪い がかかっているのが 発見

されたよ。どうやら通常の 鑑定 スキルでは見破れないように巧妙に隠蔽されていた。だから今まで気づかなかったんだろう。・・・相当の悪意ある呪いだな。かかっていたのは 悪竜の呪 というやつで、普通の人間ならば1日もたたず死んでしまうほどの強力な呪いだ。その呪いの効果は『その存在意義の剥奪』」

娘は口をパクパクとさせた。

「そのような強力な呪いをわしは受けていたのか・・・おそらく、次の竜王を選ぶ際に末娘のわしが邪魔だったか・・・」

寂しそうな表情で言った。

「なるほど、竜にもいろいろあるのだな・・・」

俺は何となく彼女の頭を何となくなでてしまう。

「!?!? そ、そなたっ・・・」

「おっと、すまない嫌だったか？」

そりゃ、いきなり知らない男に頭をなでられるなんて嫌だったろう。俺は手を引っ込めようとするが。

「こ、こら。勝手にやめるでない。それに、嫌な訳が・・・な、なかるうが! ぎゃ、逆に・・・そ、そなたは嫌ではなかったか? こんなワシのような醜い女を・・・」

「醜い? どこがだ?」

「どこがって……。この姿を見れば分かるじやろ。顔も体も醜くただれておる。男が好き好む姿でないことはよく理解しておる」

だが、俺は首を傾げると、

「そうか？ 俺はそんな風には思わないが……。むしろ、1000年も閉じ込められていたのに、健気な心を保ち続けた、美しい娘だなあ、と思っっているが」

「なあっ  
」

と、俺の正直な感想に、ドラゴン娘は素っ頓狂な声を上げると同時に、顔を真っ赤にした。

「う、美しい……。わしが……。そんなこと初めて言われたのじや……。ど、ドキドキするのじゃ……。」

何かぶつぶつ言っているが、

「とにかく、呪いを解呪するぞ。原因が 悪竜の呪 であることは分かっているし、強力な呪いではあるが、封じているのは元々ドラゴン種族固有のスキルだ。それを元に戻すということならば、自然に存在する復元力を利用すればいい。世の摂理において 奪う というのは難しい。反対に元の形に 復元 するということはそれほど難しいことではないんだ」

「摂理……。それほどまでにこの世界を見通しているというのか、お主は」

驚愕に目を見開くが、



「こ、これは・・・本当にわしの姿なのか？」

「どうやら、呪いが解けて、本来の権能が戻ったようだな。呪いさえとければ、本来の竜の力である 自己再生 能力で元の姿に戻ることは当然のことだ」

俺はそう答える。

すると、娘はなぜかちらりとこちらを見ると、顔を赤くする。

「そ、それでどうじゃろうか。わしの姿は？」

上目遣いに俺の方を見ながら、スカートのすそを握りながら言う。  
なぜか体のラインを執拗に見せようとするが・・・。

「どうって何がだ？ 最初から美しい娘だと思っているから、特に変わりはないようだか・・・」

俺は淡々と答える。

「うん・・・そうじゃったな・・・。旦那様はずっとそう言うてくれておったのじゃな！」

「えっと、なんで旦那様なんだ？」

「だって、それはじゃな・・・そ、それを言わそうだなんで、なんていけずなお人なのじゃ・・・もっつ」

娘がもじもじしながら何かを言おうとするが・・・。



「うんんぎゃああああああああああああああああああああああ  
ああああ 私の若さが!? 力が 空を支配する権能があ  
抜けていく! この1000年、ずっとこんな穴倉にとどまって  
溜め続けたわしが才能の塊たちがあ」

玉座の下から聞こえる男の絶叫がそれを遮った。

どうやら行き場を失った呪いが、呪詛返しとして、男の方へ向かつ  
たらしい。さつきも言った通り、人間では一日として耐えられない  
ほどの呪いだ。

やれやれ。

「お前のは才能なんて大それたものではなく、ただの盗人だろうが  
・・はあ。ま、だが、若さというか寿命すら元に戻ってしまおうと言  
うのは、残念だったな。残念ながらこればかりは俺にもどうしよう  
もない。盗んだものは利子をつけて返すことになるということだ」

「ひ、ひぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
・たしゆけて」

若々しかった姿は、たちまち枯れ果てた老人の姿になる。そして、  
もともとの寿命をとうに超えた状態だ。一瞬にして老人の姿から骸  
骨へ、やがてその骸骨すらも塵となって消える。

「俺は情け深いゆえに、本当は助けてやりたかったのだがなあ。  
でも、残念ながら道理をまげるという自業自得ゆえに、助けてやれ  
なくて残念だ。まあ、人は決められた寿命の中で生きて死ぬのがい  
い。これもお前のためだったのだらう。俺は結果的にはお前を救っ  
てしまったのかもしれない」

俺が殺したわけではなく、世界をあるべき姿に戻したとき、自然とこの世界の摂理が男の存在を許さなかったのだろう。俺もしょせん、この世界の一部に過ぎないということだ。俺は殊勝にそう感じたのである。

さて、そんな俺が一人の男を救ったという顛末はともかく、

「力も・・・戻って来たようじゃ。しかも、何だか力が普通よりも溢れておるような気がするのじゃが？」

「ふむ、そうなのか？ 失礼だが鑑定してみてもよいか？」

「！？ 無論じゃよ。わ、わしの全部を見ていいのは、旦那様だけじゃからな」

鑑定一つに大げさな、と思いつつも、彼女のステータスを確認すると、

LV：99  
HP：1029030  
MP：284048  
攻撃力：38940  
防御力：830493  
魔力：39499289  
称号：乗り手を得た神竜  
スキル：4つの権能

「規格外すぎるぞ なんだこのステータスは。ドラゴンと言うのは全員こんななのか？」

「い、いや。さすがにこれは高すぎるのじゃ。これは恐らく旦那様が我が運命の相手だったからじゃろう」

娘は感動したかのように、俺の方を頬を赤らめて見た。

「称号のところ、 乗り手を得た神竜 というのがあるじゃろう？ ドラゴンは誇り高き生き物ゆえ、なかなか乗り手を許可せぬ。じゃが、心を完全に許して相手には竜騎士としての資格を与えるのじゃ。そして同時にドラゴンとしての格も一段階上昇する。我は単なる竜王の末娘。神々の竜の末裔にすぎなかったが、旦那様を我が唯一の乗り手にすることで、神龍となることが出来たのじゃ」

「そういうことなのか。だが、俺は別に特別な存在でもなんでもないぞ？ それでもこれほどのパワーアップをするものなのか？」

だが少女ははあ、と嘆息し、

「旦那様が特別じゃなくて、誰が特別なのか大いに疑問じゃ。わしは先ほどから旦那様より神のオーラに近いものを感じておる。心当たりがあるのではないか？」

「なるほど。確かに俺は神に選ばれた男ではある。まあ、そんなことに興味はないがな」

「旦那様は無欲でストイックなのじゃなあ」

ともかく、俺はとんでもない存在を、この世界に生み出してしまったらしい。まあ、俺の格を考えれば、俺が動けばこれくらいの奇跡が起こることは当然なのかもしれないが。優れた判断や優れた行動

が、様々な奇跡を起こし、人々を救うと言う典型的な形だということである。

それはともかくとして、コレットは改まった様子で俺に聞いていた。

「旦那様・・・本当にありがとう。あの遅くなってしまったが、旦那様の名前を聞かせてもらいのじゃが」

「おっと、そう言えば自己紹介がまだだったな」

俺は今更ながらに思いだす。

「俺はアリアケだ。つい先日勇者パーティーを追放されて、気ままな一人旅をしているところさ」

「そうか。アリアケ。深く礼を言うぞ・・・。わしはゲシュペントドラゴン種族の長が末娘コレットとデューブロイシスじゃ」

彼女はそう言うと、顔をさっと赤くしてから、

「これから末永くよろしく頼むぞ、わしの旦那様」

10・死にたがりのドラゴンから恋するドラゴンへ（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

11・コレット(竜の末姫)が仲間になった!

11・コレット(竜の末姫)が仲間になった!

「まず聞いていいか? ええと、コレットさん?」

「さんなど不要じゃよ。コレットと呼んで欲しいのじゃ。いや、別に”お前”とかでもいいのじゃぞ! とまあ、何なりと聞いておくれ、旦那様」

いやいや。

だから、ちょっと待たんか。

「気になっていたんだが、旦那様というのは何なんだ・・・?」

「わしがそう決めたのじゃ。って、言わせるではないわい、この旦那様!」

そう言つと、娘は顔を赤く染める。

だめだ、このドラゴン。勘違いだと思つが、まるで恋する乙女のようになっている。まあ、もちろんそんな訳がないのだが。

俺はコレットを改めてちゃんと見た。

美しいのは銀髪ばかりではなかった。宝玉のような赤い瞳と唇としなやかにすらっと伸びた手足。年齢は俺よりも一回り程小さいものの、将来は絶世の美女になることが約束されたような少女だった。一緒に町でも歩けば周囲の男がまず間違いなく振り返るだろう。

竜種であることを示す一対の角以外は、何ら人と変わりがない。

「あつ、そう言えば」

俺は思いだす。ドラゴンには有名な伝説があったな。

「ドラゴンには自分を倒した相手と契りを結ぶという伝説があったな」

間接的に、俺はコレットを封印していた男を倒すことで、ドラゴンを倒したことになったのかもしれない。

だとすれば気にしなくていいぞ……。そう言おうとしたのだが、

「は？ なんじゃそのけつたいなルールは？」

違ったらしい。

美しい顔に怪訝な表情を浮かべられてしまった。

「そんな気色悪い変な理由で、一生添い遂げる旦那様を決めるわけがあるまい！」

「じゃあ、なんで俺なんだ？」

そう聞くと、より一層顔をカーッと赤くして。

「そりゃあ・・・お主が絶体絶命のこのわしを、超かつこよく助け  
てくれたから、そのう・・・その姿に一目ぼれしただけじゃ・・・  
って言わせるではないわい！ もう もう」

ポカポカと俺の胸を叩いてくる。痛い痛い。竜だけに半端ない。

ただ・・・、

「それほど大したことはしていないと思うがなあ・・・」

そう正直に言うが、

「んなわけないじゃろうが」

呆れられながら首を横に振られた。

「いちおう説明しておくがの、あの魔法使いはな、手段はともかく、  
出来損ないとはいえ、ゲシユペント・ドラゴンを1000年以上の  
長きにわたって封印したのじゃぞ？ 場合によっては世界を滅ぼす  
存在になったかもしれん」

えっ

「そうなのか？ ただの少女略取の犯罪者だと思ったんだが・・・  
弱かったし・・・」



「いや、旦那様はどんなに規格外なのじゃよ。あれを弱いつて・・・いちおう竜族の権能を奪い取っておったわけじゃからな」

そう言われるとそうだ。竜族は地上最強の存在とも言われている。その権能を持った相手を簡単に倒してしまったのだから、コレットが驚くのも無理はなかった。

だが、本当に大したことなかったのだがなあ・・・。

娘は咳ばらいをして、

「とうか、旦那様。答えを聞かせてくれておらんぞ。わしの主様にはなつてはくれんのか？ 正式な我が竜騎士となつてはくれんのか？ 悪い魔法使いにつかまって、助けてくれたのに、助けるだけ助けて行ってしまうのか？ この捨てドラゴン を非情にも見捨てるのか？」

「捨て犬みたいに言うな。ていうか、故郷に帰ればいいだろう？」

「呪いをかけた相手がいるような地にか？」

「そうだったな・・・。すまない、つらいことを思い出させてしまつて」

「いやいや、それはどうでもいいのじゃ。そのおかげで旦那様と会えたおなら、全て良かったとすら思い始めてきたくらいじゃ！ なので、むしろ旦那様がわしをどう思っているか、それを聞きたいのじゃ。やはり、こんなチンチクリンではだめなのか？ そうなのか？ じゃが、ちんちくりんじゃからできる技もあると思うぞ？ わしは尽くすタイプじゃぞ？ 頑張つて旦那様を満足させると思うぞ

？ な？ な？」

そう言つて、縋る様にしてきた。というか、俺を逃がすまいとホールドしてきた。チンチクリンとか言っているが、身体は年相応に出るところは出ていたりする。ええい、胸をおしつけてくるな。

「いやいや、チンチクリンで。お前くらいの美人は一人くらいしかお目にかかったことがないよ。ていうか、頑張るってなんだ！」

別にお世辞ではない。

俺の先日まで所属していたパーティーに、一人、同じくらいの美少女がいたが、そいつを除いては、これほどの美しい少女は見たことがなかった。

「また美人じゃと言ってくれたな！ ふ、ふふふ」

嬉しそうに微笑む。が、

「・・・じゃが、そのわしと同じくらいの美人とかいう一人が気になる。ていうか、嫌な予感がするのじゃ。なんじゃか将来旦那様を取り合うライバル的存在になりそう的な予感が・・・」

次は難しい顔をした。何を言っているのかよく理解できない。

やれやれ。俺はため息をつく。

久しぶりの一人を満喫するつもりだったが・・・、

「捨てドラゴンか・・・。まあいいさ。飽きるまでついてくればい

い

「へ？ よ、良いのか？ そんな簡単に」

突然の許可に啞然とした。

「俺がお前の唯一の乗り手なのだろう？ なら、一緒にいるのは道理というものだ」

すると、彼女は、

「えへへ、とてもうれしいのじゃ」

年相応と言って良い、あどけない、満面の笑みを浮かべたのであった。

嬉しそうに微笑んだ。

「むむ……」

ただでさえ絶世の美少女だけあって、微笑むとその破壊力はすさまじい。俺としたことが少し息をのんでしまった。

「……ああ。別にあてのある旅じゃないからな。急ぐ旅でもない。ドラゴンの姿になって飛んで行く必要もないし、目立ちたくないから、徒歩で進んで行くつもりだ。あと、俺は勇者パーティーをクビになった身だ。今更大的な街に居場所なんてない。冒険者ギルドもきつと俺のランクをCからFまで落とすだろうさ。なら、田舎の僻地にでもひっこんで、適当に畑でも耕すつもりだ」

「連れて行ってくれるのか、やったのじゃ　よろしく頼むぞ旦那様　我が竜騎士殿！」

そう、喜んでから、

「じゃが、一点腑に落ちんのじゃが・・・」

コレットは怪訝な表情を浮かべてから、

「その勇者パーティーとやらは、阿呆なのか？　旦那様をパーティーから追放するって。それと人間社会というのは、そもも人を見る目がないのか？　明らかに旦那様がいたから、その勇者パーティーは勇者パーティーでいられたのじゃろ？　という当たり前のことが、わしですら一瞬で察することができるのじゃが・・・」

そう言うてから、

「追放って、どんな判断なんじゃよ！」

おおいにツツコンでから、小首を傾げたのであった。

「まあ、無理もないことさ」

「そうなのか？」

「理解できないこと。余りにもレベルの違うもの。それを人間は恐れて遠ざけようとする。人の本能に根差した逃避だ。自分を保つ、というのは優れた者を排除する、という事実が含まれる」

「確かに人間は社会的な動物じゃて。しかし、だからと言って人間

の宝と言っても過言ではない旦那様を排除するのは歴史的な失敗ではないのじゃろうか？」

「さてなあ。だが、あいつらに教えるべきことは教えた。保護者、教師としての役目は終えた。あとは生徒であるあいつら自身が独り立ちをしなければならんだ」

「なるほどのう」

コレットは得心したとばかりに頷き。

「確かに旦那様は勇者そのものではないようじゃな。むしろ勇者や人類、いやこの世界のあらゆるものを、望ましき場所へ、あるべき姿へ、通るべき道へ、そういったところへ先導する『導き手』なのじゃろうな」

「お前の言葉は大仰だな」

「何を言うか。これでも出来るだけ抑制して言っただつもりじゃわい」  
やれやれ、過大評価もいいところだ。俺がやったことなど、人類を救うためのほんの些細な一手にすぎない。俺は人類の、いや世界を『バックアップ』する程度の裏方にすぎないのだ。無論、俺のそうした行いが人類や世界の行く末を決めると言う、決定的な役割を果たしてはしまうのだが、やはり俺は裏方にすぎないし、その方が性に合っている。目立つのはそういうのが好きなもの好きに任せておけばいい。俺はのんびりとしたのが好きなのだ。力があり、才能があったとしても、それを振りたいとは思わない。そういう地位や名誉よりも、日々の平穩こそを愛する人間が世の中にもいいだらう。

「さ、そんなことより、改めて宜しくな。コレット」

「うむ、こちらこそ宜しくなのじゃ、旦那様。わしの唯一の乗り手。  
竜騎士様 今後久しくよろしく頼むのじゃ」

そう言ってコレットは俺の腕にヒシとしがみついてくるのだった。

なお、この時コレットがさらりと言った「今後久しく宜しく頼む」という言い回しが、ドラゴン種族においては、命尽き果てるまで一緒にいる、という意味合いであるとは、この時の俺は迂闊にもまったく気づかなかったのだった。”

11・コレット（竜の末姫）が仲間になった！（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

12・一方その頃、勇者ビビアたちは

12・く閑話 一方その頃、勇者ビビアたちは

「くそ、暗くてまったく先が見えねえじゃねえか どうなってんだよ、プララ」

「ちよつ、ちよつと、怒らないでよ勇者様、一生懸命やってんじやんか！」

「アリアケは簡単に洞窟一帯を明るくしてたろうが！ なんで半径10M程度しか明るくできないんだよ！」

「・・・」

俺は怒鳴る。

俺たちは今、呪いの洞窟のダンジョンにいた。

アリアケと言う邪魔者を追い出して初めてのダンジョン攻略であった。いわば肩慣らしであり、簡単に攻略出来て当たり前であった。

だが、俺たちの空気は重かった。



「何だよ、なんで黙っちまうんだよ」

俺は不機嫌さを隠そうともせず言う。プララは黙りこんでしまった。くそ、一体何だっただい！

「たかだか、洞窟中を明るくするだけだろうが」

そんな簡単なことを・・・っ！

だが、「はあ」とため息の音が聞こえた。

今まで何も言わず、後ろから俺たちの様子を眺めていた聖女アリシアだった。

「そんなこと、アリアケさん以外に出来る訳ないでしょう？」

「・・・は？」

淡々とした言葉に、俺は思わず啞然としてしまった。

「馬鹿な・・・たかだか光で洞窟中を照らすだけで・・・」

「ダンジョンは外とは違います。ここは他の生物の体内と言っている。ダンジョン自身の魔力で満ちている。異物である我々が使える魔法には一定の制限がかかるのです。その中でも”光”というのは最たるもの。なぜなら、諸説ありますが、恐らくダンジョン自身が我々の視野を奪うように仕向けているからです」

そう言うてから、更に続けて、

「アリアケさんもおっしやっていたではないですか。聞いていなかったのですか？ あの方の教えを？」

「・・・そう言えば、そんなことを言っていたような気もするが、正直よく覚えていなかった。」

「くそ！ 役に立たねえ！」

俺は思いつきり悪態をついた。

そんなことは今までなかったから、プララをはじめ、他のメンバーが委縮する空気が伝わって来た。

くそ、役立たずどもが・・・。

ちっ。くそ、落ち着け。俺は勇者なんだ。選ばれた男なんだ。アリアケがいなくなつて、少し勝手が違うだけで、こんなことはすぐに慣れる。

そうだ、そうだ。ははは、いや何を焦っていたんだ。たかだか光源がいつもより少し狭いだけじゃないか。

「いや、すまなかつたな、みんな。もう大丈夫だ。プララも怒鳴つて悪かつた。さあ先に進もう」

できるだけ明るく言った。

「え、ええ、ええ！ それでこそビビア様です」

「俺たちの勇者はさすがだな。すでに戦略を立て直したようだ」

「う、うん。ちょっと、びっくりしちゃったよ。もー」

よし、いつも通りだな。俺のリーダーシップにみんな何も言わず従う。

だが、

「大丈夫でしょうか？ 視界を遮られた戦いに私たちは慣れていません。今まではアリアケさんがその最大の課題を取り払ってくれていましたが……。今回は、念のため一度引き返し戦略を練り直したほうがいいのでは？」

聖女が口をはさんだ。

「は？」

引き返す？ 引き返すだと

こんな冒険者ランクCレベルのダンジョンで引き返すようなことがあれば、戻ってから下々の人間どもになっていわれるか分かったものじゃない。国王からも失望されるだろう。

「そ、それは慎重論が過ぎるな。それに慎重も過ぎれば、逆に危険を招くことになる」

咄嗟に反論した。だが、言ってみるとそのような気がしてきた。そうだ、そうだ、敵に背を見せることは死につながることもある。

それに、と俺は続けた。

「俺は選ばれし男なんだ。これくらいのダンジョンで苦戦することなんてありえない」

そう言うと聖女は納得したのだろう、黙ってしまふ。どつやら説得がきいたようだ。

よし、と踵を返し進もうとする。

「……返すことも戦略の一部だと……はおっしゃっていましたが……」

「ん？」

聖女が何かを呟いたように思って、俺はもう一度聖女を見る。

だが、聖女は何事もなかったように、口をつぐんでいた。そしてその視線は一切ぶれずに、10M先の暗闇を見つめていた。

プララの作る光源が届かない暗黒を。

そこから、今しも何者かが飛び出して来るのを警戒するかのように。

(何か聞こえた様に思ったが気のせいかな。それにしてもこの聖女は心配性すぎるな。気配くらい俺たちなら簡単に察知する。『冷静でさえいれば』不意を突かれることなどありえないというのに)

そんなことを思いつつ、俺は今度こそ先を進み始めたのである。

「おい、デリリア。同じところをぐるぐる回っているんじゃないか？」

「え！？ そ、そうかしら？」

「まさか、道に迷ったのか」

「えっと、いえ、その」

俺の言葉にデリリアは焦った様子を見せた。

「地図があるのに何で迷うんだよ！ 何度も来たダンジョンだろうが、ここは！ それにまだ25階層だ。半分も来てないんだぞ」

いつもなら一瞬で通過する程度の階層だ。

「で、ですけど、こつも暗いと自分たちがどこにいるのか、分からないんですよ！」

「はあ？ たかだか地図を読むだけで何を大層なことを言ってるんだ……。それに、あのアリアケですら初見で案内できてたつてのに」

俺は呆れる。

すると聖女が口を開いた。

「あの人が異常なだけです。マップだって完全ではなかったのに、その都度修正しながらナビゲートしてましたからね」

「だが、今はそのマップは修正して完璧だろうが！」

「マップはそうですね。ですが、明りが無ければ、見える光景は異なります。目をつむっているのと基本的には同じなのです。だから、道に迷うのはあたりまえです。ゆえに進むのはいつもの倍は慎重にしなければなりません」

彼女はそう言ってから、後ろを指さした。

「なんだ？」

「先ほど、以前見かけた壁の傷を発見しました。確か、そこを曲がれば下の階層へ続く階段があったはずですよ」

「さっさと見えよ！ よし行くぞお前ら」

聖女に対してそんな口をきいてしまう。だが、アリアケを擁護するような聖女の口調がいちいち癪に障った。

俺はそれをごまかすかのように足早にそっちへ向かおうとする。

だが、

「アリアケさんがつけておいてくれた傷ですね」

「は？」

俺は何を言われたのか分からず、おかしな声を上げてしまう。

「いざと言う時のために、アリアケさんがつけておいた傷ですよ。ダンジョンでいつもマップを見られるわけではありません。戦闘中や何かしらの緊急時には特に。ですから、自分なりの目印を作っておくのです。これもアリアケさんが講義していたでしょう?」

「ふん。そんないつ使うか分からないものに、ご苦労なことだな」

「そうですね。ですが、今、役立ってます」

「そんなの偶然だろう!」

俺は思わず怒鳴り、先へ進もうと足を踏み出す。

「止まってください!」

「はあ、うるさいぞ! これ以上おれに指図・・・」

するんじゃねえ!

その後半の言葉が口から出ることはなかった。

『冷静でさえいれば』、その気配に気づかないことなど無かつたろう。

だが、今は他の一部しか視界のきかないダンジョンの中、道に迷い、集中力は限界に達していた。

だから俺はそのモンスターからの一撃をもろに受けたのだった。

12・一方その頃、勇者ピリアたちは（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



13・一方その頃、勇者ビビアたちは、

13・　　～閑話　一方その頃、勇者ビビアたちは、

「がああああああああああああああああああああああああああ

」

俺は激痛の走る腹部を見下ろす。

骸骨騎士の剣が俺の腹部を貫いていた！

「あ、あがああああああああああああああああああああああ  
いでえ　いでえよおおおお　」　　いでえ

嗚咽が漏れる。ヒューヒューといううるさい音がなっていた。それが俺の口から漏れる息の音だと知ったのはしばらくしてからのことだ。

だが、おかしかった。

「なんでだあ！　相手は・・・モンスターはただの骸骨騎士なのに  
いいいい　」

骸骨騎士はレベル20程度。ランクB程度の冒険者なら倒せるモン

スターだ。

「俺のランクはSなのに！ 貫けるはずがない！ 俺の体を！  
ダメージなんて受けるはずないんだ！ ただのレベル20程度のモ  
ンスターにい」

激痛で涙が流れて前が滲んで見えない。

痛みで混乱し、俺の目の前に骸骨騎士が立ち、今まさに俺の首に剣  
を振り下ろそうとしている現実すら見えていなかった。

「危ない！」

と、そこへエルガーが飛び込んでくる。

国の盾と言われるほどの鉄壁を誇る男だ。

（くそ、ノロマめ。もっと早く来い）

俺は内心で悪態をつきつつも、ホッとする。

だが、これで大丈夫だ。時間が稼げる。

腹はまだじくじくと痛みを伝えてくるが、冷静になり始めていた。

恐らくこれは何かの間違いだ。そうだ、誰にだって万が一がある。  
勇者である俺でさえも油断していたのだ。二度とこんな不運は訪れ  
ることはない。ただの偶然。そう偶然だ。

そう自分に言い聞かせる。

しかし、

「ぐぐあああああ………」

押されていた。

「………」

「ぐぐあああ。うぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐがあああああ」

「………」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐあああああ  
ああああ」

「おいって言うてんだよ！」

俺は腹から大量に流れ出る血を抑えながら、喚き散らした。

「何やってやがる！ エルガー！ 骸骨騎士ごときに押されてるん  
じゃねえぞ！」

「だ、だが、勇者よ。違うんだ。いつもなら、これくらいの攻撃、  
難なく受け止められていたのに……ぐぐあああああああ  
あああああ」

鋼の肉体。国の盾。そう言われた男の体は骸骨騎士の膂力に押され  
る。通常攻撃に難なく切り裂かれ、そこかしこから出血を始める。





気付けばガタガタと歯が鳴り始め、涙が流れ始めた。

「そ、そうだ、プララ！ 魔法で支援しろ！」

俺は天啓とばかりに言った。

何で気づかなかった。プララの魔法支援があれば攻撃力・防御力が格段に上昇するはずだ。

今回は不意をつかれたために、魔法によるバックアップが間に合っていないのだ。

「早くしろ！ でないと全滅だぞ！」

「……るよ」

「プララ！ どうした！ 早く支援魔法を！」

「もうやってるって言うてんのよ！」

「……は？」

もうやっている？ 何を？

「攻撃支援魔法も防御支援魔法もどっちもありっただけ掛けてるってんのよ！ でも、なぜかいつもみたいな支援力が出ないのよ！」

「じゃ、じゃあ。今のこの状態が……こんな状態が……俺たちのベストな状態だったのか？」

俺は愕然とする。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ」

俺は腹の痛みをよじり、知らぬ間に涙を流しながら呻いた。なんでこんなことに……。

「俺は選ばれた勇者なんだ。なのに」

倒れ伏した拳闘士、脆い盾役のでくの坊、明かりすらつけられない魔法使い。こんな役立たずどものせいで、俺はこんなところで死ぬまうのか……。

「なんでこんなことにい！」

俺は断末魔のような叫びをあげる。

と、そこに。

「エリアヒール。『天使の息吹』」

場違いだと思っ程冷静な詠唱が聞こえた。それと同時に腹にあった傷がみるみる治っていく。

「アリ……シア……」

「ふっ」

彼女はこんな事態だというのに全く動じていないようだった。冷静に次の瞬間には大聖水を使って骸骨騎士を一時的に無力化した。し

ばらくは動かないはずだ。

まさに大聖女とも言うべき貫禄がある。

「なんでこんなことに、とおっしゃいましたが・・・」

と、アリシアは静かに口を開く。

「そんなことは決まっています。あの人がないからに決まっていますでしょうに」

あの人……。俺はギリギリと割れるほど歯ぎしりする。それが誰を差しているのか、俺には痛いほどわかったからだ。



13・一方その頃、勇者ピリアたちは（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

14・一方その頃、勇者ビビアたちは

14・く閑話 一方その頃、勇者ビビアたちは

「なんでこんなことに、ですか……。そんなことは決まっています。あの人がいないからに決まっていますように」

アリシアは静かに口を開いた。その目はまるで俺たちを虫か何かを見るかのように思えて、俺は思わず背筋をぞつとさせた。

「視界不良の中での気配察知。なるほど、確かに冷静さを失わなければ大丈夫かもしれませんが。暗闇も恐れる必要はないのかも。ですが、ダンジョンでは常にトラブルと隣り合わせ。そんなところで常時冷静でいられるような方は、まあ、あの人しかいないでしょうね」

「っ」

「攻撃も防御も機能しない理由。そしてその支援魔法すら効果が薄い理由。それもあの人補助スキルがないからです」

「なんだって」

「まさか、気づいていなかったのですか？」

聖女は信じられないという顔をした。

「皆さんにはそれぞれ攻撃補助、防御補助、魔法補助、敏速スキル、ダメージ軽減スキル、回避スキル、鉄壁スキル、回数付きダメージ無効スキル、クリティカル補助スキル、ターゲット操作スキル、カウタースキル……。モンスター相手には攻撃力低下、防御力低下、鈍足、ダメージ低下、回避不可、必中スキル、貫通スキル、防御不可、スリップダメージ、などなど。ありとあらゆる補助スキルの恩恵があったのですよ。それこそ、誰だってAランク冒険者になれるレベルの」

彼女は淡々とそう言う。

「そ、そんなわけねえ！ これは俺が修行して手に入れた力だ！俺が自分の才能でっ……。！」

「アリアケさんが説明された時もそう言って、あの方を罵倒されましたよね。覚えてないと思いますけど……」

「」

「まあ、あの方はそんな小さなことを気にする人ではありませんけどね」

聖女はアリアケのことをそう言うと、一瞬だけ、誰にも見せたことのない夢見る少女のような表情を浮かべた。

「おっと、さて」

コホンと咳払いし、次の瞬間には、いつものように冷静な表情に戻った。

「さ、みなさん、それよりも立つてください。何とか隊列をたてなおし、ダンジョンから脱出しましょう」

彼女はそう言っつて踵を返す。

「アリアケさんがいない今、どこまで撤退戦がやれるのか保証はできませんが……このままだと死ぬだけですからね……」

そう呟きながら。

「ふう、ふう、ふう……」

俺たちは何とか15階層まで戻って来た。だが、それは命からがらだ。メンバー全員が大きなダメージを受けて血みどろの状態であった。

ダンジョンでは負傷者がいると、モンスターが増加する。ダンジョンが探索者を狩りに来るからだ。

そのため、ここまで戻って来るだけでかなりのモンスターから襲撃を受け、また体力と魔力を消費していた。イライラも限界だった。唯一、アリスアの回復魔法のおかげでギリギリ何とかもっているよなものだ。

「くそ、このままじゃ全滅するぞ！ くそっ！ くそっ！」

「ちょっと勇者様　そんな大声を出したらモンスターに見つかっちゃうじゃん!？」

プララがまるで俺が悪いかのように声を上げる。

「黙れ！　この役立たずが　お前の魔法がへボいから、俺がこんなに苦労してるんだろっが！」

「なっ　そ、そんな!」

ああ、もう、面倒だ!

「いいから、お前の回復薬をよこせ。役立たずのお前が持っけていても無駄だろっ」

「だ、だめだよ。もう残り少ないし、勇者様は自分の分つかえばいいじゃん。あ、あたしだってまだ魔法使わなくちゃいけないだし」

「嘘だな？」

「」

俺の言葉にプララが顔面を蒼白にする。

「さっきの階層から全く魔法を使ってねえじゃねえか。それって、魔力が切れたってことじゃないのか？　ええ？」

「な、なわけないじゃん！　お、温存だよ！　温存！　私の魔力量は1万を超えてるんだよ、そう簡単に・・・」

「本当なのか？　おい、アリシア、同じ魔法使い同士、お前から見てどうなんだ？」

すると聖女は、はぁ、とため息を吐いてから。

「戦力の確認は必要ですし、問われたので答えますが……。もうプララさんに魔力はほとんど残っていません。証拠に、明かりの範囲が狭まっています」

「ちよつ　アリシア！　あんた何言ってるの　勝手なこと言ってるじゃねえぞコラ！　子供の頃みたいにいじめられてーの　最近は聖女だか何とか言われて調子に乗ってるんじゃ……。」「

「事実を申し上げたまでです。それに調子に乗っているのはあなたですよ、プララさん。その魔力量1万というのは、あの人の魔力貯蔵という補助スキルによる恩恵だったのですよ？」

「は？」

何を言われているのか分からない、といった様子でプララが呆然とした。そして、

「あ、あはははは！　んな、わけ！　んなわけ！　んなわけねえだろつがあああああああああ！」

「おい、こんな時にやめないか！」

絶叫して、アリシアに殴りかかろうとする。そこをエルガーがはがいじめにしておさえた。

「馬鹿が そんな大声を出したら！」

モンスターが集まって来る！ そう注意しようとした時である。

「やかましいな。我が寝所の前で・・・」

腹の底にズンと響く様な声が、辺り一帯に響いたのである。

そして、暗闇から、あまりにも巨大な、四つ足の獣が現れる。

「そ、そんな。嘘・・・だろ？」

俺は目を疑う。こんなバカなことがあるものか。

こいつは、

「99階層にいるはずのフェンリルがなんでこんなところにいるんだよおおお」

思わず絶叫の悲鳴を上げてしまったのである。

フェンリル。神々しき天界の守護獣。

地獄の番犬と言われるこの存在は、以前の俺たちならば戦えた相手だ。

だが、骸骨騎士にすら苦戦する俺たちが東になってもかなわないことは確実だった。

一撃も与えないうちに、殺されてしまうだろう。そもそもSランク

の冒険者たちがやっと勝てるかどうかと言うモンスターなのだ。

「気まぐれに出てきてみれば、ただの虫であったか。つまらぬ」

フェンリルは珍しいブルーの美しい光沢をした毛並みだった。俺たちを敵とすらみなしていないことが分かった。

ガタガタと震える。

だが期待もあつた。もしかしたら見逃してもらえるかもと。

が、

「まあ、多少腹の足しにはなるか。それにダンジョンに捕らわれし  
我の無聊の慰めにも」

フェンリルは俺たちを敵ではなく、餌として認識したことがありありと理解できたのである。

そして、俺はすぐに行動に移った。

「おらあー！」

ばきいー！

「けひゅー」

俺は間髪入れずに、プララの鳩尾にボディーブローを叩きこむ。油断していたプララは思いつきり腹のものをぶちまけながら地面に倒れこみ、びくびくと痙攣した。



14・一方その頃、勇者ピリアたちは（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

15・一方その頃、勇者ビビアたちは

15・く閑話 一方その頃、勇者ビビアたちは

俺は間髪入れずに、プララの鳩尾にボディーブローを叩きこむ。油断していたプララは思いつきりせき込み、身動きが取れない。

「やっぱりアイテムを隠し持ってやがったか！」

時間がない！俺は遠慮などせず、プララの体中をまさぐって、隠していたアイテムを根こそぎ奪う。

「お、おえええ。う、う、な、なんで……」

地面に倒れたプララは腹のものをぶちまけながら、涙と鼻水にまみれている。

「ビビア様、いきなりなんてことを……」

「そ、そうだぞ、勇者。いきなり仲間を殴るなんてっ」

デリアとエルガーが抗議して来るが、

「馬鹿が 何を呑気なことを言ってやがる！ このままじゃ全滅  
だろうが」

そんなことも分からねえのか、この無能どもは！

俺は内心で悪態をついた。幼馴染だからとパーティーに加えてやっていたのに、これほど役立たずだとは！

するとデリアとエルガーはポカンとした表情になり、

「も、もしかしてそれは」

「プララをここに置いて行くという・・・そういう意味なのか？」

はあ。全部説明しなくちゃ理解できねえのかよ！ この低能ボンクラどもは！！

「た、助けを呼びに行くだけだ！ このままじゃあ全滅だぞ！ なら、ついてこれねえ仲間を置いて行くしかねえだろうが！ これはやむを得ない判断だ！」

「ア、アイテムのことは」

「もう残りのアイテムがすくねえんだよ。ここから脱出しても、上の階で手詰まりになる！ 俺たちが何とか脱出しなきゃならねえんだ！ でないとプララだって助けることはできねえ！ 大丈夫だ、プララ、別に見捨てるわけじゃない！ 助けを呼びに行くだけだからな！」

俺の言葉にデリアとエルガーは理解したとばかりに表情を消した。

「そうね。急いで助けを呼びに行かないといけないわ」

「デ、デリア な、なんで！ どうしてよ！ じ、じにたくない  
じにだくないいい！ だ、助けて！ 助けてよお エ、エル  
ガー」

「すまない、プララ。なんとか持ちこたえてくれ。魔法の使えない  
足手まといのお前を連れて行けば全滅する。苦渋の決断だが、これ  
しかないんだ」

「ッ そ、そんな あたしたち仲間でしょ！ くそ！ くそ！  
あんたら許さないからね！ 絶対に許さない 許さねえ！ 呪  
つてやる！ 呪い殺してやるからなあ！！」

そんな言葉を背中に聞きながら、俺とデリア、エルガーは駆け出す。

一刻も早くこの場所から逃げ出さなくてはならなかった。

だが、

「アリシア、何してるんだ！」

「いえ、私はここでこのフェンリルを食い止めますので」

「馬鹿が！ プララと一緒に死ぬ気か」

「・・・行って下さい」

アリシアはそう言うと、結界魔法を唱える。

白い透明な壁が通路を遮る。これでそう簡単にフェンリルは俺たち  
を追ってはこれないだろう。

「アリシア、くそ！」

ちい！

俺は舌打ちする。

聖女はまだ使えそうだったから、ここで別れるのはかなりの痛手だった。今後の回復はプララから奪った回復薬しかないということになる。

だが、今はこの窮地を脱することが先決だった。

いや、考えようによっては、二人の犠牲で確実に俺の命が助かるのだから、安いものかもしれない。尊い犠牲というやつだ。

明かりもデリアの炎の魔法で代替すれば何とか帰れるっ……！

「よ、よし分かった！ 必ず助けを呼んでくるからな！ 死ぬんじやねえぞ！」

俺はまったく自分で信じていないセリフを叫びながら、この場からかけ去ったのであった。

〈聖女アリシア＝ルンデブルク〉

やれやれ。

私は嘆息する。

聖女などと言われてしまっただけから何年もたちました。おかげで、こんなところに残っているわけですが……、

「だ、だすけで　　ねえ、聞いているのアリシア！　私を助けなさいよ　　ねえ！」

さつきから、なんだか地面からうるさい声が聞こえてきます。

さすがに集中できません。距離はありますが、ゆっくりとフェンリルが迫ってきているのです。

「ちょっと黙りなさい。プルラ」

「」

私が普段出さない声を出したせいで、プルラさんを驚かせてしまったようです。

「驚かせてしまいましたか？　でも今は大事な場面ですからね。……あの人もいないですし、はあ……。だから、洞窟に来てからもあんまりやる気出ないのですよね……。多少羽目を外しても構いませんでしょう？」

「あ、あなた、誰に口きいて……」

「……分かったかどうかだけ、答えなさい」

冷たい口調で言う。

「ひっ　わ、分かりま・・・した・・・」

いえ、怯えなくても宜しいでしょうに。

「心配しなくても、私だってまだ死にたくありません。あの人に会っていっぱいラブラブしないといけないのですから」

「ら・・・らぶらぶ・・・？　あ、あんた何言ってるの？　それにあんたの言うあの人って・・・」

プララさんが唾然とするのが分かった。私の口調が聖女のイメージとずれているからでしょう。

「そんなのアリアケさんに決まっています」

ああ、言ってしまいました！

私の愛しい方。この世界で唯一の人。私の英雄様。

「どうして、あんな奴を・・・。何の役にも立たない、パーティーのお荷物だったのに・・・」

プララさんの言葉に、私は思わず吹き出しました。

「そんなわけないじゃないですか。言い方は悪いですが節穴すぎますよー。冗談はやめてください。英雄をつかまえて無礼千万ですよ??」

「なっ  
」

「だいたいですね、勘違いされているんですよ、皆さんは。いえ、実力が開きすぎていて分からないのかしら。あっ、でもアリアケさんが隠していたわけじゃないですよ。あの人ったらいつも正直に言ってますからね。信じなかったのは皆さんです。そして、この状況なわけですけど」

いいですか？ と続ける。

「まず、あの方にユニークスキルがない、というのがそもそも間違いです」

「う、嘘よ！ だって鑑定士がアリアケにはユニークスキルはないって！」

「そういうユニークスキルなんじゃないですよ、多分ですけど。恐らくスキルではなくて、存在が”ユニーク”なんじゃないでしょうか。あの方にユニークスキルが無いと言われてから、私が大陸中の書物を探っただけ調べた私の推測ですが、あの方のユニークスキルは『隣に侍る神』だと思います。そう言う意味では”称号”などに近いのでは？」

「隣に侍る神い？？？？ はあ、何よ、それ？？？？ ん？ いや、でもそれってどこかで聞いたことがあるような・・・」

「村でおばあちゃんたちに聞いたでしょうに。1万年以上前のおとぎ話ですよ。いわく、世界を救う勇者が現れる時、その隣にはあらゆる助けを行う神が侍る、と」



「あいつが神だって言うの」

プララさんが驚愕した。

15・一方その頃、勇者ピリアたちは（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

16・一方その頃、勇者ビビアたちは

16・　　閑話　一方その頃、勇者ビビアたちは

「隣に侍る神はい?????　はあ、何よ、それ?????　ん?　いや、でもそれってどこかで聞いたことがあるような・・・」

「1万年以上前のおとぎ話ですよ。いわく、世界を救う勇者が現れる時、その隣にはあらゆる助けを行う神が侍るは、と」

「あいつが神だって言うの」

「ああ、いえいえ。さすがに神ではないと思いますけど・・・。伝説なのでエッセンスだけ残されたんだと思います。恐らくですけど、アリアケさんは神に選ばれた存在なんじゃないでしょうか。例えば神の使徒として神託を受けていらつしゃるとか?　例えば、私たち勇者パーティーを後方支援せよ、とかでしょうか。まあ私の勘ですけど」

「そんなわけない!　あいつが私たちより優秀だなんてことある訳ない!」

え、そこですか。

「えーっと、まあ、いえ、いいんですけどね。理解できないことはそのままです。無理しなくても。ですが、ダンジョンにもぐって分かったと思いますけど。体感されたと思いますけど、彼はあらゆる補

助スキルでこのパーティーを助けていたんですよ。ですが、もちろん、それだけではありません」

私はそろそろフェンリルに集中します。まもなく、戦闘の間合いとなるからだ。

「アイテムの管理、罫の発見と回避、ダンジョンナビゲート、スケジュール管理、魔力・体力量管理、食糧調達、休憩場所の確保。旅に必要な準備や技術のほとんどはアリアケさんがもたらしてくれたものでしたよね？ それって、おとぎ話のまんまじゃないですか？」

おとぎ話の中でも、その神様というのは、勇者に必要な助言や準備を手伝ってくるありがたい存在として描かれる。魔王討伐に集中できるのは、その神様のおかげだったと言う風に。

「そ、そんな……。じゃ、じゃあ私たちは」

ブララさんがやっと現実を理解し、顔を更に青ざめさせ始めた。

だけどもう遅い。彼は遠くに行ってしまった。というか、きっと田舎で畑でも耕そうとか言っているだろう。あの私の英雄は、ひどく一般人のように振る舞うからだ。それがまた周りのマイナス面の誤解を招く。特別な存在なのに。

そして、だからこそ、節穴がちの人々は、彼の真価に気づかない。でもそれはいい。

私だけが気づいていればいいのだ。それはそれでとても優越感のあることなので。聖女にあるまじき、はしたない思いですが。



「なに」

「何を驚いているのですか？ フェンリルさん。まさかまさか、一撃で私を屠れるとでもお考えだったのでしょうか？」

ガキイイイイイイイイン！

鉄と鉄を激しく打ち鳴らすような音が鳴り響く。それは私がフェンリルが振り下ろして来た爪を私のロッドで受け止めた音だ。

地面がミシリと音をたてて砕ける。

だけど、私の体勢は崩れない。

「なるほど、でもアリアケさんの補助がないと、やはり普段の何百分の一程度の力しかでないのですね。さすがあの方は偉大です。さすが私の英雄様」

「なにを戦闘中に言っている！ 今度は杖ごとへし折ってくれる！」

ブオンと、もう一度大ぶりの一撃が放たれる。

それを今度は、

「じゃらくさいですー！」

「なっ」

再度、弾き返した。その衝撃でフェンリルが10Mほどぶっとうぶ。

「な、なんという力だ。人間……。お前はなぜこれほどの力を手に入れることができた？ いかな呪法に手を染めればこうなる？」

呪法？ フェンリルさんがけつたいなことを言ってきました。

「修行したからです」

私は宣言した。

「しゅ、修行だと？ 嘘を吐くな！ 限界があるだろう。たかだか人間がフェンリルと打ち合うなどと……」

「だって、強くないとアリアケさんの隣に立っていて恥ずかしいじゃないですか！」

「は？ アリ……。誰だそやつは」

フェンリルさんがなぜか戸惑います。

「もう、アリアケさんはアリアケさんに決まっています！」

私はそう言ってから、

「あの方ったら強すぎて、才能ありすぎて、隣に立っていても助けられてばかりで……。それだと恋愛対象として見て頂けないでしょう？ やっぱり夫婦は持ちつもたれつじゃないと……。並び立てるような存在じゃないといけないと……。だから頑張ったんです！」

それはもう血のにじむような！ 血反吐はくくらい！ いいえ、吐

きました。

「だが、お前は聖女だか大聖女だかわれていたのではなかったか？　そういう会話が聞こえて来た気がするが？」

「そんな、よそ様からの評価はどうでもいいんです！　アリアケさんのスケールはそんなんじゃないんです。ぶっちゃけますと、アリアケさんにちゃんと私を見てもらうには、そんな称号は邪魔なくらいです。私はアリアケさんにちゃんと評価してもらい、称号を頂きたいと思っています」

そう妻として、人生の相棒的な感じの！

「く、くくく」

なぜかフェンリルさんが笑いだしました。

大きなお口に牙をのぞかせながら、ニーっと笑いますので、迫力がすごいですね。



16・一方その頃、勇者ピリアたちは（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

17・一方その頃、勇者ビビアたちは

17・く閑話 一方その頃、勇者ビビアたちは

「面白いぞ！ 人間！ いいや、アリシアとやら！ 我が無聊を慰めるに十分！ いいや、この1万と数百年、この呪いのダンジョンに封印され退屈も極ったが、生きてきてこれほど面白かったことはない！」

「あら、閉じ込められているんですか？ それはずいぶんお気の毒な話では？」

「左様。であるから、人間よ。見事我を討ち果たしてみよ！」

「えっ？ なんでそうなるんですか？」

「ふ、我はもう生き飽きた。望むのは心ゆくまで戦い、そして滅されることのみよ」

遠い目をされます。黄昏というやつですね。うーん、でもでも。

「自殺志願っぽくていやなんです。それって自殺ほう助のような・  
・」

あっ、そうだ。

「では私が勝ちましたら、一つ私の願いでもかなえてもらいましょうか」

「良かろう。腐っても我は十聖のフェンリル。かつて人の英雄と旅をした獣。人との約束はたがえぬ」

「？」

人の英雄と旅？ その話もいつかおとぎ話で聞いたことがあるような……。

「では参るぞ！」

「えっ もう、せつかちですねえ」

そんなわけで、私とフェンリルさんの戦いが始まったのでした。

ちょっと呪いの洞窟が崩落しそうなほどの戦いでしたが、ダンジョンというのは丈夫なもので、なんとかかんとか事なきを得たのです。

もちろん、私が勝ちました。杖は折れましたが、

「腕力がそれほど強いと言っつのは、修行の成果なのか？」

「もちろんですよ。アリアケさんもきつと喜んでくれますよね」

「……………」

倒れ伏したフェンリル君が沈黙しました。いや、なぜに沈黙？ ア

リアケさん、きつと喜んでくれるはずなのに。強くなれなれ、と昔言われたので、強くなりましたので。

「それはともかく、一つ願いを聞いてもらいましょうか」

くつくつく、と邪悪に微笑みながら、倒れたフェンリル君に近づきます。

「良かるう。なんでも申すがよい。我が命と引き換えに永遠の命と若さをもたらす霊薬を欲するか？ それとも我が昔飲み込んだ伝説の剣バルムが欲しいか？ いいや、あらゆる病を治すために我が心臓の肉を・・・」

「フェンリル君 あなたは私の使い魔になりなさい！」

「・・・は？」

フェンリルは驚いた表情を見せる。

「我を使い魔に。お主は聖女ではなかったのか？ テイマーだったのか？」

「いいえ。でも修行しましたから！ 大丈夫です、使い魔になって一緒に行きましょう！ 1万年も閉じ込められたら、もう十分ですよっ？」

フェンリルは驚いた表情になり、その後少し嬉しそうな色を瞳に宿したあと、ふるふると首を振り、

「い、いいや無駄だ」

シユンとした様子で言いました。

「このダンジョンから我は生きては出れぬ。例えば使い魔になろうともな。例外はない。そういう呪いを受けているのだ。使い魔になるのはいい。負けたのだから。しかし、ダンジョンの外には出れないから、役に立つことはできぬ」

心なしか、耳としっぽが垂れております。わんこ君だったのでしょか。

「じゃあ、一度仮死状態になって、アイテムボックスに入ってくださいな」

「……………は？」

「あれ、わたし何か変なこと言いましたか？ あっ、安心してください。アリアケさん直伝ですので。あの人って発想がちよつとぶっ飛んでるんですよ。それに私、聖女ですので、アリアケさんも太鼓判を押してくれるくらい、蘇生魔術が使えるのです。死んで2、3時間以内なら蘇生可能です！ これだけは、アリアケさんも凄い凄いつて言ってくれたんです！ 私と彼のアイデアで初めてできる技法だから、自慢なんですよ！」

と嬉しく言う。

「そもそも蘇生魔術を使えるような魔術師は、かつての時代もほぼいなかったと記憶しているが……」

「あら、そうなんですか？ でも私は使えます。それで、まだ何か

問題はありますか？」

あっけらかんと聞く。

「え、ああ、うーん、そうだな。いや、もう何でもいいか。調子が狂うわ。この人間。・・・本当に外に出られるのか？」

「アリアケさんが保証してくれましたとも。あの方のことだから、ダンジョンのモンスターを外に出す方法がないか、実験されたか文献を読んで裏を取ったのでしょうねえ」

「そうか。いや、でられなくともよい。そう、うまく行く道理はないのだから。だが夢は既に見させてもらった」

フェンリルは傍にやってきて、私の目の前でお座りをして頭を垂れるような仕草をした。

「我は十聖の獣フェンリル。そなたと、そしてその師たるアリアケに服従を誓おう。かつての英雄にそうしたのと同様の・・・いや、それ以上の服従を誓う」

そう言うてから、少し迷ったすえに、

「あと、フェンリル君と言っているが・・・訂正しておくが、我はメスじゃ。いちおう人型にもなれる」

「へ？ 人型・・・？ なんか嫌な予感がどつとしたのですが・・・もしかしなくても、とつても美人だったりとかしないでしょうね？」

「では我は少し眠る。ふ、ダンジョンの外で会えたならその時は・・・」

「ちょっと聞いてくださいよー!」

そんな言葉を無視して、美しい青銀の巨体が倒れる。

ズウウウウンという轟音を立てながら。

「やれやれですねえ」

私はアリアケさんから託されたアイテムボックスに、死亡判定されているフェンリル君・・・もといフェンリルちゃんを収納する。アイテムボックス内でも時間は経過するので急がなくてはならない。

「さてさて、では私もお暇させてもらいましょうか」

私はダンジョンから撤退を始める。

だが、もう勇者パーティーに戻るつもりはなかった。いちおう、挨拶くらいはするつもりだが、それはパーティーからの離脱を伝えるためだ。

「今回入った亀裂をどうやって修復するつもりでしょうかねえ、ピアさんたちは」

呪いの洞窟のクエスト失敗。その上、仲間を置いて撤退してきた。国王の失望は深いだろう。仲間同士の関係にもヒビが入ったのには間違いない。アリアケさんと私が抜け、たぶんプララさんも、生きていたとしてもパーティーを抜けるように思う。囿にされて、パー

ティーに残る程、お人よしではないだろう。とすると、3人しか残らない。ならば、新しいメンバーを入れる必要があるだろう。

「でも、誰が入ろうとするかしら」

ケチのついたパーティーには、なかなか人が集まらない。しかも、仲間を見捨てたパーティーなんて最低最悪だ。

私はそんな風に心配しながら退路を急いだのです。



17・一方その頃、勇者ピリアたちは（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 18・賢者は冒険者ギルドを訪れる

18・賢者は冒険者ギルドを訪れる

「ここは何という町じゃ？」

「ここはメディスンの町だ。人口は1万人くらいか。オールドイの町の途中にあるから立ち寄ったんだ。まあまあの大サイズの町だぞ」

「・・・の割には、ずいぶん人出が少なくないかろう？ わしの気のせいかな？」

「いや、気のせいじゃないだろう。えーっと、ちょっとすみません」

「はい、なんですか？」

俺はたまたま通りかかった通行人をつかまえて事情を聞くことにする。

「どうしてこんな様子なのかですか？ 実は最近町の近くに”魔の森”が現れたんです。それで王国からも騎士団が派遣されたり、冒険者が駆り出されたりしているんです。商業も止まって完全にパニック状態なんですよ」

「なるほどな。了解だ、ありがとう」

町人は去っていった。

「あ奴、わしを見て目を丸くして、それから旦那様を羨ましそうに見てたぞ？ わしがドラゴンというのがバレたのかの？ 完璧な擬人化術のはずなんじゃが」

自分を見下ろしながら言った。

「うーん、そうではないな。おおむね男と言うのは、美人の連れを見る羨ましがるものなんだ」

「！？ そういうことか、では旦那様も鼻が高いじゃろ！！」

じやるじやる！ と胸を張ってくるが、

「いや、できれば目立ちたくないんだが。むしろ、意外な盲点だった。難儀している」

「ぎゃふん！」

なかなか感情表現豊かなドラゴンである。ともあれ、

「先ほどの者が言っておった『魔の森』というのは何じゃ？」

「魔王が作るモンスターの巣、といったところだな。早期に駆逐しないと大変なことになる。何せダンジョンとは違って、モンスターの行動範囲に制限がない。放っておけば町は壊滅するだろう」

「旦那様でも駆逐するのは難しいのか？」

「まさか」

俺は首を振る。そんな段階になればこの国は終わりだ。

それに、

「魔の森には、第1段階から第5段階までである。恐らくまだ第1段階だろう。その段階であれば、皆に任せておいても構わないだろう。それに困ったら勇者が派遣されるはずさ」

「なるほどのう。旦那様の期待にこたえ、うまくやれると良いの」  
俺は頷く。

「もっと詳しい状況は冒険者ギルドにでも顔を出せば分かるだろう」  
「冒険者ギルドとな？　そこに旦那様も所属しているんじゃないか  
の？」

「そうだ。まあ、ランクはこだがな」

冒険者ランキングはEからSまでである。なので、下から数えた方が早い。

「それはおかしいじゃろ？　どう考えても。仕組みに瑕疵があることは明白じゃぞ？」

ゲシュペントドラゴンの娘、コレットは眉根を寄せて言った。

だが、俺は首を横に振り、

「社会制度というのは、一般的なレベルにしておかないと機能しない。俺がはみ出し者なのが悪いとも言えないか？」

コレットは大きな目をぱちくり、とさせてから、

「なるほどのう。確かに旦那様は規格外じゃて。じゃが、それはそれで孤独なことじゃなあ」

「そう思うか？」

「うむ！ 竜種も同じじゃて。強すぎて、誰も近づけぬし、近づいてこぬ！ 一緒じゃな！」

「いや、俺は一般人として生活したいタイプなんで。竜みたいに目立ちたくないとか常々思ってるし」

「なんと、裏切り者め！？」

そんなことを話しながら、冒険者ギルドへと向かう。

「それはともかくとして、先に言っておくが、俺は勇者パーティーを追放になった身だ。本当は彼らが俺から巣立った、とすべきだが、世間とは盲目的だ。理解したいように、事実を曲解しがちだ。だから、冒険者ギルドでは何かしらのペナルティを受けるかもしれんなあ」

「その時はわしがこの町ごと焼き払ってくれようぞ！」

力強く言う。口からキシヤーと炎が微量漏れていた。

「気持ちは嬉しいがコレット。持つ者は、考え方を変えないと人間社会ではやっていくのは難しいぞ？」

「ふむ。わしが永劫に旦那様と一緒にいるには、考え方を変えぬといけぬということか？」

永劫？ という言葉に首を傾げながら、いちおう「そういうことだと頷く。」

するとたちまちコレットが熱心な様子で耳を傾けてきた。

なぜだろうか？

「さっきも言った通り、社会制度は一般人に合わせて作られているなら、逆転の発想として、俺のような人間が、そっちのレベルに降りて行き合わせてやればいい」

俺は淡々と、

「それが持つ者の責務というものだからな」

「な、なるほどのう！ 眼から鱗じゃ！ わしの旦那様はさすがじゃな！ わしも下々の者には優しくしてやるとしようぞ！」

「下々というわけではないんだがな。あくまで自分が特別であることを忘れなければいい」

「分かったのじゃ！」

本当に分かっているのか不明だったが、とりあえずいきなり街を焼き払うことはしないだろう。俺の匙加減ひとつで地図から一つ町が消える。ここで暮らす一般人たちの営みを守るのもまた役割と言えば役割なのだろう。

さて、そんなことを会話している間に冒険者ギルドへ到着した。

扉を開き、辺りを一瞥した。

普段よりもピリピリとした雰囲気か漂っているのが分かった。人数も多く、入って来た俺たちをギロリとにらんだ。どうやら、何事かが起こっているのは確かなようだ。

掲示板にも全く依頼書の張り出しがない。そこには通常、各種の依頼が大量に貼られているはずなのだが。

「予想通り、何か起こっているようだな」

「どうするのじゃ？」

「そうだな……。とりあえず受付カウンターに行ってみるか」

俺は受付まで行き、その受付嬢に話しかけた。

「すまない。ちょっと聞きたいのだが」

「失礼ですが、お名前を窺っても宜しいでしょうか？」

受け付け嬢は忙しいのか、下を向いたまま言った。

「ああ、そうだな。俺はアリアケ≡ミハマ。そしてこっちはコレックト≡デューブロイシス。冒険者登録をしているのは俺だけだが・・・」

と、途中までそう言うと、受付嬢がびっくりしたように顔を上げて、俺の方を見てから、

「アリアケ あの前勇者パーティーを追放になったという、あのアリアケ≡ミハマですか」

大声で言った。

その途端、周囲の目もこちらへ向く。

「そうだが・・・」

「ちょっと、そこで待っててください！ いいですか、逃げないでくださいね！ お、『王国からの勅』があります！！ ギ、ギルド長〜！！」

そう言って奥の階段から2階へ駆けあがっていく。

周囲は一気にざわつき始めた。

「やれやれ、やはり大ごとになるか」

俺は嘆息した。しかも、よりによって、王国からの勅とはな。冒険者に大仰なことだ。



いい加減に目立たずひっそり田舎暮らしがしたいのだが・・・。

18・賢者は冒険者ギルドを訪れる（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

19・大賢者は冒険者ギルドを追放される(前書き)

日間1位です。本当にありがとうございました。

## 19・大賢者は冒険者ギルドを追放される

19・大賢者は冒険者ギルドを追放される

しばらく待たされた後、階段から一人の男が下りて来た。

周囲は一通りざわついた後、次はヒソヒソ話を始めている。

まあ、勇者パーティーを追放になった男が現れば、市井の者はざわつきもするだろう。

さて、階段から下りて来たのは、頭の禿げあがった、筋骨隆々の男だ。かつて冒険者だったのだろう。そういう雰囲気が見て取れた。

「アリアケニミハマ。本物か？」

「そうだが。そういうあなたは？」

そう答えた俺を、男は睥睨するように見てから、

「人相書きとも一致するな。はあ。どうやら本物のようだな。俺はこのギルド長のオシムだ。ふん、よく恥ずかしげもなく、冒険者ギルドへ顔を出せたものだ!!」

いきなり大声で、怒鳴る様に言った。

周りのヒソヒソ話も静かになる。耳をそばだてているのだ。

そんな中、ギルド長のオシムは、大きく息を吸い込んでから、

「アリアケニミハマ！ 元勇者パーティーの一員であるお前から、冒険者ギルドのライセンスをはく奪する！」

宣言するように言った。

「まじかよー！」

「すげえ、ライセンスはく奪だと そんなの相当な罪を犯さなきゃ、くらわねえ罰則だ！」

「こいつはすげーニュースだぜ！ かつての勇者パーティーのメンバーが、堕ちるとここまで堕ちたってな！」

周りがまた一気に騒ぎになった。注目の的といったところだ。やれやれ。目立たないという目的はどうやっても達成できなさそうである。

だが実は俺も少し興奮していた。

（俺の予想を上回ったか）

そう小声で言った。

（旦那様、なんで嬉しそうなんじゃ？ こやつら、旦那様から何か

知らんが剥奪するとか言っておるのじゃぞ？」

「いやいや、俺の予想を上回れることが滅多にないのでな。ふむ、ランクをEまで降格される程度かと思っていたのだが……。こいつら俺の予想を超えたぞ？」

これでは薬草取りの依頼を受けることもできない。また、素材の買い取りもギルドにしてもらえないということだ。他の商店でも買い取りはしてもらえるが、ギルドよりも安くなるだろう。

「困ったものだなあ」

「もうちょっと困った顔をしてから言うものではないかのう？」

「おっと、そうだな」

俺は肅然とした顔をする。

「一つ尋ねたい」

「なんだ。もはやお前が冒険者ギルドに戻ることはできんぞ」

「へ？」

俺は目をぱちくりとさせ、

「いや、そんなことはどうでもいい。というか、何でまた再登録なんぞせねばならん。面倒くせえ」

「そ、そんなことだとうっ……」

ギルド長が絶句する。

義理で入っただけだからなあ。申しわけないが、あんな面倒なのはもう頼まれてもごめんだ。

俺は真つ赤になるギルド長の反応を無視して続けた。

「魔の森が近隣に出来たと聞いた。そんな最中にライセンスはく奪というのは、なかなか思い切った判断だと思っただが？」

「ふん！ 何かと思えば、そんなことか。ははは、残念だが、勇者パーティーを追放になったお前ごときの力を借りるまでもない！ どうせそのことを根拠にライセンスはく奪の処分を取り消させようとする魂胆だろうが、そうはいかん！ お前の処分が緩むことはない」

鬼の首を取ったように言う。周囲も一緒に嘲笑やらではやし立てる。

「いや、だからそんなことはどうでもいいんだが……。まあ、今のおおよそ分かった。今は第1段階の”凶荒”状態だと思うが、その対処に誰かが向かっているんだな？」

「その通りだ。先ほど言っただろう。王国の勅があったと！」  
なるほど、そういうことか。

「王国騎士団か。・・・だが、なぜ勇者パーティーではない？」

俺は疑問に思う。もちろん王国騎士団が出向くこともあるが、ここ

は王都から見て遠い。ならば、近くにいる勇者パーティーに討伐依頼が出そうなものだが……。何かあったのだろうか？

「そんなこと知るか！　ともかく、お前の出番はもうない　勇者パーティーを追放になったような無能にはな！　俺たちだけで魔の森討伐は十分だ！　今、王国騎士団が討伐に向かっている！　そして、最奥のボスを倒したらこの冒険者たちで掃討戦を行う。それで終わりだ！」

「そうだそうだ！　ははは、無能は出ていけ！」

「二度と顔を見せるな、アリアケ！　ミハマ！　勇者パーティーに幼馴染というだけで入っていた役立たずめ」

「俺たちだけで十分なんだよ！　お前の助けなんて全く必要ねえぞ」ギルド中が興奮し、俺をあしざまに罵り、嗤った。勇者パーティーの一員だったという嫉妬もあるのだろうか。今回の事件がもはや終わったことだともいうかのように、嗤い続ける。

そして、その直後『ダン！』という乱暴な音を立てて、冒険者ギルドの扉が開かれたのであった。

そこには一人、血みどろの騎士が一人、倒れこむように入ってくる。

鎧は破け、剣は折れていて、息が上がっていた。

そして、その死にかけの騎士は大きく息を吸い込むと、



「と、討伐は失敗！」

そう叫んだ。

続けて、ギルドにいる全員に向かって、

「モンスターの大军が街へ進行中！ お前たちは至急防衛に当たれ！ これは王国から冒険者ギルドへの強制命令である！ 逃亡は死刑だ！」

そう命令し、気を失った。

冒険者ギルドには、王国からの緊急招集を断れないという法がある。

一瞬、ギルド内はシーンとなった。そして、

「そ、そんな、嘘だろ」

「話が違つぞ！ 俺は楽なクエストだからって来ただけなのに！」

「や、やだ！ なんでこんなことに！ 騎士団が勝てない相手に俺たちが務まるわけがないわ」

「だ、だが、逃げたら死刑だつて。どうすればいいんだよ」

一気に阿鼻叫喚の様相となった。

初心者の冒険者グループやレベルの低い冒険者には泣き始める者もいる。

ギルド長は先ほどまで真っ赤だった顔を青ざめさせていた。

「ふむ、騎士団め。全滅しそうになったから、モンスターたちを引き連れたまま退却してきたか・・・」

俺は騒然とするギルド内で、一人はあ、とため息を吐いた。

「騎士団ともあろうものが、馬鹿者たちめが」

19・大賢者は冒険者ギルドを追放される（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 20・大賢者は冒険者たちを雇う

20・大賢者は冒険者たちを雇う

「助けがいるか？」

俺はそう言ってギルド長に話しかけた。

冒険者ギルドは騒然としていた。魔の森から突然モンスターが街を襲撃しはじめた。しかもそれは、王国騎士団の敗北によって引き起こされたというわけだ。普通の人間ならば恐怖に駆られて当然だろう。

「くつ、役立たずのお前の助けなどいらん！ 貴様たちしつかりせんか！」

「ほう」

俺は感心する。怯えてはいるようだが、それでもちゃんと役割をこなそうとはしている。

「なるほど、俺に大声で怒鳴りつけたりしたのも、よく考えれば理由があつたかもしれない。それは自分の恐怖に打ち勝つためだ。俺はCランクとは言え、勇者パーティーの元メンバー。そういった人間からライセンスをはく奪するというのは、勅命があるとは言え、

「勇気がいる行為だ。こいつはこいつなりに何とか職責を果たそうと、自分を奮え立たそうとしていたのかもしれない」

「旦那様はあのような仕打ちを受けたにもかわらず、本当に広い公正な目で相手を見るのじゃな」

コレットは驚いて目を見開いた。

「物事は一面的ではないからな。誰しも良いところと悪いところがある。上に立つ者はその両面をしっかりと見定めてやらねばならん」

「上に立つ者の責務ということじゃな・・・」

勉強になるとばかりに、コレットは大きく頷く。

ギルド長の掛け声は続いている。

「武器を持って！ 盾を構えろ！ 敵はもうすぐそこまで来ているぞ！ 俺たちがやらなけりゃ、どっちみち皆殺しなんだ」

だが、冒険者たちは震え、怯えている。何かがもう１ピース足りないといったところか。ならば・・・。

「ギルド長。今回の報酬はいくらになる？」

「ああ　こんな時に・・・くそ、たった金貨１枚だよ！　くそつたれが！」

なるほど。まあ、王国の強制徴収では精々そんなところだろう。

「旦那様、今の質問はどういう意味があるのじゃ？」

「簡単なことだ。雇用主は正当な報酬を支払わねば、部下たちは働いてくれない。それを理解するのも上位者の義務というだけだ」

俺はそう言ってから、テーブルの上に立った。そして、

「一人頭、今回の戦いに最初から最後まで参加すれば金貨1000枚を払おう！ これは大王国法令における契約事として、君たちと俺の契約だ！」

そう大声で言い放ったのである。

一瞬時が止まった。大王国法令における契約は呪いの一種で、けっして破ることができない。その時点で俺の申し出が真実であることが証明されている。

俺は構わず続けた。

彼らはまだ頭が付いてこないようだ。が、申しわけないが彼らのスピードに合わせては俺が退屈だ。それに今は時間が惜しい。申しわけないが俺の速度についてきてもらおうとしよう。

「お前たちは何だ！ 冒険者だ！ ならば破格の報酬のために命を張ってみせよ」

俺は大上段より皆に号令をかける。

しかし、

「なつ　　そ、そんな無責任な！　魔の森のモンスターが大軍で迫って来てるつてのに！　しかも王国騎士団だってやられちまったんだぞ！」

そんな反対意見も上がった。

だが、一方で

「け、けどよ。金貨100枚って言ったら……。しかも嘘じゃねえ。大王国法令契約だぞ？」

「あ、ああ。何年分だ？　それなら家族を食わせてやれる。ボロボロの家だって直してやれる」

「俺には病気の妹がいるんだ……」

そんな声も聞こえて来た。いや、むしろそうした声が大勢である。

金で釣ったという意見があっても俺は構わない。実際に彼らは言っているのだ。金貨100枚でどれほど救える家族や友人たちがいるのかを。ゆえに十分な報酬を支払うことは上に立つ者の役割なのだ。そうした義務を果たさず……例えば金貨一枚で死地に人々を赴かせることほど、罪なことはないだろう。ふむ、後日王国の方を俺の裁量で裁いても良いのかもしれない。

とにかく、ちゃんと人の社会と経済を理解していれば、こうして本当に救わなければならない人々に恵みを与えることが出来るということだ。

「さすが旦那様なのじゃ……」

「お前、本当にあの噂の無能賢者なのか・・・？」

コレットは尊敬の目を俺に向ける。対して、ギルド長は何と俺が本当に噂の（悪い噂だろうが）勇者パーティーを追放になったアリアケか自信がなくなってしまうたようだ。やれやれ・・・。だが、こうして実際の行動で人々の目を開かせ、正しい道を歩みなおさせることもまた、俺のような者の役割ではあるう。

そして、

「くそ！ くそ！ やってやる！ どうせ逃げ場なんかねえんだ！  
なら、アリアケ・・・アリアケさんの奮発にのっかるしかねえだ  
ろうよ！」

「ああ そ、それにここは俺の生まれ育った町なんだ。魔物なんか蹂躪されてたまるかよ」

「ああ、やってやろうぜ。そして家族の元に帰るんだ！ 大金を持つてな。ちくしょう、いくぞお前ら！」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお、と鬨の声が上がった。

そして、自分の獲物を持って出陣していく。

それはギルド長も同じだ。巨大なハンマーアックスを持って、扉から出て行くこととする。

出ようとする寸前にちらりとこちらを向いた。



「ふん、礼は言っておいてやる。どちらにせよ、俺たちや戦うしかねえんだ。けど、お前の大盤振る舞いがなけりや、前線に立つことすら出来なかつたろうぜ。戦わないうちにこの町は終わってた。だが、今はほんの1%程度でも可能性はある。戦うなら一縷の望みはある。ふん、王国のはした金で命がかけられるわけねえよなあ。その点、あんたはちゃんとわきまえてくれた、ありがとうよ」

「なに、当たり前前のをしたまでだ」

「ふ、みんながアンタみたいに考えてくれりや、いいんだが。特に上の者たちなどはな……。爪の垢を煎じて飲ませたいものだ……。ではな、生きていたらまた会って、あんたの金で祝杯だ」

そう言っ出て行つたのである。

「さすがにもうすつからかんなんだがなあ……。パーティーを抜ける時に金だけは死守しておいてよかった」

「じゃが、勝てるのかの？ 彼らは？ ただの冒険者の集まりじゃ。決して特別な者らの集まりではないぞ？」

コレットが疑問を口にした。

俺はふむ、と頷く。

「それが大事なんだ。救世主が来て自分たちを守ってくれる、という考え方に俺は反対なんだ。それは大きな目で見た時に良い結果を生まない。人類全体にとってな。だから、一般人たちが自分たちで戦い勝利しなければ意味はないと思う」

「なるほど。歴史的に見てもそうじゃ。さすが旦那様じゃ」  
ただまあ、

「だが、英雄と一緒に戦う、というのは俺的には、彼らに許していると思う。きつと一般人からすれば誉れでもあるだろう。さてそんなわけで、コレット、これを飲んだら出発しようじゃないか」

「出発って、どこにじゃ？」

俺はその質問に静かに微笑んだのである。

## 20・大賢者は冒険者たちを雇う（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

21・英雄は町を救う ～メディスンの町 最終防衛ライン攻  
防戦～

21・英雄は町を救う ～メディスンの町 最終防衛ライン攻  
防戦～

後に言われる メディスンの町 最終防衛ライン攻防戦 は熾烈を  
極めた。

人間側の戦力は冒険者100程度であるが、それに対してモンス  
ターは1000を超えていたのである。

メディスンの町の防備は簡単な堀と柵がある程度で、いわゆる城壁  
のようなものがあるわけではない。

最終防衛ラインを超えられれば、もはやモンスターの蹂躞を防ぐ術  
はなく、町は瞬く間に崩壊してしまうだろう。

ゆえに、前線は地獄であったと伝えられる。

「くそ！ もう左翼がもちそうにねえぞ！ あっちにやネグル兄弟  
が守備を担当していたはずだ！ どうなってやがる！」

司令塔であるギルドマスターが大声を上げた。

「だめです！ あちらのモンスターの攻撃が苛烈すぎて、すでに戦

力の3割が損耗しています　　なんとかギリギリ持ちこたえるのが  
精いっぱいです」

「そうか。何とかもたすように言ってくれ・・・くそ、つつても、  
余り長くはもたねえか・・・」

全体の戦力はすでに1割の損耗を出している。

死者が出ていないのは、偶然ながら回復術士とアイテムが多く配備  
されていたからだ。だが、それは時間稼ぎ以上の意味は持たない。

「ギルド長！　大変です！」

「ええい、今度は何だ」

伝令からの報告は凶報ばかりで、ギルドマスターはいい加減にしろ  
と言いたくなった。

「右翼から援軍の要請です！　キャタピラー・ドラゴンが出現！  
Aランク冒険者を最低3名は回して欲しいと・・・」

「飛ばねえドラゴンなんぞ、自分たちで何とかしろと伝える！　A  
ランク冒険者の予備戦力なんぞ、とうの昔に使い切ったわ！　それ  
より正面もやべえんだよ！　数で押し切られるぞ」

正面こそモンスターたちの大攻勢であった。ゴブリンやオークはも  
ちろん、バジリスクやヒュドラまでいる。それを冒険者たちが死力  
を尽くして食い止めているのだ。

それこそ、ぎりぎりの均衡の中で作り出した、奇跡的な防衛ライン

だったと言えた。

だが、その奇跡も長続きしないことを人々は知る。

「あ、ああ、見て下さい。あれを」

「今度は何だ……って、ありゃ……なんてこった……」

ギルドマスターは絶句した。

そして、絶望とともに呟いた。冒険者たちも、その様子を見て唾然とした。戦闘中だと言つのに武器を落とす者たちすらいる。

ズシン……、ズシン……。

魔の森の方角から、ゆっくりと近づいて来る巨大な影が見えた。遠い、なのに足音は地響きのようにはっきりと、冒険者たちの耳朶をうった。

激しい戦闘の土煙で、最初はっきりとその姿は見えない。

だが、その一歩が桁違いに大きいのだろう。みるみる近づいて来た。やがて、その偉業を人類の前にさらけ出してみせたのである。

「キング・オーガ……だとう……」

それはオーガの王と言われる存在。Sランク冒険者を連れてこなければ太刀打ちできないほどの上級モンスターであった。魔大陸に渡らなければ遭遇しないはずのそいつは、間違はなく目の前にいた。この町の死。そのものが顕在化したかのように。

「終わりだ……」

「こんなの勝てっこねえ……」

「くそ、すまない、妹よ。俺はここまでだ……」

絶望と諦観が冒険者たち全員の胸中を支配した。

動きを止める冒険者たち。その最前線で戦っていた女冒険者に一体のオーガが襲い掛かろうとしていた。しかし、もはや絶望した女冒険者は剣を構える気力もない。

オーガの腕が振り下ろされる。まるでスローモーションのように女には見えた。

女はすぐに来るであろう痛みや絶命の苦しみをぼんやりと待った。

しかし、それはなかなか来なかった。

いや、それどころか、

『ふぎいいいいいいいいいいいいいいいいいい』

オーガが両腕を切断され、絶叫の悲鳴を上げていた。

女は我に返った。

「ぼーっとするな！ お前ら！」

いつの間にか現れた男がそう言ったからだ。

そして、その声はなぜか冒険者たち全員に聞こえた。

「戦いはこれからだ！ コレットも一発見舞ってやれ！」

「かしこまり！ なのじゃ！」

そう言っつて、どこからどう見ても年端も行かぬ少女は大きく息を吸い込む。すると、特大の火弾をその口からはきだしてモンスターが集中する真ん中へと放ったのだ。

それは着弾して、周囲一帯のモンスターを焼き尽くす。

「呪いは完全にとけておるようじゃな！ やれそうじゃよ！」

少女は突然現れた男性に嬉しそうに笑いかけた。

それは最終防衛ライン攻防戦の第2幕を告げる大きな狼煙となったのだ。



21・英雄は町を救う ～メディスンの町 最終防衛ライン攻  
防戦～  
(後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

22・英雄は町を救う　くメディスンの町　最終防衛ライン攻  
防戦く

22・英雄は町を救う　くメディスンの町　最終防衛ライン攻  
戦く

「あ、あなた・・・まさか助けに来てくれたのか」

駆けつけたギルドマスターのオシムが信じられないとばかりに言っ  
た。

「あれほど、あなたに失礼なことを言った俺たちのことを見捨てず  
に来てくれたってのか!？」

興奮しているようだ。ちょっと涙ぐんでいるようにも見えるが、男  
の泣き顔など気持ち悪いだけなので目をそらす。

それに、目的は別に助けに来たわけではない。

「ちゃんとお前たちが仕事をしているか監督しにきただけだ」

俺は正直に答える。

だが、ギルドマスターは微笑むと、

「ふ、くくく。まさか照れ隠しとはな。どうやら、お前はすいぶんと世間の噂とは違う男のようじゃないか！」

「何を勝手に勘違いしているのやら。そんなことよりも、だ」

俺は彼我の戦力差を瞬時に確認する。

コレットの攻撃で大きなダメージを与えられたようだが、もちろん、それだけで甚大な戦力差を覆すことはできない。

「戦略レベルの差を戦術でひっくり返すことは難しい」

「分かっている。だが、ぎりぎりまで頑張ってみるさ」

「頑張りでは埋まらん。今回言う戦略レベルの差とは、単純に数の差だ。防備のない拠点を10倍の敵から守るのは不可能だ」

「それは・・・」

ギルドマスターは悔しそうに唇をかむ。

「ゆえに、俺が補助スキルにて、お前たちの全ステータスを10倍程度に増幅する。そして敵の全ステータスを10分の1ほどに減少させる。これで彼我の戦力差は10：1でお前たちが圧倒できるはずだ」

「は？」

何だ、不服なのか？

「いや、まあ不服かもしれん。10：1の戦力比になるとはいえ、戦闘をすれば怪我をする冒険者いるかもしれんしな。だが、そこまでは面倒を見切れんぞ」

俺の言葉にギルド長は、

「いや、そうではなくて、ステータス10倍？ そのうえ、敵のステータスを10分の1？ そ、そんなスキル使い見たことも聞いたこともない　だ、だが、こんな時に嘘を吐く意味はねえ。つまり本当ってことだ。だ、だが解せねえ。な、なら、あんたは一体どうして勇者パーティーをクビになんてなった？　もしかして、勇者とやらは、周りの見えない、自分の力で成功したと思いついた、ただの馬鹿なのか？　お前の様な奴を追放するだなんて」

「いや、そんなことはないはずだが・・・」

「いや、旦那様！　わしもギルドマスターの説に賛成なのじゃ！　幼馴染だからと言って、評価が甘すぎになっておるのじゃ！　旦那様らしくもない不公平な甘々採点なのじゃ！」

「そんなことないだろう、ははは」

「だめだ、この男、幼馴染に対する評価が間違いなく甘すぎる・・・」  
「普段は客観的で慧眼じゃのに、何で幼馴染にだけそれが機能しておらんのかな・・・」

「？」

俺は首を傾げる。

ともかく、今はそんなことを話している時ではない。モンスターたちも混乱から立ち直ろうとしている。

「それでは始めるぞ。全体化スキルを常時発動。まずはダメージ軽減スキルを発動」

「おお、すごい・・・」

「皮膚がカチカチになったぞ！」

冒険者たちがざわつく。

「次に、俊敏スキル発動」

「す、すごい！早すぎて、目が回りそうだがっ！」

「3つ目に、回避補助スキル」

「す、すごい！」

「4つ目に、回数制限付き無敵付与」

「おお、まだあるのか。これなら！」

「5つ目に、確率回避付与」

「えーと、うん、まだあるんだな」

「6つ目に、ダメージ割合低減付与」

「えつと・・・助かるな」

「7つ目に、毒・火傷・冷氣・呪詛などなどまとめて耐性付与」

「あの・・・」

「8つ目に、攻撃力アップ付与」

「アリアケさん・・・？」

「9つ目に、攻撃割合アップ付与」

「・・・」

「10個目に、追加効果、毒付与」

「11個目に、攻撃時状態回復付与」

「12個目に、攻撃時体力回復付与」

「13個目に、魔力耐性付与」

「14個目に、魔力攻撃アップ付与」

「15個目に、魔力攻撃割合アップ付与」

「16個目に、時間経過による体力・魔力回復付与」

「17個目に、即死無効付与」

「18個目に、首の皮一枚を付与」

「19個目に、クリティカル率アップ付与」

「20個目に、クリティカル威力アップ付与」

「えーっと、次は敵だな。えーい、面倒だ、高速詠唱！ 今の逆を敵に付与する！ ○× ○！！！！」

はい終わり。ふー、と大きく息を吐く。

と、なぜか隣ではギルドマスターだけでなく、他の冒険者たちも啞然とこちらを見ていた。

そう言えば、スキル発動時も何か言っていたような気もするが……。

「どうしたんだ？」

「いや、どうしたもこうしたもねえ……。まじで驚いた……。それほどの高LVスキルを使いこなした上に、普通3つ程度までと言われる重ねがけを20以上も……」

んん？

「そうか？ これくらい普通だろ？ 勇者パーティーでは更に重ねがけをいつも当たり前前やってたし、別に感謝されたことなかったぞ？」

「「「はあああ?」「」」

なぜか冒険者たちが驚きの声を上げた。

「じゃ、じゃあ何か。今まで勇者たちは、こんな補助スキルの恩恵を受けながら、ダンジョンを探索していたってわけか」

「そうだが・・・」

「何だよ、そんなの誰だってできるじゃねーか!」

「っていうか、全部アリアケさんのおかげだったんじゃないの?」

「しかも感謝すらしないって。それって最悪じゃね?」

何やら、ざわついているが、

「えーっと、雑談はもういいだろう? ていうか、それどころじゃないよね。今、町が襲われてるからな」

「!?!? し、失礼しました!」

何だか嫌に丁寧な返事をされてしまった。

まあ、いいか。

ともかく、

「行くぞ、みんな! モンスターたちを駆逐するぞ!」



「はい、アリアケ様！ 行くぞ、みんな！ アリアケ様の加護ぞある！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おお」

再び大地が鳴動した。

・・・ところで、何で様付けなんだ？

22・英雄は町を救う ～メディスンの町 最終防衛ライン攻  
防戦～  
(後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

23・英雄は町を救う ～メディスンの町 最終防衛ライン攻  
防戦～

23・英雄は町を救う ～メディスンの町 最終防衛ライン攻  
防戦～

「モンスターどもが駆逐されて行きます！」

「ああ、アリアケ様のおかげだな！」

戦況は一変していた。

少しだけ補助スキルを使用しただけで、どういうわけか 様 付け  
をされてしまっているのは腑に落ちないが、とにかく劣勢だった状  
況は今やひっくりかえっている。

「行けるぞー！」

「ああ、アリアケ様の加護ぞある！ うおおおおおおおおお  
おおおおおお

「恥ずかしいからアレ止めてくれないかなあ・・・」

「何を旦那様、本当のことではないか！」

コレットが嬉しそうに言っ。

「別に大したことはしてないからなあ」

支援スキルで支援しただけである。

「それが大したことをやっておるのじゃってのに、もう！ どんだけ自己評価低いんじゃないよ」

まあ、相棒の肩を持つ気持ちも分からんでもない。それにしても大げさだなあ。

とにかく、

「とりあえず、この戦い勝てそうだな」

「うむ！ 最後はあのキング・オーガだけじゃ」

「あれは、強いな。しかし、不思議だ。どうして魔の森の初期段階凶荒であれほどのモンスターが誕生したんだ？ どう考えても第2段階の宿種かそれ以上の裂花まで行っているように見える」

俺は首を傾げた。

「それでどうするのじゃ、旦那様。あれはさすがに手に余ると思うが」

俺はため息を吐く。

「というか、戦いたいんだろ？」

「ぬお！？　なんでバレたのじゃ！？」

分かりやすい奴だ。

あまり手を貸すのは、人々自身のためにならないと思う。

・・・だが、心情的には助けてやりたい。そして何より、俺は神に近い男ではあるが、神そのものではなかった。ならばまあ、

「好きにさせてもらおう。元勇者パーティーの一員として、歴史を草葉の陰で見守るつもりではあるが、俺もまだまだ未熟だな」

「さすが旦那様なのじゃ！　それにそれは未熟とは言わぬのじゃ！」

コレットは笑いながら、

「それこそ旦那様の　格　というもののなのじゃ！　ドラゴンの末姫として認めようぞー！」

「キング・オーガには齒が立ちません！」

「くそ、後はコイツだけだったのに」

「桁違い過ぎる！　何なんだこいつは！」

冒険者たちが苦戦していた。無理もない。いかに俺の全ステータス向上の恩恵があったとしても、こいつはSランクと言っていいモンスター。

ならば、

「ここは俺に任せておけ」

「任せるのじゃ　人間どもよ！」

俺とコレットがキング・オーガと冒険者たちとの間に割って入った。

「ア、アリアケ様」

「た、助けてくれるんですか」

「別にそう言うわけではない。気まぐれだ。勘違いするんじゃないぞ？」

「わしもご主人様の気まぐれに付き合うだけじゃからな。そこんところ勘違いするでないぞ、人間どもよ」

「あ、ありがとうございます！　このご恩はっ……」

「さっさと行け！」

ピーチクと邪魔なので追い払った。

「まったく、俺は歴史の陰に隠れるつもりだというのに。目立つつもりなど毛頭ないのだが……。まあ、このモンスターを倒したら



すってんころりん、と20メートル以上の巨体が嘘のように転ぶ。

「嘘だろ……。キング・オーガがあんなに転ばされるなんて……」

「あれが、勇者パーティーを一人で支えて来たアリアケ様の力だつてのわ」

外野がまたもうるさいが、どうでもいい内容なので無視する。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおん」

自分に何が起こったのかわからなかったのだろうキング・オーガは怒声のごとき大音声を上げるが、

「だから、その口閉じておれと、言ったじゃろ？」

ドラゴンの娘。俺が呪いを解いたことと、俺という神のごとき乗り手を得たことでステータスは通常のドラゴンを完全に凌駕している。そこに来て俺のスキル補助を重ねがけする。

「オーガ必滅」

「モンスター必滅」

「攻撃力向上」

「クリティカル率向上」



「必中」

「回避不能」

「即死属性付与」

「決戦 付与」

ステータス向上スキルを重ねがけする。

「力がみなぎるのじゃ！」

「決戦 付与は本来の力を一時的に取り戻し、更にパワーアップさせるスキル。つまりお前は一時的に神龍として神の力を行使できる！ 全力で行け、コレット」

瞬間、幼い少女の姿が、数秒だけその真の姿を取り戻す。

ゲシュペント・ドラゴン。いやいや今やゴッド・ゲシュペント・ドラゴン。

黄金竜とも呼ばれようその神竜は、天空に突如現れた様に見えるだろう。

「奇跡だ」

「これがアリアケ様の・・・本当の英雄の戦い・・・」

いや、別に俺の力じゃないから。ちょっと封印を解いただけだから。だが、そんな釈明をする暇もない。

『キング・オーガよ。我が竜騎士アリアケニミハマ、そしてコレットニデューブロイシスの名のもとに貴殿を断罪する』

「ぎゃおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおお」

「死をもって、わしの前から消え失せよ。焰ラス・ヒューリよ立て」

カッ

その青白い焰は地上より天空を貫く柱のようであった。まさに天の怒りがキング・オーガに与えられたような、神話のような光景に冒険者たちには移ったであろう。

キング・オーガは消滅する。跡形もなく、一瞬にして。

ついでに、ポン！ というコミカルな音を立てて、コレットも元の少女の姿に戻った。

張り切りすぎて、力のほとんどを使ってしまい、落下してくる彼女を受け止める。

「ご苦労様だったな」

「いやー、張り切りすぎて、全力全開してしまったのじゃ。じゃが、気持ちよかったわい！ かかか！」

まあ、実際はこんな会話をしていたりで、俺たち自身には何ら緊張感もないのであった。

とりあえずこうして、メディソンの町における最終防衛ライン攻防戦は、若干俺も手伝ったものの、彼らの努力によって勝利で幕を閉じたのである。

23・英雄は町を救う ～メディスンの町 最終防衛ライン攻  
防戦～  
(後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 24・アリアケは町の英雄として称えられる

24・アリアケは町の英雄として称えられる

「アリアケ様、本当に行ってしまうってのかい？」

「そうだけ、アリアケの旦那。もっといてくださせえ。あ、何なら宿代も全部持ちますぜ！」

「おお、そうだそうだ！　うちの町の名誉市民として、ずっといてもらってのはどうだ、みんな！」

「賛成」

「勝手に決めるな！　まったく・・・」

はあ、と俺はため息をついた。やれやれ、どうしてこうなった。俺ともあろうものに頭痛を覚えさせるとは、この冒険者ども侮れん・・・。キング・オーガのほうがよほど簡単だった。

魔の森との戦い。

あのモンスターたちとの戦いから1週間が経過した。

戦闘に勝利した町、しばしその勝利の美酒に酔いしれたが、今は落ち着きを取り戻しつつある。

本来であれば、俺は戦いの後にすぐに出発するつもりだったのだ。

しかし、住民たちがそれを許してはくれなかった。

「まあまあ、アリアケ様！ いい店があるんです。どうかおごらせてください！ 冒険者の連中が一緒に飲みたいってうるさいんですよ」

えーと、また今度。

「この町が無事なものアリアケ殿のおかげです。ところでうちの娘を紹介したいのですが、どうですか？ 今晚にでもうちにいらっしゃるといのは？」

ちょっと予定があるので遠慮しておきます。

「おや、英雄アリアケ様ではないですか。少し戦いについて教える请いたいのですが、弟子にしてもらっていいですか？」

よくないし、募集してません。

こんな感じである。まったく断るだけで大変だ……。

だが、さすがに旅の予定を遅らせるのもそろそろ終わりにしたいと思っ

「ちよつと目立ちすぎてしまったな。つつい助けてしまった。まだまだ俺も甘い」

「困っている者をなんだかんだで見捨てられぬのじゃな、旦那様は」  
「そんなわけないだろう。俺の力がなくても、人間たちがうまくやっついていけるように、俺は極力手を出さないようにすべきなんだ」

「能力があるとそういった歴史的な視点でものを考えなければならぬから、旦那様の苦勞は余人には理解しがたいからのう」

コレットの発言通り、俺は普通には生きられないというジレンマを常に抱えているのであった。神にはバックアップに徹しろと言われたしな。

「何はともあれ、出発する。世話になったなギルドマスター」

「水臭いことを言わないでください、アリアケ様」

ギルドマスターのオシムは俺に握手を求めてくる。

やれやれ。

俺はあきらめて握手をした。

「当然の話かもしれませんが、ライセンス剥奪については撤回致します。本当に失礼しました。それと、こんなふざけた指示をしてきた王国には、全ギルド連合をあげて抗議文を送っておきますのでご安心ください。また冒険者ギルドの本部にも、今回のアリアケ様の功績については広く喧伝しておりますので合わせてご安心してください」

さう」

「余計なことをするなっ」

俺は思わず抗議した。・・・それに活躍を伝えるって言っても、信じないやつもおおいだろうに。

「ライセンス剥奪の撤回の撤回を要請する!」

「ライセンス剥奪の撤回の撤回を拒否します!」

「くそつたれめが!」

静かに目立たず暮らしたいだけだというのに!

「いい加減諦めてはどうかのう」

コレットが呆れた様子で言った。

「それではアリアケ様、コレット様。お元気で。もしまた寄られることがありましたら、顔をだしてください。ああ、そうそう。次の行き先としてもし、オルデンの町に寄られるようでしたら、こちらの書状を ミハイル という男にお見せください。出来る限りの便宜をはかってくれるでしょう。そして、その馬車は我々からのせめてものお礼ですお使いください」

俺はその封書を受け取る。そして、用意されていた立派な馬車を見上げた。

確かに、馬車はありがたい。急ぐ旅ではないので徒歩でも構わない



のだが、それでも、彼らが俺に何か恩返しをしたいと言つ気持ちを  
受け取るのも、尊敬を受ける人間の責任だと思った。

「ありがたく使わせてもらおう。では、今度こそ出発する。ではな  
お前たち。達者で暮らすといい」

「はい。アリアケ様たちにシングレットタ神のご加護があらんことを  
俺とコレットは馬車を出発させる。

俺たちを見送る冒険者たちは、俺たちが見えなくなるまで深々とお  
辞儀をしていた。

「次はどこに向かうのじゃ、わしの旦那様？」

馬車の御者台でコレットが聞いて来た。

「そうだなあ。せっかく便宜をはかってくれらというのなら、ギル  
ドマスターの言っていた オルデンの町 を経由するのでもいいかも  
しれない。ただ・・・」

「何か問題があるのか？」

「ああ、オルデンに行くなら、次の街道を南に進むことになる。そ  
の途中で 肥沃の大森林 というところがあるので、そこを通るこ  
とになるんだが・・・」

「それが問題なのかの？」

「まあ、そうだな。そこはエルフが住む森でな。彼らは先代勇者との盟約によって、肥沃の大森林の通行を人間たちに許した。だから、勇者パーティーを追放された俺のことを、心よくは思わないだろう。場合によっては通行を拒否、悪ければひと悶着起こるかもしれない」

「なるほどのう」

「まあ、心配しすぎかもしれないがな。それに、まあその時はその時だ。急ぐ旅ではない。コレットさえ良ければ肥沃の大森林を抜け、オルデンの町に向かうとしよう」

「わしに異存などあるはずがない。旦那様の行くところが、わしに行きたいところじゃてー！」

ニコリと笑って、コレットが言った。そして、頬を染めて、なぜかもたれかかって来る。疲れたのだろうか？

ともかく、こうして、俺たちの次の目的が決まったのである。

馬車はゆっくりと進んでいく。空は青く、風は穏やかであった。

何だか、つい先日まで勇者パーティーで冒険の準備に奔走して来たのが嘘のようである。

彼らはうまくやっているだろうか。いや、疑うべくもないか。俺から巣立った彼らだ、きつとうまくやっているだろう。

そんな穏やかな気持ちで、かつての勇者パーティーの未来を確信したのである。

## 24・アリアケは町の英雄として称えられる（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

25・一方その頃、勇者ピピアたちは（聖女さん往く）（前書き）

一旦ここで完結としておりましたが、読者様より続きを読みたいと言う沢山のリクエストを頂きましたので、続きを執筆して行きたいと思います。

本当にありがとうございました。

今後ともどうか本作をよろしく願います。

25・一方その頃、勇者ビビアたちは（聖女さん往く）

25・聖女さん往く

「ちくしょう！ 王国のやつらふざけやがって！ なにがペナルテイだ！ 俺の今までの王国への貢献を忘れたか！ 恩をあだで返しやがって！」

バリン！

俺の投げた花瓶が壁にぶつかって割れた。

「ちょ、ちよつとビビア落ち着いて」

「そ、そうだぞ、ビビア。仮にも勇者とあるうものが短気を起こしては・・・」

「うるせえよ！ 誰のせいでごうなっと思ったとやってやる！」

「だ、だってそ、それは・・・」

デリアが何か言いたげな瞳でこちらを見て来た。

くそ、今まで従順だったくせに、何だその目は！ まるで俺のせいだとしても言うかのようで気に入らない。

「でも確かに、かなり重いペナルティでしたね。まさか聖剣を没収されるなんて。勇者パーティーの証明書を剥奪されたようなものです。それに、私たちの能力に疑問符がついたのでしよう。聖剣の返却の条件がランクDクエストの任務達成とは……」

聖女シンシアが言った。

この女はどうやったのか、プララを逃がした後、驚くべきことに生還したのである。だが、はた目には大丈夫そうだが、実はその体はボロボロで、しばらく戦闘は無理だとの事だ。

「戦いの途中、運よく落とし穴のトラップに引っかかって、逃げることに成功したのですが……。しばらくは休養が必要です」

などと言っていた。

と、そこに、

「当然かもね。仲間を見捨てて逃げるような勇者パーティーに聖剣がふさわしいはずがない……」

ぽつりとした声が響いた。それはベッドに寝るプララであった。

プララはフェンリルから逃げてダンジョンの入り口へたどり着くまで、やはり何度もモンスターに襲われ、命からがら逃げかえって来たのだ。そのことは彼女のトラウマとなっている。

「ふざけんな！ プララ！ どの口が言ってやがる！ 今回のクエストの失敗は、もとはと言えば全部お前のせいなんだからなっ！ お前が光魔法さえちゃんと思えばこんなことにはならなかったんだ！」

「そ、そんな・・・ひどすぎるよ。あたし一生懸命やったのに・・・。しかも見捨てた上に、全部あたしのせいだなんて・・・」

「うるせえぞ、それ以上口を開いたらまじでクビだからな。勇者パーティーをクビになったら、変な噂が立つ。だから他に行くところなんかねえんだよ、てめえには・・・はあ、んなことより、失敗の教訓から学ぶほうが大事だろうが。今回は要するにアリアケのやっていた役割・・・あー、ナビゲートだっけか。要するにその雑務担当がいなかったのが原因だな。なら、その代わりに募集すりゃいいだけだ。んで、エルガー、指示しといたが、ちゃんといいい人材は募集できたのかよ。ま、勇者パーティーに参加したい人間なんて幾らでもいるだろうけどな」

俺は鬱陶しくなった時間をさっさと終わらせたくて、プララのことには無視して次の話題に話を進めた。

「ああ、とりあえず1人選んでおいた。採用条件の中でも一番優秀だったんでな」

「ただか雑務に優秀も何もあるかよ」

俺は馬鹿にした様子で言う。

『バシユータ』という名前のナビゲーター職の男のようだ。



募集条件にあった、各種補助スキルなども使える。これでアリアケの代わりになるだろう。

「補助スキル持ちさえ入れれば、今まで通りの成果が出せる。ふん、そのDランクのクエストをさっさと突破して、国王に泣いて土下座させてやる！ ははは、はははははははははは！」

「あ、ああ。そうですね、ビビア様！ 前はちょっといつもと調子が違っただけですわ！」

「うむ、そうだな。今度こそは大丈夫だ。何せ俺たちは幼馴染。心の通じ合ったパーティーなんだから」

3人は調子を取り戻したかのように、明るく笑い合った。

「・・・・・・・・・・」

だが、プララが俺たちの様子をどこか冷めた目で見ていた。

その視線の雰囲気は俺たちも何となく感じて、明るい雰囲気は徐々に消え、どこか重苦しい感じになる。

誰も何も言わず、誰かが微かに立てる物音だけが静かに響いた。

と、聖女が口を開いた。

「では私はこれで失礼します。申し訳ありませんが体調のこともありますので、しばらくパーティーを抜けさせていただきます」

「あ、ああ、そうだったな。気を付けて。そうだ、体調が戻ったら連絡してく……」

「では失礼します」

俺の言葉を最後まで聞こうともせず、アリシアが姿を消した。それはまるで俺のことなど眼中にないとも言つかのように……。

くそ！

俺は内心更に悪態を吐いた。

なんでこんなことになったのだろう。アリアケなんていう役立たずを放逐しただけなのに。

（いや、その代わりは入ったんだ。次で挽回できる。それで聖女や国王、他の民衆共にもう一度俺がいかに優れた勇者かを証明するんだ）

俺は再びあの人々に称賛される日々が訪れることを期待して、胸を躍らせるのだった。

（聖女アリシア＝ルンデブルク）

「んふ」

勇者たちから遠く離れて、私は思わず微笑みを浮かべた。

「んふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

おっと、いけないいけない。聖女なのにはしたない声を上げてしまいました。

「こほん」

と一つ咳払いをします。

でも、しょうがないのです。だってだって、

「待っててくださいね、アリアケさん」

ほんの数日離れていただけなのに、既にアリアケさん成分が切れています。

「今からアリアケがそちらに参りますからね」

同じ空の下にいるであろうアリアケさんのことを思い浮かべながら、私はウキウキと旅支度をはじめたのでした。

思わず鼻歌など歌ってしまいがら。

25・一方その頃、勇者ピピアたちは（聖女さん往く）（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 26・エルフ族を滅亡の危機から救う話(前書き)

続編となります。宜しくお願いします。

全体的に修正しました。(8/15)

少しは読みやすくなったかな。

## 26・エルフ族を滅亡の危機から救う話

### 26・エルフ族を滅亡の危機から救う話

「旦那様、ここがエルフが住むと言う 肥沃の森 なのじゃな。広大な森じゃのう」

竜の末姫コレットが楽しそうに言った。

俺は頷く。

俺たちはオルデンに行くため 肥沃の大森林 を通過しているところだった。

「このまま勇者パーティーを追放された俺を、エルフたちが放つておいてくれればいいがな。彼らはかつて先代勇者と盟約を結び、この道を人間に開放した。だから勇者パーティーを追放された俺をすんなりと通してくれるかは微妙なところだ」

俺はそう呟きつつ、

「何もなくても、森を抜けるまでに1週間はかかるだろうな。．．．それにしても、思ったよりも魔素が強いな．．．。あまり魔素がたまるとうるさくものを呼び寄せるが．．．管理はされていないのか？」

「エルフが多数住んでおるのじゃから、森は大切に管理されておるのではないのか？」

コレットがもつともな疑問を口にするが、

「大切にする、というのも考え方が色々あるさ。例えば、間違った過去の知識をそのまま頑なに踏襲するというのも、ある意味『伝統を大切にする』という風に言えたりするからなあ」

「やはり旦那様の言葉には含蓄があるのう！ 勉強になるわい！」

「相変わらず大げさだな」

「なんと！？ わし的にはだいぶ抑え目にしておるから許すのじゃ！」

と、そんな世間話をしながら馬車を走らせていた、その時である。

「その馬車、止まれ！」

高圧的な声が森に響いた。

まさに検問といった風にエルフが複数名、道をふさぐようにして立っている。

（やはり来たか）

思った以上にピリピリとした雰囲気を感じる。

(それにしても、こいつらひどく憔悴しているな?)

エルフたちはひどく疲弊している様子であった。目には隈ができ、立っているだけでフラフラといった風に。俺が通るだけではなく、他にも何かあったのかもしれない。

「どうかしたのか?」

俺は御者台から、彼らを見下ろして言う。

長耳族と言われる彼らは、その名の通りとがった耳を持ち、また非常に美しい容姿をしていることで有名だ。

ただ、頭が固いのとプライドが高すぎるくらいがあるため、あまり他種族から好かれてはいない。

一方で、俺は彼らが世界に必要な人種だと判断していた。

森で生きる彼らの存在がなければ、自然と人間界のバランスは崩れるだろう。そう言う意味で、世界を見渡す俺のような上位の存在としては、エルフの存在価値を認めているのである。

俺レベルの人間になると好き嫌いといった個人の好悪とは、一線を画した考え方にならざるを得ないのだ。

「お前は、アリアケニミハマ。間違いないな!」

怒声で誰何される。

「ああ、そつだが?」



俺は素直になつた。

すると、

「大人しくしろ！ この災厄の種め！ お前の様な災いの原因を通すわけには行かぬ！ いいや、ここで捕縛する。これはエルフ族全員  
の意志だ！」

そう叫ぶと、周りのエルフたちも一斉にこちらに弓矢を向けた。

その目はまるでゴミを見るように。

「旦那様、こいつらわしの旦那様に弓を引こうとしておるのじゃ。じゃから、愛の炎で焼き払って良いかの？」

「すぐに毎回焼き払おうとするな」

それになんだ愛の炎って。

とにかく「待て待て」と竜の姫を止めた。

いきなり弓を向けてくる蛮族めいた者たちだが、彼ら一般人が愚かなのは今に始まったことではないのだ。

愚か者は焼くのではなく、愚かゆえに導いてやらなくてはならない。学ぶ機会を与えねばならない。

「何をごちゃごちゃと言っている」

数名が一斉に御者台より引きずりおろそうとしてくるが。

「やれやれ」

「なにつ」「な、なんて力だ!」「くそ、本当にこれが追放された無能者の力なのか?」

俺が腕力増強をして腕を振るい、その風圧で全員が吹っ飛んでしりもちをつき、泥だらけになった。

何をこれくらいで驚いているのやら。実力差は歴然だ。だがそれを見抜けないのもまた、彼らがただの無害な一般人である証か。

俺は咳払いするとエルフたちに言う。

「お前たちが何に怒っているのか、分からんが、少しは事情を説明してみようか? エルフは蛮族ではなかったように記憶しているがどうだ? そうではないなら、弁明の機会を与えてやるから、少しは知能ある生き物らしく、事情を説明してみろ」

俺はそう言って彼らに釈明の機会を与えようとした。

しかし、

「何が弁明だ! この勇者パーティーを追放された災厄の種め! 貴様のせいで我が森は原因不明の枯死が発生しているのだぞ!」

「うむ! 勇者パーティーに災いをもたらしたことが、盟約関係にある我々へ影響をもたらしたのだ!」

そうだ、そうだ！ と更に激高した。

一方の俺は冷静に彼らの言葉をまとめる。

枯死 か。

なるほど要するに、

「肥沃の森 の木々が枯れ始めているわけか……。だとすれば、森の結界も弱まりモンスターも現れ始めているかもしれない。そして、その原因は勇者パーティーを追放された俺にあるのではないかと、そういうわけか」

「どうして勇者パーティーを追放された旦那様が原因になるのじゃ？」

「先代との盟約に、勇者はこの森を庇護することをうたっているんだ。つまり、勇者パーティーを追放された俺は、勇者パーティーの力を弱め、ひいてはこの森に災いをもたらした、ということだろう」

「古い伝統を 大切 にしておるんじゃないなあ。先代の話なんじゃろ、それって……」

呆れたような、皮肉をこめたコレットの言葉に、俺は「そうだなあ」と頷いた。

「……負けぬ。絶対にお前たちを拘束する！ このような災厄をもたらした大罪、どのように裁くかは我らがエルフの長が決めるのだ！ 一族の命運をかけて！」

そう言つて、エルフたちがにじり寄つて来た。

困つたなあ、と俺は頭をかく。

蹴散らすことは簡単だが、こいつらも大真面目なので、どう対応しようか迷つたのだ。

こいつらは馬鹿で頑迷で固陋だが、別に悪人とかではない。

そう言う意味で、こついう一般人たちを導く役割を担う俺としては、対応が非常に悩ましいのである。

だが、

「うーん、やっぱりわしの命より大事な旦那様に仇なそうとする存在は、誰であろうと許してはおけぬな」

コレットの口からきしゃーと炎が漏れていた。

「いや、ちよつと待てコレット……。こんがり焼くのは禁止で」

俺がそう言いかけた時である。

「お、お待ちください！ 大賢者アリアケ様！ コレット様！」

そう言いながら、ずざざつと、俺たちとエルフの間に割り込んで来たのは、やはりエルフの一人の少女であった。

見た目の歳は15、6くらいだろうか。

美しい金色の髪を長く伸ばした、どこか儂い雰囲気のある少女である。

だがどこか気品があった。

土下座をしながら、こちらに顔を向けて訴えた。

「同胞の無礼。お許しください。この者たちは古い伝統に縛られた哀れな者たち。なにとぞご慈悲を頂きたい」

そう言って改めて頭を下げたのである。

「なっ セラ姫！ 何という事をおっしゃるのです！」

「そうですね！ それに、なぜこんな痴れ者に頭を下げるなど！」

「言葉を慎みなさい。今大賢者様とコレット様が少し力を出せば、あなた方など一瞬で消し炭になっていましたよ。力の差は歴然なのです。そんなことも分からないのですか？」

「馬鹿な！ 勇者パーティーを追放された役立たずの男にそのような力があるわけが……」

「……大賢者様とコレット様がメディスンの町を10000のモンスターより救った話を知らないのですか？」

「メディスンを？ あの人間どもの町のことでしょうか？ ふん、我ら誇り高きエルフ族は外界のことなど知る必要などないのです！ この森が我らの故郷。そして最大の防衛拠点なのです！ それにそ

の話はどうせ嘘でありましょう！ 1000などと セラ姫以外  
誰も信じますまいなあ！」

「耳をふさぎ、目をふさぎ……。何より、その肝心の森が立ち行  
かなくなつて困っているのではなかったのですか、我々は？ は、  
・・・」

セラと名乗つた少女は軽く目をつむる。

頭が痛いとはかりに。

「ともかく、この場は私に任せなさい。これはエルフ長の妹として、  
あなたたちの姫としての言葉です」

「む、しかし我らはエルフ長の指示で・・・」

「いいから去りなさい。・・・大丈夫です。兄には私から話をしま  
すので。あなたたちが咎められることはありませんよ」

「そこまでセラ様がおっしゃるのでしたら・・・ですが、きっと後  
悔なされますぞ！」

言い捨てて、検問のエルフたちは去つて行つた。

「はあ・・・」

セラはもう一度ため息をついてから、こちらに向き直る。

そして改めて深く頭を下げ、

「大賢者アリアケ様。そしてコレット様。この度は同胞が申し訳ありませんでした。無礼をお許しください」

そう言ってから、俺のほうをすぎるような目で見て、

「そして、大変身勝手なお願いですが、どうか私たちエルフ族を滅亡よりお助けください」

彼女はそう言って、大きな瞳から一筋涙をこぼした。

「この肥沃の森を癒し、エルフ族をお救いください。頼れるのはこの世界で最も偉大な大賢者たるアリアケ様しかいないのです」

## 26・エルフ族を滅亡の危機から救う話（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 27・エルフの長(前書き)

ちよつと前半分を加筆修正しました。少しは読みやすくなったかな。

(8/15)

## 27・エルフの長

### 27・エルフの長

「このたびは同胞が申し訳ありませんでした」

俺たちをこっそりと家に招いたセラ・・・エルフ族のお姫様は、改めて俺たちに謝罪の言葉を口にした。

「うむうむ、苦しゅうないぞ！ わしはいいから旦那様へしっかり詫びをするのじゃ！ うまうま！ それにしてもエルフと言うのは高慢な者が多いと聞いたが、そうでもないのじゃなあ」

コレットはセラから出された手料理に舌鼓をつつ。

だが、俺は肩をすくめる。

「エルフ族というのは普通プライドが高いので、人間に対して頭を下げることは滅多にない」

だから、こうして エルフの謝罪 を受ける、というのは本当に特別なことだ。

無論、彼女に俺の真の才能を見抜く目があるからこそ、自然と頭を下げているのだろう。

非才である者ほど俺の力を見抜けないというのは皮肉な話だ。

「アリアケ様のお話は伺いました。本当に素晴らしいご活躍です。まさに救世主としての働きと思います」

やれやれ。

「大したことではないさ。それにお前の謝罪はもう受け取った。もう謝る必要ない」

「その上とても寛容なのですね。エルフにもあなたほどの方はおりません」

俺は肩をすくめ、

「失礼ながらこのエルフのお姫様のセラ姫こそ、実はエルフ種族の中では変わり者だと思っぞ」

「ぜひセラとお呼びください。ですが、率直なことで。私のことを分かって下さる方とお会いしたのは、うふふ、初めてです」

どこか嬉しそうにセラは笑った。

俺も少しその気持ちがあった。

俺のような特別な位置にいる者のことを、普通の人々が理解することは手に余るのだ。生き方や才覚が違ったためそれは仕方ないのだが……。

しかし、だからこそたまに自分の本質を他人に指摘されると、何だかとても嬉しくなるのである。まるで自分が特別だということを、一時でも忘れられるかのよう。

「それはともかく、事情を聞かせてもらおう。助けるか助けられないかは、その後だ」

「ごもっともです」

彼女は居住まいを正すと話し出した。

「実は1年ほど前からこの森に異変が起き始めました。お聞きになられたかと思いますが、我らの故郷たる 肥沃の森 の木々が枯死し始めたのです」

「その原因は？」

「よく分かりません」

セラは首を振った。

「兄がエルフ長になったのが10年ほど前。別段、おかしいことをしているわけでもないのに、ここ最近になって森に異変が起こり始めました。いえ、むしろ兄がエルフ長になってから、木々は一時とても活力があつたくらいなのです」

「ほっ」

俺は顎に手を当てた。

「しかし・・・今となつては、木々は枯死し、結果結果が弱まり、モンスターが出現し始めた。兄は焦り、その原因を色々と考えたのでしょうか」

「結果、俺と言うわけか？」

「じゃが、追放の時期はほんの数週間前じゃぞ？ 枯死し始めた1年前とは時期が合わぬのではないかの？」

「アリアケ様が勇者パーティーに加入していたこと自体が、災厄の原因だと兄は言っています」

「なわけないじゃろ。愚かじゃなあ」

「ええ、はい。我が兄のこととはいえ、お恥ずかしい限りです。エルフの恥でございます」

セラは眉根を寄せる。

「メディスンの町の活躍のことはお聞きしました。まさに勇者パーティーにふさわしき大賢者としてのご活躍。あなた様が福音をもたらすことはあれ、災厄をもたらすなどは、とても思えません。反対にアリアケ様ほどの方を追放などと、勇者パーティーは何をしているのか、と憤っている次第です。というか、やはり頭がおかしいのでしょうか・・・」

「また大げさなことを・・・」

「大げさではないのじゃ！ うむうむ、セラよ！ そなたなかなか見どころがあるの！ じゃが、旦那様はやらんぞ！ 旦那様はわし

の旦那様じゃからの！」

「ま、まあ。そんな。私なぞともつり合いません・・・」

そう言っつて、なぜかセラが頬をピンクに染めて、ちらちらと俺の方を見た。

途中から話がよく分からなかったが、

「話は分かった。だが、実物を見ないことには判断もつかないな」

「！ それではっ・・・！」

「エルフ族を救うかどうか、判断はまだだ。ともかく森へ入らせてもら・・・」

そう言いかけた時であった。

「その必要はない！」

バン！

扉を開き、数名の男たちが押し入って来た。手には弓や槍を持っている。

その中心にいたのは、

「ヘイズお兄様・・・」

「セラよ。これはどういうことだ！ 災厄の種を里へ呼び込むとは

！」

だが、セラはその言葉に強い言葉で言い返した。

「アリアケ様が災厄の種などとは失礼千万です。謝罪してください、お兄さま！」

「た、たわけめ！ 誰が人間に謝罪などするか。勇者パーティーを追放になった男などに籠絡されおつて！ いや、何か魔術でも使われたか。ええい、もういい。衛兵！」

「はっ！」

「3人を 封印牢へ閉じ込めよ！ あれならば、並大抵の魔力波動は封じ込められる。セラはしばらくそこで頭を冷やせ！ そして、アリアケとその仲間はそこへ永遠に幽閉する！ そうすれば災厄もおさまろう！」

「お兄様！ なんて愚かな！ アリアケ様こそがエルフ族を救う存在だということが、どうして分からないのですか 外に目を見開けば、こんなことは誰にでも分かることです！ アリアケ様がいかに優れた方かなどっ……。むしろ他の勇者パーティーの方々が愚か者であることなど自明の理ですっ……」

「ええい、黙れ黙れ！」

セラの叫びもむなしく、彼女はすぐに捕らえられてしまう。

「さて、どうしたものかな」

一方の俺は悩ましく首をひねった。

「ふん。何と泣き叫ぼうと許しはせぬ。せいぜい自分のこれまでの行いを悔い、牢で大人しくするのだな。命を取らぬだけ有り難く思え！」

だが俺は、

「はい？」

とポカンとして、

「視野の狭い男だ・・・というか閉じているな、ヘイズ、お前の視界は。まあ、エルフらしいと言えばエルフらしいか。だが、エルフの長としてはもう少し成長を求めたいところだ。まあ、まだ青二才では仕方あるまい、今後努めよ。・・・何にしろ、妹に感謝しておけ」

「なつ！？　へ、減らず口を・・・」

「お前こそな。命があるのは、妹のおかげだぞ。まったく馬鹿者めが。いきなり踏み込んだ時点で、セラの家でなければ、俺に敵として認識され、迎撃されて即死だったぞ？　人の家を血で汚すのをためらったから、ヘイズ、お前の命は今まだあるのだ。それに、俺が悩んでいるのはな、お前たち種族の命運そのものだ」

そう言いながら、よっこらしよと立ち上がる。

「に、逃がすな！　衛兵！」



「はっ！ 大人しくっ・・・」

「実力差も読めんのか、お前らは？」

ドン！ と俺にまわりっこうとした衛兵たちが、軒並み吹き飛ばされた。

「なっ　こ、これほどの差がっ・・・！ た、たかが勇者パーティーを追放された役立たずポーターのはずなのに！」

「メデイスンの町を救った英雄なのですよ！ お兄様！ もっと外に目を向けてください！ もはや中だけで完結できる時代ではないのです！ その方は本当の大賢者様です！ きつとこの世界をお救いなる歴史的な人物に間違いないですよ！」

「いや、そんな大それたものではないからな。そこは訂正しておく。そついう役割は頼むから引退させてくれ・・・」

「訂正を訂正するのじゃ！ 旦那様こそゲシユペント・ドラゴンの末姫たるこのわしコレットの唯一の乗り手なのじゃから！ もつと世界に羽ばたいてもらわぬとなあ！」

「は？ ゲシユペント・ドラゴンとその竜騎士だと？ そんな神話のような話があるわけが・・・」

「あー、もう、話がそれまくっているぞ、お前ら。と・に・か・くっ！」

俺は話の流れを断ち切るように言った。

「ヘイズとしても俺が封印牢に行くことは歓迎なのだろう。ならば、俺は封印牢に行くとしよう」

「なっ！？ それはどういう・・・」

「そうすれば、お前も見極めがつかだろう。何が 枯死 の原因なのか、な。エルフのリーダーはお前なんだ。せいぜいしっかりと見極めよ」

俺の言葉にヘイズは目を剥いた。

それは、俺と言う男が、どれだけ広い視野で物事を見ているのか、思い知ったと言う風な顔であった。

「お、お前は・・・。お前は本当にアリアケニミハマなのか。追放された、無能と言われた、あの噂の・・・」

「どんな噂か知らんが・・・。その噂は一体誰の口からきいたことなんだ？ そして、目の前で一体何が起こっているんだ？ ここは里の外ではないぞ？ お前が重視している、里の中でまさに起こっていることなのだぞ？」

「  
」

俺はそう言い残して、封印牢へ案内するように衛兵たちに命じる。

衛兵たちは立ちすくむヘイズの顔色を窺いながらも、とにかく俺の言葉に従い、封印牢へと案内したのであった。

## 27・エルフの長（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 28・エルフの里の崩壊

### 28・エルフの里の崩壊

封印牢というのは魔法的な牢屋であり、白く大きい卵型の球体で、そこに入る仕組みである。

その中に入れば、中からの魔術はきかず、また人から漏れる魔力なども外部へ届かないと言われている。

すなわち存在を封印する牢屋、ということだ。

「封印牢は中からは物理は無効化し、魔術はすべて弾く無限監獄です。外からしか開けることはできません。このようなことになってしまい、アリアケ様にはなんとお詫びしていいのか」

セラが少し涙ぐんだ。

「このセラが出来ることでしたら、お詫びになんでも致します。ア、アリアケ様が一生ここにとらえられるなら、そ、その私は精一杯、アリアケ様に全身全霊のご奉仕を・・・」

「いや、これくらいなら、すぐにでも出られるが・・・」



だが、一転して眉根を寄せると、

「それにしてもセラは油断も隙もないのじゃ……。ここぞとばかりに旦那様を寝取ろうとするのじゃから……」

「そ、そんなつもりでは」

「旦那様はわしの旦那様じゃからな！ まじで！」

「うっー」

セラは再び涙ぐんだ。

なぜか残念そうに俺の方を見てから話を変える様に口を開く。

「そ、それはともかく、ではもう封印牢から脱出されるのですか、アリアケ様」

「いや、しばらくはここにいようと思う」

「えっ？ どういうことでしょうか」

「俺がここにいれば、災厄である 枯死 は発生しないとエルフ長はお考えた。しばらく俺がここにいて、実際にどうなるのか、彼が自分の目でしっかりと検証するのが一番早いだろう」

「そ、そこまでの深謀遠慮を……。それに、それも全てエルフ族のために、その身を犠牲にしまでっ……。！ なんとというお考えの深さ、遠大さでしょうか」

「いや、逆だよ」

えっ、とセラが意外そうな声を上げた。

「これはエルフ族自体が試されていると知ることだ。俺は君たち一族へチャンスを与えるだけ。エルフという種が、自ら真実を直視できるのかどうか、それを試す機会を、な」

セラは頷くと、

「おっしゃる通りです。ただ救うのではなく、成長の機会を促す。まるでアリアケ様は神様の様な方ですわね。あなた様にエルフの命運をかける機会を頂けたこと、エルフ族として光栄に思いますよ」

そう言って、エルフの姫はその名の通り、花のように微笑んだ。

〽 一方その頃、エルフ長ヘイズは〽

封印牢へアリアケたちを封じ込め、最初の1週間、私は肩の荷が下りた様に安心していた。

「これで 肥沃の森 の災厄 枯死 は収束する！」

そう一族の者たちに宣言した。

エルフの皆も大いに喜び、自分を誉めそやし、さすがエルフ長殿だと言ってくれた。

エルフの里の長で最も求められるのは、この森の保全。その大目的を達成しつつあるのだから、賞賛は当然のこと。私は意気揚々とした。

しかし……。

「エルフ長……魔素の発生がおさまりません」

「むしろ、だんだんと濃密さを増しているような……」

「このままでは魔素によってモンスターが大量発生してしまい、エルフの里が全滅するやも」

「そんなわけなからう！ もう一度調査を試みよう！」

「で、ですが」

「いいから行け」

私は思わず大きな声で怒鳴ってしまった。

くそ、どうしてなんだ。私は一人になり、テーブルを思い切り叩く。

私は焦っていた。

私がエルフ長に就任したのはおよそ10年前。

私は先代よりもよほど森の保護に熱心な男だった。ゆえに、木々を手厚く保護し、それまで多少あった伐採すらもやめることにした。



そのおかげで森はより活況となった。木々は以前よりも繁茂し、自然から力を得るエルフの力も増したのだ。

だが、今はその面影もない。

「くそ！くそ！」

私は悔しくて、齒噛みした。

1年ほど前からなぜか森が 枯死 しはじめた。

そのせいで同胞からは、

「エルフ長として不適合なのではないか？」

「森を枯らすなどと前代未聞だ。精霊に愛されていないのでは？」

などと陰口をたたかれ始めたのだ。

どうしてなんだっ……。これほど自然を愛しているのにつ……。！

悔しいっ。悔しいっ。

そんな時、ふと妹の顔と、なぜか勇者パーティーを追放されたあの男のことが頭をよぎった。

「セラの奴、怒っていたな……。」

普段は気の優しい穏やかな娘なのだが、いざという時ははっきりとモノを言う妹だった。

「もし、妹や彼らの言う通り、パーティー追放と今回の件が無関係なら……」

そんな思いが頭をよぎる。

「少しくらい話を聞いてみた方がいいのかもしれない……」

ただ、一点だけ気になっていることがある。

最初から私がアリアケという男に対して敵対的だったのも、このことが原因の一つだった気がする。

部下の報告にあったのだが、

『セラ姫はずいぶんアリアケという男に”ご執心”だ』ということである。

私はそれを聞いて、思わず怒髪天を突いたのだ。

「な、ならん！ まだセラは幼い！」

結婚など時期尚早だ！

私とセラは歳の差が大きい。セラは私がエルフとして200を数える時に生まれた妹であり、まだ15歳である。エルフとしてはまだ幼い子供にあたる。なので、どちらかと言えば自分が親代わりのようなところがあったのだ。

なので、ついつい娘が惚れたご執心という男にきつく当たってしまった。

「・・・だが、そのせいでいきなり話し合いもせず、捕縛しようとしてしまった・・・」

普段は話し合いを重視するタイプなのに、セラのことになる、どうも冷静さを失ってしまうのだ・・・。

「だが、あの男がもし無実だとすれば、あの威風堂々たる態度。そして、あの街を救ったという噂・・・」

真実ならば、人の中でも最高位に位置するほどの男ではなかるうか。ならば結婚とは言わないまでも、正式にお付き合いくらいなら・・・いやいや。やはりまだ早いのではないか。それに男はオオカミだし・・・。

そんなことを考えていた時である。

「た、大変です エルフ長」

飛び込んで来た仲間の悲鳴で我に返る。

「どうした!」

「山崩れです! 大規模な崩落が発生し、里が飲み込まれました!」

「なんだって」

それはありえない事態だった。

エルフの森は木々が繁茂している。そんな中で山崩れが起こるなんて！

私は呆然とするほかなかった。

だが、そんな風に呆けている暇はなかった。

エルフの民たちが大勢生き埋めになっているのだから。

## 28・エルフの里の崩壊（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 29・エルフ種族を救う

29・エルフ種族を救う

〈エルフ長へイズ視点〉

「ああ、何でこんなことに・・・」

私は目の前の光景に絶望した。

突然の山崩れによって、エルフの里は大きなダメージを負っていた。

「エルフ長様、指示を　ほとんどの者が逃げ出しましたが、家ごと飲み込まれ逃げ遅れた者もおります！」

「！　そ、そうだな！　急ぎ我々総出で土砂を取り除くのだ！」

「で、ですが、この量の土砂を取り除くには人手も力も足りません  
！」

「っ・・・！」

部下たちが困惑の声を上げていた。

部下たちの指摘はもつともで、大量の土砂が民家を押しつぶしていた。

すぐに救出しなければ、押しつぶされた者たちは救い出す前に窒息死してしまうだろう。

(どうすればいいんだ・・・)

喉がカラカラに乾くのを感じた。今押しつぶされている家は、最近赤ん坊が生まれたばかりのリンスロットの家だった。自分の親友の家でもある。その新しい命が最悪の形で奪われようとしている。

「何だよ。あのアリアケっていう男を閉じ込めりゃ解決だったんじゃないかったのかよ・・・」

「やはりエルフ長には精霊の加護が宿っていなかったのでは？」

「さよう。エルフが自然災害に飲み込まれるなど前代未聞じゃ・・・」

「おい、よせ、こんな時に。聞こえるぞ」

同胞たちの声が聞こえて来た。

いつもならば威厳を保つために叱責すれば済む。

だが、今は彼らのその言葉一つ一つが真実だと痛感した。

「私はエルフの長になどなるべきではなかった。このような事態を招いてしまった」

思わず涙が流れた。

しかし、それすらも大自然の前では甘えでしかないことを知る。

「エルフ長お逃げください！」

「えっ」

呆然としていた私は反応が遅れた。

「第2波が来ます！ は、早く！」

第1波の土砂崩れで、地盤が軟化していたのだろう。山崩れが再び発生し、山肌を飲み込みながら流れ落ちて来た。

その量は第1波の比ではない。それはエルフの里を丸ごと飲み込むだろう。

「終わりだ」

私は絶望して目を閉じた。

できるならば同胞全てに謝りたかった。無能な長ですまなかった、と。

そして・・・もう一人。

「アリアケ殿の言葉に耳を傾けるべきであったのだろうな」



今ならば分かる。あの方の言葉は全て我らエルフを慮おもんばかつてのものだった。ならば、これは自業自得なのだろう。

土石流は目前に迫った。

そして、その奔流は間もなく私を押し流した。

・・・はずであった。

「何を勝手に諦めている。お前はエルフの長なのだろう」

その言葉は私の前から聞こえて来た。

「ならば、最後まであがいてみせる」

私はその時、神が降臨したのかと本気で信じたのだった。

くアリアケ視点く

「 時間停滞    重力操作    衝撃吸収    斥力発生 。 以上のスキルを 合成 し、 範囲 スキルで 連続展開 する 」

俺はエルフの里を優に飲み込もうとする土石流の前に、淡々とスキルを使った。

「す、すごい……」

「何が起こっているんだ……土砂が……」

「山崩れが元に戻っていくぞ！」

俺のスキルによって第2波の土石流が押し戻されて行った。

「原理は簡単で、土石流全体の流れを遅くしながら重力を反転させる。一方で重力を反対方向へも発生させ、流れを逆転させただけだ。もちろん、それでもまだ危険性は0ではないので念のため衝撃は殺してある」

「簡単な訳ないじゃろ！！ 旦那様以外の誰にそんな真似ができようか！！」

ついできたコレットが隣でつつこんでいた。

「ありえない」

里のエルフたちも目を見開いていた。

「い、今のは本当に勇者パーティーを追放された役立たずポーター、アリアケがやったというのか……？」

「し、信じられない。何かの間違いだ。こんな奇跡のようなことができるなんて！」

「ああ、スキルの合成・・・しかもそれを連続展開だと聞いたことないぞそんなもの！」

エルフの男たちが何やら混乱していた。

しかし、俺の元にエルフ長のヘイズが近寄って来た。

こいつだけはどこか落ち着いていた。

そして、

「大賢者アリアケ殿！！」

そう言っただけで俺を睨み付けると・・・。

がばっと、いきなり土下座をした。周りのエルフは驚くが、そんなことは些事だとばかりに口を開く。

「本当にすまなかった！　そして、ありがとう！　里はあなたのおかげで救われた！　多くの命が助かった！」

心からの感謝の言葉であった。

「だ、だが・・・」

ヘイズはあわせて疑問を口にした。

「なぜ我々のような愚かな者たちを助けてくれたのだ。あなたの言葉に耳を傾けもせず、しかも牢に閉じ込めたような我々を・・・」

はあ、と俺は嘆息する。

「別に助けたわけではない。たまたま災害が発生して、俺に襲い掛かって来たから、自分の身を守っただけだ」

「は？ た、助けた訳ではない、ですと？」

「そうだ」

「旦那様、じゃが、そなた封印牢からここまで全力疾走せんかったか？ 危険察知 スキルが反応した！ とか何とか言ってる」

「言ってるない」

「あの、セラもアリアケ様がそのようなことを言ってる全力ダッシュをしていたのを見た気がするのですが」

「知らんな」

アリアケは表情も変えずに首を振った。

「• 「これほどの偉業をなしたというのに、なんとという殊勝なお方だ•」

俺たちの下らないやりとりを見て、なぜかヘイズは再び深く首を垂こぶれた。

「改めて謝罪を。大賢者アリアケ殿。勇者パーティーを追放されたと聞き、あなたを侮った発言を多々してしまったこと。私の人生で

最大の誤りだ。あなたはまさに大賢者にふさわしい実力と見識を備えた、勇者一行にふさわしい……。いや、勇者パーティーを實質的に導いて来た存在なのだろう……。今ならばそのことが確信できます。……。ですが、なぜ勇者パーティーがあなたのような賢人を追放したのか、理解に苦しむばかりですが……。ともかく、私は自分の不明を心から恥じ、そして全エルフを代表し、ここにお詫び申し上げます。大賢者アリアケ殿、すまなかつた。そして、また全エルフを代表しお礼を言いたい。本当に助けてくれてありがとう」

エルフの謝罪。それは滅多にみられないものだ。

そしてそれ以上に、エルフの感謝。それは本当の意味でエルフが心を許した時にしか見せない行為と言われている。

「だが、まだ終わっていないぞ。第1波で押しつぶされた家からエルフたちを助け出さねばならん。時間がない」

「その通りだ。それで余りにも厚かましいお願いだが、頼むアリアケ殿。我々に力を貸してくれ。エルフ長として正式に大賢者アリアケ殿に助けを請いたい。この通りだ」

深く頭を下げた。

しかし、

「断る。俺一人の力ではどうせ間に合わん。お前たちが総力をあげて救出しろ」

俺はにべもなく首を横に振った。

その答えに、周囲のエルフたちは、

「もつともだ……。だが、俺たちひ弱なエルフでは……」

「風魔法では土と一緒に、押しつぶされた民家ごと吹きとばしてしまっただろっし……」

俺の答えにエルフ長、セラ、それに他のエルフたちも絶望に表情を染めた。

「ふーむ、そう言われてもな……。俺に出来ることと言えば、この辺り一帯の土砂の重力を10分の1程度にすること。そして、今まさに押しつぶされている者たちの体力が減らない様に回復し続ける事。あとはお前たちの筋力を100倍にすることくらいだ」

「は？」

「何だつて？」

エルフたちが戸惑った声を上げる。

「お前たちが言ったんだろっ。土砂を押しよける力が無いと。それに押しつぶされた者を助ける時間が足りないよ。なら、俺ができる支援としてはこれくらいだ。さすがにこれ以上は面倒見切れんぞ」

そう言いながら俺はスキルを発動し始める。

「範囲」スキル発動」

「自己回復促進（強） 発動」

「重力10分の1 発動」

「筋力強化（強） 発動」

「は？ えっ す、すげえ！ 非力な俺たちがマツシブに」

「見る！ この前腕二頭筋を！」

「見てくれ、こんな大岩だってこの通りだ！ これでひ弱とか言われないぞ！」

何やら微妙なところで感動が巻き起こっているようである。

「それにしてもすげースキルだ・・・」

「それにアリアケ様は俺たちのために駆けつけて下さったんだぞ」

「第2波から助けてくださった。まさに我らの救世主様だ」

「勇者パーティーを追放になったっていうのは・・・じゃあ」

「勇者パーティーの方が馬鹿の無能だったんじゃないか？ こんな大賢者を追い出すなんて！」

「そうに違いない！ むしろ先代勇者との盟約をないがしろにしたのは、大賢者を追放した勇者パーティーの方だったんじゃないか！」

「ああ、きつとそうだ！ 無能勇者どもめ！」

「くそ！ 間抜けな勇者パーティーどもめ！ もし会ったら一発殴ってやりたい！」

散々な言われようである。

そんな悪口雑言を口にしながらも、彼らは素早く手を動かした。

と言っても、軽くなった土砂を、筋肉モリモリマッチョマンのエルフたちが撤去するのに、そう時間はいらなかった。

そして、押しつぶされた民家からは、エルフたちが無事に救出されたのである。



## 29・エルフ種族を救う（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 30・エルフたちから感謝を受け、エルフ族の英雄になる

30・エルフたちから感謝を受け、エルフ族の英雄になる

「それでは、我らエルフ一族を未曾有の窮地よりお救い下さった大賢者アリアケ殿に心からの感謝を捧げ、ここに祝いの席を設ける。我らが英雄のアリアケ殿に、一同乾杯！」

「乾杯！」

「アリアケ殿に乾杯！」

「ありがとうアリアケ殿！」

「大賢者殿！」

エルフ全員が俺に対して感謝の祝杯を挙げた。

「ご覧下さい」

そう言っ一人のご婦人が抱っこしてきたのは、まだ小さな赤ん坊だ。

「この小さな命をお救い下さってありがとうございますございました。本当に

何と感謝申し上げていいか」

「ふ、礼ならもう貰っているさ。エルフに手料理を振る舞ってもらえるとは、助けたかいがあった。それで十分さ」

「いえいえ！」

と、ヘイズが割り込んだ来た。

「この程度で十分などは、エルフの誇りが許しません。もっともつと感謝の気持ちを伝えさせて頂きますぞ！」

「最初から思っていたが、暑苦しい男だなあ」

その言葉に周囲のエルフたちが大笑いした。

エルフの感謝 をこれほど受ける人間は前代未聞だろう。

もちろん、俺という人間ならば起こりえることだとは思っが・・・。

正直言つて騒がしいのは余り得意ではないのだがなあ。

「それにしても、どうしてアリアケ殿ほどの方が勇者パーティーを追放になったんだらうなあ」

「逆じゃないのか、勇者パーティーをアリアケ殿が追放したんじゃないのか？」

「それはありうるなあ」

エルフたちが酔っぱらいながら、口々に言った。

そんなことはしていないぞ、と急いで訂正しようと思ったのだが、

「なるほどのう。旦那様が追放したということが。なんじゃ、わたし納得じゃ」

「わたくしも納得できました」

「私もです。胸のつかえがとれましたよ」

コレット、セラ、ヘイズも同調してしまう。

やれやれ、事実とは違うのでちゃんと正しておくか……。

「追放したか、されたのかなど小さなことだ。大事なのはあいつらが俺と言う余りに大きな存在に縋すがることをやめ、そして、まだまだ未熟なりに自分たちの足で立とうとしたという事だ。傍から見れば滑稽かもしれないが、いくら転んでもいいと俺は思っている。なぜなら、歩こうとしなければ転ぶことも出来ないのだから。小さな子供が歩くのを見守るのも、また親の役割でもあるのだからさ」

俺は遠い目をする。俺という偉大な存在に指導を受けた彼らも、いつかは巣立たなければならなかった。俺に甘え続けたいのも分かるが、彼らはずいぶん巣立ったのだ。そのことを上位者たる俺は言祝ことほいでやらねばなるまい。彼らの上に立つ者として。

「さすが旦那様は優しい視線で皆を見ておるのじゃな。それが物事を大きな目で見るといふことなのじゃなあ」

「まるで自然の精霊神のような温かで素敵なお考えですね」

「本当ですな。私もエルフ族を導くにあたり、アリアケ殿を手本にしたいと思います。その素晴らしいお考えをもっとお聞かせいただき、学びたいと思います」

「なに、大したことはないさ。物事の通りを深く考え、歴史や大局から見通せば、容易なことだ」

「それが凄いのですがなあ」

俺の言葉に、エルフ長のヘイズはどこか感動したかのように嘆息した。

ところで、とヘイズが話題を変える様に言う。

「枯死の原因ですが、一体なんだったのでしょうか。もしか、大賢者アリアケ殿にはお分かりになっているのでは？」

その質問に俺は、

「木を大切にしすぎたからだ」

と即答する。

「へ？」

とヘイズが変な声を上げた。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ、アリアケ様！」

「そうです、木を大切にしたらだめなんて・・・」

「そんなの意味が分かりませんよ！ 木を守ったら森が衰退するだなんてっ！」

そうだな。と俺は頷く。

「だが、それが事実だ。ヘイズお前の代から木々の伐採をやめたということだが、それ以前は必ず伐採をしていたのではないか？」

「そ、その通りです。定期的に、一定の範囲を開けながら、木を切るようにしていました。そういう掟でしたので・・・」

「それを『間伐』という」

「か、間伐・・・？」

そうだ、と俺は頷く。

「間伐をしなければ太陽の光が当たらず、新しい植物は育たない。すると悪い気が発生し、魔素がたまり、モンスターが集まる温床になる。そして、一時的には良くても、長い目で見れば森は枯れていくんだ。すると、地盤が荒れ、自然災害が起こりやすくなっていく」

「そ、それである山崩れが・・・。確かに最近大雨があっただんです」

「す、すごい。さすが大賢者様だ・・・」

「ああ。これほど自然の知識に精通されているとは！」

ヘイズは頷き、

「これからは間伐をしっかりやって行くように変えたいと思います」

と言った。

それがいいだろう。

ただ、一点疑問があるのだ。

「だが、一つ聞きたいのだが、なぜお前はいきなり伐採を完全にやめてしまったんだ？ エルフと言うのは保守的な種族だ。それが悪いとは思っていない。特に自然と共に生きるならばその方がいい面も多いと思う。だからこそ疑問だ。どうして急に今までのルールを変えたんだ？」

「え、ええ。それはある時旅人からそうアドバイスを受けたからなんです」

「旅人？ それは一体どこの誰なんだ？ まったくもって無責任な無能ではないか。もはや犯罪行為だぞ」

温厚な俺であるが、若干憤る。こまじお

「その・・・勇者様です・・・」

「は？」

勇者？ それは一体どこの……。

「随分と前ですが……。その時は大賢者様はいらっしゃいませんでしたが、確か3名でお見えになりました。我々は先代勇者との盟約がございますので、勇者殿を信頼しております。けっして無責任なおことはおっしゃらないであろうと」

そ、そうだったのか。

3名と言うのもどの3名なのか、なんとなく見当がつく。確かに冒険に出ていない時などは基本同道しているわけではないのだ。

「俺が同伴していれば、こんなことは絶対に起きなかったのに……」

「確かに……。旦那様がおらんかったのが、最大の不運じゃったな……」

「アリアケ様さえいらっしゃればこんなことには……」

「大賢者殿さえいれば……」

コレット、セラ、ヘイズが口をそろえた。

「すまなかった。俺の責任だ」

「え？ ど、どうしてアリアケ様が？」



セラが驚くが、

「俺が面倒をみていた奴らだ。いわば俺は教師のようなもの。出来の悪い生徒たちの不始末は俺の責任だ・・・」

子供の面倒を見切れなかったようなものと責任を痛感する。

しかし、

「大賢者殿。顔を上げて下さい。大賢者殿の責任ではありませんよ。それに私は感動しました」

え？

どういうことだ？

顔を上げると、他のエルフたちも笑いながら、

「さすが大賢者様です。他の人のために自分が謝るなんて普通できません」

「ああ、これほど潔く気高い人がいるなんて驚いたよ」

「我々もアリアケ様の在り方を学ばないといけないなあ」

「そうだな。本当は愚かな勇者パーティーが謝るべきところを、代わりに謝罪をされる度量をお持ちなのだなあ」

そんなことを口々に言った。

「ただ・・・」

エルフ長ヘイズが眉根を寄せて口を開いた。

「やはり今回のことは正式に国に抗議はせねばなりません。勇者は王国から特権待遇を保証された身分。王国騎士団のようなものからなら。言動には国家として責任が生じる。そのことを王国に問わねば私の指導者としての責任が取れません」

「お前の言う事は正しい。だが、あいつらはまだ未熟で・・・」

俺がそう言いかけると、

「ですが・・・」

とヘイズは続ける。

「大賢者アリアケ殿の偉大さ、そして我々に示して下さった寛容さに学び、今回の件で勇者パーティーを罪に問うようなことは致しません。あくまで軽いクレームにとどめるつもりです」

「そうか。恩にきる」

「何をおっしゃいますか!」

ヘイズは慌てた様に恐縮し、

「こちらこそ返せないほどの恩を頂きました」

その通りです。とセラも同意しつつ、

「それに、今度から『勇者様』と言われたら、アリアケ様のことだ  
と思うようにしますね」

などと言った。

「それはいいな!」「賛成だ!」「真の勇者様!」

他のエルフたちも同意して盛り上がるが、

「頼むからそういうのはやめてくれ! 俺は引退してゆっくりする  
予定なんだ!」

「これほどの大活躍をしておいて、それは無理じゃろ?」

コレットが無情にもツッコミを入れる。

「そうですね、大賢者殿。私が口を閉ざしても、このような英雄譚、  
どこからか噂は広がるものです」

「頼むから勘弁してくれ・・・」

俺は盛り上がる周囲をよそに、ひっそりとため息を吐くのであった。

30・エルフたちから感謝を受け、エルフ族の英雄になる（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

31・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者は仲間を募集する〉

31・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者は仲間を募集する〉

俺たち栄光ある勇者パーティーは『ラクスマ』という、そこそこ大きな街を訪れていた。

王国のクソどもが、前回の冒険の失敗を理由に俺様から聖剣を取り上げ、その返還条件として、この町でのDランククエストの達成を条件にしたためだ。

(Dランクだと！　はっ！　俺は勇者だぞ　　そんなものは、雑魚冒険者どもに任せておけばいいのっ！)

屈辱に唇をゆがめる。こんなクエスト、楽勝すぎるのは明白だった。だが、

「とはいえ、回復術士のメンバーを募集する必要があるな」

俺たちは冒険者ギルドのテーブルを囲い座っていた。

現在のメンバーは拳闘士デリア、盾役のエルガー、魔法使いプララ。そして、ポーターとして雇ったバシユータという男の計5人だった。大聖女アリシアは前回の冒険で大怪我をしたようで、まだ連絡はなかった。

さすがに後衛の回復役なしで冒険に出るような真似は出来ない。

「ふん、まあ王都ではない片田舎の街とは言え、そこそこの街だ。勇者パーティーからの呼びかけともなれば、数十人は集まるだろう。ははは、むしろこれからの選抜が思いやられるな」

「その通りですわびビア様。とりあえず書類審査で9割がたは落としてしまつとしても、結構残りますからね」

「最後はどうしても面談だからな。ま、俺たちは人を見る能力だけはあるからな。しっかりと見極めるとしよう。なあ、プララ」

「ん・・・ああ、そうだね・・・」

仲間たちと、殺到して来るであろう新たなメンバーを待つことにする。1、2日もあれば相当の応募があるに違いなかった。

しかし・・・。

「どうして全然集まってこねえんだ！ しかも、かろうじて集まって来るのはろくに初級ヒールも使えねえ奴らばかりじゃねえか！」

「そのうえ、報酬の前払いが条件だと言ってきています。完全に途中で脱走する気ですわ」

「ど、どうする勇者よ……。審査基準を下げないと面談まで進める応募者が一人もいないぞ……」

「お前は馬鹿か、エルガー 審査基準を下げて面談して採用したとしても、とてもこんな奴らに後衛なんて任せられるわけねえだろうが！」

「む……。馬鹿とは言いすぎなのではないか……」

くそつたれが！ と俺はテーブルを蹴り倒す。

「なんで栄えある俺たちのパーティーにこんな雑魚どもしか集まってこねえんだよ！ おいデリア！ お前の募集の仕方に問題があったんじゃねえのか」

「そ、そんな！？」

「もしくは、実際にピラを作ったのはエルガーだったな……。本当に鈍<sup>どん</sup>くせえな！ てめえのせいでとんだ時間の無駄をくらったぞ！」

「なあっ  
」

俺の腹の虫は収まらない。ミスをした仲間共を叱責するのはパーティーリーダーである勇者たる俺の役目だ。

しかし。

「くくく、見てみるよ、あれ」

「本当だな。へへへ、みつともねえ奴らだぜ」

「ああ、奴らが例の・・・くつくつく」

どう見ても俺より格下の冒険者どもが、遠巻きにこちらを嗤っていることに気づいた。

俺は怪訝な顔をする。今までこんなことはなかったからだ。勇者である俺を嗤うヤツなんている訳がないし、いて良いはずもない。

恐らく、こんな田舎の物を知らない駆け出し冒険者が何かで、礼儀を知らないのだろう。格下をいきなり脅かすのもかわいそうだ。ここは少し世の中を分らせる程度にしてやるとしよう。

「おい、お前たち。俺たちが誰だか知らないのか！俺たちは栄光ある勇者っ・・・」

そう言いかけた俺の言葉を、

「知ってるさ！あの聖剣を没収された間抜け勇者パーティーだろ  
うっ！」



そう言って、あるうことが遮ったのである。

「は？」

俺は言われたことが理解できず固まる。奴らは言葉をつづけた。

「『呪いの洞窟』で仲間を見捨てて逃げたんだって 本当だったから『冒険者ライセンス剥奪』だぜっ！ よかったな、国がかばってくれてようっ！」

「その上、大聖女様にも見放されたって噂じゃねえか！」

「洞窟から逃げかえってきた時は、泣いて震えてたらしいな！ ははは、普段えらそうなくせして、情けねえ奴らだぜ！」

ギルド中が俺たちを心底馬鹿にしたような笑い声に包まれた。

俺は余りの屈辱に顔を真っ赤にする。殺意すら抱くほどに。

だが、次の言葉で逆上していた俺の体温は、逆に凍り付いてしまう。

「それに比べてアリアケさんは立派だよなあ」

「は？」

何だって？

「ああ、あの方こそまさに人々を助ける救世主様だ」

「口だけのコイツらなんかとは違う。本当の意味での賢者様だよな

あ  
」

「ちょ、ちよつと!」

デリアが焦った声を上げた。

「どうしてここでアリアケなんかの名前が出るのよ!」

「そうだ! あんな非力で無能な男の名前がどうして出る!」

エルガーも抗議の声を上げた。

すると冒険者たちは意外そうに、

「なんだ知らねえのか? ついこの間『メディスンの町』の近くに魔の森が出来たんだ」

「そのことくらいは知っている! 王国騎士団と冒険者たちが総出で防衛したともな!」

だが、冒険者は馬鹿にしたように鼻を鳴らすと、

「そりゃ国の建前さ。王国騎士団は全滅して、街は壊滅寸前だったんだ。もう無理だって皆諦めてた。そこにアリアケさんが来て、リーダーとなって冒険者たちをまとめあげ、一致団結して、魔の森のモンスター1000体を撃退したんだよ。しかもボスはキング・オーガだったんだぜ」

「なんだって そんなわけがっ・・・!」

「信じられねえのも無理はない。だが事実だ。何せ俺もその戦闘には参加したからなあ。ここにいる奴らの中には、そんな時にアリアケさんに世話になった奴は大勢いるぜ」

まさか！　そう思う。

だが、冒険者の言葉に、「俺も」「俺もだ」「アリアケ殿に助けられた」などと、アリアケの野郎を慕う言葉が次々と溢れ出て来たのである。

「それに最近は風の噂だが、エルフの里を救った、なんていう噂もある。エルフ族がアリアケさんのファンクラブを作ったなんて話もあるくれえだ。まったく、エルフ種族が人間を褒めるなんてことは前代未聞すぎて、ちょっととした評判だよ」

「し、信じられないっ。そんな馬鹿なっ・・・！」

俺は悔しすぎて歯噛みする。

ぎりぎりど歯が鳴り、膝に爪が食い込んだ。

と、その時である。

「ね、ねえ。やっぱりアリアケに謝ろっよ」

プララがそんなことを言い出したのである。

31・一方その頃、勇者ピリアたちは  
（後書き）  
（勇者は仲間を募集す

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

32・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者はかつての仲間と再会する〉

32・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者はかつての仲間と再会する〉

「ね、ねえ。やっぱりアリアケに謝ろうよ」

プララがそんなことを言い出したのである。

「何を・・・何を馬鹿なことを言ってやがる！　プララ　よりにもよって、あ、謝るだとう！？」

俺は叫ぶように言う。

「そんな無様な真似が許されるわけないでしょう　正気なの、プララ！　そもそも魔の洞窟で役立たずだったあなたのせいで、こうなってるのよ」

「そうだぞプララ。頭でも打ったのではないのか？　魔法だけでなく、頭まで悪くなつては魔法使い失格だぞ！」

デリア、エルガーも目を剥いて罵倒した。当然だな！

「恥を知れ！　このへボ魔法使いが！」

俺たちは当然の抗議をする。

普段であれば、俺たちの正論にプララはすぐに納得する。

だが、

「私の実力は確かにみんなが言う通り大したことがないのかもしれない。でも、それとこれとは別じゃん　じゃあ聞くけど、モンスターに最初にやられたのはどこの勇者！？　盾役を果たせなかったのはどこのでくの坊！？　それに攻撃が通じない拳闘士はどこのどいつなのさ！　それって全部、今まではアリアケの支援があったから、やってこれただけだったんじゃないの」

「なっ  
」

「そ、それは偶々よっ  
」

「そっ、そうだ！　油断していただけだっ！」

だがプララは更に言いつのる。

「じゃあ、そもそもの話！　光源を十分にさせなかったのは悪かったけどさ、それならそれで、そういう条件にあった冒険の仕方をするのがリーダーの役目なんじゃないの　それなのに闇雲に動き回ってモンスターを呼び寄せてさ！　アリアケだったらそんな下手な冒険の仕方はしなかったよ！　彼だったらどんな条件下でも、それにあわせた戦略を立ててナビゲートしてた！　気配察知に注力して、移動にも細心の注意を払ったに違いないよ！」

「ぐ、ぐぐぐつ……」

「何より、アンタらやられそうになっただら私の回復アイテムを奪って逃げたじゃん！ アリアケは口うるさい奴だったけどさ、それは彼なりに正しいことを示してくれてたんだよ！ 彼がいてくれたら、あんな道理に外れことは絶対に許さなかった！ だから、ねえ、謝ろうよ！ 頭を下げて戻って来てもらおうよ　やっぱり私たちには彼の力が絶対にひつよ……」

「い、いい加減にしろ！」

俺は叫ぶ。勇者としてのプライドをズタズタにされた俺は顔を真っ赤にした。

「買いかぶりもいい加減にしろ。あいつにそんな力があるわけがないだろう！ ユニークスキルもないあいつにそんなことが……！ あるわけないんだ！ 口から出まかせだ！ 俺たちは実力でのしあがったんだ！ 俺こそが、神に愛されてるから聖剣に選ばれた男で……！ だから俺があいつより劣っているわけがねえ！」

「そ、そうよ！ あんなの後ろから偉そうなこと言ってるだけじゃない！ 私がこのパーティーの支柱なのよ！ 勇者を支えているのは私なんだから！」

「その通りだ。俺こそがこのパーティーの盾なんだ！ あんなひ弱な男に助けられていたなんて……信じられるか！」

俺たちは激しくプララを罵倒した。

「おいおい、あいつら大丈夫なのかよ……」

「完全に仲間割れしてやがる」

「ていうかアイテム強奪って・・・ただの犯罪者じゃねえか」

「しかもあいつら全員、感情論しか言ってるねえな。冒険者のイロハも学べてねえんじゃねえか？」

ははは、という嘲笑の声、はあ、という呆れの声が耳に響く。

そして、

「アリアケさんと一緒にメディスンの町で戦った時は、日頃いがみあつてる100名の冒険者たちが一致団結したもんだが・・・。やはりこの勇者はだめだな。4人ですらまとまっちゃいねえ」

その言葉に、俺は余りの悔しさに齒噛みする

奥歯がくだけるほどに強くギリギリと齒噛みした。

血の涙すら流れそつだ。

この世界で最も優れた、聖剣に選ばれた勇者の俺が、こんな冒険者ギルドで笑いものにされていいはずがない。それも、あんなへボポーターのアリアケと比較される形で・・・！！

(俺の実力を知らしめなくてはだめだ)

ふとそんな考えが頭をよぎる。



(ここにいる全員を亡き者にすれば、俺の実力を王国も認めざるを得ないよな……)

そんなことを一瞬考え、実際に剣へと手が伸び始めた……その時である。

「はわわ、勇者様たちじゃないですか」

ポヤンとした、だがよく通る声がギルドへとこだました。

あまりに場違いな声に、ギルドは一瞬静寂に包まれる。だが、その声を発した人間は特に気にしていないようだ。独自のポヤンとした空気のまま、ぱたぱたと勇者たち一行に近づいて来た。

「き、君は……確か……ローレライ、だったか？」

「は、はい、そうです！ 覚えて頂いていて光栄です！」

そう言っただけ深く頭を下げた。

少女の名はローレライ。ふわふわとした緑の髪を伸ばした15歳くらいの少女だ。

あどけない、駆け出しといった風情だが、前回、たまたま一緒に冒

険したことがあり、見た目に関わらず、それなりの高レベル回復術士であった。

「ご無沙汰しております。ご挨拶が遅れてすみませんでした。まさか、また勇者様たちとお会いできるなんて、本当に光栄です！」

「そ、そうか？」

「はい！」

ローレイは何らてらいなく頷いた。

「前回の冒険で色々な奇跡を見せてもらってから、毎晩のようにその光景を思い出します。もう数年も前なのに。竜を一撃で切り伏せた勇者様の聖剣ホーリー・スラッシュ一刀撃、デリア姉様が襲い来るオーガたちを軒並み叩きのめした殺戮的舞踏、エルガー様があらゆる敵の攻撃をその鋼の肉体で全て跳ね返した鉄壁防御！そしてプララさんの巧みで疲れを知らぬ支援魔法に攻撃魔法！勇者パーティーの皆さんの武勇を片時も忘れたことはありませんでした！・・・あれ、でもそう言えばもうお一人、アリア様がいらっしやいませんか？」

俺は彼女の言葉を聞いて・・・最後のアリアケの部分だけは無視して口を開く。

「ふっふふ。そうかそうか！いや、その通りだ。フウ。いや、俺としたことが一度の冒険の失敗を余りに引きずりすぎていたな。俺にはこれまで王国を救い、民草を救済して来たと言う数々の実績があるんだ。そして、俺の實力は助けられた皆が一番よく知っている」

その言葉にローレイはニコリとして、

「その通りです。それで・・・私はしばらく別の冒険に出ていて、今日久しぶりに戻って来て、勇者様の回復術士の募集を見かけたのですが、まだ採用枠は余っていますか？」

「ああ、現在数十人から選考しようとしていたところだったが、ローレイ、君とパーティーを組むでしょう」

「え？ い、いいんですか？ いきなりなのに、私なんかで？ それに数十人の応募があったなら、もっと実力のある冒険者さんたちがたくさん・・・」

「一度パーティーを組んだことがある君が適任だろう。それに君の実力は知っているしな。お互いの信頼関係があることが重要だ」

「そうなんですね。わあ！ 嬉しいです！ またご一緒できるなんて！ よろしくお願いします！」

ローレイはニコリと微笑んで言った。

やれやれと俺は椅子にゆったりともたれかかる。

「ふ、これが本当の勇者の人気というものだ。見る者が見ればちゃんと俺の実力は評価されているってことさ」

「私も少し焦ってましたわ。たかだか一度の冒険の失敗で。ふふふ、あの失敗のおかげで私たちは更なる飛躍をとげる良い経験をしたのでしょー！」

「そうだな。勝って兜の緒を締めよ。今まで勝利の連続だった。だが、実力があっても運悪くたまには失敗だってある。だからこそ冒険は面白いんだ。そうだろう、プララ？」

エルガーがプララに水を向けた。

すると、プララもローレイの言葉に、かつての栄光を思いだしたようだ。

「そ、そうだよね……。私たちはみんなで沢山の冒険を経験して突破してきたんだ。ご、ごめんね、みんな！ なんだかわたしナーバスになってみたい！ もう大丈夫！ ってか、よく考えたらDランククエストなんか楽勝っしょ！」

「ははは！ だから最初からそう言ってるじゃない！」

「さあ、出発しましょう！」

「そうだな、ポーターのバシュータを呼んで早速出発だ！」

「「「「おう！！！！」「」「」

こうして俺たちは成功が約束された新たなDランククエストへ意気揚々と出発したのである。

その冒険先は エドコック大森林。

そこに住み着いたワイバーンの討伐がその任務であった。

32・一方その頃、勇者ピリアたちは　　（勇者はかつての仲間と再会する）（後書き）

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

33・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者たちは真の力をみせる〉

33・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者たちは真の力をみせる〉

俺たちは今、エドコック大森林の中にいた。木々が鬱蒼と生い茂っており、視界も悪く、やたらと暑い場所である。

メンバーは、勇者である俺、デリア、エルガー、プララ、ローレイ。それからポーターの男のバシュータで合計6名だ。

「やれやれ、本当にあっちな。さっさと奥地に住み着いたというワイバーンを始末して帰りてえもんだ」

俺は悪態を吐く。すると新しく仲間になったローレイがニコニコしながら言った。

「思いだしますねえ。私が冒険者として参加させて頂いた時も、そんな風に余裕を持たれながら冒険を進められていましたものね。押し寄せて来る敵をばったばったとなぎ倒される、勇者様の聖剣の煌めきは今だに忘れられません」

キラキラとした瞳を向けてくるローレイに俺は大いに気を良くす

る。

「わーっはっはっは　そうだろう、そうだろう！　ま、俺にかかれば敵の10000や20000、物の数ではないさ！　俺を倒したいなら、そうだな、それこそゲシユペント・ドラゴンでも連れてくるがいい！」

「すごい！　さすがです！！！」

「うむうむ、あーっはっはっはっは！」

俺は気分よく行軍する。そうだよ、これこそが勇者を正しく敬う一般人の反応なんだ。あのギルドの連中共は恐らく田舎者の馬鹿ばかりだったんだろう。アリアケのありもしない英雄譚に踊らされていたのがその証拠だ！　俺こそが英雄であり、魔王を倒してこの国の姫と結婚して王になる存在なんだ！

俺はかつての正しい気持ちを取り戻した。英雄としての雄大な気持ち  
をなあ！

「でもでも、ワイバーンくらいでしたら、勇者様の出番はないかも  
しれませんね。デリア姉様やプララさんの必殺技で一撃ですよ！  
勇者様が一番なのは当たり前ですけど、他の皆さんもこの大陸に敵  
う人たちはいないくらいの超一流冒険者なんですから。まあ、それ  
くらい勇者パーティーに名を連ねているんだから、当たり前のこと  
なのかもしれないけど」

その言葉に、

「も、もちろんそうよ！　ふ、ふふふ。ふふふふ！　ええ、勇者様





クモンスターだ。

「楽勝だな！ よし、戦闘開始だ！」

「任せて下さい！！」

「防御は任せろ」

「援護するよ！」

息はピッタリだな。

まずは勇者の俺が切りかかる。聖剣ではなく、普通の騎士たちが使う剣だが威力は十分だ。

「トロいんだよおお！」

ずぶしや！！！！

よっしや、見事胴体に命中！ 即死だな！

「ぎゃわあああああああああああああああああああああああああ」

が、即死だったはずのマンティコアが暴れ出し、サソリの尾を振り回した。

それが俺の腕をかする！

「な、なに　ぐ、ぐああああああああ　いでえええええ　う、腕が！　腕がしびれるうううあああ」

「ちよ、ちよつと勇者!？」

「馬鹿! 何をやってる! 邪魔だ! どけ! そんなかすり傷程度で悲鳴を上げるな、軟弱者が!」

「て、てめえ、誰に口をきいてやがるうつつ!」

「い、いいからどいてよ! ファイヤーボール!」

どおおおおおおおおおおおおおん!!!

「グ、グオオオオオ・・・グオオオオオオオオオオオオオオ・・・」

今度こそ致命傷だったらしく、徐々に咆哮の声は小さくなっていく。

ちっ、手間とらせやがって。くそ、それにしても痛えええ・・・。毒が回ってやがる、くそが! くそが! くそが!

俺は内心で毒づく。

その時である。

「あ、あれ?」

ローレイが後衛から俺たちの方を見つめ、首を傾げていた。

「あれれ? もしかして、勇者様たち・・・苦戦されてましたか?」

ローレイが自分でも信じられないとばかりに口を開いた。

「い、いや……。いやいや！」

俺は腕の激痛を我慢しながら、脂汗を流しつつ、大したことないとばかりに笑顔を浮かべた。

「ちょ、ちょっと……。そう、ちょっと調子が悪かったんだ」

「そ、そうなんですか」

ローレライは驚いたとばかりに目を見開き、

「調子が悪いようでしたら、一度街に戻られた方がいいかもしれませんが……。うーん」

「は、ははは。いやいや、たまたま調子が悪かったただけだから。今度は大丈夫だ！」

「は、はあ。そうなんですね。わ、分かりました」

どこか必死な様子の俺の気配に怯えたのか、言葉少なにローレライは頷いた。と、とにかく納得はしたみたいだな。

しかし、

「あの、勇者ごめん……」

プララが口を開いた。

「私、実はちょっと調子が悪くてさ……」

そう言つと腹を抑えて、

「ちょっと、お腹が痛くて。ごめんだけど、帰つて、いいかな？」  
ひきつった表情でそう言った。

「嫌だ！ まだ死にたくない！ また殺されかけるのは嫌だあ！」  
ブララの絶叫が前方より響く。

「縁起でもないこと言うな！ このクソ魔法使いが！」

「そうですね！ 戦いを前にして仮病で逃げ出そうとする仲間には  
先頭こそがお似合いです！」

「その通りだ。俺もこんなことはしたくない。だが、おまえの腐った性根を叩きなおすために、あえて先頭をお前にしているんだぞ」  
俺の言葉に、メンバーも同意する。

「何言つてんだよ！ 仲間を置いて逃げだしたのはアンタたちじゃ  
ん！」

ブララは叫ぶように言った。

「あ、あのう・・・」

と、ローレライがおずおずと手を挙げた。

「逃げたって、一体何の話なんですか・・・？」

「な、何でもないわ！」

「ああ。こつちの話だ！」

デリアとエルガーが力強く言う。

「????????????????」

ローレライはただただ怪訝な表情を浮かべたのであった。

33・一方その頃、勇者ピピアたちは　　〈勇者たちは真の力を  
みせる〉（後書き）

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

34・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者たちは自然の猛威を跳ねのける〉

34・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者たちは自然の猛威を跳ねのける〉

「つたく、油断も隙もありやしねえ・・・」

俺たちパーティーは順調に大森林を前進していた。少し臆病風に吹かれたパーティーメンバーがいたが、そこは俺がリーダーらしくバシッと叱責した上でお灸をすえている。

そのプララは先頭にされたことで、ずっとぐずり続けていて非常に鬱陶しいが。

「う・・・う・・・どうせまた私を囿にして逃げるんだ・・・うっ・・・うっ・・・」

はあ、まじで勘弁してほしい。ここはもう一発脅かして黙らせるか？

そんなことを考えていた時である。

「うっ・・・うっ・・・あいたあ」

急にプララが小さな悲鳴を上げたのである。

（ったく！ いちいちうるせーなあ！ 構ってちゃんかよ！ てか、多分デリアかエルガーが俺と同じ考えで、一発ぶん殴って黙らせようとしたのかね。まったく、俺と違って短気な奴らだぜ）

だが、

「痛い  
」

「うおおお！？ か、かゆい！」

デリアとエルガーも少し遅れて悲鳴を上げた。何なんだ、一体？

俺が怪訝な表情をしていると、

「ああ、黒羽虫 ですね。『虫よけ香』が切れたのでは？」

「虫？ ああそういうことか」

俺は納得する。このエドコック大森林には 黒羽虫 という羽虫が出るのだが、人間の魔力を吸うのである。この虫は毒を持っていて、吸われた場所が腫れあがると同時に、非常にかゆくなるのだ。

そのため、こういった森林系ダンジョンでは虫よけアイテムを持つてくることは常識となっている。

「だいぶ奥地まで来たから入口で使った『虫よけ香』の効果が切れただんだな。よしバシユータ、次の『虫よけ香』を出せ」



俺はポーターのバシユータに指示する。

「へ？ いや、もうないですけど」

しかし、バシユータはあっさりと首を横に振った。

「は？」

俺は啞然とした声を上げると、

「何でもうねえんだよ！」

怒声を上げて叱責する。当然だ、大森林攻略に虫よけ香が無いなんてお話にならない！

だが、バシユータは怪訝そうに眉根を寄せると、

「なんでって……。勇者さんアンタたちが『虫よけ香』がどれくらい必要か聞いたら、『すぐにクリアするから沢山はいらない』と言ったんじゃないか」

「なあっ」

まさか言い返されとは思っていなかったため俺は絶句する。

しかし、次にエルガーとデリアが怒声を上げた。

「そ、それでも！ いざという時のために予備を持っておくのが、ポーターの役目ではないか！」

「そうよ！ あのアリアケだって、それくらいのはしていたわよ！ あいつですらアイテム不足なんて事態、一度も発生させなかったのに！..!」

もつともな怒りをバシュータにぶつけた。

だが、

「は？ そんなことできる訳ないじゃないか・・・」

逆にバシュータがぎょっとした表情をして言った。

「アイテムを持てる量には限度があるんだ・・・。勝手に予備を持つたなんて、しかも虫よけを・・・。そんな重要な判断をポーターが出来る訳が無いだろう。それに、アイテム不足を一度も起こしたことがない。ありえないよ！ そんな凄腕ポーター聞いたこともない！」

最後は悲鳴のような声を上げる。

「は？」

「な、何だつて？」

「で、できないって・・・。ア、アリアケには出来ていたのに・・・

」

俺たち3人はそろって呆然とする。

と、その時、

「あ、あの・・・」

とローレライがおずおずと口を開いた。

「バシユータさんの言う通りです。当たり前ですが持っていけないアイテムの量には制限があります。何を、どれくらい持っていくかという判断は、そのまま冒険の成否にかかわってきます。これは、冒険者が最初にギルドで習うことでもありますが・・・」

「なっ・・・！」

ポーターを擁護するような言葉に、俺は狼狽する。

ローレライは続けた。

「それはでも当然のことなんです。その冒険にどんなアイテムが必要なのか、どれくらいの量が必要なのか、それが見極められるということは、その冒険の難易度や敵の強さ、行程の長さ、休憩の頻度、自分たちの力量、天候や体調など、すべてが見渡せていないとできないことなのですから」

だから、と少女は言う。

「それが出来る方は、まさにその方こそ、パーティーのリーダーと  
いうことになります。リーダーの資質をお持ちと言うことになりま  
す」

「なっ・・・！ なっ・・・！」

俺は知らないうちにギリギリと齒ぎしりをしていた。気づかないうちに手もブルブルと震えている。

「あ、あの・・・だからこそ疑問なのですが、今回のアイテム配分についてはもちろんリーダーである勇者様が決められたのですよね？それが出来ないようなら、そもそも冒険に出ることなんて出来ないわけですから」

「うっ・・・」

俺は言葉につまる。具体的指示など何もしていなかったからだ。

「前は完璧にされたいと思うのですが・・・。どうして、今回はできなかったのですか？」

ローレライはただただ純粋な疑問と言った様子でキョトンと聞いた。

「何か、出来なかった理由が、あったのですか？」

「たっ・・・!」

俺は絞り出すように言う。

「た、たまたま忘れていただけだ!」

「そうなんですか？ でしたら余計に心配です!」

「は？ し、心配???」

はい、と本当に心配そうな瞳で見つながら、ローレライは頷く。

「大森林に向かうのでしたら、虫よけ香は必須アイテムです。その配分を誤る訳がないんです。だとすれば、やはり、何か決定的に調子が悪い『理由』があるに違いありません！」

俺はその言葉に顔を真っ赤にし、ブンブンと首を振ると、

「だからたまたまだ！　というか虫くらい大したことないだろう！」

思わずそう怒鳴り返してしまう。

すると、

「あ、あの、大丈夫でしたら、その、いいんです……。そ、それにですね……」

ローレライは委縮したようにしながら、自分のバッグをこそこそと探り、

「いちおう、いざという時のために、自分用のを少しは持ってきています。そちらをお分けします。なので……そんなに怒らないでください」

「　　そ、そんなもの……！　い、いらな……」

俺よりはるかレベルが下の冒険者から憐れみを受け取るわけには行かない！

俺はその受け取りを拒否しようとするが、

「すまないな、恩に着るぞ、ローレライ」

は？

「虫だけは・・・虫だけは勘弁なのですわ。本当に助かりました。ありがとうございます、ローレライ」

デリアまで

「ホント、虫だけはアタシも無理なのよね。アンタを仲間にしといてよかったわ」

ブララっ・・・！

「僕も助かりました。ありがとうございます。今回の一件、ポーターとして成長できた気がします」

バシユータ、お前までか

（か、勝手に話を進めるんじゃないぞ）

俺は余りのことにパクパクとあえぐようにする。

しかし、

「ようし、それでは進もうではないか」

「ええ、奥地までもうすぐですものね」

「さっさと倒して帰って、お風呂に入りたい！」

「ええ、行きましょう」

「えへへ、喜んでもらえてよかったです」

そう言って、俺などいないかのように、他のメンバー全員が先に進んで行く。

あるうことか、勇者である俺を忘れたかのように、行軍を開始しやがったのである！

「おい、俺抜きで話を進めるな！　おい！」

俺は怒りに打ち震えながら、彼らの後を追ったのであった。

34・一方その頃、勇者ピリアたちは　　（勇者たちは自然の猛  
威を跳ねのける）（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



35・一方その頃、勇者ピリアたちは　　く勇者たちは戦術を立てようとする　　(前書き)

結構細かく直したので、お時間のある人はもう一度読んでいただくと幸いです。(8/23)

35・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者たちは戦術を立てようとする〉

35・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈勇者たちは戦術を立てようとする〉

大森林を順調に踏破した俺たちは、ワイバーンが居付いた湖のほとりまでやって来た。

茂みからその様子をこっそりと眺める。現在、討伐対象のワイバーンが一匹、ひとりでくつろいでいるようであった。

「さて、勇者様、作戦タイムですね。陣形とか色々確認しましょう」

ローレライがまじめな顔で言った。

だが、俺はふふんと鼻を鳴らすと、

「は、そんなものは不要だ」

そう言って首を横に振る。

「・・・えっ？」

ローレライは想像以上に驚いているようで、啞然とした表情をした。

俺は嘆息しつつ、

「たかだかワイバーン一匹程度、何とでもなる」

そう言いつと、

「ふふふ、その通りですね。私のナツクルで吹っ飛ばしてさしあげます」

「防御は任せておくといい。こちらに攻撃して来たら俺が引き受けよう」

「私のファイヤーボール見せてあげちゃうから！」

デリアたちもそう声を上げた。

しかし、

「ま、待って。待ってください！」

なぜかギョツとした様子でローレライが言う。

「その方針には反対です」

はっきりと難色を示したのである。

「へ？」

まさか明確に反対されるとは思わず、知らず唾然とした声を出してしまつ。

が、何を言われたか理解すると、

「いきなり何を言い出すんだ！ 獲物は目の前だぞ！ あとはやるだけだろうが！！」

ここまでの道程で散々な思いをした俺は、そのストレスから、つい怒りに任せて怒鳴り散らしてしまう。

だが、

「でも……」

ローレライはおずおずとしながらも、はっきりと意見を言った。

「もちろん勇者様たちなら楽勝の敵かもしれませんが。出発前の事前打ち合わせはしました。でもでも、だからこそ現場に来たときにもう一度考えなくては。絶対にイレギュラーが発生するのが危険なのですから、想定と現実では絶対に差異がでます。実戦前にもう一度、色々なケースを想定しておかなくてはなりません。それこそ、冒険者ギルドで最初に習うことでもありますし……」

俺はその言葉を「ふん」と鼻で嗤い、

「イレギュラーが起こるのは当たり前だ。だが、俺の手にかかればどんな事態であろうとも恐るるに足らん。フッ」

そう言い切る。

しかし、ローレライは逆にその言葉にキョトンとして首を傾げると、

「どうして、今回に限ってだけは、計画を立てないのですか？」

そう言ったのである。

「……え？」

俺は何を言われたのか分からず、ポカンとする。

「いえ、前はとても緻密な計画を立案されてから、戦闘に挑まれていたではないですか？」

その言葉に、

「そ、そうだったかしら？」

「いや、俺にはそんな覚えは……」

「あたしも記憶にないんだけど……」

デリアたちは困惑するが、

「いえ、立てられていましたよ」

と、なぜかローレライが断言する。

俺たち勇者パーティーが、反対に全員顔を見合わせて沈黙してしま  
う。

「勇者様たちに、こんな当たり前のことを言うのは、本当に今更か

とも思いますが・・・」

と、ローレライは続け、

「クエストと言うのは個人のみで成し遂げられるほど単純なものではありません。むしろ、個々人の力というのは、正しい戦術があつて初めて活きるものです。ゆえに、個人のみというのは、どちらかと言えば二の次だと、ギルドでは習いますよね？」

「へ？」

「個人の力が二の次って・・・」

「そ、そんなことあるまい！ この鋼の肉体の防壁を突破できる敵はいない！」

「私のファイヤーボールを馬鹿にするの!？」

「へ？ いえいえ」

ローレライは淡々と首を横に振ると、

「皆様の力を過小評価しているわけではないんです。単なる一般的な常識論ですよ。冒険者の中で戦術計画がどれほど重要視されているかお伝えしたかったのです」

「それに」と続ける。

「そもそも勇者パーティーがここまで戦つて来られたのは、そして評価されている理由は、その戦術計画の緻密さにあつたからじゃない

いですか？ だから、なぜ今回に限って、作戦を全く練らずにボス戦に挑むのかと少々理解できなかったのです」

「は？ 戦術が評価????？」

俺はポカンとする。何を言っているんだ？

「戦術計画？」

「緻密？」

「それで評価って……。は、初耳なんだけど？」

他のメンバーも同じ反応をした。

だが、そんな俺たちの反応に、

「え？」

ローレイが逆に驚いていた。

「そんなはずありません。一緒に旅をさせてもらった時もそうだったじゃないですか」

ローレイは思いだすようにしながら言う。

「あのベヒーモス討伐。かのモンスターは最初冷気に弱いとされていましたが、追い詰めると形態変化し、様々に弱点を変える難敵でした。しかし、そんな難敵であっても、事前に観察することで性質を分析し、多様な戦術を事前に準備することで対応され、ついにか

のベヒーモスを打倒したのです。あの戦いで勇者パーティーは戦巧者の評判を得ましたよね。そして、もしも、あのたくみな戦術シミュレーションがなければ、間違いなく全滅していたでしょう」

「そ、そうだったなあ！」

俺はたまらず、ごまかすように笑いながら言う。正直、そんなことがあったのか、ほとんど記憶に残っていなかった。

だが、その時、ローレライは急に首を傾げて、

「あれ？」

と言った。

「あれ・・・あれ・・・？ でも・・・確か・・・、そう言えば、あの時はアリアケさんが各種耐性のある武器や防具を持ってきていたんですよ」

「!？」

俺はその言葉に目を剥く。

「あと、それに・・・、あの時色々なケースについて、アリアケさんが説明していましたね。現場に到着してから色々な可能性をブリーフィングされていました。その時、皆さんは、うるさそうなお顔をされていました・・・。あれ？ あれ？ あれれれれれ？」

ローレライは混乱したとばかりに首を傾げる。



「そのアリアケさんが、今はいない・・・」

ハツとして、大きな目をまん丸にした。

そして、ポンと手を打ち、

「も、もしかしてアリアケさんがいないから、勇者様たちは冒険が下手くそになっているのですか？」

などと言ったのである。

それはただ純粹な疑問とばかりに、そう言ったのであった。

その言葉に、俺たちはピシリとその場に凍り付いたのである。

35・一方その頃、勇者ピリアたちは　　（勇者たちは戦術を立てようとすゝ）（後書き）

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

36・一方その頃、勇者ビビアたちは　　（勇者は怒りに身を焦  
がす）

36・一方その頃、勇者ビビアたちは　　（勇者は怒りに身を焦が  
す）

「も、もしかしてアリアケさんがいないから、勇者様たちは冒険が  
下手くそになっているのですか？」

ぷちん……。

ローレライの言葉に、俺は頭の中で何かのはじけるような音を聞い  
た気がした。

「う、うがあああああああああああああああああああああああ  
あああああ……！！！！！！」

頭が真っ白になり、知らぬ間に雄たけびのような声が俺の口から轟  
いていた。

「ゆ、勇者様　　」

「い、いきなりどうしたんだ　　」

「び、びっくするじゃんっ……！！」





様な下級魔法使い、俺たち幼馴染パーティーでなければ誰も絶対に使ってやらんぞ！」

「クソも間抜けもあんたらのことじゃん！ 仲間を囮にして逃げたゴミどもじゃん！ 女を置いて逃げたクズ男どもがどの面下げて言ってるのよ！」

「む、昔の話を何度も蒸し返すな！ 本当にお前は昔からねちっこくてっ……！」

だが、その時である。

「っ、つきあつてられるか！ こんなクソパーティー！ 俺は帰らせてもらっぞー！」

突然の音が響き、脱兎のごとく男が背を向けて駆け出した。

「……なっ　　バ、バシユータ！？」「」

仲間たち全員の驚きの音が響く。

「ポ、ポーターに逃げられたなんて知られた、最低パーティーの汚名の上塗りよ」

「またあらぬ噂を立てられてしまっぞ」

「と、取り押さえないとじゃん」

だが、その時、更に焦った声で少女……ローレライが警鐘を発した。

「そ、それどころじゃありませんよ！　ワイバーンが動き出しました！　勇者さんはじめ、皆さんが絶叫しまくって、うるさかったからですよ」

悲鳴のような叫びをあげる。

「み、皆さん、早く戦闘準備をつ……！」

そう言って全員に警戒を促すが……。

「……う、動きの速いデリアはバシユータを追え！」

「は？」

ローレライの啞然とした声が響く。

「わ、分かったわ！　殺したらいいのね」

「馬鹿！　殺したらまた人殺しパーティーなどと陰口をたたかれる！　やむを得ん！　生け捕りにするんだ！」

「分かったわ……！」

「え、ええええええええええええええええええええええ　ボ、ボスの前で戦力を分散なんて　何を考えているんですかああああああああああああああ　」

ローレライは大森林に入って初めての絶叫を上げる。それは余りにも信じられない光景を見たことによる心からのもののように思えた。







36. 一方その頃、勇者ピリアたちは  
（後書き）  
（勇者は怒りに身を焦

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

37・一方その頃、勇者ビビアたちは  
（前書き）  
（勇者は犯罪者を憎む

次回からはまたアリアケ回に移ります。

37・一方その頃、勇者ビビアたちは　　（勇者は犯罪者を憎む）

37・一方その頃、勇者ビビアたちは　　（勇者は犯罪者を憎む）

ファイナル・ソードによってボロボロになった俺たち全員は、駆けつけた憲兵たちによって取り押さえられラクスマーの街へと連行された。

連行されるや否や『牢屋』へと連行される。

ガシャーン！

という鉄格子の閉まるけたたましい音が響いた。

鉄格子の向こうでは担当の看守が侮蔑の表情で冷やかな視線を俺たちへと向けていた。

「くそ！ 出せ！ 俺は勇者なんだぞ　　どうして、こんなところに捕らわれなくちゃならないんだ！　冤罪だ！　許されることじゃないぞ！　うお！　うおおおおお！！」

俺は余りに不当な扱いに鉄格子をガンガンと叩きまくる。

ファイナル・ソードでワイバーンを倒し、街を救った英雄に対する

扱いでは絶対ないと抗議したのだ。

「そうよ、そうよ！ どうして牢屋になんて入らないといけないのよ 街を救うために私たちは出来る限りのことをしたのに」

「その通りだ！ ワイバーンの脅威から未然に防いだのだぞ！ 迎えるべきは牢屋ではなく、感謝の宴うたげではないのか さっさとここから出せ！」

「そうだよ！ アタシたち勇敢に、必死にワイバーンと戦ったのにさ！」

デリア、エルガー、プララも抗議の声を上げた。

しかし、看守は眉根を寄せると、

「何を言っている。この呆れた犯罪者どもめが」

そう冷徹に言ったのである。

「は？」

俺はその言葉に啞然とする。

「ゆ、勇者の俺が、は、犯罪者だどっ……！？ お前、言っていないことと悪いことがあるぞ！ この勇者をつかまえて犯罪者だなんて！」

「私は勇者パーティーの一員なのよ 超エリートなのよ！」

「うむ！ この世界の盾たる俺をつかまえて犯罪者だと  
許されることではないぞ！」

「少なくともアタシは無実だし！！！」

看守のあり得ない罵倒の言葉に、俺たちは猛然と反論する。

だが、

「町の重要な資源を消滅させておいて何を言っている！ この勇者  
とは名ばかりの犯罪者パーティーが！ 聞いているぞ、呪いの洞窟  
でクエストを失敗したらしいじゃないか。その時は仲間を放ってお  
いて逃げたらしいな！ そして今回は重要な冒険者たちの狩場を破  
壊した。街のインフラの破壊だぞ！ 殺人未遂にインフラ破壊！  
そんな奴らが犯罪者以外の何だと言うんだ！ この犯罪勇者パーテ  
ィーが！」

看守が改めて怒声を上げて俺たちを罵倒した。

はあ、と看守は自分を落ち着かすように首を横に振ると、

「これだけの犯罪だ。すぐに刑が確定するだろう。ま、二度と檻か  
ら出られないかもしれんが、犯罪を犯した者として、しっかりと更  
生することだ」

「くそっ！ ちくしょう・・・何てことだ。ちくしょう・・・」

俺は悔しくて歯ぎしりする。

と、その時である。

「看守さん？ 看守さん？」

ローレライが穏やかな声で看守に呼びかけた。

「何かね？」

看守が反応した。

きつと、ローレライも俺を擁護しようとしてくれるんだろう。

「・・・看守さん。私は、皆さんを止めました」

「・・・は？」

俺はローレライが突然何を言ったのか理解できず、思わず変な声を上げてしまう。

だが、ローレライは気にせず言葉をつづけた。

「今回の一件は、勇者様が暴走したことが原因です。しかも、私はわが身を省みずかえりに止めようとしてました。被害がこの程度で済んでいるのは、私の少なからぬ犠牲があったからだと思います」

「こ、この子、自分だけ助かろうとしてるわよ」

デリアが叫び声をあげるが、ローレライは表情すら変えない。

看守はローレライの言葉に首を傾げた。

「確かに君の名前は、聞いていた勇者パーティーのメンバーには入っていない。だが、冒険者ギルドで勇者パーティーに入ったとの情報があるのだが？」

そう厳しく言ってから、

「君は彼ら勇者パーティーの仲間ではないのかね？」

そう鋭く質問したのである。

「あ、はい、全然仲間ではありません」

あっさりと即答したのである。

「え、あ、そ、そうなのか・・・？」

余りにもためらいのない回答に、少し引きながら看守は言った。

一方の俺は余りのことに怒りに打ち震える。

「は、恥を知れ　ローレライ！　仲間を売るなんて！　そんなのは最低の奴がやることだ！　なあ、お前ら！！」

そう叫んだのである。



すると、デリアも頷きながら口を開く。

「・・・あの、私も勇者を止めようと思いました」

「えっ？」

言われた意味が分からず、俺はまた変な声を上げてしまう。

「止めきれなかったことの責任は感じておりますが、勇者様の力は私たちに比べて飛びぬけております。被害を縮小化させるだけで精一杯だったことをご理解ください。そして・・・」

少し咳払いしてから、

「私より強い勇者様を止めるために、自分の身を削ってポロポロになった私は、ある意味、『被害者』であることをご理解ください」

「お、おま・・・お前・・・」

余りのことに言葉が出ない。

すると、エルガーも口を開く。

「ええ、デリアの言う通りです。俺も全力で止めようとしたんですが。そう、バシユータ殿と一緒に。そうだったな？ バシユータ殿」

バシユータは一瞬考えるそぶりをしてから、

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい。そうです」

は？ 俺は更に混乱する。

「このように中立である雇ったポーターの証言もあります。けっして犯罪行為に加担したわけではありません。むしろ、俺たちは暴走する勇者を止めようとした。つまり犯罪者側では決してないのです。このことは調書に明記頂けますか？」

プララも遅れまいとでもいうかのように早口で、

「あたしも一緒です。一度ダンジョンに置き去りにされたにも関わらず、今回暴走する勇者を助けようと尽力したんです。自分で言うのもなんですが人道的な行動ですし、情状酌量の余地があるのは明白だと思います！」

看守は俺の方を憐れむような視線で見下ろしながら、

「……つまり犯罪を犯したのは『加害者』のこの勇者だけであり、他のメンバーはむしろそれを防ごうとした『被害者』ということか？」

「『……』その通りです！」「『……』」

俺以外のメンバー全員が声をそろえて断言した。

「こ、この裏切者たちがあああああああああああああ」

俺は血涙を流しながら絶叫する。

信頼する仲間たち全員に裏切られたのだから当然だった。

しかし、裏切った仲間たちはどこか憐れむような表情をしている。

「大丈夫よ勇者。落ち着いて。また会いに来るわ。だからしっかり罪を償って」

「ああ、そうだぞ。俺たちは幼馴染じゃないか。決して裏切らない」

「あたしも、色々あったけど、溺れる犬を叩こうとは思わないよ。勇者は今回の件の反省してちゃんと更生するんだよ？ 応援してるから」

「お元気で、勇者様。一緒に旅ができたこと（ある意味）忘れません」

「さようなら勇者さん」

パーティーメンバー全員が言った。

「う、うがあああああああああああああ！ お前らあああああああああああああ」

俺は絶叫する。

俺だけを犯罪者に仕立てるために、一瞬で口裏をあわせた邪悪なこいつらに、ありったけの憎しみの声を上げた。

その声はこの牢屋の並ぶ地下施設に大きく響き木霊する。

と、その時であった。

「まったく、何を騒いでおるのか」

その声はどこかよく響く抑揚を持つ男のものであった。

「ああ　あなた様は」

看守が背筋を伸ばし、気をつけの姿勢になる。

その男が鉄格子の向こうに現れた時、俺は思わず目を丸くしてしまった。

「あ、あなたは・・・なんでここに」

その男はゆっくりと頷いた。

「ふむ、ちょっと近くに用事があったものでね」

そう言いながら、その男は次の瞬間には看守に鍵を開けるように命じる。

看守は命じられるままに、あっさりと俺たちを解放したのである。

その男の名は『ワルダーク』。

このグランハイム王国の宰相である。

初対面だが顔くらいは知っている。

「実は君と少し話がしたくてね」

「俺と・・・？」

いきなりなんだ？

だが、とにかくこうして俺たちは突然現れたこのワルダーク宰相によつて牢屋から解放されたのである。

そして、俺たち勇者パーティー全員へ、王城への出頭命令が下つたのだ。

37・一方その頃、勇者ピリアたちは　　（勇者は犯罪者を憎む）  
（後書き）

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 38・オルデンの街の貴族(前書き)

全体的にかなり直しました。申しわけないのですがお時間が許すよ  
うでしたら、もう一度お読みください。(9/3)

### 38・オルデンの街の貴族

#### 38・オルデンの街の貴族

エルフ族を滅亡の危機から救った俺たちは、名残惜しそうにするエルフたちと別れ、オルデンの街に到着していた。

「ファンクラブを作ります！」

などと、エルフの姫であるセラは言っていた。もちろん冗談だろう。今はとりあえず、コレットと一緒にぐるりと街を見て回ろつとしているところだった。

パツと見たところ綺麗な街だ。ゴミ一つ落ちていないし、身なりも整った者しかない。

「今までの場所と違って、ずいぶん綺麗な街じゃな。なんだかちょっと落ち着かんわい」

「同感だな。少し綺麗すぎる」

「綺麗すぎる？ 旦那様、綺麗ではいかんのか？」



「ダメな訳ではないさ。ただ、ならば汚いものはどこに行ったと思  
う?。」

「汚いものの行方とな?」

「???を頭の上に浮かべるコレット。」

「ここを治めているのはグロス家という伯爵貴族だったはずだが・  
・。おっと噂をすれば、か」

目抜き通りをしばらく行つたところに目立つ舞台が設置されていた。  
その壇上には一人の金髪を長く伸ばした、いかにも貴族然とした恰  
好の青年が熱弁をふるっているところであつた。

「選ばれし諸君! 日頃からこの街の発展に貢献してくれること、  
このハインリツヒ、誠に嬉しく思う。ここに礼を言おう」

輝く碧眼を集まつた聴衆に向けながら、口元には微笑を張りついで  
いる。その姿は堂々としたものだ。だが、どこかその目は常に人を  
さげすんでいるかのような、人を見下ろすかのような目であつた。

「きゃー! ハインリツヒ様 かつこいい」

「本当に美しく非の打ちどころのない御方ですわ!」

「まさに貴族の中の貴族って感じだわ」

女性たちの黄色い声援が飛んでいた。

若い女性たちに人気があるようだが・・・、

「ところでコレットはああいう男性はどう思うものなんだ？」

何となく聞いてみた。

「は？ 何がじゃ？」

だが、コレットはポカンとした表情を浮かべる。

「いや、何がというか。あの男だ。なかなか貴公子然としているだろう？ カッコいいとかは思わないのか？」

「あの小童か？ 思わんが？ いや、待つがよい。そうじゃな、うむ。わしの炎で焼いてやると、他の者より油がのっついていてこんがりいきそうじゃなあ、とは思ったぞ！」

「なんでも焼け具合で判断するのはやめんかい」

俺は苦笑する。コレットにとってはただの小僧扱いらしい。

「・・・そ、それにじゃな」

「ん？」

どこかモジモジとした様子でコレットがぼそぼそ言う。

「旦那様を見てたら、他の男など目に入れる必要などないのじゃよ・・・」

「ふむ……。えーっと、どういう意味だ？」

俺は首を傾げた。

「ええ……、今ので伝わらんとか、ないわー」

コレットが何かに驚愕しているようだが、よく分からない。

そんな間にも、貴族ハイリツヒの大仰な演説は最高潮を迎えていた。

コレットとおしゃべりしてしまったため、あまり聞いていなかったが、確か、

『貧乏な者たち……特に獣人などに多い非納税者の取り締まり強化』

『またそう言った者たちは力の強い者たちが多く、犯罪者になりやすく脅威となるため、中心的に取り締まる』

『スラム街を一掃する』

といったところか。そして、それによって得た財源で街の生活を一層潤わせる、といった内容である。

一見、治安をよくするなど、もっともなことを言っているように聞こえるが……。

「旦那様、今の内容って」

「ああ、どれも弱い者・・・特に獣人たちを排除する政策ばかりだな」

俺は嘆息する。

ここに集まっている住人たちは比較的富裕層なのだろう。だからこそ、ハインリッヒの言葉を歓迎する。

だが、犯罪をおかす理由や、貧乏になる理由は、なにも個人によるものばかりではない。ハインリッヒの政策では、そういった者たちの人権を一切認めずに排除しようというものだ。彼らがこの街でどういった扱いをされているのか、察しがついた様な気がした。

「では、いつものように陳情ちんじやうの時間としたい。各区の代表者は順番に、この私に陳情内容を述べるがよい。ふっ」

どうやら、この場で街の住人たちの意見を聞く流れらしい。

一人の男が手を挙げた。

「はい、セグスタ区の者です。最近盗難が増えており困っております。何とかご対応をお願いしたいと思います」

すると、その言葉に傍にいた兵士が、

「そんなことは区の中で解決すべきだろう！ ハインリッヒ様に訴えるべき事柄ではないぞ！ 無礼者が！」

と怒声を上げる。

しかし、

「やめよ！ 領民の安寧こそが我が望みである！ それが例え窃盗程度のことであっても、困りごとに大小などない！」

「はっ・・・はは！ 失礼いたしました。ハインリツヒ様のご寛大な御心を拝察することもなく出過ぎたことを致しました！」

「よい。そなたの我を貴ぶ<sup>たつと</sup>気持ちもよく理解しておる。今後忠節に励むように」

「ははー」

部下を説き伏せた姿に、聴衆からは感動したかのように、自然と感嘆や拍手が漏れた。

「分かりやすい演技だなあ」

一方の俺は呆れていた。今の演技も恐らく単に住人たちの称賛を浴びる、という以上の効果はない。自尊心を満たすためのだけの行為なのだ。

そんな呆れる俺とは別に、壇上のハインリツヒは盗難対策を語り始めた。

「盗難が増加している原因は明らかだ。獣人たちがのさばっているために、あなたたちの生活が脅かされている。汚らわしく、金もな

い彼らを徹底的に排除し、美しく犯罪の無い、皆にとって住みよい街をつくる。今後より一層、獣人廃絶の施策を推進していきたいと思っ！」

その言葉にも聴衆たちの声援が飛んだ。

「そつだ！ 俺たちの暮らしが良くならないのは獣人どものせいだ」

「追い出せ！ 奴らに俺たちの暮らしを壊させるな！」

「汚らわしい獣人たちめ！」

住人たちの反応に、ハインリツヒは微かに笑った。

一方、隣のコレットが首を傾げる。

「旦那様、獣人が原因と言っておるのじゃ？ 本当なのかのう？」

「いや、全然違つさ」

俺は即答する。

「なぜなら、この町の獣人の人口比はそれほど多くない。その獣人たちの盗難など微々たるものだろう。あれは単に、獣人たちに偏見を持っているだけの差別主義者だな」

「なるほどのう。さすが旦那様なのじゃ。全てお見通しなのじゃなあ。やはり旦那様が政をすればよいのと思つぞ」

「それはそうだろうが・・・」

俺は頷く。無論、俺がやれば解決することはたやすい。だが、

「彼らのような只の一般人たちが、自分たちで壁を乗り越え、成長して欲しいのさ。神が手伝えれば人は進歩しないのは分かるだろう？」

「確かに。貴族どもが旦那様の期待に応えられるのかどうか、ということがあるか」

「歯がゆいものだな」

俺は思わず苦笑した。

持つ者であるがゆえに、持たざる者たちと一緒にレベルで悩んでやる事ができないのだ。

そんな風に、俺とコレットが言葉を交わしているうちに、次の陳情へと進む。

「次の者！」

「はい。私はこの街のギルドマスターです。実はまた 冒険者キラーが出現しました。もう今月になり10人の冒険者がやられています！ なにとぞ、この賊の討伐をお願いします！」

「冒険者キラーか」

ハインリッヒは頷くと、

「これに関しては皆に謝らなければならないだろう。冒険者キラーが、この街が管轄するダンジョン 煉獄神殿 に出没するようになつてから1年。私が直々に討伐へと赴いてはいるが、いまだその尻尾すらつかめていない。・・・だが、約束しよう。必ず賊は捕まえると！ 冒険者の中の不屈き者を必ずあぶり出し、首を刎ねると！」

「さすがハインリツヒ様だ！」

「お願いします！ ハインリツヒ様！」

「私たちの街をお救いください！！！」

その威勢の良い言葉に、大衆は更に熱狂する。

だが、その中で唯一俺は首を傾げていた。

「今のやり取り、少し妙だな」

「ほへ？ そうじゃったか？」

コレットもさすがに気づかなかつたらしい。

「コレットもゲシュペント・ドラゴンの末娘なら学ぶのもいいかもしれんな。いいか、コレット。人間というのは多弁な者ほど、何かを隠しているんだ。特に彼のように差別や偏見で思考がこりかたまってしまった様な者にはな」

コレットは目を尊敬の色に輝かせながら、

「旦那様はすごいのじゃ。あ奴の言葉のどこが変じゃったのか教え



ておくれ！」

「宿に戻ったらな。それまでは考えてみることだ。宿題だな」

「むむむ！ 頑張って解くのじゃ！ じゃ、じゃが気になるのじゃ  
〜！」

そんな風にコレットが頭を悩ませていた時だ。

それは偶然か。

俺の視線とハインリツヒの視線がぶつかったのである。

いや、演説者は案外、観客をよく見ているものだ。特にハインリツヒのように人の目を気にする、自尊心の塊のような男は。

ゆえに、この大勢の大眾たちの中で、唯一熱狂せず落ち着き払った俺たちは、目立ってしまったのかもしれない。

これは、ある意味俺の取って盲点であった。

冷静であるからこそ目立ってしまうのだから。

そう言う意味で、このハインリツヒという男にも、反面教師的とはいえ、値打ちがあったということだろう。

「おお、おお！ 貴様は、えーっ……。確かアリアケニミハマだな！ あの勇者パーティーを追放になったという！」

ハインリツヒは突然、周りに聞こえるように大声で言ったのだった。

「ああ、あの！」

「勇者パーティーをクビになった無能者か！」

「わははは！」

一般人たちの笑い声が響いた。

「おいおい皆やめないか。ふっ、彼なりに一生懸命やったのだろう」

嘲笑のように唇を歪めながら言う。どうやら、俺を嗤いものにすることで、自分を大きく見せたいということらしい。

そして、急に頷き、やはりその唇をゆがめるように笑つと、

「くくく、せっかく勇者パーティーの元メンバーがいらっしやっただの。少し時間があるゆえ、私がじきじきにこの素晴らしき街を案内して差し上げようではないか！」

そう言つて髪の毛をかき上げたのである。

「おお、さすがハインリツヒ様だ！ 追放された無能にさえ寛大だなんて！」

その声に、ハインリツヒは満足げに笑っていた。なるほど、またしても人気取りの一環というわけか。

俺はコレットにぼやいた。

「くだらないことに巻き込まれてしまったなあ」

「わしは旦那様と二人っきりが良いぞ？ 焼いてしまってもよいか？」

「貴族の丸焼きか・・・」

さげすんだ顔で見下ろしてくるハインリッヒを見る。彼がまる焼けになるかどうか、俺の返事一つで決まるのだから、同情せずにはられない。

なので、俺は少し考えてから、

「まあ、案内してくれるというのなら、してもらおうとしよう。どうせ街を見て回るつもりだったんだ」

いかに下らない貴族であろうとも、丸焼けにするのは可哀そうだ。

それに、と俺は誰にも聞かえないほどの声でつぶやく。

「それにこの街の汚いものを、ハインリッヒ・・・お前が一体どこにやったのか、気になっていたからな」

### 38・オルデンの街の貴族（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 39・貴族に従わぬ者たち

39・貴族に従わぬ者たち

俺とコレットは貴族ハインリツヒに連れられ、街を案内されていた。この男は注目を集めるのが好きらしく、周りを屈強な兵士たちに囲ませながら街中を闊歩していた。

平伏する住民たちを見て悦に入っている。それによって自分の権力や名声を確認しているのだろう。

「ふっ、どうですか。我が街の素晴らしさは。美しさに目が覚めるような気持ちでしょう」

「確かに美しいが、それほど単純ではないだろう。貧しい者たちや病める者たちはどうしているんだ？」

「はあ？」

ハインリツヒは馬鹿にしたように肩眉を上げる。

「そんなカスどもなどどんどん駆除してしまえばいいのですよ。なあに、領民など掃いて捨てるほどいるのです」

「それに領民は納得しているのか？」

「ええ、もちろんですよ」

にやりと笑うと、

「貴族である私の意向こそが法律なのですから。それに従えない者は領民ではありません」

当然のように言った。

と、その時、路地裏からフラフラと薄汚れた男が俺たちの前を横切ろうとした。結構な距離があり、決して道を塞ぐようなものではなかったが、目ざとく見つけた兵士たちが怒声を上げる。

「無礼者め！」

「ひつとらえて牢に放り込むぞ！」

「ひ、ひい　お、お助けを！　知らなかったのです！　まさか貴族様がお忍びでいらっしやるなどと・・・」

浮浪者の男は狼狽し、釈明する。

だが、ハインリッヒはゴミを見るような目をしたかと思うと、

「汚らわしい。誰が口をきいて良いと言った？　それだけでも万死に値する。構わん、この場で切り捨てよ」

「ははっ！」

そう言って兵士たちがその浮浪者へ迫ろうとする。

しかし、

「ひ、ひいいい」

「あつ、待て！ くそ、何と言う逃げ足の速い・・・」

先ほどまでフラフラとした足取りだった男が、なぜかいきなりすさまじい速度で退散したのである。とても追いつけるような速さではない。

これにはハインリツヒが驚いた表情を浮かべるが、

「ふ、ふん。ゴキブリは逃げ足だけは早い。だから害虫は嫌なんだ」

そう不満そうに言うと先を進み始めた。

「やれやれ」

もちろん、男の速度が上がったのは、俺が機転を利かせてコッソリとスキル 素早さ向上 を使ったからである。

「ところで」

そう言って、ハインリツヒはこちらへと振り向いた。

その視線はコレットに向かっている。

「お嬢さんは大変美しい方ですな。どうですか、このような勇者パーティーを追放になった男などよりも、この大貴族にして将来は公爵すらも夢でない、このハインリツヒィグロスの元にいらっしやうては？ もちろん、何不自由はさせぬし、大貴族に囲われればこれほど名誉なことはない。あなたにとってメリットしかない話だと思いませんか？」

貴族である自分の申し出が断られるはずはない、という感じで言った。

だが、

「冗談は顔だけにしておくがよい」

「・・・は？」

ハインリツヒは何を言われたか分からない様で、間抜けな声を上げることしか出来ない。

「そなたの稚拙な言葉、思考、行為。どれを比べて旦那様より優れているのか、わしには一向に分からぬ。為政者としても三流。お主に何一つ、わしは魅力を見出しておらぬ。せいぜい、その見当はずれな自尊心を一生涯かけて大事に守るがよからう。それに、わしにはとても貴族などと言う不自由で面倒な罰のごとき仕事は出来ぬよ。そんな仕事はお前がやっておくがよい。それがお主に出来るワシへの奉仕といった所じゃな」

その言葉に、ハインリツヒの顔が引きつらせ、ぎりぎりど歯噛みしながら、



「こ、こんな男のどろがいいと言っただ！」

しかし、コレットは嘆息すると、

「それが分からぬようでは、勇者パーティーの奴らと一緒にじゃなあ」  
鼻で嗤うように言い返した。

だが、ハインリッヒは少し黙り込むと突然笑いだし、

「ふ・・・ふはははははは！ どうやら。どうやら私の権力の大きさがまだまだ伝わっていなかったようですね！」

そう言って、

「ちょうどいい。これからちょうど罪を犯した獣人の罰が公開で行われる予定だったのです。いかに私の力が大きいか見てもらいましょうか！」

俺たちを街の広場の方へと案内し始めたのである。

そこには人だかりができていて、鎖につながれた獣人の兄妹がいた。すでに相当痛めつけられた様子が見える。

周りを囲んでいる数十名の兵士たちの手には、石が握られていた。

「くつくつくつく！」

ハインリツヒが醜悪な表情で嗤った。

「あの獣人どもは私の政策に異議を唱えた冒険者の兄妹です。汚らわしい獣人が貴族を批判するなど許されません。ゆえに私の指示で全員がこれから石打ちの刑を執り行います。この街で私に逆えばどうなるか、思い知らせてやりましょう」

そう言うと、手を振り上げ、

「やれ！ お前たち！ 手加減は無用だ！」

その号令とともに、集まっていた兵士たちが石を兄妹に投げつける。  
だが、

「な、なに」

兵士たち、そしてハインリツヒから驚愕の声が漏れた。

投げられた石がまるで壁にぶつかっただかのように、身体に当たった途端、高い音をたてて跳ね返されたからである。

それはもちろん、

「回数制限無敵付、物理耐性獲得、防御力アップ、  
ダメージ軽減。やれやれ・・・」

俺がスキルを兄妹にかけたからである。

「くっ　　き、貴様、この貴族の私の邪魔をする気か！　この勇者パーティーを追放になった無能者のくせに！」

ハインリッヒが叫ぶように言う。

俺はその言葉に嘆息しながら、

「では、その無能者に邪魔される程度の力では大したことがないな。お前子飼いの部下とやらも」

「なっ……。ふ、ふん！　たまたま防げただけだろう！　それに部下たちも油断していたに違いない！　でなければ、貴様のような無能者に、我が部下たちの何十の投石が防げるはずがないんだ！」

そこまで言うと、ハインリッヒは、少し落ち着いたのか、再び馬鹿にしたような表情になる。

「貴族に逆らつてまで、汚らわしい獣人を助けるとは。本当に愚か者だな、貴様は。どうなるか覚悟しておくがいい」

だが、俺はその言葉に吹き出す。

「俺の目の前にこそ、汚らわしい獣がいるようだが？」

その言葉に、ハインリッヒは真っ赤になる！

「無礼な！　絶対に死刑にしてやる！　だが、まずはお前の鼻を明かしてやろう！　お前が助けた兄妹が無様に死ぬ様子を見せてやる

！　そら、これでどうだ！」

兵士たちの一部が俺たちを襲おうと向かってくる。そして、残りの兵士たちは獣人たちへ再び投石を行う。

「自分と獣人たち、どちらも守ることは不可能でしょう！　はーっ　はっはっは！」

哄笑が響く。

だが、

「いや、俺の助けはもう必要ない」

バキーン！

獣人たちへ投石された石が、全てその手前で撃ち落とされた。恐らく結界術だろう。

「な、なにい！？」

ハインリツヒの驚愕の音が響く。

だが、その言葉を打ち消すほどの美しい声音が響いた。

「これは一体どういうことですか、ハインリツヒ卿」

ざっ、と獣人たちの兄妹の前に一人の少女が立ちふさがった。

その少女は美しい長い金髪と碧眼を持っていた。神々しいまでの美

貌とまさに神の祝福がもたらす福音により常人には持ちえないオーラを普段からまとうている。ほとんどの回復魔法がなかば伝説と化したこの時代の中で、蘇生魔術すら使いこなす彼女はまさに伝説級の聖女と言われていた。

それゆえに、世界中にその名をとどろかす偉人的存在。

「だ、大聖女……アリシア＝ルンデブルク様……だとう!？」

そこには数週間前にわかれたはずの、勇者パーティーの要たる、大聖女アリシアが立っていたのである。

「これは一体どういふことなのかと聞いているのですよ、ハインリッヒ卿」

アリシアは淡々と言う。

それはまさに異端審問といった様子だ。

その様子に周りの兵士たちはもちろん、住人達も多数集まって来る。衆人環視の場で審問が行われているような状況になった。

「我が国教『ブリギッテ教』はあまねく種族の差別を禁じています。あなたはそれに反している。更に……」

アリシアは続ける。

「亜人排斥の政策をとっていると本部より連絡がありました。これは我が教義に反している、と。何か異論がありますか？ ハイน์リツヒ卿よ」

「ぐ、ぐぐぐ。こ、こんな場所で審問を行うべきではないでしょう。ば、場所を移しませんか？ 大聖女様」

ハイน์リツヒが焦った様子で言う。彼のような自尊心の大きな人間に、このような住民たちが見ている前で大聖女に審問を受けるなどというのは、屈辱以外の何ものでもないのだ。

「そ、それに！ 汚らわしい獣たちを幾ら殺そうがかまわないでしょう！ ここは私の領地だ！ 領民をどうしようが、貴族の権限であり、教会と言えども口出しはやめてもらおう！」

何とか調子を取り戻そうと、貴族としての権力を振りかざして抗弁しようと試みた。

だが、

「ほう。それは我がブリギッテ教会への正式な回答として受け取ってよいのですね？」

「え？」

ハイน์リツヒが何を言われているのか分からないと言った風に声を上げた。今まで貴族という傘に隠れていたから、こつやって更に強大な権力の前で振る舞うことに慣れていないのだろう。哀れなもの

だ。

「堂々と、我が教会の教義に異議を唱えたと、私が教会に報告すればどうなるか。分かっているのですか？ あなたは最悪『破門』ですよ？」

「なあっ！？ は、破門！？ この私が」

そう、大聖女の肩書は伊達ではない。

彼女はその実力により、教会内で幹部であり、教皇第3位の位置にある。

「お、おい、破門されるぞ、あのハインリッヒ様が・・・」

ざわざわと住人たちが騒ぎ出す。

異端審問を受け、破門されたなどとなれば、いかに貴族であろうとその権勢は地に落ちる。

たかだか伯爵程度では到底教会の権威に逆らうことなど出来ないのだ。

「ぐ、ぐぎぎぎぎ」

ハインリッヒは悔しそうに奥歯をギリギリとかみしめるが、自分が今どんな立場にいるか痛感したようだ。

「わ、分かった。先ほどの発言は撤回する・・・。いいえ、致しませ

そう悔しそうに言った。

「いいえ。それだけでは足りません。この獣人たち兄妹へ、ちゃんと謝罪しなさい」

「く、くううううう」

今度こそ血の涙を流しそうなほど、顔面を険しく歪めながら、

「す、すみませんでした」

そう言って謝罪する。

やれやれ、これで一応、一段落かな？

俺がそう思った時である。

「あと、そちらのアリアケさんにも謝罪なさい」

「・・・はい？」

俺は首を傾げる。

一方のハイリツヒも、

「は？ な、なぜこんな勇者パーティーを追放になったような無能にまで・・・この私が・・・」

そう言って抵抗しようとする。



だが、アリシアはなぜかその時、もう一段声のトーンを落として、

「分からないのですか？ アリアケさんが穏便な方法で、あなた方が獣人たちに投げた石を防いでいなければ、今頃あなたは破門になっていたのですよ？ それに、アリアケさんならばあなたを直接どうにかすることもできたはず。それをしなかったアリアケさんに感謝しなさい」

そう言つて、今までにないプレッシャーをハインリッヒにかけたのであった。

「こ、こやつにそんな力があるわけが……。く、くそ。とにかく、も、申しわけありませんでした」

そう言つて頭を下げる。

「これで宜しいですか？ アリアケさん？」

いつも通りのクールな表情で、彼女は俺に言った。

「あ、ああ……。まあいいさ。許してやろう、ハインリッヒ。貴族としてまだまだお前は未熟にすぎる。しっかりと学び、今日のような馬鹿な真似を繰り返さないようにしろよ」

「ぐ、ぐきぎぎぎ……。あ、ありがとございます……」

ハインリッヒはそう言つと、悔しそうな表情で足早にこの場を去って行ったのである。

やれやれ、やっと一段落か。

俺は嘆息する。

と、その時である。

「ところで、アリアケさん・・・」

アリシアが俺を呼んだ。

まあ、久しぶりの再会だ。どうしてここにいるのか分からないが、  
積る話もあるだろう。

俺は彼女へと振りむく。

すると、アリシアは微笑みながら、

「そのの、可愛いお嬢さんは、どなたですか？」

そう言ってコレットを指さしたのである。

久しぶりに見る聖女の笑顔だったが、それは普段のクールな表情より、なぜか一段と迫力があつたのだった。

### 39・貴族に従わぬ者たち（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 40・アリシア視点 & コレット視点

40・アリシア視点 & コレット視点

↳アリシア視点↳

「初めまして、というべきじゃろっな。わしはコレット＝デューブ  
ロイススじゃ」

「こちらこそ宜しくお願いします。私はアリシア＝ルンデブルクと  
申します」

私の挨拶に、コレットちゃんはどこか凛々しく、けれどもいかにも  
美少女といった様子で微笑んだ。

何という可愛さ満点のスマイル！ 私にはないものです！

「アリシア、ところでなぜ君がこんなところにいる？ 勇者パーテ  
イーはどうしたんだ？」

「脱退してきました。行く当てもないので、アリアケさんのパーテ  
イーに復帰させてもらって宜しいですか？」

「脱退か……。お前のことだから色々と事情があるんだろう。コ  
レットとびつぱりっ」

来ました！

こんな美少女を連れてしまっている以上、私なんてお邪魔虫の可能性が高いです！

くうくうくう、それにしても、さすがアリアケさんです。ちょっと目を離れたうちに、こんな美少女とパーティーを組んでるなんて。

私が先に、ずっと、何年も前から、目をつけてたのにい……。

私はコレットちゃんのお返事はどうかと、ハラハラします。

二人は一体どういう関係なのでしょう。

もう正式にお付き合いなんてしちゃってしまっているんでしょうか！？

でも怖い！

それを聞くのが怖い！

それで「そうです」なんて返事が来たら、絶叫しない自信がありません！

で、ですが、せめてその際にも。ええ、せめてせめて、傍にいさせてもらえるように交渉せねばなりません。一番じゃなくても2番でOK。

ふうふう、私は息を整えます。落ち着いてきました。

できる！

私ならできるはずですよ！

アリアケさんの実力に追いつくために、あの恐るべき地獄の修業を耐え抜いた私なら可能なはず！

そのためにはアリアケさんにアピール。自己PRをしなくてはなりません。

かと言って、私ごとき、誇れるものと言ったら・・・、

「聖女といちおう呼ばれております。一通りの上級回復魔法と、それから蘇生魔術が使えますが」

ああ、だめです！

心の中で頭を抱えて絶叫します。

ますます可愛げがありません！

肩書アピールって！ 魔法アピールって！ もっと可愛い方向性が  
必要なのに！ せめて目の前のコレットちゃんの100分の1でも  
可愛さをアピールできればっ・・・！

ああ、このままでは加入拒否されてしまいます！

「すごいんじゃない！」

えっ？

ですが、コレットさんはそんな私の可愛げのない言葉など意に介していなかったのです。

「上級回復魔法は人から失われて久しいのじやろう？ それに蘇生魔術などほとんど歴史上おらんのではないか！ わしなど戦うだけで癒すことは出来ぬからなあ！」

「ありがとうございます」

ああ・・・私は頭をガンと殴られたような衝撃に震えます。

これこそが・・・美少女の余裕なんですね。

そこにはなんの銜てらいもありません。ただただ純粋な笑顔で褒めてくれます。

アピールだ何だと考えていた自分の心の醜さに、思わずへこみます・・・。

戦う前からアリシア、完敗です・・・。

この目の前の美少女が、可愛いアピールしてきたら、私なんてすぐにサヨナラです（泣）

ですが、そんなことを考えていた私を、コレットちゃんは追い出したりすることもなく、

「勇者パーティーにも凄いメンバーがちゃんとおったのじゃなあ。うむ、ちなみにわしはドラゴン種族の末姫じゃ。これからもよろし

く頼むのじゃ、アリシア」

そう言つて笑顔で握手をしてきたのです。

す、末姫！？ しかもドラゴン種族の！？

私とは全然次元が違います！

それなのに、受け入れてくれるなんて。

ああ、何ていい子なのでしょう。

「宜しくお願いしますね、コレットちゃん」

あっ、しまった！ つい馴れ馴れしく、ちゃん、などとつけてしまいました

ですが、その言葉にコレットちゃんは嫌な顔ひとつせず、微笑んでくれたのです。

ああ、美少女つて心まで綺麗なのですな。

こうして私はコレットちゃんの優しさのおかげで、首の皮一枚、このパーティーに入るチャンスをつかんだのでした。

ありがとう、コレットちゃん。この恩は一生忘れませんよ！



くコレット視点く

いや、何じゃこの美女。

わしは目を疑ってしもつた。

時々、旦那様が勇者パーティーに一人、非常に頼りになる女子おなごがおると言っておつた。

じゃが、まあ正直、話半分に聞いておつた。

旦那様に比べれば、頼りになると言っても、知れているというものじゃと。

じゃが、目の前にして度肝を抜かれた。

まず、ともかくその美しさじゃ。

わしのようなチンチクリンにはない、大人の魅力のようなものを放つておる。

それになんじやろう。大聖女じゃから、ということなのかの？ 普通の美人じゃ無いんじやよな。何か神々しいのじゃ。ちよつとオーラが違うって言うか。たなびく金髪に宝石よりも美しい碧眼。柔和に微笑むその表情……。

わし、女なのに、クラクラするのじゃ。

そして、まどつている魔力の質が根本的に違うのじゃ。まさに神に

愛された存在と言ってよいじゃろう。

……ていうか、これ、ずるくない？

わしがどんなけ頑張って人化してもこっちはならんぞ？

わし、いちおう世界最強のドラゴンの末姫なのに、このレベルには絶対になれんぞ？

人族って時々規格外の輩が生まれるけど、まじでそれよな。

種族を超越した美しさよな、これ。

じゃ、じゃが、わしもドラゴンの末姫じゃし、余りみつともないところは見せれぬ。とにかく頑張って挨拶なのじゃ！

「初めまして、というべきじゃろうな。わしはコレット＝デューブロイシスじゃ」

「こちらこそ宜しく願います。私はアリシア＝ルンデブルクと申します」

何と丁寧に頭を下げてきた。そして女神のように微笑む。それだけでわしは又してもクラクラとした。何じゃの、このオーラ。

そもそも、かつての勇者パーティーのメンバーなのじゃから、わしよりよほどアリアケとの付き合いは長いはず。

その上、わしは見てくれは子供<sup>ガキ</sup>じゃ。街中を歩いておっても侮って来る輩も多い。

じゃから、普通もつと上から来てもおかしくないのに、このアリシア殿は違う。まじ大聖女、礼儀正しく、人を侮ったりすることをせぬ。

じゃ、じゃが、だからこそどうしよう。

わしの心に不安が生まれる。

もし、このアリシア殿が旦那様を返せと言ってきたら？

わしと旦那様がパーティーを組むことに反対してきたら？

そうだったら、果たしてわしに拒むことが出来るじゃろうか……。

と、そんなことを考えていると、旦那様がアリシア殿に聞いた。

「アリシア、ところでなぜ君がこんなところにいる？ 勇者パーティーはどうしたんだ？」

「脱退してきました。行く当てもないので、アリアケさんのパーティーに復帰させてもらって宜しいですか？」

「脱退か……。お前のことだから色々と事情があるんだろう。コレットはどう思うっ？」

来たああああああああああああああああ

まずい、マジでまずいのじゃー！

捨てられる!？

このままじゃと捨てられてしまう

いや、待て待て、落ち着くのじゃ。

まだ捨てられると決まった訳ではない！ わしが役に立つという「  
とをアピールすればよいのじゃ。

そうすればわしの立場は守られるはずじゃ！

じゃ、じゃが、どうする!？

アリシア殿は背伸びしても絶対に届かぬ超美人じゃし、わしに出来ることと言ったら火を吐く事くらいじゃ。

じゃが、ここで思わぬチャンスが到来したのじゃ。

「聖女といちおう呼ばれております。一通りの上級回復魔法と、それから蘇生魔術が使えますが」

いかにも控えめといった様子でアリシア殿が言った。

いや、まじなのか、と思わざるを得ない。

確か上級回復魔法自体が人族の中では使えぬ者が多い。そして、何より蘇生魔術って……。それ何て神話って感じじゃ……。何

だがしかし！

わしは姑息にも思いついたのじゃ。

そっち方面ならば差別化できる、と！

もちろん、せこいかもしれん！ じゃが、わしは捨てられとうない！ No2でも良いから旦那様のそばに最後までおるのじゃ！

「すごいのじゃ！ 上級回復魔法は人から失われて久しいのじゃろう？ それに蘇生魔術などほとんど歴史上おらんのではないかわしなど戦うことしか出来ぬからなあ！」

よし、さらりと戦闘方面でアピールしたのじゃ。

・・・こんな姑息な方法でしかアピールできぬ自分に泣けてくるがのう・・・。

「ありがとうございます」

またしても丁寧な礼を言われる。

うう、自分の小ささに泣けてくるのじゃ。

じゃがじゃが、ここは泣いてる場合ではない。後ろを振り返らず、このままの勢いで最後まで行くのじゃ！

「勇者パーティーにも凄いメンバーがちゃんとおったのじゃなあ。うむ、ちなみにわしはドラゴン種族の末姫じゃ。これからよろしく頼むのじゃ、アリシア」

そう言って笑顔で握手をする。

「宜しくお願いしますね、コレットちゃん」

やった！ 既成事実なのじゃ。

わしの心は歓喜に震えた。

何とか追い出されずパーティーに残れそうじゃ！

それに『コレットちゃん』と呼ばれた。

このような方にちゃん付けで呼ばれるのは気恥ずかしい……。じやが、全然嫌ではなかった。

旦那様と冒険するのも良いが、このアリシア殿と一緒に旅をするのも、とても楽しみになってきたのじゃった。

ともかく、こうしてわしは大聖女アリシア殿の優しさのおかげで、なんとか首の皮一枚、このパーティーに残ることが出来たのじゃった。

ありがとう、アリシア殿。この恩は一生忘れぬぞ……！

#### 40・アリシア視点 & コレット視点（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 41・獣人の感謝 & ハイブリット視点

### 41・獣人の感謝 & ハイブリット視点

俺はアリシアと思わぬ再会を果たした。アリシアはどういった理由か勇者パーティーを脱退し、俺のパーティーへの加入を求めて来た。俺としては異存はない。追放したのは勇者だし、今から思えばアリシアは特に俺を追いだそうとしていたわけではなかったように思う。

脱退した理由も後から聞けばいいことだ。

一点、心配していたコレットとの関係であつたが・・・、

「初めまして、というべきじゃろうな。わしはコレット＝デューブロイシスじゃ」

「こちらこそ宜しく願います。私はアリシア＝ルンデブルクと申します」

二人は俺の心配などよそに、つつがなく挨拶をすると、

「聖女といちおう呼ばれております。一通りの上級回復魔法と、それから蘇生魔法が使えますが」

「すごいのじゃ！ 上級回復魔法は人から失われて久しいのじゃろ



う？ それに蘇生魔術などほとんど歴史上おらんのではないか！  
わしなど戦うだけで癒すことは出来ぬからなあ！」

「ありがとうございます」

「勇者パーティーにも凄いメンバーがちゃんとおったのじゃなあ。  
うむ、ちなみにわしはドラゴン種族の末姫じゃ。これからもよろしく頼むのじゃ、アリシア」

「宜しくお願いしますね、コレットちゃん」

二人ともとても落ち着いた調子でやりとりをすると、余裕させ感じさせる様子で握手をし、互いに微笑みあっていた。

(どうやら、まったく心配するようなことはなかったようだ。まあ当たり前か)

二人ともある意味、大人なのだ。

心の余裕が態度に現れているのだなあと、俺は感心したのである。

と、そんなやりとりをしていた時である。

「大賢者アリアケ様！」

10代半ば程度に見える獣人の子供2人が、俺の傍まで来てガバつと頭を下げたのである。それはハイリツヒにつかまり殺されかけていたところを助けた獣人の兄妹であった。

「アリアケ様は僕たちの命の恩人です。本当にありがとうございます」

した！ あ、申し遅れました。僕の名前はハス。こっちは妹のアンです」

アンと紹介された少女も深く頭を下げ、

「こ、このたびは助けて頂いて本当にありがとうございました。大賢者様！ 大賢者様がいなければ、私たちはあの貴族に石で殺されてしまっていました！」

だが、俺は当然だが首を横に振る。

「助けたのはこっちの大聖女だ。俺は何もしていない、礼を言うなら聖女へ言つと良い」

しかし、二人は同じように首を振ると、

「もちろん、大聖女様にも感謝しています。ですが、一番最初の投石から僕たちを助けて下さったのは大賢者アリアケ様ですよね！」

「いや、まあ、それはそうだが……。防いだけで直接助けたわけでもないし、大したことでは……」

そう言つて否定しようとする。

だが、なぜかアリアシアが口を挟んで来た。

「いいえ、咄嗟にあれだけのスキルを駆使して、数十人からの投石を防がれたアリアケさんは凄いです。それに、スキルだけではなく、その心根こころねは誰にも真似まねできないものでしょう。あくまで、私は2回目を防いだけですからね。さすがと言えます」

「その通りじゃ」

と、なぜかコレットまでも深く頷く。

「間違いなく旦那様は貴族からこやつらの命を救ってやったのじゃ。そんな偉業をポンポンとできる者がこの世界のどこにいようか。まったく自己評価の低いのが玉に瑕きずじゃなあ」

二人の言葉に、アンが改めて頭を下げ、

「私たちを救ってくださり、本当に、本当にありがとうございます。大賢者様。この御恩は一生忘れません」

そう言って涙ぐみながら感謝の言葉を口にするのであった。

ううむ、と俺は困ってしまふ。

本当に俺のしたことなど大したことないのだがなあ。けれど、余り拒否しすぎるのも申し訳なくなってきた。

なので、

「まあ、その感謝は半分受け取ろう。もう半分はやはりこのアリシアのものだ」

と言ったのであった。

「「あつ……。もう、また……」」

アリシアとコレットがそろって嘆息すると、

「さすが大賢者様です。本当にご謙遜でいらっしやるんですね」

獣人たちの兄妹もなぜか苦笑しつつ、尊敬の目で俺を見てそう言うのであった。

やれやれ、と俺も釣られて苦笑してしまう。

「ま、それはともかく、だ」

俺は話を変えるように、別の話題を切り出した。

「ハスとアン。お前たちはこれからどうするつもりなんだ？」

気になっていたことを問う。

「え、はい。また元の冒険者として暮らすつもりです。というか、それくらいしか、腕つぶししかない僕たち獣人には出来ませんから。・  
・ただ、僕たちのことをハインリツヒがまた捕まえようとしてくるかもしれないので、そこが不安なんです」

確かに。

いつまた捕まるかもしれないという状況では、おちおち外も歩けないだろう。

「ああ、それでしたらご安心ください」

だが、アリシアが人を安心させるような笑みを浮かべながら言った。

「先ほどの審問で獣人への差別政策への追及が終わったわけではありません。更に今後もそういった政策をとることがないように、教会の名において監視します」

「ほ、本当ですかっ！」

「もちろんです。というかですね・・・」

アリシアが頬をかきながら、

「前領主たるハインリツヒ卿の御父上が急死され、彼が領主の地位を継いでから、急に獣人差別政策を始めたのです。そのため、教会の対応が遅れてしまったのですよ」

「そうだったんですね。なら今後はもう・・・」

「はい、安心頂いて大丈夫ですよ」

そう言ってもう一度微笑む。

「良かったです！　なあ、アン」

「うん、お兄ちゃん！　また冒険者を続けられるね！」

兄妹も微笑みあって喜んだ。

ふむ、どうやらアリシアたち教会が監視している以上、政策面である愚かな貴族が、同じような愚策を取ることはできないだろう。

だが、俺はあの男が去り際に見せた、瞳の奥にともる漆黒とも言える闇を思い出していたのである。

だから俺は、

「ハス、アン。少し話があるんだが」

彼ら兄妹に相談を持ち掛けたのである。

〈ハインリツヒ視点〉

「くそ、くそ、くそくそくそくそくそくそくつそおおおおおお  
おおおおおおおおあああああああああああ！！！」

私は自室に戻って頭を掻きむしりながら絶叫する。

ガンガンと机に頭を打ち付けた。

花瓶をなぎ倒す。ガチャンという激しい音と共に碎け散る。

窓の外にいた猫か何かが物音に驚いて逃げ出す音がした。

それでも全く悔しさは晴れない。

「アリアケアリアケアリアケアリアケアリアケアリアケアリアケニハマアアアア

「アアアアアアアア」

私は諸悪の根源の名前を連呼する。

何度罵<sup>ののし</sup>つても足りない、忌むべき名前を連呼する。

「あんなのは！」

私は天を仰ぐ。

「あんなのはただの偶然ではないか！」

部下たち数十人の投石を無力化してみせた。だが、そんなのは大したことでは絶対でない。私にだってできる程度のことなのだ。

「次に出会い、そして戦えば、貴族であり剣の達人である私が絶対に勝つ！ 私の方が何十倍も何千倍も強い！」

それなのに！

私は思わず思いだしてしまう。

あの美しい大聖女のことを。

あの女は大貴族である私ではなく、あろうことがアリアケの味方でしたのだ！

「ああああああああ、なぜだ、私の方が男として断然優れているというのに！ 権力も力も富も名声も、何もかもが優れているはずなのに！」





スラリと鞘から剣を抜いた。

その刀身からは薄っすら魔力が漏れ出ている。その魔力は私にまるで語り掛けるようだ。弱者など蹂躞し従える以上の価値などない。絶大な力を持つ私は下々の者を好きにしている権利があるのだ、と。

私は陶然としながら口を開く。

「誰がいるか！」

私の呼びかけに、そば仕えの兵士たちが入室してくる。

「はっ！ 何でしょうか。ハインリツヒ様！」

「うむ。昨日陳情のあった冒険者キラーの討伐へ向かう。そこで、いつも通りギルドから、現在 煉獄神殿 へ潜っているリストを手して来い。我々、貴族騎士団が守る対象をはっきりとさせるためにな！」

「はっ！ 承知しました」

兵はすぐに出ていくと、ほんの10分程度でリストを持って戻って来た。

ぺらぺらとめくる。潜っている人数はそれほど多くない。

「都合がいい」

思わずニヤリとする。

上から順番に目を通して行った。

「ほう……」

と、そのリストに記載された冒険者名を見て、私は思わず目を細める。思わず激しく唇を歪めてしまった。

「どうやら、運は私を見放してはいなかったようだなあ」

そのリストには、昨日私に謝罪をさせた、汚らわしい獣人たちの名前があつたのである。

#### 41・獣人の感謝 & ハイソリツヒ視点(後書き)

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 42・ハインリツヒ伯爵の野望は潰えり

42・ハインリツヒ伯爵の野望は潰えたり

〈ハインリツヒ視点〉

「ぎゃあああああああああああああああああああああ」

汚らわしい獣人の男が血まみれになって倒れた。

「くははははははははははは！　ゴミめ！　雑魚め！　ああ、やはり私は最強だ！」

私は喜悦に唇を歪める。

うつとりと、血にまみれた剣に視線を注ぐ。

剣は漆黑。血を吸うたびにぼんやりと闇夜のごとき光を放ち、更に切れ味を増していく。殺せば殺すほど強くなる。そうすればもっと殺したくなる。あの方に頂いたこの魔剣のおかげで、私はいつか最強的存在になるのだあ！

「おおっと、いけない。いけない」

ふう、と一度深く呼吸をする。

(メインディッシュはこの後なのだ)

粗相が過ぎたと額の髪をはらう。

ついつい本当は殺す予定になかった獣人の冒険者を、あの屈辱を与えた獣人兄妹を殺せるかと思い、高ぶりにかまけて衝動的に殺してしまった。

足元の死体を見る。

そこには中年の獣人の男が目を見開いた状態でこと切れていた。

「くふふ」

絶命の際、絶叫を上げていた。しかし、周囲を見回しても、自分以外には誰の気配もなかった。

当然だ。

なぜなら、周囲は忠実な部下たちに命じて、誰も近寄らない様にしているのだから。

でなければこの私、『冒険者キラー』の仕事に支障が出てしまう。

そうだ、私が『冒険者キラー』だ。

私が演説で”冒険者キラーの討伐に向かう”と宣言したのは、万が一にも私が冒険者キラーだとバレない様にするためのカモフラージュだった。

まさか貴族の私が冒険者キラーだとは誰も思わないだろうが、念には念をだ。くくく、まさに天才の私にしか思いつけない方法だろう。冒険者キラーをしているのは、この天才たる私が剣の腕を磨くためだ。

剣の腕を磨くには、やはり実際の殺し合いが一番だ。

捕虜や奴隷を切り殺すだけでは物足りない。

だが街中で殺しをするわけにはさすがにゆかない。

だからダンジョンで辻斬りをすることにしたのだ。

そうすれば、汚らわしい獣人や最下層の冒険者を掃除できる上に、私の剣の上達にも貢献できる。魔剣の切れ味も増す。まさに一石三鳥だ。

死んだ彼らも貴い私の役に立って死ぬことができるのだからきつと喜んでいることだろう。

私はその考えの完璧さに大いに満足する。

「さあ、本命だ」

私は思わず舌なめずりする。

部下たちの情報によれば、ここを左に曲がったつきあたりで、あの獣人の妹が休憩をしているらしい。

死角から先手を取れば気取られず殺すことが出来るだろう。

「今日はソロで潜っているのか？」

事前のリスト名には兄がいた。若干情報が食い違つが、些細なことだ。そんなことはいくらでもある。

(いた！)

私はその後ろ姿を確認する。

情報通り、こちらに背中を向けている。全く私の存在に気が付いていない。

チャンスだ！

私はこつそりと、しかし素早く死角を縫いながら近づいて行く。

そして、手を延ばせば触れられるほどの距離まで近づいた。

そうして、私は唇を歪めながら、素早く剣の柄えを握ると、

「くひい！ 死ねえ！」

これだから冒険者キラーはやめられない。しかも今回の相手は貴うき立場である私に謝罪をさせた汚らわしい獣人だ。それを始末できる喜びに喜悦が走る！

(こいつを始末したら、次は兄だ。そうだ、妹の死体を前に、あら

ん限りの拷問をしたうえで始末してやるう！)

そんな妄想を浮かべながら、思いっきり横なぎに振り抜こうとした、その瞬間である。

「僕の妹に何をするんだ！ このクソ野郎がああああああああああああああああ！」

「なあっ　ぐぎゃあああああああああああああ　」

私は理解できないほどの衝撃をいきなり顔面に受けた。

目の前に星が飛び散り、一瞬遅れてすさまじい激痛が顔じゅうに走った。

私は吹きとばされ、地面をゴロゴロと転がる。そして壁に激突してやっとなまった。

「あ、あがあああああ・・・」

歯と頬の骨が折れているのかまともに声を出すことが出来ない。体中から血が吹き出る。

私は何が起きているのかとパニックに陥りながらも、何とか顔を上げて視線を巡らせた。

何メートルも先に、いないはずの獣人の兄の姿を認める。

そのことで、そいつに私は顔面を拳で殴られ、吹き飛ばされたのだと知ったのだ。



「だ、だにが・・・どぼじて・・・」

どういふことなのか。

どうして、いないはずの兄がいて、しかも私はたった一撃でこれほどボロボロになっているのか。

理解が追いつかない。

しかし、

「アン、すごいね。本当にアリアケ様の言った通りになったよ。しかも、アリアケ様のスキルで腕力が信じられないくらい向上してる」

「はい。やはり大賢者アリアケ様のおっしゃったように、貴族ハインリツヒが冒険者キラーだったのですね。さすが大賢者様です！」

ア、アリアケえ

その名前に、私の意識は一気に覚醒する。

なぜその名前がここで出る!?

その忌まわしい名前がここで出てくる!

そして、最も聞きたくない声が私の耳朶に届いた。

「おいおい、やめないか。お前たち」

そう言いながら、物陰から数人の人間たちがぞろぞろと出てくる。その先頭には、

「たまたま、今回はうまくいっただけだ。大したことではないさ」

あの忌まわしいアリアケ＝ミハマの姿があつたのである。

その私を見下ろす表情はまるで敗者を憐れむ勝者のごとき憐憫に満ちていた。

また、またなのか！ また貴様の仕業なのか！

「アビアベ＝ビババアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

私の屈辱にまみれた絶叫がダンジョンにこだましたのである。

くアリアケ視点く

「アビアベ＝ビババアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

目の前の男、冒険者キラーがどうやら俺の名前らしきものを絶叫していた。その目には憤怒とともに、どうして俺がここにいるのか不思議でならないといった困惑の色も浮かんでいる。

俺は回想する。今回の件は昨日、俺から獣人の兄妹たちに持ち掛けた相談から始まったのだ。

「ハス、アン。少し話があるんだが」

「あ、はい。何でしょうか、アリアケ様？」

俺の言葉に兄妹は首を傾げた。

「もしかすると、明日、君たちはやはり狙われるかもしれない」

「えっ？ でも、大聖女様が教会の監視があるから大丈夫って」

「それは街中での話だ。あいつの正体はたぶん『冒険者キラー』だ。君たちをダンジョンで狙ってくる可能性が高い」

「『『『『『ええ』』』』」

全員が驚いた。

「ま、待ってください、大賢者様！ あ、あの貴族が冒険者キラーなんですか」

アンの言葉に、俺は頷く。

「いくつか根拠がある。まず、奴は今日の演説で口を滑らせた。奴はこう言った。”これに関しては皆に謝らなければならぬ。冒険者キラーが、この街が管轄するダンジョン 煉獄神殿に

出没するようになってから1年。私が直々に討伐へと赴いてはいるが、いまだその尻尾すらつかめていない。・・・だが、約束しよう。必ず賊は捕まえると！ 冒険者の中の不屈き者を必ずあぶり出し、首を刎ねると！” ってな”

「お、なるほど、そういうことですか」

コレットは首を傾げていたが、アリシアは手を打った。

「確かに”冒険者の中の不屈き者”と言っちゃってますね。盗賊ではなく、ましてや獣人ではなく、冒険者だと、はっきりと告げられます。はてさて、果たしてどうして属性を特定できたのでしょうか？ それは犯人を知っているからですね！」

「おおー、さすがアリシアなのじゃ！」

コレットが尊敬の目でアリシアを見ると、彼女は照れくさそうに微笑んだ。出会って間もないのだが、この二人は妙に仲がいい。

「あと、そもそも、アイツの差別意識からして、率先して冒険者キラー討伐に行くとは思えないんだ。人気取りだとしても、1年以上かかっているから逆効果だ。ではなぜ率先して行くこうとしていたのか？ それはアリバイ作りのためだろう。討伐隊が冒険者キラーを隠蔽するためのものとは誰も思わないからな。ま、動機までは分かんが。・・・でだ”

俺は兄妹に本題を切り出した。

「このまま放置しては、今後も沢山の死者が出るだろう。だが現場を押さえない限り罪に問うことは難しい。だからお前たちに一

肌脱いでもらいたい。だが、お願いしたのは結局のところ囹役が必要ということだな。ハインリツヒはお前たちを襲撃して来る可能性が高いからおびき寄せて欲しいんだ。もちろん、俺が各種スキルでサポートするから危険はない。・・・しかし、もちろん嫌ならば断わってくれていい。強制できるものではないからな」

「いえ。分かりました。このハスが喜んでお引き受けいたします」

「えっ？ いや、いいのか？ そんなにすぐに決めて。怖いとか・・・」

「も、もちろん怖いですが・・・」

ハスはアンの方を見る。

それにアンが頷くを見て、彼は決心するように頷いた。

「ハインリツヒには沢山の同胞が殺されたり、捕まったりしているんです。そして、こんな状況ですが、この街は僕たちの故郷なんです。ハインリツヒが冒険者キラーなら、それを倒すためのお手伝いをするのは当然です！」

「そうか」

「それに、何よりアリアケ様のお役に立てるなら本望ですから！僕たち兄妹を貴族の手から救ってくれた御恩、この犬耳の誇りにかけて裏切りはしません！」

「そ、そうか」

それほど大したことをしてやった覚えはないのだが、何やらキラキラと尊敬の目を向けられては、それを否定するのも野暮というものか。

「では、作戦を開始する。作戦名は『冒険者キラー狩り』だ。さて、作戦遂行にあたって出来ればハインリツヒの動向を監視しておきたいところだが・・・」

「あ、それなら大丈夫です。実は最近たまたま使い魔を手に入れまして、ハインリツヒについて行かせています。窓の外から猫みたいに監視中のはずです。彼が動いたら知らせしてくれるでしょう」

「そうなのか。どんな使い魔を手に入れたのか、また教えてくれ」

「え、あーうん、そうですね。大丈夫かな。これ以上ライバルが増えると困るんですよ、うーん、うーん」

よく分からないが、なぜかアリシアが悩みだした。

大聖女の立場上、様々なしがらみがあるのだろうか。

まあ、ともかく、こうして俺たちの『冒険者キラー狩り』作戦は幕を切ったのである。

そして、まんまと間抜けな冒険者キラーは罠にはまったというわけだ。

途中、兄妹以外の獣人を切り殺すというハプニングもあったが、それはアリシアがあっさり蘇生魔術で蘇生させ事なきを得ている。

また、周囲の部下たちは、アリシアの結界によって容易に入ってくることは出来ない状況だ。

「さあ、観念しろ、『冒険者キラー』……。いや、犯罪者ハインリッヒよ。現行犯だ、言い逃れは出来ん。その歪で醜悪な思想と犯罪を償うがいい」

俺は倒れ伏すボロボロのハインリッヒに向かってそう断罪したのである。

ハインリッヒは血の涙を流しそうなほど悔し気な表情を浮かべたのだった。

## 42・ハインリッヒ伯爵の野望は潰えり（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 43・魔剣暴走

### 43・魔剣暴走

「ぎ、貴族の私わだしにこんな事をじで只で済むと思っているのがあ！」

ハインリツヒが齒の抜けた口で思いつきり叫ぶ。

しかし、

「うるさい、この犯罪者が！ 大人しくしないか！！」

ハスはその頬を叩き、顔を地面につけて暴れるハインリツヒを取り押さえようとす。

「ぶべえ！？ は、犯罪者だどお！？ ご、この私があ！？ じゅ、獣人ごときがあ！ ふ、ふざげるなああああ！！」

悔しそうに目を怒らせ、怒声を上げた。

その言葉を聞いて、アリシアは淡々と首を横に振り、

「殺人罪、殺人未遂罪、死体損壊、死体遺棄、公権乱用、窃盗、脅迫、その他もろもろ。言い逃れできる状況では既にないのですよ、

犯罪者ハインリッヒ？ 前領主様も草葉の陰で泣いていらっしやる  
ことでしょう。はあ、あなたこそはまごうことなき 貴族の恥さら  
し そのものです」

そう言つて、冷めた目で見下ろした。

その言葉にハインリッヒは更に激高する。

「ぐおおおお！ この選ばれた貴族の私に向かつてええええええええ  
ええええええ」

そして、

「だ、誰かだずげに来い！ なんでだああああ どうじで誰もだ  
ずげに来ないいいいいいい あの設定たずどもめがあああ！」

周りに頼ろうと大声を出す。

こんな時にだけ周りに助け求めるハインリッヒに呆れながら、

「結界をはってある。お前は檻に入れられた犯罪者そのもの、とい  
うわけだ。そんな事すらも分からないのか？ お前はもう終わりな  
んだ。無論、今回の件が公になればお前は領主の地位からは追放。  
一族からも廃嫡必至だろう。つまり、お前はもう貴族ですらないん  
だ。ただの犯罪者でしかない」

「くそくそくそくそくそくそ！ そんな馬鹿なああああああああ  
ああああ！」

俺との戦いに惨敗し、その上貴族という地位すらも剥奪されるとい

う事実が信じられず、ハインリツヒは泣き叫ぶ。

「ふう、これ以上の問答は不要だな。さっさと犯罪者を連行する  
しよう。縄をまいて猿轡をはめて連れて行くぞ。うるさくてかなわ  
ん」

「はい。アリアケ様。ほら、大人しくしろ、元貴族の犯罪者ハイン  
リツヒ。正当防衛でここで殺されないことに感謝しろ！」

そう言ってハスがハインリツヒに縄を打とうとした。

その時である。

「ぐぐぎ、ぐぎぎぎぎぎぎぎ！ 許さん！ 許さんぞー！ お前だ  
ち全員皆殺じだあああああああああ！」

ハインリツヒが絶叫する。それと同時に、

『ブオン！』

地面に落ちていたハインリツヒの『魔剣』が独りでに浮き上がった  
のである。

「なに！？ あの魔剣はもしや！？」

俺は驚く。

「ふーはっはっはっは！ そうだ！ 魔剣の力を思い知れ 今ま  
で食った魂の数だけ、この刀の切れ味は鋭くなっている！ 魔剣よ  
来い！ そうして、こいつらを一扫してっ……」



「な、なんじゃアレは」

突然の出来事に、コレットが目を見はりながら言った。

「簡単だ。アイテムに化けて冒険者を食らい自らを強化するモンスター。そんな奴は一種類しかない。 ミミック さ」

「ミ、ミミック!? ミミックって、あの宝箱になって冒険者を待つて襲い掛かる、つまらんモンスターではないのか」

「宝箱と一概に決まっているわけじゃない。それに、命を吸わせすぎたんだろう。ミミックの最終進化形”ヘル・ミミック”に至っている。こいつはもはや、『擬態したまま自ら人間を食らいに行く化け物』だ」

アリシアが息をのみ、

「SSSクラス。災害級モンスターに違いありませんね」

「まさか最後の最後にこんな大物が現れるとはのう・・・」

コレットも頷いて生唾を飲んだ。

しかし、

「よし、全員戦闘配置につけ。ハス、アンは下がっている」

俺はいつも通りに指示を飛ばした。

「「「「え?」「」」」」

「やれやれ、なにを浮足立っている」

俺は嘆息しつつ、

「この俺がポーター<sup>バックアップ</sup>を務めるんだ。落ち着けば必ず倒せる」

「アリアケさん……。そうですね、あなたの支援があれば何があっても大丈夫です」

「その通りじゃな! よーし、ドラゴンの末姫の力、見せつけてやるからのう!」

一気に士気が上がった。

「あ、いや、余りはしゃぎすぎて離れすぎないように。スキルの支援が届かなくなるからな?」

俺は逆に若干不安になりながらも、ヘル・ミミックの方へ視線を向けた。

「さあ、始めようじゃないか、ハイシリッヒ。まだ意識は残っているか? 俺が憎いならば殺して見せるといい」

「ぎしゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああ!」

ミミックの瞳が赤く明滅し、憤怒の様相を伝えた。

その雄たけびは煉獄神殿にこだまし、戦闘開始の狼煙となったのである。

### 43・魔剣暴走（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



#### 44・賢者パーティーの爽快なる戦闘

44・賢者パーティーの爽快なる戦闘

「ブボボボオ・・・ゴロズ・・・アリアゲエエエエエエ！」  
悍ましく、ガラスをひっかいたような不快な声が赤黒い球体のどこからか鳴り響いた。

ハインリッヒの怨念が捕食されてなおヘル・ミミックに残っているようだ。

その化け物に対し、俺たちは素早く戦闘態勢に移行する。

煉獄神殿のような狭い場所でコレットをドラゴン化するわけには行かない。ダンジョンを吹っ飛ばすなどバカのことだ。そんな奴はいないと思うが・・・。

どんな時でも状況に合った適切な戦闘方法というものがある。

ポーターである俺を中心に、前衛にコレットが立ち、少し斜め後ろに大聖女アリシアが陣取った。

「局所戦だ。使える技もスキルも制限される。細かい支援が力ギだ。離れすぎると俺の支援が遅れる。基本陣形を維持してくれ」

「はい！」「分かったのじゃ！」

「よし、まずは、時間制限付き無敵付与、時間制限付き素早さ向上、時間制限付き回避能力向上。コレット、最初は戦いすぎるな！ 当てたら、逃げる」

「ぬお！？ よく分からん！ じゃが、了解なのじゃ！」

「スキルの効果時間は17秒だ。時間制限がある分効果は通常より高い。次にアリシア」

「はい」

「今から16秒後に一旦スキルが切れる。その後10秒間俺の防御を頼む」

「了解です！ あと15秒後に支援結界を張ります」

アリシアは、コレットではなく俺へ支援結界を張る理由を聞かない。彼女だけが、勇者パーティーで唯一、俺の指示の意味をくみとりながら動いていた。

「よし、いつくのじゃあああああああああああああああ  
！」

コレットが化け物へ突っ込んでいった。

俺のスキルの加護を受けているおかげで、触手の攻撃を回避しつつ、本体の赤黒い球体部分に迫る。

「どっせえええええええええええええええええええええええええええええい！」

少女の細腕とは思えないほどの風切り音を上げて、化け物の体をえぐる。通常のモンスターならばこれで終わりという程の衝撃が神殿を震わせた。

『ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンンンンツツ・・・！  
』

ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

化け物の雄たけびと、赤い体液がまき散らされる。

「勝ったのじゃ！ しかし『戦いすぎずに逃げる』なのじゃ！」

コレットは俺の言う事をちゃんと覚えていて、深追いせずに一步距離をとる。

その瞬間、

『ガチイイイイイイイイイイイイン！！』

「ぬおおお、敵の傷口が・・・新しい口になっておるのじゃ」

コレットのえぐった場所が、今はガチガチと歯を鳴らしていた。

「深追いしてれば腕一本行かれていたな」

「旦那様にはこれが分かっておったのじゃな」

尊敬の目を向けられるが、

「そんなわけないだろう。ミミックだから、何かに化けてカウンタ―はありうると思ったただけだ」

「いえ、それ普通に正解ですから」

アリシアが呆れたように言った。

「ん？ そうか？ 全然違うと思うが」

俺は首をひねる。アリシアはなぜか嘆息していた。

「ま、とにかく、再生能力は確認できた。まずは第1段階完了だ。スキル停止3秒前。一旦、陣形を立て直す」

「分かったのじゃ！」

コレットが後ろに大きく退<sup>ひ</sup>こうとする。

だが、獲物を定めた化け物の触手は執拗に彼女を追った。

「ぬはははははは！ 旦那様のスキルのおかげでまったく当たらんわいー！」

コレットがすいすいと避ける。

しかし、そのせいで業<sup>うし</sup>を煮やした触手が、突然俺にターゲットを変更した。

「なあんとお 旦那様を狙うじゃとお」

コレットが悲鳴を上げるが、

ガギイイイイインン！！

俺の1mm目の前で、凶悪な触手が暴れ狂っていた。だが、紙一重で俺には絶対に届かない。

「・・・0秒。作戦通りだ、アリシア」

『セイント・オブ・ガーデン  
聖域結界』

大聖女の結界は例え災害級モンスターですら阻む。まさに人類の守護者『大聖女』の名にふさわしい力だ。

が、俺がそんな風に感慨にふけていると、

「いえ、アリアケさん。いい加減余裕のないスキル使用はやめましょうよ。私、心配で心臓が止まります」

どうやら、不服であったようだ。

「ハインリッヒの意識が多少残っていたようだし、俺を狙ってくることはお前も予想できていただろう？」

「いえ、そーい問題じゃありません。もう・・・だって、もしもアリアケさんに怪我でもあったらどうするんですか・・・」



「!!」

なぜか目をキラキラさせていた。

「旦那様もアリシアも、秒レベルの予測をしながら戦っておるのか」

そして何やら興奮していた。

「まあ、これくらいはな」

「こつこつという強敵の時は、むしろせざる得ませんね」

俺とアリシアはあっさりと答える。

「わ、わしもそれやってみたい！　かつこいいからっ！」

興奮気味に言う。うーん、しかし、

「止めはしないが、面倒だぞ？　それにこつこつというのは適材適所だ。全員がやる必要はないさ」

「やれんでも良いのか？」

いい、と俺は頷く。

「全体を見渡せる支援スキルや支援魔法使いがやればいい仕事なんだ。前衛がそんなことまでしていたらパンクする。それに、だ」

俺はにやりと笑う、

「コレットはちゃんと活躍している。お前のおかげで敵について分かったことが2つある」

「2つ？ 1つではないのか？ 再生能力があるという」

「1つ目はそれだ。驚異的な再生能力。そして2つ目は・・・」

結界の向こうの化け物を見据えつつ、

「『弱点』だ。」傷を傷のままにはしておけない”というな」

俺はそう言って敵殲滅のための作戦に着手したのである。



#### 44・賢者パーティーの爽快なる戦闘（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるの……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 45・勝利

### 45・勝利

「傷を傷のままにはしておけない」？

コレットが首を傾げた。

それにアリシアが答える。

「かつて人は”回復魔法”とは一体何なのか、ということを盛んに研究した時代がありました」

「回復は回復ではないのか？」

「少し、違います。回復とは復元である、というのが当時の答えです。つまり、元の形に戻ろうとする力を利用しているのが回復魔法の神髄なのです。つまり、ヘル・ミミックの真の能力は回復ではありません」

「確かに復元ではない。むしろあれは創造じゃ・・・そうかっ！」

「理解が早いですね、コレットちゃん。そうです。つまり、『ダメージは十分に通っている』んです。『効いていないわけではない』のです」



おぞましい叫び声が<sup>した</sup>耳朵をうつ。

だが、それは化け物の未来の断末魔だ。

俺はスキル使用を開始する。

「全体化」

「連撃」

「疾風迅雷」

「硬直無視」

スキル効果が発揮された途端、俺たちの動きはそれまでの100倍を超える。

「ぬおおおおおりゃあああああああああ！」

コレットが再び殴りかかる。

ぐしゃっ、という音と共に、化け物の体に穴があいた。

もちろん、すぐにゴボゴボと再生が始まるつとする。

しかし、

「じゃらくさいですー！」

アリシアが持っていた杖でその部分を正確に突き刺す。

『ブオオオオオオオオオオオオオオオオオ！？ アジシアアアアアアアアアアアアアアアア オボベエ・・・』

化け物が怨嗟の声を鳴り響かせようとする。が、

「その隙さえ与えぬのじゃ！！」

『ブバアア！？』

化け物が初めて驚愕の声を上げたように思った。でかい眼球が恨みがましくこちらを睨み付けてくる！

再生能力を俺たちの破壊が上回ったのだ。

「連撃 は一撃が複数回攻撃になる変わったスキルだ。ダメージは変わらないんだがな！ っと！」

俺も二人に負けじと、再生を始めようとする体に、鋭い蹴りを穿つ！

『アビアベエエエエエエエエエ！』

くぐもった怒声。

一瞬にして触手が殺到し、蹴りを放って体勢を崩した俺を蹴り殺そうとする。

だが、

「疾風迅雷　は高速化。　硬直無視　は攻撃時の隙がなくなるスキルでな」

触手が殺到した場所にすでに俺はいない。

一瞬にして化け物の背後へと回り込み、更に傷口を連続で攻撃する。

「それでもギリギリだな！　凄まじい回復能力だ」

「それを言うなら”ギリギリ行けそう”ですよ、アリアケさん。私たちの相性が、ええ、ええ、ぴったりだからですよ」

「完全に同意じゃ！　アリシアはええことを言う！」

確かに俺たちのコンビネーションはすさまじかった。

スキルで高速化し、攻撃の隙間時間さえなくなった俺たちだが、どうしたって発生する攻撃中の隙間さえも3人で埋めてしまう。

まさに、滝にうたれるかのように化け物の体がどんどん削れられていった。

『バベベ！　バベベベ！　バアアアアアアアアアアアア！』

化け物の声は途中から怒声ではなく、悲鳴へと転じていた。

再生も創造も間に合わない初めての自体に、ヘル・ミミックも、辛うじて残ったハイインリッヒの意識の残滓も恐慌状態おちいに陥る。

『ブ、ブオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

と、ヘル・ミミックがついに俺たちに勝つことなど不可能だと悟り、触手を使って逃げ出した。

触手は天井へと張り付き、まるで重力などないかのように、天井を疾走し始めたのである。

「ダンジョンから脱出する気か!!」

「低階層ですからすぐに外です」

「どうするのじゃ」

「決まっている!」

俺たちは追いかけた。だが、すぐに追いつくことは無かった。なぜなら……。

出口が見えた。

煉獄神殿の出口は大きな扉だ。

そこは開け放たれていて、ヘル・ミミックはそこからしゅるりと外に出た。

俺たちもすぐに後を追って外に出る。

巨大な眼球は振り返り、逃げおおせたと厭らしく醜悪に嗤った。

まさにヘル・ミミックという化け物とハインリッヒが融合したことを確信させるような笑みであった。

だが、

『!?!』

俺も笑っていた。

「ここまで作戦成功ですね」

アリシアの言葉にうなづく。

そう、すべては狭いダンジョンでなく、外におびき出すための布石俺はまんまと罠にはまった間抜けな化け物を指し、自分のドラゴンへと指示を出した。

「決戦 付与。暴れてやれ、コレット!」

「了解! 旦那様! さあ、外なら容赦せんぞ! ヘル・ミミック!」

カツという光とともに、少女は数秒だけ真の姿を取り戻した。

「なんて綺麗・・・」



大聖女が天の竜を言祝ぐ声が聞こえた。

神とうたわれしゲシュペント・ドラゴン。

黄金竜とも呼ばれた神竜。

『ヘル・ミミック、そして、ハインリッヒ。我が竜騎士アリアケ  
ミハマ、そしてコレット』デューブロイシスの名のもとに貴殿を断  
罪する』

『ア、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
』

「死をもって、わしの前から消え失せよ。焰ラス・ヒューリよ立て！」

瞬間、竜の口よりすべてを溶かす熱線が発せられた。

それは一条の光となって、天を衝く。

『ンギョオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
．．．オ．．．オ．．．オ．．．オ．．．オ．．．オ．．．オ』

まさに天を衝く光の柱。

どれほどの再生能力を持っていようと、神の怒りがそのすべてを  
燃やしつくのに時間はかからなかった。

そして、

ポン！

軽い音を立てたかと思うと、人の姿に戻ったコレットが天から落っこちて来た。

俺はそれをキャッチする。

「相変わらず手加減を知らん奴だ」

「いやあ、ついついな。じゃが、めっちゃ気持ちよかったわい！！」

ぬはは！ とコレットは俺の腕の中で無邪気に笑ったのだった。

「うーん、やっぱり美少女は強いうえに可愛いんですね。私も頑張らないとですね、よよよ」

なぜかアリシアが羨ましそうにしながらへこんでいた。

ともかく、こうして俺たちは一人の哀れな貴族の陰謀を打ち破ったのであった。

「やれやれ、それにしても予定していたよりも少し大騒動になってしまった気がするな。騒ぎになって目立たないうちに早く次の街に行くことにしよう」

そんな俺の言葉に、なぜか二人の少女は苦笑を返したのである。

## 45・勝利（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 46・英雄アリアケ

### 46・英雄アリアケ

「どこだ、どこに行った」

「あっちじゃないか」

どたどた。

「ふう、何とかまいたようだな……。ちっ、どうしてこんなことになった……。」

俺は遠ざかる足音を聞きながら、フウと額の汗をぬぐう。

キング・オーガでもヘル・ミミックでも逃げる必要など皆無だった。

だが、俺は今、余りにも手に負えない相手たちから逃げ回っていた。奴らはいつものどこからか俺の居場所を嗅ぎつけてしまう。

「くっくっくっ、捕まえましたよ……」

と、いつの間にか俺の肩に手がのせられていた。

「馬鹿な　俺の隙をついて背後をとっただと」

戦闘では絶対にならないことが発生して、俺は狼狽する。

しかも、相手は悪質だった。あろうことか、

「おおい！ こっちにいらっしやっただぞ！」

まずい！ こいつ仲間を呼びやがった。

「くそ 離せええええ！」

俺は振り切るように駆け出す。しかし、後ろからはワラワラと町人たちが追いかけてきていた。

「いい加減にしてくれ」

俺はたまらず絶叫する。

しかし、

「何をおっしやいますか！ アリアケ様！ アリアケ様こそ止まるべきですよ！」

「そうですよ、大賢者様！ あの悪徳貴族ハインリツヒを倒した大英雄様！ 大英雄様のサインが欲しいのは当然ですよ！」

「その通りです。街を以前のような平和な状態に戻してくれた真の大賢者様に一言お礼を言いたいだけなのです！ それから逃げるアリアケ様こそが罪だと言えましょう！」

何と反論が飛んでくる始末だ。

「まあ、しょうがないですね。はい、大結界」

と、いつの間にか現れたアリシアが結界を張って、住民たちの行く手を遮った。

「何がしょうがないんだよ・・・」

俺は不平を言う。だが、

「え？ 言いましょか？ まず悪徳貴族ハイリツヒを打倒したこと、獣人への差別を体を張って止めたこと、ヘル・ミミックなんという災害級モンスターの被害を未然に防いで街と人々の命を救ったこと。なお、その際に街の資源であるダンジョンを一切傷つけなかったこと。教団からお礼が来ているくらいです。細かいことを言うと、あと何個もあるんですが、言っただけいいですか？」

「分かった。俺が悪かった。頼むから勘弁してくれ」

俺は嘆息する。

「そうですね。ただ、もう一つ、私・・・というより教団からもお礼を申し上げなくてはなりません。これは、公式なものです、大賢者アリアケ様」

「はっ？ 教団から？」

俺がポカンとしていると、

「我が教団の教義に反する獣人への差別政策。それをとるハイソリツヒを倒していただき本当にありがとうございました。ここに深くお礼申し上げます。英雄アリアケ「ミハマ様。これは公式に大教皇から私経由でもたらされた、公式なるお礼です。あの、もし教団本部にいらっしゃって頂ければもっと他の形で謝意を示すことも出来ますが・・・」

「もう一度言おう。勘弁してくれ。それほど大したことをした覚えはない。お礼と言うなら、放っておいてくれ。田舎でゆっくりするつもりなんだから」

「大したことしまくったということ、先ほどあんなに力説したのですけどねえ・・・困った人ですね、アリアケさんは！」

やはりアリアケは呆れたように言った。

彼女にかかれば、俺など形無かたなしである。

「それはともかく、アリアケさん。私ちよつとだけパーティーを外れます。あ、すぐに帰ってきますので、そこはご心配なく。というか、アリアケさんのせいなんですけどね。こんな英雄的偉業がなされたせいで、大教皇様がひどく興味を持たれて、わざわざ今回の一件を教団に詳しく報告するように言われちゃったんですから」

「すまなかつたな。あまり目立たない様になっているつもりなんだが・・・どうしても目立ってしまうんだ」

「アリアケさんは普通じゃないですから、しょうがないんですけど

ね。はぁ・・・」

アリシアが諦めたように言った。

では、と言って、アリシアが足早に去って行く。コレットにはもう別れを言っているらしい。すぐ戻ってきますからね、と念押しをして去って行った。

アリシアと別れ、俺がこっそりと路地裏から、泊まっている宿屋に向かっていたところ、二つの気配が近づいて来た。

「ああ、やっぱりこちらでしたね。アリアケ様。我々獣人族を助けてくださり本当にありがとうございました」

「今回は本当にありがとうございました。大賢者様の神話のような戦いを見て、本当に私たちは幸せ者です」

ハスとアンであった。獣人の鼻をあざむくのはやはり難しいか。

「なに、大したことはしていない。それに俺一人の力ではないさ。お前たちの協力があつたからだ」

「本当に謙虚な方だ。本来ならばあなたこそが勇者であるべきだと思つ程に」



「そんな真の英雄様に、少しでもお役に立てたのなら、私たちはそれだけでも生まれて来たかいがあります。大賢者様」

「ふ、まあ感謝はもらっておくさ。それではな」

「ああ、お待ちください。アン・・・あれを」

「はい、お兄ちゃん」

？

俺が首を傾げていると、アンはリュックから一つのアイテムを取り出す。どうやら鈴のようだが・・・。

俺はそれを受け取る。

「これは一体なんだ？」

「この街の犬耳族全員の感謝のしるしです。もし、アリアケ様が何かお困りになられましたら、その『暁の鈴』を御鳴らし下さい。この街の犬耳族すべてが万難を排し、主人アリアケ様のもとへかけつけましょう！」

「は？ 主人？」

俺は唖然とするが、二人は構わずにザツと音を立てて片膝をつく。そして、

「この街の犬耳族の総意でございます。我ら犬耳族は主人と認められた方に一生尽くす種族。どうか御身おんみの手足と思つて下さい」

「はい、お兄ちゃんの言う通りです。大賢者様が世界をお救いになる際、どうかお使いくださいませ」

いやいやいやいやいや。

「俺なんかの配下になってどうする……。それに、俺は別に世界など救うつもりはない。それは勇者たちがきつと果たすだろう。だから、俺の配下になんてなる必要は……」

俺はそう言っただけで断ろうとするが、

「そうですか……。アリアケ様の配下になれないのでしたら、もはや自害するしか……」

「そうだね……。お兄ちゃん……」

「なんでそうなる」

俺は狼狽する。なぜか貴族ハイリツヒを倒した後のほうが余程大変な目にあっている気がする。

「私たちの忠義とはそれほど篤いものなのです。主人に捨てられたとなれば、果てるしかありません」

「ですから、どうかご慈悲を。どうか配下にしてください！」

二人はそう言っただけで頭を下げる。

やむを得ない。犬耳族が確かに忠義に篤い種族だと言うことは知っ

ていた。

これほど厄介だとは思っていなかったがな！

「分かった……。配下にする。が、俺は別に世界を救ったりするつもりなど毛頭ないし、呼び出すことなど……」

「良かった！　きっと御恩は返します　アリアケ様　誰も助けたくないと思っていたあの絶望の中で、助けてくださり本当にありがとうございます！　あなたこそ我々の光です！」

「ありがとうございます！　私たちの英雄です！　光の大賢者、アリアケ様！」

そう言っただけで感激と嗚咽の声を漏らしたのである。

やれやれ、当たり前前のことをしてただけなのだがな。

だが、俺はそう言わず二人の頭をなでてやるのであった。

二人は嬉しそうに笑い、そして改めて俺に忠誠を誓ったのである。

パカパカと馬車が走る。御者台の俺はため息を吐きながら、

「はあ、やれやれ。大変な目にあつたなあ……」

俺はそう言いながら嘆息した。

最後まで見送ろうとする者が殺到して大変だったが、何とか無事（？）出発することが出来たのである。

「出発というか、脱出であったな。かかかか！」

隣のコレットがカラカラと笑っていた。

「お前は最後までうまく隠れてたな！」

「旦那様が主役なのじゃから、奴らの目から逃れるのは簡単じゃったよ」

「この裏切者が！」

かかか！ とコレットは楽しそうに笑った。

やれやれ、と俺はもう一度嘆息した。

「とにかく次の街を目指そう。オルティへ行くには海を渡る必要がある。海洋都市『ベルタ』を目指すぞ」

「了解なのじゃ！ 我が旦那様！」

コレットは上機嫌で答えた。

俺はそんなコレットを見ながら、今回の一件を考える。

誰も気づいていないようだが、今回の事件はハインリッヒ一人が引き起こしたのではない。

あの魔剣がミミックだったのは偶然ではない。誰かが仕組んだのだ。だが、調査してもその痕跡は一切見つけられなかった。

(それに、それだけではない)

俺は エルフの森の枯死 事件、そしてメディスンの街を襲った魔の森 事件のことを思い出していた。

(二つの事件にはそれぞれ違和感がある)

エルフの森の枯死、それに 魔の森 も魔素が溜まる速度が速すぎた。

本来なら間伐をしないと行って エルフの森の枯死 が、あれほどの速度で進むことは無いし、 魔の森 があれほどのスピードで第3段階『裂花』に進むことはない。

(それに、コレットの事件のこともある)

まるで、

『誰かが闇を振りまこうとしている』

俺の脳裏にふとそんな言葉が閃いた。それはきつと俺だから気づけたことだろう。

だが俺は肩の力を抜いて微笑む。

引退した俺には関係ないことだ。

そして、きっとその大いなる闇に、俺の幼馴染である勇者パーティーたちは勇敢に立ち向かうことだろう。

俺はビビアたちのことを思い出す。

大聖女が付いて来てしまったことだけが誤算だが、俺はこう思った。

『勇者パーティーを追放された俺だが、俺から巣立ってくれたようで嬉しい。今後は求められても助けてやれないが、お前たちならきっと大丈夫だと期待している。・・・なので大聖女、お前に追って来られては困るのだが?』と。

「それより知っておるか、旦那様」

と、考え事をしている俺にコレットが言った。

「勇者パーティーじゃが、どうやら王都に招待されたらしいぞ?何でもワルダーク宰相がじきじきに呼び出して歓迎会をするとのことじゃ。そう新聞屋に出立した際、聞いたのじゃ」

「ほう、そうなのか。・・・うん。なぜだろう。妙に心配になってきたぞ?」

俺は特に根拠もないのに、なぜか、すさまじい不安に襲われる。

何やら勇者パーティーが、今まさに足を踏み外して行くような、そんな妙な予感がするのだが・・・。

いやいや！ 俺は首を振る。

ま、まあ考えすぎに違いない！

俺は頑張って気を取りなし、次の街へと馬車を進めたのであった。

第1章 完

第2章へ続く

## 46 英雄アリアケ（後書き）

はい、というわけで第1章完結。次からは第2章へと移ります。途中で終わる予定だったこの物語が無事第1章完結できたのはひとえに読者様のおかげです。本当にありがとうございます。続きも是非是非ご期待くださいませ！

というわけで、

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「勇者もアリアケも今後どうなるのー！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

第2章から何卒よろしくお願いいたします。



47・一方その頃、勇者ビビアたちは  
前書き）  
（御前試合と弟子）

だいぶお待たせしてしまいましたね。第2章始まり始まり、です。

47・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈御前試合と弟子〉

47・一方その頃、勇者ビビアたちは　　〈御前試合と弟子〉

「御前試合いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
あのクソ雑魚アリアケとだとおおおお」

俺は思わず声を上げてしまった。

俺たち勇者パーティーは今、グランハイム王国の首都パシユパシーンに来ていた。今いるのは宰相ワルダークの私室である。

王国から一度の些細なミスにより聖剣を奪われた俺だが、見事試練のワイバーンを粉碎した。その際、俺の強大な力によってもたらされた不幸な事故によって狩場を破壊してしまい、一時的に冤罪をかけられたが、日頃の行いによって宰相ワルダークに救出され、今に至るといふわけだ。

そんな英雄的存在の俺に、あるうことが目の前の男、宰相ワルダークは無茶な要求をしてきた。雑魚のアリアケと戦えと言うのだ。

「かひっ！」

俺は思わず吹き出すと、

「ひーっひっひっひっひっひっひー！」

ついつい笑い出してしまった。

「何がおかしいのかね？」

ワルダーク宰相が言う。

「あんな雑魚となんて戦う価値もねえ！俺が勝つに決まってる！モンスターと戦ってるときだって、後ろで偉そうなことを言ってるだけ。荷物持ちしか出来ねえクソ雑魚無能野郎だあ！だから俺の勇者パーティーから追放してやったんだ。そんな奴と『海洋都市デルタ』で御前試合だとお　あーはっはっはっは！そんなことしたら瞬殺に決まってるだろうが！試合にすらならねえよ！」

俺はアリアケの正当な評価をするとともに、思わず嘲笑したのである。

「その通りですわ！　おーっほっほっほ！」

女拳闘士デリアも嗤いながら、

「勇者ビビアの手を煩わすまでもありません。私の拳で一撃ですわ！　いえ、拳を使うのももったいないくらいですわ！」

「そっだ」

重々しく国の盾と謳われたエルガーが頷く。

「あのような軟弱な男と試合なぞ、時間の無駄だろう。筋肉が圧倒的に足りていない。俺のような精悍さが少しでも身につかなくては敵の攻撃を受けることもできない。戦う資格など無いに等しい」

そう言ってニヤリと嗤った。

「だよな〜」

魔法使いのプララも唇を歪めると、

「だけど一回くらいシめてやった方がいいかもしないね。最近色んな噂が流れてきて、あたしチヨームカついててさ！ あんな雑魚とわざわざ試合なんて面倒だからさ、道ですれ違ったときに腹パンしてやればいいんだよ」

そう言って嘲笑う。

俺たちにとってアリアケなぞ有象無象でしかない。

はるかに格下！

だからこそ俺と言う栄えある勇者率いる勇者パーティーを無様にも追放されたのだから！

俺の勝利は戦う前から決まっているんだ

「あの、果たしてそうでしょうか」

「は？」

俺は思わず変な声を上げる。

せつかく盛り上がった気分には水を差されたからだ。それをした奴と言つのは……、

「聞けば、メディスンの街で冒険者をまとめあげて、魔の森のモンスターたちから人々を救つたとのこと。今や冒険者の中では彼を英雄とたたえる向きもあるそうですね？」

緑の髪を伸ばした15歳くらいの少女、ローレライはあっけらかんとそう言つて微笑んだ。

「そんなの嘘に決まつてる！ あるわけねえ！ あんな無能ポーターに！ なあ、ワルダーク宰相」

俺は宰相に真相を聞く。

「あの、勇者様。いきなり目を血走らされると怖くて気持ち悪いのですが……」

ローレライが一步後ずさつたようだが、気にしている場合ではない。

アリアケが活躍するわけねえんだ。

その真相の究明こそが最も大事なことだ！ 俺の方が優れているんだから、追放されたアリアケが魔の森から街を防衛するなんて英雄的活躍が出来ていいわけがねえ！

宰相は顎を撫でながら俺の方を見ると、

「王国騎士団には失敗は許されない。だから表向きは王国騎士団がメデイスンの街を救い、魔の森を殲滅したことになっている」

「は？ なんだよ……それ……」

どういう意味だよ。

俺は宰相の迂遠な言い方に苛立ちを隠せない。

「これ以上は言えんよ。わしも立場のある身なのでな」

「ぐぎ、ぐぎぎぎぎぎぎいいいいいいいいがああああああ  
あああ」

俺は歯噛みして地団太を踏む。

ローレライが更にもう一步、大きく後ずさるが、気にする余裕はなかった。

馬鹿なバカなB A K Aな莫迦な！

あいつにそんな偉業がなせるわけがない！

俺が！

俺がつ………！

「俺が狩場を破壊したなんていう冤罪を受けているのに、あいつがそんな英雄的な行為をしていたはずがないんだ！ 認めねえ！ ありえるはずがねえ！ あああああああああああああああああああああああああああああ」

俺は天に向かって絶叫する。

「あの……やっぱり私、パーティーから離脱していいですか？」

「お、俺もお供しますよ、ローレライさん！」

ローレライの言葉に、ポーターのバシユータが応じた。

だが、

「む・だ・よ」

その二人の肩をがっしりとデリアが掴み、優しくニコリと微笑む。

ああ、そうだ。俺たちは仲間なんだから。

「いまだにラクスマーの狩場を破壊したことで、沢山のクレームや損害賠償請求が届いているの。勇者パーティーだから何とか国家権力に守られてるけど、この勇者パーティーがなくなったら私たち全員終わりよ。奴隷落ちして売り飛ばされるか、臓器を抜き取られるか……ひ、ひいいいい……。メ、メンバーが減るような行為は許さないわ！」

「うっ……うっ……。な、何でこんなことに……!!」

「お、俺も只のポーターだったのに……。ああ、神様……」

ローレイとバシュータが絶望に打ちひしがれた表情で天を仰いだ。その様子を見ながら、プララが大笑いしていた。

「くひひひひ。人の不幸を見てると気分がいいわあ！」

「本当にクズだな、お前は……」

エルガーが渋面を作るが、

「はあ？ ダンジョンで味方を置き去りにする奴の方がクズに決まってるじゃ〜ん。つまり、エルガーあんたが一番ドクズってことだよ」

「なんだとおっ！」

「んだよ！」

エルガーとプララが口汚くののしり合っていた。

くそっ……！

俺は舌打ちする。俺を支えるはずの仲間がこのザマだ。チャンスさえあれば超天才で優秀な俺にふさわしいパーティーメンバーに入れ替えるというのに……。今はこんなクソどもで我慢するしかないとはっ……！

俺はそう正義心から内心で嘆く。



そんな様子を見ながら、ワルダーク宰相は大きく嘆息すると、

「ならば、やはりこれはチャンスではないのかね？」

「は？ チャンス？」

俺は宰相の突然の言葉に理解が追い付かない。

「御前試合をしてもらおうとしたのは、王国指定勇者である君とそのパーティーの評価を上げるためだ。勇者は我が国の希望なのだからな。今、冒険者の間で英雄と名高いアリアケを倒せば、勇者としての君の強さに疑いを持つ者はいなくなるだろう。確かにラクスマーの資源を破壊しつくしてしまったことは失態だっただろうが、『あまりにも強すぎたため』という話であれば、人々の受け止め方も違ってくるはずだ。そして、そのパーティーへの風当たりも」

「どうかね、と宰相は言った。

悪い話ではないだろう、と。

そして、勝てばそれなりの報酬はもちろん出すとも。

「もう石を投げられない？」

「人殺しだと罵られたりもしないのか？」

「ざわ……ざわ……」。

パーティーメンバーがざわついている。

俺は……。

俺はそんな勝つとか負けるとかどうでも良かった。

最近は確かに少し調子が悪くて、いくつかの些細な失敗をした。

それによって一部では人殺しやら、犯罪者などと、心無い国民から陰口をたたかれることもある。

だが、それも英雄だからこそだ。

俺が真の英雄だからこそ起こる誤解であり、有名税のようなものと完全に割り切っている。

だから、アリアケを倒すことは、別に名声が欲しいからとか、かつての栄光を取り戻したいからとか、そんな我欲のためでは決していない。

そう、アリアケがズルをしているからだ。

恐らく奴は自分で街を守ったと言う噂を流し、俺に對抗しようとしている。勇者パーティーを追放された逆恨みで、追放した勇者が間違っていたという風潮を作り、俺の邪魔をしようとしてきているのだ。

ならば、これは正義の戦いということになる。

そうだ、これは正義のための戦いなんだ。



そうやってドアの外に声をかけたのである。ガチャリとドアが開き、一人の人間が入って来た。

47・一方その頃、勇者ピリアたちは  
（御前試合と弟子）  
後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「勇者もアリアケも今後どうなるの！！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

第2章から何卒よろしくお願いいたします。

48・一方その頃、勇者ビビアたちは　　く　　勇者は弟子をかわいがる。

48・一方その頃、勇者ビビアたちは　　く　　勇者は弟子をかわいがる。

「ラツカライ、入って来い」

「は、はい……」

「ご挨拶しなさい。こちらは勇者ビビアとその一行だ」

「は、初めまして！　ボ、ボクはラツカライと言います。宜しくお願ひします！」

ワルダーク宰相の声とともに部屋に入ってきたのは、目鼻立ちのはつきりした、中性的な雰囲気のある気弱そうな少年<sup>ガキ</sup>であった。黒髪、黒目勝ちで整った顔立ちをしているが、どこか怯えるような目つきだ。少年だけあって声は女性のように高い。

「このラツカライを弟子として育ててやって欲しいのだ」

ワルダーク宰相はそう言って俺の方を見た。

（はあ~~~~）　　なーんでこの勇者である俺が、こんなガキを弟

子にして面倒なんか見なくちゃいけねえんだよ！ 女だったらまだしも、男なんて育てても何もいいことなんかねえじゃねえか！ 俺には周りから称賛されるために、色々やる必要があるんだよなあ。弟子を育てるなんて面倒くせえこととしてられっかよ！ しかも、こーんなウジウジしたガキなんてボコリたくなっちまうぜえ)

知らず知らずのうちに洪面を作ってしまう。

それを見た宰相が、

「ああ、そうか言い忘れていた。この者は 聖槍せいそうブリューナクの使い手に選ばれたのだ。だから聖剣の勇者であるビビア、お前に育ててもらいたいと思ったのだ。今のところ槍の腕は凡庸だが、聖剣の使い手が鍛えれば、お前を超えるほどの潜在能力を発揮するかもしれぬと、そう王国としては大いに期待しているのだ」

と言ったのである。

「は？」

俺はポカンとする。

何を言われたのか分からない。

こんなガキが聖槍ブリューナクに選定された、だと？

俺よりも余程年下に見える。

しかもチンチクリンのガキだ。

なのにこのガキが聖槍ブリューナクの担い手だと？

それにいかにも気弱そうでビクビクと人をうかがうような、いかにもムカつく目をしていやがる。面がいいのも気に食わない。見ようによっては女にすら見える。

なのに、そんな軟弱そうな奴が聖槍ブリューナクの使い手？ 俺のようなたくましさもない奴が？

「は？」

俺は聖剣の使い手だ。

だからこそ王国指定勇者になった。

聖剣は特別だ。

聖槍ごときとは違う。

聖槍なんて大したことない。

なぜならば、聖剣は世界を救う者が持つ剣と言われている伝説でも最高の代物だが、聖槍はただ単に結界を切り裂く力に特化した、ちよっとばかり特徴的な槍に過ぎねえからだ。

だから、そんなことは説明するまでもねえ。

言葉にするまでもなく聖剣の方が上なのだ。俺が格上なのである。

なのに、宰相はなんつった？



『お前を超えるほどの潜在能力を発揮する』

だとう

「HA？」

『聖』なんて大仰な名前を付いているせいで、聖剣の使い手である俺と同等にでもなれると勘違いしていやがる！

聖が付くのは聖剣だけでいいのにつ！

おかげで、とんでもない勘違いをしてやがる！

俺がこの世界で最も優れているのに！最強なのに！槍ごときにいいいいいいいい！

俺は余りに理不尽な仕打ちに義憤に駆られたのであった。

「い、いいぜえ……。面倒見てやるよお」

「ほ、本当ですかっ！ありがとうございます、勇者さん……」

「とりあえず飲み物持ってきてくれっか？ あ？」

「へっ？」

俺の言葉にラツカライがポカンとした表情をした。

「弟子つつたら、お茶くみだろうが！このノロマがあー！さっさ



そう冷えた口調で淡々と言う。

「へ、へへへ。んなわけねえだろうがよ。鍛えてやりたい一心つてやつさあ」

俺は肩をすくめてしつかりと否定する。俺は教師として弟子のためにを思ってやったまでだあ。俺の名誉のためにしつかりと否定しておかねえとなあ。

「全然信じられません！ 皆さんも何か言っして下さい！ 勇者様が間違っていたら直すのも仲間の務めでしょう」

ローレライが声を上げた。

すると、

「まあ、確かにあのラツカライって子。余り強そうじゃなかったわねえ。いざとなったら盾がわりくらいにはなるかしらねえ？」

デリアが爪をいじりながら言った。

「…………え？」

その言葉にローレライが啞然とした声を上げる。

「いやいや、盾にも『才能』が必要だからなあ。そう俺のようにたくましい肉体が無ければだめだ。ふはははは！ いくら聖槍の使い手に選定されようが、俺のようなたくましい男でなければ意味がない。ある意味、俺の方が聖槍の使い手よりも格上ということだなあ」

エルガーもそう言っただけだ。

そして、プララも、

「魔法の的になってもらおうかなあ。聖槍があるんだったら、防げるっしょ？ てか、特別な才能があるとか言われてる奴ホントむかつくんだよね。何様って感じじゃん。いっぺん痛い目見た方がいいよね、人間的に成長する意味でさあ。そのためにお姉さんがちよつとしごいてあげるよ。きやは」

そう言っただけだ。

するとローレイが、

「あなたたちも勇者様と同じ本当のカスどもですよ！ いじめなんて最低ですよ！」

そう怒鳴ったのであった。

だが、他の仲間たちは心外だとばかりに驚きながら、

「あらあら。ローレイったら、少し落ち着いて。私がいじめなんてするわけないでしょ？ 「かわいい子には旅をさせる」と言うでしょう？ 私が言ったのはある意味、そういう意味よ」

「そうだぞ。俺のようにどっしりと構えて欲しいと願っただけではないか。断じていじめなどするわけがない。国の守護者であるこのエルガー様がな！」

「そつだよそつだよ。ちょっとした冗談じゃーん。なにマジになつてんのさー、きゃはは」

彼女の言葉を笑って受け止めたのだった。

「ぐす……。だ、だめだ……」

だが、なぜかローレイが天を仰いだ。そして、

「この人たち全員、同類なんだ……。どうして私はこんなところにいるのでしょうか……。どこで道を踏み外したのでしょうか……」

そつ地獄よりも深い絶望の声を上げたのである。

正直、彼女が何に参っているのか、よく分からないが。

「あ、あの、ジュース持ってきました」

と、ローレイがよく分からない絶望の声を上げていると、パシラ……いや、お茶くみに行っていたラツカライがジュースを持って戻って来た。

「よしよし、へへへ。ぐびぐび。かあ、人に運ばせた果実汁はうめえぜ。んん、よし、んじゃまあ、とりあえず『海洋都市デルタ』に向かいがたら、修行をつけてやるとするかあ！」

「お、お願いします！」

（へっへっへっ。だが、つつても、歴戦の強者たる俺の見立てからしても、てんで才能はなさそうだなあ。腕も女みてえに細<sup>ほせ</sup>えし。は

っ、どうせ、誰がやっても成長なんてしねえだろう。散々しごくだけしごくいて、「才能ねえわ」って言って放り出しちまつかあ。きひひ)

俺はそんなことを思いつつ、果実汁を美味そうになめたのである。

48. 一方その頃、勇者ピリアたちは  
（後書き）  
（勇者は弟子をかわい

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「弟子ちゃんは今後どうなるの！！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

第2章から何卒よろしくお願いいたします。

49・一方その頃、勇者ビビアたちは  
（弟子ver）『特訓編（勇者）』

49・一方その頃、勇者ビビアたちは  
（勇者パーティー追放）  
弟子ver）『特訓編（勇者）』

「いよーし！ 特訓はじめっぞ、おら！」

「よ、宜しくお願いします　ボク頑張ります！」

聖剣の勇者である俺の言葉に、聖槍とか言うへボ伝説武器の所有者  
ラツカライが頷いた。

今、俺たち勇者パーティーは、アリアケとの決闘のため海洋都市『  
ベルタ』へ馬車で移動中であつた。現在は休憩時間であり、ワルダ  
ーク宰相の依頼通り、ラツカライに稽古をつけてやるうとしていた。

まずは勇者である俺から、というわけだが……。

（にしても、相変わらずウジウジした奴で、イライラさせやがる。  
体も華奢で細くて、顔だけは目鼻立ちがはっきりしていて睫毛が長  
いって感じて妙に整ってやがる。それに「ボクボク」って。これが  
またガキっぽくてイラつくんだよなあ！）

俺はそんなことを思う。

「おら、どっからでもいいからかかって来いや！」



「は、はい！ ええーい」

聖槍ブリューナクを使い、ラッカライは全力でかかってくる。

聖槍による突き、払い、それらを組み合わせたコンビネーションを必死に繰り返して来る。

そんな必死な様子に俺は、

(ぎ、ぎひひひひひひひ)

嘲笑をこらえながら、聖剣で楽勝でいなし続けていた。

(まじでコイツ才能ねえよおおおおおおお！)

駄目だ。笑っちゃいけねえ。

だが、まじで笑いをこらえるのがつらい。

余りにもへボすぎて、嘲笑を浮かべずにはいらねえ！

槍は遅<sup>おせ</sup>えし、フェイントも何もねえ！ 動きが正直すぎて相手に次の行動が丸わかりじゃねえか。これならゴブリンの方がまだマシなくらいだぜえ！

「はあ……はあ……」

しかも、こっちは防御してるだけなのに疲弊してやがる。

まじで才能ない！ まじで才能ない！

こーんな奴が『俺を超える潜在能力を秘めているかもしれない』だ  
あ

プギャラー！

あ・り・え・ねー

潜在能力なんてゼロだ、ゼロオオオオ！

俺ははるかに格下の相手の槍を悠々といなしながら、内心で嘲笑<sup>おんわら</sup>う。  
このまま稽古も何もつけず、哀れな格下の姿を見続けるのも一興か  
もしれねえなあ！

「何だか勇者様……。もしかして、ラツカライさんをいじめて楽しんでませんか？ もし、そうだとしたら最低ですよ？」

おおっと、ローレイに何だか誤解されてるみてえだな。

よし、そこまで言うんならっ……………！

「おらあー！」

「あう」

俺の突然の聖剣によるハードアタック<sup>強撃</sup>によって、ラツカライが簡単に吹っ飛んだ。

くあああ、良い感じに吹っ飛びやがったなあ。俺は内心で唇を歪め

た。

「ラツカライさんにかかってこいって言うておいて、いきなり攻撃するなんて……。本当のクズでしょうか……」

「勇者失格では？」

ローレイとバシュータが何やら言うているが、ガキを吹っ飛ばした快感に酔いしれてよく聞こえなかった。

「おいおい、隙だらけだったぜえ？ 確かに俺はかかって来いとは言っただよあ、俺から掛かって行かない、なんて一言も言っただいんだよなあ？ そういう油断こそが戦場では一番危険なことさ。俺はそれをテメエに伝えたかったってわけだ。どうだ、師からの教えをありがたく受け取ってくれたか？」

俺はそうまじめな表情で言う。つっても、多分聞こえちゃいねえだろうがなあ。何せ、結構本気のハードアタックを放ったからなあ。急所に命中したろうしなあ！ こんな軟弱な野郎だ、くくく、しばらくは立ち上がることすら……。

「じ、ご指導ありがとうございます。はい、まだまだ大丈夫です。もう一度お願いします！」

「……………は？」

あれ？

俺は思いっきり首を傾げる。

なんで平気なんだ？

俺は割とマジで……世間の厳しさを思い知らせるために、師の役割として、ガチハード<sup>強撃</sup>アタックを決めてやったはずだ。なのに、どうして立ち上がって来られるんだ？

一見して、あんまりダメージも受けてねえように見える……。

何かの間違いか？

「……へ、へへへ、運が良かったみてえだな。お望みとあらば食らわせてやるぜえ！ もう一度だあ！ ハード<sup>強撃</sup>アタックウウウウ」

ドゴオオオ！

命中して、ラツカライが再び吹っ飛んだ。

しかし、

「ふ、ふう。今のは危なかったです。もう少しで急所でした。何とか外せましたね」

そう言って冷や汗を拭う仕草をする。

「……………は？」

俺は呆然とする。

何だよ、その反応は。

確実に当たっているのに、まるでダメージがないような仕草は。

それじゃあ、まるで……。

(まるで俺の方がいなされてるみたいじゃねえかあああああああああああ！)

ギリギリと内心で歯噛みする。余りにも悔しくて血涙が出そうなほどだ。

と、その時、

「どうしたんだ、勇者、調子が悪いのか？」

「ふふふ、手加減しすぎては訓練になりませんわよ」

「そうだよ、早くぶちのめしちゃってよ！」

エルガー、デリア、プララが声を上げた。

俺は思わず、

「う、うるせえぞ、てめえらあ！」

そう怒鳴り返してしまう。

「そ、そんな風に言わなくてもよいではないか……。お、大人げのない……」

「そ、そうですね。確かに指導内容に口を出して悪かったかもです

が……」

「ただの冗談じゃん。あはは……マジになんないですよ……」

引いた様子で、仲間たちが言った。

このクソどもが！ いや、いや、こんな奴らのことはどうでもいい！

んなことより、目の前の敵を倒すことの方が先だ！

俺にこんな屈辱を与えたこと、絶対に後悔させてやる！ 許さねえんだからなあ！

「なら、これをくらいやがれええええ！ 勇者最終奥義の一つ！  
究極的終局乱舞ロンドミア・ワルツだあああああああ！」

俺は聖剣の最上級スキルで切りかかる！

まるで聖剣が踊る様に連続で相手に攻撃を加えるという最強スキルの一つだ！

「う、うわあああああああああ！？」

俺の本気の剣戟はまさしく嵐の夜の稲妻ようにラツカライに降り注いだ。

「は、ははは……」

ぎゃーっはっはっはっはっはー！！

そつだ、これだ、これこそが俺の力なんだ！

槍やりごときに剣けんが負けるはずがねえんだ！

俺こそが最強なんだからなあ。所詮槍やりの使い手なんて雑魚よ、雑魚！

「ゆ、勇者様、やりすぎですわ」

「ち、致命傷になるぞ！ 勇者よ、何をしてる！」

「さすがに死んだら寝覚めが悪いよっ！」

デリア、エルガー、プララが悲鳴を上げた。

「ああん？ うるせえなあ。さすがに殺すまではしてねえよ」

その言葉に、3人はホツとした表情を浮かべる。

ま、ちよつとムカついたから、少しは本気でボコつちまつたけどなあ。

ま、これで俺との実力の差つてもんが分かつただろ。

槍やりが剣けんに敵かなうわけねえんだ。

俺こそが最強、俺こそが唯一無二の勇者なんだ。

No.1！ No.1だ！

俺の剣さばきについてこれる奴は一人もいねえ！

と、倒れていたラツカライが起き上がった。

そして、

「はあ、はあ……。すごい攻撃でした。さすが勇者様です」

そう尊敬の言葉を口にする。

「く、くははははははは！ そうだろうそうだろう！ ま、俺が本気になったら、太刀筋を見る事すら叶わな……」

「斜め上から振り下ろしたと思ったら、その反動を利用して下からの跳ね上げ。かと思えば、重力に逆らわない切り落とし。とても理にかなった動きでした。あと、素早く移動される時に足運びに特徴がありますよね。さすが、勇者様です」

ラツカライはそう言いながら、

「目で追うのがやっとですよ。余りの早さに体がついていきませんでした」

そうニコリと微笑んだのである。

「……………は？」

俺は一瞬何を言われたのか分からなかった。

なぜならコイツは言ったのだ。



『目で追うのがやっと』だったと。

しかも、俺自身が気づいていなかった体を動かす時のクセまで見えていた、と言ったのである。

ならば、もしラツカライ自身の身体さえ素早く動けば、俺の攻撃を防げたと言っているようなものなのだ。

……いや。

いやいやいやいやいや！

「見えてるわけねえ！」

「へ？ あの、勇者様？」

ラツカライはポカンとしている。

だが、この純朴そうに見せる表情こそが、こいつの一番の刃だ。

そうだ、この嘘つきめ！

あたかも、俺の攻撃が見えていたと思わせておいて、聖剣の勇者たる俺をたばかり、動揺させて倒そうって魂胆だろう。

俺の方が優れてるから、そういうた姑息な手段にうつたえるしかねえんだ！

俺のように真っ直ぐに生きていくことができねえんだ！

嘘をつかなきゃ、俺とまともに戦つことすらできねえ可哀そうな野郎ってわけだ！

俺は相手の言う事が嘘だと理解することで、やっと落ち着いて来た。

「ぜえ……ぜえ……」

だが、あまりの興奮に息が切れて疲労の色が濃くなる。

くそ……休息をとりたい……。

「お、俺はもう休むぞ！ 次はデリアたちが相手をしてやれ！ ぶん」

それだけ何とか言つと、俺は適当な場所にふて寝するのであった。

クソ！ うそつきめ！

俺は正義感から内心で相手を罵り、最悪な気分で横になったのである。

49・一方その頃、勇者ピピアたちは（勇者パーティー追放）  
（弟子ver）『特訓編（勇者）』（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「弟子ちゃんは今後どうなるの！！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

50・一方その頃、勇者ビビアたちは　　（勇者パーティー追放）  
（弟子ver）『特訓編（テリア、プララ、エルガー）』

50・一方その頃、勇者ビビアたちは　　（勇者パーティー追放）  
弟子ver）『特訓編（テリア、プララ、エルガー）』

（勇者ビビア視点）

俺は横になりながら、へボ聖槍の使い手ラツカライの修業風景を見学していた。

インチキで俺の攻撃をかわし、あまつさえ俺の攻撃が『見えた』などと言うウソツキ野郎だ。

正義の使者であり、世界の救世主である俺という聖人からすれば、そついった薄汚い思考は理解に苦しむものだ。

ああ、思いだしただけで腹立たしくなってきた。

俺の超必殺技である究極的終局乱舞でも大して驚きもしなかったことも、その後笑っていやがったことも、腸が煮えくり返る程悔しい！  
何で俺がこんな思いをしなくちゃならねえ！　何で！　なあんで

……ああ、そつだ、そつだよな。

なぜ聖剣の使い手である優れた俺様が、へボ聖槍に遠慮する必要が

ある。しかも俺は王国指定勇者。特権階級の人間なんだ。

俺は目の前の修業風景を見ながら決意する。

やはり、ラツカライは俺のパーティーにはふさわしくない。正義を標榜する勇者パーティーに卑しい考えの持ち主は相応しくねえ。

ならば、

「おい、デリア、プララ、エルガー！　いつちよ揉んでやれ！　そして、ラツカライ、お前程度の力じゃあ、いくら俺たちが稽古をつけてやっても無駄だ！　お前の実力をこれから見極めて、場合によってはこの勇者パーティーから追放する！」

「了解！」「」

デリアたちの声と共に、

「そつ、そんなつ」

ラツカライがショックを受けた顔をする。

ひ、ひっひっひ。クツクツクツクツ。その顔　　そうだ、その表情  
が見たかった！

俺は内心で笑う。

それに、『場合によっては追放』などではない。この修行の後に、  
奴に言う言葉はもう決まっている。

そうすれば、ラツカライは、

『勇者パーティーを追放された、へボ聖槍の使い手ラツカライ』

そう言われ、侮蔑される未来が待っているのだ。

俺はそんな考えを浮かべると、内心で激しく唇を歪めたのであった。

〈デリア視点〉

「了解！」

私は勇者の言葉に軽快に応じながら、内心で忙しく思考を回転させる。

先ほどの勇者の修業風景を見て私は少し驚いていた。

なぜなら、ラツカライが勇者ビビアの放った必殺技の一つ、聖剣所有者が持つユニークスキル『究極的終局乱舞』ロンドミテ・フルツを受けながらも、その一つ一つの剣筋をしっかりと把握していたからよ。

勇者の攻撃は素早くて鋭い。

その攻撃を、身体がついて行かないまでも、見えていたとするならば、しっかりと育てれば『勇者には無い部分』をカバーできる人材に育つ才能があると思ったのだ。

というのは、勇者ビビアには致命的な欠点があるのよね……。

それは、戦闘時に熱くなり過ぎて冷静さを失い、突出気味になるということだわ。

これは、こと戦闘において、大きな失点で……。あまりリーダーに向いていないタイプとも言えるかもしれないわね。

だから、私たちパーティーはそんな勇者の行動に合わせながら、全体としてフォローしつつ戦闘行動をすることになっているの。

でも、ラツカライの性格はその反対のように見えたわ。

攻撃はへボかったわね。私の方が何倍も優れていると思うわ。

だけど、こと防御と言う点については、いいものを持っている気がするのよね。

それこそ、熱くなりすぎる戦士として致命的な欠点を持つ勇者をフォローしつつ、その背中を守るような。

だからこそ。

( だからこそ、早急に追放せねばなりませんわねっ……………！ )

私は焦燥感から乾いた唇をなめた。

私たちは全員寒村の村の出身だ。けれど勇者パーティーの一員という肩書のおかげで、周りの人間が頭を下げてくれる。

宝石もいっぱい買えるし、お金ももつかるし、賞賛の声を浴びられて気持ちがいい！

こんな生活をやめられるはずもないわ！

貧乏はもう嫌よ！ 私は贅沢に生きるのよ！

だから、私の勇者パーティーにおける地位。勇者ビビアの補佐、N.O.2として助言者する有能な秘書的ポジション！ リーダーに不向きな勇者にこそ必要とされるこのポジション！

ああ、この美味しい地位を、あのラツカライなんていうポツと出に渡すわけには断じて行かない。

最近はやっとパーティーの評判が落ちてるけど、きっと一時的なものよ。絶対また人気が出て、賞賛とお金を運んできてくれるわ。

そう、だから、勇者の背中を任される相棒は、私ではなくてはいけないのよ。

この地位を脅かすものは、社会的に抹殺せねばならないのだわ！

（だから、ごめんなさいね、ラツカライ君）

私は内心の冷笑をもって、ラツカライを見やる。

（あなたがいたほうが勇者の欠点をフォローできそうだけど、私の揺るがぬ安寧のために（社会的に）死んでちょうだい）

そんな思いを胸に私は拳を握りしめたのだ。



（プララ視点）

「了解！」

あたしは返事をしながら、頭を激しく回転させていた。

ラツカライの魔法力は正直言って大したことない。へぼい。

あの魔力じゃあ、身体強化に回せる魔力量に限界があるから、攻撃にスピードや威力が乗らないし、防御だって機敏に出来ないに決まってるじゃん。

（だけど……）

あたしはこっそりと、寝そべる勇者を見て正直に思う。

（勇者とは違って、魔力コントロールはできてんだよね）

そう素直に感想を浮かべた。

勇者の魔力量は戦士タイプとしてはすごくて、その膨大な魔力を身体強化とかに使ってる。

だから威力のある攻撃とか、素早い攻撃が出来るってわけ。

ただ、魔法使い視点のあたしから言うと、あの魔力量で、その程度

？ という気はいつもしてんだよね。

勇者のは、言ってみれば、大量の水があるから、それをジャブジャブ使いまくって強さを水増ししてるって感じ？

ウソっていうか、ズルっていうか。そういう類の強さなんだよね。

でもラツカライのは真逆。

あいつは魔力量が足んないから、逆に勇者が全然持っていない技術で補ってんの。

魔力コントロールをきっちりやることで、少ない魔力量でも、あそこまでの戦闘を勇者と繰り広げることができたってわけ。

どっちが魔力的な意味で才能があるか言うまでもないっしょ。

そう言う意味では、ラツカライがこのパーティーにいて、勇者は成長できるかもしれないんだよね。

エルガーの脳筋馬鹿野郎とはまた違う、同じ聖武器の戦士だし、やっぱり魔力の使い方なんて、言われるより、目の前で見た方がイメージしやすいっしょ。勇者みたいなのでも魔力コントロールを覚えられっかもしない。そしたら、パーティーの力はグツと上がるかも。

そんなことを思う。

だからあたしは、

(さっさと追い出さないとやべえかもっ……！)

焦燥感から、思わず綺麗に整えたネイルを噛んじゃう。

あたしがこの勇者パーティーに所属しているのは、単に後ろの方で楽が出来るからだ。弱い敵を後ろから魔法ぶっ放して倒すのが快感だからってわけ。

だって、面倒なのは嫌じゃん？

怪我するのも最悪っしょ？

楽しければそれでオツケーっしょ？

だから魔法使いになったし、しかも勇者パーティーは前衛が強かったから、めっちゃ楽しさせてもらってたわけ。

後ろからファイヤーボールとかブリザードボールを撃つてたらいいだけなんだから、楽勝だったんだよね。ネイルも傷まないし(笑)

だから、あたしの今の『パーティーで最も優れた魔法の使い手』っていうポジションを、少しでも脅かすものは即刻排除しないとっ……！

魔力コントロールはまだ流石にあたしの方が上だけど、あいつは聖槍の使い手っていう、めっちゃムカつく才能持ち。考えすぎかもだけど、万が一にもあたしを追い越す可能性もあるってわけ！

才能あるとかまじチョーむかつく！

そういう才能があるかもってだけで、危険なんだよ！

あたしのポジションを万が一にでも不当に奪う可能性がある。そんなこと許せるわけないじゃん！

それに、もしラツカライがいるせいで勇者が成長しちゃったら、あたしも努力して同じくらい強くななくちゃいけないっしょ？

それは楽じゃないし、嫌じゃん？

だからあたしは決意する。

全力でラツカライを勇者パーティーから追放しよう、って。

あはは、あたしったら相変わらず冴えてる〜！

そんなことを思いながら、あたしは特大のファイヤーボールを詠唱したんだ。

〜エルガー視点〜

「了解！」

俺は勇者の言葉に返事をしながら、目の前の少年ラツカライを見る。

正直言って、圧倒的に筋肉が足りない。その体はまるで少女のように華奢だ。

(ただ、勇者のように攻撃偏重型ではないことは評価できるか)

俺は率直にそう思った。

勇者はどうしても熱くなるタイプで、周囲の見えない猪突猛進な、攻撃型の戦闘スタイルになってしまう。

そのせいで突出しがちであり、防御のプロである俺からすれば「非常に危うい」戦いをしていると感じる時が多々ある。

俺が助けなければ「あわや」ということもあった。

まあ、本人は気づいていないかもしれないが……。

それに比べると、勇者とは違い、ラッカライは攻撃よりも防御の方が得意なようだった。

勇者にはないバランスのようなものを感じる。

俺が鍛えれば、勇者のような猪突猛進型ではなく、しっかりとした防御を視野に入れた戦士に成長することができるかもしれない。

また、その姿を見ることで、勇者も防御を意識し、足りない部分をおぎない、成長することができるかもしれない。

それはひいては勇者パーティー全体の戦力アップにつながるかもしれない。

(……だが、防御は筋肉でするものだ。それに、防御のプロは俺一

人で良い！)

俺はそう考えて、重々しく頷いた。

このパーティーの防御の要はこの俺だ。国の盾とも言われる俺がいなければ、この勇者パーティーは立ち行かない。

そして、このパーティーの防御の考え方は、基本的には『正面からの防御』であり、『回避』型のような、小細工を弄する卑怯者がする防御ではない！

ああいうのは、筋肉がない非力な者がするズルである。

もしも、ラツカライが成長し、回避型防御のプロになってしまったら、この勇者パーティーに悪しき防御スタイルを広めてしまつかもしれない。

それは、ひいては俺の立場の低下を招き、国の盾と称賛される俺のポジションを奪う可能性も否定できないっ……！

そんなことは断じて許されない！

可能性ごと排除しなくてはならない。そう、脅威は根元から事前に断つ！ これこそが正しい防御というものなのだっ……！

俺はそんな正しい防御思想に基づき、ラツカライが回避しきれない攻撃を本気で仕掛けたのである。回避防御という悪しきスタイルをこれ以上広めないためにっ……！

そして、偶然か否か、俺の行動に呼応するように、デリアやプララ

も恐るべきレベルの攻撃をラツカライへ放ったのである。

示し合わせてもいない、なんの合図もしていないのに、なぜか俺たちの息はピッタリだった。

(やはり、仲間だからか)

そう考えるしかないだろう。

そんな一斉攻撃にさらされたラツカライは、

「きゃあああああつ」

まるで少女のような悲鳴をあげた。

軟弱者め！

俺は鼻で嗤う。

やはり俺の判断は正しかった。

こんな奴軟弱者のために、今の地位を失うわけには行かない！

俺たちはなりふり構わずラツカライに攻撃をしかけたのである。

この少年ラツカライを勇者パーティーから追放するために！

50. 一方その頃、勇者ピビアたちは、(勇者パーティー追放  
(弟子ver) 『特訓編(デリア、プララ、エルガー)』 (後書  
き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「弟子ちゃんは今後どうなるの!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



51・追放されてボロボロな弟子は賢者に救われる

（ラツカライ視点）

ボクはボロボロの状態だった。

精神的にも体力的にも、極限まで追い詰められていて、思わず涙がにじんでしまう。

手足には擦り傷が沢山できて、髪の毛も顔も泥だらけだ。聖槍を持つ手は震えている。息もあがっている。

でも、それだけならまだいい。だって、

「おい、そっちへ行つたぞ」

「どこに隠れやがった」

「へへへ、馬鹿な子供<sup>ガキ</sup>だぜえ、俺たちのアジトの洞窟にまんまと足を踏み入れちまつたんだからよお！ 見られたからには、命はもちろん、あの立派そうな槍もありがたく貰ってやるぜえ！」

（ひいつ……！）

ボクはブルブルと震えた。目の前に死の予感が迫っているのだ。

恐ろしい野盗がボクの命と、聖槍ブリューナクを狙っていた。

30人……いや、もっといるかもしれない。

ボクという獲物をあぶりだすために山狩りの最中なのだ。ボクの命はまさに風前の灯だった。

「うっうっ……えぐっ……」

だから思わず涙がにじんでしまう。体中が痛くて、心が折れそうで、知らないうちに嗚咽が漏れてしまう。

なんでこんなことになったのか？

ボクは余りに才能がないと言われて、勇者パーティーを追放された。でも、それは当然なんだ。

本当にまったく、ボクには槍を扱う才能がなかったのだから。

そんなボクを聖槍が担い手に選んだ理由はいまだに分からないけれど……。

だから、そんな非力なボクが、この野盗たちの目をかいくぐって窮地を脱出するなんて、余りにも無謀なチャレンジだと言うしかないかった。

そもそも、この山がどこの山なのか、天性の方向音痴なボクは知らないうちに迷い込んだため、帰り道も皆目見当がつかないのだ。

「どこだー！ ボウズー！ 慣れない山で鬼ごっこなんてやめて、さっさと出てこいよー！ そうしたら、楽になれるぞー？ ぎゃーはっはっは」

野盗の下卑た笑い声が響く。

だけどボクは唇を噛んで、その言葉に含まれた真実を認めるしかない。ボクは山に慣れていない。

いや、そもそも槍……というか武器なんて、聖槍の使い手として選定されるまで、一度も握ったこともなかったのだから。

そんなボクが平地ならともかく、山のようなイレギュラーな地形で武器を振るうなんて、出来るはずもなかった。

しかも、ここは相手のテリトリー。相手にはボクがどこにいるか、ある程度分かっているはずだ。

ボク助かる見込みなんて万に一つもなかった。

「でもボクは……」

……いいえ。

「でも、わたしは黙ってやられたりはしないっ……」

私は恐怖を抑え込むように歯を食いしばって、聖槍を胸に抱く。

槍の名門の一族として名高い武門ケルブルグ一族。その一族から聖槍の使い手が現れたことは喜ばしいことだった。

けれど、私は女性だった。末娘だった私は、当然槍など握ったこともない。

だから、ケルブルグの当主……私の父は、その日から私を男子として扱うようになった。

長くて絹のようだと言われていた黒髪をショートにし、言葉遣いも少年らしくした。普段着だったドレスは簡易甲冑となったのだ。

でも、そのこと自体は嫌ではなかった。一族の誇りを、末娘である私が担うことができるのだから。

一つ残念なのは……。

私は目をつむり、呼吸を整えながら思う。

（髪の毛を短くした私を、誰も女性だと見てはくれなかった）

それが少し残念だった。

別に男性に見られるのが嫌というわけではない。それは必要なことだった。

でも、髪を切ったくらいで、誰も本当の私を見てくれないんだ、という事実には、少し寂しい気がしていた。

（もし本当の私を見てくれるような人に会えたら……？）

私はどうするだろう？

嬉しがるだろうか？ お礼を言うのだろうか？ それとも良いお友達になれるだろうか？

誰にも触らせたことのない髪に、触れて欲しいと思ったりするのだろうか？

そんなことを考えているうちにも、絶体絶命の局面はすぐ目の前で迫っていた。

「さて〜、残るはこっちだけかな〜？」

「早く出ておいで〜。そうすりゃ、せめて痛みを感じなくて済むぜ〜？」

「ぎゃっはっはっはっは」

もう数メートルほどしか離れていない。

すぐ近くから、粗暴な野盗たちの荒々しい声が耳朵をうつ。

せめて、一矢報いる。武門ケルブルグ一族の末席を汚す者として。

だが、せいぜいそこまでだろう。

私の槍の腕など大したことない。何せ弟子になって早々に、勇者パーティーを追放されるくらいなのだから。

ローレライさんが勇者パーティーを離れる時、貴重な回復魔法を使ってくれたけど、それもすぐに無駄になりそうだ。

「こ・こ・かあ〜?」

「はあっ!」

不用意に近づいて来た野盗の一人に、私は咄嗟に槍を突き出す。

「ぎゃッ　　こ、こいつ反撃してきやがったぞ」

「はっはっは　　だっせえ!　食らってやがる!」

「うっせーぞ!　くそ、許さねえぞ!　散々痛めつけた後に殺してやるからなあ」

「くっ……!」

全然だめだ!　肩を少し傷つけたくらいで、相手はびんびんしている。

「お前ら全員で囲め囲め!　んで一斉に斬りかかれ!　持ちもんは傷つけんじゃねーぞ!」

「わあってるよ!」

しかも、そこら中に散開していた野盗たちが包囲網を狭めて来た。

(やはり慣れているっ……!)

「そっらよお!」

「あつっ  
」

ガギン！ と私は後ろから斬りかかって来た幾つもの剣を槍で弾く。でも、前や横からの剣は弾ききれず、せめて致命傷を避けるようにして攻撃を浅く受けた。それでも鮮血が飛び散って、お腹や腕から血が流れた。

「くっ……か……体……が……」

どうして？ 傷は浅いはずなのに、身体がうまく動かせなかった。

「おっ、もう効いてきやがったな。即効性の麻痺毒さ。どうだ、これから身動きすらできず、死ぬ気持ちっていうのは？ ぎゃーはっはっはっは！」

「くう……。ここ……。まで……。なの？」

知らない山の中で、夜盗にいたぶられ殺されるのが私の運命なのか。

聖槍の使い手などと言われたけれど、その実態は才能などない只の小娘だ。

こうなることは当然だったのかもしれない。

私はそんな諦観とともに、せめて動く瞳をゆっくりと閉じた。

瞼の裏には屋敷の窓際で、風に揺れる私の長い黒髪を撫でるお母様の姿が映っていた。

だが。

その時であった。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

そんな衝撃に驚いて目を開ければ、

「「「ぎゃああああああああああああああああああああ  
あああ」「」」

今まさに私……ボクに剣を振り下ろそうとしていた野盗たち数人が  
思いつきり吹っ飛ばされる光景が目に飛び込んで来た。

何だ、何が起こったの？

それに……。

「ボクはどうして生きてるの？」

首を傾げる。

と、そんな言葉に、

「無事か？ しかし、どうしてこんなところに女の子がいるんだ？」

そう後ろから、一人の男の人が答えたのだった。

女の子？

その人はボクが啞然とした表情をしているのを見て、



「おっと、驚かせてしまったようだな。俺はアリアケ。アリアケ・ミハマ。君は誰だ？ それにどうしてここに？ ああ、いや、それより立てるか？」

男の人……アリアケさんはボクの手を取って、立ち上がらせてくれた。

なぜだろう。

その指先が酷く熱を持っているように思えた。

「大丈夫か？ 黙っているが……どこかひどく痛むのか？」

「い、いえ！」

なぜだろう。労わられるのが無性に嬉しい。人に心配をさせて喜ぶようなボクではなかったはずなのに……。

それにどうしてだろう。昔のあの長い髪でないことが無性に残念な気がした。

「それで君の名前は何だ？ どうしてこんなところに一人にいるんだ？」

「ラ、ラツカライです。その迷ってしまっ……」

「そうか。ラツカライ。ま、詳しい事情は後で聞く。今はこの場を切り抜けなくてはな」

そう言って、マントの下から杖を取り出した。

なぜだろう。

この人に名前を呼ばれると、ひどく心臓が高鳴ってしまうのは。

これは一体、なんだろう？

そんな不思議な気持ちを必死に押し隠しながら、

「はい！ アリアケさん！」

私はそう返事をしたのだった。

51・追放されてポロポロな弟子は賢者に救われる（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「確かに作者は最初からラツカライのこと弟子ちゃんって言ったなあ」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 52・大賢者アリアケの活躍を目の当たりにするラツカライ

52・大賢者アリアケの活躍を目の当たりにするラツカライ

（ラツカライ視点）

「あれ？ そう言えば、どうしてボク動けるの？」

アリアケさんの手を借りて立ち上がったボクは、今更ながらの事実  
に首を傾げた。

だって、さっきまで微動だに出来なかったんだから。

でも今はこうやって普通に動けてる。

まるで、さっき麻痺毒を食らったのがウソみたいだ。

「それならスキルで治しておいた」

「へ？ いつの間にか？ というか、ボクが麻痺状態だっていつ知っ  
たの」

「倒れてる少女がいればスキルで 状態異常確認 ぐらいするさ。  
それにどう見ても野盗に囲まれてたからな。自分に 攻撃力アップ  
をかけて、邪魔な野盗どもを吹っ飛ばしつつ、君の麻痺を 解毒  
したというだけだ」

「そ、それって。3つのスキルの同時使用なんじゃっ……」

ボクは驚く。スキルを同時に使用するのは、それだけで類稀たぐいまれなる才能なんだ。

それなのに、アリアケさんはいとも簡単にそれをやってのけたと言った。

しかも、それは余裕のある状態でのことじゃない。

敵が目の前にいて、ボクが倒れていて、そんな状況の中、一瞬でその判断と行動を行ったんだ。

それはとんでもないことだ。

スキルの同時使用が出来たって、実際にその行動を成し遂げること自体が、とても常人にはまねできない奇跡なんだ。

それをボクは理解した。

「すごい方なんですネ、アリアケさん！」

ボクは思わず声を上げてしまう。

でもアリアケさんは、

「これくらい俺にとっては大したことじゃないさ」

そう言って謙遜する。

「まだまだ余裕があるんですね……。本当に凄いです！」

ボクは正直に思ったことを言った。

ただどリアケさんにとっては本当に大したことじゃなかったみたいで、軽く肩をすくめたのだった。

「それよりも敵がおかんむりだぞ」

リアケさんは苦笑しながら注意を促す。

「野郎つ……。！ぶっ殺してやる」

「変な術使いやがって！」

「へ、へへへ！だがこの数に勝てるわけねえ！ズタボロに切り刻んでやるからなあ！」

野盗たちは一様に獣のごとく吠えたて、激高していた。

「くっ  
」

ボクは齒噛みしながら、聖槍を構える。

野盗たちの言う通り、相手の数はボクたちの10倍以上いる。

しかも地の利は向こうにある。

窮地であることには変わりない。

死の影は目前から過ぎ去ってなんていないんだ！

ボクの頬を冷や汗がツーツと垂れた。

でも、

「弱い犬ほどよく吠えるというが、お前たちは、犬のように鼻はきかないようだな」

アリアケさんは何の恐怖も……いいえ、緊張すら感じさせない様子で夜盗たちに言った。

「今、どれほど強大な相手と敵対してしまっているのか。犬ならば逃げるか腹くらいは見せているだろう。お前らはそれ以下だ。犬畜生にも劣る塵芥ちりあくたのようなものだな」

そう言つと、フツと笑つたのだつた。

「こ、これだけの数の敵を前に……なんていう胆力なの……」

ボクは舌を巻く。

この人は本当に凄い人なんだ。敵がどれだけいようと決してひるまない。

その姿はまるで英雄のよう。

きつとこの人なら、魔王にだって恐れず立ち向かうだろう。

こんな状況なのに、アリアケさんのせいなのか、呑気にそんな感想すら抱いてしまう。

（そうだ。こういう人こそが、ボクの想像していた勇者パーティーのメンバーなんだっ……！）

ボクは久しぶりに、そんな気持ちを思い出していた。

ボクは、憧れていた勇者パーティーの弟子になれると聞いて、最初は喜んでいた。

ボクのようなへボ槍使いでも、勇者パーティーの弟子になって、少しでも世の中の役に立てればと思ったんだ。

……でも、その気持ちはすぐになくなってしまった。

元々、深窓の令嬢のような生活をしてきたから、世情に疎くて、どういった人が勇者パーティーに所属しているのか、そういった詳細は全く知らなかったんだ。

正直、勇者様たちは思っていたような方たちではなかった……。

彼らは口を開けば他人の悪口を言っていたし、特に向上心なんかもないようだった。

それなのに、口だけは大きなことを言っていた。

旅の道中で人が襲われていても見ぬふりをしようとしていたし、それをローレイさんに叱られて渋々戦っていたっけ……。



まさに、アリアケさんとは対極の人たちだったんだ。

だから、ボクの気持ちは急速にしぼんでいった。勇者パーティーに憧れていた自分を恥じるようになるくらいに。

（でも、アリアケさんのおかげで、久しぶりに、あの気持ちを思い出すことが出来た！）

あんな勇者パーティーに憧れたのは恥ずかしいことだったかもしれないけど、アリアケさんみたいな真の英雄と一緒に世界を旅をして、人の役に立ちたいって言う気持ちは正しい思いだったんだって。

そのことを思い出せてくれたんだ。

ああ、もしこの人が勇者パーティーのメンバーだったらしたら、ボクは絶対に追放されないように、最後まで頑張ったのに……。そんなありもしない空想をしてしまう。

この人とずっと一緒にいて、色々教えてもらいながら、世界を救う旅が出来たらどれほど私は幸せだろうなんて……。

それは勇者パーティーに一時的に滞在していた時には、決して抱く事の無かった気持ちだった。

だが、そんなことを思っていると、野盗たちが更に激高して叫び声をあげた。

「ええい、もう我慢ならねえ！」

「どっちが塵芥ちりあぐたなのかすぐに分からせてやらああああああああ」



「くそつたれがあああああ！　なんでこんな優男が、こんなに強ええんだよおお　ぎゃあああああああああああああああああああああ  
ああああ」

断末魔が間断なく山にこだました。

「ほ、本当にすごい。もう10人以上を吹っ飛ばした。そ、それに一瞬で何発も攻撃を加えてるっ……！」

ボクはその戦いのレベルに驚愕するしかない。

だけど、それがいけなかった。

そんな無防備な人間がいれば、野盗のような下卑た人たちが考えることは決まっている。

「おい、そのガキい！　大人しくしなあ！　人質になってもらうぜえ！　げへへへへへへ！　おい、優男お！　てめえ、一歩でも動いてみやがれえ！　そんなときゃあ、このガキのきれいな顔が無茶苦茶になっちまうぜえ！」

そう言つて、ボクにナイフを突きつけて来たのだった。

……だけど、アリアケさんはポカンとした表情で、

「何を言っているんだ。なあ、ラツカライ？」

そう言いながら首を傾げると、

「そいつくらい、君なら簡単に倒せるだろう?」

あっさりとそう言ったのだった。

「えっ　ど、どうしてそう思うんですか?　ボクは戦いなんてからっきしダメで……」

倒せる?　ボクが、この凶悪な野盗たちを?　無理だ。だって、ボクには才能なんてない。だから勇者パーティーを追放されたんだから。

でも、アリアケさんは優しげに微笑むと、

「だって俺の攻撃が視<sup>み</sup>えていたんだろう?　『一瞬で何発も攻撃を加えてる』って言うていたじゃないか。いや、大したものだ。それほど目の持つているなら、野盗どもの攻撃なんて止まっているよ。うなものじゃないのか?」

「止まっ……て?」

ボクはその言葉に驚く。

ボクは自分のことを何も出来ない無能だと思っていた。

だから、何の力もないと確信していた。

勇者パーティーでも全く評価されなかった力だ。

それなのに、アリアケさんは会ってほんの数分で、ボクのことをちゃんと理解して、言い当ててくれたんだ。

そうだ。

恐怖で震えていて。

死の予感に怯えて。

目の前が真っ暗だったせいでよく見えていなかった。

誰も言ってくれなかったし、誰にも分ってもらえなかった。

だけど、アリアケさんは分かってくれたんだ。ボクにすら見えていなかった、ボクの力を見抜いてくれた。

「攻撃が得意じゃないなら。しなくてもいい。防御や回避をした際に、相手の動線上に武器を添えるようなイメージで動いてみる。そうすれば自分はほとんど動かず、勝手に武器が相手に当たるから」

しかも、ボクに合った戦い方まで……！

「凄い、さすが、先生……」

「先生？」

「あっ、っ、っ……」

思わず口から出てしまった。アリアケさんはポカンとしている。

(でも)

私は思う。

これが、何かを教わるってことなんだ。勇者パーティーでは一度も感じなかった感覚。真に優れた教師に何かを習うっていう、そんなとてつもない充実感……。

アリアケさんの教えに基づいて、ボクは落ち着いて周囲を見渡す。

すると、野盗たちの剣は面白いほど単純な軌跡を描いていた。

「こんなものに、当たるはず、ない」

ボクはその剣筋を軽く槍の腹でいなすと、その勢いを殺さずに野盗の体へぶつける。

「うっぎゃあああああああああああああああああああああ  
」

大きな悲鳴がとどろいた。

「な、何なんだよこいつら……」

「に、逃げる」

「う、うわあああああああああああ」

ボクのやったことと、何よりアリアケさんの余りの凄さに野盗たちは総崩れになった。

あとは掃討戦だった。

逃げ惑う野盗たちを、アリアケさんは見事な手際で迅速に捕まえて行った。

こうして、100人以上いた野盗集団は、アリアケさんというたった一人の英雄に蹴散らされ、一網打尽にされたのだった。

（まったく、詩人が詠<sup>うた</sup>っても、夢みたいな話だと笑われるかもしれない光景だね）

あまりの凄さに苦笑してしまう。

でも、決して夢じゃない。

ボクは呑気に目の前を歩くアリアケさんの背中を見て思う。

（この人こそ、私の英雄様……。先生……）

叶うならば、この人に一緒に旅をして、色んなことを教わりたい。

そんな思いを強く抱いたのだった。

52・大賢者アリアケの活躍を目の当たりにするラツカライ(後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



### 53・賢者の弟子

#### 53・賢者の弟子

↳ラツカライ視点↳

「そうだったのか。まさか君も俺と同じで、勇者パーティーを追放された身だったとはなあ」

テーブルの向こうのアリアケさんは朗らかに言った。

今ボクたちは山のふもとの村にいた。ここは小さなお店。カフェ

アリアケさんはコレットさんと言う方と一緒に旅をされているそうだけど、その方は別件で今は席を外しているとのこと。

「は、はい。とは言っても、ボクは『無能』で『取柄がない』から追放されたんです。アリアケさんみたいな凄い人とは全然違います」  
あの山でアリアケさんに助けてもらって、とうとう自分がついて行くべき人を見つけたと舞い上がった。

絶対に弟子にしてもらおう！ って。

（でも、よく考えたらボクなんかを弟子にしてくれるわけないよね

……)

だって、

「アリアケさんみたいな有能な方を追放する理由は理解不能ですが……。でも、ボクみたいな人間を勇者パーティーから追放する理由は無能っていうだけで十分です。勇者様たちからも散々、無能だ、使えない奴って、何度もはつきり言われましたから」

言っていて、とても悲しい気持ちになって来た。

とてもじゃないけど、こんな無能なボクが、アリアケさんに弟子入りしたいなんて言い出せるはずもない。

弟子になって、ずっと一緒にいたい。だけど、だからこそボクみたいな無能がそんなことを言い出す資格なんて無い。そう痛感する。

けれど、なぜかボクの言葉にアリアケさんはキョトンとした表情を浮かべる。

そして、

「ラツカライ。君のどこが無能なんだ？」

そう言っつて首を傾げたんだ。

「えっ？」

ボクは反対に、そんな反応が返って来るとは思わず、驚いてしまう。

「ボ、ボクが無能なのは、あの山で散々御覧になったじゃないですかっ……！」

思わず声を上げてしまう。

「ろくに槍を振るうことも出来ず、野盗に囲まれていいようにやられてしまいました。アリアケさんのアドバイスで何とか一人は撃退しましたけど……。だけど、それも偶々たまたまです。ろくな攻撃手段も持たない無能者であることに変わりはないんですからっ……！」

ポロリ、と。ボクの瞳から滴が落ちた。

本当に恥ずかしい。

自分の無能さを訴える恥ずかしさで、涙までこぼしてしまうなんて。何より、こんなことを言っていてアリアケさんに嫌われてしまうんじゃないかって。

それが一番怖かった。

こういう時だけ私は女の子に戻ってしまう。

でも、

「まず、君は逃げなかった」

「へ？」

突然、アリアケさんは言った。ボクには何のことか分からない。

「戦士の資質には逃げないことがある。決して仲間を裏切らないということだ。君は野盗たちに囲まれたときに、俺を置いて逃げようとは一切しなかった。命の危険があるあの状況で、まったくその素振りを見せなかった」

「そ、そんなことは当然のことです……」

ケルブルグ家の者として、何があるうと、仲間を見捨てたりなんかしない！

けど、アリアケさんは優しく微笑むと、

「ラツカライ。それは当たり前のことではないんだ」

そう言つて私の頭<sup>ボク</sup>に手を置いた。

「それはまさに戦士としての前提であり、また究極の『資質』だ。決して裏切らない仲間にか、背中を安心して任せることは出来ないのだから。これは本当に大切なことなんだぞ？ ラツカライ。お前もパーティーを組めば、そのことが分かる」

ボクは最初、アリアケさんの言葉の意味が分からなかった。

でも、なぜか息が出来なかった。心臓が早鐘を打っている。

そして、先ほどと同じで、知らないうちに涙がこぼれていた。

でも、それはさっきの羞恥心からのものではない。

ボクは初めて人から戦士として認められたんだ。

聖槍に選ばれてからずっと独りぼっちだったボクに、アリアケさんは背中を守らせられる仲間の資質があると言ってくれたんだ。

そのことにボクは息が止まる程、感動していたのだった。

本当に。本当にアリアケさんは凄い。

野盗からだけじゃなくて、ボクの心まで救ってくれた。

「あ、ありがとうございます。アリアケさん……うっ……ひっく……」

思わず嗚咽を漏らしてしまう。

その間もアリアケさんは大きな手で私の頭を撫でてくれていた。

……ああ、この手だ、と思う。

この大きな手に包まれていると、とても安心する。

気持ちが温かくなって、絶対に離れたくなってしまうのだ。心臓が早鐘をうって、何も考えられなくなってしまふ。

「ただまあ、本来ならエルガーがこのことを言えなければならぬんだがな……」

ボクの頭を撫でながら、アリアケさんは呆れたように言った。

「防御力を誇るのもいいが、戦士の真の役割は……本当に大切なのは仲間の絆を守ることなんだと、何度も教えたのだがなあ。はあ〜」  
「どういうことですか？」

「防御の要たる戦士の真の役割とはな、パーティーの精神的支柱であることなんだ。パーティーが窮地に陥ったときでも、戦士が踏ん張り、皆を叱咤激励することで、体力的にも精神的にも持ちこたえさせる。最終的なパーティー崩壊を踏みとどまらせる。それこそが真に求められる役割なんだ。防御力が強いだの、ガタイが良いだのは、駆け出しの戦士が言う事だ。もし、そんなことを今だに言っていたら、本当に何も学べていないということになるのだが……」

「……いえ、エルガーさんはずっと防御力がどうこう、筋肉がどうこうって、おっしゃっていましたが……？」

「はあ〜……。成長していないな、あの馬鹿は……」

アリアケさんが更に深いため息をついた。

あの勇者パーティーのことだ。とてもご苦労されていたんだろう。

何より、アリアケさんの教えを受けながら成長できなかったエルガーさんの事を、とても可哀そうに思うのだった。

でも、とにかくアリアケさんのおかげで、ボクの心に巣食っていた悲しい気持ちや孤独感が癒された。

だから、ボクは改めて心からお礼を言う。

「本当にありがとうございましたアリアケさん。ボクにも誇れる才能があるってことを見つけてくださって！」

そう言っつて、久しぶりに心から微笑む。

だけど、アリアケさんは少し苦笑いを浮かべると、

「おいおい、俺は言っただろう。『まず君は逃げなかった』と。ラツカライ、君にはまだまだ沢山の才能がある」

そう断言するように言っただった。

さすがに、ボクは慌てて首を横に振り、

「えっ　そ、そんな……。さすがにボクにそんなにたくさん別の才能があるわけじゃないですよ」

そう言っつて否定する。

でも、

「いや、あるある。……が、とはいえ、これは実際にやってみて、自分で体感してもらった方が早いだろうな」

「へ？」

体感？

アリアケさんは言っつてから、飲んでいたコップをことりとテーブルに戻すと、

「ラツカライ。君さえ良ければ、少し特訓してやるつ。今から、どうだ？」

そう言つて外に視線を向ける。

「え？ え？」

突然のことだった。

あまりの早い展開に完全には頭がついて行つてない。

でも、

( だけど、嬉しい…… )

ボクは喜ぶ。

まるで本当に弟子入りしたみたいだったから。

ボクははやる気持ちを抑えるようにしながら頷くと、アリアケさんの背中を追いかけるようにしてお店を出たのだった。



### 53・賢者の弟子（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 54・御前試合にラツカライは誘われる

54・御前試合にラツカライは誘われる

（アリアケ視点）

俺とコレットは海洋都市『ベルタ』に向かっていた。

当初はオールティの町を目指し、海を渡るために寄る予定だった。

しかし、王都から突然使者が寄越され、勇者パーティーとの『御前試合』の依頼があったのだ。

試合は2対2で行われる。

何でも、王族や大衆たちの前で戦うことで、民の心を慰撫し、また魔族へ対抗する士気を高めることが目的らしい。

俺自身は世俗からは引退した身であるし、もはや王族や大衆たちが自分たちの力で未来を切り開いていくことを期待する立場だ。

ただ、

（ふっ）

つい頬が緩む。俺もまだまだだ。

俺から巢立った頼りないアイツらがどれほど成長したのか。

勇者パーティー

教師としては出来損ないの生徒ほど可愛いものだ。

気付けば、俺はその依頼を受けるとともに、彼らを久しぶりに指導してやるうと思っただけである。

そうすることで、頼りないアイツらも、また一步、牛歩のごとくではあるうが、成長できるのだから。

導き手とは、不出来な者にこそ、寛容であるべきなのだろう。

そう感慨深く思っただのである。

さて、そんな俺の目の前にいる少女は、聖槍の使い手ラツカライだ。

海洋都市『ベルタ』に向かう途中で立ち寄ったこの小さな町で、悪さを働いていた野盗を壊滅させようと赴いたとき、山中で偶然出会った少女である。

彼女が勇者パーティーに弟子入りし、どんな目に遭ったのか、そして追放されたのかについて詳細は聞いた。

そのうえで俺は彼女をカフェの外に連れ出し、広い場所に到着するや、おもむろに口を開いたのである。

「ラツカライ。君さえ良ければ、俺と一緒に御前試合に出ないか？」

俺の突然の提案に、彼女は「え？」と最初何を言われたのか分から

ない風であったが、意味を理解するとすぐにシユンとした表情になった。

「アリアケさんと肩を並べて戦えるなんて本当につれしいです。でも、ボクなんかじゃ、アリアケさんの足を引っ張るだけですよ……」

そう悲しそうに言った。

だが、

「はははは、そんなことはありえないと思うぞ？」

俺は明るく笑う。そして、

「ラツカライ、カフェでも言っただろう？ 君には才能がある。そのことを俺は見抜いてしまっているんだぞ？」

そう断言したのである。

ラツカライは頬を染めて一瞬嬉しそうにする。だが、すぐにまた肩を落とす、

「いえ、やっぱり無いと思います。だってボク、勇者様の究極的終局乱舞ロントミアでボロボロにされて負かされましたし……」

「ふむ、ではその技を一度見せてもらえないか？」

俺のその提案に、

「え？ いいですけど」

ラッカライはあっさりと頷く。そして、

「聖槍版ですが……。いきます、ロンドミア・ワルツ！ です！」  
槍が踊るかのごとく舞った。

「やっぱり、勇者様みたいにスピードが出ないです……」  
槍を振るった後、ラッカライが落ち込んだ様子で言う。

だが、俺はニヤリと笑い、

「ほらな？」

「え？」

ラッカライは、分からない、という表情をする。

「一度見ただけで再現してしまえただろう？」

「へ？」

まだ分かっていないようだ。やれやれ。

「そんなことは、誰にも出来ないことなんだ。それが君の才能だ。  
ラッカライ」

ラッカライはビックリし、混乱した様子で、

「才能？ このボクに？ でも、どういうこと？」

子供らしくあたふたとした。

「まあ、もしかしたら、勇者パーティには、動体視力がいいだけ、だとか、目がいいから回避が得意だとか言われて追放されたかもしれないな。しかし、それは愚かな間違いだ」

「で、でも、じゃあ、ボク才能って？」

「君の才能、それはな……」

「は、はいっ……」

彼女は固唾をぐくりとのんだ。

「『見稽古』だよ」

「へ？ み、見稽古？」

彼女はあっけにとられた様子を見せてから、大きくホッと息を吐いた。

「なーんだ」という声が聞こえてきそうな反応だ。

「ははは、『何だ、ただの見稽古か』と思ったか？ ま、言葉の通りなら平凡そつに聞こえるか」

見ることで相手の技を盗むという、一見些細な才能だからな。

俺は微笑む。しかし、はつきりとした口調で告げた。

「だが、見るだけで相手の性質くせを理解し、攻撃方法や防御方法を習得する技術は、相手にとつてとてつもない脅威だ。なぜなら、敵の本気の攻撃を一度受けて尚、生還したのなら、次は対策を立てて挑むことが出来る。それは、その相手には絶対に負けることがないということだ」

俺の言葉にラツカライはハツとした表情になる。

「そ、そつか。確かに一度見て覚えた攻撃なら、何が欠点かも手に取る様に分かる！」

そう言うてから、更に気づいたとばかりに手を打つと、

「じゃ、じゃあ。勇者パーティーから追放される時に、メンバー全員から攻撃を受けたボクは、今度戦ったら勇者様たちみんなに勝てちゃう?」

そう首を傾げながら呟いたのだった。

「は、ははは……。ま、まあ、さすがに勇者パーティーも本気など出しているはずもないだろうから、そう簡単にはいかないとは思うがな。……う、うん、さすがに、な」

俺は柄にもなく自信なさげに言った。

「そ、そうですね。さすがに仮にも弟子相手に全力を出すような大人げない真似するわけありませんよね……。まさか本気だったはずがありませんね」

ははははは、と二人で笑う。

「でも、もし万が一そんなことがあったとしたら、御前試合では、ボクが勇者様たちに欠点とか弱点を色々教えてあげるとして事になるのかな……？　けど、そんなことあるわけないよね」

彼女が何か呟いていたが、小さな声でよく聞こえなかった。

ともかく話を戻すでしょう。

「ま、君を突然、御前試合に誘ったのはそういうわけだ。勇者パーティーを知る君なら、いい勝負になると思ったわけだ。俺も上に立つ者として勇者パーティーアイツらを指導はするが……。ただ、一方で『同輩』の君と戦ってもらうことで、あいつらも別の意味で学ぶことが出来るだろう」

俺はそう言つと、

「出来ない奴らだからこそ、こうして色々な形で手間をかけてやらないとなあ」

俺はしみじみとそう言ったのである。

だが、その言葉になぜかラツカライが頬を膨らませたのだった。

「……そっか、出来ないのも得になることがあるんですね……。不出来だからこそ、アリアケさんにここまで面倒をみてもらえるんですから……。出来ないことが羨ましいなんて……。嫉妬しちゃうなんて……」



ふむ、よく分からないが、何やらラッカライには思うところがあったようだ。ブツブツと言っている。

「……あれ、そういえば……。同輩って？」

ラッカライが突然気づいたように言った。

俺は苦笑しながら、

「俺はもう引退した身ではあるが、聖槍の担い手である君が求めるなら、道中、君を弟子として指導しようと思っている。どうだ？」

そう提案する。

「は、はい！ 宜しく願います！ アリアケ先生！ ボクの方からお願いしようと思っていました！」

「そうか」

フツ。俺は微笑む。

彼女も嬉しそうに微笑んだ。

武の名門ケルブルグ家。

その末姫が聖槍に選定されたことは知っていた。

その末姫が偶然とはいえ、こうして俺の元にやってくる。

やれやれ、俺はため息を吐く。

分かりやすいものだ。

運命がまたしても、俺を中心に加速し出そうとしているのだろう。

今回は自業自得とはいえ、世界はどうしても俺を中心へと据えたがる。

俺はそんな事実を肩をすくめつつ、新しい弟子、聖槍ブリーユーナクの担い手ラツカライの鍛錬プランを考え始めるのであった。

#### 54・御前試合にラッカライは誘われる(後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるのっ……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 55 ・修行の成果（ゴブリンの巢窟、駆除クエスト）

### 55 ・修行の成果（ゴブリンの巢窟<sup>そうくつ</sup>、駆除クエスト）

「「ぎぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」

バタ、バタ、バタ！

10体のゴブリン・ソードたちが一斉に倒れた。

それを行ったのは聖槍ブリユーナクに選定された俺の弟子ラツカライだ。

ここはゴブリンの巢窟<sup>そうくつ</sup>で、俺たちはその掃討クエストにいそしんでいる。

ベルタでの御前試合までの1か月の間、俺は様々な修行を彼女に課した。

特に彼女は『目がいい』ものの、まだ幼いために思った通りに体が動かないと言う課題があった。

勇者パーティーを追放されたときも、勇者の究極<sup>ロンドミア・ワルツ</sup>的終局乱舞や、他のメンバーからの一斉攻撃をいなし切れずにやられたという。

逆にその欠点さえ克服すれば、彼女に大きな欠点はなくなるだろう。だから彼女にはこの1か月間、実際に多数の攻撃にさらされても冷静にそれら攻撃を受け流しつつ、反撃する術すべを実戦で学び、そして修得してもらったというわけである。

その結果が、先ほど一斉に襲い掛かって来たゴブリン・ソードたちの成れの果てというわけだ。

背後からでも死角からでも問題なし。

俺の考案した修行によって、ラツカライは完全に以前の欠点を克服していた。

ゴブリンたちを倒したラツカライはリラックスした様子で戻って来ると、

「先生の修行方法は本当に凄いですね。ボク、おかげでこんなに強くなれました！」

そう言って、俺に向かって屈託なく微笑んだ。

フツと俺も微笑み、

「これくらい大したことではないさ。もともと君には才能があった。才能を引き出すのは、人々の上に立つ俺のような人間の役割さ」

だが、ラツカライは「そうでしょうか」と首を傾げると、

「そもそも、人の才能を見出すということ自体が物凄い慧眼ですよ。鍛えるだけなら出来るかもしれないですけど、才能の種を見つけるなんて、余程の目を持っていないと出来ないことです。はい、ボクも特別な目を持っているからこそ、そう断言できます！」

なぜか興奮気味に言った。

やれやれ、俺にとっては普通のことなのだが、世間一般からすればそうなるのかもしれないなあ。

いくら俺が説明しても、非凡であるという評価を受けるならば、反論しても無駄だろう。

本当に俺にとっては大したことはないのだがなあ。

「じゃが、それにしても、ラツカライが加入してくれたおかげで、パーティーのバランスや連携が格段に良くなった気がするのじゃ。さすが旦那様じゃなあ」

そう言ったのは、ゲシュペントドラゴン種族の長が娘『コレット』デューブロイシス』。

俺の旅の道連れだ。銀色の髪を長く伸ばした紅き瞳のドラゴンの末姫はカラカラと言った。

俺は肩をすくめつつも、彼女の言葉を認める。

俺の判断によって、俺たちのパーティーはずいぶんと『手堅い』パーティー構成になった。

そのことを思うと、自然と勇者パーティーのことが頭に浮かぶ。

残念ながら、勇者パーティーはバランスが悪い、典型的なアンバランスなダメパーティーだ。

攻撃に偏重しすぎていて、一度崩れるとパーティーが崩壊しやすい。評価をすれば、Dランクあたりだろうか？

勇者は攻撃型で突出しがちであるし。

デリアはサポート役を任じてはいるが、その勇者を全くコントロール出来ていないばかりか、全体を見る視点もないので補佐としても全然機能していない。

プララは魔法使いだが、本来、俯瞰的、戦略的思考が必要な補助魔法の使用が極めて苦手だ。タイミングも頻度もセンスがない。そのため攻撃魔法に偏重してしまう。

エルガーも体を張った筋肉タンク役しかできない不器用さを露呈しがちであり、とにかく絡め手の攻撃に弱い。

以前は、俺や大聖女がいたから良かったのだが、今は別のメンバーの、ローレライという以前一時的に冒険を共にした少女と、バシュータというポーターが加入しているらしい。

彼らが勇者パーティーに散々苦労させられているのではないかと、心配でならない。

まあ、さすがにそこまで酷いことにはなっていないと思うが……。

俺がいなくなつたとは言え、腐つても勇者パーティーなのだから。しっかりと自分たちのレベルを見極めたダンジョン攻略、仲間と絆を深めつつの連携の模索、そして間違つても犯罪などは起こさないだろうし……。

「……だが、それにしても、ラツカライを加入させておけば、パーティーのバランスが良くなつたに違いないのだが……そんな簡単なことすらも分からなかつたのだろうか？ そうだとすれば愚かに過ぎるが……まさかなあ……」

俺は不可解過ぎて首を傾げる。

「さすがにそれくらいは気づきそうなものだ。あれだけ出来ないアイツらでも、それくらいのことは、な。……不思議だ、まあ、まさか自分のポジションを奪われるとか、そんな個人的なことで、パーティー全体の戦力アップの機会を手放すはずもないし。いや、本当に謎だ……」

謎過ぎて、俺ともあろうものが、深く深く眉間にしわを刻んだ。

俺をここまで困惑させるのは、世界広しと言えども、勇者パーティーくらいである。

ある意味、さすが、と言える。

「あのう、アリアケさん？ いつも思うのですが、どうして勇者パーティーに対しては過大評価なんですか？ 今、アリアケさんが言ったこととは、全部、十分ありえると思うのですが……？」



と、俺の独り言に返事をしたのは、大聖女アリシア＝ルンデブルクだ。美しい長い金髪と碧眼を持つ、幼馴染の少女。

一旦、教団本部に戻っていたようだが、大教皇への謁見が終わった後、大急ぎで戻って来たとのこと。

「ははは、さすがにそんなことはあるまい。それが事実ならただのカスじゃないか」

俺はあっけらかんと言った。

「……………」

なぜかアリシアは黙ってしまった。

うーむ、なぜだろうか…………。

まあ、ともかく俺たちのパーティーはなかなか優れた構成だと言って良いだろう。

『攻防一体型』であり、隙がない。

どんなダンジョンでも踏破可能な安定した強さを誇っているうえに、俺という存在を中心に爆発力まである。

コレットがあまりにも頼りになる攻撃の中心的存在であるし。

アリシアが蘇生魔術や上級回復魔法を使用できる聖女の頂点であるし。

ラッカライは成長途上とは言え、背中を任せられる信頼に足るタンクだ。それに、攻勢<sup>後の先</sup>防御の型を極めることを予感させる才能もある。それゆえに彼女の生還率は高い。そして、その才能は『見稽古』の才により一種異能の域に達していると思う。彼女は、勝てなくとも、負けない戦いができる戦士と言えよう。

そして、何より最強の賢者たる俺がいる。あらゆるスキルを使用できる、最強のポーターである俺が。

これほどのパーティーは大陸中を探しても見つけれまい。

「それにしても、少し怪我をしてもすぐにアリシアお姉様が回復してくれるので、何の心配もなく戦えます。本当にすごいですね」

「えっ、そうですか？ んふふふふ、照れちゃいますね。でも、ラッカライ君だってピンチになっても絶対アリアケさんの背中を守ろうとしてくれますから、お姉さんも安心して呪文詠唱に集中できるんですよ？」

「えっ　えつと……。あ、ありがとございます」

「照れおって、なかなか殊勝な少年じゃな！　うむうむ、その歳であっばれじゃ！」

「ボ、ボクなんて……そんな。コレットお姉様が前衛で敵を引き付けてくれるから、守りに集中できるだけですよ」

「ぬおおおお！　もっと言うがよいぞ！　にやはははははは！」

そして、お互いの信頼感が高いことが何より大事だ。



俺の言葉に皆「お疲れ様でした」という返事をした。

そして、一息ついたとばかりに、ラッカライは今まで結っていた髪の毛のリボンを一旦外す。

ラッカライの髪の毛は、以前出会った時よりも少し伸びていて、肩くらいの長さになっていた。

彼女は汗をかいて鬱陶しいのか、それを少し手で払う。

と、その時である。

「……………あれ？」

アリシアがラッカライを見つめながら、驚いた様な声を上げた。

「あれ、あれ、あれれれれ????？」

まじまじと髪の毛をほどいたラッカライの全身を見る。

「ど、どうされたんですか、アリシアお姉様？」

ラッカライは驚いているようだ。

だが、アリシアはそんな様子には頓着せず、確信を得た様に頷き、そして深く目を閉じると、

「ラッカライ君　あなた女の子ですね」

「な、なんじゃとおおおおおおおお」

コレットも絶叫した。

……あれ、言ってなかったかな？

俺は絶叫する二人の少女と、それに驚く一人の少女を前に、首を傾げるのであった。

） アリシア視点 ）

はわわわわわわわ！

どうしましょう、どうしましょう！

この聖女さん、最大の不覚です。

コレットちゃんだけでも「ああ、私、二番手確定じゃないですか」（泣）」と確信し、そして「せめて、2番ポジションはキープ！  
アリアケさんを後衛で守るポジションは絶対キイイプ！」と思つて、大教皇様への説明もそこそこにダッシュで戻って来たと言つのに！

気づかなかつた！ まさか女の子なんて！ 可愛い男の子が加入したな、くらいに思っておりましたのに！

ああ、まさか、女の子だったなんて！



気づかなかった！ まさか女子おんなじゃったとは！

しかも、髪の毛をほどいたら美少女になるという、超絶技巧を駆使するタイプ！ 絶大なる女子力！

そのうえ、そのうえ、『戦う』といっても前衛だけではない！

旦那様の『背中を守りながら戦う』という、そんな奥ゆかしいスタイル！

ぬああああ！ 頭の悪いわたしには絶対に出来ぬ何と言う、いじらしき戦闘スタイルなのじゃ！ 羨ましい！ やってみたいけどわたしには向かぬ！ 出来ぬ！

わ、わわわ、わしつてば、やっぱり、3番手になってしまうのか

か、肝心のラツカライの様子はどうなのじゃ ちらちらちら！

（アリアケ視点）

「あ、あの……」

突然、混乱し出したアリシアとコレットの様子にドギマギとした様子で、ラツカライは口を開いた。

「た、確かにボク……。いえ、私は女の子です。非力かもしれません。で、でもっ……」

彼女は決意するように、

「アリアケさんや、そしてパーティーに快く迎え入れてくれたアリスアお姉様やコレットお姉様のことに迷惑をかけないように、一生懸命尽くしたいと思います。力は女の子だから弱いかもしれませんが、どんな敵が来ても、皆さんの背中を私は守ります。いいえ、守らせてください！」

そう言って心配そうながら、決意を込めた瞳で俺たちを見たのだった。

恐らく、またパーティーを追い出されるかと思ったのだろう。

しかし、

「わ、私は自分が恥ずかしい。こんな小さな少女が私たちのことを守るって言うてくれるのに……。わたし、自分のことばかりでした……。2番手ポジションのことばかりでした。ええ、ええ、聖女さんは反省しましたよ！ だから、ここに誓いましょう。私もね、ラツカライちゃん、あなたの心を大切にし、そしてあなたのことを必ずや守ってみせましょう。私の大事な仲間として。いいえ、妹として！」

「ア、アリスアお姉様……」

ラツカライが頬を赤く染めた。

「わしもじゃ……。よもやドラゴンの末姫なのに3番目とか、そんなことばかり考えてしもうた。ドラゴンの誇りって何それ？ み



たいに狼狽してしもつて、めっちゃ猛省した。誇り高いのはそなたの方であったな。……ゆえに、このゲシュペントドラゴンの末姫もここに誓おう。わしらは姉妹じゃ。どんなことがあるうとも、固く絆を結び、嘘を吐かず、けっして裏切らぬ。わしらは共に最後まであろう！」

「コレットお姉様……。は、はい！ 私なんかを受け入れてくれてありがとうございますー！」

涙声でラツカライが言った。

良かった、良かった。いきなり混乱し出した時は何事かと思ったが……。

2番とか3番とかは、何を言っているのか、まったく分からないけど……。

「あの、ところで、今日あたりは一緒のベッドで眠りませんか？ もっと仲を深めましょう。……あと、姉妹なのはOKなのですが、少しですね、腹を割ってですね……ちょっと話した方がいい気がするのですよね……そろそろ」

「あつ、うん。そうじゃなあ。わしもそれ、思っと思った……」

「えっと、あ……。そういう……。は、はい。分かりました。お姉様方……」

3人がお互いの課を意味深に見合わせると目を伏せた。

……んん？

「何を話しているんだ、おまえたち？」

途中から話の内容がよく分からなかったが……。

「いえ、何でもありません、アリアケさん」

「なんでもないのじゃよ、旦那様」

「女の子には色々ありますですね、先生」

むう。

何だか男の俺は蚊帳かやの外らしい。

まあ、しょうがないか。

女性には女性の世界があるのだろう。それに立ち入ろうとするのは野暮というものだ。

と、そんなことを思っていると。

「私たち3人で、アリアケさんを、守りましょうね」

遠くで何やらヒソヒソと、少女たち3人が囁きあっていたようだが、その声は小さすぎて、俺にはよく聞き取ることが出来なかったのだ。

一方その頃、××××は

『聖槍がそろそろベルタへと至るか?』

『はい……××××様』

『勇者から離反したのは誤算であったな。本来ならば担い手の心を黒く染め、意のままに操る計画であったが……。かの海の神性を解き放つために……』

『あのアリアケが偶然ながら拾ったようです』

『……あの者か。なぜか奴が動くとき世界の命運が共にしているように見える。ただの無能だと報告を受けていたのだが……』

『いかがいたしますか?』

『慌てることはない。奴が有能ならば、聖槍の担い手は奴の元で成長するであろう。勇者では荷が重かったであろう。だが、勇者が無能であるならば、それはそれで使いみちがあるというものだ。計画に修正はない』

『御意のままに』

『くく……くくくく……。御前試合が楽しみだ』

昏き洞窟の片隅で、暗黒にのまれた者どもの、暗い笑いが響いてい

た。

55・修行の成果（ゴブリンの巢窟、駆除クエスト）（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

56・一方その頃、勇者ビビアたちは　　く勇者はかつての弟子  
を思うく

56・一方その頃、勇者ビビアたちは　　く勇者はかつての弟子を  
思うく

俺たち栄えある勇者パーティー一行は、王都『パシユパシーン』か  
ら海洋都市『ベルタ』へ到着していた。

海洋都市『ベルタ』は実際に海上に存在する大都市であり、本土に  
続く道はわずかにあるだけだ。

そして俺たちは今、街を挙げての歓迎パレードの最中だ。俺たちを  
乗せた馬車が中央通りを通ると、沿道でこったがえした老若男女が  
歓声を上げる。

「きゃー勇者様あ！　かつこいー！」

「御前試合がんばってー！」

「こつち向いてー！　アリアケなんか一撃よー！」

くくくくくく……。

「ぬあーっはっはっは！　当たり前だあ！　ああー、これだよこれ  
え！　これが大衆共の正しい姿ってえ奴だあ！　俺の勝利と栄光を

疑う必要なんてねんだからなあ！」

「本当ですわ！ 私たちに敗北などありえないのですから！」

「うむ、大陸最強の俺たち勇者パーティーという英雄を迎えるに正当な態度というものだなあ！」

「やっぱコレだよな！ 勇者パーティーはコレがなくっちゃねえ」

王都から離れたここ海洋都市『ベルタ』には、根も葉もない、俺たち勇者パーティーに関する悪い噂はまだ流れてきていない様だった。

目をキラキラさせて羨望の眼差しを向ける下々の奴らの、なんと可愛らしいことか！

だが、この羨望と尊敬はこの街だけの物ではないんだ。

(ぎひひひひひひ)

ついつい澆刺とした笑みがこぼれてしまう。

何せ、明日行われる御前試合で全てが元通りなのだ。俺たち勇者パーティーの根も葉もない嘘、悪評が吹き飛び、輝かしい未来が訪れる！ アリアケに勝利することは既に決定した未来！ 俺たちが再び尊敬と羨望の眼差しの中で、名誉と金と名声、すべてを取り戻す未来は目の前に来ているんだ！

(し・か・も・だ！)

俺は更に唇を歪める。





「あの、さすがに油断大敵ではないですか？」

「油断？ く、く、くくくく　くはははははははあ！　ぎひいひひひひひひ！」

ローレライの俺を心配してのその言葉に、思わず笑ってしまふ。

だが、ローレライがなぜか俺から距離をとる様に広い馬車の隅へと移動した。

座り心地でも悪かったのだろう。

俺は彼女に声が届くよう大声で言う。

「ラツカライには才能が全く無い！　だから、成長なんてするはずがねえ。何せ俺でさえ、育てることが全くできない無能だったんだからなあ！」

そう言っつて唇を激しく歪める。

しかし、ローレライは眉根を寄せると、

「あれは修業と言えるんですか？　本気で襲い掛かっただけじゃないですか」

そう言っつて不満そうにした。

やれやれ、分かってねえなあ。

「ま、確かにちーっとばかり敵しすぎたかも知んねえなあ。……だ

がなあ、戦いつてのは厳しいもんだ。本気でやるからこそ俺には分かったんだよ。あれは無能だ。絶対に成長しねえ」

そう断言する。

ああ、これだけは間違いねえ。

まあ、確かにあの時は、俺の攻撃をズルでかわしたから、ちよいとばかりムカついて、少しだけ、ほんの少しだけ本気でもんでやった。

だが、そのおかげで、あいつの実力が計れたのも事実だ。

何せ俺は勇者。誰よりも優れた人間だ。当然ながら、人を見る目は確かだと、確信をもって言える。

「これだけははつきりと言える！ あいつに成長の余地なんてねえ。腕力も魔力も足りない奴に、成長する余地はまったくねえ！ 神にだって誓えるぜえ！」

俺はそう言ってから、

「奴が出るなら楽勝だ、楽勝。くあーっははははははははははは！」

また究極的終局乱舞で一撃だぜ」

そう約束された未来を宣言したのであった。

しかし、ローレライはなぜか頭痛がするといった様子で、

「ああ、もう……。皆さんも何とか言っして下さい！ 油断こそが戦いにおいて最大の敵であると！ 前回だってそのせいで散々なっ……」

…」

すると、

「まあ、無理もあるまい」

そう言ってエルガーが穏やかな表情で頷きつつ、

「あの卑怯で愚劣な回避型防御をする軟弱者だ。いくら修行しても筋肉はつくまい。成長の余地はないし、俺と防御を競えば、間違いなく俺が勝つだろう」

「まーったく、あなたは筋肉ばかりねえ、エルガー」

はあ、とデリアが呆れたとばかりに口を開いた。

「まあ、でも確かにあの子が成長してるわけないわね。あの子はあくまで防御型の槍使い。ペアで出るアリアケも後衛。どちらも背中を守っているようでは、文字通り戦いにならないわ。お笑い種ねえ。まさかこの1か月程度で攻撃が出来る様になってる訳ないし。しかも、私は防御貫通のユニークスキル持ち。出場したら、二人まとめて叩き潰して一瞬でオ・シ・マ・イでしょうねえ……」

そう言うてから、ニンマリと唇を歪め、

「ああ、それにしても、これで御前試合の賞金も入るし、勇者パーティーの人気も盛り返す。そうしたらまた沢山の宝石が買えるのね！ うふ、うふふふふふ」

こらえきれないとばかりに、笑い出した。

すると、ポーターのバシュータが

「あの、さすがにまだ戦ってもいないのに、皮算用がすぎるんじゃないですか？」

そう口をはさむ。

だが、その言葉をプララが一笑に付した。

「バシュータ、あんた心配しすぎなんだよ！ 前衛で誰か戦ってくれたら、後衛からバシバシ魔法撃つからさ。あのラツカライが複数攻撃に弱いことはアタシら3人でボコったときに実証済みじゃーん。その欠点をこの短期間で克服できてるわけないっしょー。アリアケは後衛だし、ってことは、前衛の誰かとアタシの魔法でボコれば余裕ってわけ！」

そう言ってから、

「ていうか、ああ言う特別な力みたいなの持ってるのマジホントむかつくんだよね……。誰が上かはつきりさせてやんないかね。ああん、もう一回自分の立場教えてやれると思うとぞくぞくしてきちゃったよ。きゃははは」

目をスツと細めて微笑む。

ローレライがなぜかガツクリとうなだれた。

「ああ、もう！ 全員油断しかしてないじゃないですか！ 戦いの前なんですから武器を研ぐなり、トレーニングするなりやることは

沢山あるでしょう」

はあ〜？

なんでンなことしなくちゃいけねえんだよ〜。

「それより飲みにいこうぜー！ 久々の晴れ舞台だ！ 明日にはまた俺たち勇者パーティーの栄光が再開するんだからなあ！ たかだかラツカライを倒したくらいでなあ」

「ああ、そうだな！ 俺たちは国の剣と盾！ 出来損ないの軟弱者に使う時間などない！ 英雄らしく街を闊歩するのでしょうか。筋肉を魅せながらな！」

「私も久しぶりにシヨッピングにでも行こうかしら。最近は下々の者たちの、私を称賛する声を聴けてないから欲求不満だったのよねえ。雑魚のラツカライより、そっちをしないと調子が出ないわ〜、あの少年より、私の体調不良の方が大敵ってものよ。ね、どうプララ、一緒に？」

「いいねえ！ ラツカライとアリアケだったら楽勝そうだし、それにあたしネイル綺麗にしときたいんだー。あいつら相手だったらネイルの心配しなくていいからね！ 勝負に勝ったらまた世間があたしたちを英雄扱いしちゃうからあ。今の内にちゃんとしと身ぎれいにしとかなくちゃだよねえ。いひひひ」

「その通りですわ。うふふふ」

デリアとプララはお互いに微笑み合う。

「も、もう……何だか頭痛と吐き気がしてきました」

「おいおい、大丈夫か？ まあ、無理もない。この勇者の人気のせいで、これほどの人ごみなのだからなあ」

「……………うつつつ、どうしてこんなことに」

どうやら泣くほど嬉しいらしい。

俺は更に喜悦に浸りながら、群がる大衆どもに手を振る。

俺たちへの歓声は途切れることなく、大通りの行進が終わるまで続くのだった。

パレードを終えた俺たちは、街で一番高級な宿に通された。

俺が一番上等な個室でくつろいでいると、唐突に部屋のドアがノックされる。

「ああん、誰だよ？ って、ああワルダーク宰相、あんたか」

どうやら、王国の英雄たる俺にわざわざ会いに来たらしい。

「明日の準備は整っているか？」

「当然だ！ 無能と無能の組み合わせ！ 俺が負けるはずがねえ！」  
俺はそう言っただけ唇を歪める。

だが、ふと妙案が浮かんだので、それをワルダーク宰相に伝えた。

「……………。ってわけだ。どうだ、出来るか？」

「…………まあ、ルールを拡大解釈すれば可能かもしれんが…………お前はそれでいいのか？ プライドとか…………」

「は？ 何がだ？ ま、あいつらは何かズルをするかもしれねえかなあ。万が一の保険って奴よ」

「…………そうか。お前がいいなら何も言うまい。それに、確かに、保険は重要なな。では、お前にこれを渡しておこう」

そう言つと、ワルダークは懐から奇妙な形の石を取り出した。

「うげ なんだよ、これ」

俺は思わず悲鳴を上げる。

ワルダーク宰相が取り出したのは、握りこぶしほどの緑色の石に、奇妙な目玉が付いた、意味不明の物体だったからだ。

「切り札だ。いざとなったら使うといい」

俺はゲンナリとしながらもそれを受け取り、

「どうやって使った？」

「よく効く薬のようなものだ。ピンチになったときに飲み干せ。そうすれば形勢逆転できるだろう」

うげえ。だが、まあ、なるほどな。超回復薬みたいなもんか。良薬は奇妙な形のモンが多いからなあ……。

「ふん、まったく心配性なおっさんだぜ。俺たちが負けるはずねえつてのによ！……だが、俺たち勇者パーティーの復活の機会をくれたことだけは感謝してるぜ。まあ、この勇者ビビアが……国の命運を託された俺と言う尊い存在が、あんたの期待に応えてやるために仕方ないから受け取っておいてやるよ！」

俺はそう言つと、その奇妙な薬を懐にしまつ。

するとワルダークは、

「その通りだ」

そう言つて笑つた。

ん？

俺は首を傾げる。

そう言えば、こいつが表情を見せたのは、これが初めてだったな、と。そう思ったのだった。



「君は、我々の切り札、なのだから」

そんな当たり前のことを言うと、やはりもう一度笑ったのだった。

「そう、期待しているぞ？ 勇者ビビアよ」

56・一方その頃、勇者ピリアたちは　　（勇者はかつての弟子を思う）（後書き）

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 57・御前試合 その 　　～まずは賢者の小手調べ～

57・御前試合　その　　～まずは賢者の小手調べ～

御前試合当日になった。場所は海洋都市『ベルタ』に設けられたロシアムだ。観客は超満員、王族もはるか上方の特別席でご観覧とあった具合だ。

俺とラツカライはフィールドに立っている。

そして、アリシアとコレットは後方のやや離れた位置で見守る様にしていた。なお、アリシアは顔を半分フードで隠している。何せ有名なだからだ。余り大聖女を連れまわしている賢者パーティーなどと噂をされて注目を集めるのは本意ではない。目立ちたくないのな。

一方、勇者パーティーの方は、勇者ビビア、拳闘士デリア、タンクのエルガー、魔法使いプララ、回復術士ローレイ、ポーターのバシューがフィールドに立っていた。

向こうからは、誰が出場するのか詳しく聞いていないが、見たところビビアと回復術士ローレイが出場するようだ。

さて、戦いの進め方としては、まずは俺が勇者パーティーがどれほどの力をこの期間で成長させたのかを軽く矛ほこを交えて見極めた後、

弟子のラツカライとも戦ってもらったもりであった。

と、そんなことを考えていると、勇者ビビアがいやらしく口を歪めながら言った。

「アリアケえ。お前みてえな無能がよくこんな華々しい場所にノコノコと出てこれたもんだなあ。ええ、この勇者パーティーを追放された無能のくせによあ。こんな大勢の前で恥をかかされるのに平気だなんて、頭がおかしいんじゃないのかあ？ ああーん？」

そう言うと、更に鬼の首を取ったように。

「しかも、俺の追放した無能弟子のラツカライを、無能なお前が拾うとはあ、何の冗談だあ！ 無能が無能を育てるってか？ わーはっはっはっはっは！ 成長の余地なんて全くねえじゃねえか！ 無能はいくら集まっても無能！ 俺の勝利は今の時点でもう確定したようなもんだ！ この大陸の希望であり、魔法討伐に最も近い勇者ビビア様のなあ！」

そんな意気揚々とした勝利宣言をスタジアムの中心で雄たけびのように叫んだ。

「きゃー、勇者様ー！ 素敵よー！」

「この世界の希望だわ！ 最高！」

「さすが勇者様は風格からして違うわ！ 何てたくましいのー！」

大衆たちがドッと湧き、黄色い声援が飛び交った。

その声援に勇者は唇を更に歪めて笑うと、

「あーっはっはっははは！　ったりめえだあ！　聖剣ラングリスの正当なる選定者、勇者ビビア様が負ける確率なんてこれっぽっちもねえ！　あり得るとすれば、強すぎることに嫉妬した神様が俺を罪な男となじる事くらいだなあ！」

そう言つて聖剣をかかげると、コロシアムの熱狂は更に高まった。

それと同時に、アリアケへの罵声も飛び交う。

「そんなへボポーター吹っ飛ばしてー！」

「勇者パーティーの足を引っ張つて、冒険を阻害して来た無能なんてやつつけちゃって！」

「よく御前試合に顔なんて出せたわよね！　ずうずうしい！」

そんな罵声の嵐の中にあつて、

「信じております、救世主アリアケ様！　エルフ一同、アリアケ様の勝利を心より確信しています！」

エルフの姫セラ。お転婆だな。また森を抜け出してわざわざ来のか。

「世間の噂なんてくそくらえだ！　アリアケの旦那　頑張つてくださせえよ！　全額あんたに賭けましたぜ！」

恐らくメディスンの町で助けた冒険者たちだろう。呑気な奴らだ。

「獣人族一同、ご主人様の凱旋をお待ちしています！」

獣人たちが。ていうかご主人様ではないのだが……。

ともかく、俺のことを知る者たちがあらん限りの声援を送ってくれているようだ。……が、多勢に無勢。その声はあまりに小さく、罵声にかき消されてしまうほどのものだ。

勇者はその様子を見て、侮蔑する視線を寄越す。

「人望がねえなあ。アリアケえ。全くお前への声援がねえじゃねえかあ。一方の俺への声援を聞いてみるよ！ これだよ、これが本当の俺の力ってわけだ。優れているからこそ、これだけ大衆が支持し、俺に執狂するんだ！ はははは！ やっぱ俺はすげえ！」

ビビアは熱に浮かされた様に言う。

だが、俺は首を横に振りつつ、

「俺に対する声援は、俺のことを本当に信じた者たちの声援だ。彼らエルフや獣人といった種族全体からの声、俺が命を救い英雄の姿を目の当たりにした冒険者たち。そんな奴らの心からの声だ。それは百万の価値がある。お前のが受けているものとは違うものだ」

「かにははは、つまらねえ屁理屈しか言えねえとはな！ それにとんでもない嘘つきやがって！ 種族の応援？ 身勝手な冒険者たちの声援？ んなもんあるわけねえだろうが！ 勇者パーティーを追放になるような無能にそんなことできる訳ねえ！」

そう馬鹿にするようにビビアは言った。

すると、

「そんなことはありません　一緒にいれば分かるはずですよ　アケ先生のおっしゃることが全て真実だと！」

ラッカライが溜まらず、といった具合で反論する。

しかし、

「は？？才能無しがほえんじゃねえぞ、ああ！」

恫喝するようにすごんだ。そして、

「へへへ、今からでも後ろに控えてる奴らに代わった方が良いんじゃないかあー？　ま、そいつらも大したことねえんだろうけどなあ」

そう後ろのメンバーを指さして、嘲笑った。

すると、それに乗じるように、デリア、エルガー、プララがニヤニヤしながら口を開く。

「ていうか、後ろの人たちも含めて、私たちのパーティーの下働きでもしたらどうかしらねえ。無能アリアケなんかについてないで」

「うむ、それがいい。そんな軟弱な男についていてもろくなことはないぞ。やはり筋肉がないとな」

「あたしのお世話させてあげるよ。やっぱ美人のあたしには、美しい下働きがいると思うんだよねえ。見た感じ、顔だけは良さそうじ

やん。一人はフードかぶってっけど！」

彼らの言葉に、ビビアはクククと笑いながら、

「ってことだ。どうだー、お前ら、勇者パーティーの優しい提案だぞ。今なら俺たちの下僕にしてやってもいいんだぜえ」

そう言っつて見下す様に言っつたのだった。

だが、アリシアの女は、

「残念ながら、この方から離れる気は終生ありませんので」

と言っつと、

「わしもじゃよ。未永く一緒におることは既に契りちぎにて決まっつておるのでな」

額に角を生やした少女コレットもそう言っつた。

……終生？ 契り？

何だか話が大きすぎるような気がするが……。

「はっ、まあ、そんなこと言っつてられるのも今の内だがな！ そいつはすぐに情けなく敗北するんだからよお」

そう言っつてビビアが厭らしく笑っつ。

やれやれ、少しおしゃべりが過ぎるな。



「おいビビア、戦いの前のおしゃべりは敗北を呼び寄せるぞ？　そう教えたろう？」

「くくく、くひひひひ。情けない奴。これだけ言われても、そんなくだらねえ反論しかできねえのかよ。まったくつまらない奴だぜ」

失望したとばかりに肩をすくめた。

「反論も何も必要ないだろう。いつも通りにやるだけだ」

「かはは、それくらいの強がりか精々かってか！」

そう言って嗤うと、ビビアはぽつりと、

「ぎひひひ、これは俺たちの勝利確定だな。アリアケの奴ぶるっちまって、ろくに反論もできねえ」

内心を吐露するようにつぶやく。

と、そんなお喋りもそこまでだった。審判が出て来て、戦いの幕を切ろうとする。

「それでは御前試合を開始する。出場者は前に！」

その言葉に俺とラツカライは前に出る。

勇者ビビア、ローレイも前に出た。

勇者は厭らしく笑いながら、



スキル同時使用によって、身体を強化する。

これで、そもそも、相手の攻撃をかわす必要がなくなった。

だから、俺はそのまま奴の攻撃を弾き飛ばしながら、真っ直ぐに勇者へと突っ込む。

そして、

『杖攻撃アップ』 『物理攻撃アップ』 『クリティカル率アップ』

自分に支援スキルを使用すると同時に、

バツゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ン

「うっぎゃああああああああああああああああああああああ  
ああああああああ」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ！

俺の杖で思いっきり鳩尾をぶん殴られた勇者ビビアは、コロシラムの床を泥だらけになりながら転がっていく。

「ぶべああああああああああああああああああああ」

悲鳴が止まることなくコロシラム中に轟き、

ドツゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオン！



「あれ？ 勇者様……？ まさか、一瞬で……負……け……た？  
あれだけ大口叩いてたのに……ザ……コ……？」

そんなつぶやきが漏れたのだった。

57・御前試合 その　　くまずは賢者の小手調べく（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

58・御前試合 その ㄱかつての弟子との対決ㄱ

58・御前試合 その ㄱかつての弟子との対決ㄱ

ㄱラツカライ視点ㄱ

す、すごい！ さすがアリアケ先生だ！

私は先生の無駄ボクのない動きに感動していた。

勇者の攻撃は確かに強力なユニーク・スキルだったけれど、先生は鮮やかな多重スキルの行使で完全に無効化してしまった。

逆に勇者のその必殺技は明らかに隙があるから、無効化さえしてしまえば無防備になる。先生はすかさず自分にスキルをかけて杖による物理攻撃を繰り返した！

ああ、本当に無駄ボクのない完璧な動きだった。さすが私の先生……。思わず頬が熱くなる。

そして、その完璧に鳩尾に決まった一撃で、勇者は今、王族や大衆の衆人環視の元で、

「うげええええええええええええええええ。うっうっ……おええええええ

えええええええ」

と、地面に涙と胃の中身を吐き出し始末だった。……ボクだったら二度と立ち直れないほどの恥ずかしい状況……。

そんなことを思っていると、デリアさんやエルガーさん、プララさんはその光景が信じられないといった風に、

「こ、これは……な、何かの間違いよ……」

「あ、ああ。そうだ。煉獄打突武神剣オーロラ・パーストエントは勇者の所持するユニーク・スキルの中でも最速の技だ。万に一つも見破られるはずがない」

「だよね……。確か究極的終局乱舞より高速で、隙のない超必殺技なんだし……」

なんて言っているのが聞こえて来た。

ボクはその言葉に思わず首を傾げる。

隙がない？

何を言っているんだろう。

(隙だらけだったと思うんだけど……)

ボクはさっき観察した技を鮮明に思い出しつつ、

(だって、以前、勇者から受けた究極的終局乱舞ロントミア・ワルツは、見切るのもギリギリだった。でも、さっき見た煉獄打突武神剣オーロラ・パーストエントは、あれより格段



に遅く見えたし……っていつか正直、さっきのくらいだったら、ボクにだって躲して反撃できそうな程度の技だったと思ったのだけど……)

そんなことを考えたのだった。

でもその時、アリアケ先生が、

「ビビア、手加減しているのか？」

と言ったんだ。

「いや、さすがにそうに違いないか……。そうだろう！ 勇者ビビア！」

先生は何度か頷いてから、まだ餌<sup>えつ</sup>付いている勇者へと声を掛ける。

すると、勇者は悔しそうに顔を真っ赤にしながらも、

「くっ！？ しよ、しよ、しよ、しよ、しょうだ！ う、おえ、ぐええええ……」

そう先生の質問に、息も絶え絶えといった様子で肯定したのだった。

「ふむ、やはりな」

先生は納得する。

ボクも同じく、

「そ、そうだったんですね……」

そう呟いた。なるほど、どうやら本気ではなかったらしい。

(そうだよ、前の時より随分弱かったみたいだし……)

そんなことを考えていると、ローレイさんに回復魔法をかけてもらった勇者が、フラフラといった様子で立ち上がり、

「お、俺はラツカライと戦うつもりだったんだ！ それを、アリアケ、てめえ、でしゃばりやがって」

突然そんなことを言い出したのだった。

「そうだったか？ 明らかに俺に向かって衝撃波が飛んで来たような気がするが……？」

「か、勘違いだ！ この卑怯者め！ 反則だ！ 責任をとってラツカライと1対1で戦わせる！」

へ？

ボクと1対1？ 急な主張に頭がついて行かない。

「うむ……」

先生は、よく分からない勇者の主張を吟味されているようだ。

本当に先生はどんな時でもしっかりと考えを巡らせる。

その姿は本当にカッコいい。思わず胸が温かくなる。

「反則反則反則反則反則反則反則！」

一方の勇者は、反則反則と子供のように喚き続<sup>わめ</sup>けていた。

とはいえ、観客たちも勇者の主張の激しさにあてられたのが、

「そうだ、反則だ！」

「アリアケは勇者の主張を認める！ この卑怯者！」

などと言った罵声を上げる。

「やはり認めるわけには……」

思った通り、先生は断ろうとした。

でも、

「いえ、やらせてください、先生！」

ボクは初めて先生の言葉に割り込んだんだ。

「ラツカライ？」

先生は訝しんだ表情をするけど、

「ボ、ボクの……。私の先生が反則だなんて、卑怯者だなんて言われるのが我慢できません！」

我儘わがままを言ってしまう。先生は思った通り困った顔をした。

しかし、

「ほーれ、ラツカライの野郎もそう言ってるぞ？ お前は弟子のことを信じられないのか？ ああーん？」

勇者が、今だけは絶妙なタイミングで割り込んでくれた。

優しい先生は、そう言われたら、認めざるを得ないだろう。

私のことわたしを一番認めてくれている人なのだから……。

「ふむ……。そこまで言うなら仕方あるまい。だが、無茶はするなよ？ 俺は君の才能を知っているが、まだ成長の途上なんだから」

「ありがとうございます！」

どこまで出来るか分からないけど、恥ずかしくない戦いをしよう。そう決意わたしして私は微笑んだのだった。

〈勇者ビビア視点〉

（くはー！ 馬鹿なやつだぜえ！）

俺は思わず「しめた！」と内心で有頂天になる。

(ラツカライの野郎なら楽勝じゃねえか！)

思わず内心でせせら笑う。

あんな成長余地のない無能なら勝ったも同然だ！

(あの無能には究極的終局乱舞で十分だろうが、くくく、煉獄打突オーロラ・バーストエンド、武神剣ロンドミア・ワルツを使ってやる。きひひひ、究極的終局乱舞を防げなかったラツカライにゃあ、まず防げねえ。そして、煉獄打突オーロラ・バーストエンド、武神剣はそれを上回る速度と威力。見えねえだろうし、防ぎようもねえって寸法だあ！)

し・か・も・だ。

奴には攻撃手段すらねえんだからなあ！ もはや積んでる！ どんだけ無能なんだよって話だ！

俺は思わず腹がよじれそうになるのを耐える。

(だが、ラツカライは生かさず殺さずの状態にしておいた方が良かったらうなあ)

俺は冴えわたる思考に唇をニヤリと歪める。

(そうすりゃあ、アリアケはラツカライのフォローに釘付けになるってえ訳だ。さっきは、ちーとばっか油断したから、一撃を偶々たまたまもらっちまったただけだから、そこまでする必要はねえかもしんねえが

……。ラツカライごと、アリアケをいたぶってやらないと気が済まねええええ！)

くっくっく。

俺にいたぶられて、さっき俺が観客どもの前で胃の中をぶちまけるハメになった屈辱の何倍もの屈辱！ そいつを与えてやるよお。

勝利と共にもたらされるそんな素晴らしい未来図に、俺は喜悦の笑みを浮かべざるを得ない。

ぐひ。ぐひひひひひ。

そんなことを考えつつ、仲間たちに目をやれば、

(ラツカライは防御型の槍使いで、この1か月程度で攻撃が出来る様になってる訳もないから楽勝ですわ！ ま、いざとなったら、何か理由をつけてローレイと私が交代して、私の防御貫通のユニーク・スキルでラツカライを集中攻撃すれば勝利は確定なのですわ！)

(回避型防御の卑怯者など恐れるに足りん！ 仲間を守れるのは俺のようなたくましいタンクでなくてはなあ！ ラツカライのような雑魚では話にならん 攻撃を受けているうちに防御できなくなつて役割を果たせなくなるに決まっている)

(ラツカライは複数攻撃に超弱いから、最悪あたしが間違っちゃったテへとか言つて、魔法で同時攻撃すりゃあ楽勝つしょ。ラツカライがウィークポイントだし、そこを突かなきゃねえ)

そんなアイコンタクトを送つて来た。

くくく、腐っても同じ村の幼馴染パーティーだ。心は一つってことだなあ！

作戦名『雑魚のラツカライをいたぶりつつ、アリアケもいたぶりつつ倒す！』

これだ！

最高の作戦

（よおし、ほんじゃあ、まずは必殺の一撃を雑魚のラツカライに喰らわせてやるとするかあ！）

「くらいやがれえええええええ

オーロラ・バーストエンド  
煉獄打突武神剣

」

くあーはっはっはっはっは！

これでほぼ瀕死確定！

あとはポロポロのお前がアリアケの足を引っ張って、二人仲良く御前試合で恥をかくって訳だあ！

んで、俺たち勇者パーティーは再び栄光を手にするってえ寸法よう！

あーっはっはっは、ありがとよ、無能ラツカライ！

お前のおかげでまた俺の輝かしいっ……

「邪龍一閃・弐の型！」









58・御前試合 その ㄱかつての弟子との対決ㄱ（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

59・御前試合 その 　　く勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち デリア編く

59・御前試合 その 　　く勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間た  
ち デリア編く

くデリア視点く

「くく」なつ 「くく」

私とエルガー、そしてプララは思わず驚きの声を上げる。

勇者の切り札である煉獄打突武神剣オーロラ・パーストエンドが防がれたばかりか、反撃の一  
撃を食らい、ダウンしたからだ。

たちまち、私は「不味いことになった」と舌打ちをする。

今日勝利することを前提に、宝石や服をツケで買いこんでいるのだ。

このままでは借金でクビが回らなくなるじゃない！

思わずギリギリと唇をかみしめる。

（…………でも、焦るほどのことではないわよねえ）

私はゲロを吐く勇者から距離を取りつつ、冷静さを取り戻す。

噛んでしまった唇をなめてから、ニヤリとほくそ笑んだ。

(なぜなら、私がラツカライごときに負けるなんてあり得ないから)

その正鵠を射た考えにますます唇を歪める。

(だって、私にはこれがあるんだものねえ)

拳に魔力を込めた。

すると美しい青白い炎で燃え上がる。

ユニーク・スキル『祝福された拳』だ。

神をも貫くと讃えられた特別な才能。その姿にウツトリとする。

あらゆる防御を貫通するこの防御不可攻撃スキルによって、私は無敵のファイターという名声を得ているのだ。

(確かに、勇者は攻撃力も高いし、剣戟も早かった。……だけど、私のようにいかなる防御をも打ち崩すユニーク・スキルは持っていないかった。ラツカライの行動はあくまで『後の先』。さっきだって、勇者の攻撃を待ってから、攻撃に転じていた)

つまり、

(あなたの天敵は私と言う事ねえ、ラツカライい。ふ、ふ、ふ、ふ。防げない攻撃にどう対応するのかしらあ　　いいえ、あなたは対応

できない！ 私の攻撃を防いだ時があなたが無様に敗北する時なのよ！)

勝利の確信に、私は思わず陶然となる。

し・か・も・だ！

私はますます喜悦をかみしめた。

勇者が倒せなかった相手を私が倒すのだ！ この王族や大衆が見守る晴れ舞台で！ それがどういう意味を持つのか？

(決まっていますわ！)

ラツカライ何ていう、私にとってカモ！ 雑魚！ アリンコを潰すだけで、私は、勇者以上の繁栄と名声を得ることが出来るのよ！

(今まで私はNo.2の座に甘んじて来たっ……！)

確かにビビアは聖剣に選ばれた勇者で、強さも段違いだった。

でも、それはある意味、誤った認識だったのだ。

私はゲロを吐き、天へ絶叫を上げている勇者を、横目で見て哀れに思いつつ確信する。

(勇者パーティーがピンチのこんな時にこそ、窮地を救える英雄。勇者が勝てないような敵を華麗に倒す私という存在こそが、この勇者パーティー最強の存在だったと言う訳ですわ)

勇者が倒れた今こそ、No.1になるチャンスなのだわ！

そうすれば、私はもっとチャホヤされるし、もっと宝石や服やこびへつらう人間が集まって来るに違いない！

しかもそれは、ラツカライ何ていう雑魚を倒すだけでやすやすと手に入るのよ！

(ふ、ふふふ、ふふふふふふふふ)

「おーっほっほっほっほっほっほっほ！ ローレライは体調が悪いから私と交代よ！ 審判！」

私はもはや高ぶる感情を抑えることが出来ず、哄笑しながら、ラツカライへと拳を振り上げ突っ込んでいく。

審判の返事を待つこともしない。なぜなら、すでに審判はワルダーク宰相を通じて買収済みだから！

(いいえ！ 何より！ 確定した勝利を、私の約束された栄光を、これ以上待つてはいられない！)

今すぐ、私はこの大陸でもっとも偉大な英雄になって、あらゆる富を手に入れるのよ！

「私のために無様に敗北するがいいわ、ラツカライ！ おーっほっほっほっほっほっほっほ！ 雑魚のあなたには相応しい役割だわ！」

そう唇を歪めて叫びながら、私は『祝福された拳』で殴りかかっていく！

だけど、次の瞬間、

「爆雷<sup>ソイル</sup>……」

「……へ？」

「……重力<sup>ランサー</sup>落とし」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

「はあ 何のよ、これはあー！」

私は地面から突然巨大な土の槍が生える光景に思わず驚く。

でも、

「ふ、ふふふふふふふふ！ あーっはっはっはっは、残念だったわねえ！ あなたの使うこーんなへボ技じゃあ、私は倒せなかったみたいよ！ おーっほっほっほっほっほ！」

その土の槍は私にダメージを与えることに失敗していた。ぎりぎり私の身体を貫けず、目の前に隆起した状態で静止している。

恐らく切り札用の攻撃だったのね。

「無様ね！ 哀れね！ さあ、待っていないさい、ラツカライっ。今すぐあなたをボコボコにして差し上げますからね！」

私が唇を厭らしく歪めながら、目の前の邪魔な土の槍を拳で殴り破







私は心からの怨嗟の声を上げる。

だが、

「うふふ、簡単でした」

一方のラツカライはアリアケの傍に戻り、嬉しそうに頬を染め、笑いかけていた。

「ボクのさっきの技が『防御』だと気づかなかったようです。どうでしたか、うまくやれてましたか、先生？」

（！　そ、そうか、あれは私を攻撃するためのものじゃなくて、私の防御無視攻撃をラツカライ自身で受けなかったための『おとり防御用デコイ』だったのねっ……）

それを私は攻撃だと思い、防いだことで安心してしまった。

そして、邪魔なデコイを破壊するために防御無視攻撃をまんまとデコイの方に放ってしまったのだ。

ラツカライの思惑通りに！

とんだ間抜けじゃないの！

そんな私の『攻撃の際』をラツカライが見逃すはずがない。

で、でも、そもそも、こんなに短期間のうちに、私の『祝福された拳』に対応できるほどの技を磨き実戦で使えるようになるまで腕をあげるなんてっ……！



59・御前試合 その 〳勇者の仇をつつべく立ち上がる仲間  
たち デリア編〵（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

60・御前試合 その  
たち エルガー編

60・御前試合 その  
ち エルガー編

エルガー視点

「「なっ  
「」

俺とプララは驚きの声を上げた。

勇者の切り札である煉獄打突武神剣オロラ・バーストエンドが防がれた。

そして、その後ラツカライに襲いかかったデリアまでもが反撃を食らってダウンしたからだ。

たちまち、俺は「情けない役立たずどもが！」と舌打ちをする。

今日は俺のために用意された、絶好の晴れ舞台であった。

ラツカライなどと言う回避防御型の戦士がいかに非力で頼りなく、一方で俺のようなくましい男がどれほど優れているか。それを改めて大陸中に喧伝けんでんするための絶好の機会だと考えていたからだ。

今の俺はまだ『国の盾』と呼ばれるように、国レベルの英雄にとど

まっている。しかし、俺の評価は本来もつと上位のもの。……まあ、銜てらいなく言えば『人類の守護盾イジス』……。ふふふ、これくらいの二つ名が妥当と言ったところだろう。一国の器に収まるような男ではないのだからなあ。

……だが、あるうことが勇者の攻撃が、聖槍の使い手に防がれたなどと言う話になれば、実は最強の防御戦士はラツカライなのでは？ などという悪夢のような噂が流れかねない！

そんなことになったら、俺は！ 俺はああああああ ああああ  
あああああああああああああああ！

俺は思わず血が出ることも構わずギチギチと唇をかみしめた。

だが、

(……しかし、俺に限っては、焦るほどのことではない、か)

俺はゲロを吐く勇者やデリアを視界から外しつつ、冷静さを取り戻す。

噛んだ唇から流れる血をなめとりつつ、ニヤリとほくそ笑んだ。

余裕を取り戻せば、鉄くさい血の味すらも心地よい。

(勇者もデリアもしょせん俺のような冷静な戦略眼がない、少し頭の足りない者たちだ。だから、防御型の相手に攻撃で対抗しようとするという、そもその戦略ミス、根本的な間違いを犯してしまっ  
た！ まあ、攻撃型の戦士というのは、馬鹿だから攻撃しか出来な  
いのだが……。俺のように筋肉がない弊害だ。哀れな……)

俺は攻撃偏重型の戦士たる二人を哀れみつつ、

（だが、俺は違う。攻撃ではなく防御を重視したタンク。ラツカライとの戦いは『防御VS防御』の戦い。ならば、ラツカライのひ弱な防御に対して、人類の守護盾たる俺の防御が負ける道理はない！ラツカライの虚飾防御の化けの皮をはがすことは余りにも容易だというわけだ！）

あまりの理路整然とした結論に興奮する。

同時に、侮蔑の表情でラツカライを見た。

少しばかり攻撃に対する回避や反撃手段を手に入れたようだが、しよせん付け焼刃。

そして、筋肉を伴わない三流のごまかし防御だ。

真のタンクの俺と防御を競えば、必然的に俺が圧勝することは論を待たぬだろう。

「く、くくく、くくくくくくくくくく」

駄目だ、ついつい笑いを抑えることが出来ない。勝利を確信してしまつて、思わず笑いが表に出てしまった。

だが、それも無理もない。

な・ぜ・な・ら。



俺はますます笑みを深める。

（さっきは勇者の攻撃が防御されて、ラツカライの評価が上がると焦ったが……むしろ逆だ　幸いにも、ラツカライという雑魚相手に、勇者と、加えて大陸一の拳闘士などと持ち上げられていたデアアの二人が倒されている！　ゆ・え・に、あの雑魚ラツカライを倒すだけで、俺がこのパーティーで最優の戦士であるということが証明されるわけだ！　あんな雑魚を倒すだけで！）

今まで俺はパーティーの中で地味系の戦士という扱いだった。

勇者のような聖剣使いでもないし、デアアのような拳闘士といった華やかさも無い。プララのように多種多様な魔法を操ることも出来なかったからだ。

本当は俺が誰よりも一番優れていたのに！　世界で一番たくましい戦士なのに！　だと言うのに防御タイプの戦士というだけで不当な評価しかされてこなかった！

だが、今回、勇者やデアアを倒したラツカライを俺が打倒することは、既に決まっている。

これはまさに天が不遇の俺に与えたボーナスタイムなのだ！

そう、ついに正当な評価を受ける時が来たというべきなのだ！

（おお……、ラツカライを倒した御前試合の翌日には、俺の武勇が大陸中に鳴り響き、勇者パーティーで最も優れたたくましい男。人類の至宝とまで言われるようになるだろう）

それもこれも、目の前の雑魚戦士のおかげで。

そのこの小物を倒すだけで、人生最大の栄誉が間もなく、俺の手中に収まるのだ！　これが興奮せずにはいられるだろうか！

（ふ、ふふふふ、残念だったなあ、ラツカライ）

俺はニヤリとラツカライを見て、一種の憐憫の情を抱く。

（お前の『天敵』はここにいたのだ！　そう、この『聖タンク』エールガー様がお前の『敗北』そのものであり、そして勇者パーティ―を導く御旗なのだ！）

ブルブルと興奮で体躯を震わせる。

ああ、もう我慢できん！

俺は勝利を確信して、ラツカライへと肉薄しようとする。勇者とデアリアが情けなく背後で餌付く音すら、今からラツカライが齎す勝利を引き立たせる交響曲シンフォニーのように思える！

「審判！　デアリアは体調が悪い！　俺と交代だ！」

審判のことは既にお買収してあるから問題ではない。こうやって、いざという時のために環境を整えておくことも防御の基本なのだ！

俺はもはや、これから人々が永遠に俺に向け続けるであろう尊敬の視線を、既に受けているように感じながら、哄笑を上げつつラツカライの正面に立った。

さあ、俺の筋肉が勝利の唸り声をあげているぞ！

「はーっはっはっはっは！ 軟弱な少年ラツカライよ！ カウンターでも何でも打ち込んでくるがいい！ 俺の鉄壁防御に腰を抜かすことになるだろうがなあ！ そりゃあああああああああああああああ！」

そう唇を歪めて叫びながら、俺は剣を叩きつける。だが、その攻撃がかわされることは想定済みだ。そしてラツカライがカウンターを放ってくることも！

だが、それこそが俺の狙いだ！

カウンターを幾度放ても効かない現実には、ラツカライは半泣きで逃げ出すだろう！

くあーっはっはっは！

愉快すぎる！ それこそが防御型戦士の勝利の仕方！ 筋肉の大勝利の仕方だ！

何度だって相手の攻撃を受けきる！

それこそが戦士タンクの誇りなのだ！

そして、次の瞬間。

「見切りましたよ！」

そんな声とともに、

「蛟削ぎ！」  
みすぢそ

俺の振るった大剣が、まるで蛇に絡めとられるように軌跡を変えられ、ラツカライの体スレスレを通過して地面に突き刺さる。しかし、

（くわーっはっはっはっは！ 思った通りだ！）

お前はそれで隙を突いたつもりだろう！ だが、お前がカウンターを狙っていることは初めから見え見えだ！

俺はそのカウンターこそ、この無敵、鉄壁の体躯にて何度だって、何万回だって弾き返すつもりなのだから。それによってお前は俺の真の強さに恐れをなして降参すると言っわけだ！

さあ、来るがいい！

この『人類の盾』イージスがお前に『本当の強さ』というものを教えてやるう！

聖槍で選ばれたぐらいで凶に乗っている若造の身体に直じかに叩きこんでやる！

この防御の大先輩、英雄エルガー様がなあ！

俺はそんな正しい先達としての意識に興奮し、思わず大きく唇を歪めたのだった。

そして、





俺は蹲うつくまつて、思わず泣き出してしまった。

泣くのをやめようとするのだが、余りの痛さにどうしても涙が止まらない。

スタジアムを泥まみれになって転がるが、それでも痛みはひかない。

嗚咽も止まらなかった。

「うわっちゃー、あの男、泣いてるぜ。ぷっ……」

「やだ、あれだけ自分がたくましいだの、無敵だって言ってたのに……。めっっちゃ弱いじゃん……」

「国の盾って言うっても金的には勝てねえのな。ま、しよせん、その辺はフツターの戦士とそう変わんねえってことかあ」

「あの筋肉も見せかけの無駄筋肉だったってわけか。はははは！」

侮蔑や蔑みの声が、俺の嗚咽に混じって聞こえて来た。

(ぐそ”う”……。ぐそ”う”……)

俺は痛みとともに、悔しさの余り更に涙をボロボロと流す。

「だい”り”ぐい”ぢの”え”い”ゆ”う”の”お”れ”がな”ん”でこ”ん”な”め”に”い”い”い”い”い”……」

思わず怨嗟の絶叫を上げた。





薄らいでいくのを意識の中で、先ほどよりも更に侮蔑や罵倒の言葉を聞く。

俺は絶望とともに意識を暗転させて行った……。

意識が落ちる間際、

「あわわわわ、男の人って本当にアレが弱点なんですね …… 悪い事しちゃいました……」

「まあ、あれは男にしか分からない痛みだからなあ……。ラツカライが知らないのも無理はない」

「そ、そうなんですな〜」

ラツカライとアリアケの、そんなよく分からない会話に疑問を持つが、すぐに俺の意識は闇に飲まれてしまったのだった。

〜なお、王族的一幕〜

「おい、ワルダーク。何なのだ、この試合は……。わしはこんな無様な試合を見に来たわけではないぞ？」

「はあ、申しわけございません」

「申しわけございません、ではないだろう。こんな戦いでは民の心

を慰撫し、奮い立たせることなど出来ぬぞ！ 何のための御前試合だと思っておる！」

「分かっております」

「ふう……。では、すぐに手を打て。手段は問わぬ。政治とは結果が全てなのだから」

「承知しております。では、早々に」

王の言葉に、ワルダークは普段見せぬ笑みを顔に張り付かせたのだった。

60・御前試合 その 〱勇者の仇をつつべく立ち上がる仲間  
たち エルガー編〱（後書き）

本作について、

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「金的是さすがに可哀そう……」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

61・御前試合  
たち プララ編 <前編> (勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間)  
(前書き)

プララ編の前編です。

61・御前試合 その 〱勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 <前編>〱

61・御前試合 その 〱勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間た  
ち プララ編 <前編>〱

〱プララ視点〱

「ファイヤーボール！」

「うがああああああああああああああああああああああああ  
ああああああ」

エルガーにゲロまみれにされたアタシは ブチ切れて、本気のファ  
イヤーボールを放った。死ねばいいのに！

でも、無駄に固いエルガーは瀕死のままピクピクと痙攣して意識を  
失う。そして、見回してみれば、勇者もデリアもゲロ吐きすぎて半  
死半生つて感じ。

（ほんつとーに役立たずな仲間ばかりじゃん。死ねよ、クソども）

あたしは内心で勇者パーティーのメンバーを罵倒する。

あたしが呆れるのも当然だ。

だって、

（あたしが戦えばラツカライなんていう雑魚、楽勝で勝てるってーのにさっ……。なーに、馬鹿やってんだか）

そう、それがあたしの不機嫌な理由だ。

ま、それでも、ここからあたしが一手間かければ楽勝に違いないんだけどさあ。

でも、あーあ。ホント……。

（ラツカライみたいな攻略方法がハツキシしてるクソゴミに負けるなんて、チヨォありえないんですけど〜！）

あたしは心から叫び、侮蔑する。

ラツカライに倒された仲間を。

そして何より、あたしよりも格段に劣るラツカライに対してだ。

「遠距離タイプのアタシが負ける理由なんてないんだよね〜、きゃはは」

（頭の足りないアンタらは、ひたすら馬鹿みたいに、華麗なる魔法使いのこのあたし、プララ様を守ってりゃ良かったんだよ）

あたしは体内の魔力を循環させる。膨大な魔力量と共に、マスターした様々な魔術が脳裏を巡る。

（そう、ラツカライもアリアケも防御・支援型の戦闘スタイルだ。

こういったタイプにとってあたしの遠距離魔法は天敵。しかも、莫大な魔力量と多種多様な魔術を操るあたしは完全なる上位者」

「そう、あたしはこの戦いの捕・殺・者なんだ」

思わず唇をにんまりとさせる。

この戦いは猟そのもの。

獲物はラツカライとアリアケで、狩人はこのアタシだ。

その関係は揺るがしようもない。

ま、もちろん、近づき過ぎれば、獲物は牙で反撃しようとするだろう。

（だからこそ、馬鹿の勇者どもはあたしを守ってりや良かったのに。そんで、あたしが遠距離からラツカライをいたぶってやれば、牙はあたしには届かない。勇者どもはまたゲロ吐くか、傷つくかするかもしれないけど……あたしはノーダメ！ あたしは優雅に、華麗に魔力に焼かれて泣き出した相手が土下座して来んのをただ待ってりやいだーけってわけ）

そんな完璧な想像にあたしは陶然となり、更にニヤニヤと唇を歪めてしまう。

（あの聖槍ブリューナクに選ばれていい気になってるいけ好かない子供に、世間つてものを教えてやんなくちゃだし？ それが大人のたしなみって奴っしょ）

あの綺麗な顔をいたぶって、泣かして、ぐちゃぐちゃにして、土下座させて、足を舐めさせる。ペットにして飼うのもいいかも

ま、それでも許してやらないんだけどね

マジで、ああいう『選ばれた特別な存在』みたいな奴大っ嫌いなんだよねえ。マジでムカつくから、超いじめたくなる。ホント無理。

そんな奴の顔がどんな風に歪むのか……。

「きゃはは 今からちよー楽しみじゃん！」

あたしはそう言いながら、攻撃魔法の詠唱を開始する。

そして、

「くるりっ」と

あたしはいまだゲロってる勇者やデリア、瀕死のエルガーたちの方にふり返り、

「くらえ！ サンダー・ストーム」

広い範囲に思いっきり雷の嵐を発生させたのだった。

「な、何をしゃがる、プララ んぎゃああああああああああああああああああああ」

「気でも違ったの、このクソ魔法使いつ……！ って、いやああああああああああああああああああああ」



「……(ビクンビクン)」

あは。

あはは。

「あーっはっはっはっはっは　なにこれナニコレ、ちよー受けるんですけど」　勇者もデリアもエルガーも、死にかけの魚みたいにピクピク跳ねちゃってさあ！　あー、たまんねー、マジあたしを笑い殺す気っしょ」

ああー、気持ちいい」。

忘れてねーよ。

忘れるわけないっしょ」！

洞窟で瀕死のまんま置き去りにされた恨み、一生忘れるわけないじやーん

「いひ、いひひひひ　身動き取れない仲間どもに魔法撃つの楽しすぎだわ」　癖になっちゃう」。ああ」

あたしは余りの快樂に身もだえする。

「お、おい、あいつ仲間に攻撃魔法つかったぞ」

「一体、何が起こってるんだ」

「仲間割れか」

おおっと、しまったしまった。本来の目的をあたしとしたことが忘れちまうところだったよ。

勇者どもを黽り続けるのも乙なんだけど、残念ながら真の目的はそれじゃないんだ。

あたしの狙いはコレ。

「みなさーん、今は回復魔法です！ 安心してくださいーい」

「は？」

「何だつて？」

「でも仲間たちが明らかに吹き飛んで、悲鳴も……。体から煙まで

……」

ざわざわ……。

馬鹿な観客どもがざわめいている。その喧噪に乗じて、あたしは切り札を切った。

「人形に意識は邪魔なただかかんねえ。服従の呪文。禁呪<sup>コデ</sup>あたしの可愛いペット<sup>ト</sup>たち<sup>バペット</sup>」！

その瞬間、

『すくり』

意識を刈り取ったでくの坊たちが、無言のまま立ち上がった。

「あつ」

「ほ、本当だ……」

「瀕死だった仲間が立ち上がったわ……」

馬鹿どもがまんまと騙される

勇者たちは……目は白目をむき、ゲロや涙、泥にまみれている。だが、気を失った状態だから気にもしない。口からは「あー」とか「うー」といった、低いうめき声が漏れるのみだ。

あたしに齒向かいもしない従順な奴隷の出来上がり

（最高じゃ〜ん！ きゃはは）

あたしは余りに楽しくて微笑む。

（禁呪『あたしの可愛いペットたちは』は意識のない、抵抗力の弱まった瀕死の人間を操る呪文だ。聞いたことない呪文だけど、こーんな便利な魔法を教えてくれるなんて、さっすがワルダーク宰相じゃん！ ま、もちろん操るって言うっても限界があるんだけどね。細かい指示は無理とか！）

でも〜

「代わりに筋肉とか魔力回路のリミッターは、気絶してるおかげで

外し放題で超強力つてわけ！ んでもつて、今回求めてんのは、あたしが魔法を撃つ時間を稼ぐための盾！ サンドバック！ 肉の壁！ だから、まさにあんたたちみたいないな役立たずの方が都合がいいつてわけ」

あたしつてば超さえてる〜。

（あんたらの無様な姿が見れるうえに、あたしの役にまで立てんだから、最高だよねえ　ちょーっとリミッター外しちゃうから、後遺症やべーらしいけど、そこは我慢してよね　）

あくまでパーティーの勝利のためなんだから。

あたしには唇を激しく歪めながら、仲間たちを前衛へと送り出す。

肉壁として役に立てと指示を出した！

「しんぱーん！　ちなみに、あくまで戦つてんのはアタシだけだから！　そいつら只の盾だから！　だから反則じゃねーから〜！」

さすがに無理があるかしんない。

どう見ても前衛3人に後衛1人だし。

でも〜、

「勝てば官軍だしね〜」

世の中負けたら終わりなんだよ！



いや、もしかしたら、このまま倒しちゃつかもっ……！

このスピードと威力！

誰もかなうわけないっしょ！

（勝った！）

あたしは勝利を確信して会心の笑みを浮かべる。

……けど、その時あたしの耳に、

「ようやく本気を出したようだな、ビビア」

そう言って微笑むアリアケの声が聞こえたのだった。

「……は？」

私は思わず、啞然とした声を上げたのである。

61・御前試合 その 〳勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 <前編>〳(後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

62・御前試合 その 〳勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 <中編>〳〳(前書き)

プララ編長くなりました。中編となります。



62・御前試合 その 〱勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 <中編>〱

62・御前試合 その 〱勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 中編〱

〱アリアケ視点〱

「ようやく本気を出したようだな、ビビア」

俺はビビアの重い聖剣を受け止めながら微笑む。先ほどまでとはまるで違う速度、威力に、この戦いで初めて俺は少し力を出した。

強化された杖が聖剣を受け止める。

「……………は？」

ただ、なぜかプララが啞然としつつ、

「はああああああああ な、なんであの攻撃が受け止められん  
のお……………」

と頭を掻きむしっていた。

「ははは、何を言っているプララ。さっきまでは余りに弱すぎただろう？ まさか、あれが本気な訳あるまい。やっと今から普通に力を出し始めた。そうなんだろう、ビビア？」



「わしもそう思っつのじゃがなあ」

などと言う。

やれやれ、さすがにその評価はひどすぎるな。

「そんな訳がないだろう。はははは。あんなのが本気だったら俺の何億分の1の実力なんだ、というものだ」

「はあ……。相変わらず自覚がないといつかなんと……」

「いい加減自分の実力を把握してもらいたいものじゃなあ」

二人が呆れた反応をする。俺はよく分からずに首を傾げたのだった。

「ま、何はともあれ、相手が本気を出して来たのなら、ちょうどいい。こちらもここから本気でやれるな、ラツカライ！」

「はい、アリアケ先生！」

俺の言葉に、デリアとエルガーの攻撃をいなしていたラツカライが嬉しそうに返事をする。

一方で、プララが顔を青くして、また頭を掻きむしり、

「ちよっ！？　ちよっと待ってよ！　今戦ってる状態は本気じゃなかったっての」

妙なことを絶叫した。

「は？ 何を当たり前のことを。今のはまだ攻防なんてレベルのものじゃない。ビビア達のことを、さっきは「本気を出したな」とは言ったが、まだ準備運動段階なのは間違いない。俺たちだってまだウォーミングアップなのだからなあ。そうだろう、ラツカライ？」

「はい。ボクもまさか勇者様たちが、あんなに弱いのかと驚いてしまっていました。……ですが、やっぱり本気じゃなかったんですね！ 安心しました！」

「ふ、当たり前だろう。あんな醜態をさらすのが勇者とその仲間たちなはずがない。俺たちの戦いはこれからが本番なのだから！ 千のスキルを使用する準備も出来ているぞ！」

俺たちの言葉に、なぜかプララはどんどん顔を蒼白にしながら、

「ち、ちなみにあんたらが本気を出すと、ど、どうなるの？」

などと聞くので、

「まあ、今の百倍？ 千倍あたりの強さ、か？」

本当はもっと強いと思うが、謙遜して答える。

「は、はあああああああああああああああああああああ」

プララがなぜか悲鳴を上げる。しかし、

「いや、先生のはそういう、誰かとの比較が許されるレベルではないと思いますけどね……」

そうラツカライが言った。

「ははは、まあ、そもそも俺のような一つ上のステージに達した者を、人という物差しを用いて計ろうとすること自体が無謀なことなのだろうさ」

「ですね！」

だが、残念ながら人が何かを理解するためには、人の認識の及ぶものでしか測りようがないのもまた事実だ。

俺が理解されない次元の者だと気づけるだけでも、ラツカライは優れた人間だと言えよう。

「さ、では、そろそろ行くぞ、プララ！ お前も今みたいに手加減していたら、消し炭になってしまうぞ！ もう少しちゃんと魔法防御を張らないとなー！」

「へ？ へ？ ひ、ひいいい ー、これ本気なんだけど！？ ちよ、マジで待っ……………」

「ん？ 油断させる作戦か。ふっ、だが、そんな弱小の魔力なわけがあるまい。そんな程度では、魔力量1万、人類の切り札などという二つ名を名乗っては……………。ふ、ふふふ、ただのウソつきの詐欺師ということになってしまっぞ。ははははははは」

「詐欺師！？ て、てんめええええええ……………。ぐぎぎつぎぎぎぎぎぎぎい……………」

「冗談ではないか。どうして真に受けるんだ？ ……それに、そも

そも、少なくともこのビビア達程度の力はあるはずだろう？ お前たちはだいたい同じくらいの強さだったのだから。ゆえに、いくら、そんなへボ防御魔法を見せて騙そうとしても無駄だぞ？ ははははは

「ぐ、ぐぎぎぎぎぎ……アリアケエエエ……。なら見せてやるよおお……。どうなっても知らねえからなあ……。全解除おおおお……」

なぜか地獄の底から響く様な、怨嗟の声を響かせた。

何か気に障ることも言っただのだろうか？

と、そんなやりとりをしていると、

『バキバキバキバキ！ ブチブチブチブチブチ！』

なぜか、俺たちに襲い掛かる勇者やデリア、エルガーたちの体から変な音が聞こえて来た。

一体何の音なのだろうか。

「まるで骨や肉が裂けるような音だが……。とはいえ、まさかこの程度の動きで身体に異常をきたすはずもないからなあ」

多少動きが早くなって、攻撃力も上がったとはいえ……。

「ふん！」

「「「ふんぎゃああああああああああああああ「「「



四つ足をつき、まさに獣のごとき容貌になっている。

「ひい　何だよあれ！」

「ば、化け物!？」

「ワルダーク!?　どこに行ったのじゃ!　ワルダーク!　あの無様な獣たちをつまみ出せ!?　誰がサーカスの見世物動物を連れてこいと言ったあ」

大衆のざわめきと共に、王族らしき者の悲鳴も混じっていた気がした。

(まさか御前試合という公式の場で、これほどビビアたちがプライドをかなぐり捨て、本気になるとは思わなかった。無論、俺に勝つにはそれくらいしないといけないことは確かだろうが……。だが、ここまで獣じみた戦闘をしては、勇者の名に泥を塗ることだろうな。しかも、これは御前試合だ。試合の内容は明日には広く大陸中に知れ渡っているに違いないぞ?)

「くくぶひひよひよろんJAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA  
AAAA　「「「

3匹は奇声を上げた。

3匹が踏みしめた大地は割れ、音よりも早く走る肉体は異音を鳴り響かせる。本気で切りかかった一撃は重く激しい。

そして、受け止めるたびに、3匹の肉体の方が、メキメキと尋常ならざる蠕動を見せた。





そして、後ずさりを始めたかと思うと、

「い、今からでも逃げよう！ 洞窟であたしも置いて逃げられたから、コレでおあいこじゃん！」

そう叫ぶのが聞こえたが、

『ゴンー！』

「ふぎゃあ なんだよ！ 何なんだよ、コレはあああああああああ  
あ」

見えない壁に阻まれたかのように、何も無い場所に向かって焦った様子で、パンチやキックを繰り返している。

「何なんだよおおおおおおおおおお 見えねえよおお  
おおおおおおおおおお」

その絶叫に対して、

「あんなに忠告しましたのにねえ」

「…………へあっ」

泣き叫ぶプララに対して、フードの少女が近づき言った。

「アリアケさんの力がどれほど凄いか信じてなかったんですか？  
あれほど熱烈に語ってさしあげましたのに」

「だ、誰」

少女は微笑みながらフードを上げると、

「まったくもう。愚かですねー」

隠していたその顔を見せたのだった。

「ア、アリシア……。アリシア＝ルンデブルクうううう」

ブララは信じられないとばかりに目を見開く。

だが、驚いたのは大衆も一緒のようで、

「だ、大聖女様!？」

「あのアリシア＝ルンデブルク様が 伝説級の蘇生魔法を使用できるといふ、あのっ……!」

「だ、だけど、どうして勇者パーティー側じゃなくて、アリアケの側にいたんだ?」

「た、確かに。どうしてだ……。も、もしかして聖女様は勇者を見放されたのでは……?」

ざわ……。ざわ……。

勇者たちの今までの獣じみた戦いぶりや、象徴たる大聖女の登場に、大衆たちは勇者たちに対して疑念を持ち始めたようだ。

「ま、まずいじゃん! 大衆どもが本格的にあたしたたちのこと疑い

はじめてんじゃない 情報操作にも限界があるってーのに！ 馬鹿勇者のせいだ！ 馬鹿仲間たちのせいだ！」

訳の分からないことをプララは叫び、<sup>かぶり</sup>頭を振ると、

「くそ、て、てめえ！？ アリシア、なんでこんなところにいやがるんだよ」

「私がここにいるのはとても自然なことだと思いますが？ 神がなんといわれましようが、アリアケさんのいらっしやるところが私のいるべき場所なのですから」

アリシアはそう言ってチラチラチラ！とこちらを見た。

「？」

だが、俺はそのアイコンタクトの意味がよく分からないので首を傾げる。

アリシアのことだからきつと深い意味があるのだろうが……。

「くあーどんかん魔神！」

と、アリシアはよく分からないことを叫んでから、

「と・も・か・く、卑怯な手段で全員かかってきたアナタたち勇者パーティーには、きつっーいお仕置きが必要ですねえ」

「く、わわわわわわわわわわわ……」

「ま、とは言いまして、しっかりと謝るなら、許してあげましょ  
う。も、しょうがないですね。幼馴染のよしみですよ。さ、  
ちゃんと卑怯な真似してすいませんでしたと、頭をさげて……」

「っせええええええええええ！ 命令すんじやねええええええ  
えええええええ 強化！ 強化！ 強化！ 強化あああああ  
あああ！」

「ー」

「！」「」

3人の口からは、人には聞き取れない高周波が発せられる。

もはやそれは人のものではない。

勇者たちの身体からキリキリと糸を引き絞るような、何かが限界を  
迎えるような異音が鳴り響く。

それは獣すら超えている。

それはもはや化け物。

モンスターと言ってしまった方がしっくりくるほどの、人間を辞め  
てしまった哀れな者たちの姿がそこにはあった。

「きゃは あーはーっはっはははは！ これで勝てねえだろう！  
アタシさえ！ アタシさえ生き残りゃあいんだよ！」

しかし、アリシアは首を横に振った。

「はあ、やれやれ〜」

「は？ 何だよその態度は！？ 土下座したってゆるしてやんねえから！〜」

だが、アリシアはその言葉にドヤ顔をすると、

「やれやれ、です。その程度で、アリアケさんに勝てるわけないんですよねえ」

そう言っつてフフンと微笑んだのであった。

「……………は？」

プララの唾然とした声が聞こえる。

だが、俺はもはや彼女の方を向いていなかった。

なぜなら、自分のスキル使用に集中していたからだ。

『多重スキル・スタート』

俺の詠唱がコロシウムに響いたのであった。

62・御前試合 その 〱勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 <中編>〱〱(後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

63 御前試合 その 勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 後編1/2 (前書き)

プララ編が終わらないので、後編を分割しました。すみません。



63・御前試合 その 勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 後編1/2

63・御前試合 その 勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 後編1/2

多重スキル・スタート

俺の詠唱がコロシウムに響く。

「は……？ へ……？ ふんぎゃあああああああ」

と、プララの魔法防御が、俺のスキル詠唱のプレッシャーにすら耐えられず崩壊した。

彼女は吹きとばされて、スタジアムをゴロゴロと転がって泥だらけになる。

せっかく整えた髪やネイルがボロボロになるのが遠目にも見えた。

「まったく、だから油断するなんて言っておいたというのに」

「ま、待って！ マジで油断とかじゃねーからっ……！ これが全  
りよ」

「まだ全力を出すほどではないか！ ならば俺も全力で行くぞ！」



一方で、

「」

！

「」

勇者たちが咆哮し、人間性をかなぐり捨てて襲い掛かって来た！

勇者ビビアが四つ足で人智を超えた獣のごとき俊敏な動きを見せる

！ 口にくわえた聖剣で、煉獄打突オロラ・バーストエンド武神剣を放ってきた！

また、デリアがユニーク・スキル『祝福された拳』を乱暴に大地にたたきつけることで、地割れを引き起こし、俺たちの足場を崩そうとした。獣の彼女はそんな悪い足場をむしろ得手とし、姿勢を崩す俺たちを捕食するために、四つ足で迫り大口を開けて肉薄する！

そして、エルガーが何倍にも膨れ上がった異形の筋肉の塊となって、ゴロゴロとこちらへ転がって来た！ その姿は筋肉が防御だけではなく、攻撃にすら応用可能な万能な兵器だということを、獣としての本能が訴えているが如きだ！

加えて、後衛からはプララのファイヤーストームが、仲間ごと焼き殺す勢いで放たれた。

全員が無茶苦茶な動きで一切連携などない。人類が目にしたことがない、人間が行う非人間的な攻撃の嵐だった。

「何なんだよこれはあ……、まるで地獄じゃないか……」

「お、俺たちは勇者様が御前試合するっていうから、見に来たのに

……」

「こんなの、ただの化け物の戦いじゃない……」

観客たちの悲鳴や怯えが漏れる。

だが、

「頑張ってください！ 救世主アリアケ様！ エルフ族はあなたを応援しています」

「アリアケの旦那！ 頑張ってください！ あんたこそ冒険者の真の英雄なんだ！」

「獣人族一同もあなたを主人と仰いでおります！ 頑張ってください！」

セラや冒険者、そして獣人族の者たちが声を上げた。

それは、この戦いが始まる前から、俺たちに向けられるわずかな声援に過ぎなかった。

しかし、

「が、頑張つて……」

え？

「そつだ、頑張れ」

観客たちの声の向かう先が、勇者から俺へと変わったような気がした。

そして、

「そつだ、頑張ってくれ！ 賢者アリアケ様」

「そんなバケモンやつつける！」

「偽勇者パーティーになんて負けないで！」

俺を心から応援する声へと変わった。

なぜ、そうなってしまったのか分からない。

だが、俺と言う英雄に大衆が声援を送るのはごく自然なことだ。

しかし、

「「「ABIABEBIBABAAAAA  
AAAAA  
「「「

本能から発したかのような怨嗟の咆哮が、勇者ビビア、テリア、エルガーの口から迸<sup>ほとばし</sup>った。

歯ぎしりを鳴らし、口からは唾液を飛ばしながら、呪いのごとき叫びをあげて大地を踏み鳴らして威嚇する。

それはもはや完全に人から外れた者たち。<sup>モンスター</sup>









「かしこまりました、先生！」

そう返事をすると、ラツカライは、

「ソイルランサー爆雷重力落とし！」

大地を穿ち、地面から巨大な土の槍を発生させる。デリアの時はテコイ困  
として使った技だ。

「  
」

肉球魔神の突進は強力だが、すぐに止まれない欠点がある。

化け物は突き出した土の槍に乗り上げると、そのまま凄い勢いで上  
空へと跳ね上げられる。

「FUGOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO! ? F  
UGYOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO! ?  
」

筋肉だるまはギョツとした表情で、必死に目をぎよろぎよろとさせ  
た。

地面にいるはずの敵を探して。

しかし！

「……確かにボクだけの力だけでは、あなたのような化け物の肌を  
貫通することは難しいかもしれませ……」



「すごい！ 化け物たちを次々と！」

「これで2匹目だ！」

「アリアケ様の弟子、ラツカライがやったぞ！」

「あの二人、すごい師弟だな！」

「やれやれ、余り目立ちたくないのだが……。どうしても俺たちが少し活躍すれば、こうして英雄なんだと、華々しく人目を引いてしまおう。」

「もっと自重せねばならんなあ。」

「でも、俺の聞いた話だと、あの強いラツカライを、勇者ビビアは弱いつてなじって追放したらしいぜ？」

「まじかよ」

「は。本当に弱くて、見る目がないのは勇者……。いや、偽勇者のビビアだったってわけか！ はははははは！」

「まったく、本当に大衆と言つのは耳ざといな。」

「優れた師匠がいてこそ、ラツカライもあの強さなんだろうな」

「ああ、ダメな人間にいくら師事してもダメだからな。ラツカライは本当に素晴らしい師匠を得ることが出来て良かったんだろうな。ビビアのままだったら、強くはなれなかったろう」



「さあ、最終決戦だ、勇者ビビアよ。ついに本気を出したようだな。俺も手加減はせんぞ」

両雄の激突が始まるっ………！

63・御前試合 その 〱勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 後編1/2〱 (後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

64・御前試合 その 勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 後編2/2

64・御前試合 その 勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 後編2/2

「ぶひひいぎ

いいいGIGI

GIGI IGGI

AAAAAAA

勇者の咆哮がコロシムにこえました。

豚とゴブリンが混ざったような嘶きに、大衆はたまらず耳を押さえる。

聞くだけで精神に異常をきたすかのような、呪詛めいた咆哮だ。人間の出せる声だとはとても思えない。

「俺の予想すらも超えるほどだっ……！」

その醜悪さに、さすがの俺も息をのむ。俺すらも、やはり人智を請える汚穢おわいめいたものには嫌悪感を抱くとうことか。そのことを勇者ビビアは自ら体現することで俺へ教える。

一般人などは到底耐えられまい。か弱い女性などは気分が悪くなつたようで、席で次々に気を失ったり、胸をおさえて蹲すくっている。

「賢者様……！ は、早く……！」

「早くその化け物をつ……！」

「化け物をこの世界から消滅させてください！ 英雄アリアケ様！  
その化け物を、一刻も早く！」

人々の心が化け物ビビアを嫌悪し、また同時に英雄の俺に希望の光を見出していることが分かった。

だが、それだけでビビアの化け物ぶりは終わらない。

「キ　　！キ　　キ　　キ　　ああああ　　アアアア  
アアアアア　　A A A A A　　」

絶叫とともに、

『バツキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイン　』

「い、いつやああああああああああああああああああああ  
ああああ　」

「お、おええええええええええええええええええええええええ」

「も、もうお嫁にいけないっ……　ぶくぶくぶく……」

女性たちの悲鳴がまたしてもコロシウムに響く。

無理もない。ビビアは身体を更に強化したようで、体格を数倍に肥大化させたのだ。





つける気が

しかし、

『ビュビュビュビュビュビュビュビュビュビュ！』

「髪の毛に魔力を込めて打ち出しただと」

余りにも意外な攻撃に、虚を突かれた俺はさすがの俺も防ぐだけになる。一本一本の髪の毛に膨大な魔力が込められていて、刺されれば大怪我をするだろう。人間の技ではない！

無論、それと同時に勇者ビビアの頭髮がどんどん減少していくのだ！

「やめろ、ビビア！ それ以上やったら生えてこなくなるぞ！」

「！」

「

ビュビュビュビュビュビュ！

駄目だ、通じない！ 本当にいいのか、ビビア！

「ゲロは吐くし、化け物だし、全裸だし、ハゲだし。もう最低よお！」

「最低勇者！！」

「最低勇者ビビア！」

観客たちから最低コールが巻き起こる。

(哀れだな、ビビア……。そこまでして俺に追いつきたいと思ったのか?)

俺は憐憫の情を催す。

俺に少しでも近づきたい気持ちは分かる。

優れた相手に憧憬こころほぎの念を抱くのは人として自然なことだ。

だが、俺の高みにいたずらに手を延ばせば、お前のような不幸な輩が作られてしまう。

太陽に至ろうとして、崖から羽ばたいた愚かな人間のように。

俺はそのことを反省する。

俺が優れ過ぎていることの弊害が、太陽のような届かぬ高みにあることが、こんな悲劇をまき起こしてしまうだなんて……。

ならば、

「せめて、一思いひとひにやっつてやる。これで終わりだ、勇者……。いや、化け物ビビアよ……」

「あああああああああ  
EEEEEE  
AAAAAAA  
B I  
I I I I I A A B E E  
B I B A B A A A A A A A  
A A A A A A A A A A A A  
- ”

何を言っているのかわかない。もはや個人の区別もついていないの  
だろう。

ビビアが……、いや、真の化け物が迫る！

大衆が俺の勝利を願った。

『メタモルフォーゼ・ビビッド！』

俺は自らにスキルを行使する。メタモルフォーゼ自体は変身のスキ  
ルだ。だが、俺はこの技を応用して体の一部だけを変形させる。

勇者のマネというわけでもないが。

すると、

「綺麗……」

「羽が生えた……？」

「神……様？」

そんな声が観客から漏れる。

勇者に対するものとは真逆の反応が返って来る。

まあ、確かに俺は神に近い男ではあるが、そのようなものに興味も  
ないし、なりたいたとも思わないが。

そんなことはともかく、俺はスキルによって、あたかも翼人種によ

うに羽を背中より生やす。

バサリと上空へと舞い上がり、地上で四つ足のまま、悔しそうな表情をしてこちらを見上げ、成す術もなく睨み付けるビビアへと告げた。

「不出来な弟子、ビビアよ。これで終わりだ。だが最初に謝っておきたい」

「先生？」

ラツカライが不思議な顔をする。

「俺のような高みを目指し、失敗した結果が、まさにお前なのだろう。だが、化け物になるうとも、俺にその手は届かん。今、お前が俺を見上げるだけしか出来ないようにな」

その言葉にラツカライは深く頷く。

「その通りです。哀れな勇者様。あなた程度の方が先生のレベルに達することはありえません」

そう憐れんだ表情で、兄弟子……しかし、はるかに劣った兄弟子へと告げた。

しかし、ビビアはもはや知能すら残っていないのか、野生の獣にも劣るつめき声をあげると、身を思い切りかがめる。

そして、



そして……。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
……………。

太陽を目指した人が辿る末路と同じく、大地へと落下し、その身体を強く打ち付けられたのであった。

観客たちの喝采の声とともに。

〈プララ視点〉

「ち、ちつくしょう……。まさかあたしが負けるだなんてえっ  
……………」

あたしはパニックに陥る。

あらゆる手段を使ったのにダメだったのだ。

もはや、この状況をひっくり返すことは出来ない！

なら、

「逃げるしかねえ！ あたしさえ無事ならそれでっ……………！」

急いでコロシアムから脱出しようとする。







64・御前試合 その 勇者の仇をうつべく立ち上がる仲間  
たち プララ編 後編2/2 (後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの? ……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



「う……お……たちは……な……を……？ う、ぐ、がつ……」  
だが、完璧な治癒ではないようだ。試合の最中だから当然ではある。  
ぎりぎり意識はある程度、しかし動けないといったところか。

俺たちの声は聞こえるし目は見えているようだが、言葉を満足にし  
やべることは出来なさそうだ。

ならば、大衆たちのこの声も耳に届いているということか。

「おいおい、全部酷かったが……。特に最後のあれは何だったんだ  
？ まさか、御前試合で仲間割れか？」

「それってさ、完全にモンスターよりタチ悪くないか？ モンスタ  
ーじみてたけど、モンスターだって仲間割れなんてしないぜ？」

「モンスター以下のあんなのが、王国指名の勇者とその仲間たちだ  
なんて……」

ざわざわと嫌悪と侮蔑を口にする。

やがて、

「国王は一体どういつつもりなんだ？」

「大丈夫なのか、この国は？」

「魔王を倒すどころか、中から滅びちまうんじゃないか？ あんな  
無能を指名する無能な王国だなんて」

勇者がどうこうというレベルを超えて、国への疑念が膨らんでいく。それほど、勇者たちの戦闘が酷く、醜悪であり、人々の心にトラウマを与えてしまったのだろう。

それなりに、信頼されていた王国の良識を、たった一日で破壊してしまった。

どんな有能な敵国のスパイでも、これほどの工作活動は出来まい。そうこの俺をもってしても唸うなることしかさせない、恐ろしいほどの効果であった。

王国への批判は場合によっては不敬罪として厳罰に処されるほどの罪だが、今はそのことを忘れさせるほど、王国の権威を失墜させたわけである。

「ぐぎぎぎー！　ぐぎぎぎぎぎーっ……」

大衆の正直な感想に、勇者は悔しそうに青筋を立て、歯ぎしりをきしませる。

だが、意識を保つだけで精一杯な勇者は、彼らに反論することすら出来ない。

（だが、このままでは王国の権威は失墜する。勇者によって権威の象徴である御前試合が、醜悪なサーカスになってしまったのだから……。どうにか挽回せなければならんぞ？）

そう思つて王族のいる観覧席を見ると、国王が渋面を作っているのが見えた。

少しばかりスキルで聴力を強化してみれば、

(まずい、このままでは民の支持を失うばかりか、今日の戦いを観覧するためにわざわざ呼び寄せた貴族たちに顔向けできぬっ……！)

(ええい、ワルダークは何をやっているのか　どこに行きおった)

(……いや、よく考えて見れば、あんな勇者パーティーなど、この国には不要だな……)

(真の英雄を民は求める。それに王は応えるものだ……)

何やら訳の分からないことを言ったかと思うと、観覧席から、

「此度の戦い、まことに見事であった！　さすが真の勇者アリアケじゃー！」

そう大衆によく聞こえる声で言ったのである。

(はあ？　何を言ってるんだ？)

俺は純粹に首を傾げる。

勇者ビビアも同じだったようで、地面に這いつくばり、王の観覧席を首だけで見上げながら、顔面蒼白で口をパクパクとする。

ビビアが勇者なのだから当然だ。



「あ、ああ……。確かにそうだったはずだぜっ……。！」  
ざわざわと、大衆はざわめく。勇者が入れ替わるなどという事態を、  
そうやすやすと受け入れられるはずもあるまい。

勇者とはビビアのことだ。

俺はそう思っていたのだが、

「……。まあ、あの戦いなら納得だ！」

「すごい。やっぱり本当の英雄の戦いってというのは、ああいうもの  
なのねっ……。！」

「かつこよかったぜ！ 真の勇者アリアケ！ よくぞ偽勇者を倒し  
てくれた！」

パチパチパチパチ！

コロシムに拍手が轟とんき、俺たち真の勇者パーティーへと降り注い  
だ。

別にそんな称号は欲しくもないのだが、いつの間にか、こんな状況  
になってしまっていた。

しかし、その一方で、

「それに比べて勇者……。じゃなかった。偽勇者ビビアの戦いはひど  
い」



「その仲間もだ！」

「畜生にも劣る戦いだった。あんな戦いを王族たちの前でやるなんて……」

「その上、めちやくちや弱かったじゃねーか！ そんな奴らを応援していたなんて、俺は一生の恥だと思っよ！」

死ね！

畜生以下のゴミカス！

偽勇者どもめ！

などといった聞くに堪えない罵倒が飛び交う。

「うぎ　　うぎ　　うぎ　　」

華やかな舞台で華麗に活躍するはずだった勇者は、今や大衆に唾棄すべき存在と認識され、勇者の称号すらも剥奪された、ただの落伍者のようであった。

その上、勇者はあの戦いで頭髪の半分を失い、全裸でゲロまみれである。

大衆が見放すのも当然の、変質者同然の男にしか見えない。

だが俺は、

「やれやれ」

そう俺は苦笑しながら頭かぶりを振った。

そして、王族や大衆たちを諭すように語り掛けた。皆自然と静かになり俺の言葉を聞く。

「俺が優れているのは、当たり前のことだ。国が俺を頼ろうとする  
ことも分かる。だが、聞いて欲しい」

俺はそう言いながら、地面に這いつくばる偽勇者に対して、憐憫の  
微笑みを向けてから、

「偽勇者が師匠である俺に勝てないのも当たり前のことだ！ たと  
え1000年研鑽を摘もうとも絶対に無理だろう。それほど彼の格  
は低い！」

まずは事実を述べた。

「だが！」

俺は続ける。

「真の勇者はこのピビアで間違いない！」

そう宣言したのである。

「なあ  
」

その言葉に、大衆たちはもちろん、偽勇者だと公言した王すらも、  
うめき声をあげた。





る。

(ふう、どうやら、勇者の立場は守られたようだ。少し本気を出しただけで勇者の地位についてしまうところだった)

俺は冷や汗を拭うのだった。

勇者などという面倒な地位を手に入れるつもりはさらさらなかった。

幸いながらビビアは勇者ごとき地位に固執しているようだし、頼りないが、まあ任せておいてやろう。

俺には頼まれても不要な地位だからなあ。

おっと、そう言えば。

俺は思いだしたとばかりに手を打つ。

師匠として、これは伝えておいた方あ良いと思ったのだ。ビビアの今後の成長にもつながるだろう。

「一つアドバイスがある。お前、ラツカライを無能だと言って追放したらしいな。人を育てるレベルには、お前ではまだまだ達せていないらしい。相変わらず人を見る目がまだまだ未熟だ。腕を磨くのももちろんだが、それと平行して、他人の才能をしっかりと見極め、そして育てられるようになれ。人を育てられるようになってこそ、俺に少しでも追いつくことになる。それが俺からお前に与える、今後の宿題だ！」

俺の言葉を聞いていた大衆は、

「ええ 偽勇者は、あのメツチャ強かったラツカライを育てられなかったのか」

「アリアケ様の方がお強い上に、人を育てる才能もあるんだなあ」

「今ではラツカライのほうが、兄弟子だった偽勇者より強いみたいだしな」

「偽勇者ビビアには育てられず、真の英雄に育てられたら、あれほど成長する。やっぱり人によって全然違うんだな」

そう言葉を交わすのであった。

だが、まあこの点について擁護するのもおかしな話だ。  
むしろ、

「可哀そうだが事実だ。だが、落ち込むことはない。こういった悔しい経験をもとに、人は成長するものなのだから」

そういうことだろう。

ビビアの成長を願い、俺はそう言って微笑んだのである。



ああああああああああああああああああああ。

ああああああああああああああああああああああああ  
ああああああ

あ”  
あ”  
あ”  
あ”  
あ”  
あ”  
あ”  
あ”  
あ”  
あ”  
あ”

絶叫。怨嗟。怨嗟に次ぐ絶叫。

この世界などなくなればいいと言う、純粹な思いに心が覆われる。

心が闇に覆いつくされる。

当然だ。

勇者の俺を奉らない世界など、滅びるべきだ！ 俺は何も間違っ  
ちやいねえ！

……その時。

『勇者ビビアよ』

ワルダーク宰相の声がどこからか聞こえた。

「宰相！？ ど、どこから……」



『そんなことは、どうでも良い。それよりも、お前には切り札があるだろう?』

きり……ふだ……?

『切り札の声を聞け……』

こ……え……?

俺は全裸だ。

だが、腰袋を一つだけ下げている。ワルダークの切り札を放さないためだ。

その切り札のほうに耳を傾ける。

声が聞こえて来た。

『力が……欲しいか……?』

「ほ、欲しい……」

俺は即答する。

『何を、失おうとも?』

俺は、考え……、

「アリアケや今、周りにいる奴らや王族！ 大衆共をぶち殺せるなら何でもいい！」

考えるまでもなく、即答した。

『そなたは、私の器に、ふさわしい……。心地よき、黒き……。魂の担い手……。我を……。託そう……。選ばれし者よ……。』

袋の結び目がひとりでに開くと……。握りこぶしほどの緑色の石に、奇妙な目玉が付いた、意味不明の物体……。それがズルズルと、触手のようなものを生やして這い出して来た。

そして、

『シュルリ……。ゴクリ……。』

一瞬にして、俺の喉を嚙下していく異音とともに、

『ガクリ』

俺の体は唐突に糸が切れたかのように、地面に突っ伏した。

そして……、

「ビビア？ ……その体はどうした？」

そんな声が俺の真下から聞こえて来たのであった。

心地よい、絶対の、万能感と共に。

65・御前試合 その 賢者アリアケと勇者ヒビアの友情  
（後書き）

本作について、

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「（偽）勇者は今後どうなるのっ……!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

66 〱VS・モンスター・ヒビア・ハルノア その〱(前書  
き)

書籍化&コミカライズ決定！ 詳細は後書きで！











「どうかあの化け物を……。あのおぞましきモンスター……。ビビア・ハルノアから我々をお救い下さい……」

絶望。

そして、祈り。

人々が絶望した時に出来るのは、神に祈ることだけ。

それほどの恐怖の権化が、目の前の存在、モンスター・ビビア・ハルノアであった。

俺すらも目をそらしそうになる。その吐き気を催すほどの醜悪な姿……。

そう、かつての幼馴染だった元勇者ビビア・ハルノア。彼の姿を描写するならば……。

四つん這いのカエルのような姿勢で水棲生物に似た姿をしており、眼窩は隆起し、瞼はなく、肌は青色でぬめぬめとしていた。

腹の方は白くてテラテラと光っている反面、体中にびっしりと鱗があり、背びれもある。

奇妙な濃い緑色の尻尾が生えており、また鱗の合間からは、やはり悍ましい触手が何本も何本も生えていた。その触手のその先端は口のようになっていて、常時腐臭と奇妙なうめき声をあげている。

そして、その大きさは優に50メートルはあった。

言うまでもなく、人類の敵、超巨大モンスターだっ……！

その姿はとても正視に耐えられるものではないし、何より、

「あれが、ビビア・ハルノアの正体だったのか……。まさかモンスターだったなんて……」

観客の誰かがいみじくも言った。

そう。

その正体は、先ほどまで勇者と言われた男、ビビア・ハルノアなのだ。

いかに出来ない男だったとはいえ、それでも普通の人間だった……。なのに、そんな普通の人間が、目の前でこんな化け物へと姿を変えたのだ。

人が化け物に変わる。

事実はどうあれ、化け物が人間の姿で振る舞っていた。

その事実を、人々を恐怖のどん底に突き落とす。

（勇者がモンスターになったなど、前代未聞だっ……。いかに歴史を紐解いても、これほどの悪夢は記載されていないぞ……）

「このことは王国の歴史書にも明記されるだろう……」

俺は天を仰ぎ呟く。そして、

「かつての勇者ビビア・ハルノアが御前試合で、王族や大衆たちの目の前でモンスターへと変貌し、破壊の限りを尽くした、と。そう記されるだろう」

そう正確に俺は、元勇者ビビア・ハルノア。今や人類の天敵、醜悪なるモンスターになった男の未来を予測したのだった。

66 く VS ・モンスター・ヒビア・ハルノア そのく（後書  
き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

67 〽VS・モンスター・ビビア・ハルノア その 運命に  
導かれ、集いし仲間たち〽

67 〽VS・モンスター・ビビア・ハルノア その 運命に導  
かれ、集いし仲間たち〽

「アリアケ様！」

そう俺に駆け寄りつつ、声を掛けて来たのは、ふわふわとした緑の髪を伸ばした15歳くらいの少女だ。

以前、一度一緒に旅をしたことのある女性。

彼女の名は、

「ローレライか。久しぶりだな」

「はい！ ご無沙汰しています！」

彼女は花のように微笑む。しかし、すぐに厳しい顔になって、背後でビチビチと触手を振り回す化け物を警戒する。

「ですが、今は久闊きんくわんを叙じょしている場合ではなさそうですね……！  
あの化け物を……」

「ああ、その通りだ。今は目の前の化け物を倒さなくてはならん」  
俺たちは迫る触手を杖でさばきながら会話する。

ローレライは頷きながら、

「おっしゃる通りです。このローレライ、全力で支援させてもらいます！ また一緒に戦わせてください！ 真の勇者アリアケ様！」

彼女はそう言うと、もう一度花のように微笑んだのだった。

ただ、俺は勇者ではないのだが……。

まあ、人が何かを言う事を止めることは出来ない。

何であれ、彼女のような高位な回復術士がいれば助かることは確かだ！

だが……、

「いいのか？ 君は勇者パーティーの一員だ。あの化け物は、姿を変えたとはいえ、仲間である勇者ビビアの成れの果て。そんな仲間と本当に戦えるのか？」

残酷な質問かもしれない。

即答は難しいだろう。

だがそれくらいの覚悟がなければ……。

「はい！ 全然大丈夫です！」

「……え？ 本当にいいのか？ あいつはビビア・ハルノアなんだぞ？」

「そんなこと言ってる場合じゃありませんよ！ アリアケ様！ 民衆に大きな被害が出てしまいます！ むしろ、真の勇者アリアケ様の元で戦わせてください！」

その迷いのない言葉に、俺は逆に勇気づけられる。

幼馴染と戦う。そのことに躊躇していたのは優しすぎる俺の方だったのかもしれない。

だが、目の前の少女は、仲間と戦うと言うのに、むしろためらいなく、俺と共闘することを選んでくれたのだ。

ならば、俺がかける言葉は一つだろう。

「いや、こちらこそお願いしよう。ようこそ、俺のパーティーへ。一時いつときかもしれないが、共にあの化け物と戦おう！」

「はい！ このローレイ・カナリア、今より勇者パーティーを正式に脱退し、真の勇者アリアケ様のパーティーメンバーとして癒しの杖を振るいます！ ええい！」

彼女はそう言うと高速詠唱で傷ついた民たちをたちまち癒した。

なるほど、本当に優秀だ。

こんな頼もしい仲間が一人増えてくれたならば、ずいぶん戦闘が楽になるだろう。

しかし、その瞬間、

「口」

”ラ”イ”イ”

イ”イ”

イ”イ”イ”イ”

デメ”エ”エ”

エ”エ”エ” マ”ダガ”ア” ア”

ア”ア”ア”ア”

”ア”ア”！！！！！！”

どこか怨嗟のごとき人外の絶叫が響くのと同時に、触手から毒霧のような物が放出される！

（くそ、ビビアよ！ もう仲間の顔も忘れてしまったというのか！）

「アリシア、結界をつ……………！」

「おっと、これくらいは俺のアイテムで十分ですよ。わざわざ聖女さんの手を煩<sup>わづら</sup>わせるまでもない」

「なに？」

突然現れた男が聖水のようなものをまくと、紫色の毒霧がたちまち透明無害なものに変わる。

いい手際だが……………。

「君は？」



「バシュータと言います。あなたのお噂はかねがね……。あの勇者パーティーを、一人で支えていた凄腕ポーター、大賢者アリアケ様こうして話せて光栄です」

「いや、俺にとっては大したことはないさ。だが、君もその若さで大したものだな。今のは月の雫草から採取した解毒薬を、高密度ポーションに溶かしたものだろう？」

「さ、さすがです。よく分かりましたね！」

「無論だ。だがそれ以上に、敵の攻撃に動じずにアイテムを行使するその機転と行動力が素晴らしかった。ポーターはそれくらい視野が広くなくてはな」

「あ、ありがとうございます！ や、やっぱりあなたは思った通りの方だ！ ちゃんとポーターが必要な存在として扱ってください！」

「ん？」

突然の言葉に、俺が首を傾げる。

だが驚く俺をよそに、バシュータが膝を折り、

「このバシュータ・シトロ。今より勇者パーティーより完全に外れ、ポーターを越えたポーター、大賢者アリアケ様の麾下きかに入ります！」

それが意味するところは、

「俺の仲間になる、と？」

「そうです！ 邪魔にはなりません！ お願いします！」

彼はそう言うと、深々と頭を垂れた。

だが、

「そんなことをする必要はないぞ、バシユータ」

「そ、そんな……」

バシユータが暗い表情になるが、

「俺の方こそ君に頼もう」

「!?!」

目を見開く。

「バシユータ・シトロ。その優れた技量で、一時的かもしれないが、あのおぞましき怪物、モンスター・ビビア戦における、ポーターとして働いてくれるか？」

「っ！ も、もちろんです！ 喜んで！ もう俺は勇者とは無縁の存在ですよ！」

彼はそうはつきり言うと早速行動を開始した。

「はあ！」

何かを取り出したかと思うと、それを化け物の周囲へ投げつける。



聖女の結界は観客席と闘技場を完全に区切る様に、半円を描くかたちで展開されている。

それによって、化け物の攻撃は観客へは届かない。

だから、安心していたのである。

だが、パニックになった民衆の中には、聖女が結界を張る前に、何と闘技場に入ってきてしまった者がいたのだ。

それは4、5歳の子供であった。パニックが起こったときに落下してしまったのだろう。

「危ない！」

子供の行動を予想することなど、どんな大人にも不可能だ。

だが、まさか、こんな時にそれを痛感することになるうとは。

(間に合ってくれ！)

ビビアのおぞましい触手たちが、本能のままに子供を襲おうとするのを見て、俺はすぐに駆け出す。

(くそ、間に合うのか!?)

しかし、

「やらせませんわ!」





勇者以外のメンバー全員が俺のもとに集結する。

それは、たった一人孤独な勇者……いや化け物となり果てたビビアとは対照的な構図だった。

67 〽VS・モンスター・ピビア・ハルノア その 運命に  
導かれ、集いし仲間たち (後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの? ……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



68 ｝VS・モンスター・ヒビア・ハルノア その  
対 勇者パーティー 悲しき戦い その1｝ (前書き) 勇者

○ 本日は祝日なので20時ではなく早めに更新します(○\*。|。)







のようであることに気づいたのだ。

（雑魚……いや、こーんな蟻みたいな卑小な存在に、なんで俺様レベルの上位の存在が、怒りを覚える必要があるんだ？）

俺は気づく。

そう。

そうだ。

そうだよ。

今の俺はワルダークから託された『切り札』を使って化け物になっちまったものの、アリアケやラツカライの野郎どもに、卑怯な技で受けた傷や疲れは完全回復している。

それどころか、強大な力が体中にあふれ、無尽蔵の魔力に臓腑が満たされるのを感じているんだ。

おそらくあのアイテムによって、俺様の真の力が発揮されたんだろう。

つまり、

（俺にふさわしい、万能の力を手に入れたんだ！俺は神だ！ 崇め奉られるべき存在になったんだ！）

勇者も無論悪くなかった……。だが、それはしよせんは人の枠にはまった存在。





「一遍の欠片も残さないほど、や、焼き尽くしてあげるんだから！」

(ぎゃーはっはっはっは！ ほえろほえろ！ 怯えろ！ 怯えろ！ 神にたてついた報いを受ける！ 心地いいぜえ！ 負け犬の遠吠えってのはよお！)

俺は最高の愉悦に浸る。

ああ、だがもつたいねえ。

俺は惜しくなる。

この瞬間を。

この時を。

この勝利の確約された快樂の時間を。

なぜなら、3人の遠吠えという名の心地よい音色も、もつすぐ聴けなくなるのだ。永遠に！

なぜなら？

(あああああああああ、もう我慢できねえ！)

俺にささげられる供物になるからだ！

ああ、そうだ。神に我慢など似つかわしくない！



やりたいようにやる！

いたぶれるだけいたぶる！

それが上位者たるこの完全存在ビビア・ハルノア様の権利なんだからなあ！

俺は弱者をいたぶれるという快樂の予感に腹の襞をびくびくとさせながら、雑魚3人へと飛びかかったのである。

「あ”ーばっ

ばっばっば

っば!!!

ジネ”え”え”え”え”え”え”え”え”え”え”え”

!!! ザゴども”が

あ”あ”あ”あ”

あ”あ”あ”あ”あ”

あ”あ”あ”あ”あ

”あ”!!!”

俺は数秒後にはぺちゃんこになっている3人を想像し、高らかな哄笑を上げながら飛び上がると、そのまま巨体を利用して押しつぶしにかかる！

コロシムという限られた空間の中で、超巨大を誇る俺様の、この攻撃から逃れることは絶対に不可能！ 必然の勝利！ 楽勝だ！

「きやあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああ」

大衆どもの悲鳴がとどろいた。

んぎいいいいいいいいいい！！ 心地いいいいいいいいいい！！





”ナ”ン”て”こ”と”がオこ”る”う”う”う”う”う”う”う”う”  
”う”う”う”う”う”う”！?!?!?”

俺はありったけの怨嗟の念をこめて、その名を叫ぶ！

「エ”ル”ガア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”  
ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”  
ア”ア”ア”！！！！！！”

その絶叫に、俺の超巨体を、たった一枚の大盾で弾き飛ばした男は、  
あるうことがニヤリと笑うと、

「俺の名はエルガー！ この国の盾！ いや……」

男は筋肉を見せつけるように仁王立ちすると、

「人類イージスの守護盾！ エルガー・ワーロックだ！ 俺がいる限り人類  
にあた仇なす攻撃はすべて無駄だと思え！」

そう高らかに宣言したのである。

なっ……………！

なっ……………！

なああああっ……………！？

雑魚のくせに！ 雑魚のくせに！ 雑魚のくせに！ 俺の金魚の糞  
ごときが！?!?!?!?!?!?!





68 〽VS・モンスター・ピビア・ハルノア その  
勇者  
対 勇者パーティー 悲しき戦い その1〽 (後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

69 〽VS・モンスター・ビビア・ハルノア その 勇者  
対 勇者パーティー 悲しき戦い その2〽

69 〽VS・モンスター・ビビア・ハルノア その 勇者 対  
勇者パーティー 悲しき戦い その2〽

雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに  
雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに  
雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに  
雑魚のくせに雑魚のくせに雑魚のくせに  
いいいいいい！！

俺はエルガーにひっくり返されたまま、触手を振り乱した！

いら立ちを抑えきれないいいいい！！

金魚のフンごときが俺に逆らいやがったのだ！

あつていいはずがない！

（そうだ、これは現実じゃないいいいい！！）

たまたまだ！ 偶然だ！

いかに支援スキルがあったとしても、神たる俺がエルガーなんか  
打ち負けるはずがねえんだ！！！！



「うんぎよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！……！」

ちくしょうちくしょうちくしょう……！ まぐれとは言え、この  
神たる俺に土をつけるなんてえっ……！……！！

「ゼツ”タ”イ”に”ユ”ル”さん”ぞ”お”お”お”お”  
お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”  
お”お”……！！……！！」

エルガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアア！

だが、そんな俺の咆哮をまるで意に介さず、涼やかな女の声が、耳  
元で聞こえたのである。

「いつまで寝ているのかしら、化け物さん？」

「ぐげぎよ！？！？！？！」

俺は狼狽する。その声は ……！

「デリア”ア” ……！？」

そんな俺のうめき声に、真横でデリアは余裕な様子で微笑みすらた  
たえている。

（馬鹿な！ ……いつの間に！？！？！）

俺は内心で更に驚愕する。

なぜなら、

(わざわざ、ダウンしている俺に近づけないように、めっちゃくちゃに触手をぶん回していたんだぞ……！)

触れれば即死級の威力を誇るこの嵐のような攻撃をかいくぐって、俺に近づける存在などいるはずがねえんだ……！！

(特にテメエみたいな、俺の金魚のフンごときが、余裕のある声で俺に話しかけることなんて出来る訳がな……！！……！！……！！)

だが、そんな俺の内心の悲鳴を遮るかのように、遠くからブツブツと、腹立たしい声が耳に届く。

「回避付与」

「神速付与」

「巨大モンスター必滅」

「クリティカル威力アップ」

「星属性強化」

「火属性強化」

「魔法威力アップ」



神たる俺にダメージを与えられるような強さはないはずだ!!

なのに、

「あら、化け物さん、今はただのウォーミングアップですわよ?」

「は”???????”」

(ウォオ、ウォーミングアップ!?)

するとデリアは俺の内心が読めるかのように微笑むと、

「あらあら、何を驚いているのかしら? ……行きますわよ?」

俺は間近で凝集する魔力の威力に本能的な危機を感じる。

(ひ、ひいいい!?! つ、強すぎる……、ど、どうしてっ……。  
い、いや、んなことより、は、はやく逃げねえとっ……!)

俺はジタバタともがく。その一方でデリアの異名を思い出していた。

俺たち勇者パーティーの中にあつて、あらゆる難敵をいとも簡単に打ち砕く、神より授けられた唯一無二のギフト持ち。

勇者パーティーに貫けぬ敵はなしと、大陸中にその名を轟かせた神の拳。

その名はっ……!!





だ。

しかし、

「あは 空に舞い上がる化け物。いく<sup>ま</sup>いた的じゃん」

彼女たちの攻撃は、まだ済んではいなかった。

（その舐め腐った口調はプララかつ……！）

この俺様が『<sup>ま</sup>た』だとおおおお！?!？

空中で苦痛と屈辱に身もだえ、打ち震える。

今頃プララは真下で俺に攻撃魔法を撃とうと詠唱を始めているってところか！

だが、

（なんだ、それなら、安心じゃねえかあ）

ニチャリと、俺は逆に冷静になって、テラテラとした唇を歪めた。

（プララごときへボ魔法使いが俺に何が出来るってんだ！ ぐげげげげげげげええええ）

俺は痛みに苛こまれながらも、笑いをこらえることが出来ない。

エルガーが俺の攻撃を防ぐことが出来たのも、デリアが俺に攻撃することが出来たのも、ひとえに偶々俺との相性が良かったからに過ぎない。

エルガーは物理攻撃に対して変人じみた防御力を誇るし、デリアは俺の無敵の防御を無効化しやがる！

だが、もちろんそれは偶然だ！

あいつらにとって運が良すぎた！ 俺にとっては運が悪すぎた！  
それだけのことに過ぎねえ！！

絶対に次はねえ！

エルガーに対しては、魔法攻撃か特殊攻撃をすれば終わりだあ……。

デリアには遠距離攻撃で近づけないようにすれば良いだけなんだからなあ……。

そうだ、俺は全然負けてねえ！

むしろ勝ってる！ 雑魚どもの攻略法を確認したんだ！ 必要な手順だったって訳だ！！ お前らはもう終わりだ！ 終わり！ ジ・エンドオオオオオオオオオオオ！

（だが、プララ！ てめえはダメだ！ それ以前の問題だ！ なぜなら、なぜならあー！）





「サモン召喚サラマンダー、ウィザード発現、エクスハラティオ・オメガ完全憑依炎陣術式……」

プララの詠唱が俺の耳に届いたのである。

（完全憑依術式だとおおおおおおおお！？）

俺は慌てる。

その魔法はプララの魔力量1万という規格外のキャパシティーをもつて可能とする唯一無二の術式！

召喚によって招来した精霊を、あるうことか体内に完全に取り込み、その力を自在に操るといふ反則技だ！

普通の人間には精霊を体内に受け入れるような魔力キャパシティーがないから、部分的に憑依させるだけでも、神経がズタズタになつて死んでしまう。

だが、プララはその『魔王に勝るとも劣らない』と言われる魔力量によつて、その常識外の術式を操ることが出来る！

（最近では使えねえって言つてたはずなのに………！ どうしてっ………！！？）

いや、んなことは考えてても仕方ねえ。

(そ、それに、あれほどの高位魔術なら、発動まで時間がかかるはずだ！ 発動までにぶっ殺してやればいいだけっ……！)

俺はそう思うが、

「リンクング接続！ スケール完了!!！ もう撃てるよ!!！」

(あれほどの高位魔術なのに 詠唱破棄 だとおおおおおおお？)

俺は空中でジタバタと四肢を振り回す。

触手を出来るだけ地面のほうに向けて盾にしようとかあぐ!

大地に。プララに。恐るべき火の精霊たちの加護が宿るのを感じる。太陽よりもなお濃い、濃縮された魔力マナの凝集を感じる。

(ああああああああああああああああああああああああああああああ!!???)

死にたくない!

死にたくない!

死にたくないっ……!!

誰かたすけっ……!!

「いけ、プララ! 哀れな化け物をあの世に送ってやれ!」

エルガー！？

「ええ、あれはもう勇者じゃない。ひと思いにやってあげて！」

デリア！？

て、てめえええらあああああああああ………！

「分かった……バイバイじゃん、勇者。今まで楽しかったよ。……  
最後は笑顔でサヨナラじゃん！」

プララアアアアアアアアアアアア！！！

キュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
ウウウウウウウウー！

魔力が集中しすぎて空間を震わせるような異音がとどろいた。

「喰らうじゃん、化け物！」

「じ、じにだく”ない”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”  
い”  
”！！！！」

俺は絶叫した。

だが、無慈悲にもプララから最大級の魔術が放たれる！

「アザエル・インフェル世界崩壊狂熱地獄！！！！！」



その名乗りに、

「わあ！　すごいぞ！」

「化け物を倒してくれた！」

「助かった、俺たちは助かったんだ！」

そんな歓声上がる、そして、

「さすがアリアケ・ミハマ大賢者様が率いるパーティーだ！」

「本当にそうだ！　勇者が率いていたころは全くダメだったパーティーメンバーすら、真なる賢者、アリアケ・ミハマ様がバックアップすれば、こんなにすごくなるんだからなあ！　いや、本当にアリアケ様はすごい！　それに比べて……」

「ああ！　本当に勇者はダメだ！　アリアケ様の爪の垢を煎じて飲むべきだよ！」

そんな大衆たちのアリアケへの絶賛の声が響くのと同時に、対照的に、あるうことかこの俺へは、侮蔑の合唱が沸き起こったのであった。

69 〱VS・モンスター・ピビア・ハルノア その  
勇者  
対 勇者パーティー 悲しき戦い その2〱 (後書き)

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「今後どうなるの?……!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

70 〽VS・モンスター・ビビア・ハルノア その  
ンスター・勇者ビビアに敗北する勇者パーティー三人 覚醒モ

70 〽VS・モンスター・ビビア・ハルノア その 覚醒モ  
ンスター・勇者ビビアに敗北する勇者パーティー三人

〽ビビア視点〽

ぐぐぐききっ……。

ちくしょっつ……！

じぐじょっつ……！

うっ……！ えぐっ……！

俺は悔し涙が止まらない。

俺の体はプララの高出力の魔術にさらされ、今やその命は風前の灯  
火であった。

しかも、

「ふふふ。人類の盾たる俺がいる限り、例えどんなモンスターであ  
っても恐るるに足らんわ！ 無敵！ 最強！ 筋肉！ がーはっは  
っはっはー！」

「私にかかればどんな敵であつても楽勝ですわ！ やれやれ、本気





うん、ちゃんと勇者パーティーだった履歴を過去のものにして、新しい英雄として名前を売んなきゃだし！ ほらどけよ！」

聞くに堪えない喧噪が俺の耳に届く。

かつての仲間の俺を、ただの獲物として舌なめずりする声。

それはあまりにも醜悪な光景。人類の悪を凝縮したかのような汚泥のごときもの。

いや、汚物そのもの。

だから、俺は思わず祈った。

(ああ、誰か……誰でもいい……。あいつらをぶっ殺せるなら、何でもいい……。だから、誰か……)

「ダレ”カ”……タ”ス”ケ”テ”……ク”レ”」

「ふむ、よかろう。勇者ビビア・ハルノアよ」

声が、聞こえた。

(ワルダーク宰相？)

目の前にはなぜかワルダーク宰相がいた。

（だが、おかしいな）

俺は心の中で首を傾げた。

なぜなら、俺は魔法で吹き飛ばされて空中を舞っている最中だ。ただの人間であるワルダーク宰相が、そんな俺の目の前を、フワフワと浮いているのはおかしい。

だが、宰相は俺の疑問など無視して、当たり前のように目の前を浮遊しながら、話を続ける。

「魔人ポセイドンの器となりえる邪悪な魂を持つものよ。我の神核として融合し、最強の存在として人類を蹂躪する災害となるが良い」

邪悪な心？ 誰のことだ……？

神核？ 何を言って……？

「ラツカライの成長。聖槍ブリューナクの覚醒。それらは真の賢者アリアケによって成なされた。そなたが覚醒させる予定であったが、結果は同じ。かの聖具はいかなる封印をも破る光輝の槍。そなたがブリューナクに貫かれた時、持っていた魔人の封印石の結界も同時に解かれた。そして今は、魔人はそなたの中で安定している。頃合いだ、さあ一つになるうではないか」

（ひとつ？ ひとつになる？ 何を言って……）

「案ずるな。そなたは単に、魔王の配下たる我、四魔公の一人にな

るだけだ」

四魔公？ 一体……。

だが、そんな意味の分からない言葉を最後に……。

俺の意識は「プツリ」と途絶えたのだった。

ただ一つだけわかったのは。

この俺が魔族へと融合し、世界を蹂躪できるだけの力を手に入れたという、その事実だけだった。

（アリアケ視点）

「何度も言わせるな、あれは俺の獲物だ！」

「何を言いますの！ 筋肉バカは引っ込んでいてくださいます!？」

「そつだよそつだよ！ ってか、マジここで挽回しとかねーとヤベーじゃん！ だからアタシに譲ってじゃん！」

モンスター・ビビアを追い詰めたはずの三人は、なぜか唐突に言い争いを始めた。

（馬鹿なのか！ 三流……いや、四流でもやらんぞ!？）

俺すらもギョツとさせた三人を、俺は厳しく叱責する。

「獲物を前に舌なめずりなど何をしている!? 戦いの基本すら忘れたか!？」

だが、

「はははは！ 何を言っているアリアケ！ 奴が何をしようと俺の防御を突破できる可能性などない!」

「ほほほほほ！ このデリア様にかかれば、どんなモンスターでも一捻りひつひねですわ。焦る必要など皆無！ 絶無う！ なのですわ!」

「あたしつてば超有能な万能魔法使いだし。魔王だつて楽勝な夕イプひつひねつていうか」

その欲にまみれたかのような醜悪な表情に、俺の背筋すら凍らせる。まるで人類の汚物そのもの……。

「くそつ!? まるで話を通じない!? ビビアの攻撃で知能低下の超デバフがかかっているのか!？」

そんな効果はなかったはずなのに。

「もういい！ コレット！ ビビアをたおすん……」

しかし、

「誰を、倒すと？ 真の賢者アリアケ・ミハマよ」

瀕死状態だったはずのモンスター・ビビア・ハルノアは、浮遊するかのようにゆつくりと大地に降りてきたのである。

その姿は元の人間の状態に戻っていて、傷一つない。

「旦那様！ こやつはっ……！」

「アリアケさん。結界強化しますね……」

「先生、あれはもはや別人……」

「ああ、その通りだ。こいつは……」

コレット、アリシア、ラツカライと言葉をかわす。

だが、信じられないことに、勇者パーティーの三人はまだ言い争いをしていた。

あるわけないが……。まさか、目の前のビビアから感じる魔力の波動が分からないほど、知能が低下してしまっているのだろうか。

そして、あるうことが、

「わーっはっはっはっは！ 俺の力で、ただの人間の状態に戻ったようだな！ なら死ねえええええええ！」

「おーっほっほっほっほ！ 私の人生の糧かてに成り果てなさい！ おーっほっほっほっほ

「勇者ばいばーい！ 楽しかったよ だからまた来世で会おうね

「ん」

三人は何の戦術も、考えもなしに、ビビアに突撃したのである。

「馬鹿者どもが！ 初心者冒険者だって、もっとマシな戦いをするぞっ！？」

三人のあまりの愚かさに、俺すらも驚愕で動きを止めてしまった。

あらゆる難関にひるまぬ俺の動きを止めたのだから、彼らを逆にほめるべきかもしれない。

世界一の愚か者どもと……。そして。

「邪魔だ。ゴミは視界から疾く去ね」

ビビアが手を軽く振るう。

「うぎゃあああああああああああああああああああ  
？」

「ほんげええええええええええええええええええええええええ  
！？」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ  
ああ！？」

油断の限りをつくしていた三人は、その衝撃波を顔面やみぞおちに思いつきり叩き込まれ、悶絶しながらコロシアムの場外まで楽々と吹き飛ばされていった。

「ああ、一瞬でやられたぞ!？」

「何やってんだよ! 勇者パーティーのメンバーどもは!」

「本当だよ。いかにアリアケ様のバツクアップがあっても、しよせんは勇者パーティーのメンバーたちだな……!」

「アリアケ様の率いる真なる賢者パーティー・メンバーは本当にすごいのに、それと比べて勇者パーティー・メンバーは格落ちも甚はなはだしい! 本当に勇者パーティー・メンバーはダメだな!」

民衆を脅威から守っているアリシアやコレットたちへの称賛が上がる一方で、勇者パーティーメンバーの三人には雑魚だ、無能だと、そんな落胆と罵倒の声が渦巻く。

ただ、民衆の意見はもつともだが、少し手厳しすぎるだろう。

俺がじきじきに率いる賢者パーティー・メンバーと、勇者パーティー・メンバーを比べること自体に、そもそも無理があるのだから。

ただ、そんなことは大衆には関係のないことであろうし、俺の率いる賢者パーティー・メンバーとは対照的に、勇者パーティー・メンバーに埋められないほどの実力差と言う名の『格差』があることは本当のことだ。



そういう意味で、彼ら大衆の意見は正鵠を射てはいた……。

だが、今はそんな、俺たちと比較されてしまった、哀れな勇者パーティー・メンバーたちの心配をしている暇はない。

「さあ、真の御前最終戦試合を始めようではないか、アリアケ・ミハマよ。このビビア・ハルノアと世界の命運を……。いや……。」

男は冷徹で傲然とした視線でこちらを見ると、

「魔王配下、四魔王ワルダークと、この世界の覇権を競おうではないか」

ビビアの姿を借りて、その男は、かすかな笑みを浮かべたのであった。

70 〽VS・モンスター・ピビア・ハルノア その 覚醒モ  
ンスター・勇者ピビアに敗北する勇者パーティー三人（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 71・規格外な賢者パーティー

71・規格外な賢者パーティー

「魔王配下、四魔公ワルダークと、この世界の覇権を競おうではないか」

ビビアの姿を借りて、その男は、かすかな笑みを浮かべる。

「四魔公か。魔王の部下には4人の従順なしもべがいるとは聞いていたが、それがお前か」

「その通りだ。王国に潜伏し、長年にわたって魔神の復活を画策し……」

だが、

「ぬおおおおおおおおお！ 隙あり！ なのじゃあ  
あああああああああああ！」

「むっ!?!」

バキイイイイイイイイイイイン!

コレットの回し蹴りがワルダークの側頭部を狙う。ワルダークはかろうじて防いだ。

「凄まじい威力。だが、魔神ポセイドンを取り込んだ我ならば、これくらい防ぐことは……」

しかし、

「ぐっ……！？ 勢いが殺しきれぬだっ……！」

ダメージは通っていないさそうだが、その威力ゆえに、防御しながら空中へと勢いよく吹っ飛ばされた。

だが、

「別にあんなもん攻撃でもなんでもないわい」

コレットは何でもない表情で、

「ちょっと、ここはわしにとっては狭いからろう！ 旦那様、外でやるのではないか！ かかかかかっ！」

そう元気よく言う。

その言葉に残っていた観客たちが、

「一人を場外にふつとばしておいて、攻撃じゃないだっ……？」

「アリアケ様が率いる賢者パーティーの力はどれだけすごいんだ……」

ざわざわと。



アリシアやラツカライも冷静そのものだ。

俺たちはすぐにドラゴンへと姿を変えたコレットの背に飛び乗った。そして、一瞬後にはすぐに上空数百メートルへと飛び立ったのである。

観客たちは一様にぼかんとしているか、俺たちを指さしながら何かを叫んでいるようだ。

「凄すぎる」とか「規格外!」という声が聞こえて来る。

「もしや神様なのか!？」といった、よく分からない絶叫も聞こえて来るが、まあそれが一番真実に近いのかもしれないなあ。

(まあ、そもそも、残念ながら勇者パーティーとの「御全試合でじやれあい」程度ならまだしも、俺たちレベルが本当の戦闘をするならば、彼ら一般人に理解を求める、などということがそもそも無茶だろうからなあ)

俺たちの「レベル」とはそういうものだ。

「スタジアムは俺たちのフィールドにしては小さすぎた。せつかく海洋都市に来たんだから、海の上でやるとしよう。アリシア、出来るな?」

「もつちろんですよ。アリアケさんのリクエストに応えなかった聖女さんがいたでしょうか? いいえ、ありません!」

彼女はそう言いながら、詠唱を始める。

そして、一瞬にして広大な海域に結界を敷いた。

海が大地のように踏みしめられる結界となる。俺たちのような規格フィールド外が戦闘行動をしても、周りに迷惑がかからない広大で頑丈なフィールドだ。

「まるで地の創造だ……」

「やはり本当に神様たちなのでは……」

コロシウムから逃げた大衆の一人が、目ざとく、アリシアの起こした奇跡を目撃して啞然としていた。

だが驚くほどのことではない。

逆に、俺たちレベルになると、こうした特別な場所がなければ本気が出せないのだ。

つまり、

「必要だから作っただけなんですけどねえ」

困ったような表情でアリシアが言う。

ま、そういうことだな。

強すぎること。人の枠に収まらない規格外の才能。その弊害が意外なところで出てくるものだ。

だからこそ、まだまだ未熟な勇者パーティーが羨ましくもなる。自由(フリー)に戦う、という自由があるのだからなあ。

弱いこともまた特権なのだ。

それはともかく、俺たちが海に臨時のフィールドを形成したことに気づいた者たちが徐々に増えている。

そして沿岸でこの戦いを見届けようと目を凝らし、声をからして俺たちを応援しはじめていた。

中には、こちらに向かって手を合わせて拝み始める者もいる。

(まあこれだけ神話級の奇跡を立て続けに見せられてはな)

仕方あるまい。

人智を超えた力ゆえに、奇跡のように見える。単に俺たちの力が凄すぎる、常識外なだけに過ぎないのであるが……。

そうこうしているうちに、俺たちはアリシアが創った海上フィールドへ、ゲシュペント・ドラゴンの背を借りてたどりつく。

着地する前に、俺たちの戦うフィールドを、沿岸の者たちにもよく見えるように映像を送ることにした。逆に彼らの行動もこちらで分かるようにしておく。こうすることで、彼らも安心するし、また俺たちもいざと言うとき彼らを助けることが容易になるだろう。これくらいのは俺にかかれば簡単なことだ。

俺たちはフィールドへたどりつくと、すぐそこに降り立った。



すると、先に吹っ飛ばされ、待ち構えていたワルダークがこちらに向かって、

「油断したわ！　だが、我を海に誘ったのは失敗であつたぞ！　ポセイDONは海の魔神！　真の力を発揮できよう！　さあ、これでも喰らえ！　極・大海嘯！」  
マイルシユトローム・ノウア

荒れ狂う大津波を魔術で顕現させた。

数百メートルの高さの波。これがそのまま都市を飲み込めば、壊滅的被害をもたらすことは明白なほどの、恐るべき大魔術だ。

海辺で俺たちの戦闘を見ていた大衆たちから、

「ひ、ひいいい！？　なんて大津波だ！？」

「逃げられない！？」

「ああ、世界の終わりだ……。あんなもの、神様にだって止められるはずない！」

そんな絶望の声が届く。

だが、俺は微笑みながら、冷静に指示を出す。

「ラツカライ、行けるな？」

「はい、お任せください、先生！　では、アリシアお姉様！　コレツトお姉様！　手伝って頂けますか？」

「かわいい妹の頼み！ いいですとも！」

「ぐおおおおん！」

ラツカライの言葉に、二人は元気よく頷くと、

「黄昏の神エルキドウ。血の流れに逆らいて、時の流れを逆巻いて偉大な貴方の名において、我が聖脈を等しくすることをここに誓わん。セイント・ケラライクス 聖魔力共有化！」

『ものみな眠る天空よ 蒼穹を飛ぶことぞ竜の本懐 空気の流れを類に感じ 荒れ狂う嵐を笑い飛ぶ 震える大気を飲み干して 咆哮高く神を呼ぶ 赤き濡れたるひとみの奥に 戯れ遊ぶ うれしさよ ゲシユヘナ・アツシユ 聖竜加護の付与！』

エンゲージ 合体詠唱を始める。

アリシアの蘇生すらも可能とする唯一の聖魔力と、神竜の末姫の与える加護が、聖槍ブリューナクへそそがれて行く。

それは神性の合唱のようなものだ。

そして、その間に俺はもう少し具体的な指示を出した。

これほど遠いのに視界いっぱい広がる大津波、その左端を軽く指差しながら、

「ラツカライ、そうだな、だいたいあそこ辺りから……」

「はい」

「あの辺までだな」

そう言いながら右の端までツーと指でなぞる。それはほとんど地平線をなぞるような行為だ。

「分かりました」

とラツカライは淡々と頷きながら返事をした。

「あっちから、あっちまでの、全ての次元を、斬りますね」

彼女は何でもないことのように言うと、聖槍を構えたのである。

なお、

「次元を？」

「斬る？」

「????????? え？」

観客たちは混乱しているようだ。うーむ、配慮してこちらの映像を見せているが、逆に混乱させてしまったかもしれない。

あまりにも規格外なものを彼らは理解できないだろう。

それはともかく、

「スケール・リミット接続完了です！ さあ、聖女さんの聖魔力、幾らでも使ってくださいよ」

「わしの竜神としての魔力も存分に使うが良いぞ！」

「はい、ありがとうございます、お姉様がた。はあああああああ  
あ！」

ラツカライはそう言って、聖槍を片手で持ち上げる。と、その瞬間、

『バチ！ バチ！』

聖槍から紫電ともいうべき、魔力があふれ出す。

その紫電は渦巻くように聖槍ブリューナクを中心に恐るべき速さで回転します。

回転することにそれは2倍、4倍、16倍、256倍……。指数関数的にその威力を上げていく。

周囲の空気を吸収し、海の水を吸い込み、周りのマナを吸収してもまだ足りない。

ラツカライの聖槍の周りだけが、時空震のように鈍い裂帛音が断続的に鳴り響く。

「聖槍ブリューナク。それはあらゆる結界を斬ると言われるその槍の正体は、次元をも切り裂く神代からの聖遺物」

その真価は、槍と、その槍が放つ次元断の周囲のみに発生する特異

点化にある。

すなわち物理の法則、魔法の法則を無視し、世界の構造そのものに干渉する力。

それこそが、

「必中付与。やれ、ラツカライ」

「はい！ 先生！ 喰らえ！ いななけ！ 聖槍ブリューナク！  
7つの次元の1を断ち切れ！ 原初の次元断 ラグナログ・パージ！」

ラツカライが聖槍を横なぎに払った。

その瞬間、「パン！」という風船が割れたような音がしたかと思うと、地平線に大きな割れ目がぱっくりと現れたのである。

まるで布をハサミで切った時のような光景。『だらり』と、今まで空だった部分が、布切れのように垂れ下がる。

そして、その割れ目の向こうには常闇が広がっていた。

「す、すごい……」

「空間が割れた……？」

「しかも、その中に数百メートルはあったはずの大津波が飲み込まれていく……」

観客たちの信じられないといったうめき声にも似た何か、映像の

向こうから響いた。

人間は信じられない光景を見たとき、言葉にすることが出来ないものだ。

聖槍スキル『次元断』。

無論これはラツカライだけで発現させることは難しい技だ。聖女アリシアとドラゴンの末姫の力があればこそ。

その意味で、彼女たちがしつかりと普段から連携し、良い仲間であること自体がある種の奇跡なのかもしれない。夜な夜な何か秘密の会談を持っているようだが、残念ながら男の俺は入れないのだが……。一体何を話しているのだろうか。

ま、それは今はどうでもいいことか。それよりも。

「さてと」

俺は一步前に出る。そして茫然とした様子で、何とかさっきの次元断を逃れてきた、ずぶ濡れな様子の目の前の男に問うた。必中が津波を対象にしていたおかげで助かったな。

「どうする、魔神ワルダークとやら。あきらめて降参して牢屋に入ったらどうだ？ 国家転覆を図ったんだから、四魔公か何か知らんが、牢屋の中で罪をつぐなうといい。ああ、あと、あの勇者パーティーにも謝つとけよ？ 何かしらんが、迷惑をかけたんだろう？ きつちり頭を下げて、詫びをいれるがいい」

「ぐ、ぐががががが！ きぎぎききぎぎきぎきい！ 人間風情が

ああああ！」

だが、ワルダークは、ビビアの表情そのままに、悔しいのか、憎々しげに俺を見上げると、言葉にならないとばかりに、醜い歯ぎしりを見せたのであった。

71・規格外な賢者パーティー（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 72・世界滅亡の危機

### 72・世界滅亡の危機

「ぐ、ぐががががが！ きぎぎうきぎぎぎぎい！ 人間風情が  
ああああ！」

ワルダークは、ビビアの表情そのままに、悔しいのか、憎々しげに  
俺を見上げると言葉にならないとばかりに、醜い歯ぎしりを見せる。  
だが、一瞬後には、その表情を一変させて、嘲笑するものに変えた。

「情緒不安定なんじゃないか？ 牢屋で罪を償う前に、医者にかか  
ったほうがいいのかもしれんなあ」

俺は哀れむが、

「ぐふ、ぐふふふふ」

唐突に嗤いだす。

気のせいだろうか、その表情はワルダークのものと、ビビアのもの  
が、まるで共存しているかのような、左右非対称の奇妙な表情であ  
った。

「我は四魔公ワルダーク！ 姿かたちをいかなるものにも変化できる万物融合特殊生命体！ ならば魔神の魔力と我が抱きしこの怨念！ そして何よりっ……っ！」

ワルダークはニチャリとこれまで一番の笑い声をあげると、

「勇者ビビアの世界を憎む心地よき波動！ その怨念を毒へと変えて、我が流体として、この世界の海洋全てを汚染しつくす！」

「なに？」

俺はワルダークの言い出したことに首をかしげる。

魔神の力やワルダークの力で、世界の海を死滅させるような毒を振りまくことはできないのは明白だ。

だが、ビビアが世界を憎んでいる？

「そんなバカなわけがあるか。ビビアはこの世界の平和をつかさどる勇者なのだぞ？ 無論、まだまだ俺の庇護下にあって初めて勇者という資格を、ぎりぎり首の皮一枚残した状態に過ぎない仮免許と言ってよい状態ではあるが……」

「ぐざいー！ ぐざいっざいーいーいー！」

なぜか、ワルダークの顔面の左半分が異様に引きつり、よだれを溢れさせながら何かを主張しようとしている。

だが、それが何なのか、俺には見当すらもつかない。

「くつくつく！ 信じようが信じまいが、どちらも同じだ！ ではな、大賢者アリアケ・ミハマ！ そしてその英雄に付き従う賢者パーティーたちよ！ このわしの世界へのはなむけだ！ この世界を幾万、幾億の間、呪い続けようぞ！ 海なき人類が何年で滅びるか、せいぜい海のもずくとなりて、見届けてくれよう。くかかかかかか！」

ワルダークは左右非対称の哄笑を上げると、その体をドロリと溶かした。

「聖女さんパンチ！」

ドン！

大気を振動させる正拳突きが、どろどろと軟体化しつつあるワルダークの腹部へと突き刺さる。

だがワルダークの哄笑は終わらない。

「むむー、一瞬遅かったですね！」

「いや、いつの間に物理を??？」

「乙女には色々あるんですよえ」

そういつてアリスアはチラチラチラツとこちらを見るが、俺はよくわからずに首をかしげるのみだ。

すると、「は〜」とアリスアがため息をつき、「朴念仁じゃし、し

ようがないのじゃ」「ですね」と、なぜか他の二人がアリシアの背中をポンポンと慰めるようにたたいた。

なんだろう、この疎外感は……。

まあ、それはともかく。

溶けだしたワルダーク……。いや、海洋呪怨生命体ワルダーク・ビビア・ポセイドンは、この世界を破滅させる毒を、大陸を覆う海に溶かし始めていた。

海が腐れば、陸地も次第に腐り、人間もほかの生き物も、生きてはいけぬ死の世界が訪れるだろう。

まさに、今、世界の危機が顕現していた。

だが、

「アリアケさん？」

「旦那様？」

「先生？」

三人の少女たちが、俺へと呼びかける。

俺はもちろん、予想していたかのように淡々と、

「ああ」

とだけ簡単に答えた。

なぜなら、何ら気負いすることなどないからだ。

だって、俺たち4人にとって。

何より俺にとっては。

「世界の危機を救うくらい、大したことじゃないんだからなあ」

「その通りですよ、アリアケさん」

「旦那様にとって世界を救うなど路傍の石を拾うようなものよな！」

「さっすが、先生です！」

彼女たちの言葉に、俺は微笑んで、

「スキル・スタート」

世界の危機を回避すべく、行動を開始した。

やれやれ、本当は勇者パーティーの役割なのだが、さっさとのおんびりさせてほしいものだな。

そんなことを考えながら。

## 72・世界滅亡の危機（後書き）

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

73・英雄アリアケによって世界は救われる！（前書き）

ありがとうございます！

第1巻ついに発売しました！

何やら好評らしいので、とりあえず無料で『試し読み』だけでもどうぞー！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

### 73・英雄アリアケによって世界は救われる！

73・英雄アリアケによって世界は救われる

「スキル・スタート」

俺は目前で今まさに現実になるうとしていて、世界の破滅の危機に  
対して、何ら慌てることなく詠唱を開始する。

「無駄ぶわ！ 無駄ぶわ！ 無駄ぶわあ！」

醜悪な怪物から、ついには海洋を呪う汚物にまで成り下がったビビ  
ア・ワルダークの融合体は、自らの哀れな様子には頓着がないよう  
で、気持ち悪い音色のようなものを上げる。

だが、

「何を嗤っている、ビビア・ワルダーク」

「笑わずにいられるかぶわわ！ なぜならぶわわわ！」

何かを言いかげようとするが、

「概念……なぜなら、呪いという、世界を破滅させるレベルの、実体な  
きものになつたからか？」



「ぶびびばー!？」

俺がそう言つと、汚物は驚嘆のような音を上げる。

俺は「フツ」と思わず口の端を上げて、

「一般に神に近い者ほど、実体なき概念に近い。ならば……」

俺は哀れなワルダーク、そしてかつての勇者ビビアの成れの果てを哀れみ、見下ろしながら、

「この地上にて最もその存在に近い俺から、たかだか、呪い如き卑小な概念存在になつたくらいで、本当に逃げられると思つたのか？」

「ぶ卑小だと、ぶわわ!？」

眞実を言い当てられ、呪いの粘度が増す。

触れてすらいらないのに、熱を感じさせるほどの憎悪の塊。これがこのまま海洋を汚染すれば早晚人類は滅亡する。

まさに世界の危機だ。

だからこそ、

「四神相応しじふしんそうおう」

俺はスキルを使用した。

それは俺たち賢者パーティーが、神に近い者たちの集まりだからこ

そ発動できる究極のスキル。

神龍、神槍、聖女。そして、神に選ばれた俺という存在。

俺から見て左にコレット、右にラツカライ、そして前方にアリシアが陣形を組む。

『神は世界を四方に分かち、力を合わせ、世界を守っている』

そう、このスキルは始祖神話の再現。

俺たちが神のような力を振るうことを現実化する規格外のスキル。

だが、俺を慕い、彼女たちのような選ばれし者たちがそろわなければ、決して発動しない、通常ならば単なる死にスキルでもある。

「ぬおお、わしらの力が溶け合ってっ………!!」

「はい、お姉様！ 一つになっています！」

俺自身には敵を倒す直接の力はないかもしれない。

だが、

「いいですよ！ いいですよ！ さあさあ、やっちゃってください、アリアケさん！」

「思いつきりぶっぱなすのじゃ、旦那様！」

「先生、わたしの先生！ さあ、今です！」

「ああ」

俺は彼女たちの言葉に頷く。

そう、俺自身に力はなくとも、俺を心から慕って付いてきてくれる存在たち。

俺自身に完全な信頼を預けてくれる者たち。

そんな彼女たちとともにあれば、俺自身にはむしろ力は不要だ。力などなくても、信頼さえあれば、

「世界の危機を救うことなど造作もない！」

そう、

「喰らうがいい！ 哀れで醜悪なるビビア・ウルダーク！ 力などなくとも、俺のように仲間との絆さえあれば、お前たちが画策する世界の破滅など、簡単に回避できるものと知るがいい！」

仲間なき、哀れな者どもよ！

「ぶわおのれ！ ぶわおのれ！ ぶわおのれ！ あびあべびばあああああああ  
あ！」

最後に、かつての弟子ビビア・ハルノアの声が聞こえたような気がした。

だが、それはきつと感傷であつたらう。

彼は俺に感謝こそすれ、恨むような理由はないのだから。

「消え去れ！ 海洋呪怨生命体ワルダーク・ビビア・ポセイドン！  
この真の賢者アリアケ・ミハマの前から消え失せるがいい！」

俺は最後の言葉を放つ！

「神の焰<sup>ヒュー</sup>よ全てを浄化<sup>イグナイテツク</sup>せよ！」

その瞬間、四神<sup>しじふ</sup>の力をまとめ上げていた俺から、神のみが持つ浄化の光が放たれる！

まさに神たる俺を中心に世界に光が満たされた。

「ぶびいいいいいいいいいいいい！ ああああああああああああああ  
あああああああああああああああ！?? あびあばあああ  
ばあああああああああああ!??!?!?!?!」

神の放つ光によって、呪いの塊、ワルダーク、そしてビビアたちが消え去っていく。

光に影が飲み込まれ、浄化されて行くのだ！

「なんて、美しい光なんだ……」

「あれが賢者パーティー……」

「アリアケ・ミハマ様の真の力……。世界を救う力なのか……」

俺たちの戦闘を見ていた大衆から、感動とも畏怖ともつかぬ声が次々と漏れる。

そして、数十秒続いた光の浄化が終わった後には、ただ穏やかな平和な海が広がっていたのだった。

それはまさに、俺……アリアケ・ミハマが率いる賢者パーティーの活躍によって、世界の危機が回避された瞬間であった。

73 英雄アリアケによって世界は救われる！（後書き）

ありがとうございます！

第1巻ついに発売しました！

何やら好評らしいので、とりあえず無料で『試し読み』だけでもどうぞー！

<https://magazine.squaresenix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

74・エピソード 大賢者アリアケへの称賛と勲章授与(前書き)

ありがとうございます！

第1巻ついに発売しました！

何やら好評らしいので、とりあえず無料で『試し読み』だけでもどうぞー！

<https://magazine.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>



## 74・エピソード 大賢者アリアケへの称賛と勲章授与

74・エピソード 大賢者アリアケへの称賛と勲章授与

〈エピソード アリアケside〉

「救世主様！」

「大賢者様！」

「真の勇者アリアケ・ミハマ様！」

わあっ！ と沿道の人々が歓声を上げながら、こちらに喜びの笑顔や、涙を見せていた。

俺の顔が馬車から覗くと、その歓声は一層大きくなる。

「世界を救ったくらいで、大仰なことだなあ」

俺の出来ない教え子たるビビアを鍛え、そして新たな弟子であるラツカライの経験値を積みませようとして出場しただけの御前試合で、こんな目立つ羽目になってしまうとは。

「うかつだった・・・」

あれほど目立たないように普段から気を付けていると……。  
そうつぶやくと、アリシアが呆れたように肩をすくめ、

「まったくアリアケさんは困ったものです。すぐ大事件を引き寄せしてしまうんですから。英雄の気質なんでしょうねえ」

「迷惑をかけたな」

「もう、まったくです。な、何かお返しをしてもらわないといけませんね！ た、例えば、デ、デ、デー……」

「はい、そこまで、なのじゃアリシア！」

アリシアが話している途中で、なぜか急にコレットが張り付いたような笑顔で割り込んだ。

更に、

「ですね、コレットお姉様のおっしゃる通りです。抜け駆け、ダメ絶対ですよ、アリシアお姉様」

いつもは控えめなラツカライも、聖槍を振るうがごとく、毅然とした調子で声を上げる。

うーむ、いつもながら女子のやり取りと言うのは謎である。

ただ、そんな様子をポカンとした様子で見ていると、逆に彼女たち3人がこちらを見て、

「「「はあく、ぼくねんじん・・・」」」

と、なぜか反対にため息をつかれたりするのであった。

うーむ、訳が分からん・・・。

と、そんなことをしている間にも、馬車は進む。

ゴトゴトと言う音もたてず、振動すらほとんど感じられない最高級の馬車だ。

・・・だが、残念なことに、俺を一目でも見ようと沿道に集まった大勢の観衆からの称賛の声は、一向に鳴りやむ気配はなく、その騒々しい音を余計にしつかりと耳に届けていた。

「ところで聞いた話によりますと、この馬車はもともと勇者パーティーイーさんたちが、この街に入場する際に使用していたセレモニー用のものらしいですよ」

そうアリシアが言う。

「そうなのか、どつりで豪華な仕様なわけだ」

俺は頷く。

「にしても、その勇者パーティーたちを倒した旦那様が、その馬車で王城に招かれるというのは皮肉な話じゃよなあ」

「勇者様たちも、街に入場する際はこういった大衆たちの歓声を受けて、出迎えられたんですもんね・・・今は完全に逆になってしま

ってますが……」

「そうだなあ」

俺は曖昧にうなずいた。

勇者パーティーは今全員がバラバラになり所在が分からなくなっている。

勇者がモンスターに変身し、世界を滅ぼしかけた事実から、彼らはなにか犯罪者の行方を捜すかのように、今も王国によって捜索が続いていた。

「俺が抜けたとたんに犯罪者集団にまで身分を落としてしまうとはなあ……。おかげでこちらが英雄になってしまっただけで良い迷惑だが……。とはいえ、これも未熟なあいつらにとっては成長につながるいい機会か。迷惑をこうむったことは許してやるか。だが、その代わり、この逆境にしっかりと打ち勝つようにしてもらおう。今度こそ、師であり目指すべき目標である俺を、失望させないようにな」

「さすが旦那様じゃな。色々なことをあっさりと水に流してしまっただうえに、あやつらの成長を祈るうとするのじゃから！」

「なに大した事ではないさ。それに、それが上に立つ者の使命というものだ」

もう慣れた、とつぶやいた。

「先生は本当に清廉高潔なお考えをされますよね、僕、感動しまし

た！ 本当はもつと威張っても良いことなのに。この馬車だって、これから先生に勲章を授与するために遣わされたものなわけですし・・・」

ラツカライがそういって、遠くに見えるこの街の城を見上げる。

そう、この馬車は今、この街の中央にある城に向かっていった。

救世主である俺に勲章を授与するために、王国がわざわざ手配したのである。

だが、ラツカライの言葉に、アリシアとコレットはなぜかニヤリと笑う。

そして、ちょうど観衆の群れが途切れる十字路に差し掛かったところで、

「よーそろー！ ですよ！ さあさあ、御者さん、お役目を交代いたしましよー！」

「な、なにをする！？ う、うわあ！？」

うーむ、目の錯覚だろうか・・・。

アリシアがその細腕で大柄な御者の首根っこをつかむと、ポイっと麻袋の重ねられた場所に放り投げたのである。

「にゃはははははははは！ ほーれ、馬よ、走れ走れ！ 走るのじや！ まんまと脱出成功じゃー！」

「ええええええええええ！？ どういうことなんですか！？」

ラッカライは驚いているが、さすがアリシアとコレットは付き合いが長いだけあって、俺の考えなどお見通しのようだ。

俺は悠々とした様子で立ち上がると、

「よし逃げるぞ！ アリシア！ コレット！ ラッカライ！ これ以上、勳章授与なんて、目立つ羽目になるのはさすがに勘弁だ！」

俺はそう言いながら、スキル 隠密 を詠唱した。

すると、慌てて追いかけてきた兵士たちが、こちらの姿を見失って、焦った様子で立ち往生しているのが見て取れる。

俺を先ほどまで救世主だ何だと祈るように歓声を上げていた大衆たちも、突然姿が見えなくなったことに驚いて若干パニックようになっていた。

「アリアケ様がお隠れになったぞ！？」

「な、なんと少しでも探すんだ！ 俺たちの希望の光を！」

などと叫んでいる。

やれやれ。

俺は肩をすくめる。

やはり俺が目立つことは良くない。強すぎるし、規格外であるがゆ

えに、人々が自分たちで立つことを忘れさせてしまっ。

俺がするべきは、この世界を救う者を育てること、バックアップすることであって、力と才能はあれど、俺自身が英雄になることではないのだ。

そのあたり、完全に英雄と違ってよい今回の行動については、つつい流れで世界を救ってしまったとはいえ、反省が必要だろう。

「ところで先生、一体どこに向かわれるおつもりなんですか？」

落ち着いたらしいラツカライが、首をかしげて聞いてきた。

風に流れる肩まで伸ばして髪をおさえるその姿は、完全に深窓の令嬢の仕草そのものだ。

「もちろん、のんびり暮らすためにオールティに向かう旅を再開する！」

その言葉に、

「しょうがないですね、心配ですからこの聖女さんも（ずっと）ついていきますね」

「わしは元から旦那様と（ずっと）一緒じゃ！」

「はい、先生！ 僕も（ずっとずっと）お供します」

3人がそう返事をした。

何か微妙な間を感じた気がしたのだが、きっと気のせいだろう。

俺は、「アリアケ様！ 英雄様はどこに行った！」とパニックを起こす大衆の声を背中に受けながら、もはや振り返ることもなく、海  
洋都市『ベルタ』を信頼する仲間たちと一緒に脱出したのであった。



74・エピローグ 大賢者アリアケへの称賛と勲章授与（後書き）

ありがとうございます！

第1巻ついに発売しました！

何やら好評らしいので、とりあえず無料で『試し読み』だけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

75・エピソード アリアケに伸びる手 その1（前書き）

ありがとうございます！

第1巻発売で即重版しました！

何やら非常に好評らしいです。とりあえず無料で『試し読み』だけでもどうぞー！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

75・エピローグ　　アリアケに伸びる手　その1

75・エピローグ　　アリアケに伸びる手　その1

くエピローグ　??????　sideく

「あらあら、これは本当なんですか？」

私は驚いて、そのレポートを何度か読み返しました。

そのレポートには、私の大事なアリシアちゃんと、何よりも、彼女が『ぞつこん』のアリアケ・ミハマ君が、四魔公ワルダークを圧倒的な力で打倒した事実が克明に記されていたからだ。

「相変わらずの規格外っぷりですねえ、やれやれ」

読めば読むほどため息が出る。にわかには信じられない事実が、普通に記されているので、何か御伽噺を読まされているような気分だ。それくらい、彼の活躍は目覚ましい。奇跡といってよい。神の祝福を受けているとしか思えない。

「ああ、いえいえ。アリシアちゃんの予想では、神の使徒ではないかということでしたね」

世間が勇者がどうたらこうたら言っているのを、私はちょっと鼻で嗤いながら、もう一度アリアケ君に関する報告箇所だけ読んでいきます。

そして、その圧倒的な力を感じ取り、手に汗を握り、そしてとうとう、ポツリと言葉を漏らしたのでした。

「欲しい……」

うつつうつつ、欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい！

ダメだ、我慢できない！　じゅるり！　おっとしまった、ちょっとヨダレが出た。

（誰にも見られていませんね？）

ちらりと周りを見るが、おつきの司祭は幸い目を伏せている。よしよし。

（ああ、でも本当に我慢できないわ）

私はこれでも大教皇。

大陸屈指の大教会、国教『ブリギッテ教』第一位。リズレット・アルカノン。

ならば当然、

「超有能な人材を手に入れるためには手段を選んでいられません！」

ならば！

「人を仲間に引き入れる方法は、昔から決まっています。ええ、そうですとも、アリシアちゃんもきつと、喜ぶわ。はい、パンパン、誰かある！」

その声に、控えていた司祭が近づく。そして、たちまち私の命令を手紙にしたためると、その5分後にはアリシアに向かってその手紙を運搬していったのだった。

「はあはあ、待っていてね、アリアケ君。大教皇があなたをゲットしちやいますからね」

私のつぶやきが、誰もいなくなった玉座に響いたのでした。

789

くエピソード ?????? sideく

「なんだと！ 我が愛娘のコレットの居場所が分かったというのか！？」

俺は思わず咆哮を上げた。

1000年前、何者かに連れ去らわれ、もはやその生存を絶望視していた愛娘、コレット＝デューブロイスが、他のドラゴンによって偶々発見されたというのだ。  
たまたま

しかも、よりもよって娘は、人間の男に付き従っていたという。

「いえ、シャーロット様、付き従ってたというか、慕ってついて行っていたみたいに見えたんですが……。むしろあれって恋しちゃうってるといいますか……」

「そんなわけがあるかあああああああああああああ！」

「うひゃあああああああああああ!?!」

俺の再びの絶叫に、報告しに来た臣下のドラゴン『フレッド』は吹っ飛ばされた。

「ありえぬ！ ありえぬ！ 卑小な人間を慕うような軟弱なドラゴンがいるものか！ いたら俺が引導を渡してやる！ おそらく！ おそらく何らかの邪法によって囚われ、従属させられているに違いない！ くうううううううコレットおおおおおおおおお!?!」

俺は怒りと嘆きを爆発させる。その放出される魔力によって、空間がねじれて暗雲が立ち込め、雷雨になるが気にすることではない。

「うーん、私には超ぞっこんに見えたんですけどねー、超幸せそうでしたけどねー」

「まだいうか!」

俺は呆れつつ、

「ふん、まあ、むろん、この俺よりも強いならば、娘と結婚することも許さないではない！ だが、そんなこと、一介の人間に出来る





「聞いてないっすね……。えーっと、確かなんかブリギッテ教会に向かったっていう噂ですよ？」

「またあの教会か！ 俺たちの領地を犯す不届きものどもめ！ ようし分かった、ちょうどよい！ もろとも成敗してくれるわ！」

「まあ、あそこは我々にとっても聖地ですからねえ。ま、穩便にお願ひしますね」

俺たちはそんな会話の後、全長数十メートルにおよぶ巨軀を、圧倒的な魔力の力でふわりと浮き上がらせると、ブリギッテ教会の南西の地へと向かって進み始めたのであった。

(アリアケか)

よく考えれば、たかだか人間一人に神ともいわれるゲシュペント・ドラゴンの王が動かされるとするのは、それだけでも大したものだった。

そして何より、その場は人間どもの国教の総本山、ブリギッテ教会。あのいわくの地。大陸の知識のつまった場所……。

(まるでアリアケという人間を中心に運命が大きく動いているようではないか……?)

俺はそんな考えがふと頭に浮かぶが、たかだか人間になぜそんなことを考えてしまったこと自体が不快で、頭をぶるぶると振ってその考えを追い出したのであった。



75・エピローグ　アリアケに伸びる手　その1（後書き）

ありがとうございます！　次で第2章完結です。

そして、第2巻をただいま執筆中ですので、お楽しみに！

また、第1巻発売し即重版しました！　何やら好評らしいので、  
とりあえず無料で『試し読み』だけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

76・エピソード アリアケに伸びる手 その2（前書き）

いつもありがとうございます。

おかげさまで、第1巻が発売後、即『重版』しました！

何やら非常に好評らしいです。とりあえず無料で『試し読み』だけでもどうぞー！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

76・エピローグ アリアケに伸びる手 その2

76・エピローグ アリアケに伸びる手 その2

） ??????? side

「何？ ラツカライが聖都へ向かうと？」

「その通りですわ。あなた・・・じゃなかった。『ガイア・ケルブルグ』棟梁様」

槍の名門の一族として名高い武門ケルブルグ一族。

その棟梁たる儂に、妻の『チルノ・ケルブルグ』が告げてきたのは、聖槍の使い手として選ばれた娘のラツカライが聖都へ向かうという知らせであった。

世界に4つあるという聖具のうち、槍の使い手が我が一族から生まれたことは喜ばしい。

だが、ラツカライにその才能があるとは到底思えなかった。

娘は深窓の令嬢と言って良く、美しい絹のような髪を長く伸ばした、おとなしい娘だったのだから。

しかし、使い手に選ばれたのならば心を鬼にするしかない。

でなければ、聖槍の使い手というだけで、世間が放っておかない。

無暗に戦闘行為を仕掛けてくる輩もいるだろう。

だから儂は泣く泣く娘を鍛えた。

そして、それなりに成長はしたものの、しょせんは小娘の振るう槍に過ぎず、とてもではないが聖槍の使い手として胸を張れるものはなかった。

だから勇者の弟子入りを王に依頼したのだが、残念ながら勇者の修行に耐えられず追放され、なんとあるうことが、同じく勇者パーティーを追放されたアリアケとかいう輩に付き従っているという。

「許せん……。そんな訳の分からん男と一緒にいるなどと……。このガイア・ケルブルグの目が黒いうちは絶対に許さんぞ！」

うおおおおおおお！

儂はほえた。

だが、隣の妻はのほほんとした様子で、

「いえいえ、ですが棟梁様。ラツカライちゃんつたら、アリアケさんのおかげで凄く成長したみたいですよ？ なんでも四魔公を退けたとか。すごいわね！ さすが私たちの娘！ 師匠が良ければちゃんと立派な戦士になれるって、お母さん信じてましたよ！」

儂はノリの軽い妻に辟易としつつ、

「こんな短期間のうちに成長などできる訳があるまい。どうせそのアリアケとかいう不逞の輩が流した嘘に決まっておる！」

「もー、だからちゃんと社交には出ましようって言ってるのに。結構有名な話なんですよ？ アリアケさんがどうやら勇者パーティーの要だったみたいねー。その追放を知らなかったとはいえ王様認めちゃうなんて、王様やつちやつたわねー」

「あんな胡散臭い輩どもとの酒の会になど顔を出せるか！ そんな情報は嘘に決まってる！ 武人は自らを鍛えておればよい！」

「もー、そんなムキにならなくても・・・。って、あーそっか。自分が鍛えてもダメだったのに、アリアケさんにかかれば一気に成長したものですから、嫉妬してるわけですね！」

「そんなわけないだろう！ そもそも儂が成長させられなかったのに、他の者がラツカライを一人前の戦士にできるはずがない！！」

もー、やっぱりじゃないですか。

そう笑顔で妻は言うてから、

「ま、その辺は役割分担ということ。ではそういうことで報告はしましたので、あとは教育方針の違いに則りまして行動することといたしましょう！」

はい？



何をする気だ？

儂が呆気に取られているうちに、妻のチルノはいそいそと部屋を出て行くとする。

ドアから半分だけ顔を出して、

「もちろん、ラツカライちゃんの応援をしに行くんですよ。あとは、アリアケさんにご挨拶でしょうか。やっぱり大事な娘を託すんですから、顔くらいは見てお話ししておかないと。母として」

「勝手なことを！？ 儂は認めたくせぬ……。っていうか、何だその言い方は……。まるでラツカライがその胡散臭いアリアケとやらにほ、ほ、惚れて……」

イヒヒヒヒ！

という変な笑い声をあげてから、妻は顔をひっこめた。急いで廊下を見るが、もう姿は見えない。

「わ、儂は！ 儂は認めんぞ！ ええい、誰か、誰かある！」

その声とともに、何十人も部下を呼び集める。

一刻の猶予もない。

大事な娘をどこの馬の骨とも分からない男にくれてやるつもりは毛頭ない！

「出陣だ！」

こうして儂ら槍の名門ケルブルグー門は、ラツカライを嘘でかどわかし誘惑する不逞の輩、アリアケ・ミハマを討つべく出立したのであった。

第2章 fin

76・エピローグ      アリアケに伸びる手      その2（後書き）

すみません、前話で第2章完結としていたのですが、もう1話追加になりました。

第2巻をただいま執筆中です。お楽しみに。

また、第1巻がSQEXノベル様から発売され、レーベル初の重版となりました！

普段から応援頂いている皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

まだご覧になっていない方は、無料の『試し読み』だけでもぜひどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 77・アリシアさんコクらされる(前書き)

やっと第2巻の原稿修正が終わりましたので、お待たせしました、第3章を開始します。

第2巻は第2章を大幅に加筆修正しています。例えばフェンリルさんが大活躍していたり、女性キャラたちの活躍を増量していたりと、Web版だけでももちろんストーリーは完結してますが、書籍版は相当豊富な内容になっています！

発売日が決定したら、改めて告知しますので、ぜひぜひ楽しみに！

ではでは、第3章『ボクネンジンに気持ちを伝えるたった一つの方法ノブリギツテ教会侵入編』を始めます。こちらもお楽しみに！

＊ハハハ＊

## 77・アリシアさんコケらされる

77・アリシアさんコケらされる

〈大聖女アリシア視点〉

「アリアケ君、何をしてるんですか？」

「ん？ やあ、アリシアか。植物に関する本を読んでいたんだ。君も読むか？」

「いいの？ 邪魔ではないですか？ それにわたし、文字読めないし……」

「邪魔なもんか。ビビアとかだと覚えが悪くて困るだろうけど、アリシアならすぐ覚えられるんじゃないかな。ほら、教えてあげから、こっちに来なよ。本が読めれば色々なことが分かって便利だよ」

「う、うん。アリアケ君」

「ほら、もっと近くに来てくれないと、それだとページが見えないよっ」

「ひゃ、ひゃい……」

そうして私と彼の距離は縮まって、徐々に0に……。

がば！

日差しが結構差し込んでいることから見ると、昼前でしょうか？

それにしても……。

「はあ、夢ですか？」

私こと、アリシアはため息をつきます。そのため息は少し甘い熱を帯びていました。

何だかずいぶん昔の夢を見た気がします。

そう思いつつ、私は頬を染めました。

だって、毎日彼のことを夢に見るからです。見ない日はないので。我ながら「またですか」という感じなのです。

「いつかこの気持ちを伝えないと……」

そう思いつつ、はや幾星霜。

「ていうか、あの人が……アリアケさんが朴念仁すぎるんです！」

枕をバシバシとたたきます。

それらしいことを言ったことはありません。

あと、最近パーティーに加入したラツカライちゃんだって、私の仕事を見て、一発でアリアケさんのことが好きだって気づきました！

しかしながら。

しかしながら！

「あのボク・ネン・ジーン！ は一向に気づかない！ と来たもんです！」

なぜなのか！

問い詰めた！ ああ、神様なんでやねーん！とツツコみたい！

「そりゃあ、アリシアよ。お主の伝え方が間接的すぎるのではないかえ？」

「ひえ！？ いきなり出てくるのはやめてくださいフェンリルさん！」

真っ白な髪を長く伸ばした、赤い瞳を持つ絶世の美女。

しかして、その正体は過去に私が洞窟より助けたフェンリルさんなのです。

「我からの提案だがのう、抱きしめて、愛していると100回くらい言えば、いかなあの朴念仁の主様とて、お主の気持ちを察するであらうて」



「ひええええ！ コレットちゃんと同じことを言う！？ どうして私以外のみんなはそれほど女子力が高いのですが？ 何か特別な訓練を受けているのですか！？ 今からでも申し込むことは出来ますか？ 大丈夫です、お金は教会の経費で落としますから！」

「普段は冷静沈着な大聖女様と言うのに、主様のこととなるとすぐにてんぱるのよなあ、やれやれよのう」

やれやれよのう、とあくびをしながら、シュタツとフェンリルさんが窓辺へ移動しました。

「どこか行くのですか？」

「散歩よ。他の皆もそのようであるな」

気づけば、部屋には私一人。コレットちゃんもラツカライちゃんも朝の散歩に出かけているようでした。

もしかしたら朝練かしら？

「おお、それからのう。手紙が来ておったようだぞえ。教会からかのう。使い魔のカラスが置いてゆきおった」

「はい？」

フェンリルさんがその手紙を私へ放り投げます。ヒラヒラと言う軌道をえがき、手紙は私の手に収まります。

「一体なんでしょうか？ あら」

そう私がつぶやいたときには、開け放たれた窓のほかには、そこには誰もいなかったのです。

やれやれ。

自由奔放で野生なフェンリルさんに嘆息しつつ、私は手紙を読もうとします。

「そんな簡単に告白出来たら苦労しませんよって……」

アリシアさんは告りたい！ でも出来ない！ なのですから。

「でも、何とかしたいのは本当なんです！ まじなんです……」

…  
くうくうくう

一人身もだえながら、手紙を読み進めていきます。どうせしようもない指令だろう、ぐらいの気持ちです。

しかし、

「け、け、け、け、け、け、け、け、結婚！???!?!?! 私とアリアケさんが!?!?!?!」

そう絶叫したタイミングで、

「アリシア入るぞ？」

なんとアリアケさんが入室してきたのです。

「はわぁ!?!」

（アリアケ視点）

何か絶叫が聞こえたような気がしたが、まあ問題あるまい。

「アリシア入るぞ」

ガチャリと俺はアリシアの宿泊している部屋へ入る。

俺ことアリアケ・ミハマは海洋都市『ベルタ』で四魔公であるワルダークを、俺を慕い集った仲間たちとともに消滅させることになった。

本来であればそんな世界を救うような戦いは、幼馴染であり不出来な弟子たる勇者ビビアとその仲間であるデリア、エルガー、プララたちの役目なのだが、彼らはまだ俺から巣立って日も浅い。

やや荷が重かったのだろう。

本来ならば手を出すべきはないのかもしれないが、しかし、俺はやはり甘いのもしれない。

不出来な弟子たちのフォローをするのも、元とはいえ師たる俺の役目である。

何より幼馴染ということもあり、俺は彼らを助け、ついだが結果的に世界を救ったのだった。

勇者たちはその戦いで瀕死の傷を負いつつも、最近発見されて、現在はベルタの病院で療養しているとのうわさだ。

ちなみに、俺はその世界を救った功績をたたえられて、勲章を授与されかけたのだが、謹んで辞退させてもらった。

俺の目的は「引退してのんびり田舎暮らし」から変わっていない。

なので、勲章授与に向かう馬車でそのまま街を出奔したというわけだ。

いやはや、英雄を一目見ようと集まっていた国民たちはガツカリしただろうが、これ以上目立つなどごめんなので何とか許して欲しい。

さて、今俺たちは街道沿いにある宿屋に泊まっていて、俺は明日の予定を確認するために、大聖女アリシア・ルンデブルクの部屋を訪れていた。

だが、俺が部屋に入った途端、

「ひゃひゃひゃひゃひゃい!?　　アリアケさん!?　　はわわわわわわ!?!?」

いつもは見られない……。というか、俺の前では時々子供の頃のように最近は素が出るのだが……。そんな驚愕して慌てふためく聖女アリシアの姿があった。

と、その手から一枚の手紙が落ちる。

トヒトヒラと。

「ぬひゃああああ!?!」

聖女がそのヒラヒラと空中を揺れる手紙をキャッチしようとするが、驚くほど巧みな軌道をえがいて手紙は聖女の手をすり抜ける。

そして、聖女の空振りによって、手紙は結果的に俺の手にスポツとおさまった。

「わひゃあ!?! 見ちゃダメです! アリアケさん!?!」

「ん? これをか?」

そう言われて、つい反射的に手紙の内容を見てしまう。

そこには、端的に言えば、こう書いてあった。

『大聖女アリシア・ルンデブルクは、急ぎ大賢者アリアケ・ミハマと婚姻し、教会本部の危機を救うこと 大教皇リズレット・アルカノンより』

「結婚???」

俺は首を傾げつつ、その意味不明の手紙から、アリシアへと視線を移した。

「はわ、はわ、はわわわ」

そこにはなぜか茹ダコのように顔を真っ赤にして、目をぐるぐると

回して、何か言おうとして一切の言葉を紡ぐことが出来ない、冷静沈着と名高い大聖女アリシアがいたのであった。

77・アリシアさんコクらされる(後書き)

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量していますので、気になる方は、  
無料で『試し読み』だけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。



78・結婚とはどういふことだ？　そして馬車は一路教会へ

78・結婚とはどういふことだ？　そして馬車は一路教会へ

ふつむ。

俺は目の前の茹ダコ状態のアリシアを見てから、もう一度手紙に目を落とす。

そして、一番の疑問を口にした。

「俺との『結婚』とは何のことだ？」

「ひゃ、ひゃいん！？」

アリシアは飛び上がってから、なぜか目を思いつきり泳がせつつ、

「えーと、えーと」

空中にのの字を書きながら、

「い、嫌ですね、アリアケさん。結婚と言っても、まんま結婚って意味じゃないんですよ」

必死に考えを巡らせるように言った。

「結婚。マリッジ！　つまり夫婦みたいに『仲良くしなさい』という、そういう意味なんですよ！　仲良く協力して、教会の危機を救う手助けをしてもらいなさい、と。そういう意味なのです！」

ビシ！

とアリシアが宣言するように言った。

何かを必死に隠蔽したように見えたが……。

まあ、完璧な彼女に何か後ろめたい事情があるはずもない。

だとすれば、彼女の言葉を俺も素直に受け取るべきだろう。

「では、俺とアリシアが結婚して（仲良くして）、教会に訪れるという危機を救えば良いというわけだな？」

「けけけけけけけけけ結婚！？　そ、そんな急に！？　まだ心の準備が！？」

「なんだ、俺と結婚する（仲良くする）のは嫌なのか？」

最近は少しは心を許してくれ始めたかと思ったのだが。

「い、嫌じゃないです……」

「なら、俺と結婚するか？」

「は、はい……。ふ、ふつつか者ですが……どうか末永く可愛がっ

て……」

なぜか仲良くするというだけで、アリシアの頭から湯気が上がっているように見える。

そして妙にしおらしい。

と、思っていたのだが。

「って、そうじゃありません！」

大聖女アリシアの絶叫が宿屋にとどろいた。

「踏みにじられました！ 私の純情が踏みにじられました！！」

「いやあ、また、もう一步といったところでしたね、アリシアお姉様……」

「そうじゃろうか。儂にはとてつもない隔たりがあるように聞こえてならんのかな？」

修行から戻ってきて、アリシアの大声を聞いたラツカライとコレットの二人が、何事かと慌てて部屋へと飛び込んできた。

ことの顛末を俺が冷静に説明したのだが、

「はあく。やれやれ、またですか。まったくもく、これだから先生  
つてば……」

ラッカライから、伝説に謳われる地獄に通じる『メギドの穴』より  
も、なお深いため息をつかれてしまった。

うーむ、なぜだろうか。

なお、その後フェンリルも戻ってきて、一言。

「しかし、アリシアがこんな調子では、そなたらの番は当分先よな  
あ」

と言った。すると、

「それなんじゃようなあ、フェンリルよ……」

「ボ、ボクは別に急いでませんので……」

と、これまた良く分からないやり取りをした。

女子同士の会話は男子には一生分からないものなのだろうなあ。

さて、それはともかく。

「教会の危機を救う、というのはどういうことなんだ？」

俺は改めて、アリシアに送られてきた手紙の内容について言及した

のである。

「思い当たる節があり過ぎてよく分からないんですよね。ブリギッテ教会の敵なんてごまんといますから」

「そうなのかえ？ 国教だというのに？」

フェンリルが小首をかしげるが、俺もアリシアも首を横に振った。

「ブリギッテ教会自体はそれほど長い歴史のある教団ではないからな。ほんのここ200年くらいのものだ」

「そうです。元々は他の国でも信仰されている智神ワイズを奉ずるワイズ教が国教でした。ざっくり言えば、人と争うことを良しとせず、人々の助け合いによる相互扶助によって穏やかに暮らして行くとする知恵と優しさの神ですね」

「よく、そんな宗教の大転換が出来たものよなあ。宗教は人にとって結構大事なものと理解しておったが」

その指摘は正しいな。

「実際には転換しきれていない。200年前、唐突にこの国の東端に塔と街が作られた。それがブリギッテ教の始まりとされている。そんな強引ともいえる始まり方だったために、この国には今だにワ

「イズ教徒が多い」

「なんじゃか、まるでワイズ教では不都合だったので、無理やりブリグッテ教を普及させたような印象があるのじゃ」

「そうだな。あるいは、」

「2000年くらい前に何かあったのかもしれんな」

俺の言葉に、アリシアもうなずいた。

そのあたりの事情は大聖女と言われる教皇第3位のアリシアにすら、知らされていない事実らしい。

「ブリグッテ教がいい宗教だから、広まったんじゃないですか？  
ボクラ槍の一門ケルブルグも熱心なブリグッテ教徒ですから」

「あゝ、まあ冒険者ですとか、武人には人気ですよ、ブリグッテ教は、まあ、武神ブリグッテを奉ずる、どちらかと言えば……いえ、完全に武闘派宗教ですからねえ。暴力を推奨しているわけではないですが、正しいことをなすために暴力は必要悪であり、大事なものを守るためには腕力を鍛えましょう、という宗教ですからね。個人的にはどうなん？　とってますがね。あと特徴的なのは『悪魔』を超敵対視しているのが特徴でしょうかねえ」

「『悪魔』とは珍しいのじゃ！　人や竜、魔族とも異なる冥界の住人じゃな。その力は段違いと言われておる。会ったことはないがのう」

「悪魔について詳しい情報は余り多く残されていません。会ったら

基本殺されますからね。記述も曖昧なものが多いです。最新の文献でも2、300年前のものがせいぜいですかねえ。それ以降の記述は見たことはありませんね。あったとしても、見間違えか、思い込み」

「で、そんなところからの招待状というのが、この手紙か」

『教会の危機を救え』

しかも、俺を連れてきて欲しいとも読み取れる内容。

だとすれば相当の厄介ごとが予想されるわけだが……。

「べ、別にいいんですよアリアケさん。せつかくスローライフをしようとしてるのに、わざわざ私の厄介ごとなんかにつき合わなくても」

「そうはいかないだろう」

俺は微笑みながら、

「大事な（幼馴染の）アリスアの頼みなんだ。俺も教会に同行するでしょう」

そう言って頷いた。

一瞬、アリスアの動きが止まる。が、次の瞬間には、

「くううう、この朴念仁！ わざとやってるんじゃないでしょうか」

「なぜ怒っているんだ？」

「怒ってませんとも！ このアンポンターン！」

なぜか怒り出したうえで罵倒されてしまった。

ふうむ、やはりまだ嫌われているようだなあ。

そんなことを思っていると、なぜか周囲にため息をつかれた。

なぜだ？

ともかく、そんな疑問は残しつつも、俺たちは一路国の東端、ブリギッテ教の聖地であり宗教都市『セプテノ』へと馬車を走らせたのであった。



78・結婚とはどういふことだ？　そして馬車は一路教会へ（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量していますので、気になる方は、  
無料『試し読み』だけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

79・デリアとプリラに先を越される聖女さん（前書き）

2021.3.20 修正

## 79・デリアとプララに先を越される聖女さん

79・デリアとプララに先を越される聖女さん

俺たちは一路、馬車にて国の東端、ブリギツテ教の聖地『セプテノ』を目指していた。

だいたい半月ほどの旅路になる見込みだ。

コレットにドラゴン化してもらい、飛んでもらえば早いのだが、俺という乗り手を得た彼女は『神竜』クラスに昇格していて、とにかく強すぎる。安易にドラゴン化すれば周囲に様々な影響を与える可能性が高い。

俺にしても彼女にしても、規格外ともなるところという常人では理解しえない苦勞が発生してくる。

そんなわけで、どうしても必要な場合以外は、こうして一般人と同様の移動手段を使用しているのである。

さて、そんな俺たちが馬車でのんびりと街道を走っていると、

「その馬車、止まるのですわー!!」

馬車の前に立ちふさがる2つの影があった。

「デリアにプララじゃないか。どうしてこんなところに……?」

御者台の当番である、俺とアリシアがそう言っただけで顔を合わせていると、つかつかと2人の女性が近づいてきた。

そして、

「アリアケ・ミハマ！ このデリア・マフィーと正式にお付き合いなさい！」

そう唐突にデリアが、頬を染めて俺に言ったのである。

唐突のセリフに俺は首をかしげるのみだが、

「は……あ……?」

一方、隣のアリシアからは地獄よりもなお深い声が響いたかと思うと、御者台の手すりが一瞬で木っ端みじんとなり、さらさらと宙に舞った。

「アリシア、君は今、素手で手すりを……」

「い、今はそれどころではありません！ デリアさん、な、な、何をいきなりっ……！ わ、私の、私のアリアケさんにつ……!」

何かを言いかけるが、それより早くプララが口を開いた。

「あ、あたしもさ、ちょっと、アリアケにキュンキュン来てんだよね。どうかな、このあとちょっと二人でしげこまね？」

そう言って、ぐいぐいぐいぐい！ とプリラらしい強引さで、俺の腕を引っ張ってくる。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ なんなんですか、本当に!?!? アリアケさんも振り払ってください！ まずは手をつなぐところからゆっくりと始めるのが正式なお付き合いというものですよ！ わ、私だってまだなのにつ……！ よ、よりもよって、この二人に先を越されるとかっ……!」

「いや、そう言われてもなあ」

よく分からない事態に、俺もどうしていいのか困惑する。

だが、そうしている間にも女性陣の間で会話は勝手に進んでいった。

「アリスア、あなたは関係ないでしょう？ ちょっと黙っていていただけませんか？」

「そつだよ、引っ込んでなよ、根暗聖女はさあ！ アンタにアリアケはもつたいねーって、きゃはは!」

「な!?!? な、な、な、な、な、な、な……!」

アリスアが口をパクパクとさせる。

「ほーら、何も言い返せないではないですか!」

「そつそつ、なら、ひっこでるじゃーん」

「くっ、くうづづ、い、いきなり出てきて言いたい放題！ ア、アリアケさんは、ぜ、全部、わ、私の……私の……。爪の先から髪の毛一本まで、その全部……」

「おほほほほ！ 聞こえないですわ〜」

「ほらーアリアケー。こんな根暗聖女ほっとして、いいところ行っていいことしよーよー」

(やれやれ、一体どうなってるんだ?)

俺がどうしたものと頭を悩ませていると、

『ガサコン』

何事かといった様子で、幌ほろの中にいたコレットとフェンリル、ラッカライが顔を出した。

「なんじゃなんじゃ、旦那様の魅力に勇者パーティーの女性どもも、まいつてしまったというわけなのじゃ？ さすが農らの旦那様なのじゃー」

「それにしてもアリシアはいつもちと重いのが。小声になって主様に聞こえたらんから良いようなもの」

コレットとフェンリルがマイペースな会話を繰り広げる。

だが、

「そ、そんなことより、デリアさんとプララさんが攻撃してきまし

「たよ!?!」

ラツカライの言葉通り、困惑して動かない俺に痺れをきらしたのか、なんと二人が攻撃を仕掛けて来たのである。

「ああ、もう！ 埒があきませんわね！ なら、気絶させて連れて行くまでですわ！ 私の拳の味、知るといいのですわ！」

「そうそう、恋は戦争って言うじゃん！ だから奪えばいいじゃん！ 略奪愛みたいで燃えるじゃん！ ってなわけで、ファイヤーボール!!」

「!?! さ、させません！ 小結界!!」

「バチイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

アリシアが常人では不可能な凄まじい反応速度で小結界を連続で展開していく。

「連れて行かせませんよ！ アリアケさんはわたしと、わたしとっ

……!!」

「俺とアリシアが何かするのかわかるか？」

「黙っててくださいますか!?! このボクネンジン!!」

なぜか怒られてしまった。

まあ、しかしながら。



「黙るのはいいが、とりあえず結界の必要はなくなりそうだと、アリシア」

「へ？」

アリシアがキョトンとした瞬間である。

「皆さん伏せて下さい！ ええーい！」

バフン！ モクモク！

「ひゃあ！？ なんですの！ これは……すやあ……」

「白くて何にも見えないじゃん、せつかくのメイクがにじんじゃうじゃ……スピスピ……」

ぱたりと二人が倒れて、大いびきをかきだした。

「ふう。何とか間に合いましたか。さっすがバシユータさん直伝の投擲用眠り薬ですね」

攻撃中のデリアとプララの顔面に死角から、何か白いパックのようなものを投げつけた少女が姿を現した。

そして、俺の姿を認めると、パタパタと少し大きめの杖を持って駆け寄ってくる。

目の前まで来ると、はきはきと様子で、

「アリアケ様、御無沙汰しています。お変わりありませんでしょう

か

そう言っつて綺麗なお辞儀をした。

緑の髪がふわりと舞う。

その少女の名前は、

「ローレイか。久しぶりだな。ベルタ以来だな」

「はい！」

元氣よく頷いた。

少女の名はローレイ・カナリア。

かつて一時だけだが勇者パーティー時代に、一緒に冒険をしたことのある高等回復術士だ。先の海洋都市『ベルタ』における魔神ワルダークとの戦いでも、重要な役割を担ってくれた。

一見、まだ駆け出しといった風情を持つ少女だが、その腕前は既に高レベル回復術士に至っている。

あどけなさがまだ残るが、しっかりとした考え方を持った、非常に優秀な少女である。

「だが、どうして君がこんなところに？ それにデリアやプララも」

「はい、実は……。す、すみません、アリアケ様、説明する時間はなさそうです！」

彼女はそう言って後ろを振り返り、

「追いつかれました」

杖を構えながらそちらを睨む。

そちらにはいつの間にか、一人、真っ白な肌、真っ白な髪、真っ白なドレス、深紅の瞳を持つ少女が立っていた。

(いつ近づかれた?)

俺に気配を感じ取らせなかった? そんなことが出来るものなのか?

俺の驚きをよそに、その白い少女は開口一番、

「お恥ずかしいです。あまり見ないくださいませ、このフォルト  
ウナの顔を……」

そう言って頬を染めて俯いたのであった。

その瞬間、周囲の温度が10度ほど下がったように感じた。

まるで悪寒を感じたときのようだ。

79・デリアとプララに先を越される聖女さん（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもつと嬉しいですが（；^|^A

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yussyaparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

80・教会の深淵。白き少女フォルトゥナ。そして好きな人を馬鹿にする勇者は馬に蹴られる

80・教会の深淵。白き少女フォルトゥナ。そして好きな人を馬鹿にする勇者は馬に蹴られる

「なるほど……」

真っ白な肌、真っ白な髪、真っ白なドレス、深紅の瞳を持つ少女フォルトゥナは、顔を伏せて目を合わさないようにしながら、囁くように言う。

「さすがは大教皇リズレット・アルカノン様です。人にしておくには惜しいお方。教会サイドの切り札を、こうして差し向けられていたわけですね。私ごときでは敵うはずもないと、このティアラを外さずにはいられません」

「また、教会か。一体何がおこっているんだ。それに切り札？」

「ええ。ゆえに、お恥ずかしながら、こうして彼女らの頭を、クチヤクチャと私の権能で書き換え、心を意のままにして差し向けてみました。あまり魅力的な餌にはなっていないかもしれませんね。アリアケ様の趣味嗜好に思い至らず申し訳ない限りです。やはり、お隣の聖女アリシア様のパッチワークするべきでしょうか？」

頬を朱に染めて、手で顔を隠す。

その指の隙間からこちらをちらちらと見てくる。

だが、その言っている内容は、常軌を逸していて、脳を犯す毒をはらんでいる。

「さつきから何を言っておるのじゃ、このフォルトウ……」

「コレット！ 彼女の名を呼ぶな！」

「のじゃ！？」

俺の言葉に、コレットは驚いて言葉を止める。

「彼女の名は忌み名だ。口にすれば呪いを受ける。あれはそういう代物だ。だから特に彼女が目の前にいる状況では名は呼ぶな」

そういうと、白き少女フォルトウはうっすらとはかなげに、照れたように微笑んだ。

「ああ、さすがアリアケ・ミハマ様。旅の星神シングレットの加護を得た有史以来の方です。2つ目の試練も簡単に乗り越えられてしまいました」

「君が切り札と言うことは最初から察しがついていたんでな。切り札が敗れた以上、さっさと家に帰るんだな」

「左様ですか。本当に素晴らしいですね。好きになってしまいました」  
です」

「悪い冗談だな。それにこれから俺たちは君のことを『白い少女』





そして、勇者パーティーのポーター、バシユータ・シトロであった。  
「どうしてとは言うまい。やれやれ、お前らはいつもやつかいな相  
手に魅入られるなあ」

俺の呆れ声に、

「うるせえ！ 何を訳の分からない御託を並べてやがる！ アリア  
ケ・ミハマあああああ！」

不肖の弟子であり、今回もその真骨頂をいかんなく発揮する勇者ビ  
ビアが襲い掛かって来たのであった。

攻撃してきた勇者の攻撃をスキルで回避しながら、説得を試みる。

「馬鹿な真似はよせ、ビビア。お前は操られているんだ。あの白い  
少女に！」

正気に戻れ、ビビア！ というか、そもそもだ。

「デリアやプララは全然お前の女ではないだろう。そんな二人を盗  
った盗らないなど、そもそも成立しない。とんでもない言いがかり  
だぞ？」

「はあああああ！？ 二人は俺にべたばれに決まってるだろうが

あ！ それになあ、アリアケええ！」

ニチャリと、ビビアが下卑た笑いを浮かべると、全員に聞こえるような大声で、

「てめえこそ、大聖女や他の美人を、騙して、はべらせていんだろーがあー！」

と言ったのである。

騙す？

はべらせる？

どういうことだ？

俺は意味が分からずに首をかしげた。

一方、ビビアは俺を心底見下した表情で、

「はっ！ とぼけたって無駄だぜ！ てめえが何かそいつらの弱みを握って連れまわしてるのは分かってんだ！ どーせ悪鬼非道なてめえのことだあ！ とんでもねえ弱みを握っていいようにしてんだろっが！」

「そんなことは無いと思うが……」

「はん！ てめえの意見なんか聞いちゃいないんだよ！ てめえはいつもそうだ！ 後ろの方で偉そうなことを言うだけで全くてんで役に立たねえ口だけ野郎さ！」

「うーむ」

俺は相変わらずポーターや支援職の重要性の分からない、この不肖の弟子にどうしたものかと困惑してしまふ。

だが、そんな俺の様子を怯んだと勘違いしたのか、ビビアは得意げになった。そして、

「そーら、そのカワイ子ちゃんたち、このアリアケなんざ足元にも及ばない超絶最高イケメン勇者のこの俺、ビビア・ハルノアのパーティーに今なら入れてやるぜえ！」

ビビアは攻撃を仕掛けながらも、女性たちに話しかけたのである。

「アリアケなんかといてもいいことはねえぞ。つまらねえ男だ、そいつは！ 趣味もねえし、剣の腕もねえ！ 魔法だつてろくに使えねえ！ だから追放してやったんだ！ この栄えある勇者パーティーからなあ」

だからよ！ と続けた。

「あんたらみたいないな美人はこんな奴のパーティーにいるのはもったいねえつて！ 俺のパーティーにくりゃあ、いくらでもいい思いをさせてやるからよう！ 富も名誉も思いのままだぜ！ 何より！」

ビビアは自信満々に、

「何よりこの俺様がいるんだからなあ。こんな嬉しいことはねえだろつ。なあー！」

そう言い放った。もはや俺のパーティーメンバーが勇者パーティーへ加入することが当然と言った様子で。

しかし、

「あの、御冗談は顔だけにしてください、勇者様……」

「……………は？」

その言葉にビビアは何を言われたのか理解できず、動きを停止させる。

それもそのはずだろう。

そのあまりにも辛辣なセリフを言ったのが、俺たちのパーティーの中でも最もおとなしい聖槍ブリューナクの使い手ラツカライだったのだから。

「先生は本当に素晴らしい人です。落ち込んでたボクを根気強く勇気づけてくれて、成長を見守ってくれました。修行の時も自分の犠牲を顧みずに稽古をつけてくれたこともあります。だからこそボクは……私は先生と一緒にいるんです！ ずっと、これからも、ずっと……！」

そう強く言い放ったのである。

それは普段おとなしい彼女からは想像できない強い意志の表明であった。

というか、ずっとを余りに強調しすぎて、まるで一生一緒にいるよ  
うな、誤解を与えるニュアンスになってしまっているぞ。

と、そんなことを考えていると、

「うむうむ！ よく言ったのじゃ！ ラッカライ！ そなたが言わ  
んかったら、僕のイライラブレスで、この辺り一帯焦土じゃったぞ  
！」

コレットが腕組みをしながら、勇者へ言った。

「小童よ、よく聞くが良いのじゃ！ 旦那様はこのゲシュペントド  
ラゴンの末姫の見初めた相手よ！ 1000年の封印がどのような  
苦痛であるか、そなたのような矮小な輩にはわかるまい。そんな僕  
を、まるで王子様のように旦那様は救い出し、同情ではなく僕と向  
き合い、優しく言葉をかけてくれたのじゃ。このような慮外な力を  
持つ僕のようなものでも、一生ついて行っても良いと言ってくれた  
！ ならばこの身朽ち果てるまで添い遂げるほかなかるう！」

「んなあつ！？」

コレットらしい堂々とした宣言であった。

ただ、ついてきてもいいとは言ったが、ただか旅に同行すること  
を、この身朽ち果てるまで添い遂げるというのは、ちょっとオーバ  
ーな表現だとは思うが……。

などと思っていると、次にフェンリルが、

「まあ我はなあ。主様の膝の上でまどろむだけよ。そうすれば片時



誰のことだ？

相変わらず彼女の言葉は難しい。

だが、おそらく俺のために怒ってくれたのだろう。アリシアにも、みんなにも礼を言わねばなるまいな。

「ラツカライ、コレット、フェンリル、俺のために言い返してくれてありがとう。嬉しかったぞ。とはいえ、売り言葉に買い言葉とはいえ、奴のパーティーに入りたくないからって、ずっと俺といてくれるというのは、ちょっとオーバーな表現ではあると思うがな」

「うーん、朴念仁ですねえ」「のじゃ。なんたる朴念仁」「これはひどいのう」

「ん？ 何か言ったか？」

「」「さあ」「」

彼女たちは首を振った。

ああ、それと最後に、

「アリシアもありがとう。ええと、君が何を言っているのかは分からなかったが、とりあえず今しばらく俺と一緒に来てくれるということでもいいんだな？」

「うわああああああん！ ですよねえ、伝わってませんよねえ！ というか、周りのみんなの女子力が高すぎませんか！？ 聖女さ

ん周回遅れじゃないでしょうか!？」

なぜかわめきだした。

「うーむ、やはりアリシアの言葉は難しいな……」

と、そんなやりとりをしている間に、

「やれやれ、薬草を多めに持ってきてよかったですよ」

バシュータが吹っ飛ばされて瀕死になっていた勇者ビビアをかついで戻ってきた。

ビビアは気絶している。

「勇者さんが先走ってしまったんで、今日の勝負はひとまずお預けつすね。ではでは、またの機会に」

「逃がすと思っているのか？」

「ええ、もちろん。ていうか、もう逃げてますんで」

「なるほど、これはやまびこ草で数秒前の映像を映し出してるわけか。本当に優秀なポーターだよ、お前は」

この声はもう聞こえていないだろうがな。

やまびこ草の効果はせいぜい数秒。

徐々に勇者とバシュータの姿は色あせて消えていく。



デリアやプララは白い少女が回収したのか、いつの間にか跡形もない。

まあ、最初から捕まえようと思っていただけではないし、彼らが何かしらの手段で逃げ出すのは想定範囲内だ。

下手に刺激して、あの奇妙な少女と対策もなしに戦うような事態になるよりは、相手が撤退している間に、一度情報を整理した方がいい。

そう俺の直感が告げていた。

いや、それにしても、

「なんとも風変わりな相手が出てきたものだ」

正体は何となく察しがついている。

「さっさと俺は田舎でスローライフをしたいだけなんだがなあ」

俺は大きいため息をついたのであった。

80・教会の深淵。白き少女フォルトゥナ。そして好きな人を馬鹿にする勇者は馬に蹴られる(後書き)

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが( ; ^ | ^ A

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 81・聖都「セプテノ」に到着する賢者パーティー一行

81・聖都「セプテノ」に到着する賢者パーティー一行

「ここがブリギツテ教の聖地、聖都『セプテノ』か」

俺たち賢者パーティー一行と、臨時で加入したローレライ・カナリアは『セプテノ』に到着していた。

宗教都市と言うだけあって、ローブに身を包んでいる者や、辻説法などをしている者もいる。

教会や武神ブリギツテをかたどった彫像もたくさん見受けられた。

宗教都市らしい信仰にあつい、穏やかな暮らしをする人々の姿がそこには……。

「うおおおおおお！ どうですか、旅の方、ブリギツテ教に入信し、こんなたくましい上腕二頭筋を一緒に作りませんか！？ 見て下さいよ、この力こぶのたくましさを！ ふんが！」

せつかくのローブの腕の部分をカットし、自身の上腕二頭筋を見せびらかす変態が一人、車上の俺へと話かけてきた。

「やめなさい！ ああ、恥ずかしい！ 突然失礼しました、旅の方」

すると、それを見かねたのか、別の信者がやってくる。穏やかな顔  
つきの青年であり、顔には微笑を浮かべている。

だが、その男の上半身は裸であり、下半身はビキニパンツのあられ  
もない姿だ。

「ああ、ブリギッテ神の聖なるかな。ブリギッテ神はおっしゃりま  
した。上半身を鍛えたら、下半身も鍛えよと。筋肉を語るのではな  
い。筋肉が語りだすのだと。それなのに、腕まくりしたときに上腕  
二頭筋を主張するためだけに筋肉を鍛えるなど神の教えを冒瀆する  
行為だ。ふうん！」

青年はそういうと、奇麗な歯を光らせながら、突如サイドチェスト  
のポーズをとった。

胸の厚みもさることながら、腕のたくましさや脚の太さもすっかり  
とアピールしてくる。

「ふむ、見事なS字ライン。キレてるな」

俺は思わず言葉を漏らす。

「ははっ！ 分かりますか、旅の方！ あなたには才能がありそう  
だ。どうですか、ぜひブリギッテ教に入信しては！！ 今ならば教  
会特製のプロテインポーションをおつけしますよ！」

「厚意はありがたいんだが、すまないが、俺には信仰している……  
というわけではないんだが、先約の神がいてな。いちおうそっちに  
義理立てをしているんだ」

「そうですか。いえ、色々事情があるのでしよう、強要するわけはありません。ですが、きつと将来あなたも筋肉のすばらしさに目覚めることでしょう。その時はぜひ入信してくださいね。それでは、聖都を楽しんでいってください、マッスルマッスル！」

気持ちの良い青年は齒を光らせると、上機嫌で手を振りながら去っていた。

「ふつ、やはり筋トレしている人間は基本的にテンションが高いなあ。さすが武闘派の神ブリギッテを奉じる聖都『セプテノ』の民は一味違う。なあアリシア」

俺は同じブリギッテ教徒であるアリシアに話を振った。

だが、

「ご、誤解ですから！？ あんな変態ばかりじゃありませんよ！ブリギッテ教は！？ 基本的には武術を鍛えて大切な人たちを守りましょつていう教えなんですから！？ いきなりなんで上腕二頭筋なんですか！？ サイドチェストなんですか！？ 教会第3位として肅清していいですか！？ というか、なんで自然と会話しちやってるんですか、アリアケさんはっ！？ キレてるなあ、じゃないつちゅーねん！」

アリシアは、なぜか自分をあんなのと一緒にするなと必死で弁明を始めた。変になまった言葉でツッコまれる。

更に、

「いやあ、我はそれほど違和感はなかったぞえ？ アリシアも毎日鍛えておるではないか？ 実<sup>エイ</sup>は8パックになったのではないかえ？」

「フェンリルさんなんてこと言うんですか！？ それに私の体はフワフワですよ！ 毎日柔らかくするためにハチミツ飲むようにしてるんですから！」

「そ、そんなんですね、アリシアお姉様。そんな人知れない努力を……。ボクも頑張らないとッ……！」

「はっ！？ しまった、口が滑ってつい！？」

「僕は強い奴が多そうなのこの宗教のことは好きじゃぞ！ 人間族もなかなか見どころがあるのじゃ！」

「うう、コレットちゃんの純粋な意見が聖女さんつらいっ……！」

どんどん落ち込んでいくアリシアなのであった。

と、そんなにぎやかなパーティーの中にあって、一人沈黙を守るローレライのことが気になって声をかける。

「どうしたんだ、ローレライ。そういえば君もブリギッテ教徒だったと思うが、少し嫌な思いをさせてしまったかな？」

ローレライはこの賢者パーティーに合流してから日が浅い。

なので、俺たちの会話が気に障ったりすることもあるかと思ったのだが……。

「えっ!? ああ、いえいえ、全然です! 私自身はブリギッテ教徒ではありませんが、あまりこだわりはありませんので。考えていたのはこの後のことなんですよ。いえ、まさかこんな形で里帰りすることになるとは思っていなかったので、はあ……」

明らかに落ち込んだ様子でローレライがため息をついた。

彼女の故郷はここだったのか。

だが、ずいぶん落ち込んでいるようだが、なぜなのだろう?

聞いてもいいのだが、いきなり立ち入った話をするのもよくないかもしれない。

そう思つて、いったん別のことを考えることにした。

それはもちろん、あの白い少女フォルトウナのことだ。

あの白い少女フォルトウナや勇者一行との戦闘から1週間。

あれ以来、彼女らの襲撃はない。

(それもそうか)

あの戦闘は、おそらくフォルトウナにとっては意外な結果だったと、俺は分析の上、結論を得ていた。



彼女自身は余裕なフリをしていたが、実質的にこちらには被害が一切なかったし、むしろローレイが仲間に加わり、支援力が盤石になった感すらある。もともと大聖女は回復もできるが、実は前衛も出来るので結構忙しい立ち回りだったのだが、回復が二人いれば、かなり彼女の負担は軽減されるであろう。

（結局のところ、フォルトウナたちは俺たちにダメージを与えるところか、俺に策を全て破られることで、逆に俺の賢者パーティーの力を増強してしまった）

そして何よりも、

（彼女たち自身の情報を俺に与えてしまった）

これが大きい。正体不明の敵には打つ手がないが、一度接触し言葉を交わし、矛を交えれば、大なり小なり情報が入手できる。情報があれば、俺レベルの戦略家ともなれば相手の攻略方法を幾つも思いつくことは容易だ。

（あちらが用意した戦力を見ても、こちらにある程度ダメージを与えられる算段だったんだろう。そういう意味では、彼女の余裕は欺瞞<sup>まん</sup>。内心では相当焦っていたことが容易に推察出来る）

俺でなければ見破れなかったらうがな。

ふっ、と軽く微笑む。

（まあ、少なくとも、彼女の思っていた計画とは乖離<sup>かいり</sup>した結末だったに違いあるまい）

とはいえ、

「撤退は見事だったがなあ」

そこはバシユータを巧く使っていた。

彼や、むしろ俺のような優れた支援職であるポーターは、パーティーの完全な敗北を回避すると言う点で、パーティーの死命しめいを握る最も重要な役割を担っている。バシユータやその数段上のレベルの俺がどれほどパーティーの未来を決めることになるか、よくわかる戦闘だったと言えるだろう。

と、そんな分析をしていた時である。

「ああ！ 帰ってきたんですね！ 聖女アリシア！」

そう言っつて馬車に駆け寄ってくる存在がいた。

日よけのためか非常にツバの広い帽子をかぶり、地面にまで届きそうな金髪を伸ばした、アリシアと同じか少し上くらいに見える女性である。

そして、俺たちの馬車の近くまで来ると、開口一番、

「結婚式の日取りは決まりましたか！？ もう私ったら楽しみで楽しみでー！」

そう大声で言ったのだった。

ここは往来のと真ん中。

そこにいた全員が俺たちへと視線を向けて注目した。

そんな中でアリシアは顔を真っ赤にしつつ、

「やかましいですよ！ 大教皇様！ こんな往来でいきなり何言ってるんですかー！」

そう叫び返したのである。

大教皇。

そう、ならばすなわち女性の名は、大教皇リズレット・アルカノン。

ブリギッテ教のNo.1にして聖都『セプテノ』の行政区長。

そして……、

「おおっと、しかもそこにいるのは我が愛娘じゃないですかあ！  
もう、帰ってくるならそう言いなさいよお！ ちゃんとごちそう作  
って待ってるのにい！」

愛娘？

その言葉に、

「もう、だから嫌だったんですね……」

そのため息をつきながら、その少女はいつものふわふわとした緑の髪を揺らしつつ、

「ローレイ・カナリア。いえ、ローレイ・アルカノン。ただいま戻りました。お母様におかれましては、相変わらずお変わりないようぞ」

そう言って、やれやれと首を横に振ったのだった。

81・聖都「セプテノ」に到着する賢者パーティー一行（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが（；^|^A

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

82・偽装結婚の演技が出来ない聖女さんと、ドラゴン襲来(前書き)

大幅修正2021・3・19

## 82・偽装結婚の演技が出来ない聖女さんと、ドラゴン襲来

82・偽装結婚の演技が出来ない聖女さんと、ドラゴン襲来

「ローレイ・カナリア。いえ、ローレイ・アルカノン。ただいま戻りました。お母様におかれましては、相変わらずお変わりないようで」

そう言って、ローレイはやれやれと首を横に振る。

「驚いたな、まさかローレイ、君が大教皇の娘だったとは」

「本当ですよ、私も初めて知りました！」

俺の言葉に、アリシアも同意した。

「申し訳ありません、アリアケ様、アリシア様。それに皆さま。見聞を広めるために冒険者をしていますから秘密にしていたんです」

そう言って彼女は申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

確かに、彼女が大教皇の娘ともなれば、冒険者稼業など出来るわけもない。



「ところで話は変わりますが、お母様」

「何かしら、ローレイちゃん？」

愁嘆場しゅうたんばも落ち着き、ローレイがいつもの冷静さを取り戻して聞いた。

「先ほどお会いしたときに、アリシア様に、『結婚式の日取りは決まりましたか？』といった趣旨のご発言があったと思うのですが、あれはどういう意味なのでしょう？」

「う”っ”」

先ほど心の同志になった、アリシアがなぜか潰れたカエルのような声を上げた。

「ああ、それはね、それはね！」

ウキウキした様子で大教皇が話し出そうとするが、

「ひえええ！？ 聖女さんチヨークスリーパアアアアアアア！」

アリシアはあるうことが、上司（国教のトップ）に締め技をかけて落とそうとする。

「あははははは！ 何ですか何ですか、アリシアちゃん！ くすぐったいですよー！ こんな往來のど真ん中で」

「化け物ですか！？」

首を絞められても平然と笑っている大教皇に、アリシアは困惑しつつ、

「ああ、もう！　っていうか、大教皇様こそ何なんですか！　あんな手紙をいきなり寄越して！　私とアリアケさんは別に結婚なんてしなっ……！」

そう言いかける。

だが、

（む？　アリシアはさっき打合せをしたことを忘れてるみたいだな）  
俺は急いで口をはさんだ。

「ああ、その件だがな、大教皇リズレット・アルカノン。俺としては今週中にでも、アリシアと式を挙げる予定だ」

俺はそう口を差し挟んだのである。

そう、俺とアリシアは聖都に来るまでに打合せをしていた。

アリシアに送られた手紙から、教会に何か起こっていることは確実である。そしてアリシアは教会の序列第3位としてどうしてもその件の解決に向かわなくてはならない。

俺としては世話になっている彼女のためにひと肌脱ぎたかった。

無論、だから結婚するなんてことはさすがにアリシアも嫌だろうし、不可能だが、彼女のために方便を使う。要するにいったん相手の策



完全に了解してくれていたのに。

なぜか、本番では……。

まるで純朴な恋する少女のように瞳をうるませて、頬を染めながら俺の方を上目づかいで見ているのだった。

まるで本当に俺が求婚したように……、

「お、驚きました！ まさかお二人が結婚されるなんて！ ですが、おめでとございます！ アリアケ様、アリシア様！」

ローレライが驚きと喜びの声を上げた。

「あ、あうあうあうあう」

一方の聖女はもはや何を言っているのか分からない。

「あらあら！ でも、なんだか聖女アリシアの様子は何か変ではないかしら！」

と、アリシアの様子を見て、大教皇リズレットがビシッと疑問を呈した。

「なーんかてんぱってて、照れてるのとも違うっていう気がして、怪しいわね。何か証拠を見せてもらえないかしら！」

「ふうむ、証拠と言われてもな」

俺は困惑する。

と、そんな会話に賢者パーティーの面々が口を開き、

「我としては、やはりここはキスではないのかと思うのだがのう」

「フェンリルよ、それは奥手のアリシアには無理なのじゃ。心臓が爆発してしまうかもしれぬ。ここはまずハグからでどうじゃろう？」

「コレットお姉様、でもそれも同じくらい心臓に負荷をかけてしま  
いそうだとボクは思いますので、とりあえず手を握るくらいからで  
いいのでは？」

「お待ちください、ラツカライさん。それだとまるでお付き合  
いたてのカップルみたいで、あんまり説得力がありません。ここは、  
ええ……」

ローレライは吟味ぎんみしたのちに、

「お互いを『ダーリン』『ハニー』と呼び合う。これでいかがでし  
ようか？」

おー、と俺とアリシアを除くメンバーから感心の声と拍手が巻き起  
こった。

「さすが我が娘、天才ね！ さあ、証拠を見せてもらいましょう。  
大聖女アリシア。大賢者アリアケ！ さあ、早く。ああ、あの聖女  
アリシアちゃんが『ダーリン』だなんて！ ハアハア……」

「一体、どういう状況なんだ……」



俺の言葉に、

「にや、にやんだか夢が急にかなってて訳が分かりませんか!? これにはやんなんでしょうか!? なんですかこれ? どういう状況ですか!? えっ!? えっ!? はえええ!?!」

やれやれ。俺は首を横に振る。

「結婚するんだから、ハニーと言つのは当然だろう。さあ、お前も俺のことをダーリンと呼んでくれ」

「そ、そんな、アリアケさんのことを、そんな風に、言っなんて…」

「俺が夫ではいやなのか?」

「い、嫌なわけじゃないですう! む、むしろ本懐と言いますか、小さい頃からの夢と申しますか、家は庭付きの一戸建てで子供は3人くらいでゴニョゴニョ」

「なら、ほら、言ってみる。別に何度も言わなくていい。一言いえば、リズレットも納得するだろう」

俺の言葉に、アリシアは目を潤ませて、おずおずとした様子で、

「ダ、ダーリン……」

そう言って俺の服の裾をつかんで、さっと俺の後ろに隠れたのであった。

それは小さなころ、リットンデ村で幼馴染だった彼女が、何か恥ずかしいことや失敗があった時に、俺の後ろに隠れる仕草のままであった。

「ふむふむ、聖女アリシアがあそこまで言うのですから間違いはなさそうですね！ いや、おめでたい！ そして我が教会にとっても最大の福音です！ ようこそ大賢者アリアケ・ミハマ！ ブリギツテ教会はあなたを歓迎しますよ！」

大教皇がテンション高めに言った。

いちおう納得したようだな。

と、少し安心していると、ローレイが口を開いた。

「ところで、素朴な疑問なのですが、アリシア様以外もアリアケ様に、その、アレな感情をお持ちだと思うのですが、アリシア様を尊重されるのはなぜなのでしょう？ いえ、これは純粋な疑問なのですが」

アレな感情？

俺は完全に理解不能で首をかしげるばかりだが、他のメンバーには完全に伝わっているようだ。

まったく、女性陣の会話というのは、男性には全くもって難しいも



のだなあ。

「そういう誓約を結んでおるのじゃよ。アリシアが一番出会ったのが早いから、一番手なのじゃ。順番制になっておるのじゃよ」

「それゆえ早くくつついて行ってもらわねば自分の番が回ってこぬのよ。まあ我は膝の上でぬくぬくさせてもらえれば文句はないのだが」

「まあ、ボクもそれほど焦っているわけではないですが、とりあえずそういう誓約をしてみました……」

「なるほど。そうだったんですね」

ローレライは納得したと頷いてから、

「と言うことは私は二番目なのでしょうか？」

「……え？」「」

彼女の言葉に、他のメンバーが虚を突かれたように声を上げた。

「出会った順番でしたら、私が二番目ですので」

「えーっと、待て、待つじゃ。いちおう儂が二番手で……」

「出会った順番ではないんですか？」

「う、うむ！ えーっと、『総合評価』なのじゃ……」

「そうだったんですね、分かりました」

ローレライは承知したとばかりにうなずいた。

一方のコレットは、何か決して油断できない対象を見つけたかのように、まじまじとローレライを見ていた。

まあ、目の前で一体何の相談がなされているか、さっぱり分からないのだが……。

少なくとも俺には余り関係のない話だろう。

それはともかく、

「で、なぜ俺とアリシアを結婚させようとしたんだ？」

俺は大教皇に探りを入れてみた。

「そうですね、それはしかるべき時と場所でお話しましょう。少なくとも、こんな往来で話す内容じゃないですからね！」

きっぱりと拒絶されてしまった。

「やれやれ、これはなかなか……」

事態は結構込み入っていきそうだな。

俺は天性の直感で事態の深さの本質を察する。

そして、とりあえず面倒くさそうだなあと嘆息した。

俺がいかにも万能であろうとも、別にそれで手間暇がなくなるわけではないからなあ。

と、そんなやりとりをしていた時である。

「ゲシユペント・ドラゴンの襲撃だ！！！！ あと10分で接近遭遇！ 聖地『セプテノ』第1種戦闘態勢！！！！」

神官兵たちの警告が聖都へと鳴り響いたのであった。

「説明の手間が省けたみたいね」

「やはり闇が深そうだな……。やれやれ」

テンションの高いリズレットの横で、一方の俺は呆れたように肩をすくめたのだった。それにしても、ゲシユペント・ドラゴン。コレツトの同族か。

そんなことを考えていると、少し遠くでローレイとラツカライが、

「アリアケ様はさすがですね。突然の出来事にもまったく動じられません」

「まあ、先生ですからね」

そんな会話をしているのが少し耳に入った。

82・偽装結婚の演技が出来ない聖女さんと、ドラゴン襲来(後書き)

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 83・アリアケ無双

#### 83・アリアケ無双

「ゲシュペント・ドラゴン 『シャーロット・デュープロイシス』  
視点」

「シャーロット様！ 人間たちが私たちの接近に気づいて、戦闘体制に入ったようですよ！」

隣を飛ぶ俺の副官である、フレッドの言葉に、

「ふん。塵芥どもが群れて何もできぬであろう」

この俺。

ゲシュペント・ドラゴンの王、シャーロット・デュープロイシスはその数十メートルに及ぶ巨軀きよくを青天にひるがえしながら、ついついあくびをかみ殺す。

「それにしても、人間如きが、この俺、黄金竜にたてつこうとは、笑い殺す気であるうか？」

俺は本当に彼らが何を考えているのか理解できずに首をひねる。

そして、もう一度、今度は本当に『ふわぁ』とあくびをした。

俺は地面に這いつくばるようにして、こちらに武器を掲げる人間たちを見下ろす。

「何の興味もわからない。歩くときにアリを気にする者がいないのと同じか」

そんなことをつぶやく。

すると隣のフレッドが、

「シャーロット様、しっかりしてくださいよ。ほら、攻撃してくるかもしれないよ。あと、今回の目的を忘れないでくださいよ?」

「やれやれ、フレッドよ、分かっているわ。だが、あのような非力な存在たちが本当に俺たちを撃退できると思っているのかと思うと……哀れなものだな」

「まあ、そうですね」

フレッドがため息をついた。

上位種族たる我らドラゴン種族が、人ごとき下位種族にかまけていること自体、やや滑稽こっけいなことだ。

なぜならば、

「ここからプレスでも吐けば、それで聖都『セプテノ』は灰燼かいじんに帰き

すのだからな」

そう、それが事実だ。

選ばれし種族、我らゲシユペント・ドラゴンの翼には、人は誰も手を届かせることができないし、圧倒的な魔力は彼らの稚拙な攻撃魔法を全て弾いてしまう。

ゆえに最強。

誰も自分たちを傷つけることは出来ないのだ。

ゆえに退屈。

今回の遠征もすぐに目的を達してしまふことになるだろう。

なぜなら、彼らの意思など、我らの力の前にはあつてないようなものなのだから。

「それよりも、今回の『地下封印遺物』の結界が解けかかっているという情報、本当なのだろうか？」

「調べさせましたが、間違いないようですよ。やはり人間如きでは無理だったみたいですね。まあ300年封印したんだから、もった方じゃないですか？」

「まったく、封印すら出来ぬとは、嘆かわしい」

俺は嘆息する。



そんな心の動きに少し驚いた。

人間如きに俺が少しでも期待していたことに気づいたからだ。

300年前の盟約。

人と交わした盟約を今でも覚えていてる。

だが、それは人間たちが封印を続けられることが条件だった。

もしできないのならば、

「かの地ごと俺たちが大地を消し去ろう」

それをしないための盟約だった。だが、フレッドの情報によれば、その結界封印にはほころびが出始めている。封印が解放されるのも時間の問題だという。ならば、

「盟約はここに破棄された。先に破棄したのはお前たちだ人族よ」

「では、まずはどうされますか？」

「どうするか？ 決まっている。」

「まずは大地の表層を俺のプレスで全て除去する。その後、地下封印遺物へ赴き、空間ごと破壊しつくそう」

「名案ですね」

「では早速始めるとしようか」

聖都セプテノの上空から、俺はこの世界に君臨するものとして睥睨へいげいする。人を哀れむ気持ちは少しはある。

彼らは非力なだけで罪はない。ただ、俺のように空を飛べず、この魔力の壁を突破することは出来ず、俺に触れることすら叶わないだけだ。

「さらばだ、人間た……」

「なんだ、もう帰るのか？」

「……なに？」

俺は吐こうとしていたブレスを思わず中断する。

声など聞こえて来るわけないからだ。

「ここは、空は、我らドラゴンの領域！ そんな聖域に土足で踏み入る者がいては良いわけがっ……！」

「残念ながら」

その男は、腕組みをしながら俺の……、このゲシュペント・ドラゴンの前に悠然と浮かびながら余裕の笑みを浮かべていた。

俺の神域を我が物顔でっ……！

「ここはお前の庭などではないぞ、トカゲの王よ。お前が何をしに来たのか、聞いてやってもいい。ひとまず地上に降りて、会話でもしないか？ もし、俺の言葉が理解できるのならばな。外交と言う言葉を知っているか？」

「なっ!?!」

ドラゴンを前にして。

何よりも、神竜と呼ばれた自分を前にして、あり得ない言葉を並べたてられたことで、俺は思わず呻き、混乱してしまう。

何百年となかった心の動きに俺は戸惑う。

だが、そんな混乱している俺に、フレッドが慌てたように言った。

「そ、その男ですよ！ シャーロット様！ その男がアリアケ・ミハマです！ コレット様が付き従っているという!」

「なにいいいい!?!」

俺はガツンと頭を殴られたように、意識をはっきりさせる。

そう、今回の遠征の目的は2つある。

1つは聖都『セブテノ』の地下封印遺物の結界が弱まっているから、

これを封印遺物ごと排除すること。

そして、もう一つ。

「1000年ぶりに見つかった我が娘、コレットを取り返すことだ！」

俺は思わず叫んでから、

「手間が省けたぞ！ 許さんぞ、アリアケ・ミハマ！ 無理やり隷属させている我が娘、コレットを返してもらっぞ！ 下等な人族めが！」

だが、アリアケは、「はあ？」と怪訝けげんそうな瞳を、この王たる俺に向けてから、

「？ 何を言っているんだお前？ 囚われていたコレットを救った時に彼女が俺を乗り手として認めてくれたんだが？ だから、お前にとにかく言われることじゃない……んだが、お前ってコレットの親なのか？」

なあ！？

「う、嘘をつくな！ お前ごとき人族がゲシュペント・ドラゴンの我が娘の乗り手なわけがない！ 認めんぞ、絶対に認めん！」

しかし、奴はあるうことが俺を呆れたとばかりに目を細めると、

「やれやれ、頭の固い親というのは、種族を問わず話にならんなあ。まあ、コレットには悪いが、あいつの親とはいえ、少しお仕置きを



### 83・アリアケ無双（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yussyaparty/

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ……………！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。





しかし、

「馬鹿め！ 馬鹿めが！ しょせんは卑小な人の仔よ！ 俺のプレスは 無敵 なぞ効かぬ！ 無敵を無効化して、お前の身を蒸発させる！ さあ、この竜王に無礼な口を吐いたお前の罪ごと、疾くこの地上から消え失せるが良い！」

竜王シャーロットが嘲りの声を上げながら、ついにプレスを俺に向かって発射した。

だが、

「まあ慌てるな、騒がしい竜の王よ。俺のスキルはまだ途中だ」

俺は余裕の笑みを絶やすことなく、

「 無敵 スキルに 対竜種特防 を付与する」

その瞬間、俺の体からまばゆい光が輝きだした。

それは 無敵 スキルの亜種スキル。

人がドラゴンと戦うという究極状況のみで使用する、存在すら認知されていない究極的希少スキルの一つだ。

その美しき光輝は俺を包み込むと、正面から迫る、あらゆる物質や概念を焼却する神竜ゲシュペント・ドラゴンの一撃をまともに受けとめるのと同時に、その膨大なプレスの魔力を一切通過させず、完全に無効化したのであった。

俺の無敵スキルと、竜のブレスが無効化の衝撃で弾けて、まるで花びらのように魔力の切れ端がヒラヒラと舞った。

「ばっ、馬鹿なあ！ 俺のブレスが！？ この地上一帯を、聖都『セプテノ』や地下封印遺物すらも、根こそぎ消滅させられるほどの威力なのだぞ！」

竜はぎりぎりと言を噛みしめ、悔しそうに呻くが、

「どうした、もう一度するか？ などと言いつもりはなくてな。俺はお前と争うつもりはない。どうだ、とりあえずここは痛み分けとということにして、なぜここに来たのか詳しく話を聞かせてもらおうというのは……」

「痛み分けだと！？ この竜王に情けをかけるつもりかあ！」

「えっ？ いや、そんなつもりはないんだが……」

本気のブレスを防がれたことで、俺が情けをかけていると思われるってしまったようだ。

単に無益な戦闘をするのを避けたいだけなのだが。

本当に強い者は、闇雲に力を見せる必要はないし、無用な争いを回避するものなのだから、強者たる俺が争いを回避しようと交渉を持ち掛けることは普通のことなのだが……。

だが、そのことが、地上最強、神竜とまで言われた、目の前のドラゴン、シャロット王には耐えられない屈辱と捉えられたらしい。



バッキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!

「ぐはあああああああああああああ!?!」

「うわぁ……………」

俺はいきなりの展開に傍観するしかない。

いきなり現れたコレットは、あるうことが、自分の父親に、

「ゲシユペント・ドラゴン・アルティメット・キック!」

と叫びながら、思いっきり蹴りを放ったからである。

父親は完全に抱擁ほうゆうしようとしていたためか、その娘の一撃を受けて、気を失ったのか、きりもみ回転しながら地上へと落下していったのである。

「僕はコレット・デュープロイシス。大賢者アリアケ・ミハマを唯一の乗り手と認めた神竜! 例え父上と言えども、僕のみそめし大切な人を傷つけようとすれば、このコレットは竜の誇りにかけて、何物にも代えて、我が旦那様を終生守ろうぞ!」

グオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

そんな咆哮ほうぼうとともに、その咆哮に込められた念話が、聖都『セプテノ』へと響き渡ったのであった。

ちなみに、地上に戻った時に、

「うむむむむ、許さぬ。許さぬぞ。人間となんて許さんぞ……。付き合うなら俺に勝つてから……。いや、だがさっき俺のブレスを……いやいや、あれはまぐれで……」

と、意識を取り戻し、なぜか、いちおう暴れるのをやめてくれたシヤーロット王が、何やらブツブツとぼやいている姿と、

「いやあ、それにしてもよ、あのドラゴンの娘、聖都の中心で愛を叫んでおったのう、わはははは愉快よのう」

「本当にコレットお姉様ったら大胆です！ ボク憧れちゃうなあ！」

「うう、可愛い上に男前だなんて。さすがコレットちゃんです。ていうか、コレットちゃんにまで一歩先を行かれてしまいました！ うううう」

「なるほど、告白とはああやるんですね！ 勉強になりました！」

「……ん？ あの、すみませんローレイさん。その勉強をもしかして近く活かされるおつもりですか？」

「？」

妙に感心しているフェンリルと、顔を赤くしているラツカライ、そして落ち込んだり、ローレイになぜか疑心暗鬼気味の目を向けるアリシアたちが、そんな会話をしていたのだった。

よく意味は分からなかったが。

（何はともあれ、想定外の展開ではあるが、いちおう少しは彼らと会話が出来そうだな）

そんな感慨を持ちながら、集まってきた大教皇リズレットを加えて、ドラゴンたちとの会話が始まった。

84・続・アリアケ無双、そしてコレットは聖都の中心で愛を叫んだ（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



85・親子喧嘩と外交的政略結婚(前書き)

2021・3・23大幅修正

2021・3・24大幅修正(申し訳ないですm) | |”m)

## 85・親子喧嘩と外交的政略結婚

### 85・親子喧嘩と外交的政略結婚

俺は今、臨時で設けられた外交のテーブルに座っていた。

ここは聖都セプテノから少し距離のある場所に建てられた離宮であり、賓客ひんきやくなどをもてなすための場所だ。

そこには、聖都セプテノを破壊しようとして襲来したゲシュペント・ドラゴンの王『シャーロット・デュープロイシス』とその腹心『フレッド』が対面に座っていた。

一方、人間側も聖都の重鎮たち、そして俺たち賢者パーティーがそろい踏みし、今後のことについて話し合いが持たれる予定であった。

しかし……、

「この馬鹿娘め！ そんな人間のどこが良いというのだ！ 目を覚まさぬか、コレット！ 我が娘よ！！ せっかく再会できたというのに、この親不孝者めが！」

「いかに父上と言えども、その言葉は聞けぬのじゃ！　なんでわか  
つてくれぬのじゃ！　さつきも話したじゃろ？　旦那様は僕の唯一  
の乗り手！　僕を救ってくれた恩人でもあるのじゃから！　僕は一  
生旦那様と一緒にいると誓ったのじゃ！　ラブラブなのじゃ！」

「ラブラブだとおおおお！　父は！　父は許さんぞ！」

「父上の許しなどいらぬのじゃ！　のじゃのじゃ、プイ！」

先ほどからずっと激しい親子喧嘩の真つ最中なのであった。

ちなみに、俺がここにいる理由は、大教皇リズレット・アルカノン  
に、この聖都を救った英雄として、ぜひこの協議の場に同席をお願  
いされたからだ。その要請に俺は、アリシアを助けることにもつな  
がると思いい出席しているのである。

人とドラゴンの外交の歴史は長く、険しい。時に両者が血で血を争  
う戦いを起こしたこともある。

だから、人類の切り札である俺を引っ張りだした大教皇リズレット  
の思惑は理解できた。どうしてもドラゴンの強大な力に人類は見劣  
りするから、外交交渉を有利に進めるために俺と言う超越的な存在  
が、控えめに言って人類には必要だからだ。

なのだが、

「人間如きにほだされおつて！　父は許さぬ！　軟弱な人間に娘は  
やれぬ！」

「旦那様は軟弱ではないわい！　僕をかつこよく王子様のように助

けてくれたのじゃ！ 今思い出しても、くううう、かっこいいのじゃ。……それにそれに、さっき父上にも旦那様は勝利したのじゃ！ 父上自慢のブレスを余裕で防いでいたのじゃ！ さすが旦那様！ 儂の旦那様は世界一なのじゃ！」

「あ、あれは違う！ そう違うぞ！ 本気じゃなかったからな！ ちゃんとした戦いで俺を倒さぬ限り、娘は絶対にやらんからな！」

「この頑固父上！ じゃが、旦那様は100回やったら100回父上に勝つのじゃ！ だって旦那様なのじゃからな！ のじゃ！」

「馬鹿娘が！ そんなわけあるまい！ そんなことがあつたら尻尾で皿を回してくれるわ！」

バチバチと。

両者の間で火花が散った。

うーむ、どうしたものかなあ。

と、そこに。

「あの、ちよつとだけいいですか？」

そんな犬も食わない親子喧嘩の間に、ローレライがあっさり口をはさんだのだった。

さすが、これくらいできないと、大教皇の娘なんてやってられないのかもしれないなあ、と妙に感心した俺である。

「ところでコレットさん。本題に行く前に一つだけ質問なんですが」  
ローレイはそう前置きしてから、

「どうして、この方をさつきから父上と呼ばれてるんですか？ それ私が私、さつきから気になって気になってるのですが」

「んん？ 俺のことをか？」

彼は……。いや、そう彼女は、首をかしげてから自分の人としての体を見下ろした。

ドラゴンの巨体のままでは離宮に入ることは出来ない。だから彼らは人化して入室してきたわけだが、

「俺がいつオスだと言った？」

「でも俺とか言ってますし、父上とか言われてるじゃないですか？」

「王は尊大に振る舞うものだ。礼儀正しくするのは、そうだな、この隣に座るフレッドの仕事といったところか。それに父上と言うのは、同胞の頂点ゆえ、尊称で呼ばせているにすぎぬ。わかったか、大教皇リズレット・アルカノンの娘よ」

「そうだったんですか」

ローレライは納得してうなずいた。

俺はもう一度シャーロットの方を見る。

俺もてつきり最初は男性だと思っただが……。

人化したシャーロットは、胸の大きくあいたドレスのような服をきていて、また、コレットと同じ赤銅のような、長く美しい髪を伸ばしていた。

完全に女性メスのようだ。

そもそもシャーロットと言うのは女性名だしな。

「ふん、腰が折られたわ。いや、あえて折ったのか？ ふん、まあ良い。アリアケとやらが俺のブレスを防いだのは事実。だが、正式に俺と戦って勝たぬ限り娘はやらぬ！ これはゲシユペント・ドラゴンの王としての矜持の問題だ！ 100回やれば、100回貴様が勝つというのなら、この勝負受けるがいい、小僧……。いいや、賢者アリアケよ！」

ふ、なるほどな。ドラゴンとして負けるわけにはいかないというところか。

力を誇りにするドラゴンの思考としては当然だな。

「まあ、確かに俺が勝利したとまでは言えない。最後に地上にシャーロット王を墮としたのはコレットだしな」

それにあんな局所的な勝利は大局的には別に意味はない。ゆえにこだわるつもりはない。

「む！ そうだ、その通りだ！ お前、いや大賢者よ、なかなか分をわきまえているではないか！」

凜猛な笑みを浮かべて笑う。

「……ただ一つだけ言っておきたいことがあるんだが」

「なんだ？」

しかし俺は一点だけ訂正しようとする。

先ほどからなぜか、コレットの言葉をシャーロット王は曲解し、まるでコレットが俺に惚れていて、結婚を希望しているかのように思い込んでいるのだ。

だからその誤解を解こうとして、

「彼女に好意を持たれているのは確かだが、彼女の言葉と言つのは非常に極端なだけだな。俺たちは決してそうという仲では……」

そう言いかけたところで、

「分かりました。では本題に行きましょう。その戦いにこの聖都の命運をかけてはどうでしょうか？ そして勝利した暁にはコレットさんとの結婚も認める。そうすれば全て丸く収まります。ねえ、お母様？」

「いいわね！ さすがローレイちゃん！ 我が愛娘！」

「は？」

俺が言葉を発する前に、二人が意味不明なことを言い始めた。

俺は疑問を口にする。

「いきなり何を言い出すんだ、ローレイ。それに大教皇よ……。なぜ俺とシャーロット王の戦いに聖都の命運が関係ある？」

「それはあなたにかけるのが一番分がいいからに決まってるからね！ あなたを置いてこの窮地きゅうちを救える人は世界中見渡したっていないのだから！」

そう力強く言い切る。

いや、それはそうなのだろうが……。

「シャーロット王、今回聖都にやって来た目的は、『地下封印遺物』アビスの封印が解けかかっているから。そのために私たち人間とドラゴンの盟約をこちらが破棄したと断じたからね？」

アビスに地下封印遺物か。それが俺とアリシアを政略結婚させようとしたきっかけである、教会の危機とやらの正体なのだろう。

「その通りだ。そなたら軟弱な人類に、やはりアビスの封印を任せ続けることは危険……」

「なら、問題ないわね！ だって、あなたと対抗しうる存在、私た



ち人類の切り札であり、救世主たるアリアケ・ミハマ君が、アビスを再封印するのですから！」

「なに！ こやつがアビスの封印を！？」

「その通りよ！ もしあなたにアリアケ君が勝てば、私たち人類がアビス封印の担い手としてふさわしいことを証明になるでしょう？」

「むむ、確かに……。万が一だが……。もし、俺より強い者が封印するというのがなら文句はない……」

「いやいや。」

お前は俺を認めていないんじゃないのか？

「良からうー！」

そう勢いよく、シャーロット王は咆哮するように言ってから、

「この俺を倒し、アビスを封じ、人類を救って見せよ、大賢者アリアケ・ミハマよ！ そして、万が一、万が一だが、もしも俺を倒したその暁には！ 人の仔よ！ 我が娘、コレット・デュープロイスを伴侶として迎え、我らドラゴンと人類の平和と共栄の象徴となるがいい！」

そう宣言したのであった。

「いやいや、そんな政略結婚みたいなのは、コレットも嫌がって……」

「ぬわんと！？ 旦那様は絶対勝つから、儂つてば旦那様と絶対結婚できるのじゃ！？」

「あれ？ 嫌じゃないのか？」

「何を言うか旦那様！ やったのじゃやったのじゃ！ それに儂は末姫ゆえ政略結婚みたいなもんには慣れておる！ あっ、もちろん旦那様とは政略結婚じゃなくても、もちろんそのう、あれじゃぞ？ ずっと一緒におるつもりだったのじゃぞ？ きゃっ！」

俺はよくわからずに混乱する。本当に女心は分からない……ので、一旦置いておこう。

思考をシャーロット王との戦いとやらに向ける。

とはいえ、戦いに関しては、まあ、無論負ける気はないが……。何はともあれ、

「お前らちよつと落ち着かんか」

俺は呆れた調子で言う。いくら何でも勢いで決めすぎだろう？ もちろん、俺が戦えば勝利はするが……。

だが、

「そうですね、皆さん、ちよつと落ち着きませんか」

そう同調して言ったのは、ドラゴンのフレッドであった。彼は朗らかな調子で言葉を紡ぐ。

「シャーロット王よ、そのような戦いで私たちの命運を決するのはよくありません。今回の遠征の目的である『家出したコレットお嬢様』を発見したのですから、あとは当初の目的通り、人族を排除したうえで、地下封印遺物を我らドラゴン種族によって破壊しましょう。大丈夫です、王の力ならそれが可能です」

「フレッド。ふつむ……」

シャーロットが考え込む。

すると、そのフレッドに向かって、コレットがなぜか不思議そうな声で言った。

「フレッドよ、そなた今、僕のことを『家出した』と言ったか？」

「はい、そうですが？」

ふむ、と彼女は首をかしげながら、

「僕はドラゴンの権能の弱さ故、追放されたんじゃないか？」

「何、それは本当か!？」

コレットの言葉にシャーロット王は初めて聞いたとばかりに驚く。

そう、彼女はドラゴンの4つの権能。『長大な寿命』『自己再生』

『破壊力』 『空の支配』

これらが余りにも弱いためにドラゴンの里を追放され、その後あの魔導士に捕縛されたのである。まあ、本当はそういう呪いがかかっていたのだが。

しかし、

「ははははー！」

フレッドが張り付いたような微笑みを浮かべたまま言った。

「御冗談を、何をおっしゃいますか、コレットお嬢様！ 直系の姫にそのような仕打ちをする訳がありません！ シャーロット王よ、コレットお嬢様はどうやらまだご立腹の様子。追い出されたと当てつけをされているのです。少し時を置いて冷静になってから再度お話をされた方が宜しいでしょう」

「むむ？ 儂は本当のことを言っておるのじゃが？」

コレットは反論するが、

「ふむ。ここは外交の場。確かに日を改めて親子の事は冷静に話しあった方が良いだろう」

シャーロット王は納得する。

「だが、それはそれとして、フレッドよ、俺は決めたぞ！ アリアケと決闘し、アビスの扱いを決めることにする！ これは王の決定である！」

「……そう、ですか……。はは、かしこまりました王よ。……それに余り長居すべきではなさそうだ」

フレッドが何やらブツブツと言っているが良く聞こえない。

「ではな、救世主、大賢者アリアケよ！ また後日、そなたとは『聖都』、いや世界の命運をかけて正々堂々と勝負しようではないか！ 俺もドラゴンの誇りをかけて戦うぞ！ 人族の英雄よ！」

やれやれ。

俺は嘆息する。

思った通り厄介ごとに巻き込まれてしまったようだが、

「シャーロット王よ。まだ俺には事態がよく呑み込めていないが、人族と竜族の命運がかかっているというのなら、俺が戦わざるをえまい。いいだろう、後日相応しき場で、人の矛にてドラゴンの王よ、お前を空から打ち落とそう」

俺くらいにしかこの難局を乗り越えられる者はいまい。

選ばれた人間と言うのはこういう苦勞を背負いこまねばならないから難儀だ。はあ。

「ふははっはあっはは！ それでこそ人の英雄よ！ 気概のある！ だがまだ認めておらんからな！ まだコレットをやると決めたわけではない！ そこんところを勘違いするでないぞ、人間！」

「いや、そこは、そちらが大いに勘違いを……」

「はっはっはっはっは！ ではな！」

そう言つて、シャーロット王は立ち上がると、なぜか上機嫌で部屋から立ち去つて行つた。

フレッドはそのあとを追い、最後にちらりと俺と、コレットの顔を見てから、立ち去つて行つた。

ちなみにその後姿を見ながら、

「これで順番が一つ進みますね。なんでも順番性とのことですから」

「う、こやつ……まさか……」

呟くローレライの姿に、フェンリルが珍しく戦慄の目を向けていた。りした。

「ああ、大変だわ！」

と、次は、大教皇リズレットが今気づいたとばかりに悲鳴をあげた。

「まったく、次から次になんだ。今更、この大きさに気づいたのか、大教皇？」

「そう、そうなのよ、いやー、まいったわねー」

リズレットは焦りながら、

「大聖女とゲシュペント・ドラゴンのお姫様とのダブル結婚ってことでしょう！ ちょっとこれは普通の教会で式を挙げるだけでは足りないわね！！」

「「はあ??」」「

俺とアリシアの疑問に、リズレットは自信満々といった風に、

「でも大丈夫！ なら聖都『セプテノ』全土をあげての結婚式にしちゃえばいいんだから！ 安心してね 財務長官！ 会計主管！ 誰かある誰かある！」

「安心できる要素が一つもないんだが!?!」

俺は思わずツッコんでしまう。

だが、彼女の爆弾発言はそれでは終わらなかった。

「それにそれに、アリシアちゃんのご両親にもそのあたり説明しておかなくっちゃ！」

「……へ？」

アリシアの素っ頓狂な声が響いた。

「「ご両親？ へ？ どうしてお父様とお母様の話が出てくるんですか？」

「あれ？」

リズレットは首をかしげてから、

「言ってますでしたか？ 結婚するんだから、やはりまずご両親に説明しないといけないでしょう。だから気を利かせて、あらかじめお呼びしておいたんですが？」

「ぜんっぜん、聞いてませんよ！ このアンポンタン大教皇様！？」

今度はアリシアの悲鳴が響いたのであった。



## 85・親子喧嘩と外交的政略結婚（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料「試し読み」だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 86・アリシアの両親

### 86・アリシアの両親

さて、俺たちは今、聖都「セプテノ」にあるアリシアの屋敷へと向かっていた。

大教皇リズレットには、白き少女フォルトゥナと遭遇したことなどは、簡単には伝えてある。

俺としてはそのまま詳細な報告をしても良かったんだが……。

「タフすぎますよ、先生。ゲシュペント・ドラゴンとの戦闘後なんですよ！」

ラツカライが少し呆れた調子で言った。

むう、そうだろうか？

俺が腑に落ちない顔つきをしていると、フェンリルが、

「というか、我らはそもそも聖都へ到着したところだったゆえな。昼過ぎに到着して、聖都をゲシュペント・ドラゴンの襲撃から救い、そのあとは彼らとの外交会談を行い、主様をこちらの代表に立てることで何とかドラゴンたちを退かせることに成功した。まだ半日し

かたつとらんのに、何回人類を救うのかの。なのでほれ、時刻はもう夕方よ」

「そうなのじゃ！ 旦那様はかるく救世主みたいなことしちゃってるんじゃないから、そろそろ休むべきなのじゃぞ？」

そんなものかね。俺としては、さほどのことをしたつもりもないのだがなあ。

ただ、彼女たちの言葉に嘘偽りはないようで、同じ気持ちだったらしい大教皇からも、俺をねぎらって、今日はとりあえずアリシアの屋敷で一泊してから、また明日、教会本部へ出向き詳細な報告をして欲しいと言ってきたのである。

なので、その配慮はありがたく頂いておくことにした。

余り俺のような特別な者に、周囲がペースを合わせるのも余り良いことではなからう。

(それに、なんとなく俺には事件の全貌も見えて来たしな)

というわけで、パーティーメンバー全員で、アリシアの屋敷へと向かっているわけだが、

「はわわわわ！ お、お父様とお母様が来るなんて！？ 聞いてませんよ、聞いてません。どうしたらいいんですか〜！？」

隣を歩くアリシアが、柄にもなく焦り倒していた。

そう、彼女の屋敷にはご両親がいる。

わざわざ、大教皇がリットンデ村から呼び寄せていたのである。

「うおおおおおおおん！！ 良かったなあ、アリシア！ やつと大好きなアリアケ君と結婚することができて！」

「本当よぉ、お母さんも嬉しいわぁ！」

「ちよつ、二人とも声が大きいですよ！？ それに、やめてください！？ 大好きとか言わないで頂けませんか！？」

「何を言うか！ 大好きな男と結婚出来てハッピーだろう！？ さあ、今日は大いに飲みまくるのだ！」

「お母さんも今日は久しぶりに飲んじゃおつかしら〜」

「ああーん、もうこの二人はあ……………」

やれやれ。やっぱりこうなったか。

「先生、このお二人が、その……………」

「ああ、そうだ。アリシアの……………」

「おおっと、いきなりすみませんでしたな。ワシはアリシアの父のハルケン。それにしてもリアケ君も久しぶりだなあ！ すっかり大きくなったようだなあ！」

「御無沙汰しております。ハルケンさんも元気そうで……」

「ハルケンさんなどと水臭い！ お義父さんと言いなさい！ わははははは！」

その豪放磊落「はうほうらいらく」な性格の父親と、

「あらあら、あなただったら、はしゃぎすぎよ。気が早いって、リアケ君もアリシアちゃんも困ってるわ」

おっとりしている母親。

これがアリシア・ルンデブルクのご両親である。

ハルケンさんはいかにも武闘派といった筋骨隆々といった風情で、母親はアリシアと同じ色の瞳と髪を持つ優しい容姿をした人である。母親の方はもともと聖職者だったはずだ。

二人とも敬虔「けいけん」なブリギッテ教徒である。

「ところでアリシアちゃん知っているかしら？」

「な、何がですか、もう……」

アリシアが落ち着こうと冷水を口に含む。

「ルンデブルクでは結婚する男性とは、一緒にお風呂に入るしきたりがあるのよ〜?」

「ぶはぁ!」

勢いよく嘖き出した。

「なっ なっ なっ なっ なっ ……」

真っ赤になるアリシア。

「聞いたことないですよ!? そんなの!?!」

「だって初めて言うもの。それにしてもアリシアちゃんったら、結婚するのにちょっとウブすぎないかしら。本当に結婚するのかしら〜?」

「ぎくり! と、と、と、当然ですとも!」

「なら、入れるわよね〜」

「そ、そんな。でも、そんな破廉恥なっ ……!」

「あらあらあら、結婚したらもつと破廉恥なことしちゃったりするのよ〜」

「ひーん! 何なんですか!? なんなんですか!? 意味もなく圧が凄い! ア、アリアケさん! アリアケさん! アリアケさん! アリアケさん! 何とか言ってください!」

「も、すぐアリアケ君に甘える。子供のころから変わってない」

「甘えてません！」

やれやれ。

俺は肩をすくめる。

仕方ない、ここはひとつ助け船をだしてやるとするか。

「安心しろ、アリシア」

「ア、アリアケさん」

俺を信じきった目をしている。そして、自慢ではないが、その期待を俺は裏切ったことは無い。

「俺は何もしないから信用していいぞ？」

そう言っただけで安心させるように、フツと微笑んだのである。

「って」

だが、アリシアは震えだすと、

「なに完璧に受け入れちゃってるんですか！ それに手を出さないって、そんな、ちょっと、もう！ 意識しちゃうでしょうが！？」

「何をだ？」



「このボクネンジンめー！」

アリシアが嘆くように言った。

「わはははは！ さすが我が息子！ さあ、そうと決まれば露天風呂に行ってくるがいい！ この風呂はでかいぞ！ と言っても強制せねばいかならうからな、ぬりゃあ！」

「うつひゃあ！？ 離してください、お父様！？」

アリシアの悲鳴がとどろくが、そんな声はどこ吹く風と、アリシアの父ハルケンが娘を抱えて露天風呂へと連行したのであった。

～お風呂回へ続く～

86・アリシアの両親（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yussyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ……………!!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

87・お風呂回(前書き)

## 87・お風呂回

### 87・お風呂回

「もー、うちの両親にも困ったものです」

「ははは。変わらないようで何よりじゃないか」

「変わらないのはアリアケさん、あなたもですよ!」

俺の返事にアリスアは怒ったように言った。

俺も彼女もバスタオル一枚といった格好だ。

「ちょっと、あんまり見ないくださいよ!」

「見てない、見てない。いや、昔はお互いもっと小さかったのになあ、と思っただけ」

「じっくり見てるじゃないですか! このバカちゃん!」

などと、会話をしながら、俺たちはお湯につかった。

アリスアの家は豪邸といって良く、お風呂もまた非常に広い。

「あんまり引つ付かないくださいね! ていうか、後ろを向いて

ください、後ろを！」

「ははは、分かってるさ」

そう言つて、少し距離をとつてから後ろを向いた。

やれやれ、最近はずいぶん打ち解けたとはいえ、さすがにお風呂に一緒に入るのは嫌だったらしい。

「すまなかつたな」

「べ、別にアリアケさんが謝ることじゃないですよ。両親が勝手に……」

「そうじゃないさ」

俺は首を振り、

「偽装結婚のことだ。教会に侵入するためとはいえ、アリアシア、君にとつては不本意だったかもしれないな」

「そ、それは……」

「俺はいつもちゃんと考えて行動しているつもりなんだが、よく君を怒らせてしまう。よくデリカシーが無いと怒られるしな。偽装結婚のことも、よく考えれば、君にとつてはとても嫌なことだったかもしれない」

「そ、そんなことはありません」

「そうか？ まあ許してくれるなら、ありがたい。今後もできれば、こんな俺だが一緒に旅をしてくれると助かる」

「へ？」

俺の言葉に、彼女はきよとんとした声を漏らした。

「本当は勇者パーティーを追放された時は、一人旅をする予定だったが……」

俺は目をつむりながら、

「お前たちとパーティーを組んで、いろんなところに行つて、たくさん物を見たら面白いだろうと、最近は思っているんだ」

柄にもなく、思っていることをそのまま口にした。

こんなことを率直に話すのは。話してしまうのは、相手がアリシアだからだろう。

「まあ、君にとっては迷惑なことだと思うが……」

そう、俺にとってアリシアが必要であっても、彼女にとってはそうではないだろう。

何せ、彼女は大陸でもっとも有名な偉人であり、教会の序列三位で……、

「ええ、こちらこそお願いします。アリアケさん」

「へ？」

俺の背中に柔らかい手が添えられて、誰かが体重を預けてきた。

「嫌なわけありませんよ。私だって、アリアケさんが……。アー君がいたから、ここまで来れたんです。これからもずっと一緒ですよ」

「そ、そうか」

久しぶりにアー君と呼ばれた。

彼女の体の重みを背中で感じる。

成長した彼女の体は幼い時とは違って、華奢なのになぜか柔らかい不思議な感覚だった。

「こちらこそよろしくな」

「ふふふ」

彼女の嬉しそうな声が耳をくすぐった。

ふーむ、それにしても、

「な、何だか熱くなってきたな……」

やはり今日の俺は何かおかしいな。

柄にもなく照れているのだろうか。



「そ、そろそろ上がるのか！」

俺は立ち上がるうとするが、

「あの、アー君。その……」

しかし、彼女は俺の指をつまむようにしながら、

「本当にもう行ってしまうんですか？ その……私のもっと見なくてもいいんですか？」

「……え？」

「……アー君だったらいいんですよ？」

彼女の方を思わず振り返る。

(しまった、怒られる)

と思ったが、彼女は何も言わない。

ただ、彼女は顔を真っ赤にして俯きながら、上目遣いにこちらを見ていた。

「い、良いっていいのは……」

「……こんな風に二人きりになれること、なかなかありませんし……」

何だろうか、これは。



## 87・お風呂回（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



と。

「へ？」

「あ……」

俺の目の前で、白のタオルがするりと、重力にひかれて落ちていくのが見えた。

それはまるでスローモーションである。

スキルを使ってもこれほどゆっくりと感じることはない。

それほどのゆっくりさ加減であった。

そして、何より、それが『ハラリ』した後。

隠されていたはずのそれが、本当にゆっくりと俺の目の前に現れたのであった。

それは何と喋っているのだろうか……。

丸みをおびたそれは、その大きさにも関わらず決して重力に負けていなかった。

しかし、それでいて決して固そうではなく、むしろこれまで見た何よりも柔らかそうに俺には感じられたのである。

そう、卵白と砂糖で作るマッシュマロキモーサという甘いお菓子が貴族で流行っているが、それよりもなお白く柔らかそうなおイメージで……。

「きゃ、きゃあああああああ!?!」

「うわっぶ!?!」

俺はとっさのことに全く反応すらできなかった。

「み、見ちゃダメです! アリアケさん、見ちゃだめです!?!」

「むぐぐぐ……! むぐぐぐぐつぐ! (アリスア! 分かった、わかったから離してくれ……!!)」

「はうほうほう! 恥ずかしいです! まだ、まだダメです! さすがに恥ずかしいですから! まだダメです!」

「むぐぐぐ……。むぐぐぐ……。(ア、アリスア……。息が出来ないんだが……)」

アリスアは『ハラリ』によって混乱しているようで、俺を抱きしめたまま離そうとしない。

俺は彼女の余りに大きなそれに挟まれて息が出来ない。

ただ、本来ならば苦しいはずのそれは、なぜかどこか心地良く、そのまま俺の意識は次第に薄らいでいったのであった。

ちゅんちゅん……。

朝の小鳥たちのさえずりで俺は目を覚ました。

「俺は……あの後……」

アリシアの大きなアレによって意識を奪われてから記憶がない。どうやらもう朝のようだ。

「おお、生きていたか、アリアケ君！ 昨日は大変だったようだなあ。ま、とりあえず朝食が出来ているから食べなさい！」

「はあ」

俺は寝起きの中途半端な返事をしてから、ごそごそと起きだす。身支度を整えてからリビングへ行った。

パーティーメンバーがそろっている。

アリシアのご両親は別件があるとかで、先程どこかに行ったらしい。

「ア、アリアケさん、昨日はすすすすすみませんでした！ 私ったら混乱しちゃって……。く、苦しかったですよね!？」

「ああ、いや……」

実際のところ、そんなことは無かったので、どう返事しようか迷ってしまった。



まさか、ギモーヴのように柔らかかったとは言えない……。  
と、そんな時、食事の手を止め、ラツカライが頭を下げる。

「先生もアリシアお姉様も本当にすみませんでした！ 昨日はボクのせいで邪魔をしてしまいました……」

「え？ ラツカライがああ揺れを起こしたのか？ 一体何があったんだ？」

しかし、

「そ、それはその……あの……えーっと……」

なぜかラツカライが顔を赤らめてモジモジとします。

そして、言いだそうとするのだが、どうしても言い出せないと言った様子を何度も繰り返してから、

「い、言えません……ごめんなさい！ も、もうちょっと時間をもたえれば、きっと言いますから！」

やはり顔を真っ赤にしたまま、俺の顔をちらちらと見ながら言うのだった。

どういふことだろうか？

すると、

「言えぬこともあるのじゃ。うむつむ。特に親は選べぬ悲しさよ、なのじゃ」

「コレットさんのおっしゃる通りです。本当に親は選べませんからね！」

「狼の我には分からぬ複雑な人間模様であるが、まあ無理強いはよくなかるうて」

なぜかコレット、ローレライ、フェンリルが口をそろえて言ったのであった。

ふつむ。まあ、良く分かんが、確かに人それぞれ事情はあるからな。

とはいえ、

「ラツカライ。それはお前の身に危険が迫るような、そういう話ではないんだな？」

それだけは確認しておかねば。

「は、はい！そこは大丈夫です！……まずボクの心配をしてくれるなんて、やっぱり先生は優しいです」

そう言っつて改めて顔を赤くするのであった。

まあ、ラツカライがそういうのならいいだろう。

なぜか他のメンバーも納得しているようだしなあ。

俺とは関係のない何か特別な事情があるのかもしれんな。

まあ、それはそれとして。

「教団本部に行くのは昼過ぎからだつたな。それまで少し聖都を見ておきたいんだが。アリシア、案内してくれるか？」

「ええ、いいですよ。この聖女さんが色々と案内してあげましょう」

「では、我也ついで行くこうかのう」

「他のみんなはどうする？」

「僕はちよつと昨日ドラゴン化して本気キックしたんでな。少し羽休めをしたいのじゃ。あつ、ガチの方じゃなくてな。ここで休んでおるって意味なのじゃ」

「ボクも昨日の疲れが残ってるみたいなんで、念のため休もうと思います」

「教皇の娘なんで、私は今更ですしね。コレットさん、ラツカライさんと一緒にいたいと思います！ 少しお話をしたいと思ってましたから」

ふむ、では少しだけ別行動だな。

教会本部に行くときにまた合流するとしよう。

「では、アリシア、フェンリル。行くとするか」

こうして俺たち三人は聖都観光へと繰り出したのである。

↳ラツカライ視点↳

「では、アリシア、フェンリル。行くとするか」

そう言って先生たちは外出されました。

「ふ、ふう。何とかごまかせました〜……」

まだ胸がどきどきしています。

昨夜何があったかなんて、先生に言えるわけありませんから！

「にゃっはははは！ それにしてもラツカライ、昨日は良い啖呵だったのじゃ！ さすが俺たちの弟子なのじゃ！」

「コ、コレットお姉様……もう、からかわないで下さいよ……」

ボクは昨日……。

いえ。

私は昨日、思わず口走った言葉に赤面してしまいます。

「そうですね。凄いです。実の父親に向かってあんなにはつきり、熱く、アリアケ様への『愛』を宣言するなんて！ 私もし赤くなつてしまいました！」

ローレイさんの言葉に、私は一層、顔を赤くするのでした。

そう、あれは、先生とアリシアお姉様がお風呂に入られてしばらく経ってからの事でした……。

〈続く〉

88・マシユマロとラツカライ参戦（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「聖女さんは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

89・リックライ愛を叫ぶ(前書き)

2021・4・19大幅修正



## 89・ラツカライ愛を叫ぶ

89・ラツカライ愛を叫ぶ

〈ラツカライ視点〉

時は少しさかのぼります。

先生とアリシアお姉様がお二人で湯あみをされることになったので、ボクは覗きたい気持ちを押さえるために玄関先に出ていました。

いちおう、姉妹の誓いによって、順番を決めてありますので、お姉様と先生が一緒になるのは納得しています。

ブリギッテ教は強い男性や女性が、異性を何人娶るのも自由と言う、ある意味ぶっ飛んだ宗教観ですので、その教徒たるボクには問題ありません。

とはいえ、嫉妬がないと言えばウソになるでしょう。

嫉妬というより、うらやましいと言いますか、羨望といったところですかね。

ああしてご両親が公認で、お二人の結婚を後押ししようとしている

のですから。

「うらやましいなあ！」

本当に、羨ましい限りです。ボクだって先生と二人っきりでお風呂に入ったりしたいです。

それで、先生のお背中を流したりして差上げたい。

そ、そ、そ、そ。

「それに、場合によっては私の体なんかも、先生に洗ってもらったりして！ それでその流れのままに、先生のことをあ、あ、あ、愛して……きゃっ、やっぱり恥ずかしい！」

ボクは聖槍をブンブンと振り回しました。

と、そんなボクに対して、

「いつからそんなふしだらな娘になった！ ラッカライよ！」

その声にボクは、

「お……お父……様。ガイア棟梁様！」

久しぶりに再会した父の声に驚いたのです。

「どうしてお父様がここに？」

「ふん！ ラツカライ、お前が勇者パーティーを追放されたうえに、アリアケなどという、やはり勇者パーティーを追放された無能と一緒にいると聞かされてな！ 連れ戻しにきたのだ！」

「連れ戻しに？」

「そうだ！ さあ、早く家に帰るぞ。アリアケなどという得体のしれない無能と一緒にいても、絶対にお前のためにはならん！ 勇者パーティーを追放される程度のおまえの腕なら、やはり儂の手で直々に鍛えねばなるまい」

そう言つて、ボクを連れ戻そうと手を伸ばしますが、

「それは困ります、棟梁様」

「な……に……？」

お父様は驚いた顔をします。

それもそのはず。今までボクが……。私がお父様の言いつけを破ったことなどないのですから。

「口答えるのか、娘のくせに！」

「娘であるからこそ、お父様の間違いは正すべきだと思ひまして」

「なっ！？」

あっさりと言いつ返す私に、お父様は顔を真っ赤にしながら、口をパクパクとします。

どうやら、私が言いつ返してくるのが本当に意外のようです。

思いつ返すに、私は人の顔色ばかり見て生きてきたのでしょうか。

「娘の反抗期につきあっている暇などない！ いいから帰るぞ！」

「帰る理由がありません、ガイア棟梁様。前提が間違っているんですもの」

「なんだと？」

「だって、ボクは……。私はアリアケ先生のもとでも強くなることが出来ましたから。勇者パーティーに追放された私を見捨てずに鍛えてくれて、御前試合では勇者さんたちをやっつけることが出来ました」

「あんな無能にお前を鍛えることなど出来るはずないだろう！」

お父様はボクの見解など聞くつもりはないようだ。

それは別にいいんだけど。

でも、なんでだろう。この感情は……。

「ねえ、お父様……」

「なんだ？」

「さつきから先生のことを無能無能とさげすむように言っののはやめてもらえませんか？」

「無能を無能と言って何が悪い！」

その言葉に私のどこかが……。

「では、先生が本当に無能かどうか。確かめてみてはどうですか？」

「ふんっ、どうやって！」

「簡単です」

私はそう言いながら、聖槍ブリューナクを構えます。

「先生の今や唯一の弟子たるこの私を倒してみることです。お父様」

「なっ！？」

まさか、そんな提案が私の口から出るとは思っていなかったのかお父様は驚かれます。

「正気か！ この棟梁たる儂に勝てると本気で思っているのか！」

「……」

「言っておいて怖気づいたか！ だが、お前の提案は愚かだが都合が良い！ 少し痛い目を見て目を覚まさせてやる！ おまえが気づいたときには屋敷の中だ！」



槍はたちまち崩壊します。

その衝撃は余りに大きく屋敷全体を揺るがしました。

「ぐ、ぬぬぬぬ。何とか防げたが……。これはまさか、この儂が……。情けをかけられたというのか……」

それは分かってもらえたようです。

さすがに実のお父様を殺すわけには行きませんからね。

「これがアリアケとかいう輩の力というわけか……。お前の聖槍の力を引き出したとでも言うのか!？」

「はい！ お父様！ これでアリアケ先生が無能でないことはご理解いただけましたね？」

「む、むづづ。そ、そんなわけが……！ そんなわけが……」

悔しそうにしています。

それにまだ納得してくれていないようです。

でも、

「伝えたかったのは、それだけではありません！ このラツカライ・ケルブルグは宣言します！ もう二度とお父様が私の先生を悪く言うことが無いようにはつきりとここに宣言します!！」

「？」

ぼかんとするお父様。

それに、何だか後ろからドヤドヤと。

何事かと駆けつけてくる足音がいくつか聞こえてきますが、気にしません。

「この私。ラツカライ・ケルブルグは、アリアケ・ミハマ様を愛しています！」

「……は？」

呆気にとられています、続けます。

「先生は、私を深い闇から拾い上げてくれて、ここまで私を連れてきてくれた世界で一番敬愛する人です。だから」

私ははつきりと、

「我が槍は既にアリアケさんに捧げました。お父様を倒したのはアリアケ様への愛の力です！」

そう宣言したのでした。

「あ、愛！？ いや、それよりも、や、槍を！？ 槍を捧げたというのか！？ それがどういう意味か……」



「武人が槍を捧げるといふことの意味など、言葉にするまでもありません」

私の言葉に、お父様はみるみる顔を真っ赤にし、鬼の様な形相になり、

「なんとということをして！ 認めぬ！ お前が成長できたのは、これまでの儂の鍛錬があったからこそ！ そこに偶々現れたアリアケとやらが成果を横取りしただけじゃ！」

「お父様！？」

なんてことをいうのでしょうか。

でも、ボクは少し違和感を覚えます。

棟梁様は確かに意固地なところがありますが、ここまでではなかったはずなんです。

「許さぬぞ……。許さぬ。アリアケ・ミハマも。そして、儂の許可も得ずに勝手に弟子入りしたお前も絶対に許さん！ 覚悟するがいい！」

お父様はそう言って、さっそうと待たせていた馬に飛び乗ると駆け去っていきました。

「まだ話は！ くつ、行ってしまいましたか……。何だか余計に大事になってしまった気がします」

とそんな頭を抱えている私の後ろから、

「いや、なかなか良い啖呵たんかじゃったのじゃ！ ラツカライ！ さすが我が弟子！」

「我也聞いていてスカツとしたのう。カツとならずに主様がいかに優れた人物であると冷静に伝えるとはなかなかのものよ」

「はい、私も感動しました！あんな風に好きな人への愛を高らかに歌い上げるなんて、なかなかできませんからね！ アリアケ様ご本人に聞かせてあげたいところですね アリシア様にコレット様と来て、ついにラツカライさん！ カオスつぷりが素敵ですね！」

「それだけは勘弁して！ ボクの心臓が止まっちゃいますよ！？」

そんなやりとりが、先生とアリシアお姉様がお風呂タイムをしているときにあったのでした。

でも、これはあくまでケルブルグ一族の話。

私が先生にご迷惑をかけないように、ちゃんと收拾しなくちゃ……。

そう思いを決めるのでした。

く????????

「許さぬ……。儂の娘が儂の許可も得ずに槍を捧げるなど」

「そう。あつてはならないことですね。ガイア・ケルブルグ」

「娘は親の……父親のいうことを聞くべきなのだ。それなのにアリアケなどという似非賢者に騙されるとは。なんと愚かな……」

「やはり娘は、父の手元で育てるべきだったのでは？」

「その通りじゃ。不埒で下賤なアリアケから、愚かな娘を取り返し、再教育をせねばならぬ。儂だけにラツカライの人生を決める権利があるのだから」

「ええ、その通りです。ではどうされますか？」

「力が……。力が要だ。全てを思いのままにする力が……」

「分かりました。ガイア・ケルブルグ。娘を思う美しい父の真心を見た思いです。ではあなたに、4つの権能を与えましょう。長大な寿命、自己再生、破壊力、空の支配」

「ああ、ありがとうございます。?????様」

## 89・ラッカライ愛を叫ぶ（後書き）

ありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「ラッカライは今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

90・観光とドラゴン(前書き)

2021・4・19修正  
2021・4・9修正

## 90・観光とドラゴン

### 90・ドラゴン観光

（アリアケ視点）

俺とアリシア、フェンリルは三人で聖都「セプテノ」の街へと繰り出していた。

アリシアはさすが大聖女というだけあって、地理に詳しく色々な場所に連れて行ってくれる。

歴史のある大聖堂や聖人が奇跡をおこなった遺跡など、珍しい場所をたくさん見せてくれた。

だが、一番目立つのはやはり聖都の中心にそびえたつ教会本部棟であつたりする。

なぜか煙突のように細長いフォルムは、聖都のどこにいても目に入つた。

（どうして、あんな建物にしたんだろうな？）

普通、教会と言つのはある程度建物の形が決まっている。

だが、ブリギッテ教の総本山は見たことのない異形といって良い形の建物なのだった。

ところで、フォルトゥナの件やゲシュペント・ドラゴンの襲来などの事件がある中でのおんびりしたものと言われそうな気もするが、俺にとっては世界の危機が降りかかることや、実際に世界を救うことは日常茶飯事なので、別段気にならない。

むしろ、いちいち気にするようでは俺の様な役割を果たすことは出来ないだろう。

勇者ビビアにも早く俺の位置の百分の一で良いので、追いついて欲しいと期待している。

さて、そんな感じで三人で楽しく聖都観光にいそしんでいたわけだが、少し疲れたので屋外にある酒場に立ち寄ることにした。

ブリギッテ教は飲酒をタブーにしていない。

というか、むしろブリギッテ神は酒の神でもあったりする。

なので、そこら中にオープンテラスの酒場があるのだ。

しかし、

「ぬー!? 貴様はアリアケ・ミハマか!?!」

「? ああ、シャーロット王じゃないか」

そう、だる聖都を焼き尽くそうとした絶世の美女が、なんと一人で、さか酒



樽を何個も転がし、飲んだくれていたのである。

往来の人間たちも、彼女がシャーロット王であることは理解しているようで、慌てて逃げ出すか、あるいは酒場の片隅で縮こまっている様子だ。

「ここで会ったが百年目よ！ 大賢者アリアケよ！ ここで勝負するのだ」

ガオオオンとシャーロットはほえた。実際に口から炎が出ている。

なるほど、これはコレットの母親だ。

何だか仕草がそっくりだあ。

「ちょっとちょっと、アリアケさん何をのんびりしてるんですか！  
相手はゲシユペント・ドラゴンの王様なんですよ！」

「ああ、すまんすまん」

マイペース過ぎるのも悪い癖だな。

そんな風にやはりのんびりと反省しつつ、

「勝負と言っても、正式な試合はまだ先だったはずだが？」

「なに、別にそついう戦いばかりが勝負ではあるまい」

シャーロット王はニヤッと笑うと、

「酒の飲み比べよ！ そなたも男ならば、まさか逃げはすまいなあ！」

とんでもないことを言い出した。

見ての通り、彼女の周囲にはすでに酒樽が幾つも転がっている。

「おいおい、シャーロット王とやら、主様がいかに超人とはいえ、さすがにそれは無理が過ぎるのではないかえ？ ドラゴンに酒で勝てなどとはのう……」

フェンリルが眉根を寄せてそういう。

その言葉に、アリシアは何とも言えない憐憫れんびんの視線をシャーロットに向けて、

「やれやれですねえ」

とだけ言う。

フェンリルはそのアリシアの微妙なリアクションに小首をかしげる。

「ふはははははは！ では戦わずして逃げるといのか、人の救世主よ！ 大賢者よ！ しょせんはコレットを娶よめる器ではないのう！」  
やれやれ。

俺は呵々かたししょう大笑する絶賛酔っ払い中のシャーロット王に嘆息しながら、

「王よ。王からの誘いを断るなど無礼なことは出来ません。正直得えて

手ではなく、苦手と言って差し支えない若輩ではありますが、ご相伴にあずかせていただきませす」

俺はそう言って彼女の対面へと腰をおろしたのである。

そんな俺の態度に一瞬呆気にとられるシャーロット王と、

「主様！ こんな酒樽を幾つも空にする化物と飲み比べなどしては、ただではすまぬぞえ！？」

「おいおい、アリアケ様がシャーロット王と飲み比べをするみてえだぞ……」

「ああ、って言っても、王様に言われたから仕方なくって感じた」

「だな、酔いつぶされて終わりだろう。苦手って自分で言ってるからな」

そんな声が聞こえてきた。

まったくその通り。俺は酒が苦手なので、余り飲みたくないのだが……。

と、そんな風に思っただけで内心ため息をついていると、アリスアが隣に来て、

「ほどほどにしておいてくださいよ、アリアケさん」

そう言って俺の荷物を預かってくれた。

「ああ、ありがとう。君にはいつも助けられるな」

「……そ、そんなことありませんよ」

そう呟いてから離れた。

「わーっはっはっはっは！ 王の酒宴に招かれて断らぬ度量だけは認めてやろう。ふははははは！ もし俺に飲み勝てば、我が財宝を何でもくれてやろう！ ぬわっはっはっはー」

「お手柔らかに」

キン！

杯を鳴らし、お互いに杯に酒を注ぐと、まずは一口、ぐいっと飲み干したのであった。

「なはははははは！ いい飲みっぷりではないか！ 人間！ まだ行けるのであるうな！」

「ええ」

俺は頷きつつ、

「もちろんですよ」

そう言って、久しぶりの酒の味を喉の奥で味わったのである。

（3時間後）

「ちよ、ちよっと待て、人間よ！ お前……お前……」

「どござれましたか、王よ」

ざわざわ……。

周囲は騒がしい。

最初遠巻きにしかいなかった酒場の者たちや往来の人間たちは、今やシャーロット王と俺の飲み比べのテーブルの周りを囲んで、ずっとはやし立てているからだ。

いや、俺たちの飲み比べが始まってしばらくすると、どんどん人が増えてきたように思う。

「シャーロット王！ 勝ってくださいえ！ あんたに全財産かけてんだ！」

「お、俺もだ！ ああ、シャーロット王！」

「馬鹿が！ アリアケ様を信じなかったむくいだ！」

「そつだそつだ！ いやあ、それにしてもこんな名勝負が見られるとはなあ！」

周囲は沸き立つ。

無理もないだろう。

なぜなら、

「大賢者アリアケよ！ お前は化物か！？ 人の身でこの俺よりも酒をたしなむというのかあ！？」

本気で驚き、目をまん丸にしている美しい王が、さすがに酔っ払いはじめているらしく、真っ赤な顔でどなった。

一方、

「まだまだ、始まったところではないですか、シャーロット王。一番きついのを、せいぜい酒樽10個ほど空けただけですよ？」

「お前の体のどこに入ったというのだ！？ というか、苦手と断っていたらどうがっ！」

ダンッ！ と。

理不尽だとばかりに、王が机をたたいた。

あ、確かに言ったな。ただ、

「少し誤解があったようですね、失礼しました」

俺はそう言って素直に頭を下げる。

「1」、誤解……？」

はい、と俺は頷きつつ、

「お酒を飲むとどうしてもトイレが近くなる。それがどうにも苦手  
でしてね。落ち着いて話が出来ないでしょう」

「なっ……、なっ……」

シャーロット王が威厳も何もない、可愛らしい顔で口をあんぐりと  
空けた。

こうやって幼い表情をすると、本当にコレットと似たかわいらしさ  
がある。

ただ。俺は少し時間を気にしつつ、

「シャーロット王よ、すみません。まだまだお付き合いするべきな  
のでしょうか、実はまだ幾つか行くところがあるのです。今日は『  
引き分け』ということではいかがでしょうか？」

俺はそう提案する。

実際、俺たちは観光の途中で、最終的には教会本部にも行かねばな  
らないからだ。

だが、

「引き分けは認めぬ」

シャーロット王はプイッと首を振った。

うーん、困ったな。

やはりドラゴンの王ともなれば、引き分けなどは認められないらしい、  
……、

「お前の……。いや、アリアケよ、そなたの勝ちである」

「……へ？」

今度は俺が呆気にとられる。

「まだまだ勝負はついていないと思いますが……」

その言葉に、シャーロット王は獐猛じやうじやうに笑いつつ、

「わははは！ どこまでも紳士な男だな、そなたは！ そこもまた良い！ なるほどさすが我が娘は男を見る目が……って、いや、うん、まだダメだぞ。全然、俺はそなたを認めておらぬのじゃからな！」

彼女は一人で何やら笑ったり不機嫌になった後、手元の一杯を一気に飲み干すと。

「大儀であったぞ、アリアケよ！ そなたの勝利を俺は忘れん！ 見事な竜殺しであった！ わはははは！」

彼女はそういうと、本当に上機嫌といった風に酒場を出て行ったのである。



周囲には空になった酒樽が数十と……。

「お、おい、これって……」

「あ、ああ。すげえ宝石だな……。拳くらいあるぞ……。それが？」

「どうやら酒代と、あとは、」

「アリアケさんへのご褒美でしょうかね？」

「俺は楽しく飲んでいただけなのだがなあ」

別に宝石なんぞいらんのだが。

そんな俺とアリスアののほほんとした会話に、

「アリスアは私の知らぬ主様をよく知っておるようよなあ」

そう言っつて、フェンリルが少し頬を膨らせていたのであった。

「最初から主様が勝つと知っておったわけよな？」

「まあ、長い付き合いですので」

そこはかとなく、誇らしげにアリスアが胸を張った。

さて、

「店主、宝石の一つはシャールロット王からの詫び代だろう。騒がせ

てすまなかつたとな。せいぜい、集まったこいつらに振る舞ってやるといい」

「へ、へい！　かしこまりました、アリアケの旦那様！」

「さ、さすがアリアケ様だ！」「賢者様のおごりだぞ！」「ああ、シャーロット王に勝ったアリアケ様のおかげで今日はただ酒飲み放題だ」

「おいおい」

俺のおごりでもないし。

別に勝つてもないのだがな。

とはいえ、そんなことをわざわざ言つのも野暮というものか。

「ふっ」

大騒ぎになってしまった聖都で一番大きな往来から、俺たちは気づかれないうちにこっそりと退散したのであった。

90・観光とドラゴン（後書き）

いつもお読み頂きありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは今後どうなるのっ………!!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 91・アリシアの友達

### 91・アリシアの友達

さて、俺たちは教会本部一階へとやって来た。

教会本部は非常に大きく、一階は<sup>神官</sup>プリーストたちを育成するための教室がたくさんある、神官学校のような様相を呈している。

そのため、かなり若いプリーストたちの姿がみられた。俺たちと同じくらいの年齢の者たちも多い。

まだコレットたちはやってきていない。

しばらく待っていていようかと思っていた時である。

「わゝ、アリシアちゃんじゃない！ 久しぶりだねー」

「なに？ アリシア、帰ってきてたのか？」

「アリシアは序列第3位のエリートなんだから、本部にいるのは当然……。ぶつぶつ」

突然、声をかけてくる女性たちがいた。

「あつ、皆さん、久しぶりですね〜！」

アリシアが笑顔で応じた。

「アリシア、彼女たちは？」

「あ、はい。アリアケさん。彼女たちはですね〜、私の神官学校時代の友達なんですけど、名前はサキ、ルルカ、ベヨルタさんです」

アリシアがそう紹介しようとする、

「あ〜！ っていうか、あなたが大聖女とドラゴンちゃん、両方と結婚するっていう鬼畜な大賢者さんなんだね〜！」

「ほう、あなたがそうか。いや、ブリギッテ教はたくさんの恋を応援するぶっ飛んだ教義だが、大聖女とドラゴンの末姫と一緒に、とは。肝が座ったお人だな」

「それにしても、大聖女と言われるアリシアだけで満足できないなんて、コレットとかいう人はそれだけ美人さんだったり？ ぶつぶつ……」

ふーむ、どうやら俺のこともよく知られているようだ。

そして友人として、アリシア以外の女性と結婚することに、少しわだかまりを感じているらしい。

ブリギッテ教は重婚を認める教義だが、それをどう感じるかはもちろん人それぞれだからだからな。

しかし、

「んん？ あれ、っていうか。アリアケさんの隣にいる、その長身で美人で髪が綺麗なお姉さんがもしかして、コレットさんなんですか？」

「「「へ？」「」」

俺たち三人は首をかしげる。

彼女たちが言ったのは、フェンリルのことだったからだ。

どうやら、コレットの名前はみんな知っていても、顔までは知らなかったらしい。

「なるほど、美人とは聞いていたが。……ふーむこれほどは。アリシアのようなフワフワした可愛いらしさとは真逆の超絶美人……。クールビューティー……」

「そういうことなのね……。アリシアだけで不満だなんて、理解できなかつたけど……。コレットさんがこんなに美女では……」

彼女たちは、フェンリルのことを勝手にコレットだと思い込んで、口々に納得していく。

フェンリルも俺も、いきなり勘違いされて訂正する暇いとまもない。

そして、

「うっ、うっ！ アリシアったら不憫！ こんな美女が相手じゃ、アリシアみたいな天然フワフワ美少女じゃあ太刀打ちできないよね！」

サキと言われた少女が、憐憫れんびんの声を上げた。

「どっという意味ですか!？」

「アリシアは興奮すると冷静さを失う時があるから、ちゃんとコレツトさんの意見を聞いて、円満な家庭を作るんだぞ？」

「なに目線のアドバイスなんですか!？」

「早く子供を作ったほうがいい……。そうすれば捨てられる心配は格段に減る。と、うちのママが言ってた」

「こ、子供は欲しいですが……。そんな心配されるいわれはありません！ それにアリアケさんは私を捨てたりしないですから！ ねっ!？」

アリシアが律儀にツッコミを入れていた。

ついでに俺に念押ししてきたので、思わずうなずいてしまう。

「男はみんな最初そう言う。とうちのママが言ってた。ぶつぶつ

ベヨルタと言われた少女の家に何があったんだ……。

とはいえ。



なるほど、神官学校時代の関係性が手に取るように分かった。

アリシアは大聖女などと言われて世間では敬われる存在のため、普段は敬虔な信徒、慎ましやかな聖女を演じる必要があるが、どうやら友人たちの間では楽しくやっていらしたらしい。

そういう場所がちゃんとあったことが俺には嬉しかった。

村を離れる時、すごく寂しがっていたからな。

と、

「あ、色々話してる間に、そろそろ次の仕事の時間だよ？」

「ふ、そうか。時間の流れは早いな。じゃあな、アリシア。また積もる話をしよう」

「夫婦円満が一番。コレットさん、うちのアリシアをお願い……」

「ふーむ、まあ良からう。この我がつけたまろうぞ」

誤解を解くのも面倒になったのか、フェンリルは鷹揚に頷いて答えた。

それを聞いて安心したのか、アリシアの友人たちは去っていく。

やれやれ、なかなか個性的なメンバーだったな。しかし、

「いい友人たちじゃないか、アリシア。どうやら全員、君の心配を  
して来てくれたみたいだ」

「そうでしょうか???? 何だか体よく楽しまれていたような気がしますが!？」

「我をアリシアと比べて心配になるのも無理もない。どうであろう、主様。我とも結婚するかえ? あやつらにもアリシアの面倒をみるように言われたゆえ」

「調子にのらないでください!!」

アリシアが元気よくツツコミを入れたところで、

「あら、もう来ていたのね、アリアケ君たち」

そう言ってまた声がかかる。

長い金髪とどこかおっとりとした声を持つ女性。

この教会の最上位に位置する女性。

「そんなところにいないで、執務室に行きましょう。紅茶とおいしいクッキーを出しますわ」

大教皇リズレットが現れたのであった。

まだコレットたちが来るまで時間があるが、まあいいだろう。

俺たちは一足先に、彼女の執務室。

教会の中枢へと足を踏み入れたのである。

## 91・アリシアの友達（後書き）

いつもお読み頂きありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリシアは今後どうなるのっ………!!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

92・教会侵入編　～その1～

92・教会侵入編　～その1～

俺たちは大教皇リズレット・アルカノンの執務室へと招かれた。

ソファに腰かけて、出された紅茶や菓子を口に運ぶ。

コレットたちを待っていていようかと思ったが、

「とりあえず報告だけ先に聞いてしまっても良いかしら？　あなたが会ったフォルトゥナとやらについて」

とリズレットが言った。

話し合いならともかく、報告は先にしてしまった方が効率が良い。

というわけで、さっさと俺たちが出会ったあの『白き少女』について報告する。

「なるほど、私が貴方たちを呼んだのをどうやってか知り、妨害に

出た訳ね。幸い、アリアケ君が規格外だったおかげで事なきを得たわけね」

「奴は俺のことを『切り札』と言っていた。あなたが提案したアリスアとの婚姻とも何か関係があるんだらう？」

「まあ、そんなところね！」

彼女は紅茶をズビーツと勢いよく飲むと、

「元々、この聖都には不思議な噂があったわけ。白い美しい少女が現れると、それまで普通に過ごしていた人が、突如として殺人鬼になってしまったりだとか、一夜にして人格が変わってしまう、みたいだね」

「出来の悪いホラーのようだが？」

「もちろん！ 根も葉もない噂だったわけ！ でも……」

彼女は長い髪をくりくりといじりながら、

「ここ最近になってその白い少女を見たって人が頻発しはじめたのよ。で、案の定、変な事件も多発しはじめた。根も葉もない噂だと思っていたけど、これは只事じゃないなと思ったわけ！」

「それが俺をアリスアと結婚させてまで聖都へ呼び出そうとした理由なのか？」

「そうそう。あとはアリスアの報告でアリアケ君が超有能らしいこととは分かってたから！ 私は有能な人材に目がないのね！」

ふーん、と俺は思った。

嘘は言っていないようだ。

（ただ、すべてを言っていないだけだな）

そう直感的に見抜いた。

さすが、国教をつかさどる大教皇だけある。嘘についてはまずい相手を間違わない。

やれやれ、骨の折れることだ。やはり、偽装結婚をして侵入したことは正解だった。

「あとはあのドラゴンのことだが、地下封印遺物アレスと言っていた。あれはなんのことなんだ？」

「この教会の地下には強力なモンスターが封印されていて、かつてドラゴンたちとの共闘によって封印しているわけ。その封印が最近少し弱まってきているのよ」

「で、それも協力すればいいわけか？」

「え？ あー。シャーロット王たちの手前、あんな感じで啖呵切つたけど、そこはこのリズレット・アルカノンが命に代えても解決するから安心して頂戴！ なーんていうと大げさだわ！ 大船にのつたつもりでいてねん」

やはり嘘は言っていない様だな。

俺はこっさり嘆息しつつ、持っていたティーカップをテーブルに置く、

「すまないがトイレを借りたい。どっちに行けばいい？」

「あら、それなら部屋を出て左に出てもらえればすぐですわ」

「分かった」

俺はそう言っけてリズレットの執務室を出た。

さて、

「スキル 構造解析 開始」

俺はスキルを使う。

教会本部は様々な機能が集合した建物だ。

1階は神官学校で、2階から上が行政施設になっている。

だが、

「不思議なことに地下につながる階段がなかった」

これほど機能を詰め込んでいるのに、なぜか地下フロアが作られていないのである。

その理由は、



「ま、そうだよな」

俺はスキルを終了させて、右側の通路を直進しだした。

一見したところ、壁があるだけで、行き止まりのようには見えな  
い。

しかし。

『ブオン』

俺が手をかざすと、その向こうに更に空間があることが分かった。  
強力な結界で空間がねじまげられているのだ。

そして、その先には、

「なるほど、垂直移動床か」

俺はためらいなく、その床の上に乗る。

スキル 構造解析 によれば、地下へと通じるルートは、この招か  
れた者以外は入れない大教皇の執務室の前を通らないといけない上  
に、このリフトを使わなければたどり着けないようになっていた。

「地下封印遺物か」

ドラゴンシャローレットHEはそう言っていた。

そして、大教皇リズレット・アルカノンは自分が何とかすると言う。

要するに、この世界をどうにかできる二人が、自ら動く必要を直接的にしろ、間接的にしろ表明しているのだ。

「今回の事件の核は地下アビスにあるようだな、やれやれ」

俺はもう一度ため息をつきながら、ゆっくりと下降を開始する。

世界の核心に触れるために。

## 92・教会侵入編 　↳その1↳（後書き）

いつもお読み頂きありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！　買ってもらえたらもつと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

https://magazine.jp.square-enix.com/squxnovel/series/detail/yussyaparty/

- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 93・教会侵入編　くその2く

#### 93・教会侵入編　くその2く

「ほう。これはまた。俺レベルでなければ浴びるだけで正気を失わせるほどの呪詛だな……」

垂直移動床リフトでかなりの時間下降した俺は、地下に広がる広大な空間にいた。

そこは又メ又メとした紫色の外壁でおおわれた空間であり、まるで何かの生き物の中のように思わせる。

「ここに『強力なモンスター』とやらが封印されているとあの女は言っていたが……」  
リスレット

果たして本当だろうか。

一般人……。いや、相当高位な冒険者であっても、この空間にいて正気を保つことは出来まい。

そしてモンスターすらも、この呪詛の中では生きていけないのではないか？

生きていけるとすれば、俺や、俺のレベルに達した、本当の「く」部の人間にとっただけだろう。

「どっちにしても、こんな気色の悪いところにいたいわけもないがな。呪い無効（強）」

最上位のプリーストでなければ使用できないスキルをあっさりと行使しつつ、俺は先へと進む。

「なぜ、ブリギッテ教本部の地下にこんなものがあるのか」

俺は呪詛のより強い方向へと進んでいく。

強力な呪いはまるで針のように俺の体を蝕もうとするが、もちろん、俺にはきかない。

だが。

カラン。

足元には無数の白い何かが散らばっていた。

（かろうじてボロボロになりながら残っている布切れ……。青と白の混じった聖衣……。ブリギッテ教徒のものに見えるな）

俺は少し考える。

「大教皇が言っていたことが嘘でないなら、かつてドラゴンと一緒にモンスターと戦った時のプリーストか？」

俺は呟きながら更に足を進める。

大きな扉の前に出た。

血管のようなものが浮かび上がっており、余りにも巨大なミイラが左右の扉両方にかたどられている。

ミイラはそれぞれ長大な剣を持ち、扉の前でクロスさせていた。

この先が禁足地<sup>タブー</sup>であることを明示しているのだ。

だが、

「なら、俺が行くしかないな」

俺は嘆息しながら、あっさりとその扉へと手をかけようとする。

もしも、この扉がこれほど嚴重なものでなければ、わざわざ俺が出向く必要は無かったろう。

だが、この扉は明らかに資格のある者にしか通れない。

ならば、神にも等しき俺がゆくしかあるまい。

「ふっ、運が悪かったな」

扉をあまりにも嚴重にしてしまったがゆえに、俺の様な人の頂点に位置するものが来訪してしまうのだから。

その時である。

『通れぬぞ、この扉は。人如きに、アビスの心臓には、触れられぬ！ おとなしく復活を待つが良い！』

突如として、扉のミイラが動き出し、こちらに刀を振るってきたのである。

だが、俺は微笑みながら、

「そうではなくてはな」

そう言っつて新たなスキル構成を編んだのである。

「スキル スピードアップ（超）」

俺は高速化のスキルを使用する。

『無駄だ！ 脆弱な人間よ！ その程度の速さでは我々の剣からは逃れられぬ！』

ブオン！

「おっと」

プツン……。



俺はミイラたちの剣をたくみに躲す。

その瞬間に、腰にひもで止めていた袋が切られて飛んで行った。

中から小さな黒い粒がたくさん散らばる。

『惜しかった。もうちょっとで我らの剣が当たって死ぬところであったのだが！』

「……スキル スピードアップ（超）」

『まだ懲りぬか！ ははははは！ 愚かな人間め！』

彼らは哄笑を上げながら剣を振り回す。

『躲し続けても埒が明かぬぞ人間よ！ そろそろ諦めてはどうだ！』

勝利を確信した彼らは嘲笑する。

一方の俺は、

「やれやれ」

彼らの剣をなんとか躲しながら嘆息する。

「やはり自分にスピードアップを使用していないと躲すのも少し大変だな」

そう言って肩をすくめる。

『なに?』

ミイラは怪訝な声を上げる。

だが、それに対する答えを口にする必要はないだろう。

なぜなら、

『ざああああああああああああああああああああああ』

一斉に美しい紫色が、辺り一帯に広がり始めたからだ。

『な、なんだこれは……。これは……。花?』

ミイラたちは攻撃の手を思わず止めて啞然とする。

「さあ、花が咲いたぞ、アビスの門番よ」

一方の俺はそう言いながら美しい花々が咲いていく様子を見て微笑んだ。

なぜなら、これは、

「呪いを吸い込み成長する黒花だ」  
ブラックリレイ

『なつ!? 我らの力が!? この呪いの空間が浄化されていくだと!?』

その花は呪いを吸い込み、美しい花を咲かせる。ただそれだけの存

在だ。

一瞬のうちにこの空間の呪いを吸収し、ミイラたちの力の根源を奪っていく。

『だ、だがいつの間に！？ 花なんぞ咲かせている様子は……』

「何を言っている。さっき自分たちで種をまいたろう？」

俺はニヤリと笑った。

『なに！？ あれは作戦だったというのか！？ 俺たちに追い詰められていたというのも演技だというのか！？』

「スキル スピードアップ で、花の成長速度をアップさせてもいただろう？ 全部俺の手の平の上だったというわけだ」

ミイラは再度驚愕の声を上げた。

だが、そんな敵の様子を見ても、俺が伝えられる言葉は一つだけだ。

「ふ……。何を驚いているんだ、門番ども」

笑いながら、

「お前たちなど俺の敵ではないのは当たり前のことだ。そもそも雑魚の出る幕ではない。さあ、さっさと門を開けると良い。これは命令だ」

そう命じたのである。

93・教会侵入編 くその2く（後書き）

いつもお読み頂きありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

94・教会侵入編 ㄱその3ㄱ

94・教会侵入編 ㄱその3ㄱ

「お前たちなど俺の敵ではないのは当たり前のことだ。そもそも雑魚の出る幕ではない。さあ、さっさと門を開けると良い。これは命令だ」

俺は自分の勝利を信じ、そう命じた……のだが。

『ぐわあああああああああああああああああああああああ』

断末魔の悲鳴を上げながら、ミイラが更に干からびてゆき、ついには塵ちりになってしまった。

「あれ？」

えーっと……。

「倒してしまうつもりではなかったんだがな……」

思ったよりも弱くて、またやり過ぎてしまったようだ。

(優れ過ぎているというのも考え物だな)

俺は嘆息する。

地面に咲いた美しい花々を眺める。

ブラッククレイ  
黒花

呪いを吸い込み浄化する聖なる花。

アンデッドや呪われた存在に切り札となるものだ。

だが、その稀有な特性と、何よりほとんど世界に存在しないことから、『ウルトラ・レア級』のアイテムと言われている。

「俺でなければこれほど多くの黒花ブラッククレイを所持することは不可能だろう……と言いたいところだが」

俺は鼻をかく。

いや、正直嘆息した。

「せっかく集めたというのに」

別にここで使うつもりではなかったのだ。

この花たちは俺が超個人的な思いから偶々たまたま持っていたに過ぎない。

あのバシュータにも少し手伝ってもらって、やっとだったのだが……。

「ま、もう遅いか。それに持っていたとしても、本当に有効活用出

来ていたか分からんしな」

そう自分を納得させるように呟いた時である。

「あら、ではアリアケ君は、本当は何に使う予定だったのかしら？」

「なんだ、やはり俺が侵入したことに気づいていたのか」

その女性は、この異常な空間にあつて、何ら声色こゝろを変えずに、微笑みながらやって来た。

「大教皇リズレット・アルカノン？」

俺の言葉に、

「もちろんよ。大賢者アリアケ・ミハマ君。そしてようこそ、教会の心臓部へ。いいえ」

リズレットはやはり微笑みながら、

「教会の始まりの場所へようこそ！」

彼女のその言葉と同時に、ミイラの消失した扉が独りでに開き出した。



そして、その奥には、

「これは……」

さすがの俺もその光景を一瞬では理解できなかった。

いや、脳が拒否したというべきなのかもしれない。

なぜなら、

「女性……ブリギッテ教徒か？」

扉の向こうには広大な海のような空間と、そこに浮かぶ魔法陣があった。そして、その魔方陣の中央には一人の女性が祈りを捧げるようなポーズでかしずいている。

美しい金髪と青を基調とした聖衣。まるでどこかで見たとような……。

「ブリギッテ教徒ではないわ。でも惜しいわね」

「どういうことだ？」

俺の言葉に、彼女は頷いて、

「彼女がブリギッテだからよ」

なに？

この俺をして、一瞬理解が追いつかない。

「彼女こそがシスター・ブリギッテ。ブリギッテ教の始祖にして、張本人。この地獄につながってしまったアビスを300年間封印してきた最初の大聖女だからよ」

そう言ったのだった。

「あれが、ブリギッテ本人だということのか？」

にわかには信じられない。

だが、

「300年。あの状態のままこの地で封印しつづけているというのか。人の天敵であるアレを」

「さすが察しがいいわ。そういうことよ」

彼女は頷き、

「300年前。この地底に地獄との門が開いてしまった。その原因は星辰せいしんが不吉な十字を刻んだからとも、ソイツらの気まぐれだとも言われている。ただ、確実に言えるのは、とにかくソイツらは現れた。そして、その邪悪な存在は種族を問わずあらゆる生き物に害をなした。当時……」

彼女はスラスラと続ける。

「人類に一人の天才少女がいた。結界を操る術に長けたその少女は、同時に心優しい存在でもあった。異種族とも……それがドラゴンであろうとも心を通わせることができた」

「それは凄いな。普通ドラゴンは気性が荒い」

「何でも『殴り愛』とかいう方法で、どんな種族でも……。特に気性の荒い種族ほど仲良くなれたそうよ」

「……………」

それがブリギッテ教が筋肉を信奉する理由だったりしないだろうか……。

「当ても今も最強と謳われたゲシュペント・ドラゴンは最初アビスごと破壊することを提案した。でも聖女はそれを拒んだ。どうして拒んだのかは不明。ただ、結果として彼女は自分が大結界を張り続け、アイツらの侵入を防ぐ盾の役割を果たすことを望んだ。盟友だったドラゴンは怒ったらしいけど、最終的には盟約を結んで、山へと帰っていった。ただ、いつか必ず助けに戻ると言ったとも伝わっている」

「そうか……………」

シャーロット王はもしかすると、ブリギッテを助けたかったのかも  
しれない。

自分を犠牲にしようとして怒ってくれる存在を、友達というのだから。

「ところで俺からも一つ聞いてもいいか、リズレット」

「いいわよ」

瘴気元であるアビスに、俺たちだけの声が響く。

「この教会はアビスの上に立っている。しかも非常に高くそびえ立っている。その理由はなんだ？」

「観光していたと聞いてたけど、それを確認していたわけか」

さすが、と呟いてから、

「大聖女ブリギッテですら、瘴気が漏れ出すことまでは防げなかった。ここに教会を建てたのは、大聖女を守るための要塞の役割を持たせるため。ただしもう一つ理由がある。それはこの瘴気を薄めてから外部へと排出するため」

「そういうことか。煙突のようだから、そんな理由かとは思っていた」

ニコリとリズレットは微笑む。

「この腐った地獄の空気をそのまま垂れ流すと、どうなるか分かる？ アリアケ君」

「さてな。だが推測するだけならいくらでも推測は出来る。そうだな、例えばフォルトウナのような『現象』が発生するのではないか？」

「その通りよ」

面白くないわね、とぼやく。

「アビスから出てこようとしているコイツらは、生き物ではなくて『現象』のようなもの。『不幸』という現象。『欲望』という現象。『加害』という現象。人を蝕んで不吉な結末をもたらす災害の名前。精神が弱い者、満たされない者ほど、ソレに魅入られやすい」

勇者ビビア・ハルノア

拳闘士デリア・マフィー

魔法使いプララ・リフレム

ポーター、バシュータ・シトロ

「やれやれ」

俺はため息をつく。

話に納得がいったから、ではない。

更に憂鬱な質問をもう一つせねばならないからだ。

「なあ、大教皇リズレット。ブリギッテの話を聞いていると、俺は一人の幼馴染のことを思い出すんだが……」

大聖女と呼ばれ、有史以来の最上位の聖女と称えられ、大結界と蘇生魔術を使いこなす彼女。

「最近フォルトウナのような現象が聖都で頻発しているとあなたは言っていたな」

「言ったわね」

「それはブリギッテの結界が弱まっているからだな？」

「……………」

彼女は答えない。

「お前は魔力の弱まりつつあるブリギッテの代わりに、アリシアを生贄にするつもりなのか？」

そう。

「アビスから悪魔が出ない鍵の役目を彼女にさせるつもりなのか？  
それを俺に手伝えというのか？」

「そのために俺をここに連れて来たのか？」

スッ…………。

「答える、序列第2位リズレット・アルカノン！」

俺は自然と杖を手にしながら、大教皇リズレットと対峙したのだった。

そうこの教会の序列1位は永らく空位であった。

その理由はずっと秘密とされてきたが…………。

しかし、それがなぜなのか。

今ならば自明のことだ。

なぜなら、始祖ブリギッテその人が、生きているのだから。

序列一位はブリギッテでしかありえない。

そんな伝説の息づく場所で、まさに俺たちは対峙するのだった。

#### 94・教会侵入編 くその3く（後書き）

いつもお読み頂きありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもつと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - -  
- - -  
- - -  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは今後どうなるのっ………!!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。



面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



る。

街の中で使えば数百メートルにわたって、クレーターが出来るような衝撃だ。

しかし、

「スキル 神聖魔法無効化」

すぐにスキルを使用して、その攻撃を無効化した。

やれやれ。

「お前は本当に人間か……？」

とっさに神聖魔法の無効化スキルを使用した俺は、凄まじい風量に鬱陶しそうに髪を払うだけだ。

それにしても、

「周囲の風景も一切変形していないな」

「ここはそういう神のプログラムにより設計された、異界への門ですから。そう簡単に壊れたりはしません」

それよりも、とリズレットはつづけた。

「あなたこそ、どうなのかしら？ まさか神聖魔法の最高位魔法を無傷で切り抜けるなんて」

「ならば、もつと驚いた顔をしてはどうだ？ その涼しい顔をやめてな」

「確かにそうですね。これくらいであなたが倒せる訳がないことを私はどこかで理解している」

彼女は微笑むと、

「次はあなたから仕掛けてきてもよろしくってよ？」

「ふ、ではお言葉に甘えましょう」

俺自身は基本的に攻撃手段を持たない。

だから、一人だと分が悪いのだが……。

「まあ、人類の頂点くらいなら、それなりにやれるだろうさ」

そう呟きながら、スキルを構成する。

「スキル 超加速」

「スキル 筋力強化」

「スキル 行動力10倍」

「スキル 自己再生」

「スキル 杖攻撃強化（大）」

「5重スキルですか。それで何をするつもりでしょうか？」

祭壇上の教主は俺を値踏みするように言う。

「案外、こつという馬鹿で単純な攻撃が効果的なものなのさ」

「！？まさか！？」

「がん！！」

「ヒュン！」

彼女の目視出来ない速度で、彼女の頬の横を何かを通り過ぎた。

「石礫いしつぶて！？まさかそんな下等な方法で」

「普通はな。だが、ここの石はお前の最高位神聖魔法でも消滅しない、世界で最も固い鉱石なのだろう？　なら、それを世界で最も優れた俺がこの杖で打ち出せば、世界で最も威力のある弾丸に変化する。そうは思わんか？」

「！？くつ！  
エンジェル・カーテン  
大結界！」

彼女はとっさに大結界で防御態勢をとった。

アリシアの作る大結界と酷似するそれは、ありとあらゆる攻撃を防ぐ鉄壁の神聖魔法の一つだ。

「防いでみる！　リズレットー！」

「撃つてきなさいアリアケ君！ ああ、楽しいですわ！ まさかとつさにそんな戦術を思いつくなんて！ さすが大賢者！」

「行くぞ！ はあ！！」

バンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバン！

ビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュン！

ガガイイイイイイイイイインンンンンンンンン！！！！！！！！！！！！！！

五重スキルによって、俺が打ち出したただの石は、人類史上で最も大きな威力と速度で、大教皇リズレット・アルカノンを襲う。

その数は数千！

俺の超加速によって、次々と打ち出される弾丸に、リズレットの大結界は削られて行く。

しかし、底なしの魔力でその結界をどんどんと修復していく。

その上、

「墮<sup>アルス・マグナ</sup>天使の浄化弓！」

大結界などという神聖魔法を使いながら、別の神聖魔法を行使する。

無数の光の槍が追尾機能<sup>ホーミング</sup>をもって俺を襲う。

「スキル 武器解析<sup>ヲブラ</sup>」

「スキル 武器模倣<sup>フェイク</sup> ……。来い！ 偽ブリューナク！」

俺は片手に持った杖で相変わらず、弾丸をリズレットへと打ち出し続けながら、俺を自動追尾してくる光の槍をブリューナクの持つ完全防御の特性を駆使して防ぎ切る。

両者ともに攻防一体だ。

やれやれ……。

俺は呆れつつ、

「数万発を打ち出したが、よく防ぎきるものだ」

「あなたがそれを言いますか？ これでは何日たっても決着がつか  
ません」

「人の頂点の戦いだからな。それで、まだ続けるのか？ 俺は構わ  
ないが……」

石などそこらへんに無数にある。攻撃を続けることは可能だ。

しかし、俺の言葉に彼女はふっと笑うと、

「千日手ですわね」

「そうだな、これでは決着がつかんな」

俺はそう言って応じる。しかし、彼女は苦笑すると。

「ああ、もう！ 私のは単なる強がりですよ！ やれやれ、さすが大賢者です。ちょっと勝てるイメージがありません。奥の手が何個あるか知れたものではないし、ちょっと怖いくらいですわ！ あなたはなんとというか……。実に賢者らしい戦いをされる。国教の大皇帝ごときに、人類の守護者であるあなたに勝てるわけがなかったですわね。」

彼女はそう言って、攻撃の手を止めた。

同時に俺も攻撃の手を止める。

「やれやれ。何かを試されていたのか？」

「試す？」

彼女は目をまん丸にすると、

「それは誤解ですよ、アリアケ君。ここにあなたを招いたのは真実を告げるため。百聞は一見にしかずと言うでしよう？」

「これを見せることがか？」

「そうです。そしてあなたは勘違いされていましたが、見て頂けましたか。私だって大結界を……。」

彼女が何かを言いかけた、その時である。

『ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！』

！！！！』



「きゃっ!?!」

「うおっと」

地下にまで届く振動が走った。

倒れそうになったリズレットを、いつものクセで思わず抱きとめてしまう。

「そ、そんなダメですよ! アリアケ君! 未亡人とはいえ、私には娘もいますし!」

「何を言ってるんだ……」

いつもの調子のリズレットに戻っていて、一気に脱力する。

あの祭壇上の大教主というイメージはすでにない。

「話は後だ。建物が揺れるほどの衝撃……。だが、遠いな」

「行きましょう!」

俺たちは急いで踵をかえす。色々確かめたいことはあるが優先順位を間違っわけには行かない。

祈りを捧げ続ける始祖聖女ブリギッテを置いて、俺たちは急いで垂直移動床へと乗り込む。

あの衝撃音……。

あれは、人智を超えた何者かに、この聖都が『襲撃』を受けた音に  
違いないのだから。

## 95・大教皇リズレット・アルカノン（後書き）

いつもお読み頂きありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

-----

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「リズレットは今後どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

96・フォルトゥナ・レギオン VS ブリギッテ教徒・レギオン

96・フォルトゥナ・レギオン VS ブリギッテ教徒・レギオン

「何があつた！」

俺と大教皇リズレットは、聖都を囲む外壁の外へと駆けつけた。

アリシアとフェンリルとも合流している。時間がないので、教会の地下で何を見たのかはまだ話していないが。

俺たちが駆けつけたように、他にもたくさんの聖都の市民たちが集まっていた。

そして、彼らの前には、

「御無沙汰しております。アリアケ様、そして皆さま」

一人の白い少女が、本当になんの害意もないとばかりに照れたように微笑むと、静かに腰を折った。

だが、

「ありゃ、なんだ……。俺たちは何を見てるんだ」

「世界の終わりか？」

「あんな……。無数のゲシュペント・ドラゴンが空に……」

彼女のお辞儀するその後ろには、空を覆いつくすドラゴンたちの群れがあった。

数百に及ぶゲシュペント・ドラゴンたちのレギオン<sup>軍団</sup>は、人にとって絶望の象徴に他ならない。

しかも、

「先頭にいるやつらは、『乗り手を得た』ドラゴンたちか」

数匹のドラゴンの背中には人の姿が見える。

一人は立派な槍を持ち、大層なひげを蓄えた壮年の男。

後は……。あれはビビアたちか。

俺がコレットの乗り手となり、彼女が世界で最も優れた竜になったように、ドラゴンは乗り手を得ることで真の力を得る。

俺ほどの男でなくても、ただでさえ強力なドラゴンたちの力は、さらに大きく跳ね上がっているだろう。

少なくとも、この一つの国……。いや。

「人間の世界を蹂躞できるほどの戦力だな」

「さすがアリアケ様はお察しがいい。そうです。乗り手を得て、本来の力を全て発揮することが出来る状態のゲシュペント・ドラゴンたちのレギオン軍団ですから」

「なるほど……。ん、あれは？」

先頭にいるドラゴンは見覚えがあった。

「フレッド……だったか」

シャーロット王の重鎮だったはずだ。

しかし奴は今、悪魔フォルトゥナの側にいる。

……ドラゴンの寿命は長大だ。

ならば、この侵攻計画は一体何百年前から始まっていたのだろうか？

悪魔……にいつから操……られていたのだろうか？

やれやれ。

「この光景は、少しばかり一般人たちの心臓には悪いかもしれんな」

「ねえ、アリアケ君。あんなのを見て平気な人って、あなた以外いるのかしら？」

隣の大教皇が呆れ顔をした。

しかし、俺は肩をすくめる。

「まあ、少なくとも、5人はいるんじゃないか？」

「へ？」

俺はあっさりとした回答をした。

その時、

「やっぱりここにいたのじゃ！ おお、なんじゃか**いっばい**ドラゴン同胞がおるのじゃ！ 何かの祭りかの！！ かかか！」

「先生、凄い数のドラゴンですね。でも任せてください、この聖槍が何者も先生のことを傷つけさせたりしませんから！」

「勇者パーティーでは体験できなかった、まっとうな戦いがやっと出来るんですね！ 私はそれだけで満足です」

教会本部で合流するはずだった、コレット、ラツカライ、ローレライの3人が、衝撃音を聞きつけて合流する。

「アリアケさんといると退屈しませんねえ。まあ、死んでも死なせませんから、大船にのったつもりでいてくださいな。ブリギツテ教序列3位、アリシア・ルンデベルク参ります」

「我はドラゴンどもに恨みはないのだがのう。ま、相手が悪かったと思うがよいぞえ」

俺の率いる賢者パーティーが、ゲシュペント・ドラゴンたちの軍団レキオンを前に立ちはだかる。



俺をいれてたった6人。

だが、世界で最も強力なパーティーだ。

負けるつもりは一切なかった。

しかし、

「むふ。むふふ。むふふふう、あーっはっはっはっはっはっはあ  
！！」

なぜか突如、隣の大教皇が笑い始めた。

「お母様、とうとう本当にダメになってしまったんですか？」

ローレライが憐れみにまみれた口調で言った。

「違うわよ……っていつか、ローレライちゃん、とうとうって何？  
本当になって何!？」

彼女はひとしきり喚き散らしてから、

「まあ、いいわ！ それよりも、なめてもらっては困るわね、アリ  
アケ君！ この聖都を！ このブリギッテ教徒を！ このっ……」

大教皇は後ろを向いて、市民たち……ブリギッテ教徒たちに呼びか  
ける。

「愛すべき脳筋たちを……！！！！」

彼女の掛け声とともに、

「……勝てば……負けない！」

誰かがポツリとつぶやいた。すると、その言葉を受けて、他の信徒も、

「勝てば、負けない！ 負ければ負けない！ すなわち負けなければ絶対に勝てる！」

「日ごろのダンベルを思い出せ！ ダンベルは決して裏切らない！」

「問題の99%は筋肉が解決できる！ 解決できない問題の1%はモテすぎることだけ！」

「プロテイン・ポーションさえあれば何日でも戦える！」

「そうだ！ 俺たちはブリギッテ教徒  
の100匹ごとき筋肉の前で恐れるに足りない！」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！

大教皇リズレット・アルカノンの掛け声に、集まっていた信者たちは次々に聖句バイブルを唱え、恐怖を克服していく。

一気にブリギッテ教徒たちの士気と魔力が増大していった。

「アリシア、お前の宗教は変わっているなあ……」

「私はこの人たちとは違いますから！？　ここにいる人たち全員、狂信者ですから！？」

普通の信者たちは全員隠れてるだけですからね！？

と必死に弁明した。

本当だろうか……。

まあ、それはともかく。

「さつきは失礼したな、リズレット。それにブリギッテ教徒たちよ」

俺は静かにつぶやく。

その声はなぜか、誰しもの耳に届いた。

皆が俺の口にした詫びの言葉を聞いた。

「さつきは、こちらの戦力はたった6人だと言ったが……」

俺は首を振り、

「それは俺の間違いだったようだな」

ふっ、と微笑む。

そして、杖を高く掲げた。

まるで信徒を導く教主のごとく。

「大教皇リズレット・アルカノンが率いるブリギツテ教徒、狂信者<sup>マツチヨ</sup>100名！そして俺たち賢者パーティー6名！あわせて106名！これほど頼もしい仲間がいれば、ゲシュペント・ドラゴンの千や二千、倒すことなど造作もない！」

その言葉に、

「アリアケ様！」「大賢者様！」「大聖女様の婚約者様！」

歓声が上がった。

「えーと、本当に彼らも加えて戦うんですか、アリアケさん……？」

アリスアはマツチヨたちが苦手なのか、若干引き気味である。

しかし、

「ふっ、無論だとも。日頃鍛えぬいた肉体を、今こそこの聖都を守るために。世界を守るために使う時だ。……何よりも」

俺はスキルを行使する。

「筋力増強（超）。さあ、始めよう『渴愛の悪魔フォルトウナ』よ」

俺は白き少女、フォルトウナに向かって言う。

フォルトウナは初めて笑みを消した。

「俺の支援を受けたブリギッテ教徒たちは、世界最強の存在だと知るといい」

こうして、フォルトウナ・レギオン VS ブリギッテ教徒・レギオンの戦いは幕を開けたのである。

後に聖都防衛戦と呼ばれる戦いである。

96・フォルトゥナ・レギオン VS プリギツテ教徒・レギオン(後書き)

いつもお読み頂きありがとうございます！

第1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

97・大賢者アリアケの対軍スキル（前書き）

第2巻が5/7発売決定しました！ ぜひ『無料』試し読みやご予約お願いします！

<https://mangaazine.jp/square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>



## 97・大賢者アリアケの対軍スキル

### 97・大賢者アリアケの対軍スキル

目の前には、白き少女フォルトゥナが微笑んでいる。その背景には空を埋め尽くす黄金のドラゴンの群れがいる。

一般人からすれば絶望的な状況かもしれない。

だが、俺はむしろ不敵に微笑みながら、

「それでは始めるぞ。全体化スキルを常時発動。まずはダメージ軽減 スキルを発動」

「おお、すごい・・・」

「元々ムキムキで最高のボディだった俺たちの筋肉が、更に力チカチになったぞ！」

ブリギッテ教徒たちが歓喜の雄たけびを上げる。泣いている奴もいて、ちよつと怖い。

「き、気にせず、次は 俊敏 スキルを発動する！」

「す、すごい！ 筋肥大すぎて鈍重になるところを……。これで問題なく動き回れる。動けるマツチヨマンになれる！」

更に歓喜とすすり泣きの声が溢れた。

若干、意図していた喜び方と違うのだが……細かいことは気にしないでおこう！

「3つ目に、ダメ押しで 回避補助 を付与する」

「おお！」

「4つ目に 回数制限付き無敵付与 を行う。これならドラゴンのブレスも何度かなら防げるはずだ！ 切れたらかけなおすから、必ず言うようにしろ！」

「筋肉でブレスまで防げるなんて！ おおおおお！」

「5つ目に ダメージ割合低減付与（強） ！！ 筋肉超強化 とこれら ダメージ軽減 で少なくとも即死はしないはずだ！ ダメージを受けたら、アリシアとローレライの回復魔法をこまめに受けるようにしろ！」

「ダメージを受けて治してもらったら、超回復で更にムキムキってことか！？ うおおおおおおおおお！」

ええい、もうええわ！

「6つ目に、毒・火傷・冷氣・呪詛などまとめて耐性付与する」

「す、すごい！ まるで聖人だ！ ブリギツテ教徒の力を増強するために降臨された神のようだ！」

「そんなけつたいなものではないわい！ そしてレビテーション《空中飛行》！」

「ひ、飛行！？ 人間の俺たちが！？」

「当然だろう？ どうやって戦う気だ？」

「す、凄すぎる。空を飛べるなんて」

称賛の声を聞いていては日が暮れるので無視して、

「さて、あとは攻撃力アップ付与！ 攻撃力割合アップ付与！ 追加効果、毒付与！ 攻撃時状態回復付与！ 攻撃時体力回復付与！ 魔力耐性付与！ 魔力攻撃アップ付与！ 魔力攻撃割合アップ付与！ 時間経過による体力・魔力回復付与！ 即死無効付与！ 首の皮一枚を付与！ クリティカル率アップ付与！ クリティカル威力アップ付与！」

そして、

「高速詠唱！ 今の逆の効果を敵へ付与する！ ○× ○○！  
！！」

ふう！

これだから軍団戦は骨が折れるのだ。

(それにしても、途中から信者たちの声が聞こえないのが不思議だな?)

そんなことを思っていると、

「す、すいい」

「これが大賢者アリアケ様のお力なんだな……」

「大聖女様の夫になる方だけある。いや、むしろ、アリアケ様が我々ブリギツテ教徒の救世主様なのでは？  
筋肉を導く存在なのでは？  
筋肉ハイエスト・ランク・トレーナーを導く存在なのでは？」

俺の力に畏敬の念を持ったのか、静かにざわついていた。ただ、

「誰がお前ら筋肉馬鹿ブリギティアンどもの救世主なものか！」

そこだけは力強く否定しておいた。

だが、信者どもものは妙にギラギラした目で俺を見ている。何だか獲物を見る狩人のようで本能的な恐怖を感じるのだが……。

そ、それはともかく、

「さあ、これでドラゴン相手にも戦えるはずだ」

「ゲ、ゲシュペント・ドラゴン相手でもですか？」

やはりまだ不安が残っているのだろう。

誰かが不安を口にする。

しかし、俺は微笑みながら、

「ゲシュペント・ドラゴンの力は人の1000倍だ。彼我の戦力差はそれくらいある。いや、あつた」

「あつた？」

そう、過去形だ。

俺は皆を前に頷くと、

「お前たち筋肉バカは馬鹿狂信者だけあつて、人の10倍の力を持つ。魔力も無駄に篤い信仰心のおかげで凄まじく高い。それを俺の力で10倍に高めた。そして、敵には俺のスキルで10分の1の戦力へと低下させている。つまり彼我の戦力差は今まさに均衡している状態にある」

「す、すこい……!!」

「アリアケ様のおかげでドラゴン相手にも互角に戦えるっていうんですか!？」

「……というか、実は勝っている」

「か、勝ち!？」

余りに意外だったのか、ブリギティアンたちが驚きの声をあげる。

だが、俺はさも当然とばかり「ああ」と頷く。

「大聖女アリシア・ルンデブルクは蘇生魔術の達人だ。君たちを決して死なせはしないだろう。安心して戦え」

というか、

「勘違いしているぞ。これはお前たちが命を捨てるような戦いではない」

だから俺はずっと微笑んでいるのだ。

「あ、相手はあのゲシュペント・ドラゴンの群れなの?」

「相手がどうかではないだろう? この俺が。大賢者アリアケがついているんだぞ?」

だとすれば、

「少し高強度のインターバルトレーニングだと思えばいい」

その言葉に、一気に信者たちの士気が上がった。

「うおおおおお! 確かに! 大賢者様がトレーナーについてくださるんだ! こんな絶好の筋トレの機会はないぞ!」

「最高のトレーナーと、回復術士プロテインがついていて、しかも世界最高のウェイト器具と来ている！」

「これで燃えなきゃ！ブリギティアン筋トレマニアじゃないぜ！」

ムキムキの教信者たちの雄たけびが上がった。ブリギティアン

「いくぞ、みんな！ アリアケ様の加護ぞある……！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお』

勢いよくブリギティアンたちがドラゴンたちへと攻撃を開始したのであった。

浮遊スキルのおかげで、一斉にドラゴンたちへ向かっていく。

それにしても、

「あの掛け声、恥ずかしいからやめて欲しいんだが……」

「アリアケさんがあんなに煽るからでしょうに。やれやれ」

アリシアが冷静につっこみながら、さらりと、彼らの支援のために大結界を構成しはじめていた。

## 97・大賢者アリアケの対軍スキル（後書き）

いつもお読み頂きありがとうございます！

第2巻5/7発売決定です！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

コミックもガンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「教信者たちは今後どうなるのっ……っ！」



と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

98・アリアケの支援を受けたブリギッテ教徒は無双する(コレ  
ット視点)(前書き)

第2巻が5/7発売決定しました！ ぜひ『無料』試し読みやご予約  
お願いします！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>









と、儂がそんな喝采かっさいを叫んだ瞬間である。

「お嬢！ あっちの奴らが一斉にブレスを！？！？」

焦った声を信者の一人が上げる。

じゃが！

「言っただじゃろう！」

儂は高らかと天に人差し指を立てながら宣言する。

「儂らは殴っておれば良いと！」

そう言った瞬間、ブレスが一斉に噴射される。

……だが！

ガギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イ！！！！！！

ブレスは儂らに届く寸前で、虹色に輝く美しい障壁に阻まれて消失した。

「こ、これは！ たっ……………」

「多重結界……………！」

「しかも、こんな複雑な構成……………。は、初めて見たぞ……………」

馬鹿ちんどもが驚いているようじゃが、

「なっ、じゃから言ったじゃろ？」

僕は当たり前のように、でもちよっと誇らしげに言った。

「そなたらの大聖女アリシア・ルンデブルクは凄いのじゃから！」

地上に豆粒のような小さな人が、僕に向かってニコリと微笑んで手を振っているのが見えた。

「さすがアリシアなのじゃ！」

<続く>



98・アリアケの支援を受けたブリギッテ教徒は無双する(コレット視点)(後書き)

いつもお読み頂きありがとうございます！

第2巻5/7発売決定です！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

コミックもガンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

-----  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「教信者たちは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

99・アリアケの支援を受けたブリギッテ教徒は無双する(フエ  
ンリル視点)(前書き)

第2巻が5/7発売決定しました！ ぜひ『無料』試し読みやご予約  
お願いします！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

99・アリアケの支援を受けたブリギッテ教徒は無双する（フェンリル視点）

99・アリアケの支援を受けたブリギッテ教徒は無双する（フェンリル視点）

（フェンリル視点）

「白狼様！？ 早すぎますよ!？」

「賢狼様！？ ちょっとだけスピードダウン出来ませんか!? 息が出来ませんよ!!!！」

「フェンリル様あ!!！」

ブリギッテ教徒たちの悲鳴を背後で聞いて、我は速度を緩めた。ドラゴンたちからも距離をとる。

「甘えん坊たちよのう。主様のスキルによって、人外レベルに強化されておるのであるから、これくらい付いて来れるであろうに?」

「も、申し訳ありません、フェンリル様……」

「私たちがふがないばかりにご迷惑を……」

我がしつとりとたしなめると、彼らは素直に謝り、シユンとなった。

我は逆に「フッフ」と微笑んだ。

我が率いる数十名のブリギッテ教徒たちは、『脚力』にこそ自信のある者たちである。

彼らは教会学校の初等部の頃、足が速かったらしい。

そして、不思議なことに人の仔こというのは、小さい頃は足が速いと異性にモテるらしく、彼らはその成功体験を得て以降、ずっと、脚力のトレーニングを続けた素直な者たちである。

そんな素直な仔たちであるので、たしなめるとすぐに落ち込んだり、シユンとなる。

本当に手間のかかる仔たちである。

「大丈夫、そなたたちなら出来る。クラスで一番足が早かったのであるろう?」

「で、でも……。あんなのはずっと昔の話で……。わかってるんです。足を鍛えてきたのも、過去の栄光をひきずった情けない話で」

そう落ち込んだ様子で言うが、

「情けなくなどないぞえ」

我が少し厳しく言う。たしなめる。

すると、彼らは驚いたように目を丸くした。

我は口調を柔らかくして、

「誇ることがあることは素晴らしいことであるぞ？ 卑下<sup>ひげ</sup>すること  
なぞない。馬鹿にするものがおれば、このフェンリルが反論してや  
ろう。そなたらは立派な脚力を持つ<sup>もの</sup>武士<sup>のみ</sup>であるとな」

そう言ってから、

「ふふふ。それに大丈夫だ。心配なぞするでない。そなたらはこの  
フェンリルについてくるだけで良い。そうよくなあ、赤子のように  
我だけを目で追い、我だけ追って来ると良い。どうだ？ そなたら  
ならきつと出来るであろう？」

そう言ってから『赤子のように』は、少し小ばかにしたように聞こ  
えてしまったであろうか？

と少し心配になったが、

「フェ、フェンリル様！ お、俺、ついていきます！」

「お、俺もです！ ていうか一生ついて行きます！」

「頑張ります。頑張るので終わったら褒めて下さい！ 赤子のよう  
に褒めて下さい！」

「ん？ お、おう。いいぞえ？」

予想以上に元気になった。

とどうか、赤ちゃん扱いされるのをむしろ歓迎しているように聞かされたのだが、気のせいであろうか？

まあ良いか。

「ふふ、では勝ったら褒めてやる。さあ、このフェンリルについてくるがよいぞ」

「はい！ フェンリル様！ うおおおおおおおおおおお！ お前から続けええええええええええ！ フェンリル様にいいところを見せるんだああああああああ！」

「そうだ！ 俺たちはこの時のために足ばっかり鍛えてきたんだ！」

「俺がクラスで一番うまく足を使えるんだ！」

う、ううむ。

一声かけたただけなのであるが、どうしてこ奴らは一瞬でここまで元気になったのであろうか？

よく分からぬが、彼らの動きは先ほどまでとは違ってかと言って、凄まじい速度に達した。

神速の域にある。

何せゲシュペント・ドラゴンどもが、

「奴がいてくれた  
G I G Y A G Y A G A Y G Y A G Y A ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? !

「G I G Y A G Y A G Y A G Y A !」  
早すぎて見えない!

「G Y A G Y A G Y A A A A A A A A A A A A !」  
馬鹿な 人ごとにいいい

そんな風に、慌てふためいているのだから。

ふふふ。

「愉快であるな! 空のワルツというものは! さあ、ドラゴンたちよ、我はこっちであるぞえ!」

「G Y A ! ?」

「遅い遅い! 遅すぎてあくびが出るのう!」

ガシュ!!

「G Y Y A A A A A A A A A A A A A A A A A A ! ? ! ? !  
? ? ! ? ! ?」

我の爪に片翼をもがれたドラゴンが姿勢を崩す。

「G U O O O O O O O O O O O O O O O O O ! !」

だが、落下する前に我に向かって至近距離でブレスを放とうとした。

しかし、

「ドラゴンよ。我は独りで戦っているわけではないぞえ?」





すると、

「は、はい、フェンリル様！」

「フェンリル様には指一本触れさせません！」

「これからも俺たちを使って下さい！」

妙に熱量を帯びた返事がかえってきた。

「お、おう。そうであるな」

若干、元気すぎるのでちょっとびっくりした。

だが、士気は高くて大いに結構。

ドラゴンはまだまだ、空を埋め尽くすほどにおる。

だが、それらは全て我らの獲物でしかない。

「では次の獲物を喰らうとしようか、お前たち。さあ、我に遅れずついてくるのじゃぞ？」

「「「「はい  
フェンリル様  
YES、My Mother!!!」」」」

My Mother?

良く分らず首をかしげるが、今はそれどころではないの。

我らは次の瞬間にはその場から消え失せている。

そして、数百メートル先のドラゴンとの戦闘に移行しておった。

光のように移動しつつ戦うその姿は、後に『閃光のフェンリル軍』  
と言われるほどの活躍ぶりだったらしいのう。

ともかく、我らはこうして、凄まじい速度で敵たちを駆逐していったのだった。

99・アリアケの支援を受けたブリギッテ教徒は無双する（フェ  
ンリル視点）（後書き）

いつもお読み頂きありがとうございます！

第2巻5/7発売決定です！ 表紙とキャラデザを下の方に置いて  
おきますね。超かわいいですね！

1巻は発売後、大人気で即重版しました！

Web版から大幅加筆修正・増量しています。

コミックもガンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はWebだけでも大丈夫ですが、無料『試し読み』だけ  
でもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでも  
どうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - - - -  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「フェンリルたちは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

100・敵わぬ敵と英雄の出陣(前書き)

第2巻が5/7発売決定しました！ ぜひ『無料』試し読みやご予約お願いします！

<https://mangaazine.jp/square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

## 100・敵わぬ敵と英雄の出陣

100・敵わぬ敵と英雄の出陣

（ラツカライ視点）

さすがボクの先生ですね！

ボクは先生に襲い掛かろうとしたゲシュペント・ドラゴンの一体の攻撃を軽々と迎撃しながら微笑みます。

先生の対軍用の規格外のスキル使用によって、普段から鍛えていたとはいえ、ただのブリギッテ教徒たちがゲシュペント・ドラゴンたちを軽々と駆逐していきます。

まさに無双状態です！

アリアケ先生の力がどれほどすごいのか。

国防を担うほどの力を有していることが、一目でわかる凄まじい光景だと言えます。

（この光景を見てたら、ガイアお父様もアリアケ先生がどれほど凄いかすぐに理解してもらえるのになあ）

などと残念に思ってしまったたりします……っつて、

（おっと、いけないいけない）

ボクはちょっと頬を赤らめながら、首をブンブン振りました。

（普段、戦っている最中に雑念なんて持たないんだけどなあ……。アリアケ先生のことだけはいつの間にか考えちゃうんだよね……）

まだまだ未熟です！

もっと先生に認めてもらえるように、精進しないといけないよね！

そう決意したときでした。

「う、うわあああああああああああああああああああああああ  
あ！？！？！？！？」

ブリギッテ教徒たちの悲鳴が私たちの<sup>じだ</sup>耳朵をうったのでした。

〈ローレライ視点〉

「ぎゃーっはっはっはっはあああああああ！ この俺様が乗り手  
となった竜かなに敵かうと思ったのかあ！？ このダボどもがあああああ



「！」

「う、うわああああああああああああああ！」

「ゴミが！ ゴミが！ ゴミが！ ゴミが！ ゴミがああああああああああああ！ 俺を認めねえ奴らは全員死んじまえばいいんだよ！ 俺は強えんだ！ 最強なんだ！ なんて誰も認めねえ！ くそがあああああああ！」

私は突如、上空から鳴り響いた、人の悪意と下劣さを極限まで凝縮したかのような、下品な大声に鳥肌を立たせました。

本当に人をゴミのように蹴散らしていくその様子は悪魔そのもの。

そして、それが誰なのか確認するまでもなく予測がついてしまいました。

「勇者ビビア・ハルノア様……」

今や人類の敵となった者。

彼の悍ましい悪意がこの聖都外壁の上空を一瞬で支配していくのを感じます。

アリアケ様は勇者様は悪魔に魅入られ、操られているとおっしゃっていました。ですが、

「素質がありすぎる……」

そう思わざるを得ません。彼の放つ暗黒のオーラは、この私ですら

怖気づかせ、立ちすくませてしまつほどの悍ましいものです。

人がこれほどの悪意を持てるなどは、神の僕である私には到底信じたくないことでした。

ですが、悪夢は勇者ビビアだけではありません。

「おーっほっほっほっほ！ どれだけ筋肉をつけても、この防御無視という天賦の才を持つ私にはかありませんわ！ さあ、ひれ伏しなさい！ 懺悔なさい！ このテリア・マフィーに貢ぎなさい！ すべての富を！ お金を！ 私に捧げてお逝きなさい！！！」

「ぎゃあああああああああああ！？」

屈強な戦士たちがなすすべもなく、金の亡者となり、悪魔に魂を売ったテリア様の拳の餌食になっていきます。そして、恐ろしいことに彼女の防御無視スキルは乗り手を得た竜にまで及んでいる様で、あらゆる装甲を無視してドラゴンの猛威がブリギッテ教徒たちを襲つてゆきます。

「あーっはっはっはっは！ 面白いじゃん！ 面白いじゃん！ もっと華麗に踊ってみせてよ！ いーっひっひっひっひ！ この大魔法使いプララ様にもっと面白いもん見せてよ！ きゃーはははははははあ！」

「う、うわあああああああああああああ！？！？」

そして、プララさんがドラゴンとともに四方八方に火球を放ち続けられています。まさに人間砲台の様相を呈しています。

まさに人類の脅威たち。勇者パーティーは今や悪魔の軍勢の筆頭として、人を滅ぼす絶望の象徴へと成り果てていたのです。

ただ、幸い死者はいないようです。

アリアケ様のスキル支援。

そして、アリシア様の結界魔法と、上級回復魔法。

また、力及ばずながら私の中級回復魔法がありますので、致命傷は避けられていたのです。

ですが、それも時間の問題でしょう。

「……あれ？　そう言えば」

私はふと違和感を覚えます。

何だか、誰かを忘れているような……。

と、そんなことを一瞬思った時でした。

「ローレライ、気を抜くな」

「へ？　きゃっ！？」

私は軽々と持ち上げられて、どこかへと運ばれます。

アリアケ様！？　一体っ……。

なぜか私はちよつとドキつとしながら、声を上げようとしています。

ですが、それを口に出す暇はありませんでした。

次の瞬間。

『ズバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン』

私がさつきまでいた場所が……。

いえ、私がいた場所と、その後方のセプテノの外壁も含め、奇麗に一直線に切り裂かれていたからです。

それは、ついに聖都『セプテノ』の外壁の一部が崩壊した瞬間でもありました。

「ガ、ガイアお父様!？」

ラッカライさんが何かを叫んでいるのが聞こえました。どうやら、今の凄まじい攻撃をしたのは、ラッカライさんのお父様のようです。ただ、今の攻撃がブリギッテ教徒たちに与えた衝撃は大きなものでした。

「聖都が……」

私も思わず声を上げます。

セプテノは私の故郷でもあります。だから、外壁が切り裂かれる瞬間を見て、思わず絶望感を抱いてしまったのでした。

そして、それは他の教徒たちも一緒だったようで、

「つ、強すぎる……」

「まるで悪魔……。いや、それ以上だ……」

「あいつらの笑い声や醜悪な表情を見ているだけで力が入らない……。勝てない……」

人智の及ばない化け物たちを前にして、みんなが絶望してしまっただけです。

バサ……バサ……。

白き悪魔フォルトゥナの後ろに、4体のドラゴンが舞い降ります。

まさに悪魔の軍勢。

そのあまりの強さと醜悪さに、人々が絶望感に包まれていくのが分かりました。

まさに今、聖都の終焉が、目の前に現れたのだと。

……しかし、

「そんな顔をするな、ローレライ」

「……えっ？」

私は頭上から聞こえて来る優しい声に、我に返ったのでした。

「ア、アリアケ様……って!？」

っていうか!

ずっと抱っこされていたのでした!

はわわわ!？

慌てて降ります!

「ふふ、そうですねよ、ローレライさん」

勝手に慌てている私に、隣から、またも優しい女の人の声が聞こえて来たのでした。

「ア、アリシア様」

私の慌てた声に、アリシア様は優しく微笑み返してくれます。

その微笑はまさに聖母。

しかし、そんな二人はほぼ同じタイミングで悪魔の軍勢の方へ向き直ると、やっぱり同じタイミングで、

「やれやれ、出来れば俺は今回出しゃばらず、ブリギッテ教徒たち自身が故郷を守るようにしたかったんだが……」

「そうやってすーぐに楽しようとする。ダメですよ、今日はおかしいアリアケさんの特等席で見せてもらいますからね。なのでお背中はお安心してくださいな」

そう言うて、お二人は不敵に微笑んだのでした。

その光景を見て、私は今までの絶望感が吹き飛ぶのを感じます。

そして、それは他のブリギッテ教徒たちも同じだったようで、周囲の空気が一瞬で変わったのを感じました。

それはまさに『希望』。

ああ、これが英雄というものなのですね。

私は直感的にそう感じたのです。

……ただ、私はそう思ったのと同時にふと、

（なんだかちょっと……）

もやもやとするというか。

ちょっとだけ。ほんのちょっとだけですが、

（お二人の関係がうらやましいな……）

そうっすっだけ思っただけでした。



100・敵わぬ敵と英雄の出陣（後書き）

第2巻5/7発売します！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

101・一掃 その1(勇者パーティー編)(前書き)

第2巻が5/7発売決定しました！ ぜひ『無料』試し読みやご予約お願いします！

<https://mangaazine.jp/square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>



正気とは思えないほど大きな声で叫ぶ。

「大賢者などと言われて調子に乗っちゃったてめえは只のゴミカス  
つてわけだあ！ もう俺には絶対に勝てねえ！ 何せ世界最強、最  
大の存在が、この勇者ビビア・ハルノア様なんだからなあ！」

彼は鼻の穴を膨らませながら意気揚々とたまった。

「世界は俺のもんだ！ すべての国は俺の支配下に置かれる！ 俺  
に自由にできないものはねえ！ 何せ最強なんだからなあ！ 全て  
の荣誉は！ 名声は！ 女は！ 権力は！ 俺のものになるんだあ  
あああああああ！」

彼の絶叫は聖都『セプテノ』外壁にいるすべての者たちの耳に入る。

彼の声に、付き従う勇者パーティーのデリアやプララも呼応し、

「この世界のすべてが私にひれ伏すのですわ！ あらゆる富はわた  
くしのものになるのですわあ！」

「あたしが好き勝手にしていい世界になるなんて、テンションあが  
るよね！ きゃははははははあー！」

勝利を確信した、陶然とした嬌声とうぜんを上げたのであった。

まさにこの世界全てが自分たちが蹂躞する庭だとも言いたげに、  
自らの力を誇る。

……しかし。

「ドラゴンの力に、悪魔の力か。人智を超えた力だな、ビビア」

俺の冷静な声が響く。

その声は喧噪の中にあつて、なぜかよく響いた。

俺の言葉にビビアはすぐに食いついてくる。

「そうだ！ 人智を超えた力だ！ アリアケえ！ だからテメエに負けたりなんかはっ……！」

しかし、俺はビビアの言葉を最後まで聞かずに、

「ふっ……」

そう思わず笑いを浮かべてから、

「人智を超えた程度で俺に……。いや……」

俺は首を振り、

「俺たちに勝てるかと本当に思ったのか？」

「……はあっ!？」

ビビアは俺の言葉が理解できず、うめくような声を上げる。

「相変わらず不出来な弟子なことだ」

その言葉に意味不明な癩癩の言葉を叫ぶビビアをよそに、俺は瞬時

にスキルを構成しはじめたのである。

「上位結界術・限定強化（超）」

「神聖魔力強化」

「浄化魔術強化（超）」

「範囲拡大（軍）」

そんな俺のスキル行使の対象は、無論隣にいる幼馴染である大聖女アリシア・ルンデブルクだ。

彼女は俺のスキル効果を得つつも、落ち着いた様子で神聖魔術を厳おそろかに詠唱していく。

「バレット・ベール  
高速回転結界」

「ゴスベル・ベル  
福音・八咫の浄化式」

「ホーリー・フレア  
空域化術式・彼の者を穿ちて」

彼女の目の前に、高速で回転する結界術式が展開された。

本来ならばただの結界を、こうして筒状に高速回転させることで、浄化術式を蓄積させ、かつ膨張させていく。

安定させることが極めて難しいと言われる結界術を、こんな風に使えるのは世界広しと言えども彼女しかない。

そして、凝集ウチカされる神聖魔力は、もはや地上の汚わいや不純物を許さぬ『浄化の矢』へと昇華される。

「はい、いつでも撃てますよアリアケさん。浄化砲術ホーリー・パレットの準備は万端です」

彼女は微笑んだ。

ホーリー・フレア  
空域化術式・彼の者を穿ちて

それは凝集された浄化の矢を、大砲のごとく打ち出す術式。

そう。これから俺たちがしようとしているのは……。

「よし、撃て！ アリシア！」

「お任せあれ！」

彼女が弾んだ声を上げる。

と、その時、悪魔の発する美しい声音が耳朶をうった。

「やはり無理ですか。この体は朽くちても代わりはありますが、交換には時間がかかって面倒ですね……。バシユータ、いますか？」

「は。ここに」



「撤退しましょう。遠くに運んでください」

「かしこまりました。ところでビビアたちは？」

「……ここで戦う事こそ彼らの渴きをいやすこと。渴愛の悪魔にも止めることは出来ないのです」

「御意に」

バシュータは一瞬にしてどこからともなく現れると、フォルトゥナを担ぎ上げ、次の瞬間には姿を消した。

やれやれ。

「逃げられちゃいましたけど、いいんですか!？」

「ん？ ああ、あれはな、いいんだ」

俺は微笑む。

「鈴はついている。今は目の前の悪魔の軍勢を葬ることにしよう。頼むぞ、アリシア」

「も、もう！ 任せました！ それでは行きますよー!」

彼女の目の前に展開される、浄化砲術がチャージ限界だとばかりに唸りを上げている。

「アリアケさんの支援をもらった浄化砲術！ とくと味わってください」

さいね！ 浄化砲術・発射！！ すべてを薙ぎ払いなさい！！」

カツ！！！！！！

「きーひひひひ！ こんな魔法くらいで最強の俺様を倒せると思つてつ……！！?!?!?!?! う、うざい！いいいいいいいいいいいいいいいい！！？ 目があああああああああああああああああああああああ！？」

「ああああああああああああ！！?!?!?!?!?! わ、わたくしの力が！？ は、はがれおちていく！？」

「なつ、あつい！ あついって!?!? ち、ちきしょおおおおおおお!?!? もつともつともつと、好き放題してやりたかったのにいいいいいい！！ あああああああああああ!?!?!?」

直径数十メートルの筒状の浄化の矢が一直線に伸び、悪魔の手先となったビビア、デリア、プララを巻き込み、その周囲のドラゴンたちも同時に浄化の炎で焼いていく。

ビビアたちの断末魔の声かけたたましく響いた。

悪魔の力を借り、ドラゴン・ライダーとなったことで、この世界で最強の存在になったと豪語していた勇者パーティーたちだったが、彼らは忘れていたのだ。

いかに人智を超えようとも、いかに強大な力を得ようとも、そもそも神に等しい存在である俺と、神の神託を受けた大聖女彼女がタッグを組んでいる限り、勝つことはできないのだと。

彼らの断末魔は長く続き、その白い閃光が収まった時、彼らとそのドラゴンたちは大地へと落ち、完全に意識と戦力を喪失していたのだった。

続きます

101・一掃 その1（勇者パーティー編）（後書き）

第2巻5/7発売します！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

102・一掃 その2 (ガイア・ケルブルグ編) (前書き)

第2巻が5/7発売決定しました！ ぜひ『無料』試し読みやご予約お願いします！

<https://mangaazine.jp/square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

102・一掃 その2（ガイア・ケルブルグ編）

102・一掃 その2（ガイア・ケルブルグ編）

悪魔に操られていた勇者ビビアとその仲間たち、ドラゴンたちを浄化の炎により一掃する。聖女の邪悪を焼き払う聖なる焔ほむひは、身体的ダメージではなく、彼らの邪心を焼き尽くした。

大量のドラゴンたちが落下した周囲はもうもうと土煙ちけむりが立つ。

「死者なく戦争を終わらせる。こんなことが出来るのはアリアケ君とあなたが率いる賢者パーティーくらいのものね」

大教皇リズレットが感心したように言う。

「なに、賢者としては当然の配慮だ。それに凄いのは神聖魔法を自在に操るアリシアの方さ」

「謙遜けんそんも行き過ぎると嫌味けんみつてもものよ。あなたのスキル支援がなかったら、あんな大魔法を連発できる訳ないんだから」

ま、それはそうだが。

ただ、俺は「フツ」と微笑むと、

「頼りになるパーティーがいるから、俺のスキルが活きる。持ちっ  
持たれつというやつだ」

「そういうことしておきましょうかね。奥ゆかしい英雄様にめ  
んじて」

リズレットが微笑んだ。

ただ、俺は一言注意を促した。

「油断するなよ、リズレット。戦いはまだ終わってはいないんだか  
らな？」

「へ？」

彼女の首を傾げた瞬間である。

「アリアケ・ミハマアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
！」

突如、土煙を突き破るようにして、一人の男が飛び出してきた。

男は槍を突ききの姿勢に構え、音速を超えるほどの速度で俺へと肉薄  
する！

「ガイア・ケルブルグ！？ 危ない、アリアケ君！」

リズレットの悲鳴が上がるが、

「慌てるな」



俺はガイアと呼ばれた男の方を向きながら微笑み、

「『油断するな』と言ったのは俺だぞ？」

そう言いながら、構えていた杖をおろす。

「俺の背中には常に彼女が守ってくれている」

その言葉と同時に、

「先生には指一本触れさせません！ はあああああああああああああ  
あああ！」

ガギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！

「ぬづづづづづづづづづづづづづづづづづづづづづづづづ！ また邪魔するか、  
ラツカライiiiiiiii！ この父に向かって、刃向かうかあ！？」

なるほど、二人は親子か。

壮年の鍛え上げられた厳格そうな男の槍は、俺の目前数ミリまで迫  
っていた。しかし、その槍は、俺の弟子ラツカライの聖槍ブリユ  
ーナクが受け止めていた。その数ミリの差は、神にすら破られない絶  
対の空隙である。

なぜなら、この世界で最も堅固なる彼女が、俺を守っているのだから。

「う、動かぬ。わしの槍が……。く、アリアケの……。その男の支

援スキルの力かつ……!!」

ガイアが悔しそうに歯噛みする。

俺の方を憎しみに満ちた顔で見た。

だが、俺はその言葉に違和感を覚えて、

「ん？」

といぶかしげに首をかしげる。

なぜなら、

「いや、すでに支援スキルの効力は切れているぞ？」

そうあっさりと否定する。

「……なに!？」

ガイアが目をむいて驚いた。

俺の知識によれば、ガイア・ケルブルグは、槍の名門の棟梁トウライだったはずだ。

だからこそ、その槍を受け止められたことに驚きを隠せないのだろ  
う。

しかし、

「驚くことはない。彼女には才能があつた。だから適切な修行を積んでもらつただけだ。俺は戦略を教えたが、武術の天才であるコレツトや、かつて英雄たちと長い旅をした賢狼もいる。聖女による癒しもあつた。パーティーみんなに協力してもらつたことで、彼女の才能が花開いたというだけだ。あくまで、俺たちはその手伝いをしただけだ」

「戯言を！ ラツカライは儂がいくら厳しい鍛錬を施しても上達なぞせなんだ！ だからこそ勇者に預けて修行させようとしたのだぞ！」

「ははは」

彼の言葉に俺は苦笑し、

「人を育てるとするのは難しい。俺も勇者ビビアたちを育成しているが、まだまだ未熟だ。早く俺に少しでも追いついて欲しいと思っているが……。俺自身も学んではいかなければならないのだからなあ。だからな、ガイア。お前も失敗したことを認める。別に父であろうが、名門の棟梁であろうが、人を育てることは難しいし、普通に失敗もする。己が未熟であることを認めることだ」

でなければ、

「悪魔に魅入られ、利用されてしまうぞ？ 今、お前が娘を思うその親心すら、悪魔は喜々として利用している」

その言葉に、ガイアは更に激高する。

「くそおおおおおおお！ 許さぬ！ 認めぬ！ ラツカラ









フェンリルが首をかしげる。

すると、ローレイが、

「余りにビビアさんの醜悪な姿を見たショックで、悪魔の魅了から覚めたんじゃないでしょうか」

さすが、勇者さんですね！

と言ったのだった。

ははは、まあ、そんなことはないだろう。

ガイアの持ち前の精神力で、悪魔の魅了を断ち切ったに違いない。

ともかく、と、俺は苦笑いを受かべつつ、

「とりあえずこれで一旦防衛戦は終了だな。色々考えることや、事後処理はあるが……」

俺は周囲を見渡す。

死者こそ出ていないが、けが人は続出。外壁は大きく崩壊。

恐怖にかられてショックを受けている者もいる。

回復魔法だけでは、物理的、精神的な損耗はどうしようもない。

もちろん、俺たち賢者パーティーも圧勝とはいえ、激戦だった。



ならば、

「休息だな」

俺の言葉に、賢者パーティー一同は頷いた。

「一度アリシアの家に戻るとしようか」

そこで休憩をしてから、次の行動に移ることとしよう。

俺はリズレットと話し合い、そう決めて、一旦アリシアの家に戻ることにしたのであった。

そうして、俺たち賢者パーティーが、その場所を去ろうとした、その時である。

「あらあら」。あなただったら、何か大変なことになってたみたいね」

「あっ！」

ラツカライが意外そうな声を上げた。

その声を聞いて、その突然現れた女性は嬉しそうに微笑んだ。

黒髪の長い、やや中性的な顔立ちで、目元はおっとりとしている。どこかで見たとような顔な気が……。

「お母様!?!」

「はいはい。そうですね。あなたのお母さん。チルノ・ケルブル  
グですよ」

そう言って、やはり優しくそつに微笑んだのだった。

102・一掃 その2 (ガイア・ケルブルグ編) (後書き)

第2巻5/7発売します！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「ラッカライ、パツパライ、マツマライたちは今後どうなるのっ…！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

103・休息と始動　くその1く（前書き）

ついに本日　5月7日、第2巻が発売されました！　ぜひご購入、  
あるいは『無料』試し読みお願いします！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

103・休息と始動　～その1～

103・休息と始動　～その1～

「やれやれ、今日は疲れたな」

俺たちはアリシアの屋敷へとかえって来て夜食をとると、話もそこそこに寝ることにした。

あてがわれた部屋のドアを開けて中へと入る。

中は真つ暗である。

(良く考えると今日一日だけでいろんなことがあった)

聖都を観光し、ドラゴンと飲み比べをし、そのあとはアリシアの友達と会った。その後、教会の秘密ブリキッテを知り、そこで大教皇と一線を交えてから、フォルトウナ率いる悪魔の軍勢レギオンとも戦ったわけだ。

(……確かにちよつとばかり働きすぎか)

元々引退しようとしていたはずなのだがな。

(やれやれ)

俺は苦笑し、さっさと眠ろうとしたのである。

そんなわけで、俺が用意されていたベッドにいそいそと潜り込むのだった。

しかし、

『ふによん』

なんとも柔らかい、どこか安心する感触が俺の手に触れる。

と、同時に、

「きゃあああああああ！？ って、アリアケさん！？！？！？！  
！？！？！？！？！？！？！？」

よく聞き知った声がベッドの中から聞こえてきたのである。

「へ？」「

一方の俺も、驚きつつ内心首を盛大にかしげた。

（あれ、おかしいな）

なぜなら、俺の今日の寝室がこの部屋だと教えてくれたのは、今ここにいるアリシアのご両親だったのだから。





毎日すっぱいものを食べて体の柔らかさには自信があります！

全身フワフワです！

だから全然ダメじゃないです！

「ああああ、でもやっぱり心の準備が！」

「いきなりどうした！？」

私の様子にアリアケさんが心配の表情を浮かべています！

せっかく来てくれたのに、逆に心配されてしまうなんて！

そう、そうです。

私はとっさに悟りました。

彼だって恥ずかしいはず。

だけど、勇気をだして来てくれたんです！

なら、それを受け止める私も堂々としていないと。

彼に恥をかかせるなんて、大聖女さん失格です！

なら、やることは一つ！

私は心を決めましたよ！

「ア、アリアケさん！」

「お、おう」

彼の顔を真正面に見ます。

ああああ……。かつこいい……。好き、好きですよ、アリアケさん。あの日。幼いころからずっと……。

「わ、わ、私を！ か、かわ、かわいがっ……！」

ドキドキする心臓が破裂するかもしれないと思いながら、ついに言い切った！

……と思ったその時でした！

『バアアアアアアアアアアアアン！！！！！！』

「大丈夫ですか！ 先生！？」

「アリアケ様がピンチと聞いて、ローレイ・カナリア、ここに参上しました！」

扉が破壊されるほどの勢いで開かれると、そこにはラツカライちゃんとローレイちゃん、なぜか戦闘モードで突入してきたのだ。

「……ち、違うんですよ！ えっと、あの、その、これはですね！？！？」

「あ、あれ！？ アリシアお姉様！？ あ、あの、ご、ごめんさい  
！ 私、ピンチって聞かされて、あ、あの、その！？」

「はわ、はわわわわわ！？」

一瞬で状況を悟った二人と私は、目を見合わせると、お互いに顔を  
真っ赤にしたのでした。

続きます

103・休息と始動　くその1く（後書き）

本日、5月7日に第2巻が発売されました！表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケとラツカライとローレライたちは今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

104・休息と始動　くそのく（前書き）

第2巻発売されました！　ぜひご購入、あるいは『無料』試し読み  
お願いします！

<https://mangaazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

104・休息と始動　　くその2く

104・休息と始動　　くその2く

くとある親たちの親ばかり行動の記録ノハルケン・ルンデブルク視点く

「なぜわしの娘の屋敷に、こんなお歴々れきれきが集まっているのかよく分からんが……」

とりあえず集まってしまったものは仕方ないと、わしは果実汁を振る舞う。

「シャーロット王、大教皇リズレット様、それにチルノ・ケルブルグ代行様」

どなたも大きな権力を有する実力者たちばかりだ。

「いえいえ、あなたがそれを言いますか。ハルケン様。かつてのS級冒険者の武勇は今でも詩になって残っていますよ」

「昔の話です。それで……」

儂は早速本題に入ることにした。

「アリアケ君はうちのアリシアと結婚することになっていますが、今日はどういったご用件でいらっしゃったのですかな？」

その儂の言葉に、

先制攻撃

『ピシリ』

と空間に何か不穏な音が響いたように感じた。

「さすがかつてドラゴンスレイヤーと恐れられた御仁だけあるな！  
ハルケン殿！　しかし、婚姻こんいんとはやはり戦って勝ち取るものではないだろうか？」

シャーロット王が獰猛に笑いながら言った。

しかし儂は余裕の笑みを浮かべながら、

「わっはっはっはっは！　何をおっしゃいます、シャーロット王」  
そう言いつつ、

「うちの娘とアリアケ君は、何せ『幼馴染』ですからなあ！」

「ぬう！？」

幼馴染。そう、幼いころから赤い糸で結ばれた運命的存在。これに勝るアドバンテージはない！　娘はずっと彼を見て来たし、儂も彼のことを良く知っている。というか、彼に何度か助けられたことさえあるのだ。



渡すわけにはいかぬ！

それに！！

「くつくつくく！ しかも、すでに手はづつている。妻のミザリによつて、今頃アリアケ君はアリシアの部屋で一夜を共にしていることだろう！！」

差し出がましい、親ばかりかもしれぬ。

だが！ これも可愛い娘のため！ 毎日アリアケ君へのポエムを紡ぐアリシアのためだ！

『ちよつと、お父様！ まじでやめてよ！？』

と、若干嫌がられようが、すべて娘を思つての事なのだ！

しかし、そんな完璧な作戦を聞いたにも関わらず、大教皇リズレット・アルカノン様とチルノ・ケルブルグ様はなぜか微笑んだ。

いや、いやらしく唇を歪めたのだ。

まさか！？

「まあもちろん、私もアリシアちゃんとアリアケ君の婚姻には賛成だわん。でも、それは政治の話なのよね」

大教皇はニチャリと唇を更に歪めると、

「あの子ローレライちゃんたらまだ自分の気持ちに気づいてないみたいだけど、親の私には分かっちゃったのよね。というわけで、そそのかしてみたのだけわ！」

「なっ!?!」

わしは目をむく。

すると、チルノ様もやはり追つ随いするかのようについに微笑みつつ、

「うふふ。というわけで、私も便乗させて頂きましたよ、ガイア様。それにしてもあの子ラツカライちゃんたら、あんなに熱心に男アリアケ様の人を目で追いかけてたりして。青春ねえ」

おっとりとした口調で言う。

だが、その眼光は間違いなく、戦略家のそれ。

全然笑っていない。

ケルブルグ一族の軍師は彼女だと言われる理由がそこにはあった。

しかし、一つ腑に落ちない点もある。

コレット様のことだ。

「彼女コレット様は確か、シャーロット王とリズレット様の外交的取り決めにより……。シャーロット王とアリアケ君と試合をし、もし彼が勝てば、晴れて婚姻するという話だったはず。ならば、シャーロット王が今回の件を邪魔立てする理由はないはずですぞっ!?!」

思わず声を荒げる。

敵は少ない方が良くから説得しようと考えたのだ。

しかし、

「いや、実はコレットが助けられた詳しい経緯を、このリズレットに聞かされたのだ」

シャーロット王は頷きつつ、

「すると、なんと悪い人間に捕まっていた娘は、<sup>「コレット」</sup>アリアケにまるで王子のように助けられたというではないか！ これはもう、結婚するしかあるまい！！」

「……は？」

ちよ、ちよっと待って欲しい。

えっ？

「そ、それは少し安直すぎませんか？」

「何を言うっ！」

彼女は……。数千年を生きていると思われる彼女は、まるで夢見る乙女のように宙を見つめつつ、

「人間の王子に救われて、その者を選び手に選ぶなど、ドラゴンの

夢ではないか。これはもう結婚するしかないな、うむっ!!」

そう吼えつつ、

「幼馴染など、何するものぞ！ 王子様のほうがランク高いわ！」

と叫んだのだった。

くっ。

僕は想定外の反応に虚を突かれる。

融通のきかないドラゴンの王だと思っていたが、ただの直情型乙女脳ドラゴンだったとは！

「くっ、と言うことは今頃……」

わしはこの広大な屋敷の一室で、今まさに起こっている事態に戦慄する。

だが、わしに出来ることと言えば、

「まっ、頑張るのだぞ、アリアケ君!!」

とりあえず応援することだけであった。

だって、モテるといっものはそういうものだから、仕方ない。

「僕も余り考えるのは得意ではないしな！ わっはっはっは!!」

うむ、なるようになる！

と、いふことで僕は考えるのをやめたのだった。

続きます

104・休息と始動 くその2く（後書き）

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガングオンLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

105・休息と始動　くその3・前編く（前書き）

第2巻発売されました！　ぜひご購入、あるいは『無料』試し読みをお願いします！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yussyaparty/>

長さが微妙なため前編・後編で分けます。今話、短めですみません、後編は近日中にアップいたします。



105・休息と始動　　〈その3・前編〉

105・休息と始動　　〈その3　前編〉

〈コレット視点〉

儂が自分の枕片手に旦那様のいる寢室を訪れたのは夜も更けた頃じやった。

なんか知らんけど、母上から、「感動した！　アリアケ殿と戦いはするが、それはそれ。今日、アリアケ殿とアリシア嬢が同じ部屋にいるところに突撃し奪い取れ！！」と何やら物騒な檄げきを飛ばされたのじゃ。

もちろん、奪い取るとかありえぬので、そこは拒否したのじゃ。

じゃが、じゃが、

「い、一緒にならいいのじゃ………？」

儂はひらめいた。

それならアリシア殿との姉妹の誓いにも反せぬし、抜け駆けにもならぬ。というか、そもそも、

「『儂と旦那様と二人きりで』は、まじ恥ずかし過ぎるのじゃ。い、一緒が良いのじゃ〜」

儂は顔を真っ赤にする。

儂は昨日も、これまでだって、旦那様に対して沢山愛を叫んで来た。別にそれは全然恥ずかしいと思っておらぬ！

じゃって、本当のことじゃから。

まじで旦那様のことを愛しておるから。アリシア殿に負けぬくらいに！

でもでも、

「あ、愛を叫ぶのと、こゝこれは違うのじゃ〜」

儂は更に顔を赤くする。

「ど、どどどどどどどどどど同衾（おきん）して、ね、ねねねねねねねねね（ねん）るになるなんて、は、恥ずかしいのじゃ〜。ふにゃ〜」

考えるだけで腰が抜けそうになる。

っていうか、実際になった。

廊下にペタンと腰をおろしてしまふ。うう、これ以上進めぬ。このゲシユペント・ドラゴンの末姫ともあろうものが!!

じゃが、

「しつかりするが良いぞえ、コレットよ。そら、もう少しでアリアケ殿らのいる部屋よ」

「しゅ、しゅまぬ」

そんな儂を見かねて声をかけてくれる。

それは、アリシアの従僕であるところの、フェンリル殿であった。

実は旦那様の部屋に行くかどうか、迷っていたところ、背中を押ししてくれたのは彼女なのじゃ。

「かたじけないのじゃ。しかし、一つ疑問なのじゃが……」

「なにかのう？」

フェンリル殿はいつもの涼し気な顔で首をかしげる。

「そなたはアリシア殿の従僕じゃろ？　じゃとすれば、これはアリシア殿への背反になるのではないか？」

「良い質問であるな、コレットよ」

うむうむとフェンリル殿は頷きつつ、

「我は従僕ゆえ、いちおうアリシアのことは立てるようにしてあるのよ。ゆえにアリシアよりも後で主様には可愛がってもらおう予定になつておる」

「偉いのじゃ」

「であるが、どさくさに紛れて『一緒』になら、別にルール違反ではないであろう？ 抜け駆けにも当たらぬであろうしのう」

「偉くないのじゃ！ というか、ただの策士なのじゃ！？」

とは言え、

「儂と同じことをしようとしておるだけなのじゃ……」

「ぬっふっふっふ。ゆえに止められまい？」

「う、うう。言い返せぬ！？ でも悪辣あくらつさが半端ない！ 微妙に納得できん！」

とは言いつつも、一緒に来てくれるのはありがたい。

仲間が多い方が良い！

というわけで、儂らはまるで姉妹のように手をつなぎ、枕片手に、旦那様とアリシア殿のいる寝室へと訪れたのじゃった。

じゃが！

後編に続きます

105・休息と始動　くその3・前編く（後書き）

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガングONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

106・休息と始動　↳その3　後編↳（前書き）

第2巻発売されました！　ぜひご購入、あるいは『無料』試し読み  
お願いします！

<https://maganzine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

106・休息と始動　　↳その3　後編　　↳

106・休息と始動　　↳その3　後編　　↳

<前回の続き>

↳コレット視点　↳

仲間は多い方が良い！

というわけで、儂らはまるで姉妹のように手をつなぎ、枕片手に、旦那様とアリシア殿のいる寝室へと訪れたのじゃった。

しかし！！

「……ち、違うんですよ！　えっと、あの、その、これはですね！  
?!?!?」

「あ、あれ！？　アリシアお姉様！？　あ、あの、ご、ごめんさい  
！　私、ピンチって聞かされて、あ、あの、その…?」



「はわ、はわわわわわ!？」

なんと、旦那様にアリシア殿。そしてラツカライ、そしてローレライもおったのじゃ。旦那様以外はなぜか全員を顔を赤くして慌てておる。しかも、旦那様とアリシア殿は同衾どうきんしておる!

「こっ、これはっ……!？」

僕は驚愕する。この状況が表すものは一つなのじゃ! であればっ……!

「な、なんで、コレットちゃん達までもが!？ って、ち、違うんですよ、ここここここ、これはですね!？」

「そ、そうです、コレットお姉様!? ボ、ボボボボクたちは異常事態だと聞いてですねっ!? 抜け駆けとかではなくってですね!？」

「わ、私もです!？ あわよくばとも思っていないません!」  
皆が何か言っておる。

じゃが、僕はそれら声を遮かきるよつに高らかに、

「さすが旦那様なのじゃ! 確かに『全員一緒に』が一番なのじゃ!」

そう喜んで言ったのじゃった!

「……えーと? コ、コレットちゃん、何をおっしゃってるん

で……？」

アリシア殿がなぜか困惑の声を上げるが、

「にははははは！ 儂一人では不安じゃったし、じゃからフェンリル殿にもついて来てもらったが、ラツカライたちもいればより安心なのじゃ！ うむ！」

儂は朗らかにそう言った。

じゃが、

「って、コレットちゃん何言ってるんですかあ！？ そ、そんなの破廉恥すぎますよ！？」

「私も一緒ですか……！？ こ、光栄ですけど、色々教えてくださいさい……！？？」

「ぜ、全員一緒にだなんて……。アリアケ様は大丈夫なんでしょうか……！？ 新参の私は別に個別対応でも構わないのですが……！」

わちゃわちゃと。

アリシア、ラツカライ、ローレイと、三者三様の反応をしたのじやった。

ちなみに、

「ふーむ。では、我は疲れた主様を寝かしつける役目を賜るとしよ

うかのう。私のモフモフは主様の疲れた体を一晩で癒すであるうて  
フェンリル殿もまんざらではない様子で、何か固い決意をしたよう  
であった。

「うんうん、皆で一緒なら怖くないのじゃー！」

儂がそう言った時じゃった。

「えーっと、みんな、すまない」

旦那様は口を開くと、

「話の内容はよく分からんが」

頬をかきながら、

「単に俺が、アリシアの母親が案内してくれた部屋を間違っアリて、こ  
の部屋に来てしまっただけだ。騒がせてすまなかったな。さ、みん  
な疲れてるだろう。早く休息をとったほうがいい」

と冷静に言ったのじゃった。

「……………」

儂らの声が思わずハモツた。

「……………ぼくねんじん……………」

くアリシア視点く

「もー、絶対に私のお母様が何か仕組んだんですよー!!」

みんなが非常に残念そうというか、もはやこの際、経緯はいつでもいいんじゃないか？ といった表情でこっちをチラチラしながら解散していくのを、私は見送りながら言いました。

「と、言っても……」

私は私で、チラチラっとアリアケさんの方を見てから、

「はあ」

ちょっと嘆息したのです。

確かにお母様（と、多分お父様も共犯）のたくらみは少しと言っか、だいぶやりすぎで、私の純情をどうしてくれるっ！ という感じではあるのですが……。

それでも思ってしまったのは、

（アー君にはその”たくらみ”さえ伝わってないんだろうな）

という気持ち。

ちよびつとだけ、残念だなあ、という気持ち。

だって、たくらみにさえ気づいてくれないということは、私の気持ちにも気づいてもらえていないということだから。

そして、今日もまた私の気持ちは伝わらなかったということだから……。

そう思って、ちょっとだけですが、悲しくなつたのです。

が、

「やれやれ。みんなが急に集まつて来て驚いたな。ふふふ、だがやっぱり君の母親の”たくらみ”だったんだな」

「……………へ？」

「ど、どういふことですか！？」

「『やっぱり』っていうことは、お母様の狙いを知っていたということですか！？」

「いや、君のお母様は何かたくらみ事をする時に、妙にそわそわするんだ。部屋を案内してくれた時もそうだった。だから何か企み事でもあるのかなあと思つたんだ」

「あ、あ。そ、そういうことですか」  
なるほど。

何かあるな、程度のことを思っていた、ということですね。



「ああ、君と二人きりになれる機会が……コレットたちがパーティーに入ってからというもの……ずっと、無かったからな。だから、もし二人きりになれば渡したいものがあったな」

「渡したいもの？」

「ああ。まあ、さすがに君は覚えていないだろうな……。それに、教会のちよつとしたハブニングでほとんど無くなってしまった。残ったのはこの一粒だけだ」

「えつと、これは……『種』ですか？」

私の手の平に、彼がそつと、一粒の小さな種を置いた。

別に代わり映えのない、黒い種子ですが……。

ブラック・リリィ  
「黒花の種だ」

「ふーん……。えつ！？」

私は驚きました。

そう、それは……、

「アリアケ君、何をしてるんですか？」

「ん？ やあ、アリシアか。植物に関する本を読んでいたんだ。君も読むか？」

幼いころ。

「いいの？ 邪魔ではないですか？ それにわたし、文字読めないし……」

「邪魔なもんか。ビビアとかだと覚えが悪くて困るだろうけど、アリシアならすぐ覚えられるんじゃないかな。ほら、教えてあげるから、こっちに来なよ。本が読めれば色々なことが分かって便利だよ」

「う、うん。アリアケ君」

「ほら、もっと近くに来てくれないと、それだとページが見えないよっ」

「ひゃ、ひゃい……」

そうして私と彼の距離は縮まる。

お父様がS級冒険者の私は、その村では明らかに浮いていた。

同世代の女の子たちからはいじめられたり。

あるいは腫れ物みたいな扱いだった。

でも、アリアケ君だけは……。

そのうちアー君って呼ぶようになったんだけど……。



アー君だけは私を特別扱いしなかったのだ。

普通の女の子として、扱ってくれた。

丁寧に文字を教えてくれたし、いじめられていたら守ってくれた。

逆に独りぼっちの時は声をかけてきてくれた。

でも、ある日、いじめられて、どうしても泣き止めない日があった。

「また泣かされたのか、アリシア」

「うん……。ぐす、大切な花壇をね……。ぐす」

「荒らされたのか。つまらないことをする奴らだなあ」

彼は呆れた声を出した。

いつもなら彼の声を聞いたら泣き止む私だったけど、その時はどうしても泣き止むことができなかった。

すると、

「俺がもっと綺麗な花壇を作ってやるから、もう泣くな、アリシア」

「もっと綺麗な？」

私は首をかしげました。

「それってどんな花壇？」

「ん？ そつだなあ……」

彼は少し考えてから、二人でよく見ていた植物図鑑をパラパラとめくり、あるページで止めると、

「君が図鑑の中で一番奇麗だと言っていたブラック・リリー黒花で作った花壇なんてどうだ？」

「……あ、あはは」

彼が私を慰めるために言ってくれているのが分かりました。

ウルトラ・レア級。

種一つだけでも国宝級。

一生暮らせるだけの財産を使っても、なお入手できないクラスのアイテムなのです。

そんなお花で花壇を作るなんて。

物凄く贅沢で、ちょっと想像できません。

きつと冗談。優しい嘘でした、私を慰めるための……。でも、彼が私を気遣う気持ちは伝わってきました。

私が泣いていると、彼はもっと凄いの約束をしまいそうです。

だから、私は言ったんです。

「約束、ですよ？」

「もちろんだ。だからアリシア、もう」

「うん……。もう泣かない。……。負けたりしない。アリアケ君、文字をもっと私に教えて！」

「お、元氣とやる氣が出て来たな」

「うん！ いっぱい頑張つて……。アー君に追いつくの！」

「ん？ あ、ああ。頑張ろうな？」

「うん！」

こうして私はその日から彼に追いつこうと努力するようになったのでした。

そして、頑張っているうちに、聖女としての才能があったらしく、しばらくしてブリギッテ教会からスカウトされたのです。

「あの時の約束。覚えていてくれたんですね……」

「もちろんだ。花壇を作るだけの数をそろえるのに、ずいぶん時間がかかってしまったがな。それに、せっかく集めたんだが、ほとん

ど無くなってしまった。すまん」

彼が本当にすまなさそうな顔をします。

ああ。

本当に変わらないですね、アー君。

あの時から、ずっと変わらないで、私のそばにいてくれたんですね、私のアー君。

……でもね。

でもね、アリアケさん。

聖女さんは分かってますよ？

「アリアケさん？」

「何だ？」

彼は首を傾げます。

私から何を言われるのか、まったく予測できない、といった顔で。

「その後に、私とした約束を、覚えてますか？」

「……へ？」

彼は呆気にとられたのでした。

「ふふふ。やっぱり、そこは覚えていなかったですね」

もう。

本当に困ったボクネンジンさんです！

そっちの方も覚えておいてくれたら良かったのに！

「あの時に、何か君ともう一つ約束をしたのか？」

「そうですね。うふふ、何だと思いますか？」

「うーん、何だったかな……」

ふふふ、彼の困った顔もチャーミングですね。

言っちゃいまいしょうかね。

「もし、花壇を作るなら私とあなたの……」

そう言いかけたときでした。

『カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン！』

聖都中に警鐘のけたたましい音が鳴り響いたのです。

やれやれ、どうやら……。

私は起き上がりました。

彼もすでに起き上がって、マントを羽織り始めています。

「やれやれ。どうやら、束の間の休息は終わりらしいな」

彼はそう嘆息しつつ、颯爽と杖を携えて歩き出したのでした。

私も手早く着替え、たちまち彼の後姿を追いかけます。

あの頃と変わらぬ彼を追って。

106・休息と始動　くその3　後編く（後書き）

第2巻が発売されました！表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



107・聖都動乱(ラストバトル)と本丸炎上(前書き)

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<http://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

## 107・聖都動乱（ラストバトル）と本丸炎上

### 107・ラストバトル 聖都動乱と本丸炎上

「どうした。一体何があったんだ？」

俺たちはそれぞれ一瞬で装備を整えると、アリシア邸の外へ出て、周囲の状況をぐるりと見回す。

聖都は深夜にも関わらず、異常を知らせる鐘の音が鳴り響き、混乱に満ちていた。

その混乱の原因はすぐに発見される。

「火が！ それにあの建物は教会本部です！」

「最上階！ お母様がいる場所のほうです！」

アリシアとローレイが緊迫した声で言った。

一方のフェンリルは怪訝な顔をしている。

「しかし、あの場所へたどり着くには幾つもの結界と警備をかいく

ぐらぬと、たどり着けぬ構造だと見受けるがのう。誰があそこに到達して火まで放てるのであろうか？」

「犯人はフォルトゥナだろうな。だが一人ではムリだろう。協力者がいる……。おそらくずっと姿を見せなかったアイツだろうな」

「旦那様。アイツはどいつのことじゃ？」

コレットが首を傾げた。

俺は苦笑すると、

「すぐにわかるさ。だが、だとすると、夕方の戦いも教会本部を手薄にするための陽動か」

「先生、あれが陽動なんですか!？」

ラツカライが信じられないといった様子で目を見開くが、

「そのためにドラゴンを何百年もかけて懐柔し、戦力を整えたんだらう。地下封印遺物へフォルトゥナが到達するために、な」

俺は淡々とそう答える。

「アリアケ様……。だとすれば、これは用意周到な悪魔の罠です。すでに私たちは術中にある……。お母様も敵の手に落ちてはいるはず。勝てますでしょうか？」

ローレライが不安に満ちた瞳を潤ませる。

普段は凜とした少女も、母親が窮地に陥り、切迫したこの状況に不安を感じているようだ。

しかし、

「全然大丈夫ですよ、ローレライさん!!」

アリシアの澁刺とした声が響いた。

「へ?」

ローレライの間の抜けた声を上げるが、

「うむ、アリシアのいう通りなのじゃ!」

「ですね。心配いらないと思いますよ?」

コレットとラツカライも当然とばかりに頷く。

「ど、どうして大丈夫なんですか?」

ローレライが理解できないとばかりに尋ねる。

するとフェンリルは、いつもの淡々とした余裕のある調子で一言、

「悪魔は大きなミスを犯しておるゆえなあ。何せ主様を敵に回してしまっておるのだからのう」

と言ったのである。

やれやれ。

俺は苦笑する。

そして、ぽかんとしているローレライの頭を撫でると、

「まあ、そういうことだ。悪魔が計画を始めた時、俺はまだ生まれていなかった。俺がいる時点で悪魔の計算はご破算になったも同然さ」

「ア、アリアケ様……」

彼女の瞳から不安の色が消えていく。

「それに、な」

俺は微笑みながら炎上する教会本部を見やった。

「君の母親はおそらく無事だ。何せ俺がもう一度戦つのは嫌だと思っくらいいには、強い人なんだからな」

「へ？ 戦つ？」

意味が分からないといった表情でローレライはポカンとするのだった。

ふむ。調子が戻ってきたようだな。

そんな彼女の様子を確認した俺は、他のパーティーメンバーたちも引きつれ、最後の決戦の場へと向かうのだった。

それは教会地下封印遺物といわれた場所。

アビスと言われる場所へと向かったのである。

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



108・史上最悪の裏切り者と捕食。人類捕食現象アトラク「ナ  
クア(前書き)

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

108・史上最悪の裏切り者と捕食。人類捕食現象アトラク＝ナ  
クア

108・史上最悪の裏切り者

俺たちは教会本部の炎上箇所。すなわち最上層階へと急ぐ。

「乗るのじゃ!」

コレットがドラゴンへと姿を変えて背中を低くした。

俺たちはためらいなく彼女の背中へ駆け上がる。

「しゅわっち!」

瞬時にして宙に舞い上がると、次は超高速で教会本部へと向かう。

走れば数十分はかかるであろう距離を一瞬にして踏破してしまった。

「旦那様、時間がない! このまま突っ込むのじゃ!」

「任せる!」

「ぬおおおおりゃ ああああああああああああ!」



スへと連れて行かれた。復活の儀式が完了するまでここを通すわけにはいかん」

そう言つてニチャリと嗤つたのである。

その男の名は、

「エルガー・ワーロック……」

勇者パーティーの盾と言われた男であつた。

だが今は見る影もない。

今の彼はまさに、

「くくく。俺の筋肉をもつてすれば、ブリギッテ教徒だと偽り侵入することは簡単だつたぞ。俺こそが最も強く美しい筋肉を持つ男！ この国を守る正義の盾だ！ フォルトウナ様はその力を俺に与えてくれた！！ フォルトウナ様復活の暁には、俺に更なる筋肉を与えて下さる！！」

悪魔の化身となり、俺たちの行く手を阻んだのである。

「ぐははははは！ フォルトウナ様から貰つたこの体、素晴らしい筋肉が！ 躍動する！ たまらぬ！ たまらん！」

「先生！ エルガーさんが固いです！ とうか、あんまり近づきたくありません！」

エルガーが興奮した口調で、俺たちの行く手を阻む<sup>はば</sup>。

細い通路を活かして、効果的に俺たちを足止めしていた。

本来は倒すことなど造作もない敵だ。しかも今は史上最悪の裏切り者。倒すことをためらう理由はない。

だが、悪魔の力によって固くなったうえに、相当気持ち悪いこともあって、女性陣中心のパーティーはなかなかきつかった。

なんと卑劣な。

勝手の違う相手に俺たちは若干の足止めをくらっていたのだった。しかし、

「あー、もう鬱陶しいですね〜！ 私がワンパンしますので！」

若干切れ気味でアリシアが貧乏くじを引くことを決めた。

そして、彼女が拳に力を込め、エルガーへと渾身の一撃を放とうとした、その時である。

「もう、結構ですよ、エルガーさん」

ず……ず……ず……ず……

いつの間にか。

通路の奥。

そこにそれはいた。

髪も体も真っ白で、高い天井に届くほどの巨体。

しかし、その姿は容易には形容したがたい。

下半身は蜘蛛のようで、複眼が無数についていて、八本の節足が巨体を支えていた。

その上には、人の上半身がくっついていて。一見美しい少女が目を閉じて鎮座しているように見えた。しかし、その両手はやはり昆虫の手足のような節くれだった形状をしていて異常に長く、何よりその全身の白い体躯とは裏腹に、あふれ出る異様な魔力に周囲は暗黒瘴気に満ちている。

「おお！ フォルトウナ様！ ついに真の姿を取り戻されたのですね！」

しかし、エルガーは満面の笑顔で蜘蛛少女へと近づいていく。

「エルガー！ 近づくな！ そいつは！」

俺は声を上げる。

彼だって知っているはずだ。俺が何度も勇者パーティーたちのメンバーに教えてやった。

かつてはるかな神話時代。

世界に八本の足を持つ美しい殺戮者がいた。その者は白い体を持ち、美しい少女のいでたちをしていた。

だが、

「その少女の体が白いと知っている者はいなかった。なぜなら」

そう、なぜなら、

「さあ！ フォルトウナ様！ この俺に最強の肉体を！ 筋肉を！ この世界で最も優れた男にしてくれ！ 約束だろうー！！」

エルガーの歓喜の叫びに、フォルトウナは目を閉じたまま、かすかに微笑みを浮かべると、

「ええ、約束を、守りましょう。エルガー・ワーロック。己の欲望に素直なる渴愛の僕よ」

そう言つて、蜘蛛の体の口の部分が、ガバと開いた。粘液を引き、乱杭歯を生やした悍ましいその口腔。

エルガーは何をされるのか分からず、ただただポカンとして、

「は？」

間の抜けたつぶやきを上げるだけだった。

次の瞬間、

ブシューウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！

「ぎ、ぎやあああああああああああああああああああああああ  
あああ！？！？！？！？！？！　あああああああああああああああ  
ああああ！！！！！！！　　いだいいいいいいいいいいいいいい  
い！？！？！？」

フォルトウナはエルガーの下半身に噛みついた。

そして、そのままズルズルと口の中に吸い込み始めたのである！

「な、なぜ！　なゑだ！？　フォルトウナ様！　フォルトウナ様  
つ……！！　う、裏切ったな！　このアバズレがああああああああ  
あああああああああああ！」

目を血走らせ、唾を飛ばしながら、フォルトウナを罵倒する。

「ああ、美味しい。美味しい。やはり食事は人間に限ります。30  
0年。長かった。どれだけこの時を待っていたことか。我が渴愛が  
満たされる。ふふ、うふふふ。あは、あはははは」

少女は軽やかに笑った。

「それにエルガーさん。私は嘘などついていませんよ」

「な、なにいいいいい！　ならこの口を離せ！　クソが！　クソが  
！　クソアマガあああああああああ！」

「それは出来ません。なぜなら、私の一部になることで、あなたは





駆けだそうとする俺は足を止める。俺の少し前方に、いつの間にか見えないほどの細い糸が張られていた。

ラツカライが聖槍で切り裂く。

「よく<sup>かわ</sup>躲しました。触れば体を切断してさしあげていたのですが……」

少女は美しく微笑む。

その間にも、エルガーはすでに吸収されていた。彼の血しぶきによってフォルトウナの体は赤く染まっている。そして、その体も一回り大きくなった。人を捕食し更に強くなったか。

……人類捕食現象アトラクナクア。

その白い姿を見たものはいない。なぜなら、

「お前の前に立つ者は、糸に切断されるか、その足でなます切りにされるか、あるいは捕食されたという。ゆえに、その体は常に赤く染まっていたと伝えられている……」

その言葉に、フォルトウナはその美しい唇を裂けんばかりに横に歪めると、

「うふふ、まだまだ足りません。300年の空腹を満たすには。ですが……、あなたたちはメインディッシュ。私が復活したということとは、この世界の<sup>人類</sup>終わりを意味する。その前菜をつとめるならば、やはりふさわしいのは魔王か、聖剣の担い手……。近くにいるのは

……」

彼女はそう言っつて、蜘蛛の体についた目をぎよるぎよると動かすと、

「聖剣の担い手……。地下ですか。ふふふ、今行きますよ」

そう言っつて、外壁を軽々とぶち破ると、そのまま外へと身を投じたのである。

「逃げたわけではないのであろうなあ」

「はい、地下と言っつてました。おそらく地下牢のことかと」

とすると……。

「おそらく勇者パーティーを取り込むつもりだね。あー、いたたたたた……」

軽い口調で一人の女性が現れた。

それは、

「大教皇リズレット・アルカノン！」

「お母様！ ご無事だったんですね！」

だが、その体は満身創痍でボロボロであり、腕などは取れかけている。

生きているのが不思議なくらいだ。

相当の抵抗をしたらしいな……。

急いで回復させる必要があるだろう。

だが、その前に、

「初めまして、かな」

「ええ、そうですね」

死にかけの大教皇を支えて、ここまで連れてきた人物がもう一人いた。

それは、

「始祖ブリギッテ、でいいか？」

「はあ。私つていつの間にか宗教にされちゃったんですか？ まあ、恥ずかしいですが、それで結構ですよ。真の賢者アリアケ・ミハマ様」

彼女はそう言うと、ニコリと微笑んで、

「シングレットタ神のお導きのままに」

そう聖句を唱えたのであった。

108・史上最悪の裏切り者と捕食。人類捕食現象アトラクナ  
クア（後書き）

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いてお  
きますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガ  
ンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもら  
えたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

[https://magazine.jp.square-eni  
x.com/sqexnovel/series/detail/  
yusyaparty/](https://magazine.jp.square-eni<br/>x.com/sqexnovel/series/detail/<br/>yusyaparty/)

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「エルガーは今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

109・疾走、情報交換。人の天敵（前書き）

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

109・疾走、情報交換。人の天敵

109・疾走、情報交換。人の天敵

「時間がない。走りながら情報を整理しよう。結局今回の事件というのは、300年前から始まっているという事でいいんだな？」

俺たちは教会地下へと疾走しながら情報交換を行う。

疾走というか落下か。

俺たちは教会本部の外壁を駆け下りていた。

アリシアが回復させた大教皇リズレットは、傷は治ったものの、体力と精神の回復を待たねばならないので置いてきている。

ともかく時間がなかった。

「その通りです。渴愛の悪魔フォルトゥナ。神話時代において生物の位階が定まらなかつた遥かな昔、人類の捕食者天敵という上位概念として生まれた『アトラク・リナクア現象』。しかし、神々によってその概念は否定され、地下封印遺物アビスへと封印されました。でも……」

「何かがきっかけて、300年前に復活した。それをブリギッテ。あなたが封じたというわけだな」



「そうです。友達のゲシユペント・ドラゴンの王にはひどく反対されましたが。この辺りを吹っ飛ばす！　と言って聞きませんでした  
が」

ブリギッテは困ったような微笑みを浮かべる。

「ちなみに、そのシャーロット王の娘が、このコレットだ」

「のじゃ！」

「まあ！？　そうなんですか！？」

ブリギッテは驚いたあと、嬉しそうに微笑んだ。

「とすると、やはりシャーロット王が聖都を吹き飛ばそうとしたのは、君を封印の役目から解放するためか」

「あら、そんなことがあったんですか？　あらあら、あの人つたら相変わらず短気で困った王ねえ」

彼女はケラケラとしてから、

「ただ、確かにもう限界でした。私の結界は300年がたち、魔力が弱まっていた。そして、現象であるフォルトウナを完全に封じることが出来なくなった。教会はフォルトウナの瘴気を限りなく薄れさせたけど、漏れていることには変わりなかった。彼女はまるで靄のように私の封印から少しづつ抜け出し、夢のように、現まのように実体を結び、欲望を持つ者の心を300年かけてゆっくりと犯し操ったのです」

「フレッドや他の同胞たちも欲望を操られたわけだったのじゃな」

「そういうことだな。勇者ビビアたちすら操る奴だ。相当なレベルの洗脳術だと思った方がいいだろう」

「そうでしょうか。勇者様たちは何だかイキイキしていたように見えましたが？」

ローレライが淡々とした口調で言った。

「こほん。結果、操られた勇者やドラゴンたちは歴史的な大規模陽動を仕掛け、その間隙をつき、強化され操られたエルガーが、リズレットを襲い、地下へと下りて封印を解除したというわけか。そして、一足先に俺たちを待ち受けていた」

「それでブリギッテ様。あの悪魔の目的は結局なんなんですか？」

アリシアが核心を問うた。

もう地面だ。

「それは簡単です。あれは生物ではなく『現象』。神話時代に生命の頂点を人とすることに反対する神が生み出した人類の『天敵』。ならその目的は」

その意味するところは……。

アリシアがごくりと喉を鳴らした。



第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

110・人類の最期とアトラク「ナクアの子供たち」アイホート  
「(前書き)

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買っても  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyparty/>

「110・人類の最期とアトラクⅡナクアの子供たち」「アイホート」

110・人類の最期とアトラクⅡナクアの子供たち「アイホート」

「「「うわあああああああ！」「」」

地上へと降り立った俺たちが見たものは、聖都『セプテノ』の変わり果てた姿。逃げまどい絶望する人々という地獄絵図であった。

建物の間には、悪魔フォルトウナ……。いや、今は正体を顕現させた人類の天敵アトラクⅡナクア……。奴が張り巡らせた糸がそこかしこに張り巡らされていた。

いや、そこかしこ、どころではない。

「い、糸に絡めとられて……。引き寄せられる！ た、助けてくれえええええ！！！！？？？」

網にかかった人々は、いくらもがこうとも脱出することが出来ず、ある者はその糸に絡めとられて、ズルズルとアトラクⅡナクアの口元まで運ばれて捕食される。

またある者は、

「ち、力が抜けていく……。だ、誰か、た、たすけ……」

糸に生命力を吸いつくされ、みるみる骨と皮になり、変わり果てた姿へと変貌した。

聖都セプテノは広大な都市だ。だが、奴は顕現したほんの一瞬で、聖都全体を絶望の糸で覆ってしまったのである。

「この聖都全体が今や奴の巢の中であり、そこにいる人々は単なる食糧というわけか」

俺の言葉に、

「そんな、たった一体で聖都を……。信じられない」

「ゆえに人類の天敵……。人を食べることに特化した上位生命体」

アリシアとローレイが息を飲む。

「まずいのじゃ！ このまんまでは聖都が一晩ともたん！」

「それどころではないのう。このスピードならば、明日には近隣の都市が全て丸のみよ。本当に近くこの国は……。いや人類全体が滅亡するであろうって」

コレットとフェンリルが言った。

その時である。





俺とブリギッテが同時に正体に気づき警告を発する。

そう、この小さな、だが恐ろしい致死性を持つ蜘蛛たちこそが、神話においてもっとも人を殺戮した元凶だったからだ。

しかし、

「きゃっ!?!」

アリシアが悲鳴を上げた。

「す、すみません。い、一匹口の中に……」

「入ったか!」

俺の問いかけに、アリシアは、

「わ、私死んでしまうんですね……。あ、あはは、こ、こんな死に方をすると、お、思いませんでしたか」

軽い調子で言う。

しかし、カチカチと歯を鳴っていた。

「フ、フラグ回収ですね。私の弱点は自分には蘇生魔術をかけられないことですからね。いやー、最後までドジですみませんでした。どうして……。いつもアリアケさんの前では、こつなんでしょうか」

彼女は困ったような表情で俺を見つめながら、

「そうだ！ どうせ死ぬのでしたら、アリアケさんにちゃんと伝えておきたいことがあるんです。私、ずっと、あなたの……」

「馬鹿を言つな」

「へ？」

俺は彼女が何を言うのか聞くつもりもなく、言下に否定した。

「俺がお前を死なせるはずがないだろう？」

「で、でも。神話では助かる手段はないって」

「そんなことはない」

俺は余裕の風を装って言う。

断固として否定した。

「神話の最終章ではこう伝わっている。アトラク＝ナクアが封印された時、その子供たちも同時に消滅した、と。つまり、俺たちの目的は何も変わらない。俺たち賢者パーティーで、あの化け物を倒せばそれで済む話だ」

俺の言葉に、

「なんじゃ！ それじゃったら儂でも何とかやれそうなのじゃ！」

「ボクも全力を尽くします！ お姉様を助けます！」

「我也従僕ゆえ、役目を果たそうとするかのう。せつかくゆえ、ハッピーエンドを見たいとも思っておるゆえなあ」

「ローレイ・カナリア……。いえ、ローレイ・アルカノン！ 行政区長の娘として、この聖都とアリシアさんを救います！」

パーティーの皆が次々に声を上げた。

皆さの言葉に俺は頷く、

「そうだ、いつもとやることは変わらない。俺たちは最高のパーティーだ。誰も傷つかず、ついでに世界も救う。だから」

俺はアリシアの方を優しく見やり、

「安心しろ、アリシア。お前のことは俺が守る。幼いころに約束しただろう？」

「アー君……。あの時の約束……。覚えて……」

そんな会話の最中であつたが、

「第2波！ 第3波！ えーっと、沢山ですね！ 数えきれないほど来ます、先生！ そ、それに生き残っている市民の人たちにも襲い掛かるうとしています！」

「倒しながら前進！ それに生き残っている奴らを助けないわけには行かない！ 各自遊撃しつつ、連携して進むぞ！ 円陣を組め！」

蜘蛛一匹通すな！」

「……………おう！」「……………」

俺たちは密集陣形をとりながら前進する。

「邪魔ーなのーじゃあああああああああああああ！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

コレットの火の玉が着弾し、アイホートを焼き尽くせば、

「どっせえええええええええええええええええい！！！」

アリシアの正拳突きによる衝撃が直線状の蜘蛛たちを粉々に引き裂く。

「ブリザード・ジャベリン！」

「ファイヤーランス！」

フェンリルとローレイが攻撃魔法で一掃していった。

「大丈夫ですか！ はあ！」

「た、助かりました！ た、確かあなたは聖槍の使い手ラツカライ様……………！」

「ボクのことはどうでもいいです！ さあ、ボクたちが来た方向はまだ安全です！ そっちへ！」

「あ、ありがとうございます！ さ、さすがお噂に聞くアリアケ様  
ご一行様だ！」

「国教の救世主様に違いない！！」

「いいから早く！」

いちいち拝もうとするブリギッテ教徒たちを急かしたてながら、俺  
たちは前進する。

まさに四方八方から。

千を。万を。無数の蜘蛛アイホートが津波のように押し寄せてきた。

それを俺たちは次々と排除していく。

「スピードアップ（強）」

「動体視力向上（強）」

「回避率アップ（強）」

「直感付与」

俺は多重スキルを使用し、戦力を数倍に向上させる。そして、並外  
れた賢者パーティーの攻防一体の連携力を更に強化した。

そして、

「フォルトウナ彼女は……あっちにいるようです」

ブリギッテがある方向を指し示す。

「どうして分かるのじゃ？」

コレットが首をかしげる。すると、

「それはアリアケ様がよくご存じかと」

ますます首を傾げるコレットに、俺は苦笑を浮かべるのだった。

やれやれ、あいつには苦勞をかけるな。

「死んでないといいが……」

こうして俺たちは少しずつではあるが、確実に、人類に最期をもたらす現象アトラク＝ナクアへと迫って行ったのであった。

110・人類の最期とアトラク「ナクアの子供たち」アイホート  
」（後書き）

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガ  
ンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもら  
えたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「賢者パーティーは今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持



ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

111・互いの短剣(前書き)

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買っても  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

## 111 互いの短剣

### 111 互いの短剣

「いましたよ、アリアケさん！」

アリシアが言った。

俺たちはアトラク<sup>アイ</sup>ナクア<sup>ホト</sup>の子供たちを蹴散らしつつ、そして住民たちを救いながら前進し、ついに再び人類の天敵アトラク<sup>アイ</sup>ナクアと遭遇する。

その姿は最初会った時よりも数段巨大化していた。

先ほどまではせいぜい5メートル程度であったのが、今は10メートル……。いや、それ以上の巨軀<sup>きよく</sup>の化け物へと変わっていたのだ。

「早かったんですね？ ですが、久しぶりの食事は堪能できました。おかげ様でほら、こんなに育ちました」

彼女……いや、かつてフォルトゥナと呼ばれたものは、巨体にも関わらずクルリと回った。

化物のはずがその姿はどこか優雅だ。

そんな彼女は微笑みながら口を開いた。

「ですが、メイン勇者で「マ」ディッシュはまだ食べていませんよ。強力な悪魔除けの札が張られていたものですから」

見れば彼女の後ろには、糸でぐるぐる巻きとなり、口から泡とよだれを垂らした哀れな姿で、ビビア、テリア、プララたちがいた。

「それにしても、本当に驚きました。一番信賴していたのに」

彼女がそう言っつて、一人の人間をそつと手前に置いた。

それは……。

「バシユータ！」

「は、はは。旦那、お久しぶり……」

満身創痍で息をするのも苦しそうだ。

だが、生きている！

「これは単なる興味なのですが、彼をいつ洗脳から解放したのですか？ そんなタイミングはなかったと思うのですが……」

渴愛の悪魔は美しい少女の顔を微笑ませながら、蜘蛛の体より糸を四方へと吐き出した。

それと同時に、メインディッシュが逆さづりになる。

「最初からさ」

「そうなのですか？」

悪魔がぼかんとした。

「最初にお前たちが襲撃してきた時、バシュータが煙幕を使っただろう？　だが、あそこで煙幕を使う必要はない。別に攻撃を仕掛けるわけでもないしな。あれは俺の目を欺くためではなく、フォルトウナ、お前の目を欺くためのものだ。バシュータが俺の指示を聞くためのな」

「そうだったのですか。ですが、どうして私の洗脳が効いていなかったのですか？」

「以前、彼には俺の状態異常無効スキルを使ったことがある。それが残っていた」

「持続強化スキルとの併用ですね。普通はそれほど長く持続することなどないのですが、あなたならば不思議ではありませんね」

ことの顛末を全て聞いても、フォルトウナはやはり微笑んだままであった。

白亜色の蜘蛛の体に美しい女性の半身を載せた悍ましいフォルムだが、どこか神秘的ですらある。

「やはり最初にアリアケ様。あなたを仕留めることが出来なかったのが失敗でしたね。あなたの差し金で、ブリギッテ様やリズレット様も捕食できませんでした。300年準備した計画をずいぶん練り直したのですよ。せつかく作ったレギオンは元々陽動のつもりでしたが、まさか全滅するとは思っていませんでしたし」

彼女はおかしそうにクスクスと笑った。

そして、言った。

「ところでアリアケ様。気づいていらっしゃいますか？」

「何をだ？」

俺は首をかしげる。

「あなたが私の喉元に短剣を突き付けていたように」

彼女はやはり透明に微笑みながら、

「私もあなたの喉元に短剣を突き付けていたのですよ？　ねえ？」

そう言って、俺の背後に立つ少女の名を呼んだ。

「ローレライ・カナリア様？」

その瞬間。

ズバツ！！！！

ローレイのふわふわとした緑の髪がひるがえるのと同時に、その手に持った短剣が、俺を背後から突き刺し、貫通したのであった。

111 互いの短剣（後書き）

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「賢者パーティーは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち



ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

112・切り札。ドラゴンの財宝。聖杖『ケルキオン』（前書き）

・2021・6・8サブタイトル変更並びに内容微修正  
・第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買って  
もらってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

112・切り札。ドラゴンの財宝。聖杖『ケルキオン』

112・切り札。ドラゴンの財宝。聖杖『ケルキオン』

俺の背中に熱い衝撃が走る。

「ローレ……ライ……」

俺を貫通したナイフがローレイライによって引き抜かれると、ドバドバと大量の血が噴き出した。

「残念でしたね、アリアケ様」

フォルトウナが美しい声で謳<sup>うた</sup>う様に言った。

「私の喉元に短剣を突き付けていたおつもりだったようですが、それは浅知恵というものです」

彼女は慈悲深く微笑むと、

「おかしいと思いませんか？ あなたを最初襲った時、どうしてローレイライ様だけが正気だったのか。理由は簡単ですね。そう言う風に私が仕向けたからです」

ローレライは冷めた表情で、倒れた俺の方など一顧だにせず、ゆっくりとフォルトゥナの方へと歩いていった。

その行動を止めることが出来るものなど誰もいない。

「さて、では一番の敵であるアリアケ様は仕留めました。次はバシユータ様を殺しておくのがいいですね。個人の戦闘力は大したことがないのに、人と言うのは不思議な生命力が備わっているものです。さあ、ローレライ様？」

「分かり……ました……」

彼女は血の付いたナイフをハンカチで拭くと、フォルトゥナの前に立ち、その足元に転がるバシユータの方を見た。

「目を……覚ませ、ローレライ……。あんたらしくもない」

「私らしさとは何ですか？ バシユータさん？」

彼女はナイフを振り上げながら聞いた。

「いつも冷静で、周りを和ませていたアンタらしくもない。みすみす悪魔なんかには操られるタマじゃないだろう」

その言葉にも、やはり彼女は一切表情を変えない。

いつもならしない無表情で答えた。

「それは無理ですよ、バシユータさん」



やれやれと、俺は服の埃ほこりを落としながら立ち上がる。刺されたと見せかけたのはスキル フェイク による目くらましだ。

「バシユータが煙玉を使った際に洗脳をスキル 状態異常解除 で回復させた。お前の言った通り、おかしいと思ったさ。ローレイだけ正気だったんだからな。当然、この俺が気づかないはずもなからう？」

「なるほど。それは分かりました。ですが、解げせません……。本当に解げせないのです……」

彼女はローレイに傷つけられた体を、信じられないものを見つめるかのように言った。

「人類の上位存在たる私に攻撃は効かないのです。無効のはずなのですが……。なのに、ローレイ様の攻撃は、まるで私の体を傷つけたように見えます。これもアリアケ様のスキルによる錯覚なのですか？」

「いいや。人類の短剣は確かにあなたに届いた」

俺はそう言いながら、杖を構える。

「切り札の一つや二つ、用意しておくものさ」

七色に光る宝玉が美しく魔力の錬成を行う。それを見て、フォルトウナの瞳が見開かれる。

「アリアケ・ミハマ様……。その杖をいつからお持ちになったので

すか？ 出会った時は持っていなかったはず」

「シャーロット王との飲み比べで勝ったんでな。昨夜のうちに、一番良い杖をくれと言った。知っているか？ ドラゴンは財宝をため込むものだ」

「それが聖剣ラングリス、聖槍ブリューナク、聖弓ミストルティンと並ぶ第4の聖具。『大賢者の杖ケルキオン』であることもご存じなのですね？」

「無論だ。そして、あるとすればドラゴン王の宝物庫だろうとも思っていたさ」

俺は頷きながら、付け加える。

「それに、俺以外に誰がこの杖を所有する資格がある？」

俺はそう言つと、聖杖の固有スキル 人類の剣 をパーティーメンバー全員へと行使する。

それは人類の危機に際して、決して折れない『剣』となるスキル。

たとえ相手が神であれ、上位の存在であれ、人類を捕食する神話時代からの天敵であれ、

「決して負けない人類の砦となるスキル」

これによって、人類の短剣は、その天敵に刃を届かせることが出来るだろう。

「さあ、始めようじゃないか、人類捕食現象アトラク＝ナクア」

俺たち賢者パーティーが陣形を作る。

「人類の砦<sup>切り札</sup>たる俺を倒し、人を滅亡させることが果たして出来るかな？」

こうして、人類の存亡を決する戦いの火蓋<sup>ひふた</sup>が、俺の言葉とともに切  
って落とされたのであった。



112・切り札。ドラゴンの財宝。聖杖『ケルキオン』（後書き）

第2巻が発売されました！表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「賢者パーティーは今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

113・『超』大規模戦。逆転（前書き）

・第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買って  
もらってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>



闘は不可能だ。出し惜しみはなしだ！ 避難は？」

「完了しているかと！」

「よし、多重スキル！！」

人類の脅威殲滅（超）

攻撃力アップ（超）

クリティカル率アップ（超）

素早さアップ（超）

容赦なくスキルを使用する。

神話の戦いに人類の常識など通用しない。

こと、俺が聖杖キルケオンを引っ張り出すほどの戦いには！

「少し熱かったです、この程度では効きません」

地形が崩壊するほどのコレットの攻撃を受けても、アトラク＝ナクアはやはり微笑んでいる。

「では、次はこちらから」

そう囁くと、閉じがちだった瞳を大きく見開く。

「！！ 最高位結界！ 呪殺無効！！」

「私も手伝います!!!」

俺たちの前に10枚はあるかという大結界が重なるように張られる。

それは現代最高の聖女であるアリシア・ルンデベルクと始祖ブリギッテの、神の攻撃さえも弾かんとする聖なる盾だ。

パン!!!!!!

だが、

「一枚……」

パン!!!!!!

「二枚……」

パンンンンンン!

「三枚……四枚……」

最高位結界がアトラク＝ナクアの瞳に見つめられるだけで、崩壊していく。

と、同時に、

『ボン』

間抜けな音が背後から聞こえた。







さすがに超巨大建造物である教会本部を倒壊させるには至らず、アトラク＝ナクアをそこに勢いよくぶつかって止まった。

だが、フェンリルの攻撃は止まらない。

フェンリルが咆哮ほろを響かせるのと同時に、

『ギチギチギチギチギチギチギチギチギチ』

肉の弾けるような音が聖都へと鳴り響いた。

「アトラク＝ナクアの上半身をかみちぎろうとしているんですね！」

「違う、逆だ！ フェンリル、離脱しろ！」

「へ？」

ローレライがポカンした声を上げるが、

「お前が捕食される」

「なっ!？」

そう、信じられないだろうが、フェンリルがまさに追い詰められていた。

フェンリルの噛みついた口元に、アトラク＝ナクアの上半身。ほんの小さな少女の唇がそっと触れていた。

そこから、

「グ、グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！???!」

「さすがに美味ですね。千年を生きる獣というのは味わい深いものです」

まるでその光景は蛇。

何倍も大きい相手を、どういう理屈なのか、少女の唇が大きく広がっていき、どんどんとフェンリルの頭部を飲み込み始めたのだ。

「ラツカライ!!」

「はい、先生！ ごめんなさい、フェンリルお姉様！ ディメンション・スピア 次元切断！」

ラツカライが聖槍ブリューナクの奥義を使用する。

その奥義によって、直線状の物体が全て切断されて行った！

そして、

「グオオオオオオオオオオオ！ ふうふう、ふ、ふふ、助かったのう……。ちと痛いのがのう……」

フェンリルが後退してくる。

その頭部の前方部分をラツカライに切除されたままに。

「い、いめんなさい!」

「謝るなど不要よ。あのままでは我が食われておったことくらい理解しておるゆえの。アリシア？」

「エンジェル・スコール 大天使の優しい雨！」

欠損はすぐに回復していく。

やれやれ。

それにしても、気にしないと言ったものの。

「聖都を崩壊させるほどの戦いをしておきながら、ノーダメージとは、何だか申し訳ないな」

俺は苦笑する。

周囲を見れば、美しい聖都は今や、断崖絶壁や蒸発した大地、そこかしこから吹きあがる熱水、崩落寸前の大地。そして、まるでかじられたようなシュールな街並みと瓦礫といった風景になっていた。

「諦めてはいかがですか？」

と、そんな俺たちに向かって、無傷のアトラク＝ナクアがゆっくりと迫ってくる。

（いや、完全に無傷と言うわけではない）

俺は首を横に振る。

余りにも回復が早く、あたかも無傷に見えるのだ。

(それを確認するために、彼女に最初わざわざ危ない橋をわたってもらったのだから)

「あなたたちの上位存在に食べられるのは自然の理しんりではないですか？」

彼女はやはり余りに白い美しい顔に微笑みを浮かべて、謳うように、毒のように、

「さあ、早く私の血肉におなりなさい。美味しい私の家畜たち」

「ふむ、だいたいその位置かな？」

と、俺は彼女がゆっくりと近づいて来たのを眺めてから、頷きながら言った。

「……何をおっしゃっているのですか？」

一方のフォルトウナは純粋な疑問といった風に首を傾げた。

「いや、別に大したことじゃないさ」

俺は首を横に振りながら、

「ただ、作戦通り、パーティー全員の力で、お前をその位置まで移動させることにまんまと成功したな、と思ってな」

俺はそう言いながら、杖を真上に構える。

「位置……。位置……。この場所は、教会本部の前……。それが一体……。あつ」

「観光していた時に聖都のすべての位置関係は確認済みだ。あれはあの場所は」

そう、

「地下封印遺物のある場所は、ちょうどお前の真下だよ、人類捕食現象アトラク<sup>アビス</sup>ナクア！」

俺はそう言うのと同時に、スキルを使用する。

「攻撃力強化！」

「巨人の力 付与！」

「筋力強化！」

「防御力ダウン付与！」

そして、

「決戦 付与！」

その力を俺は、

「アリシア！ そしてブリギッテ！」

「はい！」「ええ！」





ええええ、くそがあああああああああああああああああああ  
！！！！」

そう叫びながら、聖剣ラングリスによって、生成されたばかりの糸  
が真つ二つに両断されたのである。

「ぎゃーっはっはっはっはっはっは！　ざまあああああああああ  
ああ！　俺を操るなんてまねしやがったからだ、ボケがああああ  
ああああああああああ」

「あなたのような虫けらが私の糸を切れるわけが……。いえ、違う  
……。これがアリアケ・ミハマ様の力……。シングレットタ神に認め  
られるということなのですわね」

「　落下ダメージ無効！　」

俺がスキルを行使する声とともに、大崩落を起こす大地はそこにい  
た全員を飲み込みながら、地下封印遺物へと落下していったのであ  
る。



113・『超』大規模戦。逆転（後書き）

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「賢者パーティーは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

114・花の聖域(前書き)

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

## 114 花の聖域

### 114 花の聖域

地下へ落下した俺たちはすぐに立ち上がる。

「残念ですが、この程度のことので、私を倒すことはできませんよ？」

同時に、アトラク<sup>ク</sup>ナクアが無傷の状態で言った。

数百メートルを落下したにも関わらず、全くダメージを受けていないらしい。

「落とし穴におとしても私は傷つけられませんよ？」

おかしそうに微笑んだ。

「それとも、地下封印遺物アビスにまた封印しようとしても企んでいるのですか？」

彼女は少し首をかしげて、

「ですが、それも無駄ですよ？ 前回のようになドラゴンたちが総力

戦を行い、最高の聖女だったブリギッテが共闘を行い、やっと30年の封印に成功したのですから。ですが、今回そんな用意はさせません。そのためにドラゴンたちを洗脳したのですから」

彼女は微笑んで周囲をゆっくりとみまわした。

俺がスキルを使用したにも関わらず、暴れていた勇者は落下の衝撃をくらったようで一人地面に伸びている。

「さあ」

アトラク「ナクアがゆっくりと迫ってきた。

「今度こそ終わりですね。楽しませてもらいましたよ。上位者の私を楽しませた上にお腹も満たしてくれるのですから褒めてあげないといけませんね」

しかし、そんな彼女の言葉を聞いて、俺はやれやれと肩をすくめたのである。

「何を言っている？」

俺は微笑みながら、

「別にお前に攻撃をしようとしたわけではないぞ？」

「……どういふことですか？」

俺はもう一度肩をすくめると、

「俺はただアリシアをこの場所へ連れて来たかっただけさ」

そう。

アリシア・ルンデベルクを。

歴史上、最高の回復術士を。

そして。

歴史上、最高のポーター<sup>賢者</sup>である俺とともに。

「約束の、最高の花畑と一緒に見たかっただけだ」

「花？ ……さっきから一体何を言っているのですか？」

そう。

お前は見ていないだろう。

復活してすぐに上層階へのぼってきたお前は見逃した。

この部屋の扉の前にひっそりと咲いた、その美しい花々を。

魔を吸収し浄化する、聖なる花のことを。

「まさかこれは。ブラック・リリィ、どうしてここに？」

アトラク＝ナクアが初めて驚いた表情を浮かべた。

「俺がプレゼントのために集めたからだ！ さあ、アリシア！」

「うん、アー君！ きて！」

俺は聖杖『キルケオン』をかかげた。

「進化促進（超）！」

「神聖魔法強化（超）！」

「魔力強化（超）！」

「神々の恩恵！」

俺のスキルに呼応して、アリシアが詠唱を開始する。

「星の息吹よ！ 今ここに命宿らす癒しをもたらせ！ 聖級回復魔

法！ 最も原初フェイース・オリジンなる天地創造の雨！！」

俺のスキルによって、普段使えない上級の更フェイース・オリジンに上……。それこそ神話にしか登場しない聖級魔法をアリシアは使用する。

それは損なわれたものを修復するという回復フェイース・オリジンという概念の枠を超え、新たな命を宿すという神々のみに許された原初魔法。

「回復魔法？ それで一体何を……」

次の瞬間。

「……」。

トヨコ……。トヨコ……。トヨコ……。

トヨコ……。トヨコ……。トヨコ……。トヨコ……。トヨコ……。

「これ……は……芽？」

彼女が茫然としている間にも、その地面を割って生えた芽は、地下封印遺物を覆うように広がり、地下の地表すべてを一瞬で緑色に変えた。

そして、次の瞬間。

サア……。

「わあ……………」

アリシアが感動するように呟いた。

「図鑑で見た通り。本当に奇麗……………」

そう。広がったブラック・リリーの花々だった。

アリシアの命を生み出す聖級魔法によって、ブラック・リリーが地表を覆うほどに増えたのだ。

地下封印遺物の悍ましい光景が幻想的な花園へと変わる。

「よし……。コレット……！」



「あいあいさー！ 喰・ら・う・のじゃあああああああ！」  
そう叫びながら火球を吐き出す！

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオン。

数千度の火球が直撃し、大轟音を立てた。

しかし、

「無駄です」

涼しい声でアトラク「ナクアが言った。

「さつきと同じですよ。多少熱いですが、それだけです。こんな火傷もすぐに回復して……」

だが、彼女は最後まで言うことができなかった。

なぜなら、

「なぜ、回復しないのですか？」

「そんなことは決まっているだろう」

俺は彼女の疑問にあっさりと答えた。

「ブラック・リリィは邪悪を吸い取り浄化する聖なる花。ここはそ

の花園」

何より、

「俺とアリシアが協力して作り上げた花園だ。いわばここは世界で最も清らかな『聖域』。傷どころか死者の存在さえ拒むほどのな」

「あなたは、まさか、そのために、私をここへ落とすとしたというのですか？」

彼女は俺をまっすぐに見ながら、

「最初から計算して？」

だが、それにも俺はあっさりと、肩をすくめながら、

「当たり前だろう？」

それに、

「言ったはずだぞ？」

俺は杖を掲げる。

「切り札の一つや二つは用意するものだ、とな」

その言葉に、アトラク＝ナクアの顔から初めて表情が消えたのだ。た。

114・花の聖域（後書き）

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「賢者パーティーは今後どうなるのっ………!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

115・再・総力戦（前書き）

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

115・再・総力戦

115・再・総力戦

「聖域に私を誘い込んだくらいで良い気にならないでもらいましょう。私は……」

微笑みを消したアトラク「ナクアは俺たちを初めてまともに見た。

そして、ゆつくりとはつきりと告げる。

「私は人類捕食現象アトラク「ナクア。あなたたちの天敵。人類を死滅させることに特化した星の意思……」

彼女の体内から、見たことのないほどの数の『アイホート』があふれ出す。

「私の全存在。全生命。全能力を使い……」

いや、それだけではない。

「あなたたち人類を死に絶えさせましょう」

『ギイイイイイイイイイイイイイイイイイ！』

『アイホート』の中には、見たことのない個体が多数含まれていた。



オオオオオオ！！！！』

少女が黄金の光を放ちながら、真の姿を取り戻す。

黄金竜としての神のごとき力が解放される。

『ラス・ヒューリイイイイ  
焰よ立て！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオン！！！！

コレットの一撃はアトラク<sup>II</sup>ナクアとアイホートを巻き込みながら  
大爆発を起こした。

ここが地下封印遺物でなければ、大地は蒸発し、何も残らない不毛  
の大地になるほどの超爆発だ。

だが、

「ギイ！　ギイ！　ギイ！　ギイイイ！　ギシッシシッシシシシ  
イイイイイ！！」

大きな蜘蛛たちが重なりあうようにして、隙間のない大きな盾のよ  
うになり、アトラク<sup>II</sup>ナクアと他の奥にいる個体たちを守った。

そして、無事だった個体たちは何のためらいもなく表面の焼け焦げ  
た仲間の死骸を押しつけ、再び波のように押し寄せて来る！

「仲間を盾にするとは、化け物の風上にもおけぬのじゃ！！」



「だが数は減らせているようであるぞえ？　このまま我らは守備を固めるのかえ、主様？」

フエンリルが冷静に観察しながら俺に聞く。

「いや、アイホートを幾ら倒しても、本体を倒さなければ意味がない。というか」

俺は素早く次のスキルの準備をしながら言う。

「今しかあいつを倒すチャンスはない。復活したてで、俺の作った聖域で、この俺とお前たち賢者パーティーメンバーが全員そろっている状態の今しか、おそらく奴を倒す機会はない」

「であるな。それではアリシア？　そして始祖よ」

「ええ、風穴をあけましょう！　前進！　前進！　前進です！！」

「コレット様が数を減らした今が好機です」

「だが無理はするな。あの強化アイホートは早く強い。一体一体がS級モンスターレベルだ。クリティカル率アップ　攻撃力アップ　防御力アップ　無敵付与　素早さアップ」

「分かっていますとも！」

「ローレライは俺と共に距離をとって常時回復魔法を使用しろ。魔力量アップ」

「了解です！」



「秘龍槍・下り落星竜！！！」  
ミスガルススオルム

迫りくる蜘蛛たちを全て聖槍ブリューナクで大地へ縫い留めていく！

「消滅させなければせき止められるとは道理よの！！」

「抜けますよ！ アリアケさん！」

蜘蛛の海を、神がそうするが如く割り、俺たち賢者パーティーは白い悪魔の前にたどり着いた。

「アリアケ・ミハマ。あなたは本当に、人間ですか？」

彼女はそう純粹な疑問といった風に呟く。

同時にそこから中から糸が伸ばされた。

「スピードアップ！ 回避付与！」

「……人類捕食現象」  
ヒューマンスニップ

しかし、糸を回避した次の瞬間、彼女が呟いたのと同時に、周囲全体がドロリと溶け始める。

（世界の表層を腐らせるほどの呪い！）

だが、

「ローレライの常時回復のおかげで数秒は問題ない！ ブリギッテ！ ラツカライ！」



「イイイイイイイイイイイイイイイイイイ！?!?!?!」

アリシアの創った結界通路を駆け抜け、コレットが渾身の一撃を思いつきアトラク<sup>ナクア</sup>へとぶち込んだ。

それによって美しい少女の口からは、その姿にはそぐわない、アイホートよりも何百倍も悍ましい奇声めいた叫び声が響き渡る。

そう、それは人類捕食現象アトラク<sup>ナクア</sup>……。

微笑みしか浮かべたことのなかった、あの人類の上位者と呼称する存在。

それがついに、人類の攻撃によって恐怖を感じ、苦痛を覚え、思わず口から漏れた初めての悲鳴なのであった。

115・再・総力戦（後書き）

第2巻が発売されました！表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「賢者パーティーは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

116・逃亡と人類の総力戦（前書き）

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>



## 116・逃亡と人類の総力戦

### 116・逃亡と人類の総力戦

「……確かにあなたたちの一撃は私に届きました」

赤い血を胴体から吹き出しながら、アトラク・ナクアは口を開いた。

「ですが、それはただそれだけの話です」

彼女は素早い動きで距離を離す。

「この花の聖域という限定された条件下だけの話。アリアケ・ミハマとその仲間たち……救世のパーティーが万全の態勢で私の前にいるというその稀有な状況。何億分の一というごく偶然生じた現象に過ぎません」

彼女は糸を吐き出すと、それを伝って壁面にとりついた。

そして、やはり謳<sup>うた</sup>うように言葉を紡ぐ。

「私をここに繋がりとめられる者はない。私はいつでもここを出ればいいのですから。それをあなたたちに防ぐ手段はないでしょう」

「ラッカライ！」

「はい！」

ラツカライが衝撃波を放ち追撃する。しかし、

「脚などくれてあげましょう。私がこの穴からはいずりだせば、もはや私に負ける可能性は一片もありません」

そう言つてアトラク「ナクアは壁を凄まじい速度でよじ登って行く！

「それではさようなら。いいえ、違いますね」

彼女は首を振ると、俺の目を真正面から見据え、

「次に会うときはあらゆる苦痛を与えてから捕食してあげましょう。ああ、どれほど珍味でありましょう。アリアケ・ミハマ様」

今から楽しみです、と彼女は舌なめずりをしたのだった。

しかし。

「ふっ」

俺はそんな彼女を見て鼻で嗤った。

知らないのか？



アトラクⅡナクアは攻撃に耐えきれず、岸壁から脚を滑らせ、再び穴の中に落下し始める。

「やれやれ」

一方の俺は微笑みながら、

「人類の存亡をかけた戦いなんだ。ならば、人類全員を率いて戦うのが『人の英雄』の当たり前前の戦い方だろう?」

俺が見上げた穴の淵には、小さな黒い影が無数に存在していた。

「そうだろう、みんな!」

その問いかけに、

「この聖都のNo.2大教皇リズレット・アルカノンが絶対に好きにさせたりはしませんわ!」

「俺は正直人間どもなどどうでもいいがな!　しかしだ!　盟友ブリギッテのためならばひと肌脱ごうではないか!」

「ワシも元S級冒険者として、アリシアの父としていいところを見せねばならからなあ!　わーっはっはっはっは!」

「俺はせめてもの楔くわじゃ!　まんまと悪魔に操られてしまうとは!　汚名返上の機会じゃ!　存分に槍を振るうぞ!　烈風槍!!!」

「うおおおおおおおおおお」  
「アリアケ様に続けえええ!」  
「ブリギッテ様と大教皇様に続けえええ!」  
「やはり筋肉は

裏切らない!」「この日のために鍛えた上腕二頭筋よ唸れ!」「見せ筋じゃないところを見せてやれえええ」

大教皇にシャーロット王、ハルケン・ルンデブルクにガイア・ケルブルグ。そして戦闘力を持つブリギッテ教徒たち数千人が全員集結していた。

まさに人類挙げての総力戦といったところか。

やれやれ。

(それにしても作戦通りとはいえ、思った以上にグッドタイミングだったな)

彼らに初めから参戦してもらおう手もあったろうが、彼らにはアイホートの被害から戦闘力を持たない一般市民を逃がしてもらっていたのだ。でなければ、俺たちもアトラク・ナクアとの戦いに集中できないから。

「さて、では引き続き、全体化 攻撃力アップ(超) 魔力量アップ(超) 魔力アップ(超) クリティカル威力アップ(超) ……」

「まさか……」

アトラク・ナクアは落下しながら俺を啞然と見た。

「今まで使っていたスキルは、賢者パーティーだけでなく、全体化によって、この聖都の住民全員へ使用していたとも言つのですか?」

まさかといった風に聞く。

「まあ大体な」

しかし、俺はさも当然だと頷く。

「でなければ、彼らの攻撃がお前に通るわけがないだろう？」

だが、その言葉にアトラク・ナクアは微笑みを浮かべる。

「ああ、なるほど」

そして、納得したとばかりにうなずくと、

「そうだったのですね。やっと。やっと分かりました。あなたは私と同等の存在……。いえ、あなたが私の天敵。私を捕食する存在なのです」

彼女はそう言いながら、無数の糸を吐き出し始める。

「ならば、私もプライドにこだわっている場合ではありませんね」

彼女はそう言うと、今度は俺たちのいる地底へと勢いよく落下をし始める。

そして、

「あんな姿にはなりたくないのですが」

そう言つて、気を失っていた勇者ビビアへとその巨体を近づけたのであった。

116・逃亡と人類の総力戦（後書き）

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「賢者パーティーは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち



ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

117・真の姿／最終形態（前書き）

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>



「余りに私好みの黒い魂でしたので、非常食にとっけていましたが、正解でしたね。やはり脱皮にはこのレベルの濃度のものが<sup>魂</sup>必要ですので」

そう呟く。

「脱皮？」

「『真の姿』あるいは『最終形態』ということですよ。アリアケ・ミハマ様。私を蜘蛛の糸から解き放つシングレットに認められし御方」

彼女は謳うように言う。

「私は元々あらゆるものを取り込み続ける悪食の悪魔。それが古き神々によって空位であった人類の上位概念にあてがわれたに過ぎません。ですが、それももう必要なくなりました。そんな器はもういません」

「なぜ？」

俺の問いかけに、

「私があなを同等の存在と認めたから。あの瞬間から、私はもはや人類の上位存在ではなくなってしまった。私が<sup>器</sup>人類捕食現象の力を失うのは時間の問題です。それなら」

彼女は微笑み、

「<sup>真の姿</sup>本当の自分をさらけ出して、私の至れる『最終形態』にて、世界



「なるほど。単体ではなく、もとは群体の悪魔だったわけか」  
どおりで幾らでも捕食できるわけだ。

（食べた存在を自分の中に無尽蔵に取り込んでいく。それがお前の真の姿というわけか）

そんなことを悟りながら、俺は目の前に佇立<sup>ちよりつ</sup>するその存在を見やる。

その全長は100メートルはあるだろう。

だがその体は一つではない。数十メートルに及ぶ胴体が幾つも絡み合っていた。その胴体の首の上には、先ほどまでの白い少女の顔もあれば、悪鬼として形容できない顔もある。口と歯だけのものもあれば、獣もいた。そして、人の小さな顔がところどころに浮き出てうめき声を上げている。

これこそが渴愛の悪魔フォルトウナ。

星のあらゆる生き物を全て捕食する存在。<sup>最終形態</sup>

そんな人類史上最悪の……いや。

俺は首を振る。

あらゆる生命の天敵が、<sup>最終形態</sup>真の姿をこの地上に顕現させたのだった。

117・真の姿／最終形態（後書き）

第2巻が発売されました！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「賢者パーティーは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち

ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



118・全攻撃効果なし。人々の絶望。そして……（前書き）

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>





ラツカライが渾身の力を込めて、神竜と神狼から得た魔力を錬成し  
解き放つ！

それはフォルトウナを溶解させ、切断する！ ように見えたが……。

『オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・  
・・・』

嵐のような大爆発の向こうから現れたフォルトウナは何ごともしな  
った様子で、あまつさえ、どこか嗤っているようであった。

「後方の地層は遙か向こうまで真つ二つですが……フォルトウナは  
無傷です！」

「あらゆる攻撃の無効化……。いえ、悪食の悪魔でしたか……。食  
べているのね、あらゆる攻撃を」

ローレライとブリギッテが声を上げる。

「ブリギッテ様、ローレライちゃん、多重結界で動きを止めましょ  
う！ そのあとで今の技をもう一度っ……。うっ……。！！！」

その時、アリシアが苦しそうに腹部をおさえ、口から大量の血を吐  
いた。

「あ、あはは……。アイホートが孵化しかかっているみたいですね」

彼女は苦笑しながら言う。

「そ、そんな、何とかしないと!？」

「でもどついたらいいのでしょうか!? そ、そつだ。ブリギッテ様なら!?!」

ラツカライとローレイが慌てた様子で言う。

しかし、

「アイホートを倒すには、本体を倒すしかないのです」

ブリギッテは目を閉じて、残念そうに首を横に振った。

そして、そんな様子を見ていた、地表にいるブリギッテ教徒たちも絶望の声を上げ始めたのである。

「バカな、あの賢者パーティーの力でさえ効かないなんてっ……………!」

「俺たちでは絶対に勝てない……………。これが……………、これが……………人類の最後だったのか……………」

「世界が……………終わる……………」

最終形態・悪魔フォルトゥナの圧倒的な力を前に、人々は戦意を完全に喪失し、絶望にのまれようとしていたのである。

しかし。

その時。

「やれやれ〜」

小さい澄んだ声。

それなのに、彼女の声は、この戦場にいる全員に聞こえた。

「これくらいなんでもないですよ。ねえ、アー君？」

彼女は当たり前のように微笑みながら俺に聞いた。

やれやれ。

俺は苦笑する。

自分の命が失われるかもしれないというのに、気丈に振る舞い、あまつさえ人々を励まそうとする。

だからこそ、君は大聖女だよ。

いや。

あの頃から、俺にとって、君はずっと……。

「ああ、そうだな」

俺は微笑み、

「俺と君がいて、超えられない壁などあるはずがないさ」

その言葉に、大聖女アリシア・ルンデブルクはにっこりと微笑んだのであった。

118・全攻撃効果なし。人々の絶望。そして……（後書き）

第2巻が発売されました！表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！買ってもらえたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqrxnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケとアリシアは今後どうなるのっ………！」

と思ったら

下にあるから、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち



ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

119・大賢者と大聖女　　く人の希望たち　　（前書き）

第2巻発売中！　ぜひ『無料』試し読みお願いします！　買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

119 ・大賢者と大聖女　　く人の希望たち

119 ・大賢者と大聖女　　く人の希望たち

「何をしようが無駄ですよ。全ては私のお腹に収まり食べつくされるのですから」

悪魔フォルトウナが倍音を響かせながら言った。

人々が震えあがり絶望する。

だが、俺はその言葉に逆に微笑みを浮かべ、アリシアにそっと呟く。

「アリシア、気づいているな？」

はい、とアリシアは頷き、

「フォルトウナはどうやら食べることにしか知らない。考えたこともないでしょう。なぜなら、アレは捕食の悪魔だからです」

だから、と続けた。

「つまり、それがフォルトウナの弱点です！」

俺は微笑んだ。彼女と俺は同じ景色を見ていることがどこか嬉しい。

ならば、これから俺が何をしようとしているのかも、彼女は理解しているのだろう。

「よし、ならやるぞ！」

「あいあいさー！」

元気のよい返事が響く。

だが、それは常軌を逸した方法だ。

普通なら止めるだろう。

仲間がそんなこと行動をしようと思っていると知れば。

だが、彼女は決してそうしようとしなかった。

それはきつと、

(俺のことを信頼して……)

そう考えた時であった。

「まさか、心配してないとも思ってるんじゃないでしょうね？」

「へ？」

出鼻をくじかれたように、俺はキョトンとしてしまった。

「俺のことを信頼してくれているのかと思っていたのだが……」

「もう、本当におバカさんですね！　アー君は」

彼女は若干怒ったように頬を膨らませた後、苦笑を浮かべて俺に言った。

「信頼していても、頼りにしていても、心から信じていても、心配ないって知っていても……心配に決まっているじゃないですか！」

「なぜ」

だが、彼女は俺の質問には答えず、俺に近づくと、

「だって、あなたは私が幼いころから、ずっと好きな人なんですから。あの約束のずっと前から」

チュツ。

「へ？」

俺は何をされたのか一瞬分からなかった。

だが、

「うふふ。驚きました?」

彼女は顔を赤く染めながら微笑む。

「久しぶりにアー君を驚かせて上げることが出来ました」

「アリシア……」

俺は少しぼーっとする。

そんな俺を彼女は優しく見つめながら、

「必ず帰ってこれるようおまじない、ですよ。これからする作戦は、私とアー君の強力なパスが必要ですから」

「そう……だな……」

キスは人同士の絆を強め、パスを強化する効果がある。

そのためにキスを……などと勘違いするわけがない。

そこまで俺は朴念仁ではない。

「なら、帰ってきてから、俺の答えを伝えるとしようか」

「ええ、楽しみに待ってますよ」

俺と彼女は離れる。

そして、俺は口にした。

「大聖女アリシア・ルンデブルク！ 準備はいいな！」

その言葉に、

「ええ！ いいですとも！」

アリシアが勇ましく答えた。

俺たち二人に人類の運命がかかっている。

ならば、始めよう。

俺は自身に強化スキルをかけながら呟く。

「あれを倒すには体内から奴を食い破る人類の剣が必要だ」

その役割は、本来なら勇者が担うべきかもしれないが……。

「やれやれ、仕方ないな！」

弟子たちをフォローするのも師の役割だ！

俺は強化した脚により、神速でフォルトウナへと肉薄する。

「フォルトウナ！ 喰らうがいい！」

「血迷いましたか？ アリアケ・ミハマ様？ まさかおのずから餌食になりに来るなんて。あなたを捕食できるなんて、考えただけで昂ぶります」

悪魔の顎が信じられないほど開き、俺を一瞬にして飲み込もうとする。

だが。

俺は微笑む。

「なあ、フォルトウナ。お前はやはり食うことしか頭にないんだな」

「なにを……？」

俺のつぶやきに悪魔は疑問を持つ。だが、全てを食いつくすという概念存在の彼女には、それ以上のことを考えることは出来ない。

そう。

「食べた後のことを考えたことはないだろう、悪魔フォルトウナ？」

「アリアケ・ミハマ。あなたは。あなたがたは、まさか……」

もう遅い。

悪魔の悍ましい口腔が閉じられる。俺は悪魔に捕食され、絶命する……その直前。



俺は彼女へと振り向いた。彼女も俺を見ていた。

「さあ、始めよう」

大賢者と大聖女による人類救済を。

「大聖女アリシア・ルンデブルクへ 聖域の加護 を付与！ 超<sup>バル</sup>大規模蘇生魔術の使用準備！」

彼女は力強く頷く。

「『聖域』を利用し奇蹟術式を発動！」

彼女が高らかに術式を謳う。

「死者蘇生を聖域という限定範囲で全体化します！！」

フォルトウナの驚きの声が聖域に満ちた。

「死者蘇生の全体化っ……！それがあなたたちの最初からの狙いっ……！死者を拒む花の聖域を利用した奇蹟の行使っ……！！」

そう、この時代、死者蘇生は彼女を除き誰一人使用できない奇蹟であった。

ゆえに、その光景はありえない光景だったろう。

死者蘇生術を全体魔法として行使するのだから。

（だが、それこそがこの聖域にフォルトウナをとどめつけた理由）

その真の目的は俺が最初フォルトウナに告げた通り。

死者を厭う花の聖域の特性を利用した蘇生魔術の行使！

言っただろう、フォルトウナ。

「切り札の一枚や二枚。いや三枚や四枚は持つておくものだ」

「この戦いの死者は必ず捕食され、全員フォルトウナの体内にいます！ 死亡から時間も経過していない！ ならば、この聖域ならば……！」

大聖女の高らかな声が響いた。

「全員蘇生させることが出来る！」

だが、

「それだけでは万全ではない」

体内から奴を食い破る人類の剣が必要だ。

ならば、その役割は。

「英雄が担うしかあるまい。やれやれ」

そのつぶやきを最後に、俺の体は一瞬にしてフォルトウナに捕食され、意識は途絶したのであった。

〈フォルトウナ視点〉

「に、逃げなくては」

私はアリアケ・ミハマ様を捕食した瞬間、その巨体をすぐに転じようと致しました。

認識を改めねばなりません。

少なくとも彼のアリアケ・ミハマのような人間がいることは認識しなくては。

ですが、

（大丈夫、彼はミスを犯しました）

私は上昇しようとしながらほくそえみます。

だって、いかな大聖女アリスア様といえども、奇蹟といわれる蘇生魔術を使用する。



あ…の時と、同じ！

「ブリギツテ様！ シャーロット王！ またしても邪魔をしますか  
ああああ！」

頭上で獰猛に笑う二人の顔が視界に入りました。

「当然！ なけなしの魔力ですが、数十秒ならあなたを封印させる  
ことくらい可能です！ 誰があなたを300年間閉じ込めたと思っ  
ているんですか！ さあ、シャーロットちゃんも力を貸して！」

「相変わらず馴れ馴れしい人間だ！ だが、うん、久しぶりな感じ  
で気分が良い！ 全部持つて行け！」

ノックス・テプリモ  
「破邪封印！！！」

ガクンと私の体が再度沈み始めます。

「お、おのれ……おのれ……」

それはなんとという屈辱。

人如きに。

トカゲ如きに。

私はまたしても、あの封印された場所。

アリス  
地下封印遺物へと落下させられているのですから。

いいえ。

いいえ。

今そこは、もつと恐ろしい場所。

なぜなら、そこは花咲き乱れる聖域。

あの大聖女が。

大聖女アリシア・ルンデベルクが。

「スケール聖句発唱！

バルム・ヘルツ・カイト超大規模蘇生魔術！！」

大規模死者蘇生術式という奇蹟を顕現させる場所なのですから。

（アリアケ視点）

ここはどこだろう？

俺は暗闇を一人で歩いてきた。

先ほどまでとても大事なことをしていたような気がするが、どうにも思い出せない。

暗闇の先には一筋の光があつて、何となく俺はそこに向かって歩いている。

だが、

（本当にそこに行つて良かったのかな？）

何となく、後ろ髪をひかれた。

（ああ、そう言えば）

と、俺は唐突に一つのことを思い出す。

それは俺が幼いころに、交わした大切な約束。

俺が啓示を受け、この世界で独りきりだと思い込んでいた時、彼女がかけてくれた言葉。

「もし、アー君が困っていたらどこまでも追いかけてあげるから！  
一緒に悩んであげるから！ だから独りだなんて思わないで。独りどこかに行かないで！」

それは寂しがりやで泣き虫だった彼女が精一杯の勇気を振り絞つて  
いつてくれた言葉。いや、逆に俺こそが寂しがりやだったと気づかせてくれた言葉。

だから俺も、

「なら、俺がもし疲れて独り切りになった時は、君に見つけてもらえるように、アリシアの好きな花でも育てておとなしく待っている

よ。そして、その時は二人でのんびり暮らそう」

と冗談めかして、返事をしたんだっとな。

それは幼い二人が交わした約束ともいえない約束。

だが、俺を本当の意味で救った言葉。

規格外の力を持ってしまった俺が、孤独にさいなまれず、ここまで歩いてこれた理由。

だから、彼女の言葉は、俺にとっておまじないのようなものだ。

（ああ、そう言えば）

俺はとっさにもう一つ思い出した。

「さつきも、一つおまじないをもらったな」

その瞬間。

「スケール聖句発唱！

バルム・ヘルツ・カイト超大規模蘇生魔術！！」

強力なパスを通じて、アリシアの声が耳朶をうった。

瞬間、俺の魂が蘇生され、肉体が再び形を取り戻す。同時に、

「無敵付与！ 人類の脅威殲滅（超）！ 攻撃力強化（超）！ 魔力強化（超）！」





最終形態のフォルトゥナに取り込まれた人間たちが次々に蘇り、その体内で暴れまわる。

「神に選ばれたなど些細なことだな。これほどの奇蹟を見せられては」

何せ数千人規模の蘇生魔術を目の当たりにさせられているのだから。まさに女神の所業だ。

「なーにを言ってるんですか！」

コツンと。

彼女がいつの間にか近寄ってきて、俺のおでこをたたいた。

「それが出来たのはアー君のおかげでしょうに。相変わらずズレてますね」

優しく微笑む彼女がいた。

悪魔フォルトゥナはだんだんと小さくなっていく。

捕食という概念を否定された悪魔は、まるでその存在を損なうように徐々にこの世界から消滅しつつあるのだ。

その悪魔と目があつた。

「まさか私が負けるとは思いませんでした、アリアケ様。そしてアリスア様。上位存在たる私は絶対に負けるはずがないはずでした。」

ですが……」

フォルトウナは少し間を置いてから、

「大賢者に大聖女。あなたたちのような存在が偶然にも居合わせたこと。それだけが私の誤算でした」

だが、俺は。

そして、アリシアは首を振りながら苦笑して、

「俺たちだけでお前を倒せるわけがないだろうに」

「そうですね。コレットちゃんにラツカライちゃん、フェンリルさんにローレイちゃん。バシユータさん。ブリギツテ様に、リスレツトさん、シャーロット王。そして筋トレ大好きでやたら強い聖都の皆さん！ 人類全員が一丸になったがゆえの大勝利です！」

「バイ！ とアリシアがピースサインをした。

そんな彼女を見る悪魔の瞳は、どこか苦笑じみている。

「人類一丸。それを成せないからこそ、人は人止まりなのですが……。いえ、そこに気づかないからこそ、あなたたちは私上位存在すら打ち碎ける人類の剣なのかもしれませんね」

悪魔は改めて俺の方を見た。

「アリアケ・ミハマ様」

「なんだ？」

「闇を振りまく者に注意しなさい」

「！それは」

「結界が弱まり私が復活したのは偶然ではないということです。…  
…なぜ、そのことを自分に教えるのか、ですか？ ふふ」

悪魔は微笑むと、

「嫌がらせをすることが、悪魔の喜びですから……」

そう言うと、フォルトウナはサラサラと砂のように風の中に溶けて行ったのだった。

「どいっいっこと……なのでしょうか？」

アリシアが首を傾げて言う。

「さてなあ……」

俺も同じように首を傾げて応じた。

少なくとも数々の事件と、今回の事件は無関係ではないということだ。

とはいえ、

「俺は今度こそ田舎に引きこもってゆっくりとするつもりだからな。

うん、関係ない、関係ない。これは決定事項だ！」

「そんな力説しなくても。今度こそきつと大丈夫ですよ」

アリシアが苦笑しながら応じてくれた。

「そうか？ まあ、アリシアが言ってくれるなら少し安心だな。あ、  
そうだアリシア」

「はい？」

俺は少し詰まりながら言った。

「一緒に暮らすなら……どんな家がいい？」

その言葉を聞いて、一瞬時が止まったかと思うと、

「お、お花がたくさん咲いてるお庭のある家が……いいです……」

彼女は驚きもせず、ただ赤くなりながら、あの日のおまじないの続きを答えてくれたのだった。

次回第3章エピローグです！

.....

第2巻が発売中！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。  
超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガ  
ンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもら  
えたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/squenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケとアリシアは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

120・エピソード く結婚式と逃亡二人組く (前書き)

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>



## 120・エピローグ　～結婚式と逃亡二人組～

120・エピローグ　～結婚式と逃亡二人組～

「いやあ、まことにめでたいわねえ！　300年間頭痛の種だった悪魔フォルトウナは撃退できたし、ゲシュペント・ドラゴンとも平和条約を締結できたし！　これでブリギッテ教の権力はますます高まるというものだわ！」

「そついうのはあんまり良くないのではないかしら、リズレット？」

聖都セプテノは現在、復旧作業のさなかである。

そんな街中を大教皇リズレットと始祖ブリギッテは歩いていた。

「いえいえ、ブリギッテ様！　権力が高まる、イコール、人が集まってくる、ですわ！　自然と優秀な人材が集まってきて、うはうはなのですよー！」

「そうなのですか？　果たしてそうですかね？」

テンションの高いリズレットに対して、ブリギッテは半信半疑と言

った様子で首を傾げた。

「でかい声でしたかと思っただが、お前たちであったか。ちょうど確認したかったのだが、肝心のアッチの準備は整っておるのか？」

そんな二人に声をかけたのは、ゲシュペント・ドラゴンの王、シャーロット・デュープロイススである。

相変わらず王様らしい覇気をまといながら、赤銅のような長く美しい髪を風になびかせていた。

「もちろんですわ！ このリズレット、抜かりありません！ というか、この超特大イベントこそが、ブリギッテ教が更なる飛躍をするための狼煙となるのですから！」

「英雄を作り上げて象徴にして人心を掌握する魂胆ですか。まあ権力者らしくて良いのでしょうかねえ」

はあ、とブリギッテは嘆息した。

ブリギッテ自身は教会のNo.1であるが、復活したことはまだ公表されておらず知る者も少ない。それに彼女自身はおっとりとした性格でとてもではないが権力闘争や政治を楽しむタイプではなかった。

なので、リズレットのやろうとすることに口出しはしない。

まがりなりにも、国教をまとめあげてきた大教皇の政治力は大したものなのだ、実際。

「ド派手にやりますわよ！ カーニバルですわ、カーニバル！  
こゝんなに国費を使って盛大にやれる楽しい催しは他にありません  
からね！ 色々な国から人を呼び寄せて、そして国で一番広い教会  
で挙式！ そして披露宴！ そのあとは1か月くらい祝の月として  
毎日パレードしたり、演劇やったり、出店を出して、お祭りですわ  
！」

シャーロット王も頷く。

「まあ、それくらいやつてもらうのが当然であろうな。何せ我が娘  
を嫁に出すのだからな」

「あれれ？ それってシャーロット王に勝ったとかいっ話ではな  
かったのではないかしら？」

「酒の飲み比べて負けたから良いのだ、うむ」

「ずいぶん気に入ったんですね。いやー、ドラゴンの王様に認め  
られるなんて、さっすがアリアケ様。前代未聞というか人間やめて  
ますわね！」

「うむうむ、並大抵の男には娘はやれぬ！ やはり儂から堂々と聖  
具を奪っていくくらいの男でなくてはな！」

ぬわっはっはっ！ と美女二人が豪快に笑った。

気の合うようで何よりだ、とブリギッテは思う。

だから、さっきから一つだけ気になっていることを聞いたのだった。

「で、その肝心のアリアケ君とアリシアちゃんたちはどこに行ったんですか？」

首を傾げて聞く。

「ん？」

「ん？」

「え？」

届かぬ高みにいるはずの三人の口から、それぞれ間の抜けた声が漏れたのであった。

（アリアケ視点）

「やれやれ、ここまでくれば安心だろう」

「そうですかねえ、あの方もしつこいですから」

たははー、とアリシアは笑った。

と、その後少し顔を赤らめながら言う。

「えーっと、アリアケさん？」

「アー君じゃないのか？」

「もう、あれは二人っきりの時だけですよ！」

「今もそうだが……」

とりあえず聖都をあげて結婚式を挙行しようとするリズレットから逃亡することを優先した俺たちは、他の仲間たちよりも先に聖都を後にしたのだ。そのうち追いついてくる手はずである。

「何だか恥ずかしくってですね、うふふ」

彼女は少し顔を赤らめて答えた。

「ねえ、アリアケさん、私いま、とっても幸せですよ？ アリアケさんは……アー君はどうですか？」

俺は少し考える。

いや、考えようとした。

しかし、別に考えるほどのことでもないなと思いつき、すんなりと思ったことを口にする。

「大聖女、君が追いかけてきてくれて嬉しいよ」

そう言うと彼女は満面の笑みを浮かべて、そのまま俺に一歩近づき、

そして……。

「うーん、あれはちょっと声をかけられぬのじゃ」

「うわー、先生つたら。お姉様つたら、うわー……」

「あまり興奮しすぎるでないぞえ？ 気づかれたら終わりゆえなあ」

「はわわ、でも、いいんでしょうか、いいんでしょうか。見ちゃっていいんでしょうか！」

「ローレイさん、そんなバツチり見ておいて今更ですよ……」

そんな二人を追ってきた賢者パーティーの面々に、物陰からばつちり見られているとは知らず、賢者と聖女の束の間の休息は続いたのだった。

120・エピソード く結婚式と逃亡二人組く（後書き）

第3章完結！ 次回から第4章開幕！

.....

第2巻が発売中！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。  
超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガ  
ンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもら  
えたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

[https://magazine.jp.square-eni  
x.com/sqexnovel/series/detail/  
yusyparty/](https://magazine.jp.square-eni<br/>x.com/sqexnovel/series/detail/<br/>yusyparty/)

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケ達は今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



121・エピソード2 く闇を振りまく者。邪神xxxxxxxxx  
(前書き)

第2巻発売中！ ぜひ『無料』試し読みお願いします！ 買ったも  
らってもいいですけど、無料試し読みだけでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

1 2 1 ・ エピローグ 2 　　〈闇を振りまく者。邪神 × × × × × ×〉

1 2 1 ・ エピローグ 2 　　〈闇を振りまく者。邪神 × × × × × ×〉

く????????視点く

「どうも進みが遅いな……」

その存在は暗い空間を漂いながらその光景を見ていた。

世界は少しずつだが、闇におおわれ始めていた。

それもそのはず。この神たる自分が闇を振りまいているのだから。

だが。

「なぜ、少しずつ、なのだ？」

その存在は解せぬとばかりに首を傾げた。

そう、世界が闇に覆われる速度が、少し遅すぎる気がしたのだ。

本来なら今頃、大陸は戦火にまみれ、血で血を争う戦争状態のはずだった。

モンスターや、あの悪魔すらも跋扈<sup>はいつは</sup>し、世界は存亡の危機にあるはずなのである。

だが、現実にはそこまでの段階には至っていないかった。

いや、その存在は認めることはしなかったが、明らかに闇が打ち払われているケースが散見された。

彼がエルフの森を枯死させようとした試みは、ある賢者の活躍により惜しくも失敗に終わった。

魔の森を生み出したにも関わらず、突如現れたドラゴンに防がれ、街一つ滅ぼすことができなかった。

見込みのある悪の素質に優れた貴族へ、戯れに送りつけたミミックが、やはり簡単に倒されたことは仕方なかったのかもしれない……。

だが、やはり誤算なのは、勇者たちがいまだに勇者であることであつた。

「あれは悪の素質に優れた最高の人材たち。聖剣の担い手なのと正義が悪かは問われない。だから、偶々才能に優れた幼馴染の『あの男』にスキルを与え、成長を促したのだ」

しかし、なぜか奴らは悪の素質を存分に持ち合わせながらも、いまだに、かろうじて勇者としての体裁を保っていた。

本来なら悪落ちし、人類を滅ぼす存在に成り果てているはずなのだ。

それなのに、先日などは300年ぶりに封印を解いた悪魔フォルトウナに、一度は心を操られながらも、最終的には『あの男』が世界を救済するのを、形式的とは言え助けている。

さらに言えば、聖槍の使い手がしっかりと成長している。

腹心たるワルダークを通じて、勇者と組み合わせることによって、聖槍の使い手も確実に墮落し、忠実な闇を振りまく者になるはずなのだ。

しかし、現実には『あの男』のもとで戦っている。

想定よりもはるかに成長した姿で。

ビキッ！

空間にヒビが入った。

「……ふむ、ならば、良かろう」

その存在は、ヒビの向こうに見える世界を微笑みながら見た。

「では、私がじきじきに世界に闇の帳とほじをおろしてやるわけではないか」

そう言うと、その空間から跳躍しようとする。

本来、彼はめつたにこの次元の狭間から出ない。

なぜなら、そこは誰も手出しの出来ない空間だからだ。

そこで、ゆっくりと闇を振りまき、世界を滅ぼすことこそが、最上

位神たる彼に相応しい態度であった。

だが、彼は思った。

(神に逆らうということがどういふことが人間に教えてやることも  
また一興だ)

たまには神の御業を見せるのも良いだろう。

「待っているが良い。××××・×××よ」

彼は邪悪な笑みを浮かべると、その何人たりとも立ち入れぬ空間から、消失したのであった。

121・エピソード2 〈闇を振りまく者 邪神×××××〉  
(後書き)

エピソードをちょっと追加しました。

次回から第4章開幕！

.....

第2巻が発売中！ 表紙とキャラデザを下の方に置いておきますね。  
超かわいいですね！

2巻はWeb版から大幅加筆修正・増量しています。コミックもガ  
ンガンONLINEで今夏連載開始予定です。

気になる方はぜひ『無料』試し読みだけでもどうぞ！ 買ってもら  
えたらもっと嬉しいですが、どちらでもどうぞ！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yussyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケ達は今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

122・本来ありえた未来とアリアケ・ミハマの変えた未来（前書き）

やっとなさ、第3巻の校正が終了しましたので、第4章を開始します！

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！



122・本来ありえた未来とアリアケ・ミハマの変えた未来

122・本来ありえた未来とアリアケ・ミハマの変えた未来

「うぎゃーっはっはっはっは！」

「う、うわあああああああああ」

「勇者だ！ 勇者軍がせめて来たぞ！ 全員虐殺される、女子供だ  
けでも逃がすんだあああああああ！」

「それはさせねえよ、ゴミどもがあ！ カスどもがあ！ おらあ！  
ロンドミア・ウルツ  
究極的終局乱舞だああああ！」

「うわあああああああああああああああああああああ  
ああああ」

はーっはっはっはっは！

勇者ビビア・ハルノアの下卑た哄笑が村の隅々にまで響き渡った。

その笑いは呪詛の力さえも伴い、逃げようとしていた村人たちの足  
取りを遅くさせる恐るべき効果すらある。

まささに人類悪。

人を滅ぼす尖兵。

勇者ビビア・ハルノア。

「そんな調子で滅ぼしてたら時間がいくらあっても足りませんわねえ、こういう時にこそ膨大な魔力を持つプララ、あなたの役目ですよっ?」

「えー、めんどくさいなあ、塵芥ちりあくたを吹きとばしてもなーんも楽しくないんだけどー」

「頑張ればその分、また邪神様に力を強化してもらえますよ?」

「これ以上強くなってもしょうがないけどねえ。まあ、まだ抵抗するうざい奴らも残ってるから、しゃーないかあ」

プララは冷徹に睥睨へいげいする視線をにげまどうひとつとびとにむけながら、指先から幾つもの小さい焰を作り出す。

「フィンガー・ボム。それぞれが地獄の業火を招来した、一撃で村を街を、国を葬り去るほどの威力を誇る魔法だよ。きひ、ぎひ、きははあはは!」

彼女はそれを何のためらいもなく、無辜むこの民たちへ放つ!

その結果は凄惨せいさんそのものだ。

だが、その光景を見ながら、勇者パーティー達全員が浮かべる表情は嘲笑であった。

この世界に闇を振りまき、少しでもこの世界の邪神の支配を確固たるものにするため。

そして、将来は魔王として勇者が君臨するための、必要な犠牲であった。

「よし、制圧は完了したようだな、勇者よ。どうだ、今日はこのまま祝杯と行くか？」

エルガーの言葉に、勇者は薄ら笑いを浮かべながら答える。

「やりたりねえなあ。おいエルガー、確か隣街が近くにあったはずだろう？ ついでに滅ぼしちまうってのはどうだ」

「やれやれ、しょうがない奴だな」

呆れた表情を浮かべながらも、エルガーも積極的に止めはしない。

街を破壊すればするほど、邪神様から強大な力を与えてもらえるのだ。自分が世界最強の男だと証明される日はどんどん近くなる。

他人のことや世界のことなど知ったことではない。

と、そんな会話をしていた時である。

「ここにいたのか、お前たち」

「へっ、やっぱり現れやがったか、うつつとつしい奴め！」

勇者が激昂するようについて。



「?????????視点」

「そう、これこそが本来ありえた未来の姿」

その存在は閉じていた片目をつつすらと開ける。

彼の左目には高い確率で訪れる未来が見える。

それは正史となるべき世界のありようであった。

だが、

「実際には勇者パーティーはまだ人類の側にある……」

なぜだ？

「あの悪の素質、汚れた魂、魔王の素質にあふれた男、そしてそれに追隨できるだけの、やはり邪悪に満ちた存在たちをあの国の最も遠き村に集めた……」

勇者ビビア・ハルノア。その闇との親和性高き魂は、邪神からして非常に好ましい邪悪なる存在。

デリア・マフィー。金銭と見栄への執着が異常な女であり、他人を蹴落とすことに躊躇いの無い女性。

ブララ・リフレム。他人を傷つけることに快楽を得るサディストで、魔法を覚えることでその倒錯的な性格に拍車がかかるはずだった女。

エルガー・ワーロック。筋肉に固執し、そのためならあらゆるもの

を差し出す男。他人をさげすみ、自らを誇ることにしか興味のない男。

これだけの人材を集め、そして、何より彼らを導くために、あの男に目を付けた。

心優しい優柔不断だと思われたあの男には才能もあつた。ゆえに、すべてのスキルを与え、あの4人をバックアップせねば遠からず死ぬという呪いの言葉をかけた。

優しいあの男は絶対に断れない。

これによって、邪悪な心を持つ勇者パーティーは、膨大な力を得ることになり、次第に悪の道へと転げ落ちてゆくはずであつた。

しかし。

「むしろ、四魔公ワルダークや悪魔フォルトウナの撃破にまで加担している……？」

無論、勇者パーティーのふるまいは邪悪で愚かであり、この世界にあと一步で混沌と破滅をもたらさんとするものばかりだ。

だが、結果として、自分が期待するような闇を振りまき、世界を邪悪に満たすような効果はほとんど出ていない。

そして、その原因は……。

「あの、男か！」

空間がピシりと歪んだ。

大賢者アリアケ・ミハマ！

あの男のせいで、本来ありえないはずの未来が、今まさに進行しているのだ。

本来ならば悪堕ちし、世界を破滅させる存在となり果てているはずの勇者パーティーは、かろうじてとはいえ、だがはつきりと人類の側に立っている。

そして何より、各地にばらまいた闇の種たち。

エルフの森の枯死や、魔の森、ゴブリンキングの討伐など、全てアリアケ・ミハマによるものだ。

「あの男が世界を救っている」

そう判断せざるを得ない。

「すべての僕の完璧な計画を破壊している！ ……だが、それもここまでだ」

もう一度左目を閉じる。

そこには自分に敗北し、みじめな姿をさらしている大賢者アリアケ・ミハマの姿があった。

優れた男であったがゆえに、スキルを与えてしまったのは失敗だったかもしれないが、なあと、自分は神だ。これから幾らでも挽回で

きる。

「待っているよ、アリアケ・ミハマ」

邪神は二チャリと唇を歪めた。

「邪神の瞋恚しんいに触れたとき、人間などゴミくず同然であることを思い知らせてやるう」

その存在はそう言うと、その絶対の空間から転移したのであった。

世界の救世主たるアリアケを倒し、勇者に世界を滅ぼす存在として覚醒させるために。

アリアケという存在が世界の救うのを止めるために、今まさに邪神は自ら動き始めたのである。



122・本来ありえた未来とアリアケ・ミハマの変えた未来（後書き）

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！

第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

Web版から加筆修正しています。

第3巻試し読みはまだのようですが、出来るようになりましたらすぐにお知らせしますね（\*^-^\*）

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

123・**辺境の村『オールティ』到着とモンスターの襲撃（前書き）**

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

### 1 2 3 ・ 辺境の村『オールティ』到着とモンスターの襲撃

1 2 3 ・ 辺境の村『オールティ』到着とモンスターの襲撃

くアリアケ視点く

「ふう、長い旅だったなあ」

だが、

「やっと、目的地であるオールティの『町』に到着したぞ、みんな」

俺は微笑みながら言う。

そこはかつて俺が勇者パーティーに所属していた時に、立ち寄った町であり、親切な人たちが多い町だったのだ。

なので、勇者パーティーを追放された俺は、この町でゆっくりと暮らそうと思ったのである。

故郷は故郷で色々としがらみもあるからな。

しかし、そんな風に感慨深げにしている俺に向かって、

「って、アリアケさん！ そんなのんびりしてる場合ですか！ このアンポンターン！」

「うわっと」

俺のマントを引っ張るようにして、アリシアがツツコミを入れてきた。

先日のブリギッテ教会の一件以来、そのツツコミの切れはさえわたっている。

まあ、それはともかく。

「それどころではないとは？」

俺は首をかしげるが、まあ、本当は分かっている。

「もう、わかってるでしょう……」

やれやれ、とアリシアが俺の真似をするように首を横に振った。

そのやりとりに、「良く分からない」と言った様子なのが他のメンバーである。

現在、俺が率いる賢者パーティーは、この俺アリアケと大聖女アリシア、ドラゴン娘コレットに聖槍プリューナクの使い手ラツカライ、十聖の獣フェンリル。

そして、先日の聖都セプトノの戦い以来、パーティーに加入したローレイとポーターのバシュータも同行している。

勇者パーティーが現在再起不能状態になってしまったことで、王国から許可が出たらしい。

コレットが首を傾げて言った。

「旦那様にアリシア。一体なんの話をしておるのじゃ？ 二人だけでラブラブしておらずに、儂らにも分かるように話すべきなのじゃ」

「のじゃのじゃ！ とコレットが抗議めいたことを言った。

「ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラブラブだなんて！ もうコレットちゃんったら！ はひ！ はひ！」

なぜかアリシアは過呼吸気味になっているので、俺が事情を説明することにする。

「最初にオールティの『町』と言ったと思うが、違和感はないか？」  
その問いにすぐにフェンリルとラツカライが答えた。

「確かに町という割には活気がないのう。建物もボロボロのような気がするぞえ？」

「商売もあまり繁盛してなさそうですね……。っていつか、どちらかと言えば『村』？」

「そついうことだな」



「せっかくゆっくり暮らすためにやって来た村が襲われているんだ。助けなければぐーたら男の名が廃るといふものだ」

「なんですか、それは」

もう、と嘆息しながら、アリシアが俺の隣に立つ。

反対側にはラツカライが立った。

前衛にはコレットとフェンリルが陣形を作り、後衛にはローレライとバシユータが陣取る。

「スキル支援はいるか？」

「旦那様の支援がなくては始まらない！ なのじゃ！」

「そうなのか？」

俺は首を傾げるが、

「「「当然！！」「」「」

コレットだけでなく、他の女性陣も頷いた。

良く分からんが、それならば、

「惜しむ理由はないな」

俺は杖を掲げ、





〇〇〇〇〇〇!!!」「」「」「」

真っ黒で巨大な狼の様な形状のモンスターたちが、集団で四方より迫ってきた!

だが、それに対して俺がすることは一つだけだ。

「頼んだぞ、お前たち」

「」「」「了解!!!」「」「」

俺の言葉をきっかけに、賢者パーティーはまるで一個の生き物のように躍動する。

コレットがこちらを捕食しようと大きな口を開けて迫ってきたモンスターをぶっ飛ばすと、フェンリルも格が違うとばかりに5、6匹をまとめて大地にたたきのめした。

うまく彼女たちをかわした敵たちが、安堵して後衛を襲えると思っただのも束の間。

敵たちはおそらく知らないうちに、聖槍ブリューナクになます切りにされて、その儚い命を散らした。

「まあ、私たちは地味に進路の邪魔をしたりとかしてましようかね」

「はい、アリシア様!」

「かしこまりましたよ、奥さん」

「お、お、お、奥さんはやめてくださいってば、バシュータさん！」  
真っ赤になりながらも、アリシアは小結界を敵の足元や前方に展開し、敵の進行を邪魔する。ローレライもそれに続き、バシュータもアイテムを使用してそれを支援した。

足元のおぼつかない哀れなモンスターなど、ドラゴンやフェンリルの敵ではない。

そして、気づけば、

「なんだ、もう終わりなのか？」

俺たちの前には死屍累々のモンスターの群れが積み重なっていた。

「いえ、普通はこう簡単には倒せるような敵じゃないんですがね…

…」

苦笑しながらバシュータが言った。

そうなのか？ と俺はいぶかしげにする。

「まあ、楽に敵を倒せるのはいいことだ」

気楽に言った……と、その時である。

「あ、あなたはアリアケ・ミハマ様じゃないですか！ この村をまた助けてくださったんですね！！」

そんな声が背後からかかったのである。

123・境界の村『オールティ』到着とモンスターの襲撃（後書き）

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

第3巻試し読みはまだのようですが、出来るようになりましたらすぐにお知らせしますね（\*^-^\*）

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

## 124・村長就任（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

124・村長就任

124・村長就任

「お願い致します!!」

「どうか!　どうか!」

「!!!!!!!!」　　「……………」　　「……………」  
「……………」　　「……………」　　「……………」

オールティ村の村民数十名が集まり、一斉に土下座をするようにして俺に対して頭を下げた。

俺たちはオールティの町……。いや、今後はオールティの村と呼ぼう。

このオールティの村に到着して早々、モンスターを殲滅。

すると、モンスター達から隠れていたのだらう。村民たちがドヤドヤと俺のもとへと駆けつけ、ろくに会話も出来ぬままに村で一番大きな建物へと案内され、一段高い上座に座らされた、といった状況だ。



俺の隣にはパーティーメンバーも同じようにずらっと並んでいるが、残念ながら彼らが拜み倒してくる中心人物とは俺らしい。

はあ……。

どうしてこうなった。

「まあ、お前たち落ち着け」

俺はいつも通り冷静に言う。

「いきなり村長になれと言われても困ってしまう。当然だが、他にも適任者はいるだろうし、このあたりを治める領主にも認められる必要がある。そう簡単になれるものじゃない」

俺はすぐに断ろうとする。しかし、

「あ、あなたしかいないんだ！　お願いします、大賢者アリアケ様  
！」

そう言って改めて村人たちが一斉に頭を下げたり、嘆願の涙を浮かべたりする。

うーん、暑苦しい。

「適任者と言っても、前の村長は逃げ出してしまった。あとは体の弱い者とかしか残ってないんです！」

「だが、そうは言っても、俺である必要は全くないだろうに……」

俺はもつともな指摘をする。

「確かにモンスターから窮地を救ったが、それは別に俺でなくても出来たことだろうに」

俺は更にもつともな指摘を繰り返す。

「そうでしょうか。軽く見積もって、勇者様のパーティーだったら全滅していたような気がしますが？」

端っこに座っていたローレライが淡々と口にした。

「ははは、さすがにあれくらいのモンスターに、ビビア達が遅れをとるわけないさ！」

俺は即答する。すると他のパーティーメンバー全員がなぜか苦笑を浮かべた。なぜ？

まあ、それはともかくだ。

「今言ったように、俺は少しばかりモンスターを倒し、村の窮地を救ったに過ぎない。村長などの器ではないと思っぞ？」

そう言って改めて辞退を申し出る。

だが、

「何をおっしゃいますが、アリアケ様」

村民の中で最も高齢の老人が口を開く。

「あなたがこの村を救ってくれたのは二度目ではないですか」

彼はそう言つて、とつとつと話し出す。

「あれはまだ勇者パーティーにいらつしやつた頃ですな。近くの森に偶々ドラゴンが住み着いてしまった。その際に派遣された勇者パーティーがそのドラゴンを倒してくださった。しかし、そのドラゴンの死骸をそのままにしていたために、その魔力を蓄えた死肉を求め、大量のゾンビ系のモンスターが集まってきてしまいました」

「あれは……すまなかつたな。確実に火葬するように言いつけていたんだが、素材がもつたいないからと言つて、目先の欲にくらんでその回収を優先した。せめてその後火葬すれば良かったんだが、その素材を腐らせるのがもつたいないと、火葬せずに撤退してしまつたらしい。その結果、残されたドラゴン本体の骨と肉は腐敗しだし、強力なドラゴンの怨念に引き寄せられた大量のゾンビ系モンスターたちが集合してしまつた。……俺は一足先にドラゴン討伐の知らせをするためにパーティーを離脱していたから、その対応が遅れてしまつた」

「私もちょうどその時は別件で教会の仕事を請けていて別行動中だったんですよねえ」

「あれはビビアたちの師としての、俺の指導不足だったと反省したものだ」

「いえいえ！ とんでもありません！」

老人は慌てて首を振る。

「アリアケ様がすぐにそれに気づき、夜中攻めてきた大量のアンデツトたちを一掃された姿は今でも村の語り草となっています。勇者たちの欲深さを糾弾する者こそおれ、英雄……、村の救世主であるアリアケ様のことを悪く言う者は一人もいません」

ですから！

とそこまで老人は話してから、改めて目に涙を浮かべて嘆願する。

「やはりこの村を導かれる方は！ 救世主になられる方は！ 英雄アリアケ様しかおられぬのです！ どうか再び、我らの指導者となってください、大賢者様！ 大賢者アリアケ・ミハマ様！」

照れてやめさせようとす。

ずいずい、と迫りながら嘆願してくる。

「ええい、救世主救世主！ 英雄英雄と連呼するな！ なんだかむずがゆいだらうが！」

俺は嫌な顔をする。

しかし、

「いえ。実はまだまだエピソードはあるのですぞ!? 例えばですな……」

「いや、もういい。勘弁してくれ」

俺は深い深いため息をついた。

宙を見上げてぼやくしかない。

「のんびりしたかったのだが……」

そうそれがこの村に来た目的だったわけ……。

しかし、

「まあ、英雄の役割かもしれないねえ」

苦笑しながらアリシアが言った。

それが俺の。英雄の運命さだめだとばかりに、諦めるとばかりに憐憫の情を浮かべた瞳で見てくる。

「まあ、私もその、あなたのですね……。その、パートナーとしてですね……。で、できるだけ負担が集中しないようにお手伝いしますので!」

顔を真っ赤にしながら言った。

「むっ、そ、そうか」

俺もその意味が分からないほど朴念仁ではすでないので、ちょっと嬉しくなる。

それに続くように、わらわじゃ、ボクもです、と皆が声を上げてくれた。

「とうかなのじゃ、旦那様」

アリシアの反対側に座るコレットが微笑みながら言う。

「こんな時代じゃからこそ、旦那様がこうして領地を持たれるのは必然だと思うのじゃ。このゲシュペント・ドラゴンの末姫の直感がそう告げるのじゃ」

「ドラゴンの直感が」

俺は苦笑する。それはなかなか馬鹿にできたものではない。時にドラゴンの直感とは未来視と言われることすらあるのだから。

まあ、確かに、モンスターが跋扈し、魔王の力が増す今の時代に俺という存在は求められていることは間違いはないのだろう。

「それはそうかもしれないが、やれやれ」

嘆息する。もう一度言うが、俺はあの神から幼馴染たちのバックアップをするように神託を受け、その役割をまっとうしたのだ。だからこそ、のんびりするためにこの辺境の村までやってきたのだが。

しかし。

俺にすぎるような瞳を向ける彼らの気持ちはよく分かった。

何より、俺がこの村を救うのは、老人が言ったように、初めてではない。

それにキラール・ウルフの存在も少し気がかりだ。

以前、あんな強力なモンスターはこの周辺の森にはいなかった。

英雄ゆえに民に頼られれば応えざるをえない、か。

俺は自分の性<sup>さが</sup>に苦笑しながら、

「分かった。少なくともこの村が立ち直るまでの間、村長の役目を引き受けることにしよう」

と答えたのだった。

「ほ、本当ですか！」

「アリアケ様が村長になってくださるなんて、夢のようだ！」

「ああ、これでこの村は救われる！」

たちまち村民たちが泣いて喜ぶのであった。

やれやれ。

俺は苦笑しつつ、

「では、早速始めるとするか。と、その前にだ」

俺は少しの間思索する。

その様子を彼らは固唾をのんで見守る。

「ちょっと呼び寄せたい連中がいるんだが、構わないだろうか？」

「「「「「？」「」「」」

その言葉に村民も、また賢者パーティーのメンバーも、頭の上にハテナマークをつけるのだった。



124・村長就任（後書き）

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

第3巻試し読みはまだなのですが、出来るようになりました  
すぐにお知らせしますね（\*^-^\*）

https://magazine.jp.square-eni  
x.com/sqexnovel/series/detail/  
yussyaparty/

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールテイ村は今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ち  
でももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

125・仲間を呼んで全員集合(前書き)

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

## 125・仲間を呼んで全員集合

125・仲間を呼んで全員集合

「ご無沙汰しております！ アリアケ様〜！」

「あ、ああ。久しぶりだな、セラ姫」

「セラ姫だなんて！ 私とアリアケ様の仲ではありませんか！」

「……どんな仲だったかな？」

「大賢者アリアケ様のファンクラブ『会長』ですよ！ きゃっ〜！」

目の前の少女はハイテンションといった具合に、美しい金髪を揺らしながら、長い耳をピコピコご機嫌に動かしながら声を上げた。

（おかしいな。最初会った時は、どこか儂い雰囲気をするエルフの少女だったはずなのだが……？）

いつの間にやら自由奔放を絵にかいたような人物になっていた。

まあいいか。本人は楽しそうだし。

ところで、

「俺が呼び寄せておいたんだが、エルフの森の事は大丈夫なのか？ 兄のヘイズは反対しなかったのか？」

「そこはこのセラ！ 説き伏せてまいりましたので大丈夫です！ 三日三晩説き伏せましたら、もう頼むから出発してくれとエールを贈られたのです！」

ははあ。それはヘイズも気の毒に。

このセラ姫。

最初会った時から、芯はとにかく強かったが、今でも言い出したら聞かないと知っているのだろう。

まあ、俺がエルフの森を死地より救ったことを借りと思ってくれていたのかもしれない。

だが、彼には同情しつつも、俺は微笑み、

「お前が来てくれたら助かる。良ければ俺を手伝ってくれ」

その言葉に、セラは今までのはしゃいだ様子はなりを潜め、胸の前に手で十字を作りながら片膝をついて頭を垂れた。そして、

「エルフの森を救った恩人アリアケ様の頼みとあらば、このエルフ族長の妹セラ。命に代えましてもその使命を果たしましょう」

そう言って俺を見上げると、

「この私を存分にお使いください、大賢者アリアケ様」

そう重々しく言ったのだった。

一方の俺は軽く微笑みながら、

「ああ、頼りにしているぞ、エルフの姫よ。この村との交易を仕切ってくれ」

「拜命致しました」

そう言っつて、彼女もまた微笑んだのであった。

「ハスとアンも久しぶりだなあ。それにしても呼んでから早かったな」

「もちろんですよ、アリアケ様！」

「お渡しした『暁の鈴』を鳴らして頂ければいつでもすぐに駆けつけると言っただけですよ」「」

「いや、それにしただって鳴らしたのはついさっきなのだが……」

まあ、細かいことは置いておこう……。

ハスとアン。二人はグロス伯爵領の犬耳族、いわゆる獣人だ。獣人差別政策をとっていたハインリツヒ・グロスを倒す過程で、殺されそうになっていた二人を救出したことで非常に懐いて<sup>なつ</sup>くれている。

それほど恩義を感じる必要はないんだが……。

というか、

「グロス伯爵領の獣人のほとんどが来てないか？」

「はあ、そうですが？」

「とりあえず動けそうな犬耳族は全員集めました！」

ええ……。

「いや、そこまでしてくれなくても良かったのだが……」

「何をおっしゃいますか！」

「そうですね、アリアケ様!!」

二人が立ち上がりながら言った。

「グロス伯爵領の犬耳族は一度主人と決めた方に生涯尽くす一族！」

「暁の鈴が鳴らされた今、万難を排し集まる事こそ犬耳の誉<sup>ほまれ</sup>というもの……」

「さあ！」

「」命令を！！！！」

めっちゃめっちゃ気合が入っていた。

「そこまでのことは本当にしていないのだが……」

と言っても、目をキラキラとさせている二人には聞こえていない。屋外には新しくやってきた犬耳族も待っていることだ。さっさと指示を出すのが懸命か。

「やれやれ」

俺は嘆息しつつ、

「よく来てくれた、犬耳族たちよ。お前たちには建築と防衛など力仕事を頼みたい。ただ、子供がいるなら『学校』を作るつもりなので、そこで教育を受けてもらえればと思っている」

「学校ってなんですか？」

「勉強を習うところだな。知識を学び、技術を獲得してもらおう」

「そんなことより用事を言いつけてもらえればすぐにアリアケ様のお役に立てると思いますか……」

ハスが腑に落ちないといった風に言うが、俺は微笑みながら、



「まあ、これは種まきのようなものでな。収穫まで気の長い時間がかかるが、その代わり得るものは非常に大きい。と言っても、まあイメージしづらいだろう。だが、これは命令ということ、すまないがよろしく頼む」

「は、はい！ アリアケ様がそうおっしゃるなら！」

ハスとアンは頭を深く下げると、

「犬耳族の誇りにかけて、アリアケ様の村づくりに貢献いたします」

「かつてのご恩を必ずお返しいたしましょう」

そう言ってかきずくのであった。

「まあ宜しく頼む。あと、今後はもうちょっと気楽にしてくれ。俺は堅苦しいのは苦手だな」

「はい！」

俺の苦笑に、彼らも微笑みで返してくれたのだった。

「いや、確かにギルド連盟に要請はしたが、まさか本当に来てくれるとは思わなかったぞ」

俺は久しぶりに驚きながら言う。

「ふん、別にお前のために来たわけじゃない。あの町での生活もちよっと飽き始めてたんでな。家族もいねえからよ、ちよっくら新しい町でギルドを立ち上げるのもおもしれーかと思ったただけだ」

「それは物好きなことだな。だが、ともかく来てくれて嬉しいぞ」

そう言うと、そのハゲの大男は図体に似合わず、ふん！と照れたようにそっぽを向いた。

まあ、こいつが俺の言うことでいちいち照れたりするわけがないので、気のせいに違いないわけだが。

ところで、と俺は肩をすくめながら、

「ギルド長オシムよ。本当にメディスンの町の方はいいのか？」

もう一度聞く。

ギルドマスターが拠点を変えろというのは、とても大きな決断だからだ。

飽きた、などといった理由なわけがないと思ったのだが……。

「へっ。あの町はあんたが魔の森をつぶしてくれてから、平和なも

んさ。俺のような有能が仕切らなくても問題ねえ。だから退屈で仕方なくなっちまってなあ、あんたの……あんたの近くなら退屈はないかと思っただけな

やはりそっぽを向きながら言った。

ふうむ。

まあ、退屈というのは一番の拷問とも言っつ。

退屈を理由に、こんな辺鄙な村に来ることもなくはないのか?????

「まあ、確かに……、この村には大量のモンスターが最近跋扈はつこするようだが……」

とはいえ、

「お前のような有能なギルドマスターが来てくれてありがたい限りだが、本当にいいの……」

そう言いかけたのだが、

「ああ、つたくよう!」

彼はなぜか自分のハゲ頭をかきながら、

「良いつたらいいんだよ！俺のことは俺が決める！好きにさせやがれ!」

「お、おう……」

怒られてしまった。

どうして来てくれたのか腑に落ちなかったので聞きすぎてしまったらしい。

これから一緒にやっていく仲なので、嫌われていなければいいのだが。

やれやれ。俺は本当に人付き合いが得手ではない。

とにかく、そういうことならば。

「ギルドマスター・オシム。お前が来てくれてありがたい。ギルドの存在は村の発展に大きく影響する。正直、かなりお前の活躍に期待している」

正直に告げた。嫌な顔をされるかと思っただが、

「ふん！ 初めからそう言え！ 俺に任せるとな！ ようし、一流の冒険者たちを集めてやるからな！」

オシムはなぜか非常に張り切った様子で、そう言って満足そうに笑ったのであった。

「ふう、まあこんなところか」

俺は集めた人々と面会が終わって嘆息する。

賢者パーティーのメンバーだけで村を運営することもできなくはないが、どこかで限界が来るだろう。

ゆえに、必要な人材に声をかけたというわけだ。

とはいえ、

「正直、まさか全員来るとは思わなかった、ですか？」

突然後ろから声がかかった。

「って、その声はまさか……」

俺もさすがに目を疑わざるを得ない。

「驚きましたか　驚いたのですしたら、計画は成功ですね！」

「いや、あんた。何でいるんだ？」

それに、

「教会の序列一位がこんなところにいたらだめだろう？」

本来空位であるブリギッテ教、その序列一位。

だが、それは先日までのこと。

今やその地位には、最も相応しき人物がついている。

それは、

「始祖ブリギッテ・ラタテクト！」

「もう、その呼び方は止めて下さい！　せめて、ブリギッテちゃんとかにしてください！　一緒に世界を救った仲間じゃないですか」

ぶんぶんと怒る。

「どこの世界に国教の始祖をちゃん付け呼びする輩がいるんだ」

「その権利をどうぞ！　いえ、ぜひとも、ぜひぜひ！」

「いらん、いらん」

「ええー」

お互い不服そうな顔をする。

そして、諦めたようにブリギッテが嘆息しつつ、口を開いた。

「世間的にはまだ私が存命ということは公にはしていません。混乱の元ですからね。知ってますか？　教会も一枚岩ではなかったりするんですよ？　私が生きていると知ったら、そりゃもう、ややこしいっただけありません」

「まあ、そうだろうなあ」

「でしよう？　なので、そういうわけなのです！！！」

「ん？」

俺は首を傾げる。何を言っているのだろう、この国教の元首は？

「私がこのまま聖都セプテノにいても、混乱の元でしかありません。ですので、面倒くさい……ごほんごほん……、泣く泣くですね、聖都のことは序列二位リズレットに任せまして、私はこうして辺境にてほそぼそと、ブリギッテ教の教えを広めようと思うわけです！」

「面倒くさいと聞こえたような？」

「気のせいです！」

やれやれ……。

俺は嘆息する。

とはいえ、彼女の言っていることはもっともだったりする。

今、教会はリズレットに政治的権力が集中しており、非常に安定している。

ここに始祖ブリギッテの復活などという大ニュースが出れば、それはもう火薬庫に火をつけるほどの大惨事になりかねない。

ならば……。

はあ。

やはり、俺はもう一度ため息をつく。

そこまで考えての行動ならば、受け入れざるを得ない、か。

しかし、

「あつ、でもですね。別に政争を避けるのに便利だとか、辺境だからこの村を選んだわけではないですよ?」

「え? そうなのか?」

俺は首を傾げる。

それに対して、ブリギッテはちょっとぶんぶんとした表情をして、

「当たり前です。辺境ってだけだったら別にどこでもいいじゃないですか」

彼女はそう言うてから、少し顔を赤らめると、

「あなたがいるから、この村を選んだんですよ?」

と言ったのだった。

んん?



それって。

つまり。

「どういう意味だ？」

「……………はあ〜」

なぜか彼女は大きく大きくため息をついてから。

「アリシアさんの苦勞がしのべれますね〜。よくゴールできましたね〜」

どうしてアリシアの名前が出てくるのだろうか。

「まあいいです。とにかくですね！」

彼女はまっすぐに俺の目を見ながら、

「せつかく300年ぶりに解放されたのですから、気持ちのいい場所にいたいと思うのが人情というものでしょう？ ですので、私はこの村に、あなたのいるこの村にいるようにしますよ、アリアケ様？」

なるほど。確かに、この村の周囲は自然豊かで気持ちのいい場所だからな。

「この村の人々にとって、心の支えが必要だ。心細く思っていた人々もあなたがいれば大丈夫だろう。来てくれて助かるよ。ブリギッ

テ

俺は素直にそう言うと、彼女は満面の笑みを浮かべながら、

「はい！ お任せください、大賢者様！ 悪い人には鉄拳パーンチしていきますからね！ 治安維持はお任せください！」

「いや、そっち方面を期待しているわけではないのだが……」

まあ、ともかくこうして、辺境の村には続々とかつての知り合いが集合したのであった。

125・仲間を呼んで全員集合(後書き)

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

第3巻試し読みはまだなのですが、出来るようになりました  
すぐにお知らせしますね(\*^-^\*)

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールテイ村は今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

126・魔王登場と新メンバー加入（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

## 126 ・魔王登場と新メンバー加入

126 ・魔王登場と新メンバー加入

（魔王リスキス視点）

「分かったのだ！ それではアルガス地方の制圧は1年もあれば出来るというわけだな？」

「はい、リスキス魔王様！」

玉座に座る私の前には、かしずいた四魔公の一人がいた。

名をトリドスと言うキング・オークだ。

その力は一振りで山すら吹き飛ばすという。

彼以外にそんな力を持つオークはいないので、とりあえず四魔公にした！

（まあ、正確には、先日四魔公ワルダークが倒されてしまったために、一人は空位なのだけどねっ……！）

そして、その余った一席を誰にするかで、魔王領では政治的な駆け引きが勃発していた。

あていしは面倒なのが嫌いなので放置しているが、そのうち解決せねばならない問題の一つなのだ。超面倒なのだ！

「はあ……。それにしても、あいつはこらえ性のない者だったのだ！ あていし以上のせつかちさんだったのだ！」

思わず口から愚痴が漏れた。自慢の赤髪をクリクリした。

「は？ 何かおっしやいましたか？」

「何でもない。妄言なのだ！」

あていしはそう言ってごまかす。

ワルダーク・ゾゾルゲー。

あの爺ちゃんをグランハイム王国に潜り込ませることで、どれだけ魔王領の利益になっていたか分からない。

何せ敵国の情報が筒抜けなのだ。他国の情報ですら、得ることが出来た。

だから余計なことせずに、その地位にしがみついでいてくれるだけで良かったのだ。

なのに！

だというのに！

あのジジイ、勝手に動いたうえに、魔神ポセイドンの復活を目論んで自滅してしまったのだ！ 最強のあほなのだ！

（情報の重要さというのが、魔族たちにはどうしても浸透しないのだ。そういう種族だからしょうがないのだけど〜）

忸怩たる思い！ なのだ！

「魔王様？ どうされたのですか？」

さすがに内省にふけりすぎたようだ。

私はいつもの調子で告げる。

「状況は理解した。だが、あの地域は人類も死守しようとするはずなのだ。こちらは圧力をかけるふりをし続けるだけで、奴らの物量や兵士を消費させるといふ効果がある。戦力を分散させることも可能なのだ。ゆえに最悪占領できずとも良いので焦らずとも良いと伝えるのだ」

あていしの指示に、

「はは！ ありがたきお言葉！ かの地の兵士、將軍たち一同に伝えましょう！ きつと一気呵成いっきかせいに脆弱な人類どもを制圧するに違いありません！！！」

「……意図を正確に伝えるために、文官に後ほど書面を用意させるのだ。それをかの地へ届けて欲しいのだ」



「ははあ！」

やれやれ、なのだ。あていしだつて、あんまり頭使うの好きじゃないのだけど、さすがに魔王なので苦手とか言ってもらえないのだ。でもそのうちハゲそうなのだ……。

さて、そんな軍事協議の後、四魔公トリドスが退室したので、あていしも自室へと引き上げたのだ。

ピンク基調のファンシー気味のお部屋なのだ。

……だが、そこにはいるはずのない存在が、立っていて、あていしに話しかけていたのだ。

「久しぶりじゃな、魔王」

「……これはこれはご無沙汰なのだ、邪神様」

驚いたのだ。どうやって入ったか何て詮索するつもりはないのだ。

そうではなくて、

「普段は裏から世界を操る邪神様が、どうして直接こっちに出てこられたのだ？」

「うむ。そのことよ、魔王リスキス」

邪神様は企み事を口にしようとするのだ。あていしは一生懸命に聞くようにする。まあ、ぶつちやけ内心、

(超面倒くさそうなのだ！ まあ仕方ないのだ)

と嘆息しまくりだったのだけど。

「何なりと邪神様。あなたに頂いた力により、あていしは魔族を統べる力を得たのだ。ならば、あなたは親と同じ。いかなる指示にも従うのだ」

「ふふふ。話が早いな。魔王よ。実は、な」

邪神様の話を最後まで聞き、あていしは早速承諾の返事と策を口にしたのだ。

「分かったのだ！ ではとっておきの駒を動かすのだ！」

「ほう、とっておきの駒とは？」

邪神様が興味深そうにするが、

「むふふ、とっておきと言えば、とっておきなのだ！ これ以上ない『駒』なのだ！！ ネタバレすると楽しみ半減だと思うので、楽しみにしておいて欲しいのだ」

「ほう」

あていしはそう言って、その策を実行の準備をしはじめたのだ。  
何事にも準備はいるというもの。

それに、

「アリアケ・ミハマつち！ 邪神様にそこまで見込まれてるとは！  
会うのが超楽しみになのだ！」

あていしはウキウキと心を躍らせる。

だって、

「ワルツは一人では踊れないのだ！」  
悪たくみ

その声はすでに去った邪神様には聞こえていないはずなのだ！

（勇者ビビア視点）

「くそが！ くそが！ くそがよおおおおおおおおおおお  
おおおおお！……！」

俺は地面に頭を突っ伏しながら絶叫した。

ここは街道のご真ん中。



にした罰があたつてんだらうがよ！ 反省してあたしに土下座して謝罪しろつてんだよ！」

「それはもう終わったことでしょう！ いい加減にしなさいよ、プ  
ララ！」

「終わつてねーよ！ やられたほうが一生覚えてるもんなんだよ！」

「そんなことよりもどうするのだ勇者よ！ もう路銀がないぞ！  
ろくなクエストも王国の許可がなければ受けられん！」

「知るかよ！ てめーらが何とかしねーか！ もう何日食つてねえ  
と思つてんだよ！」

「お風呂も入れないなんてあんまりですわ！ ちょっとお金貸しな  
さいよ、エルガー！ あんたなんて風呂入らなくても平気ででしょ  
う」

「愚かな！ 肉体の日々のメンテナンスがどれほど重要な認識が  
薄すぎる！ これだから筋肉に理解の薄い女というのは……！」

その口汚い口論は四六時中続いていた。

勇者パーティーから、ただのポーターであるアリアケが抜けてから、  
彼らの地位や名誉は凋落の一途をたどっていた。

かつての栄光はもうなく、街を歩けば借金取りに追われ、子供たち  
に嘲笑され、大人たちからは見てはいけないものとして目をそらさ  
れたりする始末。

「どっして！ どっして！ どっして！ どっして！」

どうしてこんなことになったんだ！

くそ！ くそ！ くそ！ くそ！ くそ！ くそ！  
くそ！ くそ！ くそ！

「せめて！ せめてまともなポーターが一人付きさえすりゃあ、またやり直せるってーのに！」

俺はそう確信する。

アリアケというポーターがいなくなってから、全てが狂いだした。

だからこそ、バシユータと言うポーターを雇ったが、あいつはとんだ無能で、俺たちの足を引っ張る事しかできなかったんだ！

あれは運が悪いただけだった。

「もう一度チャンスさえあれば、俺たちはまた栄光のステージに帰ることが出来るのにいいいいいいいいいいいい！ あああああああああああああああああああ！！！」

そう絶叫した時であった。

「あの、ポーターをお探しですか？」

突然、その声は背後から聞こえていた。

「は？ 誰だ？」

「ああ、突然声をかけてしまつて驚かせてしまい申し訳ありません。私の名前はティリス。実は先日、所属していたパーティーと別れてしまつて、これからどうしようかと途方にくれていたところなのです。あなたたちは？」

その声をかけて来たのは、黒髪を長く伸ばした澁刺とした感じの少女であつた。

「俺たちは」

名乗ろうとしたところ、

「ああ！ 分かりました！」

彼女がパンと手をたたいて言った。

俺はその少女の仕草に唇をニヤリと歪める。

いかに俺たちが多少落ちぶれようとも、その真の力。威厳。威容。ポテンシャル。あふれでる人間的な存在力。そんなものはどうしても滲み出てしまう。

それが彼女におのずと俺たちの正体を伝えてしまったのだらうと確信したからだ。

だが、

「皆さんもダンジョン攻略に失敗した？ いえ、Dランクパーティーーさんたちですね！」

「ぐー！　ぐきぎいいいい」

俺は彼女の言葉に思わず唇をかみしめると同時に、うめき声を上げることしかできない。

唇を強くかみしめすぎて血がしたたり、言葉を紡ぐことができなかったのだ。

しかし、彼女はそんな俺の様子には気づかずに言葉を続ける。

「話を最初に戻しますね。私も長くポーターをやっていたんです。見たところ、皆さんのパーティーにはポーターがいらっしやらない御様子！　どうでしょうか、ここは一つ、私をパーティーメンバーに入れて頂けないでしょうか！　きっとお役に立てますよ！」

そう澁刺とテイリスは言った。

しかし、俺は言下に、

「はあ、てめえなんかを加入させるわけがっ……！！　むがぁ」

断ろうとしたのだが、

「テイリスさん、でしたわね！　ええ、ええ。ぜひ入ってもらえればと思いますわ！　あと、もし宜しければ路銀を少し融通してもらうことは出来ないでしょうか？　おっしゃるように少し攻略の失敗が続きまして、ちよーっとだけ、物入りなのですわ！」

「ああ、やっぱりそうだったんですね？　いいですよ。多少持ち合



わけがありますから」

「マジじゃん！？ 捨てる神あればってやつじゃん！ これで今日はまともなスープにありつけるし、お湯も使えるじゃんじゃかじゃん」

「うむ！ 俺の筋肉も喜んでいぞ！ ふは！ はははははははははは！」

「むぎい！ むぎい！ むつぎぎぎぎいいいいいい！！（お前ら！ 離せ！ 俺がリーダーなんだぞ！）」

俺が口を開こうとしても、3人がかりで抑え込まれ、ろくに口を開けないのだった。

「あの、その男性の方は何かおっしゃりたそうなんです……」

「「「え？」「」」

三人は冷徹な目で俺を見下ろすと、

「あなたのパーティー加入を歓迎すると言っているのよ。ええ、でもちよつと興奮気味みたい。よつこ「祝福ひきた拳」らしよつと」

「ぎひへあ」

デリアのユニークスキル『防御無視』を不意打ちで叩き込まれた俺は、たちまち激痛と共に、意識が薄らいでいく。

顎がガクリと縦に揺れた。

「ふふふ、どうやら賛成のようですね。それに落ち着いたみたいですね。さ、ティリスこれから宜しくお願いしますわね？」

「はい！ 宜しく願いしますー！」

少女は朗らかに笑った。

だが、意識が落ちる寸前、俺はそんな少女と偶然目があう。

しかし、その瞳の奥に映るのは何か得体のしれない何者かのように、俺には思えて仕方なかったのだった。

だが、残念ながら次に起きたとき、そのことを俺はついに思い出すことはできなかつたのだが……。

126・魔王登場と新メンバー加入（後書き）

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いいたします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

第3巻試し読みはまだなのですが、出来るようになりました  
すぐにお知らせしますね（\*^ - ^\*）

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「魔王ちゃんは今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

127・内政のターン！　く作物の収穫量を1000%アップせ  
よ（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願  
い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

127・内政のターン！　く作物の収穫量を1000%アップせよ  
よ

127・内政のターン！　く作物の収穫量を1000%アップせよ

「なるほど、農作物にそれほど壊滅的な被害があるのか。村全体の作物の90%がダメと」

「はい、アリアケ様。おかげでこの村は壊滅しそうですねですじゃ…」

村の長老が現状を悔しそうに語った。

大量のモンスターが突如として村の近くに住み着いてから、作物は荒らされ放題だという。

そのモンスターに対応することができず、村はどんどん衰退し、今に至っているのだ。

まずは、この根本的内政問題を解決する必要があるそうだな。

俺は考える。

「やはり作物がとれないというのは、致命的なものなのですか？  
街育ちですと感覚的にはよく分からないんですが」

ラッカライの質問に俺は頷く。

「ああ。こういった辺境の村になってくると、交易にしろ、自給自足にしろ、その糧の元は農作物になってくる。その9割が壊滅してしまうともなれば、もはや村全体が死に体になってしまつと言つていいだろう」

俺の言葉に、長老は沈痛な面持ちで相槌をうつた。

ちなみに、この老人の名は確かシャルディと言う。

「ならば、わしの出番なのじゃ！ 近くに済むモンスターの集落やら森を全てドラゴン・プレスで焼き払うのじゃー！ にゃーっはっはっはっはは！！ 大船にのったつもりでいる、シャルディよ！」

「まあ、慌てるな。それは最終手段だ」

「なのじゃ？」

俺の言葉にコレットが首を傾げる。

モンスターもまた村にとっては資源であるという指摘。そのうち村へ貢献すると思う。今は仕方ない、みたいな。

「モンスターというのは有害だというのは事実だが、例えば『ラクスマー』と言う街には近くに良質の狩場《森》がある。……まあ勇者たちが半ば破壊してしまつて牢屋に入れられたことで、変な意味でも有名な場所なわけだが……。ともかく、そこで取れたモンスターの素材を売つて街は潤っているし、そのお金で人々は飲み食いをするので、街中にお金が回っているんだ」

「さすが先生です！ 冒険者としてだけでなく、政治にも詳しいのですね！」

「まあポーターだからな。あの職業はすべてに精通していないと出来ない仕事だ。まあ、俺のことはどうでもいい」

それよりも、

「ギルドマスターのオシム。それからシスター・ブリギッテを呼んできてくれ」

そうそば付きの村人に伝えた。

彼らは急いでかけてゆく。

「なぜその二人なのじゃ？」

コレットが聞いた。

「彼らはこの村の『武力』と『信仰』を統括する2大派閥のリーダーであり、この村の大きな問題の解決には不可欠だからさ」

「ほーん」

ほーん、とコレットが分かったのか分かっていないのかよくわからない返事をした。

「先生の近くにいると沢山勉強になっていいですね、お姉様！」

「うむ！ 俺もドラゴンの末姫として旦那様に色々教えてもらうの



じゃー！」

コレットとラツカライが嬉しそうに顔を見合わせた。

ちなみに、

「お前たち、別に俺のそばにべったりしていなくていいんだぞ？  
なんなら散歩に行って村の様子を見て来るとか……」

「まあ良いではないか！　なのじゃ！　最近はアリシアとべったり  
ではないか！」

「そうですよ、先生！　たまにはこうしてご奉仕させてください！」

そう言うと二人は、良く分からないおおきな扇子のようなもので俺  
に風を送るのだった。別に暑くはないのだが……。まあいいか。

と、そんなやりとりをしているうちに、オシムとブリギッテがやっ  
て来た。

「すまん、二人とも忙しいところ呼び出して」

二人には急ぎで冒険者ギルドの立ち上げと、教会の立ち上げをやっ  
てもらっている。

村で一番多忙を極めているであろう二人だ。

しかし、村全体の生活の維持のためには、二人の働きこそが不可欠なので仕方ない。

そんな二人に更に厄介ごとをお願いしないといけないので、俺は頭を下げたのだが、

「えーい、なーに言ってやがる、水くせえ！ いいから何でも言え！」

「わたしもですよ！ それに何だか面白そうですものね。さー、何でも言ってくださいね！」

と、むしろ遠慮がちだと怒られてしまった。

お願いする立場なのだが、どうもそれが気に入らないらしい。むしろ命令しろとのことだ。

うっむ、俺に命令されたいという気持ちはやはりよく分からんが…。

そんなことを気にしていても仕方ないか。

では。

「二人に依頼を出したい。知つての通り、モンスターが作物を荒らすのが村の衰退の原因の一つだ。だが、知つての通り、この村にモンスター退治のための自警団を組むような予算はない。自滅するだけだな。そこでだ、冒険者を雇うのがいいと考えた。農民たちから

依頼を出し、その報酬も農民たちから出させる。どう思う？」

俺の政策に、まずオシムが口を開く。

「アイデアは悪くねえ。村の財政は乏しいからな。だが、農民たちもそれ以上に貧しいんじゃないかねえか？ その方法だと、あいつらのほうが先に干上がっちゃまって、村が壊滅するぞ？」

「その通りだ。やはりギルドマスターという仕事をしているだけあって視野が広いな」

「は！ よさねえか！ んで、そこまで考えてんなら、次の一手も考えてあんだらうが！ わざわざ、シスターまで呼び寄せたんだからよ！」

なぜか照れながら吼えるオシムに苦笑しつつ、俺は言葉が続ける。

「ああ。無い袖は振れんからな。ならば、借りるしかあるまい」

俺はブリギッテの方を見る。彼女の方は慈悲深い女神のような表情をするが……。

俺は悪魔と契約するような気持ちで、嘆息しつつ言う。

「ブリギッテ教会は持たざる者への貸付制度をやっているだろうか？ 利息はそれほどあこぎではなかったはずだが？」

「ふふふ、さすがアリアケさん、目ざといですね。お金がなければ村の経済は回りませんから良い判断かと思えます。お金とは体内をめぐる血そのものですからね。それで、この序列一位は、こんな時

の権力ということ、リズレット様には話を通しておきましたよ」

「それはありがたいな」

嘆息する。ぜひ、お安くして欲しいものだ。

「利息は0・01%でいかがでしょうか？ もう破格も破格！ これほどの低金利はありません！」

俺は驚く。本当に安かったからだ。

「いいのか？」

さすがに0・01%では教会の利益にはならないと思うが。

「ま、そこはあなたへの投資だと思ってくださいな」

「俺への投資？」

どういふことだ？

俺は首を傾げるが、

「なるほどのう」「それはいい投資先かもしれないですね」

両脇のコレットとラツカライは納得している。本当に何を言ってるんだ？

「まったく、あなたと言う人はご自分が見えていないのが唯一の欠点ですね」

彼女はそう言って、腰に手を当てて嘆息する。

「出世払いをお願いします、とこう言っているんですよ。アリアケ様。あなたほどの人物が村を治める程度で終わるわけがないじゃないですか！ この村、そして街、やがては国を治めるに違いありません」

「そんなわけないだろうに。スケールの大きい冗談だなあ」

俺はのんびりしただけで、成り行きで村長にはなっただが、別に領主になりたいわけではないのだ。

しかし、

「んっふっふっふー。まあそのうち分かるでしょうとも。で、そうですね、あなたに爵位が与えられましたら、倍返しでもしてもらうとうことで一つ宜しくお願い致します」

「爵位って……。お前なあ……………」

スケールが大きいにもほどがあるぞ。

「もし、この辺鄙な村に伯爵が誕生するとなれば、それはいわゆる辺境伯というやつになる。まああり得ない話だ」

だが、彼女は俺の言葉をスルーしてしまう。

やれやれ。

まあ、いいか。

ともかく、まずはこれで一旦、誰も損せず村の経済は回る仕組みを整えることが出来たのだ。

そして、その確信の通り、次の日から冒険者たちが大挙して村に乗り込んできたのである。

新しいオールティの村のあり方が俺の政策によって始まったのである。

127・内政のターン！　く作物の収穫量を1000%アップせ  
よう（後書き）

第3巻は9月7日発売です！　ご予約、ご購入ぜひお願いします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！　第2巻も好評発売中です。

第3巻試し読みはまだのようですが、出来るようになりましたらす  
ぐにお知らせしますね（\*^-^\*）

[https://magazine.jp.square-eni  
x.com/sqexnovel/series/detail/  
yusyaparty/](https://magazine.jp.square-eni<br/>x.com/sqexnovel/series/detail/<br/>yusyaparty/)

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールテイ村は今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持  
ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。



128・問題勃発と賢者の活躍　　く冒険者たちの新居を大量に確保せよ（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

128・問題勃発と賢者の活躍　　〈冒険者たちの新居を大量に確保せよ〉

128・問題勃発と賢者の活躍　　〈新しく増えた住民たちの新居を大量に確保せよ!〉

〈ギルドマスター・オシム視点〉

「おい!　いくら仕事があっても寝泊まりする場所がないぞ!」

「割りの良い依頼があるから来たつてのに、建物もほとんどないつてのはどういことだ!」

柄の悪いというか、強面の冒険者たちが、即席の冒険者ギルドの建物のテーブルで酒をあおりながら文句を言っていた。

「まあ、そう文句を言うな。じきに建物も増えるさ」

ギルマスのオシムがなだめるように言うが、

「だがよ!　ギルマスの旦那!　森の木材の伐採はモンスターが多すぎて出来やしねえ!　どっかで木材を大量に仕入れてこねえことには、建物を大量に建築するなんてぜつてーむりだぜ!」

「とはいえ、こんな辺鄙な村だ!　木材を大量に売ってくれる行商が都合よくいるとは思えねえ!」

「冒険者は体が資本だ！　いくらアリアケ村長が俺たちに村人や田畑を守らせても、俺たちの方が先にばてちまうってもんだ！」

冒険者たちが不満を口にした。

（なるほど。こいつらの言うことももつともだな……）

オシムは荒くれ者の冒険者たちの愚痴や罵倒を聞きながら考えていた。

「村における人間は血みてえなもんだ。どこか一か所が止まったら、村全体が止まって死んじまう」

そして今、止まろうとしているのは、モンスターから村を守っている冒険者だ。

「これはアリアケの奴に今日の夜にでも報告するか」

あいつなら、再びうまく血を村全体に巡らせることだろう。

オシムはそんなことを考えながら、冒険者たちに出すスープの仕込みに入るのだった。

（アリアケ視点）

「……という知らせがオシムから届いた。俺の実施した内政政策に問題勃発といったところだな。このままだとこの村は徐々に衰退し、やがて滅亡してしまうだろう」

俺は賢者パーティーを集めて報告する。

「とはいえ、冒険者による村防衛は急務だったのであるう？ でなければ村人も田畑も壊滅し、復興の道もなかった。首の皮一枚でつなぎとめ、今まさに村全体が活気づきはじめているのは主様の功績であろう？」

そうフェンリルが事実を言っているだけ、といった風に淡々と告げた。

「まあ、そういったこと一切含めて村長の俺の責任だ。まだ小さな村だ。政策を一つ誤れば人体と同じで、そこに血が巡らなくなり、壊死する。それは村全体に広がり、村の死につながるだろう。というわけで、この問題を解決することが明日の村の将来を決めるだろう。皆の知恵を借りたい」

そう言うと、まずはコレットがピョンと元気よく手を挙げた。

「ではわしがドラゴンになってひとつとびして、別の森から木をこっそり取ってくるのじゃ！」

「いい案だが、お前には村の防衛のリーダーをしてもらっているからなあ。それに、木と言ってもなんでもいいわけではなくてな。建築用の木というものがあるんだ。その辺の目利きはできるか？」

「にゃんと!? そんなに難しい話じゃったのか!」

コレットが目をぐるぐる回しながら、残念そうな声を上げた。

ちなみに、もう一つ問題がある。そもそも俺たちは村における『頭脳』なのだ。だから、俺たち自身が動き、全ての問題を解決していく方策をとれば、必ずどこかで行き詰まり、村が発展することは決してないだろう。これが実に内政の難しいところだ。

「では私がブリギッテ教の権力をちよつと使用しましょう」

そう言ったのは、ローレライだ。

彼女は教会No.2のリズレット大教主の娘なので、やる気になればそう言うこともできるのだろう。

だが、

「目の前のことはそれで解決するが、長期的には余り良くないかもしれないな」

「そうなのですか？」

「ああ。まっとうな商いではなくなるからな。一時的には教会の口利きということでご便宜を図ってくれるかもしれないが、その代わりに徐々に条件を釣り上げてくるだろう。あいつらはしたたかだからな」

「なるほど。権力濫用に興味があったのですが」

「別の機会に残しておくといい」

「はい。お役に立てずすみません」

殊勝にローレライが謝る。だが、

「いや、今のやりとりで少し思いついたことがある。ありがとう、ローレライ」

「そうなんですか？ お役に立てたなら嬉しいですが」

ローレライが驚いた顔をした。

「ああ」

俺は頷いてから、

「エルフ族の姫……。セラ姫を呼んできてくれるか？」

そう言つと、全員が意外そうな表情を浮かべたのである。

「お呼びでしょうか、アリアケ様？」

いきなり呼び出されたのに、なぜか嬉しそうにセラは微笑みながら近寄ってきてテーブルに座った。

「ああセラ……。いや、エルフ族のセラ姫。商談がしたい」

俺は改まっていう。

すると、セラは一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに背筋を伸ばして俺の目をその美しい瞳でまっすぐにみた。

それは普段接するセラとは異なる、エルフ族を率いる王族の顔であった。

「それで御用向きとはなんですか？　アリアケ様？」

「ああ、実はな……」

俺はこれまでの経緯を簡単に説明する。

そして、

「で、だ。セラ姫。俺がエルフの森を枯死から救った後、ヘイズはどうしている」

その言葉にセラは微笑む。

「さすが大賢者アリアケ様です。おっしゃる通り、あの事件以降、兄ヘイズはアリアケ様のご助言に従って適切なアレに努めていますよ」

「そうか、なら大量にあるはずだな。しかも……」

俺は微笑む。彼女も微笑んだ。

「はい。森を愛するエルフが粗末にするはずがありません。今後様々な用途に使用するために、大切に加工して保管しています」

「あくまでエルフ族として使用するために、だな？」

「はい」

彼女はもう一度頷いた。

「あつ。ま、まさかアリアケさん!？」

「そういうことですか、先生!？」

アリスアとラツカライ俺が何を言うか気づき、驚きの声を上げる。

そう。

ヘイズが行っていることとは、アレに他ならない。

「森の枯死の原因は間伐をやめてしまったからだ。その間伐を再開した。しかも中断していた分の大量の間伐材が今、エルフの森には貯蔵されている。虫のいい話と思うかもしれないが、それを俺たちに売って欲しい。この村の未来がかかっている。たの……」

俺はそう言って頭を下げようとした、のだが、それより先に、

「さすがアリアケ様ですわ！ 本当に何でもお見通しなのですわね！」

なぜか感激したとばかりに、セラが喜色を顔に浮かべていた。



「うん？」

よく分からないので俺は首を傾げる。

しかし、他の賢者パーティーの面々も、

「さすが旦那様なのじゃ！ その手があったか、なのじゃ！」

「よくもまあ、色々な策を思いつくものよのう」

などと、なぜか褒められる。

「いや、単に虫のいい話をしているだけのようと思うが……。そもそもなんでセラまで俺の提案に喜んでのってこようとしているんだ？」

まだ商談の条件も言っていないのだが。

しかし、セラは「はあ」となぜか呆れた様子で額をおさえると、

「エルフ族がどれくらい感謝しているか、分かっているしやらないのでしょうか。分かっているしやらないのでしょうか。アケ様ですものね。はあ」

む、なぜか呆れられてしまっている。それにだ。

「確かに君たちを結果的には助けたかもしれないが、それほどのことでは……」

「は。どれほどのことをしてくださったのか、自覚してもらった  
めにも、それを証明しないといけないみたいですね。これも作戦  
だったらとんでもない悪徳商人なのですが、他意がないのがまた厄  
介な賢者様なんですよね。」

なぜか更にため息などをつかれてしまった。

むう、なぜだ？

「ああ、でもですね！」

セラは付け加えるように言う。

「私としましては、ここはきつと村にとどまらず、辺境伯などの国  
になると思っておりますので、その際はなにとぞエルフ国との永い  
友好関係を宜しくお願いしますね。」

おいおい。

またそれが。

「あいつと同じことを言うんだなあ。そんなことがあるわけがない  
んだがなあ。」

冗談だと分かっているても、苦笑してしまう。

「誰もそうは思っていないみたいですけどねえ。」

更にセラが冗談を言う。

俺も更に苦笑したのだった。

だが、何はともあれ、

「村長として、期待していくれている、ということには違いないわけだしな。それは君たちエルフ族が俺の村に期待……投資してくれる、ということだ。なら俺は村長として、その期待に応えるだけさ」

「はい、そう考えて頂いて結構です。エルフ族はアリアケ様を信頼しておりますから。ゆえに、ここに正式に交易契約を結びましょう」

セラが姫として宣言した。

「あつ、ちなみにですが」

と、セラが付け加える。

「ごうした交易契約はこの村が初めてになります。どうぞ初めての相手として未永くセラともどもお願いしますね？」

「えっ、そうなのか？」

俺は意外に思った。

「てっきり他の村や国ともしていると思っていたが……」

「はい。もちろん、沢山ご依頼は頂いてますよ？ エルフ族の所有する材木は腐らず、丈夫で、木自体が呼吸することで湿度調整などもしてくれますからどんな季節にも快適な最高素材ですからね。どの国も、どの商人も喉から手が出るくらい欲しがるんです」

そう言えば、聞いたことがあるな。

エルフの森で取れる木材はとんでもない値段で取引されると。

だが、それだと疑問が一つ生まれる。

「では、どうしてうちが初めてなんだ」

だが、その質問にセラは今一番のため息をつき、

「はあく。朴念仁ですね」

へ？

「はじめはあなたにとって決めていたからに決まってるでしょうに・  
・・。やれやれ、一体どうやってアリシア様はアリアケ様をおと  
されたのでしょうか？」

セラがちらつとアリシアの方を見ると、アリシアは顔を赤くして伏  
せてしまった。

どういう意味だろうか？

「あー、いいんです、いいんです。道のりは長いですね。ともかく  
「！」

彼女は再び姫の顔となり、

「ここにエルフ族代表代行セラ第一王女が宣言します。大賢者アリ

アケミハマが治めるオールティ村と資材に関する交易を契約しましょう。この村の発展にエルフは強く寄与いたします。また木材の対価はこの村の特産品でお願いします!」

「特産品? この村の野菜とかでいいのか? 本来は相当高額な木材なのだろう?」

「エルフが初めて交易を正式にします。この村の特産品はエルフにとって大変な希少価値があることになりませんか?」

なるほど。貸し借りなしか。

そんなことよりも俺たちに大事なことは。

「末永い友好を、エルフ族の姫、セラ王女」

「ええ、こちらこそ。将来の人族の王様」

「だから違つというのに」

だが、何はともあれ。

こうして、俺の対応いかんによつては村の存続が揺るがしかなない内政問題は、エルフとの交易を思いつくという俺の機転によって、即時解決に向かったのであった。

しかも、超高級資材で作られた家は冒険者たちに非常に好評で、それがまた評判を呼び、更に優秀な人材が集まってくることになったのである。

さて、こんな風に様々な内政問題を処理していたある日、そいつは空からやってきた。

128・問題勃発と賢者の活躍　～冒険者たちの新居を大量に確保せよ～（後書き）

第3巻は9月7日発売です！　ご予約、ご購入ぜひお願いします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！　第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

-----  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールテイ村は今後どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



129・刺客登場（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

## 129・刺客登場

### 129・刺客登場

「村の整備も進み始め、ある程度体裁が整ってきたな」

「そうですね先生。建物も増えてきましたし、農作物も順調に育っています。村の防備も冒険者たちが踏ん張ってくれています」

「さすが旦那様なのじゃ。廃村待ったなしの村をこうも見事に復興させてしまうのじゃから！」

「本当にそうですね。さすがアリアケ様！」

村の様子を視察に出ている俺についてきた、ラツカライ、コレット、ローレイライが笑いながら言った。

「ははは。俺の成果なんかじゃないさ。皆が一丸となって頑張ったからだ」

「みんなを一丸にしたのは先生のお力ですので、そこはお忘れなく！」

「そんなことはないさ」

俺は苦笑する。

「確かに俺は制度を考え出し、政策を実行はしたが、それを成し遂げられたのは賢者パーティーや残った村人たちの力だ」

俺はその手助けをしたに過ぎない。

だが、そんな事実を言うと、付いてきた少女たちは一様に苦笑して、肩をすくめるのであった。

なぜだ？

と、そんな風に問題は大小起こりつつも、全体としては村の復興がある程度軌道にのっていた時のことであつた。

「！？ 先生！」

「ああ、分かっている！」

「のじやのじやのじやー！！！」

「へ？ どうしたで、きゃあああああああああああ  
「！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンンン……

俺たちの歩いてきた正面の道に、流星が落ち来て来た。

シューシューと音を立てているのは、それがぶつかった時の熱量で大地が蒸発する音である。

そして、その爆発の衝撃で周囲は消し飛ばさずであったが、

「ラツカライご苦労」

「いえ、むしろ先生のスキル支援がいつの間にかかっていることに驚いているんですが……」

「僕も！ 僕も周囲に影響が出ないように旦那様を守ったりしたのじゃ！ そこんとこよろしく！」

「ラツカライさんが聖槍で衝撃を中和して、コレットさんがアリアケ様をお守りしたんですね！ えーと、回復術士の出番はおかげでなさそうですね……」

「その方がいい。それに、ちょっと下がっている」

俺は指示を出す。その指示とは、

「戦闘配置につけ」

戦闘開始を意味するものであった。

なぜなら、相手の油断しているところを急襲し、その命を奪う存在のことを、

「刺客が来た」

そう。

刺客と言っただから。

もうもうと立ち込める煙が晴れるにしたがって、刺客の全容が見えてきた。

「本来、暗殺者であれば、姿を見られた時点で失敗。逃走する。だが、この相手は逃げるそぶりはない。つまり、今のは単なるご挨拶というわけだ」

「い、今のが単なる挨拶なのですか　　すごく熱烈なのですね」

ローレライよ、少し違うが。まあいいか。

「うむ！　お前がアリアケ・ミハマなのだな！」

「そうだが？」

「今の一撃で死ななかったことは褒めてやるのだ！　だが！　全然本気ではなかったのだ！　単なるご挨拶だったのだ！　勘違いするのではないのだぞ！」

「分かっている。そう言っただろう？」

「む！？ た、確かに！ お前、人間のくせにやるではないか！  
さすが邪神様・・・げふんげふん！ とにかくあていしに目を付け  
られるだけあるのだ！」

「あていしとは私という意味なのか？」

「あていしの名は魔王リスキス・エルゲージメント！ 魔物たちの  
頂点にしてこの世界を将来6割以上支配する者！ 以後、おみしり  
おきを！」

「俺の名はアリアケ。こっちは聖槍の使い手ラツカライ、ゲシユペ  
ント・ドラゴンの末姫コレット、ブリギツテ教会大教皇の娘ローレ  
ライだ」

「ふん！ すごいのだ！ 凄いけど人間の地位なんて全然凄くない  
のだ！ すごいメンバーだなんて感心なんてしてないのだ」

「で、何をしに来たんだ？ まあ、答えるまでもないか？」

「愚問なのだ！ 答えるまでもない！ あていしはとある方の命に  
よって、アリアケ・ミハマ！ 人類の救世主たるお前の首を取りに  
来たのだ！ 退屈で……げふんげふん！ 部下では手に負えないと  
思ったからあていし自ら参上したのだ！ どうだ驚いたか！」

「まあ色々な……。全部答えてくれたことは置いておくとして……。  
魔王に直接狙われるほど、俺何かしでかしたかな、と。まったく身  
に覚えがないんだがなあ……」

「いやいや」



「!!!!!!!!!!」

そうやって力を解放しようとする。

「あつ、待った待った」

「え？」

「この場所だと村が崩壊するから、俺も全力を出せない。だから移動しよう」

「む、そうなのか？ まあ、それは確かに一理あるのだ。人民は国家の重要な資源なのだ。了解なのだ」

こうして俺たちはしずしずと、村から離れた場所に戦闘フィールドを移したのであった。



第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いいたします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyparty/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールティ村は今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

130・新サービスで懐柔 その1(前書き)

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！



「全員でやると被害が大きくなる。ここは俺一人でやるから、お前たちは見学している」

「なんじゃと」

「えっ、先生おひとりですか」

「も、もしものことがあったら！」

「まあ、多分大丈夫だろう」

俺は軽く肩をすくめていう。

だが、一方の刺客……。

魔王リスキスの方は一気に激怒した。

「あていしを舐めてるのか！ 人間！！ 魔王を寄つてたかつて倒そうとするのがお前ら非力な人間だろうが！ あていしを！ あていしを！」

彼女はそう言いながら、魔力を高めていく。

おっと、まずいな。

「鉄壁 付与。回避 付与。無敵 付与。スピードアップ 付与」

「舐めるなのだあああああああああああああああああああああ  
！……！」

ど〜おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお！……！！

「うわああああ」「なんだなんだ！？」「地震か！？」「隕石か！  
？！？！？」

村の方がパニックになっているのが分かるが気にしている暇はない。  
彼女が力まかせになぐった場所はひび割れて、クレーターどころか  
軽い谷が出来ていた。

「どうだ、人間！ アリアケ！」

「これは困るな」

「そうだろう！ 恐れおののいたか！」

「村人が歩いていてうっかりはまり込んでけがをしては困る。あと  
で直しておかないと」

「やっぱり馬鹿にしているのだ。もう許さないのだ。まじで行くの  
だ！」

「鉄壁 付与。回避 付与。無敵 付与。スピードアップ  
付与」

「喰らうのだ！ ヘル・メギド・ファイッ……」

「よっこいっしょ  
「よっこいっしょ」

ど「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお！！！」

「あつついいいいいいいいいいいいのだからあああああ  
あああああああ！?!?!」

「ふう、今のは放たれていたら後方の村が危険だったな」

体を張った甲斐があった。

「お、お前は本当に賢者なのか!? ただのあほではないのか!?」

「それ時々言われるんだが、なんでなんだ?」

俺が見学しているコレットたちを見ると、彼女たちも唾然とした表情で俺の方を見ていた。だいたい魔王と同じ表情だったので、なんだか納得いかない。

「当たり前なのだ! 超ド級魔法をぶっ放そうとしたら、あえてゼロ距離で被弾して、あていしにダメージを与えるなんて誰もやらないのだ。頭がいつっちゃってるのだ!」

「村を守りつつ、お前に攻撃をする唯一の方法だったと思うのだが……」

「常識をわきまえるのだ!」

魔王が叫んだ。

「先生が魔王に常識を説かれてますね、お姉様」

「まあ旦那様は規格外じゃからな。魔王など敵ではないのだ。さすが将来ゲシュペント・ドラゴンの末姫の旦那様になる御方なのじゃ！」

「確かにブリギッテ教会の幹部陣も若干常識はずれな方が良いですから。さして問題ありませんね」

「お前ら、俺が非常識であることが通常運転みたいに話すんじゃない」

俺は肩をすくめる。

さて、

「さあ、どうした魔王リスキス。お前の力はそんなものじゃないだろうっ？」

「もちろんなのだ！　だが、アリアケ・ミハマ！　お前の力もそんなものじゃないはずなのだ！　お前こそかかってくるのだ！　あていしからばっかり攻撃させてズルいのだ！」

「俺は……例外もあるが……基本的に攻撃手段はない。だから気を遣わずにかかってくるがいい」

「なにいいいいいいいいいい！？　では決着がつかないではないか！　なのだ！」

「俺の防御を打ち破ればお前の勝ちだ。俺の防御が崩されなければ、



まあ引き分けだな」

「引き分けなんて許さないのだ！ あていしの攻撃を2回退けただけでいい気になるんじゃないぞ、人間！ くらうのだあああああああああああ！」

さて、今度は何を繰り出すつもりかな。

俺は賢者の杖を振るいながら、次のスキルを唱えるのだった。

そして、

「ふわ〜……。なあ、リスキス、もうよいのじゃ？」

「そうですね、魔王リスキス様。先生も魔王様の勝利でいいと言ってますし」

「お互い立場のある身ですし、ここは痛み分けということで解散してはいかがでしょうか？」

最初こそ真剣に観戦していたコレットたちであったが、魔王の攻撃を俺がスキルで巧妙に凌ぐという攻防を1時間ほど繰り返した結果、完全に飽き始めていた。

「お、お前たちは黙っているのだ！ というか、馴れ馴れしっ……！」

魔王リスキスがどなるうとした時である。

『グ~~~~~』

大きな音が荒野に響いた。

それは、

「でっかい腹の虫じゃなあ、魔王の虫は。にやははははー!」

「笑うではないのだ! 未姫! 腹が減ったらグーグー言うのが普通なのだ! 健康の証なのだ!」

ふむ。

頃合いかな。

俺は魔王の様子を見て頷く。

「魔王よ。実は俺も腹が減った。真剣勝負の途中だが、こつやっ  
一緒に戦った仲だ。食事をしていけ」

「なに なんの罨なのだ! 敵に食事などどっ……………」

「別に珍しいことじゃないだろう。戦史を紐解けば敵であるうと尊  
敬できる好敵手に食事を振る舞うことはよくあることだ」

「そ、それはそうなのだ。と、というか、今のセリフの後半部分を  
もう一回言ってみるのだ」

ん？

「尊敬できる好敵手に食事を振る舞うことは」

「ぬ、ぬははははははあははっはっはははっは！！！！」

なぜか魔王が非常に気分良さそうに、手を腰に当てて笑い出した。

「そうかそうか！ うむ！ あていし舐められてるかと思ったけど、尊敬されていたのだ！ うむ、思えばこうして矛を交<sup>ほこ</sup>えた仲なのだ。ある意味、お前のパーティーの誰よりも、お前と深く交わ<sup>まし</sup>ったと言つても過言ではないのだ」

「「「ん？」「」」

コレットたちが何か言いたそうにするが、それよりも早く魔王は続けて言う。

「よしよし、では食事を頂くのだ！ そして、元気になったらまた再戦なのだ！ 言っておくが、あていしに毒なんかは効かないから混ぜても無駄なのだ！」

さて、それはどうかな？

俺は微笑み、うなずいてから、一旦魔王と休戦協定を結び、村へと一緒に戻ったのである。

ちなみに、コレットたちはひどく不満そうにしていたが、おそらく魔王を連れ帰ることに抵抗があったのだろう。朴念仁を卒業した俺にはこれくらい理由は察せられるようになったのである。

さて、というわけで、こうして村に魔王は一時滞在することになった。

これが俺の本来の目的であるとも知らずに。

さあ、この村の力を知ってもらおうとしようか。

俺は人知れずニヤリと微笑んだのである。

130・新サービスで懐柔 その1（後書き）

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いいたします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールティ村は今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

131・新サービスで懐柔 その2（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

131・新サービスで懐柔 その2

131・新サービスで懐柔 その2

「ふおおおおおおおおお！ 何なのだ、これは 来た時は全然気づかなかつたのだ！」

魔王リスキスは驚いた様子でその建物を見上げていた。

そこは俺が肝入りで作らせていた、とある施設であり、この村の成長を促すために必要不可欠な存在だ。

「めっちゃ立派な建物なのだ。あまり見たことがない建築様式なのだ！」

「東の方に行くとは独自の文化圏がある。その文化を取り入れた最新の観光施設兼宿泊施設だ。俺たちは通称『温泉旅館アンミツ』と呼んでいる」

「ほ、ほおー??？」

よく分かっているように魔王は、建物をきよろきよろと上下左右見渡す。

周囲の簡素な一軒家や長屋と違い、お屋敷と言って良いその建物か



らは、さきほどから湯気が上がったたり、どこか良い匂いも漂っている。

「まあ、入れ。女将、一名ご案内だ。魔王様なので丁重にもてなすように頼む」

「はいはい！　かしこまりましたー」

そうやって現れたのは、ブリギッテ教会序列一位のブリギッテであった。

浴衣という東方独自の着物をきて、あきらかにノリノリである。

「ブリギッテ様！？　こんなところで何をされてるんですか！？　こんな面白そうなことをされているなんて！」

ローレライが驚いていた。ブリギッテは教会との重要なパイプなので、デスクワークや渉外が中心と思っていたのだろう。

「もちろん、そういう仕事もしていますが、人々を癒すのも私の役目ですから！　まあ趣味の一環ですね！　趣味はとことん追求すべし！というのが信念です！」

「そうなのですね！　ブリギッテ教にまた新たな教義が加わった瞬間に立ち合えて光栄です！」

「はい！　ローレライちゃんは素直でいい子ですね！」

こうやってあの適当な……げふんげふん。寛容な宗教が作られたのか。

何はともあれ、

「とにかく女将、魔王リスキスとはさつき一戦交えて腹ペコ魔王だ。まあお互いに殴りあった(?)仲なんで、(ある意味)VIPだ。ごちそうを出してやってくれ」

「はいはい。それでは客室にご案内しましょう。さあ、こちらへ魔王様」

「うむ！ くるしゅうないのだ！ ところでブリギッテというのは、人間界で幅をきかせている宗教だったと記憶しているのだ。そのブリギッテ教のブリギッテと、女将は同じ名のようにだが関係があるのか？」

「あ、それ私が作りました！」

「んへ！？！？！？！？！？」

奇妙な声を挙げて目を白黒させている魔王は、それでもいちおう女将ブリギッテの後を付いて行くのだった。

〈魔王リスキス視点〉

「ぬおおおおおおおおおお！ このステーキめっちゃうまいのだ！ 繊細な味付け！ 濃すぎない味のバランス！ レア過ぎず、しかし焼きすぎでもない絶妙の焼き加減なのだ！」

「いい暴れ牛系のモンスターの素材が入りましたから。冒険者さんたちが頑張ってくれているおかげです。さ、まだまだあるのでどんどん食べて下さいね。あとこちらもどうぞ」

「むむ！ 今度は魚介なのだ！ あっさりとしつつ酸味があつてうまいのだ！ 良い香草をつかっていて味わい深いのだ！」

「森も浅めの場所なら採取ができるようになりましたからね。それにしても、それほど魔王様に褒めてもらえる嬉しいです」

「うっうっ」

「ど、どうかされたんですか？」

あていしが突然涙ぐみ始めたので、心配そうに女将が言うのだ。

まさか、人間に涙を見せた上に心配されるとは思わなかったのだ。でも仕方ないのだ。

「魔族はあんまり料理がうまくないのだ。なんというか魔族の性というか……」

こういうしかない。

「雑なのだ……」

「あ、ああ〜」

女将ブリギッテは曖昧に頷いた。

「あていしがどれだけリクエストしても、あいつらには理解できないよなのだ。全然文化として根付かないのだ……。飯は！心の洗濯なのだ！」

「まあ。それは苦労されたでしょうね……」

「そうなのだ！ あていしはっ……！ あていしはっ……！ こういう！ こういう文化的最低限度の食生活を送りたいだけなのだ！別に領土とかいいから、普通にうまいものを毎日食わせて欲しいのだ！ にゅおおおん！」

「あらあら。まあ、ここでゆっくりされているうちは、いつでもお越しく下さい。毎日美味しい料理を作ってお待ちしていますからね」

「こ、こんな美味しい料理が毎日？　じゅるり……」

「魔王様はVIPですので。お気軽にお申し付け下さい」

あていしは目の前がくらくらするのだ。

これこそがあていしの求めていた楽園。

それはこんな人間領土の中でもかなり辺鄙な場所にある、オールテイ村にあったのだ。

だ、だが一つ疑問があるのだ。村は貧乏そうだったけど、こんな料理出して大丈夫なのだ？　あていしを懐柔するために無理にうまい料理を出しているのでは！？　その疑問を率直にぶつけたのだ！

「あゝ、そのあたりはアリアケ様が色々とお考えなんだと思います。例えば、魔王が食べに来た旅館というふれこみで宣伝するのですとか、色々と使い道がありますからね。将来回収できれば問題ないところですよ」

「魔王とそのような関係であることが漏れてはマイナス効果ではないのか？」

「そうとも言えますが、国際情勢を見れば、魔族とグランハイム王国は敵対していますが、そうでない人類国家も多いですからね。アリアケ様は心の広い方ですから、せっかく魔族の王様が来ているなら、歓待すべきだと考えられたのでしよう」

「ふーん。そうなのか。奴は強いだけでなく、優秀な領主なのだ。食べ物で腹が満たされたせいかな、敵なのについて本音で褒めてしまったのだ。」

確かに人類国家とは敵対関係になることが多いが、そうでない国も結構あるのだ。その国にここも……。

いや、ここは村か。

( だけど…… )

あていしは考える。

まあ。食事をおごってくれたんだし、いざ領地が大きくなる時なんかは、ちよっとくらい支援くらいしてやってもいいかもしれないのだ。

こ、これは魔王の余裕というやつなのだ！ デレでているわけではないのだ！

そんなことを思っていると、女将がなぜかあていしの表情を読むようにしてから、微笑みを浮かべて、

「さて、次は温泉、最後にエステをしましょう。アリアケ様との戦闘でお疲れでしょう？」

「お、温泉に、エ、エステとな！？」

あていしは聞いたことのない単語に、本日何度目かも分からぬ驚愕をしたのだ。

「んん！」

思わずあていしの声が漏れるのだ。

熱いお湯につかると、体の芯まで熱が伝わって、体がほぐれるのだ。魔力がみるみる回復する気がする。

と、その時現れたのは、

「エステサービスに参ったぞえ……」

「エ、エステ？　って、そ、その声はフェンリルなのだ！？　どうしてお前なのだ！？　いや、まずは久しぶりなのだといふべきなのか？」

突然のことすぎて目を白黒させたのだ。

「おお、本当に魔王ではないか。１０００年ぶりくらいかのう？　壮健であつたかえ？」

「お前にやられた傷が痛むのだー！　とか言いたいところだが、あの時は今ほど人間と魔族の仲は悪くなかったのだ。別に何ごともなく壮健なのだ。毎日の政務で肩こりと腰痛とかがひどいのだ。あと肌荒れ」

「大変そうよな」

フェンリルは、そのナイスバディを全然隠しもせずにお湯に浸してうーん、と伸びをしたのだ。

あていしは思わずゴクリと唾をのんだのだ。

なんだかフェンリルの肌がつるつるで、まるで１０００年前の生まれたてのような赤子の肌のように思ったからなのだ。

みずみずしくて、水滴を弾くような魅惑のボディなのだ！

「そうガン見するでない。我とてちと恥ずかしくもなる。だが、この旅館のサービスであるエステの効果よ」

「エステ！」

「さよう。体をマッサージすることで血流や魔素の流れをよくし、肌を活性化させて若返ることができるのであるぞえ」

そんなことが！

で、でも、魔王が他人に肌を不用意にさらすなんて前代未聞で……。

「私のマッサージ次第では、それにおっぱいも私のように大きくなるかもしれぬぞえ？」

「やるのだ！」

あていしは反射的に答えていたのだった。

「お、おいフェンリル！ 同じところばかりもむんじやないのだ！ くすぐりたいのだ！」

「おっと、これは失礼したのう。ではこちらも」

「ふにゃあー？ そこはもっといけないのだ！ 触る時は事前の許可をとることを要請するのだ！」

「リクエストの多い客よのう。ふ、ふふふ。だがそこが良い」

「やめるなのだ！ くすぐりたいだけなのだ！ はわ！ はわ！ はわわわー！ なのだああああー！」



あていしの絶叫が温泉に響いたのだ。

だが、

「す、すごいのだ。なんだか体の疲れが抜け落ちたようなのだ。それになんだか体にたまっていた毒素みたいなものが汗と一緒に噴き出したような」

「ふふふ、今やお主はぴちぴち卵肌魔王リスキスと名乗っても良いかもしれぬな」

ぴちぴち卵肌魔王リスキス！

なんて魅惑な名前。

エステの温泉と言うのは本当に良いものなのだ！！

あていしはここは天国という奴なのではないかと思いつながら、ふらふらと自室へと戻ったのだ。

そして、そこに用意されていたのは落ち着いた部屋と、いつの間にか敷かれていた布団だったのだ。

あと、他に用意されていた浴衣という名前の着物で、あていしはそ

れを着ると更にリラックスした状態になったのだ。

布団に潜り込む。

アリアケが今日あていしに提供してくれたサービスというのは、今後、この村の名物として広く宣伝するためのものだったのだ。

別にあていしのために特別用意した何か、というわけではないのだ。だから、警戒する必要もないものなのだ。

今後アリアケがこの村の観光サービスとして、村の中核産業の一つとして位置づけようとしていて、あていしはちょうどよいお客さん第1号だったというわけなのだ。

でも。

正直。

ぶっちゃけ！

「こ、こんな素晴らしいサービスが提供されるんだったら、国庫でしっかり予算を確保して定期的に逗留しにこなくてはいけないのだ！」

あていしは快樂に身も心もほだされた体を、ふかふかの布団に身を沈ませながら思ったのだ。

このオールティ村こそ、人類で最も価値のある領地の一つなのだ。

あの邪神からは、アリアケの抹殺を命じられたけれども、

(いつまでには言われていないのだ！)

あていしは微笑む。

(あていしがその気になれば、10年後でも、50年後でも……)

くっくっくっくっ。

(ま、とりあえず100年くらいはここにいてから、それから考え  
てもきつと遅くないのだ！)

それくらい、あていしはこの村が気に入ったのだ。

うむうむ。

だが、聞いたところによる、この村は近隣の森からのモンスターの  
襲撃に難儀しているということなのだ。

他にも盗賊や、他の領地からのちよっかいも来ていると聞いた。

……もし、この村を襲う不埒物がいたら……。そしてあていしと  
殴り愛(の深い仲のアリアケを襲うような不届きものもしいたの  
なら、

「その存在と領地ごと消し飛ばしてやるのだ、むにゃむにゃ」

そんな戯言なのか、寝言なのかを呟きながら、あていしは数百年ぶ

りに心地良い快眠を体験したのだった。

こうして、この村に一人、長期滞在者が増えたのである。

131・新サービスで懐柔 その2（後書き）

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いいたします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールティ村は今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

132・近隣領地からの内債（勇者パーティー）をボロボロにしてしまう（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

132・近隣領地からの内債（勇者パーティー）をボコボコにしてしまう

132・近隣領地からの内債（勇者パーティー）をボコボコにしてしまう

くアリアケ視点く

「ふーむ、この辺りの土地は少し痩せているな。肥料を使用した方が良さそうだ」

「ですが村長様。そんなお金がありません。ほとんど無償で教会はお金を融通してくれませんが、返せるほどの収穫にはならないと思いますだ」

「村である程度の量を確保しないといけない、か。あー、そう言えば海洋都市にアレがあったな」

俺はいつものように村を歩き回り、村民たちから情報収集している。彼ら個別の声に耳を傾けていると、村全体としての問題点や、優先順位が見えてくるのだ。

よく為政者は大きな建物の中にいるようだが、俺としては現場に出て実際に見て、触って、問題を肌で感じるタイプなのである。



「アリアケさんは、そういうところ、確かにザ・賢者って感じですよね」

「そうか？ 単なる不器用系だと思うが……」

「いいえ！ 断言しましょう。私の幼馴染は出来る男です！ 間違いない！」

俺の聞き取った内容をサラサラと紙に書き付けながらアリアシアが自慢げに言った。

やれやれ。俺は苦笑する。

「君にそう言われると自信になるな」

「おお！ なんとという素直な反応！ 18年かけて朴念仁ポイントを削ってきたかいがありました！」

もう一度苦笑する。

まあ、余りやられっぱなしなもの面白くない。

「その朴念仁ポイントだが」

「はい？」

「周りが言うには、どうやら恋人であるアリアシアの前でだけは0になるらしい」

「な”っ!?!?!?”」

アリシアが一気に赤面して書きつけたノートをバサリと落とした。

「ふむ。多少やり返せただろうか？」

「いやいや！ 逆に朴念仁ですよ！ バランスを考えろっちゅーねん！ ですよ！」

「そうなのか？」

難しいものだなあ。

と、そんな風に俺が首をのんきに傾げていた、その時であった！

「近隣領地からの内偵スパイなのだ！ 皆の者、出会え、出会え、出会え、なのだ！」

最近、居つくようになった自村警備員の魔王からエマーゼンシーコールが発声されたのである！

「アリアケさん！」

「ふむ、近隣領地からの内偵、か。村が発展し出したので偵察をしに来たといったところか。あるいは、何か要求があるのか……」

その内偵部隊とやらに会えば、真相が分かるだろう。

「行こう」

「はい！」

俺たちは魔王の声が聞こえた村の入り口へと向かったのである。

「って、なーんだお前らか」

「道にでも迷ったんですか？」

「帰り道はアツチだ。ほれ、お前らだけで帰れるか？ 何なら道案内をつけてやってもいいが……」

俺は村を内偵しに来たというメンバーを見て、すっかり脱力して来た道を指さした。

しかし、彼らはその言葉に怒鳴り返してくる。

「誰が迷子だ！ 俺たちはこの街……。いや、この規模だと村って感じか！ この村を調べに来たんだよ。に、しても、ぎゃーっはっはっはっは！ で、その村長がお前ってか、アリアケえ！ 落ちぶれたもんだなあ！」

「まったくですわ！ わたくし達のパーティーを追放された成れの果てがこんな辺境の村長とは！ お笑い種なのですわ！」

「クソださだよね！ 都会に馴染めなかった田舎もんにはお似合いだけどねー！」

「こんな辺鄙な田舎では俺の筋肉の見せ甲斐もないというものだ！  
笑止！！」

勇者ビビア、拳闘士デリア、魔法使いプララ、タンクのエルガーが  
バカにするように叫んだ。

だが、もう一人、最後尾に見かけない人間がいた。黒髪を長く伸ば  
した利発そうな魔法使いといったいで立ちだ。

「あつ、私は新米ポーターのテイリスです。どうぞ宜しく！」

「あ、ああ。宜しく」

「宜しく。つて、アリアケさんが気おくれしてるなんて、珍しいで  
すね。ま、まさかああいう感じの子がタイプなんですか!？」

「ん？ タイプというのは攻撃属性が魔法ということか？」

「あ？ なんでもありません。安心安全ボクネンジン」

？

よく分からないが、

「で、この村の内偵の目的は何だ？」

「はっはー！ もちろん近隣領主ゼンダー伯爵様からの依頼ってー  
やつよ！ 近くに魔の森ができちまって廃棄されてた村が復興して  
て、しかも発展しつつあるってんで、その偵察ってーわけだ！」

「場合によっては領地も召し上げといったところか？」

「察しがいいじゃねえか！ 使えそうな村だったら召し上げて、新たな村長を送り込む予定だ」

なるほど。

ここは元々別の領主の土地だったが、土地ごと破棄されたので空白地域となっている。そこを勝手に復興しているだけなので、いわば早い者勝ちなのだ。そこにそのゼンダー伯爵とやらは目を付けたのだろう。

さて、これは想定していた事態だ。

(なので対応方法はいくつかあるが……)

そんなことを考えていた、その時である。

「おい、お前ら。本当に勇者パーティーなのだ？」

入口で仁王立ちで立ちはだかる少女が、めらめらと燃えるような嬉しそうな表情で勇者たちを見ていた。

それはまさに、運命の瞬間が来たとばかりに喜び勇む英雄の後姿であった。

「あーん？」

そして、それに対して、勇者ビビアは超舐めた態度で近づいて行き、見下げるように、値踏みするように、魔王にメンチを切る。

聖剣ラングリスを肩にのせつつ、

「なんだー、このチビは。おいおい、お嬢ちゃん、どいておきな。この勇者ビビア様の邪魔をすれば、例え誰であっても容赦しねえぜえ。何せ」

ビビアは鼻を鳴らしながら、

「俺は世界を救う勇者ビビア・ハルノアなんだからなあ」

ニヤリと唇を歪めたのである。

と、同時に、

「そうか。嬉しいぞ、勇者とその仲間たちよ！」

リスキスは本当に嬉しそうに叫んだ。

「はっ」

ビビアは訳が分からないとばかりに啞然とする。

「さあ、勇者よ。この私を倒してみよ！　そして世界の平和を守ってみせるとよいのだ！」

そう絶叫すると同時に、

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……

勇者ビビアは100メートルほど上空に吹き飛ばされたのであった。

「ああ、そうか」

「あつ、そういうことですよね」

俺とアリシアは二人してポンと手を打った。

目の前で繰り広げられているのは、あれだ。

「勇者対魔王じゃないか、これ？」

「あ、はい。勇者対魔王ですね」

いわゆる世界の趨勢をかけた戦いが、何か知らんが辺境の村の入口で、なぜか突如勃発したのだった。

そんなのんびりとした観戦モードの俺たちをよそに、

「わーっはっはっはっはっはっはっはなのだ！ どうしたのだ！ どうしたのだ！  
勇者とその仲間たちはその程度なのだ！？ 瀕死にしたら







「ああ、そうだが？」

「どうして、パーティーを去ったのですか？」

「なんでそんなことを聞くんだ？」

「いえいえ、単なる興味関心で。巷に聞こえる大賢者様が何をお考えになっているのか聞いてみたかったです！ 個人的に！」

澆刺とした様子で俺に聞く。

しかし、その瞳は何か別の事を俺に問いかけているような、そんな気がした。

ただ、得体が知れない、というのとも違う。

俺は何だか不思議な、懐かしい気持ちに囚われたのだった。

ま、それはともかく。

俺は嘆息した。

「魔王、村の入口を見張るのはいいが、無茶苦茶にしてもいいとは言っていないだろう？」

「む、そうだったのだ！ すまぬのだ！ 今日中に埋めておくので堪忍なのだ！」

魔王は素直にポコポコになった道の修復を始めるのだった。

「こっちは、どうしますかねー」

「ふむ。いや……」

魔王にボロボロにされた近隣領主からの内偵者たち。勇者パーティーの処遇を考え始め、

「良い所に来たものだ。なんだかんだタイミングのいい奴らだ」

俺はボロボロの勇者たちを見下ろしながら、微笑んだのであった。

132・近隣領地からの内偵(勇者パーティー)をポコポコに  
てしまう(後書き)

第3巻は9月7日発売です! ご予約、ご購入ぜひお願いします!  
コミックも8月開始予定です!

小説の第1巻は即重版! 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqrxnovel/series/detail/yusyparty/>  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「オールテイ村は今後どうなるの?…!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

133・むしろ実力を知り友好協定を結び、交易を開始する（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックも8月開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

### 133・むしろ実力を知り友好協定を結び、交易を開始する

133・むしろ実力を知り友好協定を結び、交易を開始する

〈近接領 ランド伯爵視点〉

「つて、感じてよお！ ランド伯爵！ 俺たちにやあ何の咎とがもねえ！  
！ なのに、あのオールテイ村の奴らは卑怯な先制攻撃してきたうえに、俺たちをボコボコにしやがったんだ！」

「ふーん。でも君たち勇者パーティーだろ？ そんなあつさりボコボコにされたの？ そのマオウつて子に？」

「んあああああああああ！？ い、いや。ボコボコつてのは嘘だ！ 話を脚色したんだよ！ とにかくあいつらは信用ならねえ卑怯者の巣窟そくくつだ！ さつさと伯爵の権限で実権を奪つて、アリアケどもは島流しや牢に閉じこめるとかするべきだぜ！」

「あの英雄アリアケをかい？ 魔の森の侵攻を千人の冒険者を率いて食い止め、エルフと個人的な友好関係を築きあげ、御前試合では魔王すら打ち破った。先日は聖都セプテノに300年ぶりに現れた悪魔を倒し、ブリギツテ教会からは叙爵の依頼が国王に來ているという、あの大英雄を牢に？ そんなことできるわけないだろう。は





「この通りだ！ なんの異論もねえ」

肯定もないけど、それはまあいいか。

「うんうん、そうだねえ」

僕はニコニコとする。

話半分。

相手にしてないことがバレそうなものだけど、僕が頷くと勇者は満足したようにフフンと鼻を鳴らした。

(なかなか脳内お花畑でうらやましい)

さてさて。

僕はまだ何か英雄アリアケの文句を言っている彼の言葉に微笑みながら、今後のことを考える。

僕は結構若くして伯爵の地位についたので、比較的慎重な方だと思っけど、そのかわりすごく直観力が高い。

こまごまと思考するよりも、最初の感覚みたいなのが結構当たって

ることが多い。

それによれば、

「絶対に敵に回してはいけない……」

ポツリと呟いた。

「ああん？ んだつてー？」

勇者が何か言っているが、無視する。

そう、僕が勇者たちから聞いた話を総合して、一言で言い表すとするならば、それは、

『恐怖』

あるいは、

『畏敬』

と言つて良いかもしれない。

それは無暗に恐れているとかではなく、この短期間で英雄アリアケの成し遂げた事、そして、実際に勇者パーティーという駒を内偵に使つてみて、実際にそれらの口から見聞きした内容を把握したうえで、僕がくだした結論だ。

あの境界の、今にも破棄される寸前で、領地として誰も管轄しようとしなかった捨てられた土地に、今まさに『圧倒的戦力』と『才能』

が集結している。

アリアケ・ミハマという大英雄を中心に、マオウという少女。

だが、彼女だけではないだろう。

村の外観も聞けば、ずいぶんと戸建てが増え、そのうえ、非常に大きな屋敷もたてられていたらしい。旅館『あんみつ』などと言うらしいが、これもおそらく英雄アリアケが考えている、村復興の切り札だろう。

冒険者ギルドも彼に協力的だ。

教会もあの化け狐と言われるリズレット・アルカノン卿が、『彼は私の「推し」です』と言ってはばからない。

ならば、僕は。

たかだかこんな辺境の伯爵に過ぎない僕は、あの稀代の英雄を正しく恐れなければならぬだろう。

もしかすると、この片田舎に、異変が起こり始めているかもしれないのだから。

ならば、次は彼らをいかにして利用するか？

と、そんなことを考えていると、先ほどから微笑んでいたティリスが、一歩前に出た。

「ランド伯爵様。お考えの最中に失礼致します。アリアケ村長から

書面を預かっていますので、お渡ししますね」

「は？ ティリス、いつの間にそんなもんを！ 俺の許可なくっ…」

だが、ティリスはニコニコしながら、まあまあとかな適当なことを言いながら、僕にあっさりと手紙を渡した。

さて、その書面の内容とえば、

「なるほど。これは参ったな」

どう利用しようか、などと考えていた自分こそが、まさに浅慮であったことを思い知らされた。

「僕が考え込み始めたら、この書面を渡すように英雄アリアケに言われていたのかい？」

「それは言っではいけないよ、と言われてます！ すみません！」  
澁刺とした回答がかえってきた。そこまではつきり言われると、こちらも苦笑するしかない。

その書面の内容と言うのは、このランド領とオールティ村との間に『友好協定』を締結すること。

そして今後の友好のために『街道整備をして欲しい』ことを求める書面だった。

要するに、友好と交易を求める書面ということである。

英雄アリアケの考えとしては、内偵を通じて村の事情はある程度伝わっただろうから、協力しないか？　と言ってきているわけだ。

「はあああああああああああああああ！？　んなもん断るに決まってるじゃねえかよ！　なあランド伯爵ううー！！！」

と勇者が絶叫するように、

(もちろん断ることもできるわけだが……)

僕の直感は告げている。

「うん。これは向こうが役者が何枚もうえだな。それにこっちにも儲けがある話だ」

「は？　何を言って……」

僕はおもてには出さないけど、舌を巻きながらサラサラと封書を作る。

彼らには豊富なエルフから輸入した資材や、大量のモンスターから出た資材などがある。その売買を現在は個別の商人やギルドを通じて行っているが、正式にこの伯爵領と交易を始めれば、双方に利益が出るだろう。

あと、この旅館『あんみつ』というのに個人的に興味があるしね。

というわけで、簡単に言うと、『了解した』と、街道を整備することを伝えるように勇者パーティーに指示した。



以降、往来をひっきりなしに荷馬車が行き来するようになり、オルティは一気に栄え始めた。

あと、意外だったのだが、あの旅館だ。

あの旅館が実は徐々に社交界で有名になり、伯爵も時々通ったりと、セレブ達お忍びの場所として、重宝されるようになったのだった。

しかも、村の支配者である英雄アリアケは、その財力や実力、そして名声。社交界への影響力が増え始めて、一部では隠れた辺境伯などど陰で言われ始めていったのだった。

そんな風のアリアケが己の才覚により、村を街へと改めて発展させることに成功し始めた矢先、それは起こったのである。

133・むしろ実力を知り友好協定を結び、交易を開始する(後書き)

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

-----  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールテイ村は今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。



何卒よろしくお願いいたします。

134・村の発展に驚愕するランド伯爵。しかし突如、魔王不在のはずの魔族軍が人類へ総攻撃を開始する！（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックもガンガンONLINEで8月開始予定です。こちら  
もぜひお楽しみに！

134・村の発展に驚愕するランド伯爵。しかし突如、魔王不在のはずの魔族軍が人類へ総攻撃を開始する！

134・村の発展に驚愕するランド伯爵。しかし突如、魔王不在のはずの魔族軍が人類へ総攻撃を開始する！

↳ランド伯爵視点

「いやはや、これはどうも、言葉を失うとはこのことだね」

「ええ、本当に……」

僕はしばらくぶりにオールティ村を訪れて舌を巻いた。部下を一人随伴しているが同様の気持ちのようだ。

「やれやれあのアリアケという英雄を前にすると、舌を巻いてばかりいる気がするのは気のせいかな？　僕のような凡人には手の届かないことばかりする」

「そ、そんなことはありませんよ」

フォローしてくれる。

「ただ、僕のような気弱で零細伯爵でなくても、彼のやったことに瞠目せずにはいられないだろう。」

オールティ村の村長アリアケから友好協定と交易をもちかけられてから数か月。

その短期間の間に、村は著しく発展していった。

いや、厳密には……、

「これは、もはや都市ですな。大賢者様のお力がこれほどとは……。噂通りと言いますが、それ以上と言いますか」

「ま、想像の斜め上過ぎるよね」

部下が思っていることを言ってくれた。

さすがアリアケ・ミハマだと。

散策しながら周辺を見渡す。

どこぞの王都かと言うとさすがに言い過ぎかもしれないが、整備された街並みや清潔な道路、活気のある商業、そして冒険者たちや獣人、エルフなど、様々な種族が入れ乱れている。

そして、そこに一切の不自由がなく暮らしているのである。

住人に暮らしぶりを聞いてみると、

「差別も理不尽もない自由な場所で、村長のことを尊敬している」

「大陸で一番住みやすい村を作られている」

「自由気ままにさせてもらっているが、冒険者にも気兼ねなく声をかけてくる変わり者で、大酒も飲める変な野郎だ」

と、そんな声しか聞こえてこない。

最後の意見は、あの荒くれ者の冒険者たちの声であり、彼らすらすつかり骨ぬきのような調子なのだ。

あいつだけは、ほかの領主たちとは「一味違う」と照れ隠ししながら言う。

「うん、いい村だね」

「さすがアリアケ様ですな」

部下も当たり前のようにアリアケを称賛する。

村では、犯罪を取り締まる自警団も、ラツカライという聖槍の使い手が努めているともあって、犯罪率がかなり低く、非常に理想的な都市だ。

そして、何よりやはり、村長……。いや、英雄アリアケのやった内政政策と外交がこの成果を生み出していることは火を見るより明らかだった。

彼のやったことは村全体に巢食っていた病巣を取り除き、治癒したこと。そして、新たな血を体中に迅速に巡らせたこと。この2点のみだ。

だが、村の病巣を看破し、そして迅速に村の生命線であるお金と人の流れを呼び込むことが、彼以外にできたとは思えない。

「知っているかい？ 驚くべきことに彼が村で初めて行った事業というのは、冒険者ギルドを誘致することと、金融……いわゆる貧農に対する貸付業だったんだよ？」

「すごいですね。普通、貧民に対して貸付をするという発想がそもそも異常ですし、普通、思いつくものではありませんよ」

本当にね。

だけど、そこにこそ彼が賢者として称えられる深謀遠慮がある。

「彼自身や彼の賢者パーティーと言われる存在が直接手を出せば、それはそれで村は発展しただろう」

だが、それは「そこそこ」の発展にとどまったと確信出来た。

そう。村と言うのは、村人全員が協力して作り上げ、発展させていけないといけない。

「アリアケという英雄はあくまでその手伝いをし、村民を導くリーダーであり、村民が自律するためのシステムを構築することに全力をあげたんだ。あくまで村人が自分たちで自立する手段を与えるように自分を押さえたんだよ。これは彼という思慮深い人物でなければ不可能だったろうね」

「そうですね。さすが賢者様です」

「彼のやったその内政政策によって、まず冒険者ギルドに冒険者が集まり、その依頼料はしつかりと農民たちからとった。その貸し元の教会との利息の調整は、まさに英雄であるアリアケの力によってうまく調整したようだ。お金の流れを決めるといって、絶対に失敗してはいけないその一点のみ、リーダーであるアリアケが主導しているところなども、内政や行財政において、何がもつとも大事なポイントかを把握している証拠だ」

「余りにも素晴らしい手腕ですが、彼は元々政治家なのですか？」

「僕もそうなのかと思ったんだけどね。そういった経験はないのだそうだよ」

「ということは、あくまで多才な才能のうちの一つということなのですか」

部下が驚愕の面持ちをした。

まあ、そういう気持ちになるよね。

超一流の政治家というのも彼の才能のうちの一つに含まれるということだ。

とにかく、そんなわけで、村は当面のモンスターの直接の脅威や、田畑が荒らされて餓死する心配から解放された。

「次に行ったのはエルフとの交易だ。エルフとの交易はここ100年ほど途絶えていたはずだが、それをあっさり復活させてしまった」

「それもまた……歴史書にのる事件ですな」

「彼の周りは事件ばかりさ」

苦笑せざるを得ない。

「噂というか、すでに英雄譚として巷間に流布している話によれば、エルフの森の危機をか的英雄は救ったことにより、個人的な友誼<sup>ゆつき</sup>を結んでいるんだとか」

「それによつて通常は市場に出回らない高級木材を輸入し、建築や加工品として輸出産業を形成している。またエルフの資材が使用できるとあつて、職人が多数つめかけたことで、産業の多様性も生まれてつある、と」

「もはやこうなれば、村と言うよりかは街……。いや、小規模ではあるが、これほどの存在ともなれば、辺境で最も発展した都市……であり、ある意味領地と言つて良い。」

「そして、これは本当にラッキーなことなんだけど、オールティ村と隣接する我がランド伯爵領は、その一番の交易相手として莫大な利益を上げさせてもらっている。オールティ村と交易するには、<sup>伯爵領</sup>うちを通る必要があるのです、その過程でお金が落ちるし、オールティ村の特産品を輸入し、他の領地に輸出すれば大きな利益となつた」

おかげで長年の借金が返せそうだ。

「やれやれ、英雄が村を発展させるともなれば、こういうことになるのかと、その偉業をまざまざと見せつけられてしまった。これぞ大賢者アリアケの所業つてね」



「しかし、もう一点。何よりうらやましいと思つことがあるのです  
が……」

「ああ、人材だね」

僕も同意する。

このオールテイ村には英雄アリアケの他に、10人の『最強』と言  
われる幹部がいる点だ。

「大賢者。賢人だからこそ、アリアケという人間を慕って人材が集  
うのだろう」

アリスア・ルンデブルク……村の医療部門統括責任者。言わずと  
知れたブリギッテ教会序列三位

コレット・デューブロイシス……ゲシュペント・ドラゴンの末姫。  
最強の存在で、存在自体が抑止力。

ラツカライ・ケルブルグ……村の警備統括責任者。正義感が強い  
聖槍の使い手。

フェンリル……1000年生きているといわれる知恵の狼。実は  
英雄アリアケの一番の相談相手。それに嫉妬するアリスアをからか  
うのが最近の趣味だというのを風の噂に聞いたが……。

ブリギッテ・ラタテクト……ブリギッテ教と同じ名前を持つ少女  
だが、そういった名前をつける敬虔な信徒は多い。ブリギッテ教に  
強い発言権を持っていて、ブリギッテ本人だと英雄アリアケが冗談  
で言っていたりするらしい

ローレライ・カナリア……教会序列第2位リズレットの娘だとい  
う噂で、アリスアと一緒に医療部門を支えている。

バシュータ・シトロ……情報統括責任者。謎が多い人物で全国を

飛び回っていることが多いが、英雄アリアケが頼りにしているとのこと。先日の聖都セプテノの悪魔フォルトゥナ復活事件は、彼の活躍なくしては解決していないとアリアケが断言している

マオウ……変わった名前の村の食客で、旅館に入り浸っている。

セラ……エルフ族の姫で、アリアケファンクラブNo.1。エルフ間との交易を取り仕切る。また、森の民だけあって森で起こっていることに精通している。

ギルドマスター・オシム……元々Eランクに降格されるはずだった英雄アリアケの功績を上層部に訴えて却下させた人物で、その先見性が高く評価されていた。王都ギルドマスターの地位の打診があったようだが、それを蹴って、英雄アリアケから誘いのあったオールティ村という寒村に赴任したようだ。

とまあ、こんな具合であり、とにかく人材が凄い。

教会第2位リズレット・アルカノン  
は人材マニアとして有名なのだが、彼女をして、「あの人たらし」とうらやましがったそうだ。

教会のトップをうらやましがらせる人気というのもまた凄まじいとだな。

「ま、とはいえ」

僕は嘆息する。

実は僕もたらしこまれそうになったことがあるんだけどね。

何度か暇を見つけ、このオールテイ村に来て、旅館『あんみつ』にお世話になったわけだが、そこで英雄アリアケと何度か会話する機会があった。

その時、多分僕は酔っていただろう。色々と思っていることを言っ  
てしまった。いや、そういう本音を引き出させてしまうのが、彼の  
また憎らしい点なんだろう。

その時言ったのは、

「僕は君がうらやましいよ。アリアケさん。あの村をこんな立派に  
立て直してしまうんだから。素晴らしい才能だ。それに比べて、僕  
はしょせんこの辺鄙な領地を継いだ伯爵に過ぎないし、継いでから  
もまったく発展していない。気も弱いし、実行力にも欠ける。君と  
は大違いさ」

そんなことを言ったのだった。

こんな弱音を吐いてもしょせん鼻で嗤われるか、まあ表向き慰めら  
れて終わりか、そうなるだろうと思いながらの発言だった。

でも。

「弱気で実行力がないのが、何かいけないのか？」

アリアケは思ってもみないことを、本当に不思議そうに答えたのだ  
った。

彼はやたら強いお酒を平気そうに呷りながら、

「俺は為政者じゃないんで、的外れな事を言っていたら申し訳ないんだが……。俺が思うに、ランド伯爵、あなたのその弱気こそが領主には一番大事な資質じゃないか？」

「弱気なのが……資質？」

僕はびっくりした。

僕の両親は厳しい人たちで、弱気の僕を叱ることはあっても褒めることはなかった。死ぬ間際だって、弱気な僕を心配するように亡くなったのだ。

だから、彼の言葉を理解することは最初できなかった。

「弱気なことが資質なわけじゃないでしょう？ からかっているんですか？」

もしかしたら、ちょっと怒っていたかもしれない。バカにされていると思うって。

でも違った。

そして、彼はやはり、本当の意味で、この村を……。

いや、この村にとどまらず、この国や大陸を治める器を持つ人物だったんだ。

「領主が強気だと、領民は困るだろうな。勝てない戦争や政争を起こす。結果、どこかにひずみが出る。それはだいたい弱い者に降りかかる。あなたの国を見た。裕福ではないが、みんな幸せそうだったんだ。」

た。当たり前のように毎日を送っている。それはあなたが無謀だと思うことはせず、何もなかったおかげだ。戦争をしかけ、領民を危険にさらそうなどは微塵も考えていない。無理に収穫を上げようとすると重税を課したりもしない、鉄の採取をして森を無くし自然災害で国を沈めることもなかった。君のような弱気で慎重。賢明なる領主だからこの辺境の地で領民は飢えずに暮らしていけている」

そう当たり前のように言ったのだった。

そして、その意見に僕は改めて驚愕させられることになったのは言うまでもない。

彼の知識はそこいらの学者の知識をとくに超えていた。あまりにも博学ぶりに、いや、それは知識を生かした知恵……いわゆる生きる知啓というアリアケ・ミハマという賢者に舌を巻いたのだ。

同時に、それは初めて僕が、認められた瞬間でもあったのだ。

だから、あの時のことを今でも思い出す。そして、弱気ですまらな  
い為政者でいようと心に誓うのだ。無理を厭い、余裕のあること  
だけ手を出していれば、きっと我が領民が飢えて死ぬようなこと  
はないだろうから。

そして、同時に「こうも思う」。

かの英雄はあれほどの強者でありつつも、弱者のあり方を理解する。

それは、実は最も統治者としてふさわしい存在なのではないか、と。  
と、そんな風に僕が物思いにふけっていたその時である。

「伝令！」

僕の部下が青い顔をしながら必死の形相で僕の前でかしずいた。

「うん、どんな悪い知らせかな？」

「は！」

伝令兵は顔を上げると一気に言った。

「魔族の大群が南の森を進行中！ その数およそ一万！ その進行方向には我が領土がつ……！」

「!?!」

なぜ、こんな辺境の地に魔王軍が!?!

魔王軍は北の大陸でつばぜり合いをしている最中であつたはず。

しかも、王都から遠いこんな領地を狙う意味は薄い。

だが、

「悩んでいても仕方ないか。弱者らしく、みじめたらしく、急ぐとしよう」

僕はその知らせを受けてから、1秒とたたず、急いで走り出した。

「伯爵、どこへ!?!」

「決まっているだろう！」

答えるまでもない。

僕が。

弱気で勇気も実力もない、ついでに保身ばかりを考える僕が頼るべき、最も偉大なる英雄がこの村にはいるのだから。

「この大陸でもっとも偉大なる賢者、アリアケ・ミハマ様のもとへ行くぞ！ ついてこい！」

僕の力強い声が村に響き渡ったのだった。

134・村の発展に驚愕するランド伯爵。しかし突如、魔王不在のはずの魔族軍が人類へ総攻撃を開始する！（後書き）

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！  
コミックも8月開始予定です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/squenixnovel/novel/2021.html>  
- - - - -  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールティ村は今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。



何卒よろしくお願いいたします。

135・魔族軍の異常性（前書き）

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックもガンガンONLINEで8/31開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

## 135・魔族軍の異常性

### 135・魔族軍の異常性

（アリアケ視点）

「というわけで、ランド伯爵の方でも情報を掴んでいるようだ。魔族1万の大群が南の森を侵攻している。幾つかの領地が間にあるとはいえ、その先にはランド伯爵領だ。間違いありませんね？」

俺の問いに、ランド伯爵は頷いた。

「ああ、その通りだ、賢者アリアケ。頼む、この窮地を！ 我が領地を救ってくれ！！」

そう言うとランド伯爵は、ただの村長である俺にがばつと頭を下げる。

やれやれ、と俺はこの男に感心しながら声をかけた。

「伯爵ともあるう者が、世間でいくら英雄や賢者と言われていようと、村長ごときに頭を下げるものではありませんよ」

「僕はこんな辺境の領主に過ぎない。伯爵など肩書きだ。世界を幾度と救って来た君にその肩書きが無いからと言って、なんで下に見ることが出来る？ 君はやがてこの大陸の盟主になるだろう存在だ。」

幾らでも下げる頭など持っている」

「いえ、大陸の盟主になど興味はないのですが……」

「君が求めるかどうかではない。他に誰がなれる？」

やれやれ。もう一度首を横に振った。

どうにもこういう過大評価を受けやすい性質たちが、俺にはある。

しかし、

「大陸の盟主ですか。それは困りましたね。アー君と田舎でのんびりお花畑を眺めながら過ごす毎日を送る予定なのですが！」

「じゃがのう、確かに本人にその気がなくとも、むしろ周りが放っておかんような気がするのう」

「先生とゆつくりこの村で一緒に過ごすのも良いと思ってたんですが、確かにこの辺境で終わるわけがなかったですね。残念です」

アリシア、コレット、ラツカライが発言する。

なぜか全員俺が大陸を統治することを前提に話しているようだが、

「お前たち、そんなことがあるわけないだろう。力が幾らあろうとも、そもそも俺にはそんな野望はないんだからなあ」

俺はそう言って呆れるが、

「と言いつつも、助けを求められると断れぬからのう主様は。いつの間にかこの辺境の村の村長になって、すでに村が国レベルになって久しいぞえ」

「しかも歴史上初の、人や獣人、エルフなどの種族共栄圏が形成されています。まさに奇跡の所業ですね。さすがアリアケ様ですね」

「これはワンチャンいけますよ！」

「行かん、行かん」

フエンリル、ブリギッテ、ローレイの言葉に、俺は出来るだけはつきり首を振った。

権力に俺に興味がなく、ゆっくりしにこのオールテイ村に来たというのに、なぜか著しい発展をさせてしまっているのは確かだが、それは単に、

「お前たちの助けがあったからこそだ。俺の力ではないさ」  
そう断言するのだった。

ただ、

「なるほど、勉強になりますね」

「そういつとこじゃぞ、旦那様？」

「さすが先生です。一生ついていきます。3番目で大丈夫ですので」

ランド伯爵、コレット、ラッカライが、どこか呆れたような、微笑ましいものを見るように言った。

一体なんなんだ。

「ま、そんな俺のことよりも、だ。バシュータとセラを呼んできてくれ」

俺はこの村の諜報の責任者と、あらゆる森に精通するエルフの姫の名を呼んだ。

「はいはい。お呼びで」

「はい、アリアケ様」

すぐに二人は現れる。何を聞かれるかも理解している顔だな。

「もう知っていると思うが、魔族が南の森を進行中だ。状況は予断を許さない。現時点で分かっている情報を教えてくれ」

その言葉に、バシュータとセラは深く頷いたのであった。

くバシユータ視点・『南部大森林地帯』諜報活動時点く

「セラ姫。あんまり前に出過ぎると危ないですぜ」

「バシユータさんもね。あなたはポーターでバックアップが仕事でしよう?」

「まあ、そうなんですが……って、おいでなさいませ!」

「嘘……」

俺とセラ姫は遠くまで見通せる樹上から、森の中を観察していた。

それはエルフからの連絡で、魔族が森の中に入ったと言う知らせを受けたからだ。

そのあたりは、多くはないが幾つかのエルフの集落がある森であり、そのエルフたちからセラ姫へと緊急の連絡があったというわけである。

そして、そこで見たものは……。

「なんて数の魔族……」

「優に1万はいやすね……」

その迫力に思わず腰を抜かしそうになるほどだ。ここから確認できたのはデーモンタイプの魔族。

手には槍を持ち、鱈のような顔と、巨体を誇る魔族だ。知能はそれほど高くないが、生命力や攻撃力が高く、人間が1対1で戦っても勝てる見込みの薄い強力な魔族。

「あいつらが前衛ということなんでしょうな」

「これは早めにアリアケ様にご報告したほうがよさそうですね……」  
そう思っていた時である。

「あつ、馬鹿！」

俺は思わず声を上げてしまった。おそらくこの辺りに住むエルフの一族なのだろう。

彼らが樹上から矢を射かけたのが見えたのだ。

とはいえ、その狙いは正確無比。

見事に魔族たちの眉間を打ち抜いていく。その数はなんと100！

「すごいな。さすがエルフだ」

「だてに森で生きてませんからね。ふふん」

セラ姫がどや顔をした。ただ、それは誇張表現ではない。森にはモンスターが住み（ちなみにモンスターと魔族は全然別のものである）、そのモンスターたちからの脅威を排除しながら生活しているので、自然と森での戦闘能力ゲリラ戦が高いのだ。



ヒット&アウェイ。

矢を射かけたエルフはすぐに樹上を移動し、次は全然別の場所から攻撃を仕掛ける。

そのたびにバタバタと100以上の魔族が倒れていった。

だが、

「なに」

次の瞬間、信じられないことが起こったのだ。

矢を射かけ、死んだと思われた魔族の上を素早く通り過ぎようとしたエルフの足を、死んだはずの魔族が生き返り、掴みかかったのである。

「死んでなかったのか　だが、脳天を貫いていたはずですよ！」

「わ、私にもそう見えました」

それは足を掴まれたエルフも同じらしく、大混乱している。

だが、それでもさすが歴戦のエルフだ。

ゼロ距離射撃。

矢を一瞬にしてつがえると、その魔族の眉間にもう一度矢を貫通させたのである。

だが、

「止まらないわ！ 死んでいないの」

「いや、そうじゃない！」

俺は気づいて、その光景に絶望の声を漏らす。

「あいつらは死んでいる！ だが、死んでも止まらないんだ！ 不死の集団なんだ！」

「そんなことが！？ あつ、だめ、助けに行かないと！」

「待て！ セラ姫！ あんた一人が行ったところで！」

「だけど！」

「見ろ！」

そう言っている間にも、同じことを考えたのだろう。

別のエルフたちも樹上から下りてきて、その不死の魔族に矢を射かけた。

だが、体中に矢をつきたてられた状態で、そのデーモンは持っていた獲物の槍をゆっくりと振りかざすと、

「ぐあああああああああああああああああああああああ！」

その信じられない膂力によって、周囲一帯を根こそぎにするように、

薙ぎ払ったのである。

後に残ったのは、ばらばらになったかつてのセラ姫の同胞だけであった。

「あ……あ……」

セラ姫がその光景に茫然としている。

だが、俺は更に残酷な真実を告げねばならなかった。

「セラ姫、しっかりしろ！　そしてしっかり見るんだ！」

「こ、これ以上何を」

決まっている！

「生き返ったのは、あの一体だけじゃない！」

俺は撤退の準備を急ぎながら叫んだ。

「全員だ……！」

そう。

それは俺の知る限り初めて見る悍ましい光景だった。

エルフたちによって矢を射かけられ、眉間や心臓、急所を貫かれて間違いない絶命したはずの数百の魔族たちが、当たり前のように、ゆっくりと、まるで死などとは無縁であるかのように、立ち上がり、

また森を前進しはじめたのであるから。

数百の死が当然のように行進していく……。

「ありえません。これは一体」

「さてな。だが、俺たちの仕事は異常事態にびっくりすることじゃない」

俺はそう言いながら、魔族に背を向ける。その意図は、セラ姫にも正確に伝わったらしく、驚き嘆いていた顔をしゃんとする。

「アリアケ様に」

ああ、そうだ。

「不死の魔族軍団が南から侵攻を開始している。その事実を一秒でも早く伝えるんだ！」

こんな異常事態を。

人類の窮地を救えるのは、あの方をおいて他にいるはずもない！

こうして俺たちは、南部大森林地帯から急ぎ撤退したのであった。

135・魔族軍の異常性（後書き）

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！  
コミックもガンガンONLINEで8/31連載開始です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールティ村は今後どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

136・勇者パーティーは手柄を目当てに出し抜いて出陣す(前書き)

第3巻の発売日は9月7日です。ぜひ、ご予約・ご購入のほどお願い致します。

またコミックもガンガンONLINEで8/31開始予定です。こちらもぜひお楽しみに！

136・勇者パーティーは手柄を目当てに出し抜いて出陣す

136・勇者パーティーは手柄を目当てに出し抜いて出陣す

くアリアケ視点く

「ということだが、魔王よ。申し開きはあるか？」

「ぬあああああ！ 誤解なのだ！ アリアケっちー！！」

俺の侮蔑のまなざしに、魔王は頭をブンブンと振って否定した。

「我がエルフの同族を殺しておいて、よくもぬけぬけと！」

「セラっちも違うのだ！ あていしじゃないのだ！ 無罪なのだ！  
難しい言葉で言う<sup>えんざい</sup>と冤罪なのだ！」

うつうつとした表情で魔王は俺の方を見た。

「何だか、温泉で懐柔され尽くされた魔王さん、餌付けされた犬さんのようになってしまっていないませんか？」

ローレライが呆れたように言った。

「仕方ないのだ。温泉で毎日がハッピーなのだ。もう何年も何十年



も休暇がなかったのだ。社畜だったあていしに訪れた初めてのオアシスなのだ！」

ゆえに！ なのだ！

と魔王は力強く続けた。

「あていしがそんなあていしのオアシスを壊すような軍事行動を起こすはずがないのだ！ 軍事的に言っても補給が保たないのだ！ それこそ！ それこそっ……！！！」

俺は魔王リスキスの言葉を継いだ。

「不死の軍団でもなければ、か」

その言葉に皆、沈黙する。

バシユータ、それにセラの報告からすれば、1万の魔族軍は『不死』の軍勢だというのだ。

「不死……。不死か……」

俺は記憶の隅に引っかかるものを覚える。

「何か思い当たる事でもあったんですか、アリアケさん？」

「俺にはどんと思いがたまることはないのじゃがなあ」

「ん？ ……ああ、そうか」

俺はポンと手をうつ。

そうだ。あの時だけ。

あの時だけ。俺は単独で行動していたのだ。

確か、あれは、

「勇者パーティーから追放されて、コレットが助けを求めて赴いた遺跡の前だったな」

「おお、俺を王子様のように助け出してくれた、あの件じゃな！  
旦那様はプリティーモグラに変身して遺跡の結界の下をくぐって、  
俺を王子様のように助けに来てくれたんじゃないやなあ。運命的な出会  
いだったのじゃ。のじゃのじゃ」

「2回も言わなくてよからうて。で、そこで、何があったのかえ？」  
フエンリルの声に頷きつつ、

「俺はそこで『ネクロマンサーの宝玉』を持つ盗賊に襲われた。遺  
跡の宝物を狙ってやってくる奴らをゾンビを操って襲っていたと言  
っていたな」

そのアイテムの名前にブリギッテは意外そんな表情を浮かべる。

「『ネクロマンサーの宝玉』と言うと結構珍しいアイテムですよ。ね。  
時折、古い遺跡で発掘されますが、ほとんどが壊れていて使い物に  
なりません。何せネクロマンサー本人にしか作れない上に、使用時  
間も限定されるもののはずです」

「ふむ。確かに雑魚ではあったが、しかし、確かにゾンビを操りはしていた……。それにその盗賊はその宝玉を『別の奴が持っていた宝玉を利用して』と言っていたな」

「別の奴……ってことは、そのネクロマンサーの宝玉を、その盗賊にわざわざ与えた人物がいるということですか、先生？」

「ですが一体何のために？」

ローレイの疑問に、俺はそれは簡単だとばかりに答えた。

「実験のためだろうな」

その言葉に、皆驚きの表情を浮かべた。

皆、俺の言いたいことが分かったのだろう。

固唾をのんだのが分かった。

そう、今回の事件は、あのコレットを封じていた遺跡の事件からの続きなのだ。

あの盗賊以外にもネクロマンサーの宝玉を使った事件は、各地で発生していたのだろう。そして、それら実験により、より完璧なネクロマンサーの宝玉が完成したとすれば？

「規模こそ違うが、今回の不死の軍勢を率いるのは……」

俺は結論付けるように言った。

「不死を自在に操る外道『ネクロマンサー』が率いる、不死身の魔族軍1万が敵というわけだ」

俺のそのあっさりとした言葉とは裏腹に、全員が今回の事件の異常性に改めて気づくのがあった。

（勇者ビビア視点）

「ぐへへ。いいこと聞いちゃったぜえ」

「ちょっと勇者。どうする気なの？」

デリアが諜報活動中の俺に聞く。

俺はと言えば、今まさに間抜けなアリアケどもが話している内容を、ガラスに耳を当ててこっさり聞いている最中だ。

俺は完全に気配を消しているので、馬鹿なあいつらは気づきもしねえ。

「まったく馬鹿な奴らだぜえ！」

俺は天に向かって叫ぶ。

と、そんな俺に向かって、

「てか、マジで何やってんのさ、勇者。あたしらランド伯爵の護衛で来てんだから、宿泊してる旅館に戻った方がいいんじゃないの？ てか、あそこの飯マジうめーからさ。早く戻って温泉入ってうめーもん食ってダラダラしてーんだけど……」

「俺もあのサウナというのが気に入った！ 筋肉を更に引き締める効果があるし、血管に血が巡る快感は何ものにも代えがたい！」

プララとエルガーが勝手なことをほざいていた。

かー！ ゴミどもが！

俺の深謀遠慮しんぼうえんりょを知ろうとしねえ！

俺のような緻密で、繊細で、おまけに大胆不敵な発想には誰も至れない。

勇者という孤高の天才ゆえの孤独が俺を襲うんだよなあ！

「勇者さんはもしかして、魔族の軍団を倒して、手柄を一人占めしようという魂胆ですか？」

「なああ!？」

俺はテイリスの発言に度肝を抜かれる。

俺の完全な思考。

孤高な思考に追いつける存在がいたことに驚き、また感動したからだ。

それがしかも新メンバーのティリスがそうなのだ。

幼馴染の馬鹿どもが、温泉に骨抜きになっているときに、唯一俺のパーフェクトな戦略に気づくとは。

「ぐひひひ。よく分かったなあ、ティリス」

「まあ、そういう目をしてましたから」

ティリスはあっけらかんと言う。

そう言う目？

ああ、なるほどな。

「遠くを見通す慧眼。なるほど、確かに他の奴とは違う瞳をしていただろうなあ」

俺は唇を歪めながら言う。

すると、その会話の内容を察した他の勇者パーティーのメンバーたちが食いついてきた。

「ちよ、ちよっと、勇者。無謀よ。だって魔族一万よ、一万！」

「そうだよ。何よりだるくない？ そんなんほっといてさ、安全な

この村でパリピ生活を満喫するしかないって」

「俺もその意見に賛成だ。筋肉を鍛えるのを優先すべきだろう」

ひよった意見をデリアたちが言う。

ああ、もうこのヘタレどもが！

「お前らそれでも勇者パーティーか！ 思い出せ、俺たちの崇高な使命を！ それは魔族どもから人々を守ることだったろうが！」

「おお！」

俺の雄たけびに、テイリスが感動の声を上げる。

当然だ。

涙を流しても良いくらいだろう。

この聖剣に選ばれし勇者が、今まさに無力な一般大衆どもを救う決意を高らかに謳っているのだから。

それに……、

「大丈夫だ。今頃、王国正規軍と魔族軍が国境で激突しだすはず。いくら魔族軍が1万と言っても、あの王国正規軍だぜ。数は3倍はある。その決戦の場面で俺たちが参戦し、勝利すりゃあ、ええ、どうなるう？」

俺の言葉に、デリア、プララ、エルガーはハツとした表情を浮かべ

た。

ティリスは単に首を横にした。

「勇者パーティーがいたから、魔族軍一万を退けることに成功したという噂が流れますわ！」

「あたしの超強力な魔法支援が、魔族軍を追い払ったってことになるわけじゃん!？」

「俺の筋肉がこの国の盾として認められ、グランハイム王国を救った筋肉だと、伝説として永久に語り継がれるわけか！」

三人の目がキラキラと光りだし、唇を大きくニヤリと歪めた。

「分かったようだなあ。これはチャンスだ。最近運悪く傷つき、ちーとばかり堕ちた名声を取り戻すなあ」

「ふ、ふふふ。これで、この戦いで良い結果が出れば、再びあの贅沢な暮らしに戻るのですわね！」

「男どもに貢がせまくれるってわけじゃん!」

「俺の肉体の絵が大陸中にあふれる!」

ぐひ。

ぐひひひひ。

俺たちの微笑みが広がった。



「あのう。しかながらですね。魔族1万を率いるネクロマンサーが何者なのか。その正体も分からないですし、ここは慎重に……」  
テイリスが何か言っているが、

「んなもん、分かるのを待ってたら他の奴らに先を越されんだろうが！ いいから出発の準備だ！ げひ！ げひひひ！ 名声は！ 誇りは！ 俺のもんだ！ アリアケどもを出し抜いてやるぜえええええええええええ！」

俺はそう言いつつ、急いで旅館に戻ったのだった。

アリアケたちに遅れをとるわけにはいかない。

まずは颯爽と王国正規軍に合流する。

ブルっちまってる賢者パーティーとは違って、一番にかけつけるのが肝だ。

出し抜いて、手柄を独り占めにする。

これ以上のうめえ作戦はねえ！

「よっしゃあ！ 行くぞ！ お前ら！ もう一度俺たちが本来の地位と名声を取り戻すチャンスだ！！！」

「「「おう！！！！」「」」

キラキラした目をした三人が、俺の誇り高き鬨の声に、賛同して声

を上げたのだった。

136・勇者パーティーは手柄を目当てに出し抜いて出陣す(後書き)

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！  
コミックもガンガンONLINEで8/31連載開始です！

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyparty/>  
- - - - -  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「勇者パーティーは今後どうなるのっ(笑)……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 137・魔王も単身突撃

137・魔王も単身突撃

（アリアケ視点）

「外が騒がしいなあ……」

「はあ……。というか、筒抜けなんですけどね。止めてきましょうか？」

俺の呆れた声に、更に呆れた声でバシュータが答えた。

勇者たちが魔族軍を倒すために、俺たちを「出し抜いて手柄を立てる」と絶叫しいきまいている。

だが、俺は微笑みながら首を横に振った。

その眼には不出来な弟子たちを見守ろうとする慈悲の念が現れているだろうか。

「出来の悪い弟子だが、世界を救う使命にだけは、必死になれる男だ。俺たちが止めたところで無駄だろう。おそらく彼我の戦力差も承知したうえで、参戦しようという覚悟を持った出陣だ」

俺は断言するように言う。

俺という最大の支援者であり、よりどころを失った奴らであるが、それでも自分たちだけで世界を救おうとしている。それは無謀を通り越して愚かではあるが、俺と言う後ろ盾を失ってなお、前を向く気持ち、姿勢はさすが俺の弟子たる勇者という他ない。

「いえ、あの人たちに自己分析が皆無なだけでは？ どうしてア  
ー君は彼らの評価がそう激甘なのですかねえ。はあ」

「うむ。そこんどだけちよつと優しすぎの悪い面が思いっきり出  
ておるのじゃ！」

「そうそう。先生は優しすぎですよ！ 明らかに自分たちの名声の  
回復にしか興味なさげな会話でしたよ！」

アリシア、コレット、ラツカライがやんやと否定的な事を言うが、

「まあまあ。戦士ならば名誉・名声を求め武勲を立てようとするの  
は仕方ないことだ。俺のようなステージに達すれば別だが、別に奴  
らは一般人に毛の生えた程度の者たちに過ぎない。ならばむしろ、  
欲望に忠実なくらいでちょうどいいのさ」

「主様は慧眼であるなあ。ところで、それはそれとしてだがのう…  
…」

勇者ビビアたちのことを話していたが、ふいにフェンリルが別の話  
題を振った。

「もう一人、今しも飛び出して行こうとしている者があるのだが、  
これは止めるべきなのかのう？」

その言葉に俺は頭をかいた。その女性の方を見る。

それは勇者とは比べ物にならないほどの戦力をその身に秘めた、この大陸でも有数の戦士。

しかし、一人で行くともなれば無謀かもしれない。敵の戦力は未知数だ。だから、本音を言えば止めたいが、

「止めてくれるな！ アリアケっち！ なのだ！ これはあていしの魔王軍の問題なのだ！」

魔王リスキスが断言した。

それに対して、

「ええ。まあ、そうですね」

「異論ありません。魔族の中で何とかしてもらいたいものです」

ブリギッテとローレイは淡々と答えた。

魔王は少し、瞳を見開いてから、少しいじいじしつつ、

「あのう……正直、ちょっとは止めて欲しいのだ。……とはいえ気持ちは変わらぬのだ。あていしは行く！」

ダンと立ち上がった。建物が震える。

そして、村長である俺の方をまっすぐ見て、



「今までお風呂ありがとうだったのだ！ 刺客のあていしを最大級  
食客としてもてなしてくれたこと、この魔王リスキス・エルゲー  
ジメント、一生忘れぬのだ！」

いや、魔王ぐらいの貴族にも通用するサービスなのかという実証実  
験だったのだが、ここは黙っていた方が得策のようなので、微笑ん  
でおいた。

「ゆえに我がこの後万が一朽ちたとしても、何かお礼がしたい！  
そこでなのだ！」

改まった調子で魔王が言う。

「我が魔王領は、この村を正式にお主の領地と認める！」

「ん？ それってつまり……」

「今後そなたは世界を救う定めにある人間であると我は見ただのだ！  
ゆえに、人間族ではただの村長からも知れぬが、我が魔王領はそ  
なたを、対等なるこの土地の領主。すなわち『辺境伯』として認定  
するのだ！」

ざわ！ と周囲が湧いた。

あまりにも異例のことだ。だが、実は例外がないわけではない。

「魔族と人間は争っているが、魔族側についている貴族も結構いる  
からな」

「そういうことなのだ。今後、アリアケつちが動きやすくするためには、辺境伯になっておいたほうがお得なのだ！ しかも、人間サイドだと融通が効きづらいと思うし、魔王サイドはあんまり干渉しないのだ。だからかなり自由に出来るのだ！ これは魔王からの置き土産なのだ！……！」

彼女はそう言うと、背中の黒い羽根をブワッと広げる。

「では、さらばなのだ！ アリアケつち！ 楽しかったのだ！ あていしも魔王の端くれ！ 自分の軍隊を好き放題やられて黙ってるほどお人よしではないのだ！ 落ち着いたらまた旅館に泊めてくれなのだ！」

「おい、待て！ 別に俺はそんな厄介な置き土産はいらっ……！」

「しゅわ……！……！……！……！……！」

「がっしゃあああああああああああああああああああ……！！！！」

天井をぶちやぶって、魔王は部屋から出て行った。

「迷惑さは魔王級でしたね。アリアケさん。いえ、アリアケ辺境伯様？」

アリシアが笑いをこらえるように言った。

「まったく、勘弁してくれ。のんびり暮らすという君との夢はどうなったんだ？」

俺がそう言つと彼女は更に微笑みを深めて。

「いや〜。最初からアー君と一緒にいて、退屈な人生を送れるなんて思つてませんでしたからね〜。ねえ、皆さん？」

彼女がなぜかこの部屋にいる全員に聞くと、

「……………そうですね〜」「……………」

なぜか全員が全員、まったくそろつて首を縦に振つたのだつた。

な・ぜ・だ……………。

俺は普通に暮らしたいだけだというのに……………。

だが、こうして俺は魔王の置き土産でついに『辺境伯』となり、今回の事態収集を改めて考え始めたのであつた。

137・魔王も单身突撃(後書き)

第3巻は9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！

『無料』試し読みもありますよ(#^・^#)

コミック@ガンガンONLINEで8/31連載開始です！

コミックとともに、小説も、宜しくお願い致します。

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://mangazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yussyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「魔王リスキスちゃんは今後どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 138・謎の提示（前書き）

小説第3巻とうとう明日9月7日です。

ぜひ、ご予約・ご購入、もしくは【無料】試し読みもできます！

<https://magazine.squar-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

また『コミック』もガンガンONLINEで8/31開始しました。

コミックともども、小説もぜひよろしくお願いいたします（o\*。

ー。o\*oコミック

## 138・謎の提示

### 138・謎の提示

「幕間 アリアケ・ミハマノ幼いころ、ある人物からギフトを送られた日の思い出について」

「これはこれは。才能を集めた村を作ったみたものだが、君ほどの才能を持つ者がいるとは思わなかったぞ？」

「おじいさん、誰？」

俺の旅は、あの会話から始まった……。

僕……当時の俺は、まだ幼くて、自分のことを僕と呼んでいた。

ここはリットンデ村。

グランハイム王国でも北のはずれにある田舎町で、開拓村と行って良い。

ただ、はぶりは良くて、人が集まってきてはどんどん開発が進められていた。

特徴的だったのは、連れてこられた人々に対して、必ずスキルチェックや鑑定が行われていたことだ。特に子供に対しては入念だった。まあ、ユニークスキル全盛時代だったので、違和感はないのだけど。スキルによっては王宮勤めも夢ではないのだから。

ただ、僕には……何だかその光景に、どこか違和感を覚えていた。まるで、軍隊を作っているみたいだな、と思ったからだ。だって、開拓に必要なスキルよりも、モンスターとの戦闘に使えるようなスキルが発生した方が、それを主催していた老人は喜んでいたので、そんな印象を持っているうちに、次々に鑑定は進んでいった。

その鑑定の中で、この村に来て幼馴染となったビビアには勇者としての資質があり、アリスアには聖女としての資質があることが分かった。デリアやプララ、エルガーたちにも様々なスキルや能力が備わっていたようだ。

だが、逆に僕にはそんな能力がないことは分かり切っていた。僕は単に本を読むことが好きな、ちょっと好奇心の強いだけの少年だ。

特別なことは何も……。

「これはこれは。才能を集めた村を作ったみたものだが、君ほどの才能を持つ者がいるとは思わなかったぞ？」

年老いたローブを身につけた老人が僕を見下ろしていた。

僕はいつもの冷めた調子でその老人を見上げる。



「おじいさん、誰？」

「ふむ、それは鋭い質問だな。一介の旅人とも言うておこうか」

「どこから、どこへ、旅をしているの？」

彼はその言葉を、なぜかきっぱりと無視すると、

「何、この世界をより良い世界に書きかえようと思つてな。そのためには、魔族を倒し、平和を築けるような人材を育成しなくてはいけない。そのために旅をしている」

「そうなんだ。それで？」

「ふむ。君には才能がある。ご両親はいらっしゃるのかね？」

「ううん。気づいたら一人だったから。いろんな仕事を手伝つてたら、ここにたどり着いたつて感じかな」

「ふむ、気づいたら一人？ まあ、捨て子ということか？ だが、ふむ。そんな君が類たぐいまれなるステータスを持っているとは。まるで

……」

「ねえ、さっきから何を言っているの？ できれば本の続きを読みたいんだけど……」

「ははは。すまなかつた。では単刀直入に言おう。無断ですまなかつたが、さきほど鑑定したところ、君には『賢者』としての素質がある」

「賢者？」

ぼかんとした表情を僕はした。

それに対し、得体のしれない老人はとうとうと語る。

「さよう。しかも大賢者の資質がある。あらゆるスキルを使いこなすというたぐいまれなる才能じゃ。そなたにはその才能を開花させよう。そして、友人たちを守ると良い」

「友人を守る？ それは……」

「そう。この開拓地の幼馴染たちのことだ。ビビアやアリシア、彼らは多くの才能に恵まれている。君はそのパーティーの支援するスキルを使用する者として、活躍することが出来るだろう」

「そうすることで、良い世界が訪れるということ？」

「さよう」

その老人は優しい微笑みを浮かべて言った。

「なるほど、分かったよ。僕は彼らを最後まで助ける」

「物わがりの良い利発な少年だ。明日にはギフトが発現するだろう。君ならばきつと使いこなし、世界と仲間たちを素晴らしい未来へ誘うだろう」

老人は更に笑みを深めた。まるで最後のピースがそろったような内

心の哄笑を押し殺したような表情だと、子供ながらに思ったことを今でも覚えてる。

僕は表面上は納得したふりをして、その日本を読んだ後、ベッドの中で横になった。

そして、考えた。

『アレは、一体、ナニだったのだろうか、』と

まるで自分が得体のしれない何かに飲み込まれつつあるような錯覚を覚えたのだ。

だけど、そう思っている間に眠りへと誘われた。

そして、

「じゃんじゃかじゃんじゃーん

」

うるさめの号令のような声で、意識を強制的に覚醒されたのだった。

「よしよし、あの人っていうか、旅神が好き放題やってくれてるおかげで、星神の私も出張<sup>ては</sup>ることが可能になったほいですね！ です

が、アプローチできて夢の中程度って感じですか。やっぱり緒戦で不意をつかれて力を根こそぎやられたのが痛恨でした。自省、反省、猛省ですね」

うるさい大号令をかけた後は、独り言を大声でしゃべっていた。

その人は純白の服をまとう緑の髪の女性であり、頭にわっかなんかをつけている。

背中には翼があった。

「ひどい夢だな。明日も朝は早いし、夢の中だけど早く寝よ」

「ちよいと、待ちなさい」

寝ようとした俺の布団にガバ　と潜り込んできた。

「いきなりなんですか」

いつも冷静沈着な僕でも、驚かすにはいられない。

「男女7歳にして同衾どうしんせず！ですよー！」

「難しい格言を知っているのですね。ちなみに私の名前は『イシス』です。あなたはアリアケ・ミハマ君で宜しいですか？」

「布団から出て行く気はないんですか？」

「まだ体力が回復していないので、こうやって近づいてパスを強めておく必要があるのです。でないとすぐに消滅する可能性が高い。」

今は『アレ』がことを急いで現世で自由に活動している。だから力代償ウンターとして、私も夢の中くらいなら一瞬出て来られているに過ぎません。もし、私があるの前に現実世界で出会えるとすれば10年以上先の話でしょう」

「????????????? なんの話ですか?」

「あなたの友達を助けるという話です」

「それって今日、おじいさんから聞いた話のことですか?」

「そうです。彼の話は本当です。ですが嘘が混じっています。私はそれを伝えに来た。彼の左目は未来を見通す。だけど、その目的は星の旅人の目的はそうではない。次々に星を渡る必要があるのは彼が星を渡らなければ生きていけない存在だから。つまり、彼にとつては人や魔族と言うのは関係なく……ああもう、時間がない!」

「ちよつと! そこ肝心なところで! って、ええ!?!」

彼女の体が透明になりつつあった。

「すみません、時間が本当に無いのです。結論だけ言います。勇者たちを、勇者パーティーを助けなさい。だけど、支援するのではなく、あなたが彼らを導くのです。力に溺れさせるのではなく、制御させるよう導きなさい!」

「導く……」

「そうです。彼らが一人前になって独り立ちできるまで、巢立つ日まで、賢者たるあなたが親鳥のように厳しく鍛えなさい! でなけ

れば！」

「彼らが死ぬから？」

それは老人にも言われた言葉だ。

しかし、彼女は神妙な表情をして、

「彼らも、そしてこの世界もです」

え？ 僕は耳を疑った。

彼らだけでなく。世界が死ぬ？ それってどういうこと？

「いいですか、アリアケ君。彼らを育成すること、それが彼らの命を救い、この世界をも救う唯一の手段なのです。だから、まかせましたよ、『未来を変える大賢者』として生まれた運命の子よ。あ、ちなみに、10年後くらいにはフォローしに行きますから。期待してください。あと、ちなみにアリアケ君、ちよっと私のタイプです！ 将来再会するのを楽しみにしみます」

「最後に変なセリフを残して行かないでください！ って、ああ、消えた！?!?!?!」

そう叫びながら僕は、ガバリ！ と、粗末な部屋の布団から跳ね起きた。

「はあ」と、とりあえず深呼吸をする。

やれやれ、と僕は将来口癖になりそうな仕草をしてから、瞳を閉じ

た。

あれは、単なる夢だ。しかもかなり馬鹿馬鹿しい。

だけど、さっきの少女の名前ははっきりと覚えていた。

『イシス』

いきなり布団に潜り込んできたちよつとエツチなお姉さんだったが、言っていることは明白だった。

それは友達を、独り立ちするまで導き、育てよ、ということ。

ならば。

「やることがちよつと変わったくらい、かな？」

老人は友達を支援しろ、と言った。

お姉さんは友達を導き、育成しろ、と言った。

まあ、どっちも同じようなものだろう。

僕はそう判断して、

「やれやれ」

そう言いつつ、頭の中でゆっくりと暮らすという将来計画を10年ほど後にずらすことにしたのであった。

138・謎の提示（後書き）

第3巻は明日9月7日発売です！ ご予約、ご購入ぜひお願いします！ 『無料』試し読みもありますよ（#^・^#）

コミック@ガンガンONLINEで8/31連載開始しました！

コミックとともに、小説も、宜しくお願い致します。

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://mangaazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yussyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「物語は一体どうなっていくのっ……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。



面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

139・勇者たち歓迎されて、有頂天になる（前書き）

小説第3巻とうとう9月7日発売されました。

思いのほか大人気です！ 支えてくれたみなさんありがとうございます！

――”m

ぜひ、ご予約・ご購入、もしくは【無料】試し読みもできます！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

また『コミック』もガンガンONLINEで8/31開始しました。

コミックともども、小説もぜひよろしくお願いいたします（o\*。

――”m

139・勇者たち歓迎されて、有頂天になる

139・勇者たち歓迎されて、有頂天になる

〈勇者ビビア視点〉

「かー、ここが人間領南部の最前線かよ。ド田舎じゃねーか!」

俺は思わず正直な感想を漏らす。

そこには広い広い荒野が広がっており、茶色の大地が地平線まで広がっていた。ごつごつとした大きな岩場が鬱陶しく、間を通る風が轟々と耳障りな音を立てる。

選ばれし者である俺たち勇者パーティー。

誇りと栄光。

公明正大であり、弱きを助け、強気をくじく正義の心を持つ者たち。

その中であって更に選ばれた者である、この俺、聖剣ラングリスに選ばれた王国選定勇者たるビビア・ハルノア様には不釣り合いな場所としか言いようがなかった。

「おっしやる通りですわ！ わたくし達にはもっと華やかな都会が

似合っていますわ！ もちろんダイヤモンド！ ネットクレス！ 宝石！  
なども！ わたくしたちの栄光に華を添えることでしょう！」

「あたしたちを称える、やっぱ王都あたりのハイソな一般人どもがいねーと始まらないよね。だから、都会の近くのクエストを中心に受けて評判を上げてたわけだし」

「見られない筋肉に意味などない。都会ならばすぐに噂になるほどのマツチヨもここでは砂煙にまみれるだけだ。ふん、むなししい土地だ」

俺の言葉に、パーティーメンバーのデリア、プララ、エルガーたちも賛同する。

俺たち勇者パーティーにとって、強大な敵を倒し、武勲を立てるところが生きがい。

そんな俺たちに、こんなド田舎は不釣り合いなのだ。俺たちには洗練された戦場こそがお似合いなのだろう。

それこそ、世界の趨勢を決するような、王都の防衛戦などが、きっと俺たちが活躍する珠玉の戦場に違いない。

「そして、そこで武勲をあげて、今度こそあのアリアケの野郎をぐきぐきぐきぐきぐきぐき……！」

「ほらほら、勇者さん。無意識に歯ぎしりしてますよ。まるでそれでは、大賢者アリアケ様に負けたように見られてしまいますよ、スマイルスマイル」

「ぐへは！！！！ば、馬鹿が！ アリアケに負けた事なんて一度もねえ！ 俺は落ちぶれたりしてねえ！ 落後者なんかじゃねえんだああああああ！！！！」

俺の真実の叫びが鳴り響くが、その声はびゅうびゅうとつるさい風にかき消されて……。

「おお、あなたたちはもしや勇者パーティー様たちではないのですか！？」

「…………へ？」

俺は驚く。

最近王都や、大きな都市を歩くと、クスクスと笑われたり、陰口を言われたりするばかりだったのだ。

アリアケに負けたのだ。

真の勇者は、真の賢者に到底かなわないなど。

勇者パーティーはオワコンなのだ。

ぎ、ぎ、ぎ、ぎ……！！

思わず歯茎の全てから血を流しかねないほどの誤解が、世間一般に流布しているのだ。

だが。

だが、いま。

だが、いま、俺の耳に聞こえた言葉は……。

「おおい！ みんな、こつちに来い！ 南部戦線に勇者様たちがわざわざ来てくださったんだ！ 我々の希望が現れたぞ！」

「は？」

「へ？」

「き、希望？」

その言葉を放ったのは、岩陰から魔族の出現を監視していた部隊の一人の若い兵士だった。

俺たちの風貌は、勇者パーティーというだけあって、売れている。

だが、だからこそ、最近では表通りを歩けば飛んでくるのはろくでもないものばかりだったのだ。

しかし、

「おいおい、マイク。寝言を言つな。こんな場所に勇者様たちが来て下さるわけがないだろう？」

「そうだぞ、マイク。勇者パーティーは王国の切り札。こんな所に来て良い存在じゃない。殿上人のようなものなんだからな」

「王国の盾がこんなところで油を売ってるわけがないものな」

そう言いながら、もう三人ほど、兵士たちが現れる。

彼らは俺たちをまだしっかりと認識していないようだ。

だが、んなことはどうでもいい！

こいつらは言った！

「王国の切り札っ……っ！」

デリアが瞳を輝かした。

そうだ！俺たちはそう言われていた。王国には勇者パーティーがいる。だから人類は負けないと！

「てんじょうびと殿上人！！！！ん、いい響きい！！！」

プララが満足げに叫んだ。

そうだ！俺たちは普通ではいられない宿命を帯びた選ばれた者たち。王国選定勇者とその勇者パーティーたちなんだ！

「王国の盾！人々を守る筋肉の壁！俺自身が国のイージス！！！」

エルガーも気持ち悪いポーズを取りながら、自身の筋肉をアピールする。

エルガーは気持ち悪いが、しかし、俺たちが王国を守る盾であり、

希望であることは言われるまでもないことだ。

俺は誰に聞こえないように、ぼそりと呟く。

「ふ、ふん、やはり田舎だな」

だが、俺は知らず知らずのうちに頬を緩めてしまふ。

それになんだろう。

ここ何か月とわだかまっていた気持ち。

鬱屈した恨みの気持ち。

本来の勇者パーティーの評価を取り戻したいという陶然の欲求。

そういったものが、スーっと、引いて行くのを感じたのだった。

それは他のメンバーも同じようだった。

まるでつきものが落ちたかのように。

かつての『最強』。

比肩する者なしと言われ、瞳を輝かせ、すべての上級クエストを総なめにして、自信满满で一般大衆どもから称賛されていた頃の顔つきにみんななっていた。



「ああ、そうだ！ これだよ！ これが本来の姿なんだ！」

俺の言葉を皮切りに、

「私たちは誇り高き勇者パーティー！ そして私は拳闘士デリア！  
防御無効のユニーク・スキルを持つ最強の存在！」

「あたしこそが人類最強の魔法使い！ 魔力量が1万を超え、魔王  
すら超えると噂されており人類の切り札！」

「人類唯一無二の盾エルガー！ 無尽蔵の体力値と鋼の防御力に加え、  
魔法耐性も他の追隨を許さない王国の盾！ その誉れを独占する  
男だ！！」

まるで今まで封じ込められていた感情を爆発させるように、全員が  
空に向かって絶叫した。

来て良かった！

俺たちはまだまだやれる！ 正当な評価を受けることが出来る土地  
がまだあったんだ！

石や嘲笑を投げつけられず、こうして称賛を投げる存在だって、ち  
ゃんといたんだ！

「皆さん、感涙に咽びすぎですよ。はい、ハンカチをどうぞ」

「ああ、すまねえな。ずびびびーん」

「ふふふ、恥ずかしいところを見られちゃったわね。ちーん」

「あたしとしたことが、こんな姿を見られちゃうなんて、まじないじゃん。ぶー」

「ふ、クールな俺らしくもなかったな。ずばびーん」

そんな俺たちの様子を、兵士たちは不思議そうな顔をしている。

おっと、いけねえ。

こういう時に言う言葉は決まっている。

俺はハンカチをティリスに返すと（なお、ティリスは微笑んだまま受け取らず一歩後ずさった）、彼ら下級兵士たちに向かって言った。

「待たせたな」

俺はマントを翻しながら言う。

「もう大丈夫だ」

その言葉に、兵士たちの目が輝いた。

「勇者パーティーが援軍に来たんだからな」

その言葉は兵士たちからすぐに、南部戦線に伝わり、俺たち勇者パーティーはすぐに大歓迎を受けることになったのである。

まあ、これが本来のあり方なんだよな。

へ、へへへ。

別に嬉しくなんかねえけどな。

だが、まあたまには悪くねえ。こついう当然の対応ってのもよお。

俺はそんなことを思いながら、無意識に頬をにやつかせながら、歓迎する兵士たちにパーティーメンバーとともに手を振りながら、案内された軍の中を歩いて行ったのであった。

139・勇者たち歓迎されて、有頂天になる（後書き）

第3巻は9月7日発売しました！ 大人気です！ 本当に支えてくれた方たちありがとう！

まだの方、ご予約、ご購入ぜひお願いします！ 『無料』試し読みもありますよ（#^・^#）

コミック@ガンガンONLINEで8/31連載開始しました！

コミックとともに、小説も、宜しくお願い致します。

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「物語は一体どうなっていくのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

140・勇者パーティー、大言壮語し、前線に立つ（前書き）

小説第3巻とうとう9月7日発売されました。

思いのほか大人気です！ 支えてくれたみなさんありがとうございます！

――”m

ぜひ、ご予約・ご購入、もしくは【無料】試し読みもできます！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

また『コミック』もガンガンONLINEで8/31開始しました。

コミックともども、小説もぜひよろしくお願いいたします（o\*。

――”m

140・勇者パーティー、大言壮語し、前線に立つ

140・勇者パーティー、大言壮語し、前線に立つ

〈勇者ビビア視点〉

俺たちは威風堂々とした態度で、軍の拠点の中を案内されていた。

「おい、まさかあれが!」

「ああ、そつだ!」

「あの伝説の勇者様一行か! すげえ!」

まったく。

俺は嘆息する。

これだから有名人ってのは困る。

歩くだけで、周りの兵士どもが憧れや羨望のまなざしを向けて来やがるんだ。

これがかわいい子ちゃんたちなら、男として嬉しい限りだが。

むくつけき男どもからの、熱い憧れの視線になどさらされて、嬉しい訳もない。

「まったく、とんだ有名税だなあ。だが、まあ勇者ともなれば、こ  
ういった有名税も受け入れるしかないのかねえ。はあ、まったくよお」

俺は肩をすくめ隣のデリアたちに話しかける。

俺と同様、デリアたちも、周りからの羨望。いや、時には称賛の声  
がたびたびかかることに『困ったものですわ』などといって、やは  
り、同じような感想を漏らす。

「勇者パーティーでいるだけで、普通の生活は出来ませんもの。私  
たちは単に弱き一般人たちを助けたくて、こつやつて南部戦線まで  
赴いただけなのに。こうして注目を集めることが目的ではないの  
ですわ。もちろん、彼らの気持ち理解できないわけではないので  
すけどねえ。あの憧れの勇者パーティーの高嶺の華が目の前を歩い  
ているのですから、誰であれ目を奪われるのは仕方ないと諦めるし  
はありませんわねえ」

「あたしもそう思うよ。何せ世界一の魔法使いが歩いてるんじゃない  
？ むしろ、サインや握手を求めたい気持ちやグツと我慢でして  
るんだろうね。そう思うと自分たちの存在感、人氣が恨めしくなるよ。  
彼らにそんな我慢を強いちゃってるんだからさあ」

「皆の言う通りだな。彼らも俺たちのように。特に俺のようなたく  
ましい肉体に憧れ、一体どんな鍛え方をしているのか教えを乞いた  
いところだろう。だが、軍規があるから、それが出来ないんだ。ま  
ったく、勇者パーティーというのはそこにいるだけで、人心を騒が



せてしまつ罪づくりな存在だなあ」

三人はそう言うと、唇を歪めながら肩をすくめた。

俺も彼らと同様に、唇を歪めながら、周囲の称賛の声を仕方なしに受け取り、手などを振る。

すると、周囲が更に盛り上がった。

「手を振っただけだつてのに。やれやれ、憧れの気持ちは分かるが、少しは自制しろつての」

「まったくですわ」「ね」「仕方ないやつらだ」

俺たちは更に唇を歪めた。

「いやー、すごい人気ですねぇ」

俺たち4人の後ろを新メンバーであるティリスが驚いた表情で言う。

「ぎひひ。いやいや、これくらい普通だ。まったく普通に街も歩けねえのが、勇者のつれえところなんだよ」

「へえ、そうなんですねぇ！」

「ああそうさ。くく、くくくく」

俺は思わず笑みを浮かべる。こうして、勇者パーティーの新メンバーになったティリスも、俺たちを心の底から認めただろう。

こうしたことを通じて、仲間の絆も深まる。そのことに俺は、思わず「ぎひひひ」と会心の笑みを浮かべたのだった。

俺たちはそんな軽口をたたきながら、南部戦線の将軍の元まで案内された。

「勇者様がいらっしやいました！ ゼルパス将軍！」

「おお！ いらっしやったか！」

この南部戦線の総指揮官は、ゼルパスという50歳くらいの鬱陶しそうな髭を生やしたおっさんだった。

その眼にはこの希望の星である勇者とその下僕どもが来てくれたことへの、嬉しさがあふれている。

まあ、こうして伝説の勇者が現れたのだから、当然の反応であり、俺は特段意に介することもない。

「勇者ビビアだ。こっちはパーティーメンバーのデリア、プララ、エルガー。そしてテイリス」

その言葉に、ゼルパス将軍は更に嬉しそうにした。

「おお！ ビビア様のことはもちろん存じております。そして、も

ちろん、他の皆様のことも！ S級モンスターの数々を屠<sup>ほ</sup>ってきた実績も！ まさに戦士の誉<sup>ほまれ</sup>を欲しいままにする最強の勇者パーティー！」

やれやれ、当たり前のことを言われても別に嬉しくないっての。

「くひ！ うむ、ごほん！ そんな世辞はいい。俺たちは迫りくる人類の脅威を打ち払うためにここまでやって来たんだ。戦況を教えたくないか？」

「おお、そうでしたな！ 面目ない！ ただ、一点だけお聞かせください」

「なんだ？」

「勇者様たちがいらっしやったことは、この上ない僥倖<sup>ウラウラ</sup>。このゼルパス、これほどの喜びを人生で覚えたことはございません。ですが、普通、勇者様たちが派遣される際は、前もって王国から伝令が来るものです。しかし、今回はそれがありませんでした。何か理由があったのですか？」

「あ、ああー、そのことか」

俺は目を右、上、下、左と動かしてから、

「お、王国からの指令を待っていては遅いからな！」

俺は力強く言った。

「最近王国の奴ら俺たちを無視しや……じゃなくて。えーっ、ア

リアケを出し抜き……じゃねえ……。えつとだな。うむ、ごほん！」  
俺は咳払いをしてから、

「この南部戦線での魔族軍との緒戦ちよせんこそが、人類の趨勢すうせいを決める大きな戦いになるだろう。ならば、王国を守る使命を背負った俺たち勇者パーティーがそこにいなくてどうする。王国もそのことは分かっているが、指示を出すには、もう数十日の時間がかかるだろう」

「そんなにですか！？ それほどの時間はっ……！」

「だから、駆けつけたってわけだ！ 王国からは指令は出ていねえが、行くなとも言われてねえ！ なら、俺たちが勝手に南部戦線で戦って、また人気者に返り咲く……じゃねえ。武勲を上げて人類を守り、無辜むこの民たちの安寧を守ることに何の問題もねえってことだ！」

「おお！ さすが勇者様たちだ！ 素晴らしい清廉せいれんなお心からの行動だったのですね！ このゼルパス、感動しましたぞ！」

そう言っつて、マジで感涙を流し始めやがった。

おっさんの涙とか見てもキモイだけなんだがなあ。

おら、んなことより、さっさと戦況を教えろや。

「將軍。こうしている間にも魔族軍が迫っている。天然の要害である南部大森林を抜ければ、この広い荒野で決戦になる。だが、その勝利は俺たち勇者パーティーの力が発揮されなければ訪れることはねえ」





「そつだろつ！ そつだろつ！」

ああ。

いいい。

そつ。

そつだ。

俺たちは称賛を受けながら戦わなくちゃいけねえ存在なんだ。

あいつらの憧れを一身に受けながら、武勲をあげ、誉を受けるべきなんだ！

だから、

「も、もしや、だとすると勇者様は！？」

「ああ、そつだあ」

俺はニヤリと、今後訪れるあの兵士たちからの称賛の声をすでに耳に聞きながら、

「最前線に立つ。俺たちがあいつらの『星』となり、『希望』となつて戦う。俺たちの最強の雄姿を前線で見せれば、あいつらも喜び、勇気を振り絞つて戦うことが出来るし、俺たちと一緒に戦う<sup>ほまれ</sup>誉に歡喜するだろつからなあ」

「おお、さすが勇者様だ。このゼルパス、感激で言葉も出ません！」

「それに相手は不死の軍団なんだぜえ？ 俺の聖剣ラングリスや、強力なファイヤーボールを使えるプララたちがいなくてどうするよ」

「おお……、おお……」

その言葉に感激したのか、また泣き出した。

いい加減うぜえ。

だが、ああ、この高揚感、本当に久しぶりだぜえ。

待ってたんだ、こんな称賛に包まれる日がまたやってくるのをよお。

長かったぜえ。

まあ、確かに、前線はきついかもしんねえが、

だがきつと、俺たち最強の勇者パーティーなら大丈夫だろう。

何より、この全能感。

聖剣ラングリスだつてあるんだ。

不死だからなんだつてんだ。切り刻んじまえば復活もしねえだろ。

魔族だろうが何だろうが、大した事ねえよ。

絶対に大丈夫に違いねえ。



ああ、もうすぐだ。

もうすぐ俺たちはまた再びあの脚光を浴びる舞台に返り咲くことができる！

俺は兵士たちの俺たちへ向けてきた視線をまざまざと思い浮かべながら、前線で更に羨望のまなざしが注がれることを確信するのだ。

140・勇者パーティー、大言壮語し、前線に立つ（後書き）

第3巻は9月7日発売しました！ 大人気です！ 本当に支えてくれた方たちありがとう！

まだの方、ご予約、ご購入ぜひお願いします！ 『無料』試し読みもありますよ（#^・^#）

コミック@ガンガンONLINEで8/31連載開始しました！

コミックとともに、小説も、宜しくお願い致します。

小説の第1巻は即重版！ 第2巻も好評発売中です。

【無料】試し読み

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「物語は一体どうなっていくのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

141・『人魔同盟』締結（その1）（前書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！  
ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

141・『人魔同盟』締結（その1）

141・『人魔同盟』締結（その1）

（ところ変わってオールティ村／アリアケ視点）

「それでどうするのかのう、主様？ 勇者パーティーは南部戦線に大急ぎで向かったようであるし、魔王は単身で突撃をかまそうと天井をぶち抜いてしまったぞえ？」

「修理が大変です。困ったものです」

フェンリルが現状を伝えると、ローレイが眉をしかめていた。この村の縁の下の力持ち的な庶務的な役割を彼女は果たしているので、頭の中で人と予算の算段をつけないといけないとプリプリしているのだろう。

「確かにローレイさんの言う通り、修理も大変ですが……」

と、アリシアが言葉を引き継ぐ。

「グランハイム王国連合国家の南部戦線は、魔王領との境界にある軍事城塞です。ここを破られると、ランド伯爵領にも被害が及ぶでしょう。何よりも」

「この村はちよつと離れてはおるが、ランド伯爵領が陥落すると、ちーとばかり、交易に差支えが出そうじゃなあ。わしが個人的にドラゴンになって空輸するだけではもはや足りぬのは明白じゃ。それほどにこの村はすでに大きいのじゃ」

「陸の孤島のようになりますかね？ 先生」

「そうですね、それに教会の支援も少し厳しくなります。教会はこの村の金融の後ろ盾。行路が遮断されてそれが滞ることは人・モノ・金、すべての流通が止まるでしょう」

彼女たちの意見を聞きながら、俺は状況を頭の中で整理する。

俺自身がすべてを考えなくとも、こうして優秀なブレインが集まっていると、こうして様々な課題や献策がどんどん提示されるので非常に助かる。

「お前たちの言う通りだ。死にも色々があるが、このまま行けば経済的な死を招くだろう。じわじわと真綿で首を絞められるような緩慢だが確実な死だ」

俺の言葉に彼女たちは真剣に聞き入る。

だが、

「ふ。それにしても君たちのような優秀なメンバーがパーティーで助かるなあ」

俺は弛緩するうように微笑みながら、単に感想を漏らす。

厳しい現状をなんとも思っていないような、余裕の笑みだ。

その笑みを、俺がただののんき者だと思っ輩はここにはいない。

皆は、俺の態度を正しく理解し、ある者は、あからさまに喜色を顔に浮かべたり、人によっては頬を染めたりした。

「アリアケさんの面倒を見るのが、つ、つ、つ、つ、妻の私の役割ですからね！ 当然ですね！」

「わしもわしも！ 旦那様の役に立てて幸せなのじゃ！」

「ボクも頼りにしてもらえて嬉しいです……。ちょっと恥ずかしいですが……」

「まあ、我も持てる力と知恵は貸そう。何せ主様のやる事がこの世界の趨勢を決めるのであるしなあ」

「アリアケ様に認められると、何だか嬉しいし、フワフワした気持ちになるからいいですよね！」

「それで……」

最後にブリギッテ。

始祖ブリギッテ・ラタテクトが俺を信頼した優しい笑みを浮かべながら聞いた。

「この後どうするのか、すでにアリアケ様の中では決まっているの

でしょう。私たちは最後まで賢者に付き従います。どうなされるおつもりですか？ やはり」

「突撃じゃな！ うおおおお！ 魔王に遅れてなるものかあ！  
なのじゃー！」

コレットが炎をキシヤーと吐くが、俺は笑いながら首を横に振る。

「戦いは終わりまで見通しておくべきだろう。今回の戦いは魔族軍との戦いのようにグランハイム王国の者たちは思っているようだが、それは違う」

「むむ！ 確かに！ 魔王が戦いに向かったのじゃ！」

「そう、つまりこれは、人類側、魔王側とも違う、第3勢力との戦いなんだ。ならば」

俺は言葉を切り、賢者パーティーの面々を見て断言した。

「やることは一つだろう？」

俺はそう言うと、ウインクを一つして、微笑んだのであった。

「ようこそ。コレットを急に派遣して驚かしたのは悪かった。だが、



「そう立腹しないでくれ」

「別に立腹などしとらん。それにあのコレット殿はゲシユペントドラゴンの末姫であろう？ 伝説のドラゴンの末姫が迎えとして来城することが、礼節を欠くことには当たらん」

「なら、どうしてそう眉をしかめているんですか？」

すると、その男は「はあ」と嘆息し、

「そなたのような冒険者たちと一緒にするな。わしの役目は玉座に座り政務を務めること。ドラゴンの背中にまたがり、こうしてたった一日で縦断することではないわい！」

その男は顔を真っ赤にしてどなった。

さっきまで青かった顔が真っ赤になる七変化は、どこか滑稽だ。

(やはり、立腹しているではないか)

と俺は苦笑する。

だが、それは想定内の範囲内のこと。

朝たたき起こされるよりも衝撃的な理由で、いきなりゲシユペントドラゴンの背中にのせられて大長駆させられれば、誰だって少しくらい怒鳴りたくなるものだ。

さて。

俺たちはランド伯爵が用意してくれた庭園のテーブルの椅子に腰かける。

相手は、

「久しぶりですね。グランハイム国王、その後お変わりはありませんか？」

「そなたもな。大賢者アリアケ・ミハマ。いや……」

王は言葉を一旦切ってから、

「魔王国边境伯領、領主アリアケ・ミハマ殿」

こうして、人類代表と魔王領代表の俺との会談がランド伯爵領で開始されたのである。

141・『人魔同盟』締結（その1）（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！  
ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「オールテイ村は一体どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

142・『人魔同盟』締結くその2く（前書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！  
ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqnovel/series/detail/yusyparty/>

142・『人魔同盟』締結　くその2く

142・『人魔同盟』締結　くその2く

(前回の続きです)

「先日は聖都『セプテノ』の救世見事であった。国軍をほとんど前線に貼り付けている昨今、あの人類滅亡を回避した功績を儂個人としては高く評価している」

「それはどうも」

「……少し疑問なのだが、聞いても良いか？」

「どうぞ?」

俺は首を傾げながら言った。

「そなたはその自分のやったことをもつと誇ったりはせぬのか？  
誰もおらぬから言うが、そなたのやったことは奇蹟と言って良い。  
もっと威張っても良いと思うが？　御前試合の時と言い、聖都救世  
の際といい、そなたには欲というものが無いのか？」

まあ、一般的にはそう思うか。

俺は納得する。

普通、功績をたてれば、それを評価され、何かしらの形で報いてもらいたいと思うのが普通だ。それは金銭であったり、あるいは身分であったりするのだろう。

だが、

「俺はアリシアと村でゆつくりと暮らしたいだけです。強いて言えば、俺の弟子たちが無事に世界を救うことを願っているだけですかね」

「勇者パーティーか……。何やら勝手に南部戦線で戦おうとしているようじゃが、指揮系統がうまく機能するとは思えぬ。戦争とは究極の集団戦ゆえ、非形式的に、単独で参加しては、連携は難しい。勝てるものも勝てなくなる」

王は呆れたように言った後、

「ゆえに、そのことを見越して、今回の会談をそなたはセツティングしてくれたいというわけなのであるっ？」

国王が俺に期待を寄せた顔をする。

やれやれ。俺は嘆息する。

今回の会談の意味を、グランハイム国王はよく理解している。

軍が手薄の南部戦線を守るのは、現在の王国には戦力的に不可能なのだ。主力は北部に貼り付いている。

「勇者パーティーが単独で非公式に参戦しましたが、それでは組織として軍は機能しないですからね」

「その通り。ゆえに、そなたから書状を受け取った時は、実はホツとした。これならば戦いになるぞ、とな」

つまり、勇者パーティーが参加した今の状況のままでは、人類が勝利することは不可能であり、ひいては人類は滅亡するという事なのだ。

その不可能を可能にする、勝利への唯一の希望を俺が提案しようとしているという状況である。つまり、本来ならば、王がこちらに出向くべきところなのだが、俺は中立的な立場でランド伯爵領での会談をセツティングした。

これはいうなれば俺が国王の立場に配慮したということであり、彼の政治的立場を悪くしないように気をまわした深謀遠慮に他ならない。そのことに王が気づかないはずもなかった。

「そなたの配慮には深く感謝している、大賢者アリアケ・ミハマ。いや……」

王はわざとしっかりと言い直した。

「魔王国边境伯アリアケ伯爵」

「こちらこそ、グランハイム王。叙爵されたばかりの边境伯ではありませんが、『边境伯』とはこうした戦時において、その防衛戦を行う上で強大な権限を与えられている。こうして同盟を結ぶ程度のね。あの魔王は無論、そのことを承知で俺を边境伯へ任命したんだと思

いますよ」

別にあの魔王はその場のノリで俺を辺境伯にしたわけではないのだ。

「人と魔族の共同戦線か。だが分かっているのか、アリアケよ。人と魔が手を組むなど、これは実に400年ぶりのことだ。その偉業をお前は実行しようとしている。重圧などは感じぬのか？」

「いえ、全然」

俺のあつけらかんとした答えに、王は驚いた表情をする。

やれやれ。それほど意外なことかな？

むしろ、

「この戦いには裏がある……。不死の軍勢を作り上げた謎の存在が……。一体誰が、何のために？俺はそっちの方が気になってますよ」

「ふつむ……」

「だから、人と魔族がいがみあっている時ではありません。南部戦線の、その先がある。人だけでも、魔だけでも対応できないでしょう」

「だから南部戦線ごときでは緊張はせぬ、か。ふ、そんな未来のことまで考えているとは……。俺は目の前のことしか……。分かった。この同盟は南部戦線のみならず、その先のことまでも見据えた同盟なのだな」



王は、深く深く頷きながら言った。

「すべて了解した。この同盟は、人と魔をつなぐ存在、大賢者アリアケ・ミハマによる人魔同盟だということが」

「へ？ いや俺は関係な……」

だが、俺が否定する前に、王は決断したとばかりに、用意していた羊皮紙に力強くサインした。

そこには、

「グランハイム王国は魔王国と、アリアケ・ミハマを信頼し、正式な『人魔同盟』を締結する！」

そう高らかに宣言されていた。

それは歴史的な瞬間だった。

400年戦争状態だった両国が、一時的とはいえ、共通の敵を倒すために、同盟を締結したのだ。

王は俺に握手を求める。

「辺境伯アリアケ・ミハマ殿。不死の軍勢に対し、人類と魔族は一体となって戦おう。400年の戦いの間に流された血と死はすぐに洗い流されるものではない。だが、今この時より、人類と魔族は大賢者アリアケ・ミハマの名において、その禍根は一時忘れ、同盟を締結し、穢<sup>けが</sup>らわしい死の軍勢を打ち砕く！」

「あの、あまり俺の名前を何回も何回も連呼しないで欲しいんですが……」

「今更何を言うか！ そなたの存在なくして、人魔同盟など成り立つはずがなかるう！ そなたはもっと己の影響力を自覚せよ！」

「ええー……」

なぜか怒られてしまったのだった。

ともかくこうして、元々は王を中心に人魔同盟の締結を予定していたにも関わらず、はからずも、過大評価されたこの俺、アリアケ・ミハマの名によって、『人魔同盟』が正式に締結され、人類領、魔王領問わず、大陸全土へ広く告知されたのであった。

そしてここに、人類と魔族の双方が認める、正式なる辺境伯アリアケ軍の行軍が開始されることになったのである。

142・『人魔同盟』締結くその2く（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！  
ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

-----

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「人魔同盟は一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

143・人魔同盟・盟主アリアケは全種族混合部隊を率い、盛大に見送られ出陣する

143・人魔同盟・盟主アリアケは全種族混合部隊を率い、盛大に見送られ出陣する

「盟主アリアケよ、頼んだぞ」

「了解した。グランハイム王。だが、こうしてすぐに人類・魔王国連合軍として出陣出来るのは、あなたの英断があつてのことだ。感謝している」

俺の言葉に、

「そなたがそれを言うのか」

王は苦笑する。

その言葉の意味が分からずに、俺は首を傾げた。

「分からぬか？ 賢者というのは遠くが見えすぎるせいで、自身が見えぬのかもしれない。そなたが起こした数々の奇跡と偉業は、この王国を何度も救っているのだ。俺とてそれくらいは理解しておる。ゆえに、俺に英断を促したのは、ほかならぬそなたである、賢者アリアケ・ミハマよ」

そんなものだろうか？ 俺は腑に落ちないとばかりに、

「いや、俺はそんな大したことはした覚えはないのだが？」

俺は淡々と事実を伝える。

が、その言葉に、王は、

「こやつはいつもこうなのか？」

と周囲に聞く。

それに対して、これから俺とともに南部戦線へ向かう面々は大きく、

「はあ~~~~~」

ため息をつけて答えたのだった。

「魔の森から街を救いましたよねえ？」

「エルフの森を救って頂きました！」

「獣人に圧政を敷く領主を倒したのじゃ」

「聖都で復活した悪魔を撃退しましたよ先生？」

ふむ、確かにそうだが、

「賢者として当然のことだ。それがどうかしたのか？」

その言葉にやはり全員が、

「はあ~~~~~」

と更に長々としたため息とともに、ブリギッテがまじめな顔をしながら、

「もう少しご自身の活躍を真剣に吟味すべきですね。周囲を見過ぎで、自分のことがおろそかになっているのではないですか!？」

そう指摘してくるが、やはり何を言われているのかよくわからずに首を傾げるしかない。

それよりも、だ。

「こうして、グランハイム王や領民たち、それにランド伯爵まで駆けつけて来てくれたのは嬉しい限りだ。武具もこれほど融通してくれたことには感謝している」

「そなたのためだ。出来る限りのことはさせてもらおう」

「これくらいはさせて頂きませんか。でないと……」

ランド伯爵が、俺の後ろに並ぶ軍勢を見ながら、苦笑しつつ言った。

「アリアケ様が数日で集められた、この奇跡の軍団を装備なしで出陣させるなんていう、領主の風上にもおけないことをしてしまうことになりますからね」

彼はそう言って、まるで目の前の光景を、やはりまだ信じられないものを見るかのように言った。

それも、まあ仕方ないだろう。

俺たち賢者パーティーの後ろには、合計で500人程度の軍勢がいる。

数自体は問題ではない。

問題はその中身であった。

「いや、本当にこれは凄いことじゃ。今までこれほどの種族が手を組み、部隊を形成したことがあったろうか。あるとすれば、それは……」

「神話の中だけの話ですね」

「大仰な言い方だなあ」

俺は呆れるが、王モランド伯爵も真剣な表情だった。

「いえいえ、アリアケさん。十分前代未聞なんですから、そこは認識を改めてくださいね!」

隣のアリシアが俺にツッコミを入れてきた。

ふうむ、彼女が言うのならばそうなのだろうか？

そんな会話をしていると、それぞれの部隊のリーダーから報告が上がってくる。

「志願した冒険者から100名すでに準備は出来てますぜ、アリア

ケの旦那！！！！ また『メデイスンの町の奇跡』を見せてやりましようや！」

俺が魔の森から、メデイスンの町を守ったことは、『メデイスンの町の奇跡』と冒険者の間で広く知られているらしく、その時の縁でオールティにやってきた冒険者は多い。今回志願した冒険者たちもその際に縁を結び、俺を信頼する荒くれ者たちだ。

「エルフ軍50名も準備できています、アリアケ様」

セラも報告をする。普通エルフは人間とは非協力の関係にある。だが、森を救った俺はすでにエルフの盟友として認められていて、今回の呼びかけに快く応じてくれたのである。このことは、人間たちをひどく驚かせると同時に、俺の影響力が甚大なものである印象を持たせてしまったようだ。

無論、彼らは少しばかり感謝してくれているだけだ。大したことをしたわけではないので、そこまで恩義を感じている訳はないと思うのだがなあ……。

「ゲシユペント・ドラゴンも1匹、連れてきたのじゃ。本来は人の戦に興味のないドラゴン種族じゃが、今回は特別なのじゃ。のう、フレッド？」

「はい、この戦いで自身の罪を償うつもりです」

聖都セプテノで悪魔フォルトゥナ側について戦ったフレッドであった。今は人の姿をしている。

彼は王になりたいという欲望を利用して、数百年、悪魔によって



心を操られ、裏切った。コレットを追放したのも彼が一枚かんでい  
るそうさ。

そして、その罪のつぐないとして、こうして今回の戦いに参戦する  
運びとなったのだ。

「ところでアリアケ様。コレット様の父上……シャーロット王より。  
伝言がございます」

「そうか。聞こう」

気性の激しい彼女の事だ。激励か何かだろう。

「早く孫がみたい、とのことさす」

「はい？」

どういう意味だ？

「うにゃあ！？！？？」

と、なぜか俺以上に、コレットは顔を真っ赤にして、バタバタと手  
を振り回している。

ドラゴン同志では通じる、一種のコミュニケーションなのかと思っ  
たが、そうではないらしい。

謎だ。

そして、最後に、

「ハス、アンも準備は出来たか？」

「はい。『暁の鈴』を鳴らしてくださいれば、いつでも駆けつけると言いました通り、獣人族200名、すでに準備は整っています！」

暁の鈴。それは犬耳種族の彼ら獣人が本当に信頼する者だけに与えるアイテムであり、その鈴が鳴らされればいかなる場合でもかけつけるというものだ。

俺がオルデンの街で差別されていた彼らを助けた際に、その鈴を譲り受けたのである。そして、今回その鈴を使用し、彼ら獣人たちの戦士を呼び寄せたのだ。彼らは力と素早さのある、実に頼りになる戦力である。

「頼りにしているぞ」

「はい！ 主人に頼りにされるほど嬉しいことはありません！」

「そうだね。みんな、頑張るよ！」

「……………うおおおおおおおおおおおおおおお！ 主人の為に粉骨砕身するぞおおおおお！！！！」「……………」

異様な盛り上がりだった。

俺への信頼が厚過ぎて、士気が異常に高い。

「とんでもない人たらしですね、アリアケ様は……………」

ローレイがポツリと言った。

「いや、さほどのことはしていないんだがな……」

単に悪い領主をぶっ飛ばしただけだ。

「そうですか？　ちなみに、お母様。リズレット様からも援軍が来ています。聖都を助けてもらった借りをちょこつと返済しないと気が済まないそうですよ。ブリギツテ教徒150名が合流しています」

「そうか。彼らの力は先日の悪魔との戦いでよく分かっている。頼りにしているぞ」

俺は集まってくれたブリギツテ教徒たちに、ちよつと冗談めかして肘を曲げて筋肉を盛り上げる仕草を試みせる、が。

「……おおおおおおお！　もう一度英雄と戦えるとはなんと  
いう僥倖！　故郷を救われた恩をここで返すのだ。みんなプロティ  
ン・ポーシオンは持ったかあああああああ！？」

なんだか凄い熱気のはねかえってきた。

「わざとですか、アリアケ様。そういうのって。どうでしょうか？  
教会の次の幹部を狙ってみるといのは？　ほら、パーティーメ  
ンバーに手ごろな少女もいますよ？」

「??????」

俺は理解できないので、とりあえず首を傾げておく。

なお、ローレイはため息をついた。

うーん、なぜだ。

まあ、ともかく、だ。

こうして俺たち人魔同盟軍は、あらゆる種族の協力を得て、強大な軍勢となったのだった。

数は魔族軍には到底足りない。

だが、非常に士気の高い、戦い慣れた軍団であり、おそらく余り戦いの発生していなかった南部戦線の兵士よりも戦える戦闘集団である。

そして、沿道には、王とランド伯爵が並び、俺たちの出陣を言祝ぐ。

同時に、発展したオールテイの町の家々からは、戦勝を祈願する花々が舞い、俺たちの行く末を盛大に祝った。

大変な大歓声を受けながら、俺たち人魔同盟軍。

いや……。

この同盟軍の盟主アリアケが率いる『アリアケ軍』は華々しく出陣したのである。

ここに不死の軍勢を打倒するという希望を一心に人々より受け、アリアケ軍の行軍が開始されたのだった。

143・人魔同盟・盟主アリアケは全種族混合部隊を率い、盛大に見送られ出陣する(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「人魔同盟軍は一体どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかつたら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

144・勇者パーティー、人々の希望として奮戦す

144・勇者パーティー、人々の希望として奮戦す

〈勇者ビビア視点／南部戦線〉

「勇者様！ 敵が来たようです！」

「ああ、報告ご苦労。へへへ、来やがったようだなあ」

俺は聖剣ラングリスを抜き放ち、不死の軍団の襲来に備える。

だが、この戦いはすでに俺たちの勝利と栄光を約束している。

なぜか？

それは、

（くくく。この聖剣ラングリスの属性は『聖』属性。魔族に強力な攻撃力を発揮できるってーわけだあ。不死かなんかしんねーが、元々は魔族ども。ラングリスの敵じゃねー）

だが、もちろん、そんなことはこの南部戦線にいる兵士どもはしらねーだろう。

とすればだあ、

「俺自身の圧倒的勝利を見せつけるチャンスってことじゃねえかあ。きへっへへっへ。アリアケどもノロマにこの戦功を譲る気なんてもったいねえ。この戦いで誤った評価を覆して、グランハイム国王に『やっぱり勇者がナンバーワン！』って言わせて土下座させてやるぜえ、ぐひひひひ！！！」

「ちょっと勇者！ 口に出てるわよ！ そういうのは内心でやって頂戴！」

デリアが俺をたしなめるようにいう。

俺たちの後ろには、この城塞の兵士たちがいるので聞かれるのを気にする仕草をする。

しかし、

「ここでの戦いの戦果や、城塞の兵士たちの評価を出来るだけゲツトする必要があるので。それによって私たちはまた王都で贅沢三昧の生活に戻るんですからねえ」

彼女も唇をニチャリと歪ませていた。

すると、

「そうだよ。慎重に行こうじゃん。でも、不死かなんかしんねーけど、あたしの超強力な魔法で木っ端みじんにしてやれば問題ないっしょ。そしたらさ、ひひひ、また、あたしが王都を歩くだけで、取材を受けたり、サインをねだられたり、貢がれたりする毎日がかえってくるんじゃない」



「ふ、俺はそんな周囲の目など気にはならんがな。だが、うむ、ここでは最高の戦いをする必要があるという意見には同意だ。そして最大の評価を得たうえで王都へ凱旋し、衆目を一身にこの筋肉へ浴びなければならん！ かつての栄光をこの筋肉に再び取り戻さねばなあ」

プララとエルガーもそう言って、唇を大きく歪めたのであった。

「あの皆さん、そう大差なく、口から本音が駄々洩れしていますので、少し控えめにして頂けますか？（誤解は色々ありますが）皆さんが士気を上げていることは確かですので」

「「「「おつとつと」「」「」

テイリスが腰に手を当てて嘆息しながら言う。俺たちは後ろをこっそりと見た。

兵士どもが、俺たちを憧れと尊敬の念を込めて見つめているのが分かった。

（ああ、これだよこれ。一般大衆どもが俺を最上の存在として崇める姿勢。たままないぜ。んん）

俺はその熱い尊敬のまなざしを堪能しようとする。

と、その時である。

「敵が出現します！……！！……！！……！！」

伝令兵が大声で叫んだ。

1キロほど先の森から、まるでウジ虫のように黒い影がはい出てくるのが見えた。

ぞろぞろと1万を超える大群が湧き出てくる。

だが、それは、

「おいでなすつたな。不死（笑）の魔族軍どもよお」

俺は聖剣を天高くかざして、鬨とぎの声を上げる。

「付いてこいお前らあ！ この戦いは勇者ビビア・ハルノアが必ずお前たちを勝利に導いてやるからよお！！！！」

その言葉に……。

「！！！！」  
「！！！！」  
「！！！！」  
「！！！！」

兵士どもの士気もけた違いに上がった。

「ぐひひひひひひひひひひ！！！！ これだよこれえ！ よっしやあ！ 行くぞお、勇者パーティーが一番乗りだああああああああああああああ！！！！」

俺は戦場の主役であることに高揚しつつ、敵陣へと突っ込んだのである。

144・勇者パーティー、人々の希望として奮戦す（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「勇者パーティーは一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



『ゲアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?』

「ファイヤーボール乱れ撃ちいいいいいいいい!!!!」

ちゅんどんどんどんどんどんどんどんどんんん!!!!!!

『アギヤ!?!?!?!?』

デリアとプララの攻撃もかなり効いてる!

無論、俺の活躍が一番かつこよく、イケてるわけだが、その下僕どもが活躍するというのは、俺の評価が上がることでもある。

そう考えて俺は唇を思いつきり歪めて笑う。

と、その時、一匹の魔族が抜け出した。

瀕死でありながらも、俺たち前衛を振り切り、後衛の兵士どもを狙ってるみてえだ。

だが、

「甘いわあああああああああああああああああ!?!?!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!

『ンガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!?!?!?!?』

巨岩とでも評すべき筋肉の塊が、思いつきりその瀕死の魔族へタツクルをかました。

余りの威力に魔族の体は再起不能なほどに痛めつけられ、吹き飛ばされる。不死であろうがもはや立てないことは明白だ！

「エルガー！ ご苦労！」

「うむ！ 勇者も素晴らしい太刀筋だな！」

そのやりとりに、後衛の兵士どもは一斉にワツと歓声と称賛の声を上げる。

「すごい、さすが勇者様たちだ！」

「不死と言われた魔族たちをこうもあっさりと退けて行くなんて！」

「仲間との連携も完璧だ。これが勇者パーティーの力なんだな！」

やれやれ。

俺は嘆息し、たしなめるように告げる。

「騒ぐな、この程度のこと。俺たちには出来て当たり前だ。完璧な戦術と冷静な判断力。そして仲間との連携。これらが出来て初めて『戦い』と呼べるものになる。ま、俺たちの真の意味での『戦い』、歴史書に残るこの戦いを目にすることを誇りに思い、精進するとい

「は、はい！ 勇者様！！！！！」







全身に走る痛みには堪えかねて、悲鳴と言つ名の絶叫を戦場に木霊こたまさせたのであつた。

「ちよ、ちよつと、勇者、どうなってるのよ!？」

「うわっ！ 勇者めっちゃ血まみれの泥まみれ！ ダセーじゃん！  
何やってんだよ勇者！」

「大方、倒したつもりになつていて、斬つてなかつた敵がいたんだろ。まったく間抜けな奴だ！」

「う、うるせえぞ!!！」

俺は体中泥まみれになりながらも、恥辱に顔を真っ赤にして立ち上がる。

そして、

「てめーらこそ、何してやがる！ 俺に尽くすためにお前らはいらんだろーが！ 敵が俺を攻撃しようとしてきたら、命を懸けて守るのがお前ら肉壁の役目だろつがああああ!!！」

俺は正当な主張を怒声とともに放つ。

すると、

「あ、あれ？」

「ゆ、勇者様？」

「さっきまで、冷静な精神とか……。阿吽の呼吸のパーティーの連携とおっしゃっていたような……」

俺たちを見ていた兵士どもが、なぜか静まり返り、何かボソボソと言い始める。

ち、ちい！

「あ、は、ははは。なーんてな。今のはちょっと油断しただけだ。あ、慌てる必要はねえ！ 言ってるだろう。俺の聖剣ラングリスは魔族どもを一掃する力を持つてる！ たまたま、運よく俺の剣を潜り抜けた奴が俺に一撃を入れただけで、もうこんなことは……！」

しかし、その言葉の最中に、

「どつやら、そう簡単にはいかないようですよ！」

「……は？」

俺はそのティリスの言葉に混乱する。

何言ってるやがる！とティリスを怒鳴りつけてやるうと一瞬考えたが、目の前の光景が信じられず、ただただ啞然とする他なかった。

俺は混乱していた。

いや、俺だけではない。

「な、なんなんですの……。わたくしの防御無効で体内の組織はもはや機能不全のはず」

「そうだよ、あたしのファイヤーボールを何発も直撃させて再起不能にしてやったはずなのに……。こんなのズルじゃん!!」

「俺の筋肉で粉々にしてやったはずが……。立ち上がれるはずが……!!」

パーティーメンバー全員が精神の均衡を崩し、混乱と恐怖に包まれていた。

それも仕方ないだろう。

なぜなら、目の前で先ほど倒したはずの魔族どもが、一匹残らず復活しているのだから。

ある者は頭をその場でくつつけ、ある者は骨が砕かれた状態で前へ前へと進む。ファイヤーボールの火炎に体を燃やされながらも進む魔族すらいるのだ。

「お、おい！ デリア！ てめえパーティーの参謀役だろうが！  
何かいい案を出せや！」

「え、ええ！ そうですわね！ ああ、思いつきました、まずは――」

旦那プララとエルガー！ あなたたちが前衛に出て時間を稼いで頂戴。  
私は一旦勇者を治療して、すぐに戦線に復帰しますわ」

「ざけんじゃねーよ！ あんたまたあたしを置いて逃げる気だろ！  
あの洞窟の時みたいによ！ は、はは！ ははははは！ 今度は  
騙されねーぞ！ 騙されねえ！ 騙されるくらいだったら、あんた  
らから先に焼いてやんよおおおおおお！」

「やめる！ プララ！ この馬鹿が！ お前たちは冷静さを失っ  
ている！ まずは俺が兵士たちの士気を維持しつつ後退する！ 大丈  
夫だ、お前たちなら戦線を維持することは可能だ！」

「エルガー！！！！！！ てめえ盾役だろうが！！！！！ こんな時に  
役に立たねえならクビだ！ クビイイイイ！！！」

「はあ！？ 何を言うか！ 俺は建設的意見を述べているだけだ！  
俺は勇者パーティーだけでなく、『国の盾』なのだからなあ。そ  
のつらい役割をまっとうするためにこうして苦渋の決断をしている  
だけだ！」

「あなた最低のクズですわ！ エルガー！」

「さわんじゃねーよ！ キモイ！」

「うるさい！ ほら前につ……！！」

ギャーギャーギャーギャーギャーギャーギャーギャーギャーギャー  
ギャーギャー……！！

俺たち勇者パーティーたちの絶叫が戦場に木霊する。

「お、おい。あの勇者パーティー。戦場で仲間割れをさせたぞっ……！」

「き、絆とか、連携どころか、即効で仲間を見捨てようとするなんてっ……！ た、ただのクズでしかないじゃなかつ……！」

「しかも、冷静さどころか、常識さえ持ち合わせていない。あんなのが、この国の勇者パーティーだなんて。う、嘘だろう……！」

「その上、聖剣が役立つだなんて。まったく戦術的にも役立つだ」

「……何しに来たんだこいつらはっ……！」

何やら兵士どもが俺たちに対して何か言っているが、もはやそんな声は俺の耳には届かない。

今は俺という人類の希望がいかに生き伸びるかが大事だ。

そのために、いかなる犠牲を払うことも許されるのは自明の理というものだろう。

だが、そんな正論を怒声と共に吐き出していたのだが、

「皆さん！ 何をやっているんですか！ 戦闘中ですよ！ せめて前を向いてください！」

ティリスの悲鳴が耳朶をうった。

だが、

「ひっ」

「あっ」

「げっ」

「ぎっ」

俺たち四人は喉から変な悲鳴じみた、豚のような音を上げるのが関の山だった。

目の前に迫っていたのはオーガ・デビル。

巨躯を躍動させ、その得物たる大鎌を俺たちに対して横なぎに振るったのだ。

それはもはや、俺たちの可視速度を超え、絶命を確信させるに十分なものであった。

そして。

俺たち勇者パーティーの命は。

こうして南部戦線で華々しく散って……。

「なーにを勝手にエピソードしているのだ、勇者ども！」

「はひ？」

俺はこれまでの生涯で一番間抜けな声を上げることになった。

オーガ・デビルの鎌を、あろうことか俺たちの鼻先で、指先一つでとめていたのは。

あろうことが。

「勇者を倒すのは魔王。魔王を倒すのは勇者なのだ。これくらい常識はわきまえておくのだ。賢者アリアケの出来ない弟子、勇者ビビア」

この勇者を助けたのは、宿敵であるはずの魔王リスキス・エルゲイジメントだったのである。

俺は命が助かったとホッとすると同時に、

「お、おい、あれはもしかして……」

「あ、ああ。魔王だ。手配書で見たことがある」

「あろうことか、勇者が魔王に助けられたってのか。あのクソ勇者は……。どこまで人類の恥をさらすんだ」

そんな声を兵士たちから聞かされて、改めて屈辱と恥辱で頭を思わずかきむしり、顔を真っ赤にして悔しかったのである。



145・勇者パーティー仲間割れをする(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「魔王は一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



なあ、お前ら」

「も、もちろんですわ！（せっかく評価が上がりかけていたのに台無しにするわけには！）」

「よ、余裕に決まってるっしょ！（またあたしをチャホヤする未来をゲットしなくちゃじゃん！）」

「お、俺の鋼の体ならば、鎌の方が砕け散っていた可能性は高いだろうな！（また俺の筋肉が一番だと王都で証明せねばならん！）」

デリアたちも、やはり俺と同意見のようだ。

そう。

そうだよ。

「俺たち英雄たる勇者パーティーが魔族どもなんかに負けるはずがあるわけ……！！」

「ちょっと！ 他の魔族の攻撃が来ます！ 危ないです！！」

「『ひいひいひいひいひい！ 嫌だ！ 死にたくないああああああああああ！！！！！！！！！！』」

俺がかつこよく宣言をぶちかまそうとしたところで、またしてもテイルスの警告の声が響く。

さきほど命を奪われそうになったトラウマのせいで、俺たち勇者パーティー四人は思わずしょんべんをちびりながら頭を抱えて、その



「あ、ああ。勇者だか何だか知らないが、あんなクソ野郎たちよりよほど強い……」

「あれが魔族の頂点。魔族の王の力……。それに決して強いだけじゃない。慈悲深さすら持ち合わせている」

「敵ながら天晴と言わざるを得ない。さすが魔王、あれが俺たちが倒さないといけない敵なのか。それに比べて……」

「ああ、それに比べて、人類の切り札があんなクソ勇者だなんて……絶望しかないじゃないか……」

「一度どころか、二度も助けられて……」

クソ兵士どもが、魔王をあたかも称賛し、逆に俺たちをクソ呼ばわりしているのが聞こえて来た。

一気に人間どもの士気がゼロになったのが分かる。

（くそが！ くそが！ くそが！ くそが！ あのクソ兵士どもを一人残らずボコってやりてえ）

だが、事実として、

「二度も助けられるなんて！ くそ、くそ、じぐしょおおおおお  
おおおおおおおおお！！！！」

またしても魔王に命を救われた。

しかも、その上、まだ残る恐怖で腰を抜かして立てない俺たちが、

今何を言っても説得力がないことだけは分かった。

クソ兵士どもの俺たちへの罵倒を聞き続けたいといけない状況と屈辱。

何より魔王に助けられてしょんべんをちびっている俺たちは、この恥辱の状況に顔を真っ赤にし、歯ぎしりをしながら悔しがることしかできなかったのである。

とはいえ、

「魔族軍の第1波としてはこれで終わりなのだ？ えーっと、確かテイリス？ だったのだ？」

「あつ、はいそうですよ。どうやら向こうもあなたの登場により、一旦兵を引いたようですな」

「勇者はしばらく再起不能だと思うのだ。心が折れた戦士は毛虫ほども役には立たぬのだ。なので、一旦後ろの救護施設に連れて行って休ませるとよいのだ」

「お気遣い感謝します、魔王さん」

魔王に労いたわられる。

後ろで聞いていた兵士たちが、もはや憐れみの目で、魔王に労いたわられる俺たちを見下ろしていた。

そのことについても、俺は悔しさの余り血が滴り落ちるほどに更に歯噛みする。

だが、魔王は少し怪訝な表情を浮かべて、ティリスに言葉をかけた。

「なあティリス。お前、あたしとどこかで会ったことはないの？」

「はい？ どういう意味ですか？ オールティ村では時折お会いしていたと思いますが……」

「うーん、違うのだ。もっともっと。昔昔なのだ。あていしがまだ魔王ではなかった頃、どこかで……」

だが、そんな二人の会話の最中に、それは起こったのである。

『どういっつもりだ？ 魔王リスキス・エルゲージメントよ？』

どこからともなく、不気味な、しわがれ声が戦場に響いたのだった。



146・勇者パーティー、魔王に助けられる(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

-----

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「魔王と勇者パーティーは一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

147・邪神 VS 魔王 その1

147・邪神 VS 魔王 その1

(前回の続きです)

〈魔王リスキス視点〉

『どういづつもりだ？ 魔王リスキス・エルゲージメントよ？』

そのしわがれた声はどこからともなく聞こえて来る。

大方、異次元に潜んでいるのだ。

でも、あていしは怒っているので、そんなことはどうでもいいのだ。

「どうしたもこうしたも無いのだ、邪神様」

あていしはムカムカしながら言う。

「あていしの部下どもを不死にしたな？」

唇を噛んで続きを言う。

「一度殺して操り人形にしたな？」



しわがれた声で、

『わーっはっはっはっは！ 何を言い出すかと思えば！ 貴様などわしの駒に過ぎぬ。そして分からぬか』

姿は見えないが、ニヤリと邪神が嗤うのが分かった。

『貴様ら魔族も含め、この星に住む全ての命を消し去ることが我の目的よ！ この星辰せいしんの力を取り込み、わしが更に高次元体へ至るためのな！ そのためにお前たちを利用し、もつとも邪魔な人類を抹殺した後は、今度はお前たち魔族すらも消し去るつもりだったのだ。ゆえに今回のことは、単に順番をはやめただけよ』

そう言いながら、傀儡かいらいごときが吼えるなど、邪神は嘲あざわらった。

だけど、あていしも負けじと、魔王らしく醜悪に笑った。

「へえ、邪神様。なにゆえにスケジュールを早めたのだ？」

『……なに？』

「1000年もかけた計画が、どこの賢者にでも邪魔されたからなのだ？」

『貴様……』

邪神の怒気が伝わってくる。

でもあていしは言葉を緩めない。



バキバキバキバキバキバキ!!!

真名に呼応するかのように、大質量の神性と悪意が空間を破砕させながら、目の前に出現したのだ。

(続きます)

147・邪神 VS 魔王 その1（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「魔王ちゃんは一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！



ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



やれやれなのだ。

さて、

「自己紹介の時間など与えぬのだぞ、邪神！ あていしは魔王だから、こんな外道も許されるのだ！」

「ふむ、ではこちらからも。『テイスト概念歪曲』」

「ぐぎっ！？！？？」

あていしどころか、一帯の空間をまるごと圧縮されるような重圧がかかる！

めきめきと空間自体が歪曲し、風景が実際に歪む。ほとんど天変地異のごとき力。

ぶしゃああああああああああああ！

当然、空間ごと圧縮してねじ切られようとするあていしの体からは大量に出血が生じた！

「その程度か？」

「魔王ひとの心配をする余裕があると思うのだ？ それは致命的油断なのだ、宇宙癌ニクス・タルタロス！」

あていしは大量に出血した血液を出来るだけ圧縮して、敵の目前へ放った。

「我が血肉一片は魔族一万の魔力と同等！ それを圧縮すれば空間に穴くらい空けてやれるのだ！ お前こそ、特異な空間の彼方に吸い込まれて消失してしまえばいいのだ！ 深層生成アビス・ノウア」

「ふむ？」

ゴッ

！！！！！！

無音。

すべての物質。音すらも吸い込む空間の穴が、周囲一帯のすべてを飲み込んでいく。

さきほど生じた亀裂どころではない。邪神の立つ場所を中心に綺麗な球体のような断面が大地にえぐられていた。

そこには邪神の姿はない。あえなくその穴へ飲み込まれて行ったのだ。

そして、その穴は徐々にふさがり、やがて完全になくなった。

「どつだー！」

「ふむ、なかなかよく出来た技だが……」

「！？」

あていしは驚く。

その声は、先ほどあていしが生成した、今は何も無い深層生成アビス・ノウアから

聞こえたのだ。

だが、

バン！

「!？」

まるで乱暴にドアをノックするような音。

だが、まるでこの世界そのものを震わせるような衝撃が、身体を、魂を、震わせた。

バン！ バン！ バキ！

「まさかっ……!!」

あていしは身構える。

「戻ってくるのか!? 空間を破壊して！ 捻じ曲げて！ こじあけて」

「無論だとも。こんな風に」

バキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!

「!？」

空間に大きなヒビが入る。そのヒビの中心には、邪神の灰色の手が見えた。



「これなら、どうだ！　なのだ！　凍って、身動き一つ取れないはずなのだ！」

「ふむ、そうか？　せいぜい宇宙よりもやや寒いくらいではないかのう」

「なに！？　まだ！？」

「しょせん齡<sup>よわい</sup>数百の小娘よ……」

完全に氷結されたはずの手が、何事もなかったかのように氷を破壊しながらぬるりと動く。

それと同時に、

「星々をわたり、精気を喰らい、滅ぼし尽くしては漂流する宇宙最強たる我を舐めるでない」

「！？？」

あていしは離れようとする。

だけど、

「お主も一度、次元の割れ目にその身を持っていかれるが良い」

「があああああああああああ！？！？！？！？」

ありえないほど広域の空間が、まるで網の目のように寸断される。

それは空間そのものが、邪神の手によってバラバラにされたために、  
防御など絶対に不可能！

「はあ……はあ……」

「ほう、確かに手足どころか首も落としたはずだが、生きているか？」

「死んだのだ。だけど、ガツツで死なないように耐えたのだ！」

「ふむ。瞬間的な死であれば無効化するスキルか」

「はあ……、はあ……、お前こそ、魔王を、なめるなよ、なのだ。  
油断しているとお前、絶対後悔することになるのだ」

その言葉に、邪神は淡々と口を開く。

「おまこそ先ほどから勘違いしていると思うがな」

「なに？」

あていしは訝し気な表情を浮かべた。

「僕はまだ力のほんの数パーセントしか出しておらん」

「なっ……」

あていしの驚く声に、邪神はやはり声のトーンを変えずに続けた。



「それに、こづいづのは油断とは言わぬ。こづいづのはな、小娘  
巖いしかに告げる。

「『余裕』というのだ」

その瞬間、空より轟音が鳴り響いた。

あていしはそれを見上げ、

「あ、あはは。これはちょっと反則なのだ」

さすがに苦笑を浮かべてしまった。

なぜなら、

「驚くほどのことではあるまい。我は星を滅ぼし支配するもの。な  
らば」

天を仰ぎながら言った。

「小星の一つや二つ、降らせようぞ」

轟音とともに、かつて邪神が破壊した星々の極大のかけらが、この  
地表へと降り注ぐ。

かつてないほどの熱量が、星の地表を全て焼き払うのだった。

148・邪神 VS 魔王 その2（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「魔王ちゃんは一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

149・邪神VS星の女神イシス・イミセリノス（欠損状態）

149・邪神VS星の女神イシス・イミセリノス（欠損状態）

（前回の続きです）

「あ、あれ？ なんともないのだ？」

あていしは降り注ぐ隕石に押しつぶされ、その衝撃により生じた熱量によって完全に概念消失までもっていかれたと思ったのだ。

けど、無傷。

痛すぎて、痛みを覚えない、とかではなくて、本当に無傷だったのだ。

しかも、周囲を見回しても、あれだけの広範囲の反則級の術を使用されたにも関わらず、大地は健在で焼き尽くされてもいない。はるか後方に怯えたようにしている勇者どももシヨンベンくらいちびつていそうだけど（さすがにそれはないか）、ちゃんと生きているのだ。

あいつらが生きているということは、邪神の攻撃は完璧に防がれたということになるのだ。

そして、それをやったのは、

「ティリス？」

その少女は当たり前のように、あていしの前に立ち、邪神を見て微笑んでいた。

勇者パーティーの一員であるはずの、ただの後衛術士であるはずの少女だったはずなのだ。

なのに、

「どうしてという顔をされていますが、魔王さん」

こちらに半分だけ顔を向けて言った。

「私の<sup>大地</sup>お肌にあんな隕石などを落とされては、さすがにお肌<sup>いた</sup>が傷みます。それはそれは困ったことになるでしょう？」

「お肌？」

大地が、自分の肌。

ああ、ということは、この少女は。

いや、あなたは、

「この星の神様……なのだ？」

「はい」

少女は当然のように頷き、

「テイリス改め、星の女神イシス・イミセリノス、これよりあなたがた我が仔たちへ参戦し、あの宇宙癌を打倒することを誓いましょう」

そう高らかに宣言したのだった。

「なるほど、まさか勇者パーティーの中に紛れ込んでいるとは」

攻撃を防がれたにも関わらず、邪神は意にも介していないようだ。むしろ、余裕だ。

邪悪に唇を歪める。

「1000年前、儂が飛来してとりついたとき、抵抗した貴様につけた傷は、まだ癒えていない。そんな貴様が出てきたところで、もはや何の足しにもならぬ。時間の無駄というものだ」

「そうですか？ 何事もやってみないといけませんよ。邪神ニユクス。それに私の仔たちはとても頼りになりますので、油断しないことです。まあ、一人きりのあなたには理解できないでしょうが」

「……………くだらぬ」

バリバリバリ！！！！

二人の。

神と神の間に魔力の渦が生じて弾ける。

存在だけで、空間をきしませているのだ。

そして、次の瞬間。

「深淵なる重さエルクシテイス・をあなたにヴァリテイタス」

ボコッ！

「むっつ！？」

テイリス。

いや、女神イシスが魔法を使った瞬間、邪神が大地へと押し付けられ、初めて膝をつく！

同時に、大地がその重力に耐えきれずに、ベコリとへこんだ。

半径一キロ？ 十キロ？ 火山口のような広大な溝が形成される！

凄まじい、これが神様の力なのだ！





まさに神の領域なのだ。

けど、

「ふむ、認めよう。これを受けて立っていられる存在はこの世界ではおるまい」

邪神は悠々とした様子で言った。

「儂を除いてはな」

そう言うのと同時に、

「ステイラ・マンティイコラ  
星を喰らう」

邪神は固有スキルを発動させたのだった。

（続きます）

149・邪神VS星の女神イシス・イミセリノス（欠損状態）  
（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「イシスは一体どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

150・人類の盟主アリアケ、参戦す

150・人類の盟主アリアケ、参戦す

(前回の続きです)

「ステイラ・マンティコラ  
星を喰らう」

邪神の呟きとともに、今まで奴を押さえつけていた『深淵なる重エルクシテイ  
ス・ヴァリテイタス』が消失していく。

いや、あれはもしかして、

「あれが厄介なんですよ。相性が最悪です」

「まさか、あれは」

「ですね。食われています。私の精一杯のなけなしの魔力だったのですが、はあ」

「ちょっと、イシス様、精一杯って!？ まだ始まったところなの  
だ!？」

あていしは、女神様の弱気な発言に驚く。

けど、



それに触れた瞬間に分かった。

ああ、これは絶望の顕現なのだ。

この宇宙の癌に目をつけられた瞬間から、この惑星の生命は、この邪神の単なる餌へと堕ちたのだ。

あていしと、そしてイシス様は、その影へと飲み込まれると、その奥へ無限に伸びる胃の腑への空洞を、まるで自由落下するかのよう  
に堕ちて行ったのだ。

「ああ、こんな奴、倒せるわけ、ないのだ。絶望というやつなのだ」

「あら、諦めが早いですね、魔王さんは」

と、こんな絶望的な状況にも関わらず、イシス様は微笑みさえ浮かべていた。

そして、

「それに、こういうのは絶望とは言いません」

朗らかに、無限に落下する中ですら、腰に手を当てて、

「こういうのは計算通り、というのです」

その瞬間、

バチ！ バチバチバチバチ！ バチイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイ！……！！

無限の空洞が歪み始めたかと思うと、まるで引き裂かれるかのように、消失したのだった。

あていしたちはいつの間にか、さっきまで立っていた場所に戻っている。

「こ、これは……」

あていしは何が起こったのか分からずに、周囲を見回す。

だけど、そんなことはする必要はなかった。

「いやー、10年ぶりの再会ですね。うふふ、お姉さんが見込んだ通り、立派な男の子になりましたね」

女神のお気楽な調子の声とともに、

「なぜだ？ なぜ貴様ごときに、僕の固有スキルを無効化できる。なぜっ………!!」

疑念と、そして憎しみの込もった邪神の声が響いた。

それだけで、あていしは誰が来てくれたのかを悟る。

ぞっ。

靴を鳴らしながら、その賢者はあていしたちの前に立った。

「やれやれ」

だけど、そこに気負った様子はない。

あていしと戦った時と同じ、少し気の抜けた、けども人を安心させる調子で、

「今度は邪神退治ときたか。さすがにお前を倒したらゆっくりさせてもらっぞ?」

そう圧倒的存在である邪神に対して、勝利を確信した様子で。

その男。

大賢者アリアケ・ミハマは言い放ったのだ!



150・人類の盟主アリアケ、参戦す（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「イシスは一体どうなるのっ……っ！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



セラ。

彼女の号令で、エルフ軍から大量の弓が発射される。無論、不死の軍団に致命傷を負わせることは出来ない。

が、

「足止めして一か所に集められれば十分です。さあ、喰らいなさい  
!！」

セラが風魔法を詠唱する。

「荒れ狂え風よストーム・テンペスト!！」

『ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ!?!?!?!』

突如巻き起こる強力な竜巻は、森林ごと根こそぎ邪神軍を天高く舞い上げ瓦解させていく。

しかも、その竜巻は一つや二つではない。大地をなめるようにその死の竜巻は縦横に走り、大地事根こそぎ邪神軍を葬って行った。

「エ、エルフ軍!？」

「どつして、こんなところに……」

南部方面の兵士たちが驚きと、信じられないといった表情で眩く。

すると、セラは胸を張って、



十聖の獣フェンリル。青白い光沢をまとう獣の姿へと変化すると、巨大な口腔を開いた。

バチバチと帯電するかのような、高密度の魔力が凝集する。そして、

「ドンナ・ゴッ雷神の怒り」

カッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

躲す余裕などありようもない。

神代の雷に触れた死者の軍団は、神聖を帯びる雷撃によって一瞬にして蒸発する。その空いた空隙に、素早く獰猛な獣人の戦士たちが更に攻撃を仕掛けて、相手の傷口を広げていった。

その、少し離れた場所では。

「さすが不死の軍勢なのじゃ！ 殴っても殴っても起き上がってくるのじゃ！」

「姫様。ドラゴンになって焼き尽くさないの?」

「このバカちゃんフレッド！ それじゃと味方まで巻き込んでしまうじゃろ!? 必要な力を必要なだけ使えばそれでいいのじゃ！」

「お、おお！ さすが姫様です！ このフレッド……」

「それに、じゃ」

コレットは悪そうな笑みを浮かべると、

「人の姿で戦っていれば、まだまだ余裕がある、ってアピールになるのじゃろ？ そしたら、後で旦那様に呼んでもらえるかもしれないじゃ、きゃっ！」

「……さようですか」

まあ、大丈夫そうだな。

さて、最後に。縦横無尽に戦場を忙しく駆け回る部隊が一つ。

「はい、エルフ軍の方の中で、けがをされた方は並んで下さいね」

「お、お願いします、大聖女アリシア様」

「あのですね、いちおう私もいるんですが。中級回復術士もお忘れなく」

「す、すみません、ローレイ様」

「ローレイちゃん、けが人に『庄』をかけてはいけませんよ」

「おっと、うっかり。失礼しました」

「ではでは。エリア・ヒール！」

「軽傷の方はこちらへ。はい、ヒール。はい、次の方どうぞ」

支援部隊であるアリシア率いるブリギッテ教団が次々にけが人を回復させていく。

と、その時である。

「あつ！？ 危ない、聖女様！！！！」

セラたちエルフ軍の攻撃をかいくぐって迫って来た不死の軍団の一部がアリシアたちに襲い掛かったのである。

しかし、

「筋肉の力を思い知れ！ ブリギッテ・マッスル・パーンチ！」

「マッスル・チョーップ！」

「ぐぎゃ ああああああああああああ！?!?!?!」

ブリギッテ教団の屈強なマッスルたちが、その行く手を見事に阻んだ。

そう、アリシア率いる軍団の恐ろしいのは、ただの支援部隊ではなく、威力支援が出来ることだ。つまり相手を撲滅しながら味方を回復してゆくのである。

「大丈夫でしたか、聖女様！」



「ええ、もちろんですとも。それにですね」

アリシアは慈愛に満ちた微笑みを浮かべた後、助けてくれたマッスルたちに近づくと、そのまま、

「聖女さんパンチ!!!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!!?!?!?!」

誰よりも強烈な破裂音を響かせて、敵を吹き飛ばした。

「皆さんも油断はいけませんよ。相手は不死ですからね!。もうあの邪神に殺されてから時間が経過しすぎていて蘇らせることもできません。完全なる死者の軍団なのですから」

「は、はい!。さすが聖女様です!。我々よりよほどマッスルですね!」

「あははは、ぶっ飛ばしますよ?。アリアケさんに聞かれてたらどうするんですか?」

「ひっ!?!」

俺はそこまでで遠視スキルを切った。

勘の良い彼女が気づく前にスキルを切れていれば良いのだが……。

俺はそんな風にブリギッテ教信者たちの幸運を祈る。

さて。

「まあ、とりあえず不死の軍団とやらは、俺の仲間たちでなんとかなりそうだな。では……」

俺は目の前にたたずむ存在を見つめ、淡々と告げる。

「俺はお前の相手をすることにしよう。邪神。シングルレッタ・ステラ・キャンサー死を謳う宇宙癌」  
「クス・タルタロス」

その言葉に、邪神はこの世の憎しみをかき集めたかのごとき表情を浮かべたのだった。

151・会戦（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 152・決戦

### 152・決戦

(前回の続きです)

「先ほどは一体どういった手品をしたのか知らんが……」

邪神は憎しみに満ちた表情から、一転して余裕の笑みを浮かべる。

「まさか、あの程度が儂の本気だとは思ってはおらぬだろうなあ、アリアケよ」

そう言つて醜悪な表情を浮かべる。

だが、

「能書きはいい。年寄りの話は最後まで聞くタイプの俺だが……」

若干、嘆息しつつ肩をすくめ、

「お前の話はオールティ村の爺様たちより長そつだ。しかも小悪党と来ている。この俺が耳を貸してやる道理もあるまい」

そう断言した。

すると、

「いい気になるなよ、人間風情が!!!」

たちまち、元の怒髪天を衝くような怒気に満ちた表情になる。

「全く、これだからちゃんと年を重ねられなかった年寄りには嫌なんだ。すぐに自分を否定されたと思ってキレがちになる。なんでもミルクを飲むと性格が丸くなるらしいぞ？　しょうもない世界征服などにうつつを抜かしているから、そういうしょうもない人格になる」

「おのれ！　もう許さぬ！」

俺が性格矯正の必要性を説いている最中だったが、

「邪神は人の話を聞く忍耐力もないのか？」

俺は呆れるように若干苦笑を浮かべる。そんな俺を見て、邪神はなぜか更に猛ったようで、

「喰らえ！　先ほどの10000倍の強さの星を喰らうじやステイラ・マンティコアあああああ

先ほど、女神や魔王たちにしたときの黒いアメーバのような形状へと変化すると、一気に俺を包み込み、取り込まんとする。

しかし、

「神殺し 付与」

「必中 付与」

「 防御力ダウン 付与……。ふむ、これはさすがに無効化されたか？ 」

俺はすぐに3つのスキルを使用する。

だが、

「はーっはっははっは!!! 無駄じゃ無駄じゃ！ いかなるスキルで神たる儂にダメージを与えられるとしても、それは0が1になる程度！ 毛ほどのダメージを儂に与えてっ……！」

邪神は哄笑を戦場に響かせながら俺を飲み込んだ！

「なんとする！ 死して後悔せよ！ 矮小なる者よ!!!!!!」

絶叫と共に、大地はえぐれ、その絶叫と風圧は各方面で戦う全員に木霊した。

と、同時に、

「ふ、そうだな」

静かな声。

それは、邪神の放った耳をつんざくような騒音ではなく、静かに震える凜とした声。

だが、その小さな声は、戦場の誰もが聞いたであろう。

そして、その声はまさに、

「アー君！」

「旦那様！」

「さすが主様！」

賢者パーティーの面々が俺の名を呼ぶ。そう、

「oooooooooooo大賢者アリアケ様」oooooooo

兵士たちすらも含む、人々の希望の光として。

バチイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイ！！！！！！

先ほどと同じ。

1000倍の威力であろうが何であろうが、俺にはきかない。

アメーバのごとき黒い影は、俺を飲み込むのと同時に、雲散霧消する。

そして、目の前には絶望と驚愕、憎悪と混乱をないませにした、見たこともないような表情の邪神が立っていた。



「な、なぜだ……」

思わず邪神は本音を叫んでしまう。

「なぜこれほど強いのだ!? 邪神のわしが負けるはずがない!?  
そ、それに、それになぜなのだ!?!?!」

邪神は「なぜだ」「なぜだ」と繰り返す。

「我が片目が見る未来がなぜ暗黒になっておる! 儂は勝利し、この星を吸収する未来がさつきまでは見えていたはずだ! なのに、アリアケごとき! 人間一人が現れた程度で、どうして見えなくなつた!」

焦燥にかられた声が戦場に響く。

戦場の中心たる俺に耳目が集中しているのが分かった。

注目されるのは好みではない。

俺はさつさとネタ晴らしをする。

なに、簡単なことだ。

「なぜも何もあるまい」

俺は手に持つ『賢者の杖』にかけていた『イリュージョン幻覚』のスキルを解く。

「は？」

「武器を隠すなど基本中の基本だぞ、邪神か何か知らないが、人間をなめすぎだな」

啞然とする邪神を前に俺は飄々という。

だが、

はるか後方。

遠くからも同じように、

「あああああああああああ！?!?!?!?!」

けたたましい絶叫が聞こえて来た。

それは勇者ビビアのものだ。

「すまないな、ビビア」

俺は微笑むと、両手で剣を構えながら言った。

「少しお前の聖剣を借りているぞ」

スキル『聖剣装備』とスキル『神殺し』。

この二つの通常スキルの併用していたのだ。だからこそ、ダメージを与えることなど造作もない。



びりびりびりびり！

邪神の放出する憎しみが帯電するかのごとくマナを震わせ、戦場の大地はまさに鳴動する。

邪神はそれほどの憎悪と、そして、何より焦燥を俺に感じたのだっ  
た。

だが、邪神の姿は次の瞬間、フツと消失する。

無論、それは、

「やれやれ、逃げるだけの理性は残していたか」

邪神との最終決戦の狼煙のろしに他ならないのだった。

152・決戦（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 153 千年の星の歴史

153 千年の星の歴史

（アリアケ視点）

「さて、皆さんお集まりですね。ではこれより作戦会議を始めましょう」

星の女神イシスの声が凜と響いた。

と、同時に俺に始めますよと、アイコンタクトを取ってくる。

（別に俺は会議の幹事でも何でもないんだがなあ）

俺は嘆息する。

すると、

「おいおい、待てよ、えーっと、女神さんとやらよう。俺の聖剣のおかげで、アリアケの野郎が辛うじて邪神を撃退したんじゃないのかよ！？ ま、まあ俺がやってりゃ、逃がしたりなんてしなかったらうがなー！」

勇者が甲高い声で叫んだ。

この部屋には、南部戦線の基地の広々とした会議室に、主要なメンバーが勢ぞろいしている。

彼の言葉に俺は同意する。

「その通りだ。あの程度のことは前哨戦に過ぎない。次が本当の決戦になるだろう。俺も少し気合を入れた方がいいかもしれんな」

そう言うと、なぜかビビアはギョツとした表情になり、

「え？ あれが前哨戦？ は？ まじ？ え？ え？」

となぜか顔面蒼白になり、まるで逃げ出せないかと、出口の方をちらちらと見るようにした。

しかし、出口には、出入りを制限するためにローレライが番をしている。

彼女がなぜか絶対零度の視線を勇者に向けると、彼はばつの悪そうな表情でぎりぎり歯噛みした。

ふつむ。どうしたのだろうか？

「あの程度の戦いに怖気づいた可能性はないし……」

俺は首を傾げる。

「その可能性を真っ先に排除するあたりが、お優しい先生らしいですよねえ」



なぜかラツカライが好ましいものを見るような微笑みを浮かべていた。やはりよく分からない。

まあ、それはともかく。

「ここに集まってもらったのは、邪神との戦いの前に準備と情報共有をするためだ」

「準備は分かるが、情報共有ってなんですか、アリアケさん？」

アリシアの言葉に、イシスが頷いた。

「ちよつと神話から現代までのお話になりますので、退屈かもしれませんが、お耳を拝借しますね。紙芝居を作っていたんですが、ちよつとだけ早めに最終決戦が来てしまつて完成しなかったことが悔やまれます」

「他にもつとやることがあったのではないのかのう」

フエンリルが呆れように呟くが、さすが星の女神は貫録がある。動じない。

さてさて、と話を始めた。

「まず、この星は生き物だという風に思ってください。本当は少し違うのですが、そう思ってもらったほうが早いでしょう。そして、あの邪神というのは、星という生き物の生き血を吸う寄生生物だと思ってもらえれば良いです」

「生き血というのは、何をさすのじゃ？」

コレットの質問に、

「マナ。いわゆる星の持つ生命エネルギーそのものです。これを損取しつくして星が死を迎えると、かの邪神ニクスは別の標的の星を求めて再び宇宙を漂流します。宇宙癌などとも言われるゆえんですね」

コレットが納得したように頷くと、イシスは話を続けた。

「ではでは、神話を話しますね。神様から神話を聞けるチャンス何てそうありませんよ」

「ちなみに他の星の女神様のテンションもそんな感じなんでしょうか？」

「うーん、他の星の女神様はもつと寡黙だったりしますね。もつと人生エンジョイすべきだと個人的には思っていますけどねえ」

「すみません、話の腰を折りました。お願いですので続けてください」

「はいはい。まずアリアケ君ですが、私ことイシス・イミセリノスの欠損部分を埋め込み、邪神の攻めてきた当時から数えて、こつそり1000年後にタイムワープさせた神話時代の人間と言うことになります。まず、ここまではいいですか？」

その言葉に、

「「「「「」」」」」」………は？「「「「「」」」」」」

全員の声がはもるのだった。

「そ、そうだったのか！？ 旦那様！？」

「いや、初めて聞いたが？」

「その割には落ち着いているのじゃ！？！？？！」

「まあ、そうかもしれないが……。しかし冷静に考えると、星の女神とやらが当たり前のように眼前にいるんだから、俺が何者であっても驚くに値せん。両親だって存在しなかったしな」

「あつ！ そう言えば、聖都セプテノでも旦那様の両親だけはなぜか見かけなかったのじゃ。あれは………」

「そもそもいない。まあ、千年前にはいたんだろうが、さすがに生きてはないだろうな。と言っても、俺は幼かったから、覚えてはいないが………」

「アリアケ君の両親は、邪神がせめて来た時。つまり、陸地の半分が海面に水没して、人口の3割が失われ時に死んでいます」

「じ、人口の3割じゃと！？」

「そうです。ちなみに、私自身も不意をつかれまして死にかけました。その時に私の欠損部分<sup>イミセリノス</sup>を埋め込み、1000年後へ時空転移させ、死から救ったのが、まだ幼かったアリアケ君です。アリアケ君はすべてのスキルが使えるでしょう？」

「そうだな。これはあんたの加護だったというわけか」

「というか、星としてあなたに縋ったというべきですね。申し訳なく思っています」

「救われたのではないのか？」

俺が首を傾げると、イシスは説明を続けた。

「あの時。邪神が攻めて来た時に私は致命傷を負いました。その欠損は余りに大きく、すぐに修復することが出来ない呪いに私は侵食されていました。ゆえに、その権能をアリアケ君に託した。しかし、それだけでは邪神は私を、この星を食いつくしてしまうという事は予測できた。そこで私はあえてマナを大量に消費し、時間を稼ぐことにしたのです」

「ああ、なるほど。だから時間転移を行ったんですね。1000年の時間転移を行う術式の使用魔力の膨大さを考えれば、マナが地上から枯渇する可能性はあります」

「そうです。これによって、邪神はこの星に興味を失った……。と言いたいところですが、残念ながら去ることはなかった。むしろ、そのあとはマナを復活させるために、養豚場の豚のように肥え太らせるために、文明の興廃を裏で操り始めたのです。およそ1000年かかって。神にとっては大した時間ではないですが、人にとって

は長い悠久とも言える時間でしょうか。ゆえに、かの邪神には善性があるように見える時が人々にはあった。ゆえに『旅の神』といった形で穏やかなる神として崇められている。そのあたり、ちよつとむかつかますね」

「まあ個人的な感想は置いておくとしてだ」

俺はまとめるように言った。

「あえてマナを枯渇させたことで、星の神と、星喰らう神はお互いに身動きの取れない膠着状態に陥った。その再戦は俺の復活する1000年後となったわけだな」

「はい、あなたがこの戦いのキーなのです。アリアケ君。邪神が力を取り戻すタイミングにあなたを送り込んだことは必然です」

「他にもいくつかの切り札を用意していました。例えばその聖剣ラングリスです」

すでにビビアに返した聖剣を、また奪い取られると恐れてか、彼は猜疑心で血走った眼を周囲に向けた。

「それはもともと対邪神用に私が開発したものです。ですがそれほどの聖剣を誕生させるには、大量のマナが必要でした。そのために地獄の門を開けることになってしまいました。蛇の道は蛇ですので」

「なるほど、ブリギッテ教の発祥の原因はあんたってことか。とりあえず、ブリギッテに一言謝っておくんだな。300年封印していたわけだからな」

「本当にご苦勞をおかけしました。最悪、私がふさごうかと思っていたのですが、期待以上に人類がレベルアップしていたのでつい頼ってしまいました」

ん？

今、ちょっと気になることを言ったな。

「期待以上のレベルアップと言うのは何のことだ？」

「ああ、そうですね。それも説明がいりますね」

ポンと女神は手を打つと、

「この星の人類は進化する種族なのです。しかも、それは個別の人間としてだけではなく、種族全体、子々孫々までスキルや能力が少しずつではあります。継承される力を持っています」

「だから、1000年だったわけだな」

「その通りです！」

女神は力強く頷いた。

「たとえ1%の成長でも、1000年経過すれば途方もない成長となります。神話時代よりも、現代の人々の方がよほど力があります」

！ 断言してもいいです！ 地獄の門を一人で封印し続けたブリギッテさん、初代勇者パーティーや初代魔王と比べて何倍も強い今の皆さまも本当に強くなっています。ねえ」

彼女はゆったりと腰かける少女の方を見ながら言った。

「フェンリルさん！ 初代勇者パーティーの唯一の生き残り。あなたもそう思うでしょう？」

「なんだとおおおおおおおおおお！？ しょ、初代勇者だとおおおおお！？！？！？」

ビビアが絶叫するが、一方の当人は別の感想を述べた。

「そういうなあ。やっと我を1000年も洞窟に閉じ込めた犯人がお前だと分かってどうしてやるうかと思っっているところではあるが……」

ジロリと女神をみやると、女神は焦ったように手を振って、

「いえいえ、ちゃんと1000年後に助けに行く予定だったんですよ。ですが、いつの間にかアリシアさんに助けられてたのでオールオッケーかなと」

「はあ……。まあ、それはあとにしよう。そうよの。その勇者はともかく、この賢者パーティーは強いぞえ。かつての、そして今の勇者パーティーなど足元にも及ばぬ。それはこのフェンリルが保証しようぞ？」

「なっ！？」

「それより我からも一つ聞いても良いかのう？ 星の端末よ」

「嫌な言い方ですね。まあ、はい、1000年閉じ込めた私が悪いですね。はい、どうぞ」

「1000年来、この方勇者と魔王の戦いは続いておるが、これは邪神の仕業であるな？」

「もちろんです」

「はあ！？！？ 魔王は邪悪だから勇者が倒すもんだろが！？！？  
?!?!」

ビビアが驚きの声を上げる。だが、女神は淡々と説明した。

「いいえ。1000年前にはそんなルールはありませんでした。私がマナを枯渇させたので、邪神が作り出した効率的なマナ生成システムの一つですね。文明の繁栄や衰退、戦争による流血など生命の生き死にの繰り返しですがマナを生むのです。というか、もともと魔族というのは正式名称ではありません」

「は？」

女神は言葉を切ると、思い出するように。

「月の人  
イルミナ族」

そう言って、魔王の方を見た。



「イル<sup>月の人</sup>ミナ族。その名の通り、月光のほのかな夜を好む種族ですの  
で、魔族の皆さんは」

言われた魔王の方は、何か懐かしそうな目を見ると、

「もうとうの昔に人間どもにも忘れられた名前なのだ。だが、あて  
いしたちの間では、確かに自分たちをそう言っているのだ。被差別  
部族だから、邪神を胡散臭いとは思っていても、表向きは頼るしか  
なかったのだ。だが、余り人が死ぬのは好きではないのだ。なんか  
悲しいからな。だから、あまり戦争は仕掛けてないと思うのだ。ま  
あ好戦的な歴代魔王もいたとは思うが、あていしは好きじゃないの  
だ、人が死ぬのは。だから、多分それもちよつとばかり邪神には誤  
算だったかもしれんのだ。マナ増大があんまりしない原因の一つに  
なったかもしれないのだ」

「そ、そうだったのか！ くそ、俺は罪もない魔族の野郎どもをぶ  
つ殺してたってのかよ……」

そうビビアは悔しがるが、魔王の方はぽかんとして、

「いやいや。今代のお前ら勇者パーティーは、なんかしらんが全然  
せめて来ぬから、拍子抜けしていたのだ。お前たち全然前線に出  
きてないのだ？」

「あれ？ そうだったか？」

「そう言えば、あまり報酬が良くないとか色々理由をつけて断って  
いましたわね……」

「長旅になるから美容の大敵だつって、ごねまくったよね」

「俺の肉体は僻地では輝かん！ やはりS級クエストをクリアし、凱旋してこのほとばしる汗と血管を大衆に見せる付けることこそが本懐だからな！！！！！」

勇者パーティーは意気揚々と語る。

こほんと女神は咳ばらいをした。

「と言いますか、邪神によって魔族を殲滅させる邪悪な魂を持つ人間が勇者なのです」

「はあ！？ 俺が邪悪なわけっ……！！」

勇者が何かを叫ぶが、ローレライが素早くサイレスの呪文沈黙を使用する。

「ですが今代、邪神は大きなミスをおかしました。アリアケ君が私の加護を受けていることを知らず、彼らの導き手になることを期待し、オールスキルラウンダーの力を授けようとしてました。その際、本来なら邪神に精神汚染の呪いを受けるはずでしたが、私の加護で無効化された。だから、勇者パーティーは純粹にアリアケ君の弟子になったのです。邪神の息が全くかかっていないアリアケ君の指導のおかげで、邪神の意図は図らずもずれ始めてしまった。そう、全てここから邪神の計画は狂い始めたんです」

女神はまとめるように、

「勇者が期待したほど邪悪ではなくなってしまう、時として邪神の手先を倒す手伝いをしてしまうことすらありましたよね？ そして、

闇雲に魔族を倒しに行くといったこともしませんでした。これはアリアケ君の弟子になったから。結果として邪神はマナの増大が止まり、大いに焦り始めたのです！」

「うおおおおおおおおおおお！ 俺はアリアケの弟子なんかじやモガモガ！！！！！！！」

「はい、ちょっとお静かにお願いしますね。今大事なところですからね。」

大きなパンをアリアシアが勇者の口につっこんでいた。

だが……。

ふむ、なるほどな。俺は女神の言葉に納得した。

「だから邪神は動いたわけか」

「あつ、なるほどですね、先生」

ポンとラツカライが納得したように手を打った。

「どづいつことなのじゃ？」

一方のコレットはポカンとしている。

つまり、

「勇者ビビアと魔王リスキスの二人が平和主義のおかげで流血の量が減った。つまりマナの生成がずいぶん遅れた。だから焦った邪神

は自分から色々と行動を開始したというわけだ」

「あっ、そういうことか、分かったのじゃ！　つまり、魔の森やエルフの森、ミミック事件、ゴブリンキング討伐事件、ワルダーク事件、聖都事変、全部あれは理由があったということなのじゃな！　！」

逆に言うと、奴はしびれを切らして出てきたとも言える。

本来喰らうべきマナが不十分な状態で、出陣してしまったのだ。

一方で、

「こちらには聖剣があり、頼りになる仲間たちもいる」

だとすれば勝機は……、

「あのー、ちょっとですね、まとめに入っているとこ悪いのですけど、アリアケ君」

「はい？」

俺は突然声をかけられて首を傾げる。

しかし、全員の目が。

勇者ビビアたちの視線すらも、俺に注がれていた。

「聖剣も、仲間も大事ですが、やっぱりここは主役に一声頂かないと始まりませんよ？」

女神は邪気のない顔でニコニコと言っ。

ハア。

やれやれ。

俺は嘆息する。彼女が求めていることが分からないほど、俺は朴念仁ではない。

それにまあ、

「聞け、お前たち」

俺の言葉に、ここにいる全員が緊張して耳を傾ける。しかし、

「いつも通りで問題ない」

その言葉に、拍子抜けしたのか、首を傾げるものもいる。

だが、俺は気にせず言葉を続ける。

「俺と戦うということは、神話として語り継がれる戦いになるということだ。これはまあ、今までも言ってきた通りだ。今更気負うほどのものでもない」

俺は皆を安心させるように微笑むと、

「それに、人類が1000年努力をし続けてきたのは、マナを喰らう寄生虫を退治するためなどではない」



死を謳う宇宙癌シングレット・ステラ・キャンサー ニクス・タルタロス』のもとへ。

153・千年の星の歴史(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケは一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！



ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

154・ちょっとハッキリさせておきたいのですが

154・ちょっとハッキリさせておきたいのですが

(続きです)

「あー、ごほんごほん。だいぶ盛り上がられているところ、すみません、ちょっと宜しいでしょうか」

主要メンバー全員がそろった部屋で、アリシアが拳手した。

「どうした、アリシア？ 大事なことか？」

「うーん、そうですね。これを確認しておかないと、最終決戦にはのぞめない程度のことなのですが」

「あら、超重要事項ではないですか。私の説明に何か漏れていましたか？」

女神イシスが首を傾げる。すると、アリシアは力強く頷き……だが、顔を真っ赤にしながら、俺の隣にくと、腕をがっしりと掴んで、

「お、おい。アリシア。その胸があたっているんだが……」

という俺の抗議の声は全く聞き入れらず、そのまま彼女は女神を睨むようにするよ、

「これはあたしのですので」

「「「「「」」」」」」

一瞬の静寂の後、

「おいおい、アリシア。さすがにそれは今言つことじゃ……」

俺がたしなめようとしたのだが、

「うおおおおおおおおお！　さすがアリシアは目の付け所が違うのじゃ！　本当なのじゃ！　なんか急に参戦してて気づかんかったが、何気にこのメンバーの中で一番縁もゆかりもあるポジションにおる。しかも、さらつと『君』付けで気安いのじゃ……！」

「お、おい、コレットまで何を……」

俺は改めて彼女もたしなめようとするのだが、お構いなしに俺のもう片方の腕にムギューとしがみつく。ちなみにアリシアとは若干感触が違うのはご愛敬である。

「儂のじゃ！　儂のつたら儂のなのじゃ！！　ふええええん！！」

「お姉様つたら、泣かなくてもいいじゃないですか。ねえ、先生」

「と、言いつつ、ラッカライ。重いんだが？」

「もう。僕わたしだって女の子なんですよ？」

「よく知ってるが」

「あつ、えつ、あつ、そ、そうですか。えへへ」

体中に賢者パーティーのメンバーがくつついたり、ぶら下がって来るので重たいことこの上ない。

そして最後に、

「我もおるゆえな。主様。ゆめ忘れぬようにのう。ほれ、お前も遠慮せずにつておけ」

「わ、私もいいんですか！　そ、そうですね。リスレットお母様も大教皇チャンスは一瞬、出遅れはアルカノン家の恥といってましたから！」

「おわつと！？」

フェンリルが大きな狼の姿になって、俺たちを担ぎ上げた。そこにはローレライ・カナリアも嬉しそうに乗っていた。

「待て待て、一体なんの勝負なんだ！」

「アー君！」

「お、おう！？」

「愛しています！　私が一番です！　あなたの一番ですからね！」

俺はまず左腕にくつつくアリシアからいきなりキスされる。

「だ、だ、だ、だだだだだ旦那様！！！！」

「お、おう?。」

いきなりのことでボーっとなったことがほとんどない俺は、この時は混乱の余り意識をはっきり保てず、反対側から呼びかけるコレットの方を向いた。

「大好きなのじゃ! 儂を二番目のお嫁さんにしておくれ。これでも尽くす女なのじゃ。未永く添い遂げたいのじゃ」

そう言つと、やはり遠慮がちだが、背伸びをして、はっきりと俺と唇を合わせる。

「先生、大丈夫ですか? 治療するので、こちらを向いて下さい」

「え、ああ。んむ!?」

「えへ。私もフアーストキスを上げられました。お姉様ともども宜しく願いますね」

お、お前たち。

「ふむ、我は今は人型ではないし、ローレライはまだ少し幼過ぎるかのう。ここは一つ予約ということではいのかのう? 無論、我の次ぞえ?。」

「むむ! そ、そうですね。見てるだけで鼻血ブーしそうですので、ご提案の通り、キス予約権で了承します! ということで、女神様!」

ローレライがビシリ！　とイシスの方を見てはつきりと言う。

「女神さまの順番は、このローレライの次になりました！　あ、もしかすると、ここにはいらっしやらないブリギッテ様が主張した場合も一つづれます。ご了解のほどお願い致します」

おいおい。

俺は呆れる。若干混乱もおさまってきた。

どうやら、アリシアが俺を好きだったことまでは了解していたのだが、なんと他のパーティーメンバーも全員俺のことを好いていてくれたようだ。さすがの察しの良い俺も、気づかなかった。

だが、

「お前らな。星の女神が俺を好きにはずがないだろう」

そう言って呆れた。

しかし、

「マジですか！？　いちおう正妻候補のつもりで1000年間過ごしてきたのですが！？」

めっちゃくちゃショックを受けていた。

「星の女神なのにヒーローミーヨー……。えー、6番目ですか。ちょっと女神差別だと思えます！　こういつのは年月を経た母性溢れる私が正妻でいいと思えます！」



理由はよく分からないが、とりあえず聞くに絶えない嗚咽を漏らしている。

そして、それをいつものように、デリアが励ましているのだった。

……と、そこから少し離れた場所で、プララとエルガーが呆れたようにそれをまた眺めていたのだった。

「てかさ、ビビアも鈍感すぎじゃね？ いい加減まどろっこしいんだけど」

「いや、俺にはデリアが奥手過ぎると思うがな。やはり告白というのは女からすべきだろう」

「てめえのその時代錯誤の感覚最悪だって自覚してる？ 女からとかうぜーんだけど？」

「お前こそ少しは女らしさを身につけてから、文句を言っただな」  
そんな会話をしていた。

だが、どういう意味だろうか？

俺には理解できなかったが、とにかく、方々あちこちでしばらくそんな会話というか、喧噪が続いた後に、女性陣で何やら後日話し合いが持たれるということで落ち着いたのだった。

やれやれ。



まあ、俺たちらしい最終決戦前のやりとりではあるかな。

俺は苦笑するが、

「だーれが、その原因だと思ってるんですか！ このニブチン！」

なぜか怒られながら、俺は最終決戦の準備を進めるのであった。

154・ちょっとハッキリさせておきたいのですが(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「恋の行方は一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

155・ラストダンジョン・無の次元　　VS　宇宙癌ニクス  
・タルタロス（本体）

155・ラストダンジョン・無の次元　　VS　宇宙癌ニクス・  
タルタロス

「さて、全員準備は整ったな。ラッカライ、逃げた邪神の行方は追えているな？」

「はい、先生。会戦には参加できませんでしたが、ちゃんと次元断層を破壊する邪神の痕跡は、聖槍によって補足できています。地味ですが、こういうこっさり皆さんのお役に立てるのは、奥手なボクとしてはありがたかったです！」

「ラッカライのああいうところ、ちょっとポイント高いと思うのじやが、アリシアはどう思う？」

「コレットちゃんもそう思いますか？　ああいうところ、いじらしいですよねえ。さすが元お嬢様です。ああいうところ、私たちも見習わないと」

アリシアとコレットが作戦会議だろうか、こそこそと言葉を交わしている。

こうやって仲間同士の連携がはかれていることは良いことだ。さて。

「さて、ではこれより泳がせていた邪神を追う。邪神は空間の隙間に潜み、この星に影響を与え続けてきた。今更だが、その邪神の隠れる次元への突破口を開くために女神により作られたのが、次元切断能力を付与された聖槍だ。聖武器は星の脅威を殲滅するための切り札としてイシスが用意した対悪星攻盾ヒュストリクスということだな。では、ラツカライ頼む」

「はい。では次元第999階層まで切除します。ただ、この辺り一帯にどんな影響が出るか不明です」

「ゼルパス将軍、退避は完了しているな？」

「はっ。人魔同盟主アリアケ様。軍人、民間人、ともに全員の退避を完了しています」

「よし、大儀であつた。お前も下がれ。ここからは星の命運をかけた戦いをこの賢者アリアケに委ねよ」

「はっ、御武運を、大盟主アリアケ様!!!!!!!!!!!!!!」

南部方面ゼルパス将軍は俺を尊敬の目で見ながら、見事な敬礼をすると、退室した。まるで王か何かに対するような態度だなあ。

何はともあれ、ここに残っているのは、人魔同盟主である俺と、賢者パーティーの面々、ハイエルフのセラ姫、バシユータ、そして勇者パーティー、女神イシスとなる。

女神イシスより、かの邪神の脅威が語られた。

「あの邪神の姿は真の姿ではありません。本気ですらありません」

その言葉に、勇者ビビアが顔を青ざめさせて絶叫した。

「う、嘘だろ！?!?!?! だって、俺ですら手も足も出なつ…  
…!!!!! げふんげふん！ あんたの攻撃ですらきかなかつたじ  
やねーか！ なので、全力じゃつ…!! 全力じゃつ…!! ねー  
なんて、ありえねえだろうがよおおおおおおあああああああ  
あああああああ!!!!!」

「はい、うるさいですよ。はいパン!!!!!!」

「うごふは!!!!!!??」

だんだん遠慮がなくなったローレライによつて、大きなパンを絶叫する口腔につっこまれた勇者ビビアは目を白黒させてもだえているが、おかげで静かになった。

さて、続きを聞こう。

「1000年前の襲撃時、私は確かに邪神を撃退したと思いましたが、本体と思われる者を粉碎したのです。しかし、その本体はすぐに復活し、不意を突かれた私は大きなダメージを受けたのです」

「つまり本体は他にいる、と」

「そうです。ですが、狡猾な邪神はその本体の場所をこれまで秘匿し続けています。また、本体が『何か』なのすら分かっていません。まずはそれら本体の場所と正体を見つけ出し、そしておそらく、あの端末としての邪神すらも上回る本体を撃破せねばなりません。言っていて厳しい試練だと思えますが……」

「一筋縄ではいきそうにない、ということだな」

「その通りです」

女神は頷く。

「しかも、第999次元階層は人類が到達したことはない、『無の次元』と呼ばれる未知の空域ダンジョンです。もしかするとその影響を相殺するだけで、私の加護は精一杯のレベルかも……」

「だが、やるしかあるまい」

俺の声に勇者パーティー以外の皆が一斉に頷いた。

「では行こう。この星の、人類の未来を決める決戦の地へ。この人魔同盟・盟主アリアケのもと……」

ラツカライが槍を振るう。

次元が幾層も切断され、虹色に、不穏に輝く邪神が通った跡が目の前に顕現した。

「シンクレッタ・ステラ・キャンサー死を謳う宇宙癌『ニクス・タルタロス』の討伐クエストを開始する!!! 報酬はこの星の救済と人々の日常を取り戻すこと!!!」

千年の神話に終止符をうつことだ！……！」

俺の声ときに關ときの聲ときが上がる。

俺の率いるアリアケパーティーはこうして出陣したのだった。



155・ラストダンジョン・無の次元 〵 VS 宇宙癌ニクス  
・タルタロス(本体)〵(後書き)

『小説』第3巻発売中! & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中!

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます!

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ!!

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「最終決戦は一体どうなるのっ……!!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 156・圧倒的な脅威

### 156・圧倒的な脅威

俺たちはラツカライの聖槍が作った次元のゲートを抜けて、第99次元階層までやって来た。

そこにいたのは無論……。

「よもや。このようなところまで。『無』と言われた次元までやってくるとは……」

その老人。

いや、既にその姿は老人ではない。

巨大な奇怪な文様をめぐらせた鎧を身につけた巨大な騎士に見える。

騎士は山よりも巨大な玉座に座り、こちらを睥睨へいげいしていた。

「実に愚かな。たかだか星の上を這う虫けらが来て良い場所ではない。それすらも理解できなかったか」

そう言っへいげいて俺たちを睥睨する邪神ニクス。

それだけで、相当の重圧が俺たちにのしかかった。

「それが本来の姿、というわけか？」

「……ふ、貴様の質問に答える義理はない」

邪神は余裕なそぶり、手にした大剣をひと撫でする。

「先生、危ない！！！！！」

「ダメージカット！！！」

バキイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！

弾ききれない！！

「コレット！ ビビア！ エルガー！！！ 支援しろ！」

「ぬおおお！！！」

「俺に命令すんなうおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

「鋼の肉体に不可能はないのだあああああああああ！！！！！！」

バキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイ！！！！！！

邪神の軽々とした一撃を、アリアケパーティー全員の防御担当全員で防ぐことに何とか成功する。

だが、

「これが邪神の攻撃、というわけか……」

「攻撃……？ くく、くくくくく」

邪神がいやらしい笑みを浮かべた。

「今のは攻撃などではない」

「何？」

俺が怪訝な表情をすると、邪神はそれが気に入ったのか、更に笑みを深くする。

甲冑の奥に口元は隠されているが、表情は如実だった。

「今のは貴様ら異物が侵入したせいで次元干渉が起こりかけたので、その流れをおさめただけだ。別にお前などいつでも殺せるし、無に帰すこともできる。うぬぼれるな虫けらよ」

「なるほど。攻撃ですらない、か。こっちは防御するだけで精一杯だったんだがね？」

「無理もあるまい。お前たちが星を喰らう神たる我に敵うわけがない。メインディッシュの女神も来ているようだ。ならばそなたらには前菜になってもらうとしよう……。とはいえな……」

邪神ニクスは初めて老人めいた声を響かせた。

「千年もメインディッシュを待たされたのだ。神代の千年は瞬く間であるが、しかしごちそうを前にした一瞬は長かった。ゆえに」

邪神はゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴとゆっくりと山よりも大きな玉座より立ち上がる。

「前菜はもう喰らおう。そのあとは惑星を喰らうとしよう」

それは圧倒的な威圧感と存在感。

邪神。

神。

人を凌駕する者。

次の瞬間に、俺たちの存在が消滅させられていることを確信させるほどの脅威が立ち上がるのを、俺たちは目のあたりにしていた。

しかし、

「さてと、もうこんなところでいいか？」

俺はさっきまでとは違ってかわった、軽い調子で言う。

「なに？」

宇宙癌ニクスの声とともに、

「アリアケさん？」

「旦那様??」

「先生?????」

「主様?????」

賢者パーティーの皆からも怪訝の音が響く。

しかし、俺は気にせずに、ある人物の方を向いた。そして、

「あとは頼んだぞ、勇者ビビア」

そう最も信頼する彼に、檄げきを飛ばしたのであった。

だが、俺の言葉に、なぜか面白いほど彼の顔が歪んだのはなぜだろうか？

156・圧倒的な脅威（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「勇者ビビアは一体どうなるのっ………！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！



ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしく願いたいします。



「は、はあ！？！？！？！　そ、そんなことこの俺がゆるっ……！！！！」

「ビビアが何か言おうとするが、

「おっと手がすべりましたわ！？！？！？！？」

「そのお口つぐんでろおらあ！！！！」

「沈黙は金！　男は黙って首を縦に振っていればよいのだ！！！！」

「ふんぎいいいい！！？！？！　ふぎいらあああああ！！？！？！？」

とっさに、デリアの手が勇者の顔面に直撃すると、プララが彼を後ろから羽交い絞めにし、エルガーが頭をもって縦に何十回も振っていた。

「よく分からんが、歓迎されているようだな」

「もちろんですわー！！」

「アリアケがいないと始まんないよー！！」

「ああ、共に世界を救おうではないか！！」

「ふっ、どこまで言っても頼りない弟子たちだ」

だが、そこがまた親しみやすい点でもある。なぜかその言葉にビキビキと彼らの笑顔がひきつったように見えたのは気のせいであろう。

そして、

「では、アリアケさんが復帰するのでしたら、この私も復帰ということ、宜しいですね?」

そう言ったのは、

「んごんごんご!?!?!?!?」

「ア、アリシアまで復帰してくれるの?!?!?!?!」

「まじ!? これまじ!? やったじゃん!?!」

「棚ぼただな! うおおおおおおおおお!?!?!?!?!」

結界魔術に、人類唯一の蘇生魔術を使える、現代の奇跡の体現者、アリシアの復帰に更に勇者パーティーが色めき立つ。

「やれやれ、アリシア、君まで無理に復帰することはないんだが」

「なーに、言ってるんですか、アー君」

アリシアは呆れ顔で、

「困難は夫婦で解決する。これは事前に取り決めたことでしょうか?」

「やれやれ」

俺は嘆息する。

そして、俺が勇者パーティーを追放されてからの日々を思った。

彼女のいることの何と頼りがいのあることか。

「君が俺を追いかけてきてもらって良かった」

そう言ってほほ笑む。

「頼りにしている」

すると、アリシアは顔を満面の笑みにかえて、

「はい！ お任せください！ アー君！！ さあ、さっさと片づけて新婚ほやほや生活をエンジョイしましょう！！！！」

その声と共にかどうかが分からないが、

「では行こう勇者ピビア。久しぶりの真・勇者パーティー戦だ。戦い方は覚えているか？」

俺の言葉に、

「俺に命令すんじゃない！」

罵声の言葉を返す。

と同時に、

「この俺に任せときゃいいんだよ！ てめえは黙って、この俺のサポートしてりゃいい！！！」

そう威勢の良い声を出した。

先ほどまでの怯えていた奴とは別人のようだ。

やれやれ。

「その通りだ。問題なさそうだな。全体化」

俺はそう言いつつ、

「神殺し 付与」

「魔力量大アップ魔神の血脈 付与」

「イージス護国の盾 付与」

「クリティカル威力アップ 付与」

それから、

「神聖フィールド 展開」

これは味方メンバーに神がいる時にだけ発動する使い時がほぼない珍しいスキルだ。全ステータスを3倍に引き上げ、自身の属性攻撃を3倍に引き上げる。

なお、相手のステータス低下スキルは効かないので後回しだ。

さて、

「アリシア！」

俺の言葉に、

「勇者パーティー全体へ 全属性攻撃無敵 救済の大結界 発動」

「同、 体力 人類最終防衛結界ライン 発動」

「同、 幸運上昇 天使の守護 を発動」

よし。

「行け、お前たち！！」

「るせえ！ だから命令すんじゃないやねえ！！ おら、デリア！！ 俺の後ろから、バーツとつつこめ！ あとプララとエルガーは後から 適当にあわせやがれ」

「「「おう！！！！」」」

真・勇者パーティーの戦いは、こうして開戦の火蓋が切って落とされたのであった。

157・ラストバトル その1 ～真・勇者パーティーの戦い～  
大賢者アリアケ、大聖女アリシア復帰) ～(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqrxnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「真・勇者パーティーは一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！



ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

158 ・ラストバトル その2 真・勇者パーティーの戦い

158 ・ラストバトル その2 真・勇者パーティーの戦い

「おつらああああああああああああああああああ、死ねこらあああああああああああああああ！！！！」

ビビアが聖剣ラングリスを軽快に振るい、邪神ニクスの全身にその刃で斬り付ける。

「攻撃力アップ 付与」

ただ、その攻撃は突出のしすぎのきらいがあり、邪神がそこに付け入れれば勇者は致命的なダメージを負いかねない、リスクな攻撃だった。

しかし、

「デリアへ スピードアップ 付与」

「よそ見している暇がありません！！！！」 『防御不可攻撃スキル祝福された拳』！！！！

「む……っ……」

すぐ後ろからとっさの判断でデリアがビビアの隙をフォローした。

一瞬でも遅れていれば、今まさに邪神の振るう巨大な剣が勇者を串刺しにしていただろう。

だが、デリアの攻撃でその隙は防がれる。

「もたもたすんな！ 追撃しろや、プララ！！！」

「勇者ビビアへ 回数制限回避 付与」

「うるせえ！ てめえが邪魔なんじゃん！！！ ファイヤーボオオオオオオオオオオオ！！！！！」

大声で罵倒しあうビビアと魔法使いのプララだが、すでに彼女は詠唱を終えていて、ビビアの攻撃が終わる瞬間には発射していた。

それも勇者にかすりそうなほどぎりぎりだ。

もちろん狙ったことだと思われるが、それにしても俺ですらヒヤリとするほどの1mmの隙間を狙ったような、連続のファイヤーボールだ。

「あぶねええええええええええええええええええええええええ、俺ごと消し炭にする気だったろ！ ぼけえ！」

「あっはっはっはっは！ あたしら仲間じゃん！ そんなわけないじゃーん！！！」

やれやれ。心を許しあう仲間同士だからこそ出来るじゃれあい戦闘中に繰り広げる。

「調子にのるな、虫ケラども」

「ひい、効いてねえだとおおおおおおおっお おおおおお おお!?」

「エルガーさんへ『大天使の金冠』多重層防御結果使用」

「びびっている暇があれば、筋肉に道を譲るのだな。ふうふうふうふうふうふうふうふうふうんんん!!!!!!!!!!」

邪神が遅れて振るわれた大剣を、国の盾を自称するエルガーが受け止めた。

その衝撃だけで、周辺に突風が巻き起こるほどだ。

「す、すごい……」

ローレイが目の前の戦いを前に思わずつぶやく。

「あの勇者パーティーが……。あの勇者パーティーが……。あんなだった勇者パーティーが……」

ごくり、と生唾を飲み込むと、

「戦いに、なってる……」

なぜか戦闘をまともになしていること自体に驚愕していた。





「!?!?!?!」

「そ、そうだよ。ほら、逃げんなら早く逃げなくちゃ! あ、むしろ邪神に力を貸すってのはどうかな? 今だったらまだ許してくれそうじゃん!?」

「馬鹿が! そんな、貴様のような舐めた態度で許してもらえるわけがなからう。もっと全力で頭を下げなくては!?!?!」

勇者パーティー全員が、渾身の力を込めた勇者の一撃が不発に終わったと知るや、急速に戦意を喪失していく。

「それにしても相手を油断させるためとはいえ、仲間になるとまで言い出すあたり、なかなか堂に入った演技だな」

「演技ですかね、あれ。やれやれ」

俺のつぶやきに、なぜか半眼で嘆息しているアリシアである。

だが、俺の関心事とはそこではなかった。

勇者ビビアたちとは逆に、堂々とした態度で、無傷な邪神ニクスの前に立ちほだかる。

「どうした、アリアケよ。お前自慢のスキル支援もこのざまだ。観念して首をさしだしにきたか?」

その問いかけに俺は肩をすくめる。

「確かに。お前には今の攻撃、まったく効かなかったようだな、邪神ニクス・タルタロスよ」

「さよう。これが神と人の差だ。思い知ったか？ 千年の星の歴史の担い手よ？」

勝利を確信した口ぶりの邪神。だが、俺は別段気にせず、淡々と言った。

「防ぐ必要もないのか、邪神ニクスよ？」

「なに？」

俺の言葉に、邪神が初めて反応らしき反応を示す。

「俺たちが何であれ。お前の言う虫けらであれ、攻撃は攻撃だ。普通はそれを防ごうとするものだ。だが、お前は戦いが始まってから、それすらしようとしていないように見える。なぜだ？」

「当然だ。この程度の攻撃なぞに防御など、不要だからな」

「なるほど。お前にとってはあれは攻撃ではありえなかった、と」

「そうだ」

邪神が邪悪に嗤った。



「ひいひいひいひい、や、やっぱりこんなところ来るんじゃないかなかった！ どうしてくれんだよ！ どうしてくれんだよ！」

「や、やっぱりここは邪神様の作る世界に与<sup>くみ</sup>して、世界の半分をもらうってのがっ……」

勇者パーティーの喧噪をよそに、邪神は笑みを決して、剣を掲げた。

「さて、埒が明かぬ。そろそろ終わりにしよう」

邪神はそう言うと、全てを終わらせるように、その剣を振り下ろした。

「『アカシック・ノヴァ』  
畢竟星の終焉』」

同時に、

「勇者パーティー交代。賢者パーティー出撃！」

俺の声が第999時空階層へ鳴り響いた。

158・ラストバトル その2 く真・勇者パーティーの戦いく  
(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは一体どうなるのっ……！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 159・神話大戦と窮地

159・神話大戦と窮地

「『アカシック・ノヴァ  
畢竟星の終焉』」

邪神ニクスの攻撃は、次元そのものを振動させるほどのものだったが、

「星の未来を紡ぐ戦士たちよ」

星の女神イシスが全員に祝福を与える聖句を唱えた。

無の次元にも関わらず、春の穏やかさを感じさせるような一陣の風が通りぬけたように感じる。

「皆さんの体力や魔力が100倍以上向上したはずですよ」

難なく女神が言う。と同時に、

「我が信仰の片翼にて二十五重大結界、信仰のもう比翼にて蘇生領  
域形成」  
ルソオメガ・カイト バルム・ヘ

その加護に驚くまでもなく、アリシアが邪神の即死級の攻撃を防ぐ。

」

「……………」

一瞬、邪神の攻撃により、時空そのものが消失し再誕生したために、轟音すらも聞こえない。

無音と言つ名の虚無と、暗黒の衝撃が耳目を犯す。

だが、次の瞬間には、俺たち賢者パーティー、そして勇者パーティー全員が、散り散りではあるが先ほどまでと同じ姿勢で立っていた。

「ど、どうして場所が変わってんだ……」

ビビアの呟きが聞こえるが、賢者パーティーは当然のこととして作戦を進めていく。

「大結界は私の分を除き全損壊しましたが、威力は殺せました。魂の消滅ではなく、一時的な死亡で済みましたので、無事皆さん生き返っています。場所が変わっているのは……ご想像にお任せします」

「了解した。ローレイ、アリシアは回復時間をとる。全体回復を」

「は、はい!」

「ええええええええええええええええええええええええ!?!?! 死!? 俺が死つ……!!!!!!」

ビビアや他の勇者パーティーは騒ぐが、神相手には死をも織り込んで戦うのは当然だ。

「さあ、次はこの星最強の存在の力を見せてつけてやれ、コレット。そして、聖獣の力を発揮せよ、フェンリル! 二人へっ……!!!!」

俺は矢継ぎ早にスキルを行使する。

「 決戦 付与！ 神話創成 付与！ 人類の剣 付与！」

「了解なのじゃあああああ！ 我が旦那様！！！ くおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおお！！！！！」

「我を千年閉じ込めた原因をここで取り除くのはやぶさかではない  
のう。わおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおお！！！！！」

コレットとフェンリルが本来の姿へと変貌する。

黄金竜と呼ばれた惑星最強と謳われた神話存在、ゲシュペント・ド  
ラゴン。

そして、十聖のフェンリルと呼ばれたかつての星の聖獣。

その最強の存在二体がこの星のすべての加護を受けて、邪神へと襲  
い掛かる。

「焰エグ・ラス・よ魂ヒューリさえも残さぬよう灰へ帰せ！！！」

「雷神との契約に従い氷結フェンリルの魔神よ降誕しその終末ミストルティンを示せ」

「 無属性 付与！ 融合化 ！」

本来ならば反発しあうオリジン魔法元素を無属性をくわえた上で融合させる。



そんな空気が漏れるような、鈍い、重い音なのだった。

「な、なんの音なんですか、この何とも聞いたことがあるような、ないような音は……」

ローレイが不気味がって声を上げた。

そして、相変わらず、

「ふふふ、その程度かね。諸君。本当に飽いて来た。そろそろ退場してはくれないだろうか」

余裕ぶつた邪神ニクスが立っていた。

「あ、あの攻撃を受けても無事だなんて。玉座の前から動かさせすらできねえじゃねえか。ひい、ひいひい……」

ビビアが情けない悲鳴を上げる。

だが、

「いや、そうじゃない」

俺は微笑みながら首を横に振り、

「逆だ」

「は？」



俺の呟きに、勇者ビビアが間抜けな声を上げる。

だが、俺は構わずに続けた。

「逆なんだよ、ビビア。あいつは」

邪神は、

「玉座から1mmも動かないんじゃない」

奴には今まで俺たちに攻撃するチャンスが何度もあった。

俺たちの攻撃を防いだ時もそうだし、勇者ビビアに威力偵察をさせた時など、攻撃をかわして倒すことなど容易だったろう。

だが、奴にはそれをしなかった。

なぜなら、

「動けないんだ」

「はあ!?!?!?!」

驚嘆の声を聞き流しながら、俺は邪神を見上げ、問いかける。

「なあ、そうなんだろう? 邪神ニクス。いや……」

俺は奴を見上げながら言った。

「偽神ニクス・タルタロス。不死を騙りし宇宙癌シングルレッタ宇宙癌よ」  
・ステラ・キャンサー

その言葉に、邪神は初めて浮かべていた笑みを消したのである。

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは一体どうなるのっ……！！」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

160. すべてがつながるとき　く凶へまがくつ魔を討て『聖弓ミストルテイン』！く

160. すべてがつながるとき　く凶<sup>まが</sup>つ魔を討て『聖弓ミストルテイン』！く

「偽神だと?」

その言葉に、ニクス・タルタロスはいくらまでの余裕を消して反応する。

「不敬な！　人間如きが！　星の表面に住む虫けら程度が。この全宇宙を支配する儂を偽神呼ばわりとは!!!!!!」

激昂により秘められた魔力が暴走し、次元が振動する。それほどの瞋恚<sup>しんい</sup>である。だが、

「だからだ。お前は神が何たるか、ずっと誤解している」

「1」、誤解だと」

「神は星の生物を滅ぼすことはあっても、星自体を消滅させることなどしない。なぜなら、神とは星に生まれ落ちた生命の管理と破壊をつかさどる存在だからだ。星自体を破壊する神は、もはや神ではない」

「馬鹿な！　儂は神だ！　儂ほどのつ……!!　俺ほどの存在が神で



だから、

「俺の言葉の意味を理解してももう遅い」

俺は大賢者の杖、聖杖『ケルキオン』を大地へと突き立てる。

「お前は防御しなかった。そして、決してその玉座の前から動かなかった。なぜだ？」

俺はそう呟きながら、ラツカライを呼び寄せる。

ラツカライは俺の意図をすべて理解している訳ではないにもかかわらず、やはり、彼女の命より大切な聖槍ブリューナクを俺へ手渡す。

「次元が振動するほどの空腹の音を響かせながらも、この千年、空腹に耐え、あくまで端末体を動かしてなお、本体は決して玉座から動かなかったのはなぜだ？」

何よりも、

「ビビア。聖剣ラングリスを、ここに」

「くそが！ くそが！ くそが！ これは俺のなんだよ！ なんでお前にやらなきゃならねえ！！！」

罵詈雑言がかえってくる。しかし、

「あくまで貸し、だかなな！ 俺がいなかったら、これからお前が何するつもりかしんねーが、その策は成功しなかったんだ！ そこらへん忘れんじゃねーぞ！！！！！！」

「ごちゃごちゃと言いながらも、聖剣を俺へと手渡した。」

3つの聖具を手にしながら、俺は今まさに、この次元そのものを崩壊させるほどの魔力を込めた一撃を放とうとするニクスを見上げる。

「何よりお前は、この第999次元階層が最奥と言った。それが決定的だった」

俺はそう言っつて、3つの聖具を目の前に掲げる。

「999次元階層が最奥の次元などと言う根拠は一つもない。一見、言われると思ひ込みそうだが、何ら根拠がない。そして、知っているか、ニクス・タルタロス」

俺はそう言っつと、ビシリと、奴の後ろにある玉座に視線を向けた。

偽神ニクスではなく、その後ろの玉座に。その行動に、ニクスは初めて狼狽の表情を浮かべた。

「玉座の後ろには普通隠し通路がある。自分の命が最後助かるための切り札としてだ。無論お前も例外ではない」

「!?!? そういうことですか！ だから、ニクスは玉座から動かなかったし、防御自体が不要だった。ここにいるのはあくまで本体を守るためのガーディアンとしての肉体！ だからこそ、本体を守るために千年もこの次元を離れることもできなかったってわけですか!?!?」

「そうだ。この次元階層の向こう側。第1000次元階層、玉座の



後ろに、奴の弱点がある！」

そう俺は断言したのだった。

「だ、だからどうした。それがわかったとして、我が弱点を攻める手段などあるまい！！！！ 我が弱点は玉座の先にあるとて、遙か彼方にある！！！！ 時間切れだ！！！！！！！！」

激高するように言う奴の言う通り、もはや時間はない。奴は全力の『畢竟星の終焉』アカシック・ノヴァをもう一度放つつもりだ。その攻撃を防ぐアリスアの回復はまだ済んでいない。

ただ、

「気づかないのか？」

俺はやはり微笑みを崩さない。

「すでにお前は玉座の位置から移動するという致命的なミスをしているんだぞ？ 何のために勇者パーティーが、お前の実力を推し測るような戦い方をしたと思う？ 賢者パーティーがお前の全力を引き出させようとしていたと思う。すべてはこの時のため。玉座より引きはがし、射線から、盾であるお前を移動させるためだ」

「射線……だと……？ 馬鹿な、次元を切り裂き、魔を穿つほどの魔力と聖属性の武器がどこに……！！？ ……まさか！ その聖具を集めたのはっ……！！」

ニクスは俺が集めた3つの聖具を見つめ、初めて露骨に狼狽する。

「馬鹿な！ それは！ ただの剣！ ただの槍！ ただの杖ではな  
くっ……！！！！ 儂を謀たばかったか、大賢者！ 星の女神！」

一方の俺は宣言するように言った。

「だから最初に言っただろう。間抜けな神よ、と！ いや神を騙る  
ただの臆病なモンスターだったな、偽神ニクス・タルタロス！！！」

「何をやる気だ！ まっ、まさか！？」

「そう、これこそが星の女神イシス・イミセリノスが最後まで隠し  
通した秘策！ お前がいくら探しても見つからなかった最後の聖具  
のありが！！！」

俺は叫ぶ。

「スキル 融合 を聖具へ使用する！！！」

聖具はもともと3つ！

だが、

「この3つを組み合わせることで、聖槍ブリユーナク次元を切り裂き、聖杖ケルキオン魔力を  
聖剣ラングリスたたえし、リユニオン闇を穿つ『聖弓ミストルティン』と合聖する！！

聖杖が魔力の弦げん、聖槍が弓幹ゆみからと成り、そして、聖剣が矢へと変形し  
たのだ。

「や、やめろ！ おおおおおおおおおおおおお  
！ あああああああああああああああああ！ お、おの



んの弦を引き絞り、玉座へと聖剣の弓を放った！！！！

瞬間。

第999次元。

無の次元と呼ばれる空間を切り裂き、その先にある、第1000次元が一瞬ではあったが姿を現した。

そこにはまるで何もない空間。あるいは、これが宇宙という存在なのかもしれないが、一切の光なき暗黒が広がっていた。

だが、そこにただ一つ、脈動し、蠕動する、奇妙でたくさんの血管のようなものが覆う球体のような何かが浮いていた。

それこそまさに、次元の最奥に隠された、宇宙癌ニクス・タルタロスの心臓。

偽神の心臓こそが、星そのものとなり、第1000次元に浮かんでいたのである。

だが、その星に生命の息吹はなく、ただびくびくと脈動する心臓のみが星のごとく浮かぶのみ。

やはり、奴は神ではない。

生命を宿せない。

ただの宇宙を蝕む漂流する宇宙癌でしかないのだ。



160・すべてがつながるとき　　凶へまが　つ魔を討て　聖弓  
ミストルテイン』　　（後書き）

『小説』第3巻発売中！　&　『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは一体どうなったのっ……！！」

と思ったら

下にある　　から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 161・エピローグ　～人魔同盟学校を作ろう～

161・エピローグ　～人魔同盟学校を作ろう～

「はああああああああああああああああああ！？　人魔同盟学校を作るだああああああ！？！？！？」

ビビアのけたたましい声が響いた。

だが、そんな素っ頓狂な声を上げたのは彼だけで、賢者パーティーの面々は欣喜雀躍とした様子で、

「確かに、邪神を討伐した今、人と魔族が戦う理由はありません。ですが、いきなり戦争をやめて仲良く、とはいかないのが人情でしょう。……その礎となる人材を育てる。そのための人魔同盟学校。とても素晴らしいことだと思います。アー君は教師としてはちょっと抜けてますが、適任だと思います」

アリシアが肯定してくれた。ちなみにちょっと抜けているという点については、一切身に覚えがないのだが、反論すると10倍返しになりそうなので黙っておく。

「わしもそう思うのじゃ！　ちなみに、わしは武術を教えたりしたいのじゃ！　わしのブレスに120秒耐えたら免許皆伝なのじゃ！」



「あていしも武術担当したいのじゃ！でもどちらかと言うとロジスティクスのほうを教えてやるのじゃ」

「では我は歴史の教師でもしようかの。本来は星の女神イシスあたりが適任かもしれぬが……」

「さすがに今回無茶しすぎましたので、星のManaが枯渇したり天変地異が頻発して良いのでしたら頑張りますが、そうでないのでしたら、ちよつと休憩をさせてください！ええ、ほんの50年ほどで結構ですので！」

スケールがでかい。

「では、わたしことブリギッテは、地味にローレライさんと一緒に回復魔術の先生でもしましょうかね。いかがですか？」

「光栄です、ブリギッテ様。あと、保険室の先生としてちよつぴりセクシー路線を目指したりするのも良さそうですね。生徒たちのドギマギする様子を楽しめますので」

「ローレライの学校観は後で矯正するとして、回復術士の養成も必要だしいんじゃないか？あと、アロシアは言語と算術が得意だったと思うから、そちらも頼もつかな。ラツカライには槍術を教えてもらおうのと、実は隠れお嬢様だから家庭科も得意だったな。それも担当してもらえるか？」

「楽しそうですね。なんか生徒たちが混乱しそうだけど」

ラツカライが苦笑した。



俺は大いに首を傾げる。

それと同時に、そこにいた全員が同時に大きく嘆息した。

「やれやれ、本当に学校経営なんてして大丈夫なのかしら？」

なんだかそんな無言の圧力を受ける。

ともかく、俺はそんな不安感を大いに醸成しつつも、オールティの町での人魔同盟学校の設立、そして運営計画は練られていったのだった。

そしてそれは、俺が邪神や星の女神という外部からの影響とは何ら一切関係なく、単純に俺がやりたいからやる、そんな昔からの夢を叶える重要な第一歩なのだっただ。

【第4章 闇を振りまく者ノ邪神XXXXXXXX 完】  
必要なエピソードを幾つか挟み次回から第5章を開始します。

161・エピソード く人魔同盟学校を作ろう (後書き)

お読みいただきましてありがとうございます。

これにて第4章完結。

エピソードを幾つか挟みまして、次回から第5章が開幕いたします！

-----

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

https://magazine.jp.square-eni  
x.com/sqexnovel/series/detail/  
yusyparty/

-----

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「人魔同盟学校って一体どうなるの……！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 162・エピローグ2 ～ひと時の団欒～

162・エピローグ2 ～ひと時の団欒～

オールテイ村でひと悶着があつた後、俺たち賢者パーティーは全員でピクニックに来ていた。

空は晴れていて、風が吹くと高原にはのどかに草の匂いが香った。

「によわわわわ！ これはうまいのじゃ！ さてはアリシアの作なのじゃ！ 間違いない！！！」

早速広げたお弁当バゲットからサンドイッチを頬張りながら、コレットがはしゃいでいた。

しかし、

「あ、いえ。そちらはわたしの作ではなくてですね」

「す、すみません、コレットお姉様。それはボクの作ったサンドイッチでして」

アリシアとラツカライは両方頬を掻きながら訂正した。

「ラツカライ！ いつの間にこれほど料理の腕を上げたのじゃ！？ わしは教えておらぬというのに！ なお、わしは料理は出来んけ

どねー！」

「いちおうテーブルマナーですとか、一通りの教育は受けさせられていまして。というか、本当はそっちが本職になるはずでしたので」

「ボクっ娘槍娘のくせに、お嬢様属性も持つておるのだから、本当に恐ろしい娘であるなあ、もぐもぐ」

ちょうどよい岩に腰かけながら、フェンリルは風に美しい銀髪をなびかせながら、優雅にサンドイッチを頬張りながら言う。

「わしもそういうギャップみたいなのが欲しいのじゃ！ 今度教えて欲しいのじゃー！」

「もちろんいいですよ、お姉様！」

「私もお願いします！ おいしいお料理を、あ、あ、アリアケさんに食べさせてもごも！」

「はい、もちろんアリアシアお姉様も！」

加熱にプレスが使われたり、怪力によって厨房が粉碎され、崩壊する未来が見えたが、それを口にする事で俺自身が崩壊する未来も見えたので、賢者たる俺は口をつぐんだ

「アリアケ様、何か言いたそうですが、どうされましたか？ 思うことがあるのでしたら、口にされたほうがストレスがなくて良いと思います」

「ローレライ、お前のその勘の良さは何なんだ……」

淡々とつつこむローレライに、俺は苦笑を浮かべるしかない。

何はともあれ、全員がゆったりとした時間を共有している。

のんびりと時間が過ぎていく。

まるで空を流れる白い雲のようだ。

「ふむ、それにしても、ごくり！ いちおう村の重鎮たるわしらって、こんな風に遊んでいても良いものなのじゃ？」

コレットが指をなめながら言った。

それを見て、アリシアがハンカチで指をぬぐってあげていた。

仲の良い姉妹みたいである。

まあ、ドラゴンたるコレットのほうが千歳ほど年上なのだが、これも口にすれば禍のもとであろう。

俺は彼女の質問に微笑みながら、

「もちろんだ。お前たちだって、毎日沢山働いているだろうに。たまにはこうして羽休めをしないとなあ」

俺も草原にごろりと横になって、雲がゆっくりと流れていくのを見守りながら言う。

「ですが、それを言うのでしたら、先生の方こそ沢山働いているの



ではないですか？ ボクたちの休憩につきあっていては休めないのではないのでしょうか？」

まじめなラツカライらしい疑問を口にした。

やれやれ。

俺は微笑む。

ふと、隣を見ると、やはり草原に寝転がるアリシアがいた。彼女も同じことを考えているのだろう。

優しく微笑んでいた。

俺はラツカライの質問に、やはり首を振って、

「そうじゃない」

そう言ってから、

「すまん、すまん」

と謝った。

大事なことを一番最初に言い忘れていたからだ。

「俺がこうやってお前たちと遊びたかったんだ。言っただろう？ 俺の夢はのんびりすることだと。それはこうやって平和な片田舎で、お前たちとピクニックをすることなんだ」

「「「え?」「」」

コレットたちが驚いた声を上げた。

「旦那様の望みが、わしらとこつやっつてのんびりするとなのじや?」

「そつだぞ?」

俺はあっさりと頷く。

アリシアはそんな俺の方を見て、嬉しそうに微笑んだ。

俺の答えを聞いて、他のみんなも嬉しそうに笑う。

と、

「にゃならば、余興が必要じゃな! 一番コレット、ブレス吐きます!」

コレットがいきなり嬉しそうに口を大きく開いた。

『そついつのはいらん!』

全員がつっこむ。

だが、みんな楽しそうだ。

そんな平和な光景が、オールティ村の片隅で見られたのだった。

……ただ、まあ当然と言えば当然。

(今まで世界を救ってきた俺の様な人間が急に暇になる訳もないだろうな。こうやって団欒の時間が徐々に取れるようになっていくといい)

これが束の間の。ひと時の団欒だと知っている。だからこそ余計に大事に感じる。

俺はまた空を見上げたのだった。

162・エピソード2（ひと時の団欒）（後書き）

これにて第4章終了です。

次回からは第5章を開幕です！！

.....

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

https://magazine.jp.square-eni  
x.com/sqexnovel/series/detail/  
yusyparty/

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは一体どうなったのっ……っ！」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

163 学級崩壊（前書き）

第5章 『人魔同盟学校をつくる』編 を開始します。

## 163・学級崩壊

### 163・学級崩壊

『ドンガラガツシャーン!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

「こらあ！ 二人とも席につきなさい！ 今は家庭科の時間でうわつぶ!？」

少し通りかかった俺は、教室の窓から中を見て、いつもの光景に苦笑を浮かべた。

ここはアリアケ・ミハマ辺境伯が作った中立国オールティの中心街に作られた学校であり、その名も人魔同盟学校と言つ。

その理念は、学校の名称通り。

これまで長い戦争をしてきた人族と魔族の融和を、幼いころからの教育を通じて行つ、というものだ。

ただ、この2種族だけではバランスが悪い。

このエンデンス大陸には沢山の種族がひしめきあっているので、他の種族の生徒も加えている。

まずは小規模、一つのクラスを編成し、人数も目が届く範囲のぎり

ぎりの5人とした。

人族は1名。名前は『FINE』。

魔族も1名である。名前は『ルギ』。

そして驚くことにエルフ族からも1名が参加。名前は『ソラ』。

また、更に驚くべきことにドラゴニユート。つまりゲシュペント・ドラゴンからも人型で1名が参加している。名は『キョールネー』。

ただ、これだけだと4人である。

残り1名は、

「ラツカライ先生、問題ありません。授業を続けて下さい」

白いワンピース姿で、無表情。ベリーショート黒髪。何を考えているか分からず、しかも種族は公式には不明となっていた。名前は『ピノ』。

「そうもいかないよ。ほらほら、喧嘩しちゃだめだよ。また、アリアケ校長？ アリアケ辺境伯？ に怒られちゃうんだから」

「へっへん、ならこのスキルを見破ってみなよ！ 斥候スキルステルス！」

そう言ったのは、冒険者の子供で将来は自分も冒険者になりたいと熱望している人間の女の子、FINEである。



「こらー！？ お裁縫に使う、布で姿を隠さないの……！」

「ならこっちにも考えがありますよっと！」

「こらー、ルギも応戦しないの！ いや、どうなのかな？ 売られた喧嘩はほどほどに買うべきなような気もしてきました。うーん」

先生たるラツカライも悩み始めた。まあ、別に教える専門家ではないしな。

とはいえ、悩んでいるうちに魔族の男の子ルギが対応策を繰り出した。

あれは、

「魔術 プラトリオン！」

ルギの声とともに、彼の体が一瞬で血液のようにパシャリと崩れ落ちると同時に、無数の蝙蝠こうもりが教室を飛び交います。

「うわぁ、すごい！ なんかわかんないけど、かつこいい！」

とFINEが悲鳴のような歓声のような声を上げれば、

「あっはっはっはっは！ やっぱこのクラスさいっこー！ 退屈しないわー……！」

と、のんきな声にゲラゲラ笑っているドラゴニユートの女子キユールネー。

なお、彼女はわりとゲシユペント・ドラゴン種族のやんごとない家系の娘だったはずだ。

「こらあああああああああああ！ 二人とも！！！！！！ これが見えないの！？！？！」

と、そこに一喝の怒声が飛ぶ。

悩める先生……は放っておいて、生真面目そうな肩まで伸びた金髪、そして碧眼をもつ幼い少女ソラが黒板の横の紙をビシッと指さした。

「分かってるよーだ！！ ソラこそ文字が読めないのー？」

「だからこうして牽制攻撃だけに行っているのですよ、ふ。ソラは相変わらず頭が固いですね」

エルフの少女……。ソラと呼ばれた少女が指さした先の紙面にはこう書かれていた。

『喧嘩はしてもいいけどマジギレはご法度だ。攻撃をするくらいなら頭を使って嫌がらせしろ B Y アリアケ・ミハマ』

（あれは、アリシアになんでもいいから訓示のようなものを書けと言われたので、校舎が破壊されないように最低限のルールを書いたものなのだが……）

しかし、

「あんたらあ〜」

声のトーンが一つ下がったソラの周りに風の精霊が大量に舞い始めた。

おっと、こりゃまずいな。

「校舎の建て替え費用なんぞ、予算に計上してないぞ？」

俺は困った表情を浮かべる。

そんな間にも、ソラの魔力は結集し、一つの奇跡魔術を形成した。

「精霊魔法 ウインド・ブレス ……!!!!!!」

「おいおい！ マジ切れしててんのはっ……!!」

「あなたのほうじゃありませんか!？」

ソラの攻撃魔法に、人間のフィネと魔族ルギは慌てる。

このままだと教室どころか、校舎もただでは済まないからな。

ただ、

「はい、そこまで！」

俺の言葉が割って入る。

「生徒たちへ 無敵付与 。ラツカライ」

「はい。次元、一閃」

シャキン！

「……………あれ？」

今までの喧噪というか、学級崩壊というか、学校崩壊が嘘のようにピタリと止まる。

そこには、聖槍で『何か』を一閃したラツカライが微笑みを浮かべてたたずんでいるだけである。

「学級崩壊もほどほどにな」

「ア……………」

皆がこつちを見て、

「……………アリアケ先生！」

先ほどまで学級崩壊させていた生徒たちが、おどいた表情で初めて俺に気づき振り返るのだった。

まあ、そんなわけで、現状人魔同盟学校は毎日学級崩壊しているのが、嘘偽らざる本当のところ、というわけなのである。

163・学級崩壊（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「人魔同盟学校は大丈夫なん？」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 164・種族いろいろ

### 164・種族いろいろ

「先に手を出して来たのはフィンネ人族です。全く野蛮このうえありませんよ」

「あーっ！ 鬱陶しいそのものの言い方あ！ そういうのがむかつくってんだよね、ルギ魔族は！ もうちょっと空気読んでくれない！？ だからクラスで嫌われんじゃないの！？」

「別にあたしは嫌ってないよー！ ガンガンやってくれて、それこそお祭りみたいで楽しいねえ！」

「キユーエルフルネさんは黙っていてください！ クラス委員長のソラとしては、お二人の退学を強く推薦しますです！！」

「あんたエルフの方が過激じゃん。学級崩壊どころか、学校崩壊しちゃうって。だから、引きこもって出てこれない空気読めない系種族なんだよね、エルフは。ケラケラ」

「あなたこそ、ふざけてばかりいないで、ちゃんとクラス運営に参加してはどうですか？ 歳だけくって精神年齢は幼いんですね」

「……へえ、結構言うじゃん、あんた。気に入ったわ」

「FINE、ルギ、キユーエルフルネー、ソラが、俺の前で言い合いというか

責任の擦り付け合いをする。

でもって、一部では、一触即発のような雰囲気も醸し出していた。

一方で全く無言で、一步引いた様子でその光景を眺めている少女、

「どうでもいい。早く教室で授業の続きをするべき」

種族不明の少女ピノは淡々とコメントした。

とはいえ、小さな声なので、その声はクラスメイト達の喧噪にかき消されるわけだが。

「できるかい」

と一応、俺なりの優しさでツツコミを入れておいた。彼女は純粹に俺がそう突っ込んだ理由が分からず、首を傾げて「？」マークを浮かべる。ま、無理もないか。

「やれやれ、それにしても、相変わらずやかましいクラスだなあ」

俺は彼らの言い争いを見ながら苦笑してコメントをする。

すると、隣のラツカライが泣きつくように言った。

「先生、ボク、どうしたらいいのか分からなくて……」

とすがりついてきた。

（おいおい、お前が先生なんだから、しっかり面倒をみないとだめ



だろう)

などと言うのは簡単だが、そんな容易にこのクラスがまとまるとは最初から俺だって思っていない。

というか、この学校を設立しようとしたときに、成功すると思った人間はほんの僅かだろう。

だが、こういう状況ですべきことは、どんな時も変わらないものだ。ビビアたちを育てた時も、そうだった。

「FINE」

「は、はい……」

俺はまず人族の少女に声をかける。怒られると思ったのか、若干委縮気味だが、

「先ほどのスキル ステルス だが、なかなか良かったな」

「ほへ？」

いきなり褒められるとは思わなかったのか、FINEが驚いて、今まで合わさなかった目を俺に合わせる。

「相当練習したんだろう。とはいえ、実戦まではあと一歩といったところだな。足音が完全には消えていなかった。耳の良い相手だと逆<sup>モンスター</sup>にやられる」

「!? み、見てくれていたんですか!?!」

「当たり前だろう? お前が日々頑張っていることくらい知っているさ」

そう言うと、彼女は喜色満面になる。元々かなり感情豊かな少女なので、褒められれば喜ぶし、怒られたらへこむ。

「ただ、お披露目したいからと言って、授業中の喧嘩で使うものじゃない。何せ切り札は見せない方がいいからだ」

「き、切り札?」

「ああ。手の打ちはあまり明かすな。仲間であっても、な」

「べ、別に仲間じゃないです! ルギなんて!」

「そうなのか? 上達したのを見せたくて、わざわざあのスキルを喧嘩にかこつけて、使ったのかと思ったぞ?」

「ち、ちちっちちっちちっちちちがうし! じゃない、違います!?! た、ただ……」

彼女はちらりと彼を見てから、

「人族の斥候スキルは魔族でも気づかないレベルの時があるって言ったから、それを見せてやりたくて。それだけだし!」

顔を真っ赤にしながら、フィネはブンブンと首を振った。

やれやれ。

さて。

「ルギもだ。魔術 ブラトリオン の蝙蝠の数が100匹を超えていたな。相当努力しているようだ。偉いぞ」

「えっ、あっ、その。は、はい。ありがとうございます。べ、別に練習なんてそれほどしているわけではないですがね……！」

彼はそっぽを向いて否定する。

だが、

「そうなのか、ソラ？」

俺はエルフの少女に聞く。

どうして彼女に聞くのか、と言う顔をしますが、彼女は淡々と、

「ルギったらなかなか放課後帰らないで、校庭の隅っこで隠れてずっと技の練習してるんです。ちなみに、フィネは競技場の隅に隠れてよく練習してます。どうして隠れる必要があるんでしょうか。努力するのは素晴らしいことなのに」

「っていうか、お前見てたのかよ!？」

ルギが赤面しながらツッコんだ。ソラは当然の様に耳をピコピコと動かしながら、

「当たり前でしょう。学級委員長をなめないで欲しいですね。クラスの万事を掌握し、手の平のうえで転がすように運営するのが、学級委員長の役割なんですから。」

「ご苦労様だな、ソラ」

「ありがとうございます、アリアケ先生！」

えっへんとはかりに胸をはった。

一方、フィネとルギはもじもじしながら、

「……だってフィネが魔族の技は派手でかつこいいて言ってるから、ちよっとそう言う技を見せてやるうかと思ってる……。だからフィネにアツと言わせたくて……。それだけです！」

双方、こういった言い分や背景があったわけだ。

一面的に見てしまえばただの喧嘩だが、ちゃんと話を聴けばそれぞれに事情があることが分かる。

あつ、それから、

「ソラ。ちなみに、学級委員長にはそこまでの役割は求めていないので、後で一回話し合おうな」

「さて、私はそろそろ帰って宿題をせねば」

「学級委員長が堂々と早退するな」

まだ授業中である。

「それからキュールネ も。もっとクラスになじむようにしろよ。竜の山では、なかなか他種族と交わる機会もないだろう？ もっと楽しんでいけ」

あたしは関係ないという雰囲気であっていたキュールネ にも声をかけた。

彼女は意外そうに、

「あたしにも説教かい？ でも、あたしは何もしちゃいないよ」

「それが問題だと、俺は思っただがな？」

「はい？」

俺の言葉にキュールネ は首を傾げた。

ついでにソラは抗議の声を上げる。

「アリアケ先生！ キュールネ はとんでもない不良ですよ。フィネとルギの喧嘩を煽ってばかりいました。悪質な愉快犯です！ 不良です！ 悪・即・退学！」

なるほど。

まあ、

「ソラにはそう見えたか」

「へ？」

ソラは俺の言葉の意味がよく分からないとばかりに首を傾げる。

「ま、時間はかかるだろうが、それも仕方ないか。何せ寿命も考え方も違う。それに、本人も無自覚のようだしなあ」

俺は呟くように言ってから、パンパンと手をたたいて、

「お前たちには授業の一環でダンジョンに潜ってもらうことになる。だから色々修行をしてもらってはいる。だが」

俺は皆の心に伝わるようにゆっくりと言う。

「お前たちは種族が違う。考え方も違う。だから、修行していたことを照れて隠し、いきなりスキルを使ってやりあった方が早いと思う気持ちも分かる。どうせ会話しても話を通じないから面倒だなあ、と億劫に思う気持ちもな。だがな」

俺は微笑みながら言う。

「それでもな、まずは会話してみることだ。本当に大切なのは一歩だけでも歩み寄ること。傍観しているだけでは何も生まれない」

意外なことに、

「話を通じなくても、話しかけるの？」

「そうだ」

「それは……どうしてかしら？」

一番興味なさそうにしていた、ドラゴニートのキュールネ がそっけなく聞いた。

「案外な、話は通じなくても、気持ちは通じるものだからだ」

「ふうん？ そんなこと、あるのかしら？」

彼女は良く分からないとばかりに首を傾げた。

他のみんなも同様だ。

だが、特にFINEとルギは自分の努力を認めさせたい、ということが動機であることがお互いに知れて、少しばかり気恥ずかしいようで、顔を若干赤らめてそっぽを向き合っていた。

可愛いものだ。

「ふっ、昔のビビア達を思い出すな」

「先生、それはきつと、とんでもない過去の美化とかだと思えます。もうホント色々台無しです」

ラツカライになぜか即座に否定された。

なぜだ？

まあ、とにかくにも、多種族学園のこの学校では、この手の喧嘩

ややりとりがとにかく多いのであった。

そして、それぞれに言い分があったりもする。

大事なのは、それを頭ごなしに否定するのではなく、ちゃんと理由を聞いて、もっと良い解決策を提案してやることである。いや、そうじゃない。解決できると思うことはおこがましいことなのかな。

『だから、話を聞くだけでもいい』

それだけで、案外ヒトというのは、わだかまりを解消したりできるものなのだから。

ラツカライにはそのことを伝えたつもりだったが、うまく伝わっただろうか？

と、そんなことをしているうちに、

「お腹が減った。アリアケ先生」

あっちを見たり、こっちを見たりして、一切会話に加わってこなかったピノが、グーとお腹を鳴らした。

それと同時に昼時を知らせる『チャイム』という自動音声魔法機器が作動し、昼食時間になったのであった。



164・種族いろいろ（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

-----

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「FINE、ルギ、キュールネー、ソラ、ピノは一体どうなるの!?!」  
と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

165・仲良くさせるには？

165・仲良くさせるには？

「いやあ、なかなかあれだけの種族を仲良くさせるのは難しいな」

俺は職員室に戻ってきて、微笑みながら言った。

ラツカライが何があったかと、どういう対応をしたのかを説明した。

「どうしたら仲良くなってくれますかねえ。やっぱり時間をかけてゆっくり……」

そうラツカライが話していると、

「それは手ぬるいと思うのじゃ！　そこは、ビシバシーっと、指導！　指導！　指導なのじゃ！」

コレットがザ・スパルタな意見を言った。

「コレットちゃんは意外とスパルタな先生ぶりなんですよね。意外なこと」

「だってアリシア。あいつら幾ら言い聞かせても反省も何もしとらんのだじゃ！　ならばここは鉄拳制裁なのじゃ！　最悪プレスなのじゃ〜！」

「お姉様、それは校舎が消失しますって」

「そうですねえ。とりあえず腕立て、スクワット1万回ずつとかにしましょうか。パワーは全てを解決しますし」

「あはは、それは人体が消滅しそうですね（汗）」

ラツカライが苦笑した。

「とはいえ、実はこの中で一番気苦労しているのはラツカライだろう。すまないな」

俺がそう言っていると、ラツカライは驚いた様子で、

「え？」

と言った。

「ラツカライの受け持ちは、もちろん槍の訓練ということで、実技も担当してもらっているが、本命は家庭科や一般教養<sup>マナー</sup>関連だ。あれだけ個性的な生徒たちを一度に教えるのは大変だろう。すまないな」

「え、そ、そんな。私なんかを労わってもらって、その大したことは出来てませんし」

「謙遜ぐせがあるなあ、ラツカライは。あまり無茶しないでくれよ。お前が頑張ってくれていることはよく分かってるんだから」

「は、はい！ 私のアリアケ先生！」

ラツカライがなぜか瞳を輝かせ頬を染めながら言った。

「はー、この朴念仁。朴念仁。朴念仁。隣に新妻がいるというのに」

「す、すみません、お姉様、そんなつもりでは!?!」

「分かってますよー、ラツカライちゃんが悪くないことは自明の理ですからねー。悪いのはこいつですよねー。大賢者さーん」

なぜか、ゴゴゴツゴゴゴ……、という効果音が、俺の隣にいるアリシアから上がる。

「一体、なぜだ?」

時々本当に身に覚えのないことで、こつやっつてアリシアからプレッシャーを受けることになるのだ。

先日、邪神を倒したが、その比ではない。とまあ、それは大賢者ジョークだが……。

「まあ我は歴史や言語担当ということで、少ない科目しか受け持つておらぬので偉そうなことは言えぬが……」

と、俺たちのやりとりをのんびりとした様子で眺めていたフェンリルが口を開いた。

なお、今は狼の状態であり、ローレライが時折モフモフとしている。

彼女は人型の時は雪のような美しいロングストレートのヘアスタイルだが、狼の際は美しく青い光沢の毛並みとなる。その手触りは触

っているだけで夢見ごっこになるほど柔らかい。

モフられるのは人を選ぶようだが、ローレイのことは「良い根性をしている娘」ということで、モフる許可を与えているようだ。

なお、今は不在だが、この辺境国の斥候を担当してくれているバシユータは、モフロうとしたら、片腕が氷ついた状態で発見されることになった。なかなか厳正な審査基準があるのだなあ、と思った次第だ。

なお、俺はモフってOKである。モフるようにすり寄ってくることもある。また、その際にアリシアが追っ払うこともあったりして、モフれる機会はそれほど多くは無い。

えっと、何の話だったか。

ああ、フェンリルの教育方針の話だったな。

「その場その場で臨機応変にする必要があるのではないかのう？ 種族ごとに、あともっと言えば個人ごとに考え方に相当違いがあるう？」

彼女はアンニユイな雰囲気で言葉を続ける。

「例えばのう、人族の子フィネなどは、打たれ強いのが一方、幾ら叱つても馬耳東風であつたりするときが多い気がするのが欠点ともいえる。じゃが、誰とも分け隔てがない。一方で、魔族の子のルギはやられたらやり返す、が徹底されているのう。魔族ゆえかの？ だが、個人としてみれば、相当に生真面目な男子であるがゆえ、あまり厳しく叱責すると、予想以上に気にしていたりもする。割と

他人との接触到にデリケートな感じもするし。そのあたりのバランスに気を付けてやらねばならぬのではないかのう?」

そう、実は人間は案外耐久力が高かったりする。逆に魔族はそれほど攻撃的ではないが、正当防衛の時は割と徹底的にやる、といった特性がある。

そして、個人レベルで言えば、コミュニケーションレベルは千差万別だ。

アリシアは頷きながら補足するように、

「あとエルフは、エルフらしい潔癖さをもっていますね。ただ、視野は広いのですが、かなり偏見もあります。排他的な意見も結構言いますからね」

よく退学退学とクラスメイトに言っているからな。

「あと、キュールネはクラスメイトにあまりとけこめてないんですが、あれは逆にドラゴンらしいっちゃらしんですよね」

「僕はすぐに旦那様と打ち解けたのじゃ!？」

「どつちかが例外なんだろうさ」

まあ、どちらが例外かは分かりやすいと思うが。

あとは、ピノ。一見人族に見えるいで立ちだが、実は別種族の彼女だが……。

しかし、彼女に言及する前に、コレットが叫んだ。

「むむむむむ！ 一人一人で対応を変えぬといかんのか！ わしには難しいのじゃー！！ じゃじゃじゃじゃー！」

「まあ落ち着け」

なでなでと俺はコレットの頭を撫でる。

「しかし。うまく出来る自信がないのじゃ、旦那様。あやつらを仲良くさせるなんて。むにゅにゅにゅ、わしは先生失格かもしれん」

「そう考えられるうちは大丈夫だと思うぞ？」

なでなで。

「え？」

おとなしくなでられながら、コレットがきよとんとした表情で見上げた。ちよつと涙ぐみながら。

「俺たちだって先生一年生だからな。いきなり何もかもうまくいくはずがないんだ。手探り手探り、それこそ今日みたいに皆で話合いながら、どうすれば生徒たちのためになるか、考えながらやっていくしかないんじゃないかな。何しろ、多民族の学校というのは前例がないから、何もマニュアルがないわけだし、正解なんてないんだよ」

「それでいいのか？ 失敗しても？」



「いいさ。まあ無責任と言われるかもしれないが、それは外野の意見というか、無責任な遠吠えみたいなものだ。気にする必要はない。俺たちが目指すのは、100年後の世界だからな」

「まあた、壮大なことを言い出す」

アリシアが呆れた口調で言う。

だが、別にその瞳は茶化している様子ではなかった。俺の心情を一番理解しているのは、彼女なのだ。そのことは疑いを持つことは一生ないだろう。

「100年後にあらゆる種族が当たり前のように交流できる世界。その橋頭保<sup>きょうとうほ</sup>。きっかけを作ろうとしているんだ。気長に行こう。それに……」

俺はそう言って、皆を見渡し、

「俺たちだって、別に誰かが強制したから仲間になったわけじゃない。彼らも一緒だ。いろんなイベントをのりこえてきつと良い仲間になれるだろうさ」

「本当かの、大丈夫かのう」

「案外心配性よのう、このドラゴンは。我は見ている面白くてよいがのう。きつと良い母になりそうであるなあ。教育ママになるのではなかるうか？」

「なっ！？ それとこれとは別なのじゃ！？」

なぜか全然別の話題が始まってしまったが、ともかくこうして日々、俺たちもクラスメイト達のことを気にかけてながら、授業を進めているのだった。

（まあ、そういう意味では実技を少し多めに取り入れてもいいのかもしれないな）

そんなことを少し思ったりした。

165・仲良くさせるには？（後書き）

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「人魔同盟学校は一体どうなるの！？」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 166・実技

### 166・実技

（アリアケ視点）

「さて、今日は実技科目だな。どこからでもかかってこい」

実技科目は大きな平野を使用して行う。

丘や川がある場所で行うこともあるが、今日は学校の近くの広場グランドで行うシンプルな内容だ。

実技の内容は、教員である俺に、生徒たちが日頃の修行の成果を実戦で試すというもので、特に禁じてもない。

（科目の中でも一番、生徒たちが好きな科目だったはずだ。歴史とか外国語とか、机上の勉強は眠くなりがちだしな）

それはビビアたちを指導した経験を思い出して苦笑する。

だが、意外なことに、生徒たち5人はぽかんとした表情を浮かべていた。

誰一人かかってこない。



「ですが、先生はバックアップの天才ですよ？ 僕たちはまだ生徒の身ではありませんが、それなりの攻撃方法をすでに修得しています。実戦だつてこなせるほどに！ なので……」

「なんだ。俺を倒してしまうことを心配してくれているのか？」

「えっと、その、まあ」

「ちょっと、ルギ！ あんたアリアケ先生に対して失礼じゃん！」

人族のFINEが怒声を上げるが、その言葉のニュアンスはルギの言葉の内容を否定したのではなく、言い方に対する文句だと言える。

「あいつらちょっとプレスしてくるか」

「お姉様すとーっぷです！ すとーっぷ！」

遠くからやんごとないやり取りが聞こえてくるので、俺は少しばかりはつきり言っておくことにした。

「お前たちは優しいな。まあ、確かに普通ポーターや支援術士といった、俺の様なタイプに集団でかかれれば、普通負けなと思うのも無理はない。だがな」

俺は微笑みつつも少しだけ声のトーンを落とす、

「その程度の実力で俺の相手になると思えるとは思わないことだ。俺なら、今しゃべっている間だけでも、お前たちを100回以上倒

せる」

「「「「!?!?!?!?!」」」」」

普段から何を考えているのかわからないピノ以外、全員が俺のプレッシャーを感じたように、今まで持っていた余裕をなくす。

「あー、すまんすまん。脅かすつもりじゃなかった。だが」

伝えたかったことはこれだ。

「そんな甘い認識では。ダンジョンに潜った途端死ぬ。冒険のクエストで失敗して死ぬ。野盗やならず者に負けて死ぬ。だから、そういった油断は今後一切禁じる。できるだけ肝に命じておいてくれ」

そう言うと、彼らは半信半疑ながら、納得したようだ。

「まあ、戦ってもいないのに、納得も無理か。さ、だからこそ、だ」

俺は杖を取り出して、

「一斉でも、一人ずつでもいいぞ。かかってこい。そして自分の実力を確認するといい」

その言葉に、生徒たちの目つきが、普段の日常生活のものから、戦闘態勢へのものに変わったことが分かった。



『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケ VS 生徒達は一体どうなるの!？」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

167・実技/実践編

167・実技/実践編

「んじゃ、あたしからだあ!!」

人族のFINEが宣言するようにこちらへと駆け出してくる。

「馬鹿! 作戦を立てないとダメだろうが!」

反対に、魔族のルディがたしなめるように言うが、後の祭り、FINEは剣(といっても模擬戦なので短めの木刀)をかまえて突っ込んでくる。

(ふーん、なかなかいいな)

と俺は内心で感心している。

一方で、遠くのコレットとラツカライもそれぞれ、

「良いぞFINE! そうやってガーっといって、そんでもってちゅどーんじゃ!!」

「いやいや、もっと慎重な方がいいですって、お姉様(汗)」

といったコメントをしている。

(あの二人も成長しているな……)

俺はそんなことを考える。

生徒を教えることは、自分がいままで感覚的にやってきたことを、  
明文化して伝える必要がある。そのことが自分の成長にいかにも有効  
かは、ビビア達を育てた俺の記憶からも確かだ。

さて、

「のんびりしてる暇はないよ！ 先生！ スキル 一点突破 ！！  
ちよりゃああああああああああああああ！！！」

大声を出してフィネが切りかかってくる。

大上段。

大きく振りかぶってからの一撃だ。

スキル 一点突破 は、斥候職に特有のスキルで、本来追い詰めら  
れることがない斥候職が敵に追い詰められたときに、腕力などの底  
力を発揮して攻撃力を大きくアップするスキルだ。

特徴としては 攻撃力アップ のスキルと似てはいるが、スピード  
アップや直感力のアップなど、いくつかの能力アップを兼ね備えた、  
有効なスキルである。

とはいえ、

「それを大声で叫ぶ意味はない」

「ぎく!?!」

フィネは体が小さいが、この学園の生徒たちは全員、マントを羽織っている。

だから、大きく動けば。

例えば、今回の様にフィネが大上段で動けば、相手の視界を奪うことが出来るのだ。

「例えば今回のようにな。スキル 魔法耐性アップ 付与」

俺は大上段で切りかかってくるフィネの『物理攻撃』については、『無視』して、『魔法耐性』をあげた。

そして、

「そろそろ、回避行動しないと、お前の背中に直撃するぞ、フィネ」

「えっ!?! ちよっ!?! まっ!?!」

フィネは焦りながらも空中で体勢をねじるようにして、俺に直接攻撃を仕掛ける前に、その視界から消える。

そして、その真後ろでは、

「ちよっと、躲すのが早すぎますよ! ええい、もう! 精霊魔法



「悪くない戦略だが。あまりよくない発想だ。お前のは連携ではなくて、謀略のようなところがある。仲間たちともっと連携を深めれば、もっと良い結果になる」

「そうですか？ 私にはそうは思えないのですが？」

「やれやれ。コレットはうるさいくらいにべったりだが、お前はそっけないな。同じゲシュペント・ドラゴンだというのに」

「末姫様のことは、言わぬが華ですわ！」

「おっと？」

攻撃力アップ 付与

防御力アップ 付与

スピードアップ 付与

回数付き回避 付与

「あら、生徒相手にそれほど本気にならなくても宜しいじゃないですか？」

「本気でそう言っているなら間違いだ。俺は油断すれば素人にだって負ける。俺は万能だから強いのではない。万能を万能たらしめる才能があるから、最強であるだけだ」

「これはやっぱりまだ私では勝てませんわね」

彼女はそう言って剣を引っ込んで後退する。

「訓練だからかかってきて欲しいところだが……まあ、実戦訓練だ。それも一つの判断だろう」

プララあたりがしそうな判断だと思いつつながら、俺は構えを解く。

と同時に、

「はあ！！！！」

「スキル シャドー・セルバンティス か」

俺との戦いの最中に何人もの影が入り乱れている。その隙に魔族の子ルギが使ったスキルが シャドー・セルバンティス だ。

影に自分の分身ともいえる存在を潜ませるスキルであり、攻撃力はそれほど強くないが、不意打ちを仕掛けるには持ってこいの技だ。

乱戦になるのを見て、とっさにスキルを発動したのだろう。

ただ、

「ルギの魔力は特徴があるからな」

俺はそう言つと、その影を手持ちの剣を抜き、ぱつぱつと両断する。

すると、



「う!？」

少し離れてこちらを睨んでいたルギが片膝をついた。

「すまん、大丈夫か？ 手加減はしたつもりだが」

「は、はい。だ、大丈夫です。でも、すぐに見破られてカウンターを喰らうとは思ってなかったもので、驚いてしまって……」

「あまり筋書通りに行くと思わないことだ。戦いはトラブルの連続だからな。今のでちょっとは体感しただろう。一つ成長したな」

「!？ は、はい!!」

ルギが嬉しそうにうなづいた。

彼はまじめな学生なので、褒めてやると良い。

さて、それはそうとして、

「おーい、ピノ。お前は何もしてこないのか？」

そう言うと、遠くで体育座りしているピノは、いつもの何を考えているのか分からない半眼をこちらに向けると、

「？」

首をこてんと横に倒した。

「ちょっと、ピノ！ ちゃんと協力してくれないと先生倒せないで

しょ！ ていうか、あなたどうしてこの学校に入ったの！？」

「それはそうですね。しっかりと授業を受けられないなら、悪・即・退学です！」

FINEとソラがプンスカとしながら言った。

自分たちは得意になって仕掛けた攻撃が、瞬時に看破されたうえに、俺に「実戦まで程遠い」と言われて憤懣やるかたない二人が文句を言ったのである。

だが、その二人をピノはぼんやりと見やるだけだ。

「ピノはまだ体調が良くないんだ。今日は見学だ」

「なんかピノだけ見学多すぎるって感じ！」

「そうですね！ 不公平な気がします！ ピノがいればもっと連携に幅が出ますのに！」

そんなことを言っている。

まあ、確かにピノの扱いは難しいだろうな。俺にとってもそうなのだから。

さて、とりあえず模擬戦としては一定こんなものだろう。

コレット、ラツカライもここぞ講評を口にしていた。

「なっ、言ったじゃろ？ FINEがバーンと行って、その後ろから

ソラがドドドドーンじゃ。ちーとばかり、連携がうまくいっておらんかったけど、練習したらもっとうまくいくし、いろんな戦術に応用可能なのじゃ」

「ああ、そういう意図で言ってたんですね。お姉様語に早くなれないと。キュールネ やルギは臨機応変な対応がいいですね。もう少し仲間との連携を念頭においてもらえるといいんですが」

「しかし、あまりそれだけでも攻撃が硬直的になりすぎるのじゃ。案外、勝手なことをする奴がいても良かったりすると儂なんかは思ったりする」

「僭越ながら、それは多分、Sランク冒険者くらいからの話のような気がするんですね。彼らはまだよくてCランクくらいかと思えますし、まずは基本的な連携が大事ではないでしょうか」

ふむ。

なかなか白熱した議論をしていて、両者の議論にはどちらにも分がある。

だが、今回の戦いで見えたのは、連携しようとする者としめない者の差が激しいこと。

そして、それが実際のクエストで大きなミスにつながるのではないかという点だ。

そのことを今日の授業では実践形式で伝えたいつもりだが、必ずしも伝わっていると楽観はしない。

子供の心に伝えるには、何度も同じ言葉で粘り強く語り掛けないと  
いけない。

それが学校というものだと思うからだ。

ともかく、こうして本日の実技科目は終了したのである。

ただ、

（色々な課題はあるが、やはりこうして何かを教えるのは楽しいな。  
何か一つでも、彼らの学びになってくれると嬉しいのだがなあ）  
そんなことを、やんややんや、言い争ったりする彼らを眺めつつ思  
うのだった。

167・実技/実践編(後書き)

『小説』第3巻発売中! & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中!

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます!

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ!!

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyparty/>

.....

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「生徒達は一体どうなるの!?!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 168・ひそかに迫る闇

168・ひそかに迫る闇

〈魔族の少年ルギ視点〉

「今日の実技、全然役に立つことができませんでしたね」

ルギは落ち込みながら、自分に割り当てられた学生寮の一室にいた。

実技の時に切り札とも言えるスキル　シャドー・セルバンティス  
を使用した。

正直言つて、まさかあれほど簡単に見破られるとは思っていなかった  
のである。

アリアケ・ミハマ先生は、この中立国オールティの国王でもあり、  
校長でもある。

そして、これは公にはされていないが、この世界の危機を邪神より  
救った中心人物なのだそうだ。

だが、その役割は賢者であり、まさか一人でこちらの攻撃をあれほ

ど余裕で全て跳ね返されるとは思ってもみなかった。

(特に僕の技は完璧だと思っていたのに、ああもあっさりと……)  
とまあ、そんな感じで、同じ思考をグルグルグルグルして、落ち込みのスパイラルに入っているのだった。

あのうるさいフィネなんかは、そんな様子をもし見かけたら、背中あたりを思いつきりたたいて、次は頑張ろうな!!! とあの無意味にうるさい声で言ってくるのだろうが、いま彼女はいない。

多分、今日のアリアケ先生の訓練を受けて、修業の熱が燃え上がったのだろう。今頃、修練場のどこかで修行中だろう。

(やれやれ。人族らしい野蛮さですね)

どうも彼女のあの押しが強さが好きになれない。あれが魔族に戦争を仕掛けてきた人族の攻撃性のような気がするからだ。だが、一方でそれだけではない気もしていた。今だって、

(もし、彼女がいたら、落ち込んでいる僕を見て、背中をおもいきりたたいて……)

大声で修行にいきこうぜ! とでも言うだろう。

だが、

「ああ、そうだな。お前が思っていることはゼーんぶ正しいぜえ」

「えっ?」



その時、僕に声をかけてくれたのは、あの馬鹿みたいに明るいフィネではなく、別の人族の男性だった。

しかも、それはとても有名な方だった。

「勇者ビビア……様？」

どうしてこんなところに？

僕はとっさにそんな疑問を浮かべたが、別にいてもおかしくはないのかもしれないと思いなおす。

勇者ビビアはアリアケ先生の教え子であり、先生の指示のもと、一緒に世界を救ったメンバーの一人だと聞く。魔族にとっても積年の好敵手だけど、邪神が倒されてその必要はなくなった。（と魔王様から聞いている）

ただ、

（あれ？ 扉が開いた音はしなかったような？）

というか、

（そもそも、自分の性格上、鍵をかけていたと思うのだが……。忘れていただろうか？）

そんな疑問が浮かんだけれど、

「どうやらもっと強くなりてーって顔だなあ、おい」

「わ、分かりますか……ははは、お恥ずかしい」

自分がそんな表情をしていたことを、勇者様に見られて僕は恥じる。けど、勇者様は逆に大笑いしながら、

「馬鹿か！ 強くならなくちゃ、意味ねーだろうが!!」

「意味がない？」

「そつだよ」

勇者様はフンと鼻を鳴らすと、

「おめーがよわっちーから、人族に馬鹿にされたり、あのドラゴニユートにも呆れられてるんだろうが！ エルフには見下されてよう」

「別に彼女たちはそんな風には思ってたなんか……」

「ああーん？」

勇者様は心底馬鹿にしきつた顔をあれて、

「本当にそう思ってたのかあ？ 知ってたんだろ？ あいつらはお前を出し抜こうと一生懸命修行してんだぜえ？」

「出し抜こうと？」

「そつさ！ だから、実技科目が終わった後、誰もお前を誘って修

行しようとはしなかったんだ」

「そう……なんですかね？」

なるほど。そうかもしれない。今回の戦いで負けた原因は連携の弱さだとアリアケ先生は言っていた。それなら、今その修行をしていないのは、僕抜きで強くなるうとしていているから？

「ああ、だが、俺はそういうイジメっていうかよう。誰かを陥れるっていう考えが大っ嫌いなんだ！へへへ、勇者だからよう。だから、特別にお前だけに力をつけてやるうかと思って、来たわけさ。俺の正義感がおめえを放っておけねえってなあ。まあかつては勇者は魔族の大敵と思われてたと思うが、ここはいつちよ水に流して仲良くやるうや！」

（出し抜く？ 彼女たちが？ 本当に、そうだろうか？ 分からない……。でも）

僕は勇者様の言葉をもう一度咀嚼する。そして、

（強くなる。それは確かに必要なことだ）

もしアリアケ様の一番弟子たる勇者様から修行をつけてもらえるなら、それは願ったりかなったりだろう。

「強くなりゃ、あいつらいけすかねえクラスメイトをギャフンと言わせられるぜえ！」

その言葉で僕の決心は固まった。

「強くなれば、彼女たちを……。分かりました、宜しく願います」

「ああ、こちらこそだあ。んじゃまあ、時々連絡を入れるからよ。もちろん、このことは誰にも他言無用だぜえ？」

「えっ、あっ、はい。分かり……」

分かりました、と言い終わる前に、勇者ビビア様の姿は幻のように消えていた。

ただ、一振りの短剣だけがそこに残されていた。

『いざというときの護身用だ。肌身離さずもっておけ』

そう書かれたメモが一枚だけ添えられて。

そんなわけで僕はこの日から時々、勇者ビビア様に修行をつけてもらうことになったのである。

決して他言だけはしないようにして。

168・ひそかに迫る闇(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「ルギは一体どうなるの!?!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 169・ダンジョン攻略をやってみよう

169・ダンジョン攻略をやってみよう

） アリアケ視点 ）

「さて、今日の授業が何か、分かっているな？」

俺の問いに、一番元気なFINEが真つ先に答えた。

「待ちに待ったダンジョン攻略に決まってるじゃん！ じゃなくて、ます！ 今から楽しみ〜」

「遊びに行くわけではないからな？」

「分かっています！ そこは、はい。冒険者の娘なので！」

と言いつつも、FINEの顔は喜色満面といったところだ。

まあ、これが油断と言つべきか、意気軒昂いげけんほうというべきかは微妙なところだ。

冒険者稼業など、全員それなりにスリルを求め、気合がないと出来ない、アウトローだから、彼女の態度はむしろ普通だともいえる。まあ、そのあたりは俺がサポートすればいいか。それに、

「勝手はこのリーダーのソラが許しませんよ！ ダンジョンを走ったら校庭100週です！」

「ダンジョンと学校の廊下を混同しているリーダーがいる冒険者パーティーがいるらしいけど、大丈夫かしら、アリアケ先生？」

キュールネ が呆れた様子で言った。

「まあ大丈夫だろう。それに学校の廊下より、ダンジョンを走るほうが危ないしな」

「モンスターに見つかりますし、畏にもはまりますからね」

ルギがまじめな様子で頷いた。

「論点がずれてるような気がするけれども。まあいいか。ピノ、あなたはと思うっ？」

あまりしゃべらず、今もキョロキョロとしているピノに、キュールネーは話しかける。

「晩御飯までには帰って来たい」

「あら、それは重要な指摘ね。野宿はお肌に悪いから」

「ダンジョン内での野営は予定していないから、そのあたりは心配ないと思うぞ。早朝に入って、夕方には出てくる。目的は一度ダンジョンがどんなものか、実際に見ること。弱いモンスターと戦ってみることだ。ダンジョン名は『深淵のダンジョン』で300階層あるが、今日は10階層まで踏破することを目的にする」



「先生もついてくんの?」

フィネの質問に、

「もちろん。俺が付いて行こう。これでも支援は得意な方なんだ」

俺がそう言つと、生徒達全員から、

『得意とかそういうレベルじゃないよね?』

という生暖かい視線を向けられるのであつた。

ともかく、かくしてクラスメイト+同伴教師一名(俺)は、近隣のダンジョンへと赴いたのである。

さて、『深淵のダンジョン』であるが、10階層まで出てくるモンスターは強くない。

せいぜい、ゴブリンやスライム、コボルト、人食いバットといった、Dランクレベルのモンスターである。

なので、

「ウインドブレス！ よし、スライムどもを壁に追いやりました！ ルギとどめを！」

「分かった!!」

「3匹いっぺんだと、手が足りないでしょ! 手伝うよ!」

「追い込みもいいですけど、頭上が少しがら空きですわよっと!」

「ピノもやるー」

子供たちでも、俺たち優秀な教師陣の訓練を受けている彼らからすれば、余裕のある戦いになる。

本来、ダンジョン攻略というのは、これくらい余裕のある状態でやるほうが好ましい。

勇者パーティーにいた時は、やたらと高ランククエストを受けようとして辟易していたものだが。

まあ、ビビアとしては、そうやって少しでも世界平和に貢献しようとしていたのだろうが。

「いえ、アー君。あれはただの名誉欲ですから。げひひひ、これでまた金と女が入れ食いだぜええ、って言っていたでしょう?」

「おっと、そうだったか? もしそうだとしたら、最低だなあ」

「もし、ではなく、事実なんですがねえ」

さて、このダンジョン攻略に同伴するのは、俺だけのつもりだったのだが、アリシアもついてきてもらうことになった。理由を聞くと、

「将来のためです」

「将来？」

「えーっと、まあ子供ってどう育つのか、私としても個人的によく見ておきたいな〜、と。」

そう言って頬を赤らめるのであった。

なるほど。

ごほん。

あー。

俺は返事をせずに、ただ頷くにとどめた。別に言葉にしなくても、お互いの気持ちを理解しあっていればそれでいいからだ。

ちよつと話題を変えた。

「連携もいい感じだな」

「ですね」

アリシアも教師の顔にすぐ変わる。こういうところは、さすが教会の序列第3位の大聖女である。

「この前のアリアケさんの実技訓練が効果を発揮している気がしますね。全員で敵に向かって行動しています。ルギやフィネが目標に

目を奪われがちになったところを、キョールネ　さんがすかさず、頭上からの人食いバットの襲撃を防ぎました」

「ドラゴンでも案外ああいうサポートタイプの奴もいるんだな」

「コレットちゃんと見ていると意外ですよ。やっぱり、何でも見ておかないと」

そんなやり取りをしている間にも、FINEがマップを作りながら、進んでいく。

それほど広いダンジョンではないので、地下第2階層へ下りる階段を発見した。

「よし、じゃあ下りようぜ！　みんなー！」

FINEが元気よく一歩踏み出した。

が、

「おっと、ストップ。まだ2階層へ行くのは、危ないな」

「へ？」

俺に首の襟元をつかまれて、猫のようにぶら下げられたFINEがポカンとしていた。

「先生、心配しすぎだつて！ まだ低階層だよ！！」

抗議するような声だが、

「よく観察しろ。ダンジョンのごつごつした岩肌に比べて、この階段は少し綺麗すぎないか？」

「あれ？ そう言えば？」

「つまりな」

俺が一步踏み出すと、

『いただきまーす！！！！！』

階段かと思われた空間が、いきなり大きな口のようになり、俺を丸のみしようと襲い掛かってきたのである。

「「「「「つわあ！？」」「」「」

「ということがありますのでね」

『つが？』

イリユージョン

幻影の俺を丸のみし、歯ごたえのなかったモンスターは、何が起ったか分からないといった表情を浮かべる。

攻撃力アップ 付与

「アリシア、頼む」

「あいあいさー」

彼女はそう言つと、一歩、二歩と進む。

「ちょっと、アリシア先生、あぶなっ……!!」

ルギが慌てた声を上げる。

無論、可憐で緘手せんしゅなシスターがモンスターに素手で近づいたら誰でもそう叫ぶだろう。

しかし、

「三步必殺、聖女さんパンチ!!!!」

ズドン!!!!!!!!

その正拳突きはモンスターを貫通し、その奥の壁がひしゃげるほどの攻撃力を発揮する。

「スキルはいらなかったな」

俺は苦笑するが、

「いえいえ、こうやってアリアケさんにスキルをかけてもらつと、守られてるって感じで、スキル以上のパワーが出るんです。これからも宜しくお願いします」

よく分かんが、そういってらしい。

ま、それはともかく、

「や、やっぱ、さすがアリアケ先生だなあ」

「うん、本当にすごい」

「奥様のアリシア様もすごいです！ これはお似合いカップルですね！」

「ていうか、この二人だったらドラゴンより強いんじゃない？」

「さすがー、アリアケ、アリシア」

生徒たちが歓声を上げていた。

「お前たち、感心するのはいいが……。ダンジョンとはこういふところだ。ちよつとの変化に気を付ける。そこに大きな罠が眠っていることがある」

「はい！」

返事を受ける。

とはいえ、

「これはミミックの一種だな。低レベルで階段化けるタイプだ。だが1階からというのは珍しい」

「ですね。うーん、聖女さんの直感では、少し嫌な予感が……」

そう、アリシアが言った時である。

「う、うわあああああああああああああああ……!」

「助けてくれ!……!」

「なんでこんなところに、あんな……!」

どうやら別の冒険者たちのようだ。

悲鳴を上げながら、別方向からこちらへ走ってくる。

「なんであんな化け物がこんな低階層にいるんだ!……!?……!?……!?」

どうやら、大きなトラブルが発生しているようだな。

やれやれ。

俺は杖を構えなおすと、そちらへと注意を向けたのである。



169・ダンジョン攻略をやってみよう(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「ダンジョン攻略は一体どうなるの！？」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 170・トラブル(トレイン)

170・トラブル(トレイン)

「ちっ、トレインか」

「先生！　トレインってなんですか！？」

俺の呟きに、いち早くエルフのソラが律儀に挙手して聞いた。

「モンスターを引き連れて、他の冒険者になすり付ける行為だ。基本的にルール違反だな」

「あら、では全員万死に値するということですね？」

めらめらと、キョールネの口からブレスの仄かな輝きが見て取れるが、

「空気がなくなるから勘弁して！　人族は死んじゃうからさ！？」

「あら、残念」

どこかからかう口調で、キョールネはブレスをひっこめた。

まあ、俺のスキルがあれば使用できないこともないが、

「戦術として大仰に過ぎるのは確かだ。魔力をケチり過ぎるのも良



「それはいいことなのではないのですか？ ケガでもしていたほうが良かったと？」

魔族の少年ルギが怪訝そうに聞く。

「いや、別に無傷なのはいいんだ。だが、とつさにトラップに引っかけたんだから、普通はもっと、な」

「そうそう。フェンリルさんと遭遇したときなんて、勇者パーティーの皆さん、鼻水と泥と涙で、全身ぐちゃぐちゃだったんですから。それが死命が天秤にかかった時の普通の状態なんですよ」

大聖女アリシアはなんでも無いことのように解説するが、その壮絶な状況を想像して、何人かの生徒はごくりと喉を鳴らしたようだった。

そう。

今の奴ら、確かに息切れはしているように見えたが、防具に違和感を感じたのだ。

そういつた違和感を大事にしないといけないというのは、さっき俺が生徒に教えたばかりのことである。

「ならば実戦あるのみだな。とはいえ、ここは適任者に任せるとするか」

「適任者？ あたしですか！？ この斥候のフィネにお任せあれ！

！！」

「どの世界に戦力分散をさせる指示を出すリーダーがいる」

俺は肩をすくめる。

「フェンリル。お願いできますか？」

俺が肩をすくめている間にも、アリシアが指示を出す。

「やれやれ、神獣使いのが荒いのう」

『ぬるり』

とアリシアの影の中から、白銀の美しい美女が現れる。

フェンリルだ。

「頼みましたよ。主様のご命令とあればテンションもあがるという  
ものよのう」

「主はこの私ですが？」

「アリシアはアリシアよ。にゃっはっはっは」

アリシアが文句を言う前に、フェンリルはトレインパーティーを追  
いかけた。

「鼻がきく彼女が見逃すことはないだろう」

「まあそうですが……。やれやれ」

と、そんなやりとりを見ていた生徒達からは、なんだかひそひそとしたやり取りをしていた。

「あれがオシドリ夫婦ってやつなんだぜ。一言二言しかしゃべってねーのに、あんなけ細かいオペレーションをやっちまうんだからなあ」

「さすがセラ姫様が認めただけのことはあります。ちょっと胸やけがしてきました」

「あら、私はとても良いものを見せてもらっているわよん。山に帰ったら、ああいうダーリンをもらわなくっちゃ」

「皆さん、まじめにしてください。今は先生方のラブラブっぷりに議論の花を咲かせている場合じゃありません！」

そんなつもりはなかったんだが……。

とはいえ、ルギの言う通り、少し距離が離れていたモンスターたちが、姿を本格的に現し始めていた。

「ミノタウロス、骸骨剣士、オーガ。100階層レベルのモンスターだな」

（モンスター発生の畏にしても、少しレベルが高すぎる。だとすれば……）

「アリアケさん。考え事は後です。フェンリルの情報も総合して考えるのが得策では？」

「だな」

俺は頷くと、

「では生徒の皆！」

俺はよく響く声で宣言する。

「これより、探索パーティーは解散。この俺賢者パーティーの一員として再編成する。俺の指示に従え！」

「で、でもあんな高レベルモンスターと戦ったことないぞ!？」

フィネが悲鳴をあげ、他の生徒たちは目を丸くしたが、

「心配するな。むしろ、ウロチヨロしている方が危険だ。俺の戦闘指揮下に入っているほうがむしろ安全だ」

「あ、それは私も保証しておきます。大聖女の名のもとに」

軽いなあ、大聖女の保証。いちおうこの大陸で有数の権威ある保証なのだが……。

だが、俺とアリシアがウインクすると、生徒達が安心するのと同時に、

「……はい、アリアケ先生、アリシア先生!!」

素直に、それぞれ、自分の戦闘位置へついたのであった。



「**トレーニングされた強敵との初戦闘が始まったのである。**」  
モンスター

170・トラブル(トレイン)(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとうございます！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「臨時の賢者パーティーは一体どうなるの!？」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 171・人魔同盟学校パーティー結成&初陣

171・人魔同盟学校パーティー結成&初陣

さて、敵はミノタウロス、骸骨剣士、オーガが1匹ずつの混成か。

「回数制限回避　スピードアップ　攻撃力アップ　クリティカル威力アップ　クリティカル発生率アップ　ブレス威力アップ　物理攻撃力アップ」

「大結界生成　大天使の息吹」

俺とアリシアがすかさず支援スキルと聖魔法を使用する。

「す、すごい。一瞬で幾つもの支援スキルを!？」

「すげえよ!　あたしなんてただの斥候なのに、なんか戦士みたいに力がみなぎってきてるもん!」

「私も今だったらセラ姫様にだって負けないかも!　洞窟ごと吹き飛ばせそうなほどの魔力を感じます!」

ルギヤフィネ、ソラが驚きの声を上げるが、俺は苦笑しつつ、引き続き口を開いた。

「敵へ　防御力ダウン　魔法耐性ダウン　物理攻撃態勢ダウン



「そうですね、強敵を見ると血の気がうずくのでしょうかね」

俺たちは苦笑しつつ、

「ああ。これでお前たちは通常の10倍の力を得た。互角以上に戦えるはずだ」

「あと、私の大結界と大天使の息吹で、敵の攻撃をかなり防ぎつつ、自動回復の効果が発揮されますので、おそらく致命傷は防げるはずです。とはいえ、死なないように気を付けてくださいね」

ニコニコしながら言った。

まあ、死んだらアリシアが蘇生魔法を使うだろうが、緊張感をもって戦ってもらうためには言わないほうがいいだろう。

さて、何はともあれ、

「人魔同盟学校パーティー、俺たち教師陣も加わっての初陣だ。地味に手堅く勝つぞ!!」

「派手にではなくて?」

FINEの言葉に俺は苦笑し、

「そういうのは俺の性分ではないのな」

俺の返事とともに、一番手貰い! とばかりに、キュールネが単身で突っ込んで行った。

それを見て呆れた様子で、すかさずウィンドカッターで牽制するソラは大したものだ。

続いて、FINEがツツコミ、それに遅れまいとルギが突っ込んでいった。

出来ればルギはちょっと様子を見ながら、フォローするような立ち回りの方が良かったんだが、そのあたりの感覚は実戦で身につけていくだろう。

さて、俺たちの支援スキル・魔法によって生徒たちは善戦していた。

回避や結界による防御。

クリティカルがヒットすることによって、数段上の敵と互角の戦いをしていく。

いかに支援スキル・魔法が重要かが分かるというものである。

と、その時、意外なことが起こった。

「攻撃力アップ スキルをルギに使用します」

「?????へ?」

「ほっ」

攻撃力アップのスキルがルギ単独に使われたのだ。

俺の場合は全員に対して、相当の強化度合いのスキル効果なので、ピノのスキルは大した効果ではないだろう。

だが、問題はそこではなくて、

「ピノ！ あなた、支援スキルなんて使えましたの！？」

「……」

ドゴオオオオオオオオオン！！

と、ミノタウロスの頬を張り飛ばしたキュールネ が突っ込みの声を上げていた。

そうなのだ。

ピノと言えば、クラスの中でも浮いた存在。

種族不明、無言、時々意味のあるのかわからない言葉が話す、といった謎の存在なのである。

そんな彼女がこの窮地（いちおうそう言って良いだろう）において、戦力として活躍するというのは、余りにも意外なことなのである。



ただ、それ以上のスキル使用をピノはしなかったので、クラスメイ  
ト達もそれ以上は追求せず、戦闘に注力した。

俺の支援スキルが強力なのは議論の余地はないし、大聖女の聖魔法  
が比類無きものであることも言うまでもない。

何せ、邪神を退けた救世主たちの支援なのだから。

それによって、生徒たちの力は本当に格段に向上していた。

キョールネ はゲシュペント・ドラゴンゆえに、元々の強いという  
こともあつたらうが、フィネやルギ、ソラも格上のモンスターを圧  
倒しはじめていた。

「どっせえええええええええええい！」

フィネの切れ味の増した短剣の一撃が、骸骨騎士の首をはねる！

「よっしゃあああああ！ きつもちいいいいいいいいいいい！！！」

喝采を叫ぶ。斥候が本務の彼女のみれば、こういった目立つ瞬  
間と言つのは快感なのだろう。

「馬鹿！ 油断するな！ デス・ファイヤ！」

と、すかさずルギがフォローに回る。

フィネに向かつて、オーガが突進してきたのを、暗黒魔法で真横か  
ら攻撃したのだ。

おかげで不意打ちになったが、フォローが無ければ危なかっただろう。

「なーに、あんたならやってくれると思ってたぜ！」

グツ！ とフィネが調子のよい様子で親指を立てるが、ルギは不満そうだ。

「打合せもなしに」

「心が通じあってたんだから、いけるって分かるだろ？」

「な、何を言ってるんですか！」

フィネが当然といった様子で言うのを、ルギは顔をプイっとそむけて怒ったように言った。

フィネは不思議そうな顔をするが、

「はいはい。命は大事にしてくださいね。これでおしまいですっつー！！ ウィンド・ソード！！！！」

風で作った剣が、ルギのデス・ファイヤーでダメージを受けて混乱しているオーガを両断した。

ミノタウロスの方はキュールネーが押さえていたが、どうやら一人で倒してしまったようだ。

「よし、戦闘終了だ。初陣にしては、よくやったみんな」

俺は彼らを褒める。と、同時に、

「今回は俺と彼女の支援があったから特別だったことは忘れないで欲しい。本来ならば100階層以降で遭遇する敵だ。今のお前たちのレベルなら、うまく逃げる作戦を立てろ」

「というか、フィネの攻撃は無謀すぎると思います。ヒヤヒヤしました」

ルギが文句を言っている。

「だから信じてたんだってのに」。あたしがそんなに信じらんないのかよー」

べーと、フィネが舌をだして抗議した。しかし、

「いえ、信じられないのは……。僕の力で……」

「？」

フィネは首を傾げるが……。

(ふむ)

そういうことか。

まじめなルギはまだ自分がパーティーに十分貢献できる自信がないし、あてにされると大きなプレッシャーを感じるのだ。

とはいえ、こればかりは実戦を重ねていくしかない。

そう伝えようとしたところ、また意外なことに、

「ルギ」

ピノがルギに話しかけた。

「は、はい？ え？ ピノ？」

「本当に解決出来ないことが起こったら、このセリフを言うといい」  
そう言って、彼の耳にゴニョゴニョと何かを吹き込む。俺にもその言葉は聞こえない。

「は、はあ……」

言われたルギも、何をされているのか、よくわかっていないようだ。

ふむ、だが、どうやら彼のことにはピノが受け持ってくれるらしい。  
なら、

「安心だな」

「何か言いましたか、アリアケさん？」

「いや」

俺は首を振り、

「では、少しアクシデントがあったが、第2階層へ下りるとしようか。スキル支援は解除するから、さっきのようには行かない。十分気をつけてな」

「……はい！」「」

ピノ以外は戦闘後なのか、いつもよりも気合の入った返事をし、

「はい」

ピノはさっきまでの人が変わったような様子はなりをひそめ、いつものよく分からない、間延びした感じの返事をしたのだった。

こうして俺たちは次の階層へと下りて行ったのである。

と……

（あの三人。どいつも赤いアクセサリをつけていたな……）

俺はあのトレインをしかけた三人のことを考える。

（フェンリルはそろそろ、奴らにおいて、拠点をつきとめた頃かな？）

彼女のことだから、心配はしていない。

ダンジョンから出たくらいには、十分な情報が得られるだろう。

いや、何かもつと違うものも持ち帰るような。

そんな予感がする。

なぜなら、

（赤色が……。あの色は確か……。いや、先入観は禁物だな。とはいえ、ずいぶんきなくさくなってきたな。俺のしようとしている事がずいぶんと邪魔らしいな。今回の”黒幕様”には）

そんな曖昧ながら見えてきた暗雲を見据えながら、俺は生徒たちの引率を続けるのだった。

171・人魔同盟学校パーティー結成&初陣(後書き)

『小説』第3巻発売中！ & 『コミック』@ガンガンONLINE  
E連載中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれたみなさんありがとう！

ご購入もしくは【無料】試し読みは下からどうぞ！！

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

-----

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「黒幕って何者!?!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当につれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



172・生徒がたくさん増えました

172・生徒がたくさん増えました

その後のダンジョン攻略は、先ほどのトラブル（トレイン）が嘘のように、順調に進んだ。

10階まで色々課題はありつつも危なげなく進んだ後、1階まで戻ってきたのである。1階の入口の大きな門をくぐりぬければ、

「よし、外だな」

今回の授業はここまでとなる。

「よし、みんなよくやったな。何度も言うようですが、1階でのトラブルは俺とアリシアの支援があつての勝利なので、そこは勘違いしないように。最善手は」

「命大事にですわね。耳にタコですわ」

「珍しいわね。ちゃんとあなたが先生の指導を聞くなんて。ミニミニクが化けているのでは？」

「あら、あなたでも冗談が言えるのね。それ、面白いわよ」

ドラゴニユートのキュールネと、エルフのソラが軽口をたたき合っていた。

ただ、以前であればただの喧嘩に見えたその光景も、ダンジョン攻略を果たした仲間となれば、意味合いが違ってくる。

「信頼と言う背景があれば、じゃれ合いのようなものだ。俺と勇者ビビアたちのようにな」

俺は優しく微笑む。

「台無しですね。まじで」

なぜか隣の俺の嫁は深いため息をついていた。久々のダンジョンで疲れたか？

「そうじゃないです」

呆れ顔で言われた。なお、あっさりと俺の心を読む癖は治らないものか。

生徒たちの会話はなおも続いている。

「あーっはっはっはっは！ あたしの活躍がきいたね！ これからもリーダーのFINE様に頼ってくれていいよ！」

「FINEにリーダーは向いていないのではないですか？」

FINEの景気の良い言葉に、ルギが反論する。

いつもならここでやはり喧嘩になることだが、

「ま、確かにね。斥候やりながら指示するのは無茶かもね。ちょっと探索スキル使ってるときに、不意打ちくらいかけた時、ルギがかばってくれたもんね、4階で。ずっと心配してくれてありがとうね！」

「別にそういうわけじゃないですから。勘違いしないでください」

「あんた実はツンデレだな！？ 新しいからかいネタができた！」

「誰がツンデレですか！ まったく……」

ルギが一言足りないだけで、ちゃんと心配して言っていることに気づいた。

全員の視野が広がっていて、お互いの絆が強まった結果だろう。

確かにリーダーは、全体を見渡せるソラがいい。

ルギも慎重なところが実はリーダーに向いているんだが、多分性格上、生真面目過ぎて判断が遅い時がある。ちょっとまだ早いな。だが、確実時に将来のリーダー候補だ。

と、そんな話を生徒たちがしていた時である。

「帰ったぞえ。ちょうどいいタイミングだったのう」

ズウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
ン！！！

「ほわわ！？」

突然、空から振ってきた青色の大きな狼に、ソラがのけぞって悲鳴を上げた。

「おかえり、フェンリル」

「うむ、主様。戻ったぞえ。あとで毛並みをととのえてくれると嬉しいのう」

そう言って笑う。

だが、

「まあ、待ちなさい、私の従僕であるところのフェンリルさんと、夫であるところのアリアケさん」

「「なんだ？」」

俺たち二人の声はもる。

と、同時に、

「「「「「なんだじゃないでしょう」「」「」」」」

生徒達が俺たちの会話にツッコミを入れた。

そして、今までだんまりだったピノが、フェンリルの牙にひっかけられた、『檻』とその中に”閉じ込められた者たち”100名程度を見て言った。

「たくさん、生徒が、増えたね」

その言葉に、アリシアが大聖女らしい微笑みを浮かべながら、

「あ、なるほど。季節外れの転校生でしたか」

と言ってから、

「って、そんなわけありません!!!!!!」

どっから拾って来たんですかー!!!!!!

大聖女の絶叫がダンジョンのある森に木霊したのである。

『檻』に入れられた子供たち。

その姿はボロボロで、目もうつろな子供たちが多い。

年齢は10歳前後くらいだろうか？

これは、

「なるほど。フェンリルは子供を守ろうとするからな。彼女を行かせたのは正解だったか。しかし、まさかこんなに子供たちを連れ帰ってくるとはなあ」

「主様ならなんとかしてくれるであろう？」

フェンリルは母性が強い。

その彼女が追いかけて行ったトレインを仕掛けてきた三人の拠点。

そこで何かがあったのだ。

そして、その結果、転校生が100人ほど増える結果になったようだな。

まあとりあえず。

「もちろんだ」

俺はウインクをしてから、

「100人なら修練場に入り切るな。ホテルは満室だが、リネン類は余ってたかな」

「では、とりあえずブリギッテ女将に連絡して融通してもらいますね」  
「ときばき。」

俺とアリシアが段取りを整えていく。

こういったポーター的作業は慣れたものだ。

大聖女の彼女も、こういう支援作業は得意である。

まずは、彼らの一時的な寝床と居場所をつくってやらねばなるまい。

そして、

「落ち着いたらフェンリルに事情も聞かないといけないな」

トレインに、明らかに孤児のような恰好をした子供たち、それをフェンリルが放っておけなかった理由。

大きな事情が背景にありそうだ。

俺はこれまでの大賢者<sup>救世主</sup>としての経験から、そう直感するのであった。

172・生徒がたくさん増えました(後書き)

『小説』の第3巻発売中。『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご購入や【無料】試し読みは下記URLへアクセスお願いします(お\*。ー。)oppoコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「転校生多いなあ」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。



面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

173・旧国教ワイズ教・聖都『マリード』

173・旧国教ワイズ教・聖都『マリード』

さて、俺たちは100人の子供たちを連れて、学校まで戻ってきた。今は教会の人間たちが来てくれて、いきなり増えた子供たちに対して炊きだしをしてくれている。

最初は怯えていた子供たちも、ご飯を目の前にして目の色を変えて食いついていた。

相当ひどい生活を強いられていたようだな。

「ふむ、今日は我も一緒に修練場で、あの仔らと一緒に眠るとしよう。何があっても大丈夫なようにのう」

フェンリルは相変わらず母性が強いようで、連れてきた子供たちが心配なようだ。

「あ、それでしたらボクも一緒に寝ますよ。フェンリルお姉様一人だと大変でしょうし」

ラッカライが言った。

すると、炊き出しの指示をしていたローレイも、地獄耳というか、その言葉を聞いてこちらにやってきて言った。

「では私もそうしましょう。炊き出しリーダーとしての責任。そしてフェンリルさんをモフリながら眠りにつける特典があるというなら、議論の余地は不要でしょう?」

「我、そんな特典つけると言ったか? 別に良いが」

ローレイのモフリへのこだわりは日に日に強くなっている。

「いい加減歯止めがきかなくなりそうだな……」

「そうですね。でも、どうでもいいっちゃいいですね」

「まあな」

アリシアの返事をきっかけに、本題に切り替えることにする。

「フェンリル、何があったか説明を」

「うむ。あの三人をな追って行ったところ、途中で早馬にのって逃走を試みよった」

「計画的だったわけか」

「うむ。こちらの予定を把握したうえでの行動よな。我らの本日の授業予定を知ることとはそれほど難しくないが、ルートは絞られる」

「幾つかの組織には共有しているからな。ルートの絞り込みはバシ

ユータに任せよう。あいつは確か」

「ここにいますよ、旦那」

俺の言葉が終わる前に、いつの間にかそばに立っていた。最近俺から直接依頼する情報収集を主に担当してもらっているが、どんどんレベルが上がっているように思う。

「いつもすまん」

「いえいえ。何をおっしゃいますやら。ですが、俺の勘では相当きなくさいですぜ」

「同感だ。慎重に慎重を重ねる。もしかすると、想定よりも大きな組織がかかわっているかもしれん」

「大賢者アリアケ様に言うまでもなかったですね。それでは」

「大仰な呼称は……」

やめろ、という前に、姿を消す。

「やれやれ。ゆっくりしていけばいいものを」

「旦那様の役に立ちたいのじゃな！　なお、俺もそろそろババーンと役に立ちたいのじゃー！」

コレットがぴよんぴよんと目の前を跳ねていた。

「お前はいつも活躍してるだろうに。これ以上、他の奴らの出番を

奪うんじゃない」

「話を続けるがのう」

フェンリルが鷹揚な感じで言葉をはさむ。

「その三人はなんとというか、獣道めいたルートを通り、北へ北へと進んだ。たどり着いたのは大神殿を有する巨大都市であった」

北の大神殿を有する巨大都市と言えば一つしかない。

「旧国教ワイズ教の聖都『マリード』」

その言葉にフェンリルはゆっくりと頷いたのであった。

(続きます)

173・旧国教ワイズ教・聖都『マリード』（後書き）

『小説』の第3巻発売中。『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご購入や【無料】試し読みは下記URLへアクセスお願いします（  
o\*。ー。）oへコミッ

https://magazine.squar-eni  
x.com/sqexnovel/series/detail/  
yusyaparty/

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはどうなるのっ……！！？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

174・ウィズ教・教主ジャルネル・ギルメイザー

174・ウィズ教・教主ジャルネル・ギルメイザー

「何だか申し訳なさを感じますね。いきなり国教からひきずりおろした立場としましては」

「ブリギッテ。お前は世間話風に、とんでもないことをいきなり言いますから心臓が悪い」

「そうですか？」

俺たちの会話に入ってきたのは、ブリギッテである。

もちろん、ここでは正体を隠している。が、偽名などは使わず、本名を普通に名乗っている。ブリギッテ、という名前をつける者は多いので、まさか始祖がここにいるとは思わないので問題ないのだ。

正体を知っているのは本当に国王レベルの者たちだけである。

「いつそ、ブリギッテ教はやめちゃいませうか。悪魔退治もすみませんでしたし」

「世間話風に……以下、略だ。リズレット辺りと話してくれ。そう



言えばここに序列第3位もいたな」

俺は冗談めかしてアリシアに話を振ってみるが、

「へ？ ああ、ブリギッテ教やめちゃうんですか？ まあ私は別にいいですけど。こ、こ、こ子育てとかしたいですしね〜」

ちらちら、とこっちに目くばせをした。

「お、おう」

カウンターだった。

「ふふふ。珍しいものが見れたの。それにしても序列1位と3位のやる気がないというのも珍しい。リズレットの采配なのかの。ま、いい」

フェンリルが微笑みながら、話題をもとに戻した。

「ワイズ教の今の教主はジャルネル・ギルメイザーという男よ。でつぶり太った豚のような老体であるな。ただ、知っての通りワイズ教徒はいまだに多いゆえ、それなりに支持者がある」

「ジャルメルか。どういう男なんだろうな」

「これがよく分かっておらぬ。だが、結構な貴族どもが入りしているとのことよ。やんごとない背景があるやもしれんなあ」

そのあたりはバシユータの情報を待つとするか。

「で、その豚の様に肥えたご老体の邸宅まで、あのトレインを仕掛けてきた三人は戻ったわけか？」

「ご名答よな。中に侵入までしようとしたが強力な結界が張ってあった。破つても良かったのであるが、途中で優先順位が変わってしまったのよ」

「ははあ」

「それがあの100人の子供たちですね？」

アリシアがポンと手を打った。フェンリルは頷く。

「ジャルメルの邸宅と少し離れた場所にワイズ教の神殿があつての、そこで多数のワイズ教徒たちが働いておつた。まあそれは普通のことであるが、どうにもな、鼻をつく臭いが気になったのよ。我しか気づかぬであろう、微かなものであつたがなあ」

「フェンリルさんは鼻がききますからね」

「場所は神殿の地下からであつたな。まあ地下牢のような場所であつた。そこであの仔らを見つけたというわけよ」

「なるほどな」

俺は納得したとばかりに頷いた。

ただ、ラツカライは腑に落ちないらしく、首を傾げる。

「閉じ込められていた理由は何なんでしょうか。そんなに沢山の子

供を……どんな理由があろうと許せません！」

義憤にかられている彼女に、俺は答える。

「多分、試験などでふるいにかけて、魔力が少ないとか、学力が優秀でなかった子供たちだろうな」

「ふるいにつ……。でもワイズ教は元々国教でその教えも弱者を救う素晴らしいものなのにつ……。！」

「ワイズ教自体と、その教主の考え方は違っただろう」

俺の言葉に、

「ブリギッテ教が脳筋すぎて、逆に珍しいまでありますからね」

ローレライが応じた。

「教皇の娘が言うと言説力が違うな。まあ、でもそういうことだ。ワイズ教が国教から堕ちて300年。その間、ブリギッテ教は常に国家から注目されてきたが、逆にワイズ教は専横を許す程度の監視の目しかなかったとも言える」

「での、勢いで鉄格子の牢屋ごとくりぬいてのう。さらってきた。げぶんげぶん、救出してきたのだがのう。主様ならなんとかしてくれるかなあと、思っただのう」

そう言って、ちらちらとフェンリルが俺の方を見て言った。

さすがに、今回は勢いで動きすぎたと内心思っているらしい。

「まあ母性暴走しすぎ事件ではあるが、お前のやったことは正しいよ。フェンリル」

俺はそう言つと、彼女の頭を撫でてやる。

「くうくん。さすが主様である。今日は我の一番モフモフな部分を使つてぜひ眠つておくれ」

「それはありがたい」

俺たちはそんなやりとりをしつつ、保護した子供たちを今後どうするか相談したのだった。

また、一方で俺の頭の中ではワイズ教の暗躍に対する対応もまた検討を進めるのであった。

174 ウイズ教・教主ジャーナル・ギルメイザー（後書き）

『小説』の第3巻発売中。『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご購入や【無料】試し読みは下記URLへアクセスお願いします（  
o\*。ー。）oへコミッ

https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yuusyparty/

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはどうなるのっ………!!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 175・孤児院の子供たち

175・孤児院の子供たち

（孤児院の年長者）ミハイル・ハミルトン視点）

僕の名前はミハイル・ハミルトンと言います。

年齢は……よく分かりませんが、多分10歳くらいでしょうか。

僕たちは今日、大きな狼さんに連れられて、何だかよく分からない場所（周りのシスターさんたちはシューレンジョーと言っていました）に連れてこられました。

（またひどいことをされるんじゃないか）

多分、ほとんどの子供たち……孤児たちがそう思ったと思います。

僕たちは元々、ワイズ教の神官のお世話をするための神官見習いとして、拾われてきた子供<sup>孤児</sup>たちです。

ただ、はっきり言えば奴隷同然の扱いで、教主ジャルネル様はもちろん、他の神官様たちと同等の扱いを受けることなど夢のまた夢。

言われるがままに、こき使われる奴隷で、もちろんお給金もありません。

教主様たちは、「食べ物を恵んでもらえるだけありがたいと思え！」とそう言っつてパンを一切れと薄い塩のまじったスープを与えて、僕たちを家畜だと呼んで笑います。

そして、使えなくなった者から、孤児院……と言っても、単なる牢屋なのですが……に放り込まれるのです。

容姿端麗だったり、本当に優秀で口のうまい子供は、昼のお勤めとして神殿に見習いとして勤務し、夜は……なぜかお気に入り神官様が連れて行くことがあります。ひどい折檻を受けている事も少なくありません。（理解できませんが、そういう趣味の神官様がいるという噂です）

そういった例外を除いては、こうして家畜のような形で牢屋に閉じ込められていたのです。

いえ、実際家畜扱いで、時折見に来る神官様が、僕たちをどこかに売り飛ばす算段を離しているのを聞いたことがあります。ろーどーりよく、なり、ひけんたい？ なり、よく分かりませんが、使いようがあるのかなんとか言っていました。

意味は分かりませんが、ろくでもないことだけは分かります。

僕たちが自分たちの状況に絶望していたのは言うまでもありません。

それでも、いちおう年長者の僕がリーダーとして、孤児たちを励ましてきました。



ただ、簡単な読み書きどころか、栄養失調気味の子供も多い状況。もうどうしようもない。ここで死ぬか、もっと酷い場所で死ぬのかだけを指折り数えるだけの日々でした。

そんな絶望が、孤児院に渦巻いていた時に、

「可哀そうになあ。人の仔は同胞にひどいことをする」

ギョロリ、と鉄格子ごしに、大きな目が僕を見ました。

まあ、何人か知りませんが、後ろにいた子供たちは失神はしたでしょう。

ただ、僕はぎりぎり正気を保てました。

何だか、その目の前の目が、優し気だったからです。

会ったこともないお母さんみたいだな、となぜか思ったのです。

「人の仔よ。どうしたい？ 我を信じてここを出るかえ？ それとも、狼が食べに来たと思ってこんな寒い場所にずっとおるかえ？」

よく見れば大きな狼さんでした。

そして、何より、

「あつたかそう」

僕は牙の大きい、僕よりよほど大きくて強そうな狼さんの青い美しい光沢のある毛を触ったのでした。

「あつたかい……」

それは無意識でした。

無意識に、温かいものに触れたんだと思います。この地下牢で温かいものは、孤児たちと身を寄せ合う以外、他にありませんでしたから。

「そうかえ。あい分かった。ではお前たちはこれより我が面倒をみようぞ。まあ、ちょっと主様は怒るかもしれないがなあ。いや、むしろ笑ってくれるやもしれぬ。ふふふ」

狼さんはそう言うと、

「一人一人運ぶのは、少々面倒であるなあ。ま、こうすれば良かるうて」

そう言いながら、前脚の爪を音もなく素早く動かしました。

そして、

「ではゆくぞ？ 多少揺れるかもしれぬが、舌をかまぬようにな」

次の瞬間、

『ドゴオオ』

地下牢……。いえ、地下一帯が吹っ飛んで空が露出していました。そして、僕らがいた牢屋はくりぬかれて、狼さんの口に啜えられていたのです。

また後ろで何人がパタパタと気絶しました。

「まあ、気絶してた方がいいかもしれないですね」

「人の仔よお主、なかなか肝が据わっておるな。名前は？」

名前……。

名前を聞かれるなんて本当に久しぶりのことでした。

だって、僕は家畜同然で、「おい」とか「お前」と呼ばれて、名前なんて決して誰も覚えてくれないからです。

「ミハイルです。ミハイル・ハミルトン」

「そうか。ではゆくぞ、ミハイル。怖いかえ？」

その問いかけに、僕は首を横に振りしました。

「お母さんみたいで、あつたかい」

「息吹があたつておるのに、面白い仔じゃな。あはははは！」

狼さんはなんでか上機嫌になって、大きく跳躍したのです。でも、

なぜか振動は僕たちにはありませんでした。もしかしたら、魔法が何かなのかもしれません。

そして、数時間のうちに、僕たちはこうしてシューレンジョーという場所に連れてこられて、信じられないことに、

「このスープ。お肉が入ってるよ！」

「や、野菜も！」

「塩以外の味がする……。あつたかい」

こうして温かい食事を口にすることが出来たのでした。

同時に、

「俺はアリアケ・ミハマだ。この国の王をしている」

「お、おう？」

おうってなんでしょうか？ このくにのおう？

お、おう？

おう？

おう！？

「国王様！？」

「そうだよ。まあでも校長でもあるんだ。だから、そんなに大層なもんじゃない」

僕が平伏しようとする、国王様はなんと自分から、

「俺はアリアケ・ミハマだ。君は？」

また、名前を聞いてくれたのです。

僕は夢の中にいるのかな？　と思いながら、もう一度名乗るのでした。

でも夢じゃない証拠に、狼さんは目の前のアリアケ国王の後ろで、やはり同じ優しい目つきでお座りをしていたのです。

こうして僕たちの生活は現実感がないまま、物凄い勢いで変わっていくのですが、この時の僕たちは、温かい食事と温かい寝床に夢中で、これからもっと楽しいことが待っているなんて夢にも思っていないのでした。

175 孤児院の子供たち（後書き）

『小説』の第3巻発売中。『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご購入や【無料】試し読みは下記URLへアクセスお願いします（  
o\*o。ー。）oへoコッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「孤児の子供たちは一体どうなるのっ………!!?」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 176・一般教養を教えよう

176・一般教養を教えよう

「今日は生きていくための一般教養『経済』の授業にしよう。さっき伝えた通りグループに別れてくれ」

さて、孤児たちを受け入れ、生徒がいきなり沢山増えてしまった訳だが、年齢も心身の健康状態もバラバラだった。

正直、授業どころではない孤児たちも多かった。

そこで、一旦ブリギッテ教会にも協力してもらい、半数は孤児として保護してもらおう。とりあえず5歳から10歳で、心身の健康状態なども悪くない50名を生徒として受け入れることとした。

そして、10名ずつ、元々の生徒達とグループを組んでもらうことにしたのである。

「質問です。どうして経済の授業なのに、私たちはこんな場所にいるんでしょうか!」

エルフのソラが生真面目に挙手して言った。



「あれ？ 言ってなかったか？」

「聞いてないって！」

人族のFINEは容赦なくツッコんだ。

「まあ、それはともかく。どうして僕たちはこんな」

魔族のレギが周囲を見渡しながら言った。

「森の中にいるんですか？」

「モンスターは出ない場所だから安心してくれ」

「アリアケ先生の授業は普通ではないので油断ならないんですけど」

ドラゴニートのキョールネ も肩をすくめた。

「普通の授業しか、したことはないと思うが……」

「我の主様は規格外ゆえ、致し方ないの」

ついできたフェンリルが笑いながら言った。

承服しかねるが、今はそんなやりとりをするために来ているわけではないので、あえて反論はやめておく。

なお、フェンリルは現在人型である。



あああ?!」「」「」

とんでもない悲鳴が、森に木霊するのであった。

腰を抜かしている生徒達多数である。

「フェンリルよ。いきなりはやめんか」

「にゃっはっは。これはすまぬ。皆もすまなかったのう。であるが、今ので分かったであろう。こいつは引き抜かれるときにの、今みために絶叫をあげる。だが、生きているわけではない。そういう植物よ」

そう、それは植物。

根っこがまるで人型のような姿をしており、引き抜くと絶叫を上げる珍しい植物だ。

その名も、

「マンドラゴラ」

ポツリと、唯一驚かずに棒立ちのままのピノが言った。

その声は小さいが、生徒達には十分届いたことだろう。

「うむ」

俺はフェンリルから渡されたマンドラゴラを皆に見せながら宣言した。



176・一般教養を教えよう(後書き)

『小説』の第3巻発売中。『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご購入や【無料】試し読みは下記URLへアクセスお願いします(お\*。ー。 )お\*コミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yusyaparty/>

.....

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「マンドラゴラが一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



「優雅ではありませんわねえ」

「優雅さはどうでもいいです。さあ、仕事ですので、まじめにやりましょう！ 下級生の皆さん、きりきり働きましょう！ 労働は美德です！ ご飯も美味しく頂けますしね！」

「そこそこそこそこのを抜いて……」

キュールネ、ソラ、そしてピノがそれぞれのやり方でマンドラゴラの採集を続けていた。

どうやら、グループごとにずいぶん行動にばらつきがある。種族が違うので指示の仕方も考え方も異なるので当然である。お世辞にも余り効率的には進んでいないようだ。

さて、手助けをした方がいいか？

俺がそう思っていると、フィネが言った。

「っていつか、これ全員でバラバラに探すの効率悪すぎじゃない？

なんか、担当分けしてないダンジョン攻略みたいになってるよ」

ほう。

気づいたか。

俺はちょっと感心する。フィネは直感で動くタイプだが、そのセン



又は馬鹿に出来ない。

「そうですね。見たところさつきからピノが、なぜかマンドラゴラの植生位置がだいたい分かるようです」

「なるほど。ただ、声が小さいのでちょっと指示がいきわたりませんね。指揮は私がとりましょう。で、私のグループの下級生の皆さんは私の指示を、そのまま他のグループのリーダーに伝えるようにしてください。二人から三人で一組になってください」

「あと、ちよつといいかしら？」

キュールネ かけだるそうに言った。

「なんですか？ あ、指示が私だと嫌だとかそういう感じですね！これは許せないエルフ差別ですね」

「違うわよ。別に私は非協力的なだけで、あなたたちを見下したりしてるわけじゃないし……」

「え？ そうなんですか!？」

「そんなに驚かないでちょうだい。プライドが高いだけ。で、えーと」

キュールネ  
彼女は腰を折られつつ、言うことを思い出し、

「ピノの移動速度だと採取範囲が狭すぎると思つのよね。だから私の背中にのったらどうかしら」

「まさか、ドラゴンに変身してくれるんですか!？」

「……必要なからいいでしょう? それより大声を出さないでちょうだい」

「なるほど。私もちょっとあなたを誤解していたかも……」

「何か言った?」

「いはいはいはいはいはいはいはいはいはい」

ブンブンとソラは首を勢いよく首を横に振った。ちょっと頬が赤い。

ふむ、どうやら、

「出番はなさそうじゃな、主様?」

フェンリルが思っていたことを言ってくる。

「まったくだ。それにしてもおかしいな」

「何がじゃ?」

俺の疑問にフェンリルが逆に首を傾げた。

「勇者ビビアたちを鍛えている時は、連携自体をとってくれるまで5年はかかったし、しかもそれは、非常につたなくて見ていられないレベルのものだったんだが……。こつも早く年端もいかない生徒達が連携を思いついて即座に実践しようとするとはな。余りのことに、正直驚きを隠せないんだ」

俺はまじめな表情で告げた。

すると、フェンリルは淡々と頷きながら、

「主様。時々我は不遜ながら主様に憐憫の情をもよおす時がある。許してたもれ」

「？」

何を哀れまれているのかよく分からないが、ともかく、こうして生徒間同士で役割分担を決められ、それは即座に実行に移されたのだった。

結果。

俺の前には、

「うーん、まさか初日から100個以上のマンドラゴラを集めるとは……」

想定を超えたマンドラゴラが採集されていた。

そんなうずたかく積まれたマンドラゴラの前で、フィネとルギが会話している。

「フィネ、あれだけ耳栓を持つてるのはすごいですね……。貸してくれてありがとうございました」

「まあ事前の準備が大事なんだよ、斥候は」

「おかげさまで腰を抜かす下級生たちはほとんどいませんでした。改めてお礼を言わせて下さい」

彼がニコリと微笑みながら感謝すると、フィネはその笑顔を見て一瞬固まった後、

「お、おう。何だよ改まるなよ、あ、あれくらいですよ」

と、なぜかまごもごとするのだった。

ふむふむ。

ま、何はともあれ、

「よし、みんなよくやった。これだけあれば十分だろう！ 予想以上の成果だ！ そして見事な連携だった！」

俺は微笑みながら皆を褒めた。

すると、生真面目なソラが拳手して質問する。

「先生！ それで、このマンドラゴラをどつするんでしょうか？ 煮ても焼いても食べられなさそうですが……」

「ん？」

どうしたんだろつか、いまさら。

俺は首を傾げてから、

「この国には特産品がないんだ。だから授業の一環として、それを作る素材採集の手伝いをしてもらった」

「「「「「へ??」「」「」「」

生徒達全員が、首を傾げた。

あれ？

「もしかして、また、言ってなかったかな？」

俺は大きく首を傾げるが、生徒達からは瞬時に、

「「「「「はい、言ってません!!!!」「」「」「」

容赦ないツッコミが俺へと刺さるのだった。

177・特産品を作ってみよう！（後書き）

『小説』の第3巻発売中。『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご購入や【無料】試し読みは下記URLへアクセスお願いします（[www.yuusya-party.com](http://www.yuusya-party.com)）

<http://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/youusya-party/>

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「マンドラゴラが特産品って、一体どうなるのっ……！？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 178・種族がたくさんいることの強さ

178・種族がたくさんいることの強さ

「先生、改めてですが、コンナモノが特産品になるのですか？」

孤児だったミハイルが不思議そうな顔で言った。

彼はマンドラゴラ採集の時も、他の孤児たちに積極的に声掛けなどをしてくれていた。

彼の言葉に、フィネが反応する。

「あたしはいらなかなー。焼いてもまずいし、何より姿かたちが気持ち悪い！ マンドラゴラの絶叫を聞いた後だと、よりきしょく悪いつて！」

ブルブル！ と体を震わせた。

「では、エルフが買うのかしら。エルフは変わり者が多いから」

何だか可哀そうな目でソラの方を、キュールネが見るが、ソラは憤慨した様子で腰に手を当てて、



「ドラゴンほどではありません！ 森と生きてて、ちょっと他種族からの干渉を嫌うだけです！」

「変わってるじゃない。と言いたいところだけど、まあ確かに山に引きこもりがちなドラゴンほどではないかしら？」

キュールネ があっさりと言をひるがえ翻したりしていた。

なお、ピノは自由にちょうちょを追いかけているので放っておく。

「気が早いなお前たちは」

俺は苦笑しながら、

「これを食べるのは相当の美食家だろう。俺も見たことは無い。そうじゃなくて、ちゃんと一つずつ鉢に植え替える。その際は、長持ちするように魔力が満ちた土を使う。それから、マンドラゴラの苗だけだと美観に欠けるから、花や飾りなど装飾がいるだろうな」

「装飾？」「美観？」「何言ってるんだ、先生」

キュールネ やソラ、FINEがそろって疑問を口にするが、ルギだけはポンと手を打って、

「ああ、そういうことですか。なるほど。分かりました、さすが先生ですね！」

いつも冷静な彼にしては珍しく、大きな声で言った。

「どづいことかしら？」

キョールネ が顎に指をあてて、首をひねる。

それに対して、

「つまり、お主らは今まさに時代の変わり目にいるといことよ」

そうフェンリルが言った。

他の者は分かっていないようだが、俺は頷いた。

「今フェンリルが言った通り、今は魔族とも和解し、ドラゴン族もこうして生徒を派遣してくれるくらいには、歩み寄りをしてきている。エルフも同じく、だ。つまり、つい先日までのように、人族だけが商売の対象ではなくなった。というか、これからどんどん貿易が活発になっていく。今は時代の節目なわけだ」

「どこかの大賢者が邪神を倒したからのう」

「まあそれは。きっかけの一つにはなったかもしれないな」

「相変わらず自己評価が控えめすぎるのよなあ」

俺はフェンリルの呆れたような声をスルーする。

「ねえ、もう少し分かる様にいつてくださいますか？」

キョールネ からも催促が来た。

なので、

「ルギ」

俺は説明の続きを、事情を了解してくれたルギに説明を丸投げする。こついうのも授業の一環である。

「え？ いきなりですね」

彼は頬をかきながらも説明しだす。

「つまり、これは防犯用の観葉植物、あるいは置物ということですよ。部屋や移動用の貴族用の馬車に飾るといいでしょう。そして、例えば敵襲とか、何かしらのピンチが訪れた時に引き抜けば相手は絶対に腰を抜かします。その間に持ち主は逃げるといふ寸法です」

「こんなうるさくて気持ち悪いもの、ぜってたい売れないって！」

FINEがもつともな疑問を言うが、

「それが人族の感覚なんでしょうね」

ルギは顎に手を当てながら言う。

「ですが、正直魔族は、こついう少し面白みのあるものが好きなんですよ。結構肝の座った貴族のご令嬢もたくさんいたりするので…。だから、庶民よりも貴族階級に売れるのではないのでしょうか？」

「えっ、貴族が買っんですか？」

ソラが驚く。

俺は頷きながら、

「ルギの見立て通りだと思うぞ。この前ちょっと魔王と話してたんだが、こういうものが好きそうだった。面白いな、魔族っていうのは」

「さらっと魔王と世間話してニーズ調査してる、私たちの先生って一体……」

ソラが驚愕しているが、放っておいて、

「で、だ。こいつを貿易品として出してもいいが、少し売れ行きを確認してからのほうがいいだろう。幸い、この国には良い施設がある」

「そうか、旅館ですね。ブリギッテ様が経営する」

ルギがすぐに合点する。

「そうだ。温泉旅館アンミツの土産物屋で販売すればいい。ここは中立国だから魔族の出入りは自由だからな。特産品として販売する」

「ひえー、魔族相手の商売を早速考えるなんて、発想がけた違いですね、すごい！ これは大儲けの匂いがする！」

FINEが目を輝かせて言った。

「大したことじゃないさ。だが、とりあえず魔王にはサンプルを送っておくか。面白いものが出来たと。うまくすれば魔族たちの間に

宣伝してくれるだろう」

「じゃあ、僕らは後は魔力を土に移したり、鉢植えをしたりすればいいのでしょうか？」

孤児のリーダー、ミハイルが言うが、

「いい質問だな。答えは否、だ。それが今回の授業の肝の一つだな」

「え？」

生徒達が首をひねる。

「世の中は協力関係で回っている。そういった作業自体は別の者たちがやってくれるんだ。すべてを自分たちだけでする必要はない。加工ルートは冒険者ギルドのオシムが確保してくれている。つまり、俺たちとしてはマンドラゴラを採集したら、冒険者ギルドの受付に渡せばいい。その時点で貨幣に交換してくれるだろう」

「ええ？ マンドラゴラみたいな気持ち悪い植物を渡したら、それでお金がもらえるんですの？」

「ああ。とはいえ、まだ貴族のご令嬢に売れたわけではないから、現時点では、買取単価は足元を見られるだろうがな。しかし、売れると分かれば、高騰すると思う。そうしたら、一苗で10銀貨ぐらいにはなるんじゃないか？」

「そ、そんなに!?!」

生徒達がざわついた。なぜなら、

「節約すれば、1か月くらいは、普通に暮らせるくらいのお金ですわ！」

「まあな。これが経済というものだ。商品を作って、ニーズのあるところに高く売る。そうやって社会は回っている。……だからこの学校での経験と言うのは貴重だぞ？」

「どついつこと？」

フィネが首をひねる。

「だって、お前たちはバラバラの種族だろう？ だから考え方も趣味嗜好も違う。しかし、それは決してマイナスではないんだ。今日の授業で分かったらう？」

「確かにそうだね！ ピノがマンドラゴラの場所を探し出せたけど、移動を手伝ったのは空が飛べるキュールネーがいたから100個以上のマンドラゴラを採集できたし。エルフのソラが森に慣れているからてきぱきと指示してくれた。私は人族らしく用意周到に耳栓を沢山もってきたし、ルギのおかげでマンドラゴラが魔族に好意的に受け入れられることが分かった！」

俺は微笑みながら、

「そう、違う種族が協力することで、新しい価値を生み出せたり発見があったりする。ハッキリ言ってお前たちは可能性の塊なんだ。困ったらお互いに相談してみる。きっと活路が見いだせるだろう」

「なるほど、これは発見ですね！」

「なんだか乗せられているようでしゃくですが、まあ、異論ありませんわ」

ソラとキュールネ が言った。

「いろいろな種族が協力すればきっと面白いことが出来るし良い社会になる。それを覚えておいてくれ」

「……………はい、アリアケ先生！！！！」

よし。

「宜しい。では今日の授業はここまでだ！ ……と言いたいところだが」

俺は切り上げようとしたが、ピンときて、続けた。

「実際にこのマンドラゴラをギルドで貨幣に交換するところも見ておいたほうがいいな。言葉だけだと現実感がないだろうし」

俺がそう言うと、フィネがお金だお金！ と、はしゃいだ。さすが冒険者の娘は現金である。

逆に、ソラやキュールネ は余りピンときてない感じだ。

この辺りも種族間でちょっと反応が違うのが面白いところだな。

そんなことを思っていると、フェンリルがやってきて、

「将来、こういった光景が当たり前になるのであろうなあ。主様といると一足先に世の中の先が見える。退屈とは無縁よな」

「買いかぶりさ」

彼女の言葉に俺は苦笑するのだった。

とはいえ、実際に俺の生徒達が卒業後に、様々な場所で色々な良い意味での事件を起こしていくことは間違いないだろう。

そんな確信が俺の中にはあるのだった。



178・種族がたくさんいることの強さ(後書き)

『小説』の第3巻発売中。『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご購入や【無料】試し読みは下記URLへアクセスお願いします(お\*。ー。)oppoコミッ

https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yuusyaparty/

.....

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「このあと一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

179・荒稼ぎしてしまう人魔同盟学校であった

179・荒稼ぎしてしまう人魔同盟学校であった

（フィネ視点）

「ほら、今日も100個だ！ どうだ！」

私が麻袋につめたマンドラゴラを、ギルドの交換所に持っていくと、『またか』と言う顔で受付のお姉さんが驚愕の表情を浮かべた。

アリアケ先生から特産品を作るアイデアを教えてもらってから1か月。

休みの日や、授業の一環として、マンドラゴラの採集は生徒達みんなで行っていた。

ぶっちゃけ、アリアケ先生が『特産品にするぞ』と言って、魔族のルギが『貴族階級に絶対売れる』と言われても、人族の私にはぜんぜんピンと来なかったわけだけだ。

今はそんな自分の不明を恥じるばかり。

私は結構自分で言うのもなんだけど直感で動いちゃうから、あんま

り人の話を聞かないんだけど、それだけじゃダメなんだなって。あの授業で思い知った。

「ホテルで売り出すや否や、魔族たちがどんどん、これでもかといふくらい買っていくんだもんね！」

ほとんど供給のほうを追いつかなくて、今やマンドラゴラ狩りは空前の価格高騰素材だ！

正直、

「これが荒稼ぎってやつか」

面白いくらいお金が儲かる！

「世の中には知らないことや、分からないこと。人に聞かないといけないことの方が多いんだ」

あの授業はある意味、私の価値観を大きく変えてくれたような気がする。

みんな違うけど、それが良いことなんだって。

ま、それはともかく。

「はい、今日の報酬ですよ」

そう言ってお姉さんは、わざわざカウンターから出てきてくれて、銀貨のつまった袋を持ってきたくれる。

「はい、1000銀貨ですよ！ ふー、重い！」

ドン！ という重みで床が揺れる。

「おい、すげーぞあれ！ せ、1000銀貨だとよ……！！……？？」

「ああ、マンドラゴラ狩りだろ。人魔同盟学校パーティーどもだ。くーうらやましい。あんだけありやあ何年も食えるぜ！ ちよつとばかり俺たちにも融通してもらって……」

「やめとけやめとけ。国王アリアケ様の生徒だぞ。この国どころか世界から居所がなくなる」

私も冒険者の卵なので、周りがお金を見てキラキラした目をしているのは理解している。

でも、アリアケ先生がすごすぎて、なんと一度もトラブルになったことがない。

あ、一度、なりかけた時も、わざわざ、オシムギルドマスターがやってきて、その冒険者をボコボコにしてしまっていた。

「アリアケに宜しくな」

そう言って、またスूपづくりに戻ってしまった。どうやら先生とは友達らしい。ところで、オシムさんはギルドマスターだけど、ここでは料理も作る。しかもかなり美味しい。このギルドのお料理がギルドマスターお手製だと知った時は、ちよつとシヨックだった。私の腕を軽々と超えて……まあ、それはどうでもいいか。なんだっ

て焼けば食べられるんだ！ ルギには呆れられるけど。

ま、それはともかく、

「よっしやああああああああああ！ 今日もお金が重い！ でも心は軽いかるーい！！！！！」

私はずっしりとした重みのある銀貨の入った袋を背負って、ギルドを後にする。

私一人なら数年、余裕で食べていけるくらいの銀貨の量だ。

（もし金貨なら……。今の金相場だと、金貨100枚くらいじゃない！！！？）

それくらいの稼ぎなのだ。

（すごすぎだなあ、アリアケ先生……）

ちよつと、あの先生は発想が尋常じゃないんだよね。

そんなことをつらつら考えながら、学校へ戻る。

で、とりあえず、

「よーし、山分けだー！」

「それよりも乾杯しましょう。たまには打ち上げをしようとおっしゃったのはあなたですよ。それに、お金は消えませんわ」

「キュールネ は分かってないな。お金を見ながら飲むジュースがうまいのに！」

「というか、ドラゴンは金銀財宝の類が好きだと仄聞そくばんしていましたか？」

果実汁を片手に、ソラが疑問符を浮かべるが、

「人の作り出した金貨・銀貨程度ではときませんわ。もっと価値のあるものでないと。例えば、アリアケ先生のお持ちの賢者の杖などは頼りりりしたくなるほどの一品ですわ」

「なるほどね。ま、それはともかく乾杯しよつか。みんなもいいかなー？」

「フィネ以外は大丈夫みたいですよ。元孤児のみんなもね」

「あははー、そっかー」

ルギのいつものツツコミに冷や汗をかきながら、あわてて、杯を掲げる。

「ではでは、我ら人魔同盟学校生徒限定パーティーの荒稼ぎにかんぱーい！ー！」

「別に荒稼ぎに乾杯してるわけではありませんが、まあ、無礼講とということで乾杯としましょう」

ソラもやれやれと呆れつつ、果実汁を口に含んだ。

「んじゃ、リーダーに分配するんで、グループの孤児たちに配分宜しく」

私はうずたかく盛られた銀貨を丁寧に5人分に均等に分ける。

学校に納めなくていいのか聞いたら、アリアケ先生が好きにしていって言ってくれたのだ。

「お金の使い方でも社会勉強だからな。うまくやれ」

と言われた。

全くその通りで、私のお父さんもドロップ品とか報酬の配分でもめることが多いって言ってた。でもって、それをきっかけにパーティーが崩壊したりするらしい。こわ！

というわけで、話し合った結果、私たちはともかく平等にすることにした。話し合いの重要さはこの前の授業で習ったからね。

これも話し合っておいてよかった。何せ、キュールネはお金に興味がないし、ソラも同じだったからだ。ルギなどは成果報酬を検討した方がいいと言っていた。それくらい考え方に違いがある。種族ごとの癖みたいなものがあるのだ。

「いろんな人が参加する時はルール作りが凄く大事」

これもここ何週間かで私が痛感したこと。うーん、アリアケ先生さ



すがっす！

でもって、リーダーのみんなは、自分たちが面倒を見ているグループの孤児たちにも平等に分けていく。これもルール。グループでストックしておく案を出す人もいたけど、グループごとにルールが違ふと不平不満が出そうなのでやめた。とりあえず、即配分してしまうのがシンプルでもめごとが少ないのだ。

平等に配分すると、なんと1か月は衣食住に困らず暮らせるくらいの金額になる！

(元孤児たちの生徒たちも、自分たちで食べ物を買ったり服を買ったりできるわけだ。アリアケ先生すごい！)

……と思っていたんだけど、実は、最近分かったというか、当たり前の話なんだけど。

「すみません。お金の使い方が分からないのですが……。ブリギッテ教会へ全額寄付しておけばいいですか？ ワイズ教徒ではありませんが、今はブリギッテ教会にお世話になっている身ですので……」

「……え？」

こんなやりとりがあった。

そつなのだ。肝心なことを忘れていた。彼らにアリアケ先生は、お金の稼ぎ方は教えたけど、使い方までは教えていないのだ。

今になって思えば、

『お金の使い方も社会勉強だからな。うまくやれ』

というのは、実はお金の使い方も同年代のお前たちが教えてやれ、というアリアケ先生のアドバイスだったことに気づく。

「あの先生、本当にくえねー！」

「FINE、あまり先生に失礼なことを言うものではないですよ」

「ルギ、わかってーよ。てか、褒めてんの」

「そうでしたか」

やれやれ。まあアリアケ先生の無茶ぶりは今に始まったわけじゃないし。

それに、確かにお金の使い方を教えるのは、同年代の私たちの方がいいだろう。

だって、

「アリアケ先生とか、大聖女のアリシア先生たちのお金の使い方とか、参考になりそうにないもんねー」

そう一人ごちる。

というわけで、私たちは元孤児たちにお金の使い方を教えに町へ繰り出すことにしたのである。

貯金も大事だけど、使うことも同じくらい大事だしね！

「お金は使ってなんぼ！ さあ、行こう！」

というわけで、週に一度の休日、私たちは何名かの孤児たちと一緒に、町に繰り出したのだった。

（続きます）

179・荒稼ぎしてしまう人魔同盟学校であった（後書き）

『小説』の第3巻発売中。『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご購入や【無料】試し読みは下記URLへアクセスお願いします（[www.yuusya-party.com](http://www.yuusya-party.com)）

<http://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/youusya-party/>

.....  
「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「元孤児の生徒たちは一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

180・お買い物

180・お買い物

（フイネ視点）

「欲しいものと言われても、困りました……」

マンドラゴラで荒稼ぎをした私たちは、町へと繰り出していた。

元孤児たち50人……は無理なので、とりあえず5人ほどを連れ出した。その子たちがまた他の孤児たちに教えてあげればいい。

それにしても絶景だ。魔族やエルフ、獣人などなど、様々な種族の人たちが歩いているが、それはここだけだろう。

この中立国オールティは元々村だったんだけど、アリアケ先生が来てから急速に発展している。ある意味、アリアケ先生だから統治できているような国だ。

「どうやったたらあのレベルに到達するんだろうな、ルギ？」

「まあ、修行しかないのでは？」

「じゃなくてさ！　なんかもうちょっと精神的な意味でだよ。落ち

着いて物事を俯瞰的に見て戦略的に優位に立つ、みたいなあの感じ！ やつてみたい！ 憧れる！」

「難しいことを考えているんですね。僕なんかはそれよりも……」

「あんたらちゃんと引率しなさいよ。ドラゴンのあたしにはちよつと荷が重いんだから」

と、ルギといつものようにおしゃべりしていると、困り顔でキュールネーが苦情を言ってきた。

「にゅふふ」

「何、あたまどうかしたの？」

私がいやらしく笑うと、キュールネーが気味悪そうに言った。

いやあ、昔だったら「あたしは知らないわよ」と言っつて、どこかに行ってしまったらう、ドラゴニユートのキュールネーが、こうしてちゃんと苦情を言ってくるのだ。

「ある意味の尊さを感じてたんだよ」

「はあ？ 意味不明」

キュールネーは眉根をしかめたまま、ツタツタと歩いて行ってしまった。

その後ろから孤児たち5人がそわそわと落ち着かない様子で付いてくる。

「で、何を買うべきなのでしょう？」

と、相変わらず聞いてくる、元孤児でリーダーでもあるミハイル。

彼でさえこの調子なので、他の奴らが自由に物を買うなんて出来るわけないのだった。

「そうだなー、あつ！ あれなんてつまそうじゃない？」

私にはウサギ肉で作った、串焼きを売っている店を見つけて、指さす。

「1本2銅貨だって。どう？」

「お、お肉ですか！ しかし、そんな贅沢をしないのでしょうか？」

「ワイズ教の教えに反してるとか？」

「いえ。ただ、清貧に努めよ、という教えはありますので、どうかと……」

「2銅貨使うくらいどってことないよ！ さあ、ほら、ほれ！ ほれ！ 買うのだー！」

「うう。でもやっぱり寄付したほうがいいのでは？」

「だからー」



なんだか押し問答になる。

と、そこにエルフのソラが割り込んできた。

「物を買うのはそう悪いことではありませんよ。あのお店の店主さんには子供が3人もいるのです」

「は、はあ？」

ミハイルたちがいきなりの話の展開に目を丸くしているが、ソラはそんなことで話の腰をおられたりはしない。というか、よく知っていますね。行きつけなんだな、こいつエルフのくせに。

「つまり、あなたたちがお金を使うことで、彼の子供たちのお腹が満たされるんです！ つまり、あなたたちはおいしいお肉が食べられる！ 店主の子供たちもおいしいお肉が食べられる！ ウィンウィンなので！ 貿易の基本ですね！」

「では、この2銅貨を、あのお店へ寄付したほうがいいのではないですか？」

「それは彼の本意なのでNGです！」

「どうしてですか？」

「彼は自分の仕事に誇りをもっているのです！ 美味しい焼き鳥を食べてもらってお金をもらおう！ そこにやりがいと自負を抱いているのです！ それを、お金だけ置いていく、というのは美味しい焼き鳥を作っている自分への冒瀆と感じるでしょう！ OK？」

「よく分かりません」

「なんと!?!」

「ああ、でも」

ミハイルが慌てて首を横に振り、

「お金を払うことで交換することが、やましいことではない、ということが分かりました。確かにワイズ教でも、高い壺を売ることで、信者の方から高額の寄付を得ていましたので。お互いが満足すればそれで双方が幸せなのですね」

「それは詐欺だと思いますが、一旦その理解でいいです」

はあ、とソラが嘆息した。長耳が垂れたのは疲労の証だ。

「じゃあ、みんな今日は試しにソラさんがすすめてくれた焼き鳥を買って食べてみようか」

「「「「は、はい」「」「」」

ということ、元孤児たちが、ジュージュー焼けて、油のしたたる、塩で味付けされた串焼きを買って頬張る。

すると、

「美味しい!?!」

目を丸くして飛び上がった。

「よ、世の中にこんな美味しいものがあつたなんてっ……！！！！！」  
孤児たちが驚愕していた。

「もっと美味しいものもありますからね。というか服とかも買っべきですね。さあ、キュールナー案内してください！」

「なんであたしなのよ！」

「私は余り詳しくありませんし、フィネはあんまり興味ないでしょうし」

「否定はしないけどね」

私は慥然としながら言う。

「ま、いいでしょ。ついて来て頂戴。と言っても、私だって安いお店しか知らないわよ」

「十分です」

というわけで、次は服屋へやってきた。

もちろん、オーダーメイドの服を作るような高級店ではなく、着古した衣服が売られている普通の服屋だ。

「ここは中古品だけど、清潔なものしか置いていないからおすすめるんですけど、どうかしら？」

「いいんじゃないですか。ワイズ教の制服ばかり着ていては傷いたみも早いでしょう。そうですね、これなんかいいと思いますけど……？」

「わ！ センスないなー、ルギ！ こういうのは派手な方がいいよ。ほら、これとか」

「ははは、こんなキラキラした服で外を歩けと言われたら、僕なら自死するかもしれません」

「にゃんだと！」

「くだらない喧嘩はやめなさいよ、もう。ちなみに、あたし的にはこの店のラインナップの中で、その二つだけは、ないわー、という感じよ」

「「なあっ!?!」」

シヨックを受ける私たちを置いて、キョールネ はゆっくりと服を物色し、そしてある服を手に取りながら、

「これとかはどうかしら？ ワイズ教は落ち着いた宗教だから、こういう白地の、おとなしめの方が落ち着くのではないかしら？ 見た目も清潔感があつていいと思うわ。黒地は汚れが目立たないけど、それって本末転倒な気がするのよね……。ちなみに、ブリギツテ教はもつと戦闘的な感じだけど。ただ、あの人たち変わってるから。袖なしの真っ赤な服とか好きなのよね……。ちよっと私の美的センスが拒否反応を示すレベルの人が多いから、ワイズ教の服選びは楽

でいいわ」

「人族より視野の広いドラゴンがいた！」

「気遣いで負ける人族の存在意義も問うべきですよ、FINE?」

「ルギだってあたしの同類だから！ 他人面禁止だよ！」

そんな言い合いをしている内に、銀貨1枚程度を使って、ミハイル達が私服を何着か購入した。

おすすめされた白地のシャツ数枚に、落ち着いた紺やカーキ色をしたズボン、それに黒のベルト。

シンプルだがよく似合う。

「自分の服を買って頂ける日が来るなんて。想像もしていませんでした。ありがとうございます！」

「買ってあげたわけじゃなくて、自分のお金で買っただけよ。今後もそうなさい。特に女子はおしゃれに気を使った方がいいわ」

「は、はい。キュールネ お姉様！」

ミハイルではない、別の女性の孤児の少女が、妙に尊敬するような熱い視線を向けて言った。

「いえ。様はやめてね。同級生なんだから……」

ちよっと困り顔をするキュールネ だった。

ところで、わたしは「おやおや？」と私は意外に思う。

ちなみにルギも同じように思っているらしい。

「以前だったら、様付けを強要するくらいだったはずですが……？」  
だよ。私もそう思った。

すると、耳ざとく聞きつけたキュールネは、プイッと顔を背けて、  
「そうだったかしら？ もう忘れたわ。さあ、もう行きましょう。  
お腹が減って来ちゃった」

そう言って、お店を後にする。

まあ、何はともあれ、

「いやあ、最初はどうなることかと思ったけど、ちゃんと買い物  
練習が出来て良かった。んじゃ、あとはお昼でも食べて解散にしよ  
うか？」

「そうですね。この近くだと、ギルドが一番近くて美味しいですね」

「ん？ あー、そうだなー。ギルドかー」

私は迷った表情を浮かべる。

個人的に、ちょっと、思うことがあったからだ。

「何かダメな理由でも？」

そんな風に私たち全員が道端で立ち止まって、相談していた時だった。

「おっと、ごめんよ、ぼうやたち」

ミハイルに男がぶつかって謝った。

「あ、いえ。こちらこそすみません。よそ見をしていて……」

私はすぐに叫んだ。

「ミハイル！ 貨幣袋は！？」

「へ？ あれ、どこに行ったのかな？」

彼が腰元に下げていた袋がいつの間にか消えていた。

「スリだ！」

「あっちに行きました！ 追いましょー！」

私の叫び声に、ルギたちがいち早く反応して駆け出したのだった。

180・お買い物(後書き)

『小説』第4巻2022年2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

【無料】試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。\*。

https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「スリッて！ 今後一体どうなるのっ……！？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。



面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

181・謀略

181・謀略

（フィネ視点）

「追い詰めたぞ！ さっさとミハイルのお金を返せー！」

ミハイルから貨幣袋をもらった窃盗犯の男は、素早い動きで人気のない路地裏の奥へ奥へと進む。

「ただ、追い詰めた。大きな壁、袋小路だ！」

「追い詰めた？ げへへ、それはどうかな？」

「なに！？」

「周りを見てみな、ひゃっはー！！！！」

窃盗犯が叫んだ瞬間に、今まで建物だと思っていた壁から、何十という針が私たちを串刺しにするように射出された。

「やばっ！？」

私は躲しきれず、致命傷を負った自分を想像するが、

「危ないですわね、うろこに傷がつくでしょうっ？」



ソラの発生させた魔法によって跳ね返す。

跳ね返された針が、

『ドス！ ドスドスドスドス！』

反対に、窃盗犯へと殺到し、その体に吸い込まれて行く。

「みんな無事ですか？ 敵は……」

ルギが警戒しながら近づく。

「危ない」

え？

普段、ほとんど声を発しないので、その声音が一瞬誰のものだか理解できない。

でも、すぐにピノだと思い至る。

緊急事態だと直感が告げた。

「危ない！ ルギ！」

「え？ 何が……」

何が起きているのかをルギが聞こうとする。

ただ、これは単に私の斥候としての直感でしかない。だからどうす

ればいいのか伝えることは出来ない。

だから私に出来たのは。

「斥候スキル スチ盗むイイイル！」

「FINE!？」

とつさにスキルを発動しながら、ルギに覆いかぶさった。

スチ盗むールはその名の通り、相手の持ち物を盗む確率を上昇させるスキル。

これを発動した理由は、

「なに!? 貨幣袋を盗んだと!? ひゃーははは! 馬鹿め!  
!」

バカはお前だ!

お金が目的なわけがない。

「馬鹿! 死ぬ気がFINE!？」

ルギが叫んだ瞬間に、ギロチンの刃が二対空中に出現した。それが私たちに迫ってくる。

スキル連続使用!!

「切り札! スキル 道連れ !!!」



「違うわね。これは幻覚よ。……はあッ！……！」

キョールネ が魔力を放つと、壁……。いや、幻覚を構成していた魔力構造が破壊される。

すると、その先には路地裏の道が単に続いているだけだった。

「何者でしょうか？」

「さーね。知らないわよ。先生方に報告よろしくね。ま、それより、死んだ仲間を埋葬しなくちゃ」

キョールネ があっけらかんという。

「くそ！ フィネ！ 僕なんかをかばって死んでしまうなんて！  
あなたが死んだら僕は……！！！」

「……」

「君とはこれからもずっと一緒だと思っていたのに。僕は自分の力のなさが情けない」

えーと……。

「こんなことでは冥界の父上になんと言えいいのか。僕の大切な……」

「た、大切な？」

どきどき。

「大切なっ……て、どうして……」

ルギがぐったりしている私を乱暴に押しつけて、半眼になって言った。

「どうして死人がしゃべっているんですか？」

「死んでない！勝手に勘違いしたのはあんただっつーの。キュー  
ルネ も悪質！」

「……はあ〜」

スキル 道連れ。

それは周囲にある物体をとっさに武器や防具にして使用できるとい  
う斥候のスキルだ。

ただ、余り使わない。何でかっていうと、

「銀貨がぐちゃぐちゃですな」

本来その道具の持つ用途以外に使用するから、その道具の耐久値を  
超えて壊れてしまうからだ。銀貨を重ねて作ったとっさの盾は、あ  
のギロチンの前にもろくもボロボロになってしまった。価値は銅貨  
以下だろう。

でも、



「なんだよー。私が死んでた方が良かったのかよー」

「そんなわけないでしょう」

ぎゅー。

ドキリ！

抱きしめられてしまった！ はわわ！ はわわわわわ！

「ただ、もう二度としないでください。寿命が縮まります」

「あ、あっはっはっはっは！ 私だってやりたくてやったわけじゃないから！」

「……そうですね。僕がもっと強ければ」

あれ？ ちょっといつもと反応が違うような。

「気にしない！ 気にしない！ みんな無事だったんだしさ！ さ、早くミハイルのところにもどろ！」

「ええ、そうですね」

私は手を差し出すが、ルギは大丈夫だと言って、自分の力で立ち上がる。

私の手はむなしく空を切る……。

と思っただけで、

「んむ」

ガシ！

私の手と、ルギの手。

両方の手を、なぜかピノががっしりと掴んでいた。

「ちよつと、ピノ？」

「どうしたんですか？」

「小指」

え？

ピノ意味不明な行動に、私とルギが疑問符を浮かべている間に、彼女は私たちの左手の小指をつまむ。

そして、

「ちよん、ちよん」

お互いの小指同士をくっつけた。

「儀式完了」

「何の儀式よ」

キョールネ が呆れた表情で見ている。他のみんなも肩をすくめたり首を振るしかない。

まあ、とにかく全員無事だった。

何より、

「先生たちに報告だね」

妙な魔術師に襲われた。それはこの平和な王国を陥れようとする不穏な影のように思われた。

181・謀略（後書き）

『小説』第4巻2022年2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

【無料】試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。\*。  
—。o入oッ

https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「この後一体どうなるのっ……！？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 182・勇者ビビアの誘い

182・勇者ビビアの誘い

（ルギ視点）

買い物の中に襲撃があった、その夜。

「おいおいおいおいおい、なっさけねーなー、ルギちゃんよう  
！」

「勇者様ですか……」

僕が個室で今日の出来事を返す返す後悔しているところに、勇者ビビア様は、また何の気配もなくやってきた。

やはり勇者様ともなれば、気配を気取られず部屋に入ることなどお手の物なのでしょう。

ただ、そんなことよりなにより、勇者様の言葉は僕の心を棘のようにチクチクと刺した。

そして、棘から回る言葉の毒が、全身を徐々に侵食するよつな錯覚をする。

「でも、今回は不意打ちの事件でした。うまく立ち回ることはできませんでしたが、しかたない面もあります」

「馬鹿かよ！ それで仲間の女を危険にさらすなんて、恥ずかしいと思わないのかねえ！ 俺だったら仲間に顔向けできねえぜ、かー！！！！」

勇者様が心底侮蔑しきった罵倒の言葉を吐いた。

あまりの厭味つたらしさに、嫌悪感を覚えたのは確かだ。

でも、

「おっしやる……通りかもしれないですね……」

勇者様の言葉には一理あると思わざるを得ない。

思った通り、勇者様はそんな僕の内心までお見通しのようで、せせら笑うように続けた。

「かもしれないじゃねー！！ 確信してんだろーが！ 自分が無力・無才の非力な男だっことをよう！ だからこうやって買いもんから戻ってきてウジウジしてたんだろーが！ 強くなるうともせず、机の前でウジウジってよー！！ かー！！！！ 俺だったら更に強くなるために努力に努力を重ねてるところをよう！！！！！！」

噂によれば、勇者様たちはこの世界を救うために、アリアケ先生の指示のもと邪神と戦ったらしい。

ご本人が吹聴するには、勇者様たちが決定的に重要な役目を果たし

たとのことだ。

その噂を踏まえれば、勇者様の発言には重みがある。

だとすれば、

「アリアケ先生に鍛錬をお願いして……」

「おいおい、正気かよ、ルギちゃんよう。まーだ、周りに迷惑をかけようつてのかあ？ ああん？」

「うっ」

それを言われると言葉に詰まる。

先生たちは一生懸命やってくれている。今回ミスをしたのは、単に僕の力が不足していたからだ。

でもどうしたら……。

「安心しな。邪神を打倒した決定的な役割を果たした俺がいるじゃねえかあ」

「えっ？」

にちゃり、と笑顔を浮かべる勇者様の態度に僕は驚いた。

「僕は魔族ですが、勇者様に思う所はないんですか？」

「あたりめえだろう？ 俺ほどの人格者じゃなけりゃ勇者にはなれ



ねえ。それに魔族との争いは邪神が仕組んだものだったんだよなあ。なら、過去のことは水に流そうや」

「勇者様」

勇者ビビア様の笑顔は唇をいびつに歪めた何とも形容しがたい笑みであった。しかし、勇者様の言葉自体は僕が今抱えている悩みを解決してくれる蜜のような甘美さがあった。

まるで魔術を使われているような錯覚すら覚える。

「この人格者であり、実力者である英雄の俺が、稽古をつけてやるよ。そうすりゃ、お前はもう仲間を傷つけるようなクソ雑魚から脱出できる」

「ほんとですか？ もうフィネにかばってもらおうようなこともなくなるんですね」

「ああー。もちろんさー。一步間違えりゃ、串刺しになってたフィネ。そんな事態は二度と発生しねえよう」

「まるで見てきたように言うんですね」

「つたりめえだろうが！ 俺は勇者様だぜ？ アリアケの親友だぞ？ この中立国の半分は俺が建国したようなもんさ」

この国の建国に関わっているという話は初耳だったけど、邪神の打倒にかかわっていることは確かなので、特段疑うような話ではないと思った。

「でも、どうして僕に稽古を？」

「似てるからさあ」

「似てる？」

ああ、と勇者様はまじめな顔で頷いた。

「強くなるうとあがく姿が昔の俺にそっくりだあ。そんな奴を放っておけねえよ。むしろ、この学校にいちやあ、おめえは強くなれねえからもしれねえなあ。こんなぬるま湯じゃあな」

「え？」

「俺は今、教主『ジャルネル・ギルメイザー』に仕えてる。どうだ、強くなる為に一緒にこねえか？ あそこなら強くなる為の修行に打ち込むことができるし、これは秘密だが強くなる為の秘薬があるらしい」

「ワイズ教！？」

僕は一気に警戒心を強める。

「あの孤児たちを監禁していたっていう……」

「ああ、あれはアリアケたちの勘違いさ。あの宗教は実力主義の国だからこそ、見込みのない奴らに食わせていくことができなかつた。だからこそ、他の豊かな国に移送するために一旦一か所に集めてたつてわけさ。この国に運んでくれたのは、むしろありがたがってたぜえ？」

「そう……なんですか？」

本当だろうか？ 実力主義の国だからこそその仕打ち……。実力がなかったから、檻に閉じ込めてよその国に移そうとしていた？

でも、仮にそうだったとしても、

「ですが、僕は仲間たちと一緒に強く……」

「なーにぬるいこと言ってやがる。ちょっとだけここを離れるだけだろうが。んで、強くなって帰ってくりゃいい。そうすりゃあ、もう足手まといにならなくてすむ。なにより」

勇者様は人類の守護者とは思えないほど、唇をいやらしく歪めて笑うと、

「FINEっていう、てめえを守ってくれた女な。あいつを守ってやることもできるんじゃないか？ なあ」

ビビア様はペロリと舌なめずりすると、

「元四魔公の一人がトリドスの息子、ルギウス・アーツロイ公爵令息様？」

「父のことは……」

「邪神に操られ不死の軍勢として人類を攻撃した首魁。お前の立場は微妙なんだ。こんなところでまごついてる場合じゃねえだろうが！ さっさと強くなって、四魔公の後継者として実力を魔王リスキ

スのやるうにも誇示しなくちゃいけねえんじゃないのかあ？」

「ぐっ！」

その通りだった。

僕にはのんびりしている暇なんてない。

この学園に集められているのは、みんな種族の壁を超えて活躍すると思われて、あの大英雄という言葉では言い表せないほどの英雄、大賢者アリアケ王に集められた子供たちなのだ。

その期待はきつと大きなもの。だから、僕が強くなることは絶対に必要なことだ。

それに、

(今度同じ襲撃を受けた時、フィネがまた無事かどうか分からない)  
僕をかばって死んでいたとしたら、僕はその後どうすればいいだろう？

どうしてフィネにそこまで僕が執着するのか。

それは僕にも分からない。

だけど、今日の襲撃から守ってくれた時の彼女の必死の形相を、僕は忘れられない。あれは自分が死ぬ可能性を考慮してでも僕を守ろうと決意した誇り高い顔だ。美しい顔だった。

「彼女に二度とあんな顔をさせてはいけない」

「そうだ。へへへ、決まりだなあ。なら、分かってんな？ 明朝にここを立つ。準備しろ。朝の4時に裏口から出るぞ」

彼はそう言つと、前回と同様にフツと姿を消した。

相変わらず、どうやって出入りしているのか分からない。

だけど、だからこそその実力のほどが垣間見える。僕も早くその領域に到達しなくては。

そうして父の後を継ぎ、魔王様に認められないといけない。

そして、仲間を……フィネを余裕で守られるほどの力を入れるんだ。

ワイズ教の聖都『マリード』。

そこに行けば強くなれるんだ。

「力が……欲しい？」

僕は自問する。

その答えはすぐに口から出た。

「欲しい。そして仲間を守りたい」

僕はすぐに勇者様の指示通り出発の準備を始めたのだった。

182・勇者レピアの誘い（後書き）

『小説』第4巻2022年2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございました！

【無料】試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。〇\*。  
ー。〇へコミ

https://maganline.jp.square-eni  
x.com/sqexnovel/series/detail/  
yussyaparty/

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「ルギはこの後一体どうなるのっ……！？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

183・増長せしワイズ教・教主ジャルネル・ギルメイザー

183・増長せしワイズ教・教主ジャルネル・ギルメイザー

）ワイズ教教主ジャルネル・ギルメイザー／聖都『マリード』

「くくく、愚かな男だ、アリアケ・ミハマ。人魔同盟などという忌々しい政策、断じて許せぬ。だが、くくく、すぐにこうなる、くきききききききき」

ガシャン！

儂は肥えた腹を揺らしながら、わざとグラスを地面へ落とした。それは粉々に砕け散る。

「これがすぐに奴にもたらされる運命そのものよ。この教主ジャルネルのご意向を神もきつとご覧になっているであろう」

「おお。おっしゃる通りです。ジャルネル様」

「神をも恐れぬアリアケに、すぐにでも神罰が下りましょうぞ！！」

うむ、と儂は機嫌よく頷いた。



追従の言葉を並べたてるのは、様々な地位の貴族たちだ。

今の国王の政策のせいで既得権益から外れて不満を持っており、この儂に依存せざるを得ない操り人形たちである。

「ですが、アリアケなどしょせん政治の素人。放っておいても、人魔同盟などという夢想は瓦解したのでは？」

一人の貴族が言った。

儂はニヤリと唇を歪めつつ、

「ビワン男爵殿のおっしゃる通り、放っておいてもじきに自滅したでしょう。しかし、魔族との融和などという神の怒りに触れる行いをした以上、この儂みずからが神に成り代わり天誅を下そうと決心したのですよ」

「おお、さすが教主様です！」

貴族どもが称賛の言葉を並べ立てる。

神同然であり、高貴な血筋を持つ教主の儂にとっては当然のものと見えよう。

「見ておれ。ブリギツテ教もじきに凋落する。獣人どころか魔族すらも公平に扱うなどという、かの邪教もまた、神の怒りに触れたのだからな」

「教主様こそが神同然。すなわち、その神の瞋恚しんいに触れたからには、

滅びは必然ですな」

「その通りじゃ。ベヒス子爵殿。くひ、ほっほっほ」

ワイズ教は人間至上主義であり、同時に人にはそれぞれ人生において果たすべき役割があるとする教義である。

我ら高貴なる者たちにとっては、ワイズ教は都合の良いものなのだ。無論、神がそうお定めになったのだから、私情を挟んでいるわけではない。

ゆえに、

「貴族のために死ねる民ほど幸運な者はおらぬ。ましてや仕えることが出来るなど至上の喜びであろう」

「ええ。そして、獣人も魔族もエルフモドラゴンどもも、早く人族の支配下におきたいものです。貴重な資源は我ら貴族が独占すべきでしょう。それが神の摂理と言つもの」

「成り上がりどもをさつさと始末し、そしてブリギツテ教の大教皇リズレットも排除し、この世界を正常な状態に出来るのは教主様と我々だけです」

「言われるまでもない。そして、その時はもうすぐ目の前まで来ておる」

「と、言われますと?」

貴族どもの期待と尊敬のまなざしが儂に集中する。

無論、神たる儂はどっしりと構えたまま、堂々と宣言した。

「アリアケ・ミハマ。あの成り上がり者の懐に潜り込み、弱点となるべき者の懐柔に成功したのじゃよ。くひひひ、儂の手にかければ、世間でいかに賢者と言われていてもこの程度！ 片腹痛いわい！」

ぐひひひひ！ と笑う儂の声に、貴族どもがやはり追従の言葉を繰り返した。

「とはいえ、いちおう奴も国王。油断だけはなされませんように」心配性の貴族が一人発言する。だが、儂は思わずニヤリと笑う。

「その忠告はありがたく頂いておこう、ゼムダ男爵。だが、儂には神のお告げがあるのでなあ」

「おお、そうでしたな。さすが教主様です！」

そう儂は実際にワイズ神の預言を聞く力がある。

だからこそ、儂こそが神と同等の存在であり、儂以外のすべてを支配し、自由にする権利があるのだ。

おっと、そう言えば。

「ふむ。そろそろそのお告げを聞く時間であるな。諸君、今宵も楽しかった。今後も冒険者や傭兵を融通してもらおう」

「無論です。未来の王よ」

「わははははあはは！」

儂は全能感に包まれたまま、部屋を後にした。

そして、私室へと戻ると、ドアの鍵をしめる。

すると、

『……聞こえるか、ジャルネルよ。我が声を聞く神の使いよ』

神の声が儂の部屋に鳴り響いたのであった。

ああ、この声が特別な存在である儂を導くのだ。

他の誰よりも優れた儂にのみ、ワイズ神は語り掛けてくる。

「くひひひひひ」

儂は笑いをかみ殺しつつ、アリアケの破滅、そしてブリギッテ教の消滅を確信しながら、神の声に耳を傾けたのだった。

183・増長せしワイス教・教主ジャーナル・ギルメイザー（後書き）

『小説』第4巻2022年2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

【無料】試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。お\*。  
ー。お\*コミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

1st anniversary記念PV

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobMIPNhk>

公開中!!

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

.....

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「この後一体どうなるのっ……!?!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 184・ワイズ神の操り人形

184・ワイズ神の操り人形

(前回の続きです)

『……聞こえるか、ジャルネルよ。我が声を聞く神の使いよ』

「くひひひひひ……。ははあ、我が神よ！ ご機嫌麗しきこと何よりでございます！ ああ、偉大なるワイズ神が今日も教主たるわたくしに語り掛けてくれることこそが無上の喜びであります！」

我が神の声は透明な音色をしておられる。威厳に満ちているが、どこか幼さもあつた。少年とも少女ともとれる少し高い声だ。

姿は見えない。だが、そのお姿はおそらく荘厳なるものであろう！

何せ、儂を王位へと導く存在なのだから！

『世辞はよい。それよりも……』

「神託ですな！ くひひひ！ 楽しみにしておりました。ありがとうございます！ 拝聴存じあげます！」

『……は……あ……』

ん？

僕の聞き間違いだろうか？ 何やらため息のようなものが聞こえたような……？ ふむ、そんなわけあるまい！ この忠実なる信徒を前に、ため息など！ ほっほ！

「神よ。どうかなされたのですか？ さあ、さあ、ご神託をこの神の使徒へお与えください！」

『そうであつたな。だがその前に一つ』

「なんでございましょうか？」

『余り、我の前で軽々けいけいに口を開くものではないと戒めよ』

おお！

しまった。つい神を崇拜するが余り、畏敬の念が口をつきすぎたようだ。

神が偉大なのは当然のこと。ことさらに強調すれば格が墮ちよう。僕が偉大なのと同じように。

「人ごときが失礼を致しました。ですが、さすがワイズ神様でございます。言葉などではなく我が信仰こそを見ておられるということですね」

『……ああ、まあそのようなものだ。近き信徒の息吹も、清ひびかであるか、よりけりゆえな。私にも趣向がある』



？

どついう意味であろうか？　だが神の崇高なる意図を汲み終わる前に、神は言葉を紡ぎ始められた。

儂は神託に集中する。

『アレを使い、手駒を揃えることには成功したな？　では次はその者を鍛え、従えよ。従順なる僕とするが良い』

「ははあ！　分かりました！　薄汚い魔族です！　拷問してでも従順にさせ、我らワイズ教のために役立てましょう！」

『……その必要はない』

「なんですと？」

儂の驚きの声とともに、カラン、という音が鳴った。近くにあった机の上に、薄紫色をした謎の液体が入ったガラス瓶が出現している。

『それを用いれば従順になる』

「ほほう！　洗脳薬ですな！　これは素晴らしい、ぐひひひ！　魔族ごときにはちょうどよい！！」

儂は哄笑する。すると、

『……そなたらの嗜好は分からぬ』

神が何ごとかをポツリと漏らされた。しかし、

「は？ 何ですと？ 恐れながら、お声が小さくてよく聞こえなかったのですが？」

『良い。私にも分からぬことがあると言ったまでのことだ』

「なんと！ 知啓の神ともされるワイズ神様にも分からぬことが！？」

『そうだ。ゆえにそなたのような者をわざわざ選んでいるのだしな。それにしても蒙昧もつまいなことだ。試さねば分からぬのだから。その意味ではそなたには手間をかけさせる。かのアリアケと相克する者ともなれば役者はそなたこそ似つかわしい』

「は、ははあ！ ありがたき幸せ！」

儂は平伏した。前半のお言葉の意味は理解できなかつたが、後半！後半のお言葉を聞いて全て理解できたからだ。

そう！

「ワイズ神様は儂にとてもつもない期待をされていることが！」

『ふむ、そうだな。その反応も期待通りではあるが……。複雑なものだな。まあ、その調子で励め、ジャルネルよ。期待に応え続けよ』

「ははあ！ このジャルネル、命に代えましても尊きワイズ神様の  
つ……………」

『ではな』

「あっ」

ブツリ！

まるで太い糸が切れたかのような音がしたかと思うと、神のオーラが去ったのが分かった。

私室に明るさが戻り、我に相応しい豪華なきらびやかな調度品が輝いていた。

将来の王たる自分には似つかわしい。

だが、

「まだまだ不足よの。まずは神託に従い……」

僕は机の上におかれた薬液に満ちた瓶を見ながら、舌なめずりする。

愚かな魔族を操り、鍛え、あの増長したアリアケや女狐リズレット・アルカノンを叩き潰すのだ。

神託通りすれば、確実な未来となることだろう。

いや、それだけではない。

ゆくゆくは……。

「我こそが大陸に君臨し、唯一絶対の王となるのだ！ やがては神にも手がっ……！ きひ、きひひひひひ……！」

我の崇高な理念をのせた笑い声が、我が聖都『マリード』に轟くのだった。

## 184・ワイズ神の操り人形（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第3巻発売中。第4巻2022年2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。\*。  
—。o>o>コミック  
<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】  
SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中！！

【応援よろしく願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「この後一体どうなるのっ……！？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

185・課外授業／潜入『聖都マリード』

185・課外授業／潜入『聖都マリード』

（アリアケ視点）

「なるほど。情報の出所はそこらあたりか。まあ、想定はしていたが。しかしさすがバシユータだ。よく突き止めてくれてた」

「ありがとうございます。で、旦那、どうしますか？ いきなり殴り込みですかい？」

「それもいいかもしれない。大事な生徒を連れて行かれたんだからな。ただ……」

うーん、と俺は首を傾げる。

「その男と、今回仕掛けてきた謀略には齟齬があると思う。その男は感じていないのかもしれないが、これはその男を利用した、もっと大きな仕掛けだ。大陸全土を巻き込んだな」

「アリアケの旦那が絡んでいるんですから、そうでしょうね」

「そうかもしれんが、余りそう言ってくれな。何だか俺が皆を巻き込んでいるように見えるだろう？」

俺が苦笑すると、バシユータは肩をすくめて、

「そうは言いませんがね。まあ事態の中心にいることは変わりありません。舞台の主役には旦那。その男は自分が主役だと思っているでしょうが、旦那の勘では、そうではありませんな」

「ああ。あるいは舞台自体が主役かもしれん」

「と言つと……」

と、そんなコソコソ話を校長室でしていると、バンツ！ と扉が開かれた。

別に鍵もかけてないので、出入り自由のため、機密性はないに等しい。

飛び込んできたのは、この学校の生徒達だった。

「ルギが転校つてどういうことだよ！ 先生！」

開口一番叫んだのは、人族のフィネだ。目に涙をためている。

「本当です。転校には手続きが必要だというのに」

「そういう問題じゃないでしょうに……」

「分かってるわよ。場をなごまそうとしたジョークです」

「壊滅的にセンスがないのね」

「あんなたちうるさい……」



続いて入ってきたソラ、キュールネーと言い合いを始めた。

と、その時、

「ルギが行ったのはワイズ教の聖都マリード。転校じゃない」

ピノがぼそりといった。

その言葉を聞いて、顔を青くしたのは孤児院の子供たちのリーダー的存在のミハイルである。

「そ、そんな！ あんな酷いところへ！？ 一体どうして」

ずいぶん混乱しているようだ。

「アリアケ先生！ 何とか言ってくれよ！ ルギはどうしてあたしたちを！ あたしたちを！ くっ……！」

FINEが何かを言いかけて言葉を詰まらせる。

恐らくこう言いたいんだろう。

「どうして自分たちを捨てて出て行ってしまったのか、か？」

「……」

ショックを受けた表情をする。だが、

「FINE。余りルギを舐めてやるな」

「はへ？ な、舐める？」

俺は苦笑しつつ言う。

「俺があいつを引き留めようとすれば、引き留められた。だが、あいつの意思は固いように思った。強くなる為に聖都マリードに行く  
と決めた。そのことは、まあ俺の指導力不足だったのかもしれない。  
強くなることと、その力を使いこなすことは別のことだ。そのバ  
ランスを崩せば、かつての俺の不出来な弟子のようになると、慎重な  
授業をしていたせいで、あいつにとっては物足りなかったんだろう」

「力と心のバランスが均衡しないと、暴走して周りに迷惑をかける」

ピノがなぜか珍しく口を開き、フォローしてくれる。

「あいつもそれはたぶん分かっている。それでも力を求めて、聖都  
マリードへ向かったんだ。なら、それを引き留めることは出来ない」

「でも！ でも！」

「ただな」

納得できないという顔のフィネに、俺は微笑みかける。

「ソラ、お前の言う通り転校届は出されていない。今はまあ、無断  
欠席といったところだろう」

「はへ？」

「何が言いたいのですか、先生？」

ぽかんとするフィネと、訝し気なキュールネー。

「校長としては生徒の無断欠席を認めるわけにはいかない。ゆえに、これは課外授業の一環とする。聖都マリードで旧国教であるワイズ教を学び、強くなる訓練をする特別授業だ」

「めっちゃめっちゃ」

ピノが半眼でつつこむ。今日は多弁であることだ。

「でも……。だったらあたしたちもその授業を受けたい！ 同じクラスの生徒なんだから、問題ないはずだ！」

「なるほど、それは道理ですね」

「面倒ねえ……」

フィネ、ソラ、キュールネーが言った。

人族とエルフ族、ドラゴン族の子供たちが、魔族であるルギを心配して、おそらく敵地であるマリードへ乗り込むことを本気で考えているのだ。

「さすが旦那の生徒は、そこいらの冒険者どもよりよほど気風が良いですな」

「アリシアや他の皆が手伝ってくれたおかげだ。お前も含めてな」

さて。

生真面目な表情で俺を見つめる少女たちに、俺はあっさりと告げた。

「では、お前たちも参加するか？ 課外授業に？」

「「「へ？」「」」

生徒たちの驚きの声が響く。

まさかあっさりと許可がおりると思っていなかったのだろう。

「い、いいのかよ？」

「もちろん。大切なクラスメイトを助けに行きたいと思うのは、友達として当然だしな」

「べ、別に大切とかじゃ……」

もじもじとするフィネ。

それには触れずに、俺は言葉を続ける。

「お前たちはこれから聖都マリードへ侵入し、神殿で巫女見習いとして働く。そのための準備はバシユータが既に済ませてくれている」

「は？」「最初からそのつもりでしたか」「はめられてませんか、わたしたち」

「そして、授業には教員の随行が必要だろう。俺と、あと数人、先

生方についてきてもらうことにしよう。そして、何かあれば協力してルギを助ける」

「いきなり助けてはいけないのですか？」

「言っただろう？ ルギの意思自体は尊重すると。あいつが飽きて帰りたくなったり、危険が迫れば助けてやればいい。そして」

俺はこれだけはしっかりと言う。

「俺がいる限り、あいつの身が危険に晒されることはないと保証しよう。大賢者アリアケ・ミハマの名において、な」

「おおー、旦那が保証なら安心していいっすね。何せ、この大陸で最大の保証っすからね」

「そんな大層なものではないさ」

「いやいや、そこはそろそろ自覚してくださいよ」

バシュータの言葉に俺は苦笑するしかない。

ともかくこうして、

「明日には課外授業に出発しよう。段取りはバシュータに聞いてくれ」

「ほ、本当に、明日出発するんだな、先生？」

ああ、と俺は頷く。

「大事な生徒をさらったワイズ教をぶっ飛ばす……もとい、課外授業『聖都マリード侵入作戦』を明日決行する。今日は英気を養え」

その言葉に生徒たちは、

「……はい!!」「……」

威勢よく応じたのだった。

185・課外授業／潜入『聖都マリード』（後書き）

【小説・コミック情報】

『小説』第3巻発売中。第4巻2022年2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。\*。  
—。o>o>コミック  
<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】  
SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「この後一体どうなるのっ……!?!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



186・自立つなよ……自立つなよ……

186・自立つなよ……自立つなよ……

「さて、ここが聖都マリードに到着したな。皆、聖衣に着替えたか？」

「うむ、儼としたことが似合い過ぎて自分が怖い！ アリシアと同じくらい可愛くない？」

「お前が可愛いのはいつものことでは？」

「ぐはっ！？ クリティカルヒット！ ゲシユペントドラゴンは倒れた、のじゃー！」

騒がしいコレットは置いておくとして、

「フェンリルは……。まあ似合うだろうな」

美しい絹のような髪に、ワイズ教の薄紫を基調とした聖衣はよく映えて、彼女を神秘的に見せていた。

「その誉め言葉もなかなか良いのう。主様は罪なお方よ」

今は人型の彼女は、聖職者のいで立ちで妙にあでやかに微笑んだ。

今回は引率の先生として、この二人を連れてきた。

「あの〜、はばかりながら、ですが」

ソラがおずおずと挙手し、口を開いた。

「コレット先生は潜入には向かないんじゃない？」

「なんちゅー率直な感想を言う小娘<sup>ソラ</sup>じゃ！　じゃが、その通り！　なんで儂なん？」

「お前はここぞというときの直感が鋭い。ドラゴンゆえの直感は予知に匹敵する。フェンリルは理知的だが、予知までは出来ない。ということに頼りにしている」

「うおおおおおおお！　愛してる！　どうじゃ小娘<sup>ソラ</sup>！　儂の力を思い知ったか！」

「潜入に向いてなさそう、という印象はますます増大しましたが、アリアケ先生のご意図はよく理解しました。以上です」

「それで〜」

キユールネーが頬づえをつきながら言った。

「コレット姫……コレット先生とフェンリル先生がアリアケ神官の『見習い』。私たち生徒は先生方の『お傍付き』という立場でいいんですね？」

「ああ。バシユータが手配は整えてくれている。俺はスキルを使用して現在の神官と入れ替わる。神官は数人の見習いと傍付きを置く慣例のようだ」

「でもさ、いきなり新しい神官が来たら目立つんじゃないかなあ？」

フィネがもつともな質問をする。

「スキル『幻覚』を使用する。だからいきなり来た神官とは認識されない。文字通り入れ替わるわけだ。問題は、俺たちはワイズ教の教義や風習を知らない。出来るだけ目立たないように努めて調査する必要がある。そこで、ミハイルにも参加してもらおうことにした。色々教えてくれ」

「わ、分かりました」

緊張した様子でミハイルが頷いた。ちなみに、無言で遊んでいるだけだがピノも連れて来ている。

「うむうむ、任せるのじゃ！ 気に入らないやつが来ても、プレスではなく、グーパン程度にしてやろう！」

「のっけから破綻しそうですね！ 確信を得ました！」

「なんじゃと、ソラ！」

「まあ我がそのあたりはフォローしようぞ。それで良いかえ、コレ  
ット？」

「む？ まあフェンリルが言うならいいけど。じゃが、お主らは分

かっておらんようじゃな！　この中で一番、潜入に向いていない人物が誰なのかを！！！」

「「「え？」「」」

「おお、おお。予知が発動したのう」

フェンリルがおかしそうに言った。

「簡単に予知にするんじゃないのじゃ。これは単なる傾向なのじゃ！」

「ふふふ、なるほどの。かしこきかなドラゴンや」

「うむ！」

二人がそんな会話をした。

潜入が一番向いていない人物？　さて、さすがにコレットが一番向いていないと思っていたのだが、一体誰のことを指しているのだろうか？

そんな作戦会議をしているうちに、聖都マリードの中央に堂々と鎮座する神殿。

まさにワイズ教の総本山。

ワイズ教大神殿までやって来たのだった。

入口には見張りがいるが、既にスキルは使用している。

「アリアケ神官様。お帰りなさいませ」

「ああ、開門してくれ」

「はは」

門番が扉を開く。

と、その時であった。

「この役立たずめが！」

「ひっ！？ も、申し訳ありません！！」

「うるさい！ このっ……！！！！」

神官服を来た男が、おそらくお傍付きの少女に手を上げようとしていた。

「いきなりだな。って、あれ？ アリアケ先生？」

「ほら、の？」

「うむむむ」

音もなく立ち上がった俺を見て、コレットとフェンリルは『やれやれ』と首を横に振った。

「誰が一番目立つかなど議論の余地はないのじゃよなあ」

「そうであるなあ」

そんな声を聞きながら、俺は瞬時にスキルを使用してその男性神官の傍まで移動すると、

「あぎゃ！？ いでえ！ いでででででででで！」

その振り上げた手をひねりあげたのだった。

「おっと、すまない。虫がついていたものでな」

「誤魔化せてるつもりならすごいわね」

キュールネーのよく通るハスキーな声が、後方から聞こえて来たよ  
うな気がした。

186・目立つなよ……目立つなよ……（後書き）

【小説・コミック情報】

『小説』第3巻発売中。第4巻2022年2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ一読ください。\*。  
—)o(コミック  
<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

【1st anniversary記念PV】  
SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中！！

【応援よろしく願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「この後一体どうなるのっ……！？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。



187・とりあえず子供に手を上げる神官をボロボロにするアリアケであった

187・とりあえず子供に手を上げる神官をボロボロにするアリアケであった

一旦、振り上げられた腕をねじりあげたが、大層な悲鳴を上げたので、手を離してやる。

「大丈夫か？」

「は、はい。あの、あなたは……えつと」

少女は10歳にも満たない子供だった。姿はみすばらしく、ボロを着ている。

見たところ、今まさに俺を見上げ恨みがましい目を向けている神官の傍付きか？

「き、貴様！ どの派閥所属の神官か知らんが、この私が誰か知っているのか！？」

と、少し考え事をしてしていると、地面にしりもちを付いていた男が青筋を浮かべながら立ち上がった。

表情は冷静さを装い、なんとか引きつった笑みを浮かべているが、内心で俺への殺意が蠢いていることが分かる。

「知らん。誰だ？」

「上級神官のロベックス様だ！ お前ごとき普通神官が口をきくのもはばかられる存在なのだぞ！」

そう言うと、彼は余裕を取り戻したようだ。

自分の立場を思い出して、心の平穩を取り戻したのだろう。

「そうか。俺はアリアケ。普通神官だ。虫を取り除こうとしただけで他意はない。あと、子供には優しくしろ。分かったな？」

「なあ！？」

おっと、

自然と指示するような口調になってしまった。

だが、こういう不出来な存在をただすには、しっかりと正義が何かを伝えた方が良い。

「上級神官の私に向かってっ……！！！」

「階位など今は問題にしていない。人として正しいかどうかだけを問っている。子供に手を上げようとした。もとい、虫がついていたのでそれを取り払った俺に対して、お前のような存在が文句を言える筋合いはない。この理屈は分かるな？」





「ドラゴン並みの苛烈さですわ。コレット先生が惚れた理由もよく理解できました」

「じゃろ」

「それよりどうするんですか？ まだ寮への入居も済んでいないのにこんな騒ぎを起こしては、問題になって追い出されるのではないですか？」

「まあ、それは問題ないさ。スキル サイレンス、スキル 濃霧（範囲小）。おい、起きろ」

「ん……ぐ……あ……」

上級神官は涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔を上げると、俺の顔を見た。悲鳴を上げようとするが、パクパクとするだけで、その声は出ない。そのことで更に混乱し、先ほどまでの激昂は嘘だったかのように、今は俺を畏怖する対象として見ていた。

「どうやら、ショックで失語症になってしまったようだな。しばらく『療養』が必要なようだ。なあ、ロベックスよ。俺の言うことが分かったら一度領け」

俺の言葉に、ロベックスは恐怖のあまり何度も頷く。

まあいい。

「今度子供に手を上げるようなことがあれば、獣の餌にする。なあフェンリル？」



「私も混乱しているので、キュールネーさんにお譲りしましょう」

「無理難問を押し付けないでちょうだい、ピノに譲るわ」

「暴力ははたーい！ でも必要悪かも」

生徒達が困惑したり、好き放題言っているが、さて。

「スキル解除と。さて、そろそろ衛兵が来るだろう。門番たちからは、一瞬の出来事だ。スキルも使用したから、何が起こったかよく分かっていないだろう。的確な証言は出来ないはずだ。適当に話を合わせてくれれば問題は起こらるので安心しろ」

「うむむむ。なかなか幸先の良いスタートじゃな！ 旦那様のかつちよいい姿を見れたのじゃ！」

「そうよなあ、しかも、子供を一人救えて何よりであるなあ」

コレットとフェンリルはニコニコと上機嫌で答えた。

「賢者パーティーって、やっぱすげー」

霧が晴れボコボコになって失禁している神官の姿が現れた異様な光景を見ながら、FINEがちよっと引きぎみに言うのだった。

そして、まもなく衛兵がかけつけた。

187・とりあえず子供に手を上げる神官をボロボロにするアリアケであった(後書き)

【小説・コミック情報】

『小説』第3巻発売中。第4巻2022年2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ「」読んで下さい(お\*。ー。 )おっ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!



【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「この後一体どうなるのっ……!?!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

188・お傍付き達のコミュニティへの参加条件が解放されました！

188・お傍付き達のコミュニティへの参加条件が解放されました！

さて、俺は俺なりの方法でロベックス大神官に神罰を下した関係で、衛兵の詰所で詰問を受けることになった。

だが、子供を殴ろうとする大人を止めることにいささかの躊躇もないし、後悔もない。

よって、このような詰問は俺にとってはどこ吹く風だ。

「では、暴力を振るったわけではないというのですね？　アリアケ神官は？」

「もちろんです。暴力はワイズ教にて最も忌避されるべき行い。敬虔なる信徒たる私がそのような行いをするはずがないでしょう？　むしろ何をもってそのようなことをおっしゃられるのか、逆に問わせていただくこともできますが、どうか？」

「い、いや……。しかし、ロベックス大神官の怯えようは何かあったと思わざるをえません。それを証言していただかなくては」

「彼なりの啓示を受けたのではないのでしょうか？」

「は？ 啓示ですか？」

目を白黒させる衛兵に、俺は語る。

「当時は不可解な霧が出ていたのでしょう？」

「え、ええ。門番からも突然霧が発生し、馬車から飛び出したアリアケ神官と、ロベックス大神官の間に何があったかは見えなかったと聞いています……」

「ならば、それが答えだ。あなたがたには分からないのか？」

「は？」

衛兵が首を傾げる。俺は彼らの思考がまとまらないうちに言葉を紡ぐ。

「私はロベックス大神官様に、何か見覚えのない虫がまとわりつくのを見て取り、慌てて馬車を下りたのです。そのことは無論、何ら問題のない行為でしょう。しかし、私が駆け寄った瞬間、唐突に濃霧が発生して、私も何が起こったのか分からない状況になった。気づけばロベックス大神官は怯えた様子を見せていたのです。おそらくですが、神の啓示を受けられたのではないか。あの虫は神の御使い、あるいはその予兆だったのではないか？ 私はそう直感しています」

「み、御使いですか？」

「そうです。彼の普段の行いに呼応し、神が何かしらの啓示を彼に与えたのでは？ その内容が何かは大神官に聞かねば分からないこ

とですが、無論、それを問いただすことは神の怒りに触れることでしょう。ですが、彼が沈黙していることが啓示の内容を踏まえたものだとすればどうでしょう?」

「アリアケ神官。その神とはやはり……」

「名を呼ぶのは不敬にあたりましょう」

「なるほど。神の接触があつたとおっしゃるのですね……」

「ええ。さすが大神官様です。無論、私など一介の神官にその内容をあずかり知ることは出来ようもありませんが、あれほどの怯え……。相当の神の御意思に触れた結果であると推察すべきだ」

「ともなれば、我ら衛兵がとかく言うべきことではありませんな。ロベックス大神官様も、その神の御意思に触れて、今や畏敬の念にかられ、ベッドで震え続ける始末だ。『話せば命はない』などと言つておられる」

「ふむ、まさに神のご意向ですな。また、彼が話さないと云つならば、私も、そしてあなたたちもこのことは胸に秘めておくべき事柄と言えましょう。何せ神のご意向がそうなのですから」

「わ、我々もですか? しかし、職務上報告を……」

「ふむ。あえて神意に反するというわけですか。結構。ならばあなたたちは異端審問にかけることとしたい。職務に殉じ、殉教するのもまた、ワイズ教信徒の生き方の一つだ。俺はそのことを非難しよつとは思わない」

俺が微笑みながら言うと、

「い、いえ！！！」

衛兵は慌てた様子で首を振ると、

「神の御意思に逆らうつもりなど毛頭ありません。アリアケ神官のご説明で納得致しました。深淵なる神の御意思であるとは思いません。大きな過ちをすることで、お許しください」

「無論だ。ご存じの通り、神は過ちを認めるものを許す寛容さをもっている。あなたたちの職務の忠実さに微笑まれているでしょう」

俺が改めて微笑むと、衛兵たちも緊張した面持ちから、やっときこちない笑みを浮かべるのであった。

(しかし、まだロベックス大神官は寝込んでいるのか)

ちよつと脅し過ぎたかな？

ともかく、こうして連行された俺は、衛兵の詰所から解放されて、やっと自分にあてがわれた部屋に来ることができたのであった。

「戻ったぞ」

「早い！？ 上級神官一人をボコボコにしたはずですよね！？」

フィネが驚愕の表情で俺を見るが、

「そうだったか？ 神の神罰が下ったただけだ。いわば神意なんだから、俺たちがとやかく言われることじゃないだろう？」

「神とは主様のことだろうか？」

「確かに旦那様は神様よりももっと偉い存在じゃからなあ」

「まあ、別に神なんぞに興味がないがな」

俺はその話題をささっと終わらせると、

「あの少女は無事だったかな？ 結局名前も聞かないうちに衛兵が来てしまったが」

「テールです」

俺の言葉にすぐに答えを返してくれたのは、孤児院出身のミハイルだった。

「顔見知りで、小さいときに一緒でした。優秀な少女でしたから、ちゃんとお傍付きとして上級神官に仕えることが出来たのでしょう」

「あんまり愉快的な職場ではなさそうだけど」

キョールネーの言葉に、ミハイルは苦笑を浮かべるのみだ。

「でも、驚きました！ いきなり子供を助けに飛び出すなんて！」

エルフのソラが腕を腰に当てて言った。

「ダメだったか？」

「いえいえ！ もうなんとというか、自分の常識が一瞬にして崩壊したので、評価不能と言う方が正しいです。でも、セラ姫がファンクラブ会長になった理由も分かった気がします！」

「そのファンクラブ、俺は全然認可していないが……」

といちおう前置きをしつつ、

「案外、ああいう人助けというのは大事なんだ。特にこういう新しい環境下では。でないと、アレが手に入らないからな」

「アレとはなんじゃ、旦那様？ のじゃのじゃ」

コレットが首を傾げているので、俺は微笑見ながら言った。

「一言でいえば『情報源』かな」

「さすがアリアケ先生、深謀遠慮ですね」

「いや、別に計算してやったわけではないがな。あれは、正直勝手に体が動いた」

「うむうむ、分かる、分かるのう。我もすっかり孤児たちを助けてしまったからのう。やってしまったから、どうしようか考えたのう。うははははは」

「賢者パーティーなのに賢者っぽくない！」

FINEがつつこむが、俺は笑いながら、

「だが、善意は人の輪を広げる。個人の力がどうこうよりも、よほど強力な力だ。さあ」

俺は絞められたドアの方へ呼びかける。

「入ってくるといい。さっきも言ったが、名前も聞いていなかったからな」

俺がそう言つと、そつとドアが開いた。

そこには一人の少女が立っていた。

「あつ！ あんたはさっき上級神官にいじめられてたつ……！」

FINEの声にびくつとしながら、

「助けて頂いてありがとうございます。神官様。ロベックス様が寝込んでいるので、御礼だけでもと思い、無礼を承知で伺わせて頂きました。あの……。あの時は本当に助けて頂きありがとうございます」

少女はおどおどとした様子で頭をぺこりと下げると、

「自己紹介が遅れて申し訳ありません。先ほどそちらのミハイルから聞いたと思いますが、私の名前はテール・ミル。ロベックス様の



お傍付きです。そして「

彼女はそう名乗ってから、俺を見てから、

「お傍付き同士のグループの二つに所属させて頂いております」

と、そう言ったのであった。

188・お傍付き達のコミュニティへの参加条件が解放されました！  
(後書き)

【小説・コミック情報】

『小説』第3巻発売中。第4巻2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ「」読んで下さい。  
\*。ー。 ) o p コッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「この後一体どうなるのっ……!?!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

189・お傍付き達のコミュニティへの参加条件が解放されました！

189・お傍付き達のコミュニティへの参加条件が解放されました！

ロベックス上級神官のお傍付きのテールのおかげで、神殿の様子がおぼろげながら分かってきた。

「いきなり情報源を確保するなんて、さすがアリアケ先生だなあ。半端ねえ！」

とFINEが喜んでいる。

「計算づくみたいに言うな」

俺は慥然としつつ、

「人を助けるのに理由はいらんさ。特にああいった大人が子供に手を上げる時はな」

「さすが旦那様なのじゃ。き、きつと、その……良い父親になるのじゃ！ ちら！」

「？ 何の話だ？」

「知ってた！ 伝わらんじやろうなあって知ってたし！」

コレットが首を振る。

「でも、こうなることも少しは考えていらっしやったのでしょうか？」

「勘違いするでないぞえ、キュールネー」

キュールネーの言葉を、フェンリルが微笑みながら否定した。

「こんなものは計算のうちに入らぬのよ。計算などしなくとも、主様が動けば状況がついてくる。ゆえに主様なのよ。分かるかえ？」

「さっぱりですが……。私の精進が足りないということですね」

「ふふふ。そなたはドラゴンのくせに素直なところが良い。して、テールと言ったか。そなたは上級神官のお傍付きだけあって顔が広いわけよな？」

「あつ、はい！ その通りです！ 助けて頂いた、アリアケ神官様に何事かお返しできないかと、尋ねた次第です。ただ、しよせん神官にもなれないお傍付きに過ぎませんので、大した力はないのですが」

「いえ、そんなことはありませんよ」

テールの言葉を優しく否定したのは、孤児のミハイルであった。

「このワイズ教神殿でお傍付きとしてやっていくには、それなりの

処世術が必要です。僕がそれに失敗して地下牢に入れられていたのに対して、テールはそこらをうまくやれる才能がある。だからお傍付きとして働けているんです」

「確かに！ 私もエルフの里では口うるさくて友達が少なかったですからね！ 人と仲良くできるといのは一種の才能ですよね！」

「あなた、自分を卑下することにためらいがないところ結構偉いわねえ」

ソラの言葉に、キュールネーが感心していた。

「ミハイルのことはともかく」

俺はまとめるように言った。

「テール。別に俺は君に何かして欲しくて助けたわけじゃない。だが、せつかくこうやって知り合った仲だ。上級神官も寝込んでいるようだし、困ることもあるだろう。俺は着任したばかりで余り役に立たないかもしれないが、何か困りごとがあつたら頼ってくれていい」

「あつ、ありがとうございます。神殿では神官ごとにグループが決まっています、食事などもグループごとに神官が面倒を見ることになっています。ロベックス様が倒れてしまわれたのでどうしようかと思っていたのです」

「なら、俺のグループを頼るといい。食事位は提供しよう。その代わり、俺や彼らお傍付きたちと友達になつてくれるか？」

「友達ですか？ 部下、とかではなく？」

テールは首を傾げた。

俺は微笑む。

「そう、友達だ。今日あった事や、何気ないこと。君の知り合いが言っていたことなんか話してくれるだけでいい。特別なことは不要だ。ただ、仲良くしてくれると嬉しい」

そう言うと、テールは素直に笑いながら頷くと、

「神官様はみんな怖い方が多いのに、アリアケ様はすごく気さくでお優しい神官様なのですね……。あつ、すいません、ついなれなれしい口を……」

「ははは、構わないさ、友達になる、と言っただろう」

俺がそう言うと、彼女はもう一度微笑むと、

「分かりました。ではお昼と夕食時にお部屋にご訪問させて頂きませす。その際に、世間話でもできれば」

「ああ、ありがとう」

俺は微笑んだ。

こうして俺はたまたま助けたテールという少女と友達になり、神殿の様子をつぶさに知ることができるようになったのである。

テールは面倒見の良い少女のようで、お傍付きの中でも好かれて  
いるらしく、非常に顔が広がったため、俺のもとにもたらされる情報  
は非常に有益なものになったのだった。



189・お傍付き達のコミュニティへの参加条件が解放されました！  
(後書き)

【小説・コミック情報】

『小説』第3巻発売中。第4巻2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ「」読んで下さい。  
\*。ー。 )oへoッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「この後一体どうなるのっ……!?!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 190 子供に大人気のアリアケと、コレットたちの神殿での生活

190 子供に大人気のアリアケと、コレットたちの神殿での生活

「そうなのです。ビューズ神官は非常に気性が荒いお方ですね。お傍付きたちも困っている子が多いみたいです。そうだったわよね、ミミルク？」

「うん。テールちゃん。しかも人使いも荒いし、気に入らないとすぐに折檻してくるんだ。この前も痣が出来ちゃったよ」

「可哀そうに。君たちのような子供につらくあたるとは、よほど心が狭い輩のようだな。神官の資格などなさそうな奴だ」

俺が眉根を寄せて、幼い少女たちの頭を撫でると、二人はぱちくりと目を丸くした。

そして、なぜか頬を赤く染める。

「ア、アリアケ神官様がお優しすぎるような気がします」

「そうか、子供にやさしくするのは普通のことだろうっ？」

「そんなことないです。理不尽なことが多くて、結構滅入ってます。あつ、もう少し私の頭も撫でて下さい」

「いいけど。俺になでられて嬉しいものか？」

「それはもう……。今日の昼食の出席権をかけて、お傍付きの子供たちの間で争奪戦が発生しましたし」

「なぜそんなことに」

「それはやはりアリアケ様の人徳というやつでしょう。あの、私ももう少し撫でて頂けますか？」

「テールずるいよ。あなたは毎日来てるんでしょ？ ちよつとは遠慮したほうがワイズ神の教義にそってるんじゃないかな？」

「そんな教義は聞いたことがないわ。それに、いいじゃない。別に。たまには。あなたこそ初対面のくせにずうずうしくない？ もうちよつと遠慮されたら？」

「どつして喧嘩になっているのか分からんが……。必要なら幾らでも撫でてやるから、仲良くしてくれ」

「「きやー」「

お傍付きの子供たちの会話はこんな風にして進んでいった。

どうやら、神殿でお傍付きの身分は低いものらしく、俺の様に普通に接してくる神官が珍しいようで、こうして妙になつてくれる。

「すぐに打ち解けてくれるいい子たちばかりで良かった」

俺は微笑む。

しかし、

「朴念仁」

「アリシアにちくつてやろつぞえ。将来の禍根の種をまいておるとなあ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

という感じで、半眼に目を細めながら、なぜか冷たい視線を俺に向ける双眸が幾つか。

「コレット、フェンリル。何を言っているんだ？」

俺はきよとんとする。

二人は、

「は~~~~~」

と深々とため息をつくのだった。

「さすがといたいところじゃが、旦那様が子供にここまで大人気じゃとは、このゲシュペントドラゴンの目をもつても見抜けなんだ、なのじゃ」

「よく考えればそなたも子供みたいなものであるし、この事態は想定しておいても良かったのかもしれん」

「？」

二人の会話は半分以上、理解不能だが、とりあえずうまく情報収集が進んでいることを褒めてくれているのだろうと解釈する。

それはそうと、コレット、フェンリルたちもお傍付きということになっているので、いちおう神殿での仕事が割り当てられている。

それにしても、

「二人とも、ワイズ教の聖衣がよく似合っているな」

俺は改めて言う。

二人の普段の恰好とはまた違った印象で、美少女なだけあってよく似合うのだ。

「くっ！ こうやって何気なく服を褒めてくれる旦那様！ これくらいでトキメいてしまって、今日一日頑張れちゃう自分がちよるすぎなのが分かる！ のじゃ！」

「我ものう、もう少し老成しているつもりだったのだが、わりとグツと来るのよ。本当に罪深い男よの。アリシアにちくっておこっ」

「思ったことを言ったただけだろうに」

「「そういってござぞ」」

二人が呆れたような、しかし微妙に頬を染めて外に出て行った。

コレットは訪問客の案内。フェンリルは夕食の仕込みだろう。ちなみにFINEたちはまだ小さいので掃除が役目だ。

さてワイズ教は国教ではなくなったとはいえ、根強い信者がいる。

というか、無理やりブリギッテ教を国教にしたから、当たり前と言え、当たり前だが。

なので、コレットの訪問客受付の仕事というのは多忙である。

それで、神官の仕事のうちの一つにいわゆる懺悔を聞き、それを許す言葉をかける、という仕事がある。

俺たちの正体はスキルによって、幻覚を見せるようにしているが、懺悔は神官に順番に割り当てられるので、俺を訪ねてくる訪問客がいるということだ。

テールたちとのいつもの昼食が終わると、俺はその仕事を始めることになる。

懺悔を聞く部屋へと入ると、コレットが案内してきた訪問客が、壁越しにやってきた。こちらの姿は見えないし、こちらからも見えない。

「……まさかお主が来るとは想定外なのじゃ」

「？ 何かおっしやいましたか？」

「なんも言っておらんのだ。さっさと懺悔するのだじゃ」

「えらそーな、下働きですわねえ」

何やら訪問客の女性とコレットが話しているが詳細は聞き取れない。そうこうしているうちに女性は懺悔室に入り、懺悔を始めた。

「神官様。わたくしの懺悔を聞いて下さい」

「ええ、いいでしょう。神はすべてをお聞き届けくださいます」

「ありがとうございます。実はとある男性のことなのですが……」

「ええ」

「彼の性格が最悪なのですが、どうも私はそんな彼のことが気に入って仕方がないのです。それで、先日実は世界を救ったのですが、その際に人生で一番の窮地になった時に」

「ん？」

「わたくし、どうやら彼に恋していることに気づいたのです。ですが、彼は性格は最悪で女癖も悪い最悪男なのです。今も金のために悪に加担してるみたいでして……。そんな彼を好きになってしまった私をお許しただけですか？」

世界を救った？

「奇遇ですね。私も世界を先日救ったりしたんですよ」

「まあ。うふふ、神官様も冗談を言われるのですわね」



冗談ではないが、そう受け取ってもらったほうが都合がよい。話を続ける。

それに、何だか他人事ではないような気がして、つつい親身になつてしまふ。まるで俺のよく知る二人のようだ。

「俺の友人にもよく似た知り合いがいます。あくまで友人の話ですが、その友人もそんな悪徳男を好きなようなのです。本人は気づいてないようですが」

「まあ」

「しかし、お似合いだと俺は思っています」

「そ、そうなのですか？ でもその男もありていにいってクズなんでしょう？」

彼女の言葉に俺は頷きつつ、

「ええ。ドクズで、まったく周りが見えていません。金遣いも言葉遣いも、女癖も悪い。強きに流れて弱きをくじくような輩です」

「あはは。それはまあ、最低ではないですか」

「ええ、しかし、どうでしょうか。そんな人間の悪性の塊のような男でも、俺たちに最低とは何か、決して真似してはいけないダメ男とはどんなものが、そういったことを教えてくれる」

「!?!? そうなんです!?!」

女性はハツとしたように言った。

「もう、ほとんど最低なのですが、そこがたまらないんです！ むしろ、正義とかまじめに何かやるなんてつまらないのですわ！ 彼が無茶苦茶やっていると、死にかけることとかもあるのですが、何だかワクワクするのです！ 正論ぶってるやつをぶっ飛ばしたりしてる姿を見ると、スカツとするのですわ」

「暴力は反対ですが、そういうダメな男を支えてあげるのもまた、恋の形なのではないでしょうか？」

「そうか。私はダメ男が好きな女だったのですわね」

「ええ、ダメ男にはダメな女が寄るともいいます。そのことを自覚されるといいのかもしれませんがね」

「ややデイスられている気もしますが、私の本心をまるで見て来たかのように指摘される神官様はさすがですわ」

「たまたま友人に似たような者たちがいたのでね。あなたがたより何倍もクズだとは思いますが。ははは」

「そうなのですわね。私も彼も、それほどのクズではありませんが、参考になるお話を伺うことができて本当に良かったですわ。神官様のお名前をお伺いしても？」

「申し訳ない。私は懺悔を聞き、それを許すための神の御使いにすぎません。名を名乗ることは許されていません」

「そうでしたか。これほどの確なご助言を頂けたので、またお話を

聞きたいと思つたのですが……」

「お二人はお似合いだと思いますよ。ぜひ、積極的にアプローチをしてみてくださいいかがですか？」

「そ、そうですね。……先を越されたけど、あの澄まし顔の聖女にでもコツを聞いてみようかしら。男の落とし方を」

「？」

なぜか身近な女性の顔を次々に思い浮かべることになったが、女性が席をたつたので思考はそこで打ち切りとなった。

代わりに、案内役のコレットがやってくる。

「何だか俺の不出来な弟子を思い浮かべながら、ついつい親身になつて話し込んでしまった。いやあ、ダメンズが好きな女性と言うのは結構多いんだな」

「そ、そうじゃなあ。いや、しかし旦那様がビビアらのことをドクスと認識しているとは意外だったのじゃ」

「ん？ ああ、あれは話を合わせただけさ。相談しに来た彼女とその好きになつた男は、話を聞くにドクスに違いはないと思つたが……。ビビアたちは不出来な弟子、といった程度だろう？ ははは」

「あ、あゝ、まあ、うーん、そうじゃな。まあいつか。にやはは」

何だか呆れたようなコレットの笑い声に、俺は首を傾げたのだった。

そんなこんなで本日のお勤めが終わる。

夕刻5時には終わり、自室へと引き上げると、フェンリルが料理を用意してくれていた。

テールたちは昼食時と夕食時に毎回来るわけではないので、今日はコレットにフェンリル、そして、

「うおー、めっちゃ美味しそう!」

「さすがフェンリル様ですわねー。良妻賢母感半端ありませんわね」

「ソラも料理習おうかな、と思わせるほどの腕前ですね!」

「間違いなくおいしい」

「こんな美味しい食事を毎日とらせてもらえて、僕は幸せです、フェンリル様」

生徒達も絶賛するほどの料理がテーブルに所せましと並んでいた。

「よく噛んで食べるのだぞ?」

「はい! いただきまーす!」

完全に母親モード・フェンリルなのであった。

さて、そんな食事に舌鼓をうっていたところで、フェンリルが話し始めた。

「そう言えばのう。今日、厨房で料理の仕込みをしていた時に、たまたま別の料理好きのお傍付きと話をする機会があったのであるが」

「テールのおかげでずいぶん馴染んでいるみたいだな」

「主様のおかげよの。でな」

彼女はグラスを傾けてから、ゆっくりと言った。

「最近、神殿の庭に黒い影が現れるというそういう噂がたっているようであるな。だが近づけば消えてしまうそうなの」

「ふーん……。幽霊みたいなものか？」

「それに近いが、消える瞬間に一言呟くとのことだ」

「話す幽霊なんているの!？」

フィネがびつくりするが、同感だ。そういう意思を持つ霊はいるにはいるが、非常に珍しい。

「うむ、その幽霊はな、人が近づくとこう言ってから消えるらしい」

彼女は微笑みながら、

「『ブリギッテを殺すにはまだ足りない』となあ」

そう言って目を細めたのだった。

190・子供に大人気のアリアケと、コレットたちの神殿での生活（後書き）

【小説・コミック情報】

『小説』第3巻発売中。第4巻2月7日発売予定！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ「」読んで下さい。\*。ー。 ) o p コッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中！！

【応援よろしく願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「この後一体どうなるのっ……!?!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 191・神の影

### 191・神の影

神殿は広大な敷地に建てられており、庭も相当に広大である。

よく手入れされた中庭のその向こうには、更に広い庭が続いている。

この広い庭の後方には、美しい山の稜線がつつすらと見える。昼間ならばはつきりと見えるだろうが、今は既に黄昏時。夜の帳もじきにおりようという時刻だ。

「本当に誰もいないな」

「よ、よく平気だな、アリアケ先生は。何だかあたし、ゾクゾクするんだけど」

「わたくしもですね。何だか今まで感じたことがない感覚ね」

「わ、私はへっちらです！ エルフは勇敢なので！」

「と言いつつ、私の後ろに隠れるのはやめていただけるかしら？ コレット先生やフェンリル先生の後ろに隠れてはいかが？」

「べ、別にいいじゃないですか！」



「なに？ 私の方が安心するのかしら？」

「そ、そんなじゃありません！ ふざけた授業態度のあなたを好ましいとは一度足りとも思った事なんて、ないんですからね！」

生徒達のやりとりを、教師陣の俺たちも聞くとともになにに聞いている。

「ちなみにピノは平気そうだな」

「んなあ？」

というか何も考えていなさそうである。

そんな様子を見ながら、コレットが口を開く。

「それにしても、ソラとキュールネーか。エルフとドラゴンとは。むむ、意外なところがくつついていて、何だか尊い感じなのじゃちよつといいな、これ」

「他種族ごった煮というのも悪くないのう。なかなか良い光景で眼福であるぞえ」

「「そういうんじゃないから！」」

二人がつっこみを入れる。さてさて。

「みな、余裕があつて何よりだが、油断はするなよ。他のみんなも、な」

「は、はい！」

孤児のミハイルは緊張した面持ちで頷いた。

庭には、アリアケ神官室の全員で行動していた。戦力の逐次投入が良いケースもあるが、俺の直感的にピンとくるものがあつたのだ。なので全員を連れてきている。

「やはり、こんな時分に、この場所に来る人間はほとんどいないんだな」

だが都合は良い。

夕刻になれば、神の祈りや、神殿の閉鎖などの仕事がお傍付きにも神官にもある。

ゆえに、黒い影がこの場所では出現するという噂は、本当にたまたま通りかかったお傍付きの間だけで噂になっているものなのだ。だから取り締まりの衛兵が来る心配もない。

と、そんな話をしていた時である。

ついに黄昏時から、夜の帳が大地に落ち、しばらくした時だった。

「せ、先生あれは！」

「！」

FINEの音が指し示す方向に、暗闇に紛れるようにして、黒い影が庭を横断するようにゆっくりと歩いていった。

その姿は黒闇のせいで黒色なのかと思っていたがそうではない。

そもそも、黒衣のドレス姿をしていた。

髪の色は銀であろうか。後ろでくくるシンプルな姿なのに、月に照らされたそれは妙に美しく映える。

同時に、肌の色も真っ白で、まるで精気がない様子なのだが、その黄金色の瞳に宿る意思の力が、そうしたすべての印象を上回り強烈な印象を残した。

金色の瞳とそこから噴き出す権威じみた雰囲気。

腰に携えた禍々しい長剣。それから明らかに闇の力を感じた。

「アリアケ・ミハマか」

意外なことに、その影ははっきりとした口調で俺へと話しかけてきた。

その堂々とした口調は、まるで王か神といった、権威の最上位に位置するそれだ。

「幻覚はきいていないようだな」

「いや、きいている。だが、この場所にやってくるとすればお前ぐらしいか思いつかぬだけだ。人の王よ」

「俺はそのようなご大層なものではないが……」

「そうか。ならば単にアリアケ王と呼ばう。こたびの働きは大儀であった。私は本体ではないが、代わって礼を言う」

「本体ではない？」

「影だ。かの邪神も影を現世に降臨させて色々と企みごとをしていたように、私もその方法を好んでいる」

「本体を守るためにだな」

「いや、単に面倒なだけだ」

「……」

「仕方ないだろう。私はそういう側面の神なのだから。攻めるなら私ではなく、このようになった経緯や環境を恨むべきだ」

「ちよつとよつとー！」

と、俺と謎の影との会話に、FINEが我慢ならないとばかりに割り込んだ。

「さつきから何をしゃべってるか分からないよ！ 何より、あたしはルギが心配でここに来たんだから！ 情報を集めてもルギの情報がない！ あんた、ルギのこと何か知ってるんじゃないかよ！」

ドストレートな叫びに、影はふむと頷いてから、

「あれは今回の悪だくみの重要な要素でな。我が操り人形として働

いてもらつ予定だ」

「なんだって！ あれはあたしの、その、うーん、と、友達だぞ！  
今のところ！」

「そうか、ならば都合が良い」

その影は……。いや、明らかに黒き騎士とも見えるその女性は禍々  
しいオーラを放つ剣を抜くと、

「お前たちが舞台上上がる資格があるか、試させてもらつとしよう」

「やっぱりこうなるのか」

俺はため息をつきながら、杖を構える。

「みんな、戦闘準備！ 油断するな！」

「そう緊張するな。これは露払いだ。楔のようなものだと思え。無  
論」

彼女は酷薄な様子で、皮肉気な笑みを浮かべた。

「場合によっては命を落とすだろう。気を張るが良い。はあ……！！  
……！！」

黒き影が剣を振るう。

それだけで、大地がえぐれるほどの烈風が周囲をなぎはらった。

「ほう、今を防ぐか」

「合格でいいのか？」

「冗談はよせ。たまには退屈をまぎらわさせよ、人の王よ」

黒き影が動く。

「光栄というべきかな。ワイズ神の影よ」

「はへ？」

「ワイズ神……様？」

フィネとキュールネーの啞然とした声が聞こえたが、俺とコレット、フェンリルは構うことなく、彼女の動きに呼应して戦闘行動に移行していたのだった。

## 191・神の影（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ一読ください。  
\*。ー。 )oペコッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「この後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。



## 192・VS　ワイズ神の影

192・VS　ワイズ神の影

「早速のブレース!!」

コレットが先手必勝とばかりに、ワイズ神の影へと業火を放射する。

「ふむ」

影は見戯とばかりに、手を一振りすると、平野を一瞬にして蒸発させるブレスを消失させた。

「ぬおお！　さすが神！　僕のブレスを赤子の手をひねるように、消し去りおった！」

「この程度では油断したりせぬ。そのような演技は不要だぞ、神のゲシュペン末裔トテフコ」

「ばればれよのう、だが走り出したら止まらぬのは狼の定めよの！  
そうれ！　大雪山ハード・スカディの怒り!!」

ワオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

「　必中　スピードアップ　攻撃力アップ　」

フェンリルが本来の獣の巨躯の姿を取り戻し、絶対零度の氷の魔力をまとって突進する。俺のスキルでその力は10倍以上に膨れ上がり、並大抵のモンスターであれば塵も残さず粉碎するレベルへと達する。

しかし、

「聖なる獣。この程度か？ 原初の勇者パーティーではお前がパーティーの要であつたとすら聞いたが、私の勘違いだったか？」

「どうであつたかなあ？ 我は今、その男に操を立てる従順な獣なのでな。昔のことは知らぬよ」

青く美しい獣の突進を、難なく片手で止めるその姿は、常軌を逸していた。

地面が耐えきれずに、亀裂が走り始めるほどだ。

「よし、今だ、FINE！ ソラ！ キュールネー！ ピノ！」

「スキル 潜伏 解除！」

いつの間にか近づいていた、生徒達が奇襲を仕掛ける。

「キュールネー……！ あなたの馬鹿力見せてやんさなさい……！」

「ソラ、あなた、こういう時こそ委員長の仮面をかぶり続けるべきではないかしら……！」

キュールネーはそう言いながらも、人の姿のままでありながら、膨大な魔力を右の拳へと集めていく。

ドラゴニック・ゲシュタルト  
「竜の激憤！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
！！！！！！

キュールネーが大地に向かって拳を突き立てた！

その瞬間に、コレットやフェンリルとの攻防によって、もろくなっていた大地はあえなく地割れを起こす。

その深さは底が見えないほどだ。軽く見て数十メートル！そこに、

カラミティ・ウィンド  
「風神の怒りよ！！！！」

ソラの全力の風魔法が炸裂し、地底の底へと吹き飛ばす！

地底数十メートルへ、神を落下させて打ち付ける作戦だ。

「なかなか良い」

ワイズ神の影が感心したような声を上げるのが聞こえた。

「や、やった？」

ソラが期待に満ちた声を響かせるが、

「無敵付与。全体化」

俺の声が響く。

と、同時に、

「 マナ吸収 、 信仰切除 、 亜空間形成 」

普段しゃべらないピノが矢継ぎ早にスキルを行使した。

「ピノ！？ なにその凄そうなスキルっ……！」

と、FINEが驚愕しているが、俺もピノも。そして、コレットもフエンリルもその言葉に答えている暇はない。

「来るぞ、衝撃に備える」

「へ？」

俺の言葉と同時に、生徒達のボケつとした声が響いた。その瞬間、

『神の前にひざまづけ。そなたらを踏みつぶしたその先に、屍山血河の栄華の都を築こう。安らかに眠るが良い』

腰に佩<sup>は</sup>いていた禍々しい黒い剣をひとなぎするだけで、極大の魔力が放たれた。

『ピースト・サンバー 黙示録の獣よ飲み干せ』

それは紛れもない神の一撃。

光を放つのではなく、光を飲み干しながら奔流する極大の魔力は、俺たちの数々の防御スキルを打ち砕かんと暴れ狂うのだった。

その永遠にも思える、神の瞋<sup>しんい</sup>たる暴力の嵐は、しかし唐突に終わりを告げた。

「接続を切られたか。頭の回ることだ」

放出されていた魔力がまるでバケツの水が切れたかのように止まる。

周囲一帯はまさに天変地異のようになっていたが、その影響は限定的だ。それは俺やピノたちのスキルによるものだが、一方で……、

「今宵はこの程度でよからう。拝礼への返答としては過分なほどであつたらう?」

少し冗談めかして影は言う。

俺は肩をすくめながら、

「そうですね。まったく、大げさな挨拶なことだ」

「あ、挨拶。あれが!？」

フィネが驚いた声を出す。

神は無然としつつ、

「当たり前だ。そなたは神をなんと心得る」

不機嫌そうに言った。

俺は苦笑しながら、

「影とはいえ、神の御業があ程度のはずがないだろう？ 無論、俺たちも全力からは程遠い」

「お前はお前で崇拜の念が足りぬ。……が、まあ良い。もしやもすれば同輩になるかもしれぬ男だ」

神はよく分らないことを呟く。

つつこむと面倒そうなので、俺は今日ここにやってきた目的を聞くことにした。

拝礼が終わったのだから、神には願い事をするものなのだ。荒ぶる神であろうとそれは同じである。

「神よ。さつきも言ったが、俺たちはルギという少年を追いかけてやってきた。どこにいるか知っているなら教えて欲しい」

潜入から1週間ほど、色々な手段を使い搜索したが、彼を見つけることはできなかったのだ。

すると、

「かの者は」

あっさりと言口にする。

「教えてくれんのか!？」

「無礼な子であるな。そこな者は。まあ子供とはそういうものか」  
影ゆえに表情は見えないが、少し微笑んだように見えたのは気のせいだろうか？

そんな俺の重いとは関係なく、神は言った。

「そなたらの目的の男児は我が手中にある。会うか？」

「えっ!？ あ、会えるのか!？」

フィネがゴクリと息をのむ音がした。

「無論だ。しかし、覚悟するといい」

神はどうやら薄笑いを浮かべながら、

「あれはもはや我が信徒。お前たちの知っている従前の者ではないぞ?？」

その言葉に、フィネや他の生徒達はもう一度息をのんだのだった。

## 192・VS ワイズ神の影（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ一読ください。  
\*。ー。)oペコッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん



公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「この後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

## 193・変わり果てたルギ

193・変わり果てたルギ

「なるほど。地下祭壇か。それも相当に古いな」

俺たちは階段を慎重に下へ下へと下りていた。

「じめじめしておるのじゃ！」

「コレットとしては快適なのではないのかのう？」

「ドラゴンをトカゲかなんかと勘違いしておるじゃろ、それ！ ちなみに、そのジョークで怒るドラゴンおるから気を付けた方がいいのじゃ！」

「そうですね。トカゲと一緒になんてとんでもない侮辱ですわ」

「あんたら、じゃなくて、先生たち、よくこんな不気味な場所で談笑できんな……」

「本当です！ 足を滑らせても知りませんよ！」

「ソラ、あんたも十分マイペースだよ！ っていうか、あたしがつつこみしないといけない状況って、おかしくない!？」

「緊張感のない奴らだな、お前たちは」

先導するワイズ神の影が呆れた調子で言った。

「この場所は庭に入口があるが、特殊な結界が張ってある。私が認めただけしか入れぬ作りだ。神域ゆえに少しは殊勝にしてもらおう」

「あなたの性格を反映したから、こんな辛気臭い場所になったということですか？」

と、辛辣な言葉を発したのは、なんとピノである。

先ほどの戦闘が終わってから、普段無口だったピノが饒舌になっているうえに、やけにワイズ神の影につっかかる。しかも、口調が随分と大人びていた。

しかし、

「こつという場所にしか宿らぬ力や生命もある。何も太陽だけがお前たちへ恵みをもたらすわけではない」

「例えばイルミナ族はそうだともいいたいかのようですね」

「そう言っている。皮肉なのは余り感心せん。ピノ。アリアケのように腰を据えるがよい」

「先生は特別だ……というか、今は関係ないでしょう。話を逸らすとうとするのは神として褒められた態度ではないのですか？」

双方が否定しあうような応酬が繰り返された。なぜか俺が時々話のダシに使われているが……。

「御託はいい。見れば分かる」

「待ちなさい。まだ話しは……」

「ついたぞ」

階段が終わると、そこには大きな扉が一つ存在していた。

天秤と剣が交差したワイズ神の紋章が刻まれているが、それは何者かによつて十字に刀傷がつけられていた。

その理由を問う暇はなく、扉は自動的に開いたのである。

そこで俺たちが目にしたのは

「ルギ!!!」

その姿を見て、開口一番叫んだのは、フィネであった。

扉の向こうは、どういう原理になっているのか、どこまでも続く平原が広がっていた。

そこに、ルギ。

いや、

「ルギ、少し見ない間に、ずいぶん変わったな」

「ああ、先生にみんな。御無沙汰しています」

彼は微笑みながらそう言った。

一見すると穏やかな笑み。

だが、その目はこちらを見ているようで、見ていない。どこか夢うつつのように見えた。

何よりも、

「どうですか？ この姿は？ 前よりもずいぶん強そうになったでしょう？」

彼はやはり陶然とした様子で言った。

その姿は以前の子供らしい姿から、どこか禍々しいものを感じさせる、不気味なものに変貌していた。

彼はそもそも元四魔公のオーク種族のトリドスの息子だが、妻はヴァンパイアでハーフである。容姿はヴァンパイアの特徴が出ていて、その肌は白く端正な顔立ちをしていて、紫の瞳をしていた。だから、オークの怪力と、ヴァンパイアのスキルが使用できる特性を持っている。

そんな彼は、今や髪の色は抜け落ちて銀髪となり、瞳の色は紅く変貌している。おかつぱだった髪はこの短期間で長く伸び、黒と赤に彩られたヴァンパイアの装束とあいまって、美しい夜の王たる威厳

すら称えていた。

「言葉遣いもずいぶんと大人びたな。だが、子供がそんなに急に成長するもんじゃないぞ？ のんびりと成長すればいいんだ」

「……先生は、いつもそうおっしゃいますね」

ポツリとルギは低い声で言った。

「慌てなくていい。そのうち成長する。潜在能力は大したものだ。何よりも」

彼は初めて感情らしきものを瞳にのせたような気がする。

「『強くなる必要すらない。そんなものがなくても仲間を守ることが出来る』 そう言いましたね？」

「ああ、言ったな」

俺は淡々とつなずく。

同時に、彼は微笑んだ。

「そんなことはありませんよ、先生。それは勘違いだと思えます。なので、それを証明したいと思うんです。だから先生」

彼の周囲からスルスルと鮮血を束ねた刃の帯のようなものが生えてくる。

「簡単には逝かないくださいね」

「ルギ！ どうしてだよ！ 帰って来いよ！ 仲間じゃないか！」

フィネが叫ぶが、

「それは違いますよ、フィネ」

彼は首を横に振った。

「仲間を守るためには力が必要なんです。僕の父さんが死んだのは力がなかったせいです。僕はまた同じ過ちを繰り返したくないだけなんですよ」

切なく謳<sup>うた</sup>つような声で言った。

だが、

「ばっか！ ルギのばか！ あほ！ あんぼんたん！」

フィネが頭にきたとばかりに罵倒しながら、

「あんた超賢いと思ってたのに、こんなに馬鹿だとは思ってなかったぞ、ルギ！ このあんぼんたんめ！ よーし、分かった！ そこまで言うなら、分かった！」

彼女は戦闘体制に移行しつつ、

「ちょっと一発殴る！ あたしも間違ってたら親父に一発ゲンコツ喰らって泣かされて反省させられるんだ！ あんたにもそれ、やってやるから、そこで待ってる！」

そう言いながら駆け出したのである。

「FINE、あなたは相変わらず口が悪いですね」

ルギの瞳が驚きの色をたたえた。と、同時にどこか嬉しそうに口元が少し動いた気がした。

やれやれ。

俺は苦笑しながら、

「俺の言いたいこと全部言ったな、あいつ」

と、言いつと、

「主様の教育の賜物であるなあ」

「旦那様の生徒は最強なので当然なのじゃ！」

フェンリルとコレットがそう返した。

だが俺は首を横に振り、

「俺の力じゃないさ。強いて言うなら、俺を支えてくれたお前たちのおかげだ」



と言いながら、突っ込んでいく彼女へ支援スキルを使う準備を始めるのだった。

## 193・変わり果てたルギ（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ「」読んで下さい。お\*。ー。)oペコッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「この後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 194・ルギの力

194・ルギの力

「簡単には死なないでくださいよ、カオス・ミスト地獄の濃霧！！」

ルギが地下空間に濃霧を発生させる。

それは吸血鬼が血液を毒素に変えて、フィールドの全てにダメージを与えるある種の反則技だ。

もちろん、

「状態異常耐性アップ 全体化。気にせずつっこめ、ファイ…」

「ぬおりゃ あああああああああああああああああ！！！！！！」

俺の言葉を聞かずに、FINEは猪突猛進する。

「おおー、あの旦那様の支援があることを完璧に信じて一顧だにしない感じ、なかなか高得点なのじゃ！ よしよし、通信簿には『優』としておくのじゃ」

「なんの科目にあたるのであろうなあ」

コレットとフェンリルはのんびりとした口調でやりとりしながらも、その行動は無駄のないものだ。

FINEがつつこんだことで、放っておけないとばかりに、キュールネーとソラも攻撃を仕掛けている。

コレットとフェンリルはそのフォーローにとっさに回っていた。

キュールネーが体内魔力を本気で高め、

「ルギ、あんた帰ったら肩もみだからね！ あと、欲しいブラウスがあるから貢ぎなさい！」

軽口をたたきながらも、その魔力は増大していく。

彼女もまたゲシュペント・ドラゴンの王族の家柄。その力は甚大なものになる。

「ソラ！ あなたの考えた、なんでしたっけ？ ゲシュペント・カオス・トルネード 暗黒竜殺劇波でしたっけ！？ それをやりますわよ！！！」

「私が考えたみたいに言わないで！ 暗黒をつけたのはあなたでしように！」

そして、ソラはエルフきつての秀才であり、セラの肝いりの少女でもある。

その二人がFINEのバックアップとばかりに、攻撃を繰り出した。

「そういう本気なところがいいですね」

「あなたの力が分からないほど馬鹿ではないの。侮らないでね、ルギ」

「そうです！ とりあえず叩きのめして、バケツを持って廊下に立たせます！」

「そうですね」

彼は微笑んでから、

「僕が邪魔な敵を全て排除したら、きっと平和な学校生活にまた戻れるでしょう。もう誰も死なないし、傷つかない。そんな世界が来るはずですよ。だから」

ルギは笑みを消すと、

「あなたたちは少し僕の影の中で遊んでいてください。安心してください、痛いのは一瞬ですよ」

その言葉と同時に、彼から伸びていた影が不自然に広がり始めた。戦闘による閃光が彼の影を揺らめかしたように見えたが、

「遅い！ 隙だらけよー！！」

キュールネーたちが同時に魔法を発動する。

しかし、

「あれ？」

「取り込まれるぞ、キュールネーよ。お主が死んだらフレッドが悲しむじゃろっ？」

「攻撃時が一番隙ができるゆえなあ、よく覚えておくとよいのう、ソラよ」

コレットとフェンリルが魔法を放った彼女たちを背中に乗せて、一瞬にして大きく後退していた。影の範囲から外れている。

「あれ？ 私たちのかつこいい攻撃魔法は……」

「キュールネー、お主、気に入ったんじゃな」

コレットが苦笑しつつ、

「あの影に食われてしまったようじゃな。しかし、あの影の先はなんじゃろっか」

「さてなあ。だが、我はつい最近、似たような光景を見たような気がするの。のう旦那様」

「いや、あれは邪神のような次元を操るものとは違うだろう。もう少し厄介なものだ」

何はともあれ、

「FINE！ お前の攻撃は届く！ 一発くれてやれ！！！」

「まっかせろおおおおおおお!!!」

ルギの攻撃を全員で相殺し、フィネを無風状態でルギのもとに到達させることに成功する。

「力のないあなたに何ができますか？」

「だから言ってるだろ!!! さっきから!!! 何度も!!!」

パーン!!!!!!!!!!!!!!

「え?」

一瞬の沈黙が地下神殿に広がる。

俺の最上級のスキルも、コレットやフェンリルたちの神がかった支援も、そしてキュールネーたちの攻撃も関係ない。

ただ、フィネは最初に宣言した通り、

「さあ、目が覚めたかよ! ルギ! こんな変なとこにいないで早く帰ろう!!!」

一発とにかく殴って、目を覚まさせようとしたのである。

「ま……」

これにはルギも目を丸くして、

「まさか、本当に、一発殴るためだけに命がけでつつこんでくるな



んて……」

そして同時に、

「ほう……。人と魔族が……。これもアリアケが作ったものか」

ワイズ神の影が何やら呟いていた。

ルギは続いて口を開き、

「FINE。僕は……」

彼が真剣な表情の彼女に声をかけようとした。

その時である。

「いつまでそんな雑魚どもを相手に遊んでおる。穢らわしい器よ」

神殿の奥より、一人のでつぶりとした老人が、罵声を轟かせながら現れたのである。

それは、

「教主様……」

「ジャルネルか。くだらぬが、これもまた必要な儀式か」

なにごとかを、ルギとワイズ神はつぶやいた。

現れたのは教主ジャルメル・ギルメイザー。

ワイズ教の最高位であり、

「さあ、早く彼ら邪魔者をくびりころせ。儂を高めへと導くが良い」

人の欲望を凝集した忌まわしき存在であった。

## 194・ルギの力（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！  
イラストは柴乃權人先生！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ一読ください。  
\*。ー。 )oペコッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「ルギたちはこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 195・教主ジャルメルの野望

### 195・教主ジャルメルの野望

「ルギよ、何をやっている。さつさとこんな塵芥ちりあくたどもなど一掃せんか。それでも我が神の器か」

ワイズ教の教主、ジャルメル・ギルメイザーは蔑んだ口調でルギへと言った。

「これは申し訳ありません、教主様。ですが、今は戦闘中です。危険ですので、それ以上前に出られることはおすすめしません」

「ほう、言うようになったな。たかだか穢らわしい魔族の小童のくせに」

せせら笑つように、ジャルメルは言った。

だが、その声にはぬぐいようのない悪意が混じっている。

「おい、あんた！！！」

と、そんな険悪な空気など意にも介さず、FINEが口を開き、

「教主だか、ゾンビだか知んねーけど！今はあたしの友達と話してんだ！邪魔すんな！っていうか」

怒りを込めて、

「友達を馬鹿にすんじゃねーよ！あんたの体のほうがよっぽど醜悪だろうが、おっさん！！」

と言った。

その言葉に、

「なんと下品な娘じゃ。どこの馬の骨とも知れぬ人間が、このジャルメル様に向かって」

と憤慨する。しかし、

「いやあ、良い啖呵なのじゃ。100点満点！！！！にゃはははははは！！！！」

コレットは上機嫌で笑っていた。

やれやれ。

「教師の仕事、結構気に入ってたんだな、コレット」

俺は微笑みつつ、

「それにしても、お前がジャルメルか。ワイズ神も、よくお前などを教主にしたなあ」

正直な感想を漏らす。

「くはははは！ 儂の信仰の賜物よ！ しかも、此度は我が信仰に  
応えて、神託まで与えてくださる！ そう！」

ジャルメルは興奮した様子で、

「儂が神となることを、ワイズ神様はお認めになったのだ！ ぐわ  
はははははは！……！」

下品な哄笑が地下神殿に響いた。

「ふーん、神ね。そうなのか、ワイズ神？」

「貴様、我が神になれなれしく口をきくでないわあ！」

ジャルメルが絶叫するが、ワイズ神の影は冷徹な口調で、

「答えるかどうかは私が決める。神の御前である。控えよ」

「は？ は、はは！」

逆に叱責を受けて目を白黒とさせる。

影はそんなことには構わずに言葉を続けた。

「星に巣くった寄生虫はお前たちが殺した。星の神は傷つきしばら  
くの眠りについた。ならば偽りの神の存在はもはや不要のはず。な  
らば新しい神がこの星には必要だ。少なくとも、しばらくの間でも

愚かなお前たちを導ける神がな」

「何を言っているかさっぱり分からないのだけど」

キュールネーが頭にハテナマークをつけている。

だが、おそらく賢者パーティーの面々以外はその言葉の真意を理解してはいまい。

要するに、

「人間が心配で出てきたというわけか。優しいんだな」

「貴様らが愚かすぎるだけだ」

なるほど。では言い方を変えよう。

「老婆心ということか。だがそれならばワイズ神。あなたが人々を導けばいいと思うがな？」

「逆に聞くが、貴様はやりたいと思うか？」

「いや、俺はのんびりしたくて、世界を救ったんだが……」

「そうだろう？　だが、勘違いするな。別に私は人を導くのを厭<sup>いと</sup>っているわけではない。ただ私は失敗している。そして、新たな神を求める者が目の前にいる。ならば失敗した神よりも新たに生まれる神の出現を祝福したいと思っているだけだ。もはや、私は不要だと結論付けたに過ぎん」



失敗？

「そんなことはないと思うが？ 少なくとも、あなたを信仰している人々が多い。十分人心を救っているように思うぞ？」

「そうか。大賢者よ。あなたがそう言うなら、そうかもしれない。ふふ」

「ワイズ神様？」

俺の言葉に、ワイズ神がおそらくめったに見せない……、いや初めて微笑みらしきものを浮かべたのを見て、ジャルメルは嫉妬なのか、混乱なのか、顔を色を赤くしたり白くしたりしていた。

しかし、

「だが、私は星を救えなかった。これを失敗とせずなんと言っ。ゆえに、大賢者よ。お前の言う”私の可能性”を追うのは、この私ではない。この私はこの教主に賭けよう」

「おお！ 神よ！ 光栄です！ 儂が神となり人類を導きましょう」

ジャルメルが歓喜の声を上げる。その姿をどこか冷徹な目で神の影は見下ろした。

「ちょっと、ちょっと！ さっきから聞いてれば！ この世界には私たちエルフとか、そのルギ《魔族》とか、いろんな種族がいるんですけど！ 人族だけじゃないですから！ ちゃんと教育受けますか！？」





## 195・教主ジャルメルの野望（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！ イラストは柴乃權人先生！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ「」読んで下さい（\*。ー。）oポコッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobbMIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。





「なにげに先生の言葉が一番辛辣なような気がしますけど……」

キュールネーがなぜか苦笑していた。

そんな俺たちのやりとりには構わず、ビビアは改めて唇を歪めて言った。

「まあ、俺の力に驚くのも無理はねえ。今や俺はワイズ神様の加護を受けた、神の御使い。そして、教主ジャルメル様はこれから神になられる存在だあ。ジャルメル様が神になった暁には、俺もその働きを評価していただき、ゆくゆくは教主の座を継ぎ、そして将来的には俺も神になるのさー！」

「お前、神になるつもりなのか？」

「そうだ！ 俺こそが神に相応しい！ 俺の格を考えれば、勇者なんて身分でおさまるもんじゃねえ！ ひと昔前は、殊勝にもグランハイム王国の王になることを画策してたが、そんなしょうもない身分は俺には不相応なことは自明！ 神！ 神だ！ 神の身分こそが俺に相応しい！！ すべての人間、種族が俺のもとに跪き、崇拜の言葉を捧げるんだ。んんんんんんんん！ たまんねええええええええええええ！ くはあああああああああ！！！」

使徒ビビアは興奮しきった様子で、まくしたてた。

「使徒ビビアよ！ もう口上はいいであろう！ ここでの働きで、儂が神になった後に、お前の扱いが決まる！ 魔族と和解した今、勇者の地位は、地に落ちた。しかもこれまでの悪評のせいで、歩けば石を投げられ、罵倒の声を聞く日々。そんな毎日から救い上げ、









「エルガアアアアアアアアアアアアアア」

そう叫んだのだった。

そう、ビビアの不意を突き、ボロボロの状態へと追い込んだものたち。

それは、

「ふ、待たせたな」

「ビビア、助けに来たよ！」

「仲間のピンチですもの。助けにくるのは当然ですわ」

かつての、勇者パーティーの仲間たち。闇に墮ちようとする勇者を救いに来た本当の英雄たちであった。

## 196・使徒ピリア（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！ イラストは柴乃權人先生！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ「」読んで下さい（）  
\*。ー。）o>oコッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「使徒ビビアたちはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 197・教主、屈辱の撤退

197・教主、屈辱の撤退

「何をしている、ビビア！ 貴様それでもこの神たる儂の下僕か！」  
吹き飛ばされて情けなく餌付いている、勇者……、いや元勇者ビビアに対し、教主ジャルメルは罵倒の言葉を浴びせた。

「ぐぎぎぎっぎぎぎぎぎっぎいいいい！！！」

その言葉に、ビビアは怨嗟の色を瞳に一瞬浮かべるが、

「なんじゃ、その目は！！！ 儂が神となった暁には、貴様にもたらそうとする恩寵をなしにしましても良いのだぞ！」

「わ、分かっているさ。うげ、うげえ。キキ、キキキキキキキ。ちよつと油断しただけだ。まだまだ本気じゃねえ。ちよつと……ちよつとだけ油断をつ……！ だから俺を神に！」

「馬鹿が！ このゴミが！ 使えぬ輩になど用はない！ 誰が落ちぶれていた貴様を拾って、この儂の下僕にしまったと思っている！」

ジャルメルの怒声は続き、

「今こそ、主人の儂の恩に報いる時じゃろうが！！！」

「ふんぎい！ ふんぎい！ わ、分かってます！ ふんぎい！！！」

ジャルメルという言葉に顔を真っ赤にしながらも、神になりたいという欲望を叶えたい一心で、ビビアは憎しみの怨嗟の声をふりしぼりつつも、表面上は笑顔を浮かべる。

だが、その唇は歪み、どう見ても顔面の神経と言つ神経がひきつっていて、見るも無残であった。

そんなやりとりをしながらも立ち上がり、こちらへとその怒りの矛先を向ける。

「こ、こんな屈辱を味わうのも、てーめらのせいだ！ どういうつもりなんだ！ アリアケはともかくて舎弟たるてめえらまで敵に回るとは！ ええ！！！」

ビビアは雄たけびのような声を上げながら、

「デリア！ プララ！ エルガー！ この裏切りもんがあああああああああああああああああああ！！！！！」

神殿に相応しくない醜い怒声をこだまさせる。

しかし、彼ら三人の瞳は澄んでいた。

そのような論難ろんなんには、まったく動じる道理などないとばかりに。



「ビビア！ 目を覚まして！ あなたは騙されているのよ！」

デリアが悲痛な声を上げた。

「そうだよ、ビビア！ ちょっと考えれば分かるじゃん。パツと見  
で、そいつ絶対悪者だよ！ そんな奴についてたつてろくなことに  
はなんないよ！ ほら、一緒に帰って、パーティーを再結成して、  
また冒険しようよ！」

ブララも仲間を思った温かい言葉を口にする。

そしてエルガーも、腕組みをしつつ微笑みを浮かべながら、

「俺たちはいつも一緒だ。やめる時も健やかなる時もな。パーティ  
ー結成の時、決して裏切らないと誓ったではないか。俺たちはお前  
を救いたい。決して、お前だけをパーティーから逃がし……ごほん  
パーティーから見捨てたりはせん！ 間違いは、全員でただす！  
仲間だからな！」

そう宣言したのだった。

それはまさに勇者パーティーが人々に指し示すべき、仲間の形。

美しい友情を体現したものであったのである。

「すごいですわね。あれが勇者パーティーなのですね」

「うん。さすががっこいいね」

キュールネーとソラが言う。俺も満足げに頷く。そう、あれこそが

俺が育てた勇者パーティーの真の力なのだ。膂力やスキルといったものではない。人々を勇気づけ、助け合う。そんな愛にあふれた力。それこそが俺がはぐくんだもの。財産なのである。

「のう、コレットよ。そなたあれを見てどう思う」

「絶対嘘じゃろ、あれ。絶対裏があるのじゃ、あれ」

「我も、そう、思う」

フェンリルとコレットも何かひそひそと話しているが、おそらく生徒たちと同じような内容だろう。

と、そんな二三言をかわしている間にも、ビビアが本気を出して襲い掛かってくる。

「まずは、てめーら裏切りもんからだああああ！ 死ねやああああああああああああああああ！！」

聖剣ラングリスに暗黒のオーラをまとわせながら、衝撃波を伴いながら斬撃を繰り返してくる。

しかし、

「アリアケ！ 支援をお願いしますわ！」

「心得た。 防御力アップ 攻撃力アップ 素早さアップ」

俺は複数のスキルを彼らにかける。

「喰らいなさい！ 絶対に一人だけ抜け駆けなんてさせませんわ！  
一人だけ神様になって栄華につ……ではなくて、人間をやめるな  
んで馬鹿な考えは捨てなさいビビア！！ 目を覚まして……！！ は  
あああああ……！！！」

「ぐええええええええええええええええ！！！」

防御無視のスキルを持つデリアの攻撃が、直接ビビアの体内にダメ  
ージを蓄積し、上空へと打ち上げられる。

そこに、

「そうだよ！ ビビア！ あたしたち仲間じゃん！ 人の世界で生  
きて！ どんな借金……、じゃなくて、返せない恩がこの世界に  
あると思ってるのさ！ それを返さないまま一人だけ逃れようとす  
るなんて絶対に許さないじゃん！ せめてそれ《ラングリス》だけ  
でも置いていってよ！ でないと絶対に一人で行かせたりしないよ、  
ファイヤー・ストームウウウッウウウウウウウ！！」

「あじいいいいいいいいいいいいいい！！！」

上空でもぐくビビアに対して、冷水ならぬ、烈火を浴びせて、プラ  
ラなりにビビアを説得しようとする。人の世界で受けた恩を勇者パ  
ーティーとして返すことを説くという説得力のあるものだ。

そして最後に、

「俺は別に勇者パーティーなどどうでもいい。だが、お前がいない  
と勇者パーティーとは名乗れなくなる。やはり腐っても勇者パーテ  
ィーというガワ名乗がないと、俺の名前だけではこの筋肉を見てくれる



「この世界で一番悍ましいものを見た気がします」

なぜか生徒達が青い顔して、眩くように何かを言っていた。よく聞き取れないが……、

「な、何をしている！ 何をしているか！ この役立たずのぼんくらが！ ビビア！ 立たぬか！ ビビア！ ぬあああああああああああああ！！！！」

気絶させられた使徒ビビアを見ながら、教主ジャルメルが悔しそうに絶叫した。

顔を真っ赤にして、その醜悪な太った腹をゆする。

だが、何をどなるうと、彼らの友情の力で説得されたビビアは起き上がる気力がないようだ。

目や鼻、口から体液と言う名の体液をたらしながら、ピクピクと蠕動している。

そんな様子を見たジャルメルは、見切りをつけたように後ろを振り向く。

そこには、

「ワ、ワイズ神様！ そ、それにルギ！！！！」

ここまでの戦いに決して口や手を出さず、傍観していた二人がいた。

「神よ、どうかお助けを！ ル、ルギも何を傍観している！ 主人

の危機じゃ！ 早く助けんか！ このノロマめがああああああああああああ！！！！」

そう忙しく懇願と怒りの声を交互に上げる。

しかし、

「あれが賢者の力か。なるほど邪神を屠るだけのことはあるな。道化とはいえ、私の加護を持つ者をこつも簡単に無力化するのだから」

「はい。ですが真の力は発揮されていない。ただあれは闇雲に増大した力に振り回されていただけです。僕とは違います。そうでしょう、ワイズ神様」

「そうだな。まだ可能性は潰えてはいない。そして、ここは舞台としては少し粗末だ。私の神殿に招くでしょう」

「そうですね。僕もここでは窮屈で力を出し切ることが出来ませんから」

ジャルメルのことを一顧だにしないように、ワイズ神とルギは言葉を交わす。

「ワイズ神様！ どうなされるおつもりなのですか！ どうかお導きを！！ ルギ！ お前も何をしているか！ お前の命は儂が握っていることを忘れていたのではないだろうな！！」

たまらずジャルメルが叫ぶと、ワイズ神が初めて気づいたようにその老人へ目を向ける。そして、



## 197・教主、屈辱の撤退（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！ イラストは柴乃權人先生！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ「」読んで下さい（）  
\*。ー。）o>oコッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中！！



【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「ルギたちはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



その代わりに、儂の怒りは、もう一方の役立たずへと向かう。

「ルギ！ この下劣な魔族めが！ せっかく神より頂いたソーマ神の罪によつて、強化してやったというのに、アリアケどもを倒すことに失敗するとは！ この責任、どうとるつもりなのじゃ！ この役立たずの疫病神めー！」

儂は怒号を吐きながら、ワイズ神様から少し離れた場所にたたずむルギを罵倒する。

そして、それだけでは気が済まなかったので、

「何とか言ったらどうなのじゃ！ このゴミ虫がー！」

『パン！ー！ー！』

おもいつきり平手打ちを喰らわせてやった。

だが、なんの反応も示さない。

泣き出したり、許しを乞うかと思いきや、平然としている。それがまた気に食わない。

「い、いのっ………！」

「教主よ。この者の体は神の器となる依り代。乱暴に扱うのは感心するところではないぞ」

「むがっ………」

もう一発、お見舞いしようとしたところで、神からもつともな指摘を受ける。

そうだ。

落ち着け。

こいつはもうすぐ儂にその体を提供することになるのだ。

「し、失礼しました。ソーマ神の聖によって、こやつの体は神の器へと変性する。そこに儂が融合し、意識をのつとることによって、人と魔の両方の力をあわせもつた最強の神が誕生するのでしたな」

「意識は一つしか残らぬゆえ、融合という表現が正しいかは私は知らん。だが、おおむねその理解の通りだろう」

「おお、素晴らしい！ ルギの今の力を手に入れ、世界を支配して人類を頂点とした世界を必ずや作り出しましょう。ぐひひひ、そうすれば権力も、金も、女も、全て儂のものに……！」

「その意思の強さを私は買っている。して、ルギよ、体の調子はどうだ？ 痛むところはないか？」

ワイズ神は、まるで母が子を心配するような口調でたずねた。そのうえ、

「はい、大丈夫そうです」

「そうか。だいぶ馴染んだようだな」

気のせいだろうか、少し微笑まれように思われた。無論、そんなわけはないのだが。儂にはそのような笑みを浮かべられたことすらないのだから。

「神の器として、お前は既に完成している。ゆえに」

案の定、神の器としての進行具合の確認だった。

ならば！

「おお！ では早速儂にその体を明け渡してもらいましょう！ 何事も早い方がいい！ 儂が神へ至ることで、一日でも早くこの世界に秩序と安寧をもたらすことができるのですからな！」

儂の声に、神はいつもの威厳を取り戻し、

「そうだな。頃合いだろう。ルギも良いか？ 意識を永久に失うことになっても」

「はい。構いません」

最後の確認にも、ルギは従順に応える。

ワイズ神様は洗脳は不要だとおっしゃったが、まさしくその通りだ。

この教主ジャルメル様に体を明け渡すことを嫌がるなど、虫けらが考えるはずもない。

むしろ、この儂にその体を神の器として使われることを光栄に思うに違いないのだ。

さすがワイズ神様はそのあたりをよくお分かりでいて下さる。

「では、神化の儀を始める。といつても、これは私の血肉を媒介するだけのことだ。少し痛むが我慢せよ」

ワイズ神様は自らの胸に唐突に腕を突き立てられた。

鮮血が飛ぶ。

「な、何を!？」

「先ほど説明した通りだが？」

神はそう言いながら、ドクドクと動く『何か』を取り出した。

「し、心臓!？」

「神核だ」

神はそう言うと、その神核を二つに裂いた。それを、

「では移植する。裂いたこれは再び一つになるう。その力によって貴様らは同一の個体として融合する。と、同時に神核を得た神の器は、正式に神として降誕するというわけだ。あとは好きに世界を救うが良い」

「ぐげええええ??!!!!」

「うっ……」

儂は悲鳴を上げる。

ルギはやせ我慢をしているのか、少し声をもらした程度だ。

それがまた癩に障るが、この後のことを思うと、唇を激しくゆがめて笑みを浮かべた。

もうすぐだ！

もうすぐだ！！

もうすぐ、儂が神に！

念願の神に！

これで世界は儂のものだ！！

すべての富、権力！ いいや、そんなちっぽけなものでは済ませぬ！ 世界のすべての崇拜は儂が一身に浴びることじゃろう！

そして永久に、この世界をあまねく支配し、この儂に従う者だけを生かす理想郷を作るのだ！

儂をこんなつまらぬ地位に追いやった王は土下座をさせたうえで首をねじ切ってやる！

儂にさからった貴族どもや、見下げて来たや面どもを見返すのじゃ！

大賢者などと言われて調子にのっているアリアケ・ミハマも永久に

続く拷問にかけよう

ぐは！

ぐはははあはははは……！

ははははは……！

はあ……はあ……はあ……。

な、なんじゃろう。

息をするのも疲れる。

思考をしようとしても、具体的な考えが浮かんでもこぼれていく。

何より、何かを考えようとする気力自体が削れていつているような。

「か、神よ……。こ、これは一体……ふげ!？」

儂がしゃべろうとした瞬間、口が無理やり閉じられて、その拍子に舌を噛み切ってしまう。

「ふんぎい!？ ふんぎiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!  
?!?!?!?!」

激痛に叫び声を上げようとするが、口はその動作すらも許さないとばかりにぴたりと閉じている。

口の中に、かみ切られた時の血がたまるのもお構いなした。



(なんじゃ!? これは!? 何が起こっている!? 儂は神になつたのではないのか!?!?!?!?)

儂が混乱の極みに達していると、見覚えのない顔が目の前に……。

いや。

いやいやいやいや!

ワイズ神様だ!

なんとということだ、どうしてワイズ神様の顔すら判別できなかった!?

儂を神へと導かれる存在だというのに。

「お、お助け……。ワ……。神……。さ……。ま……。」

やっこのこと言葉紡ぐ。

だが、ワイズ神様はいつもの様子で……。

いや。

どうして今まで気づかなかつたのだろうか。

ワイズ神様は哀れむような、まるでピエロを見るような見下げ果てた目つきで儂を見ながら、

「やはりダメか。教主にまでなったからには意思の力は勝るかと期待したが、それすらもルギには及ばなかったか」

「な……を……言っ……」

「なに、道理を述べたまでのこと。神の器に人の魂を入れる。人と魔の融合した新しき神を生み、人類に新しい神への信仰と統治をこの大陸にもたらそうとした。だが、お前では不足であったようだ、ジャルメル」

「ど、どういう……」

「まだ分からぬか。下郎。お前の穢れた魂では神の器に相応しくないとということだ。意思の力すら、仲間を思う優しい少年に劣るとは恥を知るが良い」

「そ……そんな……わしが……神になれると……」

「神になれる機会を与えと言った。嘘ではない。だが、お前はその魂のみを差し出すが良い。光栄に思え。そして恥じよ。お前の宿願は、この少年が果たさんとするだろう」

「ぞ、そんな！ そんなこと……！ なっどぐができるわけがああああああああああ……！」

薄れていく意識の最後の灯火。

この目の前の神。

もう名前すら思い出せぬ存在。



ああ……。

あああああ……。

あああああああああ……。

あ。

ルギの力が更に強まったと思った瞬間、僕の魂はまるで光の前に消え去る影のように、永久にこの世界から消失させられたのであった。

198 ジャルメルの望まぬ変性と新しき神の誕生（後書き）

【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！ イラストは柴乃權人先生！

『コミック』はガンガンONLINE連載中です。くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めちゃうのだ！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ一読ください。  
\*。ー。 ) o p コ ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobbMIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「ルギたちはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 199・大破壊

199・大破壊

（ルギ視点）

「さあ、始めましょうか。終わりの始まりを」

僕はそう宣言する。

「本当に良いのだな？ もう戻ることは出来んぞ？」

ワイズ神様は淡々とした口調で言う。

だが、この女神様は優しい。

ここで僕が神になることを拒めば、元に戻してくれる気がする。

「なぜそんな質問をされるのですか？ あなたはワイズ神の人族の救済を願う人格が分裂した存在のほうです。そして、邪神に対抗出来なかつた御身を消滅させ、次代の神を求めたはずです」

「その通りだ。わが身などもはや人は必要とはしないだろう。役に立たぬ神は廃棄するべきだ。だが人に神は必要だ。私はその可能性を追究しよう。それが私の役割だからな。だが、それは世界の選択肢の一つに過ぎぬ。お前の求めているものとも矛盾している。だから今一度問おう。お前はそれでいいのか？」

「いいんです」

僕はためらいなく頷いた。

「父が邪神に殺され、母は悲しみにくれてしまった。学校では仲間たちを十分に守り切ることができなかつた。僕には力が必要です。みんなが仲良くなるためには、圧倒的な力が必要だ。そして、それは今僕の手中にある」

「分かつた。ならば、私はお前を全力で支援しよう。我が後継者ルギ」

「はい。ですが僕にはどうしても超えなくてはいけない存在がいます」

「アリアケか」

僕は頷く。

「先生はこの世界の平和を築かれるために学校を作られました。様々な種族を集めて学校生活をさせてもらった。僕はそれを守りたいと思った。その気持ちを実現させるには、僕には力が足りないと思つた。でも先生は、それを守るのには力ではないと言われました。それを確かめないといけない。あの偉大な大賢者を超えて初めて、僕は神としてこの世界を支配する資格を得る」

「世界を救済したかの大賢者が神を試すか。ふん、妥当な結末だな」  
そう頷いてから、



「そなたは優しい子だな、ルギ」

どこか母親のような声で、ワイズ神様は言った。

「え？」

僕は首を傾げる。

しかし、次の瞬間には再び伶俐な表情へと戻り、

「では、始めよう。まずはどうするつもりか、ルギ神よ」

その言葉に僕はゆっくり頷き、

「大破壊を」

と言ったのだった。

その言葉とともに、

『ゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッ』

聖都マリードの地殻が振動しだす。

そして、数分後には。

聖都マリードのあった地には。

もはや広大クレーターのようなくぼみを残すだけで、聖都自体がいずこかへと消失していたのであった。

それをたまたま見た旅人は腰を抜かすのと同時に、天空からパラパラと降り注ぐ大量の瓦礫に、疑問を浮かべたのであった。

## 199・大破壊（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。ぽ。こ。ッ  
<http://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

## 200 空中神殿アースガルス

200 空中神殿アースガルス

〈アリアケ視点〉

「やれやれ、みんな無事か？」

「まあよくあることじゃな」

俺の問いかけに、コレットが朗らかな声で答えた。

それに対して、

「よし……！」

「よ？」

「よくあってたまるものですか！ なんなんですか、これは！？！」

「そっだよ！？ いきなりマリードの街がゴゴゴツゴゴゴ！ ってな  
ったと思ったら、う、う、う、う、う……！」

「浮いてますわね。どういう魔力量なのかしら？ こんなことが可能なことなの？」

「さすが、俺の生徒たちだ。正常なリアクションをありがとう」

こう言う時に、普通の反応をしてもらえると安心する。

俺のある種常識外の行動にも慣れてきた彼女たちが、驚いているのだから、街の人間たちは慌てふためいていることだろう。

使徒ビビアたちを撃退し、一旦自室へと戻ってきた俺たちは、大きな大地の振動とともに、屋外の景色が急速に落下していく様子を見た。

と、そこへ、

「さて、驚くのはもうすんでいるかのう？ というわけで、少しづつりと聖都を駆け回ってきたぞえ」

「フェンリルは仕事が早いな」

「あとで褒美として、十分モフるが良いと思うぞえ。にゅふふ。で、それはともかく」

フェンリルは狼から人型に姿を戻してから言った。

「聖都マリード全体が浮遊しておるようよなあ。特殊な力場が発生しておる。魔力と言うよりも、神に備わる神殿創造ユークスキルによるものではないかの」

「なるほどな」

俺は納得して頷く。

「いやいやいや！」

納得する俺に、フィネが首を振りながら、

「どついついことか、さっぱり分からないんですけど！」

そう唾を飛ばしながら言った。

「簡単じゃよ。新しい神が降誕したから、この土地はマジ聖地になった。それだけの話じゃな」

コレットが気楽な様子で説明する。

「おおざっぱすぎて分かりかねますわ、姫様」

が、キョールネーが困惑した調子で言う。

「そりゃそうだ、えつとな」

俺は補足する。授業のようなものだ。

「簡単に言えば、新しい神性が誕生した地は『聖地』となる。そして、当たり前の話だが神は信仰を集め、力を蓄え、それを人々に還元する。要するに奇跡を起こすためのパワーを蓄えるんだ。そして、人々を集めるためには効率的に信仰を集める構造物が必要なんだが、これを人間は『神殿』と呼称する」

そう補足した。

すると、

「ただ浮遊させるほどの神性とは予想外。空中神殿……。空に浮かぶ神殿だから、アースガルズとも言つべき代物」

ピノが久しぶりに口を開いた。

「ピノ、あなたどうしてそんなこと知ってるの？」

ソラが驚いて聞くが、ピノは無視するように続けた。

「空中神殿アースガルズは、空を飛ぶ事自体が奇蹟に見える。新しい神は大きな信仰と力をえる。と、同時に、逆らうものを空から罰することも可能に思う」

「文字通り『天罰』というわけか。どちらかと言えば、神殿というより要塞だな」

「空より大地を睥睨する神の雷を与える要塞。大規模戦略兵器のよくなものだと思う。力によって統治を目指す神だからこそ発現したユニークスキルだと思う」

「そんな凄い神様に勝てるのかしら、アリアケ先生？」

キュールネーがまじめな顔で聞いた。

他の生徒達も真剣な表情である。

屋外では、いきなり浮遊した聖地に混乱した信徒たちが慌てたり、ワイズ神に祈りを捧げたりしていた。



だが、俺は微笑みながら、

「ははは。勘違いするな、お前たち」

と言ったのである。

「「「へ?」「」」

生徒達が呆気にとられた表情になる。俺はやはり微笑みを絶やさず、

「俺の生徒の一人が真剣にこの世界の将来を憂いた結果、神になつてしまっただけの話だ」

「なつただけって……」

あのキールネーが絶句しているが、

「じゃな。なるほど、力による統治というのは分かりやすいが、ちよつと俺の思う学校の教育方針とは違うのじゃ」

「ほう。我はコレットの教育方針は体育至上主義かと思つておつたのだがのう?」

「にゃんと!? それは誤解なのじゃ。俺の教育方針は、考えるな、感じる! なのじゃ」

ゆえに! と腰に手を当てながら、

「こーんな空中神殿アースガルズで世界を脅しながら統治しても、

ぜーったい、うまくいかぬのじゃ！ そんなことは空の支配を数千年続けてきた我らゲシュペントドラゴンには直感的に自明なのじゃ！」

「それって教育方針といふのかのう？ まあ感性重視といふことなのかの。まあ良いわい。で、主様、どうするのかの？」

フェンリルから話を振られて、俺は堂々と宣言する。

「邪神を倒し、星の神がしばらくの眠りについた。つまり、俺に託されたのは、この星のことは、俺やみんなで決めていけということだ。だから、人魔同盟学校を作った」

「これは神話の序幕。星に記憶される戦いになる」

ピノがぼつりと呟く。

「そんな御大層なものとは思っていないがな。だが、これから数千年後の未来は今、俺たちに託されている。つまり、力による支配か、そうではない何かによるのか。ルギはその舞台に誘われ、自ら立った。そして、俺を倒せるかどうかで未来の形が決まってくるというわけだ」

「旦那様が世界の趨勢すうせいを決める鍵といふわけじゃな」

「単に生徒と話し合いに行くだけさ。だが、そのためにはお前たちルギの友達クラスメイトの力が必要だ。だから、みんな、俺に力を貸してくれないか？」

俺の願いに、生徒達は大きく頷いたのだった。

## 200 空中神殿アースガルズ（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。ペ。コ。ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「人魔同盟学校の生徒達はこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

201・神殿の番犬・地獄からの使徒ケルベロス

201・神殿の番犬・地獄からの使徒ケルベロス

「せ、先生、これって……」

「ああ、ルギ……。いや、ルギ神の神殿だな。なかなか立派じゃないか」

「これを立派の一言で片づけるって……。相変わらず常識が通用しなすぎい！！」

フィネが一人で何ごとかを叫んでいた。

「てか、これのどこが神殿なんだよ！？　なんか地面が幾つも浮いてるし、しかも、その先……。空の彼方に建物が見えるんだけど！？」

「うむうむ、絶景じゃなあ」

「そうよな。少し参拝しづらいのが難点ではあるがのう」

フィネの絶叫に、コレットとフェンリルはのんびりとした調子で言った。

「フィネ、訂正が必要ですよわね。アリアケ先生だけではなくて、他

の先生方も全員規格外のようですわ」

「ほんとですね。ちょっと忘れてましたが、全員ぶっとんでたのでしたね！」

キュールネーとソラが呆れた調子で叫んでいた。

さて、聖都マリードは天空へと舞い上がり空中神殿アースガルズになっちゃった。

そのせいで生徒達は若干パニックになってしまっていたわけだが、

「別にやることは変わらんだろう?」

という俺の言葉に徐々に落ち着きを取り戻したのだった。

そう。

俺たちがこの聖都へ課外授業として潜入した理由は、ちょっと家出したルギを連れ戻すためである。

その目的に何ら変わりがないことを認識し、FINEたちは徐々に落ち着きを取り戻したわけだ。

そして、俺たちは、パニックに陥った聖都の民たちを横目にしながら、マリードの中心へと向かったのである。

そこには、このアースガルズにおける聖域が誕生していた。

すなわちルギ神のいる聖域である。

それこそが、先ほどフィネや他の生徒達が驚嘆した場所であった。神聖な魔力が特殊な力場を形成し、大地は隆起し、空中には大地が無数に浮いている。

それら浮遊する地面は、はるか上空へと続いていて、その先には白亜の神殿があるといった具合だ。

「アースガルズ全体が、あの空中神殿を中心に浮遊しているということだな」

ならばやることは一つ。

「いやあ、授業でやっておいてよかったな。こんなところで役に立つとは」

「へ？」

フィネが素っ頓狂が声を出す、俺は首を傾げつつ、

「へ？ じゃないだろう。ちょっと特殊な状況かもしれないが、これは『ダンジョン攻略』だ。相手は神だな。まあ、そんなに変わりはあるまい。緊張することはない。授業で習った内容を思い出して、しっかり成果を出すんだぞ」

俺は気楽に言った。しかし、

「「「全然違うー！」「」」」

生徒達から総ツツコミを受けてしまつたのだ。うーむ、なぜだ。ともかく、かくして俺たちは『聖域アースガルズ神殿』のダンジョン攻略を開始したのだ。

「はあ、はあ、はあ。うわー、めっちゃ高い！」

フィネが下を向いて、大声を上げた。

悲鳴というよりかは、感動に近い声だ。こういうところが、冒険者の血を引いているなと思わせる。

「油断してはいけませんわ、また敵ですわよ」

「分かってるって！」

「ウインド・カッターー！」

『ギイイイイイイイイ！??』

ソラが襲撃をかけてきた、蝙蝠型のモンスターを風の刃で切り裂いた。大きさは人の顔ほどもあるが、難なく倒す。

「足場に気を付けろよ」

「ほいほい！ 了解！ そりゃあああああー！」

『キユイイイイイイイ！??』



今度は地面を這うように接近してきた大蛇を両断した。

これも人を丸のみにできるほどの大型種であったが、俺の支援スキルもあって、難なくフィネが排除する。

「どうだ！」

「だから油断はいけませんわよっ、と！」

『ぐしゃ！』

生命力の高いのは蛇の特徴だ。

両断されて胴体から離れた頭部が油断してガッツポーズをとるフィネに襲い掛かろうとしていたところを、キュールネーの怪力によって圧潰させられる。

「サンキュー」

「やれやれですわ」

生徒達はうまく連携がとれているようだな。

フィネが口を開く。

「この調子なら、ルギの馬鹿のいる神殿まですぐだぜ！」

しかし、その言葉に静かだったピノが、



『ブオン！！！』

キュールネーの叫びは間に合わない。

そのモンスターは間髪入れずに、蛇の尾を目の前の獲物に振りかざしたのだから。

「地獄番犬ケルベロス」

ピノの呟きだけが、なぜか皆の耳にははっきりと聞こえたのであった。

## 201・神殿の番犬・地獄からの使徒ケルベロス（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。ペ。コ。ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「FINEたちはこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

202・人魔同盟学校パーティー再結成／聖戦（前書き）

新刊第4巻の表紙や新キャラのイラストを公開しました。一番下までご覧くださいませm(´`´”m)

## 202・人魔同盟学校パーティー再結成／聖戦

202・人魔同盟学校パーティー再結成／聖戦

「油断大敵ぞえ、FINEよ」

「あ、ありがと……」

「あれはピノの言う通り、ケルベロスよ。我と同じく、地獄の番犬と言われた伝説のモンスターであるな。よもやこのようなところで会うとは思わなんだがなあ。ちょっとライバル心をあおられるの」

蛇の尾に殴打される寸前のところで、FINEはフェンリルに助けられる。

「強そうですね！ 逃げたくなくなってきました！」

「ソラのそういう堂々としたところ好きよ。でも、こいつを倒さないで、とても神様相手に戦闘バトルとはいかないのではないかしら」

「そうだぜ！ こいつをぶったおして、ルギを助けるんだ！」

ソラ、キュールネー、そしてFINEが戦闘体制に移りながら言う。

「でもあれは強いよ。地上のモンスターのSクラスモンスターを超

える化け物。ゲシュペントドラゴンより強いかもしれない」

ピノが淡々とした調子で言った。

「あら、それは聞き捨てなりませんわね」

「単なる事実。強靱な生命力と、恐ろしい攻撃力。獲物を狙ったら決して逃がさない地獄の番犬。1日あれば大陸中を蹂躪できるほど俊敏な狩人」

「博識じゃな、ピノ！ じゃが、その認識は改めてもらうことになるじゃろう！」

「そうですね、姫様」

コレットとキュールネーが、戦意を高揚させながら言った。

「我ら神の末裔たるゲシュペントドラゴンが、犬ごときに遅れを取るなどという妄言、すぐに覆してみせようぞ！！！」

その二人の叫びと共に、

『ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おお！！！！』

両名が黄金の光を放つ伝説の神竜へと姿を変える。

「その通りだ、ピノ」

俺は目の前のケルベロスを前に、ゆったりと杖を構えながらのんび



りとした調子で言った。

「見ていてくれ、お前が期待した結末を見せてやる。人と魔族。いや、すべての種族が協力して未来へ進むことを証明しよう。ピノ<sup>片鱗</sup>」

「分かった。そのために私はここにいるのだから。アリアケ。あなたとその仲間たちが創造する未来を私に見せて欲しい」

「ああ。人魔同盟学校パーティーを再結成する。今より未来を造る聖戦を始めよう。この戦い、この賢者アリアケが預かった」

俺の声を皮切りに、地獄の番犬ケルベロスとの戦いの火蓋は切って落とされたのだった。

## 2022・人魔同盟学校パーティー再結成／聖戦（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。ペ。コ。ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「人魔同盟学校パーティーはこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。





「あれでかよ!？」

俺は頷くことで、ソラとフィネに答える。

「倒すにはお前たちの力も必要だ。協力してくれるな？」

「お役に立てますかね!？」

「何か次元の違う戦いをしてるっぽいんだけど!？」

二人は弱気なことを言う。だが、俺は苦笑して、

「ははは。まあ、普通なら無理かもしれない。だが、お前たちが今、誰とパーティーを組んでいるか思い出してくれよ」

俺は賢者の杖を掲げる。

「そ、そうでしたね」

「先生にとつたら、地獄の番犬くらい……」

ああ、と俺は頷き、

「神話に残る程度の戦いなど日常茶飯事だ。そして弟子たちを鍛えることも、勝利させることもな」

そう言いながら、

「魔力量アップ      スピードアップ      防御力アップ      回避付  
与      攻撃力アップ      クリティカル威力アップ      クリティカル









「グオツ……！ オ……！ オ……！ オ……！？」

俺のスキルによって、真の姿へと戻ったフェンリルは、浴びれば即死という地獄の猛毒の中を突っ切り、まさに雁首をそろえて間抜けに口を開いていたケルベロスの喉を瞬時に、同時に掻っ捌いたのだ。

ケルベロスは地獄に住まう不死と言われるモンスター。

だが、3つ首を同時に落とされれば、その限りではない。特に、

「主様の 聖属性 で、その首と胴体を分かれたのであればのう」  
返り血を浴びたフェンリルが、ころころと転がるケルベロスの頭を見下ろし上機嫌に言った。

「むふふ、同じ地獄の番犬の異名を持つ者同士。ちよっと張り切っ  
てしもうたわい。それに、たまには我もこうして主様のお役に立  
んどのう」

「それに孤児たちも待っているしな」

「そうよな。我と旦那様の子も同じよ。早く帰って御守をしてやら  
んどの」

「？」

俺はちよっと首を傾げてから、母性本能が強いことを思い出して納得する。



した新婚生活はどうなっているんですか？」

「まあまあ、アリシアお姉様。それは先生のせいではないかと……。ないですよね？」

アリシア、そしてラツカライが、俺に迫るケルベロスの頭を粉碎していたからである。

そして、最後の3つ目の頭。それも同じく、

「なにごと諦めが肝心ですよ。これが終わったら思う存分ラブラブするといいいのではないのでしょうか」

着物姿の女性が、その嫣然とした姿とはまったく似つかわしくない様子で、ケルベロスの頭部を仕留めていたのである。

その返り血を浴びた姿はどこか美しくも感じられる。

そう。

彼女こそ、

「ブリギッテ」

ブリギッテ・ラタテクト。

「お待たせしました。ちょっと仕込みに手間取りまして。魔王様がまた泊まりに来られるとのことでしたので」

ブリギッテ教の始祖にして、現代の現人神<sup>あらひとがみ</sup>である。

## 203・ラゲナロク（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。ぺ。こ。ッ  
<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

## 204・神対神

204・神対神

「ローレライも来てたんだな」

「はい。存在を忘れられてなくて良かったです。ご依頼が難しいものでしたので、外交ルートを通すのが大変でしたよ？」

「お前にしか任せられないからな。俺がいないとなると、お前くらいにしか任せられないと思ったんだ。すまなかつたな」

「私だけが頼りだった。良い言質ですね。これは加点ですね！」

「????」

駆けつけてくれたアリシアやラツカライ、そしてブリギッテだったが、実はローレライもいた。実は彼女にはちよつとした依頼をしていて、見事その役目を果たしてくれたようだ。

ただ、アリシアやラツカライたちを見ながら『加点』とか何とか言っている意味はよく分からずに、俺は首を傾げる。

そんな俺たちの会話の一方で、ブリギッテの存在に仰天している者たちもいた。

もちろん、俺の生徒達だ。

「ブリギッテさんて旅館の女将じゃなかったんですか!? え!?  
本物!? え!? 本物ってどういうこと!?」

先ほど合流した際に、彼女が何者かをちゃんと生徒達にも説明した。

『ブリギッテ』という名前は、世間にはよくある名前なので、まさかブリギッテ教の始祖であり、リズレット・アルカノン教皇を超える存在。というか、そもそもの始祖であるとは予想だにしていなかったようだ。

そんなわけでフィネも、ソラも、キュールネーも、騒いだり目を丸くしている。

まあ、実質的には生きる神だしな。

「ちょっと長生きしているだけですよ。これからも女将ブリギッテとして、仲良くしてくださいね」

「しかも無茶言う人だ、この人！」

「フィネ! この人じゃないでしょ! 『この神!』が正解よ」

「大事なのはそこでもいいのかしら?」

「あらあら、なかなかいいつつこみですね。さすがアリアケ君の生徒さんたちです。将来は旅館に引き抜いてお姉さんと一緒に旅館経営しませんか?」

ブリギッテはニコニコとされていて、まったく緊迫感がない。



ただし、

「賢者パーティーがそろいぶみですか。そろそろ世界の趨勢が決まるって感じなのじゃろうな」

「まあアー君がそう思ってるんですから、そうなんでしょうね」

「お姉様たちは相変わらず余裕ですね。ボクは緊張してきました」

「お主は邪神を倒したりしたのに、初々しいのう。だが、それが良いの」

賢者パーティーの面々も緊張感はやはりなかった。

「ていうかですね。アー君がいつも通りだから、緊張感がないんですよ？ まったく。これから神様をぶち倒そうっていう時なのに」

「アリシア。当たり前のように、俺の考えを読むんじゃない」

夫婦生活が始まってから、以心伝心の度合いが急上昇している気がする。

まあそれは置いておくとして。

「ついでぞ、お前たち」

俺の言葉に、全員がそれぞれ前方に向き直る。

空中神殿の終着点。

そこには白亜の神殿が鎮座していた。

神おわす場所。

ここに二柱の神がいることだろう。

ワイズ神。

最も新しい神。ルギ。

そして、そのことは一つの事実を率直に告げていた。

「神と神の戦いか。まさに終末戦争だな」

俺の言葉に、生徒達がゴクリと喉を鳴らした。

そう、これは神と神の黄昏の戦い。

こちらにブリギッテとそしてもう一人……。

ゆえに、神同士が戦うことになるラグナロクに他ならないのだ。

「準備はいいな、お前たち」

その言葉に、

『おっ』

余裕な者。

緊張する者。

感情を見せぬ者。

だが、いずれにしても、俺を信じた者たちは威勢よく返事をかえす。

そして、神座カミクラたる神殿へと、足を踏み入れたのだった。

もちろん、そこには、

「待っていたぞ。救世主アリアケ、現人神ブリギツテよ」

「ケルベロスも倒すなんて、さすが先生たちですね」

神たる二柱が待っていた。

俺たちと神ラゲナロケと神の戦いを始めるために。

## 204・神 対 神（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。ペ。コ。ッ  
<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケやブリギッテたちはこの後一体どうなるのっ……!?!」  
と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

205・ワイズ神 VS プリギツテ神

205・ワイズ神 VS プリギツテ神

「ルギ！ 助けに来たぞ！！」

フィネがルギの姿を見て言った。

「助けに、ですか？」

しかし、一方のルギの方はぼかんとした表情を浮かべた後に、

「ふふふ。そういうフィネのところは好きですよ」

「なっ」

「ですが、もう時間切れです。僕は……。いや、俺はもう戻れない。力があふれ出してとまらない。俺はもうそういう存在になったんだ。だから、俺のことなど忘れてください」

ルギが淡々とした口調で言う。

それはあの生真面目ではあるが、明るかった少年からはかけ離れたものだ。

しかし、

「ばっかやるー!!!」

フィネはそんなことは一向に構わないとばかりに叫んだ。

いや、もちろん、不安なのだろう。だからこそ、自分を奮い立たせた。

それはまさしく、自分のためではない。友達のためだ。このままではルギは遠くに行ってしまう。それを察した彼女は決意したのだ。

「どんな風になってもあんたはルギなんだよ！ 力に溺れてようが、力で支配しようが好きにしたらいいさ！ でも、今のやり方は間違ってる！」

「間違っている？ どこが間違っていますか？ こうして強力な力も手に入れた。神として威容はこの空中神殿を見てもらえれば十分でしょう？ 人々は。人も魔も。新しい神様の前に跪くはず。何が間違っていますか？」

「あたしだって冒険者だ！ 力を求めて何が悪いと言われたら、別に間違ってるなんて言わねー！ だけど、間違ってる！ 決定的に一つあんたは間違ってるんだよ、ルギ！」

「何がですか？」

どこかイラついた様子でルギは言う。それは何か決定的なことを言われる予感を彼が感じたからかもしれない。

「あたしらに相談しなかつたろうが！」

フィネは怒りながら言った。

まさに怒声だった。歯がゆさと悔しさの混じったそれは、ルギの表情を氷のようにした。

「友達なのに相談もせずに出ていく奴があるか！ なに一人で決めてやがる！ 大事なことはみんなで決めようって約束したじゃないか！」

「それが……間違いですか？ くだらない」

「くだらない！ もしっ……！」

ルギの言葉に、更にフィネは返した。

「もし、このことをくだらないと思うんだったら、ルギ！ あんたはやっぱり間違ってるってことだよ！ 神様になんてなる器じゃない！ だって」

フィネは俺たちを見ながら言った。

「あんたが守ろうとしたのはあたしだろうか！ その絆がくだらないって言うんなら！ それをくだらないと言ってしまっような神様なんてあたしはいらない！」

「いらない……。僕が……」

俺はフィネの言葉に微笑む。



何もいつつもりはない。俺や他の先生たちが教えて来たことを、彼女はこの場で実践してみせたのだ。

「だから、あんたを連れて帰るよ、ルギ。あんたにそんな役は似合わない」

「勝手な………ことをっ………！」

ルギが戦闘体制に入ろうとする。しかし、

「落ち着くがいい。人よ。魔よ。ルギ、そなたはこれから本当の神になる身だ。小娘の戯言にそれ以上耳を貸すな」

「ですが」

「心配するな。すぐに決着をつけることになる。それを邪魔しようと言うのではない。だが舞台には設えがある」

ワイズ神は淡々とした様子でルギに言ってから、奥に行くように指示する。

ルギはこちらを一度振り返ってから、自らの影に溶け込むようにして姿を消した。

「ルギ！」

「もう一度言うが、慌てるな、人の仔らよ。別に決着を邪魔立てしようというのではない」

「………の割には、剣を持たれているようですが、ワイズ神様？」

ワイズ神は剣を抜きはなつて仁王立ちをしていた。

彼女の後ろには、神殿の最奥へと通じる唯一の通路がある。

「やっぱり邪魔するつもりじゃねーか！」

フィネが口を開くが、

「そなたは通るが良い」

「へ？」

虚をつかれて、フィネが素っ頓狂な声を上げる。

「私があるのは、お前たち3人だけだ。他は奥へ進むといい」

その三人と言うのは、

「新・旧国教対決ですね。ですが、私は別にあなたに何の恨みも持ってませんが……」

「はい、私もです。というか、むしろブリギッテ教の教義よりまともだと思ってるくらいです。リズレット大教皇様に無理やりスカウトされて序列三位をやってるだけなんですよね」

「あ、私もワイズ神様と戦うくらいでしたら、親子の縁を切ることも検討の余地がありますので」

ブリギッテ教を代表する三人。始祖ブリギッテ、大聖女アリシア、

大教皇の娘ローレイ。

全員が戦いを避けたがるが、

「お前たちになくとも、私には戦う理由がある。それとも、ここで全員が私と戦って時間を無駄に費やすか？ そうなれば、ルギが本当に戻ってこれなくなると思うがな」

なるほどな。

「あのルギ自体はまだ母体の状態か」

「察しいいな。救世主。分かったなら行くがいい。言っただろう？ この戦いは世界の趨勢を決めるものだ。舞台そこにはお前がいるべきだろう」

やれやれ。

「とんだ買いかぶりだな。俺はただのんびり暮らしたいだけのポーターなんだがな」

「そうか。ならば神の目をしても見誤ったのかもしれないな」

ワイズ神はそう言いながら、剣を構え始める。

「アリシア、頼めるか？」

「もちろんですよ、アー君。妻としての働きをお見せしましょう。それにまあ私も教皇ですので」

彼女はそう言うど、

「この300年。世界をまとめてきたブリギッテ教団の神髓をお見せしましょう」

凛々しく微笑んで前を向いたのだった。

すると、

「ふふ、やっぱり若いっていいですね。リズレットを外して、アリシアちゃんを後釜にするのもいいかもしれませぬね」

「内紛がすごそうなので、やめて頂けますか、ブリギッテ様」

ブリギッテも同じく微笑みながら言い、ローレイは淡々とした様子で首を振ったのだった。

そして、二人も同時に杖を構える。

「では現人神としての役目を果たしますか。行ってください、アケ君。それに皆さん」

「ああ、頼んだ」

俺は頷きながら、

「魔王の相手はあんたしかできないからな」

「はい 今日中には世界を救って戻らないと、旅館が開けませんからね」

そんな軽口をたたきながら、俺たちは別れた。

今ここに。

旧き神ふるワイズと現人神ブリギッテの戦いが始まったのである。

## 205・ワイズ神 VS プリギツテ神（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。へ。こ。ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケやブリギッテたちはこの後一体どうなるのっ……!?!」  
と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 206・ルギ神 VS ヒトビト

206・ルギ神 VS ヒトビト

ワイズ神とブリギッテたちをおいて、他の仲間たちは神殿の最奥へと進んだ。

白亜の壁に継ぎ目はなく、とても人の手によって作られたものではない。

神が誕生した瞬間に、同時に成立する神殿は、すなわち神固有の境界のようなものだ。

つまりこの場所は、まさにルギ神の内部にいるのと同じ。

俺たちの行動など、手に取るように把握しているだろう。

同時に、何か畏をしかけることもできるはずだ。しかし、そういったものは一切なく、俺たちは神殿の最奥。

ルギのたたずむ、神座かみくらの間へと到着した。

その場所は異質であった。

「な、なんだよ……」

フィネが声を上げた。気持ちは分かる。



ここまでの道程が美しい白亜の城だったのに対して、よりにもよって、神おわす場所たる神殿の最奥は、むき出しの無機質な岩や地肌が露出している。地面はひび割れ、谷底のような深い亀裂が幾つもある。

亀裂の底には溶岩が炎なのか、判然としないが、火の海が全ての生命を拒むように燃え盛っていた。

「これがお前の望む世界なのか？ ルギ？」

神殿の最奥は、神の心の風景を如実に顕す。ならばこの殺風景な、何者かもを否定し、燃やし尽くす力だけの世界が、ルギの求める新たな世界であり秩序なのだ。

「早かったですね、先生。もっとゆっくりでも良かったのに」

俺の言葉に答えのは、やはりルギだ。

むき出しの地肌のうえに、一人たたずむ。

「当然だろう？ 時間をかければ、お前を助けられなくなる」

「助ける？」

ルギが微笑む。

俺は頷く。

「ああ、そうだ。ヴァンパイアハーフのお前は様々な力を取り込む

特殊な力がある。無論、神になどなれるような器では本来なかった。だが、ワイズ神の後継者として神格を譲られたお前は、今や神の器として力を持っている」

「そうです。今の俺は強いですよ」

「いや、今ならまだ止められる」

俺は杖を構えながら言う。

「まだお前は本当の神ではない。この神殿の間に集まる信仰と、ワイズ神の開いた地獄を飲み干して、初めてお前は完成する」

「邪魔をするんですか？」

「当然だ」

「どうしてですか？ 俺は……。僕は……」

ルギは静かに言った。

「力がなくて。余りにも弱すぎて、大切なものが全て手からこぼれてしまうことを知りました。大事な仲間も力がなければ守れないんですよ、先生？ それは、あなたが一番よく知っているはずでしょう？ なのにどうして邪魔をするんですか？」

静かな声だった。だが、それは恨みがこもったような声質でもあった。

「勘違いするな、ルギ。俺に力などない。俺はただのポーターだ。」

あるのは仲間との絆だけだ」

「詭弁ですね。そうやってまた俺を馬鹿にして！」

「嘘じゃない。お前に嘘をついたことがあったか？」

「もういいです！ あなたとしゃべっていると、決意が鈍る！ 殺すことが出来なくなる！」

「まったくしょうがない奴だ。だが、そうだな。俺は神様じゃない。だが神託ぐらいなら言うことができるんだぞ？」

「何を……」

ルギがわけが分からないといった様子で目を見張った。

俺は微笑みながら、

「お前が見えていないだけで、お前は十分に強い。前のお前にだったら、俺は勝てなかったかもしれない。だが、今のお前なら勝てる。弱くなったな、ルギ」

「本当に、本当に、本当に……」

ルギは低い低い声で呟くように言うと、

「あなただけは絶対に俺が殺して上げますよ、先生！ いや、違う！」

彼は自らの体から黒い影のようなものを放出しながら叫ぶ。

「俺の一部になってもらいます！　フィネやソラ、キュールネーたちとずっと一緒に、俺の中で仲良く過ごすといいでしょう！―！」

「しょうがないな。ゲンコツ一発くらいは覚悟しろよ、ルギ」

俺は使用するスキルをイメージしながら、

「行くぞ、お前たち！　ルギに一発きついのを喰らわせてやれ！」

俺の言葉に、コレット、フェンリル、そしてフィネ、ソラ、キュールネーたちは、

『おう！―！』

と勇ましく答えたのだった。

そして、ただ一人、ピノだけは、そんな俺たちの戦いの光景を少し離れた場所で、傍観するようにつめていたのである。

こうして、ルギ神とただのヒトたちとの戦いの火蓋は切って落とされたのだった。

## 206・ルギ神 VS ヒトヒト（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。へ。こ。ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 207・ワイズ神 VS 始祖ブリギッテ／真相

207・ワイズ神 VS 始祖ブリギッテ／真相

（アリシア視点）

「戦いを始める前に、あなたの本当の目的を聞いても宜しいですか？　ワイズ神様？」

始祖ブリギッテ様がまじめな表情をして言った。

アビスを300年間封印し続けた始まりの聖女であり、地獄の門ブリギッテ教の始祖。

「剣と剣を交えればわかることだ。私は無駄は好まぬ」

「賢き神と言われているんですから、神性の通りやって欲しいんですが。それに私はブリギッテ教の序列一位ですが、わりと敬虔なワイズ教信徒なんですよ」

「ええ！？」

「そうなんですか！？　ご自身の教義を信仰してらっしゃらないんですか！？」

私もローレライちゃんも驚きます。

「いえ、別に私が作ったというより、勝手に当時の仲間とかが作り上げた内容です。割と気にいってますが、元々はワイズ教ですよ？ というか、当時はだいたいワイズ教徒でしたし」

「信徒か。いや、背徳者なのか？ まあ良い。この舞台には余計に相応しいのかもしれない」

ワイズ神様は剣は構えたままで言う。

「目的はと聞いたな、現人神ブリギッテ。それは簡単だ。私という旧き神では世界は救えぬ。だから新しき神を生み出す。そのための母体として、力と吸収の顕現体であるヴァンパイアを母体とし、お前たちを贄いけにえとして捧げよう。それによって新たな神が目覚める」

「そうですね？ ですが、それなら私たちをこの神殿にまで招くことはなかったのではないかな、とお姉さんは思いますがどうでしょうか？ まだ何かを隠している！ とお姉さんは見ました」

「無論だ。神は韜晦とうかいを好む。それにすべてを話せとは、お前たち人の言う『デリカシー』に欠けるのでは？」

「なるほど。一理ありますね」

「はい！ はい！ 異議ありです！ ブリギッテ様！ 納得したらダメですよ！ 世界の命運がかかってますから！」

ローレライの元気の良い言葉に、



「そうですね。ではこうしましょうか、ワイズ神様」

ブリギッテ様は好戦的な微笑みを浮かべて言った。

「私が勝つたら、隠し事は無しにしましょう」

「なるほど。戦利品というわけか。嫌いでは……」

「殴り愛です！ 燃えますね！ やっぱり最後は拳と拳で会話をしなくては！」

「……私が最初に言った内容に戻ってきている気がするな」

「そうですね。それに先ほど戦利品とおっしゃりましたが、それは違います。訂正を要します」

「ほう？ ではなんだと？」

かちやり、とワイズ神様も正眼に剣を構える。

ブリギッテ様は、微笑んでから、私に、

「分かりますか、アリシアさん？」

そう問いかけたのでした。

もちろんですとも！

「殴り合った後は、大の字に寝転がって、親友になるんです！ これ、ブリギッテ教の基本ですから！」

「これ、まじでそうなってるんですよね。どうして私はブリギッテ教信者やれてるんでしょうか……」

私はしっかりと宣言し、ローレイちゃんはなぜか表情を曇らせていました。

「ふふ。良いな。『カツアゲ』のような気もするが、良いだろう」

『ドン！！！！！』

ワイズ神の雰囲気が一変した。

神殿が崩壊するほどの魔力が解き放たれる。

「邪神来星より生き残った一柱。このワイズを打倒し未来の可能性を見せよ。現人神とその信徒たちよ。神を殺せるのはお前たちヒトだけの特権だ。逆もしかり。今ここに、星の未来の断章を紡ぐ」

「ならば、ここに集いし三人の聖女の力によつて、その断章は紡がれましょう。素敵な文章で、明るい物語にするなんておちゃのこさいさいです」

「行くぞ！！」

ワイズ神様の、もはや、可聴粹すらも超えた神域に達する黒い閃光が、私たちを蒸発させる魔力を帯びて神剣より放出される。

「大結界『赤<sup>アレス</sup>』！！」

それを地獄門アリスを300年に渡り封印してきた、ブリギッテ様の結果が阻んだ。

「くっ!?!」

ローレイちゃんが目の前で炸裂する黒と赤の光の奔流に目を閉じます。

その間にも、

「よくやる。ではこれはどうか!」

「重いですね! さすがに!」

既に二人は初撃の攻防を追えて、次の行動に移っています。とてつもない速さ。

動いているのはブリギッテ様ですが、それを軽くないのは、ワイズ神様といった様相です。

「ローレイちゃん、2秒後に小結界よろしく!」

「ど、どこにですか! 早すぎて見えません!」

「目の前です!」

「へ?」

「アリシアさん! 大結界を!」

「了解ですとも！ 対滅大結界！ ディースベル・アルテミシア 絶対神層！！！」

そんな私たちのやりとりとほぼ同時に、

『消滅するがいい！ 神域消失 ロストガーデン』

「くうううう！！！」

『バリン！ バリン！ バリン！ バリン！！』

神の剣より、今までの数倍の熱量を誇る魔力放出がなされた。

赤黒く燃えさかるその魔力の光線は、私がブリギッテ様の前に張った複層対滅大結界を次々に打ち砕いていく。

「防ぎ切れません！」

「それでいいんです！」

「へ？」

『バリン！！』

最後の結界が破裂する。

だが、強力な大結界を幾つも破壊した衝撃で、神技たる致死の光線は僅かにそれる。

「それたんですか？ きゃっ！？」

ドン！ とローレライの張った小結界に着地し、衝撃を吸収したのは、ブリギッテ様だ。

「強いですね。というか、めちゃくちゃ防御が固いですね。隙がないです。素手ごろでも十分やれますよ、あの神。ローレライさん、中級回復魔法よろしくお願いします」

「長期戦はあんまり向かないかもしれませんがね。こちらの力があるうちに、必殺の一撃を打ち込みたいところです。あ、次は私に中級回復魔法お願いしますね」

「は、はい。でも私の回復魔法なんかでいいんですか？」

その言葉に、ブリギッテ様と私は思わず笑ってしまいます。

「当たり前ですよ。ローレライさん。自覚がないのかもしれないですが、あなたは回復術士としてはもう誰にも負けないレベルに達しています」

「です。この戦力で勝てなかったら、どうせ誰がやっても勝てません。私たちは回復魔法を使っている余裕はありませんので、非常に助かります」

「わ、分かりました！ 有頂天になって頑張ります！」

「いい返事ですね。やっぱりブリギッテ教徒の素質がありますね。リズレットそっくりです」

「萎えました」

そんなやりとりをしていると、

「作戦会議は終わったか？」

ワイズ神様が落ち着いた声音で問うてくる。

「はい。長引かせるつもりはありません。次で決めましょう」

「ふむ。そうか。短慮かと思うが、それを止めるつもりはない。大賢者がいればまた話は別かとおも思うがな」

「ふっふっふ。甘いですね。神様。お互いを支え合うのが夫婦というもの。アー君がいなくても大丈夫であるところをお見せしましょう」

「この土壇場でデレを見せつけていくところはさすがですね。アリシア様」

ローレイちゃんの淡々とした声が響きます。

「ではゆくぞ。いずれにしてもこれで終わりだ」

ワイズ神様から再び剣が振るわれます。

今まで以上の。

それこそすべてを飲み込むような、凄まじい黒い光の奔流。全力の一撃。

ですが、だからこそ。

「私たちには勝機がある！」

「驚いたな」

「そうですか？」

少女は淡々とした調子で言った。

倒れたワイズ神様に馬乗りになり、胸には短剣が突き立てられようとしている。

「この短剣には『神殺し』の『呪い』エンチャントがかかっています」

「賢者の置き土産だろう？ 無論、その程度のものは用意しているとは思っていた。だが、私に至るのが、お前とはな、ローレライ。始祖ブリギッテと大聖女アリシアさえも捨て駒にするとは」

「捨て駒ではないです。尊い犠牲です」

「そうか……。それは人間らしく、唾棄すべき言い草で、私の期待通りだ」

「やっぱり、嘘、なんですね」

ポツリと言っローレイに、ワイズ神は訝し気な声を上げたのだっ  
た。



207・ワイズ神 VS 始祖ブリギッテ/真相 (後書き)

【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。へ。こ。ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV:井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「ワイズ神はこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

(前回からの続きです)

「やっぱり、嘘、なんですね」

ポツリと言うローレイに、ワイズ神は訝し気な声を上げたのだった。

「何？」

「約束通り、お友達同士、隠し事はなしにしませんか？」

彼女はそう言ってから、

「生贄は私たちだったはず。なのに、あなたの言葉ではまるで私たちの死は無関係のように聞こえます。それにさっきの全力の一撃はまるで隙を自ら作られたように見えました。まるで行動が一貫していません。矛盾していますよね？」

と続けた。

その言葉に、フツ、とワイズ神様は笑うと、

「そうか。剣をつきつけあった仲だからな」

皮肉気に口の端を釣り上げた。

「ではお前の望む答えを述べよう。さっさと私を殺すが良い。そうすれば、私の神性はルギへと移る」

「へ？ どういうことですか？ ああ、いえ！ そのままの意味なのですか!？」

少女は思わず驚いた。

「神は韜晦<sup>とつかい</sup>を好むが嘘はつかぬ。私こそが生贄だ。私は負けた以上死ぬ。そうせねば、この身に宿る神核をルギへ譲ることは出来ん」

ゆえに、早くとどめを刺すが良い。そう催促する。

「質問です。もう十分、神様っぽいですよ、ルギさんは」

「あれではまだ半神だ。仕上げが必要だ。何せ、次こそ、お前たち人間だけは守らねばならん」

「私たちを守る??？」

思いがけない言葉に、少女は首をひねる。

「そうだ。私は人間を守る。お前たちの愚かさや醜さ、美しさや力強さを愛おしく思う。そのためには力が必要だ。ルギというヴァンパイアの器、そして仲間……特にフィネという人間の少女を守りたいという気持ち。それらが私には必要だった」

「なぜ？」

「なぜ、か」

ワイズ神は目を閉じる。

「この1000年のお前たちの苦しみは、邪神に対抗しえなかった私のせいだ。ならば、役に立たぬ神性は次の神へ譲渡する。次こそはお前たちを確実に守る力をために」

「そうではありません」

「なに？」

フルフルと首を横に振り、少女は言った。

「どうして『人間だけ』なのですか？ この地上にはたくさん种族がいます」

「本当に聡いな、ローレライ・アルカノン。次期大教皇よ」

ワイズ神は穏やかな表情をして、

「それは私の片割れが、今まさに、大賢者とともに探っている可能性だからだ。私の可能性は……潰えた！」

『グシヤ！！！！』

「なっ……！！ 自分でっ……！！ 短剣を！？」

驚くべきことに、ワイズ神様は自ら短剣のほうに体を持ち上げ、胸を貫かせる。

「それに片割れって……。もしかして……」

「さて、あとは頼んだ……。ぞ……。ピ……。ノ……」

ワイズ神様が目を閉じて、今まさに消失しようと思われま

が、その時でした！

「まったく、それこそ短慮ではないでしょうか！ それに殴り愛で深めた友情を早々に捨てるとは言語道断！」

「は？ ブリギッテ……。そなたまだ生きて……」

「私もいますので宜しく」

死んだはずのブリギッテ様と私の顔を見て、ワイズ神様は初めて驚いた顔をされたのでした。

「あの必殺の一撃はどんな存在も蒸発させる類のものなのだが、どうやって生き延びた？」

「気合ですね、お姉さんには余裕でした」

「あっ、違います、違います！ 気合で神様に勝ったとか思われると嫌ですので説明しますと、わざわざ私たち3人の聖女が残ったのは、お互いに回復しながらあなたに接近するためです。三人でダメージを分担するように先頭を入れ替えながら接近し、後衛は先頭の

方を回復し続けるキュア・サーキュレーション陣形作戦です」

「やはり気合では？」

私の説明にローレイちゃんはポツリとこぼしました。

ですが、そんな空気は関係ないとばかりに、ブリギッテ様はガシッとワイズ神様の肩をつかまれました。

「ワイズ神様！」

「そなたは暑苦しいな。なんだ？」

消滅しつつあるワイズ神様に向かって、ブリギッテ様が口を開きました。

「提案があります！ 友達なんだから聞いてくれますよね！ ね！  
ねー！」

屈託のない微笑みを浮かべながら言っのでした。

「アリシア様」

「なーに、ローレイちゃん？」

ローレイちゃんは既にワイズ神様の上からどき、私の隣に来ていきます。

「ああいうのって、友情の押し売りと言っんじゃないでしょうか？」

「疑問に思ってはだめですよ？ 次期大教皇様？ 勧誘とつのはあ  
あいうものです」

「ええ……」

なぜかドン引きするローレライちゃんです。

ですが、それ以上に。

「正気か？」

「もちろん！ 現人神に二言はありません！」

ワイズ神様はその提案を聞いて、今度こそローレライちゃんは、啞  
然とした表情になったのでした。

その提案というのは……。



【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。ペ。コ。ッ  
<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「ワイズ神とブリギッテはこの後一体どうなるのっ……!??」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



半神程度が限界でした。完全体になるには、やはり既にある核を利用するのが一番早かったというわけです」

「ワイズ神を利用したってのか!？」

「そうです」

ルギは昏い表情で笑うが、俺は首を振り、

「それは違う」

と否定した。

「違います」

「違うな。お前たちは単なる共犯関係だ。ワイズ神がどういう悩みを持っていたのかは想像するしかないが、クソ真面目だからな、あれは。大方、邪神に対応できず、あまつさえその後救済を行なうほどの力さえないことを悔いたんだろう」

「……てことは、ルギはワイズ神の後継者？」

FINEが言った。だが、意外な人物がその言葉を否定する。

「いいえ、それも違いますね」

「ピノ？」

そう。それは、これまでほとんど沈黙を貫いていたピノであった。

彼女は猫耳を動かしながら言う。

「あのワイズ神は人間種族を至上とする新たなる統治が、星の生命体全体の強さを保つことにつながると考えた狭隘なる思考の偏在神です。ゆえに、ルギはワイズ神の神性すべてを継承する者ではありません」

「あのう、ちょっといいかしら。話の腰の骨を折って悪いんだけどいい加減聞かせて頂戴」

「あんた何者!？」

「あら、ソラ、私が聞こうと思ったのに」

キュールネーとソラの疑問に、ピノは、いつもとは違う凛々しい表情を見せながら言った。

「すみません、絶対に隠す必要がありましたもので、普段意識も半分遮蔽していました。改めて挨拶させてください。私の名はワイズ神。人のみを至上とする偏在神より分離した、もう一人のピノ・ワイズです」

「「「は?????」」」

生徒たちの啞然とした声はもった。

「あなたがワイズ神様、なの?」

キュールネーが信じられないとばかりに呟く。

「正確にはその一側面。全ての種族が協力し、上下の境なく仲間となり、共に星の未来を作ることを志向したピノ《偏在神》とでも言いましょうか。今まで通り、ピノで結構です」

ピノ・ワイズ神はそう答えた。

ルギは昏い表情のまま、

「なるほど、そうだったんですね。それはワイズ神様も教えてはくれませんでした。まさか二人に別れているなんて……」

「とすりゃあ、話は簡単だ！ 半分になっちまった神様の神核を引き継いだって大した強さにはなんねーだろ！」

FINEが快哉を叫ぶが、

「そう簡単なわけないじゃろ？ なあ、旦那様？」

「もちろんだ」

俺も肩をすくめつつ肯定した。

「ピノには神核がない。つまり、基本的には神核はあっちのワイズ神が持っていたというわけだ。そして、それは今、ルギへと流れ込んでいる」

「なんだよ、結局、不利ってわけか!？」

フィネが失望した表情を浮かべるが、

「いやいや、そうではなくてのう、フィネよ。今、ここにいるから分からぬかもしれぬが、これは神話の「くさりなのよ」

「はい？」

フィネが首を傾げた。

「つまりこういうことですよ、フィネさん」

ラツカライが先生らしい説明口調で言った。

「この戦いはですね、後に神話で語られる聖戦の最後なんです。何の最後かと言えば、この星がこの後数百年、数千年に渡って、どう繁栄するのかを決める戦いが、ここで決まるんですよ」

「えっ？ えっ？ えっ？」

「ルギさんは人が力を持ち、世界を支配する統治機構を肯定する神。一方で、私たちは様々な種族が力を合わせ、協力して、不合理で非効率かもしれないかもしれませんが、その茨の道を行くヒトの代表。これは世界を『靈長《人》』か『亜種靈長』のどちらに委ねるかと言う神話に他ならないんです」

「い、いつの間にそんなことに!？」

「先生とかかわった時点じゃないでしょうか。ねえ、先生？」

「いやいや。俺を原因みたいに言うんじゃない」

「いや、間違いなく、先生がこの神話の主役でしょうに」

俺は聞こえないフリをしながら口を開いた。

「聞いての通りだ。これは神話の戦い。星の未来を決する戦いだ。お前にその覚悟はあるか、ルギ？」

その問いに対して、ルギは嗤う。

「あはははははははははは！」

たちまち、彼の体から黒い影が伸び始める。

ヴァンパイアの特徴とワイズ神の神性が加わり、もはや邪魔者を全て吸収し破壊する恐るべき神となりはてている。

「亜種霊長破壊神ルギ、か」

「適切な名前ですね、先生。この力で秩序を地上にもたらしめましょう。力こそが全て。人を頂点とし亜種霊長たちを支配してもらおう。それによってこの世界に秩序をもたらしましょう！ もう二度とフイネを傷つけさせないように！！」

「あたしを理由にするんじゃないやねえよ！ 馬鹿！ きついのお見舞いしてさっさと帰るぞ馬鹿！」

「やれるものなら、やってみてくださいよ、フイネ！ あなたには僕の影の中で永遠にまどろみを与えましょう！！」



「じつじつ」

『亜種霊長破壊神ルギ戦』

が開始されたのである。

## 209・亜種霊長破壊神ルギ（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻2月7日発売予定！ ぜひ、ご予約お願い致します！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日2月7日発売予定！ガンガンONLINE連載中。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひご一読ください。  
\*。ー。こ。ペ。コ。ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ達はこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

210・神とヒト

210・神とヒト

「一撃でさよならです!」

亜種霊長破壊神ルギから、黒い影が神殿内部の岸壁を覆いつくすように伸びる。

「触れたらやばいっばい!」

「安心しろ、取り込まれて永遠に虚無の空間をさまようだけだ」

「旦那様はフィネを安心させる気ゼロなのじゃ、にゃっはっは!」

「姫様もずいぶん余裕がありそうですが……」

「にゃははは! 神と戦うとはそういうもんなのじゃ! 神威に触れたら死ぬのじゃ! 至極」

コレットは拳に力をためて、

「当然なのじゃっ!……! はあ!……!」

岩盤ごと影を打つ砕いた。

クレーターを形成するほどの衝撃が影を遅い、一時的に雲散霧消する。しかし、

「ほれみる。ちーとばかり触れたら、もってかれたじゃろ？」

「姫様！？ 腕が！？」

見れば、コレットの右腕がまるで炭化したようにだらりとしている。

「慌てるな、慌てるな。すぐアリシアが治してくれるのじゃー！」

「あの、姫様、アリシア先生はここにはいないと……」

「ん？ あ？ へ？ あれ？」

コレットはキョロキョロとした後、

「そうだったのじゃ！？ やば！ 左腕だけとか、やばー！」

「は、反面教師を最終戦で生徒達に見せていくなんて、なかなか粹ですよ、お、お姉様！！」

「ラツカライのそれはフォローになってるのかのう。まあ、コレットののおかげで分かったであろうて」

フェンリルが苦笑しながら影をかわしていく。

「例えば最強種（シロコウ）とて、あれは喰らう。かなう種族はおらぬであらうて」

「じゃ、じゃあ、勝てないじゃないですか!？」

ソラが悲鳴を上げる。

「そうです。さっさと諦めてください。新しい世界は、僕が作りま  
す。無駄な抵抗はやめたほうがいいですよ？ そうすれば痛みなく  
取り込んで差し上げますからね」

そう答えるルギの体からは、さらに染み出すように黒い影が放出さ  
れる。

広大な空間も、ルギの魔力で形成される影に覆いつくさるほどの膨  
大な魔力だ。

『ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアア!』

「アビス《地獄》の炎すらも飲み込むか」

「ワイズ神様の神核を継承した僕に不可能はありませんよ。どこま  
でも、どこまでも強くなれる。僕にかなうものはもういません!」

「先生、危ない!！」

今や内部前面を覆うほどに広がった黒い影から、こちらを攻撃する  
ように黒い帯状の刃が突き出される。

『ギイイイイイイイイイイイイイイイイイン!』

聖槍ブリューナクが火花を散らしながらそれを逸らした。

「ふうん。さすがラツカライ先生の第2聖具《聖槍》ですね。僕の影に取り込まれないなんて……」

静かにルギが呟く。

「なんて、生意気」

そう言った瞬間、

『ブワ！！！！』

今まで帯状だった影が、刹那<sup>せつな</sup>ブワリと広がる。

ラツカライごと取り込もうとするかのように、大きく大きく広がったのだ。

まるでゴーレムを取り込めるほどに大きく広がったそれは、一瞬のうち収縮すると、ラツカライを取り込んでしまう。

彼女は声を上げる暇もない。

「あははははははは！　まずは一人目！　だけど、分かりますよ！　ワイズ神様の知識が僕に教えてくれます！」

ルギは哄笑しつつ言う。

「ラツカライ先生こそが、賢者パーティーの防御の要なんでしょう？　それをこんな早々に失っては、もう戦えませんか。ねえ？」

ルギは俺の方を見て、微笑みながら言った。

「ア・リ・ア・ケ・セ・ん・セ・い？」

そう言った瞬間、さきほどラツカライを取り込んだのと同様、ブワリと俺の目の前を、真っ黒な影が覆った。

逃げる隙間はない。

絶望の黒い未来が目前に迫ったかのような錯覚を覚えさせる、恐ろしい攻撃だ。

「さようなら、先生。楽しかったですよ」

ルギのそんな言葉が俺の耳朶に届いたのと同時に、その黒い影は俺を咀嚼するかのように、覆いかぶさる。

そして、次の瞬間には、俺がいた場所にはただ何も無い無だけが残されていたのだった。

「ゲームセット、ですね。先生？」

「そ、そんな……」

亜種霊長破壊神ルギ。

彼のその圧倒的な力に、生徒たちは茫然とした声を上げるしかなかったのであった。



## 210・神とヒト（後書き）

### 【小説・コミック情報】

とうとう明日発売です！ 下記URLからご予約よろしくお願  
いします（\*。ー。）oppoっ！！！！

『小説』第4巻。柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いても  
らっています！

『コミック』第1巻も明日発売！ガンガンONLINE連載中。  
くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

<無料>試し読みも可能ですので、ぜひぜひ一読ください（\*。  
ー。）oppoっ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ達はこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

211・人とヒト

211・人とヒト

(前回の続きです)

「ゲームセット、ですね。先生？」

「そ、そんな……」

亜種霊長破壊神ルギ。

彼のその圧倒的な力に、生徒たちは茫然とした声を上げるしかなかったのであった。

しかし、

「危なかったですね！」

「先生、大丈夫でした？」

音速を超えるスピードで俺を背に乗せて、覆いかぶさる影から逃したのは、キュールネーであった。

ドラゴンの姿になり飛翔している。それは人智の到達できない凄まじいスピードだ。

「もちろん、大丈夫だ。というか、お前たちが助けしてくれるだろうと分かっていたしな」

「どれだけ楽観的なんですか!」

「そうですね! こちらは心臓が縮む思いでしたわ! もうほんの一瞬遅れていましたら、影にのまれていましたのよ!?!」

「だが、そうはならなかっただろう?」

俺は背にのりながら言う。

彼女の背中にはエルフのソラものついで、彼女の風魔法によってキョールネーの飛行速度を飛躍的に向上させていた。

「エルフとドラゴンでなければ出来ないことだな」

「「たまたまうまくいっただけでしょう!」」

二人に怒られてしまう。

「それにラツカライ先生がっ……!!」

彼女たちは悔しそうに言うが、

「そっちも安心しろ。ほら、見てみる」

「へ？ あっ！？」

彼女たちがラツカライが影に飲まれた地点を見下ろす。

そこにはフェンリルが獣の姿となって、影の中へ頭をつっこんでいた。

そして、

「熱いのう。まるで地獄のようではないか」

「フェ、フェンリルお姉様！ す、すみません！」

ドロリとヘドロのような粘液をしたたらせながら、フェンリルが影から頭を引き抜いた。

「フェンリルも地獄の番犬の異名を持つ聖獣だ。異界には耐性がある」

「す、すごいですね。姫様だって右腕を一瞬で失いましたのに……」

「何を言うのじゃ！ もう回復しとるっちゅーのじゃ！」

「えっ！？」

見れば、コレットの右腕が回復して動くようになっている。

「す、すっごくびっくりして」

「びっくりして、お前……」

俺は当然のように言った。

「何のために斥候職がいるんだ？」

「あつ！？」

忘れていたとばかりに声を上げる。

そう、フィネはダンジョンの罠を解除したり、マップピングをしたりと様々な役割を担う斥候職だが、そのうちの一つに『回復』があるのだ。

「どうだあたしのハイポジションは！……まあ、譲ってくれたのはギルドの錬金術師のドワーフだけだな！」

フィネがドヤ顔で言った。

しかし、ルギは嘲笑するように呟く。

「しぶといですね。まるで虫のよう。小ぢすぢるとつぶすのにも、手間がかかりますもんね」

だが、彼は気づいていないようだ。

「ルギ。虫ではない。ヒトだ」

「おや、癩に障りましたか、先生？」

ルギはやはり嗤うが、俺は微笑みながら、

「そうじゃないさ。お前が今のやりとりで気づいていないようだから、教えてやったまでだ」

「？」

彼は首を傾げる。

「本当に、何を言っているのか、分かりませんね、先生。ですが、戯言はそこまでにしてください。どうせ、これで終わりなんですから」

ルギはそう言っただけで表情を消してから、

「フイエット・マザーゲース・ライム影の海に、飲まれて、消える」

空間をすべて塗りつぶすかのような、真っ黒な影が、濁流のごとく俺たち全員に襲い掛かったのだった。

しかし、

「やはり、分かっているんじゃないようだな、ルギ！」

俺はキュールネーの背から飛び降りると同時に、スキルを詠唱する。

「マザーゲース・リベリオ 神話創成」

静かに告げるその声は全てを飲み込む影が発する異音の中で、まるで澄んだ鈴の音のごとく、全員の耳に届いた。

## 211・人とヒト（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻発売されました！ ぜひ、ご予約お願い致します  
！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日発売されました！ガンガンONLINE  
Eでも連載中です。

くりもとぴんこ先生の素晴らしい漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとう！

<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひご一読ください（o\*。|。  
）oポコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん



公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ達はこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

212・ヒトの未来を切り拓く者たち（前書き）

小説第4巻昨日発売されましたが大好評のようです。読者のみなさまに深くお礼申し上げます。ペコリ（○）（○）（○）

## 212・ヒトの未来を切り拓く者たち

212・ヒトの未来を切り拓く者たち<sup>ヒト</sup>

(前回の続きです)

「マザーグース・リベリオン  
神話創成」

静かに告げるその声は全てを飲み込む影が発する異音の中で、まるで澄んだ鈴の音のごとく、全員の耳に届いた。

「いくら先生の力で、みんなの能力を向上させても無駄ですよ！」

ルギが叫ぶ。

しかし、

「このスキルは、能力の向上なんて、一切しないぞ？」

「……は？」

俺のあっけらかんとした答えに、啞然としたルギの声が響く。

「ど、どこまでも馬鹿にしてー！」

激昂するが、そうじゃないと俺は微笑みを絶やさない。

邪神との戦いでも使ったこのスキルは、決して強いスキルではないのだ。

なぜならば、通常は死にスキルに過ぎないから。

『星の命運をかけたような聖戦』

の際にしか発動しないスキルなのだ。その上、その効力と言えば、仲間全員の絆を高め、星を命運をかける戦士として戦うことができる」

というただそれだけなのだ。

ゆえに、

「血迷いましたか！ このまま飲み込んで終わりですよ、先生！ 永遠に僕の中でまどろんでっ………！」

彼の声が響く。しかし、俺はゆっくりと口を開く。

「人」

「獣」

「エルフ」

「ドラゴン」

「そして、この戦いのために協力してくれた様々な人々ヒトヒト」  
そう。

「これだけの絆があれば、神ごときに負けるはずがない。出来ないことなどない。超えられない壁などない。どんな困難も超えられる」  
たとえ、

「もう一度、邪神が襲来しても、今度こそ俺たちの力で撃退できる」

「

「そうは思わないか、ルギ？」

バリバリと神殿内部を咀嚼するように轟音をたてながら迫る巨大な影の前に、俺は落ち着き払った様子で言った。

「そっ………!!」

ルギは叫ぶ。

「そんなものは圧倒的な力の前には無力です！ それをいま証明してあげます!!」

「ならば」

俺は賢者の杖を構える。



「ええ、蜂蜜のように」

影が俺たちを捕らえようという瞬間に、やはり気配をけしていたゲシュペントドラゴンの二人が、俺たちを救い出す。

「くっ、ちょこまかと！ 力では圧倒的なのに！」

「油断大敵よの！」

『ガギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイインンン！！！！！！』

「ぐっ！？」

聖獣の姿に戻っていたフェンリルが、不意をつけてルギに突進すると同時に、その鋭利な牙で噛みつく。

無論、ルギの放つ影がフェンリルを襲うが、

「忘れたかえ？ 我は地獄の熱さには少しは耐性がある。我が顎あごがそなたをかみ砕く方が早そうであるな？」

「ちい！」

力は圧倒的に上のルギだが、だからこそ後退する。

仕切り直せば勝利することはたやすいからだ。

しかし、大きく後退したその場所へ、





「はあ！ はあ！ はあ！ はあ！ なんてっ……！」

影でミストルティンをなんとか凌ぎながら、ルギは信じられないとばかりに叫ぶ。

「おかしいじゃないですか！ 僕の方が間違いなく圧倒的に強いのに！ それなのに一方的に押されているなんて！」

本当なら！ とルギは続ける。

「もうとっくに勝負はついてるはずなのに！ どうしてなんだ！ 神なのにどうしてヒトごときを倒せない！」

もたえるように言った。

そこに、

「戻れ、ミストルティン」

俺は声を上げる。

同時に、聖弓ミストルティンは俺の手元へと戻った。

「はあ、はあ、はあ。次こそはっ………！」

「何度やっても同じだ、ルギ」

「ふざけないでください！ そんなはずがないでしょう！ 僕の方が強いのに！ 何より！」

彼はしほりだすように言った。

「先生は強化スキルさえまともに使っていない！」

だが、俺はその言葉を聞いて、思わず笑ってしまった。

「ははは、何だそんなことを疑問に思っていたのか。当たり前のことじゃないか」

「あ、当たり前？」

ルギの怪訝な表情に俺は淡々と答えを言った。

「様々な種族、様々な人々《ヒトビト》が協力しているんだ。超えられないハードルなんてないさ。どんな困難も、これだけ色々な奴らが揃えば、そりゃ解決できる。特に今回はな」

「今回は？」

疑問符を浮かべるルギに俺は改めて言った。

「クラスメイトを助けるために奮闘しているんだ。そりゃ、クラス一丸にもなる。世界の行く末などよりも、よほど大事なことだ。気づいているか、ルギ？ みんな、お前を助けるためにやってきたんだぞ？ みんなお前を敵を前にしたような時の顔をしているか？」

「!？」

俺の言葉に、彼は気づいたようだった。

そう。

これは確かに『星の行く末』をめぐる神々の戦い。

『神とヒト』の関係を巡る神話の二コマ。

だが、そんなことはどうでもいいのだ。

今を生きる俺たちにとってこれは、

「仲の悪かったいろんな種族のクラスメイトたちが神様に逆らっても友達を取り返すだけの話だ」

その言葉に、俺の仲間たちは深く頷いたのだった。

## 212・ヒトの未来を切り拓く者たち（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻発売されました！ ぜひ、ご予約お願い致します  
！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日発売されました！ガンガンONLINE  
Eでも連載中です。

くりもとぴんこ先生のじつに可愛い漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとう！

<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひご一読くださいませ（o\*。  
ー。oppooppo

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「人魔同盟学校の生徒たちはこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

213・暴走

213・暴走

「認めない！ 絆で人が救えるわけない！ そんなあやふやなもので……！ 力がなければ大切なものは守れないんです！」

「何度やっても同じだぞ。なんだったら……」

俺は続きを言おうとする。

しかし、ルギの様子がおかしい。

「そうか。最初からこうすれば良かったんですね」

彼はそう言いつつ、

『グシャリ!!』

自分の心臓部分に当たる箇所を、自らの手でえぐる

「おいルギ！ あんた何してんだよ!？」

FINEが悲鳴をあげるが、ルギは淡々とした様子で、

「僕が弱いから、みんなを守れない。それなら、僕を供物に、新た

な神をまた誕生させればいいんです」

「神などそう簡単に生み出せるものではないぞ、ルギ！」

俺は舌打ちをして彼に駆け寄る。

「先生、ここは地獄アビスとつながっています。なら、僕を依り代に出来る存在もきつといますよ」

「悪魔を取り込む気か。だがな……」

かつて戦った悪魔フォルトゥナのことを思い出す。

あの時は、聖都『セプテノ』が1日で崩壊しかけ、数日で『世界』が終わるところだった。

「うあああああっ！」

「ルギ！！ うお……」

ルギの気配が変わる。と、同時に、暴走するかのようになり、影が暴れはじめた。

周囲を無茶苦茶に破壊し始める。

「ルギ！ うひゃあ！？」

「早く乗って！ ファイネ！」

「旦那様は儂の方へ！」

「キョールネー、サンキュー！ くっそ、ルギのやつ、めちゃくちゃしてんじゃねーよ！」

ルギの特性はあらゆるものの吸収。ゆえに、その体は神の依り代として選ばれた。

そして、今はその体をより力ある存在に明け渡そうとしている。

それも地獄の窯かまが開いた状態で。

だが、悪魔はそう簡単にアビスから出てくることは出来ない。

聖都『セプテノ』に意図的に開かれた『門』のような、捕食の悪フォルトウナのような膨大な『概念』が出入りできるほどの扉を作るのは、誕生したての神には不可能なのだ。

ゆえに、流れ込んでくるのは、地獄の窯より湧き出る『呪いの力』のみ。

それがルギの体をのつとろうと、彼の体を蝕むしみ始める！

「ルギ！ ルギ！」

FINEが必死に呼びかける。その声に、ルギは彼女の方を見た。

「FINE」

「ルギ！ 馬鹿馬鹿馬鹿！ あんぽんたん！ そんな訳わかんないもんに憑りつかれてないで、さっさとこっちへ」



来い！

そう言おうとするフィネに向かって、彼は微笑んだ。

「フィネ……。ありがとう。君を守れるようなヒトに、僕はなりたかった」

「ルギ！ あたしはっ……………」

フィネが何かを言いかける。

だが、その瞬間、

『ブワリ！！！！』

暴走した影が、その宿主であるはずのルギ自身を取り込んだ。

もはや、呪いに侵されて暴走した影自体が破壊の衝動を持ち、自律的に周囲を破壊し、呪い、崩壊させる存在となっている。

「ルギを助けないと！ あと、あの呪いもとめて！ そんなもって、そんなもって！ ああ、もうどうすりゃいいんだよ！」

フィネが頭をかきむしって焦る。

と、そこへ。

「落ち着いて、フィネ」

彼女の肩をポンとたたいたのは、

「へ？」

「愛する男性を助けたい気持ちは分かります。ですが落ち着いてでなければ百戦危うからず、です」

そうはつきりした口調で言ったのは、

「ピノ」

彼女は凜々しく微笑む。だが、

「誰が愛する男性、だよ！　べ、別にあたしは、そ、そんなんじゃない、ねーし……！」

「おや、そうなのですか？　いえ、私もヒトの言みにはうといもので」

そんなやりとりが交わされるのであった。

やれやれ。

俺はコレットの背にのりながら、ピノたちへ言う。

「ピノ……。いえ、ワイズ神様。朴念仁なんですよ。彼らは。それよりも、切り札は最後までとっておくものです。そして、今がその時では？」

そんな俺の言葉に、

「ほう、大賢者。あなたがそれを言うのですか……。まったく納得がいきませんが、まあいいでしょう」

彼女は半眼になってから、改めてしっかりとした調子で、

「FINE。ルギの小指とあなたの小指に『赤い糸』を結んだ儀式を覚えていますか？」

そう言って優しく微笑んだのであった。



公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「フィネとルギはこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

## 214・地獄に垂れた赤い糸

214・地獄アビスに垂れた赤い糸

「なんか小指を触られた記憶はあるけど、赤い糸だなんて聞いてねーよ!」

「はあ、言っていないませんでしたか？　ですが、男女の小指同士に決して切れない運命の赤い糸魔力のをつないだとすれば、それはもう神前式として契りを約束したようなものなのですが……」

「何て押しつけがましい神！　てか、お前そんな性格だったのかよ!?!」

「まあ、あまりしゃべらないようにしていましたので。まあ、それよりも」

ピノ。

いや、ワイズ神の欠片かけら。

おそらく、人のみならず地上に済む人類全体を救いたいという、ワイズ神のもう一つの意識なのだろう。

それが、口を開く。

「行くのですか？ 行かないのですか？ 今ならば、地獄の中に取り込まれたルギ君の居場所は、その赤い糸をたどれば分かるはず。あとはあなたの気持ち次第」

「いやいやいや！」

赤面しながら。

世界の命運がかかる局面ながら、どうしても赤面せずにはいられないFINEが、叫ぶように言った。

「無理だろ！？ どう考えても！？ 地獄の中だぞ！？ あのフェンリル先生ですら、地獄の炎に触れたら命が危ないくらいだったのに。あたし程度じゃあ」

しかし、ワイズ神はそんなFINEを見て、パチクリと目をしばたかせると、

「そこにヒトの絆を信じる大賢者がいるじゃないですか。そんな彼が男女の仲が裂かれるのを見過ごすことがあるでしょうか？ いやない」

「勝手に話を進めるな。ピノ」

俺は呆れれながら言う。

だが、口元は微笑んでいたであろう。

何せ、

「うちの学校は校内恋愛は禁止じゃない。好きにするといい。それに、こつこつ時、ルギのような奴を救う奴は決まっている」

「ふむ、まったく同感です」

俺とピノは口をそろえて言った。

「ああいう気難しい男には、FINEのような姉さん女房恋人が必要だ」

「な、なんだよ、それ」

ますます赤面しながら、FINEは口をパクパクとする。

「なんだもこつもありませんとも。FINE。はああああ！！！！」

「そうだぞ、FINE。さつさと行ってこい。お前にありったけのスキルをかけてやるから、なつと！！！！」

俺とピノは暴走する影たちを、迎撃しながら言う。

「ちよつと、もう限界ですわ！ 痴話げんかは戻ってきてからしたらいいじゃないか！」

「そうだよ！ じれつたいんだよね、エルフから見ても。さつさと連れて帰ってきて付き合えばいいじゃない！」

クラスメイトたちも言う。

というか、



「旦那様、そろそろ、限界じゃ」

「聖槍で地獄の門を一時的に切り開きます!」

「影の迎撃陣形は我を中心に組み立てるが良い。1分はもつである」  
賢者パーティーの面々も口を開く。

「だそうだ。どっちにしても、お前が行ってくれないと全滅だな」

「そ、そんな! でも、あたしなんかがこの星の将来を担うなんて  
つ……!」

俺は微笑みながら首を振った。

「いや」

そうじゃない。

「逆なんだ。FINE。ルギを救うのはお前とあのバカとの絆だ。そ  
して、そうじゃなければいけない」

「え?」

FINEが首を傾げた。

「宇宙癒邪神は去った。だが、遥かな未来、次の邪神が来る可能性は高い。  
地獄の門だっていつ開くか分からない。大陸に住まうヒトビトの関  
係もどうなるか分からない」

だからこそ、

「ワイズ神の片割れは人を頂点とした力による統治の可能性を模索した。俺は、地上に住まうすべての生き物が力を合わせて星の未来を作る可能性を選んだ」

「つまり先生は……」

ああ、と頷く。

「人魔同盟学校は、そのために作った。力ではなく、単なる絆。もっと言えば種族など関係なく、友達同士が助け合える仲になれるようにと。お前にとって、ルギは何だ？」

「大事な友達だ」

間髪入れずに、FINEは答えた。

俺は頷き、

「それだけの理由があれば十分だろう？」

「ああ、そうだな」

FINEは納得したように大きく頷くと、闘志を目に浮かべた。

「友達を助けるのに、理由はいらねーよな!!」

彼女の言葉を聞くのと同時に、俺は賢者の杖をかざした。

彼女が地獄の深淵でも生存できるだけの、十分な支援スキルをかけるために。

## 214・地獄に垂れた赤い糸（後書き）

### 【小説・コミック情報】

『小説』第4巻発売されました！ ぜひ、ご予約お願い致します  
！！！！

柴乃權人先生に素晴らしいイラストを描いてもらっています！

『コミック』第1巻も同日発売されました！ガンガンONLINE  
Eでも連載中です。

くりもとぴんこ先生のじつに可愛い漫画が読めます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとう！

<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひご一読くださいませ（o\*。  
ー。oppooppo

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

【応援よろしく願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「フィネとルギはこの後一体どうなるのっ……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしく願いいたします。

## 215・共に歩もう

215・共に歩もう

（ルギ視点）

地獄アビスの中は、思ったよりも文字通りの地獄だった。

灼熱に焼かれ、そうかと思えば、極寒の冷気に骨の髄まで凍らされた。

そして、これが永遠に続く。

視界はまともに機能しない。

目の前には黒炎、そして亡者の呻きが呪いとなった呪詛の風が吹き荒れている。

すべてが塵芥に帰し、それでもなおかつ、悲鳴だけが途切れることはない。まさに地の底。

それが地獄アビスだった。

「だけど、僕にはここがお似合いだ」

諦観ではなく、これが絶望というものなのだろうと、僅かに残る理

性が囁ささやいていた。

多くの人を傷つけてしまった。

多くの恩人に不義理を働いてしまった。

彼女を結局守るところか、危険な目にあわせてしまった。

「神となり、思考が通常のそれから外れてしまったとはいえ、神としての自分のあの暴拳は、間違いなく自分の中にあつた意思が肥大されたもの。つまり、自分自身エゴに他ならぬならぬ」

父は邪神に殺され、泣き続ける母を元気づけたくてもどうしようもなかった。

次期、魔公候補として、人魔同盟学校とかいうよく分からない場所に、魔王様に送り込まれた。

今まで戦争していた人間たちと仲良くするなんて、できる訳がない。

そう思っていたけど……。

「キュールネー、ソラ、ピノ。それに……」

フィネ。

何ら屈託なく、敵対していたはずの自分に話しかけてくれた少女。

一流の冒険者になるんだと、息まいて、楽しそうに微笑む彼女。





「やっと見つけたぞ、ルギ！ 赤い糸とか言われてたけど、この魔力の風の中じゃほとんど分かんなくて死にかけたんだぞ！」

彼女は文句を言ってから、にやはははは！ と快活に笑った。

その姿は、普段と変わりないように見える。

でも、そんなはずはない。ここは地獄。人間の生きていける場所ではないのだ。

「馬鹿！ フィネ！ 何をしているんですか！？ こんなところにいたらっ……！」

死んでしまいますよ！ そう叫ぼうとするが、うまく言葉が出ない。

しかし、彼女はなぜか微笑んで、

「うん。そうだな、死んじゃうな。先生のスキル総動員らしいけど、それも限界があるって言ってたぞ？ まあ、こっやって普通に生きてられるだけ凄いいけどな。まじあの人化け物だよなあ」

「何をのんきなことを！ 早く現世に戻って！ フィネ、あなたまで死んでしまう！」

僕は怒声を上げるが、

「なに言ってるのさ。これだから生真面目な男は融通がきなくて困

る」

「え？」

彼女は近づいてくる。

僕はなぜか身動きが取れない。

そして、彼女にそのまま抱擁されてしまった。僕よりもずいぶん小さな体をした彼女だというのに、僕はまったく抵抗することができなかった。

「離れてください。僕は今、強力な呪いを受けた身。あなたまで呪いが移ってしまう！」

僕は叫ぶ。でも、

「まあ、しょうがないね」

彼女はあっけらかんと言った。

「死ぬことくらいは覚悟してきたわけだしさ。ルギがこんな変な所で自殺したいっていうんなら、付き合っただけよ」

「死ぬ？　フィネが？」

「そう。あんたがここで死ぬんなら、あたしも死んであげる。どう、それでも死にたい？」

彼女の体に、黒い線のようなものが走り始める。

呪詛が彼女の身体を犯しはじめているのだ。

「何であなたまで！ 死ぬのは罪を犯した僕だけでいいんです！  
どうしてフィネまでっ……！」

「ルギ。一度しか言わないから、ちゃんと聞いててね？」

「え？」

ぽかんとする僕に、彼女はやはりニカツと笑いながら言った。

「あたしあんたのことが好きなんだ。だから命張るだけだよ。ね？  
分かりやすいっしょ？」

「！」

僕は目を見開く。

「でもまさかこんな地獄のそこで告白させられるとは思ってなかったけどさ。まあ、ルギらしいっちゃんルギらしいよね」

「僕みたいな男のどこが……」

「それを言わせるか、女に……。まあでも、そうだな。死ぬかもしれないし言っとくか。けほ」

彼女は苦しそうになりながらも言う。

「ルギ。あんたのまじめなところが好きだよ。別に貴族の息子とか

関係ないからね。ただ純粹にあんたと喋ってたら面白いだけ。何せ、あたしとは全部違う性格だし、種族も違うし、立場も違うから」  
だから、

「好きになったのかな？ でも、後付けかもね。けほけほ」  
彼女が更に苦しそうに顔を歪めた。

「まあ心中は私は嫌だけど、ちょっと憧れないわけでも……」

「もう黙ってください、FINE」

僕ははつきりとした調子で言った。

「ルギ？」

「黙ってください。でないと舌をかみます」

「あんた……」

僕は上を見上げる。地獄の出口は遠い。だけど、

「ワイズ神、この神核、お返しします」

僕の中から、神々しく光る何かが分離する。そして、それは一つの形を取り始めた。

『もう良いのか？ お前の望む世界を実現せずとも？』

その問いかけに、

「はい。要りません。それに気づいたんです」

『何にだ？』

僕は、僕を抱擁したまま、意識を失いつつある女性を見ながら言った。

「もうここに望む未来があったことに、です」

その言葉に、ワイズ神様は、

『そうか。ならばそれをもって我が答<sup>星の未来</sup>えとしよう。手間をかけさせ  
たな、ありがとう、ルギ』

どこか優しい口調で礼の言葉を言う。

しかし次の瞬間には凜々しい口調に戻っていた。

『では、地獄の門までの道を切り拓く。ついて来い。その恋人も連れてな』

「い、いえ。まだ付き合ってるわけじゃ」

『なんだ、お前もあの大賢者と同じ口か？ 面倒だな、貴様らヒト  
というのは』

ワイズ神様はそう言うと、剣を構え、

と言いながら、信じられないほどの威力の魔力放出を行ったのだ  
た。

同時に、周囲に満ちていた業火や呪詛ごと、その魔力に呑み干され  
るように消失したのである。

## 215・共に歩もう(後書き)

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ)o\*)。)。o)ペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「フィネとルギはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



216・星の未来

216・星の未来

（ルギ視点）

「うっ」

「おっ、気づいたか。ルギ。どうだ？ 身体の調子は？」

気が付いた僕に、アリアケ先生が声をかけた。

「……よくはありませんね」

文字通り、体がばらばらになりそうなほど痛い。

そして、心もボロボロだ。

「僕を……責めないんですか？」

「お前をか？ なぜ？」

「な、なぜって……」

本当に疑問を浮かべた様子で、アリアケ先生が言ったので、僕は言

葉に詰まってしまっ。

自分の勝手な思いでみんなを裏切り、この世界を力で支配しようとした。

それによって、どれほどの被害が出たか……。

「まあ、気にするな……、この戦いはこの星にとって必要な儀式だったんだ。……と言っても無理か。人命にこそ被害は出ていないが、それでも被害は甚大だろうからな」

「……」

その通りだ。そのことを思い、僕は更に心が重くなりそうになるが。

「ばっか！ あんたまたそんなククヨクして！ そういつところだゾ！」

「あいた！？ ちょっとFINE！ そんな乱暴につ……！」

ピシヤリ！ と背中をうたれて、僕は反射的に口を開く。

でも、彼女が当たり前のように目の前にいることに気づいて、また何だか啞然としてしまった。

「FINE。君も無事で良かった……」

「本当だよ。さすがにあれは死にかけた。なははははは！ 二度はないから勘弁してくれよな！ てか、今度は反対に、あたしが困ってたら、あんたがあたしを必ず助けること！ それでチャラ。だか

らクヨクヨするな!」

その言葉を聞いて、僕はスッと心が軽くなる、そして、

「分かりました。じゃあフィネ」

僕は反射的に頷くと同時に自然とその言葉が口をついて出た。

「結婚を前提にお付き合いしましょう」

一瞬、時が止まる。

「つてつ! へっ!?!?!?!? えええええええええええええええええ  
?!?!?!?!?!」

一方の、フィネが素つ頓狂な声を上げた。

「君を守るなら、やはり一番傍にいないといけませんからね。その  
ことが、今回のことでよく分かりました。神になどなる必要はなか  
った。好きな人の傍に一緒にいること……種族なんか関係なしに、  
友達になって、恋人になって、隣に立つだけで良かった。そのこと  
がよく分かったんです。だから……」

「だ、だから?」

「結婚しましょう。ああ、いえ。すぐに結婚は無理でしょうから、  
結婚を前提に付き合います」

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよ、ちよ、ちよ!」

「ああ、やっぱり嫌ですよね。すみません。僕なんかが……。やっぱり僕には生きてる資格が……」

「い、嫌じゃねーよ！ むしろいいんだけど、心の準備ってもんがだなあつ……。！ ていうか、知ってたけど重たいなあ、ルギは！ あたしくらいしか受け止められないんじゃないかね？」

「ごまかさないください。地獄アビスでの告白は嘘だったんですか？」

「それとこれとは話が別なの！ それにどうでもいいやつ相手に命かけないって。そこは分かっとけ！」

「分かりません。はっきりと言ってもらうまでは」

「邪魔くせー男！ はあ〜……」

喧喧囂囂けんけんしょうしょうと言い争う。

それを見る先生の目は微笑んでいた。

と、そこに、

「痴話喧嘩もいいですけど、この状況はどうおさめるつもりなんですか、先生？」

「この神殿、そろそろ落下するんじゃないありませんか？ 脱出します？ でもマリード市民もたくさんいらっしやるようですね。見捨てるのも忍びありませんし」

ソラとキュールネーが近寄って来て言った。

その通り。

いまや、主神がいなくなった空中神殿アースガルズは、その神性魔力を失い、徐々に高度を維持できなくなりつつあった。

神であるからこそその神殿創造という奇跡が行えていた。

神の資格がなくなっただいま、この空中神殿を維持することは不可能だ。

「くっ！ 僕が何とか！ 残った力で……」

「あ、あたしだって、なんでもするぜ！」

ルギとフィネが言った。

すると、またしてもそこに新たな声が響いた。

「はい、お待ちせしました〜 困ったときのブリギッテお姉さんです」

「ブリギッテ様、どんどんノリが軽くなってますね」

「というか、教義に人格が近づいてきていますね。……言ってる複雑な気持ちになりますか」

それは三人の聖女たち。

ワイズ神を屠りし、神に勝る聖人たちの一行であった。

くアリアケ視点く

「で、どうする？ 俺の力で無理やりなんとかしてもいいが」

「ああ、いえいえ。地獄アビスに人間を突入させて、無傷で回収するなんていう荒業をやったのけたのでしょうか？ 少しはお休みになってください。この星の未来はみんなで作って行くんでしょう？」

「まあな。で、策があるのか？」

「もっちろんです」

ブリギッテはそう言うと、後ろを見た。

そこに現れたのは、

「ワイズ神？」

「そうだ。神核が戻ったのでな。いちおう動ける。ピノきつ一人の私もご苦労だったな。ルギも、な。此度の聖戦、みな大儀であった」

「あんたもな、ワイズ」

「……お前にそう呼び捨てにされるのは、なんだか嫌ではないな。ふむ、特別に許そう」

プイっと目線を逸らしながら言う。

「ん？ 今、何か変な波動を感知しましたよ？」

「気のせいだ。大聖女よ。話を続けよ」

ワイズ神の督促に、

「そうですね。今は一刻を争う。策とは一体なんなのですか？ 時間はもうあまり残されていませんよ」

沈黙していたピノが厳しい表情で言った。

彼女の言う通り、空中神殿の落下はすぐに始まる。そのことで確実に訪れるのは膨大な信徒たちの死という史上まれにみる大惨事だ。

だが、俺には何となくワイズ神の考えていることが分かった。

それはブリギッテと共に、この場に現れたことから間違いない。

「第3の選択か」

その言葉に、ワイズ神とブリギッテは深く頷いた。

ワイズ神が口を開く。

「第1の可能性。新たな神を誕生させ、人を霊長の主とし、他種族を亜種霊長として扱う。これを力によって統治し、次の星の危機へ備える。これが最良と考えた。その可能性を探求したのが私だ」

次にピノが口を開いた。

「第2の可能性。全ての知的生命体を分け隔てなく霊長として扱い、すべての種族が結束し友情をはぐくむ。その絆により星の未来を紡ぐ。新しい神を生み出す必要もない」

「ただし、それは非常に難易度の高い未来だ。ヒトの意識を何百、何千年かけて変えていかねばなるまい」

ピノの言葉にワイズ神が補足する。

すると、ローレライが口を開いた。

「待ってください。それが第2の選択だとすれば、さっきアリアケ様のおっしゃった第3の選択が何か分かりません」

「リズレットの娘ちゃんだけのことはあって、しっかりしてますね」

「もう大人ですので」

ブリギッテは微笑んでから、口調を変えて厳かに告げる。

「第3の可能性。ブリギッテ教を廃止する」

その言葉に、ローレライが目を見開くと、たちまち喜色を浮かべた。

「じゃ、じゃあ。ワイズ教を国教に戻す、ということですか！？  
やりました！ ラッキーです！ これで大教皇なんかにならずにすみっ……！！」



「また、ワイズ教も廃止する」

「はえ”」

ワイズ神の宣言に、ローレイの濁った声が響いた。

アリシアが引き取るように口を開く。

ブリギツテ教序列三位の大聖女であり、この世界で唯一蘇生魔術が使える奇跡の代行者としての使命として告げる。

「ブリギツテ教とワイズ教を『習合』します」

（続きます）

## 216・星の未来 (後書き)

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ)o\*)o)。o)ペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV:井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中!!

【応援よろしくお願いします!】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 217・星の未来

217・星の未来

(前回の続きです)

「ブリギツテ教とワイズ教を『習合』します」

「そ、そんな……新旧国教の融合を？」

予想していなかったローレイが驚くが、アリシアは続けて厳かに告げる。

「始祖にして現人神ブリギツテ、ワイズ教主神立ち合いのもとここに宣言する。ブリギツテ教序列三位アリシア。聖槍の使い手ラツカライ。神の末裔ゲシュペント・ドラゴンの王族コレット。十聖フェンリル。そして、星の未来を担う子供たちがこれを見届けました。そして……」

アリシアは俺の方を見る。

俺は肩をすくめながらも、自分が担うべき役割を理解して口を開く。

「星の救世主にして、星の内側でお休みであるところの、女神イシスの代行者・大賢者アリアケがこれを認めよう」

そう言った瞬間、落下を始めていた空中神殿アースガルズが『ガゴ

ン！！！』という急制動をかけたような音がさせるとともに、落下のスピードを落とし始める。

「こ、こんな結末になるなんて……。よ、余計にややこしく」

あわあわと将来の苦勞に思いをはせて、ローレライが顔を青くする。

と、同時に、人魔同盟学校の生徒たちも、啞然とした様子で、

「わたし単なる生徒のつもりで学校に来てただけど、いつの間にか神話のページの生き証人になりそうですわ……」

「はい。私もです。これは名誉なことなのでしょう。ですが、どうも私の直感が、厄介ごとだという警鐘を鳴らし続けているのです。なぜでしょうか？」

「それが正解だからでは？」

キョールネーとソラの愚痴に、ピノが鋭くつつこんだ。

「ピノ。それにしてもあんた、めっちゃはつきり喋るタイプだったのね。まあ、いちおう神様ですものね」

「力はほとんどないので、あなたたちと力はそれほど変わりありません。なお、あちらのワイズ神に戻るつもりはありませんので、これからもどうぞ宜しく。人界には興味深いものがたくさんあって飽きさせませんね。あれとか」

そう言って、ルギとフィネの方を指さす。

「ああー、そうねー」

「あれは不純異性交遊にあたるのでは！？ 取り締まらなければ」

「野暮なことはやめておきなさい」「

二人に止められて、ソラはしぶしぶと引き下がった。

彼女の視線の先には、付き合いとか付き合いわないとか、結婚しようとかまだ早いとか、そういった会話を飽きずに続ける二人の男女がいたのであった。

ともかく、こうして星の未来を占う舞台は幕を閉じた。

とはいえ、多少の後始末は残っている。

まずは、そう。

あいつのことからかな。

おれはそんなことを考えながら、未来への展望を脳裏に描くのだった。

## 217・星の未来（後書き）

第5章をここまで読んでくださり、ありがとうございます。エピソードなどもう少し続きますので、お付き合いください！

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、**<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひ読んで下さいませ(o\*)。(o)oポッコ**

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobbMIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中!!!

【応援よろしく願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 218・エピローグ／教主ジャルメル・屈辱の永久追放

218・エピローグ／教主ジャルメル・屈辱の永久追放

星の未来は決し、元国教であるワイズ教と、現国教ブリギッテ教は習合することが、古の神と現人神の間で決定した。

それについて、女神イシスの代行者で、大賢者たる俺が公証しよう。力ある者がこういう時に責務を果たすべきと言うのは分かるが、面倒事をしよい込んでいるようで気が向かないがな。仕方あるまい。

だが、この決定に不服を唱える者が一人だけいた。

それは、

「なんで俺がこんなめにあわなければならない！ 離せ！ 離さるか！ 俺が！ 俺こそがこの世で最も尊き存在、ジャルメル〃ギルメイザーであるぞ！ ぬあああああああ！！！！！」

耳を汚すような絶叫が、縛られて、つるし上げられた豚のような男の口からほとばしった。

「教主ジャルメル。もう終わったんだ。お前の権力の基盤たるワイズ教は解体される。これは俺と神々によって決定とする」

「ふ、ふざけるな！ 　ふざけるなあああああ！！！！！」

つるされながら、ジタバタとあがく。

「僕のワイズ教がそんな簡単につぶされてたまるか！　そ、それにだ！……！」

ジャルメルはいやらしく、卑しく嗤うと、

「こ、この僕が誰か分かっているのか。恐れ多くもこの僕はなあ」「にちゃり、と唇を歪めるが、

「王の弟なのだろう？　それがどうした？」

俺はあっけらかんとした様子で言う。

「なあ！？！？！？」

あっさりと俺に言い当てられて、ジャルメルは今度こそ目を瞠って愕然とする。

なんだ、その反応は。

「それくらい、下調べしているのは当たり前だろう？　賢者といちおう言われる身だぞ？」

「ば、馬鹿な……。これは限られた者しかしらぬ、秘密のはず。どうして一介の国王ごとき、成り上がりの貴様ごときが……！」

「お前は本当に無能だったんだなあ、ジャルメル」

「なっ、なんじゃと!？」

俺の言葉に顔を真っ赤にして激憤するジャルメルだが、俺は苦笑しつつ、

「本当のことだ。どういう人脈を築けるのかは、その人物の『格』そのものだ。それくらいは貴族ならばよく知っているだろう。ならば、俺がどういった人脈を持っているか、想像できないのか？」

「なっ、そ、そんな。もしかして……」

「ブリギッテたちに連れてきてもらった。人使いが荒いとまた後ほど小言を言われそうだがな」

俺はそのことに嘆息しつつ、こちらにその男へ合図を送る。その男はゆっくりと近づいてくる。

そして、

「久しぶりよな、ジャルメルよ。いや、弟よ」

「こ、国王……。兄上……」

あえぐような声で、ジャルメルは言った。

そう、ブリギッテたちに急ぎ連れてきてもらった人物とは、何を隠そう、グランハイム国王だったのである。

(続きます)

218・エピソード／教主ジャルメル・屈辱の永久追放（後書き）

第5章をここまで読んでくださり、ありがとうございました。  
エピソードなどもう少し続きますので、お付き合いください！

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、  
＜無料＞試し読みだけでも、ぜひ  
ぜひご一読くださいませ）o\*。ー。）oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!!?」

と思つたら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[<無料>試し読み](#)だけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ(o\*。)。oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail>

/yusyaparty/

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……！？」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 219・エピソード／教主ジャルメル・屈辱の永久追放

219・エピソード／教主ジャルメル・屈辱の永久追放

「あ、兄上！ 聞いて下さい！ 儂は何も悪いことなどしていません！ それをこのアリアケという不敬者が儂をこんな目に！ すぐさま処刑してください」

「……」

「あ、兄上！ さあ、早くこのアリアケを！」

「黙れ！ 痴れ者め！」

「ひっ！？」

国王の威厳ある一喝で、教主は震えあがった。

教主ジャルメルの権威とは、要は国王の弟である、ということに尽きた。だから、様々な貴族が恩恵にあずかろうと、彼を担ぎ上げ、ちやほやとしていたのだ。

だが、その権力の後ろ盾である国王の逆鱗に触れたと分かり、ジャルメルは顔を青ざめさせていた。

「な、何をおっしゃいますか。儂はワイズ教の教主として勤めを立

派に果たして……」

「それがあの孤児院の運営か？」

「なっ、なぜそれを……」

国王は頭痛がするとはかりに、額を押さえると、

「その大賢者が……。いや、中立国オールティのアリアケ王が教えて下さったのだ。まさかそこまで人の道を踏み外していたとは……。大方、ゆくゆくは王にもなるうとしていたか……。あるいは、神にもなるうとしていたか？」

「わ……」

その言葉に、ジャルメルの本性がむき出しになる。

「儂こそがこの世界で一番偉いはずじゃ！ それなのになぜ旧国教ごときの教主におさまらねばならん！ この国も、世界も、神すらも、儂にひれ伏すのが道理のはず！なのに、なのに、なのに！」

そう言うと、ジャルメルは俺に対して怨嗟のこもった凄まじい、恨みがましい視線を送ってきた。

「全てはその男が台無しにした！ もう少しで！ あとちょっとで！ 儂が力を得て、すべてを支配する世界が訪れたというのに！ そ、そうじゃ！ ワイズ神様！ 今からでも遅くはありません！ 儂に神の力を！ 必ずやワイズ神様の望む未来を実現してご覧にいきます！ 人間が！ いいや、儂が力によつて全てを支配する、秩序ある最高の世界です！ そこでは全て儂にひれ伏すのです。差



別も何もありませんね！！！！」

忙しそうに、俺からワイズ神へと欲望の視線を向けた。

しかし、ワイズ神は、

「……………」

何も答えずに目を閉じていた。

「ワ、ワイズ神様！ どうして答えてくださらない！ 今まであれほどの忠誠を尽くして来たのに！！！！」

無様な絶叫だった。それに対して、ワイズ神は瞳をかすかにあける。

「なんだ、まだ終わっていないのか？ 思わず意識の回路を閉じていたぞ」

「案外、おおざっぱな神だな、ワイズは」

「まったく、なれなれしい奴だ、アリアケ。だが許す」

彼女はそう言うってから、ジャルメルへと目をむくと、面倒そうに半眼で、

「汚らわしい人の姿をした獣よ。お前の役割は終わった。その罪に応じた罰を受けるのが、人の世にとり適当であろう」

「なっ！？ 汚らわしい……………獣ですと！？ この儂を見捨てるのですか！？」

「最初からお前には人の負の側面があることは分かっていた。教主の器ではないことも。だが、霊長の歴史が続く今後数千年において、お前のような男が教主になることもある。リズレットやアリアケのような者たちが必ずしも権力の座にいるわけではない。それだけがお前の存在意義であった」

「な、な、な……」

自分の能力には何ら期待を抱かれていなかったことに、ジャルメルはわなわなと震える。

「そして、結論は得た。お前の役割も終わった。そのことだけは大儀であった。完膚なきまでに暴力による統治の不毛さを私に教えてくれた」

彼女はそう言うと、もう一度繰り返す。

「再度、告げよう。お前の役割は終わった。後は人の法に従い、アリアケ王かグランハイム王か、いずれの国の法かは、知らぬが、その裁きを受けよ」

「う、うがあああああああああああああああ！ そんな馬鹿なあ！ 僕は教主ジャルメル！ 尊きワイズ教の教主なのだぞおおおおおおお！ なぜアリアケごときに！ くそおおおおおおお おおー！！」

現状を受け入れられないジャルメルが絶叫した。

裁きであるが、あらかじめグランハイム王に一任すると決めてある。

「黙れ、犯罪者ジャルメルよ。この度の沙汰を言い渡す」

「う、うぐぐぐぐ」

王の命令に、ジャルメルは悔しそうに顔を歪めて、その言葉を聞く。

「ジャルメルの計画は国家転覆に等しく処刑が相当である。だが、王弟であり、教主を処刑したとなれば民の動揺は大きい。ゆえに、終身刑とする。だが快適な暮らしなどできると思っただけ。お前が孤児の子供たちや、信徒たちにした様々な行いは全て白日の下にさらけ出されている。それと同じ生活を一生監獄でするとよい！」

それは事実上の処刑宣言であった。

「そ、そんな。そんな。僕の計画が……。神になるはずが……。世界は僕のものになるはずで……」

「聞くに耐えん。神々よ、そしてアリアケ王よ。手間をかけた。後はこちらで処理しよう」

「いいのか？」

俺の問いに、グランハイム王は苦笑した。

「世界を救ったお前とその仲間たちに、これ以上、こんな小物の相手をしてもらい、時間を奪うわけにはいかぬ。アリアケ王は特にこれから仕事が山積するであろうからな」

王のその言葉に、

「え？ 俺はもうそろそろ解放じゃないのか？」

そつ目を丸くする俺の腕を、後ろからワイズ神とブリギッテが、がしり、と掴んだのだった。

「宗教の習合の段取りについて相談しましょう」

「俺は入る必要ないだろう？」

と、何とか逃れようとするが、

「ダメに決まっています。話がこじれないように、絶対に隣席をお願いします」

ローレイにも後ろから羽交い絞めのように抱き着かれるのであった。

やれやれ、いつになったらゆっくりできるのやら。

俺は苦笑するしかないのであった。

219・エピソード／教主ジャルメル・屈辱の永久追放（後書き）

第5章をここまで読んでくださり、ありがとうございました。  
エピソードなどもう少し続きますので、お付き合いください！

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、  
＜無料＞試し読みだけでも、ぜひ  
ぜひご一読くださいませ）o\*。ー。）oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中！！

【応援よろしく願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 220・エピソード／勇者ピリアの処断

さて、ジャルメルスの処断なども終わり、俺は自分の国への戻ってきた。

とはいえ、実はもう一つ後始末が残っていたのだ。

これは星の未来を担う大賢者としての責務と言うよりかは、国王としての責務となる。

「ア、アリアケ王　このようなむさくるしいところまで遠路はるばる恐れ入ります！」

そうやって衛兵が敬礼をした。そう、ここは王国の牢屋なのである。

「そうかしこまるな。だが職務に励んでいて助かる。これからも頼むな」

「は、はは！　王にそうおっしゃって頂けて、感激であります！　日記に記しておきます！」

「いや、そこまでしなくても……。まあいいか」

俺が普通に部下をねぎらうと、なぜかこういう感動の反応がしばしば返って来るのだ。

それは単に俺が王というだからだと思っていたのだが、

「いえいえー。それが人徳ってやつですよー。このこのー憎いですねー」

と、俺の妻が言っていた。

まあ、彼女が言うのならば、そうなのだろう。

別段、王として、また人として出来ることをしているだけで、大したことはしていないのだがなあ。

そんなことを思いながら、衛兵の案内にしたがって進む。

そして、一つの牢屋の前まできて、立ち止まった。

「行っていいぞ」

「しかし、危険です。先日も暴れ回るために手が付けられない様子で……」

「すまないな。俺の指導が行き届かなかったが故だ。許してくれ」

「な、何をおっしゃいますか、王よ！ むしろ、よくぞこの者をこれまで導いて来られたかと尊敬の念に打ち震えるばかりです。では、私はこれで。何かありましたら、お呼びください」

そう言っつて衛兵は下がった。

さて、

「久しぶりだな、ビビア」



「ア、アリアケ　アリアケなのか」

粗末なベッドで寝ていて気付かなかったらしく、俺が声をかけると  
だみ声を上げながら、牢屋の柵にすがりつくようにして来た。そし  
て、

「お、俺が何をしたってんだ　こんなところに入れられるいわれ  
はねえ　ちくしょう、ちくしょう！　何で勇者の俺が何回も牢屋  
にぶちこまれて臭い飯を食わされなきゃなんねーんだ！　あああ  
あああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！！！！！！」

人間とは思えないほど理性の崩壊したような絶叫を上げた。

「仕方ないだろう？　よりにもよって、人身売買や貴族の買収、恐  
喝などの犯罪行為に手を染め、あまつさえ大逆すらももくろんでい  
た教主ジャルメルの手先となり働いたのだから。しかも勇者である  
お前が、だ」

「ぐ、ぐぎぎ　そ、それはあつ……！！　ぐぎい！　だ、だからっ  
て、終身刑はねえだろおおがあああああああああああああああ  
あ」

やれやれ。俺はまだよく分かっていないようなので、もう少し説明  
を付け足すこととした。

（続きます）

## 220・エピソード／勇者ピリアの処断（後書き）

第5章をここまで読んでくださり、ありがとうございました。  
エピソードなどもう少し続きますので、お付き合いください！

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（お\*。ー。）お\*。こ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobbMIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん

公開中!!!

【応援よろしく願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



「当たり前だろうに」

俺は肩をすくめる。

「ぐっ、ぎっ、がっ、うっ、ぎっぎっぎいいい。くそっ、くそっ。  
ちくしょう。なら、ならせめて！」

ビビアは炯炯とした瞳をして、ニチャリと唇を歪めて、

「勇者パーティーのメンバーである、デリアやプララ、それにエル  
ガーも同じ終身刑にするべきじゃねえのかよ！ ああん　へ、へ  
へへ！　せめてあいつらに思知らせてやらないと気がすまねええ  
え！」

唇をいやらしく歪めた。

が、いやいやいや。

「むしろ、あいつらはお前を止めるために、俺に助力した功績が認  
められてな。それなりの報酬を得ていると思うぞ？　新生勇者パ  
ーティーとか言っつて、お前抜きで冒険してる。お前の作った悪評もう  
まく帳消しにしたみたいで、元気にやつてるみたいだが？」

「ちつくしょおおおおおお！　あいつらめえええええええええ  
えええええええええええええええええええええええええええええ  
ああああああああああああ！！！！　あああああああああああ  
ああああああああああ！！！」

怨嗟の声がどこまでもどこまでも、消えずに木霊する。

目からは滂沱のごとく涙を流し、汚い鼻水が垂れ下がっている。

うーん、因果応報とはいえ、余りにも哀れを誘う……。

「……はあ、やれやれ、まあ、いいか」

「あ”？」

哀れな様子の犯罪者ビビアに対して、俺は王としての言葉を告げることにした。

「犯罪者ビビア・ハルノアよ。お前から勇者の身分をはく奪する。これはグランハイム王国より許可を得ての勅である」

「なあ　俺から全てを取り上げるつもりなのかあああああああ  
あ　勇者の身分さえもおおお　」

「慌てるな」

俺は落ち着き払った声で、目の前の男に申し渡す。

「だが、このたびブリギッテ教とワイズ教の習合が成った。これにて国王の名のもとに恩赦を実施する。犯罪者ビビア・ハルノアよ。お前を改めて『下級勇者』として任命する。その任務はこの世界の危機を救い、人々の安寧を守ることである。いいな？」

「か、下級……」

「ああ、そうだ。しばらくまた俺の膝元で下積みをし、心を鍛え、まっとうな人間になるよう務めるがいい。そして、師である俺に1

MMでもいい、近づくとよう努力をして、少しでも安心させるよう、  
精進するよじに」

「ぐ、ぐきききー！　ぐきききー！」

なぜかビビアは悔しそうな表情で、血涙を流しながら歯ぎしりをす  
る。

しかし、最後には頷き、

「わ、分かりました。お、お、お、お、お、お、お、お、王様。ぐききき  
ききき」

ふむ。どうやら理解してくれたようだ。

出来ない弟子だが、だからといって放り出すつもりはない。

責任をもって、俺の数万分の一でも、役に立つような人間に成長し  
て欲しい。そう願うのだった。

「うむ、期待しているぞ、下級勇者ビビア・ハルノアよ！」

「ふんぎいいいいいいいいいい！！」

俺の威厳ある声とビビアの快諾の音が、牢に響いたのである。

さて、そんな不肖な弟子とのやりとりも終えて、俺は地下牢から出  
た。

空は快晴で、先日まで世界の趨勢を決めるための戦いに身を投じて





俺は半ばあきらめつつ、周囲のマナの量にある確信を抱いていたのだった。

「神代………帰帰」

かつて、この星が宇宙癌に犯される前の、マナを大量に満ちていた時代。

1000年前の世界に飛ばされたことを、俺は直感的に看破したのであった。

（第6章へ続く）

## 221・エピソード／勇者ピリアの処断と神代回帰（後書き）

第5章『人魔同盟学校を作ろう！』編はこれにて完結です！

ここまで読んで下さりありがとうございました！

第6章も間もなく開始しますので、ぜひぜひお楽しみに！！

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひ一読くださいませ](#)（[o\\*。ー。oポッ](#)）

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobbMIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしく願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……！！？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気  
持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

222 ・下級勇者ピリアとパーティー再結成(前書き)

第6章開始です。楽しんでいってください) # ^ . ^ # (



「下級勇者ビビアよ、そんなに驚くな。何があっても動じるなど、一番最初に教えたらう？」

そう言つて、子守をするような気持ちで伝える。

勇者パーティーを導いていた、かつての懐かしい気持ちを思い出しながら。

だが、やはりまだまだ精神的な未熟な下級勇者ビビアは、俺の言葉に怒声を返す。

「う、うるせえ！ レッドドラゴンの群れだぞ！？ お、襲われたらひとたまりもねえ！ お、お前が盾になつてる間に逃げつ……！  
ぐへあつ?!?!?!?」

「腰が抜けていては逃げ出せんぞ。それに、お前の實力では恐らく、大賢者たる俺の支援無しでは、この果ても知れない荒野を抜けるのは至難の業となると思つぞ？」

淡々と事実を告げる。

「ぐ、ぐぎぎぎぎい!?!?」

どうやら分かつてくれたようだ。

悔しそうな表情を浮かべて……どこか憎々し気ではあるが、元々人相が悪い男なので気にすることはないだろう。

それだけ、俺の口から放たれる一つ一つの至言の重要性を痛感して

いる証拠であろう。

俺は微笑みを浮かべて言う。

「理由は分かんが、どうやら俺たちは千年前以上の『神代』かみよへと飛ばされたようだ」

「神代じんだい帰かいと!? そんなバカなことが起こるわけがねえ!? いやだ! いやだ! 下級勇者でもいい! 現代へ返してくれええええ!!! デリア! プララ!!!」

エルガーの名前がないのが切ないが、無視して話を進める。

「お前の言う通り、現代へ戻る方法を探る必要がある。他の賢者パーティーや、元勇者パーティーたち、他のメンバーも飛ばされている可能性もある。だが、先ほどからやってはいるが、俺の探索スキルは今のところ発動していない。本当に来ていないのか、時間差があるのか、理由は分かんがな。というわけで提案だ、下級勇者ビビアよ」

「な、なんだ」

ガクガクと周囲を警戒しながら怯える不出来な弟子ビビアへ、俺は指示する。

「俺とお前で勇者パーティーを再結成する。下級勇者の役目は困った者の救済だ。それはこの時代でも変わらない」

「はあああ!? んなこと一人でやってるよ!? 俺は俺の命が大事なんだ! 他人がどうなるうが知ったことじゃねえ!!!」

彼は絶叫する。しかし、

「自分の命を大事にする姿勢は大事だが、虎穴に入る必要はある。俺がこの時代に呼ばれたからには、神代が俺を呼んだと言っているだろう。俺が神代で何を救う運命なのかは分からんが、困ったことに事態は俺を中心に巡るに違いあるまい。そして、恐らくそこに現代への回帰方法もあるんじゃないか？」

「な、なんでそこまで言い切れるんだよう!？」

ビビアが改めて狼狽しながら叫んだ。

だが、俺は淡々と事実だけを告げる。

「賢者たる俺と、勇者たるお前が揃って同じ場所に召喚されたんだ。この時代を救うために呼ばれたに決まっているだろうが」

その言葉を聞いて、ビビアはキラリと瞳に輝きを取り戻す。

「ほ、ほーん。た、確かにそうだな。勇者が呼ばれるのは世界を救う定めがあるからこそだ。ったく、しょうがねえな、いつも俺に世界は頼りやがる。俺がいねえと、碌ろくに世界は平和にならねえんだからよお。たく、まったく、しょうがねえなあ」

ビビアはなぜか気持ち悪い笑みを浮かべてニヨニヨとし始める。

どうやら世界の救済に必要とされたという話で元気が出たらしい。

俺にとっては日常茶飯事のことだが、彼にとってはめったにない大



仕事なのだろう。

まあ、それで少しでもやる気になってくれるならばありがたい。

気分が変わらないうちに話を進めるとするか。

「では下級勇者ビビアよ。大賢者アリアケとパーティー再結成を行うことを受諾するか？」

「くは、くははははは！　しゃーなーな！　世界を求めるならば、この最強！最高！勇者ビビアの力を貸してやらんでもねえ！　ついてこい！　このへポポーターのアリアケエー！！　しばらくの間なら使ってやるぜ！！　くははははは！！！！！！」

だいぶ調子を取り戻したようだ。

ただ、

「おっと、先ほどのレッドドラゴンの群れが襲って来たようだぞ」

「ひ、ひいいいいいいいい！！！！！！　どこだどこだ！！？」

ああ！　剣が！　剣がない！　くそう、聖剣さえあれば！！！！」

「ああ、そうだったな。ほれ、グランハイム王から預かっていた聖剣ラングリスだ。持っていけ」

「へ！？　せ、聖剣か。えっと、うう、剣一本で戦えるわけがねえ！！！！！！」

「まあ、安心しろ。冗談だ。もう群れは行ってしまった」

「へ？」

聖剣を震えながら構えて上空を警戒するビビアに俺は告げた。

「それくらい緊張感を持つていれば大丈夫だろう。油断大敵、その教えは覚えていたようだな」

「て、てめええええ！ はめやがったなあ！？！？！」

「師として力量を見極めたただけだ。ま、何にせよ、勇者パーティー再結成だ。よろしく頼むぞ？」

「くそがあああ！ 誰がてめえなんかと仲良くするかよお！ いつか後ろから刺してやつからなあ！」

ははは、冗談も言えるとは、元気の良い奴だ。

俺が刺せるならば一人前だが、まあ、そこまで成長するには何千年かかることやら。

まあ、何はともあれ、いきなり放り込まれた異世界同然のこの世界で、これくらい覇気があれば、俺についてくることも出来るだろう。

久しぶりの勇者パーティーだ。

勘を取り戻しながら進むとしようか。

こうして俺は、下級勇者ビビアと『下級勇者パーティー』を再結成し、神代の世界の冒険を開始した。

しかし、事態は俺たちに安穩とした時間を許してはくれない。

「きゃー!?!」

遠くから女性の悲鳴が聞こえて来た。

煙が上がっている様子も遠目に見える。

早速事件が発生したのだ!

## 222・下級勇者ピピアとパーティー再結成（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ）o\*。ー。）oペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 223・フェンリルさんとビビりビビアと大英雄

223・フェンリルさんとビビりビビアと大英雄

襲撃を受けていたのは小さな村だった。

レッドドラゴンは俺たちのいた現代においてもS級モンスターとして恐れられていた。

ゲシユペント・ドラゴンほどではないが、出現すれば王国軍や傭兵、冒険者に緊急招集がかかるレベルだ。

そして、ビビアがビビり散らかしていたのも無理はなく、それが群れであることもあるが、何よりこの千年前の神代しんたいにおいては、その強さは現代の比ではないことが、俺には分かった。

「ひいひいひい！？ 他人のことなんて知るかよ！？ に、逃げるんだよう、アリアケええええ」

ビビアはその臆病さから危険を察知しているようだ。

その判断は一般人としてはとても正しい。

ただ、

「お前は下級勇者だろうに。人を助けるのが仕事だろう、行くぞ！」



「思ったより、破壊されていないな。いや」

俺は遠目にその姿を見る。

「先客がいるようだな」

「ひ、ひいいい！？ レッドドラゴン以外の敵が！？ も、もう無理だあ！ デリアー！ デリアー！」

「いや、敵ではない」

「へ？」

ビビアは顔についた泥を拭いながら、意外そうな顔をする。

一方の俺は彼方に見える、レッドドラゴンと戦う姿を見て微笑みを浮かべた。

「フェンリルか」

「なっ！？」

俺の言葉にビビアの顔がまたしても引きつる。

そして、

「なにいいいいいいいい！？ やっぱり敵じゃねえかあああああああああああ！？」



そんな絶叫を轟かせたのである。

ああ、なるほど。

俺はポンと手を打つ。

ビビアにとってフェンリルは、呪いの洞窟で生死の境をさまようことになったモンスターであり、その際プララを見捨てて逃げたことによって勇者パーティーの人気の失墜のきっかけとなった相手でもある。

更に、その戦いをきっかけとしてパーティーの要である大聖女アリスアの離脱を招き、ついには王国から聖剣ラングリスを取り上げられるに至った。その挽回のチャンスとしてラススミの町の近傍にあるエドコック大森林で発生したワイバーン討伐クエスト（Dランク）をも失敗し、しかも森林を全焼させたことで犯罪者予備軍として収監されたのだった。

ん？

「仲間を見捨てて逃げたのも、その後のクエスト失敗も、全部、自業自得なんだよなあ」

「やめろ！ 思い出させるんじゃない！ また眠れなくなるだろうが！！」

俺の言葉にビビアは耳をふさいで顔をうつむける。

まあ、ビビアにとってトラウマであるとしても、



S級モンスターの群れとの戦闘が、ゼロコンマ数秒後には迫っているのだから。

## 223・フェンリルさんとビビリビビアと大英雄（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ）o\*。ー。）。oペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 224・神代の戦い

### 224・神代の戦い

「助太刀しよう」

「！？ 何者だ！」

突然、現れた俺の姿に、子供姿のフェンリルは咄嗟にカウンターを繰り出す。さすがだな。

しかし、

「いいパンチだな。ふ、大きくなったお前の一撃だったら冷や汗ものだぞ？」

「なっ！？ ドラゴンも屠る私の一撃を！」

彼女は目を見開いた。

だが、俺は微笑みながら言う。

「ドラゴンも一撃か。それは頼もしい。いつもお前には助けられてばかりだ」

「え？」









「ふ、当たり前だろう」

俺は聖杖キルケオンを構えて詠唱を行う。

「俺とフェンリルがいるんだからな。神代かみよであるうが負ける道理などない！」

俺はそう断言しつつ、

「受け取れ！！」

炎攻撃無効

神聖攻撃無効

竜殺し付与

「よっしゃよっしゃ！ そんだけスキルかけりゃ、フェンリルだって負けやしねえだろうよ！！！」

「何を謙遜している、ビビア。武勲を譲ろうとは殊勝だな。だが、今そのような配慮は不要だ。行け！ 勇者としての役割を存分に果たしてこい！」

「はひ？」

腰を抜かして座り込んでいた、観客同然だったビビアの首根っこを腕力強化で掴み上げると、今しもプレスを放出しようとするフェンリルのもとへ投擲する！

「う、うわあああああああああああ！?!?!」

「何をしにきた!?! 邪魔だ!」

突然、フェンリルの眼前に放り投げられたビビアに、フェンリルは激怒する。

だが、

「フェンリル! さっきのスキルはビビアへのものだ!」

「なに!?! そうか! 確かアリアケだったな! なら私にも!」

「心得ている! 受け取れ、幼き聖獣フェンリルよ!」

俺はキルケオンを掲げ、

龍殺し!

無属性付与!

防御無視!

魔力防御無視!

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!  
!?!?!?!?!」

そう、これは神代じんだいの戦い。



「ほげえええええええええええええええええ！？ さ、さ、さ、さん  
つ……！？」

ビビアが絶望の声を上げようとした時である。

「十分だ。感謝するぞ、通りがかりの大賢者アリアケよ！」

彼女はそう言うと、ドラゴンたちと同様に、その口元に魔力を集中させ始める。

その力は規格外。

当然だ。

「俺のスキルでお前の力は100倍にもなっている！ フェンリル  
！ お前の力でレッドドラゴンの群れを殲滅せよ！」

「承<sup>たまわ</sup>つた……！」

ブレスを浴びる下級勇者ビビアが恐慌状態に陥ってから2秒後。

それははた目から見れば、同時にブレスが放出されたように見えたくもしれない。

だが、その結果は一目瞭然であった。

山を蒸発させるほどのブレスの放射合戦。

まさに神代の戦いにふさわしい地形を変えるほどの神話レベルの戦い。これが普通なのだ。

そして、後からブレスを放出したフェンリルの熱線が、次々にブレスを吐くレッドドラゴンを溶かすように貫通し、墜落させた。角度を変えながら、次々とレッドドラゴンを蒸発させていく様子は、やはり神代かみよに相応しい地獄図絵である。

こうして、神代の初戦闘は決着がついたのだった。

「こ、これほどの力を私が発揮できるなんて……」

村を救った英雄フェンリルは信じられないように自分の手の平を見つめていた。

「すべてあなたのおかげなのか？」

ゆっくりと近づいた俺に彼女は気づいて聞いた。

だが、俺は微笑みながら首を横に振る。

「俺は大したことはしていないさ。もともとの君の力のおかげだ。0にいくら掛け算をしても、0だからな。それに、ビビアがレッドドラゴンの熱線を全て防ぐことを嫌がっていれば、君の攻撃の機会は巡ってこなかっただろう。全員の勝利といったところさ」

「いや、このビビア？ とか言う奴は、恐怖で最後は失神していたようだが？」

「戦いに気絶はつきものだ。まあ、師としては、その仲間を守ろう

とする勇敢さがあるのなら、最後までかっこを付けてほしいところなのだがな」

まあ、それがビビアの憎めないところ、か。

俺は生暖かい視線で、気絶して色々な体液を流して失神してしまっているビビアを見下ろす。

「ともかく礼を言う。ありがとう、アリアケ。いや、あなたは恐らく名のある大賢者なのだろう。賢者アリアケに心から例を言う」

「アリアケでいいさ。あと、もう一度言うがビビアの協力もあって……」

「だが、気になることがある」

ビビアの話を切り上げるようにして、彼女は厳しい目で俺の方を見た。

「どうして私の事を知っていた？ それに勇者とはなんだ？」

ふむ、さてどう答えたものか。

この神代回帰が何者の思惑で、誰が戻ってきているのか、いないのか。

そのあたりもまだ分からないことが多い。

俺は彼女の質問に、やや頭を巡らせるのであった。





「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 225・滅亡種人類王国

### 225・滅亡種人類王国

さて、俺や少女フェンリルが倒したレッドドラゴンたちの死骸が村中に散乱しているわけだが、戻ってきた村人たちは喝采を上げて喜んだ。どうやら貴重な食糧や素材になるらしい。

たくましくて何よりだな。

特にまだ腰が抜けて立てないビビアには、村人のたくましさから学ぶべきものがあるう。

「見る、ビビア。お前より力もない村人たちが、こんなにもたくましく生きている。下級勇者ビビアも腰を抜かしては格好悪いぞ」

「う、うるせええええ！ 腰なんか抜かしてねえわ！ くそがあ！」

彼は聖剣ラングリスを大地に突き立てながら、ガクガクと腰を痙攣させながらだが、立ち上がった。

「かつこわるいが、立派だぞ、ビビア。やはり勇者はそうでなければな」

「かつこわるくねえ！ 俺はイケてる！ 終始かつこいい！」

まあ自己評価をどうしようが、それは自分の勝手だ。

それよりも確認すべきことを聞くべきだろう。

「すまない、フェンリル。質問をもらっていたのに話が中断していったな。勇者と言うのはこのビビアの職業だ。世界を救う者に与えられる称号のようなものだ。君のことは風聞などで、色々聞いて知っている」

いきなり未来から来た、と話しては、かえって胡散臭がられると思つて、ぼかして答えた。

「そうか。だが、今の話であれば、その腰を振っている男よりも私にはあなたの方が勇者に相応しいように思えたが？」

「ははは。俺は後衛が専門でな。そのような大層な肩書きには相応しくないさ」

「もし勇者という職業が人格を問うならば、やはりあなたが、と思わざるを得ないが、まあいい」

改めて彼女を見ると、やはりフェンリルが人化したときの面影が多分にあった。

一方で、明確に違うところもある。

まず、自分のことを『私』という。大人のフェンリルは『我』と言っていた。

また髪の毛は大人の時と同様真っ白だが、ショートカットにしている、いかにも戦い易さを重視しているように見える。

何よりも性格だ。大人の彼女は妖艶と言って良い雰囲気を常に発している女性だったが、目の前の少女はまだ10歳程度にしか見えず、口調も無骨で端的である。

「それより聞きたいんだが、俺を見た時、人間がいることに酷く驚いていたように見えた。それにこの村も獣人たちの村のようだ。どうしてなんだ？」

レッドドラゴンの素材を回収しているのは、いずれも犬耳や尻尾をはやした獣人たちで、人の姿はない。

「疑問なのはこちらと同じだ。繰り返すが、どうして人間がこんなところにいる？」

彼女の言葉に、やっと腰の痙攣がおさまったビビアが唾を飛ばしながら言った。

「はあ！？ 俺たちがどこにしようが勝手だろうが！ それとも何かあ！？ ここにいちやいけない理由でもあんのかあ！？ ああん！？」

フエンリルはジトつとした目で、ビビアを見て、

「私は無礼な者には容赦はしないタイプだ。お前は私の胃の腑に収まることを渴望しているのか？」

「ひ、ひい！？ ば、馬鹿が！ お前みたいなチビに俺を呑み込めるほどでかい狼になれるわけがねえだろうがよう！？」

「ふむ、各地で戦っているせいか、私が聖獣であることは風聞にて

知っていたようだ、が、しかし、その力についてはあまり浸透していないらしい」

彼女はそう言うと、瞬時にその体躯を変身させていく。

バリバリという肉が膨れ上がり、口蓋が裂けて鋭い牙が映えていく。体毛は象徴的な白から神秘的なブルーの美しい光沢をした毛並が生える。

1000年後の頃よりも少し小さいかもしれないが、聖獣の持つ威容は、人間に本能的な恐怖を覚えさせるのに十分だ。

「あわわわわわ！ ブクブクブクブク……」

「なんだ？ 狼の姿になっただけで気絶したぞ、この勇者とやらは？」

「トラウマが刺激されたんだだろう。いつか克服してくれると師としては期待している」

俺はそう言っただけで彼女に向き直る。

俺はどちらかと言えば彼女が本来の姿になっているときも好きだ。ブルーの毛並みが美しく、しばしばその毛並みを枕に眠らせてくれる。俺のような若輩者にアドバイスをくれる存在として、とても信頼もしていたので、どうしても自然と彼女に頼るような言動も多くなったものだ。アリシアには時折嫉妬で嫌味を言われたりもしたが。

「ふーん、私よりフェンリルさんなんだ。ふーんふーん、ふーんだ



「そうだ。星の女神は眠りについた。宇宙からやってきた化け物も相打ちでダメージを負っている。しかし、こうして日に日にモンスタアの襲撃は強まっている。情弱な人類種はほぼ駆逐されて、一国を残す状態だ」

「王の名前は？」

俺の質問に、フェンリルは答えた。

「冥王ナイア女王。彼女が一人で滅亡種人類の最終防衛ラインを『クルーシユチャ』国で堅守している」

## 225・滅亡種人類王国（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）お\*。こッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】



「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

226・冥王ナイア

226・冥王ナイア

「ここが滅亡種人類王国クルーシュチャカ」

「凄まじい壁の高さだな！　へ、へへへ。これならあのレッドドラゴンたちだっておいそれと入ってはこれねえだろう。ひへ、ひへへ」

「そうでもない。というか、普通に入ってくる。バリスタ隊や対空迎撃部隊が対応はするがな」

「ひいひいひいひい！　戻りたい！　現代に戻ってゆっくり眠りてえよう！」

「アリアケとやら。このビビアというのは本当に連れて来て良かったのか？　明らかにお前の足手まといにしか思えないんだが？」

俺はその言葉に微笑みつつ、

「俺に追いつこうと必死にしがみついてくる弟子を振りほどいたりはしないさ。それに出来ない子ほど可愛いという言葉もある」

「ふむ、なるほど、出来の悪い子供か！　なるほど、それなら理解できる。お前は優しいのだな、アリアケ」

「ざっけんな！　誰がてめえの弟子だあああああああ！」

ビビアがたちまち激高する。フェンリルは眉根をしかめて、

「とはいえ、こうもうるさいとかなわんな。少し黙らせるか」

「ひ！ ひい！？ お、お助けをおおおお！？」

フェンリルにトラウマのあるビビアはたちまち腰を抜かして後ずさる。

「なんでこいつは私に対してこんなに及び腰なんだ？ 何かしたか？」

「過去でお前と似た相手に散々やられてな」

「なるほど、戦いの古傷か。名誉の負傷といったところか。だが、それに怯えてばかりでは前には進めんど、下級勇者ビビア」

「ぐぎぎ！ ぐぎぎぎぎぎいいいいい！」

実際は名誉の負傷どころか、呪いの洞窟でのクエストの失敗によって、勇者パーティーの評判は以後下降の一途をたどるのだが、それは過去のフェンリルには関係のないことだろう。

そんなよまやま話をしていると、俺たちはフェンリルに案内されるまま目的地に着いた。

「滅亡種人類王国クルーシュチャにおける中心。冥王ナイア様のいらっしゃる宮殿だ。粗相のないようにな、特に下級勇者よ。漏らしたりしたら首を刎ねるぞ」





いきなり現れた正体不明の男が、よりもよって玉座の間で失禁すれば、敵味方問わず斬首刑だろう。

味方だと説得しても意味がない。

失禁だけはしなと思っていたが、俺の認識が間違いだったようだ。まだまだ俺もビビアへの評価が甘い。

と、そんな会話やら猛省やらをしていると、フェンリルが口を開いた。

「すみません、ナイア様。この者たちは獣人たちの村を救うのを手伝ってくれました。正体はよく分かってはいいのですが、以前ナイア様が正体不明の旅人をもし見つけたら連れて来いと言っていたので案内したのですが……」

「うむ！ 星見ほしみがそう言っていたからな！ 『7人の英雄』が現れると！ そして人類滅亡を回避する重要なキーパーソンっぽい！ とのことなのでな！ であるが！」

ドン！！！！ と鎌を地面に置くが、それだけで、レンガの床がぐだけた。

「まじでこやつがそうなんじゃろうか？ 我が星見を疑いたくはないが、ちよっと冥王的に信じたくないみたいな感じになってるぞ！」

「はあ、そうですね。ただ、こちらのアリアケ殿は素晴らしい力を持っていきますので問題ないかと。そのビビアとかいう男はアリアケ殿の弟子だそうです」

「そういうことか。だが弟子は選んだ方がいいぞ、アリアケよ！」

「お言葉痛み入ります。女王陛下」

「ナイアで良い！ うむ、だいたい分かったし、我が鎌を受け止めたのだから、お主について文句はない！ ビビアについては保留にしておくが、とりあえず雑巾で床を拭かせたい」

「ええ、自分のことは自分でするように教えているので大丈夫だと思いません、ナイア女王」

「うむ！ なら良し！ でだ、アリアケよ。お主らには積もる話もあるし、そなたらも色々話を聞きたいであろう。だが、見ての通り人類は滅亡しかけておつてな、ちよつと我の手が止まると、人類の息の根が止まるのだ。しばし待てるか？」

「もちろんです」

「ちなみに、そなたも王の風格があるが、あっているか？」

「いちおう王もやっていますが、俺のこともアリアケでいいですよ」

「そうか、アリアケ王よ。だが、我は余り他人行儀なのは好まぬ！ ということで好き勝手にアリアケと呼ぶ！ 大儀であった！ ちよつと待っていてくれ！ フェンリルも大儀であった！ 帰って来て早々ですまぬが、アリアケたちをもてなしておいてくれるぬか？ ああ、それにしても、あそこの獣人の村もそろそろ厳しそうよな。腐ったドラゴンがああも跋扈してはなあ！」

腐ったドラゴン？

レッドドラゴンではなかったのか？

と、そんなことを考えているうちに、既に冥王ナイアは「では、またあとでな！ アリアケ！」と言いながら、玉座へと戻って行った。行列をつくる官吏たちは2倍に増えている。

「とりあえず泊まる場所を確保する必要があるだろう。ナイア様がおっしゃったように細かい話はまた後でしょう。長旅だったのだから？ 疲れをいやすが良い」

「いや、その前に」

「？」

俺は彼女の言葉をさえぎって言った。

「ビビアを起こして床を掃除させてから行くとしよう」

「……そうだったな。まったく、面倒だな。頭からかぶりついてやるのか、ブツブツ」

フェンリルの面倒そうなばやきが、俺の耳朵を打ったのだった。

こうして下級勇者パーティーは、ひとまず滅亡種人類王国『クルーシユチャ』の冥王ナイア女王と、無事謁見<sup>物理</sup>をすることが出来たのだった。



## 226・冥王ナリア（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）。お\*。こッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 227・冥王からのお願いごと

227・冥王からのお願いごと

「ここがお前たちの仮住まいとなる」

フェンリルが案内してくれたのは、それなりの広さのレンガ造りの家だった。

清掃も行き届いていて、ありがたい。

食べ物もフルーツなどが置かれている。見たことがない形状で、リングに見えるが少し色合いが違う。紫色だ。後で食べてみよう。

ちなみに、ビビアは後で来る。今は自分の不始末の処理をしていることだろう。

「食事は係りの者が一日2回運んでくるから、それを食べてもらえばいい。あと、これは当座の金だ。過不足あったらこれで賄え」

「ありがとう。ビビアの分は……」

「あいつに渡せば即座に使い果たしてしまいそうだ。お前に渡しておく」

「ははは、あいつもそこまで馬鹿じゃないさ」

「ああ、うん……」

フェンリルが何か言いたそうな表情をしたが、言葉を飲み込むようにした。

「ところで、ナイアとはいつ話せるんだろう？」

「呼び捨てとは無礼な、と言いたいところだったが、お前も王なのだったか。ナイア様も許可していたし、なら問題ないか。うん、ナイア様は忙しいからな。数日以内には時間を確保するよう努められるかと思うが……」

「その通り！ 我は忙しい！ だが、時間は作るものである！ 今ここに満を持して冥王ナイアちゃん登場！ である！」

ババン！ という音が聞こえてきそうな勢いで、扉が開け放たれた。

そこにいたのは、相変わらず長い深紅の髪と瞳が特徴的な冥王ナイアであった。

小さいが、何となく威厳がある。身長の上2倍以上ある大鎌は剣呑の上ないが。

腰に手を当てるポーズがよく似合っている。

そして、フェンリルはあちゃーという顔をしていた。

「ナイア様、公務はどうされたのでしょうか？」

「休暇である！ 我だって休暇が欲しい！ 何連続勤務か！ ワー

クライフバランスをなんと心得るか！」

「人類滅亡のカウントダウン中なので仕方ないかと」

「冗談である。人類滅亡に際して、そこなアリアケと話すことは優先順位の最上位というだけだ。ついてくるが良い！」

俺は見慣れないリンゴに似た食べ物をかじりながら、返事をする。

「どこに行くんだ？」

「むっふっふー。い・い・と・こ・ろ」

ナイアが色っぽさを出そうとして、しかし、小さいので色っぽさが全く感じられない回答を寄越した。

「って、酒盛りじゃないか」

「うむ、人の作り出した文化の極みであるな！ 素晴らしい！ 我を虜にするなあ、この星の嘗みは！ このエールは！ ぷはあ！」

「大げさな。それにしても、乾杯もせず、もう飲んでるのか、やれやれ。ぷはあ」

「そなたも飲んでいるではないか、わっはっはっは！ ういやつよ！……！」

歩いて5分くらいの場所にある酒場いきなり入ると、周囲は騒然

とした……と言いたいところだが、最初ざわついたものの、周囲の人間たちは大いに盛り上がった。

「どうやら、よく来るらしい。」

「王様が市井に顔を良く出すのは珍しいなあ」

「そうなのか？ 我はそんなこと考えたこともなかったぞ？」

「少しは考える」

と、言いたいところだが、俺も似たような口なので、人のことは言えない。

「それになあ、アリアケ。小難しい話をするときに辛気臭い感じにするのはどうかと我は思う。楽しくやろうではないか。せつかくの終末であるぞ？ レアではないか？ まあ、そなたのいた未来でも終末だったらしいが、そなたが世界を救ったのであるろう？」

いきなり核心的な話をするので、仕方なくエールを呷<sup>あひ</sup>る手を止めた。

「なぜ知って……」

そのことを、と聞こうとした時であった。

「なんでそのことを知ってやがる！？ この胡散臭いガキがあああああああああ……！！！！」

バーンと扉が乱暴に開かれて、ビビアが入ってきた。



フェンリルはエールを再び飲み始める。

「ほう、あの下級勇者とやらは玉座の間で粗相をしたのか？」

「なかなか大物だな」

「よく首と胴体がつながってるもんだ。幸運なしよんべんたれ勇者  
ビビアか、わははははー！」

「ぐぎ！？　ぐぎぎぎぎぎぎぎー！！」

さて、周囲で飲んでる者たちも酒が入って楽しそうにしているが、  
ビビアも歯ぎしりはしているものの静かになった。

話を元に戻す。

「とりあえずビビアの言った通りだ。どうして俺たちが未来からや  
つてきたことを知っているんだ？」

「うむ。そなたから言つと神代である今は、マナの量も多い。ゆえ  
に予知、とはいかぬが、星見をする能力者などもいる。それゆえに  
ある程度、未来の姿が分かったりするのだ」

その言葉に、フェンリルはグラスを置いて補足する。

「あなたたちのような旅人が突如現れることも星見の者が言ってい  
たらしい。私はあつたことがないがナイア様からそう伺っていた。  
最終的には7人の旅人《英雄》が現れる、と」

「一つ確認なんだが」



俺は端的に聞く。

「ここは実際に俺のいた世界につながる過去、ということでもいいのか？ 例えはだが、ここで起こったことは未来を変えることにつながるんだらうか？」

「当然である」

ナイアは即答した。

「世界は一つである。未来も過去も変えることが可能である。要は未来は可変である。この神代で人類が滅亡すれば、未来の人類も滅亡することになるぞ」

「あっさり言うな」

「わははは！ 世界の危機！ 滅亡の危機！ いつものことである！ 良い酒の肴さかなである。うむ、旨い！！」

「ひいひいひいひいひい、世界が！ 世界が滅ぶなんて！？ し、信じねえぞ！ 俺は信じねえ！ せつかく俺が邪神を倒したってのにいいいい！？」

「わっはっはっは！ うむうむ、下級勇者おねしょビビアも良い反応である！ 酒も飲む！ 世界も救う！ 両方したら万事OKである！」

「うおおおおお！ デリア！ プララ！ 戻りたい！ 現代に戻りたいいいいい！！」

もうおねしょビビアのあだ名は諦めたようだな。

「そうか。まあ未来に俺を送ることが出来るなら、過去に戻すことも出来るだろうとは思っていたが、まさか神代とはなあ。ところで、この時代の俺はどうなったんだ？」

「うむ、既に星神イシスと宇宙癌ニクス・タルタロスは痛み分けを喫して、眠りと休息についた！ 大地の3割は海底に沈んでおる！」

「ちょ、ちょっと待てよ。邪神が休眠してるなら、この有様は何なんだよ！？ 人類が滅亡するほどの敵がせめて来てんだろ！？」

「うむ！ 噂によれば『魔王』？ とか言つのが出たみたいだな。モンスターを操って人間を襲撃しているのだ」

「それは本当か？」

「うむ？ 何か疑問でもあるのか、アリアケよ」

「いや、この時代の魔王はモンスターを操るのか、と思ったただけだ」

俺の時代の魔王リスキス・エルゲージメントは、そういう能力はなかったからな。どちらかと言えば、そういうのは宇宙癌ニクスの領分だった。

「ふむ、未来の魔王は違ふのかもしれないな。あのレッドドラゴンはいヴの子という因子を埋め込まれて操られておる。統率が取れていて厄介だ。他にも色々と厄介な敵が多い。というわけで、アリアケとそのお供ビビアに頼みがある！」



「そうか！ うむ、頼んだぞ、下級勇者ビビアと、その保護者アリアケよ！ ……そして、聖獣フェンリルにも命ずる！」

「はい！」

フェンリルがグラスを置いて頷いた。

それにしても未来とは随分雰囲気が違うな、今更だが。

「お前はアリアケ達のパーティーに一時的に加入して、その戦力となるがよい！」

「はい！ 分かりました！」

「うむ！ 今日は良い日だ！ 計画が進むのは気持ちが良い！ わっはっは！ 店主！ 我の奢りである、皆の者、大いに呑むが良い！ ……！」

その言葉に、

「おおおおおおおおおおお！ ……！」

「王様さいごー！」

「滅亡するまで楽しく生きてやるぜー！ ……！」

周りの酔客たちが大声で歓声を上げた。

「ふ、追い詰められても人類と言うのはこつも明るく振る舞えるものか」

俺は微笑む。

「うむ、だから我は人間が好きだぞ、アリアケ」

「そうか」

俺は彼女の言葉に頷きながら、注がれたエールを飲み干すのであった。

こうして、俺たち下級勇者パーティー一行は、神代救世のための旅に出ることになったのである。

## 227・冥王からのお願いごと（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）。お\*。こ\*。ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビア、フェンリルたちはこの後一体どうなるのっ  
……!?!」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気  
持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 228 魔王イヴステイル討伐戦線

228 魔王イヴステイル討伐戦線

さて、酒盛りをした翌朝。

玉座の間にて、俺たちは詳しい情報を冥王ナイアより直々に聞いていた。

「魔王の名は、魔王イヴステイルと言う。そやつを倒せば操られたモンスターどもの襲撃も収まるはずである！」

「場所も分かっているのか？」

「無論である！」

えっへん、といった風にナイアが鼻を高くした。

「はあああああああああ！？ 場所も分かかってんなら、てめえが行けばいいだろうが！ わざわざ勇者ビビア様が行くまでもねえ！  
！！！」

「うむ、おねしょ太郎よ、それも一理ある」

「誰がおねしょ太郎だ！ 俺のあれは心の汗だと何度言えば理解しやがる！ おおおおおん！！！！！！？？？？」



「ビビアよ、無礼な口をきくなら、むしゃむしゃするぞ?」

「ひいひいひい!?!」

フェンリルのドスの聞いた声に、ビビアが震えあがった。

幸い再失禁はしなかったので、周囲の官吏がホツとする。

「まあ、とはいえ、おねしょ太郎の言葉は確かに道理ではある。ナイア力なら倒せるかもしれないと思うのは、庶民感覚としては道理だしな」

俺の言葉に口をパクパクとするビビアは、震えているが何か抗弁しているようだが、とりあえずスルーする。

「うむ、アリアケよ、その通りである。だが、我がもし敗北したらどうする? 滅亡種人類王国が本当に滅亡してしまうであろう? そんな1か0のような賭けをするわけにはいかぬ」

「な、なら、俺たちなら死んでもいいってのかよう?!!」

ペペペペ! と何とか復活したビビアが唾を飛ばした。

どこまでいっても、汚さから離れられない星の元にも生まれたのかもしれないなあ。

自然と不出来な弟子へ憐憫の情がわく。

「ふむ、その点ならば大丈夫であろう! そなたらは負けぬ! な

ぜなら、そなたらは未来から来た選ばれた戦士。運命と誉を一身に受ける者なのだから」

そう力強く深紅の女王は言う。

その言葉に、たちまちビビアはニヤリと唇を歪ませて、

「ぐひひひ！ 確かにそうだ！ わざわざ神代という時代が俺の力を求めて召喚したんだからなあ！ どうして俺が負けることがあるだろうか？ ぐひ！ いや、ない！」

たちまち上機嫌になった。

最近はず屋に閉じ込められたり、石を投げられたり、聖剣を没収されたりしていたので、ストレートな称賛に気をよくしたのだろうなあ。

「まあ、リーダーのやる気が出たようで何よりだ。それで、その場所と言うのは？」

うむ！ と頷いてナイアはその場所の名を言う。

「『呪いの洞窟』と言われる場所である」

「はひ？」

ビビアの間抜けな声が聞こえた。

ふむ、どこかで聞いたことのあるダンジョン名だな。



俺は彼に弱体化のスキルを使用して抵抗できないようにした。

そして、勇者パーティーが未来において瓦解する始まりとなった地。『呪いの洞窟』へと、鼻水と涙を流しながら嫌がる下級勇者ビビアと、トラウマの根源であるところのフェンリルを連れて、魔王討伐の旅へと出発したのである。

幸いながら、かのダンジョンのマップは、最優のポーターである俺の頭の中には、当然のごとく入っている。

## 228・魔王イヴステイル討伐戦線（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）お\*コミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 229 .ポーター・アリアケ無双

229 .ポーター・アリアケ無双

「おい！ アリアケ！ ここはさっきも通ったじゃねえか！ ったく、本当にてめえはへボだなあ！」

呪いの洞窟35階層に、ビビアのだみ声が響いた。

俺は苦笑しながら、実際2度目のルートを通る。

いちおう、色々と事前に説明はしたのだが、まあ戦闘に目が向いているといったところなのだろう。

だが、俺のその考えは甘かったらしく、下級勇者パーティーに臨時加入していたフェンリルが淡々と指摘した。

「下級勇者よ、お前は何を言っている。ここは2周すること初めて地下への階段があらわれるギミックだ。アリアケ……いや、アリアケ殿のしていることは信じられないくらい高度なことなのだぞ？」

「大したことはない。それにこのダンジョンは二度目でな」

「30階層以降はダンジョンの形状が変化する。謙遜することはない」





2周したところで、『ガゴン』と、壁が崩れたような音がした。

「よし、次の階層への階段が現れているはずだ。ああ、あそこだな。物陰に隠れて見えにくいが……」

「明かりもほとんど全域を照らしているから、確認も容易なのか。凄いな……」

「はあ！？ ダンジョンを明るくしてるくらい大したことねえ！」

「ああ、その通りだ」

「いや、ダンジョンは魔王が作り出したモンスターの1種だと言われている。ゆえに、全域を照らすことは不可能に近い。それを簡単にやっているアリアケ殿は、奇跡を起こしているようなものだ」

「大げさな奴だなあ」

俺は苦笑する。

「ちなみに、どうやってるんだ？」

「本来、魔法使いがいれば 魔力貯蔵 といったスキルで、魔力量を大幅にアップさせる。だが、今回は魔法使いがないからな。俺が 暗視 着色 幻視 という複合スキルで対応している。だから実際に見えているわけではない」

「はあ！？ 意味が分からねえ！？ 見えてないわけがねえだろうが！ 現に俺のハンサムな表情が聖剣に映ってるんだからなあ！」

キラリと、聖剣の刃にビビアが歯を見せて笑みを浮かべた。

ふう、とフェンリルが嘆息しつつ、

「その奇妙な表情が何のつもりかは知らんが……。アリアケ殿が言っているのは、元の色はほぼ真つ黒ということだ。だが、それに色をつけてくれるスキルを使用して、我々に見せてくれているということだろう」

「元々は絵描きが使うスキルなんだがな」

「変なスキル使うんじゃないやねえよ!!」

「いや、こうして役に立っているのだから凄いことだ……。本来戦闘とは無関係なスキルさえ、難なく応用してしまう。つまり、発想力が桁違いなのだろう。さすがアリアケ殿だ」

「はあ!? 偶然うまくいってるだけだろうが! それにすぐ俺の力を思い知ることになっ……!!」

スキルに関する情報交換をしながら、地下への階段へビビアが先頭に立って進もうとする。

俺のナビゲートは安全確保を優先しているため、進みは遅めだ。ゆえに、戦士の血が騒いだビビアが血気にはやったのかもしれない。

それはしかし、集中力の欠如という最もおかしてはならない行為であった。

「気を付ける! ビビア! モンスターが出るかもしれん!」

「分かってるっての！ 次の階層からモンスターが更に強くなってる可能性くらい、俺だって理解して……！」

「そうじゃない！ 先ほど壁につけておいたナビゲート用の傷跡きずあとがない！ この周囲一帯が罠の可能性がある！」

「え……？ ぐへあ!？」

『ザン!』

骸骨の騎士たちがワラワラと湧き出してきた。

俺のいた現代であれば、大した敵ではない。せいぜい、B級モンスターで、俺の支援を受けたビビアなら負けることはないはずだ。

だが、

「魔王イヴステイルの因子を受けたモンスターだ、一体一体がA級に匹敵する強さを持っている！ 油断するなよ！」

フェンリルが叫んだ。そして、一方のビビアだが……、

「ふう、助かったなビビア。よくやってくれたフェンリル」

「別にアリアケ殿のためじゃないし」

「ひいひい、いでえええええよおおおおお……!!!!!!」

フェンリルの咄嗟に蹴り飛ばされたことによって、ビビアは反対側





俺の返事に、彼女はなぜか呆れた表情を浮かべてから、言葉を続けた。

「だが、それにしても奴の、あの死を恐れない態度は凄いな」

「ああ、そうだな」

俺は頷く。

ビビアの戦い方は本当にぎりぎりの戦いだ。少しでもミスをすれば、確実に致命傷を受ける。

と、ビビアが首の皮一枚の距離で、相手の斬撃を回避した。

思わず彼は悪態をつく。

「くそがあ！ あぶねえ！ まあ、最悪蘇生してもらえばいいんだけどな！ くひあー！」

ん？

俺は違和感を覚えて首を傾げる。

ああ、そうか。

ポンと俺は手を打った。

そして、大声で告げる。

「おーい、ビビア！」

「っだよ、アリアケ！ 今は戦闘中だ！ 話かけんじゃねえ！ てめえは、馬鹿みてーに、俺の活躍を見守ってりゃいいんだよう！！」

「まあ、それはそうなんだが……」

戦闘中に、前衛の集中力を途切れさせるのは悪手以外の何物でもない。

だが、これは多分、伝えておかないといけないのではないかと思ひ、仕方なく続けた。

正しい情報の取得は、勝利条件の重要なファクターだ。

「すまない！ 一つだけだ。これだけは伝えておきたい！」

「だよ！ なら早く言え！ おらあ！ 最強勇者、ビビア・ハルノア様の通りだあああああああ！！ はっはー！！！！！」

意気軒昂、鎧袖一触といった感じのビビアに俺は伝えた。

「アリシアがいないから、蘇生魔術は使えないぞ。死んだら終わりだ。そこらへん気を付けてな」

「はーっはっはっは！ わかってるわかってる！ まあ、ミスっても生き返って……。ん？ ミスったら生き……。あれ？」

突然、ビビアの動きが止まった。





フェンリルは言う。

だが、俺は静かに首を横に振り、

「ビビアは歴戦の勇者だ。今更その程度のことですら腰を抜かすはずがない。そんな奴はそもそも勇者とは言えない」

「そうかなぁ。アリアケ殿はその、奴……と言うか幼馴染だったか？ ……への評価だけが、甘すぎるような……。まあ今はそんなこと言っている場合ではないか！」

フェンリルはそう言って、

「私にも支援スキルを！ アリアケ殿！」

その言葉に俺はすぐに応じた。

勇者ビビアの数秒後の死を回避するのだ！

## 229 ポーター・アリアケ無双（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）お\*コミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。





「「「「ぎいいいいいいいいいいいいいい！！！！  
！？！？」」」」

魔力を爪にこめてたたきつけて斬撃と共に大爆発を起こす技だ！

集中していた骸骨騎士たちが吹き飛ぶ。

ついでに、

「あんぎゃあああああああああああ！！！！！！？」

ビビアも同時に吹き飛ばされているが、

無敵付与！

彼にだけは吹き飛ばされる寸前にスキルを使用して即死を回避する！

「アリアケ殿！」

「ああ」

俺と彼女が刹那にアイコンタクトで意思疎通を行う。

まるで何十年も一緒に戦ってきた戦友のような動きに、俺は戦い易さを感じる。

まるで、賢者パーティーで戦っているときのような安心感だ。

勇者パーティーの場合は、逆に緊張感が保てて、人を育てている充

実感があるのだがな。

さて、フェンリルの意図を汲んで、俺は一瞬にして、複数のスキルを当然のように行使する。

「片手剣装備    アンデッド攻撃力アップ    剣攻撃回避    力  
ウンター」

「さすが、ポーター……。いや、賢者アリアケ殿だ！」

フェンリルは倒した骸骨騎士から剣を奪うと、それを左手に装備して戦う。

リーチを確保しつつ、右手では先ほどの爪を利用した攻撃を繰り返している。

キン！    ザシユ！

ガギン！    ザン！

ひらり！    ズシヤ！

リーチのある剣で、骸骨騎士の攻撃を弾くと、そのカウンター攻撃として爪による斬撃を喰らわせていく。

まるで剣舞を見ているような華麗な動きで、骸骨騎士は翻弄されるばかりだ。攻撃は弾かれ、かわされ、その都度、骸骨騎士の数は減って行く。

その上、俺のスキルによって、対アンデッドへの攻撃力は尋常では

ないレベルで上昇している。

A級モンスターにも及ぶ敵を、まるで赤子のようにひねる俺たちの姿は、はたから見れば神話のように語られるものかもしれない。

「ぐ、ぐごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

果たして、最後の一匹が起死回生の一撃とばかりに、自身の得物を投擲した。

それは、他の骸骨騎士の仲間が切り裂かれた身体を使った死角からの攻撃である。

しかし、

「悪くない攻撃だな」

「ぎいいいい！？」

骸骨騎士に意思があるのかどうかは分からない。だが、その瞬間確実に骸骨騎士に恐怖が走ったように見えた。

不意打ちで投擲したはずの剣を、フェンリルは見ることにせず柄の部分を掴むと、その勢いそのまま遠心力を利用して、その残り一体の骸骨騎士へと投げ返したのだった。

無論、そんな一撃を躲せるはずもない。

骸骨騎士は眉間の部分にその一撃を受けると、頭部を爆散させて、その場にガシャリと崩れ落ちたのだった。



「さすがフェンリルだ。素晴らしい攻撃だったな」

そう心からの称賛を送る。

だが、なぜかフェンリルは不満そうにこちらを見た。

「どうした？」

俺は不思議に思って聞く。

すると、

「私の勝利ではない。私とお前、二人の勝利だ。間違えるな！」

「ん？ ああ、そうだな？」

どうやら義理堅い性格のようだ。

そのあたりは未来と変わっていないのだな。

そう思って、思わず微笑む。

と二三秒、

「あれ？ ビビアはどうした？」

俺はきよるきよるとした。どこにも姿が見当たらなかったからだ。

「奴なら」こんなところにいられるか！ 俺は先に下の階層で待た

せてもらっぞぞ!』と言って、一足先に戦場を勝手に離脱したようだが?」

「そうなのか。先行して単独での威力偵察というわけか。なかなか剛毅だな。だが、命の危険を伴うタフな任務になる。後を追うとしよう」

俺はそう言って、杖をしまう。

すると、

「やれやれ。お前はそこだけがズレているんなあ、アリアケ殿よ」  
なぜか深々とフェンリルに嘆息されてしまったのだった。

俺はよく分からずに思わず首を傾げた。

ともかく、こうして第35階層を俺たちは無事に突破したのである。

## 230・共同戦線・阿吽の呼吸（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）お\*コミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



「ひ、ひいいい……」

ビビアの悲鳴が徐々に小さくなっていった。

やれやれ。

「まあ、正しく恐れること、というのは戦士として必要な資質だ。成長しているな、ビビア」

そう言って、彼の肩をポンと叩いた。

「成長の定義が広すぎないか、アリアケ殿よ……」

一方のフェンリルは、なぜか俺にまで呆れた声をかけた後、額に指をあてながら首を横に振る。

ううむ、なぜだ。

まあ、それはともかく。

「単独威力偵察をしてくれたおかげで、36階層のモンスターは一网打尽にすることが出来た。この調子で行こう」

「そうだな」

俺とフェンリルは頷き合う。

俺たちの後ろには、鎧袖一触で倒した敵たちの死骸の群れが散乱している。

「本当に凄いな、アリアケ殿は……」

フェンリルが突然言う。

奥ゆかしい意見に俺は苦笑する。

「ははは、フェンリルが凄いだけだ。俺の力を存分に發揮してくれている。未来のお前はもつと凄かったがな」

「そうなのか。あまり聞かぬようにしていたが、また時間のある時にでも聞かせてもらおうか。私が、その、将来アリアケ殿とどんな関係になっているのかを」

どうしても、彼女は後ろを向きながらそう言う。

それにしても、なぜ『どんな関係』という言い回しなのだろうか。まあ、言葉の綾か。

「ああ、どんな冒険をしたか、聞いてもらおう」

未来が変わったりするかもしれないが。

「……ふん。まあ、それでいい」

なぜか若干不機嫌というか、拗ねた雰囲気少女は言った。

「？」

俺は首を傾げながらも、36階層から下に続く階段へ、彼らを導くのだった。

さて。

そんな調子で階層をどんどん進んでいく。

敵は強かったが、俺の支援があるのだから負ける要素はない。

それに、こちらにはフェンリルもいるし、不出来ながらも俺と相性  
抜群のビビアもいる。

むしろ、進行スピードは上がった。

40階層。

50階層。

……60、70、80、90。

そして……。

「99階層。最終階層だ。ここにはボスしかいない」

「まさかこれほど早くたどり着けるとは。1週間は覚悟していたが、  
食糧なぞ余ってしまったっているぞ」

フェンリルが素直に驚いた声を上げた。

「くあーっはっはっははは！ 全部俺の実力のおかげだなあ！ へ



ポポーターでもここまで来れるんだから、感謝しろよ、二人とも！」

「ああ、よくやったなビビア。死にかけても懲りないタフさにはいつも驚かされる」

「しかもすぐ復活するしな。その精神力だけは凄いと思う。一体どういう神経をしているんだ？ 何も考えていないようにも見えるが……」

「ぐひひひ！ そう褒めるな、褒めるな！ 当然の実力ってやつよー！」

呵々大笑するビビアに、フェンリルは嘆息して、

「褒めてないんだが」

と呟く。

だが、何はともあれ、目の前には禍々しい大きな扉がある。

その向こうにはボスがいるのだ。

そう。

ギ……。

人の力では開きそうにもない扉が自然と開いていく。

ギギギギギギギギギギギギイイイイイイイイ ……！

きしんだ音を立てて開門する。

広大なフィールド。むき出しの真っ赤な岩肌がまるで内臓のようにも見える禍々しい空間。

その最奥には玉座が据えられていた。

そして。

「来たか。運命に導かれし虫けらどもよ」

倍音のような聞くだけで不快な声で、その怪物はしゃべった。

「ようこそ、呪いの洞窟の最奥へ。そして、さようならだ」

その怪物は遠目にも異様であった。

その巨躯は10メートルを超え、体中は黒いヌメヌメとした体液で覆われていた。

目玉は垂れ下がり、体は腐敗しているように見える。

身体を覆うのはボロボロの布切れのみだ。

また、周囲には蝙蝠のような、やはり黒い四肢を持つ怪物が群がっている。そいつらは、魔王の体液をすすっているように見えた。

あまりに悍ましい光景だ。

これが神代じんだいの魔王……。

「お前たちにも、この魔王イヴスティトルの因子を与えよう。そして」

魔王は言った。

「人類を滅亡へと追いやる我が偉業を手伝うが良い」

（続きます）

## 231・魔王イヴスタイル（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）お\*コミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 232・魔王イヴステイルの独白と大賢者に課されし謎

232・魔王イヴステイルの独白と大賢者に課されし謎

魔王イヴステイルは、その醜悪な巨躯を玉座から離すと、一気にこちらに間合いを詰めるように跳躍した。と、同時に、周囲にたかっていた、人体ほどの大きさのある蝙蝠……。いや、蝙蝠に見えていた、人体と虫が合体したような奇妙なモンスターをこちらへ飛来させる！

「雑魚を何体連れて来たつてなあ！ この勇者様の敵じゃねえぜえ！ おらあ！ うんぎゃあああああああ！？」

威勢の良い啖呵を切る、先陣を切る、そして雑魚モンスターに吹き飛ばされて体中を泥まみれにするという、一連の流れをビビアが体現した。

「ビビア！ 勇気があるのは結構だが、蛮勇とはき違えるな！ 下手したら今ので死んでいたぞ！」

「ひい！？ しよ、しよんな！ 俺が雑魚ごときに負けるはずがぁ！？ あ、あえて魔王は避けて、かつこいい姿を見せてやろうと雑魚を一掃しようとしたつてのにいいいい！？」

「確かに露払いは必要だが、その蝙蝠のような敵、一体一体がやはりA級レベルだ！ 俺の支援は必須なのは明らかだ！ 俺の指示を待て！」

「ぐぎい！？ 当たり前のように命令すんじゃねえ！」

ビビアが威勢の良い関の声を上げる。まだまだ意気軒昂なようだ。さすがだな。

と、フェンリルも淡々とした様子で。

「相手戦力という、貴重な情報は得られた。下級勇者にしてはよくやった」

「てめえはてめえで、憐れみの目線で褒めるんじゃねえ！ フェンリルうとうとうー！ー！」

こんな感じで一見言い争いのようだが、あくまで緊迫感のある中で意見交換をしているのだ。

俺もビビアも、そしてフェンリルも冒険のプロ。

まさか感情的に言葉をぶつけ合うような愚行はおかさない。

現に、俺たちは魔王より離れて俺たちに襲い掛かる蝙蝠モンスターを迎撃していった。

「ひいひい！ べ、別に頼りになんかしていないけどよ！ し、支援はまだかよお！」

「フェンリルが先だ」

「はああああああ！？ 幼馴染でリーダーの俺を優先しろよ！」

い、いや！　しろよ下さい！！」

「彼女の方が小回りがきくんだ。それに、そう急くな。遅れてもお前の取り分が減る分じゃない。魔王は残しておいてやる」

「ち、ちがつ……！！」

ビビアが何か言いかけるが、それどこではない。

魔王と勇者パーティーの戦闘なのだ。

それは、ゼロコンマ数秒で生死の決まる神話に語られる大戦ということだ。

それに、

「スピードダウン　攻撃力低下　スチール成功率減少　飛行モンスター被ダメージアップ」

敵モンスターの能力値を大幅に削ることを優先する。

その方が、勇者パーティー全体が有利になるからな。

「はああああああああああああああああああ！！！！！！」

フェンリルが持ち前のスピードで、フィールド上を縦横無尽に駆け巡り、岸壁をまるで地面のように自在に走り抜け、天井に爪を立ててつかまつたかと思えば、次の瞬間には大地へと重力を利用した強力な斬撃を放つ。





完全に見下げ果て、格下相手であることを確信したような、せせら笑うような声を上げる。

「さ、さすがだな……。まさか魔王にまでスキルを及ぼすとは。俺を驚かすほど成長したか、ビビア……」

俺は思わず脱帽し、弟子の成長を称賛した。

「いや、あれはスキルではなく、魔王にすら呆れられてしまうほどレベルが低い証明なんじゃ……」

露払いを終えたフェンリルが、一旦後退して来て、何ごとかを呟いている。

が、アイテムを渡して迅速に回復してもらうほうが先だ。

「ポーションだ。で、何か言ったか？」

「は、別に何でもない。それより奴が死にそうだぞ」

おっとしまった。

せつかくビビアが渾身の演技で魔王の油断を誘ったのに、無駄にするところだった。

「まずは貴様から葬ってやろう。価値なき勇者ビビアよ……」

「ひ、ひいいいいいい、ど、どうしてだよおおお……?……?……?」

本当に堂に入った演技だ。

まるで演技じゃないみたいに。

と、その時、魔王が魔力を集中しだした。

その魔力は奇怪な形をした口蓋に集中しており、それに惹かれるように、残っていた蝙蝠たちが魔王の口元に集まり出す。

どンドン蝙蝠たちは溶けて、その魔力へと変換されて行く。

放たればフィールド全体を覆うほどの魔力が放出されるほどの致死性の一撃だ。しかも、その魔力量はどうやら、このフィールドを致死性の魔力で満たし尽くし、一撃でこちらが死ななくとも、徐々に死に追いやる熱量をほこっているように見えた。

「終わりだ」

魔王が飛び出た目玉を醜悪につごめかせながら、ニヤリと嗤った気がした。

早い！

だが！

「それはこちらも同じだ！ 油断して大技を放とうとして隙が出来たな、魔王よ！ さあ行け、下級勇者ビビア！ 大賢者アリアケの支援の元、そして、アリアケ王の名の元に、魔王イヴステイトルを打倒することを命ずる！」

俺はそう言いながら、多重スキルを詠唱した！

聖魔力アップ

クリティカル威力アップ（超）

攻撃力アップ（超）

人類の脅威殲滅（超）

「ひいひいひい、な、なんか知んねえけど、大技使おうとしてやがるっ……！ お、俺だけでも、こ、こんなところからは逃れつつ……！」

ふっ。俺は微笑む。

「ああ、分かっている。こんな遠距離の場所ではお前の攻撃は当たらない！ 一気に間合いを詰めて決めるぞ！ それにお前だけを戦わせるつもりはない！ フェンリル！」

俺は少女の名を呼ぶと共に、最強のスキルの一つを使用する。

決戦付与！

「了解した！ アリアケ殿！ 私の本来の力を見せよう！！ ワオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！」  
メキメキメキという音を立てて、可愛らしい少女姿のフェンリルの口から牙が生える。爪が伸びる。

小さな体は大きく膨張し、美しいブルーの光沢を持つ、聖獣フェン

リルの姿へと変貌した。

そして、あんぐりと口を開けると、

「ひいひいひいひいひいひいひい！ 前門の魔王！？ 後門の狼いひいひい！？ ぎ、ぎやああああああああああああああああ！ 喰われたああああああああああああああああ？ し、死んだああああああああああああ！！！」

ビビアにかぶりついた。

「アリアケ殿は背に！」

「ああ、了解だ」

俺たち勇者パーティーは、フェンリルにつかまると、一気に魔王イヴステイトルへと接近する！

「まさか、このための隙を作るために、あのような情けない演技をしていたというのか！？」

「当然だ！ 下級勇者ビビアは不出来とは言え、俺の弟子！ 魔王相手に恐怖の感情など持つ訳がないだろう！」

「ガウガウ……（そうかなあ……）」

「うわああああああああん！！！！！」

魔王や俺たちの言葉にまじり、ビビアの鬨の音が轟く。気合が入り過ぎてまるで悲鳴だな。俺は苦笑する。



魔王の断末魔が響く。

俺のスキルによって強化された聖剣の力によって、魔王が塵に還って行く。

「ひいひい！？ 死にたくなっ……って、勝った！？ 俺、生きてんのか！？ ぐ、ぐははははははは！ どうだ、思い知ったか、この最強勇者ビビア様のッ……！！！！！」

何事かをビビアがフェンリルの口の中で叫んでいるが、俺の注意は塵に還ろうとしている魔王の口元に集中していた。

なぜなら、

「邪神様……申し訳ありません……。ですが……既に因子は十分に時かれ……ました……。人類を……する……第一条件『孤独』は……達成して……」

（邪神？）

俺は微かな違和感を胸に抱く。

「あーっはっはっはっは！ 勝った！ 俺の勝利だ！ 見てたか、この俺の活躍を……！！！」

目の前の勝利に歓喜して叫んでいる不出来な弟子を微笑ましく思いながら、俺は魔王の放った言葉の持つ意味を考えるのだった。

（なぜここで邪神が出てくるんだ？ 出てくるはずがないのに。な

ぜなら……)

俺の頭脳は目まぐるしく動く。

(今、星神イシスと痛み分けし、次元の狭間で傷を癒しているアレは偽神のはずなのだから)

俺はそんな微<sup>かす</sup>かだが、確かな違和感を胸に抱いたのだった。



232・魔王イヴステイルの独白と大賢者に課されし謎（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（o\*。）。（oペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願ひします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

233・凱旋と賞賛。しかし英雄に休息はなく

233・凱旋と賞賛。しかし英雄に休息はなく

「うむうむ！ よくやったぞ！ 下級勇者ビビア！ そして、大賢者アリアケ！ 聖獣フェンリルよ！」

「ありがとう、ナイア」

「ナイア様のご期待に沿えて光栄です」

「うむうむ！」

魔王イヴステイトルを討伐した俺たち一行は、滅亡種人類王国クルーシュチャへと凱旋した。

そして、魔王討伐の報を冥王ナイアへと告げたのである。

ご機嫌になるナイアが、官吏たちの持つてきていた書類をブワサッと宙へと放り投げた。

「めでたいめでたい！ むわっはっははは！ 我は機嫌が良い」

「官吏たちが泣きそうだがな」

「おっと、これは失敬した！ わはははははは！」

一緒に官吏たちと書類を拾い出そうとして、逆に止められる冥王である。

一方で、

「下級勇者じゃねえ！ 俺もアリアケみたいにな、大勇者ビビアって呼ばねえか！！！」

独りだけ不機嫌な者もいた。

しぶしぶ玉座に戻ったナイアが吟味するように言う。

「ふうむ、確かに魔王討伐を成し遂げた勇者を『下級』としておくのもちよっとアレな感じじゃな。政治的にもなんかかっこ悪くて、宣伝しづらいし」

「だ、だろう！？ なら！」

下級勇者ビビアが目を輝かせる。

それに対して、ナイアが「うむ！」と力強く頷いた。

「これからは『初級』勇者ビビアと名乗るが良い！ どうだ、アリアケ王よ」

「俺としても今回のビビアの活躍には思う所もあった。あの真に迫った油断を誘う行為がなければ、あそこまで大きな隙を魔王が見せたとはお目得ない。ビビアはもはや下級ではない。初級クラス……」。



「こうして弟子が少しずつ俺に追いついてくれるのは嬉しいものだ」  
「何万年かかかりそうだがな、アリアケ殿……。というか、私には  
前進している前提に疑問があるんだがな」

フェンリルが肩をすくめながら言った。

と、そのやりとりを聞いていたナイアが嬉しそうに言った。

「ほっほーん。フェンリルが人を敬称で呼ぶとは珍しい！ かー！  
これはアレじゃな！？ 我には縁がなかったが、人の営みには欠  
かせぬアレじゃろう！ なあなあ！」

「ち、違います……」

フェンリルが若干頬を赤くして答えた。

なんのことが分からないが、この二人にしか分からない会話だろう。  
それはそうと、ナイアには気になることを報告しておくことにする。

魔王が散り際に放った言葉だ。

『邪神様……。申し訳ありま……。せん……。ですが……。既に因子は十  
分に時かれました……。人類を……。する……。第一条件『孤独』  
は……。達成して……。』

「と言ったんだが、何のことか分かるか？」

「うむ！ 分からん！」

「即答だなあ。俺には邪神というのがどうにも引つかかったんだが」

「はあ！？ なーに言ってんだよ、アリアケ」

初級勇者ビビアがやれやれといった風に言った。

「邪神ニクスの野郎が魔王を作り出したんだからよお。別になーんもおかしくねえじゃねえか！」

「ふむ！ それについては我もそこなしよんべん太郎に同意しよう！ 邪神が星神と相打ちとなり休息中ゆえに、魔王を放ったと見るべきであろうとな。その目的はどう考えても人類の滅亡であろう！」

「私は『第一条件』というのが気になります」

フエンリルが言った。

俺の抱いた違和感は大した問題だとは見なされなかったようだな。

(ナイアにさえ、か)

まあ、今考えても答えの出る問題ではないことは確かか。

そんなことを考えていると、ナイアが言った。





「なんと!」

「その大きさは目測で1キロ!!!!!! 形状は蛇のような頭蓋と、鱗におおわれた体を持つ化け物です!」

「沿岸警備隊は!?!」

「既に7割が損耗! 残りは撤退しております!!!!!!」

「なんとということが!!!!!!」

ナイアの怒声が響く。

だが、その兵士は最後にとんでもないことを口にした。

「ナイア様。その申し上げにくいのですが……その化け物は自分のことをこう申しております」

「人語を介すか。して、なんとっておるのか!」

兵士は悍ましい言葉を口にするように、冷や汗をかきながら言った。

「自分は『魔王』である、と」

その瞬間、祝杯をあげんばかりだった神殿には沈黙があり、時折、人々が息をのむ声のみが響いたのである。

### 233・凱旋と賞賛。しかし英雄に休息はなく(後書き)

#### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ(o\*。)。。 こへコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 234・神に見捨てられし人

234・神に見捨てられし人

「その魔王は名前を名乗ったのか？」

俺は肝心なことを聞く。名は常に運命を左右するからだ。

「は？！？」 化け物に名前なんてあるのかよ！」

ビビアが言う。確かにそうかもしれないがな。

しかし、兵士は俺の言葉に確信をつかれた、とばかりに青くなり、震えながら言った。

「申し訳ございません。確実な情報ではないので、どこまで報告してよいのか……」

「良い！ ありのまま申すが良い！ アリアケが看破した通り、名を名乗ったのだな？」

兵士は頷くと、その魔王の名を口にした。

「その化け物は、自分を『ナムム』と名乗りました」

その瞬間、神殿内の人々が一気にざわついた。

いや、驚愕に近かった。

むしろ、この滅亡種人類王国で最後の抵抗を続ける人々が絶望し、持っていた書類を落したり、膝から崩れ落ちたのだ。

相当のショックが走ったことが分かった。

「フェンリル、なぜこれほど皆、ショックを受けているんだ？  
ナンム』とはお前たちの何だ？」

「神だ」

フェンリルは一言で答えてくれた。

「なるほど、そういうことが」

「どういうことだよー!？」

納得する俺。一方、周囲の混乱にあわせて思考停止に陥ってしまったビビアが、やはり錯乱しながら叫んだ。

「初級勇者よ、我が答えよう。ナンムとはこの大地を創成したという地母神である。無論、星の神であるイシスとは比べるまでもないが、我らクルーシャチュの民たちはナンムを信仰している」

「だから、その神様が何で魔王になってやがんだよう!！」

更に錯乱しながらビビアが叫んだ。

だが、彼の指摘ももっともだ。もう少し冷静になってくれればと思うが、初級勇者だから仕方ないなと思ったりする。

「それは我も知りたい。だが結果だけは明らかである。本当にナム神が魔王となって人類の滅亡を望むのであれば、我らは神に見捨てられたということになる」

「神に見捨てられた人類種か」

それは……。

「大きな痛手だな」

「ああ、痛恨の一撃！ という奴だ！ まったく、邪神ニクスはとんでもない置き土産を置いて行きおる！ 度し難い奴！ だが効果的なことは認めざるを得ぬ。かしこき奴よな！」

憤慨した様子でナイアが言った。

「はっ！ 別に神に見捨てられたくらいでなんだ！ 倒せばいいだけだろうが！」

ビビアが聖剣をギラギラとさせながら言った。

「いや、ナイア様やアリアケ殿がおっしゃっているのは、そういった武力面での話ではない」

「ああん？」

ビビアが不思議そうに眉根をひそめた。フェンリルが続ける。

「追い詰められた人類種が耐えて来たのは、無論、ナイア様が限ら

れた兵力を采配されたことが大きい。だが、それは心の支えがあつてこそだ」

「心お？」

フェンリルは頷き、

「信仰。あるいは心の寄る辺。神への祈りを通して人々は心の安寧と明日への活力を養つて来た。これからはそれが失われる。心の基盤がなくなるようなものだ。そのような神に見捨てられた『孤独』な人間が、果たして滅亡を免れることが出来るだろうか？」

そう言つて彼女は嘆息した。

「ま、まじかよ。ひええええ、俺は負け戦はするつもりはねえぜ……。こ、こんなところからはおさらばして……」

ビビアが何か言っている。

だが、俺は微笑みながらフェンリルとナイアに言った。

「神に見捨てられた孤独、か。だが、俺たちは生きなければならぬ。神が魔王となるならば、それを打倒して前に進むべきだ。違うか？」

俺の言葉に、ナイアも満面の笑みを浮かべ、

「その通りである！ このナイアも少しビビッてしまったが、ノーカーンということで宜しくである！ 神が我らを見捨てるとしても、我らは前に進まねばならぬ！ 信仰を失つても、明日に命をつなが

ねばならぬ！」

彼女は頷くと、櫓を飛ばした。

「我らは負けぬ！ 第1の魔王にて既に他の町との交流は断たれつつある。友好的であつた獣人たちやエルフたちとの連絡も取れぬ有様である！ そして、今回新たに現れた第2の魔王にて神に見捨てられつつある！ だが、例えそうした孤独なる人類種であつたとしても、明日を諦めてはならぬ！ ゆえに！」

彼女は紅の大鎌を掲げながら言った。

「初級勇者ビビア！ そして大賢者アリアケと我が従者フェンリルは、地母神ナムムの討伐せよ！」

「いいだろう。その依頼受けよう」

「私はナイア様の意に従います」

「へ、へへへ。その地母神とやらを倒せば生き残れるんだな！ ならやっつてやるぜ！」

仲間たちも意気軒昂なようだ。

と同時に、

「あ、ちなみにだが、今回は我も同行するんで宜しく」

「……へ？」



俺が首を傾げるのと同時に、ナイアが玉座を飛び出して俺の前に降り立った。

身長は俺の胸下くらいまでしかないが、その力の強さは瞳に現れている。

「お前がやられたら人類は滅亡するんだろう？」

「たまには息抜きが必要であるからな。それに今回の相手は格が違うであろう？ 確実に仕留めねばならぬゆえな」

「神相手に冷静だな……。そうだな。お前がいれば心強い戦力になる」

「うむ！！！」

こうして、俺たち初級勇者パーティーと冥王ナイアによる共同戦線が臨時構築された。

人を見捨てた神、ナムム討伐のために。

## 234・神に見捨てられし人（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）。お\*コミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 235・第2の魔王 地母神ナムからの告別 前編

235・第2の魔王 地母神ナムからの告別 前編

宇宙癌ニクス・タルタロスの星への襲撃によって、陸地の半分が海面に水没している。

そのため海岸までは近く、馬車で1日程度の距離とのことだ。

俺とビビアは同じ馬車に同乗して、目的地へと向かっていた。ナイアとフェンリルは別の馬車に別れて乗っている。

俺がガタゴト揺れる馬車の上で、仮眠を取っていると、顔を青くしたビビアが話しかけてきた。

「お、おい。アリアケ……」

「初級勇者ビビア、どうしたんだ？」

「その呼称はやめろ！俺は本来、超勇者ビビア様なんだぞ！！」

「呼称になどこだわる必要はないさ。俺など救世主や王などと呼ばれるのが嫌で、頼むから普通に呼び捨てにしてくれと周りに頼んでいるくらいだ。不思議なことに聞いてくれないのだから」

困ったものだ。

俺の言葉になぜかギリギリと歯ぎしりをする。だが、彼にはもつと

大事な聞きたいことがあったのか、その仕草を頭を掻きむしってから止めて、俺に再び青白い表情を向けて口を開いた。

「お、お前もあのナイアもよお、地母神を倒すつもりなんだろう？  
今更だけだよお、結構大事じゃねえか。やっぱり、お、俺のことは置いて行った方がいいんじゃないか？ その、あれだ、そう！  
切り札としてな！！」

「なるほど、一理あるな。初級とはいえ、勇者の存在が温存されていれば、民たちも安心するだろう」

「だろ！？ だろ！？」

「ああ。特にお前は玉座の間で粗相したにも関わらず、ナイアに処刑されなかった、奇跡の人、として風聞が流れているようだ。民にも親しみを持たれているのも大きい。ふ、俺には真似出来ない所業だ。こんな短期間で、民の心に入り込むなんてな」

「誰だそんな噂を流しやがったやつはあああああ！！！」

激昂する。

「ご近所迷惑だろ？ 周りに聞こえないようにしておこう。スキル『サイレス』」

これでよし、と。

「話の続きだが、無論、ナイアだ。勇者が現れたと喧伝するために、そういった親しみやすいエピソードを絡めるのがコツなんだぞうだ。多彩な女王だな」



母神ナムムの……女神ナムムの言葉を聞くのに同行することに同意しただけさ」

「言葉？ 何の言葉だよ」

ビビアの問いかけに俺は神妙に頷きながら、

「告別だ」

「く……べつ？」

疑問を浮かべるビビアに、俺は改めて頷き、

「ああ」

と言って、正確な言葉を選んで答えた。

「地母神ナムムの攻撃は既に終わっていて、人類は敗北している。今更戦闘しようがしまいが、結果は変わらない」

なぜなら、

「神に見捨てられた人類種が『信仰を失う』という結果は変わらないのだからな」

と言ったのだった。

「とはいえ、ナイアが『討伐』という言葉を使った意味は確かめた方がいいかもしれない」

「ナイアの？」

ビビアは首を傾げる。今はそれでいい。

しかるべき時に、俺が道を示そう。

「まあ、どうなるかはまだ分からん。だが、この戦いはどこかおかしい気がする。第1の魔王を倒して、すぐに第2の魔王が現れた。まるで……」

「まるで、なんだよ」

「倒されることを予定されていたような段取りの良さを感じてな」

その言葉にビビアは馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「そりやてめえ、邪神ニクスの野郎がござかしい野郎だからだろうがよ。魔王ってのはどんどん代替わりするもんだろう？ 確か、人類と魔王を戦わせてマナを回復させるためによ。ありゃ？」

と、ビビアが首をかしげて、

「……の割には、マナは濃密だな。それに、魔王はイルミナ族から出るもんだと思ってたが、神代は違ったてー、ことか？」

フ、と俺は微笑んで、再び仮眠の姿勢に入った。

「初級勇者にしては鋭いな。じき、中級勇者にもなれるだろう。この神代には俺たちが知っている事実と、幾つか矛盾がある。その理由は今のところ分からない」



「初級つて言うんじゃねえよ！ 超勇者様だつつてんだろーがぁ  
!?!」

そんな怒声はこの馬車の中にだけ、木霊したのである。

まだ何か言っているビビアをよそに、俺は再び夢の世界に入ってしまった。

「あれが、地母神ナムムか。すさまじいでかさだな」

「ひいひいひい、あんなのに勝てる訳ねええ」

戦うわけではないと、昨日言ったばかりだが、ビビアはどつやらとほけてくれているようだ。この辺りの以心伝心は俺と幼馴染の絆がもたらすものだろう。

さて、まだ1キロは先だというのに、その威容は遠くからでもよく見えた。

伝令兵が伝えた通り、その大きさは1キロ程度。蛇のような頭蓋と鱗におおわれた体を持つ存在であった。手足には鋭い爪がついている。周囲には何か黒い数千から数万の黒い物体が蠢うごめいていた。

「あの黒いのはなんであろうな？」

「蛇だな」

「遠見のスキルか、便利で良いの！」

「お前も使えそうだがな。あと、ナンム自体は手足を動かしていない。恐らく、あの蛇たちが地母神の下にも無数に存在して、あの巨大な神を運んでいるんだろうなあ」

「蛇たちの王でもありませんからね」

フェンリルが納得したように言った。

「地母神なのに怖すぎだろ！？　どうして、あんな神を信仰してやがんだよ、お前は！？」

ビビアが悲鳴を上げるが、

「あれは大地の災いとしての側面が大いに出ている姿であろう。豊穡や生命を司る以上、飢餓や死をも司るのは無論のこと。邪神の影響であろうな」

淡々とナイアが答えた。

「それではナンム討伐と行くか？　初級勇者パーティーよ！」

「それだが、別に戦う必要はないんじゃないか？　地母神ナンムは既に人を見捨てたのだから？　なら、もう戦いは終わっている」

「そうか？　だが、アレがこのまま大地を進み、我が街を蹂躪せんとも限らぬ！　ゆえに、冥王的の我的には、人の手によりこの場で

討伐すべきであると思つぞ！」

「ナイア様の言う通りだ、アリアケ殿。やられる前にやるのは、戦士の基本だ」

二人はやる気のようにだな。

ビビアは……、

「ひiiiiiiii！ あれ全部蛇かよおお！ 気持ち悪い！ 無理無理iiiiiii！」

ふむ。

ダメだこりゃ。

と、そんな風に作戦会議をしていた時、不意に天空から声が降り注いで来た。

『我が子どもたちよ……』

それは女性の声と、男性の声が入り混じった、不思議な声色だ。

そう、それは地母神ナンムの言葉だったのである。

235・第2の魔王 地母神ナムからの告別 前編（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ）o\*。ー。）oペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 236・地母神ナンムからの告別 後編

236・地母神ナンムからの告別 後編

『我が子どもたちよ……』

「おお！」「ナンム様がお話になられたぞ！」「地母神様！ どうか我らを見捨てないでください！」

連れて来た数百の兵士たちが浮足立つ。

それはそうだろう。

何せ自分たちが信奉している神が目の前に顕現しているのだ。

そして、地母神とは豊穰や誕生を司る、まさに『母』としての象徴的意味合いをあわせもつ。

だから、彼らがナンム神に慈悲を期待し、自分たちを見捨てることを思いとどまってくれることを、こい願う気持ちはよく理解できた。だが、

『我がこうして姿を見せたのは、この地を去るため。これまで我を信仰し、尽くしてくれたことを母は嬉しく思う。しかし、我はあなたたちを捨てる以外に、あなたたちを救う方策を見出すことが出来なかつた』

「見捨てるのが救うですって!? どういう意味ですか!?!」

兵士たちが悲鳴のように問いかけた。

『我は地母神。あなたたちの命を守るとともに、命を刈り取る存在。我が存在は今や星が欠け、  
による によつて、  
終末の性質が偏在しつつある』

なぜか途中の声が聞き取れない。

「何て言ってるかわかんねえぞ! はっきりしゃべりやがれい!」  
空気を読まずにビビアが叫ぶ。

兵士たちが眉をひそめたが、彼に関わっている場合ではないのでとりあえず無視される。

フェンリルが淡々とした調子で、

「無礼者は私の腹の中で静かにさせておくか」

と、人の姿のまま、牙を見せながら言った。

「じよ、冗談だよ。ははは……」

ビビアが俺の後ろに隠れる。

「うむ、我にも聞き取れぬかったが、恐らく神にのみ解釈できる概念なのであるう。何せ神だからな!」

ナイアはナイアで、一人納得したように言った。

神にのみ理解できる概念だから、人には聞き取れないというのは、ありうる話だ。

しかし、

(ふむ、本当にそうだろうか?)

俺は何となく違和感を覚える。

根拠はない。

ただ、これまで幾多の経験を積んできた歴戦の兵としての。

いや、賢者としての勘とでもいおうか……。

そんな俺たちのやりとりをしているうちにも、地母神ナムムの言葉は続いて行く。

『やはり によって のようだ。このような最期になることを許せ。愛し仔たちよ。あなたたちの行く末の安寧を願っている。さようなら』

「そんな!」「お、お待ちください!」「何か私たちに過ちがあったようなら直します! だからなにとぞ……!」

兵士たちの。

いや。



民としての。ただ神を信仰するただ一人の人間として、彼らは叫んだ。

しかし、

『 ではない。もう手遅れだ』

そうナムのたまが宣つのと同時に、

ピシッ！！

神の体軀から激しく何か割れるような音が鳴り響いた。

見れば、徐々に足元が石のように灰色となり、それが徐々に体の上方へと広がる。

その石化した部分に亀裂が徐々に入って行くのだ。

「地母神様!?」「お、お救いせねば!? だが、どうやって」「ああ、なんてことだ!?!」

兵士たちから絶望の聲が上がった。

同時に、ナイアも悲鳴を漏らす。

「おお、なんとということだ。我としたことが迂闊であった! よりにもよって兵士たちに神の死ぬ場面を見せてしまつとは!」

彼女は唇を噛みながら言った。

「お前は地母神を倒しに来たんじゃなかったのか？」

「無論、そのつもりであった。神殺しも辞さぬ覚悟でな！　だが、これは違うではないか！」

ナイアは大きな声で言う。

兵士たちにも聞こえるほどのはっきりとした声で。

「『人が神を捨てる』のと、『神が人を捨てる』のでは、全く意味が異なる！　これは明らかに後者である！　神が絶望し、人を捨てたようにしか見えぬではないか！　これでは！　これでは！」

彼女は悲鳴のように言う。

「滅亡種人類王国はもたぬぞ！！！！！」

それは民たちの絶望をはっきりとした言葉にした、恐ろしい事実の宣告のように響き渡ったのだった。

そう。

これはそういうことなのだ。

神から捨てられた人々が抱く感情は一つしかない。

すなわち『絶望』。

ぎりぎり保ってきた人類の滅亡と存続の天秤が、一気に傾くほどの

出来事を、冥王ナイアは看破していたのである。

## 236・地母神ナムからの告別 後編（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）。お\*。こ\*。ッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 237・新たなる救世主

### 237・新たなる救世主

「うーむ、これは大変なことになった。予定が狂ってしまったぞ！  
この冥王一生の不覚である！ ちよっとくらいなら責めても良い  
！」

「おうおう！ どう落とし前つけるつもりだよナイアさんよお！  
お前のせいで大変なことになっちまったろーが！！！」

「ナイア様。この馬鹿をかみ殺しても良いですか？」

「ひい！」

「そやつはアリアケの弟子だから、そっちに聞くがよい！！ うむ  
！！！」

「こんな奴の弟子じゃねえ！！！」

「そうか！ ではかみ殺して良い！ ううむ！」

「ひい！ で、弟子です！ ア、アリアケ！」

「やれやれ」

俺たちは帰りの馬車に同乗していた。

今後の方針を相談する必要があったからだ。

俺は嘆息しつつ、

「ビビアはまだ初級勇者だ。大目に見てやってほしい。何より師である俺の指導についてこれないのは、俺の教育不足だ。今後も人の精進するよう、ビビアには言い聞かせていく。この通りだ」

と頭を下げた。

「いえ、アリアケ殿が謝ることではありません。ふん、初級勇者よ、寛大なアリアケ殿に感謝するのだな」

「ぐ、ぐぎぎ！ あ、ありがとうございます……」

「うむうむ！ 師弟愛を見れて我は満足である！ だが、その言葉忘れるなよシヨンベン太郎よ！ これからも師に1ミリでも追いつけるよう精進するが良い！」

「その呼称はやめろつつてんだろーが！ いい加減忘れる！ あ、い、いや、忘れる下しやい」

ガルルと、すこむフェンリルに思わず敬語になるビビアであった。

呪いの洞窟の件は、本当にトラウマだったのだなあ。

そんなことを思いつつも話題は本題に進む。

呑気な会話に見えるかもしれないが、世界の危機に直面し続けている俺にとっては、これくらいの気位は持っていて当然だ。

「神が人を見捨てたとなれば、人々は心の基盤を失ったも同然だろう。何か他の精神的支柱が必要になる。ナイア、お前がそれになることは可能か？」

それが一番手っ取り早い方法なのだが。

しかし、彼女は腰に手を当てて、

「無理に決まっている！」

と笑顔で言い切った。

「なぜですか？ ナイア様なら皆慕っています」

「そういう問題ではない。もはや我は現時点で滅亡種人類の王として君臨しているではないか。今更どのようにに民へ声をかけようとも、新たな力とはならぬ」

「そりゃそつだ」

その言葉は道理だ。

既に彼女は役目を果たしている。つまり、もはや今の時点で人類の精神的な支柱なのだ。

であるがゆえに、新たな希望とはなりえない。

「新しい希望が必要か」



「うむ！ 人はパンのみに生きるにあらず！ 心の栄養を摂らねば死んでしまう！ そこでだ、我に名案がある」

ドンと、やはり腰に手を当てたまま、ナイアがドヤ顔しながら口を開こうとする。

しかし、その声を遮る大声が馬車に鳴り響いた。

「はっはっはっはっはっは！ 聞くまでもねえぞ！ ナイアあ！……！！」

ビビアであった。

だが、俺もその言葉には同意して頷いた。

それしかあるまい。

だが、もう少し声のポリュームを落として欲しいことだけが不満である。

「新たな英雄！ この窮地を救う勇者！ 世界を救う救世主の役割を担えって言うんだろう！ くははははは！！！！」

そういうことだな。

今のところこの勇者パーティーは、神殿内でこそ認知されているし、魔王を討伐したということでも噂話程度には民に認知されているが、まだ、それこそ全員が知るような有名人というレベルではない。

何となく知られている程度だ。

つまり、ビビアは新たな英雄として担ぎ上げることによって、人々の新しい精神的支柱となりえるのである。

無論、神を失ったショックを全てカバーしきれるほどではないだろうが、無いよりはよほどマシだ。

「俺もその案には賛成だ。というか、それくらいしかないだろうな」  
追い詰められた人間には余裕リソースなどない。

使えるものをどんどん使って、滅亡と存続の天秤を少しでも揺り戻す必要があるだろう。

「そうか！ 賛成してくれるか！ アリアケ！」

「ああ」

「フェンリルはどう思う？」

「良い案かと。ナイア様」

「では決まりであるな！！」

コホンとナイアは咳払いをする。

ビビアはその言葉を待ち受けて、唇を歪めて笑っていた。

ナイアが言葉を発する。

王としての威厳に満ちた声で、

「アリアケ・ミハマよ。そなたを救世主として認定する。どうか、この滅亡種人類王国クルーシュチャを守り、民に安寧をもたらし、そして」

彼女は言った。

「この神代世界を救ってほしい。救世主アリアケ・ミハマとして！」

その言葉に、一瞬の沈黙がおりる。

そして、

「はあああああああああああああああ！？！？！？！？」

ビビアの悲鳴のような、怒声のような、泣き笑いのような、耳障りながなり声が上がった。

「俺が救世主だろうがよ！　なんでアリアケなんだよ！　この超勇者ビビア様こそが人類の希望になるべきだろうが！　ぬわんで！？　どーして！？」

その声にナイアは訝し気な表情で、

「は？」

と云ってから、

「そんなもん、アリアケに決まっておるじゃる。救世主ビビアとか認定するような采配する王じゃったら、とっくに人類滅亡しておるつて」

「ですね」

ナイアの言葉に、フェンリルも素の表情で答えた。

一方、

「へ？」

俺は初級勇者ビビアが新たなる救世主として担ぎ上げられるものと思っていたので、実は驚いていたのだった。

「いや、出来れば辞退させてほしいんだが？」

「そうだ！ アリアケ！ 辞退しやがれ！ 救世主ビビア様の誕生を邪魔してんじゃねー！！！」

「アリアケよ、王として頼む。人類の滅亡を防ぐ最後の防波堤として、そなたの力が必要だ」

ナイアが頭を下げる。

「王が頭を下げるもんじゃない」

「そなたも先ほど下げていたではないか。王様差別は良くない」

「む」

俺は一本取られた気分になる。

と、同時にフェンリルも口を開く。

「アリアケ……様。どうか救世主としてこの時代をお救い下さい。  
クルーシユチャ国の民として、私からもお願いします」

「様？」

「救世主様ですから」

彼女までも、俺を真摯な瞳で見つめながら言った。

「参ったな」

「おい！ 俺が！ この俺が救世主だ！」

「だが、結局やることはそう変わらないか。それに俺がこの時代に呼ばれた、ということとは、そういうことなんだろう。早くのんびりしたいんだがなあ」

「うむ！ さすがアリアケは話の分かる良い男である！ のう、フェンリルよ！」

「えっと。その。私にはその辺の話は分かりかねます……」

「お？ へー、ほうほう。そうかそうか」

「ナイア様、違いますので」

最後辺り、二人が何の話をしているの分からなかったが、恐らく王と従僕という特別な関係の二人にしか通じない内容なのだろう。

ともかく。

「やれやれ」

こうして俺は、神代の世界において救世主として扱われることになってしまったのである。

のんびりしたいだけなのだがなあ。

はあ。

俺はこっそりと嘆息をするのだった。

とじろじ、

「ふんぎいいいいいい！！ 無視すんじゃねえええええええ  
！……！」

ビビアが絶叫していた。

出来れば彼に救世主役をやらしてもらいたかったなあ、と心から思う俺なのであった。

## 237・新たなる救世主（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（o\*。|。oペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 238・民たちと交流し慰撫する救世主のお仕事

238・民たちと交流し慰撫する救世主のお仕事

「おお、あなたが未来より来られた救世主様なのですか」

「ありがたや、ありがたや」

「どうぞ、我々をお救い下さい、救世主様」

「参ったなあ」

俺たち初級勇者パーティーメンバーとナイアは、地母神ナンムを失い、滅亡種人類王国まで帰還した。

そこからナイアの手際は早かった。

俺たちの存在は別に秘密ではなかったので知っている者は知っている程度のレベルだったが、俺たちが魔王イヴステイトルを討伐したことや、俺が未来からやってきた救世主であることを大々的に国中に喧伝したのだ。

精神的支柱である地母神ナンムを失った彼ら国民からすれば、俺は今や心の支えであった。

そんな役割は普通ならば御免こうむりたいところだが、

「まあ、任せておけ。俺がお前たちを救おう心配することはない。

いつも通りに暮らし、友と家族を大事にしる。困ったことがあったら言ってくれ。助けになるさ」

「おお！」

「さすが救世主アリアケ様だ！」

「頼りにしております！」

俺の言葉に盛大な歓声が湧いた。

「あの、とても慣れているようにお見受けするのですが」

一緒にいたフェンリルが意外そうに言った。

「まあなあ。未来でも色々やってたんでな」

「色々ですか？」

彼女が首を傾げたので、簡単に伝えた。

「エルフ族を救ったり、獣人族を解放したり、魔神を倒したり、孤児を養ったり、村を国に発展させて国王になったり、世界の危機を何回か救ったりとか、まあ色々だ」

「そ、それは慣れもしますね。さすがというべきでしょうか」

「おかしいんだよなあ。俺はのんびり辺境でまったり暮らすために勇者パーティーをあえてクビになったはずなんだが……」

どうしてこうなった？

とはいえ、困っている人々を放つてはおけない。だが、一方で、甘やかしてばかりいてもダメなことは知っている。だからあえて言った。

「逆に俺が困ったら、みんな俺を助けてくれ。俺は頼りない救世主だからな」

「ア、アリアケ様？」

意外な言葉にフェンリルの目が、今度は点になった。

民たちの顔も不安が増したように思う。ざわざわとした声も聞こえる。だが、それでいい。

「俺を頼るのは良い。だが、お前たちは人類最期の砦となる誇り高き王国民だ。誰か一人でも生き残れば俺たち人類の勝利だ。救世主の俺が倒れ、冥王ナイアが死のうとも、諦めるな。俺だけではなく、お前たち一人ひとりが、未来への希望そのものなのだから」

その言葉に一瞬シンとなるが、

「そ、そうだなっ……！！」

「おっしゃる通りです！ 俺たち一人ひとりが未来へ命をつなぐ役割を担っているんだ」

「アリアケ様が命をかけて守ってくれても、俺たちが諦めたらそこで未来は終了だもんな」

「さすがアリアケ様だ！　さすが救世主様！」

当たり前のことを言ったただけだが、先ほどまでより大きな歓声が上がった。

と、同時に、助けられたい、という民たちの気持ち、自分たちの力で未来を掴み取るのだという気持ち。自分たちが自分を助けるのだという、当たり前の意識が芽生え始めているのを感じた。

「ふう、これでいい。幾ら俺が助けようと、自分が助かりたいと強く思わない者を助けることは出来ないからなあ。さ、次の場所へ移動するかな。とにかく顔を見せるのが大事だ」

王国は10キロ四方があるので、なかなか大変だ。

と、フェンリルが言った。

「案外、そういう当たり前のことを気づかせることが困難なのですが……。私にはできません。さすがです」

「お世辞はいいさ、大したことじゃない」

俺は微笑んで首を振った。

だが、

「いえ、私はそう言ったことを言える性格ではないので。あの……  
ほんとに……」

フェンリルが若干、頬を赤くしながら何かを言おうとした。

と、その時である。

「おいしいおいしいおいしい！ おつかしいだろうがぁ！？ なん  
で俺の扱いがこーんな感じなのに、てめえの扱いがそんななんだよ  
よおおおお！?!?!?!」

ビビアの絶叫が少し遠くから聞こえてきた。そして、ゼーゼーと息  
を切らしながら、俺の手前まで来た。

「そんなに違うか？」

「何もかも違うだろうが！ そもそもだウゲエ！？」

再度絶叫していたビビアの顔に泥がべっとりついた。俺は汚れる  
のが嫌なので、フェンリルの手を引いて一歩下がってよける。

すると、別の声が響いた。

「おいおい、ビビアの兄ちゃん！ 遊びの途中でよそ見してたらダ  
メだぞ！」

「そうだよ、お母さんに教わらなかったの？」

「はい！ ってことで、今度はビビアが鬼役ユラヒンね」



フェンリルが珍しく言うか言わないか迷うような口調で、

「元々レベルが同じだけのようない感じがするのですが」と言ったのだった。

「ははは、フェンリルは相変わらず冗談も毒舌だなあ」

俺は思わず嘖き出す。

滅亡種人類王国にあつては、地母神を失って大人が精神的なダメージを受けている。大人に余裕がなければ、子供は不安になるものだ。だから、ああやって、ビビアが子供たちの笑顔を取り戻してくれることは、とても素晴らしいことなのだ。

ビビアも成長しているのだなあ、と満足して頷いた。

「冗談ではないのですが、まあ、結果オーライなのでいいんですけど……」

フェンリルが何か言っているのだが、子供たちの喧噪に紛れて聞かえない。

「何か言ったか？」

「はあ、いえ。別の話をしましょうか」

なぜか嘆息してから、彼女はいつものキリッとした表情をしながら俺に言った。

だが、なぜか顔が赤いどうしたのだろうか？

「あのアリアケ様……」

「どうした？」

俺が首を傾げると、彼女はおずおずとした様子で言った。

「手を離してもらえますでしょうか？」

どうやら握りっぱなしだったようだ。

「おっとすまない。嫌な思いをさせたな」

俺はすぐに離れた。

だが、彼女は顔を赤くしながらも淡々とした口調で、

「別にアリアケ様に手を握られるのはイヤではありません。誤解されませんように」

と言ったのだった。

誤解とはなんだろう、と思ったが。

このボクネンジンという、俺の最愛の人の声が何となく聞こえて来たような気がしたので、俺はなんとかそれを聞くのをやめたのだった。



## 238・民たちと交流し慰撫する救世主のお仕事（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（お\*。ー。）お\*コミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

239・ナイアにからかわれて顔を赤らめるフェンリルさん

239・ナイアにからかわれて顔を赤らめるフェンリルさん

〈フェンリル視点〉

今日は冥王ナイア様に、国内の状況を報告に来ていた。相変わらず官吏たちは忙しそうである。

だが、人類の命運を、まだ諦めていないということだ。

地母神ナンムが死んだことで一時的に絶望感が蔓延した滅亡種人類王国であった。

しかし、幸いながらアリアケ様の活躍によって徐々にそのショックから立ち上がりつつある。

魔王イヴステイトルの因子によって汚染されたモンスターの襲撃は続いており、まともに他の国……例えば獣人族やエルフたちとの交流はできない状況に変化はない。

だが、彼という救世主が一人いるということが、人類の希望となっているのだ。

アリアケ様おひとりの力で、こつも雰囲気が変わるとはな。

私は彼の顔を思い浮かべて、少し口元を緩めたのだった。

「良い表情である！ 萌えであるな！ 良きかな！ さすが我が従僕である。思い人を想って、知らず知らずのうちに唇を綻ばす。まことに素晴らしい！ 萌え！ であるな！ 特に普段武人っぽい少女が可憐に微笑む様は永久保存したい気持ちでいっぱいである！」

「……」

いつの間にかナイア様がいた。

そして、意味の分からないことを、唾を飛ばしながら力説していた。

ナイア様は人類種を滅亡から守る、まさに英雄であるが、時折意味不明なお方である。

「ナイア様、本日は街の様子などを報告に来たのですが」

「うむ、そなたの大好きなアリアケの活躍を惚気のんげに来たというわけじゃな！？ 良かろう！ その惚気話、聞こうではないか」

「違います」

私は心を冷え切らせて言う。瞳も絶対零度である。絶対服従を誓っているが、表情のコントロールまでは難しい。

だが、ナイア様はますますニヤニヤとした笑みを浮かべる。

回れ右をしてダッシュで離脱しようか？

いや、この御方はその瞬間目の前に瞬間移動して来るだろう。

さっきだって、明らかに気配はなかったのだ。

それはともかく、

「ほーん、惚気ではないというのが、ほーん。じゃが、内容のほとんどにアリアケが関わっておるのじゃろ？」

「それは、そうですが……」

「ほーら、やっぱり〜」

「何がやっぱりなのですか……」

私は嘆息する。

「英雄が活躍するのは当たり前です」

「そうじゃな、そうじゃな」

「だから、私がアリアケ様の行動を克明に観察し、報告することに他意はありません」

「その通り、その通り」

「ただそれは、彼の働きが素晴らしいうえに、目を離せない活躍をする時があるからです」

「わっしょい、わっしょい……」

「ナイア様！」

「うおっと」

ナイア様は「わっはっはっは」と笑ってから、

「じゃが、そなたがそこまで入れ込むのは珍しいじゃろ？」

と言った。

「別に入れ込んでなどおりません。ただ、あの方は強いだけではない、本当に色々なことを考え、見えておられる。優しいだけではなく厳しさも。それが少し好ましいと思うだけです」

「……………」

「ナイア様？」

急に黙ったので気分を害してしまったか？ と思った。

だが、

「くあく、マジではないか、マジではないか。修行にしか興味のないか。あのフェンリルがああ。いやはや、聞いている我の方が恥ずかしいものなのじゃな、恋バナというのは」

そう言いながらパタパタと自分を仰いでいた。

「ナイア様……………も結構ウブなのですな……………」

「あ、うん。恋愛とかしたことないから……。ちょっと今度教えてくれん？」

「だから別に恋をしてるわけではありません」

「頑固じゃなー。ちなみに、最近アリアケのかっこよかったと思ったシーンは何じゃ？」

「かっこいい？ 別に……。そういう目では見ていませんので……」

私は言下に否定する。

ちょっと耳が熱いが、気のせいであろう。

「じゃあ、かっこ悪いシーンを教えてみよ」

私は考える。

初級勇者ビビアならば100くらいかっこ悪いシーンを思いつく。

だが、同時にその横でそのビビアをフォローするアリアケ様が思い出された。

全体を見渡しながらも、しっかりと頼りない勇者をフォローする彼の姿は輝いていた。

「さすがアリアケ様……」

「あ、これは重症じゃな」

「い、いえ。違います。かつこ悪いのが隣にいるせいで相対的にかつこよく思っただけです」

そう言いながらも、一緒に食事をした時のことなんかを思い出した。

彼はこんな不愛想な私にも公平に接してくれる。

私が強い言葉を使っても、彼の返事はいつも柔らかく包み込んでくれるようだ。

あと細かいところで紳士的だった。

戦闘が終わった時に汚れた私の顔にハンカチを当ててくれたりする。

汚れるのには慣れてるから、最初は余計なこととしか思わなかったのだが。

今はそれがないと落ち着かない。

ケガがないか聞いてくれるのも、なんだかムズがゆいから当初は嫌だった。

今はやっぱり、それがないとそわそわとする。

彼のパーティーにいてることで、今までにない充足感を得ている気がする。

でも、



「別になんとも思ってません」

「そんなけ長い物思いしておいて、その結論はないのではないか！  
？ まあいいか、必要な情報もとれたし」

「？」

今の話に必要な内容が含まれていただろうか？

「わはは、こつちの話じゃよ。未来に備えぬといかんからな！」

それは冥王として職責の話。

でも、私はなぜか、ナイア様もつと未来を見るような瞳をされているように思った。

ルビーのような、深紅の瞳。

あるいは私が生まれた、地獄に蠢く炎のような色。

あるいは……。

「では他の情報も聞くとしようかな。私室で聞こう。書類がたまっておるのでな。付いて来るが良い」

「はい」

私はナイア様の後に続いて歩き出す。

地獄から召喚されてはや1年。

地獄の番犬と謳われた私を圧倒した存在に従い、私は今日も人について学ぶ。

「うむうむ愛も学んでいて我は嬉しい！」

「心を読まないで頂けますか？」

だが、目の前の人のことだけは、ナイア様他の人間と違つところが多すぎて、いまだに理解できないのだった。

239・ナイアにからかわれて顔を赤らめるフェンリルさん（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[無料](#)>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（o\*。）。（oペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願ひします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「ナイアとフェンリルはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 240・新たな一団は『彼』を求める

240・新たな一団は『彼』を求める

く??????

ザッザッザッザッ……。

荒廃した大地を歩く4人組がいた。

ボロボロのフード付きの外套をまとい、フラフラと歩く姿は明らかに行き場を失った流浪の民だ。

そんな流浪の民が、終末の世界においてどうなるかは決まっていた。

「おいおい、こんなところでフラフラしているなんて、命知らずな奴らだぜ」

「ひへへへ、まったくだ！ 最近はモンスターも強くて、なかなか旅人を襲う機会も減ったがラッキーだったぜ」

「おら、有り金全部と、それから食糧と水、全て置いておきな！ 命が惜しけりやあな!!」

どこからともなく現れた50人ばかりの盗賊たちが、すぐに彼らを取り囲んだのである。

滅亡種人類王国クルーシュチャにすべての人間たちがいるわけでは

ない。

こうした犯罪者などは王国より追放された。

それが徒党を組んで野盗となつて、滅亡しかけている同胞を襲撃しようとしているのだ。

皮肉な光景と言えた。

しかし、この時ばかりはいつもと勝手が違った。

こうした流浪の民というのは珍しくない。

そして、ほとんどの場合疲弊しきつていて、こうした盗賊に襲われれば悲鳴をあげるか、あるいは逃げようとするのが常である。

しかし、今回盗賊たちが獲物と見なした4人組は言わなかった。

いや、何かを囁き合っていた。

「いやあ、さすがにもう飽きました。何回目やねーん！ っちゅー話ですよ。さすがの私もそろそろ『成分』が切れてきたので、いい加減本気モードいいですか？」

「ま、まままま、落ちつくのじゃ。ただでさえ大地が沈んで大変なのに、これ以上大地を割ったり山を削るようなことはしては、色々マズイ気がするのじゃ。っちゅーか、儂が飛んでもいいのじゃが、めっちゃ敵が襲つて来よるからなあ。一旦陸路を選んだのじゃがなあ。致命的に選択ミスじゃったかなあ……」

「そそそそそ、そうですよ、お姉様。ここは一つ穏便に。穏便に行きましよう。それにその身は人妻ですし、あんまりイライラしっぱなしだと、いざあの人に会った時にしかめっ面で会うことになってしまいますよ。はい、僕としては笑顔で再会が良いと思います!」

「確かに。では私は少し身ぎれいにそろそろしておこうかと思いません。あ、戦闘はイライラしている方が済ましておいてください。ストレス解消になりますので、win-winの関係ですね」

「よく正妻を前に言えるのじゃ……。ドラゴンをして、人間って怖いのじゃーと思わせるのじゃー!」

そんな会話を繰り返す。

そして、野盗たちは完全に無視されていた。

彼らはこの荒野における強者であると同時に、王国を追い出されたはみ出し者たちだ。

だからこそ、こうして馬鹿にされることは絶対に許せない。

特に、今の会話で分かったのは、なんとこの4人は女性だということだ。

しかも、フードの下にちらりと見えた顔は、かんばせ目を疑うような美人ぞろいであった。

だとすれば、

「へっへっへっ、こいつは運がいいぜ!」

「今日は祝杯だな」

「俺はあの金髪の女がひひあっ!?!」

いいぜ、とそう続けようとした野盗の一人が、突如吹っ飛んで行った。

野盗たちの間を縫うように吹き飛んでいき、背後の森の中へと勢いを殺さず突っ込んでいく。

バキバキメキメキという、大木が折れる音、そして実際に遠目にも木が折れて倒れる轟音が鳴り響いていた。

一瞬、何が起こったか分からなかった野盗たちであったが、美しい、そして場違いなほど呑気な声音によって、理解することになった。

「困りますねー。私はもう売却済みなんです。あの方以外に指一本触れさせるわけにはいきかないんです。あくでも、ボクネンジン、なかなかアピールしても気づきませんからねー。うらめしやー」

そう言うのと同時に、はらりとフードが外れて顔が見える。

荒野にはとても似つかわしくない美少女であった。美しい金髪がゆるくウェーブした聖装をしており、優しい碧眼、口元には微笑を浮かべている。

聖母のようなオーラを醸し出していた。

だが、その容貌とは裏腹に、彼女の目の前には歪にへこんだ地面と、



若干の地割れが発生していた。

そして、彼女の拳からは、シューシューと音を立てて、擦過熱による煙が発せられていた。

誰が先ほどの現象を引き起こしたのかは明らかであった。

「な、何をしやがった!？」

「何って、決まっているじゃないですか」

彼女はやはり聖母のような笑みを浮かべながらも、シュッともう一度拳を振るう。

すると、風切り音がなると同時に、

「ぐわっ!？」

みぞおちを押さえて野盗の男達が数人崩れ落ちた。

「馬鹿な!？ 届いていないはずだぞ!？」

「ただの空圧ですよ。便利なんですよね、これ」

「それ、ドラゴンとかがやる技なんじゃけど……。あ、いや、何でもないのじゃ」

他の少女たちもフードを外す。

一人は少し背が低い、赤い髪と深紅の瞳が印象的な美少女であった。

次の人物は中世的な顔立ちをしていた。僕、と言っていたから少年なのだろうか。黒髪、黒目の整った顔立ちで、少し困ったように他の者たちを見ていた。

そして、最後の一人は青い髪に薄紫の瞳を持つ、生真面目そうな表情をした少女であった。しかし、先ほどの会話から、一番考えが読めない雰囲気がある。

「まあ、それはともかく何回目か忘れたが盗賊退治なのじゃ。倒せば倒すだけ、多分再会した時に褒めてナデナデ量が増えるはずなのじゃ。はふふん!!」

「なるほど。それは気づきませんでした。えーっと、お姉様もそれくらいは許す、という微妙な笑みを浮かべて下さってますものね。よーし、じゃあ僕も頑張りますよ!」

「なるほど。身ぎれいにしてばかりではネタが弱いかもですね。では頑張ります」

そう言っつて、少女たちが身構えた。

「しよ、正気か!? この人数を相手に!??」

野盗たちのリーダーがすごむように叫んだ。

相手は4人。

美しい少女たちがたった4人だ。

確かに一瞬にして数名が倒された。

だが、人数ではまだまだ圧倒しているのだ。負けるはずがなかった。しかし、

「や、やれ！ お前たち！」

「……」

「おい！ どうした！ お、お前らっ……え？」

リーダーは返ってこない返事に怒声を上げながら振り向く。だが、それによって嫌でも思い知らされた。

「なんじゃ、お前ら。全然動かんから逆に儂たらびっくりしちゃったぞ？」

「ちゃんと手加減されていて偉いです！ お姉様！」

「これではあの方に語る武勇伝としては弱いですね。すみません、回復するのでもう一度立ち上がってもらっていいですか？」

「さらっ怖い」と言つたよね、この将来の上司……」

金髪の少女が嘆息する。

それから、クルリとこちらを向き、微笑みながら言った。

「それはともかく、因果応報という言葉知ってますか？」

彼女はズズイと近づきながら言った。

野盗のリーダーは既にしりもちをついて、怯えることしかできない。

「食べ物と水……全部……じゃなくて、4人分で結構ですので、よろしくお願いします。あと、人がいる場所を教えてくださいね」

言葉は丁寧だが、否とは言わせぬ迫力に、野盗の男はガクガクと首を縦に何度も振ったのである。

## 240・新たな第一回は『彼』を求める(後書き)

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ)o\*)。)。o)ペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「?????????たちはこの後一体どうなるの?……!??」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 241・第3の魔王 月

241・第3の魔王 月

「大変じゃ！ 大変じゃ！」

どたばたとした様子で深紅の少女が玉座の間へ駆け込んでくる。

誰あろう冥王ナイアだ。

だが、こうした姿は珍しい。

常に冷静……ではないが、余裕があるのが彼女の特徴だ。

それがこつも慌てふためくとは。

「んだよ。てめえが集まわっていうから、こつやって『深夜』にも関わらず、多忙な超勇者であり救世主たる俺が来てやってんだぜ。くはははは！ 大船に乗ったつもりでいろや！ 慌てる必要なんてまったくなえ！」

「さすが初級勇者ビビアだ。それくらいの余裕が初級勇者には必要だ」

「初級初級言っつんじゃねえよ！ 超勇者かつ救世主様だっつってんだろおおおおおお！?!?!?!?!?!」

「いや、救世主はアリアケ様のことだ。お前はその不出来な弟子。あるいは御付きの者として民には認知されている。光栄なことだな。初級勇者よ」

「誰が御付きの者じゃ、くそがああああああ!？」

ビビアは相変わらず騒がしいが、おかげでナイアは少し冷静になったようだ。

「しょんべん太郎の様子を見ていたら、何だか余裕が出て来たわい。褒めてつかわす! さすがアリアケの弟子である! 道化役もこなすとは! いっそ、勇者はやめてピエロ役で就職するか? 給与もはずもう!」

「道化役なんてこなしてねえ! 俺は勇者だ! 勇猛果敢さで俺の右に出る奴はいねえ!」

勇者の自覚があることは良いことだ。

それに、

「確かにビビアが強敵に恐れをなさず、まるで無防備でつつこんでいく様子は勇猛そのものだ。時に蛮勇にすら見えるその姿は俺の予想すら上回るからなあ」

そうしみじみ言う。

「それは本当に相手の実力が見えていないだけだと思つのですが、アリアケ様」



「ははは」

フェンリルが冗談を言うので俺は思わず笑った。

そんな訳はあるまい。

ビビアの死をも恐れぬ勇氣には俺も評価しているのだから。

「で、何があったんだ、ナイア。俺たちを緊急で呼び出したのだから、相当のことが起こったんだろっ？」

俺の言葉に、ナイアは冷静に頷く。

既にこの場に慌てている者はいない。

ビビアのおかげだ。冷静に問題に対処する心構えが出来ている。

「星見と学者どもの報告によれば、月との距離が急速に縮まっているようなのだ。このままでは時を置かずしてこの星と衝突する」

「なるほどな。ふ、それはナイアも驚いただろうな」

「そうなのだ。さすがに想定していなかったのだな。まさか次の魔王が月イルミナだとは思っまい」

二人して頷く。

「落下してくるのですか、あれが」

フェンリルは若干固唾をのんだようだが、さすが歴戦の兵じゅわもの。

やはり冷静な様子で天を指さす。

神殿の壁は一部開け放たれている。

そこから天空が見えた。満天の星空の中に、煌々ジュジュと血のように赤く光る月イルミナがあった。

この星イシスとの距離が変化することで、そう見えるだけなのだろうが、それはこれから起こる凶事を暗示していると思えない。

「ひ、ひいいいいいいいいいい！？ つ、月が落ちてくる！？ あばばばばばばば！？ に、逃げないと！？ で、でもどこへ！？ ひ、ひいいいいいいいいいい！！ ひいいいいいいいいいい！！ ひいいいいいいいいいい！！ ひいいいいいいいいいい！！ ひいいいいいいいいいい！！ ひいいいいいいいいいい！！？！？！？」

「おいおい、ビビア。道化のフリはいい。俺たちは冷静だ。ふ、まあそんな鼻水と涎と涙を流させるような、生き恥のような姿をさせてしまう俺たちが不甲斐ないの言われればそれまでだがな」

「我にはガチのマジにしか見えぬが、救世主がそう言うのならそうなのであるう！ うむ！ その生き恥の演技！ 天晴である！ だが、そのままでは『体液全部抜く』みたいになるので、そこそこにしておくのじゃぞ、ビビアよ！」

「何だか初級勇者のことがちょっと可哀そうになってきました……。あまり英雄の中に一般人を放り込むものではありませんね。私でさえ、少し緊張しているのですから……」



「そうかー。冥王が妾めかけというのはアレじゃからな！ 諦めよう！  
またの機会に宜しく！ その点、フェンリルにはチャンスがあるな  
！ っらやまー！」

「何をおっしゃるのですか……。別に私はそんなんじゃないですか  
ら」

フェンリルが不愉快そうにプイッと顔をそむけた。

やれやれ。

「変なからかい方をするから拗ねてしまったらう。フェンリル、  
冗談だから、気にするな」

俺は苦笑しながら言う。

しかし、なぜかフェンリルは尻尾を立てて、ますます不機嫌そうに  
なる。

なんでだ？

「おー、ボクネンジンボクネンジン〜 らっららー」

隣で変な歌を冥王が歌っていた。

「ひいひいひい、デリアー！ デリアー！ プララ！ エルガー  
！ おおん！ おおん！ おおおおおん！！」

伴奏するように、ビビアの悲鳴（の真似だらう）が神殿に鳴り響い  
ていた。

「やれやれ。月が落ちるといふのに、気楽な奴らだ」

だが、だからこそ頼もしい。

俺は微笑む。

この大賢者アリアケが支援するに足るメンバーだと思ったのである。

……とはいえ、少しだけ物足りなさも感じるのだが。

それがなぜなのか。

疑問に思っまでもなかった。

だが、今はこのメンバーで何とかするしかなかった。

「では第3の魔王『月』討伐作戦を開始するでしょう」

救世主の俺の声を皮切りに、戦いの火蓋ひふたは切って落とされたのである。

とじろで、

「第3の魔王で良かったんだよね？」

「うむ！ もちろんである！ どうかしたのか？」

「はいや」

俺は微笑みながら、

「度忘れしたので確かめただけさ。なあ、ナイア？」

「うむ！ 誰しも忘れっぽいからな！ 我も時々忘れる！ ぬわっ  
はっは！」

俺は彼女の笑い顔を見て、同じく笑う。

なるほど。

第3の魔王か。

「まあ、了解した」

俺は早速次の行動に移ることにしたのだった。

俺が思った通りだとすれば、ジタバタしても始まるまい。

## 241・第3の魔王 月（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が2022/9/7同日に発売されます！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）。お\*。こッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとビビアはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 242・三十四重障壁作戦立案

### 242・三十四重障壁作戦立案

「月はこのイシス星に比べればはるかに小さくはある。4分の1くらいじゃな。うむ、どうじゃ、楽勝感、出てきたであらう?」

「出て来ねーよ! 絶望感が増して来た! 星がぶつかると聞いていたことねえよ。そんな勇者の仕事じゃねえよ。俺は(よわっち)魔王を倒して英雄になってチャホヤされるために勇者をやってるんだぞ!」

「だから今回は落下する月が魔王なのだ。受け入れる」

「そんなのありかよ!? っていうか、マジなの!? 本当にあのお空に浮かぶお月様が魔王なの!? なあ!?!」

ビビアが悲痛な声を上げる。

「アリアケ様……。あの、本当にこいつは勇者なのですか? 前々から疑問の思いが脳裏を高速で掠めまくるのですが」

フェンリルが半眼で、ビビアを指さしながら言った。

俺は微笑みながら鷹揚に頷く。

「ははは。正直、体液を色々垂らしていて、みつともないうえに勇者の風格は消失しているが、嘘偽らざる本音なんだろう。こんな風に皆の前でも本音をさらけ出せるというのも才能の一つだ。一見情けないかもしれないが、さすがビビアだ」

「一見というか、百見してもそういう感想にはならないのですが…」

「うむうむ、そなたらは余裕じゃな。では場も温まったところで作戦会議を進めようではないか。と言っても、やることは単純なので悩むことはない。安心せよ！」

「マジかよ!?! さすがナイア女王だ! ばんざーい!」

「うむ! だって、月が落ちてくるだけなんじゃもん。作戦も何も無いのだ。『受け止める』。ただこれだけである」

「このクソ女王が!」

「口を慎め初級勇者。後でパクパクの刑な」

「ひい!?!」

そんなやりとりを横目に俺は作戦の具体化を口にする。

「だが、並みの障壁では受け止められないだろう? 少なくとも数十の障壁がある」

「うむ! その試算をしているのだが、よく分からぬ! どれくらいの衝撃になるのであろうか。それによってなけなしのリソースを

「どれだけつぎ込むか決まってくる」

「うーん。4分の1と言ったな。だとすれば質量としてはこの星の64分の1だ。それが超高速で落下してくる」

「ほうほう」

「A級冒険者レベルの魔法使いたちが全力の魔法障壁を展開することを前提にしてだが、34重の魔法障壁が必要だろうか」

「す、すごいですアリアケ様。今、一瞬で計算されたのですか!？」

「これくらいは勇者パーティーのポーターとしては当然のことさ」

「当然ではないと思いますが……。そんなことが出来る方は見たことがありません」

「ははは、大げさだな、フェンリルは」

俺は反射的に彼女の白磁のような美しい髪を撫でる。

「ア、アリアケ様……」

「おっと、すまない。嫌だったか」

未来のフェンリルとは違って可愛らしい少女の姿で、なおかつ、どうにも撫でやすい箇所があるので、つい撫でてしまった。

だが、年頃の少女にしてみれば、俺のような年上の男に触れられるのは嫌だろう。

しかし、

「もっとしっかりと撫でてもらわないと困ります。義務を果たして下さい」

「へ？」

「フェンリルの頭を撫でるのは主人の役割ですから<sup>リーダー</sup>

なぜか少し頬を染めながら、少女は言った。

「おいつ、真の勇者パーティーのリーダーたる俺はっ……っ！」

「至福の時間だ。邪魔をするなら丸のみにするぞ」

ひいつ、という悲鳴が轟くが、フェンリルは構わずに俺の手を取って、頭を撫でさせ続けた。

やはりフェンリルは狼なので、頭を撫でられるのが好きなのだろうなあ。

「うむうむ。良いな、心が温まる光景である。同時に朴念仁の波動も感じる。まあ、そのまま続けて良いで良いのでもう少し作戦を詰めよう。三十四重障壁は何かしよう。リソースはほとんどなくなるが滅亡種となるよりはマシであるからな。して、アリアケよ」

「なんだ？」

なでなでしながら、俺は返事をした。

「そなたはどうする？ 障壁の展開を補助するのか？ 今作戦立案者として後方から全体を指揮するのも良いであろう」

「もちろん補助はするさ。それ込みの三十四だからな。だが」

俺はウインクをしてから、

「最終障壁の担当もしよう。俺の命をかけて、人類を滅亡から救済しようと思う」

「それは過重労働ではないか？ そなたの負担が重すぎるのでは？」

ナイアが言うが、俺は微笑みつつ、

「俺は救世主だからな。後ろでのほほんとしていたら、余計に居心地が悪いのさ」

その言葉に、一瞬ポカンとしてから、ナイアは呵々大笑しつつ、

「わはははは！ それは民たちの支えになろう！ 救世主が最後の砦となってくれるならば、皆、本来の力を出せるに違いあるまい。さすがはアリアケ。その役割を心得ておるな！」

「はい、さすがアリアケ様です」

ナイアとフェンリルが賞賛するようなことを言うが、俺は肩をすくめながら。

「人類最大のリソースを使わない手はないだろう？」

「言われてみればそうであるな、うわはははははは！」

「頼りにしています。アリアケ様」

ナイアとフェンリルが笑う。

俺も微笑みながら、

「落下地点はここから南へ100キロか。そろそろ部隊を移動させる必要がある。魔王イヴステイルの因子に汚染されたモンスターも出るから護衛兵も必要だしな」

「うむ、早急に準備にかかるでしょう。誰かある！！」

伝令兵が飛んでくる。

「救世主アリアケによる「三十四重障壁作戦」が立案された！これを我が滅亡種人類王国は採用し、断固として成功させる。詳細を指示する。まずは……」

矢継ぎ早にナイアが指示を下していった。

「さて、では俺たちも準備にかかるとするか」

「あ、ああん！？ お、俺たちい！？ お、俺もお！？」

なぜかビビアが意外そうな表情をする。

俺は首を傾げながら、

「おいおい、当たり前だろう?」

淡々と言った。

「初級勇者パーティーとして最終障壁の担当をするんだから」

「え”?”」

当たり前前に、ビビアは再度驚いた顔をした。

「さっき言ったじゃないか。リソースは限られていて無駄にできないと。お前ももちろんついて来るんだ。というか、お前がリーダーだからな。最終障壁を担当するから、一番死亡確率が高い。まあ、いつものことだから、お前は気にも留めないだろうがな」

俺は微笑みながら言う。

「そ、そんな!? お、俺はいかねえぞ!? そんな危険な場所になんて行くもんか。きええええ!!!」

ビビアが奇妙な鳥のような奇声を発するが、残念ながら選択の余地などない。

「お前としては銃後という最終防衛ラインで民を守りたい気持ちなんだろうが、さすがに今回の最終防衛ラインは星の落下地点そのものだ。勇者の自覚があるのは結構だがな。フェンリル、すまないがお前の力も借りたい。宜しく頼む」

「お任せくださいアリアケ様。ビビアと一緒にあなたの盾になりま

しよう。あと、責任をもって、こやつを月落下地点まで連れて行きます」

「や、やめるおおおおおおおお！?!?!?!?!」

「ははは。そつだぞ、フェンリル。ビビアが責任を破棄して逃げる訳ないからな」

「はあ、ええ、まあ、そつですなえ」

フェンリルがなぜか遠い目をしながら言った。

その理由は分からないが、ともかくこうして俺たちは第3の魔王『月』から星を守る『障壁作戦』を開始したのである。

俺の立案した作戦に人類の命運がかかっていると言えば重く聞こえるかもしれないが、

「まあ、いつものことか」

俺は苦笑しつつ、出発の準備を整えるのであった。



## 242・三十四重障壁作戦立案（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻が本日！！発売されました！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひ<無料>読んで下さいませ（お\*。）。（お\*コミック）

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

### 【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケとビビア、フェンリルたちはこの後一体どうなるのっ……!？」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 243・フェンリルさんは暖を取りたい

243・フェンリルさんは暖を取りたい

「うーん」

チチチチという小鳥たちの鳴き声で目が覚める。

第3の魔王『<sup>イルミナ</sup>月』の落下地点へと王国から出発した最初の朝である。

しっかりとした天幕に、組み立て式の簡易ベッドを設えられた部屋の中の居心地は悪くない。

ただ、宇宙癌ニクス・タルタロスの襲撃によって気象は狂っていて、気温は下がっており肌寒さはあった。

いや、あるはずだった、が……。

「あれ？　なんだか温かいな」

ベッドの中が妙に温かいことに気が付く。

カイロを入れた記憶もないのだが……。

そう思って掛布団をめくると。

「うーん、まだ眠いです……もう少しだけ眠らせて、すや……」

「……」

絹のような美しい髪と、そこから生える可愛らしい耳がぴよこんと生える生き物がいた。

「うーん、どうしたものか」

俺は冷静になるように努めることにした。

「昨日は特に普通に眠りに就いたはずだ。少女が訪ねて来た記憶もない。ふーむ、これは難問だな」

久しぶりに頭を悩ませた。

そして、

「なるほどな、これは夢か。なら、そろそろ起きないとなあ」

だが、

「離れられると寒いので、もう少し身体を寄せてください、アリアケ様」

「ん？ ああ、すまない」

怒られてしまった。

言われた通り身体を寄せた。

「夢なのに温かいなあ」

「はい」

彼女はモゾモゾと更に身体を俺にくっつけてから、解説するように言った。

「私の本来の姿はフェンリルという地獄の魔獣です。その形態であれば寒さなど感じません。ですが人間形態ですと若干寒さも感じます」

「体毛なくなるもんな」

「それはデリケートさに欠ける発言ですね。以後、禁止とします」

「なるほど」

アリシアみたいなことを言うなあ、と思ったりした。

そろそろ会いたいものだ、と自然と思う。

「くんくん、別の女のことを考えている匂いがしますね」

「いや、妻のことをな」

「なるほど」

ぐいぐいと、更に身体を押し付けて来た。

若干痛いぐらいだ

「痛い痛い」

「それは良かった」

何が良かったのだろうか。

ただ、すぐにその痛いのはやめてくれたが。

「で、何でフェンリルが俺のベッドにいるんだ？ 自分のベッドがあるだろうか？」

「寒かったからです」

えーっと。

「ちゃんと簡易暖炉もあったと思うが」

「そうですね。それも悪くありませんが、人肌で温まるのが一番いいかと判断しました」

「なぜそんな判断に……」

「それは……」

彼女は言いかけながらおきると、潔いほどあっさりとしてベッドから降りた。

「暖を取るには効率が良いからです。身体的にも。心的にも」

「身体はともかく、心も？」

よく分からん、と俺が首を傾げていると、彼女は答えずにすたすたと出口へと歩いて行った。

「さ、それより、今日も移動です。早く起きて準備しましょう。アリアケ様」

「ん？ ああ、そうだな」

彼女の言っていることの99%はよく分からなかったが、俺はすぐに頭を切り替えた。

なぜなら、妻のアリシアが言うことも、時々分からないことを思い出したからだ。

かくも、女性の行動は理解できないことが多い。

きつと複雑な事情や考えがあるのだろう。

何やらすぐ『ボクネンジーン』という波動が届いたような気がしたが、きつと気のせいだろう。

俺は彼女に続いて天幕の外に出たのだった。

月の落下まで、もう時間はない。

## 243・フェンリルさんは暖を取りたい(後書き)

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひ読んで下さいませ(o\*。)。oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中!!!

### 【応援よろしくお願いします!】

「面白かった!」



「続きが気になる、読みたい！」

「フェンリルさんはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

244・大賢者による防衛指揮 前編

244・大賢者による防衛指揮 前編

空の彼方。

だが、いつもならばぼんやりとした美しい白き月が、今ははつきりとした相貌を俺たちに見せつけていた。

まだまだ遠い。

だが、本当に近い。

そんな不思議な光景が、俺たちの上空で展開されていた。

「星見どもによれば、ここが月の落下地点の、その中心部分となる」

「ひええええええ……。に、逃げないと……」

「言うておくが、どうせどこに逃げても助からんぞ？ 何せあの月が落ちてくるのだからな。ここは一つ、救世主の『障壁作戦』をまんなまと成功させようではないか！ わっはっはっはっは！」

「どうしててめえはそんなに楽観的なんだよ！？ 月だぞう！？ もっとビビれ！ 俺だけビビってるみたいなのは我慢ならねえ！」

「わははは！ 滅亡種の女王ともなれば、世界の終わりなど慣れたものだ！ これもその一環である！ だが、今回はなんとも心強い味方がある！ しかもとびつきりの、と来た。本当ならば我とて多少ビビッておったかもしれないが、ここまでラッキーな状態でことに向かえたのであるからして、情けない態度など取れぬ！」

「ふ、ふん！ まあ、確かに。俺のような最強の助っ人が未来から来たとなりやあ、確かにお前がビビらねえ理由に」

「あまり過大な評価をされてもな。戦うのはお前たちでもある。俺はほんの少し手助けするだけだ」

「ふふふ、世界の危機を未来で何度も救った英雄が、ちょっと手助けしてくれるなんて、胸あつ以外の何物でもない！」

「おい、俺のことを忘れてんじゃねえぞ！ この俺こそが超勇者つ……」

「ええ。それに既にアリアケ様はクルーシユチャの民たちの希望となってます。あなたがいなければこの戦いに参戦したがない兵士たちは多かったですよ」

俺は頷き、

「まあ確かに。人間を動かすのは力だけじゃない。心が伴わなければ、そもそも戦いにならないとうわけか」

「その通りです。良かった。やっとご自身の影響力を少しは理解してくださったようですね」

「ふ。だが、俺だけの力じゃないさ。このビビア」

「そうだ！ 俺だ！ 俺の存在こそが人々の希望でっ……！」

「子供たちに大人気だ。ああも子供たちと等身大で遊べる英雄などそうはいまい。大したものだろう？」

「あー、えっと、はい……。まあ確かに私ですと少し怖がられたりしますからね」

「俺もだ。その点ビビアは子供に人気がある。泥団子をぶつけられたら、まるで本気で怒っている演技をしながら、追いかけてりするからな。子供たちも楽しいんだろう」

人魔同盟学校の校長をしている関係上、子供に好かれるのは一筋縄ではないかないことは知っている。

それをあっさりと、しかも見知らぬ土地でやってのけるビビアはさすが勇者を名乗るだけある。

「ぶぎいいいいい！ 思い出したらむかついてきた！ 街に帰ったら俺の特性泥団子を喰らわせてやる……！」

「ふっ。まったく、子供相手の遊びにこつも真剣になれるのだからな。俺などは遠巻きに眺められるか、握手を求められる感じで少し寂しいと思っているくらいだというのに」

「いえ、アリアケ様。それは子供相手に真剣しんけんなのではなく、マジ、になっているだけのように思うのですが……」

「？」

フェンリルがよく分からないことを言う。

聡明な彼女のことだ。きっと哲学的な意味合いなのだろう。

さて、それはそれとして。

「魔法使いたちの配置は完了済みだな？」

「うむ。34人の人類に残された魔法使いたちを連れてきた。月の落下まであと12時間だが、所定の位置で既に待機を命じている。何が起こるか分からぬゆえな。そして、アリアケ、そなたの支援スキルを待っている状態だ」

「了解した。っと、それはともかくとして、早速来たようだ」

俺が察知すると同時に、フェンリルも何も見えない空の彼方を見た。

「ああん？ 何が来たってんだよ？ なーんにも見えねえぞ」

聖剣にもたれかかって、ぞんざいな口調でビビアが言った。

「気配察知スキルに反応した。レッドドラゴンだ。恐らく100匹程度」

「私の耳も同じ気配を捉えています」

「うむ！ やはり来おったな！ 魔王イヴステイトルの因子に支配

されたモンスターどもであるが、別の魔王にも加勢するということがこれで証明されたというわけだな！」

「あわ、あわわわわわわ！」

「まあ予想できたことだ。そのために勇者パーティーがここにいるのだからな」

「然り！ 楽勝で退けてくれようぞ！」

「ええ。接敵まで1分。そろそろ肉眼で見えます。全軍！ 反撃準備！！！」

「はわ、はわ、はわわわわ！！！」

全員が、各々の武器を構える。

そして、フェンリルが言った通りおよそ1分後、100匹以上のレツドドラゴンが、第3の魔王『月』への迎撃作戦を邪魔するために、襲来したのであった。

「うむ！ 現場は久しぶりだが、やはり運動は良い！ 見よ、この冥王ナイアの深紅の鎌の切れ味を！ あとで全部ドラゴンステーキにしてむしゃむしゃしてやるうぞ！」

「スキルもまだ使っていないのによくやる。無茶をするな。 攻撃

カアップ　スピードアップ　竜殺し　」

「おっと、久しぶりなのではしゃぎすぎたの！　だが、これは凄いな！　見よ、冥王ナイアちゃん、ここにありじゃ！」

掛け声はまるでしゃいだ子供のようであるが、彼女が宙を舞い、大鎌を閃かせるたびに、レッドドラゴンたちの首が次々と胴体から離れる。彼女だけで10体以上を既にしとめた。

「よし！　ノルマ完了である！」

着地すると同時に大地に鎌をドンと大地に突き立ててメリアが言う。

周囲はレッドドラゴンの亡骸と、彼らの屍山血河、何よりその中央にたたずむ冥王ナイアの存在によって、紅一色に染まる。

見る者が見れば、悍ましい光景だ。

だが、人類の危機にあつて、これほど勇気を与える光景はない。

「ふざけんな！　もっと働け！」

ビビアが文句を言う。

気持ちは分かるが、

「そなたが働かんか。我だってちょっとは手を抜きたい。いつも頑張りすぎるとワークライフバランスが崩れちゃうじゃろ？」

「そんな場合か！？」

「そんな場合よ。これくらいは雑魚ではないか。そなたが何とかせい」

そんなことを言っている彼女へ、単体で突撃してきたドラゴンが大口を空けて丸のみにした。

「ひえええええええええ！？ だから言ったのにー！？」

ビビアの叫び声が響くが、

「だから、我はお休みじゃとっておろう？ そなたらは英雄。役割が違うじゃろうに」

何もなかったかのように、彼女の身体が現れる。

彼女を飲み込んだように見えたドラゴンの肉体は両断されて、その間に立つナイアは微動だにしていない。

「アリアケの支援スキル凄いの。我の攻撃、見えんくらい早かったわ、ぬわははは！」

「……………」

呵々大笑するナイアにビビアが絶句しているが、余りぼーっとしている余裕はない。

「ん。とりあえずドラゴンどもが距離を取った。遠距離戦に切り替えるつもりだろう」



「な、なにいい!? も、物陰につ……!!!!」

「フェンリル、ビビア、頼むぞ」

「承知した」

「へ?」

「先ほどのスキルに加えて……。回数付き回避 付与、火属性  
攻撃耐性 付与、即死無効」

「ありがとうございます、アリアケ様。よし、行くぞビビア」

「い、いやだ! お前の背中になんか乗りたくない!!」

ビビアが首をブンブンと振る。すると、フェンリルが呆れた声で、

「私の背中にお前など乗せるわけないだろう。私の背中は今もうアリアケ様と決めて……。ごほん。ともかく、お前は自分でドラゴンたちの所まで行け」

「む、無理に決まってるだろう! それに前みたいに無理やり突っ込ませようとしても無駄だからな! 俺は行かねえ! 命大事になんだあ!」

ふうむ、どうやら。

「ビビアは一番困難な最終防衛戦で戦うことを希望しているようだ。さすがの覚悟だな」

「はあ、まあ、そういうことですかねえ。ですが分かりました。攻撃する方が楽なのですが」

「へ？」

俺とフェンリルの会話に、なぜかビビアはキョロキョロと視線を行ったり来たりさせる。

今更、確認するほどのことではないというジエスチャーだろう。

ふ、さすがだな。

俺は彼の覚悟をすぐに理解して、次の行動へ作戦行動へ移った。

## 244・大賢者による防衛指揮 前編（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[<無料>試し読み](#)だけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（o\*。）。（oへコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中!!!

### 【応援よろしく願います!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケやビビアたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

245 ・大賢者による防衛線 後編

245 ・大賢者による防衛線 後編

ビビアの覚悟を無駄にするつもりはない。

俺はすぐに行動を開始する。

フエンリルには遠距離からブレスを吐いて来るドラゴンたちの相手をしてもらうが、100匹はさすがに多い。

それを見越してビビアは囿になると言ったのだ。

「囿役は頼んだぞ！ ビビア！！」

「は、はあ！？ 誰もそんなこと言っちゃっ……！！」

「スキル使用！ 挑発 を付与！！」

その瞬間、

ボン！！！！！！

という音を立てて、ビビアの髪の毛が真っ赤でトゲトゲなヘアスタイルとなり、無駄に凶悪なオーラがあふれ出る。

ビビアのマントも無駄に重力を無視するようにひるがえり、嫌でも目にとめる様相に変身した。

それを目にしたドラゴンのうちの半分が、その自分たちを舐めた挑発的な恰好が我慢ならないとばかりに、ビビアへと殺到してくる！！

『キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

「う、うわあああああああああ！？ な、なんで俺の方に！！！！！！？ クソどもが！ 空飛ぶいきがりトカゲの雑魚助のくせに！ この最強勇者ビビア様にたてつくんじゃねーよ！ おとなしく地面を這ってやがれえ！！！！」

自分の姿がどんな風なのか見えていないビビアは、突然襲撃してきたドラゴンたちから距離を取る。

だが、さすがだ。

役割は忘れていない。

ビビアは大急ぎで後退しながら、ドラゴンたち相手に口汚く罵ののしたのだ。それによって、挑発の効果を更に増幅させようとしているのだらう。

……だが、それにしても凄い効果だな。

「せいぜい釣れるのは10体程度かと思ったが……凄いな。どうしてだらう?？」

俺は首を傾げつつ、

「ふむ、やはりビビアが意識的に聞くに堪えない罵声を発したりして、敵を引きつけてくれていているからか」

俺は納得して、感心した。

戦場をコントロールする才能は、何も俺のように万能というだけではないということがよく分かる。

「あいつのような、知略を用いた戦い方もあるのだなあ」

「いえ、いつもあんな感じだと思いますが……」

隣のフェンリルが何かぼそつと呟いてから聖獣の姿へと変身した。

そして、たちまち、遠距離から攻撃しようとしているドラゴンの元へと肉薄する。

彼女もブレスを放つつもりなのだ。

あちらは彼女に任せておいて大丈夫だろう。

おかげでこちらに集中出来る。

「よし、ビビア、お前のおかげで敵戦力の分断に成功した！ この隙に一掃するぞー！」

『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

「ひぎゃああああああああああああああああ！？」

「おっと、無敵 付与」

50体からなるドラゴンたちがちょうど一斉にブレスをビビアへ発射したところだった。

山をも溶かすブレスを一身に浴びて、ビビアが阿鼻叫喚の悲鳴を上げる。

が、

「ふ、ふひいいい！ ふひひいいい！！」

「ふ、甘いなドラゴンども。初級勇者パーティーを舐めないでもらおう」

ビビアは健在であった。

むしろ鼻息荒く武者震いをしながらたたずんでいる。地面は融解して、クレーターが出来ており、その中心にて、だが。

彼のドラゴン50体を前に一步も退かない姿勢が鮮明に見えた。

だが、それにしても剣くらい抜いたらいいとは思っただが……。

「自分は盾なのだという心意気の現れなのだろうな」

俺は微笑む。

三十四重障壁作戦のために、自分が魔法使いたちの盾となり、攻撃



をさせないことこそが、今作戦の成否を握るということをよく理解しているのだろう。

とはいえ、心意気は買っつが、攻撃をしなくては相手を倒すことが出来ないのも事実。

「よし、行くぞ！ ビビア！ 次のブレスまで10秒はある……！」

俺はクレーターの中心から動かないビビアに声を掛けた。

「い、嫌だあ……！」

「だが、もう 無敵 は切れているぞ？ 攻撃しないと死ぬが……！」

「は、早く引き揚げろ……！」

「ふ、了解だ……！」

あれだけのブレスをくらっても戦闘意欲が高いことに感心する。

そして、

「空を飛んでもらってもいいが。お前にはこっちの方がいいだろう。スキル 地形操作……！」

「あ、ああああああああああああああああああ……！！」

『ドゴツゴオゴオオオオオオオ……！！……！！』



まるでやけくそにすら聞こえる気合の入った、勇者固有の必殺技を連続で放つ!!

『ギ、ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアア!???!?!?!!』

風よりも早く岩場を駆け抜け、致死の一撃を連続で繰り出すビビアの聖剣によって、ドラゴンたちはまるで虫か何かのように大地へと落下してゆく。

「おお、凄いな! フエンリル あつちも決着が付きそうじゃし。さすが勇者パ  
ーティーである!」

隣にやって来たナイアが笑いながら言った。

ああ、と俺は頷きながら、

「俺のスキルで大幅に増強された聖剣による攻撃とはいえ、ビビアの完全な状況判断が無ければこうもうまく一掃することはできなかつただろう」

そう言っただけでやはり微笑み返のだった。

「あ、うーん、まあそうじゃな。うむ、まあアリアケのそういう視点も斬新で良いのかもしれない!」

「?」

俺は首を傾げる。と、そこへ。

「ひい、ひい……お、終わったぞ、はひ、はひ。ばたん」

疲労困憊といった様子のビビアが戻ってきた。

さすがに50体はきつかったのだろう。

同時に、

「こちらも終わりました」

フェンリルも戻ってきた。

ビビアに比べると特に疲労した様子はないが、さすがに返り血まではかせなかつたのか、顔が汚れていた。

そのことを指摘すると、

「ええ、そうですね。汚れています。ですが困りました。ハンカチをもっていませんので」

そう言って、目を閉じて、顔を「ん」と少し突き出してきた。

時々、汚れているときに顔を拭いているので、そういう意味だろう。

ただ、

「すまない、俺の持っているのも今の戦闘で少し汚れたみたいだな。誰かの代わりに……」

「それでいいです」

「いや、しかし汚れて」

「い・い・ん・で・す」

そう言っつて、更にズイと顔を突き出してきた。

「えーっと、本当にいいのか？」

「はい。むしろ、はい」

彼女はポーカーフェイスなので感情が読めないが、まあ、「いい」と言っているものはいいんだろう。

そう思っつて、彼女の顔についた返り血をぬぐった。

なぜか隣でナイアがニヤニヤと笑っていた。

「なんで笑っているんだ？」

「にゅふふ。何でもなし。これは私の楽しみであるから秘密である」

「？」

ふーむ、よく分からんが、まあご機嫌そうなので放っておこう。

さて、

「とりあえずこれで第3の魔王には専念出来るかな？」

そう人心地つこうとした、その時であった。

「た、大変です！！！」

伝令兵が顔を真っ青にして、冥王ナイアの元へ駆けて来たのである。

そして驚愕の言葉を口にした。

245・大賢者による防衛線 後編（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[<無料>試し読み](#)だけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（\*。）。[コミック](#)

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケやビビアたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



246・閑話 フェンリルさん懐き始める 〈魔王イヴステイト  
ル戦前〉(前書き)

小説5巻・コミック2巻刊行記念エピソードです！

第231話「魔王イヴステイトル」戦の直前のフェンリルとアリア  
ケのイチャイチャするだけの『閑話』となります！

お楽しみください！！

246・閑話 フェンリルさん懐き始める 〱魔王イヴステイトル戦前〰

246・閑話 フェンリルさん懐き始める 〱魔王イヴステイトル戦前〰

「ふう、あらかた片付いたな」

「ああ、そのようだ」

「はあはあ、ぜひぜひ、はひ、はひいいいいい」

俺たちは順調にダンジョン攻略を進めていた。

そろそろ魔王イヴステイトルとの戦いとなる。

だが、ここまでかなりのスピードで攻略を進めてきている。

一旦、休息をとることも必要だろう。

「それにしてもアリアケ殿の戦闘指揮と支援スキルでこうもスムーズに攻略が進むとは……。あなたには驚かされっぱなしだ。本当に凄い方だと痛感している」

「ははは。大げさだな。俺は後ろで軽くフォローしているだけだ。フェンリルの実力さ」

「はあ……。こっちは本気で言っているのだが……。ま、だが、そうやって謙遜するところも賢者の賢者たるゆえんなのかもしれない

な

そう言っつてフェンリルはめったに見せない微笑みを浮かべる。

「おい、俺の実力のおかげだろうが！　ふうふう、はひい！」

「お前はいいから息を整えろ。あと。私は今、アリアケ殿と会話をしているんだから割り込むな」

「なんだとお！！」

「ははは、仲が良くて何よりだな」

「アリアケ殿にそう言われると、何だか余計に不愉快だな。んん？　何でだろうか？」

「？　さあ」

賢者の俺にもよく分からない。なので一緒に首を傾げた。

「ま、何はともあれ、もうすぐ魔王との戦いになる。体力の回復に専念してくれ。三交代で寝ずの番とする。それで順番だが……」

「俺が一番働いたから俺が先に眠るぞ！　いいな！　ふがあー！」  
すぐにビビアが横になった。

やれやれ、まだ火も起こしていないというのに。

「確かにお前の一番被弾が多かったな、下級勇者」

フェンリルが半眼で言うが、

「ははは。それだけ俺たちのために奮闘してくれたということさ。それに、彼はまだまだ修行中の身だ。大目にみてやってくれ。伸びしろがまだまだあるということなんだしな」

そう俺は笑いながら言う。

火をおこす。ぱちぱちと弾ける音がした。無論、モンスター除けのアイテムは使用している。

「アリアケ殿は寛容だな。さすがだ。ここ数日だけでも学ぶことが本当に多い」

「誰にだって良い所も悪い所もある。俺にもいい所があったのなら良かった。さあ、フェンリルも休むといい」

「私はこのままでいい」

「え？」

俺は首をかしげる。彼女は人外ではあるが、普通に眠るし、食べる。だから、

「ああ、腹が減ったのか？ なら簡単な食事を作ろうか？ シチュ  
ーとパンくらいならすぐに用意できるが」

「す、少しアリアケ殿と話をしたい」

「俺と？」

よく分からない理由にもう一度首を傾げた。

静寂の中ではちばちという火の爆ぜる音だけがよく響く。

火のせいかわ女の表情が赤らんで見えた。

「アリアケ殿にお礼が言いたくてな」

「お礼？」

「ああ」

彼女は頷いた。

「私はずっと一人で戦って来た。もちろん味方の兵士たちは沢山いるが、背中を預けて戦えると思った相手は一人もいなかった」

「俺も頼りない男だと思うが」

「とんでもない！ おっと、馬鹿が起きてしまう。せつかくの時間が台無しになる」

彼女は大声で否定の声を上げた後、何かを聞こえない声で言うてから、

「正直、不安だった。冥王ナイア様は優れた女王で強いが戦士ではない。王は戦場に立つべきではないしな。だからずっと一人だったし、これからもそうだと思っていた。でも、あなたが来てくれた」

彼女はやはり焚火の火で顔を赤くしながら、

「ありがとう。私にとって、あなたは英雄だ。まさか二人で戦うのがこれほど楽しいことだとは思わなかった」

いや、三人なんだが、と言おうと思ったが、ぎりぎり黙るのが正解だと思って沈黙した。

「私だけの英雄にしておきたいところだが、まあ、それは余りに我儘だ。だから……」

そう言っただけで彼女は身を寄せて来た。

「今だけは私だけの英雄になれ、アリアケ殿」

そう言いながら、彼女は俺の膝の上に、顔をうずめる様にして、頭を乗せる。

「顔が下向きだと息苦しくないか？」

「朴念仁なのが、私の英雄様の、玉に瑕なところだな」

「？」

よく分からず、俺は何度目かの首をかしげる仕草をした。

だが、これはこれで俺にとっても感慨深いものがあった。

未来において、俺はフェンリルが狼の姿となった時、その体毛にも

たれて眠るのが好きだった。

今はまるでその逆だった。

俺に心を許して、幼い頃のフェンリルが寝息を立て始めている。

「俺の方こそ、お前のような優れた戦士に頼られて光栄だ、フェンリル」

そう言って、彼女の美しい白銀の髪を撫でながら、俺も微笑んだのだった。

顔が少し汚れていたので、ハンカチで起こさないように優しく拭う。

パチパチという火の爆ぜる音を聞きながら、油断すれば死ぬダンジョンの深層にて、俺たちは穏やかな休息をとったのである。





「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケとフェンリルはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 247・第4の魔王 枯死ユグドラシル

247・第4の魔王 枯死ユグドラシル

「エルフの森の長から緊急の連絡がありました！ 世界樹ユグドラシルが枯死した模様です！！」

「ぬわんと！？ それは一大事ではないか！？」

伝令兵の言葉に、ナイアがギョツとした表情を浮かべた。

それはある意味、月が落ちてくることを告げた時よりも、驚愕していると言っても良い表情である。

「おいしいい！ 今は月の落下の方が重要だろうが！ 世界樹高何だかしんねーが、んなもんどーでもいいだろうが！」

「はあ、お前は本当に何もわかっていないのだな」

フエンリルが嘆息しながら言った。

一方の俺はフォローの言葉を口にする。

「そう言ってくれるな。俺の時代、つまり未来においては枯れてしまった世界樹が、エルフの森で大切に保護されている。いちおう文献には残された知識ではあるが、俺や彼女アリシアのように学ぶ意欲がない者にとっては余りなじみがない存在かもしれない」

「学ぶ意欲がないのは勇者として致命的では？ まあ、アリアケ様が勤勉であることは分かりますが」

「ん？ ああ、まあ……今はその議論は置いておこう」

「どついつ意味だこらあ!？」

疲れてへたりこんでいる割には、文句の声だけは大きいビビアのことは置いておいて、俺は言葉を続ける。

何せ、

「ビビア、実は世界樹には大きな役割がある。何かわかるか？」

「はっ！ 知らねえなあ」

「この世界のマナ生成だ」

「な、なにiiiiiiiiiiii!？ はあ!？ おつかしいだろうが!？ マナは自然に発生すんじゃないのかよ!？ 現に俺たちがいた未来でもマナは普通にあつたらうが!？」

「まあ、間違いではない。確かに俺たち生き物の体内にも魔力が存在するからな。そして、その魔力は死ぬときに放出される。つまりマナとなる。宇宙癌ニクス・タルトロスは、その生死の繰り返しを早め、マナを早々に星へ充足させようとしたわけだな。だが、本来、この過去において、つまりこの神代においてマナを供給していたのは『世界樹ユグドラシル』なんだ。そして、その世界樹が今枯死しようとしている。いや、もう枯死したのだろう」

「な、何が起こるってんだよ!？」

「決まっている。マナの減少……。いや、違う。これは……。魔王なのか?」

「魔王? はいい? 魔王は上空を今覆いつくそうとしている月なんじゃねえのかよ!？」

ビビアが叫ぶ。

「確かに、私も不承不承ですが、このビビアに同意します。魔王は既に空に顕現しています。アリアケ様」

彼らの指摘は間違いではないが、

「もっと柔軟に考えろ、みんな」

「なるほど、そういうことが、アリアケよ!」

「そうだ」

俺は頷く。

「柔軟に……。なるほど、そういうことですか」

フェンリルは若干青ざめたように頷き、

「いいから説明しろよ! 仲間外れはよくねーぞ! おら!」

ビビアは顔を真っ赤にして声を張り上げた。

俺は賢者として答えを与える。

「第4の魔王・枯死世界樹ユクドランシルが誕生した。第3の魔王月イルミナと共闘するつもりだろう」

「魔王が共闘！？ 卑怯すぎんだろっか！？ っていうか、枯死した世界樹ユクドランシルが何をするってんだよ！？ しょせん木だろうが！？」

俺の考えを、冥王ナイアが代弁する。

「恐らく、マナの吸収であろう。マナの放出が出来るのならば、当然吸収も出来る」

「は？ それはどういっ……」

「じゃーかーからー。この星のマナを全部吸い上げるっちゅーてるのじゃ。現代の魔法使いどもは魔法を使えんようになるし、マナで筋力を強化していた戦士たちも軒並み戦力低下する！ っていうか、ぶっちゃけな、全員使い物にならぬ！ この神代と言つのは『マナ』だよ！ すなわち魔力を利用することで戦力を底上げしてきたのだ！ 未来人のそなたらには分からぬだろうが、神代の人間は生身ではレベルが低すぎて、とてもモンスターと戦うどころではないのだ！」

「俺たちはこの神代の人間が1000年間レベルアップした後の姿だからな。例え1年で1レベルしかアップしなくても、1%強くなるというのなら、1000年後には……ビビア、何倍の力になるか分かるか？」

「はあ？ まあ2倍とかか？」

「2万倍くらいだ」

「……は？」

「2万倍だ。それが俺たち人類のそもそものギフト才能なんだよ、ビビア。星神のイシスも言っていただろう？ 人間の強さはこのレベルアップにある。そもそも、彼女は1000年後に宇宙癌を倒すことを期待して、眠りについたのだからな」

「興味深い話ではあるが、しかし、この状況は相当なピンチじゃな。マナが急速に減少しておる。なるほど、第4の魔王は良い仕事をしておる。我は元々メツチャ強いから戦えるし、フェンリルも元々アビスから召喚したからマナを自己清々するから問題ない。じゃが」

「三十四重障壁作戦は無理だな。作戦はA級冒険者クラスの魔法使いの多重障壁による月落下防衛だった。だが、マナがないなら、そもそも俺の支援で増幅することもできない」

「ひいひいひいひい！？ 終わりか！？ 終わりなのか！？ 人類は滅亡するのかあ！？！？！？」

ビビアの悲鳴が戦場に轟いた。

その絶望の声を聞いた兵士たちも、事態を察してどんどん戦意を落としていく。

俺と言う救世主によって辛うじて持ちこたえていた精神が、ビビアの悲鳴によって一気に打ち破られようとしていたのだった。

「滅亡か」

と、そこでナイアが落ち着いた声音で、天空を覆わんとする第3の魔王の光芒を見上げながら呟く。

「のう、アリアケ。滅亡とは何によってもたらされると思いつ…」

そう問うてきたのである。

## 247・第4の魔王 枯死ユグドラシル（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[<無料>試し読み](#)だけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（o\*。）。（o>eコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中!!!

### 【応援よろしく願います!】

「面白かった!」



「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケやビビアたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

248 ・冥王ナイアが語る人類滅亡のロードマップと賢者の余裕

248 ・冥王ナイアが語る人類滅亡のロードマップと賢者の余裕

「滅亡の定義か」

ナイアの言葉に俺は脳裏に幾つものパターンを浮かべた。

すると、すぐにビビアが言う。

「はあ！？ まさに今かそれだろうか！！ 魔王が圧倒的な戦力で  
せめて来て、俺たちは殺されちゃうんだ、うわーん！ デリア  
デリアー！」

「お口にチャックしておけ、まったく」

「ふがー！ ふがー！」

フエンリルに口の中へ襷褌雑巾のようなものをツッコまれて黙らされたビビアであった。

彼の意見は分かりやすく、正しいように思えるが、

「それは違うのだぞ、ビビア」

「ふんぎー！ はにはひがふってんだほ！」

何を言っているか一切聞き取れないが、何を言っているのかはよく分かった。

ナイアは独り言のように呟く。

「人を滅亡させるものは、圧倒的な戦力などではない。強大な敵などではないのじゃよ、ビビア。なぜなら」

ナイアは言葉を続ける。

「最後、人を最後滅亡させるのは、人自身に他ならないのだからの」

「すみません、私には分かりかねます。どういう意味なのですか？」

フェンリルが素直に聞いた。

分からないのも無理はない。俺は少し補足する。王の話というのは分かりにくいというルールでもあるのだろうか？

「滅亡や全滅と聞けば、それは魔王や邪神などの、人間の及ばない破壊力によって、人間が滅ぼされることをイメージするのが普通だ」

「はい」

「だが、人間を圧倒する敵が幾ら存在したとしても、人間は滅亡などしないんだよ、フェンリル」

「え？」

俺の意外な言葉に、フェンリルは啞然とした。

私の説明の番を取るなどナイアが言いたげな表情をしたので、俺は肩をすくめて言葉を止める。

「人類にはリーダーがいらない。もちろん、今ここに、冥王たる我がいるが、もし我がいなくなっても次のリーダーが立ち上がるだろう！もし、滅亡種人類王国クルーシュチャが亡国の憂き目に遭おうとも、人間はどこかに隠れ住むなりして、決して絶滅などせぬ！そして、いつかまたその力を取り戻すであろう！」

「なら、この魔王どもとの戦いには負けたって絶滅しないってことかよ！?!?!?!」

襷褌雑巾を吐き出したビビアが叫んだ。

しかし、

「いや、何を言っとなるのじゃ。今回の魔王どもに負ければ人類は滅亡する。それは間違いないぞ？ じゃから必死に抵抗しておるのじゃし」

「はあ！？ 今言ったこととちげーだろうが！」

「違わぬぞ。なぜなら……」

ナイアは天を蓋する月を見上げ、笑いつつ、

「この魔王どもは人間を直接倒しに来たことは一度もない。ただ『全てから切り離そうとしている』だけなのだから！」

「全てから……」

「切り離すう……？」

フェンリルとビビアが疑問符を浮かべる。

俺は簡単に説明した。

「魔王イヴステイトル。あれはイヴの因子によってモンスターを強化して人々を襲わせた。だが、本来の目的は他にある」

「他に、ですか？」

「ああ。あの魔王の目的は、他種族との交流を断絶することだろう」

「あつ、確かに！」

そう。

友好的だった獣人族やエルフ、他の種族たちの交流は、道中モンスターに襲われることから不可能になっていた。

人間は他種族から切り離され『孤独』になったのだ。そして、

「魔王地母神ナムム。かの女神が人類滅亡に寄与した役割とは、人々から神という存在自体を奪うこと。心の支えである信仰と祈りを取り上げることだ」

「し、七面倒なことしやがるっ………！」

「確かにな。だが、見えて来ただろう。魔王の役割が」

「いや全然」「そうですね」

ビビアはちんぷんかんぷんといった表情だが、フェンリルはまさか、といった驚愕の面持ちになった。

ナイアが説明を続けた。

「そして今回の第3の魔王じゃ。月の落下は、天の喪失である。当たり前前にある空がいかに人類の平穩に貢献して来たことか」

「それについては一つ疑問があるが、まあ後にしよう」

「えー、なんじゃろ。気になるのじゃ、その言い方。賢者の悪い所が出とるな」

ナイアはぼやきながら、

「最後に、さつき出て来た、第4の魔王枯死ユグドラシル。人々の魔力の源……というか、そなたらには想像もつかんじゃろうが、このこの神代においては空気のような存在なのじゃよ。それが奪われることの重大さは、恐らく現代を生きるそなたらには計り知れない喪失感であろうな」

と続けたのだった。

「さて、と言う感じなわけでは。人類滅亡の条件とはなんであるか、割と自明になってきたであろう？」

だが、ナイアの問いに、ビビアは疑った調子で言った。

「今の話を総合すると、『孤独』な状態に追い込まれるってことかあ！？ よわっちーあいつらは、一人じゃ生きていけねーってのかよ！？」

「まさに、その通りよ！ しかし、よくそんな言い方が出来るの。人の心がないんか、そなた？」

ナイアは呆れた表情を浮かべつつ、

「まあ、その通りである。滅亡種人類を本当に滅亡させるのは、強大なモンスターや魔王ではないと、こたびの魔王出現によって確信した！」

俺も同意見なので頷く。

「ああ。人が生きて行くための『環境破壊』。それ自体が目的なんだろう。他種族との交流や見守ってくれる神の存在、青い空と静寂の夜、世界に満ちる生存の源マナ。それらを順番に『破壊』し人類種を『孤独死』させることが魔王に与えられた目的だ」

「お、おい！ っていうことは！」

「おお、ビビアにしては鋭い！ 気づいたな！」

「俺にしてはってのが余計だ！！」

ビビアの激高をよそに、ナイアは言う。

「うむ、確かに、魔王イヴステイトルは打倒した。しかし、既に目的は達せられておるといふことじゃな。人類種は既に他種族から孤立し、孤独になった。他の魔王でも同じである！ 魔王地母神ナンムは自らこの地を去り、人を見捨てた。目的はちゃんと達したことになる！ そして、第3の魔王月が落下することが判明した時点で、もはや人類は安心して空を見上ることは出来ぬ！ 空を見上げるたびに以後は絶望が襲うであろう！ そして！ 第4の魔王は既にマナをほとんど吸収しておる。目的が達成された今、倒しても意味はあんまりない！」

「じゃ、じゃあ！ なんで俺たちはここにいるんだよ！ 月の落下を防ぐのに意味なんてねーならすぐに逃げてっ……！」

「いや、意味はあるさ。それに……希望もある」

俺の言葉にビビアが驚いた表情を浮かべ、フェンリルも顔を上げた。俺は言う。

「月が堕ちれば人類は滅亡こそしないだろうが、甚大な被害が出ることに違いはない。それを防ぐことは意味のあることさ。第4の魔王枯死ユグドラシルにしても同じことだ。倒してもマナは戻らないだろう。だが、倒さなければ永久にマナは吸収され続ける」

「なんだよそりゃ！ やっぱり意味がねえんじゃっ……！」

「いや、それによって大きな成果が得られるんだ」

「へ？」



「アリアケ様。一体それは……」

彼らの問いに、微笑みながら言った。

「魔王の目的はナイアが言った通りかもしれないが、ちょっとな『観念的』過ぎると思うんだよな。巨視的すぎるというか……」

「どついう意味ですか？」

つまりな、と俺は続ける。

「魔王の目的は人類生存のための『環境破壊』。それはまんまと達成はしている。だが、同時に魔王は討伐され続けている。それは人類にとって『希望』に他ならないんだ」

「なるほど！　だとすればアリアケ様が！」

「いや、俺と言うか。この勇者パーティーが」

俺が言いかけるが、フェンリルは言う。

「アリアケ様という救世主が、人類存続の希望として、存在する限り、人類は滅びないというわけですね！！」

いや、勇者パーティーの存在が、が正解なんだが……。

しかし、ナイアも口を開き、

「ふうむ、確かにそうじゃな。幾らこうして様々な魔王が放たれ、

人類を『孤独』に追い込んだとしても、アリアケという英雄がいる限り、人間は滅びぬし絶望もせぬだろうな」

「冥王ナイア様の存在もそうでしょう。お二人がいれば人類は滅びません」

「おお、そうじゃったな！ 我も結構頑張ってる！ むわっはっはっは！」

ナイアが自分のことを忘れていたと、呵々大笑した。

と同時に、

「だああああああああああ！ 俺のことを忘れんじゃねえええええええ！ 俺だ！ このハイパー勇者ビビア様がいなけりや魔王討伐はありえねえんだからなあ！！ 俺こそが人類の希望！ 英雄！ 救世主なんだあ！！」

ビビアの絶叫が鳴り響いた。

「うむ！ まあ、そんなことはどうでもいいか。とりあえず今は、目の前とかちよつとエルフの森とかにいる魔王を討伐することが先決である！」

「そうだな。失敗したら死ぬしな」

「ええ、やりましょう。ナイア様、アリアケ様」

「ひ、ひいいいいいい！ そうだった！ は、はやく逃げねえと！ マナがねえから月を迎撃できねえんだった！ し、死にたくね

え！ 俺だけでもっ……っ！！」

それぞれが思い思いの言葉を口に出した時であった。

「第3の魔王・月の落下！ 早まっています……！！」

伝令兵の緊迫した声が荒野に轟いたのである。

248・冥王ナイアが語る人類滅亡のロードマップと賢者の余裕  
(後書き)

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとう！

ご予約頂けると嬉しいですが、  
「無料」試し読みだけでも、ぜひ  
読んでくださいませ(o\*。)。oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobMIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中!!!

【応援よろしくお願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケやビビアたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

249・三十四『分割』障壁作戦立案

249・三十四『分割』障壁作戦立案

「間もなく落下か」

「これは参ったな。降参するしかないか。わはははは！」

「何を落ち着いてやがる！ どうすんだよ！ どうすんだよ！ なんとかしろよ、ひいひいひい！！！！」

「うるさいぞ」

落ち着いて空を見上げる俺とナイアと、焦燥をあらわにするビビア。そしてそれを窺<sup>たしな</sup>めるフェンリル。

とはいえ、ビビアの気持ちも分からないでもなかった。

「そう言ってやるな、フェンリル。俺の立案した完全な作戦が、第4の魔王が突如出現することになり不可能になったんだ。師匠である俺に頼っていたビビアがおののく気持ちもわかるさ」

「さすがアリアケ様は寛容ですね」

彼女の言葉に俺は微笑む。

一方のビビアは顔を赤くしたり、青くしたりしていた。

「アリアケの言葉に興奮したり、魔王の接近に怯えたりと忙しい奴  
じゃなあ。ちつとは師匠を見習え。で、アリアケよ」

ナイアがそう言うのと同時に、俺の方を見た。

ああ、分かっているさ、とばかりに頷く。

「無論、誰も乗り切れないこの危機を脱するのも救世主である俺の  
役割だ」

「ふむ。して、策は？」

「ああ」

この危機を脱する切り札が俺であることは前提にさっさと話は進む。

「三十四『分割』障壁作戦を提唱したい」

「三十四重障壁作戦のアレンジか。どのようなものか？」

「ああ。とりあえずその聖剣を俺が装備する」

「はあああああああああああああああああああああああああああ  
あああ！？」

ビビアが絶叫した。気持ちは分かる。

「だめだ！ 絶対貸さねえ！ これは俺んだ！ 俺が選ばれし勇者  
の証なんだ！！」

「スキル 聖剣装備 があるから、装備自体に問題は無いんだが…」

「嫌だ嫌だ嫌だあ！！！！」

「世界の危機なんだがなあ……………」

俺は困る。

「そんなに俺に聖剣を貸すのが嫌なのか？」

「あつたりめえだあ！ お前だけには貸さねえ！ お前だけにはあ  
！！！！」

ビビアが再度叫ぶ。フェンリルが、

「ビビア、こんな時に我儘を言っている場合か」

と窘めるが、俺は彼女へ首を横に振って止める。

「無理強いは逆効果だ、フェンリル」

「は、はい。アリアケ様。ですがこのままでは……………」

「そうじゃぞ、アリアケ。寛容なのは良いけど、我ら死ぬぞ？」

彼女たちが心配する。

俺は安心するように微笑みながら頷き、





そして、

「ふう、憑依完了だ」

俺はビビアの身体を完全に制御する状態となる。

同時に、最も心配していた点を確認した。

「はっ！……！！」

俺が聖剣を一振りする。

すると、

『キン！』

という不思議な音が響いた。いや、この音は聞いたことがある。

「すごい。それは……空間自体を切り裂いている音です」

「うむ！ さすがビビアではなくアリアケである……！！」

フェンリルとナイアが驚きの声を上げた。

そう。

これは空間自体を切り裂く音だ。

俺の愛弟子たるラツカライが聖槍ブリューナクで空間を切り裂いた

際に耳朵を打つ音と同質のものである。

「本来はここまでの力があるものなのですね」

「聖剣の名に恥じぬ力である。そしてその潜在能力を引き出せるリアケもさすがであるなあ」

「大げさだな。大したことじゃないさ」

俺は聖剣を鞘に収めながら言う。

そして、空を見上げた。

魔王が迫っている。

「では、作戦の詳細を説明する」

俺の言葉に、彼女たちは頷いた。

ちなみに、

(返せ！ 俺の身体を返せ！)

ビビアの意識もちゃんと残っていて、散々身体を返せと中で叫んでいるのだが、緊急事態だ。勘弁してもらおうことにしよう。

249・三十四『分割』障壁作戦立案（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[<無料>試し読み](#)だけでも、ぜひぜひ読んで下さいませ(o\*。)。oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中!!!

【応援よろしくお願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケやビビアたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 250・作戦指示

### 250・作戦指示

「作戦の内容はこうだ。まず現状、マナが枯渇した以上、全ての魔法使いは魔法使用が不可能になったと言って良いだろう」

「うむ。その通りである」

ナイアが肯定する。

「ゆえに、月の魔力自体を利用することとしたい」

「えっ!？」

俺の言葉が余りに意外だったのか、フェンリルが驚きの声を上げる。

だが、

「論理的に考えるとそうなるだろう?」

俺はあっさりと告げる。

「アリアケにとっては当然の思考かもしれないが、誰も思いつかんじやろ?」

「そうか？」

うむうむ、うんうん、とナイアとフェンリルが頷いていた。

だが、このことを思いついたのには訳があるのだ。

「俺は未来で人魔同盟学校の校長をやっているし、魔王とも交流があるからな。だから月については詳しいんだ。元々夜に生きるイルミナ族は、月から魔力の恩恵を受けている。だから、夜の方が活動的になるし、身体能力や魔力も強化されるんだ。だったら、俺たちも同じことをすればいい。な？ 論理的だろう？」

「うーん、そうじゃろうか？ 思考の次元がちょっとぶっ飛んでる気がするのじゃがなあ。落下してきてる星から魔力を直接奪おうとこのと、イルミナ族の営みを並列に考えるのは普通なんじゃろうか？」

ナイアが珍しく悩んでいるようだが、とりあえず時間がないので続きを話していくことにする。

「まあとにかく月のマナを俺のスキルによって 魔力吸収 し、それを 貯蔵 したうえで 魔力譲渡 する。これによってある程度 魔力を使えるようになるだろう」

「アリアケ様の障壁作戦は実行可能なのですね？」

「いや、そうじゃない」

「そうなのですか？」

俺は首を横に振りつつ、

「月のマナは、この星の魔力とは別種イシスのものだ。それを無理やり使  
うわけだから出力はイマイチだろう。それに 魔力吸収 をするに  
は当然かなり接近する必要がある。 魔力吸収 貯蔵 魔力譲  
渡 出来るのは1回が限度だ。つまり使用出来るマナの質と量に問  
題がある」

「で、そこを何とかするのが救世主の御業というわけじゃない？」

「というか、ここまでは単なる現状の確認だ。作戦じゃない」

「さすがである。して、作戦とは？ 早く聞かせよ。ワクワクして  
きたのでな！」

ああ、と俺は微笑みながら頷き、

「勇者のスキルには、ファイナル・ソードという最終奥義がある。  
これは剣を自壊させるものの、究極の一撃を放つ禁断のスキルだ。  
これを聖剣を犠牲にすることで発動させる！」

「おお！！！！ なんと、聖剣を迷いなく贖いするとは！！！！」

「さすがアリアケ様です。世界の危機を前にして迷いのない即断即  
決に目を瞠るしかありません」

（や、やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
お！！！！！！）

俺が憑依したビビアの悲鳴が聞こえてくるが、事態は緊急を要する。



「ここは師匠たる俺の権利を行使させてもらうことにしよう。」

「すまないな、ビビア。だが」

俺はそうつぶやきながら、聖剣を改めて鞘から抜く。

キーン……という神秘的な音が響いた。

「作戦を指示する。これが神代を救う究極の一手となる」

その言葉に冥王ナイアをはじめ、周囲の者たちもいつの間にか聞き入っていたようで頷いた。

俺も彼らに頷き返し、言葉を続ける。

「救世主アリアケは聖獣フェンリルに騎乗し、宙そらの月へ接近してスキルを発動。君らに魔力を送る」

「……はっ！……！！」「……」

魔法使いの兵士たちが勢いよく返事をした。

俺の作戦を信じてくれたことで、絶望が希望に変わった。これもまた救世主の大事な仕事の一つだ。

「と、同時に、俺はファイナル・ソードを放つ！ それによって月を三十四に分割する！ 分割した月は順番に落下するように威力を調整するから、君らはこれらを一つ一つ障壁によって順番に防いで欲しい。一つ一つならば、君たちの力を集中させれば押し返せる程

度の落下エネルギーのはずだ！」

「おお！」「さすがアリアケ様だ！」「救世主様！」「これで助かるぞー！」

「すごい、一瞬にして士気が回復した」

「うむ！ さすがアリアケである！ 我もなんか仕事せんと、仕事を失ってしまうな！ というか、我が後継はアリアケで良い！ わははははは！！ よし！」

勢いよく笑った後、ナイアは俺の指示を改めて兵士たちへ告げる。

「作戦を開始しよう、冥王ナイア」

「うむ！ 救世主の立案せし『三十四分割障壁作戦』を全軍開始せよ！ー！」

こうして、今ここに人類滅亡の危機を回避するための俺の作戦が、幕を切って落とされたのである。

## 250・作戦指示（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひ<お読みください>お読みくださいませ（お\*。）。（お\*コミック）

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

### 【応援よろしく願います！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケやビビアたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

251・大賢者は月を穿ち墮とす

251・大賢者は月を穿ち墮とす

「行くぜフェンリル」

「了解した、アリアケ様！」

「うむ、任せたぞ！ 救世主アリアケよ！！！！」

(いやだああああああああああああ！！ 助けてくれええええええええええええええええええええええええ！！！)

聖獣の姿となったフェンリルに騎乗した俺は、飛行スキルによってたちまちのうちに天を舞った。

一瞬にして味方が見えないほど小さくなると同時に、この星の大气圏へと今にも接しようとする月へと肉薄する。

と、その瞬間、

「フェンリル！ 気を付けろ！ 攻撃してくるぞ！！」

「まさか！？」

驚きの声上がるが、見事に月からの攻撃をかわす。

それは山ほどもある隕石をこちらへ発射してくるといふものだ。当たれば即死だろう。

「魔王だからな。あらゆることは想定しておいたほうがいい、フェンリル」

「は、はい！ アリアケ様！！」

「よし。じゃあ、残りの隕石たちは頼んだぞ」

見れば先ほどの隕石など霞むほどの大量の隕石が、月から発射されたのが見える。

「了解です」

(ひいひいひい！？ どういう神経してんだ、てめえら！？)

憑依されたビビアの精神だけが、絶叫しているが、星と戦うともなれば無理もないか。

とはいえ、彼は勇者だ。今後は心も指導していかねばならないと心の片隅にとどめておくこととする。

だが、今は目の前の魔王イルミナの打倒が先決だ。

「わおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん！  
！！！！！！」

フェンリルは咆哮すると同時に、口から魔力を放射する。

その熱線はこちらを狙う隕石たちを次々に破壊しつくした。破砕された欠片たちが大地へと落下していく。

「小さいとは言え、彼らは大丈夫でしょうか？」

フェンリルは心配の声を上げるが、俺は微笑み、

「あれくらいはナイアが何とかするさ。仲間を信じろ、フェンリル。俺たちは、俺たちの役割を果たすぞ」

「はい！」

良い返事だ。

そう。俺は英雄かもしれないが、全てを救うような万能の英雄ではない。

その代わりに、信頼できる仲間や俺を慕って付いて来てくれるこの世界の人々が俺に力を貸してくれる。

それこそが本当の力というものなのだ。

それを知っているか、知らないかが、本当の英雄かどうかを分ける違いなのだろう。さて、

「行くぞ！ フェンリル！ ファイナルソード発動！！ 月を！！」

俺は聖剣ラングリスを振りかぶりながら、魔王イルミナへと宣告した。

「お前を星屑へ三十四分割する！！ 許せ、月よ！！」

俺は星を殺めることを詫びるとともに、容赦なく聖剣を振るう。

聖なる光が集まると同時に、莫大なエネルギーが放出された。

それは俺がイメージした通り月を両断し、裁断し、破壊する！！

月に包含された膨大なマナもはじけるように爆散した！！

さすがのフェンリルもその衝撃に吹き飛ばされかけ、俺も衝撃で全ての五感を一瞬失う。

だが、すべきことを忘れることは大賢者たる俺にはありえない。

「魔力吸収 貯蔵 魔力譲渡 ……！！」

月のマナを奪い、地上の皆へと送った。

「よし、作戦通りだ。頼むぞ、みんな！ 俺もすぐに戻る！！」

月の分割という最大の難関を突破した俺は、すぐに頭を切り替え、地上を目指すようフェンリルへ指示したのだった。



## 251・大賢者は月を穿ち墮とす（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[<無料>試し読み](#)だけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（\*。）。[コミック](#)

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

### 【応援よろしく願います！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケやビビアたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 252・救世主の甚大なる加護

252・救世主の甚大なる加護

（ナイア視点）

「救世主様から魔力が送られてきたぞ！」

「ああ！ 力がみなぎるようだ！」

「さすがアリアケ様だな！！ こ、これなら月を防ぐことだって出来る！！」

兵士たちの驚愕と喜びの声が響いた。

「うむ！ それにあいつときたら当たり前のように 魔力アップ 攻撃力アップ などの超強力なスキルを重ね掛けしてくれておる！ これならば三十四分割された月を障壁魔法によって弾くことが出来ようぞ！！」

我も確信をもって言う。

兵士たちの言う通り、その力は膨大なものであった。

あやつはこのような絶体絶命の場面にも関わらず、余裕を持たせるほどの状況を作り出していたのである。



地上に救世主<sup>アリアケ</sup>への賞賛と歓喜の音が湧き上がったのであった。

まったく、さすがアリアケと言わざるを得ぬな！

が、ここで一つだけありえない出来事が発生した！

兵士たちが4つ目の月の欠片をアリアケによる加護<sup>スキル</sup>により押し戻すことに成功していた時である！

「おい！ おかしいぞ！ 押し戻したはずの一番目の月がっ……！」

「えっ！???!?!」

「戻ってきているだと?!?!?!」

混乱するのも無理からぬことであろう。

防いだはずの月の破片の落下。宇宙へと押し戻したはずの月が舞い戻って来たのだ！

だが、あ奴の凄さはまさにそこにある。

その舞い戻りし月すらも押し戻すほどの魔力と加護を兵士たちには与えていたのだから！

ゆえに、

「落ち着け！ 落ち着いて対応すれば押し戻せよう！」

我は兵士たちに叫ぶ。

だが、もう一つだけ誤算があったのだ。それは……、

「しかし、俺たちだけで大丈夫なのか？」

「だ、大丈夫だろう。これだけの力があるんだ！」

「そ、そうだな。だが、やはりアリアケ様が傍にいてくださると、  
そうでないのでは、その、あれだな。気分が違うな」

「う、ま、まあな」

兵士たちは少しだけ不安に感じ始めていたのである。

我はあくまで王であり、魔法使いではない。前線に立つこともできるがそれはあくまで王としてである。

アリアケは戦士であり、救世主。

そのことは決定的な誤算を生み出す。

それこそが、アリアケの弱点と言って良い箇所そのもの。

そして、ナイアもフェンリルも言っていたことであった。

それは、

『アリアケは自分の存在を過小評価しすぎている』

そう。

アリアケがいるからこそ、月の落下を防ぐなどという普通不可能と思えることを、A級とはいえ、一般の兵士たちも可能だと思えていたのである。

だからこそ、当初の作戦で、アリアケが自分たちの一番後ろですべてをバックアップしてくれるという作戦を聞いた時、兵士たちは絶対成功するという確信と安堵を得ていたのだ。

月が落下しようが何であろうが、救世主アリアケが何とかしてくれるだろうという無条件の信頼があったればこそであった。

だが、第4の魔王 枯死ユグドラシルの出現によって、作戦は急遽変更された。

一瞬にして作戦をアレンジし、この局面を打破する計画を実行に移したアリアケの力はもはや神の如くである！

だが、あやつは一つだけ重要なことを忘れていたのだ！

それは、アリアケが兵士たちとともにいないこと！

英雄と一緒に戦うということが、どれだけ兵士たちの心の支えになっていたか、あやつは自分の能力とカリスマに無頓着であり、そして、それゆえに兵士たちが全幅の信頼を抱き、恐怖を克服しているという事実気づいていなかったのである。

自分の影響力が余りに甚大であることを察しえないのが、アリアケの唯一の欠点であった。

そして、それはこの局面においては致命的な隙を生む！

いかに膨大な魔力とスキルによる支援があっても、士気の低い兵士は戦えないのだ！

三十四『分割』障壁作戦は兵士たち全員の障壁魔法の発動が条件。そして、魔法の発動の可否は精神の状態に大きく依存するものであった。ゆえに、一人でも恐怖にのまれてはいけなかったのだ。

しかし、

「はねかえした月を何度も俺たちが止めるなんて……」

「お、おい。何を弱気になってる」

「だが、確かに……。本当にもう一度とめられるのか……。それにあと何十という月が続けて降って来るんだぞ!？」

兵士たちは堕ちる星屑の前に恐慌をきたそうとしていたのである。当初の作戦通りで、アリアケさえいればこのようなことは起こらなかったであろう。

が、今ここに救世主はいない。

あやつが自分の偉大さに無自覚なことが、まさか致命的な危機を招くとは、さすがのあやつも予想できない事態であつたらう。



そんな、意外な危機に陥っていた人類たちに対し、

「あれ、なんだか急いで来てみたら、なんですか、ここ？ 雨の代わりに星が降って来るんですか？ やっぱり物騒な時代ですね」

そんな場違いな声が響いたのであった。

## 252・救世主の甚大なる加護（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひ<無料>読んで下さいませ（お\*。）。（お\*コミック）

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中!!!

### 【応援よろしく願います!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい！」

「人類はこの後一体どうなるのっ……!?!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



「一人で月の欠片を!？」

兵士たちは驚愕するとともに賞賛する。

だが、その言葉に、その女は不満そうに口をとがらせて、

「いいえ! これは私一人の力ではありません!！」

と高らかに宣言したのであった。

「そ、そうなのですか？」

兵士は戸惑いながら聞く。

それに対して美女は、よくぞ聞いてくれました! とばかりにフンスと頷いた後、うつとりとした表情で、

「愛のパワーです」

「……」

「私と彼との愛のパワーです」

「……か、彼？」

兵士が首を傾げる。

実は我も首を傾げた。うーん、だがこやつどこかで見覚えがあるのじゃがな。うーん、誰じゃったかなー、うーんうーん……、あつ。

「アリシア・ルンデブルクではないか！ アリアケの妻の！」

「おおっと！？ その真つ赤なお嬢さんは私のことを知っているのですね！？ なにゆえ？」

「そーんなことはどうでも良い！ どうしてアリアケの嫁がいるのじゃー！？」

その我の当然の問いに、アリシアはうつとりとした表情をして、

「愛のパワーです」

「それはもう良いわ！」

「えー、でも本当なんですよー。うへへー」

彼女は惚気るような仕草で言った。

「私と彼の絆は時空とか時を超えちゃいますからね。自動的に私にバフがかかったりもするんですよ。唯一結婚の絆 っていうスキルがありますよ、きゃっ お互い大体の居場所が分かっていたりもするんです。いやー、照れますねー！ はーい、大結界」

『ドゴオオオ』

「月を破壊するのか惚気るのかどっちかにせよ！ 情報量が多すぎて頭がグワングワンになるわ！」

3つ目の月の欠片を一人で余裕で押し返しながら、惚えるアリシアにはツッコミしかない！

が！ だいたい理解はした！ さすが我！

要するにアリアケがこの神代に呼ばれた時に、スキルの効力によって同時に彼女も呼ばれたということであろう。多分スキルの効力に両者が離れ離れにならないようにするといった、ロマンティック要素があるのだ。

なんとという頭の悪いスキル！！

時空をまじで超えてこなくてもいいのでは！？

だがまあ、ともかくそのスキルのおかげで彼女は呼ばれたのだ。

あ、愛のパワー……。

うつむ、認めたくない率100%であるが、嘘とまでは言えぬ！  
嫌だけど認めざるを得ない！！

「すごい！ 俺たちも負けてられん！！ 行くぞ！！！！」

「おう！」

兵士たちの士気も上がっており、いいことづくめである。

まあ、確かに愛は星を救うから、これで良いのか？

人間らしいっちゃらしいのかのう？

と、そんな感じで無理くり自分を納得させていた時であった。

「なんの！ 旦那様を愛する気持ちなら僕も負けておらんじゃ！  
！！ というか、そろそろ少し報われても良くない？」

「あ、あの僕もですね！ あの……その、お姉様がたと同じくらいの  
の気持ちがあります！」

「私は漁夫の利を狙っていますので宜しくお願いします。こうして  
事前に宣言しているので泥棒猫のそしりを受けることはないと確信  
しています」

またしても三人の者たちが、<sup>イルミナ</sup>月落下地点へと駆けつけたのである。

ええい、これ以上頭を痛くさせるのではないわ！

我ったら思わず大鎌を振り回しちゃうのであった。



## 253・愛のパワーです！（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひ<お読みください>お読みくださいませ（お\*。）。（お\*コミック）

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

### 【応援よろしく願います！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリシアたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 254・アリアケへの愛は星を救う！

254・アリアケへの愛は星を救う！

(前回からの続きとなります)

〈ナイア視点〉

「アリアシアについては、唯一結婚の絆とか言うスキルでバフ盛り盛りなのは分かったけど、そなたらは違うんであろう？ (この時点で) 重婚しておるとは聞いておらぬ。ゆえに、アリアケの愛のパワー！とかいうでたらめバフを得てはいないそなたらでは、月を押し戻す力はないのではないか？」

我は突然現れた三人の美少女たちに聞く。

だが、

「にやははははは！ 儂と旦那様の縁はそんな形式に縛られたものではないので大丈夫なのじゃ！ 何せ我が旦那様は唯一の乗り手！ 乗り手を得たゲシュペント・ドラゴンとして儂は既に覚醒済みである！ 愛以上の絆と言っても差支えない、と自分の中では議論の余地なしとなっておるのじゃ！ にやはーっはっはっはあ！」

彼女はそう反論を言いながらも、黄金の竜へと変貌してゆく。

そして、

「焰ラス・ヒューレよ立て！ 旦那様の愛を一身に受けしこの儂が一番役に立って  
みせようぞ！ そして後でナデナデのご褒美をもらうのだ！ うむ、  
完璧なのじゃー！！！！」

伝説級の攻撃と極大の惚気を一気に解放した！

それと同時に、魔法使いたちが一旦押し戻した月の欠片が更に粉々に砕け散る。

とんでない破壊力である！！

アリアケへの愛のパワーって半端ない！

そう思っておった時であった。

「あ、僕は別に一番でなくても大丈夫なので。お姉様たちを出し抜こうなんて考えてません。でも、やっぱり先生の愛は深く広いですから、独占すべきものじゃないと思うんですよね。きっと姉妹で分かち合えますよ、うふふ」

ボーイツシュであるが、よく見ればその美しい容貌や端正な顔立ち。上品な仕草が目に残まる黒髪美少女が、聖槍を構えて、落下して行く月たちに対峙している。

何気にとんでもないことを言っておる気がしたが、次の瞬間にはそんなことは忘却の彼方へ飛んで行く。

「あの辺から、あのあたりまで……」

彼女は指でツーっと宙をなぞる。何をしておるのかと思って見てお

れば、

「『次元切断・第2階層』まで」

その声を聞いた兵士たちは意味が分からなかったであろう。また上空で起こった現象にも理解が及ばなかったはずだ。

彼女の聖槍ブリューナクが鳴動しはじめたかと思うやいなや、槍を水平に振るった。

そこには落下する月たちが蠢いていた箇所である。

それらが、

『ベロリ』

と、まるで皮膚を切った時に皮がめくれるように、空間が切断されたのである。と、同時に空間ごと切断された月たちは、次々に爆発四散する。

魔法使いたちはその破片を防ぐだけで良くなる。三十四分割された月一個を受けるよりも格段にたやすい仕事だ！

「凄まじいのである。これが聖槍のちか……」

「はい！ 先生への信頼と愛の力です！！」

「ええー……。いやー、百歩譲ってさっきのドラゴン娘はそうかもしれんけど……」

「先生のお役に立てると思うと、何層も次元を切断できる気持ちで湧いて来るんです!!」

「うーん、それを聞くと一番狂愛っばいな。冥王なのにちょっと怖くなったわ」

そして、最後の一人。

「ローレイ・カナリアです。私には大した力はありませんが、皆さんを回復させることくらいは出来ます！ さあ、皆さん立ち上がりましょう！ 私のような少女でも、アリアケ様の期待にこたえべく頑張っています！ 本当の救世主様と戦える栄誉を自ら捨てて、本当の戦士と言えるでしょうか！ いや、言えない！ さあ、今こそ決戦の時！ この星を救うのです!!!」

そう言つて、全体への回復魔法をかけおつた。

マナがほぼ枯渇している中で魔法を使用していることも凄いのであるが、恐ろしいのは彼女の演説である。

年端の行かぬ少女すらも戦っている。

なおかつ、英雄と戦える栄誉。そして、星を救い魔王と戦うという大義。

戦士たちの心をこれほど揺さぶる言葉があるのか。

案の定、弱気になりつつあった魔法使いたちの瞳には力が宿る。

「そ、そうだった。俺たちは星を救う最後の希望なんだ」

「それにアリアケ様がついてくださる」

「しかもアリアケ様を愛する女性たち？　なのか？　よく分からんが、そんな凄い人達まで助っ人に来てくれた！　こんな少女まで戦おうとしている！」

「ああ、アリアケ様の期待に応えるんだ！！　情けないところは見せられないぞ！！」

「「「「おう！！！！　アリアケ様の加護ぞある！！！！」」」」

彼らはそう叫ぶと、アリアケより譲渡されてきた魔力を最大限に活用して、再び落下する月から星の防衛を始めたのである。

と、ちらりと彼らを奮起させたローレライという少女の方を見れば、

「ふふふ、これでアリアケ様に褒めてもらえますね。リズレットお母様ゆずりの人心掌握と操作を使うのはイヤ極まりますが……。アリアケ様のためですしね。それに計画のためにはいい所を見せておかないと、ふふふ」

「腹黒さが隠しきれないなー、この小娘」

「おおっと、はわわ。何のことですかー？」

少女らしい天真爛漫な表情に変わるが、もう遅い。

とはいえ、

「いい感じである。これは何とかかなりそうであるな。うーんそれにしても」

我は感慨深げに呟いた。

「アリアケよ……そなたそのうち刺されるぞ?」

そんなこんなで月防衛戦は、最終局面を迎えようとしていたのであった。



## 254・アリアケへの愛は星を救う！（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひ<お読みください>お読みくださいませ（お\*。）。（お\*コミック）

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

### 【応援よろしく願います！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「コレットたちのこの後一体どうなるのっ……!?!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでももちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

255・アリアケの元に集う賢者パーティーの少女たち。そして英雄は魔王を屠る

255・アリアケの元に集う賢者パーティーの少女たち。そして英雄は魔王を屠る

アリアケ視点

「なんで俺が刺され無いといけないんだ？」

「おお！ 戻ったかアリアケ！！ って、その恰好は？」

「ああ、もう聖剣を使用する必要はないから、憑依は解いている。ビビアはなぜかアールアール言うばかりで使い物にならないので、そこに置いておいた。それより……」

俺は戻って来てみて驚いた。

アリシアやコレット、そしてラツカライにローレイといった、賢者パーティーの女性たちが大集合していたからだ。

どうやってこんな神代まで追いかけてこれたんだ?????

「愛のパワーです！！」

「それはもういいのである！ 結婚 というスキルによって二人は分かちがたい縁を結んでおるから、時空転移した際に引っ張られたらしい！」

「愛ってすごいですね！ アリアケさん、分かりますか？ 伝わってますか？ 二人の愛は時空を超えて今ここに奇跡の邂逅を果たしたんですよ！ いやー、感動的ですなー！！」

「愛のゴリ押しはやめんかい」

ナイアが辟易とした表情で言った。

だが、

「なんの！ 儂なんて結婚予定ゴニョゴニョ……なだけなのに、こうして神代までやってこれたし！ これこそまさに奇跡と言っても過言でもないと思うのじゃ！ のじゃ！」

「僕もそうです！ 突然大地が揺れたと思ったら、この時代に飛ばされて……。これも、し、し、し、師弟を超えた何か特別な絆だと思います！ ええ、異論は認めません」

「私もです。これは将来習合したブリギッテ・ワイズ教を二人で盛り立てるよう神様がお導きになつているとしか思えません」

他の女性たちも口々に言った。

「まあ、ぶつちやけ異変が起こったので大結界で空間を保護したら、丸ごと転移しただけなんですけどね。偶然、女子会をしていたので、このメンバーになったのです」

「なんの女子会だったんだ」

「自分の胸に手を当てて聞いてみてくださいねー、私の旦那様？」  
何か鬼気迫るような、自分に圧倒的に不利な気配を感じたので、俺は話題を変えた。

「というか、本題に戻ることにする。」

「まあ、要するに、」

「俺のために助けに来てくれたということだろう。ありがとう、みんな」

そのなんの銜もない俺の言葉に、彼女たちは一斉に赤面したり、笑顔になると、

「かー、この朴念仁は。ええ、ええ、その通りですよ！」

「うむ！ 旦那様のためなら例え神代であろうとアビスであろうと駆け付けるのじゃ！」

「僕の槍を捧げた御方ですから当然です」

「こんなか弱い私でも駆けつけた点をご評価ください」  
ならば、と俺は天空を仰ぐ。

それは彼女たちも同じだ。

そして、他の魔法使いの兵士たちも。

俺が騎乗するフェンリル、冥王ナイアも天空を見上げた。

残る月の欠片はまだ20以上ある。

しかし、

「アー君。では支援を頂けますか？」

アリシアが言った。

「星を救うスキルを、私たちへ使用してください」

「ああ」

俺は杖を振るいながら、

「もちろんだ」

英雄として仕事の仕上げに取り掛かる。

「スキル多重展開」

俺は第3の魔王に微笑みかけながら告げるのだった。

「さらばだ、<sup>イルミナ</sup>月」

魔力攻撃アップ 付与



「さすがアリアケ様だ！」

「ああ、我らが救世主様！」

「アリアケ様しかこの神代を救える方はいない！！」

そんな声があちこちから聞こえてくるのだった。

だが、

「ははは、そんなことはない。勘違いするな、みんな」

俺は全員に、

「皆の力があってこそその勝利だ。全員で今回の勝利をもぎとったんだ。俺だけの力ではないさ」

と告げたのだった。

ただ、俺への賞賛の声は鳴り響き続ける。それは無理もないことだった。

俺と言う英雄と戦い、勝利を得たということは、それだけで生まれて来た理由や誇りにもなるろう。

ナイアもこの勝利に微笑んでいた。

ただ、俺はそんな光景を見ながら……。



255・アリアケの元に集う賢者パーティーの少女たち。そして  
英雄は魔王を屠る（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとう！

ご予約頂けると嬉しいですが、  
「無料」試し読みだけでも、ぜひ  
読んで読んでくださいませ（\*。）。（\*。）。（\*。）。（\*。）。（\*。）。

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケやアリシアたちはこの後一体どうなるのっ……!？」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

256 ・大賢者は世界を見通し、真実を少女たちに語る

256 ・大賢者は世界を見通し、真実を少女たちに語る

賢者パーティーとの久々の再会ということで、

「積もる話もあるう！ 我は外すのでゆっくりとするが良い救世の英雄よ、ぬわっはっはっは！」

「私も外します。未来ではどうか知りませんが、今は顔見知りではないので」

「分かった」

俺はそう言いながら、ファイナル・ソードによって聖剣を失い、全魔力を使い切って心身ともにスタボロになったビビアを担ぐ。

そして、アリシアたちの元へと歩み寄った。

「こんな時代で会うなんて奇遇だな。どうしたんだ？」

「第一声がそれですか！？ 愛する妻に対して!？」

「ははは。冗談だ冗談」

「分かりにくいんですね、アー君の冗談は。それよりも、はい」

そう言って、腕を広げる。

「えーっと、なんだ？」

「何って、ハグじゃないですか。帰ってきたらする約束にしているじゃないですか。何日お預けになってると思ってるんですか？  
んん〜」

ニヤニヤとしながらアリシアは言う。

「ああ、そうだったな」

ぎゅーっつと抱きしめた。彼女と触れあっていると安心するなあ、などと思いつつながら。

しかし、

「きゃー!?!?!?!? 冗談ですよ!?!?!? 家に帰ってきたら、  
つていう約束でしょうに!!! こんな公衆の面前で大聖女が夫  
にハグ求めたらさすがに破門になっちゃいますよ!?!?!」

ジタバタとしながら赤面するアリシアであった。

冗談だったのか。

「確かに、こんなところするのは俺としても気恥ずかしいと思っ  
た。だが朴念仁と言われないように頑張ってみたのだが……」

「いやあ、その努力はねー、嬉しいんですけどねー。まあいいです。  
その調子で精進してください。それに別にイヤじゃなかったの、  
そのあたりは誤解なきように!」

そう早口で言うのであった。

なお、

「おお、これがバカップルというもののなのじゃな。なんだか凄い！  
凄いとしか言いようが出来ぬ！ 魔王より脅威を感じたのじゃっ  
……！」

「うわー、うわー。羨ましい……。僕《私》もやって欲しい……」

「結構普通に抱っこをねだったらしてくれる可能性が少しありそうですね。将来の作戦に使えそうです、メモメモ」

他の女性たちも同じく赤面しつつ、よく分からないことを口走っていたのだった。

まあ、ともかく。

「いやー、旦那様と再会できて嬉しいのじゃ！ やつとのびのびブレスを吐ける気がするのじゃー！」

「はい、僕の先生に再会出来て本当に嬉しいです」

「本当です。とりあえず窮地を脱して環境を整えないと、二人きりになる作戦を立てても実行できませんからね」

ああ、本当に、

「俺もみんなにあえて嬉しいよ」

俺のそんな心からの言葉に、少女たちも嬉しそうに微笑み返してくれるのだった。

さて、再会を喜んだ俺たちは幌馬車に移動すると、枯死ユグドラシルの元へと向かう。

どうやら、マナを吸収する以上の行動は取らないようであるが、いちおう魔王なので討伐はしておくべきだろうという判断だ。

「それで、何が起きているのですかね？ 魔王さんたちラッシュユホスが起こつていて、それをアー君が救っているという理解で良いのでしょうか？」

「それにしても変な魔王じゃなー。俺らの知つとる魔王といたら、あの魔王リスキス・エルゲージメントじゃからなあ。それに比べて、けつたいな魔王ばかりなのじゃ！」

「そうですね、お姉様。第1の魔王はまだ良いとして、第2の魔王が地母神様。第3の魔王は月で、第4の魔王は世界樹ユグドラシルです」

「そうですね。何て言うか『誰でも良い』どころか『何でも良い』みたいにする思えちゃいます」

少女たちの言葉に俺は満足して頷く。

「いきなり神代に飛ばされて、断片的な情報からだけでよくそこま

で理解できたな。さすが俺のパーティーメンバーたちだ」

「にゃはははは！ 褒められたのじゃ！ 久しぶりで嬉しいのじゃ！ のうラツカライ」

「はい！ お姉様！」

「良い線いってましたか、アリアケ様？」

嬉しそうなローレイの言葉に俺は微笑む。

「ああ。みんなが感じた違和感は、ほとんど答えそのものだ」

「というか、あれですよ。勇者・魔王の存在自体がまだないはずですもんね。死を謳う宇宙癌シンクレッタ・ステラ・キャンサー『ニクス・タルタロス』。あの偽神が世界のマナを急速に回復させるために仕組んだのがそれなわけですし。ん〜？ だとすると、今出現している魔王の目的はなんなんでしょうか？ 今はユグドラシルに吸収されたとはいえ、マナは十分だったはずですよね？」

アリシアの言葉に俺は頷いた。

そういつた素朴な疑問こそが、真実に最も近い場所にあると思いつから。

「ああ、そうだ。本来魔王はまだ存在しないはずだし、必要もない。そして、実を言えば多分あれらは魔王ではない」

「え！？ そうなんですか、先生！？」

ラツカライが目を丸くした。

「どちらかと言えば、邪神かな？」

「邪神とな!？」

クワツとコレットが良い反応をする。

「そうだ。ニクスと一緒にだな。まああれは偽神なわけだが、あいつよりは邪神に近いと思うぞ」

「えーっと、すみません、頭がついて行きません、アリアケ様」

「おっと、すまんすまん。話すのが楽しくてな」

「そ、そんな照れてますね」

ローレライが赤面する。が、

「みんなで話すのが楽しいという意味からねー、ローレライちゃん？」

「わ、分かっています、アリシア様。はわわー」

よく分からない『庄』がただよったが、何となくスルーした方が良  
いような気がして話を先に進める。

「第2の魔王は地母神を人間に敵対させようとしたものだった。つまり『邪神』だ」



「確かにそうですね」

「第3の魔王は月イルミナだったわけだが、信仰の対象でもある。これも神と言って差し支えない存在だ。それが堕ちる。すなわち邪神だ」

「なるほどなのじゃ！」

「第4の魔王はユグドラシル。言わずと知れた生命マナの樹と言われ、世界の人々から信仰を集める女神とも言える存在。これがマナをすいつくす敵となれば、邪神と言わずしてなんと言っただろうか」

「確かに。しかし、第1の魔王はどうなんでしょうか？ イヴステイトルでしたでしょうか？」

「ローレライの疑問はもつともだな。だが、あれも調べてみたところ、元々は神だったようだ。信仰はされていなかったようだ。だから利用されたただけだろう」

「なるほど、よく分かりました。さすが先生です！ でも、魔王と邪神であることに違いはあるのでしょうか？」

ラツカライが疑問を述べる。

分からないことを素直に聞ける良い生徒である。俺は彼女の頭を撫でた。こうやって褒めると笑顔になるのでよく撫でるようにしているのだ。

「今回の世界の危機には大きなきっかけがあった。それを隠蔽するために『魔王』と命名しておいた方が隠しやすいと判断したんだろつ。まあ、俺には無意味だったが」

「？」

よく分からない、といった表情をみんながした。

「もっと分かりやすくお願いするのじゃ！ 旦那様！」

俺は微笑みながら、その真意を語る。

「今回の世界の危機は、まず、偽の『邪神』ニクスが大陸を崩壊させたことに端を発するだろう？」

「あっ！ 確かにそうなのじゃ！」

そう。

魔王と称されるとあのニクスが数から除外される。

しかし、

「そもそもどうしてイヴスティトルが第1の魔王なのか？ 第2の魔王とは誰が言い出したのか？ 第3、第4の魔王は誰が決めているのか？」

そして、

「第1の魔王と誤認させようとしたのは誰なのか？」

何よりも、



それはそれとして、俺は目の前の存在に注意を払う方が先決だと判断する。

とはいえ、この現象を引き起こした相手は微笑んでいる。

俺も同様に微笑んでいた。

俺の方が車上にいる関係で、目の前の紅の少女を見下ろすことになる。

紅の少女は言った。

「不敬であるぞ、アリアケ。冥王の御前だというのに、上から目線とは」

「別にそう言うわけじゃない。それに俺はお前の部下ではないだろ  
う？」

「うむ。対等であるな。では、よっこらせつと」

彼女はそう言いながら、自身で斬り飛ばした幌の部分から乗り込んで来た。

「楽しそうな話をしているのでな。我も混ぜよ、アリアケ」

冥府の王はそう言って、心底楽しそうに笑ったのであった。

256・大賢者は世界を見通し、真実を少女たちに語る（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、＜無料＞試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ）o\*。ー。）oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気  
持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



を、当たり前だと思わないようにしてください」

なぜか集中砲火を浴びた。

なぜだ？

「ふふ、では何か目的と考える、大賢者よ。いや、未来の星の代理人・アリアケよ」

一方のナイアは不気味に、しかしどこか嬉しそうに笑った。

俺は頷きながら、

「そうだな。スカウトじゃないのか？」

「は？」

「ほえ？」

「ええ！？」

「スカウトって？ 誰をですか？」

少女たちの口から次々と疑問符が漏れる。

まあ、そうだろうな。

ここまで看破できる人間がいるわけない。

だが、大賢者と呼ばれる俺が分からない道理もまたない。





「残念ながら既婚者なのでな」

「永遠の命とかいらぬのか!? 世界の半分とかはどうか!」

「いらぬい」

「くあああああああ! こーんなに求愛しているというのに!  
この邪神ナイアを袖にするとは!」

「で、正解でいいのか、ナイア?」

俺の言葉に、彼女は満足げに、そして破格の邪気を放ちながら頷いた。

「うむ!! よくぞその答えにたどり着いた、アリアケ・ミハマよ!  
! ちなみにどこらへんで気づいておった?」

「最初から怪しいとは思っていた。違和感がたくさんあったからな。  
例えば……」

俺は思い出しながら言う。

「星見が俺たちの出現を預言していた。だがその星見たちはどこにいる? 一度もその姿を見ることはなかった。それにお前はアリスアの顔をなぜか知っていたな? 俺の時は旅人が来るという預言だったと言っていた。なら星見たちが顔まで伝えていたわけではないはずだ」

何よりも、

「お前自身も言っていた通り、魔王の目的は『人類の孤立』だった。人類を『孤独死』させるための『環境破壊』。それこそが魔王の行動原理だったが、余りにその目的はさすがに特異過ぎる。俺の知っている魔王とは全然別物だ。ならば必ず黒幕が存在するはずだった」

「ふーむ。だが、それだけで我が黒幕と言えぬであろう？」

「お前は第1の魔王を宇宙癌ニクスとは決して言わなかった。それがずっと引つかかっていた」

「ほう」

彼女が嬉しそうな、満足そうな顔をした。

「宇宙癌ニクス・タルタロスは大地の3割を削るという途方もない『環境破壊』を成し遂げている。これを魔王に据えない理由は皆無だ。とすれば、ニクスを魔王と呼ばない理由があったと思わざるを得ない」

「くううううう！！ さすが大賢者であるな！！」

「えっと、アー君。その理由って一体……」

アリシアがゴクリと喉を鳴らした。

うん、と俺は頷きつつ、

「多分、数を合わせないようにしていたんだと思う」

「か、数ですか？」

「ああ、そうだ」

俺は続きを話す。

「ナイアは7体の魔王を出現させたかったんだろう。最初であったときも、現れる旅人は7人だと言っていたが、あれは魔王の数のことだろう。この邪神は時々わきが甘いところがある……。まあとにかく、この7という数字は人類にとって特別な数字だ。7つの大罪という言葉があるだろう？ 傲慢、強欲、嫉妬、憤怒、色欲、暴食、怠惰。無論、歓迎される観念ではない。だが、それらがあるからこそ人類とも言えるんだ。魔王たちはそれらの人類の存在理由を消去する存在でもあった」

「確かに7と言う数字には呪術的な意味合いがあります。何か大きな魔術的事業や神秘を成し遂げるならば、数合わせはとても大事ですから」

「イヴステイトルは傲慢、地母神ナンムは憤怒、月は嫉妬、枯死ユグドラシルは強欲を司ると解釈出来る。そして、本当の第1の魔王ニクス・タルタロスは暴食となる」

「あれ？ でもそれだとおかしいのじゃ、旦那様。それなら……」

ああ、と俺は頷く。

「第1の魔王宇宙癌ニクス・タルタロス、第2の魔王イヴステイトル、第3の魔王地母神ナンム、第4の魔王月<sup>イルミナ</sup>、第5の魔王枯死ユグドラシル。では第6と第7の魔王はどこにいる？」

「欠番ってやつでしょうか？」

ローレライの呑気な言葉に俺は苦笑する。

同時に、ナイアは吹きだした。

「わははははは！ 賢者パーティーは面白い者どもがそろっておる！ どうであるうか！ やっぱり我に個人的に仕えてみる気はないか？ 福利厚生もばっちりであるぞ！」

「質問に答えてやらんか」

「わはははははは！ うむ！ では答えよう。と言っても、すでに答えはその大賢者が知っておる。というかな」

ナイアは肩をすくめて言った。

「そなたに隠すためだけに、魔王ナンバリングをずらしたのだ。少しでも大賢者を油断させられればめっけもんなのでな！ ま、だが無駄であったがな。ぬはははははは！」

「……え？」「……」

少女たちの疑問符を浮かべるのとは対照的に、俺はあっさりと回答を述べる。

「人類滅亡のロードマップ。その最終局面である人類の孤独死には、最後の希望の喪失。すなわち『国（王）の滅亡』と『英雄の死』が存在するはずだろう？」

「そ、それって、もしかして!?!?!?」

ラツカライがその意味を理解して驚く。

その通り。

「第6の魔王は、目の前にいる滅亡種人類王国、最後の王、冥王ナイア以外ありえない。そして……」

俺の言葉を、目の前の紅の少女が継いだ。

「第7の魔王……。人類の希望を喪失させつるほどの大英雄など独りしかおらぬ。そうであろう?」

彼女ははっきりと言った。

「のう、救世主アリアケ・ミハマよ。いや!」

その瞬間、今までであった荷台は消失し、全員が未知の空間へと吹き飛ばされたのだった。

「魔王アリアケ・ミハマよ!」

そう。

この両者が死ぬ、あるいは人類を裏切ることで、人類の孤独死は確定するのだ。

それこそが俺をこの時代に呼んだ理由。

人類全体とつり合いが取れるほどの英雄であることが、この時代に呼ばれた理由だったのだ。

ナイアの声が響いた。

「全てを失い孤独死しかけた人類は、きっとすぎるものを求めるであろう。その際、我が別の存在、女神みたいな感じでスカウトしようではないか！ 人類はきっと喜んでその身を我に差し出すであろうなあ！ わははははは！ レベルアップするという特異なスキルを持つ奇妙な生命体！ うむうむ、実に興味深いぞ！ きっと数万年も飼えば私の役に立つ存在になるう！！ 愛してやろう！ 人類を！ この冥王ナイアが！ いや」

彼女はのたまった。

「宇宙を支配するこの愛の邪神色欲ナイアによって、幾億年もな！！」

人類の真の敵がその正体を現したのだった。

## 257・真の人類の敵（後書き）

### 【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[<無料>試し読み](#)だけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（o\*。）。[oペコミ](#)

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中!!!

### 【応援よろしく願います!】

「面白かった!」



「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケやビビアたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

258・更なる深層へ宇宙規模の深淵なる計画を看破するへ

258・更なる深層へ宇宙規模の深淵なる計画を看破するへ

「ここは……どこだ？」

それに。

「俺は何をしていたんだっただかな？」

気づけばゴツゴツとした岩がどこまでも続く、茫漠とした土地に俺はいた。

気持ちの悪いねっとりとした風が吹き、どこか生臭い。

何か大事なことを忘れている。

だが、それを思い出そうとしても、記憶がないかのように、何も思い出すことができない。

「アリアケよ、よくぞ夢の庭園へ参った。ここに招待したのはそなたが初めてであるぞ？」

いつの間にか、隣には美しい紅の髪の少女がいた。

やはり真っ赤な美しいドレスを着ていて、よく似合っている。だが、ワインレッドというより、どこか血のような赤だと思った。

と、同時に、俺の名前を思い出す。アリアケ・ミハマ。それ以外は思い出せない。いや、

「ナイア？」

「そうである。ふふふ、どうだ、ここは？　ここには我とそなたしかいない。そして、我はそなたのものだ。永遠にそなたに奉仕しようぞ？」

「なに？」

彼女の言っている意味が分からなかった。彼女は少女だというのに、嫣然とした表情を浮かべて言う。

「ふふふ、幸いながら我もそなたに惚れた。誘惑するだけでなく真実の愛。嘘偽りなく、幾年、幾億、幾星霜もそなたを愛し続けよう。ここは夢の庭園。我が箱庭。そなたは我の与える快樂に耽ると良い」  
彼女の声は人心を蕩かせる効果があるように思えた。

「人類を何度も救済し、疲れたであろう？　もう十分そなたは世界に貢献した。まさに英雄であり救世主であった。だが、そなたも一人の人間。癒しが欲しいであろう？　休息と安寧を求めたくもなるう。その際に」

彼女は俺に抱き着きながら言う。

「我を好きにしてよいぞ？　我もそなたを好きになった。初恋である。ここで我と愛しき時を過したら良い。人類のことは悪いようにはせぬ。我が庇護し、きつと生きながらえさせよう。だから、そな

たは我と……」

そう言っつて、彼女は俺を前に口づけようと迫って来る。

……が、

「すまん、ナイア」

「へ？」

俺は彼女の顔を押し戻しながら言っつ。それに驚いた表情を彼女は見せた。

「何となくだが、俺には他に決まった相手がいるような気がする。それに、その相手が俺の初恋のような気がする。だから、お前とは付き合えん。すまん」

「そなた記憶があるのか？　ここでは記憶は曖昧になるはずであるぞ？」

「いや、記憶はない。だがそんなものはなくても、行動原理は変わらないだろう。お前が何者かも思い出せんが、記憶があつても同じことを言っつはずだ」

なぜなら、

「それが人の誇りというものだからな」

その瞬間。

ピシリ！！！！

と、夢の庭園と呼ばれた空間にヒビが入ったような音が鳴り響く。

「ナイア」

俺は微笑みながら告げる。

空間が崩壊しかかっているからか、記憶も戻りつつある。

「お前は人類を舐め過ぎだ」

彼女の頭を撫でながら。

「人類はお前ごときには服従しないし、未来を委ねたりもしない」

「そなたがいるからか？」

彼女の言葉は睦言のように耳朶に響く。

だが、俺はゆったりと首を横に振り、

「俺はいつも手助けをするだけさ。俺は大したことはしていない。みんなの……人類の力があるからたまたま世界を救い続けられていくだけだ。それからな、ナイア。俺は秘密を抱えた相手と親密になるつもりはない」

「何のことだ？」

とぼける様子を見せる。だが、俺は構わずに告げる。



俺がそう言った瞬間。

「初恋とは実らぬそうだ。残念であるが……」

『パリン』

という、あっさりとした音を立て、箱庭の空間は崩れ落ちたのであった。

「そなたはここで確実に殺そう。我が計画の駒の一つにしようなどと、我もとんでもない計算違いをしたものである！ そなたらを呼び寄せ、計画遂行をするために星2つ分ものマナを消費したというのに……」

彼女の声が鳴り響いた。

「行くぞ！ 救世主よ！ そなたは我が計画遂行の最大の壁である。いや……」

ナイアは豪快に笑い、

「色欲の邪神ナイアの宿敵である……！！」

そう声を上げたのであった。

258・更なる深層〜宇宙規模の深淵なる計画を看破する〜（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、＜無料＞試し読みだけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（o\*。|。o）oペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」



「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

259 ・滅亡種人類飼育計画・最終決定コロシウム『深層心域ス  
フィア』

259 ・滅亡種人類飼育計画・最終決定コロシウム『深層心域ス  
フィア』

「うーん、ここはどこですかね？ 変な場所ですねえ。周囲の色  
が赤になったり黄色になったり。何だか不安定な感じですよ」

「でも、転移させられた感じはなかったのじゃけどなあ？」

「しかも、妙ですね。脱出してみようと思って、空間を切ろうとし  
てもうまく行きません……」

「体当たりでもしてみますか！」

最後、ローレライが言った言葉に、

「そもそも壁がないようだがな」

そう答えたのは、少女のフェンリルだった。

その姿を見た賢者パーティーの皆は、

「わー、可愛い！ いやー、戦闘の後始末とかでちゃんと話す機会  
がなかったんですが、未来のフェンリルさんとは大違いですねー」

「儂よりおぼこいではないか。むむむ、せつかくの儂の優位性がなくなってしまうのじゃ!？」

「大人の魅力なフェンリルお姉様もいいですが、こういう姿もまた可憐ですね!」

「フェンリルさんが千年前からアリアケさんと旅をしていたということですか。これはピンチ」

口々に感想を言う少女たちであった。

やれやれ。

「お前たちもう少し驚いてもいいんじゃないか？」

俺は苦笑しながら言う。

「いえいえ、これでも驚いているのです。なので、とりあえず手近な少女を愛でているわけです」

「未来のフェンリルは、現在のフェンリルがいるから同時存在は無理か。コレットは多分封印状態だから見逃してもらえている感じなんだろうな」

「なんと! 気合で何とかなっとなのかと思っておった! にやるほど、父上が千年儂を見つけられぬわけじゃ。ドラゴンレベルの存在を世界から切り離して秘匿するほどの最上級の封印だったんじゃないなあ」

「これが終わったら解放しに行くか？」

「まさか！ まさか！」

コレットは笑って言う。

「それじゃと旦那様が白馬の王子様として助けてくれると言う、僕の人生最良の瞬間がなくなってしまつてはいないか！ そんな愚策は了承できぬ！ のじゃー！」

「そうか」

フツと俺は微笑む。

「本人がそう言うなら、俺から言うことは何も無いな」

「あれ？ 今のかなり愛の告白っぽくなかったのじゃ？ もっと反応があつてもいいのじゃー」

「お姉様、しかしながら、TPOというものがありますので」

ラツカライが苦笑しながら慰めた。

その通りだ。

さて、

「フェンリル。お前を召喚した主は色欲の魔王ナイアだ。だが、お前の召喚主であることは変りない。勇者パーティーとして加わってくれたのはナイアの指示だった。今はもう無効だろう。どちらにつくんだ？」

俺の問いにフェンリルは、小さな声で呟いた。

「アリアケ様はどう思っているのだ？ はいと言ったところで、私を仲間として信用してくれるのか？」

「当たり前だろう」

「えっ」

即答したことに驚かれた。

やれやれ。俺は苦笑しながら、彼女の頭を撫でる。

「信用するかと言われたら、よく分からん。だが、お前のことを信賴している。それに、お前が俺には必要だ」

「そ、それって！」

「ああああ！ それ俺が言ってほしいやつ！！」

「神代でも朴念仁ですか、この人は、も」

フェンリルが赤面し、一方でコレットが怒り、アリスアが呆れ声を上げていた。なぜだ？

だが、そんなやりとりは一人の少女の声にかき消される。

「そなたらは余裕があるな。それ、これもオマケである」

そう言つて、その紅の少女。いや、色欲の魔王ナイアが投げ渡して来たのは、ビビアであった。

「殺したのか？」

「その必要はないであろう？　なぜなら」

彼女はそう言つてから、手を広げて言つた。

「この深層にて、そなたらは全員我に殺されるのだから！」

深層。

「なるほど。ここはそう言う場所か」

「察が良いな。大賢者。いや、我と対等なる存在。第7の魔王アリアケよ」

「どういふことでしょうか？　ナイア様」

フェンリルの問いに、ナイアは獰猛に笑つた。

「ふむ、そなたはやはりそちらについたか。だがここまで我の計画につきあつてくれた褒章として、それを許す。以後はその救世主を主とするが良い。優秀な部下をもつて我は満足であった」

「主……様？」

「で、この場所であつたな。アリアケ。察しの通りだ。ここは」

無数に変遷する周囲の彩りを、その瞳に映しながら、邪神は宣言した。

「滅亡種人類の深層領域スフィア。全人類の意識は無意識化にてつながつておる。ゆえに、この戦いは全人類の目に留まるぞ」

「なるほどな。人類飼育計画の完了はここでなされるわけか」

「左様である！ 色欲の邪神の権能において、滅亡種人類飼育計画・最終決定コロシウム『深層心域スフィア』を設置した。アリアケよ！ 救世主よ！ そして人類の希望を抹殺する第7の魔王よ！ そなたという光の消失をもって、滅亡種人類飼育計画は完了する！ ゆえに！！」

彼女は獲物である赤き鎌を俺へと突き付けた。

「ここで塵一つなく殺しつくそう！ アリアケ・ミハマ！ 我が計画最大の障壁にして、最高の素材よ！！」

少女の宣言に俺も微笑み浮かべて返事をした。

「そう気負うな、邪神よ。人類を救うのはいつものこだ。ゆえに」  
俺も賢者の杖を構えながら言う。

「いつも通り、世界の危機を救い、ヒトビトに希望を与えよう。だがそれは俺だけの力じゃないぞ？」

その言葉に、後ろで戦闘態勢に入る少女たちも頷いた。

「最高の仲間たちの力だ。俺はほんの少し、力を貸すだけだ。それがヒトの力なのは既に未来で確認済みなのでな」

こうして。

滅亡種人類飼育計画・最終決定コロシウム『深層心域スフィア』での冥王ナイア、もとい第6の魔王、そして、色欲の邪神ナイアとの最終戦争が始まったのである！



259・滅亡種人類飼育計画・最終決定コロシウム『深層心域スフィア』（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、＜無料＞試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ）o\*。ー。）oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 260・宇宙の命運をかけた戦い、開闢〜真の邪神ナイアVS希望の魔王アリアケ

260・宇宙の命運をかけた戦い、開闢〜真の邪神ナイアVS希望の魔王アリアケ

「さあ、始めよう、最後の魔王よ。ヒトの救世主として死に、絶望を与える魔王として死ぬが良い！」

「そう簡単にいくかな？」

「ぬはははは！ あの偽物の邪神ニクスと比べてもらっては困るぞ？ あれは私の部下なのでな！ 小手調べなど洒落たことはせぬぞ！ さあ、我が本性を見せよう。そして、これに耐えられるか、アリアケよ！！！」

邪神の身体から真っ赤な血しぶきのようなものが舞う。

そのドロリとした塊は徐々に大きくなった。

その身体はみるみる成長し、手足は伸び、体型もこれまでの幼いものから少女のものへと変性し、何百メートルあるつかという大きさまで巨大化する。

邪神ナイアは天蓋か、人類を見下ろす月のように宙に浮き、邪悪な笑みを浮かべながら口を開いた。

「我が体液に溺れてみるか、救世主とその一行よ」

ナイアが自身の身体から、先ほどまで体内にあった赤い何かを雨のように降らせる。

「アリシア、三十四重結界」

「<sup>イルミナ</sup>月を防いだ時と同レベルですね！」

「大げさだと思っつか？」

「いえいえ！ 六十八重結界でもいいくらいですとも〜！」

彼女は高速で詠唱して、複層大結界を張る。しかし、

『パリン！ パリン！ パリン！ パリン！  
パリン！ パリン！ パリン！ パリン！  
パリン！ パリン！ パリン！ パリン！  
パリン！ パリン！ パリン！ パリン！  
パリン！ パリン！ パリン！ パリン！  
パリン！』

一瞬にして24の大結界が崩壊した。

だが、俺と共に最も長い旅をしてきたアリシアだ。

もはや指示を待つまでもなく、俺の意図を汲み取っている。

「ラツカライちゃん！ もしミスったらよろしくです！」

「く、空間は切れませんよ、お姉様！？」



「どうですか、先生！ 時間を若干超えて同時に攻撃する技です！  
最近コレットお姉様に一撃いれるために修行してたら出来たんで  
すよー!!」

「よくやった、すごいぞ」

「えへへ、先生のお役に立てて僕《私》嬉しいです」

ラツカライがはにかんで答える。

「これは驚いた……。時間を操るのは膨大なマナが必要なのだが。  
そなたらを呼び寄せるのに資源をどれだけ使ったと思っておる？」

「なら降参してくれるか？」

「まさか!!!」

邪神ナイアは俺たちを見下ろしながら、唇を歪めて嗤う。

「ますます殺しがいがあるというものよ！ そなたら救世主一行の  
敗れる様子を全人類が見れば、必ずや絶望すると確信できた」

「そつか、ならば」

俺は予想通りのナイアの答えに頷くと同時に、

「コレットー!!」

「了解なのじゃあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

俺の合図とともに、コレットが渾身の力を解放した。

（続きます）

260・宇宙の命運をかけた戦い、開闢の真の邪神ナイアVS希望の魔王アリアケ（後書き）

【小説・コミック情報】

小説第5巻、コミック第2巻発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひ一読くださいませ）o\*。ー。）oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」



「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちはこの後一体どうなるのっ……!?!?」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

261・偽神ニクスの数万倍の強さを誇りし邪神ナイア（前書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>





「私だけではなくて、大聖女様も突っ込むのではないのですか!？」  
「おお、うぶな反応! これはこれでいいものですね! はい、でも行きますよ! フェンリルさん!！」

俺の指示で全員が一つの生物のように有機的に連携する!

「お姉様! ちょっと痛いですが、お許してください!！」

「分かっておるのじゃ! イヴの因子が回る前に半身ごと切り落とせ! あ、あまちは残してね?」

「了解です! 秘龍槍・ミスガルススオルム下り落星竜!！」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ!！」

「回復魔法開始!!! 天使の息吹!!!」

「そうはさせぬぞ! と、言いたいところであるが」

邪神はコレットから視線を外すと、ジロリと自身へ肉薄してくるフェンリルとアリシアを余裕のある笑みでもって見下ろす。

俺は二人に<sup>空中飛行</sup>レビテーションのスキルをかける。

「ナイア様、お覚悟を!!!」

「行きますよ! 時間稼ぎパンチ!!!!」

「自分から時間稼ぎと言っんじゃない。まったく。無敵貫通 付

与

俺は再度スキルを付与する。

だが、

ガギイイイイイイイイイイイイイイイイイン!!!!!!!!!!!!!!

先ほどと一緒にか。

「効かぬ、効かぬ！ 色欲の邪神の権能である！！ そなたが万能たる賢者であっても、神性に備わる性能自体を変更することは出来ぬ！」

「なんと！ まさかアリアケ様のスキルさえも無効化するなんて！」

「まあまあ、想定通りですよ、フェンリルちゃん。慌てないで一休みしましょう」

「フェンリルちゃん!？」

「差別化ですよ、差別化。いやあ、それにしても参りましたね。どうしますか、アリアケさん！ なんか無敵っばいですよ！」

俺の隣に戻ってきたアリシアが不気味に嗤う邪神を見上げながら言う。

まあ、とにかく。

「収穫はあった。あれは俺のスキルすら無効化する『無敵』の存在だ。攻撃の一切を受け付けない」

「そ、それでは……」

フェンリルが焦った表情を浮かべる。

と、同時に。

「ひ、ひいいいいい！ こんな訳の分からないところで死にたくない！ くそおおおおおおお！ これでも喰らえ！！！！ くそ邪神野郎！！！！ おらああああああ！！！！」

「ふむ、スキル 投擲 付与」

聖剣はすでに消失しているので、代わりに持っていた鉄製の剣を投げる。

当然のようにカシャンという音とともに弾かれた。

「ぬははははは！！！！ 初級勇者も参戦か！ だが、我が玉体に一矢報いようとする気概は褒めるに値する。ふむ、ここは2段階昇進とし、普通勇者と名乗るが良い。まあ」

邪神は歪に唇を歪めて、ビビアを見ながら、

「勇者たるそなたはここで死に絶えるのだがな。そこの最後の希望たる第7の魔王とともに。その方が人類に絶望を与えるし、計画もはかどる。ふははははは！！！！」

「うっ、ぢくしょう、ぢくしょう！ デリア！ デリア！」

絶望した普通勇者の悲鳴が深層心域スフィアに轟く。

（続きます）



261・偽神ニクスの数万倍の強さを誇りし邪神ナイア（後書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

262・大賢者の叡智と彼を慕う仲間たちの絆が活路を開く(前書き)

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

262・大賢者の叡智と彼を慕う仲間たちの絆が活路を開く

262・大賢者の叡智と彼を慕う仲間たちの絆が活路を開く

「さて、ではもうよいか？ 我ももう飽きて来たのでな。我が分体がそなたらの柔らかき肉を裂こうぞ」

色欲の邪神ナイアがそう言うのと同時に、彼女の腹が割れて赤黒いへドロのようなものがしたたり落ちる。

いや、あれは……。

「なんだよありゃあ!？」

ビビアが狂乱しそうになるので、とりあえずフェンリルに頭を押さええてもらう。

「ひい！ ひい！」

ばたばたとあがこうとするが、今、混乱すれば彼の命にも関わる。

軽く首根っこを掴んでおいてもらおう。

「放っておいていいのでは？ どうせ戦力になりませんよ？」

「ははは。仲間を守るのは俺の大事な使命さ」

「このような状況でも。……さすがアリアケ様です」

「こんな状況だからこそ、さ」

俺は微笑みながら、邪神ナイアより放たれた紅色のそれが何か観察する。

どうやら、それはヘドロなどではなく、それぞれがナイアの分身のようだ。

それが数万、いや百万はいるかもしれない。

その一人一人が、恐らく冥王をしていた時のナイアの実力を誇っているように思われた。

「これはピンチ！！　なのじゃ！！　旦那様！！」

「ワラワラと凄い勢いで増えていきます、先生！？」

「しかもどんどん増えてますねー。なんてでたらめなんでしょう。自分では何もしないで分身頼みとは！！」

「攻撃も通りませんし……。こういう場合の私たちの死因は圧死になるのでしょうか？」

少女たちが口々に戦況を伝えてくる。

その声には焦りがにじんでいるようにも思えた。

しかし、

「まあ慌てるな」

俺は浮足立ちそうになっている彼女らに微笑みながら言ったのだ。た。

「アリアケ様はどうしてそれほど余裕なのですか？」

「そうだな」

フェンリルの言葉に俺は頷きつつ、

「少し、邪神ナイアがボロを出したような気がしたんでな」

そう言ってウインクする。

「ボロですか？ 私には圧倒的な戦力を放出したように思えたのですが」

「確かに」

俺は否定しない。

「百万の邪神ナイアの分体だ。これを彼我の戦力差とすればこちらに勝利の確率はゼロだろう」

「なら！」

「しかし」

俺は首を横に振り、微笑んだ。

「2つおかしな点がある。それはアイツにとって致命的なものなんだろう。だから誤魔化し、隠し、嘘をつき続けて来た」

「嘘？ それはいつから……、一体何についてのことを言っているのですか？」

「全てだ。最初から最後まで全て。邪神ナイアは嘘を吐き続けている。今、この瞬間もな。さっき、確信したよ」

「今、この瞬間も？」

フェンリルが疑問を浮かべているところに、

「何を話しておる！ めはははははは！ 怖気づくのも無理はない！ さあ、我が分体に四肢を引きちぎられ、この深層心域にて、人々に絶望の一幅を残して絶えるが良い！ 第7の怠惰の魔王アリアケよ！！」

邪神ナイアの声が響いた。

と、同時に、数百の分体が一斉にこちらに攻撃を仕掛けてくる！

「まずはこいつらを何とかしないと。とはいえ、単純に数が多いな」

「せめて円陣でも組めれば良いのですが……！」

フエンリルが焦った声を上げる。

と、その隙をついて、

「ひひひひひひひひひひ！ 邪神怖い！ もう嫌だ！ 俺は逃げるぞ！ デリア ……！」

彼女の拘束を振りほどいて、ビビアが逃げ出そうとした。

「こら、ビビア！ お前もお前もないと陣形に穴があくだろうが！」

「知るか！ それに俺一人いたところで、どうせこれだけの相手を防げるわけが」

やれやれ。

「7人の旅人がこの世界を守る。邪神ナイアの言葉。あれは嘘じゃない。いや、逆か」

俺は微笑みながら言う。

「神の宣った言葉には祝のろいが生じる」

賢者の杖を構えて、スキル支援の準備を行う。

「本来は魔王の存在をほのめかした言葉。だが、それを逆に利用す

ることもまた可能だ。なあ、そうだろう」

俺は振り向きながら言った。

「勇者パーティー  
お前たち」

その言葉に、

「何がどうなってんのよ!? とりあえずあの変な赤いのが敵なの  
ですわね!?!」

「俺の鋼の肉体が神代の人類全員に見てもらえるチャンスという理  
解で合っているのか、アリアケ!?!?!」

「あははははは! 何、この勇者! びびって顔真っ青じゃん!  
は!、ちょー笑えるんですけどー!?!?!?!?!」

3人の新たな戦士たちの姿があった。

未来からの旅人に俺は含まれない。本来、この時代の人間だからだ。  
それはコレットも同じ。

すなわち、

ビビア・ハルノア

アリシア・ルンデブルク

ラツカライ・ケルブルグ

デリア・マフィー

プララ・リフレム

エルガー・ワーロック



ローレイ・カナリア

離脱した者もいるが、それでも一度は『勇者パーティー』に属した  
ことのある未来からやってきた英雄たち。

すなわち、神代を救う7人の旅人と言うには十分な条件を備えてい  
る。

無論、これは邪神の吐いた言葉呪いを利用したこじつけだ。

しかし、

「呪い 付与」

だが、邪神とはいえ神は神。

その言葉《呪い》による効果は絶大である。

「さあ、邪神ナイアよ。この7人は神たるお前が認めた戦士となっ  
たぞ?」

俺は微笑みながら、

「お前が救世の戦士たちと認めた英雄たちを、お前自身が破ること  
が出来るか? その守り、せいぜい崩してみることだ、邪神ナイア  
!」

そう言って全員に、強力なスキルを付与したのであった。

一方の邪神ナイアは目を見開き、

「馬鹿な……。どこにいたのだ。我は招いておらぬぞ！ そのような者たちを！ 一体どこから招いた！ このスフィアへと！ アリアケ・ミハマよ！！」

怒りの声を上げたのである。

262・大賢者の叡智と彼を慕う仲間たちの絆が活路を開く(後書き)

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

263・救世主アリアケが率いるパーティーは真の力に目覚める  
(前書き)

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

### 263・救世主アリアケが率いるパーティーは真の力に目覚める

263・救世主アリアケが率いるパーティーは真の力に目覚める

「馬鹿な……。どこにいたのだ。それに我は招いておらぬ！どこから招いた！このスフィアへと！」

邪神ナイアの問いに、俺は微笑みながら答える。

「それを言うなら、お前はアリシアたちをそもそも招いたのか？」

「何？」

「お前が本来招いたのは、人類全体を絶望へと追いやるほどの、史上最も強大なる大英雄のみ。すなわちこの俺だけだったはずだ」

「その通りである！なのに！」

「そう。まず勇者ビビアがついてきた。たまたま俺の近くにいて巻き込まれただけだがな。ところで知っているか？」

「何をか!？」

「ビビアとテリアは近く結婚する予定だ」

「……は?。」



「いや、それにしてもビビアはずっと、何かあるたびに「デリアー、デリアー」と泣き喚いでいただろう？ だから、みんな気づいていたかと思っただけだなあ」

「……分かるか！」「……」

全員から指摘が飛んできた。むう、そうか……。

と、ナイアの声がひびいた。

「だが、それがどうしたというのか」

俺は微笑みながら答える。

「分からないのか？ アリシアだって俺と結婚をしているから神代へと回帰した。周囲の仲間たちも一緒に。つまり、彼女たちも一緒にというわけだ。デリアーとビビアの絆によって、デリアーが転移し、多分周囲にいたプララとエルガーも巻き込まれて転移したんだろう」

デリアーが嘆息しながら言った。

「そうそう。この3人で転移してさあ。まじで死ぬかと思った……」

「いや、っていつかさ……」

「う、うむ……」

三人が言いにくそうに言った。





「ふっ、まあ俺の弟子たちだからな」

コレットの言葉に俺は微笑む。

「だが、そんな弱き者たちを使わねば我の攻撃を防ぐこともままならぬという証左に他ならんのではないか、希望の魔王アリアケよ。耄碌もろろくしたか？ この色欲の邪神を倒すには余りにも役者不足でもないか！」

そう邪神が言うのと同時に、彼女から放出された数千の分体たちがデリアたちに押し寄せる！

しかし、その言葉に俺は思わず笑う。

「気づかないのか、邪神ナイア。彼らが単なる弱者に見えるとしたら、お前は何も見えていない」

「なんだと！」

彼女の怒声に俺は応える。

「救世主である俺の率いる賢者パーティーと、弟子の勇者パーティーがこうして勢ぞろいした。今ここに、神代を救う救世主パーティーが誕生した」

俺はそう言いながら、邪神を見上げて微笑む。

「俺が率いる救世主パーティーが邪神ごときに負けると思うか？」



263・救世主アリアケが率いるパーティーは真の力に目覚める  
(後書き)

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

264・救世主を頼り、集った仲間たちは邪神と死闘を開始する  
(前書き)

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>





「お前にかけている 無敵 の効果はもう切れるぞ。数十秒は効果が出ないぞ?」

「なら カウンター でいい! あとは筋肉で何とかする!! さあ見る神代の人類よ! これが選ばれし者の筋肉だ!!!!!!」

「アリアケ様、怖いのですが……?」

「いつもあんな調子だ。だが、プララを見事守っている。俺の計算だと絶対に押し負けるはずなんだがなあ」

「筋肉は計算ではない!! 全てを凌駕するギフトなのだあ!!!」

「分かった、分かった」

俺は苦笑する。

俺の支援を受けたエルガーが守りつつ、やはり俺から受け取った魔力でプララが切り札を放射し続ける。

前方の邪神たちが融解していった!

「さすが先生です!」

ラツカライの言葉に、

「ふむ! だがしかし! 何百と倒そうと徒勞である? 何せ、い

くらでも生み出せるのだからな!!　これこそ我が権能である!!」  
邪神ナイアから更なる分体が次々と生み出される。

「ひい!　アリアケえ!　こんなじゃ埒があかねえ!　何とかしてくれやがれえ!!」

ビビアの声が響く。

「勇者ビビアさん。も〜、前に出ないでください!　聖剣がない勇者なんて、実質『無』勇者なんですから!」

ローレライが苦情を呈した。

「ぐぎ!?　そ、そんなことねえ!　俺は勇者だあ!!　普通勇者にまでなった男なんだぞ!?」

「ならアリアケ様に頼りすぎるのはダメなのでは?」

邪神の言葉を素直に受け入れてるんだな。

まあ、それは良いとして……。

「俺を頼りにするのは構わないさ。今は俺を中心とした救世主パ―ティーなのだからな。よし、普通勇者ビビアよ!」

「お、おう!?　ま、まさかこれは!?!?!?!?」

俺は微笑みながら頷き、一振りの剣を空間アイテムボックスより取り出し渡す。







ナイアはその巨大な肉体をみじろぎさせる。

すると、その手には紅の大鎌が握られていた。

「アリアケの力で随分と勢いが良いようであるが、さて、では分体ごと始末してやろうではないか。救世主アリアケとその一行よ」

邪神は大鎌を構える。

「でないとおちおち昼寝も出来ぬからな」

そう言っつて、邪悪なる鎌を振るおうとした。

それを見つっつ、俺は口を開く。

「アリシア、コレット、ラッカライ、ローレライ、そしてフェンリル」

その言葉に、少女たちが俺へと視線を向けた。

何を言われるのか分かっているという顔だ。

俺は微笑みながら指示を出す。

「偽りの邪神が隙を見せてくれた。準備をしてくれ」

俺は一拍置いてから、

「切り札を切る」

と言ったのだった。

264・救世主を頼り、集った仲間たちは邪神と死闘を開始する  
(後書き)

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

265・大賢者が作り出す百億分の一の勝機（前書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

265・大賢者が作り出す百億分の一の勝機

265・大賢者が作り出す百億分の一の勝機

「お前が直接攻撃をしてくるタイミングを待っていたぞ、ナイア」

「ほほう。死ぬタイミングをか？ 大英雄。それは殊勝であるな。ではこのまま逝くが良い！ あとは我が人類を飼育してやろう。そして、邪魔な上位存在を掃討する尖兵としようではないか、ぬはははは！！！」

俺はその言葉を聞いて、

「フッ」

思わず笑ってしまった。

「何がおかしい、大英雄よ」

邪神ナイアが怒鳴る。

だが、

「仕方ないだろう？ 何せ、神の下手な芝居を目の前で見せられているんだ。思わず笑ってしまったのは悪いと思うが、許せ」

「芝居だと？」

彼女は大鎌に更に魔力を込める。

血染めの鮮血よりなお鮮やかなるそれは、この無限の領域であろうとも、その全てを吹き飛ばすほどの威力を誇るだろう。

それこそ、宇宙開闢の再現するかのよう。

だが、俺は慌てることはない。

なぜなら、

「だってお前は色欲の邪神などではないだろう？」

「なっ!？」

ピタリ、と今まさに振るわれようとしていた鎌の動きが一瞬止まる。

同時に、

「「「「「えっ!？」「「「「「

少女たちも驚きの声を上げた。

「何を根拠にそれを言う!」

ナイアが言う。しかし、

「いちおう俺の本職は大賢者だ。世界を見通すことが、本来の俺の



仕事だ。世界を救うのはその一環に過ぎん」

ゆえに、

「お前が色欲の邪神ではないことくらい分かっていたさ、そうだろう?」

俺は天に漂う巨軀に向かって言った。

「怠惰の邪神ナイアよ」

「……た、怠惰!?!?!」

「そうさ。だって、そうだろう?」

俺は滔々と話す。

「奴の攻撃は全て他人や分身を動かす権能に特化している。色欲の邪神と言いながら、俺たちを誘惑するような行動は一切しない。むしろ、邪神の殻とも言つべき権能が彼女を常に守っている。星を砕くほどのコレットの攻撃が効かないのは、それが怠惰たる邪神が『誰も入れない邪魔されぬ空間』を作る権能を持つからに他ならない」

「ですがアリアケ様。冥王ナイア様の時はよく働かれていらっしやいましたよ?」

フェンリルの言葉に、

「ま、そうだな。だが、今も働いている。こうして人類を飼育して、宇宙一の兵士にしようとしているのだからな。だがな、フェンリル」

俺は微笑みながら言う。

「働き者と怠け者は両立するんだ」

「えっ?」

ポカンとする少女たちに俺は聞く。

「そもそも、なぜナイアは人類を飼育しようなどとしている?」

俺の問いにコレットが答える。

「ナイアが言っている通り、気に入らない上司を倒すためではないのじゃ?」

「そうだな。しかし、それは単なる『手段』だろう?」

「のじゃじゃ? つまり目的ではない、というやつなのじゃ?」

その通りだ。

つまり、

「えっ、もしかして。まさかアー君!？」

アリシアが驚きに目を見開いた。

そう。

そのまさかだ。

「ああ。そうだ。邪神ナイアの目的は、自分を使役する上位存在を抹消して自由になることだ。」

まあ、言い方を変えれば、

「怠惰に耽るために勤勉に至ったということだな」

「そ、それがどうしたというのか！」

俺の言葉に、ナイアが激高する。

「この攻撃で貴様らは終わる！ ゆえに我の正体を看破したことは賞賛はすれど、幾分の価値もない！！」

「いいや」

俺はレビテーションのスキルをパーティー全体に使用する。

「百億の価値がある。なぜならば」

俺は静かに告げる。

勇者パーティーたちが邪神の分体を倒し続け、切り拓き続けてくれている道を通り、肉薄する。

「怠惰なる神が自身から動く時、その存在は矛盾に満ちる。攻撃しよつとする時がお前が最も弱い時だからだ！ ナイアよ！！！！」

「愚かな！ だとしても、我が『邪神の殻』の権能を破り、玉体に触れることは叶わぬぞ！！ この世界のシステムが許さぬ！！」

「だから、お前が一段衰えるタイミングを待っていたんだ。なあ」

「なに！？」

ナイアが驚きの声を上げた。それは余りにも意外なものを見た瞳。

それはそうだろう。なぜなら、

「久しぶりよのう。旧き主様？」

その存在は満足そうな笑みを浮かべて言った。

「あ、あなたは……」

「うむ、そう言う意味ではそなたも久しぶりということになるのかのう？ それにしてもちんまいのう」

美しい白髪を持つ麗人がそこには二人いた。

体形は全く違うが、その二人は明らかに同一の存在であった。

「フェンリルだというのか！？ 馬鹿な！ ありえぬ！ 未来のそなたがなぜここにおる！？」

ナイアが驚愕の声を上げた。なぜなら、

「な、何をするつもりか！ アリアケ！？ そんなことをすれば二

人とも消滅するだけである！！ 同一の時代に同じ存在は、同時に存在出来ぬ！」

だが、俺は微笑みながら言った。

「お前の権能に触れていてもか？」

「え？」

そう。

「何事にも例外は存在する。怠惰の邪神ナイア。例えば」

俺は少女たちに総攻撃のためのスキルを使用した。

「神の権能『絶対防御』と世界システム『存在矛盾』が均衡した時などはな」

そして、

「その時、世界は矛盾を解消するためにその『権能』と『制限』を一時的に凍結するだろう！」

パライイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
ンンンン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

神の絶対の権能が割れる音が、深層心域スフィアへ鳴り響いた。

265・大賢者が作り出す百億分の一の勝機（後書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

## 266・救世主パーティー全滅の危機（前書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>





深層心域スフィア全体を薙ぎ払い、切り刻む、宇宙開闢すらも想起させる一撃が振るわれた！

だが！

「アリシア！」

「分かっていますとも！いつもの無茶ぶり宜しくです！」

俺は苦笑しつつ彼女へ、

「神聖魔力強化      神聖防御力アップ（超）      範囲拡大（星）」

ありったけのスキルを付与する。

「わははは！無駄だ！！その者が稀有なる大聖女であろうとも、真の神の一撃を防げるものか！！！」

「三十四重大結界！！！」

「わーはっはっは！しかも魔王を防いだ時と同数などは！」

ナイアの嘲笑が響く。

「お話にはならぬわ！これにて終幕である！！救世主パーティよ！！！」

彼女の一撃は人類が誰も見たことないほどの威力を誇る。

俺ですら初めて経験するほどの衝撃を空間に及ぼした。

そして、

「な、なぜ……」

ナイアの声がかもう一度響いた。だが、

「どっということだ……」

その声は邪神と名乗るには相応しくないものである。

「なぜ、無傷なのだ！？ 神の一撃を防げる道理など、どこにもないはずであろうに!？」

星をも破壊するであろう一撃は、なんと俺の率いる救世主パーティを誰一人傷つけることが出来なかったのだ。

だが、

「違っぞ、ナイア」

俺の声が響く。

「逆だ」

俺は静かに言う。

「魔王と同等の防御でないといけなかったんだ。だって、そうだろうっ？」

俺の言葉だけが紡がれていく。

「なあ、怠惰の邪神ナイア。いや……」

至近距離まで迫った俺は宣告するよつに言う。

「『怠惰の魔王』ナイアよ」

「な、何だと」

魔王ナイアは驚愕の声を上げたのだった。

266・救世主パーティー全滅の危機（後書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思っています！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

267・大賢者の叡智は仲間を守る！（前書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思います！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

267・大賢者の叡智は仲間を守る！

267・大賢者の叡智は仲間を守る！

「何もおかしくはないぞ、ナイア。いや……」

至近距離まで迫った俺は宣告するように言う。

「『怠情の魔王』 ナイアよ」

「何」

そう。魔王ナイアは驚愕したのだった。

だが、何も驚くことはない。

「我は邪神だ！ 誰が魔王であるか！？」

「そうだな。お前は邪神だ。しかし……」

俺は微笑みながら。

「お前の渾身の一撃。あれがお前の『殻』を無効化するためだけに誘った行動だと思うか？」

「なっ!？」

俺はあたかも神のごとく宣告するように言った。

「邪神として矛盾した行動をするお前はこの瞬間、一段階、堕ちた存在となる。無論、お前が邪神であるのは『そのまま』だ。しかし」  
俺は全員へスキルを使用する準備をしながら言葉を紡ぐ。

「自ら名乗った『魔王』というステータスは活きている。そして、この二つは矛盾しない。なぜなら、それは『お前が俺にしたことだから』だ、邪神《魔王》ナイアよ」

「ま、まさか!?!」

そういうことだ。俺は微笑む。

「星神の代理人として、神そのものより、一段階下の神格を持つ俺を魔王とみなしたならば、お前自身も一段階の墮落によって魔王たる存在になりうる。それは神たるお前が自ら定めたのだ」

神が定めたことは呪い<sup>ル</sup>となり、世界のシステムとして作用する！

ゆえに神なのだ！

ならば！

「もはやお前と俺は同等の神格を持つ存在と言えるだろう！ いや、むしろ」

俺は全員へスキルを使用した！





人類の剣

魔力量大アップ  
魔神の血脈

神聖フィールド 展開

俺の振るう聖杖キルケオンによって、救世主パーティー全員が神々をも屠る力を得る！

267・大賢者の叡智は仲間を守る！（後書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思っています！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

268・切り札（前書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思っています！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>



「ぐはあああああああああああああああああああああああ  
?!?!?!?!?!」

超上空から黄金竜の姿となったコレットが、全てを焼き尽くす焔を  
まとい星を割る威力の突撃を喰らわせる！

一度目に邪神を守った『殻』はもうない。

邪神は叫喚を上げながら大地へと墮ちる！

空を優雅に漂っていた邪神が今、這いつくばるように大地へ縫い留  
められた！

「げぶつづつづつづつづつづつ！ だが、甘いぞ！ 神よ！ この  
程度で我は死なぬわ!!」

「だろうな。ならば上を見てみる、魔王ナイア！」

「なに!?!」

コレットから更に上空へと飛び上がったラツカライが、もはや光速  
を超える勢いで槍を突き立てんとする！

「仲間ごとやる気か!?! アリアケ！」

「そんなわけがないだろう。アリシア、いまだ！」

「賜りました！ 救済の大結界 人類最終防衛結界ライン  
幸運上昇 全属性攻撃無敵 体力 自動回復  
天使の守護 ! これらを全てコレットさんへ全力集中！」



「まだ、まだだ……」

魔王ナイアは顔を上げる。

その表情は苦痛にまみれているが、笑みのようなものも浮かべている。

「確かにそなたらは強靱無比。よくぞここまで我を追い詰めたものだ。褒めてつかわす。が……我を仕留める決定打は持ち合わせおらぬ」

それが微笑みの理由か。

「権能を今一度……。怠惰の神としての殻を張れば……。回復してすぐに仕切り直せる。さすればそなたらは今度こそ我が無限の分体に圧死させられようぞ。もはや、間違いは犯さぬ!!」

だが、

「それはもう無理だ」

「な、なに!？」

俺は宣告する。

「お前はこれから敗北した神として、神《俺》の僕たる狼に『捕食』される! それが聖獣フェンリルの権能だからな」

「なっ!?! そんなことが出来る訳がない!! 我は邪神である!

！ 神を殺すのではなく、喰らうなどと!?!」

「そうか？　だが今はお前の『権能』と、『同時存在』という矛盾状態によって、システムが停止している状態だ。ある意味、安定しているんだ。ならば」

俺は微笑みながら言う。

「その安定を維持することを世界は望むと思わないか？　そのためには神の僕たるフェンリルが、お前を捕食してその権能を取り込むことが一番手っ取り早い」

「そっ……」

「そ?」

ナイアは余裕のあつた表情を決して、憤怒に満ちた表情を見せる。

そこに怠惰の神としての顔はもはやない。

「そんなことはさせぬ！　許さぬ！　アリアケ！　神を愚弄するのもほどほどにせよ！　我が対等なる存在、アリアケ・ミハマあああああああああ!?!」

ナイアは激情にかられ、全ての力をふり絞り、無理やりコレットたちの攻撃から逃れる！

体の一部が消滅することすら厭わない。

しかし！



「やれやれ」

俺はそこまでの余裕の笑みを消して、むしろ嘆息した。

「お前が俺を買いかぶってくれていて助かった」

「な、なにを？」

突然の俺の変貌ぶりに、ナイアは目を見開く。

だが、彼女に時間は与えない。

「俺など一介の人間に過ぎんさ。むしろその方が気楽で良い」

俺はそこまで傲慢ではないさ。

「お前からどれだけ力を削げるかが、俺たちの勝機だった」

そして、

「お前が玉体としていた肉体は一部が削がれ、そして、憤怒にかられたお前の神性は今や地に堕ちた」

「そ、そなたはわざと!？」

驚愕に目を見開く。

「奴らの攻撃は全て布石だったとでも！ 計算づくだったとでも言うのか!？」

その言葉に、

「当然だ」

俺はあっさりと答える。

「神を殺すのだから、同等の者がしなくてはな」

それは神の代理人である俺にしかできないことだ。

そして、

「手伝ってくれるか、フェンリル」

「もちろんであるぞえ」

「はい、あ、あ、あ、主様!!!」

現代と神代のフェンリルが同時に頷いたのだった。

「ナイアよ」

俺は聖杖キルケオンをかざしながら言っつ。

「切り札とはこうやって使うのだ」

268・切り札（後書き）

『聖女さんは追放されたい！〜王家を支えていた宮廷聖女、代わりが出来たとクビにされるが、なぜか王家で病が蔓延！えっ、今更戻って来い？一般の大勢の方々の病を治すのが先決なので無理です』

月間ランキング表紙入りできました！7位です！

こちらの作品を読んで頂いている方にはきっと楽しく読んで頂けると思っています！

応援よろしくお願いします！

<https://ncode.syosetu.com/n8390hx/>

269・英雄神は神を撃ち墮とす（前書き）

新作を始めました！いま【日間総合ランキング3位】です！

『ゲーム内の婚約破棄された令嬢に声が届くので、浮気王子を毎日断罪することにした』

<https://ncode.syosetu.com/n0557hz/>

本作『聖女さん追放』を楽しんでいただける読者の方におすすめです！！

ぜひ第1話だけでも読んでみてください！！

269 ・英雄神は神を撃ち墮とす

269 ・英雄神は神を撃ち墮とす

「スキル」

俺はシステムが停止している今だけ使用できる禁断のスキルを使用する。

「融合」

俺とフェンリルたちは一つの超常的存在として再構成される！

「馬鹿な！ それはヒトには使用できぬスキルであるはずである！」

「だが、何事にも例外はある」

例えば、

「<sup>上位システム</sup>神の権能が停止されている瞬間などはな」

「なんとという叡智……。この世界をそなたは神たる我より熟知しているというのか……」

そんな声を聞いている間にも、神《俺》と聖獣が融合した、超常神としての俺の姿が現れる。

その姿は、フェンリルの長く美しい白い髪や美しくしなやかな肉体を継承しつつも、顔は微笑みを浮かべた神《俺》のものである。

そして、神たる証として6対の碧き翼あおを持っていた。

「だが聖獣とリンクしたからといって何だと言っつ……」

『ドン』

「なっ!?!」

邪神ナイアが呆気にとられた表情を浮かべた。

それはそうだろう。

いきなり自身の肉体の一部に穴があげられたのだから。

しかも、

『ドン』『ドン』『ドン』『ドン』『ドン』『ドン』『ドン』

「ぐは!?!? な、何が!?!? ぐ、ぐああああああああああああああああ!?!?!」

一撃では終わらない。

次々と自身の体が崩壊し、再生も追いつかない。

まるで虫に喰われた書物のように、どんどんその穴は増え続け、拡張していくのだ。

それはまさに、

「我が存在が、減って行くっ……！ 摩り減らされて行くっ……！」

邪神が消滅してゆくことに他ならなかった。

「不思議そうだな、ナイアよ」

「ア、アリアケ神……！」

宙より言葉を掛ける俺へ、ナイアはねめつけるようにして叫んだ。

「我が玉体をこれほど傷つける攻撃を連続で出来るわけがない！

そなたが英雄であることも認める！ 我よりも同格たる神であることも認める！ だが、これほどまでに一方的なのは納得が行かぬぞ

！ 救世主……！」

「簡単なことだ。ナイア。聖獣フェンリルを通じてアビスにリンクしているだけだ。そして、そのマナを使用して」

「まつ、まさか……？」

俺は手を挙げる。

と、同時に無数の物体が形成された。

それは、

「万の星剣、万の星槍、そして万の星弓だ」

これらは本当の神が作った聖剣らには満たない。しかし、

「今や俺と同格たるお前ならば、もはや、これは単に、質よりも量がものを言う戦争に過ぎん」

ならば、

「無限の星武器により、お前を塵一つまで分解しよう。お前の再生が追いつかない速度で、お前をこの世界より消去する！」

「ば、馬鹿な！ 我が負けるのか！ 邪神たる我が!?!」

その言葉に、俺は、

「そつだ」

答えつつ、手を振り下ろした。

「お前はヒトという種に負けるのだ。邪神ナイア。お前が目論んだ通りにな」

百万の星の武器たちが邪神を襲う。

「ああ、そつか……」

邪神の声が細く響いた。

「見落としていたな。ヒトにはそれを導く者がいるのだな……。そつという者が現れた時、ヒトは無限の力を得るのか。我が……」



滅亡種人類飼育計画・最終決定コロシウム『深層心域スフィア』に、恐ろしいほどの爆発による光が満ちる。

「我がそれを務めてしまったゆえに、英雄と言う存在を見逃してしまった……アリアケよ……」

ナイアは呟くように言った。

「そなたに導かれた人類は恐ろしいな。きっと……この宇宙を……支配することすらも出来よう……」

だが、俺はそれに呆れた声で答えた。

「勘違いするな」

……と。

「俺の目的は田舎でスローライフをすることだ」

そんな場違いな声とともに、深層心域スフィアは邪神の消滅とともに、崩壊したのであった。

269・英雄神は神を撃ち墮とす（後書き）

新作を始めました！いま【日間総合ランキング3位】です！

『ゲーム内の婚約破棄された令嬢に声が届くので、浮気王子を毎日断罪することにした』

<https://ncode.syosetu.com/n0557hz/>

本作『聖女さん追放』を楽しんでいただける読者の方におすすめです！！

ぜひ第1話だけでも読んでみてください！！

## 270・エピローグ

「アリアケ様、本当に行ってしまったわけなんですかい？」

俺やアリシア、他の星を救ったメンバーたちは名残を惜しむ滅亡種人類王国『クルーシユチャ』の国民たちから引き留められていた。

国土の大半が海に沈み、人類は危機的な状況にある。

もちろん、多少の手助けはした。

本当はもつと復興を手伝いたいと思うし、オールティ国王でもある俺の政治手腕を発揮できれば、復興は数百倍のスピードで進むであろうという確信もある。

だが。

「すまない。これ以上、未来から召喚された俺たちがいると何が起るかわからないんだ」

もともと、俺たちは邪神ナイアによって召喚された存在だ。

特にフェンリルやコレットは同一時間軸に同一存在が併存している状態である。

システムが停止しているから良いが、いつ動き出し、何が起るかにはわからないのだ。

「そうですね。いえ、謝らないでください。アリアケ神、そして真の勇者でもあり、勇者の助言者でもあったお方」

国民の一人は言う。その者は新しい王としてこの国をこれから復興して行く。

「スフィアでの戦いは詩人が詠い、書に記し、口伝でもって、将来に伝えましょう。きっと我々がこの人類種を復興させ、あなたの活躍を心から感謝していたことを千年後に伝えるために」

「あれ？　もしかして。それって。アー君？」

俺は微笑んで首を横に振り、アリシアに続きを言わない様に伝える。

隣に侍る神の伝説。

おとぎ話にある、千年前の物語。

初代勇者には神が侍り、様々な助言をして冒険の成功を手助けしたという。

そして、勇者も大いに強く、魔王を打ち倒したという伝説。

あれが全部俺自身のことだったとはな。

「驚くほどのことではないです。だって、先生なんですから」

伝承を知っていたラツカライも察したようだ。

全く、何だか恥ずかしいな。

出来れば止めて欲しいところだが、とはいえ、神代の救世主となった今、詩に詠われるのを無理に止めるのは不可能だろう。全人類が俺が救世主として邪神を倒すところを見てしまったのだから。

それにあともう少し、この時代にやることも残っているからな。少し急いだほうが良いだろう。

俺は別れを惜しむ国民たちに別れを告げて、旅立つことにしたのであった。

さて、滅亡種人類王国『クルーシユチャ』から徒歩で半日歩いた場所に、一つの小屋が立っている。その扉をノックして顔を出したのは、

「遅い！ 全くそろそろ完全消滅するところであつたぞ！ どうせギリギリまで復興を手伝っておつたのであるう。この救世主め！」

「ええ 冥王ナイア様」

「ひ、ひいいいいい い、生きてたのかよ あの攻撃でえ」

一部の人間は臨戦態勢を取るが。

「剣を下ろすが良い。我はもう冥王ではないぞ、フェンリルよ。あー、えつと幼い方のフェンリルと言つべきなのか？ しかし、改めて見ると、やはり大人フェンリルは色っぽくなるのであるなあ！」

我もびつくりであるぞ　おお、あと、シヨンベン小僧よ、安心せよ、我はもう死に体のようなものである！　だが、最後に色々やっておくべきことがあるのでな。アリアケに使い魔を放ち呼び寄せたまでのことだ！　うむ」

俺は嘆息しながら言った。

「時間がないんだろう？　邪神ナイアよ？」

「おっと、そうであったな。手短にすまそう。救世主パーティーたちよ。ささ、入るが良い！」

俺たちは中に入ってテーブルへと座る。

ナイアが話し始めた。

「取り急ぎなのだが、我はこの星が結構気に入った。というかアリアケが気に入ったことを伝えておく！　出来れば結婚したいぞ」

「一番どうでもいい話題なのじゃ！」

「いやいや神竜よ。実は一番大事な話題であるぞ？　なぜなら我が気に入ったからこそ、今回魔王として破壊させてしまった月に、我自身イルミナがなるうと考えておるわけだし」

「月について。ナイア様が」

「うむ！　この星には大切な衛星であるからな！」

「ああ、なるほどのう。だから未来でも月は天空にあり、イルミナ

族は存続しておるのか」

二人のフェンリルが驚き、納得するという相反する反応を示す。

「その通りである！ あと、千年後の打倒、偽神ニクスにも協力しようではないか！ 今の我は勝てぬから齒がゆいものであるが、とにもかくにも、あんなに我を倒した人類が負けたら悔しすぎであるからな！ あ、でも、既にそなたらは打倒した後か。なら、変な感じだな、って思ってるかもしれんな」

「ん？ ああ、なるほどなあ。ずっと疑問だったんだが。あれはニアのおかげだったのか」

「どづいうことですか？」

アリシアが首をひねった。

俺は微笑みながら答える。

「フェンリルが『呪いの洞窟』にいた理由と、初代勇者パーティーメンバーなのに、俺たちのことを一切覚えていない理由さ」

大人のフェンリルも頷きながら言った。

「おお、そうであるなあ。そして、今、実際に神代にいるというのに、この記憶さえ、我が思い出そうとすると霧がかかったようになりおるぞえ。なんとというのかの、勇者パーティーとしてハチャメチャな冒険したことは覚えておるし、現代でも、一緒に旅をしている中で度々、神代の勇者パーティーとの旅の記憶を思い出し、口にして来ておるが、顔と名が一切思い出せんかった。しかも、そのこと





「い、今の話を聞いてなお、私はアリアケ様を救いに向かうのですか？」

「うむ。それはもう恋心ゆえ、心配でどうしようもなくなるのだ。ま、仕方あるまい！」

「こ、恋だなんて……」

「うむうむ。恋だのと、たわけたことであるぞえ。これは愛よ。我が主様を愛しておるゆえ、世界が滅亡すると分かっているても、まあ、やってしまうかもしれんものう」

「堂々と正妻の前で宣言しないでくださいな！」

アリスアが嘆息する。

だが、とにかく未来のフェンリルのダメ押しもあり、ナイアの言葉に嘘はないと分かっただけらしい幼きフェンリルは決意を表明する。

「分かりました。では『呪いの洞窟』99階層で記憶の一部を封印した状態で千年の月日を過ごします」

「だが、それはつらいことだぞ？ 長い孤独が君を苛むかもしれん」

だから、世界が亡ぶからといって強制出来る話ではない。

俺はそう言った。

しかし、

「いいえ。アリアケ様。逆です」

「逆？」

俺は訝し気にする。

すると、幼きフェンリルは初めて、心から微笑みを浮かべた。それは戦士ではなく、ただの少女のような笑みだ。

「たった千年我慢するだけで、アリアケ様とまたお会いすることが出来て、生涯連れ添うことが出来るのです。断る理由がありません！」

「そ、そうなのか？」

その断固とした意志に俺の方がタジタジになる。

そして、

「ですが、確かに千年は長いですね。だから少し前金を頂いておこうかな」

え？

俺が反応する暇もない。

周りが「あっ」としか言えない間に、俺の頬に少女はチュツと唇を押し付けたのだった。

「将来、また会った時に、続きをしたいと思います。アリアケ様」

彼女は頬を染めてそう言う。

俺は思い出す。未来で初めて彼女に会った時。確かに同じことが……。

「なるほどのう。ということはあれかえ？ 付き合いは我が一番長い、ということかえ？ ほうほう。どう思う、アリシアよ？」

「いやいやいや！ 絶対ダメですよ 一番は私ですから！ 正妻なんですからね」

「ふーむ。だとすると二番かの。ふふふ、それでも大幅躍進よのう」

「ちよつ、待つんじゃ い、一概に出会った順番とするのではなく総合評価なのじゃからして」

「むっふっふー。まあ、未来で女子会を開くとしようではないか。むふふふふ」

未来のフェンリルはどこまでもマイペースである。

「うむ、やはりこの星の者たちは面白いな！ ま、月になってゆっくり観察させてもらうとしよう！ ちなみにフェンリルの封印は万が一、予知が外れた場合の保険として星神イシスにも協力してもらうので安心するが良い。女神に一時的にリソースを与えて目覚めてもらおう！ 焦っておるから勇者パーティーの唯一の生き残りを千年後に送るって言ったら協力は惜しまぬであろう！」

邪神だけあって悪い奴だなあ。

「封印で思い出したが、そう言えばどうして我は未来において十聖のフェンリルと呼ばれるのであろう？ ナイアは何か知っておるかえ？」

「無論である。それも実は此度の戦いによるものである。十聖とは十人の救世主たちと邪神……要するに我と戦ったことを讃えた敬称であるな」

「なるほど、つまり俺、アリシア、コレット、ラツカライ、ビビア、デリア、プララ、エルガー、ローレライ。そしてフェンリル本人か」

全てはこの神代から現代へとつながっていたんだな。

「さて、もう本格的に時間がないな。消滅したらマジで終わりなので早々にそなたらを『未来へ送り還す』術式を執り行うぞ！ ちなみに、未来に送った時点で大フェンリルの記憶封印は無効化されるのでびつくりするかもしれんの。あ、小フェンリルだけはもう少し離れるようにの！」

テキパキと送還の準備をし始める。

「ええ」

「そんなこと出来るんですの」

ビビアとデリアが驚きの声を上げるが、

「当然であろう。元々ニクスが攻撃を仕掛けて星神イシスが負傷し

て、幼いアリアケを千年先に時空転移させた時点でマナは枯渇したのだ。それによってニクスもイシスも眠りに就いた。我は人類飼育計画を進めるために予備のリソース、星二つ分のマナを使用したのである。アリアケの召喚と神の魔王化などにであるな」

「だからマナが地上にあんなにあつたのか」

「うむ。でだ。枯死ユグドラシルに吸い取られはしたが、未来に還すくらいの分はこの星に残っておる。なけなしであるがな！」

「じゃが、使い切ってしまったては今の人類は困るのではないのか？  
なのじゃ」

コレットの言うことはもつともだが。

「逆であろうな。今は一時的な休息をしておるニクスが起きてマナが大量にあるとなれば、この星は喰われて終わるであろう。そのためにも、今の人類を生き延びさせるためにも、マナは使い切るべきである！」

なるほどな。

それによって千年の猶予が出来る。

その間に人類はレベルアップし、俺の時空転移が完了する。

アリシアという大聖女も生まれるし、星神イシスも聖武器の鑄造に取り掛かる余裕も生まれるというわけか。

「了解した。結果としてかなり助けられるな、邪神ナイア。いや、

月の女神ナイアよ」

「我は自分のしたことがそなたらに許されることだとは微塵も思っておらぬ。しかし、神に打ち勝ったことに最大限の敬意を表させて欲しい。実に。実に素晴らしい戦いであつたぞ、アリアケ、そしてその仲間たちよ。我はこの星に来て良かった！ あと、ビビアにはめっちゃ笑わせてもらったぞ！」

「一言余計なんだよ」

そう言っている間にもナイアの術式は完了を迎える。

「では、さらばだ。救世主一行よ！ 月の光がそなたらの導きとならんことを！」

「アリアケ様！ 千年後にまた！ 必ずお会いしましょう！」

二人の言葉に俺は微笑む。

「ああ、必ずまた会おう。二人とも」

俺がそう言った瞬間、目の前が真っ白になった。

そして、次見た光景は。

「ああ」

そこはオールティ国の地下牢の階段を上がつた先にある草原であ

った。

時間は夜。

空には煌々と美しい月が昇っている。

「久しぶりだな、ナイア」

うむ！

と言ったかどうかは知らないが、これまでもずっと俺たちを見守ってくれていたのだろう。確かにあいつは邪神だった。だが、その性格はどうにも憎めない奴だったように思う。もしかすると上司が相当嫌な奴だったのかもしれない。

さて、もう一人、再会を誓った相手がいるが。

「主様！」

「おわっと」

俺は草原へ押し倒された。

「フェンリル。久しぶり、というべきなのか？」

「ふふ、そうよな。だが、我は何も変わらんぞえ？ 記憶は取り戻したが、それだけであるからのう」

ふむ。どうやらフェンリルの方は何も変わってはいな……、

「ンチュッ」

「うむ」

俺の唇に、柔らかい感触が重なった。

それが何かなど考えるまでもない。

「ぷは。ぬふふ、我がどうやら一番らしいからの。余り我慢する必要もあるまいて。主様、愛しておるぞ。千年前のあの日からずっと。さあ、さてさて、邪魔が入らぬうちに、もう一回……」

「こらあああああああ」

「抜け駆けなのじゃあああ」

「むう、早かったのう。さすが我がライバルたちであるなあ」

そう言つと、フェンリルは颯爽と狼の姿になって駆け出す。

青色の美しい毛並みを月光になびかせて疾駆するその姿は、いつ見ても美しい。

追いかける二人の女性を笑いながら引き離す狼の姿は、とてもとても、楽しそうであった。

（Side????????）



「ほう。今まで霧があつたために渡れなかつたエンデンス大陸の霧が晴れた、と？」

その声は城内に響く。

「はい。この魔大陸とエンデンス大陸は今まであの霧のために行き来が困難でした。しかし、それがなくなつたとすれば」

その言葉に、この城の主は笑う。

「その通りだ。この魔大陸で普通に生息している者たちにすら、あの弱小大陸どの連中は勝てはしないだろう」

「いかなさいますか？」

その言葉に、城主は不敵に笑つた。

いや、嗤つた。

「決まっている。弱き者たちが通る末路がどんなものなのかな」

クッククククククク。

その不気味な笑い声は、嗜虐に満ちたものであつたという。

〔第6章 Fin〕

## 270・エピソード（後書き）

ここまでお読み頂き本当にありがとうございました！

第6章ではアリアケ達が生きる現代までの伏線がかなり回収されるエピソードになっていたと思います。

いかがでしたでしょうか？

ぜひ感想をお聞かせくださいm( \_ \_ )m

さて、次の第7章からは【魔大陸統一編】を開始する予定です！  
ぜひぜひ、お楽しみに

また、本作を少しでも楽しんでいただけましたら、ブックマや感想、  
の ボタンでの評価など、『ポチっ』とよろしくお願いします

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、  
＜無料＞試し読みだけでも、ぜひ  
ぜひご一読くださいませ)o\*)。ー)o)o)コミック

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>

【1st anniversary記念PV】

SEQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん

公開中!!

271 プロローグ 魔大陸からの刺客 (前書き)

第7章スタートです。宜しくお願い致します。気長にお付き合いください (\*^\_^\*)

## 271 プロローグ 魔大陸からの刺客

271 . プロローグ 魔大陸からの刺客

普段はのんびりとした【エンデンス大陸】最南端の海辺の街『バンリエ』は、今まさに恐怖と混沌に包まれていた。

国境警備兵たち、そして臨時で雇われた冒険者たちは余りの恐怖に身動きすら取れない。

それもそのはずだ。

目の前の海から次々に上陸してくるモンスターは、Sランク冒険者がいてやっと太刀打ちできると言われる伝説級のモンスター。オーガの王といわれる存在。

その名は『キング・オーガ』

体長は20m以上、一歩一歩が大きく、人間など蟻のようにしか見えない。

それが【10体】という大軍で進撃してきたのである。

「あ、ありえない。あれはキング・オーガだ」

「馬鹿な」

「信じられない！ た、助けてくれ！ 死にたくない」

兵士たちや冒険者が叫ぶのも無理はなかった。

なぜなら、キング・オーガとは【魔大陸】にしかないとされる、恐るべきモンスターだからだ。

時折、魔の森という魔王が人工的に作るモンスターの巢が育ち、本当に稀に発生することはある。

しかし、実際に戦ったことのある冒険者というのは、この【エンデンス大陸】でもほんの一握りであろう。

そして、10体のキング・オーガともなれば、大陸中のS級冒険者をかき集めて何とか撃退できるほどの脅威なのだ。

実際、集められた戦士1000人は、たった一体のキング・オーガのスキル 威圧 による叫び声一つで、7割がたの人員が麻痺状態に陥ってしまった。

しかも、一体でそれだけの戦力を誇る超ハイクラス・モンスターが更に9体もいるのだ。

「お、終わりだ……」

「ま、魔大陸にしかないはずなのに……。それに魔大陸とこの大陸の間には、神話時代に張られたという霧の結界のおかげで、強力なモンスターは通れないはずなのにどうして……」

「か、神様……」

身動きできない自分たちへ近づいて来る魔大陸からの刺客、そして死の象徴たるキング・オーガの巨躯を前に誰しもが神に祈ることしかできない。

その時である。

「呼びましたか？」

「え？」

それは女性の明るく朗らかな声だった。端的に言つとこの地獄に場違いなほど明るい声。

だが、虚をつかれて素っ頓狂な声を上げる兵士たちをよそに、また違う方向からも返事の声があつた。

「呼んだか？」

その声は男性のものだった。明るいと言つよりは落ち着いた、全てを見通したようなまるで賢者のごとき冷静な声音である。

そして、

「まあ！ アリアケ君つたらとうとう神様になる決意をしたのね！  
ブリギツテお姉さん嬉しいわ。じゃあ早速禅譲しますね」

「いらん、いらん！ 女神の代理人として返事をしただけだ！ 誰が好き好んで神などやるか」

「そうですかあ。でもいつでもお声がけくださいね。ワイズ神様も

アリアケ君だったらツンツンしながらデレて即OKしてくれますからね」

聞こえてくるのはのんびりとした会話。

会話の内容までは理解が及ばない。

だが、少なくとも、目の前のキング・オーガ10体という大陸全土の人間を束ねても勝てないような状況で出来る会話ではなかった。

しかし。

「し、信じられない」

そこにいた人間たちは驚愕の声を上げるしかなかった。

なぜなら、目の前で次の瞬間、見せつけられた光景は、キング・オーガによる人間への蹂躪劇などではなく、その逆。

たった二人の人間によるキング・オーガに対する圧倒的な【無双】だったからである！



## 271 プロローグ 魔大陸からの刺客 (後書き)

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、  
<無料>試し読みだけでも、ぜひ  
ぜひ一読くださいませ (\*^\_^\*)

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとブリギッテは一体この後どうなるのっ……あと最後の女性は誰」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 272・魔大陸からの刺客を蹂躪する

272・魔大陸からの刺客を蹂躪する

〔Sideアリアケ〕

俺たち賢者パーティー一行はいわゆるバカンスに来ていた。

オールティ 国の運営も軌道にのり、人魔同盟学校も夏休みである。

そんなわけで慰安も兼ねて、賢者パーティーで、エンデンス大陸の最南端にある海辺の街『バンリエ』に来ていたわけだ。

ところがだ、いきなりモンスター襲来警報が鳴ったかと思えば、その内容はキング・オーガ10体という規模だったのである。

「やれやれ。話は後だ、ブリギッテ。行けるか？」

「もちろんです。いつでもどうぞ」

彼女の言葉に、俺はスキルの詠唱を開始する。

ちなみに彼女のいで立ちは、女将の正装【着物】である。

メデイソンの町では魔の森から発生したキング・オーガを1000人の冒険者を束ね撃退した。だが、今回は10体のキング・オーガとなる。

ゆえに、神の如き力を存分に振るう必要がある。

「 攻撃力アップ（強） 」

「 スタミナ自動回復（強） 」

「 鉄壁（強） 」

「 オーガ必滅（強） 」

「 クリティカル威力アップ（強） 」

「 クリティカル率アップ（強） 」

「 カウンター率アップ 」

俺はブリギッテに七重バフをかける。周囲の人間たちからは多重スキルの使用に驚愕の声が上がるが、いつものことなので無視する。時間を置かず、キング・オーガたちにもデバフをかける。ブリギッテの攻撃特性を最大限活かせるようにデバフを厳選した。これにも驚愕されるがやはり気にせず続行する。

「 防御力ダウン（強） 」

「 回避無効 」

「 ブリギッテ 挑発 」

「 神性耐性ダウン 」

「クリティカル被ダメアップ（強）」

そして、最後にもう2つ！

「スピードアップ（強）」

「攻撃回数増加（強）」

そのスキル使用には、周囲から「ええ」という驚きの声上がる。本来、スピードアップも攻撃回数増加も、味方にバフとして使うスキルだからだ。なのにどうして敵であるキング・オーガに使用したのか理解出来なかったのだろう。

ただ一人を除いて。

「さすがアリアケ君ですね。世界で一番、私のことを分かってます。お姉さん嬉しい。この後お礼をさせて下さいね」

「誤解を招く発言は謹んでもらえればと思うんだが……。買い物に行ってるからいいものの……」

「では、行きます！」

無視された。

次の瞬間。

ドン

「う、うわああああああああ」

周囲にいた兵士たちが、ブリギッテが着物を翻して走り出しただけで、その衝撃で吹き飛ばされる。真上に吹き飛ばされて落下してくる者もいた。

「やれやれ。 衝撃緩和」

ケガをしないようスキルを使う。

「す、すみません！ ですが、今は目の前のキング・オーガ戦のためにスキルを使用してください！ ど、どこの誰だか存じませんが、名のある御方と存じます！」

「自分たちのことより、街のため、民のためか。良いところだな、ここは。だが、心配はいらない」

「え？」

俺の余裕の声に、兵士たちは虚をつかれた。

「俺がスキルを使った時点で勝敗は決している」

「あっ！」

彼らは目の前で繰り広げられる光景に目を見開くことしか出来ない。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ」



「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

まさかの事態。

本来であれば余裕でこの海辺の街を。人々を。この大陸を蹂躪できると確信していたのであろう、最強と謳われたキング・オーガたちは上陸早々に、可憐な少女に一体を簡単に殺され、焦りながらも怒り狂う。

「ブリギッテに自然にターゲットが向いたか。挑発スキルは無用だったな」

「さ、三体もいっぺんに！」

「それだけじゃないぞ。キング・オーガたちには スピードアップに 攻撃回数増加 のバフもかかっている。10体以上のキング・オーガに狙われているのと同じプレッシャーだ」

「ど、どうしてわざわざそんなことを」

「ん？ 決まっているだろう」

俺が答えるまでもなく、間もなく答えは拳により出される。

「グオ！ ガア！ ギイ」 「グオオオオオオオ」 「ガアアアアアアア」

兵士たちには恐らく見えていないだろう。恐るべき速さで、その巨



軀で連続攻撃を繰り返す。一撃一撃が致命傷。当たればその命はない。

「ひいいい！ もうダメだ」

兵士たちの絶望の声が聞こえる。

だが、俺は彼らに告げる。

「よく見ろ」

「え？」

「あれが絶望するような光景にお前たちには見えるのか？」

「あ、ああ……。し、信じられない。こんなことが」

まあ、一般兵士には簡単に信じることが出来ないのも無理はない。

「俺のバフを受けたキング・オーガは攻撃をするたびにその肉体を損傷しているのだから」

俺は微笑む。分からない、とばかりに混乱する彼らに説明をしてやる。

「ブリギッテは優れた戦士だ。そんな彼女に オーガ必滅 とカウンター、クリティカル アップ系スキルを重ね掛けている。オーガには スピードアップ や 攻撃回数増加 というバフがかかっているが、このスキルには【命中率が下がる】という隠れデバフ効果がある。なら、その時に起こることは明白だ。無駄撃ちされ



「本来余裕だと思っていた蹂躞劇が夢想だと、現実を命でもって分  
からされたのだからな。悔しいものだろうな」

まあ、それはお前らの都合でしかないし、こちらへしようとしてい  
た殺戮が、自分たちに跳ね返ってきただけの、因果応報でしかない  
が。

「こちらは被害者で、正当防衛だ。では終わりにさせてもらっぞ、  
雑魚ども」

「ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ」

キング・オーガたちが俺に向かって吼える。

今回の圧倒的な敗北の黒幕が俺だと気づいたからだろう。だが、俺  
に 威圧 は効かない。

「そんなことも分からないから、貴様らを雑魚と言ったのだ。だが、  
俺も手伝おう。浜辺をこれ以上汚されると、この街の人々の生活に  
支障が出るかもしれん。お前らはその命で贖罪するがいい」

俺はキング・オーガたちを嘲笑する。

すると、挑発スキルが効いたかのように、ターゲットは俺へと変わ  
ったようだ。こちらに突撃してくる。

「スキル 畏設置 。おい、お前たちは離れている」

「け、賢者様 アリアケ様みずから戦うのですか」

「当然だ。キング・オーガくらいならば、戦士ではない俺でも倒すことなど造作もないさ」

その言葉が耳に届いたのか、更に激憤して奴らは俺に殺到する。先ほどの女は強かった。だが後衛の俺ならば殺すのはたやすいとその目は物語っていた。だが、

「やれやれ。これだから馬鹿は御しやすくて助かるんだ」

フツ……。

三体のキング・オーガたちはその姿を忽然と姿を消したのだった。

「よし、一旦状況終了だな。ブリギッテ、すまないが結界を張っておいてくれるか？」

「ええ、分かりました！ それにしても相変わらず挑発がうまいですね。お姉さんも見習わないと」

そんなことを言いつつ、俺たちは浜辺を後にしようとする。今後の対応のために必要な人員へ連絡などをするためだ。

「ア、アリアケ様　あの、最後は一体何が起こったんですか」

兵士の一人が叫ぶように言った。ああ、そうか、分からなかったのか。どうしても、皆分かっているものだと思っただけで説明を省いてしまっただけだ。大賢者であり英雄である俺の悪い所なのだろう。

「こちらに来て見て見るといい。一目瞭然だ」

「え？ …… ああつ　　こ、これはもしかして」

「そつだ。単なる落とし穴だ」

「こ、こんなものでキング・オーガを無力化してしまったんですか」

驚愕する兵士たちに俺は微笑みながら言う。

「ははは。落とし穴ほど便利なものはないさ。無論、倒してしまつても良かったが、生け捕りにする必要があつたからな。あえての落とし穴というわけだ」

「ち、調査？」

「ああ。魔大陸からキング・オーガが渡つて来るなんて異常事態だ。殺さずに無力化するべきだろう？」

「そ、そこまで考えてあの戦いを　いきなり動員されて、碌な準備もなく！」

「その上、いきなり10体のキング・オーガとの戦闘になったのに、その後のことまで考えて戦われたというのですか」

兵士や冒険者たちが驚愕と尊敬のないまぜになった瞳を向けてくるが、俺はそれに対して何でもないのでのように答えるしかない。すなわち、

「これくらい大したことじゃないさ」

と。

何はともあれ、魔大陸からの刺客たちとの緒戦。

それを圧倒する形で、その戦いは幕を閉じたのであった。

落とし穴から悔しがるオーガたちの絶望の声が轟いたが、それも俺のスキル サイレス によって黙らせることで、海辺の街『バンリ工』は完全に日常を取り戻したのである。

ところで、少し落ち着いてから、遠くの岩場の方で、

「ん？ なんだこの女は？」

「ピンクの海藻か何かと思ったが、女のような」

「いちおうアリアケ様の元に連れて行くか？ 気絶はしてるがケガは大したことなさそうだ」

そんな声が聞こえた来たのだった。

## 272・魔大陸からの刺客を蹂躪する（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、[<無料>試し読み](#)だけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（\*。）。[こへコミ](#)

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとブリギッテは一体この後どうなるのっ……あと最後の女性は誰」

と思ったら

下にある から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



## 273 魔大陸の謎

### 273 魔大陸の謎

「Side????」

「ハア！ ハア！ ハア！」

私ことパウリナは走っていた。

何とかあの恐ろしい魔大陸から単身で脱出して、しかも運良くエンデンス大陸へ到着することが出来た！

女神様ありがとう

だけど、運動不足だから、足がもつれて息が切れて来た！

どうして私が襲われているのか分からないけど、知らないうちに何かしでかしたに違いない。

「うちは代々由緒正しい農家なのに 何も盗る物なんてありませんよ」

後ろから追ってくるモンスター達に泣きながら叫んでみても無駄だった。

そりゃモンスターだからね



ここまで逃げて来られたのすら、なぜか分からない奇跡の賜物だといつのに、地の利のないエンデンス大陸で逃げ切れる訳がありません。

どうやら私の命はここまでのようです。

「ああ、せめてお芋の収穫は終わらせたかった……」

今年は新しい肥料を試したから、きつと美味しいほくほくのお芋を堪能できると思って。それだけを楽しみに暮らしていたのに。

「ああ、天国のお父さん、お母さんごめんなさい。パウリナはキング・オーガに食べられて死にまへブツ」

後ろを頻繁に見ながら砂浜を疾走していたからでしょうか。

岩場があることに気づかずに、足を取られて、そのまま思い切り顔を岩に打ち付けたのでした。

「し、死因は岩場での転倒になるとは、ガクッ……」

こうして私は気を失ったのでした。

遠くから、キング・オーガと戦う人々の声が聞こえて来た気がしましたが、既に死んだ私には関係のないことなのでした。ああ、それにしてもふかし芋、楽しみにしていたのにな……。ジュルリ。

そんな死後の世界でお芋への未練を感じていた私でしたが、なぜか現世の声ははつきりと聞こえてきたのでした。

「ん？ なんだこの女は？」

「ピンクの海藻か何かと思ったが、女のようにだな」

「いちおうアリアケ様の元に連れて行くか？ 気絶はしてるがケガは大したことなさそうだ」

んん？

あんまり死後の世界ってイメージしてたのと違うな。

そんなことを思っている間に、私を取り巻く環境は急展開を迎えるのですが、この時の私はまだそのことを知る由もなかったのです。ただ、それは結構私にとってはいつものことなんですけどね……。

## 273 魔大陸の謎（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定  
です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとう！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひ  
ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）。お\*。こ\*。こ\*。こ\*。

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「この少女は一体どなたっ……!?」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 274・残念美少女パウリナ

274・残念美少女パウリナ

〔Sideアリアケ〕

俺とブリギッテはキング・オーガを圧倒して1時間程度経過した。

既に部屋に戻って臨時の指揮を取っている。ただの宿屋が即席の指令室である。

「管轄外なのだが……」

俺の場合、称号が複雑で、オールティ王国の国王なので王族でありつつ、魔王国の辺境伯でもある。しかし、ここ【エンデンス大陸】最南端の海辺の街『バンリエ』はグランハイム王国なので管轄外なのだ。したがって、俺の出る幕はないはずなのだが。

「何だか自然とアリアケ君を筆頭に指揮系統が出来上がりましたね。でもお姉さんもそれが一番早いと思います！」

「いつまでも神や救世主に頼るのもどうかと思うんだがなあ」

だが、確かにキング・オーガ10体が魔大陸より襲来する事態に対して、指揮を取れるのは俺くらいのもだろう。

と、そんなことを考えていると、廊下から女性の声が響き渡ってきた。

「ひいひい　こ、殺さないで下さい！　私は一介の農家の娘なんです！　お芋ならいくらでも差し上げますから！　はひ！　はひ！」

「いやいや。アリアケ王の元にお連れするだけだから。頼むから一人です歩いてくれよ」

「王様　いやですう！　やっぱりギロチンにされるおつもりなんですわね！　そんなことしなくても私は簡単に死にますよ！」

「生きたいのか、死にたいのかどっちなんだよ。それよりほれ、着いたぞ？」

「ほえ？　し、しかし、王様が住まうには何とも普通の宿屋。こんなところでギロチンが執行できるとは思えません。ああ！　あれですか、毒をあおらせるつもりなんですかね！　どうかお許しください。本当に農家なんです。スパイとかじゃないです」

そう言つて、俺の前に腰を抜かしたせいで、兵士が肩を貸す形で連れてこられたピンク色の髪を長く伸ばした少女は、迷惑そうな顔でその兵士が去ると、やはりフニャフニャとクラゲのように地面にへたりこんだ。

「君が岩場で気絶していたという少女か。大丈夫だったか？」

「ひい！　あなたは一体」

「俺はアリアケ・ミハマだ。こっちはブリギッテ・ラタテクト。君は？」



「パツ！ パウ！ パパババパウリナでいえず し、死刑ですか」

「どれが姓で、どれが氏で、どこが名だったのか分からなかったが、死刑する予定はないのでとりあえずそのクラゲ状態から復活して、話を聞かせてもらえるか、アバパウリナデイエスよ。事態は一刻を争うみたいでな」

「違いますよ、アリアケ君。どこで区切ってるんですか。パウパババババさんですよ？」

「し、死刑はないんですか！ 良かった！ 天国のお父さんお母さんありがとうございます！ パウリナは今日も生きられそうです！」

「パウリナ、あのキング・オーガたちだが、魔大陸にのみ住むモンスターだ。もちろん例外的に発生することもあるんだが、こちらの大陸では十体も発生することはない。君があれを連れて来たのか？」

「パウリナさんって言うのですね。名前を間違えて失礼しました。それあのキング・オーガ十体を引き連れて、この大陸を蹂躪されて来たとかではないんですよね？」

「わ、私にも分らないんです。私はずっと魔大陸の【ビル八】という村で生まれ育ちました。本当に何の変哲もない農家です。そんな村に突然キング・オーガがせめて来て、咄嗟の判断で海辺の舟を漕いでこの大陸へ逃げて来たんです。本当なら霧のカーテンと呼ばれる結果があるので、こちらの大陸に来れるのは、力の弱い人間やモンスターだけのはずでした。なのに、キング・オーガたちは全員海の底を歩いてしつこく付いて来たんです。死んだと確信しました！」

「諦める時の勢いが半端ない女性だな、君は」

「ねえ。今までいなかったタイプなので少し庇護欲が湧きますね」

「まあ、それで上陸して逃げていた時に岩場でバナナの皮で滑って転んで失神したわけだな。そこに俺たちが偶然到着したわけか。本当に他に心当たりなんかは無いのか？」

「ス、スパイじゃないんです。なんでも吐きますからお助け下さい」

「別に疑ってるわけじゃないというのに。まったく。ん？」

と、そこで俺はグシユグシユと半べそをかいている少女パウリナの胸元を見て言う。

「パウリナ、その胸元の紋様だが、それは何だ？」

「わ、私にはくびれもなく、む、胸も。うつつうつつ！ 胸もない女です！ 女の魅力の欠片もない女なんです！ ああ、キング・オーガ相手だけでなく、王様と王妃様にまでこんなことを言わせられるなんて……」

「アリアケ君も年頃ですものね。アリシアさんだけでは満足ではないと？」

キラリ！ とブリギッテの瞳が素早く光る。

「新婚でラブラブじゃい」

「まあ朴念仁も卒業ですね」

「ああ、さすが王様ですね。目の前の美しい王妃様の他にも、何人も何人も妃様をご結婚をされているんですね。私には預かり知らぬ世界ですね……」

「あー、もう違う違う。その胸元の紋様。どこかで見ただことがあるというか。何かに似ている気がしてな」

その紋様は楕円の環つかにいくつかの楔のようなものが付いている不思議な形状をしていた。

「あー、これは生まれた時に火傷しちゃったらしくて。それでついたらしいです」

「そうか。変なことを聞いて悪かったな」

「いえいえ。これで減刑されると思えば、どんな話でもしますから」

「いい加減誤解があるようだが、俺は別にお前を取って食おうとしている悪徳領主などではないんだが……」

俺がそうばやいた時である。

「アリアケ王！ 大変です！」

伝令兵の急報が響いたのだった。

## 274 残念美少女パウリナ（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定  
です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとう！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひ  
ぜひご一読くださいませ（o\*。ー。）oペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとブリギッテ、残念美少女パウリナは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 275・女性型オートマタ「エリス」

275・女性型オートマタ「エリス」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

大音量と共に俺たちのいた指令室が爆発した。

「ここに逃げ込んでいたのですね。探しましたよ、個体名パウリナ」  
その声が聞こえてきたのは、はるか上空。

水色の髪を長く伸ばした、女性が空に浮いていた。金色の瞳がこちらを見下ろしているのが、遠くからでも見える。

ただ服装は非常に独自だった。

シルバーのラバースーツのような素材が全身を覆っていて、エナメルの艶やかさが見て取れた。身体はどこかのつぺりとした印象だ。

何より特徴的なのは、身体の節々に球体関節とでも言うのだろうか。  
パペット操り人形のような箇所が見受けらることだろう。また、すらりと伸びた脚の先端は、まるで馬の蹄のような恰好をしている。

瞬きを全くしていないことも、非人間的で、その存在への違和感を増大させることに一役買っていた。

「な、なんだかエッチな恰好ですね。ちょっとお姉さん興奮してき

ました。後で私も着てみていいですか？」

「後にしてもらっていいですか？」

呑気なブリギッテの感想をさえぎる。

エリスが口を開いた。

「その【宝】を渡してもらいます」

「宝　　お、お芋ですか　でもまだ収穫の時期ではないですよ」

「魔大陸では芋ドロボーのためにここまで大がかりなことをするのか？」

「違います」

淡々とその銀色のエナメル質の身体をした少女は、綺麗な青髪を揺らしながら首を横に振る。ただし、金色の瞳は常にこちらを捉えている。

「それに私はドロボーではなく【オートマタ種族】の女王エリスです。陛下と呼んで、<sup>かします</sup>傳くように」

彼女の言葉に、

「俺はいちおう星神の代理人なんだが……不本意ながら」

「あ、私も習合したとはいえ、現人神でして……」

いちおう反応しておく。

オートマタの少女は表情は変えないながらも、ピタリと動きを止めてから。

「では私が傳くべきですね。前言は撤回します。と、するとこれは神殺しに該当するものとして、フルパワーで挑むべき事案だと評価を修正しました」

どちらにしても襲ってくることには、やはり変わりはないようだなやれやれ。

「ところで、オートマタと言ったか？ その見慣れない恰好からして、機械人形ということになるのか？」

「正確には自律型機械人形オートマタ種族です。個体名は？」

「アリアケ・ミハマだ。こっちはブリギッテ・ラタテクト。こっちの女性クラゲに用があるんだな？」

「ついにクラゲ扱いなんですね。ああ、でもその方がこの無茶苦茶な状況で精神が追いつかない私には相応しいかも」

「そうです。そのコードネーム【クラゲ】を渡してもらいましょう」

「あの、そのかつこ悪いコードネームは確定でしょうか？ いえ、いいんですけどね。私なんかはクラゲで十分ですから……」

いちおう緊迫しているので、スルーして会話は続く。



「ふむ。嫌だと言っただら？」

「何も？ 後悔を保証するだけです」

エリスと名乗ったオートマタは、両腕を上げるとその間にマナを収束させて行く。バリバリという裂ぱくが響き渡り、魔力が放電する。同時にその衝撃を加速させるための装置として、マナによる翼のようなものが背中に形成される。

その姿は殺意に満ちた殺戮人形であるが、銀色の人形が水色の髪をたなびかせた精巧な人形の姿は、どこか現実味がなく美しくもある。

「我らオートマタはマナによって形状を可変させる者たち。第1種兵装兵器【E・テネリタ】発射」

銀色のエナメル質の身体を持つ無機質なオートマタと同質の、無感情な唇からは、淡々とした攻性魔力の放出という事実だけが紡がれた。

その金色の瞳は最後までその様子を観察するように睥睨していた。

## 275 女性型オートマタ「エリス」(後書き)

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ(〇\*。ー。)(〇〇ペコミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ、ブリギッテ、パウリナ、そしてエリスは一体この後  
どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気  
持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 276・アリアケの弟子

276・アリアケの弟子

「ラツカライ」

俺は囁くように一人の少女の名を呼ぶ。

「はい！ 先生！」

「え？」

エリスが収束したマナをまさに発射したのとはほぼ同時に、別の声が  
耳朵を打った。

「そんな物騒なものを街で発射されたら困りますよ？」

その声は静かながらも、凜として、なぜかよく周囲に響く。

そして、

「先生から教わった技の一部を解放します。次元飽和断裂斬」

ディメンション・エラー

キン

鋭い音が轟く。

「なんですか、今のは。それに、ここはどこですか？ 解析……が

出来ない？」

エリスの声が聞こえた。

無理もない。普通は聞いたことのない音だろう。

だが、俺にとつてはなじみのある音だ。例えば神代回帰した際に、俺が聖剣を振るった時、同様の音がした。

そして、ここは……。紫色や赤、黄色といった奇妙な色が周囲で蠢く空間。幾らかの家屋も見える。

これは……。

「エリス、さっきのは次元を斬る音だ」

そう教えてやる。

「次元……。次元を、斬る？ なる……。ほど？ 全く新しいデータですね。個体名アリアケ、……。この1000年の間に人間種は次元を野菜を切るようにザクザクすることが出来る様になったのですか？」

エリスが珍しく戸惑った声音で言う。

「次元を斬れるのはボクと先生だけです！ それに、ボクは先生に教えてもらったことを実践しているだけですから。凄いのは先生ですよ」

「そんなことはないさ」

俺は苦笑する。

はにかみながら現れたのは、目鼻立ちのはっきりした、中性的な少女であった。絹のような黒髪をショートにして、美しい黒い瞳と整った顔立ちをしている。槍の名門の一族の出身で、聖槍ブリューナクの使い手であり、今や俺の最も自慢の弟子である。

「ラツカライ、いいタイミングだった。助かったぞ」

「本当ですか！ 先生だったらどうとでもしそうですが。ともかく褒めてもらえてとっても嬉しいです！」

そんな彼女は俺のことをとても慕ってくれている。

「状況はよく分かりませんが、放出されたマナは別次元へ。この次元には、とりあえず周囲一帯の次元をボクたちがいる第1階層から丸ごと切除して取り込みました。関係者と……人のいない建物が少し入っちゃいましたね。あの銀色の身体をされた女性も一緒にしましけど良かったですか？」

「現実空間に放置しておくわけにはいかんだろうし、咄嗟の判断として上出来だ。ラツカライ」

俺は彼女の頭を撫でる。

「は、はい！ 先生でしたらもっとうまくやれたんでしょうけど……。建物が入っちゃいましたし」

「まあ、建物くらいは後で直すでしょう。何せ、ラツカライの判断

がなければ、周囲一帯が壊滅状態だったろうしな。ふむ、まあ後で俺が『バンリエ』の領主に話をつけておくさ」

「ありがとうございます。さすが先生！ ボクも先生みたいになれるように精進します」

俺が微笑む。

彼女も嬉しそうにした。

「个体名ラツカライ。その少女もあなたの弟子だといつのですか？」

「自慢のな」

「ボクなんてまだまだです！ 先生はボクの100万倍以上凄いですから、えへへ」

「なるほど。脅威レベルが100万倍上がりましたね」

エリスが素直に信じた。いやいや。

「个体名ラツカライもさることながら。その100万倍の力を持つアリアケ・ミハマ。まさかこれほどの力持つ者がいるとは想定外でした」

「あ、実は1億倍凄いです。さっきのは先生が謙遜しがちなので、ボクもそれに倣っただけです」

「なるほど。それは脅威レベルを1億倍に……。形容すべき語彙が存在しません。どう修正するべきか再検討が必要なレベルですね」

「いや、ラッカライが言い過ぎなだけだから」

俺は苦笑するが。

「そんなことないですよ、先生！」

「そうよ、アリアケ君。それに、ちゃんと自己評価するように奥さんからも言われてるでしょ？」

ラッカライだけでなく、ブリギッテにまで否定されてしまった。

なんでだ……。

さて、そんな会話の一方で、

「あうあうあう！ なんだかすごいことに巻き込まれてしまいました！ さっきの攻撃で完全に死んだはずなのに、死後の世界かと思ったらそうじゃなくて別次元とかいうものらしいです。怖い！ まだ死んでた方が分かりやすくて怖いです！ 一般人の私が関わってはいけない物語に巻き込まれたそんな体験、別にしたくなかった！」

一人、パウリナは一般人らしく、てんぱりつつ、泡を吹きながら混乱するという器用なことをしていた。

「個体名パウリナの阿鼻叫喚を見ていたら落ち着いて来ました。オートマタといえども感情機能は実装しているので。とはいえ、いずれにしてもやることに変わりはありません。そのパウリナを連れ帰ります。それが私の目的ですので」



そう言って、エリスは両手の肘から先を、瞬時にブレードへと換装した。

「行きますよ、アリアケ神にブリギッテ神。そしてその弟子ラッカライ」

「やれやれ、俺の自慢の弟子の、あれだけの力を見ても諦めてはくれないか」

面倒なことだと俺は肩をすくめつつ、即応態勢に移ったのである。

## 276・アリアケの弟子（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが【無料試し読み】だけでも、ぜひぜひひっそり読んで下さいませ（o\*。ー。）oペッコ  
<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

【1st anniversary記念PV】  
SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>  
CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケやラツカライたちは一体この後どうなるのっ……」  
と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 277・星の女神イシス・イミセリノスの寝所

277・星の女神イシス・イミセリノスの寝所

ガギイイイイイイイイイイイイイイ

エリスが音速を超えるスピードで肉薄して、そのブレードを俺へと振るう。

だが、その刃は1ミリ先で完全に止まる。

俺は瞬きすらしない。

「どきなさい」

「ボクは……。私は先生に槍を捧げた女。ここをどく理由はありませんよ、エリスさん」

俺が微動だにしないのは、エリスの攻撃が見えないからなどではない。

ラツカライが間違いなくエリスの攻撃を完全に防いでくれると信頼しているからだ。

「あわわわわわわ！」

「ラツカライちゃんへの信頼が見えて、お姉さんはとても良いものが見れたとほくほくです」

パウリナは腰をぬかして今しも漏らしそうになっていて、ブリギッテがのんびりと構えているのも対象的だ。

それはそれとして、実は俺の思考は別のところにある。

「ラツカライ、ここは一体第何階層なんだ？」

そう。

例えば偽神ニクスのいたのは999階層であった。ほとんどたどり着くことのできない深奥の次元階層で、奴は決して本体を晒さないように注意を払っていた。

そんなわけで深い次元ほど、たどり着くのは難しいのだが。

「えっと、すみません。実は咄嗟の判断で深く斬りすぎちゃって…。200階層前後だと思います、ごめんなさい！」

200か。俺は少し思う所があるが、思考するにとどめる。

「いや、謝ることはないさ。おかげで助かったわけだしな」

「そうですよ。さすがアリアケ君の一番弟子です！」

「一番弟子！ そう名乗っていいんですか」

俺の一番弟子と名乗ることにどんなメリットがあるのかよく分かんが。

しかし、確かに。

「弟子の順番としては勇者パーティーのメンツだったが、あいつらはもう巣立ったし。何より実力はラツカライが一番だしな。今日からラツカライ、君が一番弟子と名乗ってもいいんじゃないか？ 代わりと言っては何だが、勇者パーティーたちは弟弟子の位置づけにするでしょう。機会があれば姉弟子として鍛えてやってくれるか？」

「ありがとうございます 先生が一番弟子だなんて こんな光栄なことはありません そう思ったら更に力が湧いてきました  
うりやりやりやりやりやー」

「そんなに嬉しいものか？」

「うふふ、そりやそうですよ。アリアケ君はもっと正当な自己評価を心がけましょうね」

「はあ」

よく分からんな。

だがやる気になってくれたのなら良かった。

それに、勇者パーティーの実力は俺の一番弟子を名乗るには、あまりにも力不足なのは確かだ。

俺の育てたラツカライに、改めて鍛えなおしてもらったのも、良い刺激になるだろう。

やれやれ、弟子をたくさん持つ、人の上に立つ【師】という身分も、

なかなか大変なものだな。

そんな感想を抱くのだった。

さて、やりとりはしながらだが、戦闘は続行している。

オートマタ種族は機会人形でありながらも、人のように柔軟な身体をしているらしい。シルバーのエナメル質の身体を躍動させる。

「やっぱり綺麗ですねー。あのぴっちりした身体が美しい！ぜひうちの旅館『あんみつ』に欲しい人材です！」

「今は女将モードは封印しておいてもらえるか？ 防御力アップ

スピードアップ 回数付き回避付与」

「攻めきれませんね。あのアリアケ神の加護の力ですか？」

「そうです！ 私へのラブラブパワーです！」

「ラブラブパワー……。愛の力というやつか。それもまた計測不能ですね」

困惑したエリスの声に、

「ごとういのですよ、おりゃああああああああああああああああああ」

ブリギッテがいきなり参戦する。

そして、あるはずのない地面に対して、拳を思いつきりたたきつけ





『50年ほどお休みします』

と言って、偽神ニクスとの戦いの後、疲弊しきつたために、再び休息に入った星の女神。

「星の女神イシス・イミセリノス！」

「あーれー？ アリアケ君じゃないですかー」

彼女はそう言うと、まだ寝ぼけているのかムニヤムニヤとした口調で言った。

「今日は良い夢ですね。私に会いに来てくれたんだ。うふふ、好き好き大好き」

威厳もへつたくれもなかった。

どうやら偶然にも、女神イシスの寝所《次元》へとやって来てしまったようで、とにかくにも、星の女神イシス・イミセリノスが突如俺たちの前にその姿を現したのである。

## 277・星の女神イシス・イミセリノスの寝所（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定  
です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ（o\*。ー。）oペコミ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「女神イシスは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 278・非認識対象概念 バグ

278・非認識対象概念 バグ

「あれ？ でも夜這いにしては人数が多いですね」

「だから夢じゃないというのに。あと俺は妻帯者だ」

女神イシスに俺は呆れた声で返す。

「夢じゃない？ はわわわ！」

シュバババババ！

という音を立てて、イシスは居住まいを直す。

もう手遅れ感が半端ないが。

「ふふふ、よくぞ参りましたね、アリアケ・ミハマ、ブリギッテ・ラタテクト、そしてラツカライ・ケルブルグ。今日はどのような事件でこの星の女神の元に来たのですか？」

ん？

俺は微かに違和感を覚える。

だが、言葉を続けた。

「今更かつこつけられてもなあ。それに来たくて来たわけじゃないんだ」

「あら、そうなんですか？」

彼女は意外そうな表情をしてから、

「せつかく3人で来たのにですか??」

3人？

俺の違和感は確信へと変わる。

「ふ、ふふふ。私のような人間は無視されて当然ですからね。ふへへ。女神様にすら無視される私の存在なんて海の藻屑にも等しき存在、ふへへ」

パウリナは膝をついて闇落ちしかかっていた。

「星の女神？ 本物なのですか？ その割には一般的に神と言われる存在にしては、威厳がかなり不足しているように私の常識センサーは訴え続けていますが」

一方のエリスはオートマタらしい、ストレートな感想をぶつけていた。

しかし。

「？ どうしたんですか。アリアケ君？ まるで」

女神は淡々とした調子で言った。

「まるで他にも人がいるような態度をして」

「……え？ 先生、女神様は一体何をおっしゃって……」

ラツカライも異常に気づいたようだ。

これはどうやら。

「ブリギッテ、何が起こっているか分かるか？」

「はい、にわかには信じられませんが、これは……」

ああ、と俺は頷きながら言った。

「女神の【バグ】だ」

俺がそう結論付けた瞬間、

「一体、本当にどうしたんですか？ さっきから何を言っ……う  
っ！」

突然、女神が苦しみ出す。

それはちょうど、パウリナが膝をついた時、胸元の紋様がチラリと  
見えた瞬間だった。

紋様はなぜか金色に輝いていて、今にも光があふれ出しそうになっ  
ているように見える。

しかし。

『非認識対象概念との過度な接触は推奨されない。これよりエラーへの緊急処置を施します』

女神の口から今まで聞いたことのないような淡々とした口調で、意味不明の言葉が述べられる。

目の色彩は青から金へと変化し、まるで何も見えていないかのよう  
に虚空へ視線を向けていた。

『緊急避難処置。同一時空転移発動』

カッ

瞬間、この次元全体がひしゃげるようにうねるとともに、目を開いて  
られないほどの光量が満ちる。

「ちっ」

俺は咄嗟の判断で、ラツカライたちを守るためのスキルを行使した。

そして、次の瞬間には。

「あらあら？」

ブリギッテの間の抜けた声が響くとともに、

「た、たかあああああああああああああ  
「

上空1000メートル付近から自由落下する思わず大声を出すラッ  
カライ声が耳朵を打つのであった。

やれやれ。

俺は随分見晴らしのよい状況なので、地表を見下ろしつつ嘆息する。

そこは見たことのない褐色の大地。

荒涼とした風景や、人の手の入っていない森林。そして、上空を飛び回るドラゴンの姿なども散見された。遠くからでも見える巨人たち。恐らくキング・オーガの群れだろう。

「だとすればここは」

俺は落下の衝撃をやわらげるべくスキルを使用しつつ呟いた。

「魔大陸上空1000メートルと言ったところか」

数秒後に死が迫りつつも、俺は冷静に状況を分析していたのである。

そして、何よりも、

「クラゲがない、か」

パウリナの姿が消失していることに俺だけが気づいていたのであった。



## 278・非認識対象概念 バグ（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございます！

ご予約頂けると嬉しいですが、<無料>試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ（お\*。ー。）お\*コミッ

<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

279 魔大陸風ペスカトール（前書き）

3/7発売コミック3巻の表紙も公開されました。ぜひページの後書きの下をご覧ください（\*^-^\*）

## 279・魔大陸風ペスカトーレ

279・魔大陸風ペスカトーレ

「やれやれ、ひどい目にあつたな」

「問題ははぐれてしまったクラゲさん、もといパウリナさんですね。無事だといいいのですが」

日はすっかり暮れて夜。野営のための焚火の、パチパチと小枝の爆ぜる音だけが静寂の中に響く。

焚火の周囲には、近くの川で釣った魚たちを串刺しにして刺して焼かれていた。

「だが、焼くだけでは味気ない。せつかくだからメインも用意しよう」

俺は真剣な表情で、アイテムボックスからアイテムを取り出す。

そして、とりわけておいた魚を捌いて調理し一品完成させた。

「よし出来た！ 【魔大陸の魚をふんだんに使ったペスカトーレ】の完成だ！」

俺はそれを集まっていたメンバーたちの前に皿に盛りつけて置いていく。

「さすがアリアケ君ですね。香ばしい香りがより一層引き立ちました。やはり旅館を将来一緒に経営するのはアリアケ君しかしませんね。お姉さんは確信しましたよ！」

着物姿のブリギッテが手放しに喜ぶ。

「こんな見知らぬ土地だ。せめて旨いものを食べて英気を養わねばな」

余った魚も串焼きのまま薪の周りに刺しておく。

小腹が空いた者が好きに食べるだろう。

何より、パチパチと枝の爆ぜる心地良い音とともに、良い香りが周囲に漂うが良い。

「それにしても女神イシス様はどうされたのでしょうか？ 奔放の方だとは思っていましたが、いきなり何か言ったかと思えば私たちを魔大陸に飛ばすなんて。アリアケ君には分かりますか？ もぐもぐ」

「俺たちはついでじゃないかな？ むぐむぐ」

俺の言葉に、沈黙をしていた一人の少女が興味深そうに口を開く。

「もぐもぐ。ほう、ついでとはどういうことですか、アリアケ神よ」

オートマタのエリスであった。最初は警戒していたようだが、今は旺盛にペスカトーレを頬張っていた。それによってほっぺがとても

膨らんでいる。

「アリアケでいい。それに彼女のことはブリギッテ、槍の使い手はラツカライと呼んでくれ。俺たちも君のことはエリスと呼ぶ。構わないか？」

「もぐもぐ、ごくん！ ええ、構わない。それにしてもこの料理は美味です。マナばかり食べてるより場合ではなかったですね。一生の不覚という概念を習得しました」

「オートマタ種族は食事はしないのか？」

「無駄だと思われるので普通しません。効率を重視する種族です。すから。もぐもぐ、おかわり」

「……案外、健啖家だな。大きくなるぞ」

俺の言葉に、

「あのエリスさん！ アリアケ君は先生もしているので、たくさん食べる子を応援しているだけです。決して、そのあなたのその胸がどうこう、とかそういう意味ではないですよ。特にお姉さんはそのシルバーのつるつるした感じの身体、とってもいいと思います！ 好きです！」

「貴女からの言葉で初めてで侮辱のようなニュアンスを受け取りましたが、ブリギッテ」

淡々とした口調ながら、エリスが半眼になった。

人形のように無表情なのがデフォだが、こっぴつ表情も出来るのだと思う。

と、そんな会話をしているところに、

「先生もブリギッテ様もエリスさんも！ お願いですから食べ物に集中するか、今後の方針の話に集中するかしてください！ っていうか！」

最後の一人、ラツカライが思いつきりツッコんだ。

「どうして敵であるエリスさんが普通に一緒にいるんですか」

ビシッ！ と指摘する我が弟子であった。

最近はやんと遠慮なくツッコミが出来る様になって成長を感じさせる一番弟子である。

俺は笑いながら口を開く。

「まあ、仲良くなるには、食事をしながら、というのがエンデンス大陸の作法だからな。もちろん、魔大陸では違つかもしれないが」

「いいえ」

口をどこから取り出したハンカチで拭きながらエリスは言った。

「私も女王の身であり、そうした儀礼はわきまえています」

「はい？ えーっと、どういことですか？」

俺たちの会話の意味が分からなかったらしく、ラツカライが頭上にハテナマークを浮かべていた。

俺は優しく説明する。

「今回の事件はパウリナが鍵を握っている。女神イシスの暴走も俺の観察では、彼女の胸元にある紋様を見た時に緊急避難的に発生したように思う。だから、厳密にはバグではなく、彼女こそをこの魔大陸へ時空転移させる【仕様】だったかもしれない。俺たちは巻き込まれたわけだ」

「だからついで、と。なるほど、そうなんですな……」

意外そうにラツカライが言う。

「ああ、イシスは俺たちが3人で来たと言っていた。俺とブリギツテとラツカライの3人だ。無視しているという感じではなかったな。あれは俺の見立てでは、【非認識対象概念】となるように仕組まれた、女神の仕様、あるいは意図されたバグではないかと思う」

「訳がわかりませんよ！ それになんでそんな仕様になっているんですか」

「それが分からない。だから一時的に手を組もうと思う」

はからずもエリスの声と俺の声が同調する。

「魔大陸は俺たちにとっても未知の土地だ。地図も何も無い。オートマタ種族と手が組めれば、鍵となる少女を助けることもできるだ



るっ」

「私たちは宝を収集することが目的です。その宝を買い取ってくれるのなら共闘は可能です。何より、この【ペスカトーレ】をまた食べさせてもらえると認識しています。その場合、あなたへの信頼度がMAXまで上昇し選択の余地はありません」

「えーっと。それは単なる餌付けなんじゃないかなー……」

「胃袋を掴んで懐柔するなんて、アリアケ君にしか出来ない手腕ですわね！ さすがアリアケ君！」

「もう一点だけ確認させてください」

「なんだ？」

無表情な彼女だが、表情に出ないだけで感情はよく伝わって来た。彼女との接し方が少し理解出来てきたように思う。

「どうしてよく知りもしない少女のためにそこまでするのですか？ 魔大陸の件が色々絡んでいるとしても、あなたが動かなくてはならない合理的理由はありません。何か裏があるのですか？」

その言葉に俺は意外なことを聞かれたような気がして思わず噴き出した。

「ふっ、確かにそうだな。だが別に理由なんてないさ」

「はぐらかすのですか？」

いやいやと俺は首を横に振る。

「パウリナはこの俺に助けを求めたんだ。なら、そんな彼女を見捨てて、明日食べるペスカトーレの味が旨いと思うか？ きつと不味くなるだろうな。本当に彼女を助ける理由も、世界を救うのすらも、それだけの理由さ」

「優しいですね」

「優柔不断だと妻には言われているが……」

一緒にバカンスに来ていたのだが、今頃怒っている……というより、呆れていることだろうな。またアー君巻き込まれてー、と。

「いえ。あなたは好ましい生命体です。アリアケ・ミハマ」

彼女はそう言って初めて微笑みを見せた。人のように。

「明日からの料理楽しみにしています。私のパートナー。あ、魔大陸風ペスカトーレは2日に一度お願いします」

エリスはそう言うと、もう寝ると言って、近くの木に座る形で眠りについた。

正確には機能を一時停止状態スタンバイにしていることらしいが。

やれやれ。

とにもかくにも、俺たちエンデンス大陸の人間にとっては前人未踏の魔大陸に、水先案内人を確保できたことは大きい。

俺はそんな気持ちでホッとするのであった。

しかし。

「ブリギッテ様、やっぱり先生ったら天然ですよ！」

「そうですね。最後私のパートナーとかさらっと言わせてましたねー。まあ、それがアリアケ君のやり口って奴よねー。ラツカライちゃんも気をつけた方がいいですよー？ あっ、手遅れでしたねー、あははー」

「笑いごとじゃないですよー      どんどんライバルが増えて行って  
ませんかー」

そんな女子たちのよく分からない会話が、隣では繰り広げられていたのであった。

## 279・魔大陸風ペスカトール（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`”´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願ひします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケとブリギッテは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

280 ・魔大帝レメゲトンは勝利を確信し、かの英雄を啜う（前書き）

3/7発売コミック3巻の表紙も公開されました。ぜひページの後書きの下をご覧ください（\*^-^\*）

280・魔大帝レメゲトンは勝利を確信し、かの英雄を嗤う

280・魔大帝レメゲトンは勝利を確信し、かの英雄を嗤う

〔Side パウリナ〕

「なんでもしやべります！ 黙秘権は行使しません！ 尋問にも屈します！ なので命だけは助けてください！」

「もう少しプライドを持った方がいいんじゃないのか？ いや、尋問する側としてはありがたいがなあ」

私は尋問室で泣きながら訴えました。取り調べ官の方は呆れていました。

なぜ

そう、それは少し前のこと。

アリアケ様という超強い王様にあわよくば助けてもらって、キング・オーガたちから逃げ切れたかと思いきや、突然現れた女の人がペカ―ッと光ったかと思うと、なぜか私は最悪な場所に飛ばされてしまっていました。

そう！

そこは後で知ったところによると、私を捕まえようとしていた、犯人の城の中庭だったのです！





この女……」

正論はやめて……。

心がもたなくなるから。

そう訴えたいところですが、お口がすっぱい状態なので、あまりつまらないことを話している場合ではありません。

口臭も気になるため、まず口をゆすぎたい気持ちで一杯です。

お水を一杯欲しいみたいな感じで……。

「ほう、これはこれは。パウリナ様ではないか。驚いたな」

と、そんな葛藤を知る由もなく……。

知ってるわけないよね！

そう、ちゃんとセルフツッコミはちゃんとこなしつつ、衛兵たちの後ろから威風堂々と。要するに無駄な偉そうさを醸し出している男の人が近づいて来るのを見上げます。

黒で統一されたぴっちりとした感じの服にマント。目を引くのは目の周りをだけを覆う黒のマスク。年齢はまだ青年と言って良いくらいです。

リバーズは空気を読んだのか止まりました。

臆する必要はありません。まずは冷静に状況を分析しないと。



アリアケ様が女神とか言ってたような気もします！ ということは神様にもすがることが出来ない。ああ、もう死にました！」

「変わった女だな。諦めが早いな。これが俺の片翼とは信じがたいが、その紋様は動かぬ証拠か。ふむ」

片翼？

「この紋様が何か？ これは火傷でついたものなんですけど……。なので勘違いなので、おうちに帰してもらっていいですか？ ではではー」

「捕縛しろ。尋問する」

「ですよー！」

「緊迫感のない女だ。それはそれとしてパウリナよ。先ほどアリアケと言ったか？」

「あ、はい」

しまった。迷惑をかけてしまうかもしれない。でも、もう口に出してしまっているのとぼけても無駄だろう。

「どっという関係だ？」

どっという関係。

関係……。

何度も命を救ってもらって、頼りになって、堂々としている。守ってくれる男性。

つまり。

「理想の結婚相手？」

ああー。でももう奥さんがいるって言ってました。

ああー。でもたくさんいるとも言ってました。

ということは、私もその一角に？ きゃー

「ほう。それは面白い」

そんな私の内心とは別に、レメゲトンさんはニヤリと嗤う。

「ではその希望をこのレメゲトン魔大帝様が自ら打ち砕くでしょう。それにその男の名はこの魔大陸にも轟いているが、魔大陸の覇者である俺の敵ではない。くくく。鍵を開ける儀式として申し分のない戦士の生贄ではないか」

勝利を確信して、唇をいやらしく歪めた。

「まあ、俺が出るまでもあるまい。四魔将に討伐命令を出すとするか。くくく」

四魔将とは、この大陸のほとんどを支配するレメゲトン魔大帝に従う強力な幹部たちのことだ。一人で王国を滅ぼすことすら可能と言われている。

「ちよっ！ やめてください！ あなたの目的は私でしょう」

さすがに生贄……だなんて。殺すつもりがあると知って黙ってはいられない。

でも。

「くっくっく。使命も忘れた愚かなる末裔よ。お前は黙って俺の指示に従っていればいいのだ。連れて行け。そして、アリアケがレメゲトン魔大帝の幹部に殺されたという報告を大人しく待つが良い。その報告はすぐに届くだろうがな！ はーっはっはっはっはー！」

私の力では衛兵たちの力にはかなわず、そのまま牢へと連行される。食糧などは出るが監禁状態だ。

「どうかご無事でいてください、アリアケ様」

普段はクラゲのようにフニャフニャとするだけの私だったが、この時だけは、真剣に彼の無事をお祈りしたのである。

280・魔大帝レメゲトンは勝利を確信し、かの英雄を啜う（後書き）

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひぜひ一読くださいませ（\*^ - ^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「パウリナは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

281 アリアケ帝国の始まり〜翼人王国救済編〜（前書き）

3/7発売コミック3巻の表紙も公開されました。ぜひページの後書きの下をご覧ください）\*^-^\*）



## 281・アリアケ帝国の始まり〜翼人王国救済編〜

281・無能な魔大帝に代わり帝位につく〜翼人王国救済編〜

〜Sideアリアケ〜

「きゃああああああああ」

「今のは子供の悲鳴ですよ」

「そのようだな。あっちだ。スピードアップ 付与」

俺たちは魔大陸へ女神イシスのバグによって時空転移をさせられた後、一旦、オートマタ種族の女王エリスと手を結ぶことになった。エリス自身は単に宝物と噂されるパウリナの紋様に興味があつて狙っていたようだが、女神の時空転移によって大きな謎があると感じて、俺と一旦手を組むことにしたようだ。

「今日のご飯はなんでしようか。ワクワクが止まりません」

「あああら、エリスさんたら、実はアリアケ君の手料理が目当てで仲間になったのね？」

「侮辱はやめて頂きたい。私は我がパートナーのアリアケと、女王として、今回の事件を探ろうとしているだけです」

「ならワクワクと口に出すのを止められた方が無難かと思うのですが……。あとパートナーとさりと口にはしているのが若干ボクには

気になるのですが他意はないんですよね？」

「ふむ、人間と言うのは細かいですね。しょせんは言葉尻に過ぎません。しかし善処しましょう。パートナーの仲間たちの機嫌を損ねるのは、パートナーと私の関係にとって有益ではありませんから」

「善処できてませんよ」

後半部分の会話の意味は不明瞭であったが、とにかく、俺たちとエリスは一時的とはいえ、パウリナという今回の事件の中心を巡って手を組むことになった。

エリスによれば、現在俺たちがいるのは魔大陸の南方にある翼人種が統治する【フリーウム王国】の北の森林地帯であるらしい。そのため俺たちは南下しつつ、街を目指していたわけだ。

しかし、そこに不意に子供の悲鳴が轟いて来た。

俺は反射的にスキルをパーティーメンバー全員に使用し、現場へと疾走したのである。

そして、そこにはある意味予想していた光景。

この魔大陸で横暴を繰り返す存在としてエリスに教わった、トロール族たち10体が、背中から美しい羽根をはやす子供たちに、今まさに襲い掛からんとする瞬間なのであった。

「助けなくちゃ！」

ラツカライが叫ぶよりも早く、

「スキル」

「え？ 先生？」

俺は足元の握りやすい大きさの礫つぶてを拾って大きく振りかぶって、

「投擲」

思いっきり！

今しも襲い掛かる寸前だったトロールの脚に投げつけたのであった。

ベキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イ

「ギ」

一瞬、何が起こったのか分からないそのトロールはキョロキョロと  
するが。

「ギイイイイイイイイイイイイアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアア」

自分の脚にめり込み、ひしゃげかけた太ももを確認すると同時に、  
激痛とあいまって、大絶叫を森林にこだませたのである。

「我がパートナー。あれは恐らく魔大陸を統べるレメゲトン魔大帝  
の手下四魔将ギガテスの部下たちです。それを敵に回すことになり  
ますが、宜しかったのですか？」

エリスの声が冷静な声が響く。

俺は微笑みながら、

「ん？ ああ、それなら好都合だろう」

俺の答えにエリスはやや首をかしげるが、

「無法が通っているのなら、その魔大陸を統べるレメゲトン魔大帝という無能に代わり、俺が魔大陸を皇帝として統一しよう。それが一番手っ取り早いからな」

俺の淡々とした回答に、珍しくオートマタのエリスは目をパチクリとしたのであった。

281・アリアケ帝国の始まり〜翼人王国救済編〜（後書き）

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定  
です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとつごぞいますm(´`´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひ  
ぜひご一読くださいませ（\*^\_^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたち一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

282 子供を助ける(前書き)

3/7発売コミック3巻の表紙も公開されました。ぜひページの後書きの下をご覧ください) \* ^ - ^ \*

## 282 子供を助ける

### 282 子供を助ける

「それは、魔大帝から帝位を篡奪すると言っことですか？」

「篡奪と言っか……。本来、その能力のない輩が権力を持っている状態なんだろう？ それは結構迷惑じゃないか？ まあ、別に俺はそんな権力や権威は欲しくとも何ともないんだが……。だが、子供を襲わせるような部下を野放しにしている、そのレメゲトン魔大帝とかいう無能者よりはよほどマシだろう？」

「なるほど。子供を助けるためだと言っのですね？」

「まあな。子供を助けるのは大人の義務というものさ。それすらできないから、自然と民意によって、権力が俺にもたらされるといっさけさ。だから、これは篡奪じゃない。まあ、俺がなぜか王位についたり星の……。まあいい。そんな地位につくのは自然現象のようなものだ」

「先生、若干諦めが入り始めてますね……」

ラッカライの指摘にハツとする。

「ほ、本当だな。なにげにさらっと皇帝になるのを受け入れていた……恐ろしい」

「しかし、そんなことが本当にできるものなのですか？」



エリスは半信半疑といった様子である。

しかし。

「あら、でも、それは名案だとお姉さんは思いました！ なぜかというと、とても分かりやすいからです！ お姉さんは一票ですね！ 愛のために！ 子供のために！ 殴り愛をする精神を我がワイズ・ブリギット教は歓迎します！」

「……一言いいですか？ 我がパートナー。あなたの仲間たちは些か猪突猛進が過ぎるのではないですか？ 仲間をもっとバランスを考えて組んだ方がいい」

「いや、もう少し色々いるんだがな、本当は」

多分、こちらに向かっていているだろうから、そのうち合流できるだろうさ。

さて、俺たちはそんな会話をしつつも、行動は素早く、背中から美しい羽根をはやす子供たちの前に回り込んでいた。

翼人種はエンデンス大陸には存在しない種族であるため、初めて見るが、エルフとはまた違った幻想的な雰囲気をもっている。

だがまあ、やることは普段と変わりはない。

怯える子供たちに一声かける。

「安心しろ。この雑魚どもを始末したら、親のところまで送って行

「う」

俺がそう言って微笑む。だが、彼らもの不安は表情から消えない。

「だ、だめだよ。ト、トロール10体なんて！ 殺されちゃうよ！」

そんな子供の叫びに呼応するように、俺に攻撃されたトロールを含め、いつせいに殺意をむき出しにして、大音声を響かせた。

巨人たちが怒声を発することで、周囲の木々がビリビリと震える。

「そのガキどもの言う通りだ！ がはははは」

「こんなことをして！ ただですむと！ おもってまいなあ！」

「そつだ！ 俺たちは四魔将ギガテスの部下だぞ！」

「逆らえばお前らはおろか、フリーウム王国さえも、ただではすまん！ 女、子供も皆殺しだ」

「ぐははは！ そつだ！ 愚かなことをしたな！ 謝ってももはや許しはせんぞ」

そんなトロールたちの威圧。

子供はおろか、普通の冒険者程度ならば、委縮して震えあがることだろう。

だが、俺はむしろ微笑みを浮かべてしまった。

「な、何がおかしい」

「恐怖でいかれちゃったのか」

勘違いをしてさらに居丈高になるトロールたち。

しかし、更に俺は笑みを深くした。

そして言う。

「ふむ、では俺の方も少し自己紹介しよう。俺の名はアリアケ・ミハマ。この大陸の全ての王国を統べる【皇帝】だ。さっきそうなることを決めた」

「な、なにを」

トロールたちがギョツとした表情をする。

「馬鹿を言っな！」

「そうだ！ この大陸はレメゲトン魔大帝様が統治なさっておられる！ そして、その四魔将の一人たるギガテス様が、ここいらの王国の統治をじきじきに任されているのだぞ」

激しい怒声だ。

しかし。

「馬鹿は貴様らだ！ この屑どもめが」

「ぐあ  
」

「な、なんだ　この圧力は」

俺が少し威圧を込めると、10m近い巨人どもが一気に気圧される。

「お前らのような子供を襲うような犯罪者を野放しにするような統治者ギガテスとやらも同罪の重罪人であることは自明だ。そして、その無能のギガテスとやらを四魔将とやらに据えている無能大帝レメゲトンも帝国運営には不向きな無能であることを、今まさにお前たちが証明している。そんなことも分からのか」

「犯罪者」

「無能だと」

やれやれ……。

言われなければ分からないのか？

俺は鼻で嗤いながら言う。

「そつだ。子供を襲うなど重罪以外の解釈のしようもないだろうがゆえに、俺がその無能なレメゲトン魔大帝とやらに代わって、皇帝としてこの魔大陸を統治することにした。要は尻拭いというわけだ。そして、そんな皇帝たる俺の第一の仕事は……」

俺は聖杖キルケオンを掲げて言う。

「皇帝勅命として、魔大帝レメゲトン、そして四魔将の権力を剥奪

することを宣言する。罪は追って償わせる。次に、お前たちにも、皇帝たる俺の法に従って罪を償ってもらおう。とはいえ、俺は暴力は嫌いだ。フリーウム王国も近い。そこで裁判を受け、牢屋に入り罪を償うがいい」

俺は犯罪者たちに対して、そう命令を下したのであった。

どれも子供を襲おうとしていた犯罪者たちに対しては妥当な罰であろう。

だが。

「か、勝手なこと言ってるんじゃないぞ！」

「そうだ！ 我らは誇り高き四魔将ギガテス様の部下！」

「魔大帝レメゲトン様を侮辱した罪、死んで償ええええええ！」

トロールたちが激昂して襲い掛かってくる。

俺は呆れた声で首を横に振る。

「時代について来ていないようだな。そいつらはもう皇帝でも四魔将でもない。俺がそう決めたのだからな。ゆえに、我が法に基づき、お前らはただの子供たちを襲う犯罪者集団だ。獲物を狩る側ではなく、皇帝である俺の法に裁かれる側に回ったと知れ。スキル・リ  
ピート」

俺はスキルを詠唱する。

「黙れ！ ガキどもをやる前にお前から先にやってやる！」

「せいぜい、後悔しろ！」

「脆弱な人間めが お前を喰らってから、次は後ろのガキどもだ  
」

怒気を迸らせてトロールたちが肉薄する！

もはや、その巨体は数センチにまで迫っている。トロールたちは必  
殺を確信したのである。

怒りの中にも獲物を捉えた時の喜悦がある。

だが。

ドシユ

ドゴオオオオン

ビュン

ドシユ

「へっ」

「あ……ね……」

「ど……っ……し……て……前に……すす……すす……め……」

10体いたトロールたちは俺たちに近づこうとするが、その動きは次第にゆっくりとなりていく。そして、

「ぎ、ぎゃあああああああああああああああああああ」

数体のみ、断末魔が轟いた。

それもそのはずだ。

あるトロールはサラサラと砂のように宙に消える様に消滅し、ある者は自分が既に心の臓を貫かれていることに気付かなかった。またある者は急所だけを破壊され身体を動かすことは不可能だったのだ。

そうしたトロールたちは断末魔を上げることすら許されず、俺たちの圧倒的な力の片りんを垣間見ただけで、畏怖の念に駆られつつ消滅していった。

恐らく自分たちが死んでいたことにも気づいてはいない者も多かったであろう。

それほどまでに、俺たちの攻撃は圧倒的なスピードと技術を誇っていたのである。

「ふん、自業自得だな。子供を傷つけようとする輩に容赦はない」

俺は何ら躊躇なく断言する。

「ですね！ 子供に手を出そうとするなんて、人魔同盟学校の先生陣をなめてもらってはこまりますよね」

「ふ、その通りだ。それにしても後の先も極まってきたなあ、ラッ  
カライは」

スキルを付与しているとはいえ、もはやその斬撃は見えないほどの  
スピードだった。

「待ちなさい、私も攻撃に参加していましたので、相応の評価を求  
めます」

「僕よりちょっと遅かったですね、ふふん」

「む？ それは、早さより質を重視したゆえにですね」

「まあまあ、いいじゃないですか。心臓の必中さすがでしたよ。仲  
良くしましょう。争いは何も生み出しません。ちなみに私は4体や  
りましたので、いちおう申告しておきますね、アリアケ皇帝？」

「「一番競争心強くないですか？」」

やれやれ。俺は苦笑する。ちなみに残り一体は俺が改めて投擲で倒  
しておいた。恐らく死んだことに気づかないまま逝けたことだろう。

せめてもの慈悲だ。

「さて。とりあえず無能な元魔王レメゲトンの尻拭いは一旦完了  
だな。やれやれ子供が無事でよかった」

俺が子供を守れたことにほっこりしていると、おずおずとした様  
子で一番年長の翼人の少女が言った。実際の年齢は分からないが1  
0歳程度だろうか？



「た、助けてくれてありがとうございます。あの強いトロールたちを一瞬で倒してしまっなんて……」

子供の翼は小さめで、可愛いものだと思ってつい口元をほころばせる。

「むしろ、ああいった存在を野放しにしている大人の責任というものだ。そのあたりの尻拭いをしたいと思っている。すまないが君たちの街まで案内してもらってもいいだろうか？」

「も、もちろんです。命の恩人ですから。ね、みんな」

「う、うん！」

「むしろ、街まで護衛してもらいたいと思ってた！」

「こ、こら！ 助けてもらっておいてなんてことを！」

だが、俺は笑った。

確かにそうだ。

他にもトロールがいるかもしれない。

「ああ、そうだな。では護衛として同行させてもらおう。俺はアリアケ・ミハマという者だ」

俺は右手を差し出す。握手という文化は無いかも思ったが、

「は、はい！ アリアケ様 私の名前はリムと言います」

ちゃんと手を握ってくれたのだった。

## 282 子供を助ける（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ皇帝は一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 283・フリューム王国女王に頼られる

283・フリューム王国女王に頼られる

「ほう。ここが翼人種が統治する【フリューム王国】か」

フリューム王国は城壁により囲まれた都市国家であり、先ほど門番に事情を話して入れてもらったところだ。

「でも先生、何だかみんな元気がないように見えますね」

「それよりあっちが騒がしいようですよ、アリアケ君」

そのようだな、と思いながら俺は目を遠くへと向ける。何やら土煙を立てながら迫って来る集団があった。

そして、俺たちの前を通り過ぎるかと思いきや、急ブレーキをかけて止まった。

先頭の女性がまくしたてるようにして、めっちゃ唾を飛ばしながら突然話し始める。

「そ、その方達、待つて待つて！ はあはあ、えっと、申し遅れました！ 私はフリューム王国の女王なんですけど！ ぜえ、ぜえ。なんと、付近にトロールが出たららしいんです！ 私たちはその討伐隊です。子供たちが外に出ていると聞いて、こうして近衛兵を率いて出陣するところです！ あなたたちは見れば武器も所持されているご様子！ ぜび、傭兵として私に雇われて下さい！ 報酬は、

ええいもってけどロボー！ 1万ルベルだ おおん、これで今月も女王の使えるお金がなくなっちゃったよ、ぴえん」

一気にまくしたてて要望を告げたのは、俺よりは少し小さいながらも女性にしては身長の高い、見た目20歳くらいの緑の髪とアンバー色の瞳が美しい女性だった。美しい白い翼は陽光に照らされてキラキラと光る。

あと、聞き間違え出なければ、女王らしい。

「ああ、それなら手間が省けたな。ちょうど俺たちが通りかかったところに、多分お前たちが助けようとした子供たちがトロール10体に襲われていてな」

「そんな！ 時すでに遅かったということなんですわね！ 10体だなんて子供たちが逃げられるはずありません！ うおおおん！」

「まあそんなに獣のような咆哮を上げる前にだ。もう少し話を聞いて欲しい。フリーユーム王国女王よ」

「ミルノーです」

「俺はアリアケだ。よろしく頼む、ミルノ女王。で、まあ話を聞いて欲しい」

「うっ、うっ、鬱。どうせ私のせいだって言っただけなつもりなんでしょう。いいでしょう、私も女王です。私の政治がポンコツなばっかりに四魔将ギガテスの横暴に屈し続けてきました。そして、とうとう大事な子供にまで。うええええええええええええん」

見かねてリムが口を挟んだ。

「ミルノ 女王様。あの、私たちは無事ですので。ここのアリアケ様に助けてもらったのです」

「やめて！ 優しくしないでよ！ 今の私は女王としての無力感に絶望して、責任を感じまくって内省しまくりなんだから！」

「こいつ、やはり、どついてはいかんのか？」

「すみません、アリアケ様。いちおう女王でして。あの人気もあるんですよ？」

「まあ、そうだろうな」

俺は微笑む。

「話は聞かんし、直情的でちょっと頭のネジが一本取れているようだが、自分が先頭に立って子供を救いに行こうとするんだ。へっばこなど短所のうちに入らんさ」

「パートナー、褒めているつもりでしょうが、貶しているワードの割合が過多になっていますよ」

「まあ、でも分かります。確かに為政者って完璧なだけが取り柄じゃないですからね。アリアケ君みたいに超人なのもいいですけど、コレットちゃんみたいな可愛いお姫様にこそ付いて行きたい！ という殿方も多いみたいですからね。と、そんな結果が先日旅館で行った第5回賢者パーティー・ファン投票で判明したんですよ」

「暇を持て余しすぎでは……。まあ、担いでくれる仲間たちが俺のような上に立つ者には必要だからな。その資質は何も俺のような完璧さだけではないのはよく知っているつもりだ」

「その視野の広さを持っているのが先生の凄いところですよね！」

俺はそんなことないとはかりに苦笑しながら肩をすくめて、<sup>トリップ</sup>反省中のミルノ 女王にもう一度声をかける。

「精神異常解除。ミルノ 女王、こつち側に戻ったか？ なら、さつきから話している内容も聞いていた内容も、そろそろ理解出来たろう？ ちゃんと子供たちも無事だし、こうして送り届けた」

「うおおおん 良かったよおおおお」

「スキルが効いていないのかな？」

「いえ、これが天然なんです」

そうか、と頷きながら、子供たちを抱きしめてメソメソする女王に告げる。

「とはいえ、トロールは今後も現れるだろう。また行きがかり上、トロールには投降をすすめたものの、襲撃を続けたのでな。倒すしかなかった。だが、そうなれば恐らく俺を狙ってトロールやその上司にあたる四魔将ギガテスが襲ってくるだろう。今日は出来れば宿泊させて欲しいと思っっているが、無理には言わないつもりだ。ただ食べ物などだけは補給を……」

俺がそこまで言いかけた時であった。



「逃がさん！　あなただけはー！」

突然、ミルノ　女王が襲い掛かって来る。というか、普通に腰に抱き着いて離そうとしないだけなのだが。

「ええい、離せ！　いきなり何だっちゅうんだ！」

俺の言葉にミルノ　は叫び返してくる。

「だってだって、アリアケさんを襲うかもしれないけど、結局この国を脅してくることは未来永劫変わりはないんだもん！　だから敵は共通！　ここは一つ手を組みましょう！　欲しいものがあつたら出来る限り融通するからー！」

「うーむ、結構渡りに船のような提案なのに、不安しか湧いて来ないんだよなあ」

「どうしてよ！　正直すぎるわよ、アリアケさん！　んっ、ていうか……」

彼女は俺の方をジロジロと見てから。

「なんだか貴族が王族のような気がするんだけど気のせい？」

「ん？　いちおうエンデンス大陸では国王をやっていた。魔大陸では帝国を建国するつもりだ」

「先生つたら、いきなり過ぎますよ。それじゃあ女王様も理解が…」

しかし、ミルノ女王は目をキラキラとさせながら、満面の笑みを浮かべながら言ったのである。

「加盟します！ 帝国に加盟します！ どうかどうか！ この王国に慈悲と力を皇帝として貸して下さい」

「侮れない判断の速さだな」

「あー、女王のこと軽薄だと思ったでしょ！ 分かるんだかね！ でもね、これも分かっちゃうの。女王には」

彼女はウインクをしながら言った。

「誰に寄生すればうまく生きながらえられるかってね」

そう堂々と宣言したのであった。

「女王よ。不器用なオートマタ種族の私が言うのも何ですが、『言葉を選ぶ』ほうがコミュニケーションが円滑になると思いますが。せめて、『誰が信頼できるか分かる』とでも言っておけば、いい感じのムードだったとシミュレーションの結果は指し示しています」

「おっと、しまった、てへ」

「はあ、やれやれ」

俺は苦笑しながら、全力で頼って来るフリーダム王国女王ミルノに対し了承の意を伝える。

「俺もお前が少なくとも面白い女王だということくらいは分かるぞ。アリアケ帝国の一つ目の王国の女王がお前というのはどうかなーって正直思っけどな」

「ひどいよー」

そんな会話をしながら、俺とミルノは今後の作戦について意見を交換したのであった。

## 283・フリーダム王国女王に頼られる(後書き)

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定  
です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとつございますm(´`”´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひ  
ぜひご一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケとミルノ 達は一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

284・もう一つの加盟国(前書き)

明日新刊発売!宜しくお願ひします!……!!

## 284・もう一つの加盟国

284・もう一つの加盟国

「さて、それはそれとして、我がパートナー。このようなヘッポコな女王が統治する王国だけでは、帝国としての体裁に傷がつくと言うものです」

「一理あるな」

「酷いよ　目の前で言わないでよ」

場所は会議室である。

整理しておく、俺たちアリアケ帝国の最終的な目的は、魔大陸との間にあった【霧の結界】が消失した理由の解明と、魔大陸の無力化ということになる。もちろん、【霧の結界】が復活すればそれはそれで良いが、俺が皇帝として君臨してしまった方が早いというのが現時点での判断だ。その過程において、行方不明になったパウリナの救出や、バグというか仕様と思える時空転移を起こした女神の挙動の理由も判明することだろう。

……無論、皇帝など面倒なので、出来れば【霧の結界】が復活すればいいとは思っているが。現時点では俺が動くのが最も早く確実なので仕方ない。これも賢者の勤めといったところだろうか、やれやれ。

さて。そんな訳なので、オートマタのエリスが言ったように、アリ

アケ帝国に加盟する国を増やしていくことは重要である。発言の重みも違うし、そもそも一国だけ支配していても帝国と名乗っているのか微妙なところだ。

「そこで提案があります。もちろん、これはあなたが今後も私のパートナーであり続けることを誓うのなら、という条件付きですが」

「今まで通りということだろう？ 別に構わないが？」

「構った方がいいですよ、アリアケ君。これはお姉さんからの忠告です。アリシアさんが怖いですよ」

「そうです、そうです！ あとですね、アリアケ先生は妻帯者ですから！ エリスさんは、そのところお忘れなく！ ちなみに、パートナーについては順番がありますので、そのあたりも宜しくです！ ボクは3番目！」

「あら、私の理解では、最近フェンリルさんが神話時代からのパートナーであることが判明して、入れ替えが起こったと聞いていましたけれど？」

「まだ賢者パーティー女子会で審議中です。あんなのズルいですよ」

「そうなんですね。まあいいです。今度混ぜて下さいね？」

「え？」

「え？」



「話に割り込ませて頂きます。本筋から離れているようですので」

「誰のせいだと思ってるんですか！」

「既に予約が沢山埋まっているということでしょう。ならばパートナーには迅速に、その賢者パーティー女子会メンバーと懇ろねんじろになつてもらわなければならないそうですね。私もその点については尽力しましょう」

「思ったよりも柔軟で理解力があるオートマタって解釈違いなんですけど」

ゴホンと俺が話を本筋に戻すために咳ばらいをした。

「で、エリス。その妙案と言つのを教えてくれないか？」

「ええ、我がパートナー。私も女王と名乗るからには国を持っていきます。小さな国ではありませんが、国は、国です。人口もオートマタ種族ひとがたという増減しない人形が数十人いる程度になります」

「なるほどな。数が少ないのは繁殖も老衰もしないからか」

「ええ。なぜか私たちオートマタはするように創られたようです。誰に？ 何のために？ それは分かりません。分かっているのは同じ起動時間の姉妹たちがこの魔大陸で目を覚まし、今までの千年間を過ごして来たということですよ」

「千年ね」

「何か？」

「いいや、続けてくれ」

彼女は頷き。

「女王の権限として、時限的にあなたの帝国に加盟しても良いと思っ  
ています。なぜなら、得る物は多く、失う物は少ない。もとより  
私の国は統制の取れた国であり、感情などない。利益と合理に沿っ  
てのみ、駆動する種族ですから」

「二日に一度ペスカトーレを出さないと感情的に怒られた記憶があ  
るが……」

「見解の相違ですね。神経システムに絶望を知らせるプログラムが  
走り、モチベーションを助けるメインの思考回路が断絶気味となり、  
敵味方の誤認が反転する重要なシグナルが発せられるだけです」

「めっちゃ怒ってる、この女王、こわいよー！」

ミルノーが怯えた。

「ともかく、あなたの帝国に加盟することは直接出会い、矛を交え  
た私には合理性に疑いはありません。しかし、もしかすると、私の  
姉妹たちは違うかもしれません。なので、パートナー、あなたはも  
しかすると、姉妹たちに力を誇示しなくてはいけないかもしれませ  
ん。それが加盟の条件です」

「いいだろう。この魔大陸では強い事が信頼の証になることはよく  
理解している。郷に入っては郷に従えとも言っしな。姉妹と戦う必  
要があるならそうしよう。ただ心配が一つある」

「珍しいですね。聞きましょう」

「手加減が一番難しいからな。やりすぎないように出来るか心配だ」

「さすが私のパートナーは言うことが違います。では我が国へ案内しましょう。場所はこのフリーユーム王国より西になります。海を経由した方が早いでしょう」

「では、早速明日には行くでしょう。ミルノー女王。色々と用立ててもらっても構わないか？」

「もつちろん！ その代わりに、げへへ、うちの国のこともよろしくお願いしまっせ」

「魔大陸には普通のテンションで話が出来る人材が払底しているのか？」

俺はそんなことを言いながら、翌日一路、海路を使い、オートマタ種族が治める国【プロメメテル】へと赴いたのであった。

## 284・もう一つの加盟国（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定  
です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとつございますm(´`”´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひ  
ぜひご一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願ひします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちはこの後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

285・勇者パーティーを倒す(前書き)

本日発売! 『追放嬉しい』 小説6巻発売・コミック3巻 宜しく

お願いします(\*・・・)

詳細は後書きの下をご覧ください! 可愛い表紙にも注目です(\*・^

- ^ \* )

## 285・勇者パーティーを倒す

285・勇者パーティーを倒す

さて、どちらかと言えば非常に広大な入り江と言った方が適切な海を、ミルノー女王より借りた船で渡ると、オートマタ種族が治める小国家プロメテルへすぐに到着した。

オートマタ種族の女王エリスとしては、帝国に加盟することは国益にかなっていると判断している。

しかし、新しい国に訪問するからにはどういったトラブルが待ち受けているか分からない。

アーパー女王ミルノーが治めていた翼人種族のフリーウム王国の緩さは例外だと理解すべきだろう。

そんな覚悟を決めて、俺たちが港に到着して早々、やはり思いがけない事件が待ち受けていたのだった。

「やっぱり来やがったな、アリアケエ！　ここが会ったが百年目だ！　また俺をこんな目に遭わせやがってえ」

ガギイイイイイイイン

棧橋へ降り立ち、埠頭を歩いていた俺にいきなり攻撃を仕掛けて来るといふ大胆不敵な敵が出現したのである。

しかし。

ドゴオオオオオオオオオオオ

チユドオオオオオオオオオオ

メキイイイイイ

「おおおおおおおおおおお」

「あつ、すみません。ついカウンターで顎砕きを放ってしまいました」

「私も第2種兵装兵器【E・ブレード】で斬撃を喰らわせてしまいましたね」

「正拳突きがこれほど奇麗に決まったのは初めてかもしれません。手になじみます」

なぜか俺の警護を買って出ている三人が、見事に三人とも猛烈なカウンターを炸裂させていた。

「あれくらいの攻撃なら俺一人でも対応できるから大丈夫なんだが……」

「いえいえ、先生は今や【皇帝】ですから。ドーンと構えていてください。んふんふ。ボクもとうとう皇帝のお傍付きかあ。アリアケ皇帝。くうく、テンションが上がります！」

「まあ、私も加盟国の女王にして、唯一のパートナーですから。粗



相をするわけには行きません」

「唯一とか言ってますよ、この女王さん。抜け目のなさはローレライさんの波動と同じものを感じるお姉さんです！」

まあ、意気軒昂なのは良い事か。

それよりも、いきなり襲ってきた刺客が誰かと思いきや。

「ちょっと、ビビア。大丈夫なの」

「ほらー、もう無理だからやめとけって言ったじゃーん。上司も見えないんだから無理することないってー。適当に仕事してダラダラしてよーよ」

「そうだな。筋トレしてるのが良い。万人におすすめできる暇つぶしだ」

「それはあんただけやってな。あたしはネイルアートにはまってんのー」

どうやらカウンターによって倒してしまったのは、

「勇者ビビアとそのパーティメンバー全員か。どうしてここに？いや、問うまでもないか」

俺は臨戦態勢を取る。

「え？ いえ、違うのよ、アリアケ。これはビビアが感情の赴くまま先走っただけで」

「果たしてそうだろうか。勇者ともあるうものが感情を制御しきれずに襲い掛かるなどあるわけがないだろう?」

「その通りなんだけど! でもあなたもそろそろこの勇者の性格を把握しても良くない」

デリアがそう叫んだ瞬間であった。

「そう。そやつらは我が部下。『エンデンス大陸』で『勇者パーティー』というからには最強パーティーの代名詞なのだろう? エンデンス大陸から派遣された彼らは、この私デユースに戦いを挑み一敗地に塗れ、殺さないでと泣きながら命乞いしてきたので余りに哀れなので部下にしたのだ。そして、今は同族であるお前たちを迎撃するように命じたのだ。くっくっく」

そうやって現れたのは、エリスとよく似ているが、肌の色が褐色の少女である。

「そうなのか。だが、いちおうそこに倒れて白目を向いているのがリーダーの勇者ビビアだ。いちおうリーダーを倒したから、勇者パーティーは倒されたのではないか?」

俺の言葉にその少女はこめかみを押さえるような仕草をする。なかなか人間くさい。

「『エンデンス大陸』最強のはずなのに弱すぎる! ちゃんと給料分働かんか! 労働は美德だぞ! ほら、お前たちも行け! ああ、もう勇者ビビア! お前ももう少しがんばらんか、蹴り!」

「うぎいいいい！」

喝を入れられて、とりあえず涙目のビビアも立ち上がった。

「ああ、なるほど。今まで霧のカーテンが覆っていたから、情報に誤りがあるんですね。デューズさん……、お可哀そうに」

「そこの着物姿の女に普通に同情されているのが気に食わない！ ええい、お前らも一矢報いないか！ 給料は2倍出すぞ」

「へへへ、初めからそう言えばいいんだよ。今はデモンストレーション。ここからが本番って奴さ！ 行くぞ、てめえら」

「「給料2倍！ お金大事に」」

「言いだしておいてなんだが、勇者というのはそんなお金で右往左往する人種で良いのか？」

だが、実際にお金に釣られて、なかなかのバフがかかっているようだ。

「ところでエリス女王！ どうしてあなたがそこにいる！ あなたがこの大変な時期に国を空けるから、私とその穴埋めをしているのだぞ！ あなたに女王の座は相応しくない！ この国は私が今後変わって統治する！」

「クーデターというやつですね。面白い。ではこっちはこっちで戦いで決着をつけましょう」

「種族No.2デューズを舐めないでもらおう！」

ガギイイイン！ とお互いのブレードを交錯させた。

あっちはあっちでドラマがあるようだ。

「ふむ。はからずも勇者パーティーVS賢者パーティーの構図だな。いつもの主要メンバーがだいぶ不足しているが」

「そうですね。では加勢しますね、アリアケさん。夫のピンチに駆けつける。これぞ妻の役目ってやつですよ、キャッ」

「……………」

「僕も最近、気のせいかめっちゃ身体がなまっとったから、ちよつと本気出して良い？ 具体的にはこの半島吹っ飛ばすくらいの勢いでやっちゃって良い、なのじゃ！」

「……………」

「我も最近2番手に浮上したのでなあ。ほとんど妻みたいなものであると自覚しておるからの。さあ、我をアリシアのように扱うが良いぞ、我が主」

「……………」

「あていしは完全に興味本位で来たただけだけど、魔王より魔王帝とかの方がエラソーなのだ！ あていしがそれ名乗りたいのだ。手を貸すのだ！ アリアケっち」

「……………」

「セラもおりますので。仄聞しましたところ、アリアケ様は皇帝になられるのですか？ ああ、グッズ展開がはかどりますね。早速開発に入りましょう！」

「……」

「まあ次期大教皇になるのは避けられそうにありませんので、知見を広めに来ました、ローレライもおります。ところで皇帝の奥方は皇妃と言つらしいですね。大教皇と似てますね？」

「……なぜ全員いる？ バシユータ？」

俺はやつと声を出し、近くに潜んでいるだろう斥候のバシユータを呼ぶ。

「いやあ、いきなり旦那が海辺の街『バンリエ』から消えましたから、ラツカライ嬢と消えたもんですから、駆け落ちだとか何とかで大変でしてね。ただ『愛のパワー』『真の絆』『結婚』とかいう祝呪福によつて、奥方には大体の場所が分かるそう。そんなこんなで大陸へと来たつて訳ですよ」

神代でも追いかけて来てくれたぐらいなので、驚くほどではないか。

「まあ了解した。ではとりあえず、勇者パーティーを倒すとするか。今や彼らはオートマタ種族の部下であり、俺たちの敵らしいからな」

その言葉に、ビビアたちは顔を青ざめさせた。

「ちょ、ちょっと待て た、確かに賢者パーティーと戦うとは言

「つたが、そんな大勢で攻撃して来るなんて聞いてねーぞ」

「そ、そうよ！ ほら、ちょっとはね、こつ手加減してもらって」

「数を頼んで攻めるなんて男のすることっちゃんえよ！ ずりーんだよ！」

「そつだ！ プララの言う通り筋肉以外に頼るな！」

「言つてねーよ！ そんな気持ちわりーこと」

勇者パーティーからは怒号というか、悲鳴じみた声が轟くが、俺は肩をすくめて言った。

「いや……襲撃してきているのは……お前らの方なんだが？ こちらが防衛のために人数をそろえることに、なんら疚しさを覚える理由はないんだが……」

その余りの正論さに、ぐうの音も出ない勇者パーティーであった。

まあ、とりあえず、命令されているという立場も鑑みて、手加減してぶん殴ることにした。

「んぐわああああああああああああああああああ」

埠頭には、再び勇者ピビアたちの絶叫が響くのであった。

## 285・勇者パーティーを倒す(後書き)

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売予定です！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



286・オートマタも恋をする(前書き)

昨日発売! 『追放嬉しい』 小説6巻発売・コミック3巻 宜しく

お願いします(\*・・・)

詳細は後書きの下をご覧ください! 可愛い表紙にも注目です(\*・^

- ^ \* )

## 286・オートマタも恋をする

286・オートマタも恋をする

「くっ、クーデターは失敗か。殺すなら殺せ。だが、お前のような女王が長く君臨出来るとは思わぬことだ、エリス女王」

さて、壁に突き刺さったり、地面で伸びている勇者パーティーの面々は置いておいて、あつちはあつちで決着がついたようだ。さすが女王の称号を持つだけあって、圧倒的な力でエリス女王は、No.2のデュースを制圧していた。デュースは悔しそうにしながら破れた服というか、損傷した装甲を押さえている。

「あの二人よく似ていますが、デュースさんは褐色肌で出るところ出て、お姉さんとしてはどっちも選び難いですね」

「300年間封印から解かれたからか、この女将、最近地がですだとあていしは思っただ！」

「言いたくありませんが、ブリギッテ教の始祖だと信じたくない気持ちがあつたよと湧いてきました！」

「ふ、私なんてそのトップに据えられる定めにあるんですが。ちなみにアリシア様のことは絶対に逃がしませんから、よろしく……」

ブリギッテの運営する旅館あんみつの常連である魔王リスキス・エルゲージメントのコメントに、ワイズ・ブリギッテ教の重鎮中の重鎮である二人は絶望に打ちひしがれるのであった。

そんなやりとりをしている間にも両者の会話は進む。

「デユース、私はあなたを殺すつもりはありません。あなたがいるから私が楽が出来るのですから。これからも女王の補佐を宜しくお願います」

「うわあああ！ 殺してくれ！ こんな女王の下で働くのはもう嫌だ！ せめて休暇をくれえ」

「どうやら、俺が支配しようとしているこの国はとんでもないブラツク国家らしいな……」

「なに、支配だと 貴様、確か先ほどアリアケ皇帝と呼ばれていたな。まさか、この国を支配するつもりで来たのか」

損傷した装甲を自分のマナで修復し、立ち上がったデユースはこちらを向いて聞いて来る。

その視線は先ほどエリスを睨んでいた時よりも、よほど熱がこもったものだ。やはり一筋縄ではいかないか。実質的にこのオートマタ種族の実務を取り仕切っているであろう、この少女が強く反意を示すなら、無理強いをしてもうまくいかないことは明らかだ。

「そのつもりだったが、無理強いをするつもりはない。魔大帝レメゲトンの圧政によって、翼人種や他の種族たちも虐げられていると聞いた。またこの大陸との行路はひらけたばかりで謎も多く、俺が解明するしかないだろう。また救わなくてはならない少女もいてな。そんなわけで、俺が皇帝になって、現在の無能な魔大帝を退位させるのが行きがかり上、妥当だというだけだ。ただ、だからと言って、

君のように国をしつかりと想っている女性と敵対するつもりはない。嫌われたくはないからな」

それでは本末転倒というものだ。しかし、その言葉を聞いて、デュースは俺の顔をジツと見つめると、パイと頬を赤く染めて顔をそらした。

「ふ、ふん！ 大した自信ではないか、に、人間のくせに！ だが先ほどの戦いでその実力は見せてもらった。それに志もこの魔大陸マジナクの圧政をやめさせることにあり、少女を救う使命も帯びているというこのようだ。まさに勇者だ。そこに転がっているのとは違う。ふん！ き、気に入った訳ではないけど、お前がこの国を傘下に治めたいと言つなら、考えてやらなくもないんだからな！」

ん？ それって。

「のう、旦那様。俺もそろそろ報われないなあ、って思っておるのじゃが、やたらめつたらライバルを増やすのはそろそろやめた方が良いと思つのじゃが、どうじゃろうか？ 俺ってNo.2だったはずじゃろー？ 俺が嫉妬でブレスの温度がうっかり一兆度を超えちゃうことだってあるのじゃぞ、うらめしや〜」

「ボクもですよ、先生！ 先生は釣った魚に餌を上げないタイプですか。ボクはそんな残酷な人だとは信じませんよ。」

「っていうか、正妻を前に他の女性といちゃつくのやめてもらっていいですかー？ これって正論ですよねー？ 大陸ごとカチ割っちゃいますよ〜」

「我も別に構わぬがのう。我の主がモテる様を見るのは、非常に気

分が良い。むふふ」

「神代から戻って来てから完全に第二夫人モードですよ、このフエンリル様！ ファンクラブ会長としてちょっと見過ごせないのですが！ というか、セラのことももっと見て下さい」

「これは以前も言いましたが、出会った順番で言いますと、私は結構最初の方ですから。コレット様より先なので、どうかご高配のほどお願いします。あと将来は大権力者なので、贅沢できます」

「人間って怖いのだ！ あ、でも、あていしもそんな争奪戦を眺めることでお勉強するのだ！ そして、将来は参戦するのだ、ぬはははは！ これぞ魔王の深謀遠慮なのだ！」

「声に出してる時点でどうなんでしょう。まあ、それはともかくアリアケ君。後でこの後始末はお願いするとして、まずは皇帝として一言お願いします」

「いや、本当にいいのか？ 確かにエリス女王から許可はもらっているが、臣下がついて来なければ意味がないが……」

その言葉に、デューズはもう一度頷いた。

「ア、アナタならいいと、私のプロセスが言っている。アナタの命令だったら、なぜか気持ちよく受諾できそうなのだ」

「そ、そうか」

「あーりーあーけーさーん？」

本能的に危機感を覚えつつも、いちおうオートマタ種族が治める国【プロメメテル】を傘下に治めることは了承してもらえようだ。まあいちおうこれで帝国としての体裁は成立したことになる。

そんな俺の思考とは裏腹に、アリシアが号令をかけていた。

「はい、本日は女子会を開催します。議題はアリアケさんについてです。参加しない人は賢者パーティーでの発言権は一切ありませんので、万障繰り合わせの上参加するように！ 特にそのエリスさんとデューズさん！」

「「イ、イエス、マダム」」

有無を言わせぬ迫力が、そこにはあったのである。

## 286・オートマタも恋をする(後書き)

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売しました！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`”´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV:井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中!!

【応援よろしくお願ひします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「デュースたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



287・魔大帝レメゲトンは怒り狂う(前書き)

「昨日発売!」追放嬉しい! 小説6巻発売・コミック3巻 宜しく  
お願いします(\*・・・)

詳細は後書きの下をご覧ください!可愛い表紙にも注目です(\*^  
-^\*)

## 287・魔大帝レメゲトンは怒り狂う

287・魔大帝レメゲトンは怒り狂う

【Side 魔大帝レメゲトン】

「なんだと　　アリアケ皇帝だとお　　」

俺は急ぎの知らせを伝えに来た部下に対して、思わず声を上げる。

「は、はは！　既にこの魔大陸の南部の国々をその掌中に治めているようです。あの偏屈どもの集まりであるオートマタ種族王国【プロメテル】と、行動不可解斜め上女王ミルノの治める翼人種【フリーウム】。このある意味目立つ2大王国がアリアケ帝国の傘下に入ったことが大きかったようです！」

「馬鹿な！　どうしていきなり現れたエンデンス大陸の雑魚ごときに、この俺が長年の交渉と恫喝で何とか支配することに成功した二国があっさりと寝返ると言うのだ　　わ、分かったぞ、相当な手ひどい手を使ったのだな！」

俺は一瞬狼狽したものの、落ち着きを取り戻す。

恐らく、相当悪い手段を用いたのだろう。

子供を人質に取る、あるいは、女王の命と引き換えに支配を吞ませるなどだ。

「そう。それならば理解できる。何せ俺の常套手段でもあるからな」  
しかし。

「い、いえ。レメゲトン陛下。恐れながら申し上げますが……」

「ん？ なんだ？ 遠慮はいらん。正確な情報を全て詳らかに報告せよ！」

言いにくそうな部下に対して、俺は余裕を取り戻し、寛容に言葉を促す。

だが。

「そのアリアケという輩は一切武力を用いていないようです」

「なっ」

自然と俺の口から驚愕の声が漏れた。

と同時に。

「そ、そんな訳があるものか！ では説得でもしたとどういうのか  
ありえぬ！ 俺には従わないのに、アリアケごときに従う訳がない」

そう言って、知らぬ間に地団太を踏む、が。

「いえ。まさにその通りのようです。それどころか、アリアケは襲われていた翼人種の子供を善意から助け、また恐れながら、子供を

襲つような部下を野放しにしている魔大帝レメゲトン陛下を無能と蔑み、ミルノー女王に皇帝になることを決意したことを語ったようです。これに感動した女王はアリアケ帝国への貴族を決意した模様。その武勇伝に感動した周辺国のうち、元もと我が帝国に反意のあった国々が次々に呼応しております」

「む、無能だとお　　エンデンス大陸の弱小たる人間如きがああ  
俺は思わず手元にあつた飲み物をぶちまける。」

だが、部下は俺が正確な情報を全て詳らかにするように、という指示を忠実に守って言葉を続ける。

「つ、次にオートマタ種族の方ですが、エリス女王は元々宝物の収集癖のある人物であり、今回も魔大帝レメゲトン陛下がお求めになったパウリナをかすめ取るうとしておりました。無論、その目論見はレメゲトン陛下によって阻まれましたが」

「そ、そうだな……」

褒めているつもりなのだろうが、あれも実は失策である。

パウリナを捕縛するために遣わせたキング・オーガ10体は、弱小大陸のはずのエンデンス大陸まで追跡したが、その後捕虜となつてしまい、目論見からは外れている。パウリナが我が城に現れたのは僥倖以外の何ものでもないが、偶然でしかないのだ。噂によると、あれも偶々居合わせたアリアケによって阻まれたという噂がある。

「どこまでもこの魔大帝を侮辱しやがってえ……！　ぎぎぎぎっ……」

思わず悔しさから、齒ぎしりをしてしまう。

部下は報告を続ける。

「しかし、なぜかアリアケとエリス女王、その仲間数名が突如魔大陸南部に出現。詳細は不明です。しかし、この時にどうやら同盟のような関係を結んだ模様です。エリス女王はアリアケのことを、我が最愛のパートナーで病める時も健やかなる時もずっと一緒にいる間柄である、と周囲には説明しているようです！」

「なぜだ！不意を衝き、女王を人質にして【プロメメテル】を支配したのではないのか。その言葉だけならば、ただアリアケに惚れているだけではないか。俺がプロメメテル王国を支配するときはいかほど反抗的であり、しかも、オートマタ種族の一個体ごとが余りの強さであるために、懐柔と譲歩を繰り返し、やっと支配に至ったというのに。しかも、あの女王補佐のデユース・オートマトンがいかに頑固でどれほど難儀したことが」

「えっと、そのことも報告にはありまして……」

「は？」

俺の思考が追いつかないうちに、部下はすらすらと報告を読み上げる。

「そのデユース・オートマトンもこのアリアケ・ミハマという人物には執心との情報があります。かの国は実質的にはこのデユースをはじめとした5体のオートマタが、好き勝手に宝物を収集する女王エリスの補佐に回っている訳ですが、その筆頭であるデユースがア

リアケのことを『アナタ』などと呼び、距離を詰めたがっているとの噂です」

「人心まで掌握しているというのか　あの頑固で融通のきかないオートマタ種族の腹心にまで」

俺にはできなかつたのに！

許せん！

許すことは出来んぞ！　アリアケ・ミハマ

我が帝位を奪おうとする、篡奪者めが

「こうした強力なオートマタ種族が従ったことから、南部の国々ではレメゲトン陛下よりもアリアケの方が強大な皇帝であるという根も葉もない噂が広がり、我が帝国に反旗を翻す国々が続出している次第です！　陛下、このままでは我が帝国に甚大な被害がもたらされます」

「分かっている！　下がれ」

「は、はは」

部下はそう言って俺の前から下がる。正確に情報を伝えよと言ったが、これほどまでに屈辱的な情報がもたらされるとは思ってもみなかった。

地面には打ち捨てられて割れた飲み物のグラスと、ぶちまけられたワインがシミになって広がり、地団太を踏みならし、齒ざしりをし

たせいで、呼吸はゼイゼイと荒い。

魔大帝がこのような屈辱を味わうことは許して良いことではない。  
ならばやることは決まっている！

「四魔将を呼べ　我が帝国に挑む愚か者が現れた　緊急事態で  
ある　急げ」

俺は胸にわだかまるイライラを解消するように、部下へ四魔将を招集することを指示したのだった。

その目的は無論、俺よりそのアリアケという篡奪者が、無能で弱いことを証明するためである

## 287・魔大帝レメゲトンは怒り狂う(後書き)

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売しました！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`”´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】



「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケ皇帝たちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

288・四魔将現る(前編)(前書き)

3/7発売! 『追放嬉しい』小説6巻発売・コミック3巻 宜しく  
お願いします(\*・・・)

詳細は後書きの下をご覧ください!可愛い表紙にも注目です(\*^  
-^\*)

## 288・四魔将現る（前編）

### 288・四魔将現る（前編）

「ふむ、魔大陸の南部諸国はかなり帝国傘下に参加してくれたな。みな、魔大帝の圧政に苦しんでいたのだろう」

皇帝となつた俺は日々加盟国を増やしていた。

今も玉座に座りながら書類をめくりながら戦略を練っている。

「いやいや、規格外過ぎるだけですから、アー君が。例えばなんですか、あの人魚族に対する交渉は？ 海の中で早く泳ぐ勝負をして雌雄を決するっていうお話でしたのに、海を割って疾走するって。人魚姫が意外過ぎて気に入って下さいましたから良かったですけど」

「ちゃんと海の底を歩いてもいいかは確認したんだがなあ」

「海を割るほうが確認すべき優先順位が高いんですよねえ」

やれやれーと、俺の妻である大聖女アリシアが肩をすくめる。

「いやいや、それより問題なのはあの人魚姫、明らかに旦那様を見る目が怪しかったのじゃ。もう一晩泊っていけとしつこつたのじゃー！」

なぜかコレットがプンスカとしていた。

それに対して、魔王リスキスが眉根を寄せて言う。

「っていうか、それを言うのなら、なのだ。そろそろコレットつちが、さつさと決めるところを決めるべきではないかと、この魔王のあていしは思っわけ、なのだ！ 見てみるのだ！ 何人待っていると思ってるのだ」

何を言っているのかは不明だが、ともかく、リスキスが視線を投げかけた先には、ラツカライやフェンリル、ローレライ、セラ、ブリギッテといった賢者パーティーの面々がいるとともに、今回魔大陸で最初に帝国へ加盟してくれた、エリス女王に補佐のデューズ、そしてミルノー女王がいた。ちなみに、今いる場所は翼人種が統治する【フリーム王国】で、使用していない地域を少しだけ帝国の直轄地とさせてもらっている。

もともとモンスターが出て剣呑な場所があり、誰も近づけない場所だったのを、俺たち賢者パーティーで一瞬にして掃討したので、まあ、荒地の有効活用のようなものだ。ミルノー女王からは、

「さつすが我が皇帝！ ビバ！ アリアケ皇帝 うっひゃあ」

と意味不明な反応をもらったが、大丈夫なのか、このフリーム王国と思わなくもない。

まあ、それはともかく、いちおう直轄地も出来、加盟国も様々で、魔大陸南部をそれなりに治めることが出来たので、名実ともに皇帝なのは間違いない。大陸全土にも、加盟国の面々を通して、俺が皇帝として魔大陸を新たに支配することを宣言している。こうした施策は無論、大きな大戦略の一環として行っている訳だ。そろそろ釣

れるころあいではないだろうか？ そんなことを俺は脳内でシミユレーションしている。

さて、現実を意識を戻せば喧々諤々の議論が行われていた。

「あの、お姉様、それにはボクも同意です。ちょっと皇妃とか名乗ってみたいと思っちゃったりなんかしてまして。どうでしょうか、ここは一つ、女子会で順番を再協議してみる、なーんて？ えへへ」

「ぬおおなのじゃ まさかラツカライ妹から普通に下克上宣言されるとは 可愛く微笑んでおるが、女の怖いところがよー出ておる！ 成長しておるのじゃ、そっち方面に」

「まあ、そう急くではないぞえ？ コレットにもコレットのペースというものがあろうて。おお、それならば我と一緒に怖くはなからう。一度チャレンジしたことがあるが、あの時は邪魔が入ったゆえなあ。いや、あるいは仮の主と一緒にするのも良いのではないかのう？」

「さすがに破廉恥過ぎますね。仕方ないので将来の大教皇の私も見学しましょう。その際にどんなトラブルが起こるかは神のみぞ知る、といったところですから、何が起ころうとも私の責任は問われないでしょう」

「見ましたかオートマタの皆さん。これがエンデンス大陸の恋模様なのです！ セラもファンクラブ会長として出遅れない様にしないといけません」

「なるほど。会長ともあるう重役であつても、それほどの努力が必要だとは。デュースも努力が必要ですね？」

「わ、私はそんなのではない　あくまで好意の一種であって……」

「女王としてはね！　あなたたちオートマタ種族があざとい奴らなんだと確信したね！　クーデレにツンデレを一種族で独占するなんて、とんでもない種族だよ　ミルノーにもなんか残しておいて欲しかったよ！」

「あなたは……お笑い枠です。誰も座れない席についているので安心してください」

「恋愛から最も遠い席だ、うわん」

何の議論が分からないがとにかく白熱すること凄まじい。

「大陸の未来を決める以上は、これくらいの活気ある議論になるのは当然だな」

フツと俺は微笑む。

「フツ、じゃないわーい！　っと」

笑顔のままなぜかビシーっと、つつこみを入れるアリシアであった。なぜだ？

と、そんな議論を交わしていると、連絡兵が駆け込んできた。そして開口一番、急報を告げたのであった。

「た、大変です、アリアケ陛下！　よ、四魔将が！　よ、四魔将が現れました」

そう告げる。

今まで議論していた面々の言葉はピタリと止み、全員が俺の指示を待つ姿勢となる。

俺は頷いて言った。

「作戦は成功だ。魚は釣れた。後は調理するのみだ」

その言葉に俺のパーティーメンバーたちはやはり微笑み、出陣の準備を始めたのである。

## 288・四魔将現る（前編）（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売しました！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`””m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひぜひ一読くださいませ（\*^\_^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】



「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ皇帝は一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

289・四魔将現る(後編)(前書き)

3/7! 『追放嬉しい』コミック3巻、小説6巻発売 宜しくお  
願います(\*・・・)

詳細は後書きの下をご覧ください!可愛い表紙にも注目です(\*^

-^\* )





「てめえ、また逃げようってのか　あたしを呪いの洞窟で見捨てたみたいによう！」

「まったくプララは恨みがましい奴だな。そのことはもうお互いに筋肉を通して話し合い解決したではないか！」

「解決しねーよ！　ってか、逃げるならあたしが一番に逃げるからな　てめえらはそこで間抜けにも腰抜かしてる勇者の介抱でもしてな　」

「ダーリンなら大丈夫ですわ。私は信じています」

「ああ、俺も勇者を信頼している。俺たちの支援なしでも最後まで因縁の敵と戦い切る覚悟と力を持った男だ」

「へ、へえ。勇者を見捨てんのか。それも結構乙かもしんねえなあ、くっくっく」

「て、てめえらあ　それでも仲間かあ　」

罵詈雑言が最前線で飛び交っていた。

「デューズ、あなたの採用した勇者パーティーですが、あなたの好みをとやかく言うつもりはありませんが、些か戦士としての資質に欠けるのではないですか？　いえ、あなたの好みをとやかく言うつもりはありませんが」

「言ってるも同然だろうが！　エンデンス大陸の勇者だって言うから採用したんだよ！　ここまで酷いと誰が思う　」

「俺の師としての指導不足だな。申し訳ないことだ」

「あなたの指導を受けたラツカライ・ケルブルグは見事に大成しているようです。つまり、あなたのせいではない、アリアケ皇帝」

「そうだな。こいつらがへボいだけだ。っていうかさ、こ、今度でいいから。わ、私の修行にも付き合ってくれよな」

「ほう、どさくさに紛れてよく言ったものです、この部下。ドロボ  
ー猫。勅命で排除が必要になる日も近いですね」

「そんなときゃあ、国が回らなくなるのを覚悟するんだな」

やれやれ。詳細は分からないが、魔大陸の戦士たちは強くなることへの執念が強いようだ。喧嘩までしなくても良いだろう。それはともかく、この大陸を統べる皇帝として俺は先頭に立ち告げた。

「お前が四魔将ギガテスか。ここはこのアリアケ帝国の領地だ。不法侵入として現行犯逮捕する。犯罪者として牢屋に入るといい」

俺はそう告げる。しかし、ギガテスはそれを嗤いながら退けた。

「ぐはははは！ お前が命知らずにも皇帝を僭称したアリアケ・ミハマか！ 嘘とはったりで南部の国々を支配したようだが、それも今日までだ！ 魔大帝レメゲトン様の力に蹂躪され、陛下に逆らった愚かさに震えながら死ぬがいい！ ワーッハッハハハ」

その言葉に呼応するように、率いられて来たキング・オーガ1000体も一斉に嗤う。

それはまさに地獄絵図。鬼たちが人間を肴に楽しむ宴の光景そのものと見えたかもしれない。

だが、

「やれやれ、その魔大帝レメゲトンが無能であることを、お前自身が体現し、証明しているということに気づかないとはな。やはり、無能の部下は無能ということか」

俺は淡々と事実を述べる。

それに対して、ギガテスは激憤する。

「なんだと　貴様、言うに事欠いて！」

だが俺は肩をすくめて、思わずフツと嘲笑してしまう。

「まったくお前は周囲の状況が見えていないようだ。そして、そんなお前を大幹部として取り立てている上司であるレメゲトンも無能であることは明白だ。その自明の理に反論できるはずがないだろう」

俺はビシリとギガテスに指を差しながら言う。

「子供を襲うような部下を放置し、支配する国々を恫喝するような無能がお前だ。その自覚もないようだから、この皇帝があえて直接言い渡す。貴様はただの犯罪者に過ぎん、この罪人が。牢屋にて俺の沙汰を待っている！」

「貴様、俺は魔大帝レメゲトン様の……」

俺はその言葉すら、一言のもとに切って捨てる。

「そんな罪人のお前を大幹部とし、大陸中に迷惑をかける魔大帝レメゲトンとやらは無能のそしりを免れ得ない！ よって、この皇帝アリアケが罷免する。お前はただの流浪のオーガであり、犯罪者集団の親玉に過ぎん。魔大帝レメゲトンという犯罪者もじきに俺が裁くが、まずは今回、領土侵犯、ならびに数々の余罪を持つお前を現行犯として捕縛する。大人しくしろ、元四魔将、もとい犯罪者ギガテスよ！」

俺の言葉に、犯罪者ギガテスは激高する。

「お、おのれええええええ！ 俺のみならず、レメゲトン陛下まで愚弄するとは！ もはや塵一つ残さぬぞ！ 殺す！ 殺してやるぞ！ アリアケ・ミハマあああああああああああああああああああ！」

俺の正論に対して、元四魔将、犯罪者ギガテスは暴力による解決を選択する。

すなわち、引き連れて来たキング・オーガ100体に対して攻撃命令を発したのである。

だが、俺は微笑みながら宣告した。

「やはり無能だな。皇帝の階階の前にすら、進み出る価値もない」

俺の言葉とともに、賢者パーティーたちの攻撃も開始されたのである。



## 289・四魔将現る（後編）（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売しました！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`”´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ皇帝は一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

290・四魔将はなすすべもなく蹂躪される(前書き)

3/7発売! 『追放嬉しい』コミック3巻・小説6巻発売 宜し

くお願いします(\*・・・)

詳細は後書きの下をご覧ください!可愛い表紙にも注目です(\*^

- ^ \* )

290・四魔将はなすすべもなく蹂躪される

290・四魔将はなすすべもなく蹂躪される

「行け、我が配下たちよ！ 大地ごと奴らを蹂躪せよ！ そして大逆の罪を犯した愚か者たちで屍山血河を築くのだ」

「『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』」

四魔将が一人、ギガテスの総攻撃の命令で、まるで赤銅色の山が動くかのように、キング・オーガ100体が動き始める。

その光景は圧巻。

山が脈打ち、明確な殺意を持ちながら、たやすく森の木々をへし折りながら肉薄してくるのだから。

「あひい！ もうだめえ！」

「ダーリン！ 気持ち悪いですわよ」

勇者パーティーが腰抜けになる気持ちも分からないではない。実力はともかく、やはり精神修養が足りない未熟者だからなあ。

そんなことを思いつつも、俺も皇帝として指示を出す。

「その言葉は全てお前たちに返ることだと気づかないのか？ 今の

皇帝は俺であり、既にレメゲトンは俺が罷免したと宣告したはず。ゆえにお前たちこそが大逆の徒であり、屍山血河を築くことになる。自ら極刑を望むか、いや、子供を狙う罪人どもにはお似合いか」

俺はそう理路整然と相手の言葉を論破しつつ、言葉が続ける。

「奴らは数が多いが、訓練された動きではない。海辺の街『バンリ工』でパウリナをすぐに捕まえられなかったのもそのためだ！ それぞれが思い思いの行動で動いていて、軍団と言えるほどの者たちではない。すなわち雑魚だ」

「だとすると、アリアケさん？　ここで採るべき戦術は何になりますか？」

うん、と俺はアリシアの言葉に頷きながら言う。

「1000体、という数字に惑わされる必要はない！　雑魚がいくら群がっても雑魚！　その場合のセオリーは各個撃破となる！　集団戦を仕掛けて、あえて相手に連携させるな」

「最高の戦術ですね、アリアケさん」

「僕もそういうの大好き」

「ブリギッテお姉さんも良いと思います。単身突撃します！」

「本当に好ましい判断です。集団戦法は私の得手ではありませんので」

「あなたは女王なんだから、もう少し得意になってもらわないと困

るんだけどね！ でも、私自身はそういうのは嫌いじゃないよ」

あれ？ 賢者パーティーの半分つてもしかして脳筋集団……？ え  
？ いや、まさかなあ。

そんな若干の疑問が浮かんだが、心の平穩のためにも、深く考えないことにした。

「とはいえ、そのために必要なのはスピードだ。 疾風迅雷 硬直無視」

よし。

「これでいつもの10倍は動けるようになった。 お前たちの実力ならば一人で10体や20体相手することは容易だ！ さあ」

俺は聖杖キルケオンをかざしながら、迫りくる大軍を差しながら言った。

「奴らを蹂躪せよ」

「「「「「おう！」「」「」「」

賢者パーティーたちの威勢の良い声が響くのと同時に、

「ドラゴオオオオオオオオオオオオ・カノオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オン」

変身していないコレットが体内で集積したマナをブレスへと変換し、それを凝集した一直線のマナ砲として発射する

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

通常のプレスは放射状に広がるが、彼女の行ったのはそれとは真逆の攻撃だった。

凝集された光線がまるで森を両断するかのようになり裂き、一筋の線を森に引く！

だが、その効果は絶大だ。

なぜなら、その熱線上にいた生命体は全て溶解し、もはや溶けて軽い渓谷のようになった大地へと落下している。

「な、なんだ今のは　エ、エンデンス大陸のドラゴン如きがなぜこれほどの攻撃が出来る　」

たちまち、四魔将の悲鳴が轟くが、後の祭りだ。

魔大陸のモンスターは確かに強い。

霧のカーテンのせいで内部で熾烈な蟲毒のような闘争が行われ、一体一体の個体の強さはエンデンス大陸を超えるかもしれない。

だが、

「自惚れたな、四魔将。お前たちが内部で闘争を繰り返している時、俺たちは宇宙の癌を退け、外宇宙の神と戦い星を守って来た。俺たちの強さは中にあるのではない。外との戦いによって培ったものだ」





## 290・四魔将はなすすべもなく蹂躪される(後書き)

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売しました！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ皇帝は一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

291・四魔将ギガテスは絶望する(前書き)

3/7発売! 『追放嬉しい』コミック3巻・小説6巻発売 宜しく  
お願いします(\*・・・)

詳細は後書きの下をご覧ください!可愛い表紙にも注目です(\*^  
-^\*)

## 291・四魔将ギガテスは絶望する

291・四魔将ギガテスは絶望する

「コレットちゃんだけに良い恰好をさせてはいられませんね！ ゆえに、ここは肉弾戦しかありません」

「その通りです。ワイズ・ブリギッテ教の神髓をお見せするとしましょう。せめて安らかに逝きなさい」

「さつさと権力を手中におさめて、教義変更しよう……」

アリシアとブリギッテが俺のスキルによって風よりも早くキング・オーガの脇をすり抜けながら、敵陣の中央深くへと潜り込む。一見無謀にも見える行動だ。案の定、その光景を見てギガテスは嗤う。

「グハハハ！ 愚かな！ 敵陣の中央にたった二人でやって来るとは！ なぶり殺しにしてくれと言わんばかりだ」

しかし、その言葉にアリシアとブリギッテ、そしてその後方から追隨したローレイは余裕の表情を崩さない。

なぜならば。

「馬鹿が。すべてが逆だ。現状認識も正確にできない無能な四魔将よ」

「なんだと！」

ギガテスは激憤するが、数秒後には俺の言葉が正しいことが分かり、その顔を絶望に染める。

「これより大結界を張り、周囲100メートルからキング・オーガおよそ30体を閉じ込めて……」

「私たち三人でなぶり殺しにします!」

「生け簀すみたいなものですね。分かります」

「な、なんだとおおおおおおおおおおおおおお」

「分かったか?」

俺は驚愕するギガテスに向かって説明してやる。

「囲まれたのはアリシア達ではない。お前たちが囲まれたのだ。大結界で逃げ場を失ったキング・オーガたちは、その巨軀ゆえに自由に動くことが難しい。一方の彼女らは自由自在にキング・オーガの懐に潜り込み、必殺の一撃をお見舞いするだろう」

「いかん、逃げつ……!!」

もう遅い。

「スキル 広域化」

「セント・オブ・ガーデン  
聖域結界!!」



「俺たちの戦ってきた相手はもっと強かったぞ。お前が今抱いている感情は甘えでしかない」

「なん……だと……。それが貴様のいるステージだと言うの……か……」

俺の威厳のある言葉に、より一層絶望を深めざるを得ない、四魔将ギガテスなのであった。

だが、先述の通り、まだ戦いは始まったばかり。暴れたりないのは何も聖女たちだけではない！

賢者パーティーの他のメンバーたちも、この皇帝の指示を受けているのだから。

## 291・四魔将ギガテスは絶望する（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売しました！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひご一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願ひします！】



「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケ皇帝たちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

292・賢者パーティーは四魔将を絶望の奈落へとたたき込む  
前書き)

3/7発売! 『追放嬉しい』コミック3巻・小説6巻発売 宜しく  
お願いします(\*・・・)

詳細は後書きの下をご覧ください! 可愛い表紙にも注目です(\*・  
・ハ\*)

## 292・賢者パーティーは四魔将を絶望の奈落へとたたき込む

292・賢者パーティーは四魔将を絶望の奈落へとたたき込む

「コレットが戦意をくじき、アリシアたちが前線で暴れ回っているおかげで、敵の前進が止まったな」

「主様。だとすればこのまま前線を押し上げ、相手を圧迫してやるのが良策だと思いがどうかえ？」

「同感だ。皇帝アリアケに続け。ただしこれは蹂躪などではない」

「では何であろうか」

フェンリルの疑問に俺は答える。

「雑魚の一掃だ。虫けらを相手に蹂躪も何もないのと同じ道理だ」

「ぬはははは！ その通りであるな。では前進しよう。虫けらを踏みつぶして通るぞえ」

俺こと皇帝アリアケが先導する形で、前線を切り上げて行く。

それ自体が相手にとって多いならプレッシャーであり、俺と言う力と才覚の権化に圧倒され絶望するに足る事柄であったろう。

「なんかすごい、アリアケさんが歩くだけで、相手の戦力を低下させるなんて！」

「大したことじゃないさ。それに……」

「それに？」

ミルノー女王ののんびりとしつつも、感嘆の言葉に、俺は肩をすくめるのみだ。

無論そう簡単に前進を許しはしない。

「雑魚であるがゆえに、彼我の戦力差が読めずに、蛮勇を通り越した無能はむしろ多いというのもまた道理とつわけだな」

俺が微笑みを浮かべながら歩むのと同時に、キング・オーガ二十体以上が一斉に襲い掛かって来る。

「行け！ あのアリアケさえ倒せば形勢は逆転する」

ギガテスの哀れな怒声が響いた。

俺がこの戦いの中心であり、全てを支配している。ゆえに、俺の首さえとれば勝機が窺える。

なるほど、それは道理だ。

だが。

「それもまた作戦の一つだ。愚かなり。四魔将ギガテス」

「なんだと」

俺は淡々と事実のみを突き付ける。真実がもつとも効果的な攻撃であることを、大賢者たる俺は知悉しているからこそ。

「俺は時間の無駄が嫌いでな。早くのんびりしたいんだ。ゆえに俺を狙いやすいように前進し、お前たちの手の届く範囲にあえて進み出たというわけだ。その意味が分かるか？」

「ま、まさか そんな馬鹿な！ 貴様、恐ろしくはないのか  
自らを囮にするなどと」

「囮？」

フツと俺はその言葉に思わず噴き出してしまふ。

「何がおかしい」

「囮になどなつたつもりはない。俺は象徴だ。愚鈍なるレメゲトンや貴様ら犯罪者集団四魔将に鉄槌を加える『正義』と言う名の炎。ゆえに、その火に向かって羽虫たる貴様らが身を焼き付くように吸い寄せられるようにしたまでのこと。囮？ 馬鹿を言うな」

俺は宣告する。

「俺に近づいたところで、焼き尽くされるのは、お前ら虫けらのみだ。自らの程度を正しく知るといい」

「その通りです！」

「お前たちが我が主様に少しでも触れられる訳がなかるつてなあ」



沈む。

「なんだとおおおおのおお」

ギガテスの悲鳴が轟くが、俺にとっては当然の結果だ。

「一の型は相手の攻撃を利用するカウンター攻撃。攻撃のタイミングをずらすこともなく一気に集中攻撃をさせることでカウンター攻撃の威力が数十倍に跳ね上がっただけの話だ」

「そ、それすらも計算づくだとも」

「当然だろう」

俺の答えにギガテスは狼狽を通り越し、絶望して啞然とするしかない。

だが、そんな暇などないのだ。

なぜなら俺の前進するたびに、俺の力の延長たる仲間たちの刃がオーガたちを切り裂くのだから。

「返信するまでもないのう。はははは！ 柔らかであるな貴様らは！」

「グ、グオオオオオオオオオオオオ」

その強靱な爪で相手をみじん切りにしていくフェンリル。目にも止まらぬ速さで、仲間が殺られたことに理解が追いつかない愚鈍たるキング・オーガという最強のオーガ種を蹂躪し尽くしていく。





魔将ギガテスの哀れな絶叫が響く。

愚かなことだ、と俺は哀れむ。

なぜなら、将たるギガテスの絶望の声は、当然、部下たちにも伝わり、彼らキング・オーガたちの絶望もまた深まるからだ。

「ウ、ウガ、ウガガガガ！」

その時だ。一体のキング・オーガが背中を見せて走り出したのである。

「ま、待て！ 馬鹿な 我が最強の軍勢から脱走兵あと こ、こんなことがあああああああああ」

最強などと謳っていたことが恥ずかしくなるほどの士気の低下だな。

俺はフツと笑う。

もはや四魔将の軍団に当初の面影はなく、ただただ俺の率いる賢者パーティーの力によって、絶望の奈落へとたたき込まれた最弱の軍勢がそこにはあった。

292・賢者パーティーは四魔将を絶望の奈落へとたたき込む  
後書き)

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売しました！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひぜひ一読くださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしく願います！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ皇帝たちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

293・四魔将を蹂躪する(前書き)

3/7発売! 『追放嬉しい』コミック3巻・小説6巻発売 宜しく  
お願いします(\*・・・)

詳細は後書きの下をご覧ください!可愛い表紙にも注目です(\*^  
-^\*)

## 293・四魔将を蹂躪する

### 293・四魔将を蹂躪する

「さて、軍団を率いることすらも失敗した四魔将ギガテス。いや、既に俺が皇帝の座に就き、レメゲトンを廃位させている以上、ただの子供を襲う犯罪者集団だったな。犯罪者ギガテスよ。今ならば皇帝の俺の法にて、お前やレメゲトンを公正に裁いてやるう。だが、これ以上の犯罪をおかすというのならば、容赦はできない」

「アリアケっち。実際、こいつらのやっていることは、アリアケ帝国の領土を侵す領土侵犯と、その臣民たちの安全を脅かす行為なのだ！ ゆえに、そこまで温情をかける必要すら、本来はないのだ！」

魔王リスキスはさすが王としての道理を理解している。その言葉は完全に正しい。だが、一方でこいつも思う。

「こいつらが愚かなのは同情すべきことだ。皇帝が余り慈悲深いのもどうかと思うが、こういう犯罪者集団にも更生の機会を与えるのもまた、良い魔大陸社会を作っていく上で必要なことではないかと思っただけだ」

「さすがアリアケっちなのだ！　そこまで見通してのこととは！　あていしなんて、こんな犯罪者どもはさっさと駆除すべきだとしか思わなかったのだ！」

「その考えも正しい。全ては俺の手の平の上にある。だからこそ、この犯罪者ギガテスに選ばせてやる事が出来るんだ。この場で領

土侵犯をおかしし大逆罪をおかした大犯罪者となるのか。それとも、ここで素直に謝罪をし、正義を体現しようとしているアリアケ帝国とその象徴たる皇帝に対して頭を下げるのか、をな」

「慈悲深いですね。そういった機微は私には分かりかねますが、ギガテスにはもつたいたないほどの温情であることは分かります」

「そうだな。犯罪者ギガテス。ほら、時間の無駄だ。お前の軍勢はもう敗走を始めてるじゃないか。お前は四魔将なんて器じゃなかったんだ。単なる虜囚としてこき使われるのがお似合いってもんだ。早く諦めな、それとも、往生際が悪いのが四魔将の条件だったのか？」

帝国の面々からも今降参すれば、公平な取り扱いをすることを約束する温情ある言葉が出た。

しかし。

「うるさい！ うるさい！ 調子に乗りおつて！ ふ、ふはははは！ 部下などただの俺の手足に過ぎん！ そんなものがいなくてもこの俺一人で貴様らを蹂躪することなどたやすい！ お前らを倒した暁には、アリアケ皇帝に屈した軟弱な国々の領民どもをことごとく苦しめてくれるわ！」

やれやれ。

俺は聖杖キルケオンを構えながら宣告する。

「ここにお前の罪は決まった。領土侵犯、王族への殺害を予告する大逆罪、その領民を苦しめることを良しとする恫喝、いずれも重犯



「ぐははははははは！ その程度のスキルなど効かぬ 我が鋼よりも固く、何者にも貫かれぬ肉体は、お前たちがいかなる強化を施そうとも通じるものではないとされ」

ギガテスの哄笑が響く。

だが、俺は一言でそれを黙らせた。

「慌てれるな。これは前置きだ。では命じる。 皇帝勅命」

「な、何 なんだそのスキルは 聞いたことがないぞ」

狼狽するギガテスと、

「……す、凄い！ 力が……」

対照的な仲間たちの声が響き渡る。

オーガ必滅も、部位破壊もその名の通りのスキルだ。だが、皇帝勅命は、俺が帝位に就くことよって初めて使用することが出来るようになるスキルで、普通は死にスキルである。

その効果とは『支配下にある者達の力のランクを強制的に一段階上昇させる』というもの。もちろん、例えば元々Dランク冒険者に使用しても、Cランク冒険者になるだけで大した効果はない。

だが、俺が使用した対象は、エリス・オートマトン女王、女王補佐デユース・オートマトン、そして魔王リスキス・エルゲージメント。すなわち、既にSランク冒険者のクラスを凌駕する規格外たち。



そんな者たちが、一つステージを上がる時、その効果は絶大な物となる！

「皇帝が命じる」

俺は指先一つ動かす必要はない。

「階階段に迫る不敬な犯罪者を駆除せよ」

その言葉は真言となり、世界の事象として顕現するかの如く仲間たちが力を発揮する

「魔王の力をおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おお！」

まずリスキスが突っ込む！

「舐めるのではないのだあああああああああああああああ  
あああ！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

部位破壊どころか、身体をねじり切るほどの一撃が、犯罪者ギガテスへと炸裂する

「んぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
なああああああああああああああああああああ  
」 馬鹿な

絶叫を上げながら、ギガテスがもんどりうって大地を無様に転がっ

ていく。

踏みつぶされるキング・オーガたちも哀れな悲鳴を上げた。

だが、さすがギガテスはそれだけでは倒せない。

一瞬離れたと思った胴体が、瞬く間に再生を始めたのだ。

「ぐ、ぐははははは！ まさかこの秘儀を見せることになるとはな  
！ 俺が無敵だと言ったのはこのことだ！ 強靱な肉体だけでなく、  
即再生もする！ 俺が殺されることはありえぬということだ、どう  
だ」

その言葉を俺は道化の戯言のように笑って聞く。

「よくその頭で仮にも四魔将を名乗っていたものだなあ」

俺は呆れる。

「なんだと」

「やれやれ、自分の言っている矛盾点にも気づかないのか？ お前はさっきまで、自分の肉体を誇り、傷一つつかない、といったことを言っていたんだぞ？ それが今はどうだ？ その肉体は魔王リスキスに簡単に部位破壊されるほど脆弱なもので、やっと切り札の瞬間再生を使用している始末だ。【追い詰められている】としか見えないんだが？」

「なあ」





## 293・四魔将を蹂躪する(後書き)

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が2023年3月7日 発売しました！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`´”m)

ご予約頂けると嬉しいですが、【無料】試し読みだけでも、ぜひぜひ読んでくださいませ(\*^\_^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願ひします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケ皇帝たちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 294・魔大陸の覇者アリアケ皇帝から落伍者レメゲトンへ降伏勧告を行う

294・魔大陸の覇者アリアケ皇帝から落伍者レメゲトンへ降伏勧告を行う

「旦那。四魔将を楽々と葬ったニユースが魔大陸中で広がっているようです。アリアケ帝国に加盟したいっていう国々がから次々に書面が来ていますぜ」

諜報担当のバシユータが連絡をくれる。

「ああ、これで名実ともに俺がこの大陸の覇権を握っている状態になったな。少なくとも四魔将がああ体たらくだったんだ。もはやレメゲトンの権威とやらは地に堕ちただろう」

「まさかこんなに急速に自分たちの牙城が崩れるとは思っていなかったでしょうなあ」

「力で統治していたのが仇になったな。力や知恵、経験も俺が上だ。もしも徳による統治をしていれば、また違った道もあっただろうが、無能が力で押さえつけていただけならば、そのはるか上位に存在する者が現れれば、即座に覇者から落伍し、ただのチンピラに成り下がってしまったというだけさ」

「ですな。それでどうしやす？ やっこさんは焦っているのは明白です。奴はジリ貧ですから残された道は、焦燥にかられながら攻めてくるしかありません。わざわざこちらが攻め立てなくとも、自ら自滅しに来るでしょうな」

「本来ならそうだ。だが圧倒的な力と知恵を持つこちら側が圧倒してしまるのが一番被害が少ないと思う。それに、今回俺が柄にもなく皇帝などになって大陸を成り行きで統一したのは、無能大帝レメゲトンで迷惑をこうむっている人々を助けるためだが、他にもパウリナの救出をするや魔王大陸の謎を解明することもある。それで、パウリナの居場所は判明したんだろう？」

「ええ、旦那」

バシュータは頷いて言った。

無能なる落伍者レメゲトンは、どうやらいくつかの拠点を持っているようだ。そのうちの一つ【ノヴァリス基地】に滞在しているようだ。そして、そこでパウリナを軟禁しているようだ。

「パウリナを傷つけるつもりはないことは、最初に無傷で捕獲しようとしていたことから判明していたからな。キング・オーガ10体に追いかけて無事だったのは、そういう指示だったからだ。ゆえに、むしろレメゲトンの傍にさせることを皇帝たる俺が許可していたが、もういいだろう」

俺は微笑む。バシュータも頷いて言った。

「ええ、旦那。大陸の覇者から落伍者に零落した輩だ。何をするか分かりやせん」

「その通りだ」

俺は立ち上がってバシュータに指示を出した。その指示は賢者パー



ティーとオマケの勇者パーティーたちに伝わるのだ。

「これより3時間後！ 落伍者レメゲトンのいるノヴァリス基地を奇襲してパウリナを救出する！ 無能ゆえに何をするか分からん！ ゆえに奇襲とし、ことは迅速に達成するように伝える。」

「了解です。」

「あと、いちおう降伏勧告もしてやろう。まあ現実を受け入れられるとは思えないから、拒絶した瞬間に奇襲するということになろうがな。」

「ただただ地団太を踏んで悔しがるだけのようない感じがしやすね。」

バシュータは苦笑しつつも、深く頷いたのだった。

294・魔大陸の覇者アリアケ皇帝から落伍者レメゲトンへ降伏  
勧告を行う(後書き)

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中!

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとつございますm(´`””m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ)\*  
^-^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV:井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中!!

【応援よろしくお願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



「  
やはり、四魔将ギガテス様が余りにもあっけなく敗北したことの  
影響はあまりにも大きく……」

「あの役立たずがあああああああああああ」

奴が敗北するまでは、南部の国力の弱い地域が、寄せ集まっただけの  
自称アリアケ帝国に過ぎなかった。

「俺も鼻で嗤っていたのだ。なのにつ……！」

皇帝を僭称する不敬者を排除する。

ただ、その程度の任務だから失敗するはずがない。

そう思って送り出した南部地帯の統括者である四魔将ギガテスが手  
も足も出ず敗北したのだ

その噂は瞬く間に魔大陸全土に広がった。

同時に、アリアケが新しい魔大陸の皇帝として統治するという噂も  
同時に駆け巡ると同時に、

「この俺が魔大帝ではなく、無能な落伍者レメゲトンなどと世間で  
は吹聴される始末だ」

俺を嘲笑う国民の声が、俺の耳にさえ届くようになった。

そして、今日届いた書面は、そんな今の俺の逆鱗に触れるものだった

たのである。

『元魔大帝であるレメゲトンよ。皇帝アリアケより命令する。お前は  
その無能さゆえに統治すらまともにも出来ず国民を虐げ信頼を失い、  
彼らと皇帝たる俺によってその身分を剥奪され罷免された落伍者で  
ある。ゆえにお前は既に何ら権力を持たない武装した犯罪者だ。今  
すぐ武装を放棄し、皇帝アリアケに降伏して投降するとともに、こ  
れまでの罪を償うこと。なお従わない場合は法に従い、犯罪者レメ  
ゲトンには更なる厳罰に処することを皇帝として宣言する』

「何度思い出しても忌々しい！ この俺を落伍者だと 犯罪者だ  
とおおおおおおおおとおお」

俺は地団太を踏む。この千年、魔大陸を支配してきてこれほどの屈  
辱を味わったことはない

「そ、それでどうなさるのですか？」

部下が言う。俺は恐らく血走った眼で吐き捨てるように叫んだ。

「こんな降伏勧告に従う訳がないだろう！ 絶対に許さん！ 八つ  
裂きにしてやるぞ、アリアケ・ミハマああああああああああ  
ああああああ」

俺がそう宣言した瞬間である。

『ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

「ぬああああああああ 何事だ」

突如基地全体が大きく揺れたのである。

そして、

「た、大変でございます！」

別の兵士が慌てて駆け込んできた。そして、

「な、何者かがこの基地へ襲撃をかけております」

「な、なんだとおおおおおおおおおおおお」

俺の絶叫が再び基地の中へ轟いたのであった。

295・【Sideレメゲトン】降伏勧告だとおおおお（後書き）

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`””m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】



「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「犯罪者レメゲトンは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 296・まんまとパウリナを奪還される

296・まんまとパウリナを奪還される

「コレットに騎乗するのにも久しぶりな気がするなあ」

「時々忘れられているようじゃが、旦那様は僕の唯一の乗り手であり、竜騎士なのじゃ！そこんところよろしく」

「アピールを忘れぬのは大事よなあ」

俺たち賢者パーティーたちは、レメゲトンがいるノヴァリス基地へ空と陸からの両面から奇襲をかけていた。

空中は俺とコレット、そしてエリスやデュースの分担だ。

「ふむ、ではパウリナがいないだろう箇所をまずは破壊するとしてよ。やれ、コレット。スキル 決戦 付与」

「了解なのじゃ、我が竜騎士様！行くぞ！ラス・ヒューリ 焰よ立て」

黄金竜から放たれる一撃は、圧倒的な火力によって基地の壁の根こそぎこの世から消滅させる。

「によわはははは！地上から進行する仲間たちを阻むものはこれでなくなるのじゃ！」

「エリス様。エンデンス大陸の戦士というのは全員がこんなハチャ

メチャなのですか？ 魔大陸の方が強いとずっと言われてきていたはずですが……」

「デューズ、この者たちは例外中の例外です。とりあえずデータ上は外れ値にしておきなさい。我々がバグります」

「な、なるほど」

そんな会話を隣を飛行する二人のオートマトンがしているが、俺は逆に警戒するよう声をかけた。

「いや、よく見て見る。あの基地。どこか変だ」

「「「え？」「」」

俺の言葉に三人が基地へ注意を向けた瞬間、それは起こった。

「緊急下降だ、コレット」

「ぬお 了解なのじゃー」

その瞬間、基地へ甚大な被害を与えたコレットに向かって、基地から有機的な帯状の物体が攻撃を仕掛けて来た。音速を超えるそれをコレットはかわす。

だが、

「一撃ではなさそうだな」

「100は来ていますね。迎撃します」

「さきほど躲したのも、反転して向かってきているぞ！」

「全部なぎはらうのじゃ！　しかし、これは一体なんなのじゃ  
どうしてただの基地が、こんな見たこともない迎撃システムを搭載  
しておるのじゃ　旦那は知っておるのじゃ」

コレットの言葉に、俺は肩をすくめる。

「さあな。まあ、思い当たる節くらいはあるが」

「ほう、それは何ですか、我がパートナー、アリアケ皇帝？」

彼女はオートマタにも関わらず、初めて感情を浮かべたような意味  
深な瞳をしている。

俺はだが、特に構うことなく続けた。

「あの基地からの攻撃の物体は、お前たちオートマタ種族の構成素  
材と同質のものだ」

その言葉に、エリスは相変わらずだが、表情豊かなデュースマでも  
が表情をスツと消したのである。”

### 【Sideパウリナ】

「くう！　胸が苦しい！　どうやら私はここまでのようね。願わく  
ば、収穫したてのお芋でじゃがバターを作りたいかった……。それで、

アリアケ様に食べてもらって、その後は、ぐへへ」

突然基地が揺れた。その瞬間、胸の火傷のあとが赤く光り出したのだ。痛くはないものの、何かが自分の体内を駆け巡っているような違和感で、呼吸が乱れる。

「パウリナ！　ここから出よ！　敵からの奇襲だ！　お前を飛空艇へ連れて行く」

「レメゲトン！　い、今の独り言聞いてましたか　聞かれてたら、し、死ぬしか……」

「ええい、貴様のくだらん妄想などどうでも良いわ！　それに、抵抗しても無駄だ！　お前にはまだ役に立ってもらうことがあるのだから　いいから来い」

「ひいひいひいひい！　いんですか、いいんですか　高い所に連れて行ったら高所恐怖症だから、心臓が止まる恐れがありますよ　ふ、ふへへへへ」

「ふざけた女だ、いいから来い！　もはや時間がない　本当は秘密を聞き出してから計画を実行する手はずだったが、急がねばならぬ、あの僭帝アリアケが迫ってきているからな」

「す、すごい、まるでお姫様みたい！　これは私の人生で一番輝いている瞬間かも！　へ、へへ」

「ああ、もう。話してるだけ時間の……」

無駄と言いたかったのだらうレメゲトンが、私の腕を力づくで引っ

張ろつとしたその時だ。

軟禁されている部屋の壁から、帯状の物体が突如生えたと、レメゲトン突き刺すように伸びたのである。

「ぐげ　く、くそ！　この馬鹿システムが。俺とこいつは同等だと言つのに、あくまで攻撃されたら自動防御するだけのシステムになっているのか！　出来損ないの防衛システムめがあ」

「????????????」

レメゲトンは憎々し気に悪態をつく。

その帯状の攻撃は一瞬の隙を作るのに十分だった。

自分にこれほどの行動力があつたとは信じられない。

いや、逆か！

「私って今、めちやくちゃテンパってるだけですなー！」

「なにい」

レメゲトンが焦りから目を見開いているのがちらりと見えたが、すぐに視界から聞けた。

「アーイ、キヤーン、フライー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!」

5階建ての基地の窓から私は思いっきり飛び降りたからである。



「はわわわわ」

腰を抜かした。

そして、そのドラゴンにまたがっているのは、将来婚活しようと思っ  
ている相手であるアリアケ様！

「ほええええ　ど、どうしてそんなところにいるのですか。なる  
ほど夢か」

現実逃避を完了してから、地上を見下ろす。

そこには、見知らぬ方々も大勢いるものの、ラツカライさんやブリ  
ギッテさんたちもいた。

「でも、私を助けに来てくれる訳はないから、どういことだろう  
……」

まず一番少ない可能性を排除してから思考を開始する。

『カツ！！！！！！！！！』

胸の光は更に強さを増す。まるでこの基地の躍動に呼応しているか  
のようだ。

そして、その強い赤い光は、アリアケ様たちにも届いたらしい。

「パウリナ、そこにいたか。自分で逃げ出して屋上で待っているか  
はさすがだな。俺たちを信じて待っていてくれたというわけか」



スキルの一つだろうか？

彼の声は私に届いた。

「は、はい。え、ええ。そんなところですよ。へ、へへへ」

嘘も方便です。

「逃がさんぞ、パウリナ！」

ダン

大きな音を立てて扉が開かれる。

レメゲトンは大勢の部下を連れて追ってきたのだ。

「イシス・イミセリノス・アーク女神の  
方舟のの鍵アクセス・キーであるお前を逃すわけにはいかん」

「」

私は息をのむ。

レメゲトンの言葉に。

なぜなら。

「す、すみません。なんて言ったか、もう一度お願いできますか？  
すごく大事なワードを言ってくれたのに、難しすぎて聞き漏らし

「ちゃって、へへへ……」

「うるさい！ お前といると調子が狂う！ それでも女神より役割を与えられた一族の末裔か！」

「女神？ 末裔？」

私は首をかしげる。

「そんなことすらもお前たちは忘れたか！ もういい！ 俺は千年間、その役割のために備えて来た！ お前は俺の言うことを聞いていればっ……」

と、そうレメゲトンが叫んでいた時である。

「巧妙な時間稼ぎだったな、パウリナ」

私の頭をわしづかみにするドラゴンの足が頭上にはあった。

と、同時に、私のアリアケ様の声が優しく頭に上から振ってくる。

「首がもげます〜！ 人質救出は丁寧にするのが習わしですよ〜」

「そうだな。 防御力アップ。よし」

「よし、じゃありませんよ！ お慈悲を！ お慈悲を！」

「くそ！ しまった！ まんまと時間を稼がれてしまったか！ 許さんぞ、アリアケ・ミハマ！ そしてパウリナあああああああ

」

屋上のレメゲトンが悔しに咽びながら絶叫していた。

帯状の攻撃は既に停止していた。

胸の赤い光も停止する。

「女神のイシス・方舟のイミセリノス・アークか。なるほどな」

そんな混乱のさなかだというのに、アリアケ様は落ち付いた様子で、何かを呟いているのだった。

296・まんまとパウリナを奪還される(後書き)

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとつじぞいますm(´`””m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ)\*  
(^-^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV:井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中!!!

【応援よろしくお願いします!】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「パウリナたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 297 秘密の開示〜イシス・イミセリノス・アーク〜

297 秘密の開示〜イシス・イミセリノス・アーク〜

「ふへへ、死んだ。死んだ。生きてる可能性を信じるなんて馬鹿のすることなんだ。ふへへ」

「ちよつとアリアケさん、さすがに『頭を鷲掴みboy神竜』はやりすぎですよ！」

「うーん、今から思えばそうだな。だが、なんとなパウリナならOKのような気がしてな。なあ、コレット」

「うむ！ 不思議なのじゃ。僕は粗忍者であることは否定せんが、あんな仕打ちをするタイプではないのじゃが……」

救出にはまんまと成功したものの、思ったよりも乱暴な救出劇になったことが自分たちでも不思議だった。そんなわけで、アリアケ帝国の会議室ではちよつとした反省会が繰り広げられていたのだった。

会議室には関係者一同が勢ぞろいしている。

「これは新しいタイプの女性かもしれませんね。今のうちに排除しましょう。大丈夫です、権力を使いますから」

「この娘、<sup>コレット</sup>母親に似て来たのう」

「はわわ 知らぬ間に 私はおっとり天然少女だったはず

いつからこんなことに」

「勇者パーティーで一皮むけたんだろっさ」

俺はそう言っつてフツと微笑む。

「経緯は知らんが、むしろやさぐれたのでは？」

「よくぞ言ってくれました、デューズさん！ ツツコミ不在の恐怖を感じていたので、頼もしい見方が増えて聖女さん感激です！」

「そ、そうですか、マダム（あなたも相当なものですとは言えない……）」

「それより、これからどうするのですか、我がパートナー、アリアケ皇帝。ついでにミルノー女王よ。今後の方針について決定する必要があると進言します」

デューズは呆れた声を出し、エリスが話題を変えた。

「そもそもどうして、あのレメゲトンはパウリナさんをさらったりしたのでしょう？」

「確かにそうですね。なかなか居場所を突き止められませんでしたから、相当注意を払って居場所を秘匿していたようでした。何か特別な意味があるのでしょうか思えませんよ、先生！」

「じゃな。旦那様の 念話 スキルで聞いたところによれば、あのレメゲトンはパウリナのことをなんかめっちゃ長い名前で呼んでおったのじゃ。じゃが、忘れた！ すまんな！」

「お、覚えてます！ 覚えてます！ 極刑にならないように重要な単語を必死で思い出してたんです」

「その設定いつまで引きずってるんだ……。まあいい。俺も覚えてはいるが、説明してくれ」

「はい！ 極刑されないなら、何でも話しますとも」

「俺ってそんなに極悪非道な人格に見えるか？」

「何だか自信がなくなってきたぞ？」

「つたりめーだボケ！ てめえは人の気持ちを理解できてゴミカス野郎だ！ いっぺん死んで来いオラア」

「おっと、出来ない弟子の反抗期か。ふふ、ヨチヨチ歩きだったピアも人間だったわけだ。人とは成長するものだ」

「あんた、そういうところよ……」

「一度筋肉で思い知らせてやりたいものだ……」

「何億回でも私の炎で泣かせてやりてえ……」

勇者パーティーたちが何か言っているようだが、今はパウリナの言葉を聞くのが先だ。賢者は優先順位を間違えたりはしない。

「で、どうなんだ、パウリナ」



「へ、へい、皇帝陛下。レメゲトンは私のことをイシス・イミセリ女神のノス・アークの鍵と言いました！ あと、私の事を『女神より役割を与えられた一族の末裔』とか言っていました！ 同等の存在だともつて、え クラゲが末裔で同等！ ええ どういうことなんでしょうか レメゲトンはクラゲと同等の存在なんですか 混乱してきました！ とりま芋をふかして食べていいですか」

「まあ、自分の言葉でいきなりテンパリ始めるのはよせ。窓から五体投地で飛び出した時も度肝を抜かれているのでほどほどにな」

「へ、へへへ、了解です」

「うおおおい！ こいつのこの卑屈な態度どうにかなんねーのかよ！ ぶん殴りたくなるんだが」

「そつだよ！ そんなに卑屈になって、色々考えてたら頭が痛くなるでしょ！ リラックスして何も考えないのが一番だよ！ 私みたいにね！」

「ミルノー！ てめえは女王なんだからちつとは考えねえか」

「いやあ、魔大陸に来て良かったじゃん。ツッコミに回る勇者とか珍しすぎてくつそ笑える！」

「話は進まんがな。筋肉も退屈しているぞ？」

「はあ。じゃあ、とりあえず、ダーリンのことは置いていて。方舟って言うと船よねえ。イシスって言ったら、あの星神ね。で、その星神イシスが鍵の役割を与えている一族の末裔ってわけね。うん、意味不明」

デリアが総括してくれたので、発言を引き継ぐことにする。

「そういうことだな。舟ということなのだから、乗員がいるはずだ。それは誰か、というのがまず第一の疑問。そして、舟は海を渡る乗り物だ。どこからどこへ、誰を運ぶ？ 仮に舟を起動させる鍵がパウリナだとして、ではその舟はどこにあるのか。そしてレメゲトンが同等と言ったのならば、もしかすると、奴も舟の鍵なのかもしれない。だとすればなぜ、2つ鍵があるのか、だな」

「素晴らしい推理力だとは思いますが、結局分からないことが多い気がしますねえ」

ブリギッテが首をかしげるが、俺は微笑みながら首を横に振る。

「そうでもないさ。もう一つ忘れていることがある。ラツカライ、ブリギッテ、そしてエリスにパウリナ。お前たちは俺とその経験をしている」

その言葉に、三人は声を揃って言った。

「「「時空転移」」」

そう。

「あの時。女神イシスは魔大陸出身のエリスとパウリナだけは認識できなかった。そして、更に言えば、魔大陸の存在を女神イシスはずっと隠し続けていた。霧のカーテンと呼ぶ存在がそれだ。魔力が一定以上の存在は通れない。それはまるで、魔大陸を『標本』として保管しようとしていたからのように見える」

「なるほど、標本ですか、アー君。だとすれば、舟の目的も何となく見えてきます」

アリシアはさすがに勘が鋭い。

「はあ〜　なにわけわかんねえこと言ってんだ！　どうでもいいからレメゲトンをぶっ飛ばしてエンデンス大陸に帰ってチャホヤされようぜ」

ビビアは相変わらず馬鹿だが、そこが味だなと思う。

「あるいは」

彼のことは無視して話を続けた。

「女神イシスは魔大陸の存在を知らないのかもしれないな」

「そんなわけねーだろうが！　自分の星のことを知らない訳ねー」

「この雑魚勇者どもうるさいのだ！　もう一度魔王対勇者パーティをしてきたくなったのだ！」

「ひ、ひいいいいいい　す、すいません」

ふむ、と俺はそんな彼らの様子を横目にしながら頷く。

勇者ビビアの指摘はまったく正しかった。

そして、だからこそ誤りだな、と俺はその時直感的に感じたのである。



297 秘密の開示〜イシス・イミセリノス・アーク〜（後書き）

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm（ー”m）

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

298・アリアケ皇帝は一瞬にして飛空艇を創造する！

298・アリアケ皇帝は一瞬にして飛空艇を創造する！

「さて、それで現状のレメゲトンだがどんな感じだ？」

状況を整理し終わったものと見て、俺が次の話題に移る。

情報担当のバシユータとセラが答えた。

「飛空艇という特殊な空を飛ぶ船に乗り飛び去りました。どこに行つたかまでは確認できていやせん」

「ほとんどの戦力を集結させて発進したようです」

「なるほど、恐らくアーティファクトなのだろうな。今の技術ではすぐに再現は不可能そうだ。とすれば、俺たちも別の手段で空を泳ぐ必要があるそうだな」

「でもアリアケ様、私たちには飛空艇はありませんよ？ コレット様も大人数を乗せるのは反対では？」

「そうじゃなあ。ビビアとかが乗られるくらいなら、ドラゴンの権能を破棄するのじゃ！」

「んだとこのドラゴン娘め！」

「ほう、儂のブレスがご所望か？」

「おほほほ！　ダーリンだったら大事な時期なんだから、ちょっとは控えなさいよ」

「あいたー！」

ガルルルと犬歯をむき出しにして威嚇するビビアをデアリアが小突く。

一方の俺はあっさりと代案を提案する。

「別に飛空艇でなくてもいいだろう。アリシア、お前たちが乗って来た大型船があるんじゃないのか？」

その言葉にアリシアはすぐにピンと来たようだ。手を打って頷いた。

「ありますとも。しかも、軍船ですから大砲とかも備わってますよ」

ふむ、ならばだ。

「移動しよう。【フリーウム王国】の南の港湾に軍船をつけてくれ」

「どうするつもりでしょう、我がパートナー。私の背中に乗って戦うというグッドアイデアを提案しようと思っていたのに」

心無しか残念そうなエリスの声が響くが、それでは俺しか戦えない。

エリスの問いに俺は答えた。

「なに、海を割って自由に疾駆したように、今度は重力を無視して





「さすが気が利くわね、ローレライ。ね、ねえ。ちょっとだけでも勇者パーティーに戻ってこない？」

「おっと、風が強くて聞こえませんでした。ではでは失礼をば！」

「絶対聞こえてるでしょうが！」

賢者パーティー、勇者パーティーの面々が口々に、即席の飛空艇の感想を呟いたり叫んだりしていた。

「さすが旦那様なのじゃ！これで追跡もばっちりなのじゃ！つてか、こんなこと出来るのは旦那様だけなのじゃ」

「スキルをうまく使えば誰にだって出来るさ」

「できませんよー？ そのあたりの認識不足がまだまだですねー、アー君はー」

「むむむ？」

笑顔で否定されてしまう俺であった。

「ところでアリアケっち。この飛空艇の名称はどうするのだ？ やはりこういうのには名前がいると思うのだ！」

「確かに士気を上げるためにも名前は大事だな。そうだなあ【鮮血の太陽ク  
リムゾンサン】というのはどうかな？」

かっこつけすぎか？

そう思って別の名称にしようかと思ったが、

「か、かつこいいです、さすが陛下！ はっ、しまった！ 勝手に発言してしまった！ これはあれですかね、ここから飛び降りないとだめですかね」

「お前が鮮血を降らせてどうする」

俺はパウリナへ苦笑しながら言う。

「あていしも良いと思うのだ！ 特にあていしの特技たる血が仄めかされている感じ、魔王的にはテンションぶち上げなのだ。それにしても楽々と船を浮かせたり、あていしのアリアケ皇帝はさすがなのだー」

どうやら魔王リスキス的にも満足らしい。ご機嫌そうなので、これで行くか。

それはそれとして。

「行先は分かるか、エリス、デューズ？」

俺の言葉に二人は頷いた。

「パウリナから放出された赤い魔力は特殊なものようです。レメゲトンはどうやらそれを採取したようで、その残滓をたどることでおよその方角は探知可能です。しかし、急がなければその魔力残滓も消失していたでしょう」

「ふん、アリアケ皇帝の迅速というか、規格外の力があってこそその追跡劇ということだな。べ、別に褒めてないからな」

「ははは、分かっているさ」

俺は笑うが、なぜかデューズは不服そうであつた。なぜだ？

「やれやれ。で、アー君。今回奴らを追いかける理由を改めて確認させてもらってもいいですか？」

「そうだな」

俺は乗員たちを前にして、今回の作戦について語る。

「レメゲトンが行動を開始したのは霧のカーテンが消失したタイミングと一致している。同時に、自分と同じ鍵であるパウリナをさらい、奴なりに必要な情報や条件がそろつたのだろう。ゆえに、全軍でどこかへ移動を開始した。そこが今回の決戦の地であり、そしてこの魔大陸にまつわる謎を解き明かす答えが眠る場所だろう」

俺は淡々と事実を語る。

「まさかこんな軍船を浮かべて追いかけてくるとは思っていないのじゃ！ 追いつかれたらビビッてシヨンベンちびるんじゃないかと思うのじゃ！ ビビアが神代でやったみたいに！」

「な、なぜそれを知っていやがるっ」

確かプララが言いふらしていた気がするが黙っておこう。

「ふ、そうだな。少なくとも犯罪者レメゲトンにそうした役割を任せるのは利口なやり方ではない。奴の居場所は本来牢屋だからな。俺や俺の帝国の重鎮らが赴き、犯罪者レメゲトンを逮捕したのちに、かの地でしかるべき判断を下すのがこの魔大陸、ひいては世界や星にとって良いことだろう」

俺の言葉に皆が頷く。

「行くぞ、みんな。決戦の地へ」

俺の言葉に、全員の士気がこれ以上ないほど高まるのであった。

298・アリアケ皇帝は一瞬にして飛空艇を創造する！（後書き）

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`””m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

## 299・空中戦！

299・空中戦！

空には大きな雲が漂っており、その雲の上を飛空艇クリムゾンサンは疾駆する。

相当の速さで飛翔しているが、先行したレメゲトンたちの船にはまだ追いついてはいない。

「はんっ！ 発進してからもう3日もたつてのによお！ ま、へボアリアケの浮かしたノロマな船じゃあ、追いつくにも時間がかかるってもんだあ」

「たびたび吹っ飛ばされそうになっておるのに、よくそんな大言壮語がはけるものよなあ。そのあたりだけは神代から変わっておらん のう、お前は」

「はっ！ 俺は本当のことを言ったまでウワアアアアア」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

大きな衝撃音と共にクリムゾンサンが大きく揺さぶられ、勇者ビビアは見事に吹っ飛ばされて行った。

「惜しい輩をなくしたの。だが前を向いて生きていくのが我ら生ある者の務めであるぞえ」



「こらこら、勝手に殺してやるな。今のもアリシアの大結界が攻撃を防いだだけだ。むしろ、先手を取らせて出方を見ると言う意味で戦略通りだろうに」

「であつたかの」

とぼけるフェンリルに苦笑しながら、俺はアリシアや他のメンバーに呼びかける。ちなみに、ビビアは大結界にひっかかって助かっている。

「蜘蛛に捕らわれた獲物のようにもがいててうける！ ぎやはははは！ ま、どーでもいっか。アリアケ！ 二時の方向に船影！ 雲の中に隠れての魔法攻撃だね、うざい」

プララが嘲笑しながら、一方で正確な報告を上げるといふ器用な真似をする。

「先生、発見しました！ 敵影多数！」

「こちらも敵影を確認。そのうちの一体は四魔将が一体、個体名ウロボロスです。他多数のドラゴンを従えて接近してきます！」

ウロボロスは遠くからでも分かるほど長大な蛇そのもので、泳ぐように空を飛んでいる。いちおう羽はあるが強力な魔力によって飛翔しているのだろう。

「よし、いい作戦を考えた！ このミルノー女王ちゃんが水をぶっかけて目が痛いようく、ってなって落下させるんだよ！ 待ってね作戦名を考えるから」

「おえー！　ただでさえ酔ってるのに、死亡フラグがピンピンに立ってる！　オエエエエエエエ　だ、大丈夫ですよ、ちゃんと船外に吐いてますから。心配しないでください……」

「パウリナちゃんナイス！　そのXXXXXで相手の目つぶしを狙う作戦だね！　よし、私と共同戦線だー」

「お前らには女子力という概念はないのか……？　オートマタの私でもドン引きなのだが？　アリアケ様に気持ち悪がられたどうする……ぶつぶつ……」

エリスが引いていた。

「とはいえ、ミルノー女王の戦略自体はそれほど悪くない。パウリナのXXXXX作戦はどうかと思うがな」

「い、いいいいい、言ってますせん！　私は言ってますせんよおおお　女王様が勝手に言っただけですから、おえー！」

ふむ、忙しそうなおパウリナは放っておいて、作戦を説明する。

「ミルノー女王が言った通り、相手の目を奪う作戦を行う！　高高度の空中戦だ、油断しないようにな」

「あほう！　んな作戦で勝てるわけねえだろうが！　俺の剣技で相手を圧倒するのが一番ってもんだ」

「ほう、良い、心がけです。では一番槍は譲りましょう」

「はへ？」

「ふ、さすが勇者パーティーと言ったところか。浮遊 スキル発動。存分に戦ってこい！ ただ、俺は船も操作している。下手したら死ぬからそのつもりでな」

「私は言っていないわよ」

「俺の筋肉は陸地でこそ輝くのに」

「あたしは魔力による後方からちくちく弄るのが趣味で」

「では射出」

「「「「うぎゃあああああああああ」」」」

エリスがブースターを創出して加速し、勇者パーティーごと出陣していった。

敵中央にいきなり躍り出て集中攻撃を受けることも厭わない。

一方で、そんな行動を想定していなかった敵陣の一角は大混乱が発生していた。

「ふ、さすが勇者パーティーだ」

「僕には死にかけているように見えなくもないんですがね……」

「重篤な幼馴染バイアスがかかっているのじゃ。言っても無駄なのじゃ〜」

ラツカライとコレットがヒソヒソと何か言っていた。

「まあ、良いのじゃ。儂も戦うのじゃ！ ラツカライとアリシアとブリギッテは旦那様のこと宜しくなのじゃ。フェンリル、リスキス、一緒にやるのじゃ〜！」

「そうであるなあ。なかなか嘸み応えのありそうな蛇よ。おっと、作戦は目くらましであったか」

「倒さんでも良いのじゃ？」

コレットが首を傾げると、リスキスが答えた。

「アリアケっちの指示は、そういうんじゃないのだ！ が、まあ倒してしまっても良いのだ。自由にしたらよいと思うのだ。なぜなら、コレットっちの勘は、神の末裔ゆえ天啓に近いからなのだ」

「分らんが、分かったのじゃ！」

「ほらほら、そなたら行くぞえ。勇者どもがもう死にかけておるか  
らの」

彼女らもそう言いながら出陣する。

「私は回復をしていくとして、セラさんはバシュータさんと組むと  
良さそうですね」

「ですな。ちょうど目つぶし草を粉末にしたものが大量にあります  
ぜ」

「それはいいですね。風に舞わせるにはうってつけです」

「ふん、では私は護衛役をするか」

「エリス女王の護衛じゃなくていいんですか？」

もっともな疑問をセラがデューズに聞くが、

「あんな自由なのを護衛してたら、バグってしまう。勘弁してもらおう」

「は、はあ、そうですか。何だかお察しいたします……」

そんな会話をしながら彼女らも出陣する。

「私たちは良いんですか、アー君？ 大結界を張りながら、戦うことも出来ますよ？ 拳で」

「大胆な拳は乙女の特権ですからね！ ちなみに私も殴り愛しながら結界を張るの結構得意なんですよ」

大聖女と現人神はいうことが違うなあ。

「僕は何があっても先生の背中を守りますね！」

「おおー。なるほど、お姉さんは学びました。こういう奥ゆかしさも大事なんですね。殴り愛だけが愛ではないんですね」

「学びが深まって良かったです。ま、それはそれとして」

俺は開始されたこの星で初めての、飛空艇同士での空中戦を観察しながら言った。

「空中戦の肝は個人ではありませんから。あくまで船と船の戦い。つまり」

俺は微笑みながら言った。

「最大の戦力はある程度、船に残しておかなければならない」

それなのに相手は空中戦が可能な最大戦力たる四魔将を既に船から放出してしまっている。

「その意味をレメゲトンはほどなく思い知るだろうさ」

俺の言葉はまるで予言のように、船内に響くのだった。

## 299・空中戦！（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



### 300・空中戦の意外な結末

300・空中戦の意外な結末

【Sideレメゲトン】

「フハハハハハ！　しょせんは僭称皇帝アリアケよ！　全く大したことないではないかあ」

飛空艇のブリッジで俺は奴を嗤い哄笑を上げていた。

「見る！　奴らは空中戦に不慣れだ！　四魔将ヨルムンガンドに手も足も出ないからと、目つぶしで落下させようとしている」

ブリッジにいた部下たちもつられて嗤う。

そんなことで空中から落下する四魔将ではないし、率いるドラゴンたちも同様だ。

「見る、加速しだしたぞ。はははは、雲の中に突っ込んだ。躲す余裕もないのだろう。よし掃討戦だ！　追いかけるながら空中戦を継続せよ！」

「はは！」

戦いの趨勢はもはや明らかである。

「進退窮まり気が動転したようだな、アリアケよ。四魔将の一人ギ



「くそおおおお　いいから報告しろと言っているのだ」

俺は受け取ったハンカチで顔を乱暴に拭きながら状況報告を求め  
る。

一体何が起こったというのだ

だが、部下から発せられた言葉は俺の耳を疑わせる内容であった。

「飛空艇のヒュー主胴体部スレージに大穴！　損耗率50%！　機体維持で  
きません！」

「なんだとお　どういうことだ　敵共は全員四魔将とその部下  
たちと戦闘中ではないか！　こちらがやられる道理がどこにあるの  
だ　一体誰がこちらの防衛線を突破して、しかもこの巨大な飛空  
艇に大穴を空けることが出来る」

俺が狼狽して絶叫するが、部下からは事実のみが告げられ、更に血  
の気が引いた。

「相手の飛空艇の体当たりです」

「た、体当たりい」

俺はブリッジから全方位を確認する。

空には積乱雲をはじめ分厚い雲が何百と存在した。俺たちはその雲  
に隠れて相手に奇襲を仕掛けることに成功したのだ。

だが、いつの間にかその立ち位置は逆転していた。

相手の飛空艇の進行にあわせ、有利であるこちらは追跡をしているつもりであった。

しかし、そうではなかった。

相手の船はこちらの半分以下で小回りが利く。その上、どうやらアリアケによるスキルで浮遊させているため、更に空中での自由度が高いのだ。

ゆえに、雲に隠れた瞬間に我が艦の死角へと回り込み、突撃を敢行したのである！

「追いかけていたつもりが、陥穽に落とされたというのか、この俺様がぁ　空中戦そのものが目くらまし！　いや、目をくらませる相手は四魔将でもドラゴンでもなく、この俺だったということか！」

俺はブリッジの指揮台を血が出る程ギリギリと握りしめ、歯噛みしたのであった。

同時に、相手の行った『目つぶし』作戦の規模の大きさが、俺の想定をはるかに超えていたことも、俺に地団太を踏ませる原因の一つである。

「絶対に許さんぞ、アリアケ・ミハマアアアアアア」

「レ、レメゲトン様、お逃げ下さい！　時間がありません！」

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

爆発して轟音を発しながら落下する飛空艇とともに、俺の絶叫もまた艦内へ轟いたのである。

【Sideアリアケ】

「よし、うまくいったな」

「相変わらず無茶苦茶ですねえ、アー君は」

「さすが先生です。思いもつかない艦隊運用だと言わざるを得ませんね」

「こんなことが出来る人は今後いないから史上初であり、史上最後ですね」

「僕はこんな作戦ならいつでも大歓迎なのじゃ！ 殴ってスッキリなのじゃ！」

俺たちが貫通させたレメゲトンの船は、こちらの何倍もあった。装甲も相当の分厚さで普通の方法では墮とすことはなかなか難しいのは明らかであった。

「だからこそ、俺のスキルで、お前たちの攻撃力を何倍にも増幅させた上で、ラツカライのブリューナクをちょっとだけ強い力で押しもらったというだけさ」

「だけって……。いえいえ、誰もそんな発想できませんからー！」

「そうですねえ。アリアケさんの無茶っぷりを客観視することをお姉さんはおすすめますよ」

呆れたような声で二人が言う。

「ブリユーナクの悲鳴が聞こえた気がしましたよ」

「無理ないのじゃ！ ゲシュペント・ドラゴンとブリギッテとアリアによる 三步破軍 なんて、惑星破壊レベルだからの！ じゃが、超気持ちよかったのじゃ、かかか！」

「 三步破軍 スキルは三步のうちに敵を屠るほどの攻撃力を与えるスキルだが、今回は敵の装甲を貫く推進力を獲得するための爆発力として利用しただけだぞ？」

「そんな発想誰もしませんってば！」

「本当ですよ、さすが先生です。あ、そう言えば、ちなみにコレットお姉様、四魔将ヨルムンガンドはどうなったんですか？」

「ん？ おお、あれか、あれか」

コレットは朗らかに笑って言った。

「半殺しにして飽きたから、魔王リスキスに譲ってやったわい。退屈そうだったからな、によわはははは！」

「コレットちゃんも大概規格外ですよねえ」

「お姉さんとしては半殺しは可愛くないと思います。ここは一つ」

めってした』と言っておくと、可愛さがアップしてアリアケさんへのアピールにもなるかと思うのですがどうですか？」

「えーっと、誤魔化せるレベルを超えた破壊力だと思いますが……」  
彼女らのそんな会話をしている間にも、レメゲトンごと敵飛空艇は落下していく。

指揮官であるレメゲトンを失った四魔将もほどなくリスキスに討伐されるだろう。

だが、下方を見ると山脈の頂きに、複雑な形をした遺跡のようなものが見える。

レメゲトンたちの船はなんとかそこに不時着しようとしているようだ。

「悪運だけは強いようだな」

あれが目的地らしい。

「後片付けを終えたら後を早急に追うとしよう。どうやらあれが今回の事件の舞台。いや」

俺は微笑みながら言った。

「この星の舞台裏なのだろう」

### 300・空中戦の意外な結末（後書き）

#### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】



「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



にしても、いつ、誰が、何のための使うための施設なのかのう？」

「でもそもそもおかしいですよ、お姉様。都市は生活をするために、使うのはヒト……ですよ。でも、それをこんな辺鄙な場所に隠蔽しておいたら、いつになっても使う機会は来ないはずですよ」

「そうだな、と俺は頷く。」

「存在自体が矛盾した都市。使われない都。あるいは、そうだな」

俺は点と点がつながる感覚に思わず頷く。

「使われないことも想定されていた都市と言うべきかもしれないな」

「む、難しい会話をしている。わ、私場違いじゃありませんか？  
降りた方がいいですか」

「こらこら。パウリナちゃんは明らかに関係者、というか多分、今回の鍵ですから。大人しく運命をアリアケ君に明け渡しちやいなさーい」

「う、運命を　う、うへへ。そ、それって養ってもらえるみたい  
でいいすね……」

「こいつ図太いのか、か弱いのかよう分からないのだ！　人間とは  
不可思議なのだ！」

「魔王様に突っ込まれるとは逸材ですね」

「セラ様も結構なエルフ族の異端児《逸材》だったと記憶しています

が……。まあ、それはともかく、ブリギッテ様のおっしゃる通りのようですね」

ローレイの言う通りだった。

その広大な湖の下に隠された都市は、レメゲトンを不時着させると一度、また水の膜を張ろうとする。

だが、俺たちの飛空艇が近づくと、同様に湖の水が取り払われ、下に隠された都市を露出させたのである。

それと同時に、パウリナの胸元の紋様も赤い光を放っていた。

「こ、これは……。本当に火傷の痕じゃなかった説ありますね！」

「それはあまりに今更過ぎるなあ」

俺は大いに肩をすくめたのである。

俺の船が着陸した時には、既にレメゲトンたちは船を去った後であった。

ボロボロになり、爆発の可能性もある飛空艇から必要な資材だけを早急に運び去ったのだろう。

「逃げ足が早いな。ビビア並みだ」

「んだとゴラア」

「褒めているんだがなあ」

「逃げ足が早いことは悪い事ではないですからね。さて、アー君」

「なんだ？」

アリシアが言う。

「そろそろアー君には今回の事件の青写真が見えているはずですよ！ 情報共有よろしくです」

「うーん、そうだな、不確定要素があるし、割とぶつとんだ話だったから、あまり曖昧な話はしないようにして来たんだが、パウリナ の能力についても一部確認できたわけだし、そろそろいいか」

「さすが儂の旦那様なのじゃ！ 儂なんてなーんにも分からんのだよ！ そもそも、この魔大陸の存在が何かよう分からんと思ってるくらいなのじゃ！ にやははは！」

「あていしもなのだ！ さすが大賢者ありあけつちなのだ！ あと、あていしなんて、まだオートマトン種族というのに違和感があるのだ。なんか根本的に成り立ちが違う感じがしてしまうのだ。あ、これは別に悪い意味ではないのだ 気を悪くするのではないのだ、はわわわわ！」

「よく言われますので大丈夫です。心優しい魔王様」

「や、優しくないのだ！ 勘違いするな！ なのだ！」

やれやれ。俺は微笑んでから、

「そうだな、まずは分かりやすい部分から説明するか」

そう言っつて解説を始めようと思った時である。

「お帰りなさいませ、お待ちしておりました、ご主人様」

そう言っつて、複数の女性たちが、どこからともなく現れたのである。その誰もがシヨートヘアの黒髪で、エプロンドレス姿をして特徴がない。

「ようこそ魔大陸の中枢へいらっしやいました。パウリナ・アルス・サロモニス様。また星の女神イシス様と同等なる権限をお持ちのリアケ・ミハマ様」

彼女らの先頭の一人がそう言っつと、カーデシー屈膝礼をする。

そして、次に、

「最外殻仕様オートマタ・エリス様、デユース様、お疲れ様でした。千年に渡る情報収集に敬意を表します。後日、同期の時間を頂きたく思います」

そう彼女らに言っつたのだつた。

「君たちは……オートマタ種族の基本素体ということだな」

俺の言葉にその少女らは頷いた。

「その通りです、アリアケ様。さすが星の脅威《癌》を取り除いた救星の英雄でございます。私が基本素体たちを代表してコミュニケーションを取らせていただきますので、呼びやすいよう仮にサイスとでもお呼びください」

そう言っただけで彼女は軽く微笑んだのである。

俺も微笑んで言う。

「やはりここが魔大陸の心臓部『コア』なんだな」

その言葉にサイスはやはり微笑みで答えたのである。

### 301・魔大陸の中枢（後書き）

#### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】



「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 302・魔大陸の正体（前編）

#### 302・魔大陸の正体（前編）

「ど、どどどどっどど！ ど、どどどどっどどー！」

「まあ落ち着いてダーリン。翻訳すると、どういうことだ、説明しろコラ、ですわ」

「なるほど。ごもつともです。とはいえ、千年間掃除とメンテナンスで航行機能を維持してばかりでしたので、少しテンションがぶち上がってしまいました。お恥ずかしい限りです。反省を致しました」

「見た目と反して、こやつ恐らく、割とやんちゃな性格をしておるのじゃー！」

「エリス女王の基本素体だからな」

「どういう意味でしょうか？ 理解しかねます。そしてついでに言うなら、私の素体ということについても疑問を覚えます。私やエリスと同期とも言っていたようですが？」

「そつだ！ 私は私だ！ ベースになる存在なんか身に覚えがないぞ！ 私は最初から私だった」

エリスたちが疑問を呈するが、逆にアリシアやリスキスはその言葉の方に違和感を覚える。

「あ、でも、それはそれで変じゃないですか？ 普通の生き物には親がいますが、オートマタ種族はそうじゃないですよね？ じゃあ、そもそも、どこからあなたたちは来たんでしょうか？ 今までは分裂でもしてるのかと思ってましたけど、違うんですよね？」

「確かにそうなのだ。まるで最初からこの魔大陸にいたみたいなのりなのだ」

「お二人とも正解です！ パンパカパーン」

「やったのだ！ 正解したのだ」

「このメイド緊張感というものを知らんのかえ？ 反省はどうした、反省は」

「失礼致しました。猛省しましたので、もう大丈夫です」

「オートマタ種族というのはあれですか、意外性を求めてやまないタイプなんですか？」

ローレライの言葉に、サイスは咳払いしてから再び話し始める。

「魔大陸と同時に私たちオートマタは生み出されました。なぜなら、その目的が魔大陸の維持管理。そして、いざ運用した時のスタッフだったからです」

「ふんぎが！ ふんぎが！」

「ああ、もうっっさいこのクス勇者！ はい、デリア！ 翻訳」

「意味分かんねえことばっかり言ってんじゃねえぞ、ゴラ。魔大陸の運用とか意味不明すぎんだが舐めてんのか、ああん？ とのことですわ」

「あと、このビビア・ハルノアに賛同するのは、ストレステストのようで不快なのですが、私たちにサイス、あなたの言った、そのようなメモリーはありません」

「それはそうです。目的が違いますので、当然初期配置も違いました。私たちの目的は管理運用・維持メンテですから、この魔大陸コアに初期配置され、必要な記憶として歴史がインプットされています。ですが、最外殻仕様オートマタはフラットに外部の生命と交流し情報を蓄積することが必要です。そのため、私たちのように歴史はむしろ邪魔であり、一方で旺盛な好奇心やコミュニケーション能力が付与されているのです。ああ、私ももっと皆さんを楽しませるコミュニケーション能力が欲しくてやみませんが、仕方ありませんね」

「十分面白いよ！ 今度一緒にネタを作りましょ！」

「光栄です。えっと、面白そうな女の方」

「女王なんだけど」

「まあ、コンビ結成は喜ばしいこととしてだ」

俺はパンパンと手を叩く。

「何から説明しようかと思っていたが、手間が省けて良かった。要するにこの魔大陸は現在、待機状態だな。本格稼働を待っている状

態というわけだ。そして、そのための鍵となる存在がパウリナであり、同時にレメゲトンでもあった。二つに鍵を分割したことに意味がありそうだ。女神イシスはあんなノリの星神だが、割とヒトの可能性に賭ける性格だからな。俺を千年後に時空転移させたりとか、その際最たる例なわけだが」

「フンガアアアアアアアアアア」

「そうだな、ビビア。結局のところこの魔大陸が何なのか、か」

「どうして先生には勇者様の異次元言語が分かるのでしょうか、お姉様？」

「この星、最大の謎なのじゃ」

ラツカライとコレットがなぜか呆れている。

「アリアケ様には既に見当がつかれているのですか？」

「ん？ ああ」

俺はサラリとサイスに向かって言った。

「この魔大陸は邪神に星を破壊された時のための脱出艇だろう？」

要するに、

「宇宙船だな」

一瞬の空白の後、



## 302・魔大陸の正体（前編）（後書き）

### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



### 303・魔大陸の正体（後編）

#### 303・魔大陸の正体（後編）

「その通りです。正確には惑星脱出用星間横断仕様型浮遊艇、通称【アーク】と言います。それにしても、完全に魔大陸の正体を言い当てられたことには変わりありません。さすが星の神の権限を委ねられた大賢者様です。テンションあげあげと申し上げて差支えありません」

「テンションぶち上げているところすいやせんが、俺みたいな凡人にも分かりやすいようにもう少し簡単に説明して頂けませんかね？」

バシュータが肩をすくめながら言うが、実際のところ彼はほぼ理解しているだろう。情報を共有するためにあえてそういう道化を演じてくれているだけだ。

「ぎひひひひい！ わかんねーのかよ、バーカ！ 要するにこの魔大陸が宇宙船だってことだ」

「おっと筋肉が滑った。ふむ、すまんが話の続きを頼む」

メキヨメキヨメキヨ！

「んぎいいいいいい　　エルガー　　てんめえええ、グアアアアアアアア」

「ちょっと、エルガー！……ほどほどにお願いするわよ」

「ふぎー（デリア）」

ふむ、皆は一瞬ざわついたものの、バシュータのおかげで再び話に集中してくれた。不出来な弟子は放っておいて続きを語る。

「結論だけではもちろん意味が分からんだろう。そして、俺たちがこの魔大陸で実際に目にしたものの、経験したものから推察をするのが一番理解しやすいと思う。まず、女神イシスが暴走した件を覚えているか？」

「そうでしたね。そのせいでボクたちはこの大陸に時空転移させられたんですから」

「その時、変なことが起こっていただろう、パウリナ、エリス」

二人に話を振る。

「はい。女神イシスは私とパウリナのことをまるで居ないものとして扱っていました」

「いいえ。私が無視されることはいつものことなんで。こんなに影が薄い私が女神様から無視されるのは当然のことなんで、へ、へへ」

なぜか真逆の答えが返ってきたわけだが、答えの内容は同一なので、話を続けることにした。

「そう、女神イシスはなぜか君たち二人を無視した……わけではない」

「ではない？」

「ふへへ、同情はよしてください。分かってるんです。分かってるんです……」

「そう、無視したのではなく、認識できない仕様なんだ、星の女神にとっては。なぜなら、ここが星の女神にとっての最後の切り札だったからだ」

「切り札とな！ とすると、その切り札の相手というのがもじゃ、なのじゃ」

コレットの驚いた声に俺は頷いた。

「そう、その相手が邪神だ。正式には偽神である宇宙癌ニクス・タルタロス。かつてイシスを窮地に追い込み、千年の眠りについた惑星の天敵。イシスは俺を時空転移させること、この星のマナを使い切る事で、千年間の時間稼ぎをすることで人間のレベルアップするための時間を作った。だが、それだと問題がある。ローレライなら分かるだろう？」

「負けたら終わりということですね。そういう博打は余り打つべきではないですね。政治生命は死ぬまでつきませんから。死なない様に、死なない様に、延々と立ち回り続けるべきです」

「さすがあのリズレットの娘だ」

俺は微笑む。ローレライは嫌そうな顔をする。

そこにデュースが口を開いた。

「と、ということは、まさか魔大陸はニクス・タルタロスに敗北したとき用の脱出艇なのか」

「呑み込みが早いな、デュース。そういうことだ。考えてもみる、千年後にどうなっているかなど、正直まるで分らん。だからあいつなりに奥の手を使ったんだろうさ」

「ふむ、だとすれば我がパートナー。私やパウリナを星神が認識できない理由も明白です。切り札なのだから、万が一にでもニクス・タルタロスに知られてはならなかった。記憶を読まれることもありうるし、操られることすらあるかもしれない。だから、自分の記憶から抹消することはもちろん、認識すらしないことを選択したわけですね。私でも同じ選択をするでしょう」

「無視されてるわけじゃなかった……？ し、信じられない……」

「補足をすれば、魔大陸にはこの千年間、霧のカーテンというものが張られていた。これは魔力値や腕力など、ある一定の強さ以上になると通行が出来ない仕組みだが、これも女神イシスの仕業で間違いない」

「あー、なるほどですね。魔大陸には生命を存続させておかないと、いざという時に脱出させる人員がそもそもいません。だから、宇宙に逃すべき強い個体を、大陸に残すために、行き来を阻んだわけですね。霧のカーテンは魔大陸に行けないようにしている訳ではなかったわけですか。むしろ、魔大陸から出ないように封印していた、と」

アリシアもポンと手を打って納得する。”  
” 「ですがアリアケ様、分からないのは今になってなぜレメゲトンは動き出したのでしょうか。それに霧のカーテンも取り払われたのと同じタイミングで？」

セラの疑問に俺は二度頷く。

それは今回の事件の核心部分だったからだ。

だが、その答えについては、アリシアとコレット、ラツカライが偶然にも口をそろえて、あっさりと答えを言っただけだ。

「それはもちろん、アー君がニクスを葬ったからですよ、ね？」

「それはもちろん、旦那様がニクスのアンポンタンを消滅させたからなのじゃ！ のじゃ？」

「それはもちろん、先生のおかげで宇宙癌ニクス・タルタロスを討伐したからではないでしょうか？」

「そなたら仲がええのう。だが、それしかあるまい」

フェンリルも頷いて肯定する。俺も同意見であった。

「ま、そうだな。だが、俺だけの力じゃない。みんなの力を合わせた結果だ。俺は後ろでフォローしていただけだ」

「私の記憶が正しければ、四つの聖武器を合体させて、偽神の心臓を貫いていたような？」

「？ やはり、みんなの力を合わせた結果じゃないか」

「やれやれ〜」

「先生らしいですね〜」

アリシアとラツカライが肩をすくめた。

なぜだ？ まあいいか。

「ニクスを打倒したことで、魔大陸は起動可能な状態になったというわけだ。だから、レメゲトンは行動を開始し、もう一人の鍵であるパウリナを手中に収めようとした」

「アリアケ様、ニクスを倒したのに、魔大陸が起動する状態になるのですか？ ニクスを倒したのなら、魔大陸で脱出する必要はないはずです。そうセラは思うのですが？」

もつともだな。だが、それは星神の立場になれば理解できるのだ。

「セラ、女神イシスの視点でものを考えてみるといい。いや、むしろ彼女自身すら認識できない、星の生命を存続させるための自動プログラムとでも言うべきなのかもな」

「自動プログラム。あっ！」

聡明な彼女はすぐに答えにたどり着いたようだ。

「偽神ニクス・タルタロス討伐のために、女神イシスと共闘し、その後女神は長い眠りに入りました。もしかして、その間に何かがある

か分からないから、念のために魔大陸を起動できるようにしたので  
すか」

「ふ。出来ない弟子も悪くないと思っていたが、やはりよく出来る  
生徒は可愛いものだ」

誰のことだあ　とアームロックをかけられている勇者の声が漏れ  
聞こえて来たが、俺は微笑みながら口を開いた。

「それだけこの星の生命を愛しているというわけだ、あんなノリだ  
がまさしく星神だな。彼女の権能とはすなわちこの星の生命を必ず  
生き延びさせること。その一点に集中しているんだろう。そのため  
なら、かなりでたらめなことまでやる。それに、女神は認識してな  
いが、あの偽神は本当の邪神ナイアの使徒だしな。別の邪神が彼女  
の眠りの間にやって来ることは実は十分考えられる。だから無意識  
に魔大陸を起動可能状態にしたのは、実際かなり妥当な判断なんだ」

” 「詳しいご説明をありがとうございました。ご主人様。私どもが  
認識できていない貴重な情報も含まれておりましたことをお礼申し  
上げます。ウキウキする冒険譚だったと申し上げざるを得ません。  
何せ娯楽が少ないもので」

「それは良かった」

「猛省はどこに行ったのだ？」

「でもさでもさ！　女王的にはまだ分からないところがあるんです  
けど！　発言したいけど、発言しちゃっていいかな？　かな」

「はい、ミルノー女王さんどうぞ！　ちなみに実は残り時間が無い

「はずですので、前置きは結構ですよ」

「ブリギッテさんが怖い！ えーっとね！ 疑問っていうのはパウリナちゃんとレメゲトンさんのことなんだけどさ、二人がこの魔王陸……。うっん、アークを起動させる鍵なのは分かったんだけどさ」

彼女は首をコテンと横に倒して言った。

「なんで二人もいるの？」

ミルノーの言葉に全員の時が一瞬止まった。

「あれ？ 変なこと言った？ でも普通鍵って1つじゃない？」

「ふっ」

俺はその言葉を聞いて微笑む。

「うわん！ 馬鹿にされた！ もう生きていけない！ パウリナちゃんとお芋作って慎ましく暮らすんだから！」

「死ぬか生きるかはつきりしてください」

ローレイがすかさず女王相手にツッコミを入れているが、スルーして、

「馬鹿にしたわけじゃない。その通りなんだ。その理由が最後まで俺には分からなかった。特に」

俺はパウリナへ視線を向けて話す。



「同じ鍵として生まれたはずなのに、二人はまるで違う生態をしていることがな」

「おお！ 確かにそうなのじゃ！ パウリナは普通の女子おんなこじゃが、レメゲトン、あやつはなんじやろう、千年生き続けておることからしても、特殊な存在なのじゃ。少なくとも人間ではないのじゃ！」

「ブリギツテ様みたいに時間停止型の封印で自分ごとアビスを封じていた訳でもないですもんねえ」

コレットとアリシアが頷く。

「どういうことなんですか、先生？」

俺はそのことを説明しようとするが、

「ふむ、どうやら邪魔が入りそうだ。だが問題ない」

俺は聖杖キルケオンを構えながら言う。

「その答えはこの戦いが教えてくれるからな」

俺の言葉に反応するように、仲間たちは一斉に戦闘態勢に移行したのであった。

### 303・魔大陸の正体（後編）（後書き）

#### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとつございますm(┌┐”m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

304・四魔将をアーク維持管理要員と共闘して打倒する（前編）

304・四魔将をアーク維持管理要員と共闘して打倒する（前編）

ドゴオオオオオオオオオン

俺たちが戦闘態勢に移行した瞬間に、美しい街並みの一角が爆破四散する。

そして、そのがれきを踏みつぶすようにして現れたのは、二体の巨大なモンスターであった。

どちらも体長は20mほどはあろう。

そのうちの一体は紫の粘性を持つスライムだが、通常、低レベルのそれとは全く違うようだった。

「魔大陸でのスライムとは、すなわち物理攻撃を一切受け付けず、歩いた後には何も残しません。ゆえに【災害】か【現象】と言う風に捉える方がより適切でしょう。またあれはその中でも最高の個体であるジェネラル・ヴェノム・スライム。近づくだけでその毒素によって生物は死に絶えます」

他方、もう一体はがっしりとした肉体と牛の頭部を持った存在である。だが、大きさがけた違いであり、その担がれた斧による衝撃は街の一角を一瞬にして塵に還すことは容易であろう。

「あれはミノタウロスだと思うが、あれほど巨大で強大な姿の個体

を視認したのは初めてだ。破壊に特化した悪夢そのものだな。メア・ミノタウロスと称するのが妥当なところか」

「了解した。エリス、デューズ。だが、やることは変わらないさ、そうだろう、みんな？」

「お、おうさ！ 応戦してやるってもんだ。俺には星剣があるんだ」！

「もう、勇者様だったら何をおっしゃってるんですか！」

ローレイが腰に手を当てて呆れたように言った。

「『応戦』じゃないですよ、私たちがするのは。私たちがアリアケ様の元ですべきは唯一っ！」

「うむ！ ローレイはよう分かっておる！ 旦那様がすべきことなど一つに決まっておるのじゃ。のう、ラツカライよ！」

「はい お姉様」

ラツカライは聖槍ブリューナクを構えながら断言した。

「蹂躪ですね！ 腕がなります！」

「あらあら、何だか脳筋がラツカライちゃんにまで感染うつっているよ  
うね、お姉さんは悲しいです」

「本当ですね、ブリギッテ様。やはり女性は床しくない！ それ  
はそれとして前衛に行きましょう この前練習した必殺技に耐え

られますかね、四魔将さんたちは、ふっふっふー！」

「……うちのチームはこんなだったかな」

俺が少し苦笑していると、先ほどまで話していたサイヌもおもむろにこちら側へと近づいて来た。

そして、

「では我ら自律型維持メンテナンス型オートマタもあれたらの蹂躪をお手伝いさせて頂きます。どうぞ指示を賜ればと思います。アリアケ様」

「いいのか？ あれはこのアークの鍵であるレメゲトンの部下だぞ？　せめて中立とかじゃないのか？」

「え？　あー、うーん……」

彼女は少し目を泳がせたが、誤魔化すように言った。

「あくまでプログラムとシステムに統制されているので柔軟な対応が取れないのです。そんな訳で、都市機能を壊している彼らを、維持管理要員である私たちは自動的にエネミー認定しました。うん、そんな感じでいいでしょう！　言い訳は完璧です」

「こいつら絶対最初のプログラムからバグってるのだ！」

魔王がツッコミを入れているが、何はともあれ味方でいてくれるならばありがたい。

「では星の権限を持つアリアケが勅命する。アレを蹂躪せよ」

その言葉にサイスは目を輝かせた。

「命令されました！ 最高！ この瞬間を千年も待ってて良かったー！」

そう言いながら、数十に及ぶサイス達同型機は四魔将の二体へと突撃していく。

「テンションぶちあがってますねー」

「ぬおおおおー！ 一番槍を奪われる訳には行かぬのじゃ！ ドラゴンの恥は掻き捨てなのじゃー！」

「その用法はあつておるのかえ？ コレットや」

「ぐはははは！ これだけ味方がいればやらねえだろ！ 活躍のチャンスだ、行くぞてめえら」

「はいはい。あんまり突っ込み過ぎないでね」

「あたしはファイヤーボールうってっから。勝手に死に行ったらいいじゃーん！」

「筋肉を躍動させながら突撃だ 俺の筋肉ならばスライムの毒だろっがミノタウロスの斧だろっが防げぬものはない」

こうして、サイス達アークのオートマタ達と共闘しての、四魔将との戦いの火蓋は切って落とされたのである！

304・四魔将をアーク維持管理要員と共闘して打倒する(前編)  
(後書き)

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中!

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`”´”m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ)\*  
(^-^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV:井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中!!

【応援よろしくお願いします!】



「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

305・四魔将をアーク維持管理要員と共闘して打倒する（中編）

305・四魔将をアーク維持管理要員と共闘して打倒する（中編）

存在が災害現象であると称されたスライムの中でも、その頂点となるジェネラル・ヴェノム・スライムに向かって、まず勇者パーティーたちが奇襲をかける！

「ビビア！ そいつは物理攻撃を無効化するぞ！ 気を付けろ！」

「うるせえ、ボケが！ スライムにこの俺様が負ける訳ねえだろうがあ！ぐっはあああ」

勇者ビビアは全力でダッシュした勢いのまま吐血しつつ、もんどりうちながら転がっていく。

「あと近づいただけで即死級の毒素を発しているから気を付けてると言いたかったのだが、一步遅かったな。状態異常無効 付与。アリシア」

「はいはい。アンチドーターリアルマー解毒の加護よ。ローレライちゃん？」

「はい、ヒール《回復》」

微妙にローレライは回復に消極的だが、まあいい。

「はひい！ はひい！」

何とか体力残り1といった感じで、勇者が顔面を蒼白にしつつ、冷や汗をかきつつ、星剣を杖代わりに起き上がる。

「ダーリン、魔大陸のスライムはエンデンス大陸のものとは違うみたいですよ！ あと鼻血を拭いた方がいいですよ」

「ぎゃーっはっはっは。うける！ 何だよその顔！」

「うむ、顔面からこけたくらいで鼻血ブーとは情けない。顔の筋肉を鍛えてない証拠だ」

「んぎい！」

「だが威勢が良いのは良いことだ。サイズ、すまないがお前の指揮下で戦わせてやって欲しい」

「了解しました、ご主人様！ よし、勇者ビビアとその一行よ、ついてきて下さい」

「は、はああああ どうしててめらんかに指示されなきゃならねえ てめえらはただの使用人風情だろうが」

「はい？ いえ、あなたたちはデューズ様やエリス様達オートマタ種族の下僕？ だと先ほど部分的に同期して知りました。だとすると、当然私たちの配下でもあります。反抗的な態度をとる場合は消滅させても良いと聞いていますがどうしますか？」

「なっ そんな馬鹿な ち、ちつきしょおおお この俺が使用人ごときよりも下の身分だったのか！ なら早く命令しやがれ

え！」

「ぎゃははは！ 勇者、受け入れるのめっちゃ早すぎじゃね？」

「だいぶデューズに絞られたからな！ ちなみに俺たちもな！ 筋肉が委縮しているから、従うことに否はない！」

「まあ大勢の方が勝率が高いので、なんでも良いですわ。エンデンス大陸に戻ったら単独で勝利したと報告したらいいだけなのですわ！ なりふり構ってたら富も名誉も手に入れられませんのよ」

「皆さんの意見に一切誇る点はないのに、なんで威勢だけは良いんですか？」

「まるで成長していなくて逆に安心したのだ！」

サイスと勇者パーティーたちとの会話に、ローレイヤリスキスが言った。

と、その隙を逃すほど四魔将は甘くない。

メア・ミノタウロスの渾身の横なぎが大地を掘削するっ……！！

だが！

「これはなかなかの重さですね。ちょっと本気出せそうでお姉さんは嬉しいです」

その掘削はへたりこむ勇者たちの目の前で停止していた。ブリギッテが実に楽しそうな顔で、敵と同じ規模の斧を受け止めていたから



さるようにスライムへ激突する。

その衝撃だけで土煙が舞って視界を覆い隠す。

「やったあ！ これはやったね！ 間違いない！ 女王には分かるもん！」

ミルノー女王が喜んでいるが、

「いや」

俺は肩をすくめて言った。

「効果はない。すなわち……セラ。風を」

「はい、アリアケ様。ウインド・風よ、切り裂けブラスト！」

彼女の起こした突風によって、土煙は一瞬にして吹き飛ばされる。土煙の中のスライムにも命中しているはずだ。

しかし。

現れた目の前の光景を見ながら俺は続きを口にした。

「ノーダメというやつだな」

クリティカルヒットした斧を受けても、風魔法を受けても、スライムは健在であった。

それどころか、ダメージが通った痕跡すらない。

同時に、メア・ミノタウロスから感じる力も数倍に増大しているのが分かる。

「うわん そんな あれで勝てないなんて！ 生きて帰ったらアリアケ皇帝と結婚する計画なのに！」

「まあ落ち着け。あと、お前のセリフは逆運命力がありそうだから、ちよつと静かめで頼む」

それにしても。

「物理防御無効でもダメージが通らないのか。だとすると……」

「先生、次元ごとやりますか？」

「それも無効化しそうだな。物理というか、攻撃が無効なんだろう」

「それは厄介ですね。で、どうするんですか、アー君？」

アリシアが信頼した瞳で俺を見ながら言った。

「もう作戦は出来ているんでしょう？」

その言葉に俺は微笑みながら頷いた。

「もちろんだ。さあ、ではサイスたちにも手伝ってもらおうでしょう」

俺の言葉を受けて、サイスをはじめとした数十体のオートマタたちが、俺たちの頭上に浮遊し集合した。

305・四魔将をアーク維持管理要員と共闘して打倒する(中編)  
(後書き)

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中!

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`””m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ)\*  
(^-^\*)

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV:井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中!!

【応援よろしくお願いします!】



「面白かった！」

「続きが気になる、読みたい！」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です！

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

306 四魔将をアーク維持管理要員と共闘して打倒する（後編）

306 四魔将をアーク維持管理要員と共闘して打倒する（後編）

「ご主人様は私たちにどのような行動をお求めですか？ あ、自爆ですね」

「なんでそうなる。『命大事に』がアリアケ帝国の国是でな」

俺は苦笑してから思い出すようにして語る。

「レメゲトンの基地を襲撃した際に、パウリナの窮地を助けた帯状の物体があった。あれは何だろうと思っていたのだが、君たちに会って確信した。あれも君らスタッフの仕事の一環なのだろう？」

「さすがご主人様です。すべてお見通しですね。あれは私たちが形態変化できる姿の一つです。その基地は恐らく魔大陸にいくつかある支所だったのでしよう。ですので、私たちの素体たちが基地の設計に組み込まれていたのだと思います」

「そういうことだろうな。あんなことが出来るのは君たち以外は考えられない。ではサイス、君たちもその力を使用することは出来るか？」

「もちろん可能です。ご主人様。かの形態ギルテルとなり、敵の切断、拘束なんでもしてご覧にいれましょう！ アがってきました！」

「そ、そうか」

俺は攻撃が効かないことを確認したスライムたちを見上げながら、フツと余裕の笑みを浮かべながら指示を出した。

「先ほどの一連の攻防で戦力分析は終わっている。ジェネラル・ヴェノム・スライムは生命に対する致死性の毒を発散し、攻撃を無効化する【災害】。メア・ミノタウロスは一撃で街の一角を一層する破壊力を持つ【狂戦士】<sup>バーサーカー</sup>。この両者にタッグを組まれれば、近づくこともできず相手の毒と暴力に蹂躪されるだろう」

「では、勇者パーティー様たちに自爆させるしかありませんね」

「さつき自爆説は否定したのだが……」

ローレイの言葉に苦笑しながら続きを話す。遠くで勇者が抗議しているが、吹き飛ばされて倒れたままなのでスルーすることにする。

「そうじゃないさ。レメゲトンは本当に戦略が下手だということだ。もし、ここでこの二体のモンスターを解き放たなければ、きっとサイスは一方的に俺たちの味方ではなかった。アークを守るのが至上命題であり、レメゲトンとパウリナは同等のはずだからな。だが、この魔大陸のコアを破壊しようとしている【災害】と【バーサーカー】を野放図にさせておくことは出来るはずがない」

「はい、プログラムが許しません」

「なら、倒し方も随分楽になる。もちろん、俺たちが力を尽くせば消滅させることは出来る。だが、それは戦術的な勝利。もし、戦術的な勝利を得られるならばそれを選択するべきなのさ」

「さすが主様であるなあ。興味深いぞえ。で、どうするのかのう？」  
フエンリルの言葉に俺は頷く。

「サイス、俺たちが二体の動きを出来るだけ攪乱し、足止めする。隙について奴らをギルテルで『拘束』してくれ」

「了解しました。その後はどうされますか？」

俺は指示を出そうとするが、その前に敵が先に動いた。

「ふ、それは拘束してからでいいだろう。まずは隙を作る。魔王リスキスに 星剣装備 攻撃力アップ スピードアップ。ミルノーに 魔力増幅 氷魔法強化。セラに 風魔法強化。アリシア、コレット、ブリギッテには 攻撃力アップ クリティカル威力アップ を付与。サイスたちオートマタ全員に 防御力アップ。あとは 回数付き回避 状態異常無効 を 全体化」

「おお、星剣、あていしが使っても良いのか 勇者の剣を使うのって何だか背德的なのだ！」

「か、返しやがれ 俺のアイデンティティーがあ」

「ほらほら、ダーリン、動いてはダメですわ。今は回復優先ですわ」

「それにもう地に堕ちた信頼を回復するのに、剣の一本や二本あんなま変わんねーって！ ゲラゲラゲラ」

「剣になど頼っているうちは三流。やはり俺の肉で勝負することが

大事だ」

「離せええええええええ！ よりにもよって魔王に剣を奪われたらまた後で何か悪評が立つだろうがあああ！」

そんな絶叫をよそに、スキルを付与したメンバーは阿吽の呼吸で動く。

「わ、私は何もしなくてもいいんですか？ ま、まあ何も出来ないんですが……」

と、その時パウリナが言った。今は俺の背中を守るラツカライと、回復に集中しているローレライのみがいる状態だ。

俺はパウリナに優しく微笑みかけて首を横に振る。

「そんなことはない。実はパウリナがここにいるのは、君が勇気を出したからだろう？ 言葉には出してないかもしれないが、俺には分かっている」

「え？」

意外そうな表情をするので、俺は口に出して言ってやる。

「本当なら君は基地から助け出された後に、安全な場所に残る選択肢も当然あった。流されただけで、こんなところに付いて来る訳がない。もし君が来るのを嫌がるなら、俺は君を連れてくるつもりはなかった。なぜなら、ただの無力な女の子だしな。でも君は来た。それは、自分がここで果たす使命があると思ったからなんだろう？」

「そ、そんな大したものじゃないです。でも、いないとご迷惑をかけるかもしれないかもって思っただけだ。断る勇気もなかっただけっていいか……」

「それでいいのさ」

「え？」

「普通に暮らしていた女の子が、こんな環境にいきなり放り込まれて敢然としてたら俺がびっくりだ。おっかなびっくり。おどおど、びくびく。それでいいじゃないか。だが言葉や態度はどうあれ、俺は君の行動を見ている。その答えは一つだ。君は逃げなかったし、ついて来ないという判断をしなかった。少しは流されたただけだとしても、今も逃げずにここにいます。それで十分なのさ」

「ア、アリアケ皇帝様……」

俺は安心させるように頷いてやる。

「ありがとうございます！ 結婚するならアリアケ皇帝がいいです」

「いつきなり何言ってるんですか、この小娘？ おっと、失礼しました。こほこほこほん、パウリナさん。あなたは11番目くらいなので、そのあたりちゃんと弁えて下さいね」

「そうです、そうです。ちなみに、ボクなんて先生とキスしたこともありますからね！ キャツ、恥ずかしい、私としたことが嫉妬で口がすべってしまいました……」

「ひいいい！　　すいません、すいません。調子にのってすいません  
！」

何だか姦しいが、まあ、途中から冗談を言い合っているようなので  
問題ないだろう。

それに戦局は既に動き出していた。

「く・ら・う・の・だああああああ　　魔王終局星剣乱舞な  
のだー！」

「あれは俺のだ！　俺の必殺技！　究極的終局乱舞なんだー！　う  
わああああああ　　」

ビビアの絶叫が遠くから聞こえてくるが、

「いやあ、あれは別物ですねー」

苦笑しながらラツカライが断言していた。俺もそう思う。

勇者の究極的終局乱舞ロンテミア・フルツは目にも止まらぬ速さで相手に攻撃を加える  
最強スキルであるが、魔王のそれは一撃一撃がもはや地殻変動を起  
こすレベルのものであった。

それがメア・ミノタウロスに炸裂する！

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオ」





だが、それが彼女の狙い。神の系譜につらなる彼女の戦闘における直感力は、未来予知に近い。

グラリと、その巨躯がよろめく。

無論、踏みとどまろうとして、片手をつこうとするが、

「フォロー、行きます！  
原初の次元断ラゲナログ・パージ」

「ブモオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

手を付こうとした場所の次元がバツクリと割れ、片腕がそこに吸い込まれるようになる。

「よし、ミルノー女王！ 必殺嫌がらせだ！」

「私だけかつこ悪くないかな もうちよつと検討をお願いします」

「

彼女は抗議しながらも、魔法を詠唱する。

「アイス・ブレード氷剣の結晶雨」

俺の 魔力増幅 氷魔法強化 を付与された彼女の魔法は通常の数百倍となっている。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

ビキビキビキビキビキ！



「ブ、ブモオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
攻撃を一人で防いだのはデューズであった。

メア・ミノタウロスは不意をつかれたことで、今度こそ本当に転倒し、背中から転倒したのである。

「先ほどサイス達全員のオートマタ種族に 防御力アップ を付与したからな。無論、最外殻仕様であろうとも、デューズもその中に含まれる。あえて、注意から外れるようにサイスの名前を出したわけだ」

転倒。これは十分な隙だ。すなわち、

「第一段階の計画は予定通り。そして、次の勝負も一瞬の攻防となるだろう」

今の戦いも時間にすれば1秒程度のものなのだから。

俺は視線をジェネラル・ヴェノム・スライムの方へと移す。

そこには敵へと凄まじいスピードで肉薄するエリス、ブリギッテ、アリシア、そしてフェンリルとセラ、バシュータがいる。

「はあああああああああああああああああ！」

「行きますよ、行きますよ、行きますよー！」

先手はブリギッテとアリシアが取る。

ブリギッテは猪突猛進と言って差し支えない宗教の始祖だけあって戦意が高い。

あと、アリシアはブリギッテと組むと、結構その影響を受けるのか、大聖女とは思えない武闘派になる。

彼女らはサイス達の作ったギルテル《帯》を足場に上空50メートルまで一気に上昇する。

「アリシアさん、合体技、よろしくです！」

「かしこまりました！ コレットちゃんを見ていて思いついた結界魔法 神竜のドラゴンスケイル・バレル 弾丸！」

それは砲術と言って良い結界魔法のアレンジだ。

超硬質なドラゴンの鱗の如き結界を生成・圧縮し、その圧縮で結界が崩壊した衝撃で対象を弾丸のように打ち出す亜種結界魔法！

そもそも、その衝撃に耐えられる人間がこの地上に何人いるかわからないが、その内の一人がブリギッテ・ラタテクト。ブリギッテ教の始祖であることは間違いない。

「この拳に纏った地獄アレスの熱に焼かれてくださあああああああああああああ  
あああー」

本物ではないだろうが、300年間身近にあり続けた地獄の炎を再

現した力を纏い、弾丸となったブリギッテが超高速で【災害】たるスライムへと突撃する。

ボゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ひしゃげる。

潰れるかのようにスライムが横へと伸びる。

それでも衝撃は逃しきれずに、更に更に、ブリギッテの拳は。彼女と言う弾丸はスライムを貫通するのではないかというほどギチギチと音を立てて食い込む。

だが。

『再………生………』

どこから声を発しのか不明だが、耳障りな倍音がスライムから響いた。

その瞬間、貫かれようとしていた体が瞬時に球体に戻ろうとし、ブリギッテを押し返し始めた。

「なるほど、これはいざ貫くとなれば、骨が折れそうですねっ、と！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

刹那、スライムの体は元の球体へ瞬時に復元される。

が、同時にブリギッテは今まで込めていた力を一気に緩めて離脱する。

『オオオオオオ』

それによって、まるで凄まじい力で叩きつけられたボールが跳ね返るように、空中にスライムが浮き上がる。

「セラ様、出番ですぜ」

「準備万端ですよ。それにしてもバシユータ様のアイテムはいつもどこに隠しているんですか？」

「アリアケの旦那直伝ですな」

「あら。それはファンクラブ会長として、少し嫉けちやいますね」

彼女は頬を膨らませた後、バシユータの投擲した物体を風魔法によって、器用に空中のスライムの周囲をグルグルと巡らせる。

「さすがセラだな。あれだけの精度の高い風魔法を使えるのはインデンス大陸でも彼女だけだろう」

威力という面では他のメンバーに一段落ちるかもしれないが、彼女の風魔法における器用さというのは、実は他が追隨できないレベルなのだ。そして、それが今回、奴を倒す契機を作り出す！

「あの、先生。バシユータさんが投擲したのって、もしかして……」

「ああ、そうだな」

俺は少し笑って言った。

「俺たちの人形だ<sup>デコイ</sup>」

バシュータはアイテムボックスを持ってないはずなのだが、どうやってているのだろう。彼は仲間になってから、最も実力が伸びた一人であることは間違いない。

とはいえ、その人形は実物よりかなり小さいし、造形もそれほど似ているわけではない。

だが、20メートルを超える巨躯を持つモンスターが、そんな大小を把握できるわけがない。

そして、造形の詳細は、今まさにセラが高速で人形<sup>デコイ</sup>を回転させているために、判別は不可能だ。

ならばスライムが次にする行動は決まっている。

『ゴオオオオオオオオオオオオオ』

体当たり。いや、捕食だ！

人形<sup>デコイ</sup>を追撃してきた俺たちだと思い、カウンターを喰らわせたつもりになる。

だが、それが人形<sup>デコイ</sup>であると気づいたときにはもう遅い。

これは刹那の攻防なのだから。

奴が捕食したのが人形だと気づいた瞬間には、既に準備は終わっていた。

「腕がなるのう、エリス。こうして主様の元で戦うのは胸が踊るであろつて?」

「否定はしません。それよりもう撃てるのですか?」

「無論よ。そなたを待つておるのよ」

「私もいけます。ここはパートナーにいいところを見せるチャンスですので。第1種兵装兵器……」

「そなたのその正直なところはとても良いと思うぞえ?」

「【E・テネリタ】発射」  
「雷神の怒り」

エリスの背中には翼が形成され、両腕を上げるとその間にマナを収束させて行く。バリバリという裂ぱくが響き渡り、魔力が放電する。銀色のエナメル質の身体を持つ無機質なオートマタが、水色の髪をたなびかせる姿は最初見た時と同じく美しい。その唇は淡々と魔力放出を宣告する。

片や十聖の獣フェンリルは、青白い光沢をまとう獣の姿にて巨大な口腔を開き、バチバチと帯電するかのような、高密度の魔力が凝集、発射した。

『カッ』



ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

本来ならば瞬時に融解するほどの熱量がジェネラル・ヴェノム・スライムへ直撃する！

だが、その熱線を浴びても、奴にとっては致命傷ではなかった。

その巨躯を宙に浮かべたまま徐々に押されてはいるものの、ダメー  
ジ自体は無効化されているのだ。

「は、はわわわ。ア、アリアケ皇帝。まさかとは思いますが、こ、  
ここここれって、これって……！」

「落ち着け、落ち着け」

眼前の余りにスケールの違う戦いに腰を抜かしかけているパウリナ  
を宥めつつ、俺は彼女の質問に端的に答えたのである。

「まさかも何もなしさ。無論、すべて」

俺は聖杖を掲げながら言った。

「計算通りだ」

俺がそう言った瞬間、スライムに対する攻撃が急遽止む、そしてジ  
エネラル・ヴェノム・スライムが自由落下を始めるが、その真下に  
いるのはメア・ミノタウロスだ。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

その衝撃は相当なものだろう。

ただ、

『ブモ、ブモモモモ』

『ゲ、ゲ、ゲ、ゲ、ゲ』

両者は健在であった。そして、ここまでやって碌なダメージを与えられなかったこちらを嘲笑うような声が漏れていることが分かる。

しかし、

「馬鹿だな、四魔将」

俺も同時に嗤う。その声はなぜか良く響き、二体の化け物にも届いたようだ。

『グオオオオオオオオオオ』

それは魔力を伴った怒気として、突風を起こす。

だが、俺は淡々と宣告する。なぜならそれが強者のできる唯一の憐れみだからだ。

「言つたろう、強さに恵まれただけの愚者たちよ。魔大陸で最強程度で俺に勝てるわけがない。むしろ、お前たちのような強さを活かせぬ者たちに、過ぎた力がもたらされたことが哀れだ」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ』

更なる怒りの声が彼らから上がり、起き上がるつとする。

だが、

「真実を聞き怒りをたぎらせるほど見苦しいものはない。それに、既に戦いは終わっている。馬鹿と言った理由はな、敗北者は負けてからあがこうとするからだ。だからお前たちは俺には勝てる道理はない、永遠にな。サイス」

「かしこまりました。アリアケ皇帝。これよりオートマタ500体によるギルテル形態による……」

彼女もまた、二体の巨大モンスターの状況を見定めながら言った。

「永久封印を行います」

あらかじめ指示を与えておいた彼女の行動は迅速であった。

重なり合った二体の巨躯を数百本の白い帯のようなものがグルグルと包み込んでいく。

『ブモオオオオオオ！』

『ゲ、ゲ、ゲ、ゲ、ゲ』

最初は余裕もあったのだろう。いくつかのギル<sup>帝</sup>テルは破壊され、引きちぎられる。

だが、多少破壊されてもそれらは継続して動き続けた。

エリス達と同様、可変体である彼女らは多少の攻撃を受けたところで致命傷にならない。

それどころか、伸縮自在性もあるため、中に収められた対象がいくらもがこうとも、手ごたえがないのだ。

『ブモ、ブモモモモモ』

『ゲ、ゲ、ゲ、ゲ、ゲ』

いかに強靱であろうとも。あらゆる攻撃を無効化しようとも。

この魔大陸の管理スタッフたちはそれ以上に柔軟であり、何より数は無数に近いほどいる。

今、ここにいる数百体ですら、先ほど聞いたところほんの一部らしい。

ついにギルテルの一部を引きはがすことが不可能になると、二体のモンスターへ、次々とギルテルが重なり包み込んでいく。

「先ほどのご主人様らへの攻撃力などは既に計測済みです。千体のギルテルで包み込めば、永久に内部から破壊することは不可能でしょう」

「そうか」

「そして、これは推測ですが。ジエネラル・ヴェノム・スライムは堂空間にいるミア・ミノタウロスをそのうち捕食するでしょう。」と、

同時にスライムには毒素とその巨躯を活かした攻撃以外に脅威となるものはありません。オートマタにはどちらも無効化可能なものです。無害化まで数百か数千年か分かりませんが、オートマタにとつては大した年月ではありません。意識を切り離して活動することも可能ですのでご心配も不要です」

「ああ、そうじゃなければ違う作戦を考えて勝つようにはしていただき

「そ、そうですか。い、今のはあがりました」

「？」

よく分からないので首を傾げると同時に、

『ブモオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

『ゲゲゲ      ゲゲゲ      ゲゲゲ      ゲゲゲ      ゲゲゲ      ゲゲゲ』

四魔将二体の断末魔が聞こえて来たのだった。

白い球体と化した四魔将は、これから数百年以上に及ぶ半永久の封印により倒されることになる。

「とにかくありがとう、サイス。それにみんな。君たちのおかげで四魔将を倒すことが出来た」

俺がそう言って微笑むと、サイスは頷いてから、戻って来たエリスとデュースの方を向いて言った。

「えっと、すみません、ちょっと同期不可能な領域が出来てしまい

ました」

「そうですね？　ですが、私は平気ですから、あらゆる情報は同期すべきだと思います」

「えっと、私は、まあ、分かる。だから全部同期しなくてもいいんじゃないねえかな」

淡々としたエリスと、少し顔を赤らめがちなデュースとサイスが対照的であった。

理由はよく分からないが。

ともかくこうして、最後の四魔将たちを、サイスたちアーク維持管理要員たちの力を借り打倒したのであった。

306・四魔将をアーク維持管理要員と共闘して打倒する(後編)  
( ) (後書き)

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`”´”m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ)\*  
( ^ - ^ \* )

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary 記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



### 307・汝、星と共にあれかし

307・汝、星と共にあれかし

四魔将の最後の二体を討伐した俺たちは、サイスたちの案内でアークの心臓部へと進んで行く。

案内の最中にサイスが申し訳なさそうに言った。

「ご主人様。サイスたちはアークを破壊しようとした四魔将を撃退するために協力関係を結びましたが、本来は中立の立場となります。これ以降は手を貸すことはできませんがお許しくださいませ」

そう言いながら深々と頭を下げるが、俺はちょうど撫でやすいところにある綺麗な黒髪を撫でながら言った。

「当然のことだ。むしろ、四魔将の出陣のさせ方を明らかに間違えたレメゲトンの戦略ミスだな。魔大帝から落伍者へと落ちぶれたのも頷ける」

「この扉の向こうが制御室。この惑星脱出用星間横断仕様型浮遊艇アークの制御室ブリッジとなります」

「私の胸の紋様に似てる？」

そうパウリナが言った瞬間、彼女の胸元から赤い光が発せられる。だが、扉は開かない。

しかし。

「……アクタ……エスト……ファブラ……ケッテン……デス……ク  
ラウス……アーク……」

「パウリナ？」

「あつ、わ、私は何を……！」

「パウリナ様に刻印された神言です。意味は『門は開かれた。死の鎖よ無意味となれかし』。アークのコアであるブリッジに入るための鍵の一族。その中でも一人にしか受け継がれない唯一無二の徴です」

「そ、そうなんですか。鍵って言われていたので、穴に差し込まれてぐりぐり回されるのかと思って緊張していました」

「そんな宇宙船で惑星を脱出するのは嫌なのじゃ」

「ほら、開きますよ」

アリシアの声に、全員が扉の向こうを見る。

そこは一面の草原だった。

恐らく空間が歪曲しているのだろう。

草原の中にはポツンと、魔大陸の心臓と思われる紅色のクリスタルが台座の上に浮遊している。

そして当然ながら、その横には、

「待っていたぞ！ 僭帝アリアケ・ミハマ！」

怒気に満ちた表情で、こちらを待ち受ける一人の男。

かつて、この魔大陸の皇帝だった男の成れの果て。

「犯罪者レメゲトンか」

俺が蔑む視線を向けると、相手はギリギリと奥歯をかみしめながら叫んだ。

「大逆者は貴様だ！ 誰もお前を魔大陸の盟主などとは認めていない！ 俺がこの大陸を統一し、そして」

奴は宣言するように言った。

「惑星の後継者たちを宇宙へ脱出させる！ 邪魔はさせんぞ、アリアケ・ミハマああああああ」

俺は奴の言葉を聞いて、フツと嗤う。そして、一言呟いた。

「汝、星と共にあれかし」

「なに？」

俺の言葉の意味を理解しかねて、レメゲトンは微妙な表情を浮かべたのである。

### 307 汝、星と共にあれかし（後書き）

#### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとつございますm(´`”m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 308・方舟の起動

#### 308・方舟の起動

「汝、星と共にあれかし。分からないのか、レメゲトン。既に偽神ニクス・タルタロスは俺たち賢者パーティーが討伐した。当面の脅威は既に俺が葬った。今更魔大陸でこの惑星を離れる必要はないのではないか？」

その言葉に、レメゲトンは馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「何を言いだすかと思えば！ そのような事情はとうに知っている！ 女神がこの魔大陸を認識せず、最後の切り札として惑星脱出艇として創造した経緯も全てな！」

「そこまで理解しとるのに何で出て行こうとしとるんじゃ！」

コレットがもつともな言葉を放つが、レメゲトンはやはり嗤い続ける。

「そのパウリナと違って、俺は魔大陸が生み出されると同時に生まれ常に共にあった。ポツとでのアリアケ、貴様などとは年季が違う。女神がいまだにこの魔大陸の機能を停止せずにいるのは、惑星脱出することを推奨しているからだということがなぜわからない。それに、パウリナから聞いた話によれば、お前たちは休養中の女神と邂逅している。その際にパウリナとエリス女王、貴様らは認識されなかった。それはすなわち、女神がこの魔大陸を依然として、惑

星脱出用の切り札として認識している証拠だ」

ならば、とレメゲトンは続けた。

「女神の意思に反しているのは。星の意思に反しているのは、この魔大陸を女神の意思に従い起動しようとする俺を邪魔する貴様らだということになる。僭帝アリアケ、貴様こそが神に逆らう大逆罪を犯した大犯罪者に他ならない。そして、他の者たちも同罪であることは明白である」

奴は嘲笑う様にして言う。

「反論があるか？ あるならば聞いてやろう。大逆罪を犯す星の敵どもよ」

なるほど、さすがかつて魔大帝をしていただけあって、威厳らしきものが醸し出されている。

だが、

「やれやれ、レメゲトン。お前は馬鹿だな」

俺は肩をすくめて、呆れた声を上げた。

「はっ！ 何を言うかと思えば、言っに事欠いて程度の低い罵倒か」  
嘲笑を浮かべるが、俺はそれに対して同様に肩をもう一度すくめる。そして言った。

「だから、馬鹿だと言っているんだ。どうして俺に対して、魔大陸

の未来に関わることを問う必要がある？」

「な、なに？」

俺の言葉の真意が分からないのだろう、怪訝な表情を浮かべた。

「やれやれ。本気で分かっていないようだな。お前は女神に創造された魔大陸の鍵なのだろうが思慮が余りにも浅い。教えてやろう。女神が言外に語る事実を。そもそもどうしてパウリナとお前と言っ二つの鍵を用意していたと思う」

「むっ……！　そ、それは……。今はそんなことは関係ない」

「馬鹿が。お前が見えないことこそが最も大事な真実なんだ。不明であるならば、黙って聞け、レメゲトンよ」

「ぐがっ……！！」

屈辱に咽ぶ声音を漏らす、構わずに俺は言葉を紡ぐ。

「お前はもしかしたらパウリナが予備だとも思ったのかもしれない。あるいは、アークの一部の機能を行使するにはパウリナが必要だと考えたのかもしれない。だからこそ、念のためにパウリナをさらい情報を引き出そうとした。だがな、あの女神イシスはそんな細かいことをする奴じゃない」

「女神相手に分かったようなことを！」

「まあ、直々に代理を頼まれているのでな。魔大陸の皇帝の座にそれほど拘泥するお前の気持ちは実はよく分らん」



「なっ！」

俺はいらだつ相手に逆に冷静に事実のみを告げる。

「なぜ予備ではないのか。機能が別ではないのか。それはパウリナがごく普通の寿命を持つ、ただの人間の少女であり、一方のお前が千年を生きる魔大陸の化け物であることを考えれば自ずと答えが見える」

「ああー、分かりました！」

「僕も分かったかもしれん！」

「先生、ボクも分かりました。あの女神様らしいですね！」

「あれは変わった神性ゆえなあ」

四人の声が響く。それと同時にエリス女王も納得した声を上げた。

「星と共に生きるのか。それとも惑星外へ逃げ出してまで生き延びるのか。その選択をヒトに委ねたということですか」

「そんな馬鹿なことがあるか！」

レメゲトンの怒声が響いた。

「ふざけるな！ これだけの準備をしておきながら、最後の判断はヒトに委ねるだと 星の未来がかかった選択をそんな曖昧にする訳がない！」

「レメゲトン、惑星外での生活は恐らく過酷なものになるだろう。アークは無論、そのための機能を搭載しているはずだ。だが、星に根ざして生きることと、宇宙で生きるとは全く違う。多分だが、どちらも死ぬ可能性は同じくらいある。宇宙での生活に慣れずに死ぬことは当然ありうる」

「何を根拠にそのくだらない説を吐く！」

「パウリナの一族がその最終判断をするための存在。すなわち星に、大地に根差して生きる普通の人間としてあえて生み出されたからだ」

「」

レメゲトンはハツとした表情になる。

恐らく、今までこの魔大陸を支配し、アーク起動の判断も全て自分に優先権があると思っていたはずの彼にとってみれば、それは青天の霹靂であつたらう。

「レメゲトン、お前が千年を生きる魔大陸の支配者であるならば、彼女たち一族は魔大陸に生きる……いや、星の大地に生きる者だ。ゆえに、お前の一存でアークを起動することは許可出来ない」

「お前に許可など……！」

「俺は星の代理人であり、お前たち魔大陸、アークの鍵の判断を見守る者だ。控える、今お前がすべきことはパウリナの意見を聞き届け、起動するかどうかを吟味することだ。上位者である俺につまりぬ口をきくことではない」

「ぬっっっっっっ！」

ギリギリと唇から血をしたたらせるほど悔しがるレメゲトンであるが、俺は優しくパウリナに言葉を促す。

「パウリナ、君はどうしたい？ 偽神は打倒し、星の未来を作る為の学校も運営し、将来の人材も育成はしている。だが、将来また邪神の類が襲来することは否定しない。だから、レメゲトンのしようとしていることに理がない訳じゃない」

「わ、わわわ、私が決めるんですかあ　ほ、本当に私はお芋を育てるのが得意なだけの一般人ですよあ　」

「そんな一般人の君が勇気を振り絞って、俺たちについて来た。そんな君の意見が聞きたいんだが？」

彼女はオドオドと、いつも通りに冷や汗をぐっしより掻き、どこか隠れるところを探す。だが、ここは平原だ。隠れる場所などなかった。

なので、彼女は観念したように言葉を発したのだった。

「い、家に帰りたいです……。やっぱり、自分の家が一番落ち着きますもん。生きていたって、生きた心地がしないのはもう勘弁です。へ、へへへ……」

「最後までパウリナちゃんだったね。でもその意見は女王も賛成だよー！」

「正直でいいと感じましたがデューズはどうですか？ 私は、オー  
トマタ種族の女王として、彼女の言葉を支持します」

「ふん、女王がいろいろ言うのなら、補佐が言うことは何もないね  
！ それに私も雑務が国に沢山残ってるんで、早く帰りたいのは同  
感だ」

「ふむ、魔大陸の住人の意見はよく分かった。なるほど、自分の家  
《星》が一番落ち着くか」

俺はパウリナの意見に微笑んで頷く。

「言われてみれば当然の話か。ふふ、賢者を称しているというのに  
一本取られた気分だ」

俺はそう言ってパウリナの髪をくしゃくしゃと撫でたのであった。

「では、アー君？」

「ああ」

俺は裁可を下す。

「星の代理人として決定する。アークの鍵の双方の意見を聞き、パ  
ウリナ・アルス・サロモニスの意見を尊重することとした。アーク  
は起動しない！」

もちろん、女神が数十年後に起床した際にまた違う判断をするかも  
しれない。

だが、今俺がすべき決定はここまでだ。

未来にどんな災禍が再び起こるかなど分からない。

だが、その時はその時で、他の誰かが俺に代わって、この星を守るために奮闘するだろう。

それだけの話だ。

そして、それでいい。

それがパウリナの言った、自分たちの星で生きるといふことなのだから。

俺はそう結論付けたのだった。

しかし。

「許さん！ 許さんぞ！ 俺は方舟を起動させる！ アークの皇帝として君臨し、全てを支配するのだ！ そして」

レメゲトンは叫んだ。

「他の星！ 他の星系！ 銀河を支配する！ 新しい神に俺はなるのだ！」

レメゲトンは突如、自分の心臓に腕を突き立てる。

鮮血が舞う。

「邪魔はさせんぞ、アリアケ・ミハマ！ 星神イシスの代理人よ！」  
そう断末魔を上げながら、台座の上のクリスタルに自分の心臓を埋め込んだ。

「方舟よ、起動せよ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

突如、大地を震撼させる振動が俺たちを襲ったのであった。

### 308・方舟の起動（後書き）

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`””m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^ - ^ \* )

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



### 309・宇宙での攻防

#### 309・宇宙での攻防

「魔大陸が。アークを起動させたか。己の心臓をコアシステムに直接接続させて制御をのっとりたか。だが……」

俺は淡々とその光景を見つめながら言う。

「そのこと自体は無意味だぞ、レメゲトン。お前がアークを起動させたかった目的は女神の意思を汲んでのことではなかった。お前はきれいごとを口にして皆をだましていただけだ。その最終目標は自分が神となり遍く星々を支配することだ」

「今さら気づいても遅い！　こんな星にもはや未練などない！　霧のカーテンが晴れ、錨いかりが外れた今こそ、俺はこの千年の悲願を達成するのだ　見る」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

凄まじい轟音と、上昇による圧力が俺たちにのしかかる。

「スキル　浮遊　全体化　を発動。全員これで重力と相殺出来ているな？」

「おええええええええ！　ぎもぢわるい」

「おええええええええええ！」

勇者ビビアとパウリナが同じようなリアクションをしていたが、とりあえず見なかったことにする。

「で、何をするつもりだ？」

「油断したな、アリアケ！ 俺がこの千年何もしなかったと思うか！ 我が権能は『支配』！ 俺の血をのませることで四魔将をも支配した！ ただの獣であつた奴らすらもな！ ゆえにアークの制御のために我が心臓を捧げることためらに躊躇いはない」

「お前自身が方舟となるか」

「そつだ。そして俺に従わぬ異分子は排除する。まずは大賢者アリアケ・ミハマ。そしてその部下ども」

「俺は部下じゃねえ！ 俺は最高勇者ビビア・ハルノア様だ！」

「船酔いしながらでは威厳がありませんわねえ」

「うぜえなあ。ほれ、激辛の酔い止めをくれてやるよ。ちなみにレツドペツパーの1万倍辛いけどね、きひひひひ！」

「なんでそんなものを持っているんだ……」

勇者パーティーが回復作業をしているうちに、レメゲトンの肉体はドサリと倒れる。

その代わり、今まで深紅に染まった美しいコア・クリスタルが、ど

す黒い光を放ち始める。

「ご主人様、残念ながら私たちはここまでです。これ以上はレメゲトンに私たちの思考システムを侵食されます。停止状態に一時的になりますので、終わったら起こして頂けますか？ せっかくのクライマックスなのに、残念無念ですが」

「エリス達もか？」

「いいえ」

サイスは苦しそうにしながら微笑む。

「最外殻仕様オートマタとは、アークとはあえて切り離された自律システムを持つ個体です。最後までご主人様の助けになるでしょう。うらやましいです」

「分かった。君たちには助けられた、礼を言う」

「もったいないことでございます。我が母のパートナー様……」

彼女はそう言うと、停止状態になる。恐らく他の基本素体も同じだろう。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

更に衝撃音が轟く。

同時に、ブリッジの草原の風景は消失し、狭い部屋へと変わる。と同時に、一瞬にしてその壁面に無数の穴が形成された

「ブリギッテ！」

「はいはい、セイクリッドサークル聖域の盾！」

「ビビア！ そろそろ行けるだろう！ 無敵 付与！」

「辛iiiiiiiiiiiiiiiii！ 痛みを忘れるには何かぶつ潰して誤魔化すしかねえええええ！ ちらあああああああ 魔王iiii加減星剣を返せやあああああああ」

ブリギッテの展開した防御結界に、壁面から高威力の魔弾バレットが乱れ撃たれる！

それらを円状に展開されたシールドによって、ブリギッテは全弾跳ね返した。

「俺より威張ってんじゃねえぞ、この犯罪者ごときがああああ！ てめえが神なら俺はもっと偉い何かだあああああああ」

ビビアは壁面に突っ込むと、俺の譲渡した星剣により、バレットの射出口を次々に破壊してゆく。

「さすがビビアだな。窮地に陥った時、仲間を救うために何十倍と  
いう力を発揮している」

「プララさんの香辛料が効きすぎてただけな気がしますけどね〜。  
後で絶対へばるパターンなような気がしますけどね〜」

横でアリシアが苦笑しながら、周囲を観察してアドバイスを俺に伝

える。

「この部屋は狭すぎますね。ここは既にレメゲトンの体内のようなもの。外の方がまだ戦いやすそうです」

「そうであるな。我も変身するにはちと手狭であるなあ」

「ああ、外に出よう。おーい、行くぞ、ビビア」

「辛iiiiiiiiiii!」

俺たちはブリッジから脱出する。と、次の瞬間、

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ブリッジごと大爆発を起こす。

ディメンション・スピア  
「次元切断!」

ラツカライが次元ごと切除することで炎から俺たちを守る。

こうして俺たちは無事に市街区画まで戻って来ることに成功したのだった。

だが、そこは最初見た時の光景とは全く別のものになっていたのである。

なぜなら。

「空が暗いですね。魔大陸に灯された人工灯によって明るさは保た

れています」

「魔大陸と周辺の海ごと、魔大陸に備わった魔力フィールドで包まれているので、空気などの心配はないようだな」

エリスとデューズが分析結果を報告する。そして。

「あ、見て下さい、アリアケ様。青い星が頭上に見えます。そして、白い星がこんなに近くに。もしかして、これ、は……」

セラの言葉に俺は頷いた。

「俺たちの母星、惑星イシス。そして、その衛星である月だ」  
イルミナ

そう。

既に俺たちは魔大陸という方舟により、惑星を脱し、宇宙を飛翔していたのである。

「その通りだ。アリアケ・ミハマ。いや、宇宙の藻屑と消える儂き者どもよ」

どこからともなく、アークと一体化したレメゲトン。アーク・レメゲトンの声が響く。

「この宇宙という我が胎の中で何もできずに死ぬがいい」

こうして、方舟そのものとなったレメゲトンとの、宇宙における最後の戦いが開始されたのであった。

### 309・宇宙での攻防（後書き）

#### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



### 310・星を裂く者、そして星を導く大神

310・星を裂く者、そして星を導く大神

「くくくくく！　今やこの惑星脱出用星間横断仕様型浮遊艇。すなわちアークこそが、この俺魔大帝レメゲトンそのものだ。その体内にいる貴様らに勝ち目はない」

「ほう、そうなのか？」

「その余裕がどこまで持つかな？　この方舟は宇宙でもし再び邪神と遭遇した際でも戦える力を備えている！　このようにな」

瞬間、アーク市街区画全域を覆うほどの大きさのレメゲトンの顔が現れる。

「それがアークとしてのお前の仮初の肉体と言っわけか」

「その通りだ。喰らえ」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

レメゲトンの口や目が赤く輝くのと同時に、高出力の魔力がほとばしる。

「街ごとやるつもりか！　ここはお前の守るべき魔大陸の住民が暮らす予定の場所だぞ」

「くだらん！ 銀河大帝となるこの俺にとって、街の一つや二つど  
うでも良いことだ！ ましてや魔大陸の住民など俺にひれ伏す存在  
でしかない」

彼はそう叫ぶのと同時に、臨界した魔力を放出する。

「思考する間もなく滅ぶが良い！ 我は星を裂く者、そして星の導  
く大神！」

「5重防壁展開！ 無敵付与 全体化！」

「ラゲナログ・パージ！」

「大結界『赤』」

「対滅大結界！ 絶対神層！！！」

「地獄の氷盾」

星の代理人、聖槍の使い手ラツカライ、現人神ブリギッテ、大聖女  
アリシア、魔王リスキスが防御スキルや魔法を瞬時に展開する。

カッ

白い光が周囲を照らしだし、余りの衝撃に音すらも死に絶える、絶  
対の熱量がアークの表層を焼き尽くす。

時間にして数秒。

だが、その数秒は恐ろしいほど長い。

そして、その光が収まった先にあった光景は、がれきと化したかつての美しい街と、煙があらゆるところで立ち上り、炎が大地を舐める地獄の光景であった。

「ふ、耐えたか？　だが、それがいつまでもつかない？」

レメゲトンの頭部は嗤いながら真上から、正面へと移動してくる。その巨大な顔は彫像のようであり、表情はぎこちなく動くために、不気味この上ない。

「油断したな、レメゲトン、おらあああああああああ」

「ほう？」

隠れてこっそりと後ろに回り込んだ勇者ビビアが不意打ちを喰らわせる。

その攻撃は確かにレメゲトンの後頭部を何度も切り裂いた。

だが、

「愚かな。銀河大帝レメゲトンの力をまだ理解出来ないのか。卑小な人間め」

瞬時にレメゲトンの目に魔力が凝集する。

「ビビアー！」

「分かってる！ うっせーんだよ！ アリアケえええ！」

ビビアは罵倒の声を上げながら反応する。

「避けるなっつーんだろっが！ このクソボケが！ 死ね！」

「な、に？」

意外だったのだろう、レメゲトンが訝し気な声を上げる。だが、既に臨界に達した熱線を止めることは出来ない。

「ふ、余計なお世話だったな。エルガー」

「だから分かっていると云っているだろうが、アリアケ！ 勇者を守るのはこの筋肉の見せどころなのだ！」

フラストレーションを発散するかのように、エルガーは自慢の筋肉を見せつけるようにして、ビビアの前に立ちはだかり、盾を構える。

「 防御力アップ 鉄壁 護国の盾 付与」

カッ

先ほどよりもビビアを狙った一撃は熱量が凝集しており、もはや人智を超えた威力を誇る。

だが、

「アチー！ くそが！ くそが！ くそがあああ！ このへボタンクがあ！ てめえなんてクビだ！ 全部完璧に防ぎやがれえ！」



「彼らもレベルアップしているんですよ！　それが私たち人間の最大の固有スキルなんですから！　神にしても、神もどきにしても、そんな規格外の存在を二体も相手に戦闘しておいて少しも強くならないわけがないんです。精神レベルはともかく！」

「毒舌ですね」

「ローレイさんに言われるのは心外ですね」

その通りだ。神の他にも悪魔とも戦い、師であり神の代理人である俺とも何度も戦っている。

その過程は決して無駄ではないのだ。

それは俺が彼らから巣立つ際、彼らが成長すると確信したからこそ、勇者パーティーをあえて追放されたのだから。

「デリア！　プララ！」

「ちょっと、馴れ馴れしく名前を呼ばないで頂戴！」

「はあー、邪魔くせえ」

デリアとプララも死角から攻撃を開始する！

「デリアへ　クリティカル威力アップ　付与。プララへ　魔力量大ア魔神の血脈　付与」

「銀河大帝だがしんないけど、あんた油断しすぎなのよ！　死にさ

らしなさい！ ハネムーンは宇宙でなくて、海の見えるビーチの予定なんだから！ 祝福された拳 極拳！ 火流星メテオ・シュトルームの渦 ！！！！」

「あたしはどうでもいいけど、ネイルも男もいねえこんな舟は無価値なんだよね。さつさと沈めよ、世界崩壊狂熱地獄アザエル・インフェルノ」

「ぐおおおおおおおお」

デリアの攻撃一撃一撃は、世界で唯一の防御無視攻撃であり、炸裂することにレメゲトンの顔面を削り取るとき削岩マシンと化す。

同時に、その挟まれた箇所を狙いすましたかのように、デリアの魔法が突き刺さった。

「いたそー！ ゲラゲラゲラ！ 雑魚がいきがるからだよ、バカが死ぬ」

「ですわ。おととい来やがれですわ。おーっほっほっほっほ」

「お前らはもう少し口を慎むことはできんのか……、ふう」

高威力の攻撃にさらされたレメゲトンの攻撃が止み、人心地ついたエルガーが苦言を呈す。

「馬鹿が！ 俺の出番がねえじゃねえか！」

「いいじゃないのー。エルガーの後ろで、ウプププ。隠れて震えてたってプププ。歴史書に残してもらえばアーハッハッハッハ！」

「んぎい！ そうは行かねえ！ とどめを刺すのは俺だあ」

「よせ、ビビア！ 大将首を狙いたい気持ちは戦士としては分かるが、まだそいつはっ……………！」

「うつせえ！ 勇者ビビア伝説はここから始まるんだ。せめてクラック冒険者にかかるんだ」

そう言つて、眼から光を失い、気絶して大地に佇立したかのようになっているアーク・レメゲトンへ近づく。

「首を取る……………つっても、首がねえじゃねえか。くそが！ 雑魚のくせに手間ばかりかけさせてやが……………」

「それは貴様のことか？」

「え？」

「危ないですわ」

ドン！

気を失っていたというより、単に行動原理の修正を行っていたのだらう、アーク・レメゲトンは再起動するやいなや、口腔より黒い閃光をビビアに向かって放つ！

直撃は死を免れない。

しかし、デリアがビビアを突き飛ばした。それによってビビアは視線から外れる。



だが、

「デリアー」

その射線上には代わりにデリアーがいる。

既にスキルは切れている。

「まずは一匹」

そんな言葉をレメゲトンの目は語っていた。

「大結界っ……っ！」

「いや」

「アー君？」

俺はアリシアを止める。

なぜなら。

バキイイイイイイイイイイイイ

「ぐおおおお」

どこからか強力な一撃がレメゲトンを殴打した。

その反動によって射線が大きく外れ、焰におおわれる市街地を切り裂くように横断した。その横断した場所からは次々に大爆発が巻き

起る。

「今度は、何だっ……!!」

不機嫌をあらわにしてレメゲトン・アークが言う。

だが一方で、

「呼ばれたからパーティーに来てみただけである！ 誰かと思えばやはりアリアケにシヨンベン太郎ではないか。わっはっはっは！ 相変わらず千年後も盛大な祭りを開催するのに余念がないな、そなたらは」

その声は陽気に満ちていた。

「は？」

「え？」

「ま、まさか……」

「え、マジ？」

ピビアにデリア。エルガーやプララの啞然とした声が響く。

やれやれ。

「助けに来てくれたのか、冥王」

「こらこら、旧い名で呼ぶでない。まるでそれでは我が邪神のよう

ではないか」

彼女はかつての赤い髪、赤い瞳、深紅の鎌……ではなく。

美しい銀髪、アイスブルーの瞳、そして白銀の鎌を持つ姿を現しながら言った。また、姿こそ少女だが、その大きさはレメゲトン・アークに負けない巨人である。

「我は月の女神。イルミナと呼ぶが良いぞ、大賢者アリアケ！」

邪神から惑星イシスの守護星となった女神イルミナは、そう言って快活な笑顔を浮かべたのであった。

「可能性はあると思っていたが、助かる。宜しく頼む」

「うむ！ ま、とはいえ、あんまり魔力を貯蔵できておらぬのでな。千年前のようなことは出来ぬのでそこは容赦するがよい！」

ナイア。いや、イルミナが堂々とそう言う。

だが、何はともあれこれで。

「役者は揃ったな」

惑星イシスの最強戦力、そして協力してくれる別の星の神。

これが今、星をあげて結集できる最大の戦力を結集した状態なのだから。

### 310・星を裂く者、そして星を導く大神（後書き）

#### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`””m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

311・窮地

311・窮地

「ふん、しょせんは惑星イシスにも及ばぬ月の神。これより銀河を支配する大伸となる俺の敵ではない」

「ほう！ なかなか良いではないか。その調子で我が上司とも戦って打ち破って欲しいところであるが」

イルミナは嗤いながら言った。

「人材を粗末にしている点で失格である。そなた一人で戦って勝てるくらいなら、我一人だって勝てておるわ！」

「自分の弱さを棚に上げてよく言ったものだ」

「ふん、弱さを認めて強くなるのだ。あるいは協力をするのだ、小童。その程度のことも分からぬか。そこなシヨンベン太郎ですら悟っておる事実だというのに」

「俺は最強だ！ だから俺を慕って下僕どもが沢山集まってくるんだだけだ。俺を楽にさせるのが下僕ども役目だからなあ！」

「うーむ、口汚いのでドン引きで同意をためらうなあ。であるが、そういうことである。人を否定するそなたは絶対に行き詰まる。要するに楽をしないのは支配には不向きである証拠である。かつての邪神が断言しよう。ひいては、この舟に未来はない！」

「ほざけ。銀河の大伸となる俺を前に不敬である」

だが激高したレメゲトン・アークは姿を消す。

「気配はないな。だが、予想は出来る。バシュータ、フェンリル、どうだ？」

「性格から言えばアレはねちっこい奴です。だから一番嫌な方法で攻撃してくるでしょうぜ」

「であるなあ。まあ、こういう時に外道がやることは決まっておるぞえ」

なるほど、それはつまり。

「人質か」

俺がそう察した瞬間、無数の影が宙に現れた。

「そんな……」

ローレライの信じられないという声が響く。

さもありなん。

「サイスたちか。機能停止しているものを、無理やりプログラムに介入し行動させている訳か」

ゆえにサイスたち自身に意思はない。

レメゲトンの声がどこからともなく響く。

「協力と言ったな。くだらん。そんなものは弱点でしかないことを思い知れ。この四魔将を倒すために共闘した素体たちを破壊し、その協力や仲間といったものが、いかに脆いか、その身をもって知るが良い！」

「来るぞ！」

「数が多いですねえ。お姉さんは10数えるのでやめてしまいたよ」

「ブリギッテ様、千はいますので、せめて百くらいまでは数えて頂けると助かります」

「お二人とも来ますよ」

「はいはい」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

突っ込んで来た基本素体は、躊躇なく攻撃を仕掛ける。

それを二人の聖女が、生身で受け止めた。

「10くらいは大丈夫ですけど、100となるとやや不安ですね、どうでしょうか、アリシアさん」

「とりあえずみねうちですかね」



基本素体は帯状態ではない。だが、市街地を守るための戦闘能力はかなり高い。

一体一体が相当な強さであり、物量で押されれば不利だ。

「面白いのだ！ あていしを魔王と知つての狼藉かー！」

「魔王よ、恐らく聞こえておらんぞえ？」

「分かっているのだ！ とりあえずぶつ壊さないように頑張るのだ！」

「俺も頑張るのじゃ。手加減を！」

本気でやれば負けることはない。

だが、今は操られた人質に戦闘を仕掛けられているような状態だ。

「いやらしい攻撃ですね！ ウインド・ショット！」

「本当だよ！ 素直で純真、天真爛漫な女王の私には理解できないよ！ チラ！ アイス・ストーム！」

「なんですか、今のアリアケ様へのチラ見は」

幸いながら早まってサイスたち基本素体を破壊する仲間はいない。

「ひいひい、こいつらつええええよおおおお……」

「ぐおおお、おい、勇者しつかり戦え……。デリアは何をしている、プララモだ！」

「わ、私さっきので少し腰が抜けましたわ、おほほ」

「あたしは至近距離で戦うの苦手だし、ちょっとパス！」

勇者パーティーは互角のようで、そもそも破壊できないような状況のようである。

「先生、危ない！」

「おっと」

ギイイイイイイイイイイイイ

俺は聖杖キルケオンで防ぐ。操られている分、行動は単純だ。

サイスが俺を狙って来た。腕はブレードの形状に変化しており、直撃すればただではすまないだろう。

「先生から離れなさい！」

聖槍ブリューナクが煌めくが、それを大きく跳躍してサイスはかわした。

「我がパートナー、提案があります」

と、その時、エリスが声をかけてきた。

「一部同期した際に知りましたが、あのサイズは基本素体の統括素体です。あれが機能停止すれば全ての基本素体たちは行動不能になるでしょう」

「それは案外リスクな機構をしているんだな？」

「本来ならば別の基本素体にその役割が引き継がれますが、今はハッキングを受けている状態なので、そのプログラムは発動しません。つまり」

彼女は淡々と言った。

「サイズさせ破壊すれば済む。時に権力者は切り捨てる覚悟も必要と承知しています。同じオートマタ種族として、もし彼女を破壊されても私はパートナーを恨んだりはいしない。どうでしょうか？」

ふむ。

俺は即答した。

「却下だ」

その回答にエリスは、

「そう言うと思いました。では成功確率の低い代替案を提示します」

彼女は後ろにかばっていたパウリナに目を向けて言った。

パウリナは意を決したように、前に進み出る。

「わ、わわわわわ！ わー」

「ふむ。俺ですら分かん。熱意は伝わるのだがなあ」

「残念な少女ですからね。もう一度チャンスを上げましょう。ちなみにそれ以上時間がかかると、物量で押されて負ける可能性がグーンと上がります」

「ひい！ わ、私の心臓を上げます！ レメゲトンもやってたから、私にだって出来るはず！ いえい！」

ダブルピースをしながら言う。

極限レベルでテンパっているようだが、言わんとしていることは分かった。

「だが、それは難しいだろう。どうやって心臓を取り出す。あれは千年生きた化け物だ。君は違うだろう」

「信じてますから！」

チュツッ！

「え？」

「は？」

「のじゃ」

俺はあっけにとられ、エリスは感情らしきものを瞳に浮かべ、そし

て偶々近くにいたコレットは驚愕の表情を浮かべていた。

いきなりキスされるとは思わなかったので、隙をつかれた。

そして、その隙についてパウリナは行動する。

「さっきブリッジの扉を開いた時に、頭の中に色々な知識が流れ込んできたんです。だから今ならレメゲトンと同じことが出来ます！  
アルリビ・アシエル・エイヌヌ・ラクコアフ・アーク！」

彼女の胸元。いや、

「全身に紋様が広がっていく」

「これが鍵として覚醒したパウリナさんの力……」

「邪魔をするな、パウリナ！ 基本素体ども何をしている。奴を止める！」

サイスたちが一斉にブレードを槍に変化させ、投擲のポーズになる。

だが、一斉のその姿勢のままピタリと止まった。

「なぜだ」

「決まっているだろう。アーク・レメゲトン」

俺は微笑みながら言った。

「彼女がお前よりも上位の鍵。アークの艦長として選ばれたからだ。  
キヤンテン

いかに操ろうとも、傷つけることはサイスたちの原理上出来ない！」

「なっ そんな小娘に、この大伸たる俺が敗れたというのか」

レメゲトンは声を荒げる。

「信じぬ！ ふざけるな！ 俺はっ」

「今のうちだ！ パウリナ！ アリシアはこっちへ！」

「私の心臓はただの器官ではなく、力を象徴するもの！ 深部より生じた魂と生命力が宿りし果实！」

その詠唱と共に、彼女の心臓……。

いや、

「さつき見たアークのコアのようなのだ！」

それは動きを止めたサイスに近づき、ゆっくりと吸い込まれて行った。

そして。

ブシューウウウウウウウウウウウウウ！

全基本素体が機能を停止し、空中から落下し始める。

「スキル 衝撃緩和」

打ち所が悪いとただではすまないからな。

それよりも、

「アリシア！」

「蘇生ヘルツ・カイト魔術を使用」

「蘇生確率上昇のために 聖域の加護 付与！」

「パウリナさん！ 死ぬのは大聖女の前では許しませんよ！ キスのいい訳聞かせてもらいますからねー」

温かく神々しい光がパウリナを包む。周囲には花弁が舞い、奇跡が顕現するのが視覚的に認識されているのだ。

そして。

「う……うほ……うほ！」

パウリナが蘇生する。何度見ても奇跡とはあっさりと俺と言う人智すらも超越する。

「馬鹿な そ、蘇生だと そのようなことは神の俺にすら出来ぬのに！」

レメゲトンの悲鳴じみた声が聞こえてくるが、アリシアはフーと額の汗を拭う様にして笑顔で言った。

「少なくとも人を助けたいとも思わないあなたには不要な術ではな

いですが、レメゲトン・アークさん？」

その言葉は皮肉がきいていて、俺は思わず吹き出してしまっただった。

そして、同時に、

「おのれ！ 舐めるなよ、たかだか人形どもを敗った程度で　神の怒りに触れるが良い」

レメゲトンの咆哮が魔大陸へ鳴り響いた。



### 311・窮地(後書き)

#### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にあり  
がとつございますm(´`””m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 312・破滅をもたらす大神

312・破滅をもたらす大神

レメゲトンは再び、顔だけの状態で俺たちの前に姿を現す。

だが、その表情は先ほどまでの余裕のあつたものではなく、怒りに満ちた憤怒の形相と化している。

「許さぬ。どこまでをこの神たる俺を愚弄しおって」

「そなた程度では荷が重いというのに。我が言うのだから間違いないぞ？ そなたは星に戻って畑でもいじって日々暮らすのがお似合いであると思うがな。とても為政者として有能には思えぬ。あ、これも女王やってた我が言うから間違いないぞ？ ぬわっはっはっはっは！」

「黙れ！ たかだか月の女神ごときが大言を吐くでないわ！」

彼女が元邪神であることを、レメゲトンは知らないのだ。

やれやれ、知らないことは幸せなことだな。

「ならば、これでどうだ！ 所詮は貴様たちは人間！ 神たる俺と違い、宇宙で生きることが出来ぬ！ 死ぬがいい！」

まさか？

「魔大陸を。アークを包む保護フィールドを解除するつもりか？  
そんなことをすれば魔大陸に住む生命全部が死に絶えるぞ。分かっ  
ているのか？」

「そんなことよりも、俺が勝利することが大事だ。生命など、また  
どこかの星で見つけ、増やせばいい」

「愚かだな。そんな神が人に認められる訳もない。世界が歓迎し、  
権能を渡すと思うか、レメゲトン」

「無論だ。強さこそがその証となるのだから！ 喰らうがいい、  
アリアケとその一行よ！ これで終わりだ」

レメゲトンが再び消える。

と、同時に。

パン

「あ奴、まじで魔大陸を覆っていた3層あるフィールドのうちの1  
つを消滅させおった！ このままでは魔大陸の生命はすぐに消滅す  
るぞ！ どうする、アリアケよ！」

「あれは破滅をもたらす神にはなれそうだな。邪神のようだ」

「あんな奴と一緒にするでないわ。私の格が落ちてしまっただろう  
！」

真剣にイルミナが抗議する。

「じゃが、本当にどうするのじゃ、旦那様。あやつの言う通りむき出しにされれば魔大陸の生き物たちはすぐに死亡するじゃろう」

「そうだな。魔大陸に来て知り合いも増えたからな」

「マーメイドのお姫様なんかは、なかなか離してくれませんでしたもんねー、アーくん？」

「む、そうだった、かな？」

俺は頬をかく。

「それでアー君。もう作戦は出来ているんでしょう？ 私の大賢者様？」

アリシアの。妻の信頼する瞳はいつも俺を勇気づけてくれる。

そして。

「うむ！ 旦那様といればどんな窮地もへっちゃらなのじゃ！ 我が唯一の乗り手である竜騎士様なのじゃからな！」

「はい、お姉様！ 先生に出来ないことはありません！」

コレット、ラツカライも笑顔を浮かべる。

「女ごころを理解すること以外はのう」

「本当です。そろそろ上限人数を決めるべきだと思います。第99回女子会をしましょう、女子会を」

フェンリルとローレライの意見はよく分らないが……。

「我がパートナー、私はあなたを信頼している。だからあなたの言葉で命令されたい。さあ、何でも言いなさい。あなたのパートナーである私に」

「私もアナタの力になりたい……。えっと、別に他意はないけどな……」

「女王もね、ここは一つくっばらないといけないなって感じだよ  
くっばっていいこう！ セラちゃん！」

「もちろんです。ファンクラブ会長として、アリアケ様の雄姿は全  
てこの瞳におさめなければ。そのために蹴っばるのは当然のこと  
ですとも！」

「あー、まあ俺も頑張りますよ。旦那は先を見通し過ぎますからね。  
足元が心配ですから」

他の者たちも信頼を俺に向けてくれる。

「ありがとう、みんな」

俺は微笑む。彼らの信頼がなければ、俺は戦えない。

「俺自信に戦う力ない。全ては俺を信頼し力を貸してくれる彼らの  
力あってこそだからな。みんな力を貸してくれ」

「……もちろんです」「……」

みんなの声が一つになる。

「はっはー！　しゃーねーなー！　アリアケが俺に頼るんなら、ち  
ーつとばかし力を貸してやるかー！　くあー、最強勇者様の力をい  
つも頼りやがってよー」

「ふ、そうだな。宜しく頼むぞ、ビビア。まだお前には大切な役割  
が残っているからな」

「へ、へへへへ！　わーってるわーってる！　最後の一撃！　とど  
めやはり最強最高勇者の俺の出番だよなあ！　ぐへ、ぐへへへへ  
へ！」

「ダーリン、笑い方が邪神よりすわ」

「うむ。それに俺たちも当然活躍できるのだろうな、アリアケ！」

「ネイルが割れない感じでよろー」

「もちろんだ。勇者パーティーのことは頼りにしている。むしろ、  
この戦いに必要不可欠だ」

その言葉に、勇者パーティーたちも意気軒昂となる。

「ひゃーっはっはっはっは！　この星剣が火を吹くぜー！」

「大丈夫なのじゃ？　なんか最後操られてこっちに剣を向けて来る  
ぐらいが関の山のような気がするのじゃが？」

「コレットちゃんの予感は今も未来予知なみに当たりますからねー。やっときますか？」

「やるなやるな」

俺は苦笑しながら止める。

と、その時。

バリッ

「2つ目か。実質最後のフィールドだな。次が破られればこの方舟は終わる」

「ひ、ひい！ 早く作戦をいいやがれれれれれ！」

「声が震えているぞ、ビビア。作戦と言うのは簡単だ」

俺は単純明快に答えた。

「星に方舟を接舷させる」

ただ、それだけだ。

「……はああああああああ」

理解できないとばかりの音が轟いたのであった。



### 312・破滅をもたらす大神（後書き）

#### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

### 313・女神イルミナの権能

313・女神イルミナの権能

【Sideレメゲトン】

「くくく、後一枚だ」

俺は嗤う。

この方舟の制御はほとんど自分の手にあるが、無理やり制御を奪ったこともあり、命令がすぐに通らない。

そのために、少し時間がかかってしまった。

だが結果は変わらない。

アリアケ・ミハマたちは結局、自分の体内にいる虫けらでしかない。

だから、俺が少し本気を出せば、すぐに排除できるのだ。

そう。

アークを覆うフィールド。宇宙と内部を隔てる強固な透明な魔力フィールド。

これがなければ、奴らは生きていけないだろう。

もちろん、魔大陸の生命も死に絶える。

だが、俺が宇宙を飛行し、遍く銀河を支配し、大神として君臨するという大義の前では、些末なことではしかないだろう。

俺は歪に唇を歪める。

「やっとか」

少々時間がかかってしまった。

だが、これで終わりだ。

最後の魔力フィールド。

その解除権限が俺の元に届けられたのだ。俺はその権限を行使することを決定す……

ドゴオオオオオオオオオオ

「ぐああああああああああああああああああああああああああああ」

アークそのものとなった俺にすら届くほどの甚大な衝撃であった。

まるでアークが流星にでもぶつかったような衝撃に、俺は思わず怒声を上げる。

「何があった！ もう少してアリアケたちを宇宙の藻屑に……」

出来ると言っのに。

そう言いかけた俺の意識はそこで止まった。

理解できなかったのだ。

なぜなら。

「なぜだ……」

俺は啞然とした後、驚愕に震える。

「なぜアークが星に不時着しているのだ　先ほどまで確かに俺は  
宇宙を航行していたはずが」

その叫びは、しかし、やはり一人の男の声によって遮られた。

「レメゲトン。さあ、地上に戻って来たぞ。さっさと始めようじゃないか」

始める。

始めるだと。

俺は理解が出来なかった。一体何を始めると言っのか。

「お前は星々を支配するつもりなのだろう？　なら、この星も支配  
してみてはどうだ？」

この星？



### 313 女神イルミナの権能（後書き）

#### 【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm(´`””m)

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

#### 【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一郎さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。



### 314・大神レメゲトン

314・大神レメゲトン

「もはや手加減はせん！ アリアケ・ミハマああああ」

再び現れるのはレメゲトン。

だが、その表情は更に不気味に歪んでいる。

その野望の大きさと、アークを従える権能により、邪神へとなりかけているのだ。

大神レメゲトンという呼称はあながち間違いではない。

「これが最終決戦だ！ イルミナはアークを縛り付けるので全力を傾けてくれている！ だが、もって3分。その時間で決着をつけるぞ！」

「少なすぎんだろうが」

「仕方ないだろう。惑星イシスの最大の戦力、月の女神、そしてアーク体内ではなく地上戦に持ち込めたこと。サイスたちをパウリナが制御に成功したこと。これ以上の好条件はもしもう一度やり直しても整うか分からない」

「ほら勇者、さっさとやりに行くのだ！ 勇者と魔王の共闘<sup>ワルツ</sup>なんて、なかなかチャンスはないのだ！ 楽しんで踊るのだ！」

「そんな物騒なダンスは御免こうむる！」

「まあ文句を言っていないでも始まらぬからのう」

「そうですね、トルネード！」

「爆裂弾も目くらまし程度にはなりますかねえ」

フェンリルにセラ、そしてバシュータが攻撃をしかける。

「よし、行くのだ！ バベル・ニヴルヘイム 地獄の氷槍！」

「ちくしょおおおおおおお！ アリアケ支援寄せせ！ 死にたくない ロンドミア・ワルツ 究極的終局乱舞ああああああ」

「いくらあがいても無駄だ！ 喰らうが良い！ 星を裂く呪殺の炎よ」

最初よりもより高出力の魔力の渦が、レメゲトンから放出される。恐らく魔大陸の全てのリソースを使用しているのだ。

しかし。

「ふっ、時間稼ぎをされたらどうしようかと思っていたが、みんなが攻撃を仕掛けたことで、向こうも全力を出してきたな。相手が全力なら、それは相手の限界が見えて来た証拠に他ならない！ ならば、死中の活を拾うぞ、アリシア、コレット！ 頼む！」

「了解」

ゴゴゴゴゴゴゴ！

カッ

数十倍の大きさに肥大したレメゲトンが、俺たちを睥睨するようにしながら、目と口から呪殺の炎を放出する。

防御することは可能だ。

だが、この地上戦という好条件は時間制限がある。ゆえに。

「決戦 付与！」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ」

コレットが美しき金色のドラゴンへとその身を変える！

「大結界生成 大天使の息吹」

彼女の大結界と大天使の息吹。これで敵の攻撃はかなり防げる上に、自動回復の効果が発揮される。

即ち、

「なぜだ なぜ前進できる この業火の前で！ 恐怖はないのか」

レメゲトンの放つ 星を裂く呪殺の炎 に身を焼かれながらも、コレットは突き進む。

しかも、

「うわははははは　これはたまらんのじゃ！　めっちゃ熱いのじゃ」

「分からぬ！　解せぬ！　なぜ止まらぬ！」

「そんなこと決まっておるのじゃ」

気づけばレメゲトンの目前にゲシュペント・ドラゴンはいた。

そして、その口腔に最大級の魔力が凝縮していく。

「愛の力じゃ！　大好きな旦那様と大好きなアリシアが全力で僕を信頼してくれるならば！」

彼女は一気に魔力を解き放つ！

「僕はその信頼に答えるまでなのじゃ」

「ぐああああああああああああああああああ」

ドラゴンブレスを至近距離より浴びたレメゲトンの彫像のような顔に、ビキリ！　とヒビが入る。

「く、くそ！　離れよ」

レメゲトンはとっさに暴れるようにして、コレットを引きはがす。

「はあ、はあ、許せぬ。神に対して何たる不敬なことを。この怒りの雷撃を受けるがよい！」

今度は魔力を雷へと変換し、広域に対して超強力な雷撃による攻撃を開始する。

「ラツカライ！」

「はい！ 了解しています！ 聖槍ブリューナク奥義！」

「何をしようとも無駄だ！ 雷撃の方が早い！」

「だから、いいんです」

「なに？」

後の先。ラツカライの神髄はそこにある。すなわち、相手に先に行動させ、それを利用して攻撃するのが彼女の最も得意とする攻撃なのだ。

ゆえに！

「聖槍固有スキル      カウンター！      対神極光・無の型      ！」

雷撃は見えない。だが、それは聖槍に選ばれた彼女にとってハンデではない。

体は勝手に反応し、彼女への落雷はブリューナクが吸収する。

と、同時に、

「極光の節理よ反転し、神すらも滅ぼせ！ 対神極光ブリューナク  
！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

見えない攻撃すらも反撃可能なラツカライによって、雷撃のダメー  
ジをレメゲトンは負ってしまう。

「なぜだ！ なぜこれほどまでに追い詰められる！ 神たる俺が！  
方舟そのものになったこの俺が」

「なんだそんなことも分かっていなかったのか、レメゲトン」

「なに？」

俺の言葉が意外だったようで、レメゲトンは驚く。

だが、答えはやはり簡単なことだ。

「お前は常に玉座の上にいた。かつては皇帝であり、今は神として。  
だが、そうして上位存在になればなるほど、それは弱点になる。な  
ぜなら、上位なる者が悪になりし時、人によって滅ぼされることが  
運命だからだ。それは宇宙の摂理であり、ゆえに惑星イシスの神々  
は誰一人、ヒトを侮っていないかった。邪神ナイアすらもな。お前は  
その基本すら出来ていない。神のなりそこねだ」

「なりそこね、俺が！」

「神はなりたくてなるものではない。神になりかけの俺が言うんだから間違いない」

俺は淡々と事実だけを言う。

「だからもう、それくらいにしておけ。お前に神は向いてない」

それが最後の説得だった。

しかし。

「おのれ！ 認めん！ もういい、俺が神であろうが、なれまいが！ 全てを破壊する！ アークも、貴様らも、そしてこの月も。最後は惑星イシスすらも」

そう叫ぶと、奴は更に膨張していく。

だが、それはこれまでのように魔力を放出するためのものではなかった。

「そうか。哀れなる暴走する神レメゲトンよ。俺たちごと巻き添えにして自爆するつもりだな」

「さすがにそれで月が消滅してしまえば、我らとて無事ではすまんであろうなあ」

「イルミナ族も困るのだ！」

「ですが、どうすれば？」

「時間がありやせんな」

「勇者パーティーに盾になってもらっても無駄ですよね」

皆の意見はもつともだ。それに時間はほんの10分ほどしか残っていないだろう。

だが、

「もともと奴は全てを破壊しようとしていた。自爆だろうがなんだろうが、対処法にさほど変わりはないさ。エリス、デューズ、パウリナ」

「何でしょうか、我がパートナー？」

「自爆する相手を止めるのは難しい。だとすれば遠くに破棄するしかない、そこでだ」

「そうですね、では私が犠牲になりましょう。幸いまだ推進余力は残っている。出来るだけ遠くまで運びましょう。と言うわけでデューズ後は宜しくお願いしましたよ。ただ、その代わり……」

「待て！ 最後まで勝手なことばかり。ふん、王国には貴様のような女王でも必要だ。私が行く。ふん、その代わり、だな……」

「いや、お前たち。何か勘違いして……うむ」

「はわわわ！ 公衆の面前でチューなんて。何て破廉恥な」



「お前が言うな」「

エリスとデューズが言った。

やれやれ。

緊急事態なのだ。俺は頭をすぐに切り替えて説明する。

「そうじゃない、そうじゃない。パウリナ。君の力でエリスとデューズの意識を別の素体に移したりはできないか？」

「へ？ それは出来ますけど……」

「エリスとデューズは自動操縦モードにして、レメゲトンを遠くまで運んで欲しい。もちろん、意識は違う素体に移した後でな。出来るか？」

「なるほど。欲しいのはこの身体だけということですね」

「機能だけな」

そして、これが肝心なところだが。

「残り時間は10分もない。可能であれば太陽近辺まで運びたいと思っっている」

「それはさすがに無理ではないでしょうか。何万キロと離れています」

「ああ、だから俺たち勇者パーティーが行く。ビビアとアリシア、

頼むぞ」

「あ？」

「アー君？」

ビビアたちから素っ頓狂な声が聞こえたが俺は無視して続けた。

「一番活躍したがっていたからな。まさに最終局面だ。これ以上の場面はないだろう。それに追放されはしたが、それまで長く一緒に旅してきたことには変わりはない。今回の作戦は連携力が必須だ。最適のメンバーと言えるだろう」

「あばばばばば　いやいやいやいやいや！　ちょっと待て！　ちょっと待て！　いや、嫌だ！　俺は行きたくねえ」

「無論、死ぬかもしれない危険なクエストだ。だが、勇者だからこそその恐怖に打ち克てるだろう」

「あひひひひひひひひひひ」

「全然打ち克ってないようですけどねえ。他の皆さんも。まあ、私はアー君と一緒に別はどこにでも行きますけど。ところでアー君、彼らが平静になるのを待ってる時間はないですよ。作戦を教えてくださいな」

「ああ、そうだな」

その作戦を聞いて、ビビアたちからは更なる阿鼻叫喚が漏れたのであった。

「助けてくれえええええええええええ」

「まあそんなに嫌がることはないだろうに」

作戦は簡単だ。

太陽の方向を目指し、レメゲトンで大結界に包み連れて行く。

だが、通常の飛行では太陽にたどり着くことは出来ない。

宇宙で爆発させてしまえば、地上にどういった被害が出るかは不明だ。

そこで、まず全員で太陽の方向に向かって飛行を開始する。

そしてある程度のところで、一人が他のメンバーを押し出す形で加速を助けて離脱する。

これを繰り返すことで、超高速で移動することが最終的には可能になるのだ。

無論、全ての加速スキルなどは使用しながらのこととなる。

最終段階のスピードは凄まじいものになるから、俺が担当するしかないだろう。

大結界を張ってもらう関係から、アリシアは最後から二番目だ。

「よし、行くぞ！」

「必ず勝つてくるのじゃぞ！ 旦那様！ 愛しているから帰ってきたら結婚するのじゃ！」

「先生、僕もです！ いえ、私もです！ 帰ってきたら一緒になりましょう！ 約束ですよ！」

「我もそのように頼むぞえ？」

「え……えつと……？」

「はいはい。女子会で話し合いますよ。女子会で！ さ、エリスさん、デューズさん。初期加速お願いします」

「……」

既に意識を他の基本素体に移した二人の身体に意識はない。合図とともに俺たちを結界ごと運んで行く。

「離せえええ！ おのれ！ 最後までこのような！」

「やれやれ。スキル サイレス」

「おのれええええええええええ ……」

これで静かに、

「ちくしょおおおおお！ アリアケええええええええ！ 許さねえか



悪態をつくビビアをエリスの素体が回収して、イルミナの方へ戻って行く。

「アリシア、君もそろそろ」

「んっふっふー。嫌です」

「は？」

意外な返事に俺は驚く。しかし、彼女は嬉しそうに微笑むと。

「相変わらずニブチンですねー、アー君は。太陽の近くにあなた一人でなんて行かせる訳ないじゃないですかー」

「だが危険だぞ？」

「だからこそですよ。もし死にかけても。死んでも。私が何度でも蘇生してさしあげますから。知ってますか、アー君。私、結構重い女なんですよ？」

「そうなのか？」

「そうですね。だから、今回のメンバーに選んでもらえたの、実は嬉しかったんです。ふふふ。ねえ、ところでアー君。気づいてますか？」

「何がだ？」

「レメゲトンさんですが、恐らく爆発を早めようとしています。魔

力飽和の速度が早まっていますから」

なるほど。せめて一矢報いようとしているようだ。

「とすると、やはり最後の一押しがいるな。アリシア、頼めるか？」

俺が加速して太陽に近づく必要がある。

スキルを使用すればなんとかなるだろう。

しかし。

「それだともし失敗した時に蘇生できないじゃないですか。大却下です」

「だが」

「むしろ逆にしませんか？ 私にスキルをかけてもらってですね、私が加速してレメゲトンさんを太陽で自爆させるようにするんです。名案でしょう？」

俺はその言葉に苦笑して。

「OK………というはずがないだろう？ 俺はお涙頂戴な話は昔から嫌いだな。やはりハッピーエンドじゃないとなあ」

「あー、確かにアー君に読んでもらった本《物語》は全部そうでしたねー」

ならばどうするのか。答えは簡単だ。

「二人で力を合わせるか」

「はい、大賛成です。私のアー君！ 大好きです！」

「スキル 攻撃力アップ。デューズ、すまないな。お前の素体は壊してしまう」

「すみません、デューズさん！ 戻ったら、美味しいお料理をごちそうします！ 聖女さんパーンチ」

ドゴオオオオオオオオオオ

渾身の一撃でデューズの素体が爆発を起こす。

それによって更に加速が生じた。

このまま確実に太陽の中でレメゲトンを自爆させなくてはならない。

「このまま行くぞ、アリシア！」

「太陽の中にまで来れるなんて、アー君といると退屈しませんね。大結界を常時発動。やれやれ」

「ぐ、ぐおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

太陽の中に入る。

そこはアビスのような灼熱の地獄。



生命が生きていける環境ではない。

そして、その時は来た。もうスキルは解除していいだろう。

「さらばだ、レメゲトン。せめて安らかに眠るといい」

「おおおおおおおおお！ おのれ！ なぜだ、なぜこれほどの差がある！ 俺は神になるはずの男だったのに！」

その言葉に俺は微笑みを浮かべて答えを伝える。

「支配するのが神ではないからだ、レメゲトン。次生まれ変わる時は俺の弟子になるといい。神がどう振る舞うべきか教えてやれるだろう」

「ぐ、ぐおおおおおおおおお」

ドオオオオオオオオオオオオオ

魔力が飽和し、大爆発を起こす。

それはまるで星の爆発に匹敵する規模であり、太陽の中で爆発させていなければ、恐らく惑星イシスやイルミナにも大きな被害が出ていただろう。

「ぐっ」「きゃっ」

そして、その爆心地の間近にいた俺たちもその余波をもろに受けた。

俺とアリシアは抱き合いながら、彼女の結界に守られながらも、宇

宙のどこともしれない方向へ吹き飛ばされたのであった。

### 314・大神レメゲトン（後書き）

【小説・コミック情報】

コミック第3巻、ノベル第6巻が発売中！

小説・コミック共々大人気です。支えてくれた皆さん本当にありがとうございますm( \_ \_ )m

【無料試し読み】できます。ぜひぜひ、ご一読くださいませ）\*  
^-^\*）

（小説）<https://magazine.jp.square-enix.com/sqexnovel/series/detail/yuusyparty/>  
（コミック）<https://www.ganganonline.com/title/1252>

【1st anniversary記念PV】

SQEXノベル1周年記念に、PVを作成頂きました。

<https://youtu.be/iNAobmIPNhk>

CV：井上 喜久子さん・保志 総一朗さん  
公開中！！

【応援よろしくお願いします！】

「面白かった!」

「続きが気になる、読みたい!」

「アリアケたちは一体この後どうなるのっ……」

と思ったら

下にある

から、作品への応援お願いいたします。

面白かったら星5つ、つまらなかったら星1つ、正直に感じた気持ちでもちろん大丈夫です!

ブックマークもいただけると本当にうれしいです。

何卒よろしくお願いいたします。

エピソード

「やれやれ、やっと人心地ついた」

俺は月を見ながら嘆息する。

宇宙空間に妻と一緒<sup>アリシア</sup>に吹き飛ばされるといふ稀有な経験をしたが、何とか無事にイシス星へと仲間たち全員と帰還することが出来た。

その理由は、レメゲトンの支配から解放されたサイスたちと、基本素体に意識を移動させたエリスやデューズが再起動し、数千体のオートマタを率いて探索し、宇宙を漂う俺たちを拾ってくれたからだ。今、こうして俺が自国オールティに戻り、こうしてバルコニーでのんびりと夜空を見上げることが出来るのも、彼女らのおかげである。さて、そんな彼女たちであるが、

「魔大陸とは違う食事文化、実に興味深いですね。調査意欲が絶えません」

「女王！ あんたはいい加減仕事をしろ！ いつまでここにいるつもりだ」

「愚問ですね。全ての料理のレシピをこのメモリーでパンパンにするまでです。それにあなたも別にそこまで嫌がっているようには見

えませんが？」

「い、いやあ、それは……」

エリスとデューズが言い争っているが、いつものことである。デューズが頬を妙に染めている理由までは分からないが。そしてもう一人、

「上げて行きましょう！ 明日は元気に街道作りです」

サイスのご機嫌な声が響いた。

そう……三人とも、まだここにいるのである……。

いや、まあ確かに魔大陸は現時点では起動しなことを決定したから、ある意味休息期間であることは確かなのだが。

「なぜ、俺の国にいる？」

「魔王リスクスに旅館『あんみつ』での湯治に誘われましてね、あれはいいものです。料理も様々、文化そのものがお宝であるという新しい概念を、私は理解したのです。ぜひ習得して魔大陸に持ち帰らねばなりません」

「うまいこと言っているが本音は？」

「食べ足りません。ちなみに我がパートナー。あなたの料理も楽しみの一つです」

やれやれ。

「ま、料理を通して、今まで交流のなかった魔大陸とエンデンス大陸が理解し合うというのは良い方法か」

「さすがは我がパートナーです」

まだしばらくは滞在しそうな女王エリスたちであったが、まあ、幸せそうだから良いだろう。

月を見上げれば、あの女神イルミナが「どわっはっはっは！」と笑っているような気がした。

……まったく、あいつには助けられたな。俺はそう思って、月に杯を掲げた。

さて、俺は国王でもあるが人魔同盟学校の校長でもあるので出勤する。

道中で生徒たちに出会う。魔族のルギに人間のフィネ、ドラゴニユートのキュールネーにエルフのソラ。そしてワイズ神の分体ピノをあわせた5人だ。

「あ、先生、おはようございます」

「はよーん！ 先生！ 聞いたぞ、宇宙に行ったんだろ？ どんなところだった？ どん

「相変わらず規格外な活躍をしているんですね」

「もう少し休むべきではないでしょうか？ 働き過ぎたら過労で倒れますよ！」

「魔大陸の皇帝までされて、お人好しが過ぎますね」

今回の活躍は既に市民たちの知るところだ。魔大陸との霧のカーテンが失われた以上、原因と経緯を各国に報告する必要があった。ただ報告をしたところ、賞賛と感謝の言葉。並びにいつの間にか民間に武勇伝として今回のいきさつが物語風に伝搬することになってしまったのである。

「一体、いつになったらのんびり暮らせるんだ？」

俺は困った様子で言うが、

「きっとワークホリック体質なんだよ、アリアケ先生は！」

「FINEにしては正鵠を射た意見ですね」

FINEの言葉を間髪入れずルギが支持した。

やれやれ、そんなことは断じてないんだがなあ。

まあ、とはいえ、

「FINEとルギのように、種族を超えて仲良くなれる奴らが暮らせるように、ほどほどに頑張るさ」

「「なっ  
「」



顔を赤らめる二人を笑ってから、俺は一足先に校舎へと向かうのだった。

さて、校務も終わり、視察も兼ねて寄り道をして帰ることにした。

目的地の一つ目は、

「まあ、ようこそ旅館『あんみつ』へ。国王様一人ご案内です！」

「ようこそ、アリアケ様!!!」

そう、旅館『あんみつ』である。ここは他国の要人が逗留する特別な施設でもあり、時折俺も訪れて様子を見るようにしているのだ。かつて助けた獣人族のハスとアンもここで従業員として働いている。

ところで、今日泊っていたのは、

「おおー、アリアケっちも来たのだ？ いいお湯だったのだ。それにしても、今回は宇宙戦だったし、きつとアリアケっちもお疲れなのだ。ゆっくりしていくべきなのだ。そう、この魔王もさすがに疲れたので、こうしてブリギッテ女将の世話になっているのだ」

魔王リスキスト、

「まあ、たまにはこうして羽休みも必要ですしね。アリアケ様のグッズを魔大陸へ展開する前に休息も必要です！」

セラ姫と、

「ミルノーちゃんも今回は頑張った！ だからこうやって自分へのご褒美をあげてるんだ！ いいよね！ 女王にだって休息は必要なんだから！ちゃんと大臣たちにも連絡して、『いなくても全然大丈夫』っていう返事もあつたから！」

ミルノー女王だった。図らずも王族グループだ。

と、そんなことを思っていると、リスキスが首を傾げて言った。

「ミルノーっち、その大臣たちの『いなくても全然大丈夫』って、それはそれでどうなの？ ……ん？ あれ、っていうかあていしも、もしかして、魔王国でそういう扱いになってるかもなの？ めっちゃ不安になつてきたのだ」

「あれ、あれ？ 私って要らない子って言われてる？ あれれー？」

不安になる二人につられるように、セラも首を傾げ始めた。

「そう言えば、私もグッズ展開の話ばかりお兄様にしていたら、最近、お兄様からは『好きにしていよいよ』という生温かい返事しかかえって来ないようになってきている気がします」

三人はテンパリ始めながらも、

「大丈夫ですよ。きっと何とかありますよ。さあ、それより美味しいお料理が待ってますよ。お酒もご用意してますからね。あ、ハスさん、アンさん、配膳のほうお願いしますね」

「はい！ それではアリアケ様、失礼します」

二人は廊下の奥に消えていく。

一方、魔王たちは、

「そ、そうなのだ。うんうん、きっと何とかなるのだ！」

「そうだよね！ ミルノーちゃんが要らない子なはずなかった！  
アハハハハ」

「私はエルフの姫、ちゃんとエルフの里の木材交易なんかにも貢献してるから大丈夫なはず。大丈夫、大丈夫、ふ、ふふふ」

そう言つて、何だか不気味な様相で笑うのだった。

「ブリギッテ。確かに居心地の良い最高の宿を作つて欲しいとは言つたが……、この三人を見ていると微妙に洗脳状態のように思えるのだが……」

「アリアケ君も利用して行つてくださいよ。いつでもこのブリギッテお姉さんが、超特別サービスをしちゃいますからね」

そう言つて満面の笑みを浮かべるが、どうにも嫌な予感しかしないので、退散することにした。

あの三人はあのままでいいのだろうか……。

「ま、まあ、あまり深く考えないでおこう」

もう一つ寄る場所があることだしな。

俺は旅館から帰宅途中にある農地へやって来た。

そこで芋作りをしている一人の少女がいたので声をかける。

「魔大帝パウリナ。精が出るな」

「ふわああああああああ」

俺の挨拶にその少女。魔大帝パウリナはなぜか悲鳴を上げた。

「どうした、魔大帝。何かトラブルか？」

「王様、その呼び方やめてくださいよ」

ドヨンとした表情で言った。

「仕方ないだろう。魔大陸は再度スタンバイ状態になって、元の位置に戻ったが、もうあのレメゲトンはいない。魔大陸を唯一起動出来るアクセスキーであり、またサイスたちを操る権能を持つ君が魔大帝になるしかないからなあ」

「ほえええ　お芋をふかして食べたいだけの人生なのに、いつの間にかこんなことに」

「まあ、サイス達が全力でバックアップしてくれるだろう。それに余り気負う必要もないさ」

「そ、そうなんですか？　な、なぜですか？」

彼女は疑問を浮かべるが、俺は微笑みながら答える。

「いざとなれば、俺が助けるしな」

「お、王様！　そ、そうですね、さすが王様です！　け、結婚してくださいー！」

「ははは、それだけ冗談が言えるなら大丈夫だ」

「冗談じゃないのに」

まあ、ともかく彼女もこの国でゆっくりしていけばいい。ここは誰であれ受け入れる国なのだから。

「ただいま」

俺は玄関をくぐる。すると、

「お帰りなさい、アー君」

「ただいま、アリシア」

愛しい妻が待っていてくれた。まあ、彼女も人魔同盟学校の先生なので、職場でも会ってはいるのだが。

「今日のご飯はアー君の好きなパスタですよ。むっふっふー、楽しみにしていてくださいね」

「ああ、俺も手伝おう」

そう言って、奥の厨房へと入ろうとする。

が、

「ふむ、主様、それには及ばんぞえ。我が手伝っておるゆえな。ゆつくり休んでいるが良からうて」

「そうですね、アリアケ先生にはちゃんと休んでもらわないと。心を込めた料理を美味しく召し上がってもらうことが、先生のお仕事です！」

「わしのプレスで美味しく炒めた焼肉をぜひ堪能すると良いのじゃ」

「私は盲点であるところの、食後のデザートを用意しておきますね」と、そんなアリシア以外の声が聞こえて来た。

厨房をのぞけば、エプロン姿の美少女五人が広めのスペースで分担して料理を作っている。

さすがに俺が入ったらスペース的に邪魔か。

ただ、

「なぜ3日に1度、全員家にいるんだ？」

そう。なぜかコレットにラツカライ、フェンリル、そしてローレラ

イたちは、毎日ではないのだが3日に一度はこうして我が家に集合し、料理をして宿泊していくのである。

もちろん、俺は構わないし、大事な仲間なので問題ないのだが。

なぜか、俺の知らないうちに、特別なルールが施行されている気がしてならないのであった。

「ふー、アー君。第108回女子会……。聖女さんからはこれ以上のことは言えないのです」

「そうなのか」

「ええ、ええ。まあ新婚生活を二人きりで堪能したい！ 超したい！ という気持ちも山々なのですが、そこは魚心あれば水心。私の背中を押してくれたら、ちゃんと順番を待ってくれたりもしてくれてますし、何より大切な……」

「おお、大切な何であるかえ？」

「なんでもありません！ はいはい、食事にしましょう食事に！」  
パンパンとアリシアが手を叩いて仕切り直そうとする。

だが、フェンリルはニヤニヤしながら言った。

「うむうむ、我もそなたらを大切な仲間であり、家族であると思っておるぞえ？ にゅふふふふ」

「やめなさい 恥ずかしいでしょうが 聖女さんハリケーン・

パンチを放ちますよ」

途中で切った言葉の続きを言われて、アリシアが赤面する。

しかし、コレットとラツカライ、ローレライも元気に口を開く。

「わしじゃって、わしじゃって！ 旦那様やアリシア、ラツカライやフェンリルのことを大切に思っておるのじゃ！ ずーっと一緒なのじゃ！ あと旦那様との子供が欲しいのじゃ 本当の家族になるのじゃ！」

「うわー！ コレットちゃん！ どさくさに紛れて何て大胆な！ 大胆さは美少女ドラゴンさんの特権ですか うう、美少女はさすがです！」

「ボ、ボクも！ い、いいえ、私もアリアケ先生のこと大好きです。結婚しましょう！ お姉様の次に！」

「ラツカライちゃんも女子力高い！ ちゃんとコレットちゃん達を立てた上で、求婚するなんて！」

「むふふ、出来た者たちであるな。我は別に後回しでも良いぞえ。ただ、我も家族になりたいのう」

「はい、私もです。ぜひその際はお誘いのほどを。既成事実が大事ですから！」

むむむ。

さすがの俺も女子会でどういったことが話されたのか、何となく察



しがついたのだった。

そして、それがアリシア公認であることも。

いつの間にこんな状態になっていたのかは想像だにつかないが！

「えーっと、そうだな……」

俺はアリシアを見てから、どうするか決めた。

「アリシアと俺の子供が出来たら、その後考えよう」

まずは自分たち夫婦のことが優先だと思ったからだ。

しかし、

「あ、それなんです、アー君。えっとですね」

「へ？」

彼女は顔を赤らめながら、嬉しい報告を俺に告げたのであった。

〈1年後〉

「おい、アリアケよお」

「何だビビア」

俺とビビアは並んで座っていた。お互いに赤ん坊を抱っこしながら。

「俺の子供、超可愛いと思わねえか？」

「ふむ、そうだな」

俺はビビアが抱っこしている、小さな生まれたての生命を見下ろす。

女の子だ。

「とても可愛いな」

「そうだろう！ そうだろう！ ぐひひひひひ！」

大笑いするビビアに対して、後ろから声が飛んできた。

「ちょっと、ダーリン！ その笑い方は情操教育に悪いですわ」

「なんだと！ じゃあ、俺が『ハハハハ』と笑えつてのか」

「それはそれで気持ち悪いですわねえ」

「むがー」

デリアの言葉に、ビビアが不服の声を上げた。ただ、赤ちゃんを起こさない程度の声でだ。

「ところで俺の子はどうだ？」

「ふんー！」

ビビアは鼻を鳴らして言った。俺の抱く小さな男の子を睥睨すると。

「可愛いに決まってんだろっが。馬鹿めが!」

「ふ、そうだな、馬鹿な質問だったか」

その言葉に後ろから声が飛んできた。

「ちょっと、アー君、馬鹿なんて言葉使っちゃだめですよ。情操教育に悪いですからね」

「む、確かに」

アリシアの言葉に反省する。

「難しいものだなあ」

「まっただ、けっ」

俺たち二人は赤ん坊を揺らしながら会話する。

「ところで賢者パーティーは一旦解散したらしいじゃねえか。良かったのかよ」

「勇者パーティーもだろっ?」

「ふん、まあな」

魔王討伐自体はもはや人類の目的ではない。

だからパーティー自体は解散しても差し支えない。

ただ、無論、強力なモンスターは存在するため、その討伐任務に赴くパーティーは必要なのだが。

しかし、俺は肩をすくめて言った。

「次の世代が育つさ。これまでもヒトはそうやって進歩して来た。俺からお前たち弟子が巣立って成長したようにな」

「一度もお前の弟子になったことなんてねえよ、ボケが！」

「ダーリン！」

「ア 君！」

叱責の声がもう一度飛んできた。

やれやれ。

俺はもう一度手元の赤ん坊らの稚い表情を見る。

赤ん坊の体温が伝わってくる。

それだけで幸せな気持ちになった。

それはまさに、これからの明るい未来そのものだと思っただった。

〈 f i n 〉

### 315・未来へ（後書き）

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。

アリアケやビビアたちの物語は、一旦これにて物語は完結となります。

長い旅路の末の二人の結末、読者様たちはどんな感想を持たれたでしょうか。

より良い読後感を感じて頂ければ嬉しく思います。

作者としましても、フラグも全て回収できて、とても満足できる作品になったと感じております。

さて、本作の最終巻の第7巻が10/6に発売されます。大幅に加筆修正もしておりますので、ぜひともお買い求めいただけますと幸いです。コミック第4巻も大好評発売中です。どちらもお楽しみ頂けますと幸いです。

(小説) <https://magazine.jp.square-enix.com/sqenixnovel/series/detail/yuusyaparty/>  
(コミック) <https://www.ganganonline.com/title/1252>

それでは次の作品でお会いしましょう。  
皆様の良い読書ライフを祈っています。

---

この作品の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n5256gk/>

---

【書籍化&コミカライズ】勇者パーティーを追放された俺だが、俺から巣立ってくれたようで嬉しい。……なので大聖女、お前に追って来られては困るのだが？

2024年3月6日02時11分発行